

Nihon gikyoku zenshū

日本戯曲全集
第四十一巻

長田秀雄
木下杢太郎
吉井勇
郡虎彦

現代篇第九輯

東京 春陽堂版



「飢渇」舞臺にて右より　市川男女藏　長田秀雄　尾上菊五郎



「悪鬼跳躍」　山田隆彌　岡田嘉子



「歡樂の鬼」　右　市川松蔦　左　市川左團次



「俳諧亭句樂の死」舞臺面



「髑髏尼」



「小しんと焉馬」舞臺面



舞臺面



「道成寺」 上 市川左團次 下 市川松蔦



長田秀雄



木下杢太郎



吉井勇



郡虎彦

日本戯曲全集　第四十一巻　目次

長田秀雄篇

長田秀雄篇

喜劇

惡鬼跳躍（一幕）

登場の人々

犬山眼八郎　活動寫眞會社長
日向孝一　取締役
飛田五郎　監査役
浦　春潮　文士
阿久澤たへ子　女優
綠川　昇　男優
野田靜水　老優
監　督
カメラマン
その他、女優數名、男優數名、監督助手給仕など。

——左右は俳優の方から。
活動寫眞會社の社長室。
左手奧の窓の下に、事務用の大卓。その上に卓上電話。その傍に書棚がある。
正面、造りつけの暖爐、その上に、午後三時を指した米國製の奇拔な置時計がある。五時になると、オルゴール仕掛にて『汽笛一聲新橋を』の節を朗かに奏し出す。
壁上には『誰知烏雌雄』と、俗惡な大字で書した額がかかつてゐる。筆者は故大隈重信侯である。
極めて華美な絨氈が一面に敷いてあつて、室の中央には金庫と來客用の大卓がある。ソファ、椅子など。壁間には、メリー・マグラーレン。リリアン・ギッシュ。メーベル・ノーマンドなど美しい活動女優の廣告ビラをかけてある。
事務卓の前の凭りかゝりの椅子に身を埋めて社長犬山眼八郎が大島の袷に袴をはいて、頻りに書類を調べながら陰欝な顏で考へこんでゐる。
右手の入口の扉、コツ〳〵となる。

犬山　（獨語）どうも困つた——五十萬圓の缺損だ。たへ子かな。（柔しい聲で）おはいり。
（扉開く。異樣な『死』の扮裝をした老優野田靜水が大鎌をかついで登場。）
（野田の顏は髑髏のやうに描かれてゐる。）
犬山　（ギョッとして）誰だ。
野田　へヽヽ、社長。私ですよ。
犬山　何だ。野田か——（嚙みつくやうに）その姿は何だ。

野田　(卑しげに) 今日三時から撮影がありますからね。
犬山　君はもう扮裝して來たのか。
野田　どうです、社長。この顏は。(にやりと笑ふ)
犬山　不氣味な奴だ。何か用かね。
野田　社長、につこりして下さいな。
犬山　俺に笑へと云ふのか。
野田　それでないと、話が切出しにくいから……。
犬山　(吐出すやうに) また、前借りか。
野田　社長、酒屋の拂だけです。
犬山　一體、いくら欲しいんだ。
野田　五十圓でいゝのです。
犬山　もう、今月になつて五十圓も飮んだのか。
野田　(凄い顏になる) 僕がアルコホル中毒だと云ふ事は、社長だつて知つてゐるでせう。
犬山　アルコホル中毒で君の顏が不思議に歪んでゐるから、この會社では給料を拂つてゐるのだ。
野田　つまり僕は汽車のやうな物です。石炭をたかなければ、會社の役には立ちません。
犬山　厄介な奴だ。
野田　僕は一日に八度酒を飮みます。つまり飯より五度だけ餘計です。だから金がかゝります。
犬山　一體、どうして君はアルコホル中毒になんぞなつたんだ。
野田　素面でゐるのが耐まらないからです。
犬山　(眼をギロリと光らす) 何か惡い事をしてゐるね、君は。
野田　いや、惡い事なんかしやしません。
犬山　でも氣が咎めるのだらう。
野田　違ひます。思ひ出すのが厭なのです。
犬山　やつぱり惡事だからだ。
野田　然し、僕はこれ迄五十年の間、金で間違ひをした事はありません。
犬山　そりや、金に緣がなかつたからさ。
野田　社長、僕も一遍惡事を働ける位金を持つてみたいと思ひます。
犬山　ぢや君は何をしたのだ、
野田　啞の娘と關係したのです。
犬山　啞の娘と關係した。
野田　さうです。(何か云はうとして考へる。狡さうに笑つて) 社長、こりや筋になりますぜ。
犬山　ふむ。まあ、話してみ玉へ。
野田　いくらくれます。
犬山　價格は物を見てからつけるものだ。
野田　いや、きつと受けますぜ。

犬山　一體そりや何時の話だい。
野田　私が二十八九のまだ新派の二枚目をやつてゐた頃の事です。
犬山　恐ろしく古い話だね。
野田　少し古いが、話には身がありますよ。
犬山　君の話はいつも長つたらしくていけない。今日の撮影には、この社長室を使ふ事になつてゐるんだから、もう、そろ〳〵支度に來る。手つ取早く話し玉へ。
野田　前借りの方はどうです。
犬山　仕方がない。さあ、この傳票で會計から取つてき玉へ。（傳票に捺印して渡す）
野田　（輕く頭をさげる）伊豆の下田で御難を喰らつて座長以下樂屋に寢泊りをしてゐた時の事です。辨當屋から、樂屋に飯を運んでくる啞の娘がゐましてね。
犬山　いゝ女かい。
野田　えゝ、一寸可愛い顏付をしてゐましたよ。
犬山　でも、啞ぢやあね。
野田　（辯解するやうに）何たゞ、物が云へないだけです。
犬山　君はそれを口說いたのか。
野田　（哀訴するやうに）御難を喰らつて女郎買にも行けない時だつたからです。
犬山　非道い奴だな、で、どうしてそれを思ひ出すと厭な氣がするんだい。
野田　啞と密通いたと云ふ評判が、樂屋から町へ擴がつたので、流石の私も閉口しちまひましてね、それに芝居の方もトヤですから思ひ切つて私は夜逃げをしたのです。
犬山　啞を置ざりにしてかい。
野田　（憤然として）考へて御覽なさい。そんな者がつれて步けますか。
犬山　よく追つかけて來なかつたね。
野田　ところが追つかけて來られない譯があつたのです。その娘は孕んでゐたのです。この私の種子を……
犬山　啞の癖に……罪な話だ。
野田　それから二ケ月ばかりしてから、一座の奴に出會したとき、その啞娘が身を投げて死んだ話をきかせられましたよ。
犬山　可哀さうに……それで君は酒を飲み出したのか。
野田　どうです。これは筋になりませう。
犬山　うん、買つてもいゝ。
野田　いくらくれます。
犬山　まあ、作者に書かしてみなければ値はきめられないね。
野田　（異樣な眼付で）今でも、醉ひがさめると、その娘の顏がハツキリみえますよ。

犬山　（入口をノックする音がきこえる。）

犬山　おはいり――

（扉が開く。監督が洋服姿でシネリオを持つて出てくる。）

監督　昨日御願ひして置いたとほり、今からこの室で撮影にかゝりますから。

犬山　（立上つて）よろしい。（時計を出してみると）三時からと云ふ話だつたが、もう十五分過ぎてゐる……

監督　（憤慨する）實に不埒です。

犬山　何が。

（この間に野田は誰も氣付かぬやうに鞄を擔いで退場する。）

監督　今度、撮影する『戀の煉獄』は社長も御存じのとほり、當時文壇で天才と云はれてゐる浦春潮先生に懇請して、此處の役者にはめて書いて頂いた傑作であります。

犬山　君、その辯士のやうな口調はやめ玉へ。

監督　（恐縮して）はあ、つい、昔の御里が出まして。

犬山　そこで何が不埒なのです。

監督　男優の綠川昇です。他の俳優はキチンと時間どほりに集合しましたが、綠川だけはまだ出てきません。

犬山　そりや怪しからん。綠川の役は何です。

監督　浦春潮先生が、特にあの男の身體にあてはめて若い資本家の役を書いて下すつたのです。今度のフイルムの云はゞ、主人公です。

犬山　ぢや、他の役者と取換る事は出來ないのですな。

監督　えゝ。

犬山　で、君はどう云ふ處置を取りましたか。

監督　只今。給仕に自轉車で迎ひにやりました。

犬山　ふむ。

（そこへ給仕にともなはれて、男優綠川昇が飛込んでくる。顏に大きな腫物が出來てゐる。切開して、膏藥がはつてある。）

監督　（嚙つくやうに）君、困るぢやないか。

綠川　（腫物をおさへて）いや、どうも申譯がありません。

犬山　一體、どうして遲刻したのです。

綠川　もう絶望です。社長。私はどうしていゝか分らなくなりました。

犬山　何が。

綠川　（腫物を指さして）顏にこんな大きな腫物が出來たのです。

監督　そりや大變だ。

綠川　この顏では二枚目はつとまりません。

犬山　（唸る）……

監督　一體、何時出來たんだい。

緑川　昨日です。

監督　ぢや、昨日一寸僕にさう云つてくれゝばよかつたぢやないか。

緑川　僕もこんな大きな腫物にならうとは夢にも思はなかつたもんで……

監督　ぢや、今朝でも電話をかけてくれゝばいゝのに。

緑川　何しろ醫者へ行つて切開して貰ふのに、今までかゝつたんです。

犬山　醫者は何時頃までに癒ると云ひました。

緑川　（診斷書を懷中から出す）これです。

犬山　（受取つて讀む）ふむ、病名、濃泡性濕疹、病因、白髮染の中毒による物と認む――君は白髮を染めてゐるのか。

緑川　えゝ實は。（かう云つて、頭をなでる）

犬山　（つゞいて讀む）豫後、良。十日間の靜養を要すか。

監督　（嚙みつくやうに）困るぢやないか、君。

緑川　昨夕ニキビだと思つて、つぶしたのが惡かつたのです。

犬山　（大喝）馬鹿。ニキビの出來る年かい。

緑川　（陰鬱に）はあ。

監督　社長、どうしませう。

犬山　已むを得ない。撮影は延期だ。（緑川に）君、撮影が延期になれば、會社にそれだけの損害がある事は知つてゐるだらうね。

緑川　そりや知つてゐます。

犬山　これは君の責任だと云ふ事は。

緑川　知つてゐます。

犬山　ぢや、會社の內規によつて、君の今月の俸給は半分しきや渡さないから……

緑川　（情けない顏付で）減俸ですか。

犬山　さうだ。

監督　社長。折角、撮影の樣子を見に浦春潮先生も來てゐらつしやいますし、俳優たちも、もう扮裝をすましてゐますからどうです。緑川君の出ない最後の場面（しいん）だけでも映しませうか。

犬山　成程。さうして、緑川君が癒るまで、他の撮影にかかつてゐれば少くとも時間の經濟だね。

監督　ぢや、皆を呼んで、すぐ取りかゝりませう。

犬山　さうしてくれ玉へ。（緑川に）君は歸つて寢てゐ玉へ。

緑川　はい。（退場）

監督　（扉の外に半身を出して）おゝい、皆來てくれ玉へ。それから、誰か、浦先生をおつれしてくれ。

（俳優、カメラマン、監督助手など、ぞろ／＼現はれる。皆社長に一禮する。）

（最後に阿久澤たへ子が、文士、浦春潮を案内して出てくる。「浦春潮は一座にて一番醜貌の俳優をして扮せしむる事」。）

たへ子　社長、これが、浦先生でゐらつしやいます。

犬山　や、先生、ようこそ私が社長の犬山眼八郎です。——此度は、またわざ〳〵會社のために御執筆下さいまして有難う御座いました。

浦　いや、始めて御眼にかゝります。どうも原稿が大へん遅れて御氣の毒でした。

犬山　どういたしまして——そのかはりあんな御傑作が頂戴出來ましたので、皆大喜びで御座います。

監督　社長、綠川君の事を鳥渡先生に……

犬山　浦先生。どうも申譯のない事が出來まして（浦は默つて犬山の顔をみてゐる）實は主人公役の綠川昇が、今朝急に顔に大きな腫物が出來まして、（浦は思はず自分の顔をなでる）醫者から撮影を禁止されたので……、今、監督といろ〳〵相談いたしましたが、已むを得ませんから、綠川の出ない場面だけ撮影する事にいたしました。

浦　さうですか。それは困りましたね。

監督　綠川君はニキビだと思つて、つぶしたのです。

犬山　（咳拂ひをする）何も先生がわざ〳〵御出で下さいましたのに、こんな失態を御眼にかけて、何ともはや……

浦　では、今日は最後の場面だけやるのですね。

犬山　さうです。何れ、綠川が癒り次第、全部撮影いたします。

監督　社長、ではそろ〳〵かゝりませうか。

犬山　うむ。それでは僕も浦先生と一緒に見物してゐよう。

監督　（助手に）君、撮影準備だ。

助手　はい。

（助手は大卓の位置を直したり、人工光線の裝置をしたり、室内を駈けまはつてゐる。）

（監督はシネリオを開いて、浦春潮と何か相談をしてゐる。）

（カメラマンは、撮影機を適當の處に据ゑる。）

（阿久澤たへ子は、犬山眼八郎の胸によりすがるやうにして甘えながら何か話してゐる。女優男優すべての眼は好奇と羨望と嫉妬の光を放つて兩人の方に燦爛と輝いてゐる。）

（『死』に扮した野田靜水が、何時の間にか、來てゐる。）

野田　（突然叫ぶ）や、大變だ。俺の鎌がない。

（一同愕然とする。）

職工に扮した男優　君はきつと撮影場の前の酒場に置忘れてきたんだよ。

野田　あゝ、さうだ。一寸頼むよ。鎌を取つてくるから。

（大急ぎで退場。）

監督　（浦と打合せをすまして、室の中央に出る）阿久澤さん。

たへ子　（驚いて犬山の胸から離れる）はい。

監督　あなたは、社長の事務卓の前の椅子に腰かけて、入口の方をみてゐるのです。

たへ子　（云はれたとほりの姿勢をして）かう。

監督　それでよろしい。（乳母に扮した女優に向つて）乳母さん。君は、この御孃さんの前に立つて、いたはつて上げてゐるのだ。

乳母に扮した女優　これでいゝの。

監督　よし。そこでと（あたりをキヨロキヨロ見廻す）おや、野田君は。

職工に扮した男優　いま、鎌を取りに行きました。

監督　（いら／＼して）仕様がないな。折角、浦先生に順序を追つて、撮影して御覽にいれようと思つてゐたのに……

（野田靜水が鎌を擔いで飛込んでくる。）

野田　や、遲くなつて濟まねえ。

監督　さ、早く――君はこの床机に腰かけてくれ玉へ。（前の組からはなして床几を置く）

野田　よしきた。（腰かける）

監督　助手。バックのスクリーンはどうした。

助手　はつ。（スクリーンを立てる）

監督　（カメラマンに向つて）オーライ。（手を上げる）

（カメラマン『死』に扮した野田を撮影しはじめる。監督は『死』に向つて、さま／＼の注意をあたへてゐる。少時、監督。撮影中止の合圖をする。）

カメラマン　何うしたのです。

監督　（野田に向つて）君、そんなに動いちや駄目ぢやないか。

野田　だつて、あんまり急いでやつてきたので、呼吸が切れてやりきれねえのさ。

監督　困るなあ――カメラマン、やり直しだ。（カメラマン無言で、また撮影をやり返す）

（監督はシネリオをちよい／＼見ながら、いろ／＼指圖をする。靜止してゐた『死』はやがて、首を左右に動かし、不氣味な笑ひを洩らして、撮影終る。監督中止の合圖をする。――乳母と令孃とはその間に死を指さしては笑つてゐる。）

野田　（立上る。首すぢをボリ／＼搔く）あゝ、南京蟲にさゝれて、非道え目に會つた。

監督　さあ、今度はあつちの組だ。

（カメラマン撮影機を動かす。助手は光線の具合を直

したり、人物の位置を動かしたりする。）

撮影はじまる。令嬢に扮したたへ子が乳母と結婚について話をしてゐる。ふと、たへ子は朦朧と現はれた『死』の姿を見て驚く――凝視數秒。たへ子撮影中止の合圖をする。）

たへ子　一寸待つて頂戴。

監督　（面喰つて）何うしたのです。

たへ子　ねえ、監督さん。こゝの處があたしやり憎くつて仕様がないわ。何とか直して頂戴よ。

監督　何う直すんです。

たへ子　ねえ、先生。（かう云ひながら浦春潮の方へ歩みよる）

浦　え。

たへ子　今のところ、何だかあたし、やり憎いんですが：：何うでせう、先生。あの茲で一寸泣くわけにはいきますまいか。

監督　そりや無理です。あすこでは結婚の樂しさを空想して乳母（ばあや）と話をしてゐるのですから……

たへ子　（憎さげに監督をにらんで）そりや、あたしだつて知つてるわ。

監督　そこへ突然、『死』の姿がみえるんで面白いのです。始めから泣いたら折角『死』が出てくるのが無意味です。

たへ子　（監督の言葉をきゝもせず）先生、何うで御座いませう。

浦　それを僕が御答へするのは、一寸困りますね。

たへ子　あら、どうしてゞせう。

浦　僕はこの會社の注文によつて、僕としては、あなたに一番はまつたつもりで書いたシネリオです。

たへ子　そりやさうで御座いませうとも。

浦　そこで、このシネリオが出來上つたとき、會社からは社長の意志を代表して、此處に居られる撮影監督が、御約束したゞけの金を持つて禮に來られたのです。（たへ子は默つて聽いてゐる）だから、もう、僕としては、このシネリオは、會社にすべての權利を賣つてある譯です。

たへ子　でも、あなたが御書きになつた物ぢや御座いませんか。

浦　さうです。決して代作ぢやありません。然し、たへ子さん、書いたのは、確に僕ですが、相當の金額で賣渡した以上すべての權利は會社にあるのですよ。その點では丁度、あなたの指にはまつてゐるダイヤの指環と同じ事です。こはさうと失なさうと、もう今ではあなたの御勝手です。

たへ子　（監督に）ぢや、監督さん。私が云つたやうに直して頂戴。

監督　そんな事は出來ません。
たへ子　何故出來ないの。
監督　成程、浦先生のおつしやるとほり、このシネリオのすべての權利は會社がゆづつて頂いたのです。だから、權利を持つてゐるのはこの映畫會社だと僕は思ひます。
たへ子　だから、直して頂戴つて云ふんぢやないの。
監督　お分りにならないやうだから、ハツキリ云ひますが、このシネリオの權利は會社にあるのですよ。あなたにあるのではないのですよ。
たへ子　でも會社の物なら、直してくれてもいゝぢやないの。（たへ子は犬山の顔を見る。犬山知らん顔をしてゐる）社長さん、さうぢやなくつて。
犬山　（鷹揚に）とに角、この映畫の事はすべて監督に任してあるんだから‥‥
監督　（熱くなつて）さうです。社長から監督に命ぜられてゐる以上、すべての事は僕の責任なのです。
たへ子　ぢや直して頂戴。
監督　厭です。
たへ子　何うして。
監督　直せばこの映畫が滅茶苦茶になります。
たへ子　直さなければ、あたしが引立ちません。（浦春潮が大きなクシヤミをする。）

監督　あなたは隨分引立つてゐます。
たへ子　あたしはもつと〳〵引立ちたいのよ。
監督　でも、この上あなたが引立つと、他の役者の影が薄くなります。
たへ子　だから、他の方の影の薄くならないやうにあたしを引立てゝ下さい。
監督　そんな事は出來ません。
たへ子　でも、それが監督の役目ぢやなくつて。
監督　（憤然として）僕はそんな事をするために監督してゐないのです。
たへ子　ぢやあなたの役目は何なの。
監督　カメラマンと役者を監督指揮して、映畫の統一をはかるのが僕の役目です。（得意らしく浦春潮と犬山とをヂロリとみる）
たへ子　ほゝ‥‥。あたし可笑しくなつちやつたわ。
監督　何が可笑いのです。
たへ子　だつて、あたしはあなたの三十倍も月給を貰つてゐるのよ。さうでせう。
監督　（口惜しげに）そりやさうです。
たへ子　月給の少い者が、澤山取つてゐるものを指揮するなんて滑稽だわ。
監督　（唸る）‥‥ぢや、僕の役目は何だとあなたは云ふの

です。

たへ子　さうね、あなたの役目は、撮影の時に役者の世話をしたり、筋を直して、あたしたちの引立つやうにする事だわ。

監督　侮辱だ。とてもたまらない。社長、僕はこの映畫の監督は御免をかうむります。

犬山　まあ、君……さう憤慨しないで……

たへ子　社長さん、どうしても、この人が直してくれなければ、あたし、この映畫には出ませんからね。

犬山　そりや困る……

たへ子　（憎らしげに監督をにらむ）あなた、隨分生意氣で強情だわ。

監督　（破れかぶれになる）貴樣こそ無智で傲慢だ。

たへ子　（わつと泣いて犬山の胸に凭りかゝる）社長さん。あの監督は、あたし大嫌ひですから免職して下さい。

犬山　（唸る）……

監督　（夢中になつて）畜生、誰がこんな處に居るものか。こつちから御免かうむらあ。

（退場。）

犬山　（優しく）たへ子さん、泣くのはおよしなさい。（一同に向つて）これは何と云ふ醜態だ。一體、この頃は會社の規律が亂れてゐる。まるで滅茶苦茶ぢやないか。浦先生に對しても面目ない次第だ。今日はこれで撮影中止にする。何れ監督に對しては嚴重な制裁をするから……皆さん。もう、あつちへ行つてよろしい。（一同一禮して去る）

（後には阿久澤たへ子と犬山と浦春潮とが殘る。）

浦　あの監督は惜い事には、少し頭腦が舊すぎますね。

犬山　全くです。どうも頑固で困ります。

たへ子　浦先生のやうな聰明な方に監督して頂いたら、どんなにいゝ氣持でせう。

浦　（にや／＼して）たへ子さんのやうな天才は、かへつて監督なんかあると、藝術の奔放性を束縛されて御不自由ですよ。

たへ子　（美しい聲を出す）あたし先生が好きだわ。

犬山　（不安らしくたへ子をにらむ）どうもたへ子さんは時々さう云ふ心にもない失禮な事を云つていけない。

浦　や、これは御邪魔しました。僕はこれから、ある雜誌の編輯所へ行かなければなりませんから、失禮します。

たへ子　あら、もう御歸りなさるの。

浦　失敬します。

犬山　これはどうも大へん失禮いたしました。では、その內、またゆつくり御眼にかゝつていろ／＼御話を承ります。（一禮する）

（浦吞潮退場。）
たへ子　なか／＼頭腦のいゝ方ね。
犬山　（不機嫌に）俺は文士は厭だ。
たへ子　（凝乎と犬山をみてゐる）あら、あなたは嫉妬（やきもち）をやいてゐるのね。（逆ろやうに笑ふ）
犬山　お前の擧動はどうも怪しかつた。
たへ子　まさか、いくらあたしが物好きだつて、あんな變な顏の人に…
犬山　變な顏の人には惚れないと云ふんだね。
たへ子　あたりまへだわ。
犬山　ぢや、俺はどうだ。
たへ子　あなたは別よ。
犬山　だつて、いま、お前の云つた事を煎じつめると、俺のやうな者には惚れつこはないと云ふ事になるぜ。
たへ子　（蔑むやうに）馬鹿ねえ、あなたは。
犬山　どうして。
たへ子　だつて、あなたは別だつて云ふ事はちやんと分つてゐるぢやありませんか。
犬山　それが俺には分らないんだ。
たへ子　だから馬鹿だわ。
犬山　どうもお前の云ふ事は可笑しいぜ。
たへ子　何故。
犬山　だつて、正直なところ、あのへつぽこ文士と俺と比べて男振には大した違ひはないからね。
たへ子　だつて、あなたは、第一、お金があるわ。
犬山　（唸る）…つまり俺の金鍍金（きんめつき）に惚れてゐるんだな…
たへ子　ねえ、あなた、そんな事どうでもいゝぢやないの。
犬山　ぢや、俺が破產したら、どうする。
たへ子　そんな事はある筈がないわ。
犬山　（段々凄い眼付になる）いや、たへ子、誤魔化しちやいけない。俺は本當の事がきゝたいんだ。
たへ子　そりや無理だわ。
犬山　何が無理なんだ。
たへ子　あたし本當の事なんか考へてみた事はないんですもの…
犬山　（突然、たへ子の手をねぢ上げる）どうだ。痛いか。
たへ子　（顏をしかめて）また、始まつたのね、痛いわ。
犬山　（齒を喰縛つて、ます／＼ねぢ上げる）…俺が憎いか。
たへ子　およしなさいよ。（叫ぶ）痛い。
犬山　俺が憎いか。
たへ子　（恐ろしさうに）あなた、氣がちがやしなくつて。
犬山　（たへ子をにらんで）さぞ、憎いだらう。この俺が…

たへ子　そりや憎いわ。
犬山　（クタ〳〵になつて、手をゆるめる）それみろ――それがお前の本音だ。本當はお前は俺を憎みきつてゐるのだ。
たへ子　あたりまへだわ。あんな亂暴な眞似をするんですもの……（腕を出す）御覽なさい。こんなに紅くなつたわ。
犬山　（それを見まいとして）よせ、もう、そんな腕なんか出すのは止めろ。
たへ子　（獨言のやうに）本當にひどい人ね、まだひり〳〵するわ。
犬山　（陰鬱に）たへ子。
たへ子　何よ。
犬山　くどいやうだが、もし、俺が破産でもしたら、お前はどうする。
たへ子　此頃、あなたは餘程、どうかしてゐるわ。神經衰弱ぢやなくつて。
犬山　（いら〳〵して）俺のきいてゐる事に 素直に返事をしろ。
たへ子　だから、この間からさう云つてゐるぢやないの。あたしはそんな事を考へた事はないつて。
犬山　また――ぢや、俺が頼むから考へてみてくれ。

たへ子　そりや無理よ。
犬山　何故。
たへ子　あたし考へたくない事は、いくら考へようとしても考へられないんですもの。
犬山　一體、お前の魂は何處にあるのだ。
たへ子　そんな事、あたしに分らないわ。
犬山　どんな男でも、大抵何處かに急處があるが、女の急處は俺にはどうしても見付からない。
たへ子　女は身體全體が急處だわ。
犬山　つまり何處をさはつても、同じ感じしきや起らないんだ。急處がない譯だ。
たへ子　（美しく微笑して）あなた。
犬山　何だ。
たへ子　これでも愚圖々々云ふの。（かう云つて、右の手を眞直に高く擧げる。ゆるい衣服（きもの）は長襦袢の袖と一緒にまくれて、白い腋の下がみえる。黑い絹糸の房のやうな毛が叢生してゐる）
犬山　（顫へる）駄目だ。俺は變態性慾だ。（頭をおさへる）
（事務卓の上の卓上電話が突然けたゝましく鳴る。）
犬山　（飛んで行つて、受話器を耳に押付ける）はあ、俺だ――何取締と監査役が來るつて……さうか。俺はもう十分位は社長室にゐるつもりだ。ぢや、待つてゐるから。

さよなら‥‥
たへ子　日向さんと飛田さんがゐらつしやるの。
犬山　（陰鬱に）うむ。
たへ子　何の御用でせう。
犬山　さあ、何か會社の事だらう。兎に角、お前が此處に居ちやまづいね。
たへ子　ぢや、あたし行くわ。
犬山　もう、すぐ家へ歸るかい。
たへ子　どうでも‥‥
犬山　晩飯を一緒にたべようぢやないか。
たへ子　えゝ、ぢや洋食にしませう。
犬山　うむ。何でもいゝ。ぢや撮影所の方で待つてお出で。
たへ子　えゝ――ぢや、また後で。（かう云つて眼で笑つて退場）
（犬山眼八郎は事務卓の處へ坐つて、きはめて陰鬱な顏をして、書類挾みから、數葉の書類を引出し調べてゐる。）
（扉をたゝく音。）
犬山　おはいり。
（この聲に應じて、取締役、日向孝一と、監査役、飛田五郎とが入つてくる。）
日向　や、社長。御待たせしました。
犬山　いや、大へん早かつたぢやないか。
日向　自動車で飛んできたのです。
犬山　ふむ。（探るやうに二人の顏を見比べる）
（沈默。）
日向　（飛田に向つて）ぢや、僕から御話しようか。
飛田　さう願はう。
犬山　何だね。
日向　例の一件です。どうです、社長、金策の方はうまく運びましたか。
犬山　殘念だが、駄目だつた。で、君たちの方は‥‥
日向　やはり駄目でした。（沈默）何しろ恐るべき不景氣ですよ。ねえ、飛田君。
飛田　何處も決算期だからな。
犬山　一文も出來なかつたのか。
日向　えゝ、實に不思議な位です。
犬山　（唸る）僕は君たちの方を當にしてゐた。
飛田　私はまた社長の方を當にしてゐたのです。
犬山　株主總會は、もう、眼の前に迫つてゐるんだぜ。
日向　遲くも、此處二週間の内には、何とかして五十萬圓だけ調達しなければなりません。
飛田　私たちの方には、もう、一つも當はありません。
日向　これが百方奔走の結果です。

犬山　……僕の方にもないんだ。

飛田　（沈默。）社長。

犬山　何です。

飛田　株主たちはもう感づいてゐるのです。

犬山　（飛上る）それは本統かい。

飛田　昨日ある銀行で厭な噂をきゝましたよ。

犬山　厭な噂——どんな。

飛田　大株主の島田運平が、こつそり一味の株主たちと會合してた形跡がありさうです。

日向　何しろ彼奴はこの前、社長にならうとして失敗してゐますからね。

犬山　それが事實なら大變だ。帳簿を檢査されるとすぐ我我は横領罪で縛られる。

日向　さうです。

犬山　しかも僕と島田とは、犬と猿の仲だ。

日向　社長、どうかして、二週間以内に五十萬圓だけ調達して下さい。

飛田　もう、かうなつては、社長に調達して貰ふより他に方法はありません。

犬山　僕の私財をすつかり投出しても、五萬圓あるかなしだ。

飛田　そんな事ぢや燒石に水です。

日向　（狡さうに）社長お互に誠意を以て御相談しようぢやありませんか。

犬山　（憤然として）ぢや、僕が財産を隱匿してゐると云ふのか。

日向　阿久澤たへ子の名義になつてゐる銀座の地所を抵當にして御覽なさい。銀行ぢや五十萬は立派に出しますよ。

犬山　あれは出せない。俺とたへ子の死金だ。

日向　ぢや、社長は我々を見殺しにするんですか。

飛田　（凄い顏になる）あなたは私にあの時、何と云ひました。

犬山　ぢや、君は僕の言を全部信じてゐるのかね。

飛田　あたりまへです。

犬山　嘘も休み〳〵に云ひ玉へ。君は自分も金が欲しかつたから、我々の味方になつて、帳簿の監査を怠つたのだ。

飛田　あなたは惡黨だ。

日向　よし玉へ、飛田君。社長は君より役者が上だよ。だが、犬山さん。さう突放してしまつちや、あなたにもお爲になりませんよ。

犬山　そりや無論三人共倒れだ。

日向　まあ、一つお互に何かいゝ方法を考へようぢやありませんか。

犬山　それや君の云ふとほりだ。

（突然、扉を亂打する者がある。）

（三人ギヨツとする。）

飛田　（呼吸を呑んで）何だらう。

日向　はてな。

犬山　とも角も開けてみ玉へ。

飛田　（扉を開ける）

（職工に扮した男優が飛込んでくる。）

犬山　（一歩退がつて鋭く）何だ。何うしたのだ。

職工に扮した男優　（手に持つた號外を差出す）大へんです。號外が出ました。

飛田　（奪ふ様に受取る。讀む）社長、北京が大地震です。

犬山　え、ペキンが――どれ〳〵。

飛田　いえ、僕が讀みます。天津よりの無線電信によれば、今朝午前八時二十八分、北京市に大地震突發して、死者無慮七十萬、傷者擧げて數ふべからず。なほ、地震と共に、市街各所に火災起り目下延燒中、悲絶慘絶言語につきがたき由。

日向　ふむ。郵船株は暴騰するぞ。

飛田　その後に大學の地震學教室の今村博士の話がのつてゐます。

犬山　（驚喜して）そんな物はどうでもいゝ――日向君、我々は助かつたよ。

日向　どうしてゞす。

犬山　（職工に扮した男優に向つて）君は撮影所に飛んで行つて、カメラマンに大至急來てくれつてさう云つてくれ玉へ。

職工に扮した男優　はつ。（退場）

犬山　君、この地震は天祐だよ。早速飛行機だ。

日向　どうも社長のお話はあんまり奇拔で、私には分りませんが：：：

犬山　君はどうかしてゐるね。北京大震災の映畫が出れば、五十萬やそこらは瞬く內に儲かるといふ事に氣がつかないか。

日向　でも、金は二週間の內に要るのですよ。

犬山　飛行機で一呼吸に飛べば、北京まで二日路だ。一日撮影して二日で歸れば、一週間目には、市內の常設館には震災の寫眞が出る譯ぢやいか。

日向　成程。

飛田　さすがは社長だ。

犬山　天未だ我を捨てずだ。兎に角、飛行機會社に電話をかけなくちや：：：（かう云ひながら、卓上電話の處へ行き、受話機を取つて、耳に當てる）

（職工に扮した男優が飛んで出てくる。）

職工に扮した男優　社長、駄目です。
犬山（いぶかしげに）何――駄目だ。
職工に扮した男優　監督とカメラマンとが、同盟罷業を起しました。
犬山（唸る、昏倒する）
日向　社長、社長、どうしました。氣を確にお持ちなさい。（飛田に）君、醫者を‥‥
飛田（職工に扮した男優に）おい、早く醫者を呼んで來ないか。
職工に扮した男優　はつ。（行かうとする）
犬山（やうやく呼吸を吹きかへす）
飛田　社長。御氣がつきましたか。
犬山　おい、もう醫者は呼ばなくてもいゝ。
職工に扮した男優　はつ。（退場）
犬山（額の汗を拭く）大打撃だ。然し、日向君、みすみす儲かる處を‥‥實に殘念ぢやないか。
日向　然し、郵船株は確に暴騰しますよ。
犬山　僕は全く不運だ。折角滿都の人氣を集める事が出來る處だつたのに‥君みてゐ玉へ。きつと大阪の會社が僕の計畫を實行するよ。
日向　社長、何事も廻りあはせです。御諦めなさい。
飛田　かうなると、いよいよ善後策が緊急問題ですね。
日向　大地震が東京に起るとよかつたんだがなあ。
犬山（眼を閉つて）せめて火事でもあると、差向一時の急場はしのげるんだが‥‥
日向（異様な聲で）社長、あなたは眞面目にさう思つてお出でゞすか。
犬山　僕は何時でも眞面目だ。
日向（不氣味な微笑）それぢや救かる途があるかも知れませんよ。
犬山　何、救かる途が‥‥君。そりや本當か。
日向　この會社には、フイルムが澤山貯藏してありますね。
犬山　さうさ、四五日前に米國から入荷したから、少くとも二十萬尺はあるだらう。
飛田　二十萬尺あれば、階下の倉庫一パイでせう。
日向　重要書類はすつかり此處の金庫にあるでせうな。
犬山　無論だ――うつかり他人には見せられないからな。
日向　フイルム貯藏倉庫はすぐこの下でしたね。
犬山　さうだ。
日向　あなたは金庫に火が入る理由を御存じですか――火事の場合に。
犬山　知らないね。そんな事は。
日向　さう云ふ事も研究して置くものですよ。
犬山（不安らしく）一體どうすれば、金庫に火が入るの

だい。

日向　譯はありません。フイルムを入れて置くのです。さうすれば、金庫は破裂してしまひますよ。

犬山　(唸る)……

飛田　成程、これは工夫だな。

犬山　二十萬尺のフイルムは、此建物を燒くには、十分な燃料だ。(陰鬱な顔で考へこむ)

飛田　證據が無くなれば、もう法律を恐がる必要はありませんね。

犬山　待ち玉へ、日向君。君は實に恐ろしい男だね。

日向　何故です。

犬山　君は島田に買收されてゐるね。僕に火をつけさして置いて、君たちだけ助からうと云ふ惡だくみだ。

日向　いや、それは誤解です。私は島田とは少しも關係はありません。

犬山　然し、火をつけて、使込みの方の證據を無くしてしまへば、あとは、放火の罪跡だけが問題になるのだからね。

日向　(冷然として)それでなければ、社長に全責任を負つて貰ふだけです。

犬山　全責任を負ふと云ふと……ふむ、僕に自殺しろと云ふのかね。

日向　とに角、もうかうなつちや、その二つより他には途はありませんよ。

犬山　(凄い眼で二人をにらむ)僕が自殺させられるとすれば、君たち二人も安穩にしては置かない。

日向　社長、そりや駄目ですな。

犬山　どうして。

日向　あなたにだつて分つてゐるでせう。我々は何時もあなたの手からだけ金を受取つてゐるのですよ。帳簿にはみんなあなたの印が捺してあるだけなのです。

犬山　惡黨。

飛田　日向君、僕の方も大丈夫だらうね。

日向　安心してゐ玉へ。惡いやうにはしないから……

犬山　然し、監査役が見免してゐた點で株主たちは疑問を持つからね。

日向　ぢや、すつかり云つてしまひませう。その方があなたも往生しいゝだらうから。

犬山　まだ、何かたくらんでゐるのか。

日向　實は私も島田運平の密議にあづかつてゐるのです。

犬山　(唸る)底の知れない惡黨だ。

日向　あなたが全責任を負つて下さるとすれば、いろんな氣持の惡いことをおきかせしない方が死顔が奇麗になるだらうと思つて、これまで隱してゐたのです。つまり老

婆心ですよ。

犬山　（歯嚙みをしながら）よくも君達は俺をこんな破目におとし入れたな。

日向　方法はあなたの御勝手です。とに角二つしきや途はないのですから、――ぢや、よく御考へを願ひます。（飛田に）君歸らう。

飛田　社長、失禮いたします。

（兩人退場。）

（沈默。）

犬山　（獨語）だが、みす〱、彼奴等のわなに引かゝるのは、何う考へても心外だ。仕方がない、一應はたへ子を口說いてみよう――然し、彼奴がなか〱一筋繩で行く女ではないからな。もし銀座の地所を俺に貸せばよし、貸さなきや、彼奴を殺して、俺も死ぬまでだ――たへ子は何と云つても日本一の女優だ。彼奴の居ない會社は、魂のぬけた死骸みたやうな物だ。（事務卓の抽出しから、小形の自働拳銃を出す。凝視數秒――突然。哄笑する）その時の島田や日向の顏が眼にみえるやうだ。…

（扉音もなく開く。）

（たへ子が現れる。）

たへ子　あなた、何が可笑いのよ。氣味の惡い笑ひ方をするわね。

犬山　（拳銃を隱す）誰だ。たへ子か。あゝ吃驚した。

たへ子　何と云ふ顏をしてゐるの――何だかあなた變ね。

（注意深くあたりを見まはす）

犬山　（時計をみる）もう約束の時間だな。たへ子、出かける前に一寸話がある。まあ、此處におかけ。

たへ子　ところが、あたし殘念ですけれど、今日行かれないの。

犬山　何、行かれない。飯を喰ひにかい。

たへ子　えゝ、今、家から電話がかゝつてきてね、何ですか、急に歸つて來いつて云つてきたのよ。

犬山　（注意ぶかくきいてゐる）たへ子、今お前は、日向に出會つたらう。

たへ子　いゝえ、出會はなかつたわ。

犬山　嘘を吐いちやいけない。この廊下の階子の邊で出會つた筈だ。

たへ子　全く會はないわ。

犬山　…お前がシラを切るところをみると、もう、日向はお前を抱込んでゐるんだ。仕方がない。いよ〱最後後の手段だ。

（突然。犬山は拳銃で、たへ子を射つ。たへ子倒れる。犬山は、その上に覆ひかぶさるやうに身を伏せる。）

犬山　これでやうやくお前の正體が分つた。（自殺する。奇

拔な米國製の置時計が、この時、オルゴール仕掛で、汽笛一聲新橋を、はや、わが汽車は離れたりの一節を朗かに奏しだす。苦悶してゐる犬山は首を上げて叫ぶ）誰が時計をかけたんだ。（死す）

（少時、『死』に扮した野田静水が醉つぱらつて入つてくる。鎌を持つてゐない。）

野田　や、社長とたへ子と寢てゐやがら……

（野田は猥褻な身振をして、大聲に笑ふ。日が次第に暮れる。）

喜劇

噓（一幕）

人物

宇佐美新吾　活動寫眞會社長
同　のぶ子　別居の妻
同　信一　一子
櫛田おえい　妾
醫者
淸水一郞　辯護士
桑島英三　重役
女中

現代

『大悟徹底』と云ふ大字を俗惡な筆致で書いた額の下に立派な髭を生やして肥つた宇佐美新吾が、ぜいたくな寢具の内に身をよこたへてゐる。新吾は、某活動寫眞會社の辯士から成上つた社長である。毒藥を飮んで自殺をしかけた處である。醫者が、禿頭の後だけを見せて、一心に脈を見てゐる。妾の櫛田おえいが心配さうな顏付で坐つてゐる。深夜の事である。

おえい　先生、如何で御座いませう。助かりませうか。
醫者　さあ。
おえい　（泣聲で）もう駄目で御座いませうか。
醫者　さあ。（長い間を置いて）モルヒネをどの位飮まれたのか分らんので……
おえい　只今、吐きましただけではないでせうか。
醫者　まだ胃の內に殘つてゐるかも知れませんね。それに不斷から心臟が弱い方でしたから心配です。
おえい　（思はず高い聲で）先生、どうかして生命だけ取りとめるやうにして下さいまし。後生ですから……
醫者　……まあ、出來るだけの事はしてみますが、……
新吾　（突然浮言を云ふ。辯士時代の調子がその言に殘つてゐる）飛行機上の接吻か。素的、素的。
おえい　まあ、あんな事を……
醫者　何、浮言ですよ。モルヒネ中毒者はよくあんな事を云ひます。や、大分脈もよくなつてきました。この調子だと、或は持直すかも知れません。
おえい　まあ、本統で御座いますか。さうなつてくれたら、どんなに嬉しいか知れやしません。
新吾　（突然）あはゝゝ……。こりやいゝ。やつぱりチヤツプリンは大悟徹底してるね。女にことわられてるあの顏付と云つたら、はゝゝ……

醫者　御商賣柄、活動寫眞の事が始終頭を離れないんですね。

おえい　（脈がよくなつたと云はれたので、すつかり安心して）まあ、夢でも見てゐるんで御座いませうか。先生。

醫者　さうです。モルヒネを飲むと、始終愉快な夢を見てゐる譯です。

おえい　でも、死ぬつもりの人間が……呑氣な夢なんか見てゐて。それでよろしいのでせうか。

醫者　えゝ、別に構ひません。（時計を出してみる）もう十一時ですね。

おえい　えゝ、かれこれそんな物で御座いませうよ。

醫者　（新吾の瞳孔を調べたり、脉をまくつてみたりする。心臓部に聽診器をあてがつて凝乎と耳をすます。やがて）心臓は、仕合と今のところでは、だん／＼いゝ方に向つて來てゐます。では、私はもう一軒、急病で見舞はなければならん家がありますから……もし御容態に變りがありましたら、電話で御報らせを願ひます。何れ明朝は、また拜見に上りますが……

おえい　（柱の呼りンを押す）まあどうも遲く御苦勞さまで御座いました。では容態が變りましたら電話をおかけいたします。（叮嚀に別れの挨拶をする）

新吾　此處は少し切らなきや警察でやかましく云ふだらうね。惜いなあ、人情の極致だからね。何しろ毛唐は大悟徹底してるよ。はゝ……

（女中登場。）

醫者　（診察の道具を片付けて）盛んに浮言が出ますね。では明朝。（輕く會釋して立上る）

（おえいは出てまた女中に向つて。）

おえい　先生を御玄關まで御送りしておくれ――では先生、私は大へん失禮で御座いますが此處で御免かうむります……

醫者　さあ、どうぞ。（退場、女中そのあとについて行く）

（沈默。）

新吾　それ、オーケストラ。英國の國歌だ。ドドレ・レドレル、ミミフアミレド……はは……（おえいは驚いてみてゐる。長い／＼沈默、新吾は身動をする。）

おえい　あなた。あなた。お氣がついて。あなた。（長い間。答へなし）やつぱり駄目だわ。

（女中登場。）

女中　只今、會社の營業部の安本さんからお電話で御座いまして、あれから御容態は如何でいらつしやりますかつて仰しやつて御座います。

おえい　ぢやあたしが出るから、お前鳥渡此方へ居ておくれ。

女中　はい。（おえい退場。女中は恐さうに枕元に坐つてゐる。）
新吾（大きな聲で）おい。どうしたんだ。警視廳からは、まだ檢閲に來ないか。
女中（面喰らつて）はい。旦那さま。まだどなたもお見えになりません。（返事なし。女中はけゞんな顏で新吾を見つめてゐる。やがて心配さうに）寢言かしら。（沈默。）
（おえいが出てくる。）
おえい　ぢや、お前はもうあつちへ行つて居てもいゝよ。
女中　はい。（退場せんとす）
おえい　あ、それからね、淸水さんに電話をかけて、旦那さまはもうお宅をお出なさいましたらうかつて伺つておくれ。
女中　はい。（退場）
おえい（獨語）もう見えさうなもんだのに……（新吾長い呼吸をして身を動かす）あなた。あたしですよ。えいよ。分つてあなた。（返事なし）あなた。（あたりに誰も居ないのを見て）何とか云つて頂戴よ。ねえ、あなた。（涙聲で）ほんとに駄目なのかしら。あゝ、どうしたらいゝだらう。（新吾の上に突つ伏して泣く）
新吾（身動きをする。長い間。哀れな聲で）おい、苦しいから除いてくれ。
おえい（驚喜）まあ、（凝乎と新吾の顏をのぞきこむ）あなた。お氣が付いて。ほんとにお氣が付いたのねえ。（微笑）
女中（登場）あの、淸水さまの旦那さまはもうお宅をお出なすつたさうで御座います。
おえい　はな。御覽よ。旦那様がお眼をお開きなすつたよ。
女中　まあ、ほんとで御座いますか。（まじ〳〵と見る）
新吾　おえい。さう騷がないでくれ。頭が割れさうだ。
おえい　ぢや、はなや、お前はあつちへ行つてゐておくれ。
（女中退場。）
新吾　何だか、まだ身體中が俺の物ぢやないやうな氣がしてならない。（長い呼吸をする）
おえい　そんなにお苦しくつて。
新吾　一體どうして俺は死なゝかつたんだい。
おえい　あなたがモルヒネを召上がつたらすぐ瀧田先生がゐらしつて、すつかり藥で吐かせて下さつたんで、助かつたんですよ。先生はね、もう五分も經つてゐたら、とても駄目だつたらう。うまく手後れにならずに濟んだつてさう云つてゐらしつたわ。
新吾　困つたなあ。今更助からうなんて夢にも思はなかつたよ。

おえい　どうしてまたあんな恐い眞似をなすつたのよ。あたしを置放しにして。
新吾　いや、正直な事を云へば俺もあの時、心の底から死なうと考へてゐた譯ぢやない。バツタリ行きづまつて苦しんでゐる處にモルヒネの瓶が見付かつたからいけなかつたんだ。併し今、かうやつて助かつてみると、何故本統に死んでしまはなかつたらうと思ふよ。あゝ、死損つて生きてゐるのは實際慘めだ。
おえい　心の底から死ぬつもりがなかつたのなら、助かつた方がいゝ譯ぢやないの。
新吾　そりや女の考へ方だ。
おえい　をかしいわね。何うして。
新吾　さうぢやないか。成程死なうと云ふ決心はなかつたが、兎に角、モルモネが、俺の咽喉を通つて行くときは、そりや何とも云へない氣がしたよ。俺はモルヒネの味が舌から消えてしまつたとき、あゝ、これでやうやく死ねたと思ふと何だか全身の力をつかひつくしてしまつたやうな心持がした——一度あんな氣持になつたら人間はもう決して生きてゐられるもんぢやない。
おえい　でも生きてゐらつしやるからいゝぢやないの。
新吾　馬鹿だな。
おえい　何が馬鹿なのよ。

新吾　(間を置いて)　併し俺だつてモルヒネの瓶を手に持つまでは、やはりその位に考へてゐたんだ。
おえい　(注意深く新吾を見る。恐怖の表情)　何を云つてるのよ。しつかりして頂戴。
新吾　お前は俺の氣が變になつたと思つてるね。(間)　大丈夫だ。安心おし。(微笑)
おえい　本統に大丈夫…何だかあなたの面差が變つて凄いわ。
新吾　(何か考へてゐたが)　おい、おえい。瀧田は何と云つてゐたんだい。俺の身體の事を。
おえい　不斷から心臟が丈夫でないから要心しなければいけないつて云つてゐらしつてよ。
新吾　ふうん。ぢや注射でもして行つたのかい。
おえい　吐き藥ですつかりお腹の內の物を出してしまつてから注射を一本なすつたわ。
新吾　(間を置いて)　何うも變だ。こんなに頭がハツキリ澄んだ事はこれ迄つひぞない。何だか自分で自分が凄くなつてきた。やつぱり俺は死ぬんかな。
おえい　およしなさいよ。そんな氣味の惡い事を云ふのは——(眼をつぶる)あ、厭だ、厭だ。先刻あなたがモルヒネを飮んでグタリとしてゐらしつた時の事をマザマザと思ひ出しちやつたわ。

新吾　會社の方はどうなつた。

おえい　あなたの書置を持たしてやると、すぐ監査役の方が眞蒼になつて飛んでゐらしつたわ。そして、これから重役會議を開くつて云つてお歸りになつて、さうね三十分もしたかと思ふと、營業部の安田さんから電話でね、あなたの容態を聞いてきましたから、あたしが出て、まだ昏睡したまゝでどうなるか分りませんと申上げると、では兎に角、あなたの方からお電話が來るまで秘密にして此儘待つてゐませうつておつしやいましたよ。

新吾　つまり俺が死んだと云ふ電話を待つてる譯だね。それから淸水は來たかい。

おえい　もうお宅はお出かけになつたさうですが、まだいらつしやいません。

新吾　（獨言のやうに）俺が死ねば株主が告訴を取下げるだらうと思つて待つてゐる譯だな。

おえい　淸水さんは遲いぢやありませんか。

新吾　淸水はいろ／＼奔走してゐるんだらう。（長い間）併しあの時、たとへ本氣ではない迄も俺は何だつて自殺しようなんて、考へたんだらう。つまり重役たちの思ふつぼにはまつた譯だ。

おえい　どうして。

新吾　これ迄も度々、あいつ等は俺に向つて、そんなあてこすりを云つてゐたよ。だから俺は斷然一人で責任を背負つたり何かはしまいと決心してゐたんだ。あれだけ用心してゐたのに何うして死ぬ氣になつたのかしらん。

おえい　ぢやなほ、助かつてよかつた譯ぢやないの。

新吾　（イラ／＼して）馬鹿。とに角一度自殺しかけた以上、あいつ等のわなに引かゝつた譯になるぢやないか。

おえい　でもあなたが死なゝかつたんだから、向ぢや困るわ。安田さんに電話をかけませうか。もう大丈夫だつて。

新吾　よせ、何もこつちからそんな事までする必要はない。俺がモルヒネを飲んだ事をもうあいつ等は株主全體に振れ廻つてゐるに違ひない。さもしい奴等だ。

おえい　安田さんはあくまで重役だけの秘密にして置きますつて云つてゐてよ。

新吾　當になるもんか。もう、きつと何處かで大株主だけの秘密會が開かれてゐるよ。俺がお人よしであくまで責任を重んじて自殺しかけたと云ふ報告は、とにかく、重役たちに取つては、いくらか歩がよくなる事だからな。

おえい　でも横領罪になるなら重役は皆罪を着なきやならないつて、淸水さんが云つてゐらしつたでせう。

新吾　だつて皆シヤア／＼してゐる内で、俺一人こんな眞似をしたとすれば、裁判官でなくつたつて、俺を疑ぐる事になるぢやないか。おまけに俺は社長だ。

（女中が周章てゝ出てくる。）

女中　あの御本宅の奥さまが坊ちやまをおつれ遊ばしてゐらつしやいました。

新吾　（ギョッとする）何、おのぶと信一が……

おえい　あたしからお報らせしましたの。（新吾は何ともいはず苦悶す）あなた。こちらへおつれしてもいゝでせう。（新吾點頭く。おえい立つて女中と出てゆく）

新吾　（凝乎つと苦しさうに空を見つめて何か考へてゐる。突然）やうやく分つてきた。俺は會社のつかひ込みで死なうとしたんぢやなかつた。おのぶの事からモルヒネを飲む氣になつたんだ……（顔を手で覆ふ）

（おえいの後についておのぶが信一の手を曳いて出てくる。）

おえい　さあ、どうぞ……

おのぶ　（おえいを見下すやうにして口もきかずに室内に入つて、枕元に坐る。信一も、その傍に坐る）あなた。御久し振で御座います。（かう云つて叮嚀に頭を低げる）

（おえいはおのぶをにらみながら新吾の寢床の向側に廻つて坐る。おのぶはおえいより四つ五つ年上に見える。おえいよりはるかに美人である。）

新吾　（手を頭から離す）おゝ、おのぶか。

おのぶ　（信一に）さ、お父さんにお辭儀をなさい。

信一　（不思議さうに）母ちやん。お父さんは生きてゐるぢやないの。

おのぶ　まあ、何を云ふんですよ。

信一　だつて、御覽。瞬きをしてゐるよ。

おのぶ　およしなさい。そんな事を云ふのは。

新吾　（微笑）信一。どうした。よく來たな。

信一　（新吾をじろ／＼見て）母ちやん。歸らうよ。僕なんだか恐いもの……

新吾　信一。何故、お父ちやんに返事をしない。

信一　お父ちやんは惡い人だから、口をきいちやいけないんだね、お母ちやん。

新吾　（おのぶの顔を凝乎とみる）おのぶ。お前は俺がそんなに憎いか。

おのぶ　（憎惡の眼ざしで）いゝえ、たゞ、お可愛さうに思ひますわ。

新吾　（呻く）おのぶ、後生だから今日だけどうかそんな事を云はないでくれ。成程、お前には隨分言分もあるだらうが俺は今死にかけてゐるんだ。俺が眼を閉つてしまふまで、どうか、もう少し柔しい樣子をしてゐてくれ。

おえい　奥さま。お醫者さまが、なるたけ病人の氣に障るやうな事は云はないやうにしろつて仰しやいましたよ。

おのぶ　（おえいには答へずに）あなた。私とあなたとお

話をしますのに邪魔ですから、おえいを臺所へでもやつて下さいまし。
おえい（カッとなつて）まあ、奥さま。
新吾（個を請ふやうに）おのぶ……
おえい（おのぶに）あなたはよくも仰しやいましたね。あなたが旦那から嫌はれて、あゝやつて一人で暮らしてゐらつしやるのが、お氣の毒だと思つて、蟲を抑へてゐるのに、よくもそんな事を仰しやいましたね。
新吾（强く）おえい。
おえい いゝえ、あなたは默つてゐらしつて下さいまし、奥さま。（何か云はうとする）
新吾（やさしく）おえい。
おえい（泣崩れる）だつて、あたしまだこんな口惜しい眼に會つた事はないんですもの……
おのぶ（侮すむやうにその有様を見てゐる。やがて）あなた。
新吾（おえいの泣くのを見て、何とか慰めてやりたいと思ひながら、おのぶに氣をかねてハラ〳〵してゐる）何だい。
おのぶ 一體、今夜の事はどう云ふんです。だしぬけに使の者がきて、あなたがモルヒネを召上つて、昏睡してゐらつしやるから、すぐ坊ちやんをつれてお出で下さいと云ふおえいの周章て切つた手紙をはふりこんで行つてしまつたのです。モルヒネを召上つた以上、もうあなたはとても生きてはゐらつしやるまいとかう思つて來てみると、あなたは何時ものとほり丈夫さうなお顏付で寢てゐらつしやるのです。私にはさつぱり譯が分りません。
新吾 いや、こんなに遲く呼びつけてすまなかつた。その譯は、いま俺が話してきかせるから……
信一 母ちやん。歸らうよ。
おのぶ 何を云ふんです。
信一 だつて眠いんだもの……
新吾 信一。眠いだらうな。おえい。さ、信一を寢かしてやつてくれ。
おえい（泣いてゐて返事をしない）……
新吾 さ、俺の傍に床を敷いてやるんだ。
おのぶ いゝえ、信一は決してこの家へは寢かしません。（おえい不承不承に立たうとする。）
新吾 まだそんな……たまには俺の傍に寢かしてくれてもいゝぢやないか。
おのぶ いゝえ、いけません。決してお父ちやんの傍へなんぞ寢るんぢやないつて敎へてあるんですから……
私がつれて歸ります。
新吾（强く）おのぶ。信一は俺の子ぢやないか。

おのぶ　（急に態度が崩れて、ハラ〳〵と涙をこぼす）その信一の傍からあなたは逃げてゐらしつたんです。
（おえいはそこに坐る。そしてまじ〳〵とおのぶの様子を見つめてゐる。）
新吾　俺が惡かつた。だけれどな、おのぶ。これにはいろんなお前に分らない事情もある。モルヒネはすつかり吐いてしまつたが、俺は不斷から心臟の弱い身體だ。また助かるか死ぬか分らないんだ。おのぶせめて今夜だけは、信一を俺の傍に寢かしてくれ。
おのぶ　（腸を掻きむしるやうな聲で泣きながら）いゝえ、いけません。あなたの今のお苦しみを、私はこの三年間、ずつと耐へて來たのです。
新吾　だから恕してくれと云つてゐるぢやないか。おのぶ。俺が何故モルヒネを飮んだか、お前は知つてゐるか。
おのぶ　（冷然として）そんな事を私が知つてゐる筈がないぢや御座いませんか。自分で散々つぱら勝手な眞似をして置いて愈々につちもさつちも行かなくなつてからモルヒネを飮んだりしていゝ耻つさらしですわ。
新吾　（悲痛な聲で）俺は決して自分のつかひ込みや何かのために、こんな馬鹿氣な眞似なんかしやしない。俺がモルヒネを飮んだのは、お前と信一の事からだ。
（それをきくと、おのぶとおえいとは驚いて新吾を見る。）
おのぶ　（間を置いて）今更、そんな見えすいた嘘をおつしやつても、もう駄目ですよ。
新吾　（泣く）嘘ぢやない。おのぶ、何故お前はそんな殘酷な事ばかり云ふんだ。人間はモルヒネを飮んでからまだ嘘をつける者だとお前は思つてゐるのか。
おのぶ　他人はどうだか知りませんが、少くともあなたはさうです。
新吾　（呻く）あ……
おのぶ　（凝乎つと耐へてゐた感情が急にあふれてくる）あなた。私はこの二三年の間の苦しみを考へると、自分でもよく生きてゐられたと云ふ氣がする位ですよ。（泣く）乳呑子を抱へたまゝ、あなたに捨てられて、お金と云つては一文だつてなし、ほんたうに今考へても氣が狂ひさうです。漸くあなたから月々の仕送りは來るやうになりましたが、それでも信一を抱へたまゝ淋しい夕御飯をたべる時の心持は、本統に何とも云へませんでした……
新吾　あゝ、信一の事は、もう云つてくれるな。胸が苦しくなる……。
おのぶ　あの頃の事を考へると私はどうしたつて、あなたが憎くて耐まらなくなりますよ。今日も此處へくる途で、

萬々一まだあなたが生きてゐらしつたらそれこそ腹の癒えるまで仇が打てると思つてそれを樂しみに途を急いだのです……

新吾　お前は俺を殺すつもりか。

おのぶ　……私にあなたが殺せたら、こんな苦しみはしなかつたでせう……

新吾　（慘ましく泣く）俺にはお前の心持がハッキリ分る。……これ迄は俺は、たゞ漠然とお前が癪にさはつて耐まらなかつた。俺は何故そんなにお前が憎いのか考へても見なかつた。結局俺はどうしても、お前と一緒に居る事が出來なくつて、かうやつておえいの處に逃げて來たんだ。この子煩惱の俺が、信一を置きつぱなしにして……

おのぶ　（居眠りをしてゐる信一をしつかり自分に引よせて）私はおえいのやうな者に見替へられたのが口惜しいのです。

（おえいはこれをきくと顏色をかへる。）

新吾　あゝ、待て、今日は俺に腹の內をあらひざらひ云はせてくれ、俺はこれ迄噓ばかり吐いて世を渡つてきた男だ。處が、俺の噓がうまく當つて、とんとん拍子に出世が能きたので、すつかりいゝ氣持になつてしまつて、何時となく俺は自分自身に向つても噓をつく癖をつけてしまつた。その結果が今日のモルヒネになつたんだ。

おのぶ　どうして、それがモルヒネになつたんです。

新吾　（手でおのぶの言を押へるやうな身振をする）苦しい。（呻る）

おえい　（驚いて）あなた。あなた。どこが苦しいんです。

新吾　いや胸だ胸がつまつて呼吸が出來ない……（少時苦悶。やがて臂をふりしぼつて）おのぶ。俺は今日の晚飯の時までモルヒネの事なんか夢にも考へてゐなかつたんだ。たゞ何とかして、うまく會社の不仕末を隱さうと苦心してゐたんだ。何う云ふはづみだつたか、ふいと俺は會社の建物を重役と棒組んで抵當に入れたのは、お前の處を飛出して一年經たない內だつたと云ふ事を、その時思ひ出した。――すると、耐まらなくお前が憎くなつてしまつた。その時、机の上のモルヒネの瓶がふいと眼に付いた。

おのぶ　あなたがモルヒネを飮んだらさぞ私が困るだらうとかう思つたのでせう。

新吾　さうだ。思ふさま困らしてやれと思つてすつかり捨て鉢になつてゐた。

おえい　まあ……

おのぶ　本統に恐ろしい人ね。あなたは。

新吾　だがな、おのぶ。今になつてよく考へてみると、俺

はお前が憎かつたんぢやない・・・俺は自分自身に向つて噓をついてゐたんだ。（顏を手で覆ふ）

女中 （登場） あの會社の桑島さんがいらつしやいました。

おえい あなた。會社の桑島さんがいらつしやいましたよ。どうしませう。此處へお通しするんですか。

新吾 （手を顏から離す。陰氣な微笑） たうとう待ちきれずにやつてきたな。此處へ通せ。

女中 はい。（退場）

新吾 （獨語） 桑島をよこしたのは面白いな。

おえい あの方は耳が遠いくせに隨分おしやべりね。

女中 （姿は見えず） こちらで御座います。

（桑島英三和服で袴をはいて現れる。始終物に驚いてゐるやうな顏附、丈高くしてコチ〳〵にやせてゐる。）

桑島 や、これは奥さん。どうも飛んだ事でさぞ吃驚なすつたでせう。（おのぶ挨拶する） おゝ、おえいさん。一體どうしたんです。僕は一體不斷から、社長はあんまり眞面目すぎるから、或はこんな事になりはしまひかと思つて心配してゐたんですよ。（おえい挨拶する） 社長。如何です。お苦しいですか。

新吾 （顏をしかめて） 騷々しい奴だな。

桑島 （聞違へて） さうでせう。さうでせう。はたで拜見してもお苦しさうです。（おえいに） それで醫者は何て云ひました。

おえい 心臟の方にさはりさへなければ、大抵大丈夫だらうつて瀧田さんがおつしやいました。

桑島 心臟に――

おえい 只今のところでは大分脈もよくなつて參つたさうです。

桑島 何です。もう一度、その耳が遠いので。

おえい （大きな聲で） 脈も大分よくなつてきたさうです。

桑島 脈が――あゝ、さうですか。それは何よりです。お二人とも御安心でせう。はゝあ、それを伺つて、私も安堵いたしました。會社でも皆胸を撫でおろすでせう。

新吾 噓を吐け。

桑島 はつ、何か仰しやいましたか。

新吾 皆に心配させてすまなかつた。

桑島 いや、どうしまして。會社の者は皆あくまで社長の御無事を祈つて居りますので、私が歸つて話して聞かせましたら、それこそどんなに喜ぶか知れやしません。併し實際思ひの外でした。私はじめ誰もかうやつて二度と社長の御無事なお顏を拜見出來ようとは夢にも考へて居りませんでしたからねえ・・・

新吾　（叱るやうに）もう、よし玉へ。そんな腹にもない事を云ふのは。
桑島　（新吾の顔色をみて）はつ。（間）いや、私はその耳が遠いのでどうも……
新吾　そんなに誤魔化さなくつてもいゝ。（吐出すやうに）實にずるい奴だ。
桑島　はゝ……併し、奥さん社長の今度の態度は實に立派でしたな。あゝまで自分の責任を重んじて、モルヒネまで飮まれたんですからなあ……。（つひ口をすべらす）只今も株主諸君が感心して居られましたよ。
新吾　（鋭く）やつぱり株主たちには、僕がモルヒネを飮んだ事をふれ廻つたんだね。
おえい　さつき、電話で安本さんが、重役だけの秘密にしておくつておつしやつたのに……
桑島　（周章てゝ）いや、無論、平の株主には秘密にしてあります。重役だけですよ。
新吾　（少時考へてゐる）おい。おのぶもおえいも一寸、此處をはづしてくれ。桑島君に少し內々で話したい事があるから……
おのぶ　はい。（信一を起して）ぢや桑島さん。御免下さい。（もと來た方の入口に去る）
桑島　どうも、奥さん。恐縮です。
おえい　旦那、お話がすんだら、呼鈴を押して頂戴。（反對の方の入口に去る）
新吾　桑島君。もつと傍によつてくれ玉へ。
桑島　はゝ。（にじりよる）
新吾　もうこの室には、誰も居ないだらうね。
桑島　はつ私一人で御座います。
新吾　（間。險しい顏をして）嘘をつき玉へ。あすこの隅に誰か居るぢやないか。
桑島　（鳥渡ふりかへつてみる。にやにやと笑ふ。狡さうに）社長。あんまり思ひつめない方がいゝでせう。
新吾　（憤然として）馬鹿。僕が君の前で、狂人の眞似なんかするもんか。（間、陰慘な聲で）畜生、たうとう出てきやがつたな。
桑島　何を仰しやるのです。何も居やしませんよ。
新吾　（それには答へずに）貴さまだな。俺にモルヒネを呑ましたのは……
桑島　（新吾の肩に手をかける）どうしたんです。社長。確かりして下さい――何も居やしないぢやありませんか。
新吾　（呆けたやうな顏付で宙を見つめてゐる。やがて、目がさめたやうに苦笑する）何だ。あれは君の影法師か――俺はおのぶかと思つた……

桑島　奥さんはあちらへいらしつたぢやありませんか。
新吾　（いら〱して）そんな事は君にきかないでも分つてる。（間、鋭く）桑島君。
桑島　はゝ。
新吾　（冷たく）重役たちは僕が生命を取止めたときいたら、さぞ厭な顏をするだらうな。
桑島　決してそんな事はありません。
新吾　（不機嫌になる）よし玉へと云つたら――君はどこまで嘘をつくのだ。
桑島　いや嘘ではありません……實際……
新吾　僕にはよく分つてるんだ。併し、安心し玉へ。やはり僕は死ぬだらうから……
桑島　（聲の調子が變る）でも脈がよくなつたつて云ふぢやありませんか。
新吾　何、よくなつたつて一時さ、人間には死ぬ時が分ると云ふが、どうも、嘘ぢやないね。
桑島　どんな心持がします。
新吾　さあ、鳥渡口へは出て來ない……寂しいと云ふのかしら、ちがふね、冷たい……ぞつとするやうな心持だよ。あゝ僕はかうしちやゐられない。何だか、段々近づいてくるやうだ。（顏を手で覆ふ）
桑島　（凄いやうに新吾を見つめる）社長。何がです。
新吾　何だか知らない――凄い靜かな者だ（長い間。新吾は顏を覆つたまゝ時々戰慄する）いや、俺は死なない――決して死なゝい。（かう云つて、顏から手を取る）
桑島　（心中に迷ふものゝ如く）社長。醫者は――それには及びませんか。
新吾　（憎しみを露はす）君は俺が死ぬのを、本當に待つてゐるんだな。
桑島　いや、それは誤解です。（ゆるやかに）併し社長。これはもしもの場合を考へて申上げるんですよ。あなたが不幸にも、もしもの事がありましたら、會社の方は重役一同がどうにか致しますから……
新吾　そして、俺はどうなるんだ。
桑島　私は誓ひます。あなたの御名譽にも決して傷はつけません。
新吾　（呻る）それを俺も云はうと思つてゐたのだ。俺はどうせ死ぬかも知れない。だからもし死んだら、後の事は重役一同によろしく頼む……
桑島　承知いたしました。（間）あなたの御本心が分つたので、皆さぞ安心するでせう。
新吾　（長い間を置いて）して、會社の帳簿の尻はどうなるんだ。
桑島　現金があれば、どうでも誤魔化せます。

新吾　現金はないぢやないか。

桑島　それがある所から出る事になつたのです。

新吾　費ひこんだ二十萬圓が全部でるのか。

桑島　はあ、併し、無論一人ではありません三四人の株主が出すのです。

新吾　誰だ。その株主と云ふのは。

桑島　いや、それは未だ確定した事でありませんから、お話は出來ません。

新吾　社長の俺に話せないと云ふのか。

桑島　とに角、確定する迄は、どうも御話いたしかねます。契約ですから……

新吾　確定するのは何時だ。

桑島　（冷然として）あなたの御不幸のあつた時です。

新吾　何、俺が死んだ時……ぢや、君たちは、俺の生命を廿萬圓で賣つたのだな。

桑島　社長。そんな事は仰しやるもんぢやありません。さうしなければ、あなたが、告訴されるばかりでなく、重役一同もつまらない眼に會ふんです。お互に苦しまなければならない時だつたのですからね。

新吾　それで俺一人死ぬのか。

桑島　併し社長の立派な行爲は決して無駄にはなりません。

新吾　（憤然として）何たる事だ。一身を犧牲にして、惡い奴らを救ふために俺はモルヒネを呑んだのか。

桑島　社長。どうかさう興奮しないで下さい。

（この時、わつと信一の泣く聲がきこえる。つゞいて、おのぶとおえいとの聲高に爭ふ氣配がする）

新吾　（聞耳をたてゝ）何うした。信一。

（信一が泣きながら入つてくる）

桑島　坊ちやん。何うしました。

信一　母ちやんがおえいと喧嘩をして、二人とも恐い顔をしてゐるんだもの……

新吾　また初めたか。

桑島　（卑しく笑ふ）兩雄雙び立たずですね。社長。

新吾　（熱くなつて）餘計な事を云ふな。

（おえいが『あなた』と金切聲を出して飛込んでくる。そして、そこに突伏したまゝ泣く。）

信一　（しつかり新吾にかじりついて）おえいの馬鹿。

新吾　おゝ、信一よくお父さんの傍に來てくれたな。（涙をこぼす）

信一　お父さん。おえいを追出しておくれよ。ね。さうすると、僕も母ちやんも、お父さんと仲よくするから……

新吾　（悲痛な聲で）信一。

おえい　（恐い顔で）まあ、坊ちやん。

新吾　おえい。
（この時、おのぶが殆んど冷やかに見えるやうな顔付で入つてくる。それを見ると信一はわつと泣いて飛んでゆく。）
信一　（おのぶにかじりつく）母ちやん。
おのぶ　さ、信一。お家へ歸るんですよ。
新吾　おのぶ。
おのぶ　ぢや、あなた。これで失禮しますよ。桑島さん。御免下さい。
桑島　奧さん。あなたは氣でもちがやしませんか。社長がこんなに惡いのに――
新吾　おのぶ。待つてくれ。（涙をこぼす）どうしてお前はさう殘酷なんだ。俺が死にかゝつてゐるのに……
おのぶ　あなたは私には、もう他人ぢやありませんか。
新吾　……お前は俺の妻だ。
おのぶ　いまのあなたの本當の奧さんは、この下司女のおえいです。
新吾　いや、お前は俺の妻だ。
おえい　（憎しみの眼で）奧さま。あなたは旦那に厭はれた女ですよ。
おのぶ　旦那には、お前位が丁度、適當してゐるんだらうよ。
おえい　まあ、口惜しい。（また泣き伏す）
新吾　……今になつて、いろんな事が段々ハツキリ分つてくる。（獨言のやうに云ふ）
おのぶ　あなた、では、私は歸ります――情の深いおえいの懷で、後の御養生をなさいまし。（行かうとする）
新吾　（血を吐くやうに）おのぶ。
おのぶ　厭つた女にはもう用はない筈です。
新吾　決して俺はお前を厭つたのぢやない――俺がモルヒネを吞んだのは、お前と信一のためだつたんだ。
おのぶ　（冷笑）あなた。私がまだそんな甘口に乘るとお思ひなすつて。
新吾　おのぶ。まあ俺に云はせてくれ。いま俺がお前の傍に居られなかつた譯が、やうやく俺にハツキリ分つてきたから……
おのぶ　私の傍に居られなかつた譯が分つてきたんですつて。
新吾　さうだ。俺は死際になつて、やうやくお前と俺との深い因緣を悟つたんだ……
おのぶ　（やゝ柔かな表情になつて、そこに坐る）……それはどう云ふ事なのです。
新吾　俺はお前が心の內で他の人を思つてゐるのを充分知つてゐながら、無理にお前を貰つた。それが間違ひだつ

たんだ。

おのぶ　でも私はもうそんな人の事は諦めてしまひました。この頃では思ひ出しもしやしません。

新吾　お前が諦めた事も俺は知つてゐる。

おのぶ　それなら何も私の傍に居られない譯はない筈ぢやありませんか。

新吾　俺もこれ迄は、さう思つてゐた。それでゐてどうしてもお前の傍には居られなかつたのだ。

おのぶ　つまりあなたには私が御氣に入らなかつたのです――私が厭で耐まらなかつたのです。

新吾　決して、決してさうぢやなかつた。俺はお前の事を思ふと、すぐ涙が出るくらゐお前が好きだつたのだ。

おのぶ　……

新吾　それはお前にもよく分つてゐた筈だ。

おのぶ　（間を置いて）　私はもう耐まらなくなつてきました。（深刻な嗚咽をする）

新吾　おのぶ。お前は俺を憎んでゐる。俺はお前に身も魂も打込んでゐながら、どうしてもお前の傍には居られない――世の中にはそんな理に合はない事があるんだ……

おのぶ　（嗚咽をつゞけながら）　教へて下さい。あなた、何故、私の傍に居られなかつたのです。何うしておえいの處へ逃げていらしつたのです。

新吾　おえいと一緒に居れば、始終氣が樂だつたからだ……

おのぶ　何故私と一緒だと、あんなにいら／＼なさるのです。

新吾　今思へば、やはりお前の心の底にかくれてゐる前の男の眼の光を、暗々裡に、俺は感じてゐたのだ。だからいら／＼しないでは居られなかつたんだ。

おのぶ　私はもうとうから諦めてゐると云つてゐるぢやありませんか。

新吾　お前が諦めてゐるのは、よく分つてゐると俺も云つた。だがな、人間はしらずに嘘をつく者だ。一旦、心にとまつた事はいくら諦めても、消えてしまふ者ぢやない――だからお前の前では、俺はどうしても安心して裸になれないんだ。人間は時々裸にならなければ、自然と心が鬱してくる……

おのぶ　どうして裸になれないんです。私にはあなたの仰しやる事が分りませんわ。

新吾　俺は何度となくすつかり裸になつて、お前に心の底まで話してみようとした。お前も情に燃えて俺の眞實を知らうとした。それは憶えてゐるだらう。

おのぶ　えゝ、よく憶えてゐます。私が折角打解けようとすると、すぐあなたはいら／＼して皮肉な言ばかり仰し

やるのです、だから私はあなたを憎み出したのです。
新吾　どうして俺はあんなに毒々しい皮肉を云ふのか、自分にも分らなかつたんだ。おのぶ。つまり俺は弱い眞實をお前の前にさらけだして、前の男とくらべられるのが恐かつたんだ。だからあんな毒口をきつて、逃げてゐたんだ――その結果、俺はモルヒネまで呑まなければならなくなつたんだ。
おのぶ　でも私の傍からはなれてゐらつしやるんだから、何もモルヒネなんか呑まなくてもいゝ譯ぢやありませんか。
新吾　（嗚咽する）おのぶ俺は信一が可愛いゝのだ……
（沈默。おのぶは憫れむやうに見てゐる。女中が出てくる。）
女中　清水さまが御出でゞ御座います。
桑島　あの辯護士の清水君か。
女中　さやうで御座います。
桑島　（動搖す）今時分。
（清水一郎が入つてくる。洋裝。堂々たる風采である。）
清水　やあ、遲くなつた。一體どうしたと云ふのだい。
桑島　（陰欝に）モルヒネを呑んだんだ。
清水　や、奥さん少時御眼にかゝりませんでした。どうです。この樣子では生命にはさはりはなさゝうですね。

おのぶ　心臟の方さへ氣をつければ、まあ生命だけは取止めさうで御座います。
桑島　清水君。少時。
清水　何だ、君も來てゐるのか。
桑島　（てれて）一寸、社長の見舞に……
清水　桑島君、君たちは實に怪しからんぢやないか。
桑島　何故。
清水　何故だ――白ばつくれるのもいゝ加減にし給へ。僕は、先刻電話で、宇佐美君のモルヒネを呑まれた報をきくと、すぐ、會社囑託の義務を考へて、主だつた株主の家をすつかり廻つて、社長に對する感情やら、告訴の手つゞきの進行をきいてみたんだ。ところが、君たち一味の重役は、これ迄、會社の金をいろんな支出の形で横領して私腹をこやしてゐるのみならず、社長の自殺をもう株主たちに報告してしまつてゐるぢやないか。
桑島　この揚合告訴を取下げるためには、已むを得ないぢやないか。
清水　さうだ。告訴を取下げるために、已むを得ないが、何故君たちは、横領罪の責任を社長一人に押しつけたんだ。事實横領してゐるのは、君たちだぜ。
桑島　（圖々しく）それは出るところに出てみなければ分らないよ。

清水　そればつかりぢやない。君たちは手分けをして株主の家を廻つて、會社の缺損は、社長の責任だけれども何とかして自分たち重役が、うめ合せるから、告訴を取下げてくれつて歎願したさうぢやないか。

新吾　(苦しさうに叫ぶ)　桑島君。君はこの俺を殺しに來たんだな。

清水　さうだ、君が生きてゐる事は、重役たちに取つて大へん不便な事なんだ。

新吾　誰が死ぬもんか。もうかうなつては、俺は斷じて死なゝい……

(桑島は冷然として微笑してゐる。)

清水　宇佐美君。この憎むべき重役たちに比べると、君の態度は實に立派だ。君は社長としての責任感から、モルヒネを呑んだんだ。君の心事の高潔さは、確に、この人生の理想と一致する。(この清水の臺詞の間に新吾の顏色は石灰のやうに蒼白くなつて、烈しい苦悶の表情が露はれる)さすが君だ。この額に書いてあるとほり大悟徹底した心事だ。成程、本妻と子供とを捨てゝ、妾と一緒に暮らしてゐた君の平生の生活は或は指彈さるべきものかも知れない。然し、人間として過失のない者はない。今度の壯烈な君の態度は、たしかこれ迄の君の失行を償つてあまりあるものだ。(新吾の苦悶はます〳〵烈しくなる)ねえ、奥さん。宇佐美君は現代の英雄です。偉人です。高潔な心事に對しては、あなたも平生の過失をお責めになる氣はもうないでせう。許してお上げなさい。許してお上げなさい。

新吾　(耐まらなくなつて呻くやうに)　清水君。あゝ、苦しい。もう、何も云はないやうにしてくれ玉へ。

清水　(おのぶとおえいとが思はず新吾の傍によるのを見て)　どうした。宇佐美君。

新吾　僕は死にさうだ。胸が……胸が。

清水　君、氣を確に持ち玉へ。今君が死んでは。會社はもう暗黑だ。

(桑島にやりと冷たく笑ふ。)

新吾　あゝ。胸が……

おえい　あの齋藤さんをお招びしませうか。

新吾　早く、早く、でないと死んでしまふ……

(おえい急いで退場)

信一　母ちやん、僕は恐いよ。

(新吾は言語に絕したる苦悶の後、その生命を終り、ダラリとなる)

桑島　もう駄目だ。脈が上つてしまひました。どりや、會社に電話で報らせて來よう。

(退場。)

信一　（聲高く泣く）・・・・

（おえい歸つてきて、この樣子を見る。）

おえい　（聲をふりしぼつて）奧さん。

おのぶ　おえい・・・・（手で顏を押へる）

淸水　偉大なる死だ。

喜劇

死骸の哄笑（一幕）

人物

故松田良造　婦人科病院長
同　滿子　その母
同　誠　その息子
村山はな　愛妾
吉田ゆき　同
小川とみ　同
山路よし　同
尾崎とめ　同
藤田良輔　生命保險會社支配人
同　つた子　その妻（故人の妹）
田村謙齋（醫學博士）（故人の親友）
小倉なつ　仲働き
その他書生看護婦など。

時

現代

所

東京

つい今しがた腦溢血で亡くなつた婦人科病院長松田博士の私宅である。

庭に面した十疊。正面には床の間があつて大きな鍾馗の幅が掛けてある。右手は緣がは、開け放した庭から曇つた夏の夜の空が見える。緣がはが茶の間からの通路になつてゐる。

左手は一面に唐紙で閉め切つてある。これは玄關から通ふやうになつてゐる。楣間には誰かの模寫した古いマドンナの油繪が懸けてある。

右手奥寄りに蒲團が敷いてあつて、その上に松田博士が臥せられてある。

枕元には隱居お滿、息子誠、田村謙齋、はな、ゆき、とみの三妾が坐つてゐる。二人の看護婦がまだマゴマゴしてゐる。松田博士は今呼吸を引きとつた處である。烈しい光線が顏に射らないやうに、電燈の半面に黑い布があてゝあるので、博士の死の床は暗く朧に見えてゐる。

誠は呆やり父の死に顏を眺めてゐる。家族の者は皆泣き伏してゐる。

田村　（愁然として）おい、吉岡その氷嚢をかたづけろ。

看護婦　はい。（一人の方が氷嚢をとつて、緣側から去る）

お滿　(間を置いて)　田村さん。私は何だか夢のやうで御座いますよ。かうやつて伜の死水を取らうとは思ひも掛けませんでしたよ。

田村　あなたのお心の內は全くお察しします。何しろあまり突然なので――それにこの腦溢血といふ病氣は、輕いのは癒りますが、かういふ風にやつて來ると醫者の手ではどうもなりませんので……

お滿　はい、何ももう因緣でございますから、私は諦めましたが……たゞこの子が兩親とも無い事になりますので……それに、あなた、私とてももう九十二でございますもの、何時どんな事になるか分りやしませんからねえ。

田村　……

お滿　私はそれが苦勞でございますよ。(泣く)　それにあなた、この子が普通の子ならよろしうございますが、御存じの通り頭腦の働きの鈍い子ですからねえ。

田村　御心配は御尤もですが、あんまりつめてお考へになつて、あなたのお身體に障るとそれこそ大變ですからなあ。

お滿　有難うございます。

田村　(殘つた看護婦に)　石川、汝は藤田さんに電話をもう一度掛けて見てくれ。まだ鎌倉から三人ともお歸りになりませんかつて。

看護婦　はい。(去る)

(入れ違ひに今一人の看護婦が出て來る。)

お滿　先刻危篤の電報を打ちましたのが六時でございますから、もう來さうなものでございますが……

田村　さうです。

看護婦　先生。もうこの電氣の覆ひを取つてよろしうございませうか。

田村　あゝ、取つてくれ。

(看護婦立つて黑い布を取り去る。死せる松田氏の顏が明るく見える。)

誠　(間を置いて)　ねえ、お祖母さん。お父さんは眞白な顏をしてゐますねえ。

お滿　何を言ふのですよ。

誠　お父つさんはあんな顏をして、何を考へてゐるの。お祖母さん。

お滿　そんな事を訊くものではないよ。お父つさんはねえ、もうお亡くなりなすつたのだよ。

誠　ぢや死んぢやつたの。

お滿　さうですよ。だからもう汝は二度とお眼にかゝる事は出來ないのだから、よくお顏を憶えてお置きなさい。

誠　死ぬとお父つさんはどうなるの、お祖母さん。

お滿　遠い處へ行つてしまふのだよ。

誠　遠い處つて、何處。
お滿　極樂と言つてね、佛樣のいらつしやる處だよ。
誠　面白い處。
お滿　（間を置いて）大變結構な處ですよ。
誠　ぢや、お父つさんは喜んでるでせう。
お滿　默つていらつしやい。（恐い顏をする）
（沈默。）
（玄關番が出て來る。）
玄關番　（一葉の名刺を出して）御隱居さま。此方が鳥渡お眼にかゝりたいとおつしやつていらつしやいました。
お滿　誰です。（眼が薄いので活字が讀めないので眉に皺をよせて名刺を見てゐる。）
玄關番　山路よし子と書いてあります。
お滿　山路よし子と……誰だらう。（間）兎に角今日は取り込んで居りますから甚だ失禮ですが、お眼にかゝり兼ねますつて、さう言つて下さい。
玄關番　今さう申上げたんですが、先生の御不幸を伺つて上つたのですから、是非お眼にかゝりたいとおつしやつて、どうしてもお歸りになりません。
お滿　何です。先生の御不幸を伺つて上つたのですつて――どんな人です。
玄關番　二十八九の立派な御婦人です。

お滿　（首を傾けて）私はこんな人は知らないが……
（看護婦が緣がはから出て來る。）
看護婦　先生、お電話を掛けましたら、まだお歸りにならないやうでございます。
田村　さうか。
（突然左手の唐紙がする〳〵と開く。盛裝した山路よし子が現はれる。）
よし子　まあ、御隱居さま。暫らくでございました。
お滿　（驚いて）あなたは何人（どなた）です。
よし子　もうお忘れでございますか。病院に居りました山路でございますよ。
お滿　あゝ、看護婦の――（看護婦二名顏を見合はせてゐる）
よし子　さうでございます。かうやつてのこ〳〵お宅へ上れる義理ではございませんが、今日鳥渡先生に申上げる事がございまして、病院に電話をかけましたら、急にお亡くなりになつたといふので……御隱居さま。（泣く）全く夢のやうでございますねえ。一昨日私共へお出でになりましたまでは、少しもお變りもなかつたに、もうこんなお姿になつておしまひ遊ばすとは、私どうしても本當とは思へないのでございますよ。
お滿　（煙に捲かれてゐる）汝（おまへ）は始終良造に會つてゐたの

ですか、病院を出てからも。

よし子　えゝ、この三年といふものは五日とお眼にかゝらない事はなかつたのでございますよ。

お滿　(間を置いて不機嫌な聲で)　石川さんももうあつちへ行つて休息して下さい。

看護婦　はい。(二人とも去る)

お滿　さあ、誠、汝もう寢るんですよ。

誠　いやだなあ。僕はもう少しお父つさんを見てゐるんだ。

お滿　そんな事を言ふものではありません。

誠　ねえ、お祖母さん。お父つさんは遠い處へ行つちまつたつて言ふけれど、やつぱり此處に居るぢやありませんか。

お滿　遠い處に行くのは靈魂だけですよ。

誠　靈魂つて何。

お滿　(五月蠅さうに)　そんな事を訊かないで早くお寢みなさい。

誠　でも分らないんですもの。お祖母さん。

お滿　靈魂とは心の事ですよ。

誠　心つて何。

お滿　五月蠅いねえ。この子は。心といふのは物を考へる處さ。

誠　ぢやお父つさんは死んぢやつて、物を考へる處が遠くへ行つちやつたから、かうやつて何も考へないで臥てゐるの。

はな　さあ、坊ちやま。私と一緒に寢みませう。面白いお話をして上げますよ。

誠　はなはすぐ居眠りをするんだもの。

はな　(赤くなつて)　あら坊ちやま。

お滿　(一喝する)　ぐづ〳〵言はないでお寢み。

誠　だつて……(しく〳〵泣きながらはなと退場)

お滿　(誰にいふともなく)　ほんとに我儘で困りますよ。

よし子　まあ、坊ちやまのおみ大きくおなり遊ばしたこと。私が病院に御厄介になつて居りました時分はまだほんの赤さんで、よくお亡なりになりました奥樣に抱かれていらつしやいましたが……

お滿　(その話には構はずに)　ぢや汝は良造にかこはれてゐたのだね。

よし子　(嬌態をして)　えゝ。あれからずつとお世話になつて居りましたのでございますよ。

(他の二人の妾はこの話を聞いて、驚いてよし子の顔を見る。さま〴〵の思惑が二人の顔に見える。)

お滿　(冷淡を裝つて)　さうですか。

よし子　(間を置いて)　私が病院に上りますと、すぐに先

生がいろんな事をおつしやいましたが、丁度あの時分は、まだ奥様が生きていらつしやいましたから、そんな事をしてはいけないと思ひましてお斷りをしてをりましたの。その内奥様はお亡くなりになりますし、先生も何かにつけて御不自由だらうと思ひましたから、私はたうとうお世話になる事になりましたので御座います。（急に悲しさうに）まあ、今から思ひますと、先生の柔しくして下すつた事ばかり思ひ出されて私はもう悲しくつて悲しくつて……

お滿　（つり込まれて）私もねえ。この年になつて、こんな苦勞をしようとは思ひませんでしたよ。

よし子　ほんとでございますねえ。私は御隱居さまのお心をお察ししますと、もう淚がこぼれて……何も申上げられませんよ。（泣く）

お滿　（泣きながら）あゝ、よく言つておくれだ。

（おゆきとおとみとは憎らしさうな顏付で、よし子の顏を見つめてゐる。）

ゆき　（こらへかねて）御隱居さま。

お滿　何だい。

ゆき　佛樣がまだ眼をあけていらつしやいますが……

お滿　さうだつたねえ。

（おとみが素早く立つて行つて眼をふさがせる。）

とみ　（その儘死人の顏を凝然と見てゐたが急に狂氣のやうになつて）旦那樣、どうしてあなたはこんな情ないお姿におなり遊ばしたんでございますよ。（死人の上に泣き伏す）

（沈默。）

ゆき　（鼻をつまらせながら）ねえ、御隱居さま。私にはあの御丈夫な方がこんなにおなりになつたかと思ふと世の中がたよりなく思はれますよ。今朝病院へお出かけの時洋服をお着せ申しますと、旦那樣はにこ〳〵遊ばして「おい、おゆき、いやに不機嫌な顏をしてゐるぢやないか、何處か惡いのか。」つておつしやいましたの。「いゝえ少し齒が痛みますから。」と申し上げますと、「どれ見せろ。」つておつしやつて、私の顎に手をお掛け遊ばして見て下さいましたの。（間）私はあの時の「小さな蟲齒だ。大したものぢやない。」つておつしやつたお聲が、まだ耳についてゐるやうで、どうしても忘れられませんのでございます……（泣く）

お滿　もう〳〵、止しておくれ。思ひ出す程悲しくなるから……

（よし子は不思議な顏付で二人を見てゐる。）

田村　（イラ〳〵して）藤田さんは遲いな。どうしたんでせう。（時計を出して見る）もう九時二十分になる。

お滿　あなたは何か御用がおありなさいますのですか。
田村　いや、何一軒これから往診しなければならない處があるだけです。
お滿　それは困りましたねえ。もう參るだらうと思ひますが……ほんとにまあ何だつて鎌倉なんかへ參つたんでせう。あなたお急ぎでございますか。
田村　いや、まだようござんす。さつき電話で十時頃行くからつて言つてやつて置きましたから。
お滿　あゝ、さうでございますか。兎に角藤田夫婦が參りまして、あなたに立會つて頂いて遺言狀を開けなければなりませんから……御迷惑でももう暫らくお待ちなすつて下さいまし。
田村　はあ、承知しました。
（おはなが靜かに緣側からはひつて來る。玄關番が現はれる。）
玄關番　御隱居さま。尾崎とめ子さんと申上げる御婦人が見えまして、先生がお亡くなりなすつたさうですから、是非御隱居さまにお眼にかゝりたいとおつしやつてです。
お滿　尾崎とめ子さん、へえ、田村さん、どうしたのでせう。良造の舊い友達で結核で亡くなつた尾崎正夫さんの奧さんですよ。四年も五年も一度も顏を見せないで、今になつて會ひたいなんて――それに良造の死んだ事を何處から聞いたのでせう。
田村　（變な顏付をして）尾崎の未亡人ですか。ぢや此處へお通しなさらなければなりますまい。
お滿　どうしてゞす。私は會ふまいと思ひますが……
田村　いや、さういふ譯には行きますまい。あの人は此頃大分、松田君と往來してゐられるやうですから……。
お滿　まあ、さうですか。それをどうして私に隱してゐたのでせう。良造は――
田村　（間を置いて）やつぱり言ひ惜かつたのでせう。
お滿　（驚く）ぢややつぱり――まあさうですか。（四人の愛妾の方を見る。四人意味ありげな顏をする）ぢやこちらに御案內して下さい。
玄關番　はい。（去る）
お滿　（嘆息を吐いて）あの人までもねえ……
（沈默。）
（大きな丸髷に結つた尾崎とめ子が出て來る。三十ばかりの年增である。）
とめ子　（顏を赤くして）まあ御隱居さま久し振りでお眼にかゝります。こんなに御無沙汰してはいけないと始終思ひ暮らして居りましたのですが、やつぱり上り憎いので……

お滿　ほんとに久し振りでしたねえ。（ジロ〳〵見ろ）

とめ子　また今度は突然飛んだ御不幸で、さぞあなたも御殘念でございましたらう。今夜私共へお出でになるつておつしやつてお出でがないものですから、病院の方へお電話で伺ひますと、これ〳〵だとおつしやるので、私は眼を廻してしまひましてねえ。（泣く）まあ何といふ悲しい事になりましたのでせう。

お滿　やつぱり酒や女狂ひが過ぎたのですよ。ねえ、田村さん。

田村　一體松田君には腦溢血の素質がありましたから、わたくしも亂暴な生活を廢すやうに注告したんですが：……。

とめ子　おや、田村さんでいらつしやいますか。まあ暫らく。取亂して居りまして、ちつとも氣が付きませんで失禮いたしました。

田村　いや、暫らくでした。

とめ子　御隱居さま、どうぞ此迄の事はおゆるし遊ばして下さいまし。先生がお亡くなりになりましたので私はほんとに心細い人間になつてしまひましたのでございますから、此からはせめて御隱居さまのお傍に時々上つていろいろお話でもいたしましたら、少しは心强いかと存じますから：…どうか御隱居さま、私を娘だとお思ひ遊ばして……

お滿　（つり込まれて）とめ子さん、私はこの年になつて、こんな苦勞をしようとは夢にも思ひませんでしたよ。

とめ子　ほんとでございますねえ、しみ〴〵お察しいたしますよ。（死人の傍へ摺り寄つて）まあ、先生。（狂熱的に）お情ない。どうしてこんな事におなり遊ばしたのですよ。先生、私は先生に死別れて一人で生きてゐる氣はいたしませんよ。此間お出で遊ばした時、お酒のお相手をしたのが、一生のお別れにならうとは夢にも思ひませんでした。（死屍をゆすぶつて）先生、何とか言つて下さいまし。とめは一生あなたのお情を忘れませんよ。（泣き伏す）

（四人の愛妾はさま〴〵な思ひで、この愁嘆を眺めてゐる。）

お滿　（泣く）

とめ子　（嗚咽しながら）御隱居様、お恥かしい話ですが、どうぞ不身持な奴とおさげすみ遊ばさないで、私の話をお訊き下さいまし。一旦後家になつたものがどうしてあんな氣になりましたか、今から考へて見ると自分でも不思議に思はれるのでございますよ。主人が亡なりましてから寂しい年月を送つて居りますと、先生が御親切にも始終お訪ね下さいましてねえ。それは柔しい事を言つて

下さるのでございますよ。その內あれは主人が亡くなりましてから四ケ月ばかり經つてからでございました。ある晩先生がお出で下さいまして「一人では心細からうから世話をしてやらう。」とおつしやるのでございますよ。私も一度はお斷り致しましたが、何しろ主人が後の始末をして置いてくれなかつたものですから、段々暮しも心細くなつて參りまして、それに實家は死絶えてしまつて、相談相手になつてくれる者もございませんので、ついいつとなくお世話になる事になつてしまひましたの。(間、涙をこぼして)でもこんな悲しい目を見る位なら、あの時なまじひお世話にならなかつた方が好いと思ひますよ。御隱居さま。愚痴なやうですが、私はどうしても諦められませんのでございますよ。(泣き伏す)

お滿　(泣く)

(四人の愛妾も大泣きに泣く。)

田村　(また時計を出して見る。舌打をして)　もう九時四十五分だ。どうしたのだらう。

とみ　(はなに向つて)　おはなさん、お互に旦那樣がいらつしやらないと思ふと、心細くて心細くて、行く先が眞黑なやうな氣がするわねえ。

はな　ほんとですわねえ。(しく/\泣きながら)　私なんかつく/\さう思ふの。此方へお小間使に上らなければ今頃は田舍でお父つさんと一緒に眞黑になつて働いてゐるのよ。かうやつて結構にして頂くのを考へると旦那樣の御恩は忘れられないわ。

ゆき　私はもう旦那樣のお世話になつてから足懸四年になるけれど、何時も柔しくして下すつたの。それを考へると勿體ないやうよ。

はな　それも長くお患ひなすつたとでも言ふなら、諦めやうもありますけれど、今朝まであんなにお丈夫だつた方が急にお亡くなりなすつたんですもの、どうしても諦められないの。私にはまだ物をおつしやるお聲が聞えるやうだわ。

とみ　あゝ、全く情ないのねえ。ねえ、おゆきさん。これからは何にかあつても三人仲善くして暮らしませうね。

ゆき　ほんとにさうしなければならないわねえ。

とみ　そして旦那樣の事を思ひ出したら、三人寄つてお互に泣きませうね。

(玄關番が出て來る。)

玄關番　御隱居さま、只今藤田さんがお着きになりました。

(玄關番の言がまだ終らないうちに藤田良輔とその妻つた子が旅裝のまゝは入つて來る。)

田村　やあ、藤田さん。

藤田　やあ。
田村　大分待ちましたよ。
藤田　それは失禮しました。時に義兄は如何です。危篤といふ電報で――
お滿　良輔さん。もうとう／＼いけませんでしたよ。（泣く）
つた子　お母さん、ほんとですか。
田村　松田君は三十分ばかり前に呼吸を引取られました。
つた子　病氣は何です。
田村　劇烈な腦溢血でした。私が診に參つた時には、もう昏睡狀態には入つてお出でゝした。
つた子　（嗟嘆のやうに低く）まあ……
藤田　（間を置いて）放縱な生活の報いですよ。
（沈默。）
お滿　良造はよく自分でも「あんまり私は血が多過ぎるから長生はしまい」とはいつて居たが、まだ五十三といふと、男盛りだからこんな事になるまいと思つてゐたのに――人間は全く當にならない者だねえ……
つた子　お母さん、一體兄さんは何時から惡くなつたのです。私たちが鎌倉へ行くまへにお眼にかゝつたときには、まだ何ともなかつたぢやありませんの。
お滿　何時から惡くなつたとお言ひかい。
つた子　えゝ、あんまり突然で、私にはどうしても本當とは思へないんですもの。（泣く）
お滿　（泣きながら）良造は亡くなる一時間前までは平常の通り眞紅な顏をしてゐましたよ。つた子。あれは夕御飯を喰べかけて急に引つくり返つたのですよ。
はな　（けろりとして）丁度私が御給仕を致して居りましたのですが、五本目のビールを一杯召上ると、心持が惡いとおつしやつて、そこに突伏しておしまひ遊ばしたのでございますよ。私はまあどうしようかと思ひまして……
つた子　（憤然として）おはな、汝に訊いてゐやしません。差出口ばかりして……
はな　（赤くなる）はい。
つた子　（ふとあたりを見廻して、よし子を發見して不思議さうに）お母さん。
お滿　え、何です。
つた子　このお二人はどなたです。私は存じませんが……
お滿　（少したじろいで）良造のね……
よし子　まあ、奧さま。あんまり、お眼にかゝらないのでお忘れなさいましたのですか。私は山路でございますよ。（笑顏になる）
つた子　山路さんと申しますと。

お滿　病院に看護婦をしてゐた。
つた子　へえ、私は知りませんよ。そんな方は。
よし子　ねえ奥さま、お忘れになつたのですよ。私はよく奥さまが此方へお遊びにいらしつたのをお見掛け申しましたよ。
つた子　(冷淡に)　さうですか。お母さん、この方は何か御用でもあつていらしつたんですか。
お滿　あのね、良造の世話をしてくれた人たちだよ。
とめ子　(おづ〳〵)　私は尾崎とめと申します。(挨拶をする)
つた子　(それには答へずお滿に向つて)　何でゞす。
お滿　何でつていふことはないけれど、おはなやおとみのやうに不斷の世話をして居た人たちだよ。
つた子　だつてこれまで、家には見えなかつたぢやありませんか。
お滿　他所に置いてあつたのだよ。私も今日初めて聞いたんだけれど‥‥
(藤田は驚いて二人の顔をしげ〳〵と見る。)
つた子　へえ‥‥(かう言つて五人の愛妾を見くらべる)さうですか。
(沈默。)
(五人の愛妾はてれてゐる。)

藤田　(重大な事件を談ずるやうに重々しく)　お母さん、それでは義兄さんの世話をしてゐた女はこれだけですか。
お滿　これだけだらうと思ひますがねえ。
藤田　ふむ。(間を置いて獨り言のやうに)　五人――
お滿　(感傷的に)　良造も嫁が亡くなつてから、何かにつけて不自由だつたやうですから、私は度々新しく嫁を探してやりましたけれど、何うい譯ですか、もう家内を持つのは厭だと申しましてねえ、何の口も斷つてしまひましたの。今になつて考へて見ますと、あれは一人の女を可愛がつて行く性質の男ではなかつたのですねえ。
藤田　義兄さんにとつては女は人間ではなくて、人間の爲に役に立つ一種の生き物としきや思はれなかつたのです。
つた子　(死骸の傍に坐つて、しげ〳〵と良造の顔を見つめてゐたが)　兄さんは敎育のある立派な女を知らなかつたから、そんな間違つた考を持つたのですよ。亡くなつた義姉さんがあの通りの性質でしたからねえ。
藤田　義姉さんの嫉妬には義兄さんも餘程閉口して居られたやうでしたねえ。
つた子　それに今更こんな事をいふのも何ですが。義姉さんにも少し學問があつたならば、あんなでもなかつたで

せうがね。

藤田　何しろ少しも反省のない人だつたから。人間は善かつたけれども。

田村　（欠伸を噛み殺して時計を出して見る）　十時五分前だ。

お滿　（また悲しくなつて來る）　でもかうやつて私が良造の死顏を見ようとは何といふ不仕合でせうねえ。良造も辛苦して、やうやくこれまで家を盛立てゝ、これから少しづゝ樂が出來ようといふ時になつて、こんな事になつてしまつて私は可愛さうでなりませんよ。（泣く）

つた子　皆お酒と女の毒ですよ。

（五人の愛妾は恥かしめられたやうな顏付で一齊につた子を睨む。）

（沈默。）

つた子　（愛妾たちを白睨みかへして）　私はかうやつて兄さんの死顏を見てゐると、慘たらしく虐殺（なぶりごろ）しにされた人を見てゐるやうな氣がしてなりませんよ。兄さんの顏には苦痛に責め疲れた人が死んで、漸く安らかになつたやうな表情が表はれてゐます。私はたつた一人の兄さんをこんなに慘たらしい眼に會はせた人たちが憎くて憎くて耐りません。

とめ子　（憤然として）　奧樣、それは私たちに向つておつしやるのですか。

つた子　私は誰と人を指して申しません。兄と不道德な關係を結んでゐた總ての女に向つていふのです。

とめ子　不道德ですつて、まあ。

よし子　それでは奧樣伺ひますが、道德的な男女の關係と申しますのは、どういふ關係でございませう。

つた子　それが分らないのですか。一夫一婦の結婚より他に、人に聞かれて耻かしくない男女の關係はありませんよ。

よし子　それでは奧樣、あなたはまだ何にも御存じないのですね。（間を置いて）　そのお齡で男と女との間の事は何一つお分りにならないのですね。

つた子　失禮な事ばかり。私はかう見えても女子高等師範學校を卒業して、藤田と結婚してからもう十年になりますよ。その位の事が分らないでどうするものですか。

よし子　でも十五六の未婚娘の言ひ草見たやうな事をおつしやるぢやありませんか。

つた子　（急き込んで）　何ですつて、十五六の未婚娘の言ひ草ですつて。まあ、素性も分らない妾風情の口からそんな侮辱を受けたかと思ふと、私は口惜しくて口惜しくて。

よし子　（落付いて）　奧樣。今私共は系圖調べをしてゐる

のではございませんよ。そりや私共と違つてお金のある娘さんは立派に思ふ方と結婚して、他所眼には羨まれるやうな家庭をお造りになる事が出來ます。併しさういふ御夫婦が皆、あなたのおつしやるやうな人に聞かれて耻かしくない御關係だか、どうか分るものぢやございませんよ。よしまたこれが人に聞かれて耻かしくないやうな御關係であつたにしろ、私共から見ればそんな御夫婦は少しも人間として價値のない者としきや思へません。

つた子　どうして價値がないのです。

よし子　折角人間が天から授かつた寶物を味はゝないからです。寶の持腐れだからです。丁度智惠のない金持がお金をすつかり藏の內へしまつてゝ銹させてしまふやうな物です。物の價値を知らないのはこの世の內で一番大きな罪ですよ。

つた子　そんな事はありません。私は決して價値を知らないのではありません。節制するのです、濫費をつゝしむだけです。(死骸を指さして)　兄を御覽なさい。これが濫費の結果です。あなた方が人間でなければ、兄は拂つただけの價値のものをあなた方の身體から貰つて行けたのですが、あなた方が人間だつたために、あなた方の兄にくれた物より大きな値段を兄は拂はせられたのです。その結果が腦溢血です。この通り慘たらしい死態をしなければならなかつたのです。兄はあなた方五人から責め苛なまれて死んだのですよ。

田村　(また時計を出して見ろ)　十時十分過ぎだ。(藤田とお滿とに向つて)　この調子では今夜中には遺言狀を讀むやうにはなりますまい。私は鳥渡失禮して病人を診て來ませう。

(つた子の最後の言葉を聞いて、五人の愛妾は險しい眼付でつた子を白眼んだが、田村が遺言狀と云つたので電氣にかゝつたやうに一齊にその方を見る。)

藤田　いや、お忙しい處をお待たせして置いて、ぢやそろそろ遺言狀を開封しませうか。遺言狀はどこにあるのです。

お滿　おはな、あの良造の書齋の床の間に置いてある箱を持つて來ておくれ。

はな　はい。(退く)

藤田　先年私が勸めて遺言狀を書かせて置いたので、後の財産等の整理には大助かりですよ。

つた子　でもよく兄さんがあんな物を書いて置く氣になりましたねえ。あんな氣象で……

お滿　やつぱり蟲が知らせたんだよ。

藤田　誰でも五十を越すと、遺言狀を書く氣になりますよ。併し義兄さんも働いて貯めてあつたから後は樂です

よ。この宅地と病院だつて時價に見積つて大した物ですから――それに私の會社に一萬圓の保險がついてゐますから：：：

お滿　あれは今度取れるのでせうか。

藤田　私の會社では當人が死んでから五日以內に全部支拂ひますから。

（はなが朱塗りの大きな箱を大事さうに運んでくる。一座の者は皆默つてその箱の一擧一動を見守つて片唾を呑んでゐる。）

（お滿が箱をはなから受取つて藤田に渡す。）

藤田　（箱を受取つて田村に）田村さん、あなたお讀み下さいますか。

田村　いや、お身內ですから、あなたの方がいゝでせう。

（藤田は皆の意見を問ふやうに一座を見廻す。）

お滿　では御苦勞ですが、良輔さん、讀んで下さい。

藤田　承知しました。では讀みませう。（かう言つて藤田は封印を切つて箱を開ける。內から一通の狀が現はれる。藤田はそれを擴げて）では讀みますから：：：（皆は默つて一禮する）大正二年十月十九日、午後九時この狀を認む：：：我今五十一回の誕生日を迎へ、しかも尙我が脈管の內に流るゝ血液の熱に惱めるを感ず。今にして顧みればわが一生の生活は慘苦と快樂と、恰も機械の齒輪の如く緊密に喰ひ違ひて、その間に空隙なきを覺ゆ。これわが生活の唯一の誇りにして、同時にまた自己の滿足なり。我れは神を信ぜず。たゞ人間を信じかつ愛す。そもそも人間は淚と笑との器によつて、その肉體を虛僞と眞實とを以て彩られたる者なり。地上他にかゝる靈妙なる物あらんや。（一座變な顏をして聞いてゐる）わが人間を熱愛する所以は此處に存す。彼等は一面甚だ多淫にして、一面極めて多淚なり。われはこれを自己に徵して知る。われいまだこの事實に想ひ到らざりしときはたゞ徒らに人生を苦痛としたり。怠惰はその頃のわが好伴侶にして、鬱憂は妄想と共にわが食膳の缺くべからざる滋味なりき。此處に生活は沈滯し、人生は爛壞の岐と化して、わが肉體が奇しき憂の內に始終する者とならんとしたりき。危かりしかな。

お滿　（とう／＼耐へかねて）良輔さん、それが遺言狀でございますか。

藤田　えゝ。（箱の內をなほ一應調べて）これより他には何もございませんが。

つた子　何だか變ですねえ。

藤田　まあ先を讀んで見ませう：：：その頃われは極めて貧困にして、人間生活の外面たる衣食住の一として滿足なる物はあらざりしなり。然れどもわれは敢てこの困苦缺

乏を意とせず、たゞ愚なる靑春の意氣に驅られて怠惰と鬱憂との内に未來の安樂を夢みたりき。然るにわが三十歳の時、圖らずもわれは人生の一大事實に逢着し此處に初めて多年の迷夢を破り、眞實の生活を發見したり。われは後にわが妻となりて、多くの噓を吐き、多くの貞節を盡し、遂に同棲四年にして、一子を殘して死去したる一美人を戀慕したりしなり。幸福にもわが堂々たる風采とわが職業とは、かの女とその父母を欺く事を得てわが家庭は造られ宿望は此處に達せられたり。われはかの女によりて人生の多くの秘めたる事を得たり。これわが未だにかの女を忘れ得ず。日夜感謝の情を以て已に十年前一片の土と化したる彼の女を思ふ所以なり。同棲二年にしてかの女はわが親友某醫學博士と情を通じたり。(一座愕然とする。田村は狼狽して色を變ず)而もわが妻を愛しその親友を愛する情は依然として變らざりき。もしわれ早く此世を去らば、その友は必ずわが亞死の床に伏して、わが眼の閉づるを見屆け、わがために遺言狀を讀む一人となるべきを疑はず。(田村は頻りに汗をふいてゐる)かの女は二心を抱きて、ます〳〵われに貞節なりき。夜毎に迸るわが熱き情に酬ゆるに娼婦の如き情熱を以てしたりき。かくてわが愛すべき妻は戀愛の苦勞によりて劇烈なる神經衰弱となり、僅に二十三歳を一期として白玉樓中の人となれり。わが悲歎比ぶるものなかりき。妻の死によりて初めて人生の最も深き秘密に徹底し得たるわれは、飜然として虛僞も眞實以上に尊むべき所以を悟り得たり。わが生活は一轉したり。それよりわれは虛僞も眞實も總てわが生活の途に逢着する最高の事實として恭しく取扱ひたり。不思議なるかな。數年にしてわれは總ての事實を虛僞とも眞實とも感ぜざる迄修養し得たり。かくてわれは人生を熱愛し今日の富を得て體量二十二貫を數ふるに至れり。今われにとりては生も死も虛僞も眞實もなし。たゞ美しく愛すべき自己あるのみ。

――これだけしきゃ書いてありませんよ。

(皆呆れてゐる。)

よし子　ぢゃ私たちは、どうなるのでございませう。(答ふる者なし)

(突然緣がはの外で泣き聲がきこえる。)

お滿　誰だらう。

(つた子が默つて立つて障子をあけて見る。)

つた子　おや、汝(おまへ)は……

なつ　(泣きながら)はい。なつでございます。(内に入つて來る)まあ、旦那樣、とう〳〵こんな情ないお姿におなり遊ばして――(大泣きに泣く)

お滿　なつ。どうしたのだい、突然入つてきて。

なつ　御隱居さま、どうぞ失禮な處は御勘辨遊ばして下さいまし。私はさつきからその緣がはで立つて居りましたのでございます。まあ、何といふ悲しい事でございませう。あんなお柔しくして下すつた旦那樣がわづか二時間か三時間の內にこんなになつておしまひなさいますとは――なつはもう決して旦那樣、お嫁になんぞは參りはいたしませんよ。旦那樣のお墓の傍へ御奉公して一生尼になつて暮らします。……

お滿　何を云つてゐるのだい、汝は――

なつ　いゝえ、御隱居さま、お聞き遊ばして下さいまし。これが悲しくなければ犬畜生にも劣りますのでございます。先日忘れもいたしません。今日から五日前の晚方、丁度皆さまお芝居へいらつしつた後で御書齋で旦那樣がお招びになりますから、私が參りますとそれはく〵お柔しい事をおつしやいましてねえ、もう私は恥かしくて死にさうでございました…あゝ、旦那樣、私にはどうしてもこんな事におなりなすつたのが噓としきや思へませんでございます。（死人の傍にすり寄つて）旦那樣く〵何とかおつしやつて下さいまし。なつでございますよ。先日旦那樣の溫かいお手に抱いて頂いて長い事泣いて居りましたなつでございますよ。旦那樣あゝ、もう何ともおつしやれないのでございますか。お可愛さうに……

（なつは死骸をゆすぶつて、狂人のやうに泣く。）

――靜かに幕――

喜劇 姙婦授産所（一幕）

人物

玉木輝子 姙娠授産所長
宇川村子 同授産所事務員
毛利勝子 同授産所助手
武田收二 新聞記者
増田享一郎 牧師
田代うら子 女學生
葦田靜江 琴曲指南の寡婦
內田新之助 商業學校生徒
梅本りん 小間使
その他同授産所女玄關番等

時
現代

場所
東京市內

場末の街。下宿屋をその儘買つたやうな家のつくり、十疊と六疊の室。

十月中旬の晴れた午後である。奥の間の正面は硝子障子で立切つてある。外は庭。鴨居に支那人の字で、『至誠通天玉水女史至囑』と記した額がある。硝子障子の外は緣がはになり病室に通ふやうになつてゐる。右は唐紙で閉て切つてある。姙婦診察室と云ふ張札がしてある。左は床の間と違ひ棚とになつてゐる。床の間には大きな松の鉢植が飾つてある。左の六疊は患者の待合のやうになつてゐて、新聞二三種と大きな瀨戶物の火鉢が置いてある。奥の間には小形の瓦斯ストーブがある。下に毛氈を敷いて中央に紫檀の卓が据ゑてある。その上に灰皿、莨入、帳簿、四五册。女玄關番が牧師増田享一郎と女學生田代うら子を伴れて次の間から座敷へ這入つてくる。瓦斯ストーブに火を點ける。

女玄關番 只今先生がいらつしやいますから、少時お待ちなすつて下さいまし。

（二人默つて會釋をする。）

（女玄關番去る。）

増田 （小聲で） うら子さん。存外廣い家ですね。それに靜かですよ。あなたの下宿なんかより餘程いゝ。

うら子 どうせさうですよ。あなたはよくそんな惡口が云へますね。

増田 またそんな事を――あなたは近頃餘程神經過敏にな

つてゐますね。
うら子　神經過敏には誰がしたのですよ。こんな恥かしい眼にあつて――あたしどうしてあの時あんなに馬鹿だつたのでせう。（泣く）
増田　（うろたへて）うら子さん。今先生が來ますから……
うら子　來てもいゝわ。あたしが泣くのは無理でせうか。こんな身體にされちまつて。
増田　困るなあ――家でもうあれだけ泣いたり、僕を苛めたりしたのに。（熱くなつて）うら子さん、僕の愛を信じて下さい。僕はあなたの身體の始末のために全力を注いでゐるのですから。
うら子　でも増田さん。あなたの愛を信じた結果がこれよ。あたしとあなたと始めてたつた二人でお話したときあなたは矢張『僕の愛を信じて下さい』つておつしやつたぢやありませんか。
増田　（悄然となる）うら子さん。これは不慮の災難です。あなたがもし僕の愛を信じて下さらねばこの場合――
うら子　いゝえ、當然の結果よ。さうぢやなくつて。
増田　うら子さん。神をお信じ下さい。あなたの言葉には異教徒の調子が出て來ましたよ。恐ろしい事です。
うら子　異教徒にもなりませうよ。けふ神谷さんの夫人があたしのお腹をみて變な笑ひ方をしてゐらしつたわ。あの方は饒舌者（おしやべり）だからもうきつと教會中の評判になつてるわ。
増田　（急に氣が付く）そりやさうと、うら子さん。お金の方はどうしませう。
うら子　困るわ。あたしお金なんか持つてやしなくつてよ。
増田　僕の俸給が全部で二十九圓五十錢――と。とてもそれでは足りやしない。あなたはお國からいくら貰つてるんです。
うら子　二十圓よ、毎月。
増田　合せて四十九圓五十錢。併しそれを皆此處へ拂つてしまふと來月僕は一文なしになつてしまふ。洋服屋とミルクホールにはどうしても拂はなけりやならないが。
（考へこむ）
（玉木輝子が紋付の羽織に黒繻子の袴と云ふ全部黒ずくめで出てくる。四十七八のでつぷり肥つた醜い女である。）
輝子　（商賣馴れた男のやうな口調で）や、鳥渡仕掛けた用事があつたので失禮しました。
（うら子は俯向いてゐる。）

増田　（なるべく弱足を見せないやうに）　いや。どういたしまして。今日上りましたのは…實はこの婦人を鳥渡診て戴きたいと思ひまして。
輝子　（輕く）　はあ、成程。（うら子に向つて）　あなたが産婦さんでいらつしやいますか。
うら子　（赤くなつて）　はあ。
輝子　（卓上の呼鈴を鳴らす。　女事務員宇川村子が飛んで出てくる）　鳥渡診斷簿に記入して下さい。
村子　はい。（卓の側に坐して帳簿を開く）
輝子　（うら子に向つて）　では鳥渡御姓名と御齡とお住居とを――
増田　住所は本郷區森川町一、増田享一郎方田代うら子、明治廿八年六月生れです。（村子その通りに記入す）
輝子　ぢや二十歳でいらつしやいますね。
うら子　はあ。
輝子　（うら子の姿勢をジロジロ見ながら）　これまで別に重い病氣におなりなすつた事はありませんか。
うら子　いゝえ。（村子はその返事を記す）
輝子　では鳥渡拜見しませう。（立つて診察室の方へゆく。うら子は氣まり惡さうに從いてゆく。増田はそれを心配な眼付で見送る）
増田　（室内を一通り見廻して正面の額を見つめてゐる。やがて獨語の調子で）『至誠通レ天』――

（診察室から大きな輝子の聲がきこえる。）
輝子　村子さん。月經初潮、滿十二年五月。――以後順調――本年二月十八日來潮せず――五月頃より輕度の惡阻ありしも二ケ月にして治癒せり。その他疾病なし。月經期間七日内外――最終月經は二月十二日に始まり同十八日閉止す。分娩豫定日は…十一月二十五日。
増田　今日が二十日　（指折り数へる）
輝子　八月二十三日始めて胎動を感ず、下腹部に緊張あり。

（村子その通りに記入す。）
増田　（考へ深く）　『至誠通レ天』と…
（輝子とうら子は診察室より出てくる。）
輝子　（にこやかに増田に向つて）　只今あちらから申上げたやうな譯で――豫定日は十一月二十五日ですが。
増田　しますと…僕は一向かう云ふ事には通じてゐないんですが、その豫定の日には必ず生れるのでせう。
うら子　いゝえ、どうも之ばつかりはさうきちんと參るものではございません。がしかしこの産婦さんは私の考へではそれより早からうとも遲くはなるまいと思ひます。
増田　はゝあ…　（うら子を顧みて相談するやうに）　うら子さん。ではお願ひしますか。

うら子　（黙つてどうでもいゝと云ふ擧動の内に承諾の意を現す）
増田　もう後一月しきやないのですから――もし産婦のお預かりを願ふとすれば何時頃からが宜しいでせうか。
輝子　（呆然としてゐる女事務員に）村子さん。此處が濟んだら先刻お願ひして置いた胞衣會社へやる手紙を書いて戴きたいのですが。
村子　（赤くなる）はい。（去る）
輝子　（増田に向つて）私の所は何時でもお引受け致します。お望みなら今日からでも――幸ひ産室が昨日二つばかり空きましたから。
増田　なる程――さうしますとお預けいたします費用はどの位になりませうか。
輝子　（流れるやうに）入室料は特等一等二等に分けてあります。特等は一日一圓一等八十錢二等五十錢で賄まで附きます。尙産褥に居らつしやる間はこの倍額を頂戴する事になつて居ります。それから御出産の時は諸費用ともに十圓だけ戴く規定で御座います。これは總十日分だけ宛前金で、お納めを願ひます。
増田　なる程。（胸の内で勘定する）……
輝子　これから特等一等までは私がお取上げいたしますが二等は助手に任せてあります。
増田　はあ。どうでせう。うら子さん。セコンドにしては。
うら子　セコンド。（不服らしく云ふ）
増田　（汗をふきながら）でもいろ〳〵都合がありますから。ね。いゝでせう。
うら子　いやよ。あたし。……増田さん。特等にして頂戴。
増田　併しその――
うら子　（自棄に）そんならいゝわ。あたしあなたに願はないから――（惡さうに白眼む）
増田　（閉口して）併しうら子さん。
うら子　（輝子に向つて）ぢや特等に願ひますから、さうして今日からお願ひしたいと思ひます。何時どんな事があるか知れませんから。
輝子　（簡單に）はあ、よろしうございます。
うら子　（増田に）では増田さん。あたしもう歸りませんからあなた鳥渡家へ行つてあたしの荷物とお金を持つて來てくださいな、荷物は手廻りの物と着替二三枚でよくつてよ。
増田　（情なさうに思切惡く）でも。……
うら子　（低い聲できつく）これはあなたの義務よ。（輝子に向つて）丁度夫が東京に居りませんので此方にいろ

いろ世話をして戴いてほんとにお氣の毒ですの。

輝子　(何もかも全部承知し切つてゐるやうな顔付で)　まあ、さうですか。それは御氣の毒な事でございますねえ。

増田　(一ぱい喰つた人のやうに忌々しさうに)　ぢや。うら子さん、僕は歸りますから　(輝子に)　長座いたしました。ではさうして願ひます。(去る)

輝子　(増田に挨拶しながら呼鈴をチンチンとならす。女事務員が飛んでくる)　村子さん、この方を昨日空いた十二號にお伴れ申して下さい。

(女事務員はうら子を伴れて緣がはづたひに去る。)

(女玄關番が名刺を持つて出てくる。)

女玄關番　先生。かう云ふ人がお眼にかゝりたいつて來ていらつしやいました。

輝子　(名刺をみる)　ぢや此方へお通しなさい。

(女玄關番去る。)

(新聞記者武田收二が出てくる。)

武田　(叮嚀に)　始めてお眼にかゝります。私は東京××新聞の社會部の記者で——名刺を差上ときましたが武田と申します者です。

輝子　はあ、さうでいらつしやいますか。始めまして。何か御用でも。

武田　實は今度このあなたの御事業に付きまして少し新聞に書きたいと思ひますので…

輝子　なる程。

武田　私共の社では社長はじめ非常にあなたの御事業に御同情を持つて居るのでございまして——

輝子　まだ事業と名のつく程の事でもございませんのに——そんな事をおつしやられては却つてお恥かしいやうでございます。

武田　どういたしまして——それではお忙しい處を甚だ恐れ入りますが、一つ現在の御狀況とかあなたのお履歷とか、この事業をお思ひ立ちになりました動機または將來の御希望と云ふやうな事に付きまして、お話を願ひたいのでございますが…いかゞでございませうか。

輝子　まあ、左樣でございますか。

(記者は忽ち手帳を出して鉛筆をけづる。助手毛利勝子が緣がはの方から出て來る。)

勝子　先生。九番の産婦さんが潮時のやうでございますが…

輝子　何か異常がありますか。

勝子　別に異常はございませんが頻りに陣痛をうつたへますから…

輝子　あの産婦さんは二等でしたね。ぢや御苦勞ですがあ

なた取上げて下さい。
勝子　かしこまりました。（去る）
武田　さうしますと現在何人の産婦を御收容になつていらつしやいますか。
輝子　當授産所で三十四人收容して居ります。
武田　（記入しながら）なる程。
輝子　餘程社會の要求があつたものと見えまして創立以來三日と産室の空いた事がございません。
武田　はゝあ、入室して居ります産婦は主に何う云ふ社會上の階級に屬して居る人達でございませうか。
輝子　それは一定いたしません。けれども何れも正式の結婚をしてゐない人達ばかりでございます。
武田　なる程。それはさうでせうな。してみますと未婚の婦人が多い譯ですな。
輝子　いゝえ。良人を失した人の方が多いかも知れませんよ。私どもから見ますとこの人はお産をした事があるかないかはすぐ分りますからね。
武田　はゝあ。――ではこれ迄手におかけなすつた産婦の數はどの位ございませう。
輝子　さうでございます。はつきりした事は覺えて居りませんが創立以來四年間に八百三四十のものでございませう。

武田　大したものですなあ。
輝子　まづ私は一生の内に一萬近い私生兒を生せるやうになるだらうと思つて居ります。
武田　（驚く）はあ。そんなに澤山私生兒をお造りになるのは何か社會の利益にでもなさらうといふお考へからですか。
輝子　（笑つて）いゝえ。私はそんなお金持の考へさうな事は決して考へません。一萬人の私生兒を生ませるのは別に何の意味もありません。たゞ私の仕事の結果です。私はこれから何年生きるか分りませんが、私が安樂に一生涯生活した證據になつて殘つてくれるのが一萬人の私生兒だと云ふだけです。
武田　さうしますとあなたはあなたの御事業が社會に何う云ふ影響を與へるものだと云ふ事はお考へにならないのですか。
輝子　それは働いて御飯を戴いてゐる人間の考へる事ではないと私は思つて居ります。
武田　どうしてです。
輝子　働かないで生活の出來る人間は別として、これは誰も異存のない事だらうと思ひますが、人間は肥え太つて樂々と世を渡つてゆくのが當人に取つても他人にとつても一番愉快な事です。その點では人間も豚もあまり變り

はないと思ひます。

武田　なる程。

輝子　そこで元來貧乏な人間は何か一番有利な仕事を搜さなければなりません。それにはその人間の性質と技倆とが自分にはつきり分つてゐなければならないのです。さうでせう。

武田　それはあなたのおつしやるとほりです。

輝子　處がこの數の多い人間が皆がみな社會の利益になるやうな職業に適するやうに出來てゐるものではありません。なかにはまあ極端に云へば盜賊の名人も居ます。これは決して人間ばかりではありません。自然の人間に與へたもの丶内に滋養になる食物もあれば人を殺す黴菌もあるやうなものです。それだのに折角自分を幸福にしてくれる仕事を社會の利益のために犧牲にするのは矢張馬鹿の一種です。

武田　けれども人間には良心がありますから、結局さう云ふ風にして得た幸福は一種の不幸になるだらうと思ひますが。

輝子　それはさうです。そこで私どもは是非見なければならないものと、見てはいけないものと、世の中の出來事を嚴重にこの二つに分けてしまひます。そしてそれに適合まるやうに自分を敎育しなければなりません。さうして終ふと心持がのびのびして來ます。

武田　と云ふと……あんまり奇拔で私にはよく分りませんが。

輝子　何んな惡事でも何處か世の中に適つて居る處があるものです。盜まれた當人は損害でもその金が遊廓へ落ちればそこで何人かの人間が助かつて行きます。世の中が進んで複雜になればなる程かう云ふ矛盾が烈しくなつてゆきますから、私共は自分の職業のよい方ばかりを見て惡い方を見ないやうに自分を敎育するのです。

武田　そんな事が出來ませうか。

輝子　そこが敎育の必要な處です。私ども丶始めの内はよくお芝居に出てくる人のやうに見てはいけない方を見ては自分で苦しんで居ましたが、仕合と此頃ではそんな事はないやうになりました。此仕事などでも出さなくていい襤褸を隱してやるのですから、確に社會には必要な仕事ですよ。

（助手、毛利勝子が緣がはから出てくる。）

勝子　先生。五番の產婦さんは只今御安產なさいました。

輝子　御苦勞でしたね。男ですか女ですか。

勝子　男のお子さんです。

輝子　此頃は奇體に男ばかり生れますね。

勝子　それから只今十六番の產婦さんが――

輝子　あれはたしか狭窄骨盤でしたね。
勝子　さうで御座います。
輝子　あの産婦さんは何等でしたらう。
勝子　矢張二等で御座います。
輝子　さうですな。切開は厭がるのでしたね。
勝子　さうで御座います。
輝子　ぢや頭蓋穿孔術をやつて下さい。あなたと村岡さんと立會つて。
勝子　はあ――
輝子　用心して下さい。母親に危険のないやうに――それから子供の頭をよく壓してゐないと動きますから。
勝子　はあ。承知いたしました。（去る）
武田　頭蓋穿孔術と云ふのはどう云ふ遣方なのです。
輝子　母親の骨盤が狭くて赤兒が出られませんから、赤兒の頭に孔をあけて腦髓をすつかり出して、頭を長くして挽き出すのです。赤兒を殺して母親を助けるのです。
武田　そんな重大な手術にあなたは、お立會なさらないんですか。
輝子　私の授産所の規定として特等一等は全部私がやりますが二等は助手に任せてあるのです。助手は只今二人居りますが皆立派に女醫の免狀を持つて居りますから差支はありません。
武田　はゝあ……
輝子　私の授産所は仕事にかけては出來るだけ正確に規則的にして居ます。この仕事を始めますとき、私は人間の身體から子供を引張り出す器械になつたのです。そこでは仕事に關しては鐵のやうに沈默でなければなりません。私どもは仕事の上では秘密を守ります。併しそれは器械として守るのです。その間に少しも人間らしい感情を生じません。
武田　器械として。
輝子　つまり鐵で造へたやうに無意識に仕事をしてゆくのです。もし何人もこの仕事を見にいらつしやらなければこれは何時までも秘密になつて居ります。けれども何人か見にお出でになれば決して隱しはいたしません。器械として自分の職分を盡すに差支ない限りはどんな處でもお眼にかけます。たとへそれがそのお方の見てはいけない事でも。
武田　なる程。あなたのお考へは餘程面白い。確に近代的です。處で私はあなたを失禮ながら人間の身體から子供を引張り出す器械として、あなたの御履歴を伺ひたいのですが。
輝子　（笑つて）では私は鐵のやうに無邪氣にお話ししませう。

武田　どうぞ願ひます。

輝子　（朗讀のやうな調子を加へて）私は慶應元年十月六日に神奈川縣橘樹郡の相當な寺に生れました。私の父は日蓮宗の坊主で御座います。十八歳の春まで可なり可愛がられて育ちましたが、その年に父が亡くなつてしまひました。私はそれから三人良人を持ちましたがその內二人は私を棄ててしまひますし、一人は肺病で死んでしまひました。初めの良人は矢張日蓮宗の坊主で御座いましたが、道樂者で私の財產をすつかり費つてしまひました。次の良人は柔なしかつたかはり、身體が弱くて早世しました。三番目の良人は私より年下で巡査で御座いましたが、四ケ月ばかりする內に逃げてしまひました。私はもう一文の財產もなく、ほんたうの裸一貫になつたのです。幸私の世話になつた人に醫者がありまして、その人のすゝめで私は二十八歳の時、女醫になる決心をして學校に這入りました。晝はその人の家の藥局を務めて、夜學に通つたのです。在校中は勉强に一心でしたから、別に何事もありませんでしたが、後期の試驗が通つて一人前の女醫になつてから私は長らく友人として交際してゐた一人の醫學生から戀慕の情を打明けられましたが、私はその人の誠意を疑ひましたから承諾しませんでした。

武田　（熱心にその話を筆記してゐたがそのとき烏渡手を止めて）その時あなたはお幾歳でした。

輝子　三十五歳でした。それから私は身心の寂寥を忘れるために發奮して米國に渡航しました。そしてあちらでいろ〳〵苦勞しましたが學問上何も得る處はありませんでした。只金がたまつただけです。私は四十一歳に日本へ歸つて來まして取敢ず開業しましたがどうも思はしくありません。そこで米國で見聞した處もありますしまた日本刻下の社會にかんがみて、この姫婦授產所を開いたので御座います。幸ひな事には開業以來滿四年になりますが次第に隆盛になるばかりです。

武田　や、有難う御座いました。これは一種の立志談としても結構なお話です。早速明日の新聞に載せませう。

輝子　文章は何うか御訂正を願ひます。

（女玄關番出てくる。）

女玄關番　先生。一人產婦が見えましたが。

輝子　さうですか。

武田　（もじもじして）時に甚だ願ひ兼ねますが產婦御取扱ひの實情を一つ拜見させて戴く譯には參りますまいか。

輝子　それは心安い事です。失禮ですがあなたはもう妻帶していらつしやいますか、それとも御獨身ですか。

武田　まだ獨身で御座います。

輝子　御獨身では、これはあなたに取つて見てはいけない事になりますが、それさへお構ひなくば……

武田　いえ、私は構ひません。

輝子　では御眼にかけませう。併しあなたが其處に坐つていらしつては產婦が耻かしがりますから、仕事の邪魔になります。ぢや少時あの椽がはの戸袋の蔭に隱れてゐて下さい。

武田　承知しました。（椽がはに出て戸袋の蔭に隱れる）

輝子　（女玄關番に）產婦さんをこちらへお伴れ申して下さい。

（女玄關番去る。）

（琴曲指南の寡婦葦田靜江、品のいゝ切下髮で被布を着て出てくる。）

（二十七八歲の器量のいゝ女。大きな腹を持扱つてゐる。）

輝子　あなたが產婦さんでいらつしやいますか。（じろじろとその姿勢をみる）

靜江　（きまり惡さうに）左樣で御座います。始めまして……

輝子　（輕く會釋して）や、始めまして……

靜江　實は鳥渡見て戴きたいと存じまして……

輝子　はあ——（呼鈴をチンチンと鳴らす）

（女事務員宇川村子が飛んでくる。村子は卓の側に坐つて帳簿を開く。）

輝子　では鳥渡お姓名とお齡とお住居を……こちらで書き取りますから。

輝子　私は麴町區三番町五番地に居ります葦田靜江と申します琴の師匠で御座います。

村子　（顏をあげて）お齡は。

靜江　二十九歲で御座います。

輝子　これまでお產をなすつた事が御座いますか。

靜江　いゝえ、初めてゞ御座います。

輝子　では何か重い御病氣をお罹らひなすつた事は。

靜江　御座いませんの。

輝子　では一寸拜見いたしませう。

（靜江を伴れて診察室へ這入る。村子はペンの先を氣にしながら待つてゐる。硝子障子から武田が室内を覗いてまた隱れる。）

輝子　村子さん。月經初潮滿十七年八月。爾來順調——本年三月二十日以來潮せず。惡阻その他の疾病なし。月經期間五日内外、最終月經は三月十五日に始まり同廿日閉止す。輕產婦なり。分娩豫定日は……十二月二十七日。

（村子その通りに記入す。）

輝子　七月中旬より胎動を自覺す。その他異狀なし。

（沈默。）

（二人は診察室より出て來る。武田は顏を出してゐたが、狼狽てゝ引込める。村子は帳簿を片付けて去る。）

輝子　十一月二十七日前後ですからまだ大分間がありますが。――どうなさいます。今から入室なさいますか。

靜江　左樣で御座いますね。（媚びるやうに笑つて）實は先生、少し御相談が願ひたいんで御座いますよ。私は御覽のとほり寡婦で御座いまして確然した親類もないので御座いますからどうぞ先生、可哀さうだと思召して……

輝子　そこで御相談とおつしやいますのは。

靜江　（微笑）まあ先生。（甘へるやうに）只今申上げますわ。こんな耻かしい事は先生さう急いて申上げられやしません。

輝子　（呆れてゐる）……

靜江　先生。そんな眞面目な顏を遊ばしちや厭で御座いますよ。

輝子　（當惑して）私の無愛想は持前ですから……

靜江　あらお憤り遊ばしては困りますよ。實は私はこの四年程前に良人に別れましてね。

輝子　は、なる程。

靜江　元々良人と申すのがほんの人の善いばかりで少しも働きのない男だつたものですから、後で私は其日の御飯も戴けないやうな次第で――まあ私はどうしようかと思ひましたの。其內良人の生前から御懇意に願つて居りました方で、やはり同じお役所へ出ていらつしつた方ですが、いろ〳〵親切に世話をして下さいましてね。やうやく琴の師匠をはじめましたの。

輝子　はあ。

靜江　さう致します內に、先生、まあお耻かしい話で御座いますがその方がいろ〳〵可笑な事をおつしやるやうになつたので御座いますよ。私はそれが厭でたまりませんでしたの、先生。

輝子　なる……

靜江　（泣く）先生。私は亡くなつた良人に濟まない事をしてしまひましたの。……

輝子　……それで。

靜江　それと申しますのも先生、私は女の身で自分で御飯を戴いてゆかなければならない身體で御座いませう。ですからつひその方にもまた外の方にもそんな強い事は申上げられませんでね。どうか先生。可哀さうだと思召して下さいまし。（頻りに泣く）

輝子　なる程。それで此處へいらつしつたのですね。

靜江　先生。私は何時の間にかこんな思ひも懸けない事に

なつてしまつて途方に暮れてしまつたので御座いますよ。處が先生。（口惜しさうに）男と申しますものは薄情なもので御座いましてね。私がこんな身體になりますと、もう誰れも寄り附きもいたさないので御座いますの。もう私は口惜しくつて恥かしくつて早速その始めから世話して下すつた方の處に談じ付けに參りましたの。さうしますとどうでせう。先生。私もう殘念で殘念で：：：（少しも殘念らしくなく泣き入る）

輝子　（困り切つてゐる）……………

靜江　（輝子が親切に訊いてくれないのを口惜しがつて）先生。その男は嫉妬をやいてどうしても私を引取つてくれないので御座いますよ。

輝子　さう………

靜江　そのうちに御近所でいろ／＼噂が立つて參りまして……もう／＼私は恥かしくて外は歩けませんの。（泣く）

（助手毛利勝子緣がはから飛んで出る。）

勝子　先生、十六番の産婦さんは御安産で御座いました。（汗をふく）

輝子　村岡さんと立合つて頭蓋穿孔術をやつたのですか。

勝子　はあ、産婦さんは御無事で御座います。

輝子　それは御苦勞でした。それでは産婦さんに別に出血もありませんでしたか。

勝子　はあ、別に。

輝子　では跡の消毒を手落ちのないやうに願ひます。子供は男でしたか、女でしたか。

勝子　男のやうでした。

輝子　また男ですか――それからあの五番の産婦さんはまだ産れませんか。

勝子　えゝ、村岡さんがつきつ切りに付いてゐますけれど――

輝子　お産が始まつたのは今朝の午前十一時からでしたね。

勝子　午前十一時十五分からで御座います。

輝子　さうでしたね。御苦勞でした。あとから私も鳥渡診に行きますがあなたも時々廻つて診て下さい。

勝子　かしこまりました。（去る）

輝子　（靜江の方に顏を向けて）それで。

靜江　まあお忙しい處に長話をいたしまして――そこで先生。これは一生の御願なので御座いますが（愛嬌笑ひをして）聽いて戴けませうか。

輝子　（ぶつきらぼうに）あなたはまだその用向をお話しなさいません。

靜江　あゝ――いまお話ししようと思つてゐる處で御座い

ますよ。先生。さう云ふ次第で之から十二月廿七日まで待つて居ますと家業にも差支ますし……私は大變困るんで御座いますがどうで御座いませう。お金は費るだけ掛けますが早産をさせて戴く譯には參りますまいか。

輝子　それは出來ません。法律で禁じられて居りますから。

靜江　そこを一つ秘密でして戴きたいので御座いますが——そのかはりお金を決して惜みませんから——ねえ、先生。

輝子　一體産科で早産をさせていゝのは、骨盤が狹いとか、身體が産をするに耐へない病氣があるとか、何か條件がなければだめです。失禮ですがあなたの身體には少しもその條件に適する點がありません。あなたのお身體はまるで子を産むためにわざ／＼造へたやうに工合よく出來てゐますから。

靜江　でも先生。どうかお情を持ちまして……

輝子　いゝえ。さう云ふ事は當授産所ではお引受する事は出來ません。當授産所創立の際定めました規定に『分娩に適せざる身體を持ちたる産婦以外には人工早産を施行せず』とかう書いて御座いますから——折角ですがお斷りします。

靜江　(肩で呼吸をしながら)ではどうしても駄目で御座いますね、先生。

輝子　はあ。お氣の毒ですが……

靜江　それならば致し方も御座いません。どうも長々お邪魔いたしました。では失禮いたしませう。

(靜江去る。)

輝子　これは折角御出でなすつたのに。

(女玄關番入違ひに這入つてくる。)

女玄關番　また産婦さんがいらつしやいました。

輝子　此方へお通しなさい。

女玄關番　かしこまりました。(去る)

(武田收二耐まらない顏付で戸袋の蔭から出てくる。)

武田　や、どうも伺つてゐると——

輝子　まだ出てはいけません。も一人いま來ますから——

(武田びつくりして戸袋の蔭へ引つ込む。鐵物屋の若旦那、商業學校に通つてゐる内田新之助が小間使梅本りんをつれて恥かしさうに這入つてくる。)

輝子　(默つて二人を見てゐる)

新之助　(てれて)始めてお眼にかゝります。

輝子　はあ。

新之助　(益々てれて)實は烏渡診察を願ひたいので——

輝子　産婦さんですか。

(りんは眞紅になる。)

新之助　はい――四ケ月程前から段々大きくなりましたので……

輝子　(呼鈴をチン〳〵と鳴らす)　さうですか。

(女事務員宇川村子が飛んでくる。)

輝子　では産婦さんのお姓名とお齢とお住居を伺ひませう。

新之助　はあ……日本橋區室町二丁目一番地鐵物商、内田商店内梅本りん。(りんに向って)　おい、汝(おまへ)は何年生れだい。

りん　(おど〳〵して)　若旦那樣。私よく覺えて居りませんので御座いますが。

新之助　困るな。ぢや、今年幾歳だい。

りん　あの十六歳で御座います。

(宇川村子それを帳簿に記入す。)

輝子　あなたは當授産所の規定をお讀みでしたか。玄關に張つてありますが――

新之助　(煙に卷かれて)　いえ。まだ拜見いたしませんでした。

輝子　ぢや必要な點だけ私からお話しいたしませう。

(助手毛利勝子が椽がはから這入ってくる。)

勝子　先生五番の産婦さんが御安産になりました。

輝子　あゝさうですか。男ですか女ですか。

勝子　女のお子さんで御座います。

輝子　産婦さんにもお子さんにも異常はありませんか。

勝子　お子さんは別に何ともありませんが産婦さんが出血のため腦貧血をお起しなさいました。

輝子　それで。

勝子　枕を低くして葡萄酒を差上げましたがもう大分およろしいやうです。

輝子　それはお手數でした。

勝子　いゝえ。(會釋して去る)

輝子　(兩人に向って)　や、失禮しました。それでは御話いたしませう。まづ入室料は之れを特等一等二等の三級に分ち特等一日一圓一等八十錢二等五十錢を申受くるものとす。各賄付とす。尙産褥に居らるゝ内はこの倍額を納めらるべし。分娩時は諸費用全部を合せて十圓納付さる可きものとす。右は總て十日分前金拂なり。

新之助　なる程。

輝子　それからこれが必要です。第六條に當授産所に於ては分娩に適せざる身體を持ちたる産婦以外に人工早産を施行せず。――まあ必要な事と云へばこんなものです。

新之助　あゝ、左樣でございますか。では一つ御診察を願ひたいものです。

輝子　はあ、承知しました。では此方へいらつしやい。

（りんを伴れて診察室へ這入る。村子はペンを持つて書く用意をしてゐる。新之助は心配さうな顏付で診察室の方を見つめてゐる。）

（沈默數分。）

（村子は不思議な顏付で、首を傾げてゐる。「おや、變だ」と云ふ表情で。）

（新之助は椙間の額を眺めて偶然庭の方から戶袋を見廻し武田の顏を發見して吃驚する。武田は狼狽てゝ引込む。）

（やがて輝子がりんを伴れて診察室から出てくる。）

村子　（堪らなくなつて）先生。

輝子　村子さん。此方は帳簿に記入しないでもいゝのですよ。

（村子けゞんな顏をする。）

輝子　（眞面目に）只今よくお身體を拜見しましたが、この方は姙娠してはゐらつしやいません。

新之助　（驚喜して）えゝ、本統ですか、それは。

輝子　はあ、このお腹の大きくなつたのはお腹に水が溜つたのです。俗に脹滿と申す病氣です。

（りんは眞紅になつてそこに突伏してしまふ。）

新之助　はあ――　（呆れてゐたが少時して）おい。何だつてそんな病氣に罹つたのだい。（落膽したやうな顏をする）

りん　（泣くやうに）若旦那さま。濟みません。どうか堪忍遊ばして下さいまし。

（沈默。）

新之助　（氣まり惡さうに）おい。りんや。ぢやお暇しよう。

りん　はい。

新之助　これはお邪魔いたしました。（挨拶をしてりんを伴れて去る）

（宇川村子は椽がはから出てゆく。戶袋の蔭から武田が苦しさうな顏で飛出して來る。）

武田　やあ、どうも珍らしい物を見せて戴いて有難う御座いました。

輝子　（平然として）いや、どういたしまして。

武田　私は何ですか結婚するのが厭になつて來ましたよ。

輝子　だからはじめに申上げたのです。これは未婚者の見てはいけない事なのです。

武田　（間の拔けた顏付で）なる程。いやお邪魔いたしました。私も失禮しませう。

――幕――

歡樂の鬼（一幕）

登場人物

法學博士　遠藤亨
夫人　敏子
檢事　津田三吉
醫師　亙理愼太郎
下婢　みよ

時　現代

所　東京山の手の屋敷町

法學博士遠藤亨の書齋。既に古びて華文の擦り切れたる海老茶色の絨氈を敷きたり。
室内は極めて質素に裝飾せらる。
正面、中央に兩開きの玻璃扉あり。庭園に通ず。その左右に大なる窓、各一個宛あり。帷幕は開かれたり。左手、奥に入口。其れに續きて壁一面の大書架あり。洋書充滿す。

正面、右側の窓の下に、大なる讀書卓一個を据う。右手中央に古風なるカミン爐あり。上に置時計鏡などを載す。卓の右方、壁間に泰西法律學者の大なる寫眞像をかゝぐ。
カミン爐に續きて玄關に通ずる兩開きの扉あり。
室内の中央よりやゝ右の奥に、小なる圓卓一個を据う。その周圍に椅子數脚。書架の前に、ソフア一脚よこたはる。室内の情調は、陰鬱にして悽愴なる事、都會の曉に似たり。愉快に曇りたる初夏の夜は、その暗き眼を以て、玻璃の窓より覗へり。
夫人、敏子、年わかき地方裁判所檢事、津田三吉と、小卓に相向ひて談笑す。三吉は洒落たる背廣にて、金縁の近眼鏡をかけたり。三吉の語調、擧止、すべて極めて都會的なり。
夫人の眼、折々に何物かを凝視する時、その主我的なる容貌に、犯しがたき女性の權威を現はす。折々遠方の電光、瞬くごとく窓に映射す。

敏子　（心安げに卓上に手を載せて）貴方も御存知でせう。松岡博士の長男の方、――ほら、あの工學士に御成りなすつた？

三吉　えゝ。よく知つて居ますよ。熊本の高等學校に、一緒に居ましたから。

敏子　昨夜あの方の御結婚の御披露が、紅葉館であつたものですから、私も參りましたが、一寸綺麗な夫人ですよ。

三吉　さうでせう。何でも華族女學校で、有名な美人だつたさうですからなあ。それに松岡君もあの通り綺麗な男ですから、全く理想的な夫婦でせう。

敏子　さうね。ですが、私は松岡さんのやうな顏立は厭ですよ。

三吉　何故です。色が白くつて、凛々しくて、所謂白皙の美丈夫ぢやありませんか。

敏子　（三吉を凝視して）私はも少し弱々しい男の方が好きですよ。あんな強い顏付を見ると、何だか此方が威壓されるやうで、不愉快で耐りませんの。

三吉　つまり貴女は男の內から女性的の美を攫み取らうと云ふのでせう。貴女みたやうに感情の荒んだ婦人は、多くさう云ふ風になつてしまひますね。

敏子　まあ非道い。ぢや私は年增藝者が俳優を買ふのと同じ心持で、弱々しい方を好むのでせうか？

三吉　まあさうです。藝者は醜惡な現實にふれて敎育されますが、貴女は讀書によつて、其處まで到達したのです。

敏子　（故意に微笑す）貴方は私がさうなつたのを、輕蔑なさるのですか？

三吉　（微笑して）飛んでもない事を。僕は決して貴女を輕蔑しやしませんよ。唯、貴女は餘り文學書類を讀み過ぎました。（時計をみる）それはさうと、先生は、大變遲いぢやありませんか？

敏子　何でも學校から歸つて、又出たのださうです。私も今日は晝から、一寸他處へ行きましたから――併し、もう歸つて參るでせう。

三吉　何か御忙がしい仕事でも御ありなさるのですか？

敏子　いいえ、學校から歸つて、外出する事は滅多にないのですが、今日は生憎――

三吉　相かはらず御勉强でせうね？

敏子　ええ。何うして家はあんなに出不精なのでせう。每日每日、書籍ばかりいぢくりまはしてゐて、能く倦きませんねえ。（室內を見廻す。）それにこの書齋の陰氣な事といつたら――私は一人では、一時間も心棒できませんよ。

三吉　さう、さう。僕がまだ御厄介になつてゐた時分から、貴女はこの室が厭でしたね。

敏子　（他事を考へ居たるが、俄に氣付きて）ええ。さうですよ。（三吉をみて微笑す。）ねえ。津田さん。貴方ももう夫人を、御貰ひなさらなくちやなりませんねえ。家から大學へ通つてゐらしたのは、本統に此間のやうですが、もう（指折りかぞへて）さうさう、精一が生れ

てから、間もなく御卒業なすつたのですから、五年近くになりますのねえ。

三吉　（微笑す。）結婚ですつて。戯談云つちやいけません。それとも持參金でも澤山持つて來てくれる人があれば、貰つてもさしつかへはありませんが、現今結婚して、夫婦で乾干になるなんざあ、あまり感心しませんからね。

敏子　だつて貴方くらゐ取れば、生活には充分ぢやありませんか。まあ自分で家庭を持つて御覽なさい。下宿なんかしてゐるより、何の位心持がいいか知れませんよ。御幾歳でしたつけねえ、今年？

三吉　僕ですか？

敏子　ええ。

三吉　卅二になりますよ。たしか貴女より三つ上だつた、と思ひますが――

敏子　さうでしたつけねえ。ぢやもう急いで御持ちにならなけりや、どんな女だつて、頭の禿けた御婿さんよりは、禿げてゐない方を好みますからね。（微笑す。）此れから私がせいぜい心がけて置きませう。

三吉　（戯談らしく）何うか願ひます。なるべく美人で、若い處を――

敏子　ほほほ……（間をおきて）だけれど貴方は呑氣だから却つて私達より若くみえますよ。

三吉　（夫人を熟視めて）さう云へば、貴方は近頃恐ろしく更けてきましたねえ。さうして、

敏子　（强ひて微笑す。三吉の談をさへぎりて、早口に）もう御婆さんですもの――

三吉　顏色もよくないやうです。何處か惡いのぢやありませんか――醫者に診せて御覽なさい。

敏子　宅でも始終、「汝は此頃色が惡い。」つて云ひますから、此間御醫者さんに診て頂いたのですが、別に何ともないさうです。

三吉　（猶夫人より眼を放さずに）それならよう御座んすが。（間）精一さんが死んでから、貴方はすつかり前と變つてしまつたやうです。何時まで思つても、同じ事ぢやありませんか。それより心を快活にして、せいぜい美味い物でも、食べて御覽なさい。またすぐ後が出來ますよ。

敏子　（鬱憂なる凝視）精一。（間を置く。神經的に）あんな恐ろしい顏付の子供が、何うして私の腹から生れたのでせう。あの時分の事は、考へてもぞつとします。（半ば獨語のやうに）宅にも私にも少しも似てゐない獸のやうに醜い兒でしたね。（間）私はあの兒を始めて見たとき、耻かしいやら情ないやらで、氣が狂ふやうでし

た。（聲をそひめて）津田さん。恐ろしい事ですが、私は一遍あの兒を殺さうとした事がありますよ。

三吉　（沈痛に）さう。僕もあの頃は丁度御家に居ましたから、よく知つて居ます。貴女の産後の肥立が思はしくない上に、あの劇烈なヒステリーでせう。あれでは先生も餘程心配して居られたやうでした。

敏子　（迫るが如く）ねえ津田さん。何うしてあんな兒が生れたのでせう。（意味ありげに三吉を凝視す。間。）兩親とも健康で、血統も極く正しい家庭にも、あんな子供が生れるものでせうか？

三吉　さあ。さう云ふ醫學上の問題は、僕にはよく分りませんが、顏や姿の醜いのは必ずしも。

敏子　（談をさへぎる。熱心に）いいえ。精一の顏の醜くかつた事ばかりを云ふのではありません。（聲をひそめて）あれは低能兒でしたよ。

三吉　（夫人を熟視して）低能兒。（間）そんな事はありますまい。

敏子　いいえ。確にさうです。やつと五つになつたばかりで死んだものですから、他處の御方には分からなかつたやうですが、宅と私には、あれの腦の發育が、餘程鈍いのがよく見えて居たのです。

三吉　併し男の兒は、一體に發育が遲いものですよ。僕は精一さんが、やうやく二つになられた時、岡山の裁判所へやられたので、それから何う云ふ風に成長されたか、少しも知りませんが、僕の兄の長男などは、今年四つになりますが、まだ能く言葉が出來ないやうです。

敏子　ええ。精一も死ぬまで、滿足に言葉が出ませんでした。併し、そればかりぢやありません。あの兒には、物を記憶える事が、何うしても出來なかつたのです。五つになつて、父母の顏さへ能く見分けが付かなかつた位ですもの。

三吉　（少時沈默）御病氣はたしか腦膜炎でしたね。亡くなられたの時の？

敏子　ええ。急性腦膜炎でした。（間）その苦しみやうと云つたら――まるで大人が死ぬやうでしたよ。私は見てゐられないで病室から逃げ出した位ですの。今でも時々思ひ出しては身顫しますよ。厭な聲で呻吟るのが、何とも云へませんでした。

三吉　なる程。餘程ながく煩らつて居らつしたのですか？

敏子　いいえ。ほんの一週間ばかりで亡くなりましたの。丁度宅が京都の方へ講演に行つて、今日東京へ來ると云ふ日でした。煩らひだしたのは。

三吉　ぢや先生の御留守だつたのですね？

敏子　ええ。七時の汽車で歸ると云ふ電報が來たものです

から、私は夕飯をかつこんで、急いで新橋へ迎ひに參りましたの。丁度、其日は、夜半に雪でも降りはしまいかと思はれる黄色く曇つた寒い日でしたから、私は一枚餘計に衣服を着て、玄關に出ますと、精一が疲れたやうな悲しいやうな妙な顏付で、後からついて來ますの。私は車の上から「この寒いのに、こんな所へ出て來てはいけません。早く內へ御入りなさい。」つて、叱りながら門を出ました。今思ふと、その時もう罹つて居たのですね。

三吉　なる程。ぢやそれ迄は、別に變つた事はなかつたのですか？

敏子　（首を振る。）ええ。別に何にも。（間）いつもの通り御飯も食べましたし、何處が痛いと云ふ事もなかつたやうです。さうしますと、生憎宅の汽車が脫線したとかで、新橋へ着くのが大層遲れて、二人が家へ歸りましたのは、もうかれこれ九時でした。宅はあれでなかなか子煩惱ですから、此處で、紅茶を飮みながら「精一は何うした。もう寢たか。」つて訊きますの「私は家を出る時、女中に「八時になつたら子供を御寢せ。」つて云ひつけて、置きましたから「はいもう寢んだでせう。」と云ひながら、後を見ますと、（左側の入口を指さす。）あすこから、默つてあの兒が出て來ました。その顏色と云つたら——すつかり蒼ざめてしまつて——何だか苦しさうに、がたがた顫へてゐるぢやありませんか。宅がびつくりして、額に手をあててみますと、全で燒けるやうなのです、これは大變だ、と云ふので、亙理さん、貴方も知つて居らつしやるでせう？

三吉　ええ。東京病院の院長でせう？

敏子　ええ。あの方に診て頂いたのです。その晩すぐ。（間）するとあの方がむづかしい顏をなすつて、「夫人。御氣の毒ですが、坊ちやんはもう醫師の手では癒りません。餘程性の惡い急性腦膜炎です。」と仰しやいましたの。ですから、私はもう始から助からないものだ、と諦めて居りました。

（少時沈默。）

三吉　全くあの病氣ぐらゐ子供に取つて、恐ろしいものはありません。大抵死んでしまひますが、もし癒つても、多くは白痴になつて、一生、親兄弟に歎をかけるのですから——

敏子　ええ。さうですとも。薄情なやうですけれど、あの兒は死んだ方が、自分にも幸福だつたと思ひますよ。たとへ、貴方、生きて居た所が、何も仕事が出來るぢやなし、一生涯父の厄介になつてゐて、人樣の笑ひ物です。その內に私共が死んで御覽なさい。それこそ誰もかまひ手はありませんから、乞食になるか、養育院にでもは入

るより、外に仕方がありません。

三吉　まさかさうでもありますまいが、併しさう云ふ不幸な身體を持つて生れた人は、却つて早く死んだ方が、苦痛が少ないかも知れませんね。

敏子　（突然神經的に）ですが津田さん。何うしてあんな兒が、私の腹から生れたのでせう。（間）あれは全く淺ましい兒でしたよ。貴方はあれが大きくなつてからの事は、御存知ないのですが、もう三つ位の時から、あの厭らしい醜いのが、すつかり大人になり切つて居ましたよ。身體はまだ子供でゐながら、顔付ばかりが大人に――さうして髮の毛が厭に薄くつて（眉をひそむ。）顔を見て居ると、全で老人のやうでしたよ。あんな氣味の惡い兒はありませんね。

三吉　さあ。先生も貴女も血統は正しいし、惡い病氣はないし――たゞ單に偶然と云ふより外に、說明の仕様はありませんなあ。

敏子　（疑ふやうに三吉を凝視す。）偶然でせうか。（間）宅はよくあの兒の顔を見つめて、「これは淺ましい造化の謎だ。」と云ひましたが、私には何うしても、偶然の出來事とは思へません。宅か私か何方かに深い罪があつて、その報があの兒に現はれたのではないか、と思ひます。つまり云ひかへれば、精一は恐ろしい血族の罪の記念なのでありますまいか。

三吉　そんな馬鹿氣た事があるもんですか。貴女は相かはらず浪漫的な思想で、現實を判斷してゐますね。

敏子　いいえ。さう云ふ意味で云つたのではありません。私の云つた恐ろしい血族の罪の記念と云ふのは、もつと實際的な言葉なのです。（聲をひそめて）ねえ。津田さん。私は時々さう思ひますよ。宅が若い時分に非常に放蕩か何かして、その結果が精一になつたのではないでせうか。

三吉　では貴女は何かそんな證據でも御覽なすつたのですか。

敏子　いいえ。別に證據を見た譯ではないのですが、何うしたのか、私にはさう見えて仕方がないのです。

三吉　それは貴女の邪推ですよ。もし先生にさう云ふ罪があつたとしたら、貴女と結婚されてからの、あの謹嚴な態度は、證明することが出來ないぢやないですか。

敏子　それはさうですが、私はね、そんな小說を讀んだ事がありますの。ある非常に眞面目な紳士が家庭を造つて、幸福に日を送つてゐると、その夫人が娘の時分、戀人があつてその人から、ある病氣を受けて居たのです。處が、當人もそれを知らずに、結婚してしまつて、もう前の戀人の事は、すつかり忘れてゐると、四五年經つてから、

懷胎したのです。生れて見るとその子供は母の遺傳によつて、何時までも言葉を記憶えないのです。そこで紳士は唖の兒を抱いて、陰鬱な書齋に、夫人に對する殘忍な復讐をもくろみながら、一人寂しく日を送る、と云ふ筋なのです。これは小說ですけれども、さう云ふ事實は、世界には有り勝ちなのですからねえ――

三吉　それ御覽なさい。矢張貴女が小說を讀みすぎたから、さう云ふ事を考へるのです。全く詩的空想といふ奴は、家庭に取つて、何より禁物です。それよりか御料理でも、習つて御覽なさい。先生は喜ばれるし我々も時々御馳走に有つける譯ですから。ははは……

敏子　（輕き不快の表情）貴方は御自分以外の者は、實に殘酷に批判なさるのね。だけれど御茶屋へ行つて藝者を買ふのと、比べたら、何うでせう？

三吉　いや。それは異ひます。貴女は男と女と云ふ二種類の人間を、一緒にして考へてゐるからいけないのです。

敏子　いいえ、決して男と女とを、一緒にして考へて居るのではありません。私は私の考へた婦人の立場を、始終守つて居るのです。

三吉　それは何う云ふ事なのです？

敏子　つまり婦人といふ字から、此れ迄の弱い恥かしい奴隷的な意味を取つてしまふのです。私は日向葵（ひまはり）のやうに、太陽の光りをうけて、思ふさま輝いてみたいと思ひます。

（右側の兩開きの扉あきて、下婢みよ入り來る。）

みよ　夫人。旦那樣がお歸り遊ばしました。

敏子　さう、御歸りになつたの？

（博士遠藤亨、地味なる洋裝にて、葉卷を口にくはへたるまゝ入り來る。）

敏子　（立上りて）御歸りなさいまし。（頭を下ぐ）

亨　やあ。津田君か。久し振だつたなあ。

三吉　（立上りて）餘り御無沙汰をしましたから――

亨　御無沙汰は御互だ。ははは……

敏子　津田さんは貴方を、二時間ばかり待つていらつしやいましたよ。

亨　さうか。それは御氣の毒だつた。まあ掛け玉へ。

（博士はその讀書卓の前なる凭り掛りの椅子に腰かけ卓上に置かれたる二三通の手紙をよむ。）

（三吉も夫人も無言にて、椅子に腰かける。）

敏子　貴方。それから今日の晝過ぎに、東洋堂とか申す書店（みせ）の番頭が參つたさうで御座います。私は丁度留守で御座いましたが――

亨　（手紙を讀みつつ）うん訊いた。

（少時沈默。）

（やがて手紙を卷き收めて。）

亨　俺の留守に、瓦理は來なかつたか？
敏子　いいえ。御出でになりませんよ。
亨　さうか、今日は一寸用事があつたので、學校から電話をかけたら、七時頃御宅へ伺ふから、と云ふ事だつたから――それではもう來るだらう。（椅子を三吉の方へ向け直す。）おい。紅茶でも入れて來ないか。
敏子　はい。（左側の入口より去らんとして）貴方。御飯は？
亨　飯か？　飯はもう濟んだ。
（敏子去る。）
亨　津田君。近頃は何うだ。役所の方は面白いか。
三吉　いや一向面白い事もありません。それでも岡山よりはいいやうです。
亨　併し田舍の方が靜かで、勉强ができさうだが――
三吉　無效です。何しろ周圍の人が皆呑氣な樂天家ばかりですから、若い人間がゆくと、刺戟がないので、不知不識自分も馬鹿になつてしまひます。もう田舍廻りは眞平です。
亨　ははは……それはさうかも知れん。（卓上の煙草箱を出し）何うだ。一本やり玉へ。
三吉　は。ぢや一本頂きます。（葉卷に火を點ず）
亨　時に君は相かはらず下宿住ひだらう？
三吉　ええ。さうです。
亨　不便だらう。何うだ、家を持つてみては？
三吉　何。もう五六年馴れた生活ですから、別に不便とも思ひません。それにもう少し獨身で、勉强して見たいと思ひますから――
亨　それもさうだな。（間）實は先日君の兄さんから、手紙が來たが、「君に結婚を勸めても、何うしても聽き入れないので、兩親が非常に心配して居る。ついては貴方から、何とか是非結婚するやうに、云ひきかせてくれ。」と書いてあつたが――併し君がさう云ふ考でゐるなら、その通りに俺の方から返事を出しておかう。
三吉　（輕く頭を低げて）何うかさう願ひます。田舍の老人などと云ふものは、全く頑固でこまります。それは自分の生きて居る內に孫の顏を澤山見るのは、自分に取つては愉快でせうが、意志のない結婚をさせられて、子供を造つたり、生活難に苦しんだりする當人は、實に慘めな者ぢやありますまいか。（間）さうしてもし當人が、それを承諾しないと、すぐ親の恩と云ふ舊式な器械を持つて來て、拷問にかけるのです。（微笑す。）併し兩親も僕ぢや餘程手古摺つたとみえて、到頭先生の處へ持つて來ましたね。
亨　さう。兎に角君の御父さんは、頑固な點では、我々の

親類中で、有名な方なのだから、君も隨分困る事があるだらう。併し親なんと云ふ者は、あとさう長く生きてゐるものでもなし、安心させて置くと、また一方では、君の生活に便利な事もあるから、なるべく反抗しない方がいいと俺は思ふ。

三吉　それはさうです。何しろ僕の親父は、非常に先生を信仰して居ますから、今度の事など、先生から上手に云つてやつて下されば、きつと安心するだらう、と思まひす。御迷惑ですが、どうぞ――（輕く頭を低ぐ）

亨　外に丁度少し用事もあるから、では其序に書いておかう。

（敏子、洋銀の盆に、紅茶を載せて入り來る。）

敏子　味が何うですか。よく出ましたかしら――

三吉（紅茶を喫みながら）いや。結構です。昔から夫人は紅茶を入れることは、名人でしたねえ。ははは……

（紅茶を喫す。）

敏子（微笑す）それは貴方、十年以上、毎日毎日入れさせられて居ますもの、上手になる筈ですわ。全く宅みたやうに、紅來の好きな人はありませんねえ。

（博士小卓に片肱を突き、惱ましげに指を以て、雙方の顳顬部を押さへゐる。）

三吉（之をみて）先生。何うかなさいましたか？

亨（獨語のやうに）何うもいかん。

敏子（顏を博士の方によせて）貴方。また痛み出しましたか？（三吉に向ひて）此頃は夜になると、きまつて頭がいたいと申しますの。

亨（顏を上ぐ）津田君。實に妙だよ。晝間は何ともなくて、夜になると腦の奥が糸を曳くやうに痛んで來る。

三吉　腦が惡いのぢやありませんか？

亨　さあ。（間）さうかも知れない。

三吉　もう醫者に御診せなさいましたか？

亨　いや、まだ診せない。つい暇がないものだから。

三吉（間を置きて）早く御診せなすつたらいいぢやありませんか。（間）腦でも惡いと大變ですから――

亨（倦み疲れたやうに微笑す）いま腦が惡くなると、俺は物質上にも破産しなければならん。

敏子　貴方。今日互理さんは、御診察にいらつしやるのですか？

亨　うん。外にも一寸用事があるので、序に診察もして貰ひたかつたから、電話をかけたのだ。

（少時沈默。）

敏子　もういらつしやりさうなものですね。

三吉（間を置きて）先生。今度御書きになる法理學新論と云ふ書籍（ほん）は、いつ頃出來るのですか？

亨　さあ。まだ漸く思想がまとまつただけで、少しも書いてないから、能くは分らんが、何うしても後三四年はかかるだらうと思ふな。
三吉　ぢや大分大部なものですな？
亨　いや。それ程でもない。三千頁内外のものだらう。
三吉　西洋人の考へ出した法理學とは、餘程異ふのでせうな。
亨　無論異ふ。俺の新らしい思想を説明する爲めには、これ迄の法理學とは、立論の基礎までも變つて來なければならないのだ。（次第に熱心になる）俺はあの書籍を、俺の生存の記念として、總ての人類に進呈したいと思ふ。少くとも俺のこれ迄の讀書と思索とは、あの書籍によつて始めて一個の果實となるのだから――
三吉　實は、この間偶然電車で、內田博士に御眼にかかりましてね。
亨　內田には久しく會はんが、病氣は少し快いと見えるな？
三吉　ええ。血色もよし、餘程以前より肥つて來られたやうです。併し何と云つても、もう長い事はありますまい。右の肺はすつかり腐つてしまつたと云ふ話ですからなあ。それでも元氣だけは、相かはらず盛なものです。「遠藤が今度、法理學新論と云ふ大部なものを書くさうだが、俺も一つ一世一代で、何か書いて見たい。」つて云つて居られました。
亨　あの男？　身體は、あの元氣一つで、持つて居るのだ。隨分長い肺病だから、普通の人なら、もう餘程前に死んでゐる筈なのだが。（間）又東京へ歸つて來たのかしらん？
三吉　いいえ。やはり逗子に居られるさうです。「今日は久し振で、東京の空氣を吸ひに來たのだ。」つて笑つて居られました。
亨　俺は巴里では、內田と始終同宿して居つたが、其時分から腦のいい偉い奴だつた。併し一體虛弱な上に、亂暴な生活をしたものだから、彼奴の思つて居た仕事も出來ない內に、あんな病氣に取つかれてしまつた。惜しいものだ。
三吉　さうです。（懷中時計を見る。）何と云つても商法ぢや、あの方と肩を並べる學者は、一寸見付かりませんからなあ。や、もう八時だ。（立上る）
亨　まあいいだらう。ゆつくりして行き玉へ。
三吉　ええ。有難う御座います。一寸他處へ寄らなければなりませんから――
敏子　まあ御話なさいまし。久し振ですもの。
三吉　ええ。またあがります。では先生、先刻の御話は宜

しく願ひます。

亨　よし。承知した。

（三吉博士夫妻に挨拶して、右側の入口より去る。）

（夫妻は三吉を見送りて、又室内に戻り來る。）

（敏子。紅茶の道具を片付ける。）

敏子　亙理さんはいらつしやいませんね。

亨　急な病人でもあつたのかしらん。それなら電話でもかけさうなものだな。

敏子　さうで御座いますねえ。

亨　來たら此處へ通してくれ。さうして葡萄酒でも出したらいいだらう。亙理は酒好きだから。

敏子　はい。かしこまりました。

（敏子左側の入口より去る。）

（博士は室内を歩き廻り、窓より空模様を覗ひ居る。）

（敏子また入り來る。）

亨　明日はまた雨らしいな。（かく云ひ終りて讀書卓の方へ歩み來る）

敏子　厭で御座いますねえ。

亨　（此れには答へず、卓上の葉卷を取り、火を點じてソフアの方へ歩み行き、陰鬱なる表情にて、ソフアの上に横たはる。やや暫らく、頭の痛むを指にて押さへ居る）

敏子　そんなに御痛みになりますなら、御冷やしになつては如何です。氷を取りにやりませうか？

亨　いや。それにも及ぶまい。（間）實に妙な痛み方だ。

敏子　困りますねえ。何うしたのでせう。

（少時沈默。）

亨　（夫人を直視して）おい。敏。

敏子　はい。

亨　妙な事を訊くやうだが、汝は今日何處へ行つた？

敏子　私で御座いますか？

亨　うん。

敏子　一寸御友人の處まで參りました？

亨　（柔らかに）御友人の處ぢやあるまい？

敏子　（博士を凝視して）いいえ。御友人の處で御座います。

亨　（微笑して）汝は俺も欺くつもりだね？

敏子　（鋭どく）いいえ。たしかに御友人の處へ參りました。

亨　（間を置きて）俺はよく知つてゐる。汝は今日精一の墓にまゐつたらう。（不快なる表情にて、なほ夫人を直視す）

敏子　（俯首く）――

亨　今日學校で教授會議があつたので、俺は三時頃出かけてゆくと、松島が丁度其處へやつて來て「やあ、遠藤君。

今、染井の墓地で、君の細君に會つたよ。」と云ふぢないか。（間）それをきくと、汝が精一が死んで以來、時々烈しい憂鬱に落入つたり、また此頃三日を置かず、俺に隱れて何處かへ出かける、理由が、始めて分かつた。（やや長き間）それは親子の情で、當然の事だから何も隱すには及ばない。公然出かけたらいゝぢやないか？

敏子　‥‥

亨　（半ば獨語のやうに）併しあの兒が生きてゐるうちはあれ程厭だつた汝が、何うして死んでから、急に精一を慕ふやうになつたらう。――俺には何うもその心理が分からない。

敏子　（徐ろに頭をあぐ。次第に感激す。遂に神經的に嗚咽して）それは私自身にも分りません。私は始めて精一を生んだとき、あの醜い獸のやうな顏付を見るのが、厭で耐らなかつたものですから、無慈悲なやうですが、始終心の中では、早くこの兒が死んでくれればいい。此兒が生きてゐる爲めに、私は生活の快樂を味はふ事が出來ないのだ、とばかり思つて居りました。さうしますと、去年、五年間私の苦痛の種子になつてゐた精一が、死んでしまひました。私はひそかにそれを喜こんだので御座います。これから美くしい生活が、私の前に開けると思つて、あさましい事ですが、私は始めて安心しました。（間）まあ、その當座の二三ケ月は、樂しく過ぎ去りましたが、不思議にも、この春あたりから、私は何とも云へない物寂しさを感じました。私はこの譯の分からない憂愁をまぎらはす爲めに、芝居や音樂會や婦人會や、なるべく人の多い華やかな場所に出かけたのです。併し何うしたのか心の寂しさは、私がまぎらさうと思へば思ふ程、ふかく胸の奧底へ喰ひ入りました。私にはあの兒の生きて居た時分の生活が、戀しくなつてまゐりました。それから以後、私は心の空虛に惱まされるときは、いつも貴方に隱れて、精一の墓にまゐりました。あすこは私の靈魂の避難所で御座います。あの兒の墓の前に立つて、時のたつのも知らずに種々な事を考へて居りますと、深い地の底から慘ましい血族の聲が、私を呼ぶやうな心持がいたします。それを訊くと、始めて私には、自分の生きてゐるのが、よく分かつて參ります。

亨　つまり汝は精一が死んで始めて血族の愛情を感じて來たのだ。汝は今段々母と云ふものになりつつあるのだ。併し何も俺に隱して行く必要はないぢやないか？

敏子　（悲しげに微笑す）私は自分の心持の變つてゆくのを、貴方の御眼にかけたく御座いませんでしたから――

亨　俺は決して汝の心持のかはつたのを、悲しみはしない。

敍子　（博士を凝視して）私は母となるより、婦人として生きたく思ひます。

（下婢みよ、右側の口より現はる。）

みよ　あの旦那樣、亙理樣がいらつしやいました。

亨　さうか此處へ御通し申せ。

（みよ去る。）

（博士讀書卓の方へ歩みよる。）

亨　（夫人に向ひて）亙理には少し祕密の用事があるから、汝はあつちへ行つてゐてくれ。

敍子　はい。

（醫師亙理愼太郞、みよに案内せられて現はる。半白の髭あり、羽織袴に金緣の眼鏡をかけ、小なる鞄をさげたり。）

亨　やあ。先刻は失敬した。

亙理　いや僕こそ。（夫人に向ひて）夫人。暫らく御無沙汰しました。（首を低ぐ）

敍子　いいえ、私こそ。先日から一遍伺はうと思ひながら、つい――（頭を低げる）皆樣御變りも御座いませんか。（三人小卓をかこみて坐す）

亙理　有難う。皆無事です。（博士に向ひて）もう少し早く來ようと思つたが、生憎一人むづかしいのがあつたもので、つい遲くなつてしまつた。

亨　いや。――御忙がしい所を、わざわざ御呼立して濟まなかつた。

亙理　そんな心配はいらない。呼ばれて診察にゆくのは醫者の務だ。ははは……

（少時沈默。）

敍子　何うぞ御ゆつくり。（一禮して左側の入口より去る）

亨　（煙草箱を出し、まづその一本を自から取り、火を點ず。亙理も無言にて、一本の葉卷を取る）今夜は何だか蒸熱いぢやないか。

亙理　何れ降るだらう。（間）この邊は全く靜かでいいな。（室内を見廻す）

亨　靜かな事は靜かだ。何しろ此處に住んでゐるのは、大抵官吏か、學校の敎師みたやうな人間ばかりだからね。

亙理　さうさ。我々とは全く生活が違ふ。毎日きちんと出勤して、歸つて來れば、もう用事はないのだからね。

亨　そのかはり君達のやうに、金が取れないから、同じ事だよ。

（みよ、葡萄酒を持ちて、左側の入口より登場す。博士亙理に酒をすすむ。）

亙理　や。もうかまふのはよし玉へ。（葡萄酒を飮む。）僕はこの頃、少し頭が惡いので、なるべく酒と煙草をひ

かへるやうにしてゐるが、仲々苦しいものだね。

亨　さうだらう。何しろ酒と煙草に掛けては、君の名聲は大したものだつたからなあ。あれが所謂醫者の不養生だね。ははは……

亙理　……ははは……。併し酒はまだいいが、この煙草と云ふ奴は忙がしいとつい喫み過ぎて困るよ。

亨　併し二三杯はいいだらう。（酒をつぐ）

亙理　有難う。まああんまり頂くまい。（ハンケチを取り出し口をふく）時に今日電話で診察してくれと云ふ話だつたが、一體何處が惡いのだい？

亨　實は此間から、夜になると、毎晩頭が痛んで來るのさ。そのくせ晝間は、忘れたやうに癒つてしまふんだが——あまり妙だから、君に一遍診て貰はうと思つて——

亙理　ふうん。夜になると、頭が痛む。——外に何か變つた事がありはしないか？（博士を直視す）

亨　一日、身體がだるくて、何をしても、すぐ厭きて嫌になる。

亙理　能く眠れるか？

亨　いいや。眠れない。始終うとうととしてゐて、一寸眠つたかと思ふと、實に氣味の惡い夢許りみる。（間）それに盜汗が非常だ。

亙理　なる程。（注意深く博士をみる）食事は？

亨　一向進まない。何うだらう。腦が惡いのかねえ？

亙理　さあ兎に角診察してみないと分からんが、（鋭どく博士を見る。間）君は若い時分、放蕩をした覺えはないか？

亨　放蕩？（やや長き無言。）何うして？

亙理　放蕩をやれば、よく種々な病氣を引きうける。その病氣の内には、十年以上身體の内にひそんでゐて、急に腦を犯すのがある。

亨　ふうん。

亙理　何うだい。あるだらう？（間）君もそんな事は云ひ憎くからうが、併し醫者に向つて、隱すのは愚だよ。

亨　（やや長き間）實はさう云ふ事がないでもない。

亙理　さうだらう。（間）僕は精一さんの生れたときから、既に君を疑がつてゐた。

亨　（愕然として）え。精一。（間）ではあの子供も、僕の病氣の影響をうけたのか？

亙理　さうさ。君にさう云ふ秘密の病氣があると云ふ事を、不幸な精一さんが、僕等に說明してくれたやうなものだ。

亨　（やや長き間を置く。沈痛に）併し僕はあの忌はしい病氣を發見したとき、充分療治をして置いたが。——

亙理　あの病氣は癒つたか、癒らないのだか、醫者にも分からない事があるからねえ。（間）一體君は何時やつ

たのだい？
亨　まだ巴里に留學してゐる時分だつた。
亙理　では西洋人から感染したのだね？
亨　さうだ。
亙理　それでは少し性が惡いかも知れない。異人種間には、普通劇烈に來るものだからね。
亨　劇烈に來る？　併しあの病氣は今の醫術では、それ程恐るるに足らん物ださうぢやないか？
亙理　さう。大抵は癒るが——併し腦を犯された奴は、その程度によつては、豫後不良だ。
亨　豫後不良と云ふと？
亙理　（博士をみる。間）發狂するか。白痴になるか。または腦溢血で急に死んでしまふ。
亨　（慘ましく表情す）ふうん。
亙理　一體何時頃から頭が痛み出したのだい？
亨　（深く考へに沈みゐる）
亙理　（博士を直視して）おい。遠藤君。頭の痛み始めたのは何時だい？
亨　（考へより醒む）え。——さう。此四月の初め頃からだつたと思ふ。
亙理　それはいかん。何故早く僕に云はなかつたのだい？
亨　それ程のこともあるまいと思つてゐたものだから——

亙理　兎に角一寸診察してみよう。
亨　では御願ひしよう。
亙理　（半ば獨語のやうに）眼底檢査の器械をもつて來たかしらん。（鞄を引寄せ、その内より檢眼鏡を取出す）ああ。あつた。（博士に向ひて）それから御手數だが、これから網膜の異常を調べなければならんから、ランプを一つ拜借したいものだ。何んなのでもいいから——
亨　一寸待ち玉へ。（立ちて壁側の呼鈴を押す）
みよ　（左側の入口より現はる）何か御用で御座いますか。
亨　夫人は？
みよ　御庭を御歩きになつていらつしやいます。
亨　では奥にランプがあるだらう。あれを持つて來い。
みよ　かしこまりました。（去る）
亨　では始めよう。上衣を脱ぎ玉へ。
（博士上衣を脱ぐ。亙理椅子を博士の方へ寄せ、診察をはじむ。）
（みよ登場す。手に鍍銀の小ランプを携ふ。これを卓上に乘せて。）
みよ　これでよろしう御座いますか？
亙理　（振りかへりて）ああ。結構だ。（みよ去る）
（亙理診察を終りて立上り、そのランプに火を點じ、

　博士に。）
亙理　君。一寸電燈を消してくれ玉へ。
（博士立ち上りて電燈を消す。室內やや暗くなる。）
亙理　此れでよし。君この洋燈を君の後の卓の上に乘せて
くれ玉へ。
・（博士ランプを讀書卓の上に置く。）
亨　（ふりかへりて）此邊でいいかい？
亙理　ああ。よろしい。さあこれから眼底檢査だ。君は僕
の左の耳を見て居玉へ。いいかい。
（亙理檢眼鏡を以てレンズを通りたる光を博士の面上
に反射せしむ。博士の眼のほとりの皮膚の色、燈光に
映りて、疹くやうに鮮やかに見ゆ。）
亙理　ふうん。（間）こんどは右の耳を見るのだ。さう。
（やや長き間）さう兩方とも乳頭鬱血を起してゐる。
（獨語のやうに云ふ）
（眼底檢査終る。亙理檢眼鏡、レンズ等を納ひながら。）
亙理　君はやはりあの病氣に、腦を犯されてゐる。しかも
もう餘程進んでゐるやうだ。
亨　（沈痛に）さうか。（長き間）で、恢復の見込は？
（亙理を直視す）
亙理　（冷然として）病氣は無論癒る。併し腦に出きた腫
物の痕の缺所は、癒るものではない。（間）君の運命
は、その缺所の大小によつて定まるのだ。
亨　（間を置く。平靜を裝ひて）發狂するとか、白痴にな
るとか、腦溢血で死ぬとか？
亙理　さうだ。誠に御氣の毒だが、今の醫術の可能性は其
處までだ。
亨　（沈思。長き無言の後、悲痛なる微笑）つまり論理的
に完備した結論に到達したと云ふだけの事だね。
亙理　（短き無言）なるべく早い方がいいが――何なら
僕の病院に、入院してみないか？　家に居ると、何うし
ても種々の事に、腦を使つたり何かして、病氣の爲めに
よくないだらうと思ふから。
亨　さう。
亙理　君の方の都合さへよくば、明日にも來たまへ。部屋
を明けさせとくから――
亨　さう。（沈思に耽ける）
（少時沈默。）
（隣室の時計十時をうつ。）
亙理　（懷中時計を見て）では、僕は御暇しよう。
亨　（沈思より覺めて）まあいいぢやないか？
亙理　ああ。さう、さう。先刻電話では外にも何か用があ
るやうだつたが？
亨　ああ。（考へて）併しかうなつては、あんな事は相談

した處が仕方がない。（間）實は家内だがね？

瓦理　うん。

亨　この頃またヒステリーが、段々烈しくなつてゆくやうだから、僕の著述の邪魔になつても困ると思つたので、君に相談して何處かへ轉地でも、させてやらうと思つたのだが——

瓦理　なる程。併しそれはもう過去の問題だがね。いま君は著述などに耽つてはいかんよ。なるべく精神を安靜にして、病氣の恢復を待たなければならん身なのだから。

亨　併しこの話は家内にはしないでおいてくれ玉へ。それから僕の病氣の事も。

瓦理　うん。承知した。では（立上る）——

亨　（孤獨の不安を恐るるやうに）もう暫らく話して行き玉へ。今十時をうつたばかりぢやないか？

瓦理　いや。今夜むづかしい患者を一人殘して來たから——それでは、兎に角電話をかけてくれ玉へ。

亨　さうか。どうしても歸るのか。では——（立上る。）

瓦理　夫人によろしく。

（瓦理右側の兩開きの扉より、玄關の方へ出で行く。博士も見送りにゆく。）

（舞臺空虛となり、洋燈の光、暗く輝くのみ。）

（正面庭園に通ずる兩開きの玻璃扉あきて、夫人敏子室内に現はる。）

（髮亂れ顏蒼ざめたり。）

敏子　（喪心せるごとく無言にて、右側入口を凝視す）

亨　（ゆるやかに歩みて室内に入り來り、正面の玻璃扉の開きたるままなるを見て、夫人の擧止を注意しながら、間を置きて）汝は彼處から入つて來たのか？

敏子　はい。

亨　何故あんな處からは入つて來た。（とがむるやうに鋭く云ひ放つ）

敏子　（昂然として）私は彼處から入つても、少しも差支はないと存じます。

亨　（不快げに）何だ。其顏色は。——俺は少し調べ物があるから少時あつちへ行つてゐてくれ。

敏子　（博士を凝視して）私はあちらへは參りません。

亨　何、あちらへは參りません？（間。やや險しき顏す）汝は俺に反抗するつもりか？

敏子　（故意と冷靜を裝ひて）いいえ。決して反抗など、致すのでは御座いません。

亨　そんなら俺の云ふ通り、あちらへ行けばいいぢやないか。

敏子　（博士の言を聞かざる如く、やや神經的に）私は唯貴方に伺ひたい事が御座いましたから、參つたので御座

います。

亨　（夫人を直視して）俺に訊きたい事がある？（間。眉をよせて）何だ、その訊きたいと云ふのは？

（博士椅子に坐す。）

敏子　（極めて靜かに）精一のやうな兒が、何うして私共の家庭に、生れたので御座いませう。（冷やかに笑ふ。）もうかうなりましたら、貴方も御話下さいますだらうと存じまして——

亨　（險しく）何を云ふ。（長き間。夫人を直視して）汝は今の話を立聽して居たな？

敏子　（鋭く）はい。聽きました。何もかもすつかり——

亨　（早口に）汝は立聽などして、恥かしいとは思はないか？

敏子　（口惜しげに）立聽をして恥かしいと思はないかつて、仰しやるので御座いますか。立派な家庭に、精一のやうな兒が生れたのと、何方が恥辱で御座いませう。（間）貴方はよくも私を御欺しなさいましたね。

亨　それは、問題がちがふ。

敏子　（强烈なる感情を暴露して）いいえ。同じ事で御座います。私は貴方の爲めに、獸のやうな兒を産ませられました。之が私にとつて一番烈しい侮辱で御座います。

亨　兎に角もうあつちへ行つてくれ。俺は今夜は重大な問題にふれてゐるのだから——

敏子　いいえ。私は貴方に伺はない内は、何うしても參りません。（棒のごとく凝立す）

亨　（間）汝は俺を氣狂にするつもりか？

敏子　それは私の方から申上げたい事で御座います。（少時博士を凝視して）先刻亙理さんが御出でになりましたとき、貴方は私に「少し秘密の話があるから、あちらへ行つてゐろ。」と仰しやいました。私は自分の部屋で、書籍でも讀まうと存じて參りましたが、何うも氣がくさくさ致しますから、少し庭を歩くつもりで、下へ降りました。さうしますと、丁度あの白薔薇の花壇の處へ立つて居ますとき、平生と異つた心配さうな貴方の御聲が、斷々にきこえてまゐります。私の好奇心は、段々私を窓の方へ引寄せました。（間）私はきくともなく、つひ貴方のこれまでの恐ろしい秘密を、伺つてしまつたので御座います。（間。迫るが如き眼差す）ねえ貴方。私はこれから何う致したら宜しいので御座いませう。

亨　（强ひて冷靜に）それはどうでも汝の勝手だ。汝には汝の意志があるだらうから。（間）併しよく考へてみろ。それは慥に俺の方に罪がある。けれども汝と俺とは、もう十年以上も同棲してゐる夫婦ぢやないか。汝が今云つた言葉の意味は、よく俺には分つてゐる。併し、汝にだ

つて、俺が今自己の破滅を豫言されて、口にすることも出來ないやうな恐怖と心配に、惱まされてゐるのは分るだらう。さうしたら少しは俺を憫んでくれても、よささうな物だと俺は思ふが――

敏子　（冷やかに笑ふ）貴方を憫めとおつしやるので御座いますか。御氣の毒で御座いますが、私は不斷から貴方のおつしやつたとほり、自己を離れてものを考へる事の出來ない女で御座いますから、今の場合、とてもそんな事は出來ません。それに私は、貴方よりまだ不幸な人を知つて居りますから、私はまづ、その人から憫まなければなりませんもの。

亨　それは誰だ。

敏子　死んだ精一で御座います。（神經的に）可哀さうに、何も知らないあの兒は、精神も身體もすつかり貴方の罪のために、腐つてしまつて居たので御座います。あれは決して人間では御座いませんでした。血族の罪から生れた獸だつたので御座います。

亨　精一。（嗟嘆す）

敏子　（反語的に）あの兒もきつと今頃は、暗い地の底でぼんやり貴方や私の事を思ひながら、あの醜い顏をしかめて、泣いてゐるでせう。（力をこめて）全くあの兒の爲めには、貴下は此上ないいい御父さんで御座いましたからねえ。

亨　（慘ましき表情。夫人を直視して）汝は實に恐ろしい女だ。汝は俺を殺さなければ承知しないのだねえ？

敏子　殺す。まあ――貴方は氣が御違ひになつたのでは御座いませんか。何で私が貴方を殺しませう。能く氣を落付けて考へて御覽遊ばせ。私はただ私共三人の內で、精一が一番可哀さうだと、申したので御座いますよ。

亨　（眼を一ヶ處に凝集せしむ）精一。ああ――

（少時沈默。）

敏子　（柔らかに）貴方。精一が生れる前は全く面白い家庭で御座いましたねえ。能く井野さんや內田さんを御招びして、御一緒に御飯を食べたりなんか致しましたつけねえ。

亨　あの頃はまだ御互に若かつたから――

敏子　（注意ぶかく博士の擧動を覗ひながら）私が此方へ參りましたのは、丁度貴下が歐羅巴から、御歸りになつたばかりの時で御座いましたねえ。

亨　さう、さう。汝には島田が一番似合ふと云ふので、家へ來てからも、厭がるのを無理に島田に、結はしたのを覺えてゐる。

敏子　あの時分貴方は全で子供のやうな無邪氣な方でしたねえ。まだ覺えていらつしやいますか。此方へ參つた年

の夏、二人で葉山に參りましたのを？

亨　うん。そんな事があつたな。

敏子　（微笑して）あの時貴方が勉强ばかりしてゐらしつて、つまらないと云ふので、持つてゐらした御書を、私がすつかり隱したので、貴方は怒つておしまひなさる、私は泣く、大さわぎをした事が御座いましたね。――

亨　俺はあの頃から今度の法理學新論を書く準備をしてゐた――考へてみればもう十年餘になる。（烈しき悔恨の表情）ああ。あの書ももう書けないのか――（夫人を直視す。）おい。敏。俺の貴い讀書と思索とが、この腐つた腦の內で死んでしまはなければならないと思ふと、俺はもう耐らなくなる。俺は何にも仕事を殘さないで、蟲けらのやうに世を去る事は、何うしても出來ない。この地上に一つの足跡も殘さず、もう死んだ翌朝から、人々は俺の生存してゐたのを、忘れてしまふやうな生活を營むために、俺は生れて來たのではない。敏。賴むから俺を救けてくれ。俺は明日から一生懸命になつて、原稿を書くから、何うか傍に居て、俺を看護してくれ。

敏子　ええ。よろしう御座います。

亨　（興奮して）では承知してくれたか？

敏子　（鈍どく）え、え、その替り貴方は私の願を訊いて下さいますか？

亨　汝の願？

敏子　え、え、私の願。――訊いて下さるでせう。

亨　（點頭す）うん。何でも訊かう。

敏子　（間。憎惡の表情す）ぢや伺ひますが、貴方の御病氣は何で御座います？

亨　（愕然として）え。俺の病氣？　（間）何うして汝はさう俺を恥かしめるのだらう。何もかもちやんと知つてゐるぢやないか。――

敏子　（落付きて）貴方が私を欺いてゐらつしやる間は私は貴方の敵で御座います。

亨　俺は決して汝を欺いては居らんつもりだ。

敏子　いいえ。欺いて居らつしやいます。私は貴方を私一人で所有しなければ、何うしても心が濟みません。ですから、貴方の御心にさう云ふ秘密があると云ふ事は、私に取つては大變な不安の種子なので御座います。

亨　俺の秘密は、もう先刻すつかり立聽してしまつたでは無いか？

敏子　先刻伺つたのは御病氣の事だけで御座います。私はもつと委しく、その時分の御話を承らなければ、安心が出來ないので御座います。

亨　敏。それだけは許してくれ。今になつてあの頃の事を思ひ出すのは、俺の最も苦痛とする所だから――

敏子　では仕方が御座いません。私は私の途を行くばかりで御座います。（間。博士を凝視す）ですが貴方は先刻おつしやつた御仕事を、もう思切つておしまひなさいましたか？

亭（痛ましき容貌にて）いや。決して思切りはしない。

敏子　ではその御仕事を、御一人でなさる御考がつきましたか？

亭（間）汝は何うしても訊かなくては承知し無いのだなあ。（嗟嘆す）

敏子　當然で御座いますわ。そんな卑怯な眞似はなさらないで、さあお早く御話し遊ばせ（迫るやうに云ふ）

亭（長き間を置き沈痛に半獨語のやうに語る）俺は大學に居る時分から、選抜されて洋行するまで、極めて素行の正しい青年であつた。處が俺が佛蘭西へ行つて、巴里の大學で、法理學を專攻してゐる時分、彼地の人の華やかな生活を見馴れて來るにつけ、つく〴〵我々東洋人の慘めな生活を、殊に自分のこれまでの直線的な貧しい生活を、厭ふやうになつて來た。（夫人を柔らかく視ながら）後にはもう空虛な孤獨生活に耐へられなくなつて、夜一夜灯の明るい街を歩きまはつて、僅かに鬱を慰さめた事もあつた。するとある雪の夜、オペラの歸途に寄つたカツフェで、俺は一人の美くしい女と近付きになつた。（夫人の眼漸次に輝く）その女は暗色の髮と、黑い瞳を持つた西班牙生れの阿婆摺れものだつた。まださう云ふ歡樂に馴れない俺は、初めてその女によつて、生活の充實を味はつたのだ。そして醜い惑溺のうちに、世も人も忘れて、ただ女の紅い唇を熟視めてばかり居た。さうするとその女は若い異邦の客の熱情に、この皮肉な恐ろしい病氣をもつて報いた。併しもうその頃は俺の神經も大分荒んでゐたから、一時は驚いたが、それ程の恥辱とも思はず、醫者に通つて癒ると、又すぐ放蕩の岐に、新らしい女の笑顏を見た。さう云ふ風にして巴里に三年の月日を暮らした俺は、名譽ある少壯法律學者として日本へ歸つて來たのだ。

敏子（憎惡の感情の快よさを味はひつつ）まあ、――併しそれ程放蕩をなすつた貴方が、よく此地へ御歸りなすつてから、ああ云ふ眞面目な生活を遊ばしましたねえ。

亭　俺は「聰明」と云ふ事を忘れなかつた。もし日本で、俺があゝ云ふ生活に耽つたなら俺は到底、自分の仕事を仕遂げる見込はない、と云ふ事を、よく知つて居たから――

（少時沈默。）

敏子　さうして見ると、精一はやつぱり私の疑ぐつてゐたとほり、血族の罪の恐ろしい記念だつたので御座います

わねえ。

亨　（悲痛なる表情。）　さう。あれは慘ましい「歡樂の鬼」であつた。（嗟嘆す）

敏子　「歡樂の鬼」（博士を見る。間）　してみると、何も知らない私が、あの兒を生んだのは、貴方の爲めには、大變御氣の毒な御役に立つた譯なので御座いますねえ。（皮肉に笑ふ）

亨　（手を振る）　もうそんな話はよしてくれ。（博士雙方の顳顬部を指を以ておさへ苦痛の表情をなす）

敏子　又痛みますの？　（博士の擧動を覗ふ）

亨　（無言）

敏子　（冷酷なる調子にて）　貴方。私は貴方に申上げなければならない事が御座いますの。

亨　何んだ？

敏子　先刻私は貴方に、貴方の御仕事を御助けするやうに申上げましたが、私はもう何うしても、貴方と御一緒に生活して行く事は出來ませんから、御暇を頂戴いたします。

亨　（驚きて）　暇をくれ。又そんな事を云ふ。一體何うしたと云ふのだ？

敏子　私は貴方から、婦人として三つの損害をうけました。第一に、私は精一と云ふ兒を生まなければなりませんでした。第二に、私はその爲めに、婦人の美くしさを、失つてしまひました。第三に、私はあの兒の病死によつて、心の空虛に、惱まされなければなりませんでした。

亨　汝は夫婦間の愛情を、さう云ふ數學的のものと、思つて居るのか？

敏子　今から思つてみますと、私は決して貴方を愛して、結婚いたしましたのでは御座いません。その時分、私はまだ世間を知らない馬鹿で御座いましたから、やはり普通の處女のやうに、貴方の地位と名譽とを、愛したので御座います。

亨　おい敏。そんな事は云はないで何うか俺を助けてくれ。

敏子　いやで御座います。兎に角私はまだこれから長い一生を、みぢめな寡婦や、病人の看護婦として、費したくは御座いませんからねえ。

亨　（憤然として）　汝は實に冷酷な婦人だ。

敏子　（笑ふ）　そりや冷酷とお思ひなさるかも知れません。私は一人の男を始から終まで自分一人で、所有して居たいので御座います。

亨　少くとも之から先の俺は、汝一人の所有ぢやないか？

敏子　貴方の御命がこれから先何年あります？

亨　（長き無言）　ああ、考へても恐ろしい。（烈しき戰慄）　俺はこれから死か狂氣か白痴か、その三つの一つ

を、ぢいつと待つて居なければならないのだ。（雙眼を一ヶ處に凝集せしむ）

敏子　（冷然たるうちに絶えず博士の擧動を注意しつつ）貴方は明日亙理さんの病院に御入りなすつて、世間の事を忘れて、靜かに仕事でもなすつたら御宜しいでせう。（獨語のやうに）亙理さんは貴方の御友人ですから、貴方が冷たく御成りなさるまで、親切に療治して下さるでせう。

亨　（烈しく苦悶す）ああ。俺はこれからたつた一人にならなければならない。（間）腐つた頭腦と半死の身體を抱いて、――人々の冷たい眼光に、追跡されながら、寂しい、病院の寢室の上にたつた一人で、淺間しい最後を待たなければならないのか。（かすかに欷歔す。間。つぶやくやうに云ふ）併し俺はどうしても、此まま死ぬ事はできない。（間）死。ああ、考へても恐しい。平生健康であつたため、俺はこの問題に付いて、まださう深くは考へて置かなかつた。呼吸が絶え、心臟の鼓動が止つて、筋肉が硬く冷たくなると、總ての意識は閉されてしまふ。俺は永久の暗黑のうちに、段々腐つて行かなければならない。（間）いや、俺は何うしても、此儘死ぬ事は出來ない。（漸次烈しく）俺は建築師が高い塔を築くやうにあの法理學新論を書くために土臺を堅め、足場をかけて來たのだ。（頭髮をかきむしる）さうすると今になつて、敏、汝は行つてしまふ。のみならず、いつの間にかこの執拗な病氣が、俺の生命に喰ひ込んでゐる。（狂氣のやうに）無益だ。もう無益だ。ああ一生の希望も、計畫も、皆一時に消えてしまつた。（俄に蘇生せるごとく）併し俺は何うしてもこのまま死ぬことは出來ない。敏。何うか此處に居てくれ。頼むから俺の仕事を助けて、完成させてくれ。

敏子　（博士を直視して）貴方。それは御無理で御座います。私には私の意志に、反抗する力は御座いませんもの。まだ種々申上げる事も御座いますが、また長くなりますから、遲くなりません内に、私は參ります。

亨　敏。（よろめきつつ立上り、少時啞者の如く夫人を凝視す）

敏子　（立去らんとして振かへる）はい。

亨　（かすれたる聲にて斷々に）汝はこれから何處へ行くつもりだ。俺一人殘して――

敏子　私で御座いますか？

亨　（無言）

敏子　（やや長き間の後、華やかなる聲にて）新らしい大きな世界へ參ります。この私が婦人として、日向葵のやうに輝くやうに、自由に大膽に、美しく生きて行かれ

る新らしい世界へ參ります。

亨　(聲をしぼりて)　それでは汝は精一のことは、全く忘れてしまつたか?

敏子　(長き意味深き無言の後低く)　精一。(感情勃發す)　ああ何うしたらいいでせう。私はとても此處を離れることは出來ません。あの兒の靈魂の聲が何うしても私を放してくれないのです。あの獸のやうな兒が何故私にはこんなに忘れられないのでせう。(聲なき慟哭)

亨　(間)　敏。では何時までも此處に居てくれるのか?

敏子　私はもう何うしても何うしても他處へは參れなくなりました。

亨　え。汝は本統にもう行かないのか?　(夫人を堅く抱く)

敏子　(柔らかくうち顫へつつ)　ああ、何時の間にか私はもう母になつてしまつて居りました――

(夫人鋭どく泣きつつ博士に凭りかかる。)

――幕――

飢渴（三幕）

人物

秋山貞俊　退役中尉

同　貞二郎　その弟

同　おさと　その母

同　とき子　出戻りの若い叔母

村田寛介　中尉の叔父

同　おむら　その妻

同　きくゑ　その娘

内海良玄　僧侶

丸山作三郎　下男

その他下女下男など

時

現代

場所

東京に近い東海道筋の小さな街

第一幕

秋山家の裏。鮮やかな六月頃の午前の日影が射してゐる。右には母屋の古風な窓が見える。勾配のゆるい屋根が空を劃つてゐる。中央は古い土藏。觀音開きがあいてゐて、暗い內部が見える。

右は一杯の鷄小屋になつてゐる。

土藏と母屋との間は、路次のやうに深い空地になつてゐて、その突あたりが、黑い塀になつてゐる。塀の後から、母屋の屋根の上にかけて、壓するやうに、陰鬱な隣寺の森が見える。黑塀には小さな木戶がついてゐて、寺と此家の通路をなしてゐる。

おさとが出戾りのとき子や、下女下男を使つて蟲干を始めてゐる。田舍の鄕士の家であるから、古い武具だの書畫骨董品、昔流行つた女物の派出な衣裳、和漢の書籍などが、そこらに一面に並べかけられてゐる。

おさと　（土藏の內に向いて）おとき。おとき。

おとき　（內から）はい。

おさと　汝(おまへ)はおなほと二人で、二階からお琴を降してきておくれ。

おとき　（矢張聲だけきこえる）はい。

梅吉　へえ、もうこれでおしまひかね。

おさと　どうして、まだ二階に澤山干さなきやならないものがあるよ。あ、おつね。その紋付の裾に泥がついてるよ。烏渡はたいておくれ。

おつれ　（土藏の側面の壁に、綱を渡して掛けた古風な仕立ての紋付の泥を落す）　御隱居さま。この紋付は御隱居さまのかね。

（手に取つて、しげしげと見る。）

おさと　（笑ひながら）　あゝ、私がね、此處の家へ嫁に來たとき着てきたのだよ。もう三十四五年も前だから、袖の工合なんか今とは仕立が丸つきり違ふねえ。

（下女は紋付を感心して見てゐる。と「さ、どつこいしよ。」と云ふ聲が聞えて、手拭をかぶつたとき子と小間使のおなほが重さうに袋にはひつた古い一面の琴を持出してくる。梅吉はこのとき土藏の内にはひる。）

とき子　あゝ、重かつた。おなほが力がないものだから、二階から降りるとき、危なく落すところだつたわ。

おなほ　私まあどうしようかと思ひましたよ。とき子さま。

おさと　ほんとに氣をつけておくれよ。それでも落されちや大へんだからね。

とき子　大丈夫よ。さあ、一呼吸に出してしまはう。（又内部にはひる。續いておなほとおつれがはひつてゆく）

梅吉　（鎧びつを荷つて出て來る）　や、どつこいしよ。こりや重いや。（蓋をあけて、鎧を取出して干す）

（おさとが何か思出したやうに、そゝくさと土藏の内にはひつてゆく。梅吉は默つてそれを見送つてゐる。おつれとおなほが書箱を出してくる。）

おなほ　おつねさん。そんなに急いぢやだめよ。私苦しくつて仕樣がないわ。

おつれ　この位なもの一人で澤山だ。骨惜しみばかりして。

おなほ　（ふくれる）　あら――骨惜しみなんかしやしないわ。どうせおつねさんみたやうにお百姓できたへた身體ぢやありませんからねえ。（かう云ひ捨てゝ、また内へはひつてしまふ）

おつれ　（憎さうに後を白眼んで）　何んだ、色情狂。白粉つける事より外にや襦袢一つ縫へもしねえで――

おさと　（陸軍中尉の正裝のはひつた桐の箱を持出してくる）　これを干しとかないと、また貞俊が喧ましいからね。（おなほが後から、つんとして禮帽を持つて出てくる）

（おなほは又内へはひる。おつれは本箱をあけて、書籍を干す。おさとは禮服を出して干してゐる。）

梅吉　（突然）　御隱居さま、村田さんのお客は今日お出でなさるだかね。

おさと　（下を向いて、禮服の皺をのばしながら）　ああ、

十時三十分の汽車だから、汝(おまへ)は御苦勞だけれども、停車場まで迎ひに行つて貰はなくちや。

梅吉　へえ、ぢやもう行かなきやならねえなあ。十時はさつき打つたゞから――

おつれ　へえ、十時三十分になつたよ。

おさと　おや、もうそんなかい。ぢや梅吉急いで行つておくれよ。貞二郎が行つてゐるにやゐるけれど。荷物があるだらうからね。

梅吉　へえ、ぢや行つて參ります。（去る）

おさと　（其處いらに干してあるものの、位置を直しなどしながら、獨言のやうに）あゝやつて東京で綺羅を張つてゐたものが、急に零落れて田舍に引込むのは、さぞ厭だらうねえ。

おつれ　（間を置いて）皆樣當分此處へ居なさるだかね。

おさと　ああ、皆と云つても、たつた親子三人だからねえ。丁度家も今の人數ぢや廣すぎるしするから、まあ、此處に居て貰はうと思つて――

おつれ　ぢや旦那さまと奥さまと、お孃さまだけかね。

おさと　ああ。（突然思ひついたやうに）おとき。もう干すものはないかい。（内に向つて、訊く）

とき子　（聲だけ暗い處から聞こえる）ええ。もうそれで皆ですよ。今おなほと此處を掃除してゐるんですよ。まあ大變なゴミだ事。

おさと　よく隅の方まで掃いといておくれよ。

（沈默。）

（正面の母屋と土藏の間の木戸をあけて、寺男の磯五郎が出てくる。）

磯五郎　御免なせえまし。

おつれ　おや、磯さん。どこへ行くだね。

磯五郎　なあに、鳥渡そこまで和尚さんの御用でゆくだよ。（おさとの方を向いて）蟲干で御座えますか。

おさと　ああ、かうやつて毎年々々二日も三日も暇をつぶすんで――ほんとに厭になつてしまふよ。

磯五郎　（笑ひながら）そんな事を云ふとバチがあたるべえよ。私ら蟲干するにも、するものが無えだから。ははは……

（突然土藏の内部から、笑ひ聲がきこえる。磯五郎は吃驚して、そつちを見つめる。）

おさと　そんな處でフザケてゐないで、早く掃除をしまはないかい。もうすぐお客さまが着くぢやないか。

とき子　もう掃除はすんだのよ。（かう云ひながら、おなほと二人で笑つて出てくる。箒とチリ取りとを持つてゐる）ああ、可笑しかつた。姉さん。今なほが長持のなかを掃除してゐるとね、大きな鼠がぴよいと飛出したんで

すよ。その時のなほの驚きやうと云つたら——ああ、可笑しい。(笑ふ)

おなほ　(氣まり惡さうに、嬌態をしながら)　あら、とき子さま。でも突然で御座いますもの……私まだ胸がどきどき致しますよ。

磯五郎　(からかふ)　鼠がそんなに恐いかね。おなほさん。

おなほ　(それには答へずに)　御隱居さま。もうこちらには御用は御座いませんでせうか。

おさと　ああ。おや汝はお座敷を片附けといておくれ。もうお客がくるからね。

おなほ　はい。

磯五郎　(にやにやしながら)　鼠だつて耐へられめえよ。おなほさんの顏を見たら——この頃は豪ら女振がよくなつたからなあ。

おなほ　(浮ついて)　まあ、あんな馬鹿ばつかり云つてるよ。

とき子　(皮肉な調子で)　汝があんまり白粉をつけるから、皆でからかふんだよ。

(おなほは厭な顏をして、默つて退場する。)

おつね　(間を置いて)　何でもいい、せつせと働いてゐせえすりや間違はねえだから。(獨言のやうに云ふ)

おさと　さうだとも。人間は堅くして働くに限るよ。おとき。もう何時だらう。

とき子　さうですね。追つけ十一時でせう。

おさと　まだ來ないね。どうしたのだらう。

磯五郎　どりや油を賣つてねえで、行つてこよう。御免なせえまし。(秋山の屋敷を通りぬけて村の方へゆく)

とき子　ほんとねえ。もう來さうなものね。

おさと　(思出したやうに)　さあ。此處が濟んだから、そろそろ御飯の支度にかからなくつちや——おつね。臺所の方はおときと私でするからね。汝はお風呂に水を汲み込んどいとくれ。

おつね　へえ。

(三人退場。少時は人氣もなく、ただ明るい日光が舞臺の閑寂をてらしてゐる。鷄の聲が時々きこえる。やがて「やあ。今日は蟲干だな。おい、作三郎。あの土藏の前へ押して行つてくれ。」と云ふ聲がきこえて、秋山貞俊が、椅子に車のついた物に乘つて現はれる。顏が蒼白くやせて鬚がはえてゐる。貞俊は日露戰役で砲彈に當つて、兩方の足を腿から切られてしまつた步兵中尉である。その椅子の凭りかゝりの處を丁度乳母車を押すやうに、丸山作三郎が押してゐる。作三郎は戰役當時中尉の從卒を勤めてゐたが、同じ時に負傷して廢兵になつたので、中尉が憫んで、一生を飼殺しにし

てゐる下男である。右の頬と額に烈しい裂傷の痕があるので、兇悪奇醜な面貌をしてゐる。）

貞俊　あゝ、此處でいゝ。（間）おい、作三郎。もうすぐ夏になるな。みろ、あすこの屋根に巣を喰つた燕の子が大變さわいでゐる。

作三郎　（中尉の椅子をはなれて、土藏の石段に腰かけたまま、鈍い顔付で中尉の指す方を眺める）今年やまた馬鹿に澤山子を生んだねえ。中尉殿。

貞俊　どうだ。親燕が歸つてくると、あの通り吻を出して——可愛いぢやないか。

作三郎　（間をおく）中尉殿。俺やこの頃子供が欲しくて仕樣がねえ。獨りでゐるのが寂しいやうな氣持がしてならねえ。

貞俊　そろ〳〵女房が欲しくなつたな。（笑つて）待て待て、今にいゝ女を捜してやるから。

作三郎　（間を置いて）こんな顔になつちや若え女は傍へよるのも厭がる、だから…中尉殿。俺女房より子供が欲しいんですよ。

貞俊　（凝乎と作三郎の顔を見つめて）なあに——面なんかどうでもいい——今にきつと女房を持たしてやるよ。

作三郎　中尉殿。俺よりあんた早く奥さま呼ばなきやなるめえ。

貞俊　（突然笑ひ出す）ははは…俺か——俺は癈人だからな。こんな弱い身體で女房を貰つてどうする。

作三郎　さうでねえだよ。あんた奥さま呼ばねえと、秋山の家が立たねえ。

貞俊　俺はたゞかうやつて、殘つた日をこの椅子の上で暮らせばそれでいゝのだ。（暗い心持で）今更女房なんか貰つて、世間めく必要のない身體だ。

作三郎　（間を置いて）今日はあんまり暖けえから睡くて仕樣がねえ…

貞俊　俺はちつとも睡くない。（間）あゝ。毎日毎日かうやつて暮すのも、もう倦々した。何處か景色のいい處へ行きたいがなあ。

作三郎　（答へずに居眠りをはじめる）

貞俊　おい。作三郎。（返事がないので、作三郎の方を見る）何だ。睡つてゐるのか。

作三郎　（驚いて）はあ、何だね。

貞俊　俺たちが負傷して、戰地から後送されたとき、行つてゐた熱海の療養所はいい景色だつたなあ。

作三郎　俺らはもう一生あんな結構なとこにや行けねえだねえ。

貞俊　あすこで春崎少尉に始めて會つたときにや、さすがの俺も思はず涙をこぼしたよ。春崎といへば、士官學校

ぢや有名な美少年だつたが、兩方の眼玉を打たれて、二眼と見られない顏になつてゐたからなあ。

作三郎　春崎少尉殿は今どうしてゐなさるかね。

貞俊　さあ、さつぱりたよりが無いが――どうして居るかしらん。（短い間）春崎とお母さんと、たつた二人暮らしだつたが……

作三郎　あの人は初め俺らの小隊長だつたが、酒飲みでねえ。醉ふと亂暴して手が付けられなかつただ。

貞俊　併し勇氣のある男だつた。得利寺の遭遇戰のときにや、あいつの武者振が、一番目ざましかつた。白兵戰になつてから、あんな小さな身體で、露助を六人斬倒したからなあ。あの時は感狀を貰つて、喜んでゐたが……

作三郎　（何か考へてゐたが、突然）特務曹長殿は、何うしてゐるだね。

貞俊　山口か、あれは俺たちが後送されてから、沙河で戰死したさうだ。

作三郎　本統かね。俺や今まで知らなかつた。へえ、いい人だつたがなあ……

貞俊　（間を置いて）彼奴らのやうに、戰死した方がどの位幸福だつたか知れやしない。（間）あゝ厭だ厭だ。俺はもうかう云ふ生活には倦々してしまつた。

（沈默。土藏の屋根の陰影に半身を彩られて作三郎は何事か思出したやうに微笑してゐる。）

作三郎　中尉殿。俺やいまいろんな事を思出したが、あの大石橋の夜襲のときや、凄かつたねえ。

貞俊　うむ――あの時は俺の中隊が一番苦戰をしたなあ。

作三郎　（凄い微笑を浮べながら）今でも夜中に眼をさましたときなんか、あの時の露助の機關銃の音がきこえるやうな氣がしてなんねえ事があるが……全く豪え戰だつたねえ。

貞俊　三軍枚をふくんで進むか――併し愉快だつたなあ。今考へ出しても、肉が引締まるやうだ。（間）さうさう。俺はあの夜襲の前に將校斥候に出た事があつたよ、卒六名を伴れて――汝も覺えてゐるだらう。あの内田なあ。

作三郎　内田上等兵殿かね。

貞俊　うん。外の兵を森の蔭に殘して、俺と内田上等兵とたつた二人で、本道上を進んで行くと、道のまがり角に出たんだ。ひよいと見ると、つい二三十米の處に敵の騎兵が十五六騎休んでゐるぢやないか。それつて云ふんで、早速逃げたの逃げないのつて――でも幸福なことには、その騎兵は四五發後から射つただけで、別に追かけては來なかつた。が、あんな恐ろしい事はなかつたよ。今でも思ひ出すと、汗が出るやうだ。

作三郎　戰地の味ばかりは行つてみねえ者にや、分らねえ

よ。身の毛のよだつやうな思を何度するだか、分らねえだからねえ。

貞俊　辛い事も恐ろしい事も隨分あつたが、併しあの頃は何をするにも張合があつた、面白かつたなあ。

作三郎　(間を置いて)　あの時分はまだ若くて、身體が丈夫だつたからねえ。何でもかうしようと思ふと、その通りに出來ただもの――だがもうだめだ。今ぢや身體が半分死んでるだから。

貞俊　(陰鬱に)　あのときは俺はまだ二十二にしきやなつてゐなかつたからなあ。(間)　宇品から運送船に乘込んだときには、「俺はこれから戰地へ行くのだ。これで愈軍人の本分を全うする事が出來るのだぞ。」と思ふと、嬉しいやうな恐ろしいやうな氣がして、俺は丸つきり夢中だつたよ……併し何と云つてもまだ考が若かつた。船の內では戰の事ばかり考へてゐたからなあ。あのとき、ふと俺はもし戰死したらどうだらうと、かう思つた事があつた。すると何とも云へない悲壯な心持がして、涙が自然に流れたが、どう云ふものだか、少しも恐ろしいとも厭だとも思へなかつた。(間)　俺は戰死するか、無事に凱旋するか、どつちかだとしきや思つてゐなかつたのだ。こんな身體になつてしまつて、退屈な張合のない暮らし方をしようとは、あの時分は夢にも思つちやゐなかつたよ。

作三郎　天道樣のなさる事だ。默つて諦めるより仕方はねえ……

(沈默。磯五郎が歸つて來る。)

磯五郎　(會釋する)　今日は――いいお天氣で御座えます。

貞俊　磯五郎か――何處へ行つた。

磯五郎　なあに――(手に持つてゐる包を見せて)　これでさあ。和尙さんの買物さ。

貞俊　何だ。挽茶か。

磯五郎　はは……さうでがんす。美味くもねえものを、よく飮みなさる。一斤かつてもものの半月と持たねえだからねえ。(退場しようとする)

貞俊　おい、磯五郎。和尙さんにな、お閑でしたらお遊びにいらつしやいつて、さう云つてくれ。

磯五郎　へえ。かしこまりました。(木戶より去る)

作三郎　(突然)　中尉殿。今日は東京からお客がくるだかね。

貞俊　うむ。もうやがて來るだらう。

(おさとが急いで出て來る。)

おさと　おや、汝(おまへ)は此處に居たのかい。

貞俊　えゝ。何か御用ですか。

おさと　いゝえね。貞俊、あの人たちが來たら何處に寢て

貰はうかと思つてね。

貞俊　何處でもいゝぢやありませんか。

おさと　私はね、たつた親子三人だから、奥の十疊にして貰ふと都合がいゝと思ふが、それぢや汝(おまへ)がどうかと思つて——

貞俊　ふむ。ぢやさうしたらいゝぢやありませんか。私は離室に寢る事にするから。

おさと　ぢやさうしておくれ。さうすると、大變都合がいいからね。ねえ、貞俊。どうしたのだらう。まだ來ないがね。

貞俊　お午までには大丈夫來ますよ。なあに、停車場で荷物の事か何かでゴタゴタしてゐるんですよ。

（とき子がたすき掛けで出てくる。）

とき子　姉さん。お膳はどれにしませう。——高脚の方にしませうか。

おさと　さうさね。あの春慶塗のがいゝよ。おさしみはもう出來たかい。

とき子　いま松が來てこしらへてますよ。ぢやお膳は六人前出しとけば、いゝのね。（去る）

おさと　あゝ、六人前でいゝよ。

（木戸から内海良玄が出てくる。もう五十七八である。）

良玄　やあ、おさとさん。今日は蟲干ぢやな。

おさと　えゝ、それにあなた、今日は東京から皆參りますので、大騷ぎで御座いますよ。

良玄　愈來なさるのか。それはおいそがしい事ぢや。貞俊さん。此頃はどうぢやな。

貞俊　や、和尚さん。今磯五郎にお閑でしたらお遊びにいらつしやるやうに申上げてくれと云つて置きましたが——

良玄　さうでしたか。あまり日和がよいので、この頃は出懸けてばかり居るから、とんとお眼にかからなかつたな。

おさと　どりや風呂は沸いたかしらん。ぢや良玄さん、御ゆつくり——

良玄　あ、どうか私にかまはずと——私は貞俊さんと話してゐますから。

（おさと去る。）

（沈默。）

良玄　貞俊さん。村田さんは今度は御家族全部で來なさるのかな。

貞俊　さうです。（間）併し家族と云うても、娘一人と夫婦だけですから。

良玄　ふうむ。私はもう二十四五年お目にかゝらんが——村田さんも大分更られたぢやらうな。

貞俊．えゝ、此頃ぢや餘程氣が折れて來たさうです。叔父

も大分失敗續きで、艱難しましたからなあ。
良玄　まあ此處では申憎い話ぢやが、村田さんもこの街に地主さんで、柔なしくしてゐなさると、今こんな事にならなかつたのぢやがなあ……
貞俊　何しろ、若い時分には自由民權の說か何かにかぶれて、政黨騷ぎをして步くと云ふ風だつたのですから、こんな處に凝つとしてゐられる物ぢやありません。
良玄　あなたのお父さんとはどうしてあゝ性質が異うたかしらん。丸で他人のやうぢやつたからな。
貞俊　やはり性質が違ふので、あゝ仲が惡かつたのですね。
良玄　うむ。この街でもその時分秋山の兄弟は腹がちがふので、あゝ仲が惡いのぢや、などゝ言ひはやして居つたからなあ。
貞俊　そんな噂がその時分あつたのですか。
良玄　馬鹿どもが言ひふらしたのぢや。村田さんはあなたの祖父さんが、江戸の妾に生ませたのを、生れるとすぐ此方へ引取つたのぢやなどゝな。はは……併し村田さんもお氣の毒な人ぢやな。子供の頃村塾へ行くときにはなか〳〵俊才ぢやつたでな。手もよし、詩なども上手いものぢやつたが——人間の行末は分らぬものぢやな。
貞俊　併し何と云つても、商業だけはあの氣質ではだめですよ。頭腦が實に疎大なのですからなあ。
良玄　ふうむ。
（短い沈默。）
貞俊　何しろ政治運動では失敗するし、商業では失敗するし、今ぢやどうすることも出來ないのですからなあ。（間）それでも私がまだ少尉で東京に居た時分はなか〳〵立派な構の家に住んでゐましたが——
良玄　村田さんの奧さんや子供は、まだ此處ははじめてぢやな。
貞俊　叔母は一度來たことがあります。父がなくなつたときに。何しろ叔父と來ては、あつちへ行つたきり一度も歸省したことはないのですからねえ。
良玄　ふうむ。何れ此家に居なさるおつもりぢやらうが、あなたやおさとさんと折合へばいゝが……
貞俊　私は叔父とは仲がいゝのですよ。幼年學校や士官學校にゐる時分、よく遊びにいつて御馳走さしてやつたものです。あれで叔父は妙に子供や若い者が好きでしてね。
良玄　（間を置いて）併しあの性質で、よく村田さんがこつちへ歸る氣になつたものぢやな。
貞俊　やはり東京の生活に疲れて氣が弱くなつたのですよ。
（このとき家の內が急に騷がしくなつて、若い女の甲

高い聲などがきこえてくる。今迄うつらうつら居眠りをしてゐた作三郎は突然眼をさまして、あたりをキョロキョロ見まはす。）

貞俊　（ゆるやかに母屋の方を見送つて）　やつて來たやうです。

良玄　ふうむ。着きなすつたかな。

貞俊　おい、作三郎。汝行つて鳥渡見て來い。

作三郎　へえ。（去る）

貞俊　（その方を見送りながら、獨言のやうに）　賑やかな東京から來ては、こゝの生活が當分不便で寂しくて困るでせうよ。

良玄　さうぢやな。村田さんは何ぢやが、奥さんたちがお困りぢやらう。（かう云つて母屋の方を見る）　あすこから貞二郎さんが來なすつた。

（貞二郎出てくる。二十五六で、快活な男。まだ書生風である。）

貞二郎　やあ、和尚さん。いらつしやい。（會釋をする）

良玄　（にこやかに）　貞二郎さんか。

貞二郎　（兄の方を向いて）　あまり早く迎へに行きすぎちまつたので、隨分待ちましたよ。それに今日は何處か東京の女學校の遠足があつて、汽車がこんでゐて、叔父さんは大分困つてお出でてしたよ。

貞俊　いや、御苦勞だつた。荷物は皆持つて來たらう。

貞二郎　えゝ、持つて來ました。梅吉に車を曳かして――

（突然、母屋の内から若い女の聲で、「貞俊さんは何處へいらしつて。この窓の外。」と云ふ聲がきこえる。華美な姿をしたきくゑの顔が窓から現はれる。）

貞俊　（間を置いて）　や、きくゑさんか。

きくゑ　まあ、貞俊さん。

（貞二郎は笑顔で二人を見くらべてゐる。）

貞二郎　兄さん。きくゑさんが大きくなつたでせう。

きくゑ　（嬌笑）　いやよ。貞二郎さん。

貞俊　（眩しいやうな顔をして）　全く見違へるやうだ。とても途で會つたつて分りやしない。

良玄　どりや、俺は失禮しよう。

貞俊　まあ、いゝぢやありませんか。いま叔父も來ますから。

良玄　いや、お疲れぢやらうから、村田さんにはまた後にお目にかゝらう。

貞俊　さうですか。

良玄　さよなら。（去る）

きくゑ　（後姿を見送つて）　どなた。お父さんの知つてるかた。

貞俊　叔父さんの昔の友だちで、この裏の寺の和尚さん

だ。

きくゑ　まあさう。

（この時きくゑの後から「きくゑさん。何ですよ、そんな處へ出て。」と云ふ女の聲がきこえる。）

きくゑ　（急に後をふり返つて）　あら、お母さん、いま貞俊さんとお話してゐるのよ。

（窓からおむらと寛介との姿が現はれる。）

貞俊　あゝ、叔父さん。

寛介　や、貞俊。暫らくだつたな。

おむら　（急に涙ぐんで）　まあ、貞俊さん。（貞俊を見やつてゐる。）

貞俊　叔母さんですか。

おむら　（しんみりと）　ほんとにあなたは異りましたねえ。

貞俊　（故意と笑つて）　いゝ形になつたでせう。ははは：…：

（作三郎が出てくる。鳥渡窓の方を見る。）

作三郎　中尉殿、あんたやつぱり此處に居るかね。

貞俊　うむ。

（作三郎は默つて土藏の石段に腰をかける。遠くからとき子の聲で「貞二郎さん、鳥渡手をかして頂戴。荷物が着いたから。」と云ふのが聞える。）

貞二郎　はいよ。ぢや叔父さん。荷物は皆あの儘家に上げて置きますから。

寛介　うむ、さうして貰はう。

おむら　貞二郎さん、ほんとに御苦勞さまですねえ。

貞二郎　いえ。（去る）

寛介　貞俊、こんどはまた皆でやつて來て、豪い厄介をかけるな。

貞俊　何です。叔父さん。

おむら　全くですよ。長年まあ、御無沙汰勝ちでゐて、急にこんな御迷惑をかけるのが、お氣の毒でねえ。

貞俊　そんな事があるものですか。此處は叔父さんの故郷ですもの――歸りたくなつたら、歸つていらつしやるのが當然ぢやありませんか。

（おなほが出てくる。）

おなほ　あの、お風呂がよろしう御座います。

貞俊　ぢや、叔父さん。はひつてらつしつたらどうです。お疲れでせうから。

寛介　うむ。では一つはひつて來よう。

貞俊　あ、叔父さん。御存知でせう。お隣りの良玄さんを。

寛介　うむ。

貞俊　今まで此處へ來て話してゐましたよ。

寛介　さうか。久しく會はないが、相かはらず元氣かな。

貞俊　えゝ、今夜あたり話に來るでせう。さ、はひつていらつしやい。田舍の風呂は汚ないですよ。
寛介　ぢや後にまた出てから話さうね。（去る）
（おむらが一緒についてゆく。）
きくゑ　ねえ、貞俊さん。あたし向うから廻つて其處へ行つてもいいでせう。
貞俊　あゝ、その座敷の緣側に庭下駄があるから、それをはいておいで。
きくゑ　えゝ、いくわ。（去る）
（貞俊は微笑を浮べて、物を考へるやうな眼附をしてゐる。きくゑが出てくる。）
きくゑ　今日は蟲干ね。
貞俊　あゝ、下らない道具がゴチヤゴチヤあるので、厄介でしやうがない。
きくゑ　まあ、あんな事を――あら、貞俊さん。あすこにあなたの軍服があるわね。
貞俊　うむ。あれを着て、きくゑさんの處へ行つたたつけ。あの時分はまだ九つか十だつたね。
きくゑ　えゝ。あたしよく覺えてゐるわ。何時だつたか、戰爭にいらつしやる少し前よ。お正月あなたがあの軍服を着て、お酒に醉つてゐらつしやつたわねえ。
貞俊　さうだつたかねえ。何しろあの時分は亂暴に酒を飮んだから――
きくゑ　さうさう。あたしいろんな事を思出してよ。あなたが戰爭にいらつしやるとき、家でお父さんや何かとお酒を飮んだでせう。あのとき家のお母さんが泣いたわねえ。
貞俊　さうだつたねえ。あれはもう四五日で東京を出發すると云ふ時だつた。きくゑさんもあのとき子供のくせにお母さんの眞似をして泣いたぢやないか。
きくゑ　あら、眞似をして泣いたんぢやないわ。あたしほんたうに悲しかつたんですもの――でももうあれから隨分經つたわねえ。
貞俊　うむ。もう十年になるよ。
きくゑ　あれつきりあなたはいらつしやらなかつたのね。家には――
貞俊　行きたくつても行かれないぢやないか。こんな身體になつてしまつては。
きくゑ　あなたが負傷なすつたつて云ふ電報がきたとき、隨分家では心配したわ。ねえ、貞俊さん。もう今ぢや傷は痛みはしないでせう。
貞俊　いや、やつぱり氣候の替り目なんかには、疼いて困ることがあるよ。こんな身體になつちや全く駄目だね。
きくゑ　ほんとにお氣の毒ねえ。あたししみじみ御同情す

ゐるわ。（短い間）　肢を切るときは隨分痛かつたでせう。

貞俊　切るのは魔藥がかゝつてゐたから、何ともなかつたが、切るまでが耐らなかつた。それから切つてしまつてから、もう俺の足は兩方とも無いのだ。俺は片輪になつたのだと思つたとき、何ともいへない寂しい厭な氣持がしたよ。

きくゑ　ほんとねえ。（間。熱心に）　負傷なすつたのは何處だつたの。

貞俊　遼陽の戰のときだつた。きくゑさんにその話をしてきかせようかね。

きくゑ　えゝ、話して頂戴。面白いわ。

貞俊　僕が負傷したのは本攻撃にかゝつてから二日目だつた。もう四五日少しも眠らないので、精神がぼうつとして、傍の奴が彈に當つて死んでも、何とも感じない位だつたよ。僕は丁度第一線の小隊長だつたから、散兵壕の內から、一生懸命に射撃してゐたのさ。そのときはもう中隊長が戰死してしまつてゐたので、一番古參の小隊長が代理をしてゐたつけ。（このとき呆然してゐた作三郎が顏をあげて、熱心に話に聞き入る）曇つた厭な日だつたよ。すると前進の命令がきた。僕はもうすつかり枯れてしまつた聲をふりしぼつて、「前へ。」と云ひながら散兵壕を飛出した。すると突然僕の前で天地が大きな瞬をしたやうな氣がした。僕はそのまゝ其處に倒れて氣を失つてしまつた。後できくと、そのとき砲彈が僕の直ぐ前で破裂したんださうだ。

きくゑ　まあ――

貞俊　（作三郎を指して）　この男がその時分僕の從卒でね。僕が倒れたから、すぐ僕をつれて散兵壕の內へはひつて、繃帶しようと思つて調べると、兩脚はぐちやぐちやに碎けてゐるし、胸には傷があるしするので、もうとても助からないと思つたさうだよ。

きくゑ　まあ、それでもよく丈夫におなりなすつたわねえ。やつぱり運がよかつたんだわ。

貞俊　（間。不快な顏付で）　運がいゝか惡いか知らないが、僕はあのとき死んでゐた方がいゝと思ふよ。こんな不自由な身體で、生きてゐたつて、何になるんだらう。却つて娑婆ふさげだ。

きくゑ　まあ――いやよ、そんな恐い事をおつしやつちや。

（おさとが窓から顏を出す。）

おさと　きくゑさん。こんな處にゐたのかい。

きくゑ　えゝ、今貞俊さんから、戰爭のお話を伺つてたのよ。

おさと　さうかい。早くお風呂におはひり。

きくゑ　えゝ、あたし後で入れて戴くわ。

おさと　そんな事を云はないで、今日はお客さまだから——

きくゑ　いいのよ、伯母さん、誰か先にはひつて頂戴。

おさと　ぢや先に御飯にしよう。あつちへお出でなさいな。貞俊もね。（去る）

貞俊　大分腹が空いた。ぢやあつちへ行かう。

（作三郎が立ちかける。）

きくゑ　貞俊さん。あたしが押していつてあげませうか。

貞俊　（笑つて）きくゑさんに押せるものか。仲々重いよ。

きくゑ　大丈夫よ。この位ゐ何でもないわ。（椅子を押して去る）

（折角立ちかけた作三郎は、また舊のところに腰かけて、呆やり椅子の行く方を見つめてゐる。）

——幕——

第二幕

もう八月に近い美しい夏の宵である。舞臺の前の方は庭、正面に十疊敷の廻り縁の物々しい客間があり、障子は全部取はづしてある。古風な大形の置洋燈が室を照らしてゐる。座敷の正面は廣い床の間と違ひ棚になつてゐる。床の間には北島雪山の二幅對の書がかけてある。違ひ棚には青磁の香爐と、寫眞帖などがかざつてある。床の間の中央には刀懸があつて、そりの強い朱鞘の古刀がかけてある。左は一面の庭。十七日位の月が、幽邃な光を投げてゐる。庭の中央より少し左寄りに、置座をすゑて、とき子、きくゑ、おむら、おなほなどが浴衣がけで、月光の内に涼んでゐる。

座敷では緣ばなに蚊やりをたいて、浴衣がけの寛介と、良玄とが默々として碁を打つてゐる。大變遠いところから、物悲しいやうな浮々したやうな尺八の音がきこえる。女たちが笑ひ興じてゐるところで幕開く。

きくゑ　あれ、螢が——

とき子　まあ、きくゑさん。大きな聲を出して——私吃驚しましたよ。

（きくゑは何とも答へずに、つき物がしたやうにふらふら立つて、團扇で螢を追ひかける。）

おむら　きくゑさん。およしなさい。何です。子供みたやうに——

きくゑ　（甘えて）でも綺麗ですもの——なほや、そつちの方から追つて頂戴。あらあんな高いところに逃げちやつたわ。

（きくゑは惜しさうに置座に戻つてくる。）

おむら　（間を置いて）馬鹿だねえ。ほんとに——何時ま

で汝はねんねえでゐるつもりなのだらう。

きくゑ　ねえ。とき子さん。あたし東京にゐた時分よく螢を買つて來ちや、蚊帳の内に放して寢たわ。此處いらには隨分居るでせうね。

とき子　お寺の池のところには、もう五月蠅い程ゐますよ。

きくゑ　さう。裏のお寺――取りに行きたいわねえ。

おなほ　お孃さま。そりや綺麗で御座いますよ。何時かとき子さまやつねやと取りに參りましたがねえ。

とき子　さう、さう。何時か汝たちと一緒に行つたねえ――でもあすこはお墓のそばだから、何だか氣味が惡いよ。

きくゑ　家でも何時か東京にゐた時分、大宮の公園に行つたわねえ。お母さん。あのときは私隨分取つたわ。

おむら　裏のお寺つて、私まだ一度も行つて見ないが、そんな池なんかあるの。

とき子　えゝ、なか〳〵廣いお寺ですよ。此處から黑い森が見えるでせう。あの森の內に池があるんですよ。こんど何時か晝間でも行つて御覽なさいましな。閑靜ですよ。貞俊さんがよく行つてゐますよ。

おむら　さうかい。貞俊さんと云へば何處へ行つたんだらう。今夜は見えないね。

おなほ　何ですか御飯を召上つてから、散歩したいとおつしやつて、作三郎が椅子を押して出ていらつしやいましたよ。

とき子　きつと涼みに出かけたんでせう。あの人は自分で歩けない癖に、そりや外へ出るのが好きですからね。

おむら　外へでも出なけりや何の樂もありますまいからねえ。私や始めて此處へ來たときにや、これがあの活潑な貞俊さんかと思ふと、涙が出てきてねえ。

（沈默。）

きくゑ　お母さんは此頃ほんとに涙もろくおなりなすつたわねえ。

おむら　汝だつて今はさうやつて、浮々してゐるけれど、年を取つて御覽。やつぱりお母さんのやうになるから――世の中つて云ふものは決して若いときに考へてゐるやうなものぢやありませんよ。

とき子　（獨言のやうに）でもね。今時分何處を步いてゐるんでせう。

おなほ　御門をお出遊ばして、下の方へいらつしやいましたから、きつと、また八幡樣で御座いませう。

とき子　さうかも知れないね。貞二郎さんも今夜は居ないのかい。

きくゑ　いいえ。お部屋にゐらつしやるわ。

（暗いところから、「へえ、今晩は。」と云ふ聲がきこえる。）

とき子　（暗中を覗き込むやうにして）誰だい。
磯五郎　（段々姿を現はす）へえ、磯五郎で御座います。
　鳥渡――
とき子　何か和尚さんに御用かい。
磯五郎　へえ。只今伊勢屋の御隱居さまが、お出でて御座えまして、和尚さんにお目にかゝりてえつて待つてゐなせえますから……
良玄　（座敷の内から）よし、分つた。汝先に歸つてな。只今すぐ和尚さんがいらつしやいますとさう申し上げておくのぢや。
磯五郎　へえ、御免なせえまし。（去る）
　（座敷ではまだ勝負を爭つてゐる。）
おむら　（しみじみと）貞二郎さんも、あゝやつてぶらぶらしてゐなすつちや、自分でも氣が揉めるだらうねえ。
とき子　えゝ、でも此頃ぢやもう身體も大分よくなりましたからねえ――一時は肺病になりやしないかつて隨分心配しましたよ。
きくゑ　貞二郎さんはまた來年から早稻田へ行くんですつて――商科ね、あの方は。
おなほ　（突然）あれ、お孃さま、また螢が參りましたよ。
きくゑ　なほや、汝も加勢して頂戴。
　（二人は團扇で螢を取らうとして、夢中になつて座敷の方へゆく。）
　（「あれ、あすこで御座いますよ。」「汝だめだよ。もつと早くはたかなくつちや。」などと騷いでゐる聲がきこえる。）
おむら　（間を置いて）あの作三郎と云ふ男ね。突しぬけだけれども、ありや何なの。舊は兵隊だつてね。
とき子　あれですか。あれは舊貞俊さんの從卒だつたんですがね。あんな片輪になつちまつて、それに親もなんにもないんですよ。それで貞俊さんが哀れがつて、あゝやつて飼殺しにしてあるんですよ。
おむら　まあ、さうかい。何だか氣味の惡い男ねえ。
とき子　えゝ、人間はいいんですけれども、何しろあんな顏ですからねえ。
　（沈默。）
　（座敷では漸く勝負が濟んで、碁石を片付けてゐる。）
良玄　これで相々ぢや。あなたは然しなかなか强いな。俺と三目は慥にちがふやうぢや。
寬介　いや、だめですよ。若い時分に一時凝つた事があつたが、この頃はさつぱり碁石に手を付けないから。ははは……
良玄　や、伊勢屋の隱居が待つてゐるぢやらう。（歸り支度をする）

寛介　まあ、お茶でも一杯入れ替へて……
良玄　いや、また來ませう。ではさやうなら。
寛介　さうですか。ぢやまたその內に——
（良玄は下駄をはいて、置座の處でおむらやとき子に挨拶して去る。）
寛介　（縁がはに腰かけて）いい月だ。今日は幾日だらう。
おむら　もう十七日か八日でせう。
寛介　さうなるかな。もうまもなく秋になるな。
おむら　早いものねえ。私たちがこつちへ來てから、もう二ケ月になりますよ。來た當座は朝夕はセルでも着ないと寒いやうだつたがねえ。
とき子　（團扇をばた〱やりながら）もうさうなりますかねえ。此間のやうですけれども。
寛介　（突然）おときさん、あんたも何時までもさうやつてゐる譯にもいかないだらう。どうだ。も一度緣づいて見ちや
とき子　でももうこんな出戻りのお婆さんを誰が貰ふもんですか。
おむら　そんなことがあるもんですか。あなた位ゐの年で緣づく人は、世間にはいくらもありますよ。
寛介　いくつだつたかな、今年。
とき子　もう三十一ですよ。ほんとにお婆さんになつてしまつて……
おむら　私たちもせいぜい搜しときますがね、ほんとにいい口があつたら、嫁にいつた方がよう御座んすよ。今の內はまだ若いから、何とも思はないけれども、年を取つてから一人だと心細くてねえ。
とき子　えゝ、私もねえ、子供さへないと、何んですけれど、向うに置いて來た子供が氣になつて、何だか新らしく緣づく氣がしないんですよ。
（また座敷の裏の方にきくゑの聲がきこえる。）
おむら　まあ、何をして騷いでゐるんだらう。
寛介　きくゑか。あれももうそろ〱嫁づける工面をしなけりやならんが……
とき子　でも人間はきくゑさんの時分が一番花ですねえ。
（沈默。）
（座敷の唐紙をあけて、おつれが出てくる。）
おつれ　あの御隱居さまがお茶がはひりましたから、お話にお出でなせえましつて、おつしやいました。
寛介　あゝ、さうか。おむら、ぢやおさとさんの處へ行つて、お茶を御馳走になつて來よう。
とき子　どりや、私も少し仕事でもしませう。
（四人退場。舞臺空虛になる。）
（きくゑが出てくる。）

きくゑ（はんけちに螢を包んで持つてゐる）おや皆何處に行つたんだらう。（かう云つて置座に腰かける）

（きくゑうたふ。）

靜に照らす月影に
あはれ、鳴きよる蟲のこゑ
靜にふくる秋の夜の
淋しささそふ蟲のこゑ。

聲ほそぼそと、きこゆれば
何故か、心の闇ふかく
人なつかしさ、悲しさの
せつなき思、身にぞしむ。

きくゑ（唄つてしまつて驚いたやうに）誰れ。そこに居るのは——誰れ。

（暗のなかに貞二郎が現はれる。）

きくゑ　まあ、貞二郎さん。厭な人ね、默つてそんな處に立つてゐて——あたし吃驚したわ。

貞二郎（笑ふ）あんまり一生懸命に澄まして唄つてゐるから、威かしてやらうと思つたら失策つてしまつた。

（貞二郎はきくゑの傍に來て置座に腰かける。）

きくゑ（憎むやうに）誰があなたなんかに威かされるものですか。

貞二郎　だめだよ、いくら威張つても——此間便所の傍で威かしたら、泣いたぢやないか。臆病なくせに——

きくゑ　いゝ事よ。あたし知らないわ。

（きくゑは怒つて默つてゐる。）

貞二郎　怒つたのかい。え、きくゑさん。

きくゑ　しらないわ。

貞二郎（きくゑの手を執りて）おい、ほんとに怒つたのかい。（顏を覗き込む）

きくゑ（耐らなくなつて吹出す）ふふ……あゝ可笑しい。（笑ひこける）

貞二郎　きくゑさん。覺えておいで——僕を揶かしたね。

きくゑ　……だつてあなたが眞面目になつて——あたし餘程、怒つた風をしてゐようと思つたんだけれど、どうしても耐らないんですもの……

貞二郎　きくゑさんは不斷怒りん坊だから、つい揶されたんだよ。よし、覺えておいで、今度敵を取つてやるから……

きくゑ　いやよ。またあなたはきつと威かすんだわ。ねえ、貞二郎さん。もう喧嘩なんかよしませうよ。仲よくお話しませうよね、いいでせう。

貞二郎　あゝ、きくゑさんが欺かしさへしなければ……
きくゑ　えゝ、もう欺かさないわ。そのかはりあたしを威かしちや厭よ。よくつて。
貞二郎　あゝ、（きくゑの持つてる螢の包を見て）何だい、それは螢かい。
きくゑ　えゝ、今なほやと二人でお寺の裏に行つて取つてきたの。きれいでせう。
貞二郎　あの池の處かい。
きくゑ　えゝ、隨分恐かつたわ。眞暗で厭にしいんとしてゐるんですもの――。
貞二郎　あすこには大きな狸が居るよ。
きくゑ　あら、厭よ。またそんな…
貞二郎　威かすんぢやないよ。ほんとだよ。
きくゑ　（貞二郎に添ひながら）うそよ。うそよ。きつと威かすんだわ。
貞二郎　ほんとだつて云へば。だつてあすこの磯五郎ね。あの爺が日向ぼつこをしてゐる處を見たんだつて云ふもの。
きくゑ　厭よ。もうそんな話。
（貞二郎は寄りかゝつてくるきくゑを緊かり抱く。きくゑは默つてゐる。）
貞二郎　（間を置いて）狸が恐いかい。きくゑさん。
きくゑ　（小さな聲で）えゝ、恐いわ。
（沈默。）
（貞二郎きくゑに接吻しようとする。）
きくゑ　（驚いて）あれ、貞二郎さん。厭よ。
貞二郎　え、きくゑさん。
きくゑ　（急に振りはなさうとして）よして頂戴、厭よ、あたし恐いから。
貞二郎　恐い事はないよ。
きくゑ　（漸く貞二郎の手を振りはなしてせはしく呼吸を刻みながら）厭よ、厭よ、あたし。（間）あなたは恐い人ね。
貞二郎　（鈍いやうな調子で）きくゑさん。も一度此處へおかけよ。話があるから。
きくゑ　厭だわ。またあなたがあんな亂暴な事をするから。
貞二郎　もう決してしないから、ねえ、鳥渡此處へお出でよ。いゝだらう。
きくゑ　（短い間を置いて）ぢやきつとね。
貞二郎　あゝ、大丈夫だよ。
（きくゑは默つて貞二郎の傍に腰かける。）
（沈默。）
貞二郎　（きくゑの肩に手を廻して）きくゑさんは僕がそんなに厭なのかい。え。

きくゑ　(小さな聲で)　知らないわ。
貞二郎　ぢやどうしてもキツスさせてくれないの。
きくゑ　(泣聲になつて)　だつて恐いんですもの・・・・
貞二郎　ぢや僕の心がまだ分らないんだね。
きくゑ　(默つてゐる)
貞二郎　え、きくゑさん。
(沈默。)
(貞二郎は無理に接吻しようとする。)
きくゑ　あれ、またそんな・・・・
(たうとう二人は接吻してしまふ。二人の唇がはなれると、きくゑは貞二郎の膝の上に突伏してしまふ。)
貞二郎　(きくゑの顏を覗きこんで)　ゆるしておくれよ。ね、きくゑさん――
(庭の暗いところから、作三郎に椅子を押させて貞俊が現はれる。)
貞俊　(吃驚して離れた二人を陰鬱に白眼んで)　おい、貞二郎。(短い間)　今汝は何をしてゐた。
貞二郎　え。
貞俊　(鋭く)　汝は今何をしてゐたと云ふのだ。
貞二郎　・・・・・・
貞俊　(ジロリときくゑの方を見る。きくゑは置座に突伏して泣いてゐる)　二人でしてゐたのはあれは何の眞似だ。
貞二郎　・・・・・・
貞俊　(ヂレて)　おい、貞二郎。返事をしないか。
貞二郎　(間を置いて、石のやうな顏付で)　何もしてゐやしません。(間)　たゞきくゑさんと話をしてゐただけです。
貞俊　(險しく)　何、何もしてゐない。噓をつけ。貞二郎。汝は俺を馬鹿にする氣だな。
貞二郎　(蒼くなる)　僕は決して兄さんを馬鹿にしやしません。
貞俊　これが馬鹿にしたのでなくつて、何んだ。貞二郎。俺はチヤンと見てゐたぞ。(間)　何もかも汝たちの爲た事はすつかりあの暗い處から見てゐたのだぞ。
貞二郎　併し・・・・
貞俊　(奮然として)　まだ云ふか。あんな眞似をして置いて、まだ俺を欺さうとする。圖々しい奴だ。(間)　やれ身體が弱いのなんのと云つて、學校は怠けるし、女さへ見ればすぐ汚らはしい眞似をする。それで敎育をうけた靑年と云ふ事が出來ると思ふか。(間)　また女も女だ。男が何か少し甘い言をかけると、すぐ嬉しがつて、男の云ふなりになる。何と云ふ醜體だ。おい貞二郎。貴樣みたやうな心の腐つた奴は、もう家に置く事は出來ないから、何處でも自分の勝手な處へ出てゆけ。不埒な――

貞二郎　兄さん。それぢや丸で下等社會の喧嘩です。そんな非道い事をおつしやらなくつても、いいぢやありませんか。

貞俊　何——下等社會の喧嘩だ。生意氣な事を云ふな。俺の言ふ事が下等社會なら、貴樣のした事は何だ。あれは畜生の眞似か。

貞二郎　（猶然として）僕は兄さんだからと思つて、凝乎と耐へてゐるのですよ。それにその言草は何です。あんまり侮辱して貰ひますまい。よう御座んす。僕は出て行きませう。こんな侮辱をうけては、到底ゐろと云つたつて居られやしません。

貞俊　よし、出て行け。誰が何と云つても、俺は貴樣を追出してやる。この秋山の家には、まだ貴樣みたやうな墮落した人間は一人も出たことはない。そのかはりもう追出したら、いくら貴樣が泣附いてきても、決して家へは入れないから、さう思へ。貴樣みたやうな奴は乞食にでもなるがいゝ。

貞二郎　餘計なお世話です。乞食でも何でも。僕は僕の勝手な者になります。

貞俊　えゝ、口の廣い事を云ふな。さあ、早く出てゆかないか。貴樣みたやうな奴が、一刻でも此家にゐるのは家の汚れだ。（間）おい、作三郎、早く此奴を追出せ。

作三郎　中尉殿。まあ、氣を靜めて下せえ。何もあんた、そんなに怒らねえでも、よく話しせえすりや、分るこつたに——

貞俊　貴樣までそんな事を云ふか。さあ、作三郎．早く追出せ。追出さないと、貴樣も追出すぞ。

作三郎　まあ、中尉殿……

貞俊　（やゝ低く）俺がこんな片輪になつて、身體が利かないので馬鹿にしてゐるのだな。貴樣は——

作三郎　誰があんたを馬鹿にするものか、中尉殿。まあ落着いて下せえよ。拜むから……

（きくゑは泣きながら、貞二郎をなだめてゐる。）

貞俊　落着け——俺はこんなに落着いてゐるぢやないか。

（貞俊は段々落着いてくる。そして獨言のやうな調子で）よく考へてみろ。俺がこんな片輪になつてしまつたのは決して俺自身の爲めぢやなかつたのだぞ。俺は國のために、汝たちのために、まだ若い愉快な事の出來る身體を犧牲にして、恐ろしい生死の間にはひつて來たのだ。そして俺自身の身體を惜まずに働いた結果が、こんな哀れな半分死んだ片輪になつてしまつたのだ。併し今更、俺はそれを悔むのではない。かうなるのは俺の運命だつたのだ。俺はこんな醜い身體になつても、心のなかには少しも疚しい處はない。俺はあの戰爭のとき、多くの人を

慘たらしく殺した。併しそれも皆國のためだつた。汝たちの爲だつた。その間には一點と云へども私利私慾の汚ない心はなかつた――それだのに汝たちは今になつて、もう總てを忘れてしまつて、俺の身體の利かないのをいい事に、俺の眼を盜んで、そんな汚らはしい事をする。一體それでいゝのか。汝たちの生活の恩人を欺いてそれでいゝのか。

貞二郎　……

貞俊　貞二郎。汝はそれでいゝのか。

貞二郎　（きくゑに和められながら）でも兄さん。僕は何もあなたを欺いたんではありませんもの。

貞俊　（また險しくなる）何、これでも欺いたのではないか。汝たち二人は俺の眼を盜んだぞ。（間。深く心の底から湧き出して來るやうに）何うしても許して置く事は出來ない。貞二郎、早速出てゆけ。

貞二郎　兄さん。あなたがおつしやるまでもありません。私は出てゆきます。

きくゑ　（泣聲になつて）また――貞二郎さん。あなたがおつしやるから貞俊さんがお怒りなさるのだわ。默つていらつしやいよ。後生だから。

貞二郎　よう御座んす。きくゑさん。かまはないで置いて下さい。僕はもうどうせ此處を出て行くつもりだから、云ふだけの事を云ひますよ。

きくゑ　でも、あなた。それぢやまた……

貞俊　（その樣子を憎しみの眼を以て見てゐたが）これだけ言はれてゐながら、まだ圖々しく二人でぢやらついてゐる。その醜體は何だ。貞二郎。あんまり愚圖々々してゐるとたゝき出すぞ。

貞二郎　（きくゑを振切つて）お待ちなさい。兄さん。僕はいま云ふだけの事を云つて、それから出てゆきますから――

（きくゑはまた置座の上に泣き伏してしまふ。）

貞俊　何――言ふだけの事を云ふ。何だ、云ふだけの事とは。さあ云つてみろ。

貞二郎　えゝ、云ひますとも。兄さん。僕はやつぱりあなたと同じに此處の家で生れたんですよ。

貞俊　そりや當然の事ぢやないか。それがどうしたと云ふのだ。

貞二郎　たゞあなたの方が四五年早く生れたと云ふだけですよ。僕だつてあなただつて人間に於ては、ちつとも違はないんですよ。

貞俊　（毒々しく）たゞ俺は汝みたやうに汚らはしい心を持つてゐないだけだ。

貞二郎　何ですつて。（間。思返して柔らかく）まあ、い

い、兄さん。お聞きなさい。僕はあなたからたゞ弟だと云ふだけで、始終忍ぶに耐へない侮辱を受けてゐるのですよ。たゞ四五年後れて生れたと云ふだけで――こんな馬鹿氣た不公平な事が、世の中にあるでせうか。

貞俊　そりや當然の話ぢやないか。弟が兄にゆづるのは何も不公平ぢやないぢやないか。

貞二郎　弟が兄にゆづるのは當然です。けれどもいくら弟だつて、兄から自分の人格までふみにじられては、もう默つて耐へてゐる譯にはゆきません。兄さん、あなたはこれまで一緒に暮らしてきた何十年の間、いつでもあなたの我を立てとほして來たのですよ。そのうちには僕はあなたから何度と數へ切れない程、亂暴な侮辱を受けました。僕はもう耐へる事は出來ません。

貞俊　何を云ふ。生意氣な――汝がさう云ふ兄を兄とも思はない傲慢な心を持つてるから、それを直すために叱るのだ。自分のした事は忘れてしまつて、すぐそんな云ひ拔けをしようとする。

貞二郎　まあ、お聞きなさい、兄さん。これまで僕が始終腹の立つのを無理に耐へてきたのは他でもありません。あなたは戰爭のために、そんな片輪な身體になつてしまつて、世の中に何も樂のない方だから、大抵の無理は、まあ俺の方で耐へなければならないと、かう思つたからです。所があなたは何時でも口癖のやうに「俺は國のために汝たちのためにこんな身體になつてしまつたのだ。」つておつしやるのです。如何にも僕たちが故意とあなたを犧牲にして、そんな身體にしてしまつたやうにあなたは思つてゐるのです。併しそれはあなたのひがみですよ。あなたがそんな身體におなりなすつたのは、僕等の知つた事ぢやありません。

貞俊　汝たちの知つた事ぢやないか。いゝか、貞二郎、きけ。俺は汝たちの代表者となつて、汝たちの生活の安危のために戰つたのだぞ。そしてこんな身體になつてしまつたのだ。（間。むら〳〵と湧いてくる怒に身を顫はせて）それを何うだ。今の貴樣の言草は――丁度俺が道樂に戰に行つて、こんな身體になつて歸つてでも來たやうに――さあ、貞二郎出てゆけ。もう一刻も置く事はならん。二人とも早く出てゆけ。

きくゑ　（唐紙を開けておむらと寛介が出てくる。）

（聲高く泣き伏す）

おむら　まあ、どうしたのです。

貞俊　（險しい眼付で）こら、貞二郎、出てゆかないのか。

おむら　（其處にあつた下駄をつゝかけて庭に降りて來て）まあ、きくゑ、何ですよ。汝までそんな處で泣いたりなんかして仕樣がないぢやないか。

きくゑ　（泣きながら）　だつてお母さん…

貞俊　出てゆかないとかうしてくれるぞ。おい、作三郎もつと前に出してくれ。（かう云つてヂレる拍子に危なく地面へ落ちようとする）

おむら　あれ、危ない。まあ、貞俊さん、落こつたらどうしますよ。（後を向いて）　貞二郎さん。さあ、早くあつちへいらつしやい。これ、きくゑ。何だね、汝は、早く貞二郎さんをあつちを伴れてお出でよ。貞二郎さんてばさ――ほんとにヂレつたいねえ。

貞二郎　えゝ、叔母さん。今行きますよ。兄さん、僕はもう決してあなたにはお眼にかゝりませんからね。

貞俊　どうとも勝手にしろ。人非人。（かう云つて、貞二郎ときくゑの後姿を火のやうな眼付で見送つてゐる。）

おむら　まあ、ほんとにどうしたんですよ。

（貞俊は凄い顔をして默つてゐる。）

寛介　（緣側へ出て、凝乎と見てゐたが）　貞俊、何うした。何で喧嘩したのだ。

貞俊　（苦り切つて）　いや、何でもないのです。

おむら　そりやね、貞俊さん。貞二郎さんもまだ若いから、いろんな氣にさはるでせうが、そこはあなたが勘辨しなくつちやいけませんよ。それにね…

貞俊　おい、作三郎。

作三郎　何だね。中尉殿。

貞俊　俺をあの八幡の廣場につれていつてくれ。

おむら　まあ、貞俊さん。またこれからお出かけなさるの。

貞俊　えゝ、鳥渡出かけて心を靜めて來ます。では叔父さん、叔母さん。お休みなさい。

（作三郎に椅子を押させて暗い方に消えてしまふ。）

（沈默。おむらはその後姿を見送つてから、上にあがつて菓盤や何か散つてゐる物を取りかたづける。）

おむら　（片付けながら）　あなた。何うしたんでせう。今夜は――あんな大喧嘩を兄弟でしたりして。

寛介　さあ、何う云ふもんかな。（かういつて緣側にでゝ）あゝ、いゝ月だ。併し、今夜はこりや蒸熱くて寢られないな。風がぱつたり無くなつてしまつた。（かう獨言のやうに言つて、其處にあつた下默をつゝかけて置座のところに出てくる）

おむら　あなた、もうそろ〳〵床をしかせませうか。

寛介　（置座に腰かけて、其處にあつた團扇をバタバタ使ひながら）　まあ待て。今から閉めたひには、とても熱くて寢られない。

おむら　いゝえ、たゞ床だけ敷いて置いて、戸は寢がけに私が閉めますから…

寛介　うむ――まあ此處へ出て來て御覽。そりや涼しいよ。

おむら　え丶、今床を敷いてから行きますよ。まあきくゑは何處へ行つたんだらう。自分の床まで私に敷かせて、ほんとに仕樣がないね。（おむらは口小言を云ひながら、唐紙を開けて、隣室から蒲團やら蚊帳やら持出して、寢る支度をしてしまふ）

寬介　（おむらが蚊帳を釣つてしまつて庭に降りてくるのを見て）あ丶、い丶月だ。かうやつて凉んでゐると、家へはひつて寢る氣はしないな。

おむら　（置座に腰かけて）やつぱり外は蚊がひどう御座んすね。

寬介　（團扇をバタバタ云はせて）うむ。（間を置く）長安一片月。萬戸擣衣聲か。

おむら　ねえ、あなた。貞俊さんと貞二郎さんは何であんな喧嘩をしたんでせう。

寬介　さあ、何でしたのかな。併し、おむら。喧嘩をするのも若い內の事だよ。

おむら　あなたもよく若い時分には、兄さんと喧嘩をなさいましたねえ。私はまだ嫁に來たばかりで、まあ、ほんとにどうしようかと思つた事がありましたよ。

寬介　は丶丶……俺もあの時分は可なり氣が荒かつたからなあ。

（沈默。）

おむら　ねえ、あなたあの何時かの河口さんの方の話はどうなつたんでせう。あれつきり何とも云つて來ませんねえ。

寬介　河口の方のはなしとは——うむ、あの北海道の農園の管理人の口か。（團扇をバタバタやる）

おむら　え丶、だめなのでせうか。

寬介　さうさなあ。もう何とか云つて來なければならないが……

おむら　月給なんかいくら安くても、親子三人暮らせさへすりやよ御座んすからね。いくら親切にして貰つても、何だかかうやつてゐるのは、氣が落着かないで私は厭ですよ。

寬介　うむ。明日はもう一度手紙をやつてみよう。

（沈默。寬介は居眠りをはじめる。）

おむら　（少時團扇をバタバタやつてゐたが）あなた、大變蚊が出て來ましたよ。まあ、こんな處で眠ると、風邪を引きますよ。あつちへ行つて寢ませう。さあ。

（おむらは寬介をゆり起す。）

寬介　うむ。（欠伸をしながら）あ丶い丶心持だ。長安一片月、萬戸擣衣聲か。

（寬介は立上つて座敷の方へ行く。）

（おむらも寬介について行かうとしたが、ふと思附い

て。)

おむら　（獨言のやうに）　きくゑは何處へ行つたらう。きくゑ、きくゑ。

（おむらは娘の名を呼びながら、舞臺の右手の方へはひつてゆく。置座の上にはきくゑの忘れていつた螢の包が、呼吸をするやうに青く光つてゐる。）

――幕――

第　三　幕

秋山家の門前。もう十月十四五日頃の夕方である。正面には大きな昔風の門がある。その左に門番の家があつて、古風な武者窓が付いてゐる。右は高い黒塀。その上から高く母屋の屋根だの、塀際に植ゑてある樫の木の梢だのがみえる。門の内は敷石の途になつてゐる。

門の外は街道。時々農夫やら旅人風の男やらが通つて行く。秋の短い日は、もう大分傾いて、物の陰影が長く濃くみえる。何處か遠方で子供たちが、わあわあ騒いでゐる聲がきこえる。門のところには、おなほとおつれが立つてゐる。武者窓からは門番の梅吉の内儀さんが顏を出してゐる。門の外の黒塀に添つて俥が四臺待つてゐる。

門番の女房　おなほさん、お嬢さまが行つてしまひなさると、あとが寂しくなるね。

おなほ　ほんとよ。お内儀さん。昨夜あたしお嬢さまと二人で、そりや泣いたわ。

門番の女房　何處だね、こんどお嬢さまの行きなさる處は。何でも餘程遠方だつて云ふ話だねえ。

おなほ　北海道よ。お嬢さまも昨夜あたしにさうおつしやつたわ。あんな寒いへんぴな處へ行く位ゐなら死んだ方がましだつて――

おつれ　なあに。行つてしまへば、またすぐ馴れてその土地がよくなるよ。

門番の女房　何だつてまた急にそんな遠方へ行きなさるだね。

おなほ　旦那樣にお役がついたんだつてさ。だけれどいくらいゝお役がついたつて厭だわ。あんな遠い處――汽車で三日もかゝるつて云ふんだもの。

門番の女房　隨分遠いねえ。何百里あるだね。

おなほ　あたしもよく知らないけれど、三百里くらゐあるでせう。

おつれ　皆樣豪ら遲いだね。何をしていらつしやるだか――

――（かう云つて門の内に入つてゆく）

門番の女房　今年はお屋敷にや、久し振ていろんな事があつたねえ。東京からお客さまは御座らつしやるし、貞二郎さまは何處かへ行つてしまひなさるし――御隱居さまも苦勞だねえ。

おなほ　ほんとねえ。でもお內儀さん。若旦那さまのゐらつしやる處はやうやく分つたのよ。

門番の女房　へえ。分つたかね。

おなほ　えゝ。何でも東京のお友だちの下宿にゐらつしやるんだつて云ふ話だわ。それで御隱居さまは、一昨日旦那さまに內證で、お金をお送りなさつたのよ。

門番の女房　へえ、やつぱり親子は有難いものだねえ。

（おつねが出てくる。）

おなほ　おつねさん、もういらしつて。

おつね　まだ奧で何か話してゐなさるが、汽車に乘遲れたらどうしなさるだ。

門番の女房　なあに、荷物は先に行つてるし、あとは身體だけだから、行くには譯はねえだよ。

おつね　梅吉さんが停車場で待ちくたびれてゐるべえよ。

門番の女房　おなほさん、この頃はやつぱり旦那さまは機嫌が惡いかね。

おなほ　惡いのなんのつて――もう每日恐い顏をして、物一つおつしやらないわ。

門番の女房　若旦那と旦那とは前から、あんなに喧嘩しなすつたかね。

おなほ　いゝえ。前にはそんな事はなかつたわ。あのお客さまがいらしつてからよ。

門番の女房　一番しまひにあの若旦那が家を飛出してしまひなすつたときの喧嘩は豪え騷ぎだつたね。

おなほ　ほんとにねえ。あたし傍で見てると、腰が拔けさうだつたわ。旦那さまがねえ、凝乎と眼を据ゑてピストルで若旦那を狙つてゐらしつた姿が今でも眼に見えるやうよ。あゝ厭だ。考へ出してもゾツとするわ。

門番の女房　旦那は若旦那を殺すつもりだつたかね。

おなほ　どうだか、そんな事は分らないわ。でも當らなくつてよかつたわねえ。

門番の女房　全くだよ。當つた日にや、旦那は牢へはひりなさらなきやならねえだものねえ。でも旦那は餘程お孃さまに惚れてゐなすつたんだねえ。

おなほ　えゝ、そりや夢中だつたわ。傍で見てゐても可笑しい位ゐだつたのよ。でも厭だわねえ。いくらお金があつても、あんな片輪になつた人は。

おつね　此人はまあ、旦那さまの惡口ばかり云ひ散らして、知れたらどうするだ。

おなほ　大丈夫よ。知れるもんですか。（舌を出す）

おつね　お客さまが歸つてしまひなさると、家の內がまた靜かになるだ。さうすりや、また旦那さまの氣が靜かになつてくるだよ。

おなほ　おつねさんはほんとに旦那さま思ひね。

おつね　(間を置く)　御主人さまの事を思はねえて、どうするべえ。

(沈默。)

(このとき門の內が俄に騷がしくなる。)

おなほ　おや、いらしつたわ。(遠く街道を見込んで)　俥屋さん。俥屋さん。(手をたゝく)

(俥屋が四人左から出てくる。門番の女房は窓から首を引込めて、門のところに現はれる。)

(旅裝の村田一家が門に現はれる。その後から、おさと、とき子、貞俊、作三郎が出てくる。)

おむら　もうほんとに、おさとさん。此處までお送り下さると澤山ですよ。

寛介　嫂さん、もうどうぞ。何處まで送つて頂いても限りはないから――

おさと　まあほんとに長々御一緒に暮らしてゐて、急にかうやつて、お別れするかと思ふと、何だか心細くなりますよ。どうか寛介さんおむらさん、あつちは寒いさうですから、お身體を大切にして、達者でゐて下さいましよ。きくゑさん。お父さんとお母さんに氣をつけてあげて下さいよ。(きくゑは悲しさうに默禮する)

寛介　いや、何から何まで、申分のない手厚いお世話にあづかつて有難う。ぢや貞俊。これでお別れするから、くれぐれも身體に氣をつけてな――

おむら　貞俊さん、私たちはまたきつとその內に出て來ますから、どうかそれ迄患らはないやうにしてゐて下さいな。まあ、何と云つていゝか、お禮も出來ないくらゐ、皆樣で親切にして下すつて――ほんとにこの御恩は忘れやしませんよ。(淚ぐむ)

貞俊　いや、何もおかまひする事も出來ませんで――叔父さんも叔母さんも、どうぞ御丈夫でもう一遍こつちへ入らしつて下さい。

おさと　皆さん、どうぞ御遠慮なくお俥にお乘りなすつて下さい。時間が御座いますから……。

おむら　ねえ、あなた、ぢや折角嫂さんがあゝ云つて下さるから失禮ですけれども、お俥を頂戴しませう。

寛介　うむ。

(門の處に集まつた人たちと發つてゆく人たちの間に別れの挨拶が、一しきり賑やかにきこえる。村田一家は俥に乘る。おときも一番後の俥に乘る。)

おさと　今日はどうしても私が停車場まで、お見送りする

筈なんですが、天氣の加減で、少しリョウマチが起つてきましてね、お送りが出來ませんから、おときを代理に差上げます。おとき、よく氣を付けておくれよ。

とき子　（俥の上から點頭く）　はい。

おむら　まあ、もうほんとに結構で御座いますのに。まあまあ、恐れ入りますこと――おときさん、わざ〳〵お氣の毒で御座いますねえ。

とき子　いゝえ、おむらさん。何をおつしやるんですよ。

寛介　や、良玄さん。俥の上で大へん失禮ですが――もうお眼にかゝれんかも知れんから、貴下もどうか身體を大事にして、長生して下さい。

良玄　いや、昨日はわざ〳〵お立寄り下すつて有難う。いよいよお發ちかな。これはお名殘惜しい譯ぢやな。

おむら　こちらに居ります内は、また何かといろ〳〵お世話になりまして、有難う存じます。では――

良玄　いや、奥さん。それではお機嫌よう。（道行く人や近所の子供などが俥の傍にたかつて見てゐる）

（おなほは頻りにきくゑの俥の傍へよつて、何か話してゐる。）

おさと　ぢや皆さん御無事で――

寛介　有難う。

おむら　嫂さん。あなたもお達者で――では失禮致します。

（俥の梶棒があがる、見送りの人と、發つ人との間に、「御無事で。失禮。」と云ふやうな短い言がかはされる。四臺の俥は、左の方に消えてしまふ。寂しい沈默。門の外に集まつた往來の人々や子供は、何時か居なくなつてしまふ。）

おさと　（默つて長い事俥の行つた方を見送つてゐたが、誰に云ふともなく）やれ〳〵、皆行つてしまつて、これからまた家の中が寂しくなるねえ。

（貞俊は門の右側の處に、死んだやうな顔をして椅子に腰かけてゐる。遠方でまた子供の騒ぐ聲がわあ〳〵ときこえる。）

良玄　もう冬も間近いのに、これから北海道へ行きなすつては、村田さんも身體にさはらなければいゝがな――俺は行つたことはないけれども、あつちは餘程、寒さがきびしいと云ふ話ぢやからなあ。

おさと　（しみ〴〵と）　あの人も運の悪い人ですねえ。あの年になつて、親子三人であんな寒いところへ行かなくつちやならないと云ふのはねえ――

良玄　人間の行末くらゐ分らぬものはないな。

おさと　ほんとですよ。あの人なんかはこの街に居れば、立派な旦那さまで暮らせたんですがねえ。

おなほ　御隱居様、私はもう御用は御座いませんでせうか。

おさと　あゝ、汝たちはこれからお座敷を片付けてね、よく掃除して置いておくれ。
おなほ　はい。ぢやおつねさん。行きませう。
（おなほとおつれと門の内にかくれる。門番のお内儀さんも内へはひる。）
おさと　ねえ、貞俊。こんどの處は札幌からはさう遠くないさうだけれども、大變寂しい處だつてね。
貞俊　さうでせうなあ。
良玄　村田さんはあつちでどんな仕事をしなさるのかな。
おさと　何でもあの人の昔の友だちの持つてゐる農園の管理をするんださうですよ。その話を聞きましたときにね、あんな寒いところですし、それに頂戴する物もさう澤山と云ふ譯ぢやないのですから、まあ、そんな處へゆくより、此處で呑氣にして居らつしやいつて、餘程止めたんですが、どうしても承知しないで、とう〳〵行つてしまつたんですよ。
良玄　ふうむ。
おさと　（間を置いて）何しろもうそれに年が年ですからねえ。
（沈默。遠方から子供の唄がきこえてくる。）
――夕燒けこやけ、あしたは天氣になれ
夕燒けこやけ、あしたは天氣になれ――

良玄　いや、もう秋が大分深くなつたな。（間）ときにおさとさん、貞二郎さんはどうしなすつた。たよりがありましたか。
おさと　えゝ、一昨日東京の友達の下宿に居ると云つて參りましたが――ほんとにあれにも困つてしまひますよ。
良玄　若いうちは、いろんな事がして見たいものぢやからなあ。あつちで何をしなさるつもりかしらんて。
おさと　また舊の學校へ通ふんださうですが、まだ身體もほんとでは御座いませんしねえ。無理をして患らひでもしなけりやいゝと思つて、案じてゐるので御座いますよ。
貞俊　（突然）一體お母さんがあんまり貞二郎を可愛がりすぎたからいけないんですよ。増長してあんなになつてしまつたんです。
おさと　何を云つてゐるのだよ、貞俊。そりやわが子だもの、可愛がらないでどうしませう。
貞俊　度に過ぎた可愛がり方をすると、人間は我儘になりますよ。
おさと　（ため息をついて）汝も貞二郎も、ほんとに剛情で困つてしまふねえ。
良玄　貞俊さん、この頃はちつとも俺のところへ來られんやうぢやな。またちと碁でも打たうかな。
貞俊　（暗い聲で）えゝ、その内にあがりませう。

良玄（間を置いて）どうしたのぢや。貞俊さん。あなたはこの頃豪い陰氣になつたやうぢやな。
貞俊　………
良玄　何處か惡いのぢやないかな。
貞俊（怒つたやうな聲で）どうせこんな身體です。惡くなつたつて善くなつたつて、どうなるものですか。
（段々あたりが暗くなつてくる。）
（馬を曳いた百姓が、通りすがりに、丁寧に頭を下げて「今晩は。」と云つてゆく。）
良玄　ふうむ。貞俊さん。こんな事は云ふ迄もない事ぢやが、あなたはもちつと氣を大きくせんといかんな。大事な秋山家の戸主で、國家のために名譽の負傷をした人ぢやから……まあ、なるべく養生をして、一日も長生をする工面をすることぢやな。今此處であなたが弱つて見なさい。おさととさんがそりや心細いから……
おさと　全くさうだよ。貞俊、此處で汝にひよつとした事でもあると、逆緣になつて、私一人殘らなけりやならないからねえ。
良玄　何しろあの戰爭で、それだけの大傷をして命の助かつた人ぢやから、貞俊さん。あなた位ゐ武運の強い人はないのぢや。さう思ふと、命は粗末には出來んな。
貞俊（默つて考へてゐたが、この言を聞いて）和尙さん。どう云ふ譯で私は武運が強いのでせう。それを考へると厭になりますよ、なまじひに武運が強かつたばかりで、私はこんな身體になつて、若い年月を何の面白い事もなく退屈な日を送らなければならなかつたのです。（間。嘆して）他の奴等は皆愉快に世を暮らしてゐるのに、私一人かうやつて、寂しい日を送らなければならないかと思ふと、他の者がみんな憎くなつてきますよ。
おさと　貞俊、まあ、何を云ふんだよ。
貞俊　いゝえ、お母さん。私はあなただつて憎いと思ひますよ。同じ兄弟の內にも、偏頗をつけるんですからね。
おさと　まあ、私がいつそんな眞似をしました。私は汝たち二人にはいつでも同じやうに仕向けてゐますよ。困るねえ、そんな事を云つちや……
良玄　貞俊さん。失禮ぢやがあなたの考は少し間違つて居りやせんかと俺は思ふのぢや。今あなたは自分の武運を恨むと云ひなすつたが、まあよく考へてみなさるがいゝ。これは人々の授かり者ぢや。あなたのやうに云うた日には、貧乏人や病人は皆生きてゐられなくなつてしまふ。其處ぢやな。人間の大事な處は——何事も天命に安んじて、敢て多きを望まずぢや。精神の苦樂はこの世の相とはまた別ぢやからな。
（貞俊は默つてゐる。）

おさと　ねえ、貞俊。ほんとに良玄さんのおつしやるやうに氣を廣く持つておくれよ。後生だから。——

（お寺の夕暮の鐘がごをん〳〵となり渡る。）

良玄　（俄に氣付いて）や、もう六時ぢや。どりや俺は歸らう。おさとさん。それでは——

おさと　まあ、わざ〳〵お見送り下さいまして、ほんとに有難う存じます。

良玄　いや、貞俊さん。それではよく考へて御覧。結局人間は其處の諦めさへつけば、もう樂なものぢやから——さよなら。（暗い門の内にはひつてゆく）

（貞俊は默つて頭を下げてこの後姿を凝乎と見つめてゐる。何處かで法華太鼓をたゝく音がきこえる。まだ暮れきらないので、銀色の星が空に輝いてゐる。）

おさと　（空を眺めて）さあ、貞俊歸つて御飯にしませう。

貞俊　お母さん、鳥渡待つて下さい。少し話がありますから。

おさと　何だい。貞俊。（凝乎と貞俊の顔を覗きこんで）おや、どうしたんだい。汝は——氣味の惡い顔をして。

貞俊　お母さん、貞二郎は一體何處にゐるんです。隱さないで敎へて下さい。

おさと　何を云つてゐるんだよ。一昨日汝に見せたぢやないか。貞二郎の手紙を——まだ疑ぐつてゐるのかい。

貞俊　（冷たく）あの手紙は手紙です。私はどうしてもあれを信じる事は出來ません。そりや私みたやうな醜い片輪と違ふから、お母さんが可愛いとお思ひなさるのは、決して無理とは思ひませんから。ねえ、お母さん。本統の事を云つて下さい。貞二郎は今何處に居るんです。

おさと　困るぢやないか。貞俊。そんな事を云つちや——何遍云つても同じ事だけれども、私は決してそんな考へは持つてゐやしませんよ。何方も自分のお腹を痛めた子ぢやないか。あれ一人を可愛がつて、汝を憎むなんてまあ……親の心にもなつて御覧。そんな事が出來るものか、どうだか。

貞俊　まだお母さんは隱していらつしやるのですね。私は決してあれの居所をお敎へなすつても、亂暴な眞似なんかしやしませんから、どうかお母さん。本統の事を云つて下さい。

おさと　だからさ。あの手紙に書いてあるとほり牛込のお友だちの下宿に居るんだと云ふのに——まあ、貞俊。よく考へて御覧。あれの居所を私が汝に隱して何になるんだよ。

貞俊　そんな事を私が知るものですか。（間）よう御座んす。これ程までお頼みしても敎へて下さらないのなら、もう決して伺ひませんから。

おさと　困るねえ。ほんとに汝は――どうしてさうひがんでしまつたんだらう。私は隱してなんかゐやしないつてば。(稍强く云ふ)

(沈默。)

貞俊　お母さん。くどいやうですが、どうしても敎へて下さらないんですね。

おさと　(恐怖を感じて)　まあ、汝、何と云ふ氣味の惡い風をするんですよ。そりやもしほんとうに隱してゐるなら、敎へてあげるが全く隱してゐるんぢやないんだからねえ……。貞俊、後生だから、そんな變な事を云はないでおくれよ。

貞俊　今になつて、そんな事をおつしやつてもだめですよ。お母さん、私はちやんと貞二郎をお母さんが隱してゐらつしやる證據を持つてゐますからねえ。

おさと　證據。まあ、汝は何を云つてゐるんだい。そんな證據があるなら出して御覽なね。どんな物か知らないけれど……

貞俊　まだそんな事をおつしやるんですか、これを御覽なさい。こりや何です。

(爲替劵の受取を出す)

おさと　え、これかい――

貞俊　お母さん、あなたはこの五十圓を私にかくして誰に送つたのです。貞二郎に送つたのでせう。

おさと　そりや汝に隱して送つたのは、私が惡かつたから、謝りますがね――

貞俊　私はいまそんな事を訊くのぢやないのです。貞二郎は何處にゐるかを伺つてゐるのです。

おさと　だからさ。やつぱり私の云つたとほりその爲替に書いてある牛込の――

貞俊　嘘です。そんな事で私は欺されやしません。

おさと　まあ、お聞きよ。私は決して欺すんぢやないつて云へば――

貞俊　いゝえ、欺すのです。そりやこの爲替に書いてある處にはこの受取人になつてゐる貞二郎の友だちは居るでせう。併し貞二郎は決して此處には居やしません。金が其處へ着くと貞二郎はその家へ取りに行くのです。貞二郎が他の處に泊つてゐるのは、私にはチヤンと分つてゐますよ。

おさと　(長い呼吸をして)　困るねえ、私はまあどうしよう。汝に隱してその金を送つたのは、そりや私が重々惡かつたけれども――ねえ。貞俊。少しは私の身にもなつて考へておくれ。あの子だつてやつぱり汝と同じ私の子なのだからねえ。それにあゝ云ふ弱い身體だから、あつちへ行つてもし患らひでもすると可哀さうだと思つて、

私はあれだけ送つてやつたんだよ。汝だつて弟の事ぢやないか。私が金を送つたのをまさか悪いとは云やしまいね。
貞俊　だから金の事は云つてゐやしないぢやありませんか。私はたゞ貞二郎の居處が知りたいだけです。
おさと　まあ、ほんとにどうしたらいゝだらう。ぢや汝はあの子の居處をきいてどうしようと云ふのだえ。
貞俊　分つてるぢやありませんか。あなたはそれまで隱すつもりですね。
おさと　それまで――それまでとは。
貞俊　だめですよ。いくら誤魔化さうとしても。（間）あなたと貞二郎とグルになつて、私を出拔いて、きくゑとあいつとを結婚させるつもりでせう。チヤンと知つて居ますよ。
おさと　馬鹿な……まあ、汝夢でも見てゐるんぢやないかい。よく落着いて考へて御覽。きくゑは今寛介さんに伴れられて、北海道へ行つたぢやないか。ほんとに確かりしてくれなくちや困るよ。
貞俊　またそんな子供欺しみたやうな事を――そんな事はいくらおつしやつてもだめです。私はもう何もかもすつかり知つてゐるのですから。そりやきくゑはチヤンと叔父さんたちに伴れられて行つたにはちがひありません。併し。此處を出てから先は何處へ行つたか、分るもんぢやありませんからね。（獨言のやうに）何しろ皆でグルになつてゐるのだから。
おさと　ほんとに厭だねえ、どうしてそんな事を考へるのだらう。ぢや證據か何かあるのかい。きくゑが貞二郎の處へ行つた――
貞俊　馬鹿な事をおつしやい。お母さん。あなた方がそんな證據なんか殘して置く人ですか。（間。呼吸を刻んで）こんな片輪になつたばかりで、皆から愚弄されるかと思ふと、腹が立つて耐らない。
（沈默。）
（門番の家の武者窓にパツと燈火の影が映す。）
おさと　あゝあゝ、困つてしまふねえ。私はもう死にたいやうだよ。ねえ、貞俊。ほんとにどうか確かりしておくれよ。汝がいまそんな風になると、私はたつた一人ぼつちになつてしまふからねえ。いゝかい貞俊。
貞俊　だからお母さん。たゞ貞二郎の居處さへ敎へて下されぱいゝんぢやありませんか。あなたが私にあの事を隱しさへなさらなければ、何でもないんぢやありませんか。
おさと　まだそんな事を云つてゐるんだね。ぢや汝の疑のはれるやうに、誰か汝の信用してる人を搜しにやつて御覽。きつと貞二郎は一人でお友だちの下宿に居るから：

……

貞俊　そんな事をして、何の役に立ちます。さうすりや貞二郎は自分の家から、その下宿へそのときだけ來てゐるにきまつてゐるぢやありませんか。

おさと　ぢや何うすればいゝのさ。もう私には仕様がないから、どうでも汝の勝手な手だてゞ疑のはれるやうにして御覽。

貞俊　えゝ。よう御座んす。きつと搜して見せますから。（間。口惜しさうに）きくゑと貞二郎はどんな事があつても結婚させるものか。

（沈默。）

おさと　（柔しく）ねえ、貞俊。もう家へ歸りませう。御飯だから――

貞俊　（すげなく）お母さん。一人先へお歸りなさい。私はまだ歸りたくありませんから。

おさと　（ため息をつく）困るねえ。ぢや作三郎、汝よく氣を付けて旦那をつれて歸つておくれ。私は先へ歸るから……

作三郎　へえ。

（おさと門の內に隱れる。）

作三郎　さあ、中尉殿。御隱居さま心配してゐらつしやるだから、歸りませう。

貞俊　（險しく）こら、作三郎、貴さまもうあつちの味方だな。

作三郎　何を云ふだよ。中尉殿。俺はあんたの事より外に、何も考へた事はねえだ。つまんねえ事を云ふもんでねえ。

（沈默。）

貞俊　（嗚咽しながら）おい、作三郎、俺が惡かつた。ゆるしてくれ。たとへ他の奴等は皆俺の敵になつても、汝だけはいつも俺の味方だなあ――あゝ、作三郎。ゆるしてくれ。

作三郎　（いたはるやうに）さあ、中尉殿。もう家へ歸つた方がいゝだ。家にや溫けえ飯があんたを待つてるだ。

貞俊　いやだ。俺は歸らない。おい作三郎。俺はこれから東京へ行くから、汝はこの椅子を押して來てくれ。どうしてもあいつ等を搜し出さなくつちや……

作三郎　馬鹿云ふでねえよ、中尉殿。さあ、俺の云ふ事を聞いて、家へ歸るが一番いゝだよ。

貞俊　どうしても俺はあいつ等を搜し出さなけりやならない。

作三郎　（間を置いて）中尉殿。あんたの心は俺がよく知つてるだ。あんな女どうする氣だね。まあ待つがいゝだよ。その內には、もつとえゝ女搜してあげるから。

貞俊　おい、作三郎。俺のこの胸の內を知つてくれるのは、全く汝ばかりだなあ。
作三郎　中尉殿。あんたと俺とは、何遍一緒に今死ぬかと思ふやうな恐ろしい處を通つて來たか分らねえだからねえ。俺はどうあつてもあんたの悪いやうにはしやしねえ。
（貞俊は默つて嗚咽してゐる。）
作三郎　さあ、はやく家へ歸るが一番だ。もうお客も歸つてしまつたから、これからお屋敷はまた靜かになる。その方があんたの爲には藥だ。明朝からまたこの椅子に乘つて、お寺の池の處へ日向ぼつこをしに行くべえ。
貞俊　うむ、作三郎。歸らう。
作三郎　（椅子の後の取手を押さうとして）　あいたゝゝた。（顏をしかめる）
貞俊　どうした、作三郎。傷でもしたか。（きづかはしさうに訊く）
作三郎　（間を置いて）　いや、何でもねえだ。そろ〳〵冬が近くなつたで、この肩の傷痕が痛んでならねえだ。
（作三郎はかう云つて、椅子を押して門のなかに入つて行く。）
（遠くから子供の唄の聲がきこえる。）
——蛙がなくからかへろ
蛙がなくからかへろ——

（あたりは段々暗くなつてくる。大きな半月が門番の屋根から、半分ばかり露はれてゐる。）
（一臺の俥が歸つて來て、門のところに梶棒を下ろすと、內からとき子が現はれる。）
（とき子は寒さうに袖を重ねて、そゝくさと門のなかに入つてしまふ。）

——靜かに幕——

石山開城記

（四幕六場）

人物

顯如光佐　本願寺門跡
敎如光壽　長子、新門跡
興正寺顯尊　次子、脇門跡
阿茶丸　三子
（如春尼公）　北の方
下間刑部卿法橋頼廉　上席家老
同、按察使法橋頼龍　家老
同、少進法橋仲之　奏者
願得寺實悟　連枝
河内顯證寺覺淳　同
常樂寺超乘　同、（御鑰取り役）
敎光寺證誓　同、（御鑰取り役）
粟津源六季遠　本願寺重臣
矢木駿河守光直　同
平井越後守宗成　同
大多和惣兵衞元直　毛利家の侍
鈴木孫一持久　雜賀門徒の首領
黑丸の光玄坊　北國大一揆落人
願證寺善堯　伊勢長島一揆落人
蘭菊丸　本願寺小姓
町人宿老三名　大阪庄屋
叡山法師三名
おさめ　敎光院侍女
隻眼の武士　（姓不詳、大學殿と呼ばれる）
近衞前關白前久公　勅使
庭田大納言重保卿　同
勸修寺中納言晴豐卿　同
宮内卿法印　織田方使者
佐久間信盛　同
　その他、一門の坊主衆、武士、侍女法師たち、門徒一揆の農民、野武士など大勢。

時代

天正八年閏三月三日より同十年、六月三日まで。

場所

大阪、石山本願寺と、紀州鷺の森別院。

序曲

天正八年閏、三月三日の夜。

大阪石山本願寺の祖師堂に於て、門跡、顯如光佐が、和議の大評定を開いてゐる。
正面に祖師の骨肉の御影を納めた大龕が内陣の奥ふかくかざられてゐる。
顯如光佐、願得寺實悟(九十歳に餘る老僧)常樂寺超乘、顯證寺覺淳その他連枝、下間頼廉、同、仲之の二家老をはじめ、平井越後、矢木駿河、鈴木孫一などの重臣たちが綺羅星のやうに並んでゐる。

仲之 (一同を見廻して席より進出で)御召によりまして、一同罷り出でまして御座りまする。(平伏する)

光佐 敎如は如何いたした。まだ、見えぬやうぢやな。

仲之 御意に御座りまする。新門樣、敎行寺殿、按察使法橋、粟津源六などいまだ參られませぬ。

光佐 敎如は今宵の評定に缺けてはならぬ。先刻つかせし大鐘の響が聞えぬ事はよもあるまい。如何いたしたのぢや。

仲之 先刻よりお待ちいたしてをりまするが、あまり新門樣の御出が隙どりますゆゑ、只今、召使の者を北の御所へつかはしましたるところ、敎行寺殿、按察使法橋など相詰めて、密々何事か御談合あらせらるゝ最中と申す事で御座りました。

(一座緊張する。)

光佐 勅使には明朝奉答の手筈ぢや。今宵はどうあつても、此石山立退の議をまとめねばならぬ。和議についての大阪町人の意嚮をたづぬるため、召出したる庄屋たちの參るも、もはや、間もあるまい。仲之。今一度、使を敎如の館につかはせ。

仲之 かしこまりました。(退場)

光佐 常樂寺。

超乘 はつ。

光佐 御龕の扉をお開き申せ。

實乘 はつ。(立上つて、大鑰にて、正面の大龕の扉を開く)

(世に骨肉の御眞影と呼ばるゝ親鸞上人の影像が、燈明の光に照らされて、仄かに現はれる。)

(光佐は龕の前に進み、合掌禮拜する。)

(一同合掌。)

光佐 (我座に戻る)さて、昨夜の評定を續ける前に、そちたちに一言申しきかせる。それは餘の儀ではない。昨日、禁裡より勅使として近衞前久公、庭田、勸修寺の三卿が、再び參られ、此度、織田右府との和議とゞこほりなく相濟み、禁裡に於ても祝着至極に思召さるゝとの御諚を賜はつた次第は、既にそちたちも承知いたして居る事ぢや。

(一同頭を低げる)ついては、とても事に、この石山

を立退かれたならば、織田右府に於ても定めし滿足に思はれ、和議も末長うつゞくであらうとの勅書にそへて、近衞公よりこまごまと御話があつた――所詮本願寺が、この石山を立退くか、退かぬかによつて、和戰いづれともなると云ふところが、あの勅書の眼目ぢや。あくまで石山退轉に異議をとなふる敎如の心ばえは、九年前、初めて織田殿と戰ふ頃のわれらの心ぢや。浮世の辛勞を知らぬ乳くさい考ぢや。敎如一味の敎行寺も賴龍も、軍にかけては豪の者と云はれようが、心が練れて居らぬ。云はゞ一徹者ぢや。昨夜のやうに雙方意地を立てゝ論戰いたしたならば、今宵もまた小田原評定に終らうぞ。

賴廉　いかにも門跡樣仰せのとほり、この論戰は何時までたつても、まとまる筈は御座りませぬ。併しながら、毛利家よりの糧道をたゝれし目下の窮境で、無謀の戰をつづけますれば、宗門の滅亡は目前で御座りまする。成程新門樣仰せの如く、この石山を退轉いたすは、御開山蓮如上人に對しても相濟まず、かつは、當寺の最初よりの申分を失ふ道理では御座りまするが、兵糧米もかくの如く殘少ない有樣で御座りまする上、門徒衆いかに猛くとも、九年にわたる難戰にもはや倦みあぐねて居りまする。

光佐　そちの云ふとほりこの上の合戰は、もはや無益ぢや。併しながら、敎如一味の者どもをかへりみず、このまゝ和議を進むる譯にもゆかぬ。そこで、昨夜より、とくと考へた末、やうやう案じいだした方略がある。それをそちたちにきかするぞ。（一同頭を低げる）即ち、只今敎如が參つたならば、なほ一應理解をといてみて、彼ら一味の者どもが、承服すればよし、さもない時は、敎如を勘當いたすつもりぢや。

（一同動搖。）

賴廉　御勘當と仰せられまするか。

光佐　いかにも、久離切つて勘當ぢや。父としては、まことに忍び難い事ながら、宗門のためにはやむを得ぬ。

覺淳　門跡の仰せ、容易ならぬ宗門の一大事と心得まする。只今、法敵天下に充滿いたし、當寺を十重廿重に取りかこみ居りまする際に、御父子の間、さやうの事と相成りますれば、折角門徒衆決死の勇氣もにぶり、織田右府をして漁夫の利を得せしむる事になるで御座らう。此處はよくよく御分別が肝要で御座るぞ。

賴廉　顯證寺樣の仰せ至極と存じまする。かゝる大難の時にあたりまして、御父子の御不和は決して宗門のため御一門のため、目出度い出來事では御座りませぬ。恐れながら、その儀は今一應御熟慮遊ばすやう、ひとへに御願いたしまする。

平井越後守　顯證寺様、刑部殿の御思案のとほり、何さま、宗門の一大事と心得まするゆゑ、末席をもかへりみず、我々一同よりも御願いたしまする。（一同頭を低げる）

光佐　我らとて、それ程の事を考へぬではない。つくづく天下の有様を思ひめぐらし熟慮を重ねし上の方略ぢや。

覺淳　新門は當流の嫡々、殊に利發の生れで御座る。宗徒の大將たちの內にも、門徒衆の內にも、新門のためには命も惜むまじと思詰めた者が數知らず御座る。この石山の法戰九年の間にわづかに二度より敵に退けを取らぬは新門の軍略よろしきを得たゝめかと、憚りながら、愚僧は思案いたす。かの織田右府はなかなかの曲者で御座れば、たとへ、門跡右府の思惑どほり、この石山を退轉さるゝとも、機をみて、如何なる難題を持ちかけるやも知れませぬ。いま新門御勘當あらば、その時にいたつて後悔臍をかむとも、もはや及ばぬ沙汰と相成りまする。

光佐　成程、一理ある言葉ぢや、そのやうな時が來ようも知れぬ。その時こそ、この光佐が「開山の御眞影」を奉じて、懸命の戰をいたすわ。宗門一大事とあらば、日本全國の門徒衆が、何事をおいても走せ集まつてくれるであらう。

超乘　祖師親鸞聖人は、御子善鸞を御勘當遊ばしました。また、三代覺如上人は、存覺と義絶されたと承はりまする。されど、これは御宗門に異說を立てられた爲——卽ち敎義の上の解釋にもとづいたもので御座る。

光佐　待て、常樂寺、なる程、御先祖お二方が、その子を勘當遊ばされしは、そちの云ふとほり、敎義の上の異說を許し難く思はれたからであつた。然るにこの光佐は、さやうな宗門の義理からではなく、たゞ、この石山退轉を肯んぜぬが故に彼を勘當する——御身はそれを申すのであらう。

樂寺　さやうで御座りまする。

光佐　その儀ならば、無益ぢや。もはや申すな。

樂寺　（色を作して）無益と仰せられまするか。

光佐　いかにも無益ぢや。われらは宗門の義理にも、石山の退轉にも、一向、差異を認めぬ。今日目前の大事は石山の退轉ぢや。わが淨土眞宗の敎義が未だ固まらぬ內は、義理の上の爭が一大事であつた。然るに、今以つて、ひたすら敎義の爭を尊しとするは、詮ずるところ、古になづんだ議論ぢや。（實悟の方を向く）願得寺。蓮如上人の御子息の內で生殘つて居らるゝは御身一人ぢや。この儀についての御身の思案は。

實悟　（笑ふ）いや、格別よい思案も浮び申さぬ。新門が參られて、談合さるゝ內には、何か思付くかも知れませぬわい。

光佐　（しみじみと）常樂寺。血を分けた子供の事ぢや。われらとて、決して、喜んで勘當はいたさぬわ。

（超乘は頭を下げる。）

（下間少進仲之が出てくる。）

仲之　使では埒のあきかぬる事もと存じましたゆゑ、某直直に北の御所へ參上いたし、新門樣をおつれ申しました。

光佐　御苦勞であつた。

（敎如と敎行寺證誓、下間按察使法橋賴龍、粟津源六が入來る。敎如以下の人々はまづ「骨肉の御影」を拜して座につく。）

敎如　（光佐の方を向いて）御評定の時刻に遲れまして、申譯も御座りませぬ。（一禮する）

證誓　我々一同よりも、遲刻の段御詫を申上げまする。（一同頭を低げる）

光佐　勅使の方々へ明朝までに御返事いたさねばならぬゆゑ、今宵は是非とも和戰何れにか決せねばならぬ。然らば早速ながら評定に移るといたさう。（間。一同の顏をずらりと見廻して）さて、此度の爭はわが淨土眞宗の法流に取つては、未曾有の大難である。卽ち、今宵は合戰の中にも屢奇瑞を現はし玉うた宗祖聖人の御眞影にも、御同席を願つて、愼重に談合いたすために、この祖師堂に集まつて貰うたのぢや。

（一同頭を低げる。）

賴廉　（座を進めて）只今、門跡樣仰せの御趣意に從つて、評定にうつりまする。昨夜御詮議を願ひましたる禁裡御勅書の件で御座りまする。皆樣も御存じのとほり、昨夜は遂に論戰と相成り、三更に及んでも、石山退轉の可否、何れとも定まりませんで御座りました。云ふまでもなく、これは當山草創以來の一大事で御座りまする。なかなか一朝一夕に定まるべき事柄では御座りませぬ。そこで、引續いて今宵も御詮議を願ふ次第で御座りまする。門跡樣御演說のとほり、明朝を以て勅答の手筈になつて居りますゆゑ、何としても、今宵は御評定を終らねばなりませぬ。よろしくその邊の事をお含み願ひまする。

證誓　（突如として）刑部卿にたづぬる議が御座る。

賴廉　何事に御座りまするか。

證誓　いや、餘の儀では御座らぬ。そもそも此度の石山退轉の儀は、恐多くも禁裏に於かせられて、深く宸襟を惱まされ、勅使を以つて匆々和議を取計らふやう仰出されしに初まる。もとより一天萬乘の君の勅に反き奉るは、臣下としては不忠のきはみで御座る。さりながら、事の次第を深く慮かりみるに、石山退轉の難題は、法敵、織田右府がひそかに禁裏に手を廻して、勅書を强請いたせ

しかと思はるゝ節が御座る。いや、われらよりつかはし置きたる間者が戻つて參つて、織田右府より勅書降下につき、密かに伏奏せし仔細をつぶさに物語り申した。織田右府と不和におはす前關白近衞公を、勅使と共に下らせしは、その謀を知られぬための手段かと愚考いたす。卽ち、只今、この石山を退轉すれば、むざむざ敵の術中に陥る道理――この邊の思案、訊ね申す。

賴廉　成程敎行寺殿仰せのとほり、この度の勅書は、或は織田右府のからくりかも知れませぬ。さればと申して兎もかくも叡慮より仰せいだされし儀に、もし異論をさしはさみ申さば、違勅の罪を云ひたてられ、右府の思ふつぼにはまり申すで御座りませう。兎角、織田右府は、日本一の曲者で御座りまする。かやうに幾重にも張られた網をのがるゝためには、餘程思慮なくては叶ひませぬ。

證誓　（怒りて）愚僧には思慮なしと申すか。（つめ寄る）

賴廉　これはしたり。何でそのやうな事を申しませう。ただ某は右府の腹の黒さを、心に思ふまゝに申上げただけで御座りまする。

敎如　敎行寺。ひかへられい。父上の御前で無禮で御座らう。

光佐　敎行寺。やはり短氣はやまらぬと見ゆるな。

證誓　（赤面して）何とも恐入りまする。

敎如　父上に申上げまする。

光佐　何ぢや。

敎如　只今、敎行寺が述べました當寺退轉の儀につきまして、昨夜御評定の果てますると共に、同心の者ども、私館に引上げ、只今まで、さまざま思案を重ねましたが、何はともあれ、この際、當寺の御動座は、私ども一統不承知で御座りまする。また勅諚の儀につきましては、敎行寺の申述べまする通り、右府の謀たる事は、もはや一點の疑ひも御座りませぬ。只今、刑部は違勅の罪を云立てゝ右府が必ず攻めて參るであらうと申しましたが、憚りある事ながら、眞實の叡慮ならぬ勅諚といたしますれば、敢て、恐るゝ事も御座るまいと思はれまする。當今の帝に於かせられましても、本願寺の忠節はよく御存知かと思はれまする。卽ち、一旦違勅の罪をうけても、わが宗門を堅固にかたむるが、我らの取るべき途かと憚りながら思案いたしまする。

光佐　然らばそちに問ふが、もし、織田右府が違勅の罪を眞向に振りかざして、大軍を以て攻めて參つた時は如何いたすつもりぢや。

敎如　その時こそ、某、門徒衆をはげまして、一心不亂に戰ひまする。織田勢、いかに猛くとも、念佛に凝りかた

まつた門徒衆の必死の矛先には手向ふ事は叶ひませぬ。
光佐　門徒衆の信心にこり固まりたる力は、もはや九年の籠城によつて、よく分つて居る――併し、長籠城の果てぢや、さすがの勇士たちも、疲れはてゝしまうたのが、そちには見えぬかのう。
教如　たとへ、いかに疲れはてゝ居りませうとも、一旦法敵に立向へば、忽ち、勇氣日頃に百倍して、生死を忘るるのが、門徒の習で御座ります。
光佐　それ程の事は、弱年者のそちに習はいでも、われら、よう知つてゐる。これまでの長籠城にあたら門徒の生命を失はせた數をどれ程と思ふか、われら、それを思へば、あまり罪深さに、夜もおちおち寢まれぬ程ぢや。
教如　これは異な事を承はります。今、海内は麻の如く亂れて、王法光を失ひ、下より上を剋する末法濁世の有樣で御座りまする。當流は、御先祖の上人以來、屢危ふきに瀕して、或時は寺領を掠取られ、またある時は危難身に及び、忝なくも門跡の御身を以て、惡徒の兇刄の下に立ち玉うた事も御座りまする。即ち、信心の門徒たちが當流宗門擁護の爲め、降魔の利劍をふるつて、法敵に立向つたのぢやと、幼少の折より、父上の御教を受けて居りまする。
光佐　然らばあらためて云ひきかす。この本願寺が降魔の利劍を取つて立つたのは、兇惡無殘の法敵のために宗門の斷絶せむ事を恐れたからぢや。窮地におちいつて、已むを得ず、身をまつたうせむが爲ぢや。決して、無辜の門徒衆の尊とい血潮を、無益に流すためではないぞ。
教如　いま、法敵の張本信長の憎むべき陰謀により、忝なくも蓮如上人御開山のこの靈場を奪はれんとする大難に殉ずる血潮が無益で御座りまするか。
光佐　父に向つて暴言を吐くか。無禮であらうぞ。
教如　いや、決して暴言では御座りませぬ。わが宗門を思へばこそ、御怒りをもかへりみず、諫めたてまつる次第で御座る。
光佐　成程、この石山は無二の靈場、幾萬の門徒の血を流したる日本唯一の眞宗の道場ぢや。何人も捨てがたく思ふ人情にかはりはない。そもそもわれらが始めて籠城いたした時は、東國は武田信玄公と堅く結び、加賀の一揆、長島の門徒も盛んな勢であつた。また、北陸の上杉輝虎入道、淺井朝倉の大名たちもわれらに惡志をつくして居た。然るに、かの機山公は上洛途上に雄志を抱いて、空しく倒れ、淺井朝倉は、はかなくも織田に亡ぼされ、上杉入道も遂に天命に勝つこと能はず、病のために不慮の死をとげてしまうた。彼等は何れも信長の大敵であつた事は、そちも知るとほりぢや。かくて勢にのつた信長

は、加賀長島の門徒を討つて、わが本願寺の枝を刈り幹を切つてしまうた。今はもはや孤立無援ぢや。頼み切つたる毛利の援軍も、かやうに海路を斷たれては何としても來られぬ。寺中の兵糧も、もはや手薄うなつてしまうたのぢや——われらが一旦、信長と和して、この靈場を退くのは、この上、無益の血を流しても、將來の見込が立ちかぬるからぢや。いやしくも宗門の束を司る者は、そちのやうに血氣にまかせていたづらに合戰の夢ばかりみて居る事は出來ぬ。

敎如　只今の御言葉、敎如心外で御座りまする。某とて、人命の餘さはよく承知いたして居りまする。徒らに血氣にはやつて、合戰の夢ばかり見ては居りませぬ。宗門のため、よかれと思へばこそ、あくまで籠城を云ひ張る次第で御座りまする。

光佐　然らばそちはこれ程理解を說いても承知いたさぬのぢやな。

敎如　宗門のためには、致方が御座りませぬ。

光佐　（勃然として）默れ、敎如。父が苦心も察せず、あくまで我意を云ひ募る不孝者奴。

敎如　諸佛如來も照覽あれ。某は決して我意を云ひ募る次第では御座らぬ。僞多き信長に欺かるゝを恐るればこそ申すので御座る。（敎如一味の者どもは自然と敎如に寄りそふ）

光佐　然らばそちはあくまで籠城をいたせ。違勅の咎をかうむつて、亂臣賊子と末世まで唄はるゝだけぢや。

覺淳　（見かねて）敎如殿。御父子の間で何事で御座る。靜かにお話なされても分るでは御座らぬか。

光佐　捨ておけ、顯證寺。苟くも門跡たるわが心に反く奴は、御開山の御同朋とは申されぬ。未來かけて勘當いたす。

敎如　（立上る）何、御勘當と仰せられまするか。

（一座混亂。）

（一方光佐に味方するものは、光佐を取圍んで立つ。）

光佐　（靜かに立上る）不孝者奴。もはや父でもない。子とも思はぬ。立ち去れ。

敎如　（呼吸を呑んで）致方が御座らぬ。たとへ御勘當を受けても信ずる處は曲げられませぬ。

證誓　（殺氣を含んで）新門の仰せ、理に於て缺くる處なしと信じ申すによつて、われ等一同何處までもおとも致す。

實悟　（進み出る。大音に）おのれ。その言草は何事ぢや。門跡に對し奉つて申し上ぐる言か。不所存者奴、退り居らう。

證誓　たとへ顧得寺殿の御叱りうけても、こればかりは曲

げられませぬ。

實悟　その我慢を捨てぃと申すのぢや。うろたへ者奴が。わづかの事に眼色をかへて騒ぎまはる見苦しさを恥ぢぬか。（證誓不承不承に口をつぐむ）

（小姓蘭菊丸が現はれる。）

蘭菊丸　申上げまする。大阪町人の宿老たちが、お召によつて參りました。

實悟　おゝ、丁度、よい處ぢや。すぐこれへつれて參れ。

蘭菊丸　かしこまりました。（退場）

實悟　顯如殿も、新門もお聞なされい。はからずもよい思案が浮び申した。はゝゝ、まづこの難儀な時に、角目だつて父子爭ひをせずともの事ぢや。二人ともお坐りなされい。（間。二人が坐つたのを見て）そこでその思案ぢや。俺の思案と申すは他でも御座らぬ。凡て法師たる者は、天下萬民の幸を祈るが第一で御座る。決してわが身の利慾を先にいたしてはならぬ。わけてもわが淨土眞宗の宗門は、宗祖以來、諸國の賤しい百姓や町人たちの間に彌陀の悲願を傳へて參つたのぢや。そこで、當地退轉の議については、俺は、まづ、大阪の町人たちの心をきいて、然る後に何れとも定むるが、一番ぢやと思ひまする。幸ひ、只今、これへ大阪の庄屋どもが參る故、早速ながら、きいて見ようでは御座らぬか。

光佐　成程、これはよい思付ぢや。

賴廉　さすがは顯得寺様で御座る。天晴の御名案憚りながら、刑部は感服仕りまして御座りまする。

覺淳　當時石山第一の學僧と云はるゝだけに、お年は召されても、智惠は曇らぬ——愚僧は顯得寺殿の御思案に同意で御座る。

實悟　老ぼれの世迷言をようこそ聞屆け下された。お禮申す。さて、顯如殿、かやうに事がきまつた上はもはや、お父子の間に隔意は毛頭御座るまいのう。

光佐　われらに於ては勿論隔意は御座らぬ。

實悟　敎如殿とても同じ御心で御座らうのう。

敎如　父上の御心さへ解けますれば、某に置きましても至極大慶で御座りまする。

實悟　（一同を見廻して）各々方にも、お父子のお言について異存は御座るまいと存ずる。

（一同頭を低げる。）

（蘭菊丸に導かれて、大阪町人の宿老三人入り來る。）

蘭菊丸　町人の宿老を召つれまして御座りまする。

宿老一　（末座に平伏して）お召によりまして、大阪島の内の庄屋、紅屋勘兵衞、同じく玉造の庄屋、村田屋庄八、同じく野田の庄屋、伊勢屋宗堪參上いたしまして御座りまする。（宿老二三も平伏する）

實悟　下間少進。
仲之　はつ。
實悟　町人どもは、もはや、此度の和議について承知いたして居るであらうのう。
仲之　はつ、昨日、御評定が終りまするると、すぐさま、仔細を申し傳へさせて置きましたゆゑ、一同とくと、相談の上、伺候いたしました事と存じまする。（宿老たちに）どうぢや。
宿老一　仰せのとほり、下間様よりお達しが御座りましたから、今朝、町の主だちました者どもと、談合の上、參りまして御座りまする。（平伏）
仲之　然らば訊ぬるが、この度織田右大臣家と當寺との和議について、町人中の意嚮はどうぢや。
宿老二　村田屋庄八より御答へいたしまする。當本願寺様と右大臣家との確執は、もはや九年に相成りまする。その間の百姓町人の難儀は、たゞ、御推察を願ふばかりで御座りまする。御和睦の儀が相調ひますれば、一同の喜、これに越すものは御座りませぬ。（平伏）
仲之　然らば當寺退轉の儀はどうぢや。
實悟　其方たち、遠慮はいらぬ。包まず心底を申せよ。
宿老三　有難い仰せ、恐入りまして御座りまする。その儀につきましては、伊勢屋宗堪よりお答へいたしまする。

私ども始め大阪の百姓町人は、大方門徒衆で御座ります。したがつて、當山の御退轉を好む者は一人も御座りませぬ。併しながら、只今村田屋より申し上げました通り、百姓町人の難儀の有樣をつくづく見まするると、私共、庄屋を相務めまする者どもは何とぞして泰平の世の中に致し彼等の苦を救うてやりたいと、かやうに思はずには居られませぬ。身の程を知らぬ奴と思召さるゝかは存じませぬが、眞實さやうに考へまするので、申上ぐる次第で御座りまする。
實悟　然らば當寺の退轉を望むのぢやな。
宿老三　（平伏）上人様の深き御憐みを持ちまして、私どもの胸中御察しを願ひ上げまする。
實悟　よろしい。よく申した。もはや御用は相濟んだぞ。
三人　はつ。有難う存じまする。（平伏）
仲之　其方どもは引取つてもよろしい
（三人はまた一禮して蘭菊丸に導かれ退場する。）
光佐　やはり推量いたしたとほりぢや。
（教如が何か云はうとする。）
實悟　まづ御聞きなされい。やうやう、俺の思案が定まり申した。教如殿の云はるゝとほり、織田信長は心の知れぬ男ぢや。一旦和を結んで、當寺の油斷を見すまし、何のやうな事をたくらむかも知れませぬ。そこで、當方で

も何喰はぬ顔で和議を取結び、門跡はこの石山を去らるるのぢや。新門は後に殘つて、織田の方へは引渡しの支度中と云ひ送り、なるべく時を伸ばす工面をさるゝのぢや。ははは……信長に、もし、たくみがあれば、必ずその內に知れまする。なければ重疊、新門も引取らるゝがよい。どうぢやな、教如殿。その邊で折合はれたがよくは御座るまいかのう。

教如　至極の御思案と存ずる。然らば、父上御退去の後、某はこの開山の御眞影のお伴をいたして當寺に居殘り、安土の樣子を油斷なく探らせて置くで御座らう。

實悟　やれ、やれ、ようこそお聞き下された。これで俺も安心いたした。はははゝゝゝ。

――幕――

第一幕

第一場

石山本願寺城門の內。正面の大きな門から遠く淀川より大阪の人家平野がみえる。

右も左も小高く築上げた城壁の土手になりゐる。その上に矢倉がある。

「南無不可思議光如來」と大書した絹の白旗や、幢旛の形の大旗など、城壁に立てつられてある。

城門の樓上には大幅の額を掛け「進足者往生極樂。退足者墮落無間地獄」の十六字の大字を書いてある。

陽春四月初めの午後の事である。門徒兵、法師武者などが、大勢坐つて鐵砲を掃除したり、刀鎗を磨いたりしてゐる。長閑な日射がその邊を照らして、雲雀の囀りがきこえる。

法師武者一　(鐵砲掃除の手をとめて) やれやれ、疲れたわ。玄雲坊。

法師武者二　何ぢや。

法師武者一　いよいよ春ぢやな。城外から雲雀の聲がきこえて來るぞよ。

法師武者二　かやうに日ましに暖かうなつて、花が咲き雲雀がなくと、嚴しう逆茂木を打つた城內にゐるのはつくづく厭になるのう。

法師武者一　久振りに京へでも行つて、花見酒が飲みたうなつたわ。

法師武者三　櫻ももう見頃ぢや。若い女の酌で醉うて見たいものぢやな。

法師武者二　(鐵砲を掃除しながら) やれ、やれ、この銹はどうぢや。こすつても〳〵落ちる段ではないわ。

法師武者四　銹びる筈ぢや、久しう使はぬからのう。

法師武者二　それに春先は濕氣が强い故、錆が來やすいのぢや。
法師武者一　鐵砲掃除ももう倦々したのう。（少し離れて鎗を磨いてゐる門徒一を見て）これこれ、雜賀の作右衞門殿。お身の鎗はどうぢや。まるで赤鰯ぢや、鐵の膚は少しも見えぬでは御座らぬか。
門徒一　去年の暮に花隈の戰に騎馬武者を突落したまゝ、一度も磨かぬためで御座る。自體人の脂は鐵には大毒ぢや。
門徒二　作右衞門。よう磨いて置かぬと、また組頭にやかましう云はるゝぞ。
門徒一　いや、大事ない。いよいよ和議ときまれば、武器の類は悉皆織田殿へ差出さねばならぬ。切味はどうあらうと、たゞ點數がそろうてさへ居ればよろしいと組頭は云うて居られたわ。
門徒三　してみると、今度の和議は本物かな。
門徒一　先日勅使の見えたときに、上人樣は起請文と一緒に和議の受書をお出しなされたと云ふ話ぢや。（法師武者に向つて）さうで御座つたのう。御坊。
法師武者一　さうぢや。下間三家の人々が血判した起請文ぢや。
門徒三　今度こそ、さすがに、新門樣も、我慢の角を見事折られておしまひなされたと見ゆるな。
法師武者二　新門樣いかに軍好にわたらせらるゝとて、この上籠城は云張られまい。昨日焔硝藏へ行つてみて、愚僧は心細う思うた。玉藥の箱が、もういくつも御座らぬ。
（この群から離れて、無言のまゝ、一心に鎧の胴をつくらうてゐた三人の法師は顏を上げて、憎々しげにこの群を見つめる。叡山からのがれてきた法師たちである。服裝が他の者とは違つてゐる。）
門徒二　（それに氣付かぬ樣子で）玉藥だけでは御座らぬ。何にもかも手薄ぢや。これは聲高には云はれぬが俺の從兄が兵糧方に入つて居るのできいたのぢや。米も麥ももう殘少ない有樣ぢやとのう。
門徒三　何ぼ戰がないとて、近頃のやうに飯米を減らされては叶はぬわ。
法師武者一　毛利の手から、二萬石の兵糧を入れてから、もう四年にもならう。その上、このわたりの田は、何時も拔目なく織田方で刈つてしまふのぢや。今まで喰ひのばしたが不思議な位ぢや。
法師武者四　二度目の毛利の兵糧船が、船戰に勝つて入つて居れば、まだ續く筈であつたのに――殘念ぢやのう。
法師武者三　兵糧の話をしたら腹が空つてきた。（欠伸をする）

門徒一　何せ此頃は敵も味方もたゞ砦を固めてゐるだけで、合戰どころか、小ぜり合もせぬから、分捕物が大不景氣ぢや、これには全く氣が滅入るわ。

法師武者二　昨年の春はよい春であつたのう。例の荒木村重が織田に叛いたので、よい機ぢやとばかり、刑部殿の手について、天下茶屋の砦を夜討したのぢや。愚僧のこの太刀はその機の分捕ぢや。

門徒一　（太刀を羨ましげにみる）これは大將分の佩く太刀ぢや。

法師武者二　いや、太刀ばかりでない。不意を打たれて敵が總崩れになつた後ぢや。砦の内には、あるわ。あるわ。刀劍、物の具の類は勿論、酒樽が十もずらりと並んでゐる——得たりかしこしぢや。鏡をぬいて我勝ちに飲つたわ。

門徒一　われらは丁度運惡く、あの頃は、福島の出城の守備に行つて居つたわ。御身は仕合せ者ぢやのう。

法師武者三　愚僧はあの機には飛龍と言ふ銘を黄金で象眼した種ケ島の短筒を分捕つて參つた。

門徒一　それはまた、いかい儲ぢや。して、その短筒はどうなされた。

法師武者三　それがのう。我々雜兵の持つ物でないと言ふので、加賀の黑丸の光玄坊に取上げられたのぢや。

法師武者四　これ、僞を言ふまい。光玄坊は北國大一揆の大將株ぢや。今でこそ、落人となつて、この城に來てゐらるゝが、御身の分捕物をたゞで取上るやうな人ではないわ。

法師武者三　（躍氣となる）いや、本統ぢや、愚僧決して僞は申さぬ。

法師武者二　（笑ふ）頑石坊。御身は、もう忘れたのぢやな。

法師武者三　何を愚僧が忘れたと言はるゝ。

法師武者二　あの短筒を御身は光玄坊に砂金一兩で賣りわたしたではないか。（法師武者三が何か言はうとするのを押へて）その晩、御身は賭事に負けて、折角の一兩をはたいてしまうたのぢや。はゝはゝゝ。（皆笑ふ）

法師武者三　（立上る。血相をかへて）おのれはこの頑石に恥辱をあたふるのぢやな。

法師武者二　何、恥辱ぢや。はゝゝゝ、片腹痛い言草ぢや。

法師武者三　伊勢の長島で願證寺塔中の惡僧と唄はれた愚僧の手並をみたいのぢやな。（打ちかゝる）

法師武者二　えゝ、その高慢の鼻を打ち折つてくれうぞ。

（挌鬪）

（皆は面白がつてみてる。矢倉から、長島願證寺同宿善堯が降りてくる。）

善堯　（大音に）また喧嘩いたす。喧嘩口論は堅く禁制と大將より御布令があつたにもかゝはらず、そちたちは此頃、よるとさはると、すぐ喧嘩ぢや、さほど、喧嘩がしたくば、愚僧に向つて來るがよい、誰彼の容赦はない。つかみひしいでくれるぞ。（兩人の法師はこの言葉の間に掐鬪をやめる）

法師武者三　（間を置いて）いや、御布令に反くつもりは御座らぬが、きゝ捨て難き雜言を吐きますゆゑ……

善堯　えゝ、默らぬか、自體四五日來、軍兵どもの風儀が眼に見えて亂れて參つた――まだ、和議は、しかと定まつた次第でもないのに、すぐ氣がゆるむやうでは、末代までの笑はれ者ぢや。以後、かやうなことが眼についたら、すぐさま、斬つて捨てる――きつと申しわたしたぞ。（間。一同をねめ廻して）武器の掃除は、もう仕上げたか。

法師武者一　仕上げまして御座ります。

善堯　仕上げた上は何故早く矢倉へ納めぬ。

法師武者一　はつ。（一同は立上つて、武器を運びかける。）

善堯　武器を納めてしまつたら、すぐ、祖師堂の前に集まれ。（立去る）

門徒二　また、祖師堂の掃除ぢや。（鎗を數本かついで、矢倉へ行く）

門徒三　善堯奴ときたら、一時も樂をさせぬ。（太刀を取集める）

法師武者一　長島でもあやつの組下は泣かせられたわ。（鐵砲を擔いで矢倉へ入る）

法師武者二　まだ和議はしかと定まつた事でもないと言ひくさる――新門黨の奴らは、殺生が道樂ぢや。

（かう云ひながら一同武器を矢倉へ納め、退場。）

（鎧の胴をつくろつてゐた法師たちは、凝乎つと彼等の後姿を見送る。）

法師一　どうぢや。良譚、本門びいきの奴らは、臆病者の揃ひぢや。和議の噂をきいて、犬のやうに尾を振つて喜ぶ有樣は見苦しいのう。

法師二　脫柵して女遊びはする。賭事はする。その隙には、喧嘩沙汰ぢや。軍律も何もあつたものではない。

法師一　折角張りつめてゐた心が弛んだのぢや。あれでは、まるで烏合の百姓一揆ぢや。われらが見捨てゝきた叡山の墮落もひどかつたが、此處とても此頃ではあまり變りはないのう。

法師三　何故門徒が開山の御眞影を守つて、この石山に籠城いたしたか、それすら、もはや忘れはてゝ、たゞ現在の安樂を願ふ淺間しい奴等ぢや。

法師一　さうぢや。慈悲忍辱の宗門すら、兵杖を以て守護

せねばならぬ。これは大いなる矛盾に違ひない。慘ましい矛盾ぢや。

法師三　併し、その矛盾の內に、われらは如來の御心を感ずる――所詮、新門殿の御思召どほり、あくまで法敵と戰ふのが本望ぢや。

法師一　われらもさう思ふ。この矛盾の內から、何者かを生みだすのが、人間の務めぢや。

法師三　たとへ改宗はしても、叡山を信長に討たれた時のあの恨は忘れられぬ。（立上る。城門の額を仰ぐ）足を進むる者は極樂に往生し、足を退くる者は無間地獄に墮落せんぢや。――この言によつて血を流した者の數は、計り知ることが出來ぬ。

法師二　や、城門の外から、下間刑部殿が、歸つて來らるる。

法師一　いや、下間殿ばかりではないわ。鈴木孫一、矢木駿河守の姿も見ゆる。

法師三　一番後から來るのが平井越後のやうぢや。何れも本門びいきの御歷々ぢや。

法師一　本門黨の人々とは、面を見合せても蟲唾が走る――もはや鎧の修繕もやめぢや。（鎧を擔いで矢倉へ退場）

（他の二人も退場。）

（やがて、下間刑部卿法橋賴廉、鈴木孫一、矢木駿河、平井越後の四人が、城門で下馬して入つてくる。）

賴廉　久振でよい遠乘をいたした。（馬丁に向つて）馬はもう要らぬ。休ませい。（馬丁は四頭の馬を曳いて退場）さて、各々方、門跡樣御退轉の支度もこれであらかた備うた次第ぢや。御出門は九日昧爽と內定いたして居る。さやう心得られい。

平井越後　承知仕る。然らば、この堺口の御門より御發足に御座るな。

賴廉　如何にも――そこで、御路筋は、この御門より只今檢分いたせし路を住吉、堺にお取りなされて、貝塚の願泉寺に御一泊。翌日鷺の森へ御到着の順序で御座る。

鈴木孫一　路次の警護、御行列の順序はいかやうに相成りまする。

賴廉　そこぢや。今朝未明に、かの間者の大學が京より戾つて參つて、織田殿、この度の御路筋にて、內々門跡樣を失ひ奉り、長へにわが宗門を滅さんとの御たくらみありと申す。時節柄、決して油斷はなり申さぬ。

矢木駿河　いかさま、右大臣殿の事ゆゑ、さやうのたくらみもないとは云はれませぬ。兎角要心いたさねばなりますまい。

賴廉　そこで、常樂寺樣、下間少進法橋などゝ、昨夜額をあつめて考慮を重ねし上、大體かやうに決定致した。まづ、

ゑ、心配は御座らぬ。また、住吉の邊までは堺町の御門徒が警護いたすで御座らう。卽ち御宿に當る貝塚岸和田あたりが一番心配で御座る。そこで當地御發足を未明の頃と相定めたのぢや。さやういたせば遲くとも、日の蔭らぬ内に願泉寺に御着になるで御座らう。

平井越後　成程、して、御行列の順序は。

賴廉　まづ、先發はあのあたりの地理をよく心得た者でなくてはならぬ。根來の小密茶坊に賴まうと存ずる。その次が某、つゞいて門跡樣御籠側は下間三位と七里三河等に堅めて貰ふのぢや。下つて、少進仲之、願得寺殿、その他御堂、衆御一門の坊主衆、殿軍を矢木殿、平井殿に御願申す。

鈴木孫一　某は御行列に洩れまするので御座るか。

賴廉　いや、貴殿には大役が御座る。是非御願いたさねばならぬのぢや。

鈴木孫一　いかなる御役で御座るか。

賴廉　まことは今夕、常樂寺殿お一人御先發として紀州へお下りで御座る。御苦勞ながら、貴殿には、その御警護を御承引願はねばならぬ。

鈴木孫一　（不平の顏色）某は常樂寺殿を……

賴廉　成程、御不審も御座らうが、これには深い仔細が御座る。常樂寺御先發の列中に、北の方腰元衆おさめ殿がまゐるのぢや。そのおさめ殿の守護がどうしても餘人には任されぬ。

鈴木孫一　これはまた不思議なお言葉を承はる。何故某でなうてはなりませぬか。

賴廉　孫一殿。この儀是非とも御承知下されい。本門黨一同になりかはり、某、折入つて御願ひいたす。その仔細は別儀で御座らぬ。（四方を見廻し）まことは、腰元、おさめ殿のかはりに、かの「開山の御眞影」を女輿に乘せ參らせ、ひそかに紀州へお伴いたすので御座る。（皆驚く）いや、これはまだ門跡樣にも御承知なき秘中の秘で御座るぞ。

鈴木孫一　驚き入つたる仰せを承る。かの「御眞影」は先夜の大評定の折、新門樣仰出されて、當石山表に御殘りと定まり居りしやうに存じ申す。

賴廉　あれが某一期の失策で御座る。まことは新門樣如才なく仰出さるゝ前に、某より「御眞影」の儀は是非とも門跡樣お伴遊ばされて、紀州へ御移りあるやう申上ぐべきで御座つた。かの「御眞影」は忝なくも宗祖親鸞上人の御荼毘の灰を漆にまぜて塗り奉りし眞宗根本の御眞影で御座る。これなくば、石山九年の籠城も、あるひは覺束なかつたかもしれぬ。また合戰の間にも、さまざまの

奇瑞を現はされたる事は、各々方もよく御承知で御座らう。卽ち、もし、これが新門樣御手に移らば門跡樣はあれども無きが如く、眞宗の法燈はひとへに新門樣御手に輝く事となり申さう。いかに、各々方。それで御得心が參るかな。

平井越後　申すまでも御座らぬ、某は大不得心で御座る。

矢木駿河　成程、只今承つて、驚き入る。危ふい事で御座つたのう。

鈴木孫一　某もあの折、新門樣が、最後に誰も氣付かぬやうに「御眞影」の事を仰せられたのを、いぶかしう存じては居りましたが、さほどの謀とは心付きも致さず、ただ聞き流して居りましたが……

賴廉　つまり新門樣に一パイ喰はされたのぢや。はは……そこで、北の御方と示し合せて、今朝門跡樣お勤めの後、常樂寺殿がひそかに御眞影を抱出しまゐらせ、只今は北の御方の御居間に安置してあるのぢや、貴殿に御願ひいたすのは、そのためぢや。

鈴木孫一　(喜色を浮べて)成程。これは大役で御座る。

賴廉　然らば御承知下さるか。

鈴木孫一　承知仕る段では御座らぬ。が併し、門跡樣御承知なくとも、後で御叱りは御座るまいな。

賴廉　その儀は御氣づかひには及ばぬ。旣に北の御方も御承知で御座れば、後々の事は某が取計らうで御座らう。

平井越後　北の御方が、あのやうに新門樣を憎ませらるゝは何とも合點が行きませぬ。

賴廉　それには深い仔細が御座る――この度の御父子の御不和も、源は北の御方ぢや。おゝ、あれに新門樣御出ましぢや。我々が寄合うてゐる處を見付けられては、面白う御座らぬ。參るといたさう。

(四人退場。)

(敎如きらびやかに鎧うて、證誓、賴龍、粟津源六、黑丸の光玄坊、善堯、その他の武士、法師を引つれて出て來る。)

敎如　源六。

粟津源六　はつ。

敎如　これで矢倉、矢倉を皆廻つた譯ぢやな。

粟津源六　さやうで御座りまする。この堺口の御門が最後で御座りまする。

敎如　此處は善堯、たしかその方の持場であつたな。

善堯　さやうで御座りまする。長屋の一揆の者どもと、叡山の殘黨が守備いたして居りまする。

敎如　士卒の樣子は何うぢや。

善堯　やはり和議を喜ぶ本門樣びいきと、新門樣思召に從ふ者と二派に分れて居りまする。

敎如　志氣はどうぢやな。

善堯　和議の噂がきこえて參りまして以來、殘念ながら、志氣は弛んで居りまする。

敎如　ふむ。誰の持場も同じやうぢや。して、士卒は殘らず此處に居るか。

善堯　廿人程、祖師堂の廣場の掃除に行つて居りまする。それから木津の砦に交代に參りましたので、只今は三十人程殘つて居りまする。

敎如　その者をこれへ呼出せ。

善堯　かしこまりました。（矢倉へ上る）

敎如　（證誓をかへりみて）諸處の砦と城内の士卒をあはせて、われらに忠節の者がまづ八千ぢやな。

證誓　いや、一萬は間違ひなく當寺へ殘るで御座りませう。毛利家よりつかはされました者どもも一味いたしまする筈で御座りまする。

敎如　あれが二千は居らう。なるべく内輪に見つもらねばならぬからな。

（善堯が先に立つて士卒をつれて出てくる。）

善堯　一同召しつれて御座りまする。

それへ並ばせい。

善堯　はつ。（士卒に向つて）一同それへ出い。新門様直直の仰せがあるぞ。

（士卒はそこへ並ぶ。一同頭を低げる。）

敎如　（進出て）さて、近頃はとんと合戰がないので、そちたちにも久しう合はぬ。さりながら、何時もかはらず、當流宗門のために粉骨碎身するそちたちの志は、新門、心の中で有難う思うて居る。祖師聖人様も定めし極樂淨土で、そちたちの出精をうれしう御覽ぜらるゝであらう。（一同合掌）そこで、今日、この新門が矢倉々々の持場をまはつてそちたちに言をかはす仔細は他ではない。薄々はもはや承知の事と存ずるが、此度、法敵、織田信長が、この石山を攻めあぐんで、卑怯にも、當今の帝の袞龍の御袖にすがり、和議を申入れて參つたのぢや。御父門跡に於かせられては、ひとへに違勅の罪を恐れて、この石山を退轉遊ばさるゝ御決心である。然るに、この新門は何としても信長の心を信ずる事が出來ぬ。また、蓮如上人以來の靈場たる當石山の城を、空しく法敵の蹂躙にまかするは、前後九年の大法難に血を流したる門徒衆の屍に向つても相濟まぬ儀ぢや。（士卒の間に感激の聲がきこえる）即ちこの敎如は、深く慮かる處あつて、この石山を退かぬ決心の臍をかためた。たとへ信長大兵を以つて攻めて參るとも、我に如來の加護あれば、決して恐るゝには足らぬ。はては敎如一人になつて、空しく骨を城門にさらすとも、宗門の爲にはさらに厭ふ所

ではない。然るに幸にも門徒の爲めに度々奇瑞を現はし給うた眞宗根本の開山の御眞影が、われらと共にこの石山に御殘りになる事になつた。有難い事ではないか。（一同唱名）然しながらそちたち門徒衆も、もはや九年の惡戰に疲れはてゝ居る。或は家里に歸りたいと思ふ者があるかも知れぬ。それも無理ではない。もし、さやうの心があるならば、遠慮はいらぬ。早速申出づるがよい。すぐさま望どほりにいたしつかはす。（一同を見廻す。門徒たちの顏には、複雜な表情が現はれる）また、あくまで敎如と生死を共にし、御眞影を守護して法敵と戰はうと思ふ者あらば、たゞちに申出でい。未來かけて我らの友ぢや。

（鎧の胴をつくろうてゐた三人の叡山法師が列中から驅出る。）

法師一　御願で御座りまする。何時までも新門樣の御側にあつて、開山の御眞影に仕へたう御座りまする。

法師二　生死をかけて御願ひいたしまする。

法師三　どうぞ、御聞屆けを願ひまする。

（三人平伏。）

（士卒の列中に動搖が起こる。）

敎如　三人の法師、顏を上げえ。そちたちの願、敎如忝なう思うぞ。

三人（感激）有難う存じまする。

敎如（法師一を凝乎と見て）おゝそちは先年、野田福島の戰の折、わが馬廻りをつとめて甲斐々々しう働いた法師ぢやな。（法師二に）そちもよう見覺えて居る。（法師三に）そちはあの機我らの馬の腹帶をしめなほしてくれたのう。

三人（涙を流して）新門樣がわれ〳〵をよう見覺えぢや

生きてこの城は出られぬわ。（士卒の列中に高い感動の聲が起こる）

一同　御願で御座りまする。何時までも御傍に置いて下さりませ。（くり返しくり返し叫ぶ。列が亂れて熱狂した士卒は、次第に敎如の身に迫るやうに寄せてくる）

第二場

本願寺奥殿の北の方の居間、同じ日の夜、部屋の內、右手には几帳が置かれてある。正面、床の間、違棚、絢爛をきはめた花鳥極彩色の襖にて仕切る、廣い緣には勾欄がついてゐる。すべて寺院建築と寢殿造りとの混合した樣式である。前は美しい庭園、今を盛りの櫻が、軒近く咲亂れてゐる。

短檠の灯を前にして、妖艷な門跡の北の方が「骨肉の御影像」の御襟卷を直してゐる。腰元のおさめが出て

くる。

おさめ　北の方様に申上げまする。

北の方　何ぢや。

おさめ　只今、常樂寺様が刑部様と御一緒に内々お眼もじ致したいと仰せられて、あれにお待ちで御座ります。

北の方　おゝ、お早いお出ぢや。此れへ御案内しや。

おさめ　かしこまりました。（退場）

（北の方は亂れ箱に疊んであつた白のさめるやうな打掛を取り出して、御影像に着せる。）

おさめ（常樂寺に下間賴廉を案内してくる）常樂寺様刑部様御越で御座ります。（退場）

超乘（旅裝束で）いよ〳〵發足の刻限が參つた。お暇乞かた〴〵先刻、御打合せいたせしとほり「御眞影」を頂戴に參つて御座る。

北の方　先刻より御待申して居りました。超乘さま。勿體ない事ながらかやうに致して置きますれば、何人も氣付きは致しますまい。

超乘　成程、これならば、堺口の御門でも怪しむ氣づかひは御座らぬ。

賴廉　女儀の御智慧はさすがにこまかく行渡りまする。

超乘　先刻、新門殿に御暇乞のため、北の御所に參りしに、今宵は士卒の風儀検分のため、新門殿、御身をやつされて、城内を御巡りある由に御座る。見咎められては、一期の大事ぢや。

北の方　新門が城内を見廻られまするか。

賴廉　北の御所では、もつぱら、その御仕度中で御座りまする。

北の方　刑部。まだ、新門は何事も存じては居らぬのであらうな。

賴廉　いや御氣づかひあらせられまするな。斷じて御承知では御座りませぬ。

北の方　心の鋭どい新門の事ゆゑ、少しでも怪しう思はれたら、事の破れになりませうぞ。

超乘　今朝、愚僧と刑部と二人して、ひそかに祖師堂より「御眞影」を取出し參らせしを見た者は、誰一人御座らぬ。

北の方　なほ、この上とも用心が肝要かと思はれまする。門跡さまに御暇乞はなされましたか。

超乘　只今これへ參る前に御眼どほりいたして御座る。

北の方　開山の「御眞影」について、何かお話が御座りましたか。

超乘　たゞ、愚僧はそれとなく、宗門の魂たる「御眞影」をまだ本門跡もつがせられぬ新門殿にお渡しあるは、將來のため面白う御座るまいと、かやうに申しました。

頼康　門跡様も御心中では深く御後悔の御様子と拜し參らせまして御座りまする。

超乘　いや、愚僧は御父子の情愛に兎角おなづみなさるゝ御様子と御見受け申した。

北の方　何と御意遊ばされたのぢや。

頼康　勘當いたさせし者ならば、とも角、願得寺のあつかひによつて、折角折合うた上は、既に新門跡をゆるした致如ぢや。「御眞影」をゆづゝても大事あるまいとの御意で御座りました。

北の方　それならば、安心ぢや。刑部の推察しやるとほりぢや。

超乘　愚僧はあの仰せは、眞實の御心底より出でしものと思案いたす。

北の方　なるほど、新門をいとしう思召す御心は、人一倍深くわたらせらるゝが、この度の儀は、ひそかに口惜しう思召しておいでぢや。

超乘　その仔細が承はりたう御座る。

北の方　かりにも思召に添はぬ事ある時は、決して本心を明かされぬ御氣象ぢや。さやうの時には、鋭どく機を見てお出でなされまする。

頼康　この上は、門跡様に、この度のはからひを申上ぐるのが一役で御座る。某が心を惱ましまするは、たゞ、それだけで御座りまする。

北の方　自體これは常樂寺殿にお願ひするが一番よいと我身は思ひまするが、生憎今宵御發足ぢや。（頼康に）そちが惡者にならねばなるまい。

頼康　また肝にこたゆるお叱りを受くるので御座りまするなあ。

超乘　おゝ、もはや出立の時刻で御座る。鈴木孫一が待兼ねて居るで御座らう。

北の方　「御眞影」の御輿は參りましたか。

頼康　御庭の木戸口に參つて居りまする。某が參つてこれへ召つれませう。（立上る）

（頼康は庭先に下りて左の方へ去る。）

北の方　「御眞影」の事は、なほ、我身よりも門跡さまへ申上げて置きまする、

超乘　その邊はよろしく御願ひいたす。

（頼康に導かれて、鈴木孫一が、二人の士卒に女輿を擔がせて現はれる。孫一は北の方その他の人々に禮する。）

頼康　（士卒に）その方どもは、只今戸口へ參つて某が呼ぶまで待つて居れ。

士卒二人　はつ。（退場）

頼康　（その後を見送つて）憚りながら、「御眞影」をこれ

へ願ひまする。

超乘　承知いたしました。（御眞影を椽に運ぶ）

賴廉　恐入りまする。（御眞影を受取つて、輿に乘せる）鈴木氏。只今の者どもをお呼び下され。

鈴木孫一　承知いたした。（退場）

賴廉　（簾を下ろす）常樂寺樣、この御輿は表御玄關に廻して置きまする。

超乘　然らば、北の方。これで御別れいたす。

北の方　我身も、この九日には當城を發足いたしまする。また、鷺の森で眼もじいたしまする。

超乘　お待ち申す。なるべく早く御出でなされ。御免かうむる。（退場）

（鈴木孫一が士卒をつれて出てくる。）

賴廉　これを擔いで參れ。

士卒二人　はつ。

北の方　孫一。大儀ぢやのう。

鈴木孫一　恐入りまする。

賴廉　鈴木氏。道中の儀は、かねて、御願申せしとほり、よろしく御賴みいたす。

鈴木孫一　承知いたしました。然らば、御免下され。

賴廉　御玄關にて、常樂寺殿のお出をお待ち下され。

鈴木孫一　よろしう御座る。（退場。士卒も輿を擔いで孫一の後より退場。）

賴廉　（見送つて椽に上る）心がかりで御座りまするゆゑ、塀口の御門まで、某御見送りいたして參りまする。

北の方　さうしてたもれば、我身も安心ぢや。

賴廉　御免かうむりまする。（退場）

北の方　（呼鈴の綱を曳く）

（おさめが現はれる。）

北の方　御開山さまの御身代りとはそちは果報者ぢやのう。

おさめ　恐入りまする。もはや御出かけに相成りまして御座りまするか。

北の方　只今。やう〳〵御出かけ遊ばした。大學はもう參つたであらう。

おさめ　はつ。先刻よりあちらへ控へて居られまする。

北の方　ひそかにこれへ呼んでたもれ。

おさめ　かしこまりました。（退場）

（やがて、蒼面雙眼の異樣な男が現はれる）

大學　お召で御座るか。

北の方　おゝ、大學。夜陰の出仕大儀ぢやのう。

大學　（さげすむやうに微笑する）北の御方の御召は、かへつて樂しみで御座る。

北の方　そなたに內々賴みたい事がある。まそつと、近

う。
大學　御免下され。（近くにじりよる）
北の方　（凝乎つと大學を見つめる）大學。そなたは、やはり我身へまことをつくしてくるゝであらうのう。
大學　申すまでも御座らぬわ。信玄公御最期以來、武田を見かぎつて浪々の身となり、窮苦をかさねし某を、かうして、養うて下さる上はのう。
北の方　武田家は姉上の嫁いで居らるゝお家ぢや。そのお家に仕へたそなたを、我身が養うて取らせるのが、何の御恩ぢや。ましてそなたは、これまで幾度か、當寺と武田家の御用をつとめた身ぢや。
大學　（皮肉に）仰せ、身にあまりたる名譽で御座る。
北の方　そこでそなたへ頼みぢや。きいてたもるか。
大學　某の身で出來まする事ならば、御辭退はいたし申さぬ。
北の方　只今、常樂寺殿が、門跡さま石山御退轉の先發として、此處を立たれたのぢや。お伴は雜賀の鈴木孫一ぢや。その御先發の一行の內に、恐多くも、祖師堂の「開山の御眞影」を女輿にお乘せ申してある。これは我身の計らひ、深い仔細があるのぢや。
大學　成程。
北の方　常樂寺殿は當家の御連枝、もとより御疑ひいたす譯ではないが、當時の人の心は計られぬ。そちは大儀ながら、これより御一行の跡をつけて鷺の森の道場まで行つてたもらぬか。
大學　常樂寺殿の振舞に眼を離さぬやう致せばよろしいので御座るか。
北の方　さうぢや。怪しい御振舞がなければよし、もし、腑に落ちかぬる事があつた時は、容赦はいらぬ。お命を縮むるのぢや。
大學　（切腹するやうな苦しげな笑方をする）承知いたした。よい御用ぢや。この大學は人の血を見ることが大好きぢや。
北の方　もはや堺口の御門をお出なされた頃ぢや。早う參れ。
大學　然らば御免かうむる。（退場）
（北の方は少時、何事かを考へてゐる。やがて立ち上つて几帳の處へ行き、几帳をかゝげて內に蹲つてゐる蘭菊丸の手を曳いてつれてくる）
北の方　（いたはるやうに微笑して）さぞ待遠であつたであらう。何かと用事が出來て參つて、そなたに窮屈な思をさせたのう。
蘭菊丸　（落着かぬ樣子で）いえ、いえ、さやうな事は御座りませぬ。

北の方　何でそのやうに物怯ぢ致すのぢや。誰一人此處に參る者はない。靜かに落着いて美しい笑顏を見せてたもれ。そなたと、かうしてゐるのが、我身の人しらぬ樂ぢや。

蘭菊丸　今宵は何故か氣が沈んでなりませぬ。

北の方　（手を取つて、凝乎つと顏を見る。蘭菊丸耻かしさうに俯向く）何かそなたは我身に隱してゐる事があるであらう。眼の色が少しも定まらぬ。

蘭菊丸　さやうな事は御座りませぬ。

北の方　（獨言のやうに）何故かしらぬが、我身はそなたがいとしうてならぬのぢや。何事も包みかくさず話してきかせてたもれ。

蘭菊丸　私は何も包みかくしては居りませぬ。たゞ何となく心が鬱いで、この世の相が、冷たく、すさまじく思はるゝので御座りまする。

北の方　熱があるかも知れぬ。此處へきや。（蘭菊丸傍近くにじりよる。北の方。額へ手を當てゝ見る）いや、膚は氷のやうぢや。これ、何が恐ろしうて、そのやうに顫ふのぢや。

蘭菊丸　北の方さま。まことは、私は新門さまが恐ろしうてなりませぬ。

北の方　何と申す。新門が恐ろしい……それはまた俄に何うしたのぢや。我身と、そなたの秘事を知つて居るのが、氣がかりぢやと申すのであらう。

蘭菊丸　はい。この頃の新門さまは、それは恐ろしい眼ざして私を御睨みなされまする。

北の方　その儀ならば、もはや心づかひはいらぬ。九日にはそなたも我身もこの石山を立退くのぢや。

蘭菊丸　先刻、大書院の廊下で、御出合申しましたるときの殺氣を含んだ御眼の色は、思ひ浮べても恐ろしう御座りまする。

北の方　新門はあのとほりのしたゝか者ぢや。決してこの事を口外いたす氣づかひはあるまい。安心しや。

蘭菊丸　はい。私はたゞ北の方さまの御袖に縋つて居りまする。

北の方　（蘭菊丸を抱きしめる）そなたの其心がいとしいのぢや。のう、蘭菊丸。たとへ新門が如何ほどそなたを憎まうとも、少しも恐るゝ事はない。何時も我身が几帳の蔭にかばうてやりまする。

蘭菊丸　北の方さま。お嬉しう存じあげまする。

北の方　新門はこの年の始め頃より、そなたの樣子に眼をつけてゐるのぢや。此處へ忍ぶにも、よう心して氣付かれぬやうにしてたもれ。

蘭菊丸　かしこまりました。

北の方　わが腹を痛めた新門が、あれほど憎う思はるゝに引かへて、そなたがいとしうて耐らぬとは罪深いわが心ぢやのう。
蘭菊丸　何故、そのやうに新門さまに御憎しみをおかけなされますするので御座りまするか。私には不審でなりませぬ。
北の方　それはわが身の生立ちからぢや。そちはまだ知るまい。語つてきかせませう。
蘭菊丸　北の方さまは、細川晴元公の御息女と恐れながら、承はつて居りまする。
北の方　晴元公は我身の養親ぢや。あのやうなお方に養はれたばかりに、肉身の者をも信ぜぬ頑な心になつてしまうたのぢや。
蘭菊丸　それは何故で御座りまする。さやうな名家にお育ちなされたは、私どもには、この上もないお幸福と思はれまする。
北の方　我身のまことの親御は三條公頼と申す殿上人であつた。晴元公が、我身と姉上とを、深い思召から養育てられたのぢや。甲州の武田信玄公の北の方が、我身の姉上ぢや。幼少より他人に育てられて、親の慈しみを知らぬ我身は、やがて、晴元公の御手元から、この本願寺に緣付いて參つてのう。それと云ふのも、晴元公がわが力にせうために、本願寺と親しうなりたいと思ぼしたからぢや。
蘭菊丸　當寺へ御出遊ばしましたのは、北の方さま御幾歲の時で御座りましたか。
北の方　やうやう十三になつた頃の事ぢや。此處とても我身には冷たい住家であつたのぢや。
蘭菊丸　北の方さまの仰せのとほり、他人の內ほど辛らい物は御座りませぬ。
北の方　そなたも宿世がよう似てゐる。互に心が分かる筈ぢや。かやうに育つた者は、世の情け、親子の情愛などは、何としても信ぜられぬ。たゞ、おのれ一人が手賴ぢや。
蘭菊丸　仰せ、一々わが心に思ひ當りまする。
北の方　新門をいとしう思はぬは、そのやうな育ちの頑な心からぢや。まして、近頃、新門がそなたと我身の語らひを、心付いてからは、一しほ、憎うてならぬ。
蘭菊丸　新門さまも新門さまで御座りまする。日頃の御振舞は決して御母君たる北の方さまに御孝心深うわたらせらるゝとは、恐れながら申しかねまする。
北の方　これが前世よりの定まる業と云ふのであらうのう。いや、折角そなたとの逢瀨に、かやうな沈んだ話は無益ぢや。どうぢや。少しは氣が輕うなつたかや。

蘭菊丸　お情深い仰せ、身にしみて嬉しう存上げまする。私はまだ、何うやら氣が欝いでなりませぬ。

北の方　病は心からと申す。待ちや。そなたは、かねて、箏の琴が好きであつたのう。いま、御身が彈いてきかするほどに、機嫌よう笑うて見せてたもれ。（自から立つて、側に立てかけてあつた琴を下ろす）

蘭菊丸　恐れ多う御座ります。私がお手傳ひいたしませう。（ともに立つて琴をよい處に据ゑる）

（短檠の灯影をあびて北の方は琴を彈じ唄ひ出す。蘭菊丸は凝乎つときゝ入つてゐる。）

（長い間を置いて、二人は顔を見合せる。そして美くしい微笑をかはす。）

（おさめが慌たゞしく出てくる。）

おさめ　（聲をはずませて）　北の方さま。門跡さまのお入りで御座りまする。

北の方　（琴をやめて）　何、門跡さまのお入りぢや。（顔色かはる）

おさめ　もはやこれへ御出で御座りまする。

（蘭菊丸は色を失つて、うろ〳〵する。）

北の方　お知らせもなく突然のお入り、何とも不思議ぢや。これ、おさめ。そちは蘭菊丸を伴なうて、庭口からつれて出しや。お出迎は我身が、みづからする程に……

おさめ　かしこまりました。さ、蘭菊丸さま、お出でなされませ。

（恐れをのゝく蘭菊丸の手を取つて庭先に降りる。）

（二人は木立の闇に消える。）

（北の方は二人の行衞を見送つて、立上り、靜かに入口の襖の外へ出る。）

（やがて、北の方は門跡光佐を導いて歸つてくる。腰元が三四人、その後につゞく。）

光佐　いよ〳〵、九日には、この石山を立ちのかねばならぬ。そなたもわれらも、此處は深う馴染んだ土地ぢや。さま〴〵の忙がしい要事に急きたてられて、つい、そなたを訪ぬる事も怠りがちであつた。今宵は珍らしう暇を得たので、久振にそなたの琴でもきゝながら、休息いたすつもりで參つた。

北の方　ようこそお入り遊ばしました。皆の者、酒の仕度しや。

腰元たち　はつ。かしこまりました。（退場）

光佐　此道場に生れて、三十六年の日をくらしたと思へば、何となう去りがたい心地がいたす。そなたとて、十三の年から今まで廿年あまりの住家ぢや。今宵は一つ昔語りを致して、石山の別を惜しまうではないか。

北の方　それは何よりのお思付で御座りまする。私も琴な

ど彈いて、御相手をいたしまする。

(腰元たちが酒肴を運んでくる。)

光佐 (盃を取つて) 鷺の森の片田舍ぢや。何かにつけて不自由であらうぞ。そのかはり、海の眺めはこの上もなくよい處ぢや。古歌に名高い和歌の浦も間近ぢや。打ちつれて、濱邊のそゞろ歩きに、日頃の憂を忘れようぞ。

北の方 和歌の浦輪の名月の眺めは、さこそと只今より樂しみにいたしして居りまする。

光佐 (盃をさす) そなたも一獻傾けてはどうぢや。

北の方 頂戴いたしまする。(盃を受ける)

光佐 (また盃を受けて) 唯今、此處へ參る道すがら、久振にそなたの琴の音をきいた。早速ではあるが、一曲所望いたす。

北の方 つれ〲の手すさびに、只今、箏の琴を取出し、もてあそんで居りました。おはもじながらおきゝに入れませう。(腰元に) 只今の琴をこれへ出しや。

腰元一 かしこまりました。(琴を北の方の前に置く)

(北の方は琴を彈じはじめる。光佐は盃を手にして凝乎つと聞入る。)

(突如として、靜寂を破つて、若い男の悲鳴がきこえる。北の方はハツトしながら、强ひて胸中の動搖を押し隱して、琴を彈きつゞける。つゞいて女の悲鳴。)

光佐 何事ぢや。(耳をすます。列席の腰元たちは怯ぢ恐れて互に顏を見合せてゐる) 誰か見て參れ。容易ならぬ聲音ぢや。

腰元たち はつ。(一同緣に出る)

(緊張した沈默。やがて、敎如が粟津源六と四五人の士卒をつれて出てくる。士卒は蘭菊丸とおさめの死骸を抱いてゐる。)

敎如 夜陰に及んで、奥殿をさわがし奉る狼藉の罪はおゆるしを願ひまする。

光佐 (立上る) 敎如。如何いたした。

敎如 (顏色をかへて、凝乎つと心を押へてゐる北の方の方を尻眼にかけて) 只今、奥庭の垣の外を通りかゝりまするると、怪しい男女の人影が、ひそかに枝折を開いて出まする樣子ゆゑ、引捕へむと致しまするると、忽ち身を飜がへして逃げ出しました。それとばかり追ひかけましたが、勝手を知つたる奴らとて、あちこちに逃げまはり、あはや、見失なふばかりで御座りましたゆゑ、不憫ながら切つて捨てました。(士卒に) 曲者の面を見せい。(二つの死骸を士卒たちは、そこに寢かし、灯を差出す) や、これは驚入る。母上。曲者は、お側近う召使はるゝおさめと蘭菊丸で御座りまする。(凝乎つと北の方を見つめる。)

光佐　（敎如の顏を見つめてゐる）

北の方　（深く憤つて）新門は、また、何用あつてこのあたりをお通りなされたのぢや。

敎如　（冷笑ふやうに）和議の噂が出ますると、士卒どもの志氣が亂れて參りましたゆゑ、ひそかに城内を檢分いたす途中で御座りました。（短かき間）察するところ、この二人は不義をいたし居りました物と見えまする。

光佐　（敎如の語氣と北の方の樣子より何事かを感じる）まこと、二人が不義ならば、かやうな淺ましい眼に會ふも、心柄ぢや。致方がないわ。

（北の方は深い恐怖に襲はれて、光佐の顏をじろりと見たまゝ、眼を伏せる。）

敎如　（凝乎つとおさめの死骸をみる。ふと思出して）母上、おさめは何うして、城内に殘り居るので御座りまするか。

北の方　（憎々しげに敎如を見ろ）おさめは我身の召使ぢや、城内に居ろのは不思議では御座るまい。

敎如　（疑惑に沈む）いや、先刻鷺の森へ御退けの先發として、常樂寺が城内を出まするとき、確かに、母上御召使おさめが女輿に乘つて一緒に參りました筈で御座りまする。

北の方　それは誰か、他の女子であつたのであらう。

敎如　堺口の御門を檢分中、通りかゝりましたゆゑ、念のため取調べましたが、鈴木孫一の口よりしかとさやうに聞きまして御座りまする。（粟津源六をかへりみて）さうであつたな、源六。

源六　いかにも仰せの通り、おさめ殿が北の方御發向の前に、奧向の仕度のため下らるゝとの事で御座りました。

敎如　（何か思ひ當つたやうに）父上。

光佐　（探ぐるやうに）何ぢや。

敎如　念のため承はりまする。「開山の御眞影」は確かに祖師堂に安置して御座りませうな。

光佐　一旦、そちの守護と定まつた物を、何で、われらが手をかけよう。安心いたせ。前のまゝぢや。

（北の方深刻な表情で微笑する。敎如は凝乎つと光佐の顏をみつめる）

――幕――

第二幕

第一場

紀州鷺の森別院。

廣い書院の內部。その年の夏の初めの事である。床の間には、二幅の大幅の南畫がかゝつてゐる。椽の勾欄

をへだてゝ、遠く海が見える。襖には雪中の江山の光景が、墨繪で書いてある。すべてが石山より目立つ程粗末である。幕開くと、興正寺顯尊、下間仲之が勅使、前關白近衛前久、庭田大納言重保、勸修寺中納言晴豐の三卿と織田家の使者、佐久間信盛、宮内卿法印の二人を案内してくる。

勅使ならびに織田家の使者は設けの席につく。

顯尊　（平伏して）勅使の御高來、先刻より御待いたして居りました。父、顯如以下主從の者ども、只今、御眼どほり致しまする。何卒少時御待ちを願上げまする。

（小姓が茶と菓子を運んでくる。）

前久　おゝ顯尊殿ぢやな。少時見ぬ間に大人びて來られた。（庭田、勸修寺の二卿に向つて）門跡に面差がよう似通うて居るでは御座らぬか。

重保　いかにも近衛公の仰せのとほり、よう似て居られまする。

晴豐　この三月、石山にてお會ひ致せし折は、只今のやうにたくましう肥えてはお出でなされぬやうで御座つた。

重保　顯尊殿。お年はおいくつぢや。

顯尊　十五歳に罷りなりまする。

（江山白雪の襖が開いて、光佐、北の方、一門連枝の坊主達、下間賴廉などが現はれる。）

（光佐以下の人々は、皆、靜かに設けの席につく。平伏。）

光佐　遠路の勅使、御苦勞に存上げまする。

前久　門跡には、久しう御眼にかゝらぬ。見參らすところ、顏色なども、却つて以前よりつや／＼しくなられたやうぢや。御壯健と見ゆるな。

光佐　恐入りまする。近衛公はじめ、重保卿、晴豐卿にも、美はしき御尊顏を拜し奉りて、祝着至極に存じまする。

重保　御房。打絶えて御眼どほりいたさぬ。お變りもなうて、御目出たう御座る。

光佐　御言葉、痛み入りまする。

前久　さて、今日はる／＼推參いたした次第は餘の儀では御座らぬ。例の石山の一件ぢや。どうも困つた物で御座るのう。

光佐　敎如の儀につき、恐多くも勅使を給はる段、何とも申上ぐる言葉も御座りませぬ。

重保　（晴豐のさゝげた文箱をとつて）此れが勅書で御座る。謹しんで御聞きなされい。（勅書を開く。光佐は平伏する。一同もこれにならうて平伏。重保勅書を讀む）

此度は石山退去の儀とゞこほりなく相すみ、祝着と存じ候。然るに、新門跡、後に殘られ、何かと世の中騷がし

きよし、織田右府より頻りに訴へ申され候。もし天下の亂と相成るやうな事もあらば、萬民の憂たるべく候。よくよく御分別有之べきやう、內々叡慮よりも仰出され候。なほ、くはしき事は源大納言、勸修寺中納言。兩人申上ぐべき候也。かしく。――本願寺僧正御房へ。(重保は讀み終つて勅書を光佐にわたす)

光佐　(光佐膝行して勅書をうけて、一覽の後、卷納める)新門、いたづら者に加擔いたし、天下萬民の憲をもかへりみず、ひたすら我意を云ひつのり、端なくも叡慮を惱まし奉る段、光佐におきましては、たゞ、たゞ、恐入り奉るばかりで御座る。勿論、先日來、屢々、使者を以つて、新門に石山立退の儀を申しつかはしましたが、如何なる天魔の魅入りしか、更に聞入るゝ樣子も御座りませぬ。もとより彼はわが淨土眞宗の法統血脈を嗣ぎまする者、光佐が杖とも柱とも賴む嫡々では御座りまするが、かやうに畏多くも違勅の罪をかさぬる上は、やむを得ませぬ。父子の緣を切つて、宗門より勘當いたす所存に御座りまする。

前久　門跡の御決心、御痛はしうは存ずるが、かゝる時節ゆゑ、一時さやうの事と相成るも已むを得ぬで御座らう。

重保　御心中、深く御察し申す。禁裏叡慮に於かせられても、此度の和議が、かやうの事より萬一破談とも相成らばと、たゞ、それのみをお氣づかひで御座る。殊に織田右府は、知らるゝとほり、短氣の大將で御座れば、その點も、とくと御勘考あらせらるゝやうにとの勅諚で御座つた。

晴豐　門跡御房の石山退去については、帝も深くお喜びで御座る。今日、われら勅使の一行に、織田右府よりの使者、宮內卿法印、佐久間右衞門尉を差加へられたるは、門跡御房の御思案をとくと承はり、石山の處置について、なるべく穩便に引濟むやう取計らふためと、右府直々のお賴みによつた次第で御座る。

光佐　叡慮の忝じけなさ、織田右府の御心勞、光佐、たゞ、たゞ、深く恥入るばかりで御座る。

宮內卿法印　門跡上人には、打絕えて御眼どほりいたしませぬ。御無禮の段はおゆるし下され。

光佐　いや、無沙汰はこちらのことで御座る。

宮內卿法印　右大臣家の御諚は、佐久間殿。貴殿よりお傳へ下され。

信盛　承知仕る。門跡上人に申上げまする。右大臣家には、一昨日、安土より俄かに御上洛遊ばされ、禁裏に於て、天機御伺ひ遊ばされし後、二條城にて、宮內卿法印と某とをお召あり。汝等、早々勅使のお供いたして鷺の

森に下り、門跡御房に會うて、石山の不始末を問ひたゞして參れ。」と、以つての外の御機嫌で御座りました。

宮内卿法印　打割つて申せば、右大臣家には、もはや御覺悟の態と、この法印は見受け參らせて御座りまする。新門の御勘當との仰せを承はりし上は、包まず申上げまする。かの若坊主果つるか、信長の天命盡きたるか、天下の兵をあげて、一戰に勝負を爭うてみようずと、散々の御機嫌にて、お側の者どもに仰せられたを、この法印しかと承はりまして御座りまする。

（一座動搖。）

光佐　（凝乎つと心を抑へて）無分別なる新門の振舞、まことに右府に對して面目も御座らぬ。

宮内卿法印　右大臣家御憤ほり深くして、まこと石山に天下の大兵を集められましたる節は、この鷺の森にも、何のやうな難儀がふつて參らうも知れませぬ。此處はよくよく御思案が肝要かと憚りながら存じまする。

光佐　（憤る）然らば、法印にたづねる。宗門の跡取りを勘當まで致せし光佐の心を推量もなく、なほ、內々、石山に一味內通いたすとの疑をかけらるゝのぢやな。

宮內卿法印　いや、決してさやうな儀では御座りませぬ。たゞ、萬一の場合を懸念いたしたばかりで御座る。

光佐　思うても見られい。新門は我が總領で御座る。殊に幼少の折りより共々に籠城いたし、幾度か生死の間をくぐつて參つた者ぢや。愚痴では御座るが、決して憎うは思ひませぬ。天下の爲を思へばこそ勘當いたしたので御座るぞ。

信盛　只今、法印の申しましたる儀は、門跡上人の御心を、いまだ御承知なき右大臣家の御諚で御座りまする。憚りながら、我ら兩人立歸つて、御當地の樣子を包むところなく右大臣家に申上げましたならば、右大臣家の御疑は忽ち晴るゝで御座らうと愚考仕りまする。

光佐　（顏色を柔げて）いや、われらとて、右府の使者たるその方たちに、殊に勅使の御前にて、かやうな事を申しつのる心はさらに御座らぬが、あまり心外の御疑をかうむるゆゑ、つい、持前の短慮より、もはや、勘當も無益ぢや。あはれ、新門と共々に織田殿を今一度苦しめ奉らうずと、ふと、かう思うただけぢや。（法印と信盛とは、驚いて眼を見合せる）ははゝ、御容赦あれ。もはや、心にわだかまる物も御座らぬわ。

前久　（光佐を見つめる）御房、恐多くも、主上はじめ、われら骨折つて、やう／＼和議のとゝのうたる折から、只今の御言葉は穩で御座らぬ。つゝしみ召され。

光佐　御無禮の段は平におゆるし下され。たゞ、一時の短慮より、ふつと思ひつめた事をそのまゝ包まず申しただ

けて御座る。まことは、昨日、われら一門の實悟と申す者を石山につかはし、勘當の趣を申してやりました。
重保　それは驚き入る。もはや、敎如殿を御勘當で御座るか。
光佐　いかにも勘當いたして御座る。この儀につき、勅許を仰ぐため、今明日の內に、これなる下間刑部卿を京へ上すつもりで御座つた。
賴廉　只今、門跡より申上げましたるとほり、某使者を承はり京へ上つて、禁裏へ其のよしを申上げ、なほ、安土へも伺候のつもりにて、仕度を急ぎ居りました次第で御座りまする。
前久　右大臣家の使者たち。
宮內卿法印　（平伏）はつ。
佐久間信盛　（平伏）はつ。
前久　門跡の言葉を承はつて、その方たちも安堵いたしたであらう。
宮內卿法印　仰のとほりに御座りまする。
晴豐　實悟殿と申すは、かの蓮如上人の御實子で御座らう。
光佐　さやうで御座る。蓮如の實子にて、わづかに生殘り居りまするは、願得寺實悟一人で御座る。彼は一門の長老で御座りますれば、敎如とて、無下にその諫を退くる事も叶ひますまい。實悟は深く此度の儀を痛心いたして居りまするゆゑ、勘當の趣を申し傳へ、なほ、幾重にも理解を說いて、石山を立退くやうに申しきかすると言うて、出かけて參りました。
晴豐　それは重疊、御心づかひ、定めし主上に於かせられても、御滿足で御座らう。
重保　右大臣家もそれをきかるればさぞ御喜びで御座らう。
信盛　我々使者として參上いたしました者どもの面目も立ち、この上の喜は御座りませぬ。
晴豐　然りながら、門跡御房はとも角、女儀にておはす北の方が、さぞ情なく思ぼしたで御座らうのう。
北の方　（會釋して）何事も天下のためと申しきけられ、たゞ、たゞ涙を飮んで居りまする。
前久　われら、いとほしう思ひ居りまするぞ。（北の方頭を低げる。庭田、勸修寺二卿に向つて）さて、門跡御房をはじめ、當寺一統の御心を伺うた上は、われらも、今一度、石山に參り、敎如殿に御眼にかゝり、勅諚の次第、右府の心中などを、とくと申しきけ、敎如殿並びにつき從ふ面々に利害を說いてみようでは御座らぬか。
重保　その儀、もつとも然るべく存じ申す。
晴豐　石山は幸ひ、歸洛の路筋に當りますゆゑ、日數もさ

してのびませぬ。

前久　(法印、信盛に)　その方たちはどうぢや。

法印　是非とも、御伴を願はしう存じます。

前久　然らば、さやうに致す。教如殿も、われらとは、きはめて入懇の仲ぢや。かへつて、よい都合に參るかも知れぬ。

北の方　(光佐に向つて)　御用相すみましたる上は、支度も出來て居りますれば……

光佐　然らば、あれなる海近き座敷に、支度いたさせ置きましたれば、打くつろいで御休息下されい。

前久　御心づかひ、かへつて痛み入る。

北の方　京とちがうて、むさくるしうは御座りまするが、和歌の浦輪を見はるかす景色だけは、自慢で御座りまする。さ、(顯尊に)　御案内しや。

前久　然らば仰にしたがひ、休息いたさう。

光佐　われらも後刻、酒の御相手に參るで御座らう。

(勅使とその一行は案内せられて退場。)

(光佐と北の方の二人だけ殘る。)

光佐　(心中の苦々しさを押隱して)　そなたも部屋へ下つて休息いたせ。

北の方　(焦躁の心地)　わが夫に申上げまする。

光佐　何ぢや。(ふと思ひ返して)　いや、いや。今日は勅使の御成りぢや。何事もきくまい。

北の方　(押迫るやうに)　恐れながら、火急にお耳に入れねばなりませぬ。御聞き下されませ。

光佐　(立上る)　いや、何事も明日の事ぢや。今日はそなたに構うては居られぬわ。

北の方　(憎しみの眼ざしで、凝乎つと光佐を見る)　さやうに言をかまへて御逃げ遊ばすとは卑怯では御座りませぬか。

光佐　(怒りを顏に現はす。やがて冷やかに)　近頃のそなたの心は、われらには分らぬ。部屋へ下つて、凝乎つと落付いて考へるがよからうぞ。

北の方　何故、そのやうに、あなたさまは、御自身の心をお包み遊ばします。(間、鋭どく)　新門が可愛ゆうてならぬと何故正直に仰せられませぬ。

光佐　(凄い眼ざしになる)　みだりに人の心を推量るは、かへつて、そなたの身の爲であるまい。

北の方　(冷やかに笑ふ)　もはや私は覺悟をいたして居りまする。かやうに、お心にさからふは、覺悟の底から湧き出づる女の恨で御座りまする。

光佐　(烈しい憎しみで)　女子を夜叉と申された如來の御言葉に僞はない――恐ろしい心ぢや。

北の方　そのお言葉で、新門を身にかへてもと思召す御心

が、よう分りまする。ほほゝゝゝ。

光佐　（勃然として）默れ、そちはあくまで、この光佐をあなどるのぢやな。然らばきかう。眞實血潮を分けた母と子の間で、それ程まで新門を憎むは、何の爲ぢや。

北の方　たゞ、憎いから、憎みまする。

光佐　おのれ、あくまで欺かる心ぢやな。そちが新門を憎むは人畜生にも劣つたさもしい心からぢや。これだけ云ふさへ、口のけがれぢや。

北の方　何時ぞや、石山の奥庭で御覽なされた二つの死屍が、それほど御心の惱になりまするか。

光佐　（殺氣を含んだ眼ざしで）む、やはり疑うたとほりぢや。

北の方　あれこそ、嚴しい御法度をなみして、不義をいたせし二人の者に下りました天罰で御座りまする。

光佐　いや、さうは云はせぬ。もはや、そちの口占で明かに知れてしまうた――今頃は蘭菊丸が焦熱地獄で、不憫や、さぞ、そちを待つてゐようぞ。

北の方　それほど御疑ひなされますなら、何故私をお責めなされませぬ。只今も申すとほり、もはや、覺悟を致して居りまする。たとへ身は八裂にされても、少しも厭ひませぬ。

光佐　そちは、まだ、われらの刑罰をさとらぬか、さりとは鈍い心ぢやのう。

北の方　何と仰せられまする。

光佐　そちには、身を切らるゝより辛い事がある筈ぢや。

北の方　（間を置いて）そのやうな事は御座りませぬ。

光佐　また、僞を申す。久離切つて勘當いたせし新門を、まことはわれらいとほしう思うて居るとしたらどうぢや。（北の方の顏色變る）これがそちの一番の苦しみぢや。

北の方　それはまことで御座りまするか。

光佐　（凝乎つと北の方を見つめる）阿茶丸は末子ぢや。萬一、新門の勘當を赦さうなら不憫ながら、この本願寺の門跡はゆづられぬ。

北の方　……

光佐　次男の顯尊を興正寺の跡取りにやつてしまうた上は、そちの最後の阿茶丸が門跡になる順ぢや。併し、新門が戻つて參ると、さう行かぬ事になるのう。

北の方　いえ、いえ、いかにいとしう思ぼせばとて、御勘當の勅許を願ひまする上は、もはや、御自由にはなりますまい。

光佐　恐多い事ながら、また、御赦免を願ふばかりぢや。

北の方　（唇を嚙んで）恐ろしいたくらみぢや。

光佐　（憎い程冷やかに）さやうな時が參つたならば、新

門は、さぞ、そなたに孝行をいたすであらう。
北の方　(身をふるはせて)　いや、新門をいとしいと思ぼすのは、たゞ、私を苦しむるための僞ぢや。それに違ひは御座りませぬ。よう分つてしまひました。
光佐　それはどうとも、そちの推量にまかするがよいわ。
北の方　新門をいとしう思ぼすが、まこと定(ちやう)なら、何故、「開山の御眞影」を當地へ御移しいたした事を、御叱りなされませぬ。あれが、まことの御心の證ぢやと、私は思案いたしまする。
光佐　何故ぢや。
北の方　あれで、あなたさまが、新門を何う思うてお出で遊ばすかがよう知れてしまひました。
光佐　(沈痛に)　いかにわれらが憤つても、もはや、あゝなつては、何うもならぬ。恐ろしいのは、女子のたくらみぢや。
　(阿茶丸が泣きながら乳母につれられて、現はれる。)
乳母　北の方さまの御側へお出でなされたいと、おむづがり遊ばして、何としてもお聽入れなされませぬゆゑ、御用談中とは存じましたが、お伴れ申しまして御座ります る。
北の方　おゝ、阿茶。これへおぢや。(手を擴げ抱かうとする)
阿茶丸　(泣きつゞけて)　麿は父上の御側へ參りたいのぢや。
北の方　何、父上の御側へ。(險しい顏になる)
阿茶丸　(光佐の側に走りよる)　父上。
光佐　何ぢや、阿茶。むづがつてはならぬ。
阿茶丸　父上、新門さまを、おゆるしなされて下さりませ。
光佐　(笑ふ)　ふむ。そちは顯尊から智惠をつけられて參つたな。
阿茶丸　父上、御願で御座りまする。新門樣が此處へお戻り遊ばせば、また、石山へ參らるゝゆゑ、御勘當のおゆるしを父上に願うて御覽なされと刑部が申しました。
光佐　(顏色をかへて立上る)　阿茶。何故、そのやうな事をきいて參るのぢや。いかに頑是がないとて、以後さやうな事を申すとゆるさぬぞ。
阿茶丸　(泣出す)……
北の方　(阿茶丸をかばひながら)　何で阿茶をそのやうにお叱りなされまする。兄弟の情合とは思召されませぬか。
光佐　刑部も卑怯な奴ぢや。「御眞影」の儀について、わが心を計りかねて居る――阿茶を使うて、ひそかにわが心を探らうと致すのぢや。(急にむら〳〵と怒る)　言語

道斷。今度こそゆるさぬ。眼に物見せてくれやうぞ。

（阿茶丸は光佐の權幕に恐れて、聲たかく泣きながら、いよ〱北の方にしがみつく。）

第二場

石山本願寺祖師堂の内部、同じ日の事である。もはや、夕方近い日射が、一方の窓から、異様に赤く映しこんでゐる。

大龕の扉を堅く閉めてある。げつそりやつれた教如と、證誓、賴龍、粟津源六。その他善堯、加越大一揆の落武者黑丸の光玄坊などが、圓く坐つてゐる。

教如　（神經的にあたりを見廻す。聲低く）賴龍。

賴龍　はつ。

教如　聖人の御眞影の有無を疑ふ門徒どもが、たとへ如何やうに迫つて參つても、決してこの祖師堂に入れてはならぬ。腹心の者どもに、よく緣外を固めさせい。

賴龍　かしこまりました。（立上る）

教如　待て。賴龍。緣外を固むる者どもの太刀を取上げて置け。かやうな機ぢや。血迷うて、刄傷沙汰でも起さば、いよいよ、人々の心が荒まうぞ。

賴龍　承知仕りました。（退場）

教如　（眼を輝かして）まだ、決して、落膽してはならぬ。門徒たちは、御眞影を信仰いたすあまりに、たゞ疑を持つて參つたのぢや。「御眞影」が、眞實、此處になうて、鷺の森の御坊にお移りなされた事を知る者はあるまいと存ずる。

證誓　愚僧もさやうに思ひまする。たゞ、この上は、鷺の森より參る者を嚴重にせきとめて、門徒に先方の樣子を知らせぬやうにいたさねばなりませぬ。

教如　さうぢや、それがなかなかむづかしいわ。

光玄坊　いや、新門樣の御諚では御座るが、愚僧はさうは思ひませぬ。門徒たちが、第一不審いたすは、新門樣晨朝の御勤めに御眞影の御開帳を遊ばされぬ儀で御座りまする。

善堯　まだ聲たかう申しはいたしませぬが、彼等の間では、もつぱらそれを怪しんで居りまする。

教如　御鑰取り役の常樂寺が、鷺の森へ先發いたしたため、お鑰の所在が分らぬ。追て、先方に問合せ、お鑰を見出すまで、御開帳は取止めぢやと、布令てあつても、やはり疑ふのぢやな。

善堯　さやうで御座りまする。

教如　（間を置いて沈痛）門徒どもの疑が、そこまで深うなつて居ると、この祖師堂は、もはや、迂濶には離れられぬ。今日より、われらはじめそちたちも、此處に寢と

まりする事に致す。

證誓　さやうの事を致せば、却つて、門徒の疑を增す道理では御座るまいか。

敎如　（深刻に）もはや、門徒の疑など、かへりみては居られぬ。此處を離れて、この御寵の正體をみられたが最後、われらの身の上は、どうなるか分らぬ。身を守るためにも、一味同心の者はひたと寄合うて居る事が肝要であらうぞ。（一同緊張）が、併し、その內には、先日矢文を以つて申して參つた四國の長曾我部元親の軍兵が參るであらう。彼は南海の英雄ぢや。近頃、織田を恨み、將軍家に好を通じて居る。これが參れば、門徒の心も、また、振ひ起らうぞ。

源六　元來、門徒どもは、新門樣御爲ならば、生死も念はぬと堅く誓つて置きながら、當寺の落日をみると、すぐさま、かやうに騷ぎ立てをする。不甲斐なき奴らで御座るのう。

敎如　それが人の心ぢや。此度はわれらも、よい學問をいたしたわ。

證誓　將軍家義昭公より更に御消息が御座らぬが、いかが、いたし居られまするか、心掛りで御座る。毛利殿の方の相談が首尾よく參らぬと見えまするな。

敎如　羽柴秀吉が備中まで攻入つたと云ふ話ぢや。毛利殿も今が懸命の合戰最中であらう。この上、本願寺を援助さるゝ望はまづないと見ねばなるまい。大多和惣兵衞がこゝに參つて居るだけでも過分と思はねばならぬ。（間）われらが賴むは、たゞ、長曾我部だけぢや。あれが參れば、天下に恐るゝ者はない。

（賴龍が入つてくる。）

賴龍　仰のとほりに取計らひ置きました。

敎如　大儀であつた。

賴龍　只今、毛利家よりつかはされ居りまする大多和惣兵衞が、御眼通りを願ひ出でゝ居りまする。

敎如　眼通りゆるす。これへ呼べ。

賴龍　はつ。（退場）

證誓　惣兵衞は何を願ひ出づる心で御座らう。

敎如　もし、歸國の願であつたら、今暫らく居殘つて貰ふやうに說いてみねばならぬ。彼の手には二千の中國勢が居る。只今の二千はなかなか大切ぢや。

光玄坊　惣兵衞の願は歸國の儀で御座る。彼は愚僧に度々、さやうの心を洩らして居りまする。

敎如　そちの持場は惣兵衞とは、隣りあひぢやのう。

光玄坊　さやうで御座る。愚僧は堺口の御門、彼は天王寺口の御門をかためて居りまする。

敎如　中國勢はやはり門徒と仲がよくないか。

光玄坊　以前のやうに喧嘩口論はいたしませぬが、やはり何事につけても白眼み合うて居りまする。
教如　困つた者ぢや。
（賴龍に案内せられて、大多和惣兵衞元直が出てくる。）
惣兵衞（平伏）　御眼通りの儀、早速御ゆるし下され有難く存じまする。
教如　何時もながら出精、新門は忝なう思ふぞ。
惣兵衞　恐入りまして御座ります。
教如　して、その方の願と申すは何事であるぞ。
惣兵衞　火急の御願、他の儀では御座りませぬ。まことは主人の小早川隆景より、密々の消息が御座りまして、新門樣にも、旣に御承知のとほり、織田家の軍、旣に領內深く打入りし由を申參りまして御座りまする。つきましては、甚だ心なき儀のやうに御座りまするが、火急御暇を給はりたう存じ、御願のために、御眼どほりを願ひました次第で御座りまする。當山只今の有樣を見すて參らせて、歸國いたす事、某に於きましても、心苦しうは御座りまするが、何にいたせ、主の大事で御座る。家來の身と相成りますると、かやうに他國の空で安閑と暮らしては居られませぬ。某の胸中何卒御推量の上、即刻歸國の儀、おゆるしを願ひたてまつる次第で御座りまする。
證誓　貴殿の御願、御もつとものの次第とは存じ申すが、御覽のとほり、當山は、只今が危急存亡の場合で御座る。殊に門跡御退去の後は、籠城の門徒も次第に散じはて、一時五萬にあまりし士卒が、今や、わづかに五千にも足らぬ有樣で御座る。それとても、烏合の衆、甚だ、頼み甲斐なき者どもで御座る。然るに、幸にも、かの南海の長曾我部元親が、鞆の津に座[おは]す將軍家の御懇請により て、伊豫土佐の兵を以つて、當山を救ふよしを申して參つた。
教如　惣兵衞。この儀は、まだ何人にも明かさぬ。たゞ、そちだけがきくのぢやぞ。さやう、心得い。
（惣兵衞は頭を低げる。）
證誓　卽ち、四國の荒武者たちが、當山へ參るは、もはや間もない事で御座らう。折角、これまで、共々に籠城し生死を共にいたせし我々で御座る。どうぞ、それ迄、御待ち下されい。
惣兵衞　教行寺殿の事を分けたる御物語、殊に、陣中、誰一人知らぬ秘事まで打明けての御賴み、惣兵衞、肝に銘じて忘れませぬ。なれど、此處は一つ新門樣に御思案を願はねばならぬ處で御座りまする。某はじめ當山へ參り居りまする中國勢は、皆、毛利家の、數代恩顧の者どもで御座りまする。古來未曾有の戰上手と承はるかの羽柴秀吉が、天下の大兵を率ゐて、備中より因幡に攻め入り、

只今は鳥取城を取圍み居る樣子に御座りまする。萬一鳥取城が落城いたさば、もはや、毛利一家は、枕を高うしては寢られませぬ。當山の難儀を見捨て申したてまつつて、歸國を願ふ惣兵衞が心底、何卒お汲取を願ひ上げまする。

敎如　惣兵衞。先刻よりそちの申すところ一々、新門は深く感じ入る。主の難儀を見捨てかぬる段、まことにもつともぢや。すぐさま歸國いたせとわれらに於てはかう申したいのは山々ぢや。併し、當寺も今や、大難に會うてゐる。只今そちが二千の中國勢をひいて歸國いたせば、恐らく門徒たちは、臆病風にさそはれて、散々になつてしまふであらう。さすれば、父に反いて、あくまで籠城いたさうと云ふわれらが志は無益になつて、空しく天下の物笑ぢや。そこをとくと思案してたもるまいかのう。（惣兵衞は俯いたまゝ、返事をしない。敎如長く惣兵衞を見つめてゐる。一同不安は刻々につのる）　どうぢやな。惣兵衞。

惣兵衞　（無骨に）　折角では御座るが、どうぞ御暇を下されい。同じ死ぬるものならば、この惣兵衞主の馬前で死にたう御座る。

源六　（怒氣を含んで）　惣兵衞殿。これ程、事を別けて新門樣御頼みあるは、よくよくの事で御座るぞ。あまりと云へば情ない御返事ぢや。今一應の御思案強つて賴み入る。

惣兵衞　……

賴龍　成程、承はれば、毛利家に於かせられても、此度は難澁の御樣子で御座る。然しながら、毛利の御家は中國の大藩、譜代の勇士が雲の如く居らるゝでは御座らぬか。貴殿一人御歸りなくとも、合戰に事は缺き申さぬ。それに引換へて當山は、たゞ今のところ、知らるゝとほり無人の有樣、殊に、まだ、御主君より歸國の仰せが御座らぬ上は、お止まり下されても義に於て缺くる處も御座るまい。

惣兵衞　按察使法橋の仰せのとほり、主人より歸國せよとは、まだ申して參りませぬ。成程、某一人、當山に殘りましたとて、合戰に事を缺く事は御座りますまい。なれど、それは他處眼の御思案で御座る。當の某の胸中は、なかなか以つて、さやうな呑氣な事では御座らぬ。

源六　（憤然として詰めよる）　惣兵衞殿。お控へ召され。

惣兵衞　（飛びすざりて刀の柄に手をかくる）

源六　きくに耐へぬ惡口雜言、無禮で御座らうぞ。かくなる上は、もはや武士の意地ぢや。決して歸國はゆるし申さぬ。

惣兵衞　（じりじりと後へさがる）　然らば某は刀にかけて

も歸國いたす。（拔き合はうとする）

教如 （一同殺氣立つのを押靜めるやうに）待て、源六。方々も何事ぢや。坐らぬか。

源六 あまりと申せばきゝ分けなき……

教如 えい。われらが命ずる――坐れ。（源六はじめ一同しぶしぶ坐る）惣兵衞。そちの歸國はゆるしてつかはす。さうさう支度いたせ。さりながら、惣兵衞。肝に銘じて忘るゝな。此儀は敎如に取つて、身を切らるゝより辛い事ぢやぞ。

惣兵衞 はつ。恐入りまする。（涙をふり拂つて）新門樣の御心中、深く御推量仕りまする。白證、この度の歸國は、まことを申せば某の心中では御座りませぬ。召しつれました中國の者どもが、强つて歸國を云ひつのり、いかやうになだめ諭しましても、いつかな聞入れませぬ。果は、一揆にも及ぶ樣子で御座りまするゆゑ、心を鬼にして、御願いたす次第で御座る。御無禮の段はいくへにもおゆるし下されい。

教如 （思はず嗟嘆す）もはや、士卒どもの心は、さほどまで、この新門を離れてしまうたかのう。

（一同言なし。あたりが少しづゝ暗くなる。）

惣兵衞 御痛はしう存じまするが、これで御別れいたしまする。（隻眼をおさへる）各々方にも、もはや御眼にかかりませぬ。御免下されい。（平伏）

教如 そちも堅固でくらせ。

惣兵衞 （泣く）はつ。（靜かに退場）

教如 （窓を見返つて）空の色が不思議な赤さぢや。やがて、暴風雨が來ようも知れぬ。次第に暗くなつて參つたわ。（此時、俄かに、祖師堂の外に叫びのゝしる聲が騷がしくきこえる。敎如ぎくりとして）何ぢや。あの叫び聲は。

賴龍 門徒どもが御眞影を拜みたいと申して、迫つて參りましたので、御座りまする。（出て行く）

（外は烈しい騷擾。內では一同が何時となく敎如を圍んで、近くよりかたまる。やがて、騷擾が靜まる。）

（賴龍が歸つてくる。大學を縛つてつれてくる。）

賴龍 不思議な曲者を捕へまして御座りまする。（大學の髻をつかんで、引上げる。蒼面隻眼の大學は、につと人を侮げすむやうに笑ふ）

教如 （覺えず乘りいだす）おゝ、そちは大學ではないか。

（大學答へず）どうして此處へ參つたのぢや。

賴龍 只今門徒衆を取靜めて居りまするると、この祖師堂の緣の下より、ひそかに這出づる怪しい曲者が御座りまするゆゑ、捕へさせて見まするると、この大學で御座りました。

教如（血相をかへて大學に）そちは母上の間者となつて、此處へ忍んで參つたのぢやな。

大學（また侮げすむやうに笑ふ）如何にも御推察のとほりで御座る。

教如（赫怒）おのれ、ようもほざいたな。打殺してくれうぞ。

大學 かやうに捕へられた上は、生かさうと殺さうと御身の自由ぢや。もとより、塵埃のやうな生命ぢや。惜しいと思うた事は、近頃ないわ。（眼を閉る）

源六 新門跡様に對して無禮の雜言、おのれ、言をつゝしまぬか。

大學（切齒するやうな聲で苦しげに笑ふ）何ぢや。新門樣ぢや。（笑ふ）新門も人間なら、おれも人間ぢや。

證誓 おのれと新門樣とは、自づから位が違ふわ。

大學 四海平等ぢや。人間も鳥獸もかはらぬ。死んでしまへば髑髏ぢや。（また笑ふ）おれは、その位が氣に入らぬ。

教如（冷笑）それ程、位が氣に入らぬ者が、何で母上に召使はるゝのぢや。

大學（さげすむやうな微笑）御身の母御前は美しい婬婦ぢやからのう。

教如（勃然として）源六。そやつを切つて捨てい。

源六 はつ。（立ち上る。また門徒の押寄せる聲が遠くきこえる）

教如（苦悶）待て。成敗は追つて命ずる。まづ、一間に堅く縛しめて置け。

源六 はつ。（大學を引立てる）

（兩人退場。）

（門徒たちの騷擾が段々近まつてくる。）

（あたりはますます暗くなる。）

教如（黯然として）母上の事を思ふと、心が暗くなるぞ。……

（門徒の騷擾が祖師堂の外で烈しく起る。教如の周圍に一座の人たちが不知不識寄りそふやうになる。）

（扉が開いて、一人の法師が入口に平伏する。）

證誓（こらへかねて）何事ぢや。

法師 只今、鷺の森の御坊より願得寺様が御出で御座りまする。

教如 何、實悟殿が見えたと申すか。（證誓、賴龍と顏を見合せる）思ひもかけぬ人が見えたものぢやのう。

證誓 よい事では御座るまい。

教如 何はともあれ、これへ通せ。

法師 はつ。（退場）

（やがて、願得寺實悟が現はれる。源六も戻つてくる。）

教如　實悟殿。珍らしう御座るのう。

實悟　新門跡にも、御無事で珍重で御座る。やれやれ、今少し早う參る筈であつたが、堺の門徒衆に引止められて、つひ時を過ごし申した。時に寺內の樣子は如何で御座る。變る事も御座らぬかの。

教如　（苦々しげに）寺內の有樣は散々で御座る。貴僧としかと御約束いたし置きたるにもかかわらず「開山の御眞影」は母上のたくらみで鷺の森にお移り遊ばさるゝ。門徒どもの心は日ましに險しうなつて參る。何にせよ。只今が一番厄介な處ぢや。

（門徒の擾亂絶頂に達する。）

實悟　ほう。それは御心づかひで御座るのう。只今、愚僧が案內せられて、この祖師堂へ參る道すがら、門徒衆が口々に何かわめきながら、押しよせ參つたは、あれは何事で御座る。

證誓　「御眞影」を拜ませいと强訴いたすので御座る。

實悟　門徒衆の心が、そこまで險しうなつたとすれば、まことに容易ならぬ儀で御座る。御身のためにも、早う此處を御引上げなさるゝが、ようは御座るまいかのう。

教如　いや。この教如は、斷じて石山は離れませぬ。たとへ、骨が砂利になつてもぢや。

實悟　成程。悧發なやうでも、まだ、新門殿は心が御若う御座る。世の中の事はさやうに堅苦しう考へては生きては行かれませぬぞ。

教如　實悟殿。もはや、その御話は無益ぢや。御免かうむる。われらの決心は、たとへ如來の仰せでも變へられぬ。まづ、御用向を承はらうでは御座らぬか。

（門徒の聲次第に靜まる。）

實悟　さ、それぢや、愚僧がたゞ今、申上げた事が、自然、此度の用向にかゝはつて參るのぢや。

教如　只今も申せしとほり、その御用ならば、もはや承はるには及ばぬ。御立歸り下されい。

實悟　（きつとして）新門、ようきかれい。此度、愚僧が當地へ罷越したる用向は他では御座らぬ。本願寺當代の門跡は、新門跡教如、及び、その一味の者どもを、改めて宗門より勘當いたさるゝ。それを申しつたふる爲に參つたのぢや。

（一座動搖。）

教如　御勘當で御座るか。（みるみる內に血相がかはる。悲憤の聲をしぼつて）いや、此期に及んでは、御勘當をうけても我が心はひるがへされぬ、自體、父上は如何なる仔細あつて、かくまで、この教如を憎ませらるゝので御座るか。なる程、御心にそむいて、この石山に籠城いたした段は、教如重々恐入る次第で御座るが、これとても、

宗門の爲を思ふ故で御座る。諸佛如來も照覽あれ、敎如の心には、一點の惱ましい處も御座らぬ。（涙なふり拂ふ）實悟殿。この敎如は、幼少の折より、父上を世にも慕はしう思うて居りました。只今とて、（嗚咽）かくまで無殘な御言葉を承はつた只今とて、父上を慕ひまつる心は更にかはりませぬぞ。

實悟　敎如殿。門跡も、御身をいつくしむ御心は決して御身に劣らぬと、この實悟は推量いたす。たゞ、何事も天下の爲ぢや。血の涙を流して、御身を御勘當なされたので御座る。そこの御思案が肝要ぢや。

敎如　いや、父上はたゞ、われらを惱ませらるゝのぢや。もし、父上に子を思ふ御心が爪ほども御座るならば、かの御眞影を召上げらるゝ筈が御座らぬ。われらは父上にかほどまで惱まれ參らするが無念で御座る。

實悟　「御眞影」の儀は、門跡も我らも、夢知らぬ内に、此處を御動座遊ばされたので御座るぞ。

敎如　もとよりこれは母上の御計らひとは承知いたすが、それならば、何故、再三御願ひいたすにもかゝはらず、當山へ御戻し下さらぬので御座るか。それと云ふも、所詮は、敎如を好かせられぬ故で御座る。

實悟　御身の思案が、憚りながら、まだ、お若いと申すはそこで御座るぞ。かの御眞影は、淨土眞宗根本の寶で御座る。一旦、門跡と共に鷺の森にお移りありしものが、またまた、故もなく、當寺へお戻りなされては、宗門の威信にもかゝはり、門徒の信心もゆるぎ申さう。成程、當地より移し奉りし手段は、よいとは申されぬ。門跡も心中深かく御憤りの御樣子ぢや、さりながら、只今、事を荒立てゝ、かの謀が萬一、外に洩るゝやうな事が御座れば、それこそ一大事ぢや。そこをよう考へて御覽なされい。

敎如　（悲憤）それにつけても、母上は罪深い御方ぢや、この恨は、敎如決して忘れ申すまじ。

（一人の武士があわたゞしく入つてくる。）

武士　申上げます。只今、嚴しく縛め置きました大學が、隙をうかゞひ、繩を嚙み切つて、何處ともなく逃げさりまして御座ります。

賴龍　何、あれ程、堅く縛しめ置きし繩を嚙切つて逃れたと申すか。（敎如に）御免をかうむり、取調べて參りまする。（退場）

（武士も退場。門徒たちの擾亂がまた烈しくなる。）

敎如　實悟殿。繩を嚙切つて逃れたと申すは、母上の間者で御座る。この敎如の身の上を探るために、母上がひそかにつかはされし間者で御座るぞ——恐ろしい御心では御座らぬか。

實悟　いかに末法濁世とは云ひながら、御親子の間柄で何

事で御座る。勿論、北の方も御心得違ひで御座るが、御身とて、北の方に孝心厚うおはすとは申されぬ。よう、考へても御覧なされ。北の方とて、罪なき者を憎まるゝ事は御座るまい。

教如 (北の方に對する憎惡と侮蔑とを露骨に現はして)それには仔細が御座る。當山を御退去ある數日前、奥庭深き木立の闇にて、われらがかの蘭菊丸を殺害いたせし儀を母上は深くお憎しみぢや、これよりくはしうは、われらが口からは云はれぬ事で御座るが、生け置いては我家の恥辱と存じ切つて捨てた次第で御座る。その邊の仔細は御推量下されい。

實悟 教如殿。ひたすら理を立てゝ、一歩も曲げぬ御身のお心は結構で御座るが、理になづみ過ぐると、はては淺間しい我執の鬼とならねばならぬ。われらは元來、罪深う生れた人間ぢや。決して聖人君子では御座らぬ。此所を念へば、自づと心の凝りが解けて參る筈ぢや。此度の御勘當とて、やはりさうぢや。當道場の開山蓮如上人の御文章にも「むつかしき題目なんど出來あらん時は、速かに、この在所に於て、執心の心をやめて、退出すべきものなり。」とあるでは御座らぬか。實悟は決して惡しうは計らひ申さぬ。早う此石山を御立退なされい。さすれば、折をみて、門跡の御心をなだめ奉り御勘當御赦免のために骨を折り申さう。

教如 (憤然として) 云はれな、實悟殿。もはや、われら一味の者の心は決し申した。鳥滸がましけれど、教如は、當流の御開山親鸞聖人の嫡々で御座る。たとへ父上母上と云へども、無法の仰せに阿容阿容從ひ奉る譯には參らぬ。かゝる上はあくまで石山に立てこもり、父上、もし、われらも門末の寺々を狩り催ほして、新たに本願寺を開くばかりぢや。

「開山の御眞影」を奉じて門跡とあふがれ給ふならば、わ

(一座緊張。)

(門徒たちが「御願ひで御座ります。御願ひで御座ります。」と呼ぶ聲が外からきこえてくる。)

實悟 こは容易ならぬ事を承はる。宗門の掟を破つて、新たに別派を開かるゝは、謀反と同じ罪過で御座るぞ。

教如 それもやむを得ぬ事と存じ申す。非理非法の兩親の憎しみが、教如を、かくまで墮落いたさせたのぢやとお傳へ下されい。

(「お願ひで御座ります。御願ひで御座ります。」と叫ぶ聲が次第に烈しくなる。)

(頼龍が入つてくる。)

頼龍 殘念ながら、大學の姿は、もはや、何處にも見えませぬ。

教如　頼龍。また、門徒どもが喧しう申す。取靜めて參れ。

頼龍　そこで御座りまする。折角、御用談中と存じ、威しつ、すかしつ、さまざまに申しなだめて見ましたが、狂氣の如く湧き立つ門徒どもは、いつかな靜まる段では御座りませぬ。

教如　えい、腑甲斐なき者どもぢや。然らばわれらが自ら參つて、說きさとしてくれるわ。（立上る）

（一同憂色を現はす。擾亂その極に達す。）

頼龍　（袂をひかへて）さりとは輕々しい御振舞、何事で御座りまする。只今、御姿を御見せなされましたら、どのやうな事にならうも知れませぬぞ。

教如　（凝乎つと頼龍をみる）構はぬ。離せ。

（一同、口々に「お危なう御座ります。およしなされませ。」と云ひながら、敎如を取りかこむ。）

（此時、烈しい騷擾と共に閂が折れて祖師堂の扉が開く。門徒たち亂入。）

門徒五六人　（敎居の處に蹲まつて）御願で御座ります。「開山の御眞影」を拜ませて下さりませ。（口々に叫ぶ）

敎如　（奮然として）退れ、無禮者奴。（門徒威に打たれて、靜まる）先日より度々申しきかすとほり、御眞影は確かに御龕の內にある。やがてお鑰さへ見付からば、何時でも拜ませてつかはす。

（一座のもの共は太刀を拔きそばめて、敎如を守る。）

（門徒を掻きわけて、第一蓆に鎧の修繕をしてゐた叡山法師が三人前に出る。）

法師一　（熱狂して）御眞影は既に鷲の森に御動座と承はる。眞實、此處に御座りまするか。

法師二　（恐ろしき顏付にて）此處に御座るならばその證をお見せ下されい。

敎如　眞實この御龕の內に安置してある。われら僞は云はぬ。（頼龍源六等をかへりみて）これ、決して太刀を拔いてはならぬぞ。よいか。

法師三　僞りぢや。此處にはもはや御座らぬと確かに承はつた。

法師一　（斧を提げて立上る。大音に）地獄に墮ちても構はぬ。「御眞影」の在所を確めようぞ。（亂入す）

法師二三　それ、御龕を打ち破れ。（つゞいて亂入）

（つゞいて門徒七八人祖師堂に入込む。挌鬪。）

（法師一は斧を振つて、大龕に迫る。）

敎如　（こらへかねて叫ぶ）無法者を切つて捨てい。

（光玄坊が太刀を振るつて、法師一を後から袈裟がけに切りさげる。法師一は倒れる。法師二が、その隙に大龕に近づいて、扉を打破る。善堯がおのれと叫んで、その脇腹を刺通す。法師二死す。）

（大龕の扉の破れた處に、しつかり法師三が取りついて、內を覗く．源六がその背中を刺す。）

法師三（刺されて苦しみながら、後を振返つて）空ぢや。何もないわ。（悲痛なる大笑。そのまゝ、ぐたりとなる）

（門徒それをきいて一時森と靜まる。敎如手を以つて額を蔽ふ。窓に映る夕榮ますます赤く異樣に輝く。）

――幕――

第三幕

巨鐘の響が狂亂したやうに鳴りわたる。少時、幕開く。鷺の森別院本堂。中央本尊阿彌陀如來、一側に「祖師骨肉の御眞影」の粗製の龕。共に扉を開かれてゐる。未明燭臺に火を點じ、佛前の燈明も燃えさかつて、晝のやうである。時は、天正十年六月三日、前幕より二年以後の事である。

光佐、顯尊、實悟、覺淳、超乘その他御堂衆、一門連枝の坊主衆が居流れる。覺淳以下の一門連枝の坊主衆は皆甲冑をよろうてゐる。

光佐（晨朝の勤めの讀經を終ふ）あの巨鐘の響を止めさせい。もはや走せ集まる門徒もあるまい。

法師　はつ。（退場）

（遠く、鐵砲の響．繼續。つゞいて喊聲。）

超乘　いよいよ刑部が打つて出たやうで御座る。

覺淳　刑部もわづか二百の門徒では、目ざましい働も出來かねるで御座らう。

超乘　刑部が打つて出たといたすと、もはや大手には平井越後の手の者が百人あまり殘つて居るだけで御座るのう。

光佐　もはや、それだけか。

超乘　法師も門徒も打ちまぜて、物の役に立つは、それだけで御座りまする。

光佐（沈痛に）それではいよいよわれらの最後が近づいて參つた。（顯尊に）そちの母は如何いたした。

顯尊　只今。最後の御行水で御座りまする。

光佐　そちは．もはや行水をすませたか。

顯尊　はい。父上の御後で頂きまして御座りまする。

（鐘の音やむ。法師戻つてくる。一人の法師武者が驅けて本堂の入口に蹲まる。）

法師武者　愚僧は平井越後の手の者で御座る。只今、下間刑部殿が、打つて出でられましたが、忽ち寄手の先陣、丹波殿の手の者に押包められて、苦戰の體と見うけまする。越後手勢を以つてくり出し、刑部殿をお救ひいたさうと存ずる。その儀如何で御座らうか。

光佐　控への勢は何程あるのぢや。
法師武者　一番手の鈴木孫一殿、殘りすくなに打ちなされて、只今城内で御休息中で御座りまする。控へと申してはその他には御座り申さぬ。
光佐　よし、孫一が居るならば、直ちに打つて出でい。
法師武者　承知仕る。（驅けて退場）
（烈しい銃聲。）
光佐　常樂寺。織田勢は一萬をこゆるであらうのう。
超乘　さやうで御座る。濱手、山手を合せて一萬四五千は確かで御座りまする。
光佐　それに引換へて、味方はわづか五百に足らぬ烏合の衆ぢや。もう一時とは持つまい。昨夜申しきけたとほり、最後の用意をいたせ。
超乘　かしこまつて御座る。然らば防矢を仕る者どもにその趣申傳へて參りまする。（退場）
光佐　誰かある。
法師　はつ。
光佐　そちは下人どもに、この本堂の周圍に薪を積ませい。あるだけの薪を殘らず積ませるのぢや。
法師　はつ。かしこまりました。（退場）
光佐　（瞑目して）いよいよ、寄手が、城内に亂入いたすを合圖に、誰でもよいこの本堂に火をかくるのぢや。いや、かやうな時には、得てうろたへるものぢや。（眼を開いて一座を物色する）顯證寺。御身に賴み申さう。
覺淳　（たゞ頭を低げる）……
光佐　しかと賴み申すぞ。
覺淳　承知仕る。
光佐　（實悟をかへり見て）生きながら、荼毗の灰とならうぞ。
（一座甚深なる感動をうく。）
實悟　（涙を押へて）この實悟は、はや九十に餘る齡で御座る。さまざまの世の相も見て參つたゆゑ、餘生をむさぼる心は更に御座らぬが、門跡はまだ四十にもなられぬ。かやうな亂世に世を受け幼少の機より、難儀な事ばかりなめて來られた。いよいよ御最期と思へば、たゞ、御痛はしう存ずる。
光佐　いやしくも一宗の束を司どるわれらが宗門と共に果つるは當然の義理で御座る。たゞ、われら何んとも諦めかぬるは、石山籠城以來、幾千とも知れぬ門徒衆の生命を失はせた事ぢや。所詮われらは淨土に往生は出來まい――いかに如來の慈悲が廣大無邊ぢやとは云へ、この罪業を償ふ事はむつかしう思はるゝわ。
覺淳　それは門跡御一人の罪では御座らぬ。
光佐　いや、われらのこれまでの生涯を思へば、恐ろしい

惡夢のやうな氣がいたす。所詮、かほどまでに亂れ果てた世の中に、宗門をひろむるのぢや。降魔の利劍をふりかざして、身を守り人を押へ、この國土の上に眞宗一流の政を施かねばならぬと、かう思うたのが、そもそも過りであつた。

實悟　如來の慈悲は廣大にして、如何なる惡人も攝取不捨と承はる。石山十一年の合戰に生命を失ひし門徒衆は、いまや、安養淨土に往生して、門跡のお出を待ち居るで御座らう。

光佐　（數珠を爪ぐつて）門徒たちの斷末魔の聲がいまだに耳に殘つて、心の苛責となり申す。南無、阿彌陀佛、南無、阿彌陀佛……

（超乘が戻つてくる。）

超乘　門跡の仰せ。大手、搦手の大將に申傳へて參りました。

光佐　御苦勞ぢや。

（顯尊がこの時、突然泣き出す。）

光佐　如何いたしたのぢや。（不興げに）心が怯れたか。

顯尊　いや、決して怯れはいたしませぬ。父上。御ゆるしなされて下さりませ。私は兄上に御眼にかゝりたう御座りまする。

（一座皆泣く。）

光佐　（思はず涙をハラハラとこぼす）興門。もはや、それを申すな。

顯尊　はい。（唇をかんで泣く）

光佐　（强ひて烈しく）あくまで親に反いて、宗門に別派を樹つる勘當者が、そちはそれほど慕はしいか。云ひ甲斐なき奴ぢやのう。

顯尊　もはや、死なねばならぬ身で御座りまする。ただ、一眼お眼にかゝりたう御座りまする。（泣く）

光佐　（手で顏をおさへる）愚者奴……

（大寂寞。やがて、銃聲、つゞいて烈しい喊の聲がきこえる。）

（北の方が、眞蒼な顏で阿茶丸をしつかり抱きしめて急いで出てくる。腰元三四人恐ろしさうに、ひたと北の方の後について現はれる。）

北の方　わが夫（つま）。つねの居間は危なうて居られませぬ。只今、行水を致して居りまする間にも、濱手の方より飛んで參る敵の流彈が、幾つとなく鴨居を打貫きまする。

疊淳　さては、いよいよ敵が間近くよせて參つたと見えまする。

超乘　濱手御門は少進仲之が、わづかの手勢で防いで居りまする。

實悟　濱手の敵の大將は誰で御座るか。

超乘　三七信孝殿と見受け申す。
實悟　然らば濱手の人數は、山手の方より多勢で御座らう。いや、われらもかやうに安閑として死を待つより濱手御門へ參つて、仲之に力を合せ、防矢の一筋も仕らうでは御座らぬか。
超乘　いかさま、願得寺殿仰せのとほりぢや。各々方。參らうでは御座らぬか。
（御堂衆、一門坊衆一同立上る。）
坊主衆の一人　いざ〱、御伴仕らう。
（一同退場。）
（光佐と北の方、顯尊、阿茶丸、腰元たちだけ殘る。）
實悟　（本堂の扉の外にて）東の方が白んで參つた。やがて夜も明けよう。
光佐　（獨語）夜の明くる時が、われらの身の終りぢや。
（腰元たちが聲高く泣出す。）
北の方　（險しい顏色にて）これ、見苦しい。何事ぢや。靜かにしや。
法師　（戻つてくる）仰せのとほり本堂の周圍に薪を積ませまして御座りまする。
光佐　そちは表へ參つて、合戰の樣子を見張りいたせ。いざと云ふ時は、馳せ戻つて、顯證寺と共々に薪に火を點くるのぢや。

法師　はつ。かしこまりました。（退場）
光佐　（北の方に）敵が亂入いたしても見苦しうないやうに、奧殿の方は取片付けて參つたであらうのう。
北の方　はい。仰せのとほり、取片付けて參りまして御座りまする。
光佐　（深い眼差で凝乎つと北の方を見る）この上はたゞ、心靜かに最期の時を待つばかりぢや。
北の方　（齒を喰縛つて）はい。（北の方にしがみついた阿茶丸が、突然、泣叫ぶ）靜かにするのぢや。阿茶丸。
光佐　阿茶丸をこれへおこせ。
北の方　はい。さ、父上の御側に行きや。
阿茶丸　父上。（わつと泣きながら、光佐にしがみつく）
…
光佐　（凝乎つと阿茶丸を見つめる。身を顫はし聲をうるませて）阿茶。もう泣くな。われらが、何時までも抱いてゐてやらうぞ。
阿茶丸　死ぬのは厭ぢや。父上、麿は死たうは御座りませぬ。（泣く）
（北の方は顏を袂でかくす。）
光佐　これ、阿茶。よい子ぢや。さやうにむづがる物ではない。この父も母も、みな、とも〲に淨土へ行くのぢや。如來さまが可愛がつて下さるぞよ。

阿茶丸　恐い——麿は恐いのぢや……

光佐　（北の方に）阿茶はまだ、物心おぼえぬ幼子ぢや。火に燒かれ、烟にむせんで、泣狂ふ姿を見ては居られぬ。われらが最期まで、抱きすくめて居らうぞ。

北の方　何と仰せられまする。

光佐　（凄い顏付になる）最期を亂さぬやう、わが腕できびしう阿茶を抱きすくめて置くのぢや。

（阿茶丸は光佐の心を感じて、前から怯えてゐたが、此時、懸命の力を振つて、光佐の手から逃れ、北の方にしがみつく。）

阿茶丸　（泣きながら）母上。麿は父上が恐ろしう御座ります。

北の方　（阿茶をやさしく抱きしめて）わが夫。

光佐　（迫る）阿茶をこれへおこせ。

北の方　いえ、上げられませぬ（ハラハラと涙をこぼす）何でそのやうな無慈悲な事が出來ませう。阿茶丸は私の最愛の子で御座りまする。

光佐　おこせと申すのぢや。

北の方　（憎しみの眼で、凝乎つと光佐を見つめる）厭で御座りまする。阿茶を手放しては、私は死なれませぬ。

光佐　（憤然として）またしても、われらに逆ふ——おのれ、おこさぬと、かうしてくれるぞ。（立上る）

北の方　（凄く笑ふ）何れにしても死ぬる身で御座ります。思ふとほりになされませ。たゞ、阿茶だけは死んでも離しませぬぞ。

（光佐は飛びかゝらうとする。）

顯尊　（見かねて泣きながら）母上、何事で御座りまする。此期に及んでの御爭は、往生の障になりますぞ。罪深い事とは思されませぬか。

光佐　（男泣になく）生死の境まで、現在の妻とかやうに憎み合はねばならぬとは、何と云ふ罪ふかい宿業ぢや。

（喊聲また烈しくなる。）

（傷ついた一人の武士が驅けて出て來る。）

武士　大手の大將、刑部頼廉申上げまする。敵はもはや、逆茂木を打破つて、御門の塀際まで、ひた〳〵と押寄せました。遲くとも半時とは持つまいと存じまする。最期の御用意遊ばされませい。

光佐　（きつとなる）心得たと申せ。必ず氣を落とすな。最後の一人になるまで防矢仕れ。

武士　はつ。承知仕る。然らば御免。（退場）

（大砲の音がやゝ遠く二三發きこえる。實悟と覺淳が戻つてくる。）

實悟　もはや、濱手の御門は危う御座る。防矢仕る者も、僅か五十人程になり申した。それとても、寺內に召使は

るゝ雜人原を狩り集めた後詰の勢で御座れば、所詮たのみにはなりませぬ。

覺淳　寄手もさすが攻めあぐねて、只今の處は、一丁ばかり引退ぞき、呼吸を入れてをりまする。もはや、御最期の御仕度と存じ、先刻の御頼みを思出して、薪に火をつくるために戻つて參りました。

光佐　然らばいよ〳〵最期ぢや。（腰元たち聲高く泣く）

（大砲の響が近く二三發鳴り響く。）

阿茶丸　（泣出す）…

北の方　これ、靜にしや。よい子ぢや。この母が抱いてゐるのぢや。恐ろしうはないぞよ。

實悟　夜があけて、あたりが明るうなつたので、海上を警しむる九鬼の軍船より、大砲を發ちまするのぢや。

覺淳　（恐ろしげに）城崩しとやら名づけ申して、雷のやうに觸るゝ物を打碎きまする。

光佐　顯證寺。御身は薪に火をつくる前に、この本堂の外に廻つて、扉を悉く閉め、釘を打ちつけて置くのぢや。

覺淳　何と仰せられまする。釘づけに致すので御座りまするか。

光佐　さうぢや。

（腰元たち色を失ふ。）

覺淳　（力なく）承知仕る。（退場）

光佐　（腰元たちに）もはや、何としても免れられぬ。不便ではあるが、そちたちも覺悟いたせ。（實悟と顯尊に向つて）火が廻つて參るまでの間、皆、共々に、彌陀の和讃を唱へようでは御座らぬか。

實悟　（深刻なる顏付で）生きながら、如來の引接に會ひたてまつる御心ぢやな。よい思付きと存ずる。

光佐　（顯尊に）そちも仕れ。

顯尊　かしこまりました。（哀願する）母上。せめては後世安樂のため、共々に、唱へ奉らうでは御座りませぬか。

（扉の外より釘を打つ音が心を刺通すやうに響く、腰元たちは耳をおさへて顫ひゐる。）

北の方　（わが身内に釘を打たるゝやうに苦惱す）…わが身は、阿茶と共々に、のたうちまはつて苦み死をするのぢや。

實悟　（周圍の光景を見聞きせぬやうに眼をつぶり合掌して）南無阿彌陀佛。〻〻〻〻〻。

光佐　（澄んだ聲で和讃を唱へはじめる）

無明の大夜をあはれみて、
法身の光輪、きはもなく、
无碍光佛としめしてぞ、
安養界に影現する…

（一同これに和す。念佛稱名。）

（扉の外に烈しい擾亂の聲、驚破（すは）とばかり一座は最後の大緊張をしめす。）

實悟　（大聲に）敵が亂入いたした。（思はず立ち上る）

（腰元たちも立上つて、恐ろしい恐怖の叫びをあげる。扉をたゝく音。）

光佐　（思はず顯尊と相抱く。眼を爛々と輝かして、ひたと扉の方を見つめる。神經的な叫び）火ぢや。早く――火は如何いたした。

（北の方は切れるやうに阿茶丸を抱きしめて、眼をつぶる……。）

（烈しい響、人聲。扉が破れる。「父上」と云ふ帛を裂く叫がきこえる。堅く鎧うた敎如が轉ぶやうに入つてくる。つゞいて敎行寺證誓。按察使法橋賴龍、粟津源六が、同じやうに甲冑をよろうて入つてくる。源六は傷を負うてゐる。）

光佐　（少時は氣付かぬ樣子。凄い顏付で鋭く）誰ぢや。何者なれば、さやうな狼藉をいたすのぢや。退がれ。退がれ。

敎如　（跪づいて）父上、私で御座りまする。敎如で御座りまする。

光佐　敎如。（かう云ひかけて、凝乎つと敎如の顏を覗くやうに見る。少時、思はず叫聲を上げる）敎如ぢや。おお、そちは敎如ぢや。

敎如　父上。（かう云つたまゝ、硬ばつたやうな顏付で、凝乎つと光佐を見る。やがて、その表情が破れて、涙がハラハラとこぼれる。聲をうるませて）敎如。嬉しう存上げまする。……

光佐　おゝ、よう戾つて參つた。（涙を押拭ふ）

顯尊　（敎如の側ににじりよる）兄上。

敎如　興門。父上はじめ、そなたにも計らずも今生の内に再び廻りあうて嬉しいぞ。……

顯尊　（泣く）兄上の事を思はぬ日とては一日も御座りませんでした。

敎如　（顯尊の手をしつかり握つて）天下廣しと云へども、只今、われらをさほどまで思うてくるゝはそなた一人ぢや――その志、敎如は決して忘れぬぞよ……

實悟　（がつかりしたやうに）敎如殿。よい時に戾つて來られた。見らるゝとほり、本堂の扉をこと〴〵く釘にて打ちつけ、外より火をかけんといたし居つた處で御座る。今一時遲くば、もはや今生の内には御眼にかゝれぬ筈で御座つた。（涙をおとす）

敎如　（手に顏を埋めて）われらは仕合者で御座る――如來は、まだわれ等を見離し玉はぬ……

光佐　そちが戻つて參つたので、親子一門、打ちそろうて、彌陀の淨土へ參らるゝ。（しげ〳〵と敎如の顏をみる。聲を曇らせて）やつれては居れど、筋骨もたくましう天晴の男になつたのう……

敎如　（心弱くなる）父上、この二年が程は、敎如も、これまで覺えぬ辛苦を致しました。（泣く）

光佐　（耐らなくなるのを凝乎つと耐へて、わざと强く）親に反いたよい見せしめぢや。

敎如　（泣きながら）この期に及んでも、まだ、それを仰せられまするか、それ程までに、この敎如は親の憎しみを負はねばならぬとは、よく〳〵、因果な生れで御座りまする。

顯尊　（ハラハラして）父上。只今が、一門の者どもの身の終りで御座りまする。兄上の罪をお咎め遊ばすことを、どうぞおゆるし下されませ。顯門、身にかへて御願いたしまする。

光佐　（泣く）これ、顯門。そちには、この父の心が分らぬか。われは決して敎如の罪を咎むるのではない――わが子がいとほしいのぢや。所詮、わが者と思へばこそ、かゝる愚痴も出るのぢや……

敎如　（光佐を見つめてゐる、やがて泣く）父上、どうぞ、おゆるし下されませ。只今までは父上の御心が、この敎如には何としても分りかねたので御座りまする。さればこそ、一昨年以來、勿體なくも父上を恨みたてまつり、荒びはてた心を以つて、諸國を流浪いたしたので御座りまする。

光佐　敎如。もはや、何れにも參るなよ。

敎如　はい、かしこまりまして御座りまする。

光佐　（神經的に笑ふ）いま死ぬる身ぢや。もはや參らうとて、參られぬわ。

（一座皆泣く。）

（大砲の音、喊聲。）

敎如　（聞耳を立てる。決心をハッキリ顏に現はして）もはや、最期の時で御座りまする。あの喊の聲には、勝ちほこつた寄手の勢がみなぎつて居りまする。（阿茶丸を抱いたまゝ、敎如をわざと見ないでゐる北の方の側に寄る）母上不孝な敎如は、長い間、母上にも御歎きをかけました。おゆるし下さりませ。（凝乎つと北の方を見る。萬感胸にあふれて、自然と淚が出て來る。敎如は聲をうるませて）さ、母上、最後の御別れで御座りまする。どうぞ、ゆるすとたゞ一言、仰せられて下りませ。

北の方　（熱し切つた冷やゝかさで）父上に楯ついて、門末の寺々を集め、宗門に謀叛をいたすそなたぢや。この母のゆるしなどは、望みではあるまい。

教如　（顔を手で掩ふ）　あゝ、やはり御心は前と變らぬ。母上、どうぞ、おゆるし下さりませ。御憎しみを負うて冥土へ參るは罪深い事で御座りまする。

北の方　（凄い微笑）　阿茶。そなたと二人で、焰に燒かれて、抱合うたまゝ死にませうぞ。（頰ずりを烈しくする）

顯尊　母上。どうぞ、兄上をおゆるしなされて下さりませ。

光佐　（耐へかねて北の方に）　鬼畜にも劣つたる心根ぢや。その心を改めずば、淨土には參られまいぞ。

北の方　（泣くにも泣けぬ苦しみに身を顫はせて）　鬼畜に劣つた心は、生きながら地獄に落ちた苦しみで御座りまする。かやうな淺ましい心根には、誰が好んでなりませうぞ。

光佐　それは自から求めたのぢや。

北の方　（泣く）　呪はしいはこの世の中ぢや。肉身の者をかほどまでに憎むとは世にも淺ましい宿世ぢや……。（矢叫びの聲が突然、大きく響きわたる）

覺淳　（入り來る。大音に）　いざ。御用意遊ばしませ。もはや、寄手は一の木戸を打破りました樣子で御座りまする。（大恐怖。大叫喚、光佐は立つて「開山の骨肉の御眞影」を取出し、しつかり抱く。北の方は阿茶を抱きしめたまゝ俯向く。教如は顯尊と手を取り合ふ。腰元たちは人心地なく突俯してしまふ。賴龍源六は互に刺違へようとして、刀を拔く。實悟と證誓は瞑目、念佛——阿茶の泣聲が、高く響く）

（下間刑部賴廉が入つて來る。）

賴廉　不思議で御座りまする。只今、寄手の面々が、既に一の木戸を打破つて、ひた〳〵と城内に入こみ、もはや、かうよと見えました折から、如何なる仔細か、そのまゝ足並をみだして、遠く城外へ引去りまして御座りまする。

光佐　（ほつとして）　何、引去つたと申すか。

（超乘が呼吸を切つて驅けてくる。）

超乘　御喜びなされませ。敵は、もはや退散いたして御座る。

光佐　（實悟をかへりみて）　然らば、新手が寄せて參るまで、生命がのびたのぢや。

賴廉　いや、これには何か仔細が御座らうかと存ずる。既に一の木戸を打破りし上は、新手を入れかふる迄も御座りませぬ。つゞいて亂入いたすべき筈で御座る——それを俄かにあわてふためいて引去りましたるは、察するところ、當山に味力の者が、寄手の後より、ひそかに攻めかゝりましたるかと思はれまする。

光佐　織田殿の威勢、海內を壓するこの頃の時節に、當山に加擔する大名もあるまい。

教如　私は四國の長曾我部にかくまはれて居りましたが、

京よりの間者が戻つて參りまして、織田殿大兵を以て四國討伐の御仕度中と承はりましたゆゑ、かね〴〵憎ませらるゝ本願寺ぢや、殊に、鷺の森は道筋にも當ることゆゑ、危ふしと存じ、すぐさま、志の大名たちに加勢を求めましたが、應ずる者とても御座りませんでした。

光佐　大手搦手共々に引去るとは不思議ぢやのう。併し、油斷はならぬ。やがて、前に倍する勢を以て攻寄せて參らうずるぞ。

（法師武者が馳けてくる。）

法師武者　鈴木孫一申上げまする。寄手は既に影も形も見えぬまで引去りましたが、直ちに後を慕うて、追擊いたしませうや。

光佐　いや待て。――敵に如何なるたくみがあらうも知れぬ。決して早まつてはならぬと申せ。

法師武者　はつ。かしこまりました。（退場）

敎如　かほどまで取圍みたる軍勢が俄かに旗をまいて立去るとは、よく〳〵の仔細と覺えまする。（證誓をかへりみて）われらが敵の圍みを打破つて、此處まで參るにさへ、一方ならぬ難儀をいたしたのう。

證誓　貝塚、丹の輪あたりより此方には敵の後詰の者どもが、みち〳〵て居りまする。

（大學が血だらけになつて本堂の扉から覗く。）

北の方　（眼早く認めて）おゝ、大學、何時戻つたのぢや。

（大學本堂に入つてくる。）

大學　皆お揃ぢやな。（苦しげに笑ふ）北の御方。御喜びなされい。信長は死んでしまうたわ。はは……

光佐　大學、何と申す。織田殿が死なれたとは、そりや誠か。

大學　（侮げすむやうな微笑）われらは大身の人たちのやうに僞は云はぬ。信長は一昨夜、京の本能寺で、明智光秀に襲はれて、腹切つてしまうた――血なまぐさい有樣であつたわ。はは……

敎如　明智光秀――むゝ、さては謀叛ぢやな。

北の方　（狂喜して）わが夫――みな〳〵助かりましたぞ。

光佐　おゝ、命拾ひをいたしたわ。（立上る）

敎如　寄手の者どもは、さればこそ、浮足だつて退き去つたのぢやな。

（一座動搖。腰元たちがわつと泣出す。）

（鈴木孫一が足に傷を負つて、出てくる。）

孫一　只今、御注進いたしましたとほり、うらゝかな朝日影に小手をかざして見渡しましたが、もはや、寄手は影も形も見えませぬ。まづ、これで、暫らくは、呼吸をやすむる事が出來まする――早速、物見の者をつかはし置きましたゆゑ、やがて、寄手の樣子は相知れませうと存

じまする。
光佐　孫一。（ハラハラと涙をこぼす）喜べ、織田殿は一昨夜、御自害ぢや。
孫一　何と仰せられまする。
大學　右大臣の位に上つて、天下にはびこつて居つた信長も、明知光秀の恨みの刄に刺貫かれて、死んでしまうたわ、われらはこの眼で見て參つたのぢや。人が何百人となく傷を負うたり死んだりいたして、それは快よい有様であつたわ。（齒を喰ひしばるやうに笑ふ。次第に顏が蒼ざめてくる）
孫一　（狂喜）まことで御座るか。（かう云つて、孫一は跛を引きながら、聲を張上げて唄ひ舞ふ）
あら、目出たやな、目出たやな。
法敵亡びて、萬々歲
淨土他力の宗門は
末廣がりに御繁盛……
（光佐は「開山の御影」を大龕にをさめ合掌禮拜する。）
北の方　阿茶。そのやうに願ふ事はない。もはや死ないでもよいのぢや。
阿茶丸　死ないでもよいなら、麿は、これから柔なしういたしまする。（北の方の胸に顏を埋める）
北の方　（涙ぐんで）おゝ、可愛ゆい言を云うて。――母は悲しうなりますぞ。
（仲之が出てくる。）
仲之　只今承はれば、織田殿。明智に襲はれ、本能寺に御薨去の由、何とも夢のやうで御座る。これで宗門はいよいよ御繁盛。祝着至極に御座りまする。（平伏）
光佐　おゝ、そちたちにもいかい苦勞を見せたが、もはや、萬々歲ぢや。
北の方　（大學に眼をつけてゐる）大學、いかゞいたした――傷を負うたか。
大學　只今、當寺に參るために寄手の陣中を驅けて參ると き、鎗を以つて脾腹を突かれ申した。いや惜しい生命でも御座らぬ。死んでしまへば、何人も髑髏ぢや。はは……
教如　刑部
賴廉　はつ。
教如　味方の軍勢は何程殘つて居る。
賴廉　されば……二百も居りませうかと存じまする。
教如　（思案する）二百か……父上、御願が御座りまする。
光佐　何ぢや。
教如　宗門の恨みは、決して織田殿一人では御座りませぬ。

石山以來、味方を苦しめし織田の士卒を、たゞ阿容阿容、このまゝ歸しては、敎如、何としても腹が癒えませぬ。何卒、二百の門徒をおかし下されませ。まつしぐらに敵を追うて、浮足だつた奴原を皆殺しに致してくれようと存じまする。

光佐　（烈しい憎惡の眼で、敎如をみる）　何と申す。そちはこの上、人を殺したいか。

敎如　恨ある奴原を生かしては歸されませぬ。

光佐　（勃然として）　默れ、敎如。そちの心には夜叉が宿つてゐるぞ。やうやく萬死の内に一生を得て、我々一同愁眉を開いたばかりのところぢや。今、われらには敵も味方もない――たゞ人間がいとしいわ。法敵の大將。織田殿でさへ、もし、生きて居らるゝならば、手を握つて、涙ながらに御物語をいたしたく思ふくらゐぢや。それに何ぞや、修羅の心を忘れかぬ、舊き憎しみによつて、逃げゆく者共を皆殺しに致さうとは、宗門の者ともおぼえぬぞ。

敎如　さりとは心弱き御仰せ、わが宗門の爲に血を流したる門徒衆の仇を討たうとは思ぼされぬか。

光佐　門徒衆が何でさやうな仇と思うて居らうぞ。やはり、そちは母の心をうけついで居る。もはや、われは、そちを見棄てた。七生まで勘當いたすぞ。

大學　（狂氣のやうに。蒼ざめた顔で笑ふ）　はは、……（やがて大學は力なく倒れて死んでしまふ）

顯尊　（泣きながら）　父上、あゝ兄上……

實悟　（合掌したまゝ顯尊に向つて）　與門。ようお聽きなされい。親子と生れ、夫婦とちぎつた人間が、かやうな深い憎しみに打沈み、不和をくりかへして參る内に、その血筋より新たに、また人間が生れて、世は次第に移りかはるので御座る。これこそ凡慮には計り知られぬ如來の下された謎で御座るのう。

――幕――

大佛開眼（五幕十二場）

聖武天皇詔勅

朕以薄德恭承大位。志存兼濟。勤撫人物。雖率土之濱已霑仁恕。而普天之下未洽法恩。誠欲賴三寶之威靈乾坤相泰。修萬代之福業動植咸榮。粤以天平十五年歲次癸未十月十五日。發菩薩大願。奉造盧舍那佛金銅像一軀。盡國銅而鎔象。削大山以構堂。廣及法界。爲朕知識。遂使同蒙利益。共致菩提。夫有天下之富者朕也。有天下之勢者朕也。以此富勢造此尊像。事之易成。心之難至。但恐徒有勞人。無能感聖。或生誹謗。反墮罪辜。是故預知識者。懇發至誠。各招介福。宜每日三拜盧舍那佛。自當存念各造盧舍那佛也。如更有人情願持一枝艸一把土助造像者。恣聽之。國郡等司。莫因此事侵擾百姓强令收斂。布告遐邇知朕意矣

人物

託阿眞玉　大佛師
國公麿　大佛師
高市眞國　大鑄師
高市眞麿　大鑄師
柿本男玉　大鑄師
行基大僧正
良辨僧都
玄光律師
吉備眞備
藤原仲麿
栖戸辨麿　養徳畫師
葛城若女　公麿の娘
筑紫娘子
唐僧道璿
婆羅門僧正　菩提仙那
大神杜女　宇佐八幡禰宜尼
林邑僧佛哲
葦柄郡司
相模舍人　その子
頰に瘤のある男　後に沙門行信
橘奈良麿
その他、僧侶、采女、賦役の工人、土民の群集など。

時代

天平十八年より天平勝寶四年まで。

場所

平城京。

第一幕

第一場

天平十八年十月のある夜。滿月。廣い路上。盧舍那佛大像鑄造の御願のため、灯を點した燈籠一萬五千餘杯が、猿澤の池の周圍から、三條大路にかけて、一面に輝きわたつてゐる。

正面、森々とした杉の木立、次第に高くなつた處に、興福寺と、その五重塔とが、隱見してゐる。左の方、丘の裾から、低く取廻した築地の塀があつて、支那風の瓦屋根が諸處に見える。こほろぎの聲が、ほそ〳〵ときこえる。中央の道路を開けて、興福寺の塀のところから、斜に丘の下の築地のあたりまで、一面に金鐘寺の燃燈供養に出場する法師たちが、式の裝で休んでゐる。一方は菅原寺の法師、一方は河内の智識寺の法師たちである。

智識寺の法師一　此頃は、燈籠を立てゝ供養する事が、大流行ぢや。

同二　さればぢや。

同三　不思議な事が流行りだしてきたものぢやのう。

同一　一昨年、紫香樂の京に、盧舍那佛の鑄型を作られた時からぢや。あの時の燃燈供養は寒かつたのう。

同四　あの鑄型は、もう崩れてしまうたであらう。

同二　いや、この間、紫香樂から來た人の話では、まだ、あの儘殘つてゐると云ふ事ぢや。

同三　あの鑄型も成佛は出來ぬな。

同四　本統ぢや。もし魂があるならば定めし宙宇に迷うて居る事であらう。

同二　氣の毒なのは、楯戸辨麿ぢや。

同一　あの養德畫師か。

同二　さうぢや。あの失敗のために、此度の鑄造には選まれぬのぢや。

同四　あれは國公麿が惡かつたのぢや。

同三　どうして。

同四　楯戸辨麿は盧舍那佛の御姿を、智識寺の御本尊にならうて造らうと思うたのぢや。

同二　天竺そのまゝの佛の御姿ぢやな。

同四　さうぢや。辨麿は皆も知つてのとほり玄昉僧正の渇仰者ぢや。あの御本尊を玄昉僧正が唐土から持つて歸られた時、凝乎つと見て、涙をこぼしたと云ふ男ぢや。

同一　辨麿は、僧正が初めて智識寺に、帝の行幸を仰いだ

時も、來て嬉し泣きに泣いて居つた。

同四　さう云ふ男ぢや。僧正遺愛の御本尊にならうて、盧舍那佛を造らうと思うたのは、當然ぢや。ところが國公麿は、また異うた考を持つて居つたのぢや。

同一　あの男は百濟人の孫ぢや、亡國の遺民ぢや。

同二　さうぢや。我ら日本の人間とは、考も異はう。

同四　公麿は、健駄羅國の佛の御姿を基として造らうと思うたのぢや。そこで、二人の間に爭ひが起つた。鑄型は何度となく造つては破されると云ふ有樣ぢや。その內に皆も知つて居られるとほり、山火事は何度となく起る、大地震はあると云ふ騷ぢや。あの時公麿が、ひそかに帝に、玄昉僧正の持つてきた佛像にならうて造らうとするゆゑ、このやうな不祥な事が起るのであらうと申上げたので、そのまゝ御取止になつたのぢや。

同三　公麿は惡い奴ぢやな。

同二　併し、あの男では、この度の盧舍那佛もまた失敗ぢや。あの男には何の勝れた處もない。云はゞ凡才ぢや。

同一　健駄羅風のしかも拙い盧舍那佛が出來上るであらう。はは……

同四　この度も婆羅門僧正が、栢戸辨麿を帝に推擧されたが、とう〳〵御聞入れがなかつたと云ふ話ぢや。

（菅原寺の法師たちはそれを聞いて次第に穩かでなくなる。）

同三　玄昉僧正に緣ある者は、もう世の中には出られぬのぢや。

同二　それと云ふのも、皆あの乞食坊主のためぢや。

同三　さうとも、さうとも。あの坊主は、橋を架けたり井戶を掘つたりして、愚民どもの御機嫌を取つてゐればそれでよいのぢや。

（菅原寺の法師たちは、怒つて立上る者、それを留める者、互ひに入亂れて、動搖する。）

菅原寺の法師一　（留めるのを振拂つて）もう聽捨にはならぬ。これ、賫僧ども。乞食坊主とは誰の事ぢや。（智識寺の法師たちは默つて、さも輕蔑したやうに見てゐる）これ程言うても返事をせぬとは、禮儀も何も知らぬ奴等ぢや。

智識寺の法師二　（冷やかに）氣狂が何かわめき立てゝ居るやうぢや。喧ましくてならぬ。そろ〳〵行かうではないか。

菅原寺一　何、氣狂ぢや。（飛びかゝる）

（雙方の法師、殺氣立つ。）

智識寺二　さうぢや。氣狂と云うたのが、何で惡いのぢや。我らが靜かに語り合うて居るところに口を入れて、わめき立つるのが、氣狂でなくて何であらう。

菅原寺一　行基僧正の惡口を云うたからぢや。
智識寺三　誰がそのやうな事を云うたのぢや。
菅原寺一　貴僧たちぢや。
智識寺四　我らは當時飛ぶ鳥も落すやうな行基菩薩の惡口などは決して云ひはせぬ。のう。同宿。
智識寺の法師たち　さうぢや。誰もそのやうな事は云ひはせぬ。
（「いや、言うた。」「云はぬとは卑怯ぢや。」と云ふやうな怒りの聲が、菅原寺の同宿たちの間に起る。）
（此時從僧一名をつれて興福寺の門より玄光律師出てくる。）
菅原寺二　まあ、待て。我らがきつと應對して見せる。（進み出る）智識寺の法師たち。
智識寺一二　（聲をそろへて）何ぢや。
菅原寺二　貴僧たちは決して行基菩薩の事は云はぬと云はるゝのぢやな。
智識寺二　さうぢや。
菅原寺二　然らば先刻、井戸を掘つたり橋を架けたりして愚民の御機嫌を取る乞食坊主と云はれたのは、誰を指したのぢや。
智識寺四　我らの一番厭ひな奴を指したのぢや。
（菅原寺の同宿騷ぎ立つ。智識寺の法師たちも、互ひに身をよせて、いざとばかり身構へする。玄光律師は默つて見てゐる。）
菅原寺二　然らば、法師にあるまじい行ひのため位を奪はれ筑紫へ追ひやられた上、何者かに刺殺さるゝのと、井戸を掘り橋を架けて、民福を圖るのと、何れが善い行ひぢやと思はるゝか。
智識寺四　それは皆、乞食坊主の讒言のためぢや。あの才學に秀でた玄昉僧正が、何で法師にあるまじい行をなされよう。それともさやうな證據ばしあつて言はるゝか。
菅原寺二　いや、我等は誰と人を指しはせぬ。たゞ我らの一番不愢ぢやと思ふ奴を云うたまでぢや。
（菅原寺の同宿の間に笑ひごゑが起る。）
菅原寺一　はは：：氣味のよい事ぢや。智識寺の法師たちのあの賢さうな顏、はは：：
智識寺三、四　おのれ、嘲弄するのぢやな。（打ちかゝる）
玄光律師　（前へ進み出て）待て。法師の身で爭ひをするとは何事ぢや。
（雙方の法師たちの間に『玄光律師ぢや。』と云ふ低い聲が湧く。）
菅原寺一　智識寺の法師たちが、聞くに耐へぬ惡口雜言をいたしましたゆゑ、つい：：
智識寺二　いや、彼等の僻(ひがみ)より爭ひとなりましたので御座

ります。

玄光律師　貴僧たちは、今日はどのやうな日ぢやと思うて居らるゝのぢや。忝なくも帝が、盧舍那佛大像の建立のため、供養遊ばさるゝ日で御座る。貴僧たちも、その供養に列るために、此處まで來られたのであらう。身につけた袈裟に對して恥ぢらるゝがよからう。（一同無言）それとも强つて爭はうとならば、僧綱所へ訴へて、法に從つて裁いて進ぜるまでぢや。（沈默）俺の云うた事が分つたならば、此樣な處で道草を喰はずに、早く金鐘寺へ行かるゝがよい。

雙方の法師たち　はつ。恐入りました。

（法師たちは二つの群になつて、各玄光律師に禮して去る。）

玄光律師　（後を見送つて從僧に）あまり騷がしいので何事かと思うたら、あの始末ぢや。あれが所謂末派と末派の爭ひぢやな。恐ろしいものぢや。俺も支度をして、そろそろ金鐘寺へ行かずばなるまい。一更には帝の出御ぢや。（去る）

（舞臺少時空虛。）

（やがて、葦柄郡司と、その子の相模資人が旅裝で馬に乘つて現はれる。從者一人。郡司も資人も刀子を帶びてゐる。）

郡司　よい月ぢや。この邊で、一休みして行かうではないか。

資人　（年若い美しい男）今日は大分歩きました。お疲れで御座りませう。

（二人は馬から下りる。從者は馬を曳いて二人の傍をはなれ、路傍の木につなぎ、その根に腰かけて居眠を始める。）

郡司　年は取りたくないものぢや。（石に腰かける）やれやれ、疲れた。

資人　（立つたまゝ、凝乎つと考へてゐる）

郡司　そなたも腰を下して休んではどうぢや。

資人　父上。これが平城の京で御座りまするか。

郡司　さうぢや。京ぢや。俺も二十年振りに、やうやく上つたので、嬉しくつてならぬ。此處が三條大路ぢや。

資人　大きな池ぢや。これがよく父上のお話し下された猿澤の池で御座りまするか。

郡司　いかにも、猿澤の池ぢや、秋風のわたるにつれて、小波の動く有樣は、少しも昔と變らぬ。この池の傍で、そなたの母と俺とは、始めて會うたのぢや。

資人　……父上。私は何となく心細くなつて參りました。

郡司　（資人の顏を、覗くやうにみる）何ぢや。そなたは涙ぐんでゐるのか。（笑ふ）故郷を思ひ出したのぢや

な。相模の野が戀しうなつたのぢやな。よし、よし。それも一時の事ぢや。京に馴れてしまへば、何時となく忘るゝのが習はしぢや。若い心は、何事につけても、氣の沈む事があるものぢや。

資人　出會ふ人も出會ふ人も賢しげな見知らぬ人ばかりぢや。築地を立廻した大きな館や、寺が、數限りもなく立並んでゐるのみぢや。……父上、京とは云ひ知れぬ寂しい處で御座りまするなあ。

郡司　夜の寂しさは、京も鄕も變らぬ。人の寢靜まる時ぢや。やがて、夜が明けると、そなたは美しい京の娘子を見るであらう。平城の京は今が世の盛りぢや。國々から選まれて、京に召出された釆女たちの赤裳曳く姿に、心があくがれるやうになると、見知らぬ人にも怯れぬであらう。

資人　父上、私は母上の事が忍ばれてなりませぬ。奈良坂こえて、京に入るまでは、駒の足並ももどかしいやうで、御座りましたが、……ひとり寂しく相模の家の灯の影に物など縫うて居られる母上の御姿がふと思出されて、眼に見えるやうで御座ります。

郡司　物思ひは限のないものぢや。長い旅路の疲から、心が弱くなつたのかも知れぬ。まあの燈籠の灯の池に映る風情を見るがよい。そなたには美しうはないか。

資人　さつき、奈良坂の尾の上から見えたのは、この灯の光で御座りましたなあ。私は狹霧の底にきらめく數知れぬ光を見て、夜の空が靜かな海に映るのかと思つて居りました。その時、父上が、あれが京ぢやと仰しやいました。

郡司　一萬五千抔の燈籠を盧舍那佛に奉られたのぢやと、道行く人が話してゐたが、偉い事をなされたものぢや。二十年前にはこのやうな事は夢にも見る事が出來なかつたが……

資人　その盧舍那佛の出來る御寺は何處で御座りまするか。

郡司　この大路を北に行つた處であらう。京の東山を切開いて造らるゝと云ふからのう。

資人　山のやうな大きな御佛が出來るのぢやと、人々が云うて居りましたが、本統で御座りまするか。

郡司　さうぢや。餘程大きな御佛と見える。何時ぞやの勅に、國銅を盡して象を鎔すとあつたのを見ても、その規模の程が思はるゝ。何さま日本建國以來の大事業ぢやな。

資人　帝は、そのやうな御願を、何の爲めに御起しなされたので御座りませうか。

郡司　されば……我ら卑しい者の謀り知る事の叶はぬ大御心ぢや。

資人　恐れ多い事ながら、そのやうな大事業が人間の力に及ぶもので御座りませうか。

郡司　人間の力に及ぶか、及ばぬか、たゞ御佛が知つて居らるゝだけぢや。勅には「夫れ、天下の富を有つ者は朕なり。天下の勢を有つ者は朕なり。この富勢を以つて此尊像を造る。事の成易き、心の至りがたき、但恐らくは、人を勞するあつて、能く聖を感ずるなく、或は誹謗を生じ、反つて罪辜に墮ちん。」とある。世に名高い天平十五年の勅ぢや。

資人　父上。帝は何時の頃から、盧舍那佛鑄造の御願をお起しなされたので御座りませうか。

郡司　さあ、それは我らには分らぬ。人の噂では、國々に國分寺を建立せられた頃からとも、また、大御位に卽かせられた時からの御願ぢやとも云ふ。或は、河內の智識寺に行幸せられたとき、玄昉法師が唐土から持歸つた天竺傳來の金銅盧舍那佛をお拜みなされてから、思立たれたとも云ふのぢや。

資人　また、諸國から、賦役の民を召さるゝので御座りませうなあ。

郡司　天下未曾有の大工事ぢや。賦役に召さるゝ民の數は大したものであらう。――佛法の榮ゆるは、結構な事ぢや。併し、京を諸處に移されたり、大きな御寺を數限りもなく造られたりして、賦役に出づる諸國の民の苦しみを思ひやられぬのは、心得がたい事どもぢや。

資人　父上、秋の風身にしむ驛路の夕暮れに、私も、そのやうな民のつぶやきをきゝました。

郡司　廿年の間に、世の中がすつかり變つてしまうた。郡司の職を長うつとめた俺には、民の心がよく分る――この頃は、人の心が次第に險しくなつてゆくやうぢや。

資人　山賊の群が多くなつて、眞晝、村里を襲うてまゐると、鈴鹿の關守が云うて居りました。

郡司　山賊も多くなるであらう。（刻の鐘遠く鳴る）や、もう、酉の下刻ぢや。明日はまた、そなたを式部省につれて行かねばならぬ。早う簡試をすまして、そなたが資人を命ぜられぬ內は安心が出來ぬ。

資人　父上、馬飼の童は疲れたと見えまして、眠つて居ります。

郡司　何にせよ。もう京に來てしまうたのぢや。今宵は南家の參議さまの御館へ參つて泊まるのぢや。久振にゆるゆる手足を伸ばして寢られる事であらう。こりや、馬飼の童、起きぬか。

資人　馬飼の童、もう行くのぢや。（馬飼の童、眼をさまし起上つて、馬を引いてくる）父上、南家ならば、大納言さまの御館では御座りませぬか。

郡司　大納言さまは兄君ぢや。我らが參るのは、弟君參議仲麿さまの御館ぢや。

資人　何故兄君の御館へは參らぬので御座りまするか。

郡司　それには少し仔細もあるが、元來俺はあの濶達な御氣象の參議さまが好きぢや。

資人　（郡司が馬に乘つたのを見て自分の馬の手綱を握つて、地上に立つたまゝ）世の中には御兄弟の御仲が美はしうないと申す者が御座ります。

郡司　（資人には答へず馬上から遠方を凝乎つと見つめてゐる。やがて）おう、誰やら、あすこから、公卿らしい御方が見えるわ。眼が遠うなつて、よう見えぬが……

資人　大勢の人が供をして此方へやつて參ります。

郡司　五位以下の俺ぢや。馬上の姿をとがめられてもつまらぬ。厄介な事ぢや。（馬から下りる）

（藤原仲麿が從者數人を伴つて騎馬で出てくる。）

郡司　おう、參議樣ぢや。（一二歩進み出る）

仲麿　（馬上より見る）誰ぢや。

郡司　（恭々しく禮して）相模の葦柄の郡司で御座ります。刑部多禰彥で御座ります。（馬飼の童は馬を引いてかくれる）

仲麿　うむ。これは珍らしい。刑部の爺であつたか。して、今頃、此のやうな處で何をして居るのぢや。

郡司　たゞ今、京へ着きまして御座ります。

仲麿　何、今着いたと申すか。

郡司　はい。これより御館へ參らうと思うて居りました處で御座ります。

仲麿　何にいたせ、よう上つて參つた。何うぢや。京も變つたであらうがの。

郡司　私の居りました頃の面影は少しも見えませぬ。たゞもう驚くばかりで御座ります。

仲麿　して、その若者は誰ぢや。

郡司　私の子息奴で御座ります。どうぞお見知りおかれますやうに。（頭を低ぐ。資人、父の後より初々しく頭を低げる）

仲麿　そちの子息か。よい若者ぢや。名は何と云ふ。

郡司　參議さまに御返事申上げぬか。

資人　鮪と申します。

郡司　もはや十九では御座りまするが、鄕育ちのまだとんと何も辨まへませぬ。此度召伴れて上りましたは私の跡をついで資人と致し、名ある御館に仕へさせむ爲で御座ります。何分とも私同樣お眼をおかけ下さりませ。

（資人また父にならつて禮をする。）

仲麿　うむ。こりや鮪。そちが父は我家に仕へて、心實なる者であつたによつて、葦柄の郡司に推擧いたしつかは

したのぢや。そちも我家へ參るがよい。幸、今宵供養の場にて、式部卿に出會ふゆゑ我家へ參るやう我らより取計らうて置かう。いや、待て。（物を案ずる樣子、やがて、從者たちに）そちたちは、少時、此處を遠慮いたせ。

（馬より下りる。）

從者たち　はつ、かしこまりました。（馬を引いて去る）

仲麿　刑部の爺。近う‥‥

郡司　はつ。（恐る〳〵仲麿の傍へ行く）

仲麿　（郡司を見つめてゐる。眼光次第に鋭くなる）そちは昔のとほり我らに忠勤をつくす所存に違ひはあるまいな。

郡司　（その威に打たれて）はつ。

仲麿　（眼を轉じて、資人を見つめる）そのかみ長屋王が、私かに皇太子を呪詛されしとき、帳內となつて長屋王の御館に仕へ、我藤原家のために、盡してくれた功は、我ら未だに忘れぬのぢやのう。

郡司　（感激して）參議さま。身にあまる御言葉恐れ入りまする。

仲麿　（また眼を資人の上に轉ず）爺よ。そちが鮪はやはりそちのやうに我らに忠勤をはげむ心であらう。

郡司　申すまでも御座りませぬ。（資人の方を見て云ふ）

仲麿　いや、我らはその誓ひを、鮪の口からきゝたいのぢや。

資人　（跪づく）參議さま。もし忠勤を怠りましたならば、來世は地獄に墮ちて八裂にせらるゝ法もあれ。（祈るやうに言ふ）

仲麿　よう誓うてくれた。

郡司　子息奴には、どのやうな御用を仰付けられまするので御座りまするか。

（資人は跪づいたまゝ熱心に仲麿を見上げてゐる。）

仲麿　我ら心の秘密にかゝはる事ぢや。人に洩れてはならぬ。まそつと近う。

兩人　はつ。（仲麿の傍近く立ちよる）

仲麿　鮪は橘奈良麿の家に資人として行くのぢや。

郡司　あの諸兄公の御子さまの‥‥

仲麿　さうぢや。つとめて忠勤をはげむのぢや。そして奈良麿の腹心となるのぢや。

資人　何故そのやうな事を致すので御座りまするか。

仲麿　（聲低く）奈良麿は我らと血緣の者ぢや。然るに彼の男は、我ら藤原の一族に敵意を抱いてゐる。權勢を欲するからぢや。やがては我ら一族を亡ぼして己の大野心を遂げようとするであらう。我らの親しい徒弟、廣嗣が朝敵となつて筑紫に憤死したのも、彼の男と玄昉法師の仕業ぢやと、我等は白眼んでゐるのぢや。

郡司　廣嗣さまはお痛はしい事で御座りましたなあ。
仲麿　廣嗣は聰明な男であつた。我らもあの男には望をかけて居つたが、とう〲あのやうな不幸な事になつてしまうた。
郡司　東の國では、玄防法師と吉備眞備に含む處あつて兵を起されたのぢやと傳へられて居りましたが……
仲麿　吉備眞備も同類かも知れぬ。
資人　參議さま、私は奈良麿さまの御館へ仕へてどのやうな事を致すので御座りませう。
仲麿　いや、別に何事もない。たゞ忠勤をはげんで、奈良麿に深く信ぜられるやうにするのぢや。併し我らとは何のかゝはりもない物として置かねばならぬ。そちの家柄も葦柄の郡司の子息では面白うない。何とか造りかへねばならぬ。
資人　もし奈良麿さまの腹心となりましたならば……
仲麿　奈良麿が心をゆるしたと見たらば、彼の男の身について、そちが不審と思ふ事を、ひそかに我らに知らせて貰ふのぢや。（資人青ざめた顔で仲麿を見つめてゐる）そちの父は長屋王の帳內となつて、やはりそのやうな事をいたした。それが國の爲めによかつたのぢや。その功によつて郡司の地位とそちが母とを得たのぢや。
郡司　これ、子息。たつた一目お目どほりをいたしたばかりで、かやうな重い御用を仰せつけらるゝとは、そちは仕合せ者ぢやぞよ。
仲麿　（郡司に）打見たところ、骨細で美くしげな若者ではあるが、心は父におとらぬ丈夫と我らは見たのぢや。
郡司　恐れ入りまして御座ります。
仲麿　鮪、どうぢや。まだ覺悟がつかぬか。
資人　參議さま、覺悟はついて居りまするが、そのやうな事を致しまするのが、私は氣づかひでなりませぬ。
仲麿　氣づかひとは。
資人　惡い事のやうに思はれまして……
郡司　これ、何と云ふ無禮な。
仲麿　よいわ、爺。そのやうに口荒く申すな。鮪の疑は有理ぢや。
郡司　參議さまの御前をもかへりみずあまりと云へば……
仲麿　そこがよい處ぢや。我らがよく說いてきかせるから、まあ默つて見てゐるがよい。鮪、そちはまだ世の中を知らぬ。よい事も惡い事も、つまるところはその心根一つぢや。たとへ一時の權略を行うても心が誠ならば、神佛も決してとがめはなさらぬ。そちが役目は云はゞ間者ぢや。人の信を裏切らねばならぬ。併し、奈良麿は國の政を亂さむとする奴ぢや。此儘にして置くならば、日本の國はどのやうになるか分からぬ。國を救ふための間

者ぢや。分つたか。
資人　はい。
仲麿　では引受けてくれるのぢやな。
資人　（決心して）仕損じるかは知りませぬが、兎も角も、奈良麿さまの資人にして下さりませ。
仲麿　よく引受けてくれた。鮪、我らは嬉しう思ふぞ。
兩人　忝けなう御座ります……
仲麿　もう供養の刻が迫つてまゐつた。二人とも、今宵は我家へ參つて、ゆる〳〵寢むがよい。我らは供養の場に行かねばならぬ。一更には帝の出御ぢや。
郡司　それではお言葉に甘えまして、御館へ參るで御座りませう。
仲麿　さう致したがよい。（聲高く）供の者ども馬を曳いて參れ。
（從者たちは馬を引いてくろ。仲麿馬に乘る。）
郡司　それでは參議さま。（兩人頭を低げる）
仲麿　また、明日の朝會はうぞ。
（從者たちに擁せられて去る。兩人後を見送る。）

第　二　場

第一場より二三日後。平城京内の雜沓した市場の光景。午後、正面には日の光を受けて、美くしく紅葉した連山が見える。佐保川がこの市場を貫いて流れてゐる。上流の方に支那風の石橋が見え、川の中に、小舟二三艘種々の荷を積んで沈みさうに浮んでゐる。廣場の諸處に土器、陶器、美くしい布、獸の肉などの物品が山のやうに積んである。商人がその品物の前に坐つてゐる。柳四五株。藁ぶきの家二三軒。家には皆大きな窓がある。川向うから、この市の廣場へ來るためには、極く粗末な板橋がかゝつてゐる、市場の上に遠く五重の塔が見える。群集の内で葛城若女が、二人の釆女たちと話をしてゐる。

釆女一　行基菩薩はまだお見えにならぬ。遲い事で御座りまするなあ。
釆女二　私はまだ一度も菩薩の御姿を拜んだ事が御座りませぬ。今日はよい機會ぢや。是非拜んで戻らねばなりませぬ。
釆女一　葛城若女さま。あなたは行基菩薩をお拜みなされましたか。
葛城若女　私もまだ拜んだ事が御座りませぬ。
釆女二　もう餘程なお年で御座りませうなあ。
釆女一　私の母が、まだ、若い頃、菩薩さまの御說教をきいて、尼になつてしまはうと思うたと、話してきかせた

事が御座ります位ゆゑ、もう八十におなりなさるので御座りませう。

采女二　菩薩さまは、まあ、このやうに人を待たせて…

采女一　ほんに早うお出でなさればよいになあ。

葛城若女　（間を置いて）私は行基菩薩を拜むのが、恐ろしう思はれてなりませぬ。

采女二　何故で御座ります。私には、涙もこぼるゝばかり貴いお方とより思はれませぬが…

采女一　まあ、皆さま、一度菩薩さまのお顏を仰いで御說敎をきいて御覽なされませ。神々しいと申しませうか、何と申しませうか、その御聲が心に染みわたるやうで御座ります。なるほど世の中で、菩薩ぢや、御佛の生れかはりぢやと申す筈ぢやとしみ〴〵思はれます。

葛城若女　それが私に恐ろしう思はれるので御座ります。

采女二　葛城若女さま、あなたは不思議な事をお云ひなされますなあ。

葛城若女　巨勢采女さま。あなたは智光法師の物語を知つてお出でなされまするか。

采女二　いえ知りませぬ。

葛城若女　（采女たちの中央に立つて）智光法師と申す人は、才學も辯舌も世に勝れた法師で御座りましたが、帝さまが行基菩薩に御歸依なされて厚くおもてなしになるのをかね〴〵妬ましく思うて、山に隱れ人に背いて暮らして居りました。そして、弟子たちに向つて、行基さまの事を惡しざまに罵り散らしてばかり居りました。

采女二　どのやうな事を申して罵つたので御座りまする。

葛城若女　行基さまには深い學問がない。あれは世の人を欺いてゐる賣僧ぢやと申したので御座ります。

采女二　まあ、惡い法師で御座りまするなあ。

葛城若女　すると、或時、その法師は別に苦しみもせず、ふと死んでしまひました。

采女一　よい氣味では御座りませぬか。

葛城若女　まあ、おきゝなされませ。智光法師はそれから十日目に蘇生へりました。そして大息をついて弟子どもに冥土の有樣を話してきかせたので御座ります。呼吸が絕えたと思ふと、恐ろしい鬼が出て來て法師を逐うて何處ともなく行きましたが、行手に當つて、黃金造りの美くしい御殿が御座りました。法師が不思議に思うて、その鬼に訊ねますと、鬼は冷笑つて、そちは智惠者ときいたのに、あれを知らぬか。あれは行基菩薩が來世の生を受け給ふ御殿ぢやと答へました。

采女二人　（感歎の言を洩らす）まあ…

葛城若女　また何處ともなく行きますと、はるか途のはてに焰の烟が空にみちて、物凄い處が見えました。鬼が、

あれはそちの墮ちて行く地獄ぢやと申してきかせました。智光法師は、地獄の王の前に引出されて、菩薩を謗り嫉むだ罪によつて、銅の火の柱を抱かせられました。法師は身內の燒爛れる苦しさに耐へかねて、一生懸命に叫ばうとしましたら、はつと我にかへつて蘇生つたのださうで御座ります。

采女一　まあ、それから智光法師とやらはどういたしました。

葛城若女　わが惡行を悔いて、行基菩薩にお詫を申上げようと思つたさうで御座ります。その頃菩薩は難波の橋を造つて居られましたが、はるかに智光法師の姿を見て、につことお笑ひなされて智光法師が詫に來たと工人どもに言はれたさうで御座ります。

采女一　冥土の事までも見通してお出でなさるので御座りまするな。

葛城若女　それをきゝましてから私は行基菩薩が恐ろしうてなりませぬ。

（市場の方より橋を渡つて、栯戸辨麿が出てくる。手に大きな酒の瓶を持つて、もう大分醉つてゐる。）

（辨麿は柳の下の石に腰かけて、また、酒を飲む。）

采女二　菩薩さまが、私の故鄕の河內へお出でになつた時分、鄕の人々が大きな池のほとりで宴を開いて、醉ひしれて居つた事が御座いました。（辨麿醉ふと云ふ言をきいて、ふと顏を上げる）折惡しくそこをお通りになると、その群の一番の惡戯者が魚の膾を持つてまゐつて、行基菩薩に、「法師、これを參れ。」と云うて差出しました。菩薩は默つて、それを召上りました。少時して菩薩は池へ向つて、腹の中の物をすつかりお吐きなされたので御座ります。すると、その膾が、あまたの小魚となつて、泳いでいつてしまひましたと云ふお話を、私は聞いた事が御座ります。

辨麿　何、魚の膾が泳ぎだしたと云ふのか。はは…愚かな少女たちぢや。

（采女二人驚いて、辨麿の方を見つめる。そして、何か互にさゝやき合ふ。辨麿また酒を飲む。市人が一人二人橋を渡つて廣場に來る。）

葛城若女　（疑乎つと辨麿を見つめてゐる）栯戸辨麿さま。

辨麿　（驚いて）誰ぢや、我らの名を呼ぶのは。（氣付く）や、葛城若女…（わが眼を疑ふやうに）さうぢや。あれは葛城若女ぢや。確にさうぢや。（烈しい感動）

葛城若女　見ればもう大分醉うてお出でのやうす…辨麿さま。あなたは此頃、すつかり變つてしまひなされたなあ。

辨麿　（眼をすゑて）酒は僞りを云はぬ。正直者ぢや。飮

めばたゞ醉ふばかりぢや。醉うてしまへば何事も苦にならぬ。即ち往生安樂國ぢや。我らはそれゆゑ、心をゆるして、酒をのむのぢや。

葛城若女　何とおつしやるので御座ります。

辨麿　そなたも公麿どのも酒はあまりお好きではなかつたやうぢや。はは……

葛城若女　（むつとして）何かと思へば、酒にかこつけて、あのやうなあてこすり、私はもう聞きたくは御座りませぬ。辨麿さま。人の手前も御座ります。私が、何時、あなたに僞りを申しました。（辨麿、胸中の苦悶を追拂はうとするやうに、頻りに酒を飲む）さあ、辨麿さま、男らしい返事をおきかせなされて下さいませ。

辨麿　（大きな聲を出して）國公麿は大たはけぢや。いや、小才子ぢや。あのやうな男はどうでもなるがよい。はは……（泣く）酒は僞りを云はぬ。酒のためには身代を失ふものもある。死んでしまふ者もある。我らはそこが好きなのぢや、人間には、何時でも、不幸になりたかつたり、死んでしまひたかつたりする望が腹の底にはあるものぢや。

（市人や僧侶が辨麿を取りかこんで、可笑しげに見てゐる。）

葛城若女　辨麿さま。もうよい加減になされませ。父とあなたとの爭は、公の事では御座いませぬか。そのやうならちもない姿で……

（若女はかう云ひながら、辨麿の肩に手をかけて起さうとする。）

辨麿　（振拂つて）辨麿の身體は、どうせもう癈りものぢや。觸れて貰ふまい。（酒を飲む。泣く）苦い酒ぢや。酒は誰でも自分を思うて吳れる者ぢやと信じてゐる……馬鹿ぢや。大たはけぢや……親と子はその姿の樣に心も違ふものぢやと思うてゐる……死ね。不幸の底に沈んでしまへ。

釆女二　もう、およしなされませ。そのやうな人に構うては、おん身の恥になります。

（群集の内から「氣狂ひか。」「いや酒に醉うてゐるのぢや。」「養德畫師ぢや。」「この頃はこのあたりを何時も醉うて步いてゐる。」などと云ふ聲が聞える）

（行基、弟子二人を伴れて現はれる。）

釆女一　（聲たかく）行基さまぢや。菩薩さまがお出でなされた。（跪いて合掌する）

（群集讃歎、同じく跪いて合掌する、南無阿彌陀佛と云ふ聲が、一時に群集の內から起る。）

（行基は廣場の中央に立つ。法師四五人柳の下に立つて、行基に反抗の氣勢を示してゐる。釆女二人も葛城

若女も跪づく。)

行基　(にこやかに)　皆さま。ようこそお集り下された。(輕く頭を低げる。)

群集　南無阿彌陀佛。……

行基　皆さまに今日集まつて頂いたのは何のためか、まづ俺はそれをお話しいたさう。この內には、商人も農人も居られよう。人の妻、または、娘子も居られよう。或は賓人兵衛の方々も居られよう。法師たちも見ゆるやうぢや。その職業の違ふやうに、顏かたち、心もまたさまざまぢや。而も一人殘さすみな佛のためには、かけがへのない大切な子供ぢや。(思はず合掌す)　皆さまを見て居られる佛の慈悲の眦は、常に涙のために、濡れて居るのぢや。

群集　南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。……

行基　佛の慈悲は廣大ぢや、限りが御座らぬ。それならば、何故、皆さまをこの現世に放つて輪廻の苦しみをお與へになるか。魂は過去現在未來の三世に通ずる者ぢや。皆さまは、これ迄幾千劫と云ふ時を生きかはり死にかはりして來られたのぢや。その幾千劫の善果をつんで、漸やく此世に人間と生れたのぢや。それはみな佛の慈悲ぢや。前世には鳥、獸であつたかも知れぬ。

群集　南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。……

行基　皆さまの心の內には、佛性と云うて、未來の世で佛になる事の出來る尊とい美くしい芽が開いてゐるのぢや。これは如何なる惡人にもある。たゞ我執の雲に深くおほはれてゐるだけぢや。

額に黥のある男　佛性とはどのやうな者で御座ります。

行基　そなたは何の罪を犯して黥されたのぢや。

額に黥のある男　馬を盜んだので御座ります。

行基　何度盜んだのぢや。

額に黥のある男　三度盜みました。三度目にこのやうに額に墨を入れられました。

行基　そなたはまだ盜みたいと思ふか。

額に黥のある男　盜みたいとは決して思ひはいたしませぬ。盜まねばならぬやうになるゆゑ、つい盜むので御座ります。

行基　何うして盜まねばならぬのぢや。

額に黥のある男　私は伯樂で御座ります。生れつき貧しい者で御座ります。それに賭博がこの上もなく好きで御座ります。賭博に負けると一日も二日も何も喰べられぬ事が、始終あるので御座います。

行基　それは氣の毒な事ぢや。

額に黥のある男　さう云ふ時に、人の家の肥えふとつた馬を見ますと、どうしても盜まずには居られなくなるので

御座います。

行基　盜んだ馬を賣つた後ではどのやうな心持ぢや。

額に黥のある男　たゞ、これで餓死をせずに濟むと思つて安心するだけで御座ゐます。（群集の内から罵るもの、笑ふものがある）

行基　そなたには佛性がある。どうぢや。時々身も世もあられぬやうに淋しい事があるであらう。

額に黥のある男（考へる）御座ります。御座ります。そのやうな時に私は耐らなくなつて賭博を打つので御座ります。

行基　それが佛性ぢや。そなたは佛性のめざめに耐へきれずして、つい惡事を行ふのぢや。明日俺の寺へ來るがよい。

額に黥のある男（打たれたやうに立上る）佛性があるのぢや。（泣く）

僧一（柳の下に立つて反抗の氣勢を示してゐた内の一人）何が佛性ぢや。賣僧奴。（前へ進む）そちは無智の小人に阿つて、佛法を害なふ極惡人ぢや。

行基　無智の小人も大才の貴人も、佛の眼には一樣の人間として映るのみぢや。佛はそのやうな差別を以つて我らを待つては居られぬ。（額に黥のある男に）こりや、明日はきつと俺の處へ來るのぢや。忘れまいぞ。

僧一　賣僧、然らば、そちは、國家の刑罰にふれたその賤人の何處に佛性を認むるのぢや。

行基　それこそ人心の深秘、口舌には盡されぬ。たゞ心が心を知るのぢや。南無阿彌陀佛々々……

（群集の内に高聲に稱名念佛するものがある。）

僧二（群集に向つて）行基は佛法を害なふ極惡人ぢや。先哲の途をたどつて、深く思を經典にひそむる事もなく、たゞ肆に市井に現はれて、淺薄の教理を說くのぢや。人々、彼に欺かれてはならぬ。

（群集動搖。行基を罵る者、讃歎する者、高聲に念佛稱名する者、入亂れていよ〳〵騷がしくなる。）

（家の窓、皆開く。中から機を織つてゐた女たちが覗く。楯戸辨麿、熱心に行基の顏を見つめてゐる。）

行基　皆さま。俺はまだお話せねばならぬ事が澤山ある。靜かに聞いて下され。（群集靜まる）さて我らは佛の廣大な慈悲によつて有難くも現世に人間として生れてきたのぢや。ところが現世はどうぢや。やはり苦の世界ぢや。そこぢや。皆さまはこのまゝ何時までもこのやうな苦の世界に泣きつ笑ひつ浮きしづみしてゐたいと思はるるか。輪廻の波のまにまに醜い喜怒哀樂の聲を上げて悶がいてゐたいと思はるるか。ひとへに勇猛精進して、來世は必ず西方極樂淨土に生れようとは望まれぬか。そ

れには皆さまの心の內の佛性を培ひやしなつて、行かねばならぬのぢや。
群集　南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。……
行基　皆さま。忝けなくも帝は現世に於て、この日本の國の人間をことごとく佛菩薩からあづかつておいでになるのぢや。
鬚ある老人（突然立上つて）噓ぢや。日本は神國ぢや。帝は畏れ多くも神の御末ぢや。神世の昔、我らの祖先は天孫瓊々杵尊を守護して高天原から天降つたのぢや。佛は異國の神ぢや。帝は我ら國民を天照御大神から賜はつたのぢや。
行基　さうぢや。日本は神國ぢや。帝は我ら國民を天照大御神より賜はつたのぢや。そこで、恐れ多い事ながら、天照大御神とは如何なる御方ぢや。
鬚ある老人　日の大御神ぢや。伊弉諾伊弉册の二柱の神より、高天原をゆづり受けられた女神ぢや。大日孁貴命とも申すお方ぢや。
行基（合掌して）天照大御神は卽ち盧舍那佛ぢや。
鬚ある老人　何ぢや。たはけた事を申すな。
（群集また騷然。柳の下の法師たち一二歩進む。）
行基　決してたはけた事でない。我らの神大日孁貴命の本地は天竺の盧舍那佛。盧舍那佛の化身は大日孁貴命ぢや。

僧一（冷笑ふ）不思議な說ぢや。我ら寡聞にしてまだそのやうな珍說を經文で讀んだ事がない。こりや賣僧。如何なる典據あつてそちはそのやうな事をいふのぢや。
行基　佛法は經文によつて、我らの心耳に明らかになる。然るに經文はたゞ文字を集めたものぢや。讀誦する人の心によつて死にもし、また生きもする。佛法の意識が深くなければ如何に經文を讀んだとて深旨に徹する事は思ひもよらぬ。
僧二　まづそちの妄說の典據を云へ。
行基　いかにも聽かせ進ぜよう。（合掌）これは當今の帝の御代に行はれた奇蹟ぢや。皆さま、帝がこのやまとの平城の地を相して十六丈の金銅盧舍那佛大像を鑄造遊ばさむとする御宿願はすでに知つて居らるゝであらう。この行基もまた帝の大御旨を承はつて、諸國に勸進したのぢや。さて、愈建立となつて、帝はやはり遠祖なる神々の御心を思召された。そこで行基に勅があつたので、俺は早速伊勢の神宮に參つて內宮南門の大杉の下に廬を造り、帝より賜つた佛舍利一粒をさゝげて祈つたのぢや。——天平十三年の秋の事で御座る。すると、第七の夜、夢ともなく現ともなく神殿の扉がおのづから開け、大音に、「實相眞如之日輪。照二却生死之長夜一。本有常住之月輪。爍二破煩惱之迷雲一。我今逢二難レ遭大願一。如二渡得レ船一。

又受難得寶珠。如暗得炬。師其持舍利。藏埋飯高鄕。以賴邦家。と、唱ふる御聲がきこえたのぢや。

群集　南無阿彌陀佛。々々々…………

行基　俺は佛舍利をさゝげて、飯高鄕に藏め京に歸つて、帝にその次第を奏聞いたした。帝は大へんな御喜びであつた。その夜の帝の御夢に日の大御神が現はれましまして、「日輪は卽ち毘盧舍那佛たり。帝よ、この意にて造營を與さるべし。」とお告げがあつた。

群集　南無毘盧舍那佛。南無毘盧舍那佛。…………

行基　帝はおんなつかしさに、日の大御神の御姿を見つめて居られた、すると、大御神は見るみる內に、赫々たる光明を放つて、日輪の相を現はされたのぢや。

群集　(高聲に)　南無毘盧舍那佛。南無毘盧舍那佛。……

行基　帝は忝けなくも龍顏に淚をお流しなされて、俺にその次第をお話しなされた。我らが盧舍那佛を以て、天照大御神の本地と信ずるのぱ、このやうな奇蹟に出會ひ奉つたからぢや。

群集　南無毘盧舍那佛。南無毘盧舍那佛。……………

(群集熱狂する。柳下に立つ僧たちはやはり反抗の氣勢を保つてゐる。鬚ある老人も立つて不滿らしく見てゐる。栖戶辨麿が立上る。)

辨麿　行基菩薩。盧舍那佛は天竺の佛ぢや。いや、天竺の人の姿に現はれ給うた佛ぢや。そのとほりに造り奉らねばならぬ。さうでは御座らぬか。

行基　誰かと思うたら、栖戶辨麿どのぢやな。面白い事を云はるゝ。いま、俺が皆さまにお話しいたさうと思ふ事と全く關係のない事でもない。それゆゑ、まづ辨麿どのに行基の考をお話しいたさう。

辨麿　我らは此度大佛鑄造のお役を取上げられたのぢや。河內の智識寺の盧舍那佛にならうて、天竺の人の御姿に大佛を鑄奉らうと云張つたからぢや。國の公麿の大たはけが……

行基　お待ちなされ、辨麿どの。本來毘盧舍那佛の御姿は、帝の御夢に現はれた日輪相ぢや。日輪が我ら佛徒の信仰の中に現はれ玉ふ時に毘盧舍那佛の御姿になるのぢや。天竺の人には天竺の人の御姿に見えるであらう。日本にあつては、卽ち日本の人の御姿に見えねばならぬ。

辨麿　……

行基　そもそも釋迦如來が天竺にお生れなされて、天地の間に昏く埋もれてゐた佛の道を發見されて以來、毘盧舍那佛の慈悲深い御眼は、ある時は天竺を照らしまたある時は健駄羅國西域に輝き、更に唐土から緣あつて、この日本の國を照らし給ふ事になつたのぢや。いま、毘盧舍那佛の御眼はひたと此日本の國に注がれてゐる。佛法の

日本に榮ゆるはそのためぢや。俺は溫かい佛の御眼の光を衣を通して膚の上に感じまする。(合掌)
群集　南無毗盧舍那佛。南無毗盧舍那佛。
行基　辨麿どの、釋迦如來出現以來、佛法の榮えた國々の御佛は、皆その國の御姿で刻まれてゐるのぢや。そしてその國の言葉で信ずる者の魂に後世成佛の道をさゝやかれたのぢや。健駄羅國や唐土から渡つた御佛を拜んでみなされ。よく分かる事ぢや。
辨麿　(沈思して)　さうぢや。日本の國の御佛は、我らの姿のやうに刻まねばならぬ。あゝ、さうぢや。南無毗盧舍那佛。(合掌する)
行基　(辨麿の肩に手をかけて)　辨麿どの、よく理解して下された。俺もうれしう思ひまする。
辨麿　夢がさめたやうぢや。
(鬚ある老人、何時となく跪づいて合掌してゐる。)
僧二　(冷笑して)　栖戸辨麿は墮落した。賣僧の辯舌に迷はされたのぢや。愚かな奴ぢや。
僧一　支離滅裂な說敎ぢや。聽いては居られぬ。行かう。
僧三　何時まで居つても同じ事ぢや。
(「歸らう、歸らう。」と云ひ合ひながら橋を渡つて去る。)
辨麿　何が墮落ぢや。

行基　辨麿どの、緣なき衆生は何とも致方がないものぢや。……併しやがてはあの人たちにも分る時が來るであらう。迷は悟りの初めぢや。皆さま、事に妨げられて思はず遲くなつた。これから俺のお話しいたさうと思ふ事に移るのぢや。皆さまは、帝が國銅を盡し大山を削つて十六丈と云ふ未曾有の盧舍那佛大像を何のために造らると思うて居らるゝ。これは是非俺が皆さまへ傳へねばならぬ事なのぢや。
群集　南無毗盧舍那佛。南無毗盧舍那佛。
行基　帝は佛の說かれた三千大千世界をさながら汚濁の現世にうつさうと思召されたのぢや。廣大な御願ぢや。卽ちこの日本の國を一佛世界と見て、六十餘州の國々に各國分寺を設け、丈六の釋迦佛像を本尊となし、その六十餘州を統べ率ゐる平城の京には總國分寺として東大寺を建立して各國釋迦佛の本身毗盧舍那佛を金銅十六丈の御姿に鑄上げ奉らうと云ふのぢや。これは當今の帝の御位に卽かせられた時からの御宿願ぢや。卽ち日本の國に生を受けたる者は、各戒律を守り、かの寂光土の美はしさを、さながらに世を過させむと云ふ大御心ぢや。
(群集合掌す。)
行基　さればこそ、國土未曾有の費えもお厭ひなされぬのぢや。有難い大御心ではないか。

（群集感動する。）

行基　かやうな廣大な工事ぢや。さすがに天下の富を有つておいて遊ばす帝も、その造營のために消えてゆく費えの大なるに尠からず御心配遊ばされた。今は國の富を擧げてもなほ足らぬと云ふ有樣ぢや。そこで行基に勅があつて、あまねく天下に財を募られる事になつたのぢや。行基は、北は越の國より東海に及び、筑紫吉備を勸進してやうやく今日皆さまに見ゆる事になつたのぢや。願はくば皆さま、一紙半錢の寄進によつて、廣大な佛恩にあづかられよ。

群集　南無毗盧舍那佛。南無毗盧舍那佛。……

葛城若女　（感動して）菩薩さま、私はこれを寄進いたします。

（葛城若女は玉を鏤めた櫛を取つて出す。群集は爭つて、「これを差上げます。」「寄進いたします。」と口々に云うて、さま〴〵の物を出す。窓の内の女は、鏡を出す。行基の弟子がそれを集めて廻る。）

行基　（合掌して）皆さまのお志をさぞ帝はお喜びなさるであらう。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛……もはや、日も大分傾いたやうぢや。それでは皆さま、俺はこれから東大寺へ行かねばならぬ。これでお別れいたします。

（行基、稱名念佛しつゝ去る。弟子は寄進の物品を擔いでその跡に從ふ。群集熱狂して、高らかに念佛をとなへ行基を追うてゆく。葛城若女と、楯戸辨麿とが、廣場に殘る。家々の窓は、閉まつてしまふ。託陀眞玉が現はれる）

眞玉　（喪心したやうになつて、かすかに念佛をとなへながら、合掌してゐる葛城若女の肩に手をかけて）葛城若女。

葛城若女　（夢からさめたやうに）眞玉さま（美しい微笑）

眞玉　我らはそなたに會はうと思つて探しまはつてゐたのぢや。

久しくお眼にかゝりませぬなあ。

葛城若女　（眞玉に抱きつく）嬉しう御座います……

楯戸辨麿　（凝乎つと死んだやうな顏色でそれをみつめてゐる）……

——幕——

第二幕

第一場

地獄谷の岩窟の光景。天平二十年の春の事である。岩窟内中央の岩壁に近く机一脚を置き、燈明二基を奉り大香爐に護摩を焚く。机上中央に、巨大異形の壺がある。嚴重に封じてある。正面岩壁には、黄泉國八雷（よもつくにやついかづち）の

圖を畫いた掛軸が八幡大菩薩の掛軸を中央にして並べかけてある。八雷は皆極めて怪奇な相貌である。印度婆羅門の惡神たちに似てゐる。鈴と獨鈷とが机にのせてある。すべて、眞言宗と陰陽道と神道の祈禱の形式が混和されてゐる。筑紫娘子が一人で、呆やり物を案じてゐる。

筑紫娘子　(手に一疋の純白な兎を抱いてゐる)　これ、そなたの名は何と云ふのぢや。(間)　まあ、何と云ふ臆病な獸であらう。我身に抱かれてゐて、少しも凝乎つとしては居らぬ。これ、兎、何でそのやうに耳を立てるのぢや。何か不思議な音でもきこえるのかや。(間)　そちの毛はつや／＼として美しいのう。何、何か我身に話したい事でもあるのかや。何故そのやうな圓い眼で見つめてゐるのぢや。(頬をすりつける)　我身はそちが可愛ゆうてならぬ。かうしてゐると、涙が出て眼が熱くなるやうぢや。これ、兎、そちはもと月の宮居に住んでゐて、餠をついてゐたとは、誠か。何で地上へ墜ちてきたのぢや。何か惡い事をしたのであらう。許しませぬぞ。(笑ふ)　嘘ぢや。だましたのぢや。まあ、この動悸の早い事と云うたら……我身はそちの臆病が可愛ゆいのぢや。(また 頬をすりつける。相模資人がそつと岩窟へ入つてくる)　これ、我身のするやうにしてゐるのぢや。そのやうに手足を動かしてはならぬ。何ぢや。耳を立てゝ。此處には誰も來る氣づかひはないのぢや。(筑紫娘子は ふと顏を上げて驚く)

相模資人　娘子此處は地獄谷の岩窟で御座りますか。

筑紫娘子　(兎を抱いたまゝ、耻と物怯で赤くなる)　さやうで御座ります。

相模資人　筑紫の宇佐八の命婦、大神の杜女さまの籠つて居られる岩窟で御座りまするか。

筑紫娘子　はい。

相模資人　(娘子の心を推して)　いや、怪しい者では御座りませぬ。我らは橘奈良麿さまの資人ぢや。けふこの岩窟で、藤原仲麿さまにひそかにお眼にかゝる事に定めてあつたために參つたので御座ります。

筑紫娘子　さやうで御座りますか。

相模資人　(微笑)　さぞ驚かれたで御座らう。

筑紫娘子　(微笑。眼をふせて)　かやうな山の中ゆゑ……

相模資人　ぶしつけの段はおゆるし下さりませ。

筑紫娘子　(赤くなる)　いえ、私こそ。……

相模資人　して、あなたさまは誰人で御座ります。

筑紫娘子　……大神の命婦に仕ふる者で御座ります。

相模資人　命婦さまはお出でなされませぬか。

筑紫娘子　たゞ今、この下の谷川の禊にお出でなされまし

た。
相模資人　まだ仲麿さまはお出でなされませぬか。
筑紫娘子　はい。
相模資人　美しい兎で御座りますなあ。飼うてお置きなされますか。
筑紫娘子　（微笑）　いえ、食物のあまりをやりますので、ついこのやうに馴れてしまうたので御座ります。（頭を撫でゝやる）
相模資人　あなたさまは、何と云ふ御名で御座ります。
筑紫娘子　たゞ、筑紫娘子と呼ばれて居ります。
相模資人　筑紫娘子……しみると西國のお人で御座りまするな。
筑紫娘子　はい、筑紫の濱に生れました。してあなたさまは。
相模資人　我らは東の相模の野にそだつた者で御座ります。筑紫は美しい處で御座りますかな。
筑紫娘子　筑紫の日射のあたゝかさは何時も春のやうで御座ります。山に參れば、橘の實が黄金色して枝もたわゝになつて居ります。海の潮の濃い青は、御空のやうに澄んで居ります。珊瑚、玳瑁、瑠璃などゝ、世の人の貴む寶は、數限りもなく御座ります。……紫筑は美しい國で御座ります。

相模資人　何故またあなたさまは、そのやうな美しい國を棄てゝ、京へお出でなされたので御座ります。
筑紫娘子　（悲しげに）　命婦さまの仰せはそむかれませぬ。
相模資人　（凝乎つと、正面の掛軸を見ろ）　伊奘冊命の御屍を取圍んでゐたと傳へらるゝ黄泉國の八雷神ぢや。大神の命婦がかやうな惡神を祭らるゝは、如何なる譯で御座りまするか。筑紫娘子、お敎へ下されませ。
筑紫娘子　（色を變へて）　それをお訊ねなされてはなりませぬ。
相模資人　それはまた何故で御座ります。
筑紫娘子　命婦さまの仰せで御座ります。もし、私の口から、それをお話いたせば、私は死なねばなりませぬ。（悲しげに云ふ）
相模資人　（驚く）　死なねばならぬ……あなたさまが……
筑紫娘子　はい。
相模資人　（獨語）　仲麿さまの仰せには、大神の命婦は、東大寺の境内に宇佐八幡宮を遷座鎭祭するために、この岩窟に隱れて秘密の法を修するのぢやとあつたが。……
筑紫娘子　そのやうな事は、もうお考へなされますな。あなたさまも恐ろしい目にお會ひなされます。
相模資人　恐ろしい目に……

（大神杜女が白い裝束下げ髮であらはれる。）
杜女　（凝乎つと、相模賫人を氣味の惡い眼で見つめてゐる）變つた事はないか。
筑紫娘子　（狼狽して）はい。このお方は參議さまにお會ひなされるためにお出でなされたので御座います。
杜女　（やうやく眼の光を和げる）ふむ、そなたは誰ぢや。
相模賫人　（頭を低げる）橘奈良麿の賫人で御座ります。
杜女　參議公はまだ見えぬ。しかと定めて置いたのぢやな。
相模賫人　はい、仲麿さまは未の刻に地獄谷の岩窟で會ふと仰せられました。
杜女　もう未の刻ぢや。
筑紫娘子　（兎を撫でゝゐたが、突然）どなたかお出になつたやうで御座ります。（兎に）これ、靜かにしや。
（仲麿が現はれる。手に鞭を持つてゐる。相模賫人、頭を低げる。）
仲麿　鮪か、さぞ待つたであらう。
相模賫人　私もつい先刻參りました。
仲麿　（杜女に）見知らぬ男をこの岩窟に待たせ、そちはさぞ驚いたであらう、併し、心配せぬがよい。我らが家に父から仕へて居る者ぢや。刑部鮪と云ふ者ぢや。
杜女　それを承はりまして、やうやく安心いたしました、
仲麿　さうであらう。我らも何の報せもなく鮪を此處へ差向けるのは、如何かと案じたが、何に致せ人眼が繁く、秘密の物語は出來ぬので、やむを得ず、此處を選んだのぢや。許せ。はは……。鮪、して奈良麿の方は何うぢや變つた事はないか。
相模賫人　いよ〳〵御謀叛の萠があらはれて參りました。
仲麿　ふむ。現はれたか。
相模賫人　はい。一昨夜、遲く太政官の庭に一味の人々を集め、天地四方を禮拜して鹽汁を飲んで互に、死する期は共に死なむと誓ひました。
仲麿　ふむ。集まつた者は誰々ぢや。
相模賫人　暗い處で御座りましたため、よく分りませぬ。黃文王、道祖王、安宿王、小野東人、多治比犢養、大伴古麿、など十四五人で御座りました。
仲麿　吉備眞備は。
相模賫人　吉備眞備は參りませぬ。
仲麿　ふむ。一味の者どもは大抵分つたやうぢや。
相模賫人　奈良麿は私に人の來ぬやう見張りをいたせと云付けました。すると、誰やら暗い處で「期は何時ぢや。」と申しました。奈良麿は手を振つて、「まだ〳〵、急いてはならぬ。密々寄合うて、機の熟するのを待たねばならぬ。」と申しました。
杜女　（突然）機の熟する時は、永劫に來はせぬ。俺には

よく見えて居る。
仲麿　杜女、如何致した物であらう。
杜女　構はずに。知らぬ振りしてお出でなされませ。いざと云ふ時には、この杜女がよい謀を立てまする。
相模資人　道祖王が「さうぢや。帝御萬歳の後を待つのぢや。」と云はれました。すると、大伴古麿が、「併し、さう長々とは待たれぬ。藤原氏の勢がいよ／＼盛になつて參りますから。」とお答へいたしました。
仲麿　道祖王は何と云はれた。
相模資人　道祖王は何とも答へられませんでした。奈良麿が傍から「それは恐れる處でない。藤原氏にも內輪の爭があるのぢや。」と申しました、
仲麿　ふむ、我ら兄弟の事を指したのぢやな。
相模資人　それから歸らうと致しましたとき、黃文王が「とに角、吉備眞備を一味させねばならぬ。唐土の軍學にかけては及ぶ者もない男ぢや。」と云はれました。
杜女　吉備眞備は一味する氣遣ひはない。彼の男は冷靜な男ぢや。何事も傍で凝乎つと見てゐるだけぢや。
仲麿　ふむ。（沈思）いや、鮪、御苦勞であつた。それだけぢやな。そちが見て來たのは。
相模資人　はい。
仲麿　それでは、もう行け。これから先きが大事ぢや。なほ、よく氣をつけてゐて貰はねばならぬ。
相模資人　畏まりました。それでは參議さま。大神命婦さま。御免をかうむります。
（相模資人去る。）
杜女　（後を見送つて）心の弱さうな若者で御座りまするなあ。
仲麿　眞面目な男ぢや。
杜女　あのやうな男は間者には向きませぬ。
仲麿　何故ぢや。惡賢い性でないだけ、我らは安心して使ふ事が出來るやうに思ふのぢや。
杜女　一朝の恩に感じ、女に迷ひやすいもので御座ります。御用心なされませ。
（筑紫娘子が兎を抱いたまゝ、杜女の物語を一心に聞いてゐる。顏を赤らめて、夢見るやうな表情になる。）
仲麿　いや、我らが命には背かぬと佛に誓うたのぢや。それよりも杜女。奈良麿の謀反ぢや。いよいよ確證があつたとしても、あのまゝにして置く方がよいとそちは思ふのぢやな。
杜女　知らぬ顏をしておいでなされませ。もし、おん父諸兄公がお亡くなりなされたら、御用心が大事ぢや。諸兄公御在世の間は、決して形には現はれませぬ。
仲麿　そちの呪詛の驗は見えたか。

杜女　(物凄く笑ふ)　驗が見えた段では御座りませぬ。これ、御覽なされませ。虬の血をしぼつて、この壺の內に注ぎ、百蟲を生きながらその內に封じ護摩を燃いて、攻めかけ祈りましたところ、このとほり、指の血を染めて書きました橘諸兄の三字が蟲喰ひのやうに穴になつてしまひました。(白絹に橘諸兄と穴の明いたのを壺の內より取出して示す)

仲麿　ふむ。我らの世の中が、次第に近うなつてきたやうぢや。快い事ぢやな。杜女、そちの盡力は忘れはせぬ。宇佐八幡の遷座は、この仲麿が必ず成就させてつかはす。

杜女　有難う御座ります。私の願はそれ一つで御座ります。

仲麿　宇佐八幡は藤原氏を加護する神ぢや。我らとて疎かには思はぬ。諸兄公さへなければ、もう藤原家の天下ぢや。橘一味のために謀反の汚名をきて、縛首にせられた廣嗣も地下で喜ぶであらう。

杜女　廣嗣さまは憎いお方ぢや。

仲麿　そちは廣嗣に會うた事があるのか。

杜女　一度お眼どほりいたした事が御座ります。いや、不思議なものぢや。今になつて思うてみれば憎いお方とも思はれぬ。

仲麿　廣嗣がそちに何か手荒い事でもいたしたのか。

杜女　(兎を抱いた筑紫娘子を見つめて)　この年になつてこのやうなお話しをいたすは愚な事とは思ひまするが何も懺悔ぢや。參議さま、お聞き下されませ。私が宇佐の宮に仕へて命婦となりましたは、廣嗣さまゆゑで御座ります。人の運命程分らぬ者は御座りませぬ。

仲麿　それはまた不思議な事をきくものぢや。何うしたのぢや、廣嗣が。

杜女　私はもと太宰府の尼寺に居りました尼で御座ります。昔話は可笑しなもので御座りまするなあ。

仲麿　そちが尼であつたと申すか。

杜女　觀世音のためには、命も惜しうないとまで思うて居つた尼で御座ります。丁度私が二十一の春の事、ふと通りかゝつた山道で、このやうな美しい白兎を見つけました。兎は腰のところを矢に射貫かれて苦んで居りました。哀れなものぢやと思うて、私がその兎を抱上げましたところへ馬を走らせてお出でなされたのが廣嗣さまで御座りました。

仲麿　廣嗣が射貫いたのぢやな。

杜女　それは我らが射たのぢや。これへ持つて參れと仰せが御座りましたが、何分にも私は兎が可哀さうでなりませぬ。そこで私は廣嗣さまに兎の命乞ひをいたしました。すると廣嗣さまはお笑ひなされて、それ程兎の命が大切ならば、そちに遣はすから、介抱してやるがよい。併し

唯はやらぬ。どうぢや尼法師、そちの一番大切ぢやと思ふものを我らに吳れるのぢやとおつしやいました。私は卽座によろしう御座りますと申上げました。廣嗣さまは我らはそちの操を貰ひたいのぢやとお答へなされました。

仲麿　(微笑)廣嗣の云ひさうな事ぢや。

杜女　觀世音菩薩さまが心の潔白を見守つてゐて下さるのぢやと思うて、地獄へ墮ちる思ひで、私は廣嗣さまに身をおまかせいたしました。

仲麿　思ひ切つた事をいたしたものぢやな。

杜女　傷いた兎は望通りに私の手許に殘りましたが、始めて男女の秘密を味はつた私は、もはや舊のやうにはなる事が出來ませぬ。一旦は廣嗣さまを憎み汚れた我身を詛うて、死んだが增ぢやとまで思ひこんだので御座ります。併しよく案じてみますと、地獄へ墮ちると觀念したその刹那の苦しみが何うやら苦しみでなかつたやうな氣がするので御座ります。厭はしう思うたのか、さうでなかつたのか、觀世音さまの御前に合掌して、かう念じて居ります內に、私は佛の御顏を拜む事が出來なくなつて參りました。思ひ出のなかの廣嗣さまが何時となくおなつかしく思はれてならぬやうになつたので御座ります。佛にそむいた恐ろしさに たうとう 私は還俗して しまひました。そして宇佐の御神に仕へまつる身の上になつたので御座ります。

仲麿　どうしてまた神には仕へようと決心したのぢや。

杜女　身の汚れをさつぱりと潔めて頂きたいと思うたので御座りまする。

仲麿　…してみると、そちは藤原の家とは、なほざりならぬ緣があるのぢや。

(筑紫娘子熱心に聽いてゐる。)

杜女　(筑紫娘子に)そちがさうして兎を抱いた姿をみて、俺は昔の事を思出したのぢや。このやうな話は、そちたちにはよい戒になる。心して聞くのぢや。

筑紫娘子　はい。命婦さま。

杜女　何ぢや。

筑紫娘子　その兎はどうなされました。

杜女　兎は宇佐の神宮へ參つてから、苦しい思出の種ぢやと思うて、山に放してしまつた。參議さま、私の懺悔ばなし、さぞかし可笑しう思召したで御座りませう。

仲麿　いや、人の心の不思議を眼の前に見せて貰うたやうな氣がいたしした、そちのお蔭で、久振に我らは廣嗣の事を思出した。あの男の氣性がまざ〳〵と現はれたやうであつた。や、もう大分時が經つた。そろ〳〵歸らずばなるまい。

杜女　私はもうお祈りをいたさねばなりませぬ。
仲麿　杜女、諸兄公の事はこの上とも頼むぞよ。
杜女　御心配なされますな。驗が見えた上は、もう長い事が御座りませぬ。
仲麿　杜女、さらばぢや。（去る）
（杜女は仲麿を送つて、岩窟の入口へ行く。）
筑紫娘子（凝乎つと白兎を見つめてゐる）兎、そちは憎い奴ぢや。かうしてくれる。苦しいか、苦しうないか。
（兎をしつかと抱きしめて、頰ずりをする。微笑。）

——幕——

第二場

大佛鑄造工事の光景。
巨大な盧舍那佛の土鑄型（原型）中央にそびえ、既に腹より下は、銅を流し込みたるため、土の山にて覆はる。そのさま、半身を堆土の丘に埋沒した浮彫のやうである。一方には枕木形の銅塊をつみ重れ、一方には、寄せ型を造る土砂を積む。その他、足場を組むための木材、木炭の山など、その邊に亂雜に積まれてある。大佛の背後の丘陵は、殆んど直角に削落されて、その側面が赭赭色に輝いてゐる。その丘陵の上に、圓く和やかな嫩艸山が、その芝艸の美くしい膚を露はして、空中を劃つてゐる。大佛の腹部の堆土の山の上には、巨大な坩堝が五六個、間をへだてゝ置いてある。
朝。初夏の太陽は、烈しくこの生れつゝある大佛を照らしてゐる。前面の平地に幄舍が一ヶ處張つてある。幄舍の内には、支那風の大卓を据ゑ、椅子數個を置く。唐僧道璿が國公麿と、卓によつて話をしてゐる。健馱羅、印度、唐その他各様式の大佛の雛形が卓上に並べてある。

道璿（一個の大佛の雛形を、凝乎つと見みつめてゐる）
公麿、これはどう見ても毗盧舍那佛の御姿ではない。たゞの法師ぢや。而も、この日本の國の法師ぢや。
公麿　さやうで御座ります。佛の御姿と云ふべき凡俗を超脫した氣品が御座りませぬ。成程、衣紋のすぢのなだらかさ、肉づけの工合などは眞に迫つて居りまするが、併し、それは人間としての事で御座ります。
道璿（大佛の原型と雛形とを見比べる）人間の姿としてよく鑄上つても、それは決して喜ぶべき事ではない。經文の上に現はれた眞の佛の御姿でなければならぬのぢやこの雛形と鑄型とは見比べてみれば、成程、業は非凡な物であらうが、我らはこのやうな盧舍那佛には、更に頭が低がらぬ。公麿、そちは大佛師の長ではないか。何故、常々そちが禮拜する健馱羅佛のやうに鑄奉らぬのぢや。

健駄羅の手法を傳へたものは、飛鳥京以來、この日本には、數多くある筈ぢや。

公麿　健駄羅の佛像は韓國を經て、日本に傳はりました。併し、只今は、日本の國は何事も唐土でなければ夜が明けませぬ。健駄羅の手法を傳へた佛師たちは、たゞ不遇に泣くばかりで御座ります。

道璿　健駄羅の流れを汲む佛師で、世に出てゐるのはそちだけか。

公麿　さやうで御座ります。幸と私共はあなたさまのお引立をかうむりまするし、延いては橘左大臣さま御一門の御愛顧を受けまするので、今度のやうな未曾有の大工事の長を命ぜられたので御座ります。御恩の程は決して忘れはいたしませぬ。

道璿　近頃の唐土の佛像は悉く天竺の様式から脱化したものぢや。腐れた心の生むだ美くしさぢや。所詮官能の美くしさ以上のものでない。我らは唐土人でありながら、健駄羅の藝術を慕ふのは、そのためぢや。小兒のやうに幼ない技巧の内に尊い光がある。卽ち精神の光ぢや。

公麿　私の祖父が百濟の人で御座りましたため、健駄羅の藝術は、私には、故鄕の言葉のやうになつかしく思はれます。

道璿　（叱責するやうに）公麿、それ程、健駄羅の藝術に執着するそちが長でありながら、何故、このやうな盧舍那佛を選むだのぢや。

公麿　道璿さま、世の中はむづかしいもので御座ります。私の思ふやうになるものなら、何でこのやうな盧舍那佛を選みませう。

（栢戶辨麿が出てくる。）

道璿　公麿、あれへ參つたのは栢戶辨麿ではないか。

公麿　いかにも辨麿で御座ります。あなたさまもお知りなさるゝとほりあの天竺びいきのあの辨麿が、近頃は行基さまの處へよく參るさうで御座ります。その爲に彼奴は智識寺の法師たちに見放されて、生活も立たぬやうに貧しくなつたさうで御座ります。

道璿　辨麿も行基に化かされたのかも知れぬ。（立上る）我らは金鐘寺へ行かねばならぬ。良辨僧都に會ひたいのぢや。

公麿　では、後程、お待ち申して居りまする。

道璿　定めの時刻には、良辨僧都とつれだつて此處へ參らう。（去る）

辨麿　（つかつかと蝘舍へ入り、雛形の一つを取つて、今、道璿が見てゐた雛形と見比べる。そして大佛の鑄型を見上げる）……。

公麿　（默つて辨麿を凝乎つと見てゐる。やがて）辨麿、

(返事なし) 辨麿。

辨麿　そちのやうな卑劣な奴の言葉をきく耳は持たぬ。大たはけ奴……。

公麿　はは……大たはけでも何でもよろしい。だが、辨麿、よくみるがよい。(一つの雛形を指して) これはそちの造つた雛形ぢや。天竺の樣式ぢや。河内の智識寺の本尊生寫ぢや。(辨麿の手の雛形を指して) ところで、これは託陀眞玉の造つた雛形ぢや。(辨麿は鋭い眼で公麿を見る) 業にかけては、何と云うても眞玉ぢや。

辨麿　いゝや、業では決して眞玉には負けぬ。たゞ、樣式が惡かつたのぢや。日本の國の御佛は、日本の人の姿に彫まねばならぬと云ふ事が、我らに分らなかつたのぢや。

公麿　ふむそちはたうとう眞玉に說落されたのぢやな。

辨麿　いや。行基菩薩の說教によつて眼がさめたのぢや。

公麿　行基菩薩の說教……ははは……

辨麿　何を笑ふのぢや。

公麿　いや。何も笑はぬ。そちは聖人ぢや。

辨麿　聖人……

公麿　そちがこの度の大佛鑄造の御役に洩れたのは、誰のためぢや。皆行基菩薩のためぢや。(辨麿の額の色變る) 紫香樂の京の鑄造の折、そちが自說を固執したので、行基菩薩は栖戸辨麿は爭を好む男ぢや。それに無くては叶はぬと云ふ程の佛師でもない。此度の鑄造には省いたがよからうと云はれたのぢや。生菩薩のお言葉は驗たかなものぢや。

辨麿　それは誠か。

公麿　(冷たくさげすむやうに辨麿を見る。やがて) 何で僞を云はう。

辨麿　(眼が輝いてくる) そちが我らの事を惡ざまに云うたので、御役に洩れたと專ら噂であつたが……

公麿　我らはそちと眞玉とを二つの手のやうに使うて見たかつた……併し今となつては云うても甲斐のない事ぢや。

辨麿　いやいや、我らはそちを信ずる事は出來ぬ。

公麿　信ずる事が出來ずば、信ぜずともよい。併し、そちは不幸な男ぢや。我らの娘葛城若女を……

辨麿　(急いでさへぎる) 何を云ふのぢや。公麿。

公麿　いや、我らはよう知つてゐる。……片戀は苦しいものぢや。

(辨麿、卓上に伏して嗚咽く。)

(沈默。)

公麿　や、あすこから來るのは眞玉と葛城若女ぢや。

辨麿　(額を上げる) 何、葛城若女。(涙に濡れた眼で凝乎つと公麿の指さす方を見る。苦しげに) うむ。眞玉と葛

城若女ぢや。
公麿　辨麿。
辨麿（猶、眼を据ゑて見つめてゐる）何ぢや。
公麿　我らとそちとは此處に居つてはならぬ。戀に醉うた人々は、驚きやすいものぢや。さ、あの木の間に隱れて、今日の論議の人々の集まるのを待たう。
（辨麿は公麿に手を取られて鋭く見返りながら隱れる。）
（託陀眞玉と葛城若女が現はれる。）
眞玉（大佛を拜す）靜かな朝ぢや。葛城若女、夏の朝のそゞろ歩きは、氣色のよい物ぢやな。
葛城若女　ほんに何とも云はれませぬ。咲きほこる夏花の茂みを分けて參りますと、白露が、地に碎ける音がしはせぬかと、思はれます。
眞玉　何もかも鮮やかに輝きわたる。何處にも曇りが見えぬ。葛城若女、あれ、もう燕が渡つて參つた。征矢のやうに黑い姿が地をすつては飛んでゆくではないか。
葛城若女（快活に）燕よ、此處へ來や。（手を拍く）えゝ、ついついと知らぬ顏して飛んで行つてしまふ――何であのやうに忙しげに飛んでゆくので御座りませう。
眞玉　此處の土を啄ばんで飛んでゆくのぢや。そして、お寺の棰（たるき）の間や、我らの家の軒下に巢を組むのぢや。

葛城若女　その巢の內で、あの可愛らしい雛を育てあげるので御座りまするなあ。
眞玉　さうぢや。（微笑）我らも早うこの大像を鑄上げ奉つて、そなたと巢を造りたいものぢやのう。
葛城若女　燕の雛のやうに小さな口を開けて母親をせびる子の可愛さは、かうして思うてみるだけでも樂しみで御座ります。
眞玉　長い間、我らは巢を造る日を待ちこがれてゐたが、もうすぐぢや。
葛城若女（合掌す）どうぞその日が早く參りますやうに……眞玉さま。私はかうして盧舍那佛さまに願うて置きます。
眞玉　盧舍那佛さまと云へば、今日は此處で名ある京の法師たちや佛師どもが寄合はれるのぢや。賦役の人夫も集まらず靜かな筈ぢや。工事は晝過ぎねば始まるまい。
葛城若女　何のためにお寄合されるので御座りませう。
眞玉　帝の仰せがあつたのぢや。國を傾けて造營さるゝこの未曾有の大像が、もし後世、非難の的となつては面白うない。また韓國や唐土より笑はれては、日本の恥辱になる。念には念を入れよおぢや。名ある人々の進言を待つて改める處は改めねばならぬと云ふのぢや。
葛城若女　また何時ぞやの紫香樂のお寺の時のやうに恐ろ

しい爭ひになりはいたしませぬか。心配でなりませぬ。
眞玉　いや、大した事にはなるまい。もうこの通り、お膝の上まで鑄上げ奉つた後ぢや。たゞ喧ましいのは御面相であらう。
葛城若女　紫香樂の時も、御面相が一番爭ひの原で御座りました。
眞玉　あの時の論議は、火が出るやうであつた。併し、此度はもう根本の主義が定まつてゐる。行基菩薩のお授けによつて我らの主張が通つたのぢや。
葛城若女　日本の人の御姿に、盧舍那佛さまを鑄上げたてまつると云ふので御座りますか。
眞玉　さうぢや。そなたもきいたであらう。何時ぞや、市の廣場で、行基菩薩が栖戸辨僊に說いておきかせなされたとほりぢや。我らと行基菩薩とは、紫香樂の造營の時から、同じ考であつたが、あの頃の帝は、まだ今のやうには行基菩薩を信仰してお出でなされなかつたのぢや。
葛城若女、見るがよい。（大佛を指さす）鑄型の出來榮えは我らの口から云ふのも異なものだが、どのやうな佛像にも劣るとは思はれぬ。
葛城若女　かうして御面相を見上げて居りますと、何うやら瞼が熱うなつて、自づと涙が出て參ります……
眞玉　やがてこれが金銅の光眩ゆい御姿になるのぢや。その時しみじみと拜むがよい。我らには金銅十六丈に鑄上がつた御姿が眼に見ゆるやうぢや。葛城若女、我らはそれを思ふと、夜もおちおち寢られぬ。凝乎つと輝くおん手の形、御胸より腹に、盛上る腐の力、また、頰より脣にかけてなだらかに消えてゆく影などが、閉ぢた瞼に燒付くやうに見ゆるのぢや。
葛城若女　（突然）眞玉さま、私はこのやうな御姿を何處やらで見た事があるやうな氣が致します。
眞玉　何、このやうなお方を見たと云ふのか。そなたが……
葛城若女　はい。たしかに見た事が御座ります。何處のお方であつたやら……どうしても思出されませぬ。
眞玉　このお姿に似た人が、世の中にあるとは思はれぬ。葛城若女、これは我らの心が生んだ幻を、そのまゝ彫み上げたものぢや。
葛城若女　（ひたと大佛を見つめて）いえ、いえ。私はたしかに記えて居ります。
眞玉　我らにも、よくそのやうな事がある。わが心の幻を何時となく世の人に結付けてゐるのぢや。何にいたせ。我らはもうこの上、人を集めて論議する必要を認めぬ。このまゝ鑄上げれば、それでよいのぢや。
葛城若女　あの强情な父が、どう思つて、あなたさまのお

考に從うたので御座りませう。

眞玉　公麿どのは自説を固く執つて居られた。すると、雛形を出せと云ふお命が出た。我らも公麿どのも出したのぢや。行基菩薩が、帝の仰せをかうむつてその雛形の內から、選まれたのぢや。（卓上の雛形を指さす）　そのとき、菩薩が此度の鑄造には、この雛形を原としまするとと云うて、我らの彫んだものを指された時には夢ではないかと疑うた。公麿どのも、もう仕方がなかつたのぢや。

葛城若女　眞玉さま、私は父の心をよく知つて居ります。父は心の底では、どのやうな恐ろしい事を考へて居るかも知れませぬ。御用心なされませ。

眞玉　我らも公麿どのゝ氣象はよく知つてゐる。併し、行基菩薩が生きてお出でなさる間は大丈夫ぢや。さすがの公麿どのもあのお方にばかりは齒も立たぬのぢや。公麿どのゝ主張さるゝ健駄羅の様式も惡いとは思はぬ。それは健駄羅の人が造るべきものぢや。この度の帝の思召に從ふときは、どうあつても日本の人のお姿に造られねばならぬ。健駄羅は勝れた藝術の國ぢや。我らとて、取入るべきものは取入れるのぢや。健駄羅ばかりではない。天竺はもとより唐土韓國の佛像からも取れる處は取つたつもりぢや。

葛城若女　父には健駄羅より有難いところはないので御座ります。

眞玉　併し、この度は公麿どのが造營の長ぢや。自分の考へのとほりに造りたかつた御心は、我らとてしみじみお察しするのぢや。

葛城若女　（凝乎つと遠方を見る。やがて）　もう時刻と見えて、あちらより人々がお出でになります。今輿から、お降りなされたのが、婆羅門僧正さまぢや。眞玉さま、では私は行きまする。

眞玉　人々が集まられたところにそなたが居ても妙なものぢや。葛城若女、それではまたの逢瀨が樂しみぢや。歸るがよい。

葛城若女　はい。それではお別れいたします。（微笑、振返り振返り去る）

（印度僧、婆羅門僧正、林邑僧佛哲が出てくる。兩人は大佛の前に跪いて禮拜する。その後から、良辨僧都と唐僧道璿が何か話をしながら出てくる。二人も大佛を禮拜する。公麿、顏蒼ざめて眼が熱病のやうに輝く楯戸辨麿を樹の間よりつれ出す。託陀眞玉は幄舍の內で、頻りに雛形を見てゐる。）

公麿　（燒付くやうに眞玉を見つめてゐる 辨麿の背に手をかけて）　辨麿、もう皆さまもお寄りなされた。さあ、行くのぢや、行くのぢや、あの幄舍の內へ。

辨麿　幄舍の內へ行つて何をするのぢや。

公麿　そちはもう忘れてしまつたのか。今日の論議を。

辨麿　（それには答へず）我らはもうすつかり見てしまうた。盧舍那佛が何ぢや。眞玉が何ぢや。（跪づく）ああ、宇宙の大魔王。私の身も魂もあなたの物で御座りまする。身の毛のよだつやうな恐ろしい力をお示し下さりませ。（合掌）

公麿　（間を置いて）所詮眞玉とそちとは昔のやうに打解ける機はもうあるまい。情ない事ぢや。

辨麿　……我らは託陀眞玉を詛ふ。奸諂な行基を詛ふ……

（佛前に禮拜したる人々は幄舍に入り、互ひに挨拶して椅子に腰かける。公麿も辨麿も無言に座につく。）

婆羅門僧正　行基大僧正はまだ見えませぬか。

良辨　行基大僧正には、先日より少し御病の氣味と承はりましたが……

婆羅門僧正　もはやお年がお年ゆゑ、氣遣ひな事で御座る。して、昨日朝廷よりお使を賜はつた節の御返事を聞かれた方は御座りませぬか。

公麿　私の承はりました所では、病氣ももはや大分怠りたれば、明日は推しても參ると云ふ御返事で御座りました。

婆羅門僧正　何時も早いお方が、かやうに遲くならるゝやうでは、或は御病氣がまた惡うなつたのかも知れませぬ。

良辨　私もそれを氣遣うて居りまする。此處七八年の間。大僧正には、帝の御思召で諸國を勸進なされて、御苦勞も多かつたやうで御座りまするゆゑ、そのお勞れが出たのかも知れませぬ。

婆羅門僧正　何にしても氣遣ひな事ぢや。

（沈默。皆々雛形を見てゐる。眞玉は行基が來る方を一生懸命に見てゐる。辨麿はひたと眞玉を見つめてゐる。）

婆羅門僧正　もし。行基大僧正が見えぬものとすれば、ただ便々と雜談に耽つてゐるのは愚な事ぢや。殊に今日の論議は重大な儀で御座る。良辨どの、そろ／＼始めては、どのやうな物で御座らう。

良辨　さやうで御座りまする。皆さま如何で御座りませう。

（一同異議もない樣子で頭を低げる。）

婆羅門僧正　然らば始めませう。別に御異議もないやうぢや。

良辨　もし大僧正が後から見えれば、これに越した事は御座らぬ。

眞玉　（突然）末席から恐入りますが、皆さま、どうぞ大

僧正のお見えになるまで、論議をお待ち下されませ。

公麿　眞玉、何を云ふのぢや。かうして皆さまがお揃ひなされた上は、たとへ大僧正お一人がお缺けなされても、それは致方がない。まして御病中とあれば御來否の程も分らぬ。控へるがよい。

眞玉　いや、私はさうは思ひませぬ。この度の大佛鑄造につきましては、大僧正は一番お力をおつくしなされたお方で御座ります。如何に御病中とは云へ、そのお方を措いて論議を始むると云ふ事は私には合點が參りませぬ。まあ、暫らくお待ち下されませ。大僧正の事ゆゑ、もし御出席が出來ぬやうならば、必ずその趣を申して參るで御座りませう。

婆羅門僧正　眞玉、そちが申す事は一應もつとものやうなれども、深く慮れば、必ずしも道理とは思はれぬ。第一、この論議はどなたの思召によつて開かれたのぢや。

眞玉　帝の思召で御座ります。

婆羅門僧正　して、帝は、もし大僧正が病中ならば、論議を待てと仰せられたか。

眞玉　いや、さやうな仰せは御座りませぬが、併し…

婆羅門僧正　待て、眞玉、然らば帝の仰せによつて論議を開く以上は、大僧正のお出でがあつても、なくても定められた時刻には、論議を開かねばならぬ。我らとて、大僧正のお出でを待ちたいのは山々ぢや。然し帝の仰せには從はねばならぬ。それに此迄度々の論議によつて、大僧正のお考へはよく我らに分つて居る。既に盧舍那佛も大僧正の御主張によつて、あのやうに鑄始め奉つたのぢや。我らは大僧正のお考へは十分腹の内に置いて論議を始むるのぢや。どうぢや、眞玉、我らの言ふ事はよく分つたであらう。

良辨　皆さま、まづ論議の始めに私から一應お話しいたす事が御座ります。昨日私が參內いたしました節、畏多くも帝から、勅が御座りました。（皆頭を低げる）即ち、此度の論議は、最後の論議である。各愼重の心を以て、邦家の爲めに最善の考慮をつくすように。とかう仰せられたので御座ります。

道璿　帝がこの度の大佛鑄造について、かほどまでに大御心を惱ませられてお出で御座るかと思へば、賢いとも畏多いとも何とも申されませぬ。恐れながら帝の大御心を推し奉れば、私はどう致しても自分の思ふ事だけは申上げねば心が濟みませぬ。そもそも、此度の鑄造は行基大僧正の主張さるゝ所に從つて、唐土にも天竺にも例のない不思議な盧舍那佛を鑄奉る事になつたので御座る。もつともこれに付ては、我々は一應の反對はいたしたが、大僧正が自說を固守されたため、遂に衆議一決、もはや

御膝のあたりまで鑄上げ奉つたやうな次第で御座る。併し、つく〲御尊體を拜み奉ると私はどうも滿足いたされませぬ。私はこの點について、今一度皆さまの御考慮を仰ぎたいと思ひまする。

婆羅門僧正　我らも道璿どのゝお說に同意ぢや。併し、一旦、帝の御裁可を經て、これまで鑄造いたしたものを、また覆がへすと云ふのは如何で御座らう。

良辨　いや、僧正の仰せでは御座るが、私はそのやうなお心遣ひは御無用かと思ひまする。何となれば、もし、このまゝでよいものならば、帝は決して今日の論議をお開きにならなかつたで御座りませう。この上ともよかれと思召されてこそ、勅まで出た次第で御座る。

道璿　これが一時の物ならば、私とて、かやうに頑固に云ひ張りはいたしませぬ。何にいたせ、萬世に殘る大工事ぢや。後世の小ざかしい者どもに、指さし嘲らるゝことのないやうにと、ひたすら願ふ心からで御座る。

婆羅門僧正　根本より鑄造し直すと云ふ道璿どのゝお說には、どなたも御異議は御座らぬか。

辨曆　（毒のある眼ざしで眞玉を見て）　私も道璿さまのお說をごもつともと思ひます。

眞玉　辨曆、そちは何を云ふのぢや。この御尊像の何處に不服があるのぢや。

辨曆　我らには、何處から何處まで不服ぢや。

眞玉　そちはけふはどうかいたして居るやうぢや。

辨曆　（それには答へず）　皆さま、私が河內の智識寺の本尊をうつしましたこの雛形を、もう一應御覽下されませ。これこそまことの盧舍那佛のお姿で御座ります。

婆羅門僧正　待て、辨曆。それでは皆さま、御異議は御座らぬのぢやな。

眞玉　（漸やく發言の機を得て）　いや、異議が御座ります。婆羅門僧正さま、只今道璿さまの仰せられました御尊體の樣式の上の非難は、私にはどうしても合點が參りませぬ。その點につきましては、行基大僧正さまがまだ鑄造を始めぬ內に、くはしく皆さまにお話しなされましたから、今更くどくは申しませぬが、何は兎もあれ、私どもはこの日本の國の、土の上に生れたもので御座ります。日本の土の香は、私どもの血を温めて、生命の糧となつてくれるので御座ります。盧舍那佛はその日本の民の信仰の內に生れた御佛で御座ります。成程我が日本は國まだ幼なく、民の心も、唐土や天竺に比べては暗く愚かで御座ります。從つて、この御尊像も、あるひはそれ等の諸國の御佛に劣るかも知れませぬ。併し、如何に巧みに製られた御尊像でも、健駄羅や天竺の樣式では、日本の民が思慕の涙を注いで、をがみ奉る盧舍那佛では御座りま

せぬ。

佛哲　眞玉、それはそちの見聞が狹いのでさう思ふまでぢや。一度海を渡つて、さま〴〵の尊い御佛を拜んでみるがよい、忽ちそのやうな說を立てた事を恥かしく思ふであらう。

眞玉　たとへ海を渡つて、唐土や天竺震旦の尊い御佛を拜んだとて、私のこの信念は失せはいたしませぬ。成程天竺は、始めて佛法の現はれた靈地、唐土は中華の大國、ともに三寶の榮きはみなき樂土で御座りませうが、私にとりましては隣りの子供の美しさに過ぎませぬ。如何に愚でも醜くとも、我家に生れた子供に曳かるゝのが親の心で御座ります。皆さま、私は根本より鑄造しなほすのは、たゞ徒らに國家の費えを增すばかり、無用の儀と思ひます。

公麿　いや、眞玉、そちの意見は、かの行基大僧正に比べて、また一段と、偏狹ぢや。我らは、そのやうにわが日本の國を、他國と差別しては考へぬ。佛法は唯一無二の敎ぢや。天竺震旦の民も、唐土韓國の民も、また日本の民も、佛を信ずる心に變はない。勝れた樣式の佛像が、要するに必要なのぢや。

眞玉　私はさうは思ひませぬ。成程、佛法は唯一無二の敎で御座ります。併し、佛を信ずる心は、國により民の心によつて異ひます。

公麿　いや、その國の民が、まことの佛法を理解して居れば、異ふ筈がない。もし佛を信ずる心が各異ふとすれば、それは佛法を誤まつて傳へたのぢや。眞玉、この盧舍那佛の尊像は、我らが長となつて、經始から、鑄型をきざむまで、殆んど、そちの思ふまゝに造らせてみたのぢや。ところが、平生の大言にも似合はず、この出來榮はどうぢや。成程、技術としては一點の非もあるまい。併しこの御尊像の何處に、慈悲の御光がある。何處に、端嚴微妙と經文に說かれた佛菩薩の御相がある。我らはなまじひに行基大僧正の御仰せに從つて、鑄造をそちに委ねた事を悔いてゐるのぢや。

眞玉　公麿どの、この盧舍那佛の御尊像には、慈悲の御光が見えぬ。端嚴微妙な佛菩薩の御相が現はれて居らぬとおつしやるので御座りまするか。

公麿　さうぢや。

眞玉　成程、類型に毒せられて、眞の佛菩薩の幻を見た事のないお方には、さう見えるので御座りませう。公麿どの、烏滸がましい申分で御座りますが、これは私の獨創力が生んだ盧舍那佛で御座ります。天竺健駄羅の類型を眞似たのでは御座りませぬ。新らしく案じ出された樣式で御座ります。

公麿　はゝゝゝ、そちはこの盧舍那佛に自負して狂氣いたしたな。

良辨　これ、兩人とも控へるがよい。此處は論議の場所ぢや。惡口雜言は無禮であらう。

婆羅門僧正　さて、いよ〳〵根本より改鑄し奉るとすれば、如何なる樣式によつて鑄奉るか。皆さまの御意見が承はりたいものぢや。

眞玉　婆羅門僧正さま、婆羅門僧正さま、それではどうあつても……

婆羅門僧正　（冷やかに）多數の御意見ぢや。改鑄と決定いたす。

眞玉　（獨語）行基大僧正はまだお出でなされぬ。何うなされたのであらう。

佛哲　只今、僧正から申された樣式について私の考へた事を聞いて頂きたいと思ひます。そも〳〵樣式につきましては、紫香樂以來既に何度となく論議を盡されて、しかも尚決定しかねて居るやうな次第で、云はゞ、この度の盧舍那佛鑄造の基礎とも思はれる困難な問題で御座ります。この問題さへ決定いたしますれば、この未曾有の大像は、もはや左程の行惱みもなく出來上るかと私には思はれるので御座ります。私はこれ迄、漂泊の旅に多くの月日を送りましたため、天竺、獅子國、交趾また唐土閩越の地まで、名ある寺々には必ず巡拜いたしました。これ等の寺々の佛像は皆勝れた藝術品で御座りました。就中、私が隨喜の淚を流して思はず合掌禮拜いたしましたのは、かの有名な南天竺達嚫の波羅越寺の本尊彌勒菩薩で御座ります。その氣高さは、靜かな曉の日の光のやうで御座りました。皆さま、天竺は佛法發祥の靈地で御座ります。たとへ只今は外道の輩にふみにじられて、見る影もない有樣とは云へ、古き世の寶は地の底、洞窟の內に人知れず埋もれて居ります。それらの寶をたま〳〵拜み得たものは、釋迦如來在世の頃の極樂世界を、まのあたり見るやうな心地がいたします。皆さま、私は天竺の樣式を以つて、改めてこの盧舍那佛を鑄奉ることを主張いたします。

辨麿　（熱し切つて行基の來場を待つてゐる眞玉を冷やかに見つめてゐる）眞玉。

眞玉　何ぢや、辨麿。

辨麿　行基大僧正が見えぬと、そちは勢が弱るやうぢや。何故何時ものやうにそちの意見を强く主張せぬ。

眞玉　大僧正はきつとお出でなさるであらう。早くお出でなされぱよいに……

道璿　いや、我らは佛哲どのゝ御意見に從ふ譯には參らぬ。皆さまも知つて居らるゝとほり、我らは紫香樂造營の時

から、健駄羅の様式を主張して居るのぢや。健駄羅の様式は素朴ぢや。大夏、安息、太秦など云ふ西方萬里の國國の不可思議な藝術に影響せられて、一見、奇異に見ゆるのが健駄羅の藝術ぢや。成程、造像の技巧の巧拙から云うたならば、或は天竺に劣るかも知れぬが、併し健駄羅の藝術には、深い精神が現はれて居る。暮れゆく空に一つ一つ現はるゝ星の光を見るやうぢや。見るものに、自づと涙を催さしむるやうな所がある。

眞玉　(歡喜して)　行基さまぢや。皆さま、大僧正のお出で御座ります。(指さす)

婆羅門僧正　大僧正が參られたと……

(皆、眞玉の指さす方を見る。蒼ざめた行基、童子に助けられて現はる。行基はまづ大佛を拜して、幄舍に入り、皆に會釋する。)

婆羅門僧正　大僧正には、御病氣と承はりましたが……

行基　(眞玉と童子とに助けられて着席)　いや、さほど烈しい惱では御座らぬ。併し、仙那どの、いよ／＼行基は近い内に往生の素懷を遂げられさうぢや。(皆驚いて行基を見る。行基は寂しい微笑を洩らして)　かやうな事を申すと、わざと事を構へて天下の人々を驚かすたくみのやうにきこゆるが、近頃俺は夢となく、現となく、極樂莊嚴の寂光世界を見まするのぢや。涙もこぼるゝばかり美しい眺めぢや。(合掌する)

良辨　ふむ、大僧正のやうに、三世に徹底した聖人なればこそ、さやうな有難い奇蹟も現はるゝので御座ります。

婆羅門僧正　併し、盧舍那佛の開眼供養までは、どうあつても、濁世にお止まりを願はねばならぬ。開眼の導師は大僧正がお務め下さらねば……

行基　いや、そのやうな事は思ひもよらぬ。まづ來ん年の春も早い頃、淨土に召さるゝで御座らう。

眞玉　大僧正さま、そのやうな事は仰せられずと、この盧舍那佛の出來上るまでは、どうぞ此世にお止まり下さりませ。

行基　俺も帝の仰せを受けて、折角これまで力を盡したものゆゑ、天晴出來榮を見て行きたいとは思ふが、既に命數定まる上は是非もない……仙那どの。

婆羅門僧正　はい。

行基　さやうの次第なれば、盧舍那佛開眼供養の折の導師は、是非貴僧にお務めを願ひたいと、俺はこの間から思うてゐる。御承引下さるで御座らうな。

婆羅門僧正　いや、我らのやうな若輩では、とても、そのやうな……

行基　どうか御承引下され。けふ此處へ參る前に、もはや帝にもお願ひいたして置いた事ゆゑ。

婆羅門僧正　（感激する）　はい。不肖の我らに、そのやうな重大の儀が務まりまするか、たゞ、それが心がゝりで御座る。

道璿　大僧正、只今、衆議によつて、この盧舍那佛を、更に根本より改鑄する事に定まつて御座る。

行基　（靜かに）　根本より改鑄いたす……それはまた何う云ふ譯で御座る。

眞玉　この御相は、御佛とは思はれぬ。何處に慈悲の御光がある、端嚴微妙な御相が現はれてゐると、かう皆さまが申されるので御座ります。

行基　さやうな御意見は、これまで幾度となく論議の席で承はつたやうぢや。皆さま、それならば、佛は何故人間の醜しい姿をかりて、この世に現はれ給うたので御座らう。佛の御力は、廣大無邊ぢや。俺がもし佛ならば、人間よりは更に美しい創造によつて、我姿を現はしたで御座らう。然るに佛は、人間の姿を以て、天竺にお生れなされた。これには深い意義がなくては叶ひませぬ。

道璿　大僧正、佛はたゞの人間としてお生れなされたのでは御座らぬ。最も美しい人間として此世に現はれ給うたので御座る。

行基　さればぢや、道璿どの。佛の最も美しい人間として現はれ給うたと云ふのは、卽ち我ら人間の眼が、第一に佛を見出し奉つたと云ふ事ぢや。佛の御生命は森羅萬象の何處にも宿つてお出でなされる。これを最初天竺の人が見出したからこそ、まづ佛は天竺の人の姿になつて現はれ給うたのぢや。行基はさう信じて居る。佛は人の心が寂しうなつて、切に貴いものを思ふときに、始めて現はれ給うた。然るに人間には自から差別の心がある。俺と同じ姿を持ち、俺と同じ言葉を吐く者に最も親しみを感ずる。そこで、佛は、衆生濟度の大願を果す爲めには、どうしても彼等と言語容姿を同じうせねばならぬと思はれたのぢや。人間よりも美しい創造によつて現はれ給はなかつたのは、そのためぢやと行基は信じてゐる。

良辨　大僧正の仰せは、よく我らの心に徹しましたが、そのやうな深いお考が、この盧舍那佛に現はれて居ると、お思ひなされますか。

行基　俺はよく現はれて居ると思ひまする。かうして拜んでゐると、濁世の寂しさを忘るゝばかりぢや。（合掌）

眞玉　（跪づいて）　大僧正さま。大僧正さま……

辨磨　（憤りに驅られて立上る。行基を白眼みつめて）　大僧正さま、頭が痛んでなりませぬゆゑ、失禮ながら私は退席いたします。

（公麿が無言で、彼をなだめる。）

第三場

天平勝寶元年二月二日の夕刻の菅原寺東南院の內部の光景。正面には厚い帷幕が垂れてゐる。その內が行基の寢室になつてゐる。右の方の中央に、大きな厨子がある。開いた扉の內に、彌勒菩薩の美くしい乾漆の大像が見えてゐる。左は廣い兩開きの入口になつてゐる。院の外から時々、群集の泣悲しむ聲や、稱名念佛の入亂れた聲が、物凄く響く。僧四五人、室內に坐つて話をしてゐる。

僧一　御門前の群集はまだ立去らぬと見える。もはや日も暮れて行くのに。

僧二　冬の日はまことに短いものぢや……かほどまでに人人に慕はれては、定めし大僧正さまも、この世を去らるるのが辛い事で御座らう。あれ、おきゝなされ、門前の群集の泣きかなしむ聲は、先刻より却つて烈しくなつて參つた。

僧一　功德は積んで置くものぢや。大僧正がお若い時分、每年洪水のために困難いたす淀の川下の村のために堤を築いておやりなされたので、村人たちがその御恩を思うて、一昨日の朝より、夜の眼も寢ずに、金堂にこもつて、大僧正の御惱御本復を祈つて居りまする。

僧三　我らとて、今一度大僧正の健やかなお顏を拜したいと思ふ心にかはりは御座らぬ。

僧一　いや、併し、この度は大僧正は御本復はむづかしいので御座らう。おいたはしい事では御座るが……

僧四　たゞいま、帝の厚い思召によつて、朝廷より効驗神の如しと云はるゝ、西域のお藥を賜はりました。

僧二　大僧正はそれをお上りになりましたか。

僧四　大僧正は聖恩を感泣して、そのお藥を召上りましたが、もはや、そのお藥を受付けるだけのお力が御座らぬ。忽ちもどしてしまはれたので御座る。

僧三　何にいたせ、長い御惱ぢや。御身體の衰へが烈しう御座らうから……

（童子一人、手にこぼるゝばかり咲き誇つた梅花一枝を捧げて、泣きながら靜かに現はれる。）

僧四　これ、淨麿(きよまろ)。何でそのやうに泣くのぢや。

童子　大僧正さまが……

僧三　どうしたと云ふのぢや。

童子　（漸く泣止む）皆さま、御覽なされませ。これは大僧正さまの一番大切になされました講堂の前の紅梅の枝で御座ります。たゞいま大僧正さまが、久しく垂れこめてゐてあの紅梅を見ぬ、定めし花も咲いたであらう。一枝手折つて參れと仰せられましたので、參つて見ます

と、一夜の内に匂深い紅の花が、このとほりみな白く變つてしまつて居りました。(泣く) 大僧正さまの御身の上に悲しい事のある前兆で御座ります……

僧二　いかにも不思議ぢや。

(童子は泣く〱、その梅花を捧げて帷幕の内に入る。)

僧一　不思議と云へば、今日、良辨僧都が、帝の思召によつて、お見舞に來られて我らに秘かに仰せられたが、今曉近う吉備眞備公が、占星臺上で、天文を見て居らるゝと、遥かに西の方角に當つて、白銀に輝く大きな星が、俄に雷のやうな響を發し、流れ星となりて、瞬く間もなく地平のかなたに隱れ去つたさうに御座ります。吉備公は、これ只事に非ず、我日本の民の深い悲ぢやと色を變じて、帝に伏奏せられたと云ふ事で御座る。

僧二　大僧正は三世に徹底した大聖人ぢや。生菩薩と尊まるゝお方ぢや。かるが故に、三十三天の諸佛が聖人の大往生の不可思議を我らに示さるゝのぢや。(合掌)

僧三　かの大聖釋尊の沙羅雙樹下の御入滅の有樣を、眼のあたり見るやうぢや。(合掌)

僧四　(合掌) 我ら幸にも、末世に生を受けて、かゝる不可思議に逢奉るのも、何かの因緣で御座らう。有難い事ぢや。

(沈默。)

(門前の群集の騷擾愈烈しくなる。忽ち左の方の扉の外に爭ひの聲がきこえる。やがて、二三の法師にへだてられながら、第一幕に出た頰に黥のある男、僧形になつて旅裝束で現はれる。)

法師一　此處は大僧正の御寢所ぢや。入る事はならぬと云ふに。

頰に黥のある男　いや、大僧正さまに一目お目にかゝれば、すぐ分る。我らは決して、怪しい者ではない。

法師二　さりとは强情な法師ぢや。大僧正は、いま御重態ぢや。お許しなくては、何人もこの御寢所には入れる事はならぬ。

頰に黥のある男　我らの顏を御覽になれば、大僧正さまはきつとお許しなされる。邪魔すな。

法師二　いや、ならぬと云うたらならぬ。

法師一　そちのやうな見も知らぬ法師を入れたら、それこそどのやうなお叱を受けるか知れぬわ。さあ歸れ、歸れと云ふに。

法師二　これ、早く立去らぬか。

僧四　何事ぢや。騷がしい。大僧正の御耳に入つたらどうする。

頰に黥のある男　大僧正さまはどこにお出でなされまする。

僧四　貴僧は一體何者ぢや。
頬に黥のある男（一禮して）私奴はいつぞや、大僧正さまが、盧舍那佛勸進のため、六條の市場で御說敎なされましたとき、初めて一念發起いたしました法師で御座ります。大僧正さま御病氣御大切の噂を、過ぐる一月二十三日に筑紫の觀世音寺で聞きましてより夜を日についで馳上つて參つたので御座ります。
僧四（法師たちに）その方たちは、もう參つてもよい。
（法師達去る）それは御奇特な事ぢや。貴僧がわざ〳〵遠路のところをお見舞下された次第は、何れ大僧正に我らより御披露いたすで御座らう。
頬に黥のある男（あたりを見廻して）して大僧正さまは何れにお寢みで御座ります。
僧四（帷幕を指さして）あれにお出でぢや。（頬に黥のある男、つか〳〵と帷幕の方へ行かうとする）これ、何處へ行かるゝのぢや。
（僧等驚いて皆行手に立ちふさがる。）
頬に黥のある男　もはや今生のお別れぢや。大僧正さまを拜ませて下さりませ。
僧四　折角のお志なれど、醫師の命令によつて、どなたもお眼どほり叶はぬ事になつて居るのぢや。
頬に黥のある男（跪いて）たつた一目でよろしう御座ります……
僧一　只今申上げたやうに、何と云うても御重態の事ゆゑ、御心を騷がせぬやうに、我らがお付き申して居るのぢや。
僧三　貴僧の厚いお志は、我ら必ず機を見て大僧正に御披露いたすゆゑ、今日はお引取り下され。
頬に黥のある男（泣く）大僧正さまは、私奴にどのやうな時でも、必ず會うてやると仰せられました。私は、一目拜まねば、どうしても引取られませぬ。
僧四　それは無禮と云ふものぢや。この四五日は已むを得ぬ筋の方々のお見舞さへ、出來るだけはお斷りいたして居るのに。
頬に黥のある男（急に顏を上げる）已むを得ぬ筋の方々とは、どなたさまの事で御座ります。
僧四　高位高官の方々ぢや。藤家の公達とか僧正僧都の職にあるお方がお見舞下さる場合ぢや。
頬に黥のある男　我らとて、心の誠は、そのやうなお方と變りは致しませぬ。どうぞ大僧正さまにお取次なされて下されませ。
僧四　はて、ならぬと云うたらならぬ。
頬に黥のある男（恐ろしい顏で）うむ。そちたちは、高位高官の人々には媚る、匹夫の志は、ふみにじつても構

はぬと云ふのぢやな。法師にあるまじい奴等ぢや。

僧四　（憤つて）何と申す。

（他の僧たちも不穏の顏色にて、頬に黥のある男につめよる。童子の手によつて帷幕がさつと、左右に開かれる。一段高い床の上に、支那風の牀をまうけて、その上に病衰へた行基が坐つてゐる。童子が、先刻の白梅の枝を枕上の花瓶にさして、行基の横の榻に腰かけてゐる。一人の老法師が、黙々と現はれて、諸處の燈臺に灯を點じてゆく。室内急に明るくなる。帷幕が開かれると、その方を見た頬に黥のある男は平伏する。）

行基　誰かと思うたら、そちは何時ぞや六條の市場で會うた伯樂であつたのう。

頬に黥のある男　さやうで御座ります……

行基　いま聞いて居れば、そちは筑紫の觀世音寺から、夜を日について驅付けたと云ふが……ようこそ俺を忘れずに居てくれた。厚う禮を云ふぞ。

頬に黥のある男　……勿體なう御座ります……

行基　（凝乎つと男の姿を見て）そちは僧形になつて居るが、何時發心したのぢや。

頬に黥のある男　はい。六條の市場で大僧正さまが私奴に佛性があると仰せられましたとき、ふと、涙が出て思はず大聲に泣きましたが、そのとき大僧正さまが、明日寺へ參れとおつしやつて下さりましたのでよろこんで、このお寺の御門前に參りました。

行基　俺は待つてゐたのに……

頬に黥のある男　ところが、いざ御門をくゞらうと致しますと、どうした事やら氣怯れが出て、いくら勇氣を出して見ましても、御門がくゞれないので御座ります。御門前の小川で、水を一抔飲んだら、心が落着くであらうと、ふと思ひまして、小川の岸に下りたちますと、水鏡に映つた我顏の黥のあとがはつきり見えました。私奴はそのとき始めてわが顏形の醜さを知つたので御座ります。このやうな顏をしてよくこれ迄大路小路を歩いたものだと、今更ながら淺ましくなりました。

行基　ふむ。そちの本來の心が始めて眼をさましたのぢや。

頬に黥のある男　すると、この御寺の内から、鉦の音にまじつて有難い念佛の聲が風のまに〳〵聞えて參りました。そのときハツと瘧が落ちたやうな氣がして、心が涼しくなりました。この心ぢやと、かう私奴は思うたので御座ります。

行基　（感じて）さうぢや。いかにもその心ぢや。

頬に黥のある男　ところがさう思うて居ります内に、涼しい心地は、また何時の間にやら、消えうせて舊のとほり

後悔慙愧の苦しさが胸に張りつめて居ります。うむ、これてはいかぬ。たゞ今の凉しい心地が、常に心に滿ちてゐなければならぬと思ひまして、さうなるまではお眼にかゝらぬつもりで、御門前を立去り、知人を尋ねて、筑紫の方へ參りました。そして筑紫の觀世音寺で出家いたしましたので御座ります。

行基　どうぢや。つねに心に凉しさが、たえぬやうになつたか。

頰に黥のある男　仲々なりませぬ。兎もすれば、邪念が起つてなりませぬ。大僧正さまの御病氣の事を聞かずに居りましたら、まだなか〳〵お眼にはかゝれぬ筈で御座りました。

行基　俺も久振にそちに會うて嬉しい。して、法名は何とつけて貰うた。

頰に黥のある男　行信とつけて貰ひました。行ひを信ずて御座ります。

行基　行信か、よい名ぢや。ときに行信、俺もそちに喜んで貰はねばならぬ事があるのぢや。

頰に黥のある男　私奴に——何で御座ります。

行基　（にこやかに）目度たい事があるのぢや。

（託陀眞玉が入つてくる。眞玉は僧たちに會釋して、行基の前に跪く。）

行基　眞玉か。遲かつたのう。

眞玉　お使を受けましたとき、生憎と　東大寺へ參つて居りましたので、つい遲くなりました。

行基　廬舍那佛の工事はどうぢや。もう大分進んだであらう。

眞玉　はい。あとはもう御胸から上を鑄奉るばかりになりました。

行基　眞玉、殘念ながら、行基は、もう廬舍那佛を拜む事は出來ぬ。今もこの行信にその話をしようといたして居つた所ぢや。俺はいよ〳〵皆と別れねばならぬ。（間を置いて）もうやがて、佛のお迎ひが參るであらう。（合掌する。）

（門前の群集の念佛と哀泣とが、この時また烈しくきこえる。）

眞玉　お顏の色などは、何時もより晴れやかにお見上げいたしますが……

（行信、合掌。）

行基　それは嬉しい事があるからぢや。（祕かに打明けるやうに）俺は兜率天に來世の生を受ける事になつたのぢや。（眞玉も僧たちも合掌する）南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛……。（行基は合掌したまゝ）かうしてゐる内にも、つねに恐ろしいやうに光り輝く紫の雲が眼前を離れ

ぬ。

行信　大僧正さま、何かそのやうな御兆が御座りましたか。

行基　それを今そちたちに話してきかせようと思うてゐるのぢや。兜率天は美しい處ぢや。今朝曉近くの事であつた。俺がふと氣がつくと、眼の前に何とも云へぬ美しい世界が開けてゐるのぢや。はて、此處は何處やらであつた。たしかに見た事があると思うて、その內をさまようてゐると、廣い池があつて、人の頭のやうな大きな蓮の花が馥郁として、何とも云はれぬ香を吐いてゐる。俺は夢見るやうになつてしまうて、その池のほとりの徑を步いてまわつたのぢや。すると、その徑のつくるところに、寶石を以て築いた壯麗な樓閣があつた。その正面の欄間に、兜率內院と云ふ額があつたのぢや。ハツと思うて合掌禮拜すると、彌勒菩薩が何時の間にか俺の前に立つてお出でになるのぢや。そして心に染透るやうな御聲で、行基、そちは長い間我身を信仰してくれた。仇には思はぬ。その報として、そちを此處に引取つて、末長く我身の手許に召使うてやると仰せられた……妙なる樂の音が鮮やかにきこえる。よい音ぢやと思うて、ふと我歸ると、菩薩の御姿も莊嚴世界も消えてしまうて、たゞ俺の頰がしとゞ涙にぬれて居つたのぢや。

（皆合掌して念佛をとなへる。）

（門前の哀泣がまたきこえる。）

眞玉　（涙を押拭うて）大僧正さま、御後に殘りまする私どもは……（嗚咽する）

行信　（聲を上げて泣く）……

行基　別れるのはこの世の定めぢや。俺とてもそちたちを殘して行きたうはない。（涙を拭ふ）あの門前に泣悲しむ人々の聲をきくがよい。俺は昨夜も一昨夜も、たゞ獨りで、あの聲をきいたのぢや。まことに腸がちぎれるやうであつた。凝乎つとあの聲に聞入つてゐると、地獄の鬼でも泣かずにはゐられまいと思はれる。（群集の聲がまたきこえる）

行信　長い一生の內にたつた二度よりお目にかゝれぬとは、あまり果敢ない御緣で御座ります……大僧正さま、どうぞ私奴もおつれなされて下さりませ。（泣伏す）

行基　濁世の業のまだ盡きぬ身ぢや。そちの願は今は叶はぬ。何れ、來世では會うて笑うて話をいたすであらう。そのつもりで修業を怠らぬやうにするがよい。眞玉、そちにもいろ〳〵話したい事がある。

眞玉　はい……

行基　まことを云へば盧舍那佛の御造營の終るまで、俺は此の世に止りたいと思うてゐたのぢや。帝が鑄造の大願

を起されたのは、天平十二の年ぢや。まだ玄昉法師が生きて居られて、どういふ物か、俺と心が合はず、互に罪深い内心の爭をつゞけてゐた頃ぢや。あれからもう十年になる。俺はその間、隨分苦しい思もしただけ、あの盧舍那佛には執着が殘るのぢや。併し、何事も佛の思召ぢや。まして來世の幸福を生前に知る事を得た俺が、そのやうな心を持つては佛罰の程が恐ろしい。それゆゑ、俺はすべてをそちに任せる。眞玉、云ふまでもないが大勇猛心を以つて、誓つて、造佛の功を終らねばならぬぞ。よいか。

眞玉　はい。

行基　たとへ命にかゝはるやうな事があつても怯れてはならぬ。

眞玉　何事も覺悟いたして居ります。

行基　未曾有の大事業ぢや。險しい心の人間もないとは云はれぬ。俺はそちに望をかけて、死んでゆくのぢや。

眞玉　（精神を勵まして）大僧正さま。どうぞ御安心下さいませ。たとへどのやうな事が御座りましても私は必ず盧舍那佛を鑄上げ奉ります。

行基　これまで度々我らの意見に服せぬ人々の論議を破つて參つたのは、俺とそちと二人で力めたからぢや。いま、俺が入滅すれば、あの人々は、また勢を得て、おのれの意見を言張るであらう。その時ぢや、そちが苦しまねばならぬのは。

眞玉　はい。

行基　行信。

行信　（顏を上げる）何で御座ります。

行基　そちもこれから、眞玉を助けて、盧舍那佛造營のために盡してくれねばならぬ。悉しくは、何れ、眞玉がそちに話してきかせるであらう。

行信　大僧正さまの仰せならば、如何なる事でもいとひませぬ。

行基　よう云うてくれた。嬉しう思ふぞ。（兩人平伏する。群集の聲またきこえる。行基涙ぐんで）門前で泣きさけぶあの人たちを思ふと、どうしても死なれぬ…

（寺僧一人現はれる。）

寺僧　たゞ今、參議藤原仲麿さまが、お出でなされました。

僧一　大僧正さま、藤原仲麿さまのお出で御座ります。

行基　仲麿公が見えたと云ふのか。これへ御案内いたせ。

（寺僧去る。やがて仲麿を案内して來る。）

仲麿　大僧正、御病氣は如何で御座るか。

行基　わざ〳〵却つて恐入りまする。

仲麿　帝よりも大切にとの勅で御座りました。

行基　數ならぬ私を大御心にかけられ、屢お見舞を賜はり、また今日は珍らしい西域のお藥まで頂きまして、行基はたゞ聖恩を感泣するばかりで御座る。
仲麿　盧舍那佛の鑄造もまだ終らぬ内に、大僧正にもしもの事が御座つては、我らも途方に暮れねばならぬ。あまり心がゝりになりまするゆゑ、夜陰に驚かし參らすも如何かと思ひましたが、兎も角も御容態を知りたうて、つい參つたやうな次第ぢや。
行基　仲麿公、もう長のお別れが近づいたやうに思はれます。
仲麿　そのやうな心弱い事を。大僧正とも覺えぬお言葉ぢや。
行基　いや、彌勒菩薩のお迎が參るのは、もう間もあるまい。（合掌）南無阿彌陀佛……
（行基の顏の色次第にかはる。）
眞玉　（驚いて）大僧正さま、大僧正さま。（行基に取すがる）
行基　（眼をひらく）仲麿公、かねがね申上げたとほり盧舍那佛の事はお願ひいたしまする。萬事はこれなる眞玉にお聞取り下され……
仲麿　大僧正、その御心配には及ばぬ。我らがきつと引受けて御座る……
行基　（微笑。やがて手を以つて、空中を探る）玉の階（きざはし）ぢや。兜率天まで虹のやうに美しくつゞいてゐる……
（行基入滅す。門前の哀泣念佛の聲がさわがしくきこえる。行信は聲高く泣伏す。）
仲麿　（合掌）南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛……
眞玉　（行基に取すがつて）大僧正さま、大僧正さま……
（泣入る）
（僧たちは立つて靜かに進み合掌す。）
靜かに　――幕――

第三幕

第一場

晩春五月頃、春日野の奥、杉の大木四五株右の方に立並び、その下枝には濃い紫の藤の花房が長く垂れてゐる。正面には手向山が森の上に美しい姿を露はしてゐる。
左の方、遠く平城京を望む。瓦屋の上に寺院の塔が高くそびえてゐる。午後。一面に花咲き亂れた草原。小鳥の聲がのどかにきこえる。葛城若女が阮咸（げんかん）をもてあそびながら木の切株に腰かけてゐる。
葛城若女　眞玉さまは何をしてお出でなさるのか。遲い事

ぢや。（阮咸を彈きつゝ唄ふ）

花さきみつる春日野に
戀しきひとをまちくらす
女心は白藤の
垂れて動かぬ姿かも。

悲しき夢のさめしとき
涙にしめる眼をあげて
ひとりぬる夜のさびしさを
毗盧舍那佛にかきくどく。

樂しからずや、戀の夢
たゞ力なく君が手に
いだかるゝとき、わがなみだ
微笑む眼を濡らすかな。

（やつれて頰のこけた眞玉が現はれる。）

葛城若女　（微笑したまゝやうやく唄ひ終る）　眞玉さま、遲いお出ぢや。どれほど待つたか知れませぬ。

眞玉　（肩に手をかける）　我らも心に急いだが、生憎今日は、俄にむづかしい事が起つて、どうしても拔けてくる事が出來なかつたのぢや。

葛城若女　何で御座ります、むづかしい事とは。

眞玉　困つた事ぢや。大鑄師の高市眞國と高市眞麿が、黨を組んで、我らの命令を聞かぬのぢや。

葛城若女　何と申すので御座ります。

眞玉　やう〳〵寄せ型が出來たので、今日から、御肩を鑄始めたのぢや。すると、何を憤つたのか、眞國と眞麿とが、面白うない顏附でたゞ立つて居るのぢや。その內に坩堝は燒けて眞赤になる。我らは樋の口を見て、さあ、今ぢや。銅汁の加減はどうぢやと訊いても返事もせぬのぢや。腹が立つてならぬ故、眞國を捕へて叱ると「我らは國公麿どのの命令でなければ働く譯には參らぬ。」と、かう云ふのぢや。眞麿は、それを聞きながら、鼻歌をうたつてゐるのぢや。我らを若輩と侮つてゐるのぢや。

葛城若女　眞玉さま、夫は父の指金で御座りまするぞえ。

眞玉　我らもそのやうな事ではないかと思うた。そなたはどうして、公麿どのの仕業と知つたのぢや。

葛城若女　つい四五日前の事で御座ります。父は二人の大鑄師を、わが家へ集めて、何やら密かに談合して居りました。私はふと通りがゝりに父の聲で「そちたちも我らもつまらぬ。犬骨折つて鷹にとらるゝのぢや。」と云ふのをきゝましたが、あなたさまのお話で、思ひ當ります。

眞玉　ふむ。公麿どのが、如何に力をつくされても、つまりは我らの功績になると云ふのぢやな。

葛城若女　さやうで御座ります。

眞玉　それは小人の考へぢや。藝術の上に功績を爭ふならば、何故、藝術で爭はぬ。卑しい手段を廻らして、我らを苦しむるとは、以ての外ぢや。

葛城若女　眞玉さま、わが父を惡ざまに申すは、罪深い事ながら、何事にも、あのやうな險しい手段をいたすのが、父の持前で御座ります。この上とも御用心なさらねばなりますまい。

眞玉　併し、如何やうに手段を廻らされてももはや案じる事はない。行基大僧正がお亡くなりなされたときはまだ鑄造も進まず、人々の意見も、さま〴〵であつたゆゑ、我らも心をゆるす事が出來なかつたが、此頃では、鑄造もあのとほり進んで、今更莫大の費をかけて鑄直すなどと云ふ事は、國の力がゆるさぬ。葛城若女、恐ろしい費ではないか。今日までに使うた銅の高が、ざつと六十萬斤、炭が一萬石あまりぢや。

葛城若女　ほんに恐ろしい費で御座りまするなあ。その費もさることながら、行基菩薩のおかくれ遊ばしてよりのあなたさまの御苦勞も、並大抵の事では御座りませぬ。よくお生命が續いたもんぢやと、私は何度か思ひました。

眞玉　兜率天にまします大僧正が、我らを守護して下されたのぢや。（合掌）

葛城若女　ほんに行基さまは御佛の生れかはりぢや。御姿を拜みまつるまでは、未來の事まで見通すお方ときいて、恐ろしう思うて居りましたが、何時ぞや、六條の市場で、有難い御說敎をきいたとき、何とも云へぬ、氣高さ、おやさしさに、われしらず涙にくれてしまひました。

眞玉　もうあのお聲もきかれぬと思ふと、我らは寂しうて泣きたいやうぢや。

（沈默。）

葛城若女　（唄ふ）

彌陀の光につゝまるゝ
尊きひとを忍びつゝ
我らの戀に幸あれと
涙流して祈るかな。

眞玉　葛城若女、（葛城若女の腰かけてゐる木の切株に腰を下ろして、ひたと並び、肩を抱く）今一つ唄うてきかせてくれ。

葛城若女　（微笑。また唄ふ）

眞玉　（頭を葛城若女の肩に押しつけて、微笑みつゝ）

　　藤の花さく春日野に
　　君と見ゆるうれしさよ。
　　兜率の宮にすむ人の
　　守らせ玉ふ戀の幸……

（左の杉の木立から、藤の花をかき分けて、大神杜女が靜かに出てくる。）

葛城若女　（身動きもせずに）　眞玉さま、この儘に死んで逝るゝものならば、どのやうに嬉しう御座りませう……

眞玉　葛城若女、そなたは、我らの魂ぢや。

（抱擁。）

杜女　何者なれば、恐多くも宇佐八幡勸請の靈地で、戲れてゐるのぢや。

眞玉　（驚いて、葛城若女の傍から離れる）　誰ぢや。

葛城若女　（恥ぢ恐れて）　……

眞玉　御身は誰ぢや。

杜女　この森の奧に住うて、八幡大菩薩勸請の靈地を守護する者ぢや。

眞玉　この森の奧に……御身は不思議な事を云はるゝ。この森の奧は地獄谷と云ふ人の恐れて近づかぬ魔所ぢや。夜になれば、何處ともなく呪詛の聲がきこえたり、白い木魂のやうな者が音もなく通つたりすると專ら噂の高いところぢや。そのやうな處に住んで居らるゝとは……

（葛城若女は恐れて、眞玉に取りすがつてゐる。）

杜女　神靈の岐には、自ら人智には計られぬ靈怪な兆があるのぢや。たま〳〵さやうな事を見聞いたした者が、恐れて魔所などゝ云ふのぢや。此處は人間の來るべき所でない、そちたちも早う立去るがよい。

眞玉　何とも合點の行かぬ事ぢや……

葛城若女　（恐れて）　眞玉さま、早う參りませう。そのやうな恐ろしい處に長居して災に會うてもつまりませぬ。さあ、早う……

眞玉　（立上る）　行かう、葛城若女。

杜女　（凝乎つと、眞玉を見つめて、冷やかに）　これ、待ちや。

眞玉　何ぢや。

杜女　見れば二人とも若うて美しい人たちぢや。哀れなものぢや。

眞玉　何が哀れぢや。

杜女　これは各の命數の秘密にかゝはる事ぢや。妄りに明すことはならぬが、未來の悲を知らず、たゞ狂ひたはむ

るゝそちたちが不憫なあまり語つてきかせる。ゆめ、人に洩らしてはならぬぞ。

眞玉　…何ぢや。

杜女　そちはこの秋を過ごさずして命を失ふのぢや。

眞玉　何、我らが命を失ふと云ふのか。

杜女　さうぢや。そちには死相が現はれてゐる。不憫ではあるが、如何にともし難い。

眞玉　(笑ふ)　死相が現はれてゐる…愚な事を云ふ女子ぢや。そのやうな事が、どして信ぜられよう。(葛城若女は色をかへてきいてゐる)

杜女　信ぜずば、信ぜぬまでの事、我身はたゞ見たまゝを云うてきかせただけぢや。(去らうとする)

葛城若女　(杜女の手にすがる)　…しばらくお待ち下さりませ。

杜女　そちたちも早く此處を立去るのぢや。

葛城若女　はい。立去りまする…どなたさまかは知りませぬが、只今おつしやつた一言が私は心づかひでなりませぬ。今少し悉しうお話し下さりませ。もし、御願で御座りまする。

杜女　我身にもそれより深うは分らぬ。たゞこの若人の額ぎはに見ゆる曇が不祥な未來を敎へてくれるのぢや。(去る)

眞玉　(後を見送つて)　氣味の悪い女子ぢや。

葛城若女　眞玉さま、あの女子の云うた事が、氣にかゝつてなりませぬ。

眞玉　(笑ふ)　大丈夫ぢや。我らは兜率天にますます行基大僧正が守護して下される。葛城若女、案じる事はない。

葛城若女　…でも私は案じられてなりませぬ。

眞玉　あの女子は紫の藤の下枝を分けて、森の內に隱れてしまうた。不思議な奴ぢや。狂人かも知れぬ。つまらぬ女子にさまたげられて、折角の樂しさが、何處へやら行つてしまうた。葛城若女。嫩艸山の頂へ行かう。そして、京の春を見下ろしながら、人知れぬ逢瀨を心のかぎり樂しまうではないか。

葛城若女　…あの森の內から地獄谷とやら云ふ魔所へ行かれるので御座りまするか。

眞玉　つまらぬ事を心にかけるものではない。さあ、行くのぢや。

(葛城若女は眞玉に伴はれて去る。森の內から、筑紫娘子が出てくる。)

筑紫娘子　參議さまはまだ見えぬ。(二人の行方を凝乎つと見守つてゐる。顏色蒼ざめて何となく愁はしげである)燃えたつたやうな陽炎の內を、歡しさうに笑ひながら嫩艸山の方へ歸つてゆく。美しい人たちぢや。(嗟嘆する)

もう影も形も見えぬ。夢のやうぢや。（涙ぐむ、我身を責むるやうに）たゞ泣きたいのぢや。泣いて泣いて泣死んでしまうたら、さぞよい心地であらう……（葛城若女の腰かけてゐた切株に腰を下ろす。沈思）

（仲麿があらはれる。）

仲麿　（後より肩を打く）　筑紫娘子．何を考へてゐるのぢや。

筑紫娘子　（驚いて立上る）　參議さま。

仲麿　（微笑）　我らの參つたのも知らずに、何をそのやうに考へて居つたのぢや。

筑紫娘子　（紅くなる）　何も考へては居りませぬ。命婦さまはあの森の內でお待ちなされてお出でゝ御座ります。暫らく此處にお出で下さりませ。命婦さまにお知らせ申して參ります程に。（去る）

（やがて、杜女が素燒の壺を筑紫娘子に抱へさせて出てくる。）

仲麿　杜女、久しう逢はなかつた。そちは變りはないか。

杜女　有難う御座ります。幸と何の障もなくやうやく三年に亙る大祈禱を終りました。昨夜、願の滿つる頃、八幡大菩薩の御託宣が御座りました。

仲麿　八幡大菩薩は御嘉納遊ばされたか。

杜女　御感應ましました段では御座りませぬ。參議さま、お喜びなされませ。（次第に興奮してくる）　私は八幡大菩薩の御姿を、はつきりと拜んだので御座りまする。

仲麿　して、御託宣は何とあつたのぢや。

杜女　杜女、そちが丹精をぬきん出て祈禱致せし功績によつて、わが日本の國のあらむかぎり、藤原の家は榮ゆるであらう。就中仲麿は此處五年を出でずして勢旭の昇るが如く、人臣の榮を極むるであらうと仰せられました。

仲麿　有難い御託宣ぢや。いさゝか思當る節もある……

杜女　帝は御不豫のため出家入道遊ばされて、藥師寺．御移轉が御座りました。參議さま、阿倍內親王が天日嗣をおうけになれば、あなたさまの御出世はもう思ひの儘で御座りまする。

仲麿　橘の一族は、天平十年に道祖王を太子に立てそこなうた恨はまだ忘れぬのぢや。道祖王は、この度は太子に立たるゝであらう。あのお方が、もし御位をつがるゝやうな事があつては、我らの一族は散々な眼に會はねばならぬ。此れはよく考へて置く可きことぢや。

杜女　（意味ありげに）　また、近々に年號が改まりまするぞ。

仲麿　この四月に天平感寶と改つたばかりぢや。

杜女　（沈默。やがて）　兎も角もあなたさまに御運が向いてきたやうぢや。筑紫娘子、その壺を參議さまに奉るの

ぢや。

仲麿　うむ。虬の血をしぼつて、百蟲を封じた壺ぢや。これをどうするのぢや。

杜女　諸兄公達調伏の血染の絹を、護摩の火にかけて焼いて、この壺の内に秘めて御座ります。これを宴の折諸兄公の盃に人知れず入れてお置なされませ。自づと德を失ひ人々に逆うて身を亡さるゝで御座りませう。

仲麿　杜女、何から何まで、いかい世話であつたのう。

（壺を受取る。）

杜女　恐れ入りまして御座ります……

仲麿　さうぢや。今日はそちを喜ばせる事があつたのぢや。例の八幡大菩薩遷座の話ぢや。

杜女　帝のお許しが御座りましたか。

仲麿　今朝やう〳〵お許しが出たのぢや。

杜女　有難う御座ります……

仲麿　此處は東大寺の境内ぢや。境内には八幡大菩薩を遷座し奉ると云ふ事は、神祇官たちをはじめとして法號の内にも同意せぬ人々が多かつたのぢや。帝におかせられても、それを押切つてお許しになる譯にも行かず、大御心を惱ましてお出でなさつたのぢや。それにそちも知るとほり行基大僧正が、入滅されたために、大東寺造營の方針も尠なからず變つてきたのぢや。今では良辨僧都が、僧綱所の長として、帝の御歸依をかうむつて居る。

杜女　良辨僧都は、行基大僧正とは、御性質も餘程ちがうて居りまする。

仲麿　良辨は華嚴の宗徒ぢや。行基大僧正ほどの德はないが、智慧にかけてはたくましい男ぢや。

杜女　良辨僧都は八幡大菩薩の遷座に御異儀はない筈で御座りまする。

仲麿　いや、腹の底は分らぬ。併し、良辨は今、我らに楯をついては損ぢやと云ふ事を、よう知つて居る。困るのは良辨と仲のよい婆羅門僧正と道璿ぢや。寺院の境內に神社を置くのは異法ぢやと云うて、再三帝の大御心を動かさうといたした。

杜女　私は橘家の異議を一番恐れて居りました。

仲麿　諸兄公も日本建國以來の不思議な御設ぢやと云うて、我らを白眼みつめて居られた。我らもあまりに異議が多いので、一時はどうなる事かと案じたが、何にせよ、東大寺はたゞの學問寺ではない。日本の總國分寺ぢや。即ち日本の民を治むるために、國の富を擧げて造らるゝ寺ぢや。恐れ多い事ながら、天照大神も、帝の御夢に日輪の相に現はれ給うて、我本地を示しこの大事業を御嘉納ましました。宇佐の御神も、遠祖、日の大神の本地毗盧舍那佛の境內に遷座ましますのが何の不思議で御座ら

う と申上げて、やうやく御勅許をかうむつたのぢや。

杜女　これでやう〳〵私の一生の念願が屆きました。宇佐は筑紫の遠地なれば、何卒して京に御別宮を設け、八幡大菩薩の神威を輝かさむと、たゞ、そればかりを私は願うて居りました。有難い事ぢや。參議さま、八幡大菩薩のお喜びの程も思はれまする。（默禱する）

仲麿　杜女、そちはいよ〳〵宇佐に歸るつもりか。

杜女　はい。もはや、三年に亙つて、他行いたしましたゆゑ、宇佐の宮の様子も案じられます。ともかくも一應歸りまして、御遷宮の用意もいたし、また、御託宣を乞ひまして、遲くも、この年の暮るゝ頃までには、盧舍那佛參拜のため、神輿を奉じて京へ上る心組で御座ります。

仲麿　天神地祇を率ゐて、身を草木壤土に交へても、必ず盧舍那佛鑄造の御願を成就せしむべしと云ふ、何時ぞやの宇佐の御神託は、この度の御造營には、帝のお力となつたのぢや。神輿を迎ふるときには、行幸の儀式に準じて紫色の輿を奉るであらう。

杜女　何分ともによろしく願ひまする。

仲麿　そちたちも、過分の恩賞にあづかるやうに我らより帝に申上げて置くぞ。

杜女　有難う御座りまする。

筑紫子　（悲しげに）命婦さま、私もお伴して筑紫へ參るので御座りまするか。

杜女　さうぢや。かね〴〵故鄕を慕うて居つたそちゆゑ、定めし嬉しいであらう。

筑紫娘子　命婦さま。私はもう京を離れて、何所へも行きたうは御座りませぬ。此處に殘して置いて下さりませ。

杜女　そのやうな事はならぬ。そちは此頃はどうかいたして居るやうぢや。

仲麿　筑紫娘子、白兎はどういたした。今日は抱いて居らぬやうぢやな。

筑紫娘子　はい。この頃は、いくら呼んでも私の傍へは參りませぬ。（泣く）

仲麿　杜女、筑紫娘子は、少しやつれたやうぢや。病氣ではないか。

杜女　年頃の女子は、よくこのやうにやつれて泣くもので御座りまする。

――幕――

第二場

天平勝寶元年九月下旬。夕刻。

盧舍那佛の御尊體は既に鑄終つて、いま、御頭に銅を注入する時である。大佛悉く土の山に埋れて、五ヶ處の樋の口が、天に向つて開いてゐる。土の山と、後の

丘陵とは殆んど同じ高さになつてゐる。前面やゝ下つた處に、壕が深く掘つてある。その内に炭火が紅くすさまじく熾つてゐる。樋の口は、その壕の内部に添うて、造られてゐる。巨大な坩堝が、五個、壕の上に、樋の口近く、仕掛にて、坩堝が樋の口の上に傾けられるやうに、釣つてある。大きな鞴が五つ置いてある。銅塊が、山のやうに積んである。賦役の人夫たちが、働いてゐる。人々はこの山の上に通ふには、後の丘陵から下りてくる。嫩艸山が、くれてゆく日の反射をうけて、ハツキリと輝いてゐる。丘陵の上、杉の木立の梢に金鐘寺の屋根が露はれてゐる。

左の方、一面の森、右は遠く眼界が展けて、京の人家、寺社塔影を見通す。佐保川が遠く日に光つてゐる。山脈がそのはてを劃つてゐる。

人夫一　（長い鐵の箸を以て、炭火を搔廻してゐる）　どうも此處の炭が思ふやうに熾らぬ。

人夫二　（傍で鞴をふんでゐる）　炭が濡れてゐるのではないか。

人夫一　（箸を傍に置いて汗を拭く）　やれ〱、えらい汗ぢや。

人夫二　秋と云うても、まだ九月ぢや。火のそばに居ては耐らぬわ。

（人夫三四の兩人は、銅塊を坩堝に入れてゐる。）

人夫五　（鞴をふみやめて）　やれ〱、暑い事ぢや。（坩堝の内を覗く）　や、銅の塊が少しづゝ煮えてきたわ。

人夫六　（他の坩堝を覗いてゐる）　どうしたのであらう。この坩堝は少しも火が廻らぬ。

人夫二　大鑄師たちは、何處かへ行つてしまうた。河内の若者、少し休まうではないか。

人夫一　此頃のやうに夜晝の差別なくこき使はれては、身體がつゞかぬ。皆の衆、少し休まうではないか。

（十二三人の人夫が諸方より現はれ山の上に車座になる。）

人夫七　大鑄師は何處へ行つたのぢや。

人夫八　いや、金鐘寺の方へ出かけて行つたわ。

人夫二　今日は國公麿は姿を見せぬな。

人夫一　やがて來るであらう。うまくゆけば今夜で盧舍那佛が鑄上るのだからのう。

人夫二　やうやく鑄上る事になつたわ。隨分長い工事であつたがのう。

人夫一　本統ぢや。何年になるかのう。

人夫五　鑄始めたのが、天平十九年の秋ぢや。

人夫一　（指折りかぞへて）　うむ。九三年ぢや。

人夫九　（老人。身體がやせて、苦しさうである）　俺も長

い間苦しんだものぢや。
人夫六　どうぢや。今日は一きは苦しげに見えたが……
人夫九　もうだめぢや。重い物を擔ぐと、ぐら／＼として倒れさうぢや。
人夫十　（同じく老人）娑婆に居る間は、樂は出來ぬのう。
人夫九　併しそちたちは結構な身の上ぢや。賦役がすめば、故郷へ歸れるのぢや。
人夫十　何が結構ぢや。俺のやうな貧しい者は庸（みのしろ）が出せぬによつて、毎年賦役に出ねばならぬ。
人夫五　やれ寺ぢや、塔ぢや、役所ぢや、と此頃のやうに大きな工事ばかり續いては、耐らぬわ。
人夫八　併し丈夫で國に歸るものは幸ぢや。この工事では火傷して死んだものも澤山あるからのう。
人夫二　（沈んで）盧舍那佛さまの人柱に立つのぢや。
（沈默。）
人夫九　俺は賦役の人たちが羨ましうてならぬ。これでも俺は昔帳内（とねり）まで勤めた者ぢや。
人夫一　どうして生駒の翁は、そのやうに零落（おちぶれ）たのぢや。
人夫九　俺は長屋王の帳内であつたが、王が皇太子を詛うた罪で自害なされたとき、賤民（やつこ）に下げられてしまうたのぢや。
人夫一　生駒の翁には妻はないのか。
人夫九　むかしは妻も子もあつたが、人買ひにかどわかされてしまうた。もはや死んだかもしれぬ。生きて居れば何處ぞの家の奴婢になつてゐるであらう。
人夫二　やれやれ、氣の毒な事ぢや。
人夫九　俺は紫香樂の造營から引つゞいて、こき使はれてゐるぢや。そのためにこのやうに病みつかれてしまうたのぢや。
（沈默。）
人夫五　や、大鑄師たちがやつてきたわ。
人夫十　鬼奴がやつてきた。どれ。（立上る）
（皆立上る。）
（大鑄師高市眞國、同眞麿、柿本男玉が現はれる。）
眞國　もう坩堝は煮（たぎ）つたか。
人夫一　まだで御座ります。
眞麿　（樋の口を覗いてみる）樋の口も、まだ赤うならぬ。そちたちは、何をいたして居たのぢや。
（人夫たちは無言で立つてゐる。）
眞國　（坩堝を覗いて廻る。一つの坩堝の前に立止つて）この坩堝は、どうも火の廻りが面白うない。
男玉　（壕の内を見る）これ、人夫たち。炭が足らぬ。炭倉から運んで參れ。
（人夫たちは「はい。」と答へて去る。人夫九は疲れて

立てぬ様子。）皆で行くのぢや。

眞麿　（眼をいからせて）皆で行くのぢや。
人夫九　はい。（よろ〳〵する）私奴は御覽なさるとほり、身體の工合が惡うて、思ふやうに働けませぬ。少時休ませて下さりませ。
眞麿　ならぬ。身體の工合が惡ければ、何故組の長に屆けて、休ませて貰はぬのぢや。
人夫九　（涙をこぼして）私奴は賦役では御座りませぬ。賤奴に下げられた者で御座ります…
眞麿　それはそちが惡い事をしたからぢや。行け。賤奴は死ぬまで働くのが、その身の運命ぢや。
人夫九　…どうぞ特別の思召で、少し休ませて下さりませ。
眞國　そやつは札付の怠者ぢや。
眞麿　行かねば、痛い眼を見するぞ。（鐵の箸を取上げる）
人夫九　はい。（悄然として去る）
眞國　はゝゝ。たうとう行つてしまうた。
眞麿　あのやうな奴は、一度憫みをかけると癖になつて、働かぬものぢや。
男玉　坩堝はまだ暫くは煮らぬ。託陀眞玉は今日はどうしたのぢや。
眞國　あのやうな奴はどうでもなるがよい。我らは大きらひぢや。
男玉　好ききらひは別の話ぢや。早く來て貰はねば、仕事がはかどらぬわ。
眞麿　大方葛城若女とたはむれて、定めた時刻を忘れてゐるのであらう。此頃では名高い噂ぢや。
眞國　公麿どのも、眞玉が大言を吐きながら、葛城若女を、程よく欺いてゐるのを快くは思うてをられぬ樣子ぢや。
男玉　眞玉は葛城若女を心から思うてゐる…
眞國　そちは正直者ぢや。眞玉に化かされてゐるのぢや。
男玉　いや、我らはよう知つてゐる。まことの戀ぢや。
眞麿　眞玉の戀などはどうでもよい。我らは、もと、おと と弟子であつた奴から、手足のやうに使はるゝのが、癪にさはるのぢや。眞玉が公麿どのゝ工場へ始めて來た頃の事を考へてみるがよい。人もなげな此頃の振舞が憎うてならぬのが不思議ぢや。
眞國　程よく行基大僧正に取入つたのが、あやつの出世の基であつたのぢや。
男玉　併し眞玉の腕は、認めてやらねばならぬ。
眞國　いや、何と云はれても、あやつの指圖で働くのは、我らは厭ぢや。
眞麿　我らも厭ぢや。
（沈默。）

（公麿が出てくる。）

公麿　（汗をふく）暑い事ぢや。此處へ來ると蒸れて溶けさうぢや。

眞國　託陀眞玉がまだ參りませぬ。

公麿　眞玉はたゞ今、我らと一緒に盧舍那佛の御膚に塗り奉る黃金を調べるがため、大藏省に參つたのぢや。我らは一歩先きに出て參つたが、もうやがて來るであらう。

眞國　百濟王敬福が、陸奥より奉つた黃金で御座りまするか。

公麿　さうぢや。五百兩と云ふと、大分な量ぢやのう。

眞麿　何にいたせ、始めて我國に出ました黃金で御座りまする。我らも早う拜みたいものぢや。

公麿　この鑄造が終り次第、東大寺へ運ばるゝ筈ぢや。そちたちもやがて拜見が出來るであらう。

男玉　今年位忙がしい目に會うたことは、近頃覺えぬ。行基大僧正がお亡れになるかと思ふと、百濟王敬福が黃金を奉る。天下の嘉瑞とあつて、年號は改まる。この盧舍那佛の御前に假御殿が出來て、帝の行幸がある。また、御讓位で年號が改まる。我らはとんと眼が廻るやうであつたわ。

眞國　あの折は畿內七道のあらゆる御社に、始めて日本國に黃金の出たよしを使者を以て奏されたと云ふことで御座りまする。

公麿　盧舍那佛の御前で橘左大臣の奏せられた命は立派な物であつたのう。帝もお喜びなされる筈ぢや。大佛に塗り奉る黃金不足とあつては、末代までの恥辱ぢやと思召されて、黃金を買ふために、遣唐使を發せられると云ふ御相談まであつたのぢや。そこへ陸奥から、使が來たのぢや。

男玉　黃金の質はよろしう御座りますか。

公麿　唐土より渡來した物と比べて、決して劣らぬやうぢや。眞玉は御尊體に塗り奉るに、おほよそ何百兩費さねばならぬか、今大藏省で計つて居るのぢや。時に賦役の人夫たちは一人も此處には居らぬ。どうしたのぢや。

（零落の極く見苦しい裝をした楯戶辨麿が出てくる。）

眞麿　炭が足りませぬので、炭倉へ取りにやりました。

公麿　（辨麿を見て）それならばよろしいが、怠けさせてはならぬ。辨麿。

辨麿　（むつつりと）何ぢや。

公麿　何か用事か。大鑄師たちは、皆わが腹心ぢや。如何なる秘密も遠慮はいらぬ。

辨麿　託陀眞玉は居らぬか。（諸方を見廻す）

公麿　眞玉に會ひたいと云ふのか。それならば今少し待つがよい。（間）辨麿、眞玉にも困つたものぢや。近頃は

殆んど傍若無人ぢや。
辨麿　傍若無人とは……
公麿　盧舍那佛鑄造の功を誇つて、人を人とも思はぬのぢや。大鑄師たちも皆心の内では、善く思うては居らぬのぢや。
眞國　（獨語のやうに）　このやうな大工事の場處では、何處からともなく大石が降つて來たり、煮つた銅が流れてきたりするものぢや。
眞麿　さうぢや。人の恨を買ふと、恐ろしい目に會ふものぢや。眞玉も氣をつけねばなるまい。
公麿　これ、何を云ふのぢや。そのやうな氣の荒い事は云はぬものぢや。我らがあれ程云うて聞かせてもまだ分らぬか。
眞麿　我らは土や煮つた銅ばかりあつかつて居るので、馴れぬ人間を手にかけると、つい手荒な眞似をしてみたくなるのぢや。惡い心ではないわ。はは……
眞國　さうぢや。よう云うた。全體眞玉のやうな勝れた男は、我らがさつな人間とは、氣が合はぬものぢや。
公麿　辨麿、あの通りぢや。我らもこれについては心を惱ましてゐる。眞玉の振舞を見れば、我らとて腹は立つ。が、そこを凝乎つと押へてゐるのぢや。何はともあれ、この鑄造の終るまでは、眞玉は大切な身體ぢや。私の恨で、もし殺されたと云ふやうな事があつて見ろ。それこそ大變ぢや。皆も、そこをよう考へて、蟲を押へて居つて貰はねばならぬ。天下のためぢや。我らが賴む。
眞國　公麿どのゝお賴みさへなくば、もうとうに眞玉は土に埋つてゐるのぢや。
眞麿　鑄造が終るのも、もう間もない事ぢや。たとへ足場の板が折れて、眞逆さまに落ちようと、坩堝が破れて、銅の煮湯が一面に流れようと、その後の事は我らの知つた事ではないわ。
辨麿　（眼を光らす）　鑄造は何時終るのぢや。
公麿　兎に角、今夜御頭に銅を注いでしまふつもりぢや。それから螺髮を鑄上げねばならぬ。これが大變ぢや。長うかゝるのでのう。
辨麿　（鈍い聲で）　今夜ぢやな。
公麿　さうぢや。今夜の仕事を濟してしまへば、眞玉も樂になるのぢや。（間）　人夫たちは遲い事ぢや。また、何處ぞで油を賣つて居るのであらう。炭が燃え切つてしまふわ。早う參つて伴れて來るがよい。
（三人の大鑄師は「仕やうのない奴等ぢや。」と云ひながら去る。）
辨麿　（異様な表情）　葛城若女は、もう眞玉を見限つたと云うたな。

公麿　さうぢや。娘は賢い女子ぢや。眞玉の心根を見破つて此頃は會ひもせぬ。

辨麿　（沈んだ恐ろしい顔で凝乎つと公麿を見つめてゐる。やがて）そちは惡人ぢや。恐ろしい奴ぢや。（しわがれた聲で）惡人でも恐ろしい奴でもない。葛城若女が……

（辨麿は狂氣のやうになつて、駈けて、行つてしまふ。）

公麿　（後を見送つて）愚かな奴ぢや。あのやうに零落すると、心までが愚かしうなる。併しあやつも我らのためには、なくてはならぬ男ぢや。藥は十分に利いたやうぢや。面白い見物であらう。

（大鑄師が、人夫たちに炭を擔がせて出てくる。人夫たちは汗にぬれてゐる。）

眞麿　（人夫九が後れてよろめくのを見て）こら、そちは先刻怠けようとした賤奴ぢやな。早う歩かぬか。

人夫九　（あへぎながら）大鑄師さま、どうぞお許しなされて下さりませ。私はもう歩けませぬ。（倒れる）

眞麿　えゝ歩けと云ふに、（足にて蹴る。人夫九は、蹴られたまゝ、呻吟つてゐる）手のかゝる奴ぢや。これ、誰かこの翁を伴れて行け。

人夫一二　はつ。（炭をそこに積んで、人夫九を抱へて去る。他の人夫たちは、皆、その後を見送る）

（眞玉があらはれる。人夫十が南無阿彌陀佛と小さな聲で云ひながら、人夫九の炭を擔いで積み上げた處へ持つてゆく。）

男玉　その炭を壕の内に入れるのぢや。（人夫たちは默つて炭を壕の内へ投げ入れる。火が烈しく燃つてくる）

（大鑄師たちは鐵の箒で炭を掻き廻してゐる。）

眞玉　（公麿に）や、黃金の數が合はぬために思はず遲くなりました。銅汁の加減は如何で御座ります。

公麿　炭が十分でなかつたので、まだ煮らぬやうぢや。

眞國　（一つ坩堝を覗いて）この坩堝は駄目ぢや。どうも火が廻らぬ。

（日が次第にくれる。壕の内の炭が紅く輝く。）

眞玉　（地に手をあてゝみる）もう土が熱くなつてきた。早く銅が煮えてくれねば。（坩堝を覗いて廻る）人夫たち、鞴を踏め。

（人夫一、二、三は鞴をふむ。眞國眞麿の二人は、眞玉が坩堝を覗いて廻るのを見ると、急に中央に集つて腰を下ろす。火が壯んに燃る。）

（沈默。）

公麿　眞玉、今夜は鑄上るであらうのう。

眞玉　（坩堝に耳をつけるやうにして、音をきいてゐる。微笑）大丈夫、鑄上ります。お聞きなされませ。もう銅

が煮つて參りました。

公麿　我らは鳥渡、東大寺まで行つて來ねばならぬ。火急の用事を忘れて居つた。眞玉、すぐ歸つて來るつもりぢや。後はそちに賴むぞ。

眞玉　行つておいでなされませ。

（公麿去る。大鑄師二人は異様な眼附で點頭き合つて、その後を見送る、眞玉は、坩堝を聽いて廻る。）

男玉　（一番右の樋の口を覗いて）もう、大方よさそうぢや。

眞玉　（覗く）うむ。（順次に次から次へと覗いて廻る。最後に左の樋の口を覗き終つて）土が大分燒けて來たやうぢや。（聲高く）大鑄師たち、各持場を定めねばならぬ。集まつて下されい。（男玉一人眞玉の傍へ來る。他の二人は返事をしない。眞玉は、決然として）高市眞國、眞麿、早う來ぬか。

（二人は不承々々に來る。）

眞國　眞玉、我らはそちの命で動く大鑄師ではないのぢや。

眞麿　造營長國公麿の命で動いてゐるのぢや。

眞玉　（勃然として）大鑄師、公の仕事ぢや。そちたちが懈怠いたせば、我らはすぐ東大寺へ訴へて、事の曲直を檢べて貰ふまでぢや。（二人は默つてゐる）男玉、そちは右の一番の坩堝を持つのぢや。人夫は十人ぢや。

男玉　十人、鞴につく者を入れてぢやな。

眞玉　さうぢや、眞國。そちは二番の坩堝ぢや。大鑄師の數が足らぬゆゑ、三番四番の坩堝は我ら一人で持つ。五番が眞麿ぢや。人夫は各十人づつぢや。人夫たち。仲間を呼んで來るのぢや。（人夫たちの内より二三人、呼びにゆく）鞴をふめ。（五つの鞴に二人づつ、人夫が付いて、一生懸命にふむ）よし、その勢をゆるめてはならぬ。（人夫たちがどや／＼と大勢やつてくる）人夫たちの内より八人づつ、二組、三番四番の坩堝につくのぢや。

（人夫たち云ふやうになる）

男玉　（一番の坩堝から）人夫、八人だけ此處へ來い。

眞國　此處へも八人ぢや。

眞麿　我らの處へも八人來るのぢや。

（混亂した人夫の群が漸く、八人づつに分れて、各坩堝の傍に集まる。）

眞玉　炭が足らぬわ。（人夫炭を入れる。眞玉は樋の口を凝乎つと覗いてゐる）

（他の大鑄師たちも一生懸命に樋の口を覗いてゐる。）

男玉　樋の口があけぼの色に燒けて來たわ。

眞玉　（四番に移る）まだぢや。まだぢや。まだ銅汁を注いではならぬ。

眞國　二番の樋の口も、紅くなつたわ。

眞麿　五番は、まだ少し、燒けが足らぬ。
眞玉　まだぢや。
眞國　鞴の手を止めろ。火が少し强すぎるやうぢや。（二番の人夫鞴より離れて、汗を拭く）
眞麿　（五番の鞴をふむ人夫に）これ、何故、鞴をふまぬのぢや。
男玉　どうぢや。まだか。
眞玉　（三番に移る）よし、男玉。一番の樋の口に銅汁を注げ。
男玉　人夫、坩堝のくさりを曳くのぢや。
（暫らくえいと云ふ聲がして、人夫たちは、坩堝のくさりを曳く。坩堝次第に傾く。煮つた銅汁が流れて、樋の口へ入る。土地震動。白烟あたりをこめすさまじく銅汁が鳴り渡つて、紅焔天に反映する。）
眞玉　五番、どうぢや。
眞麿　（間を置いて）よし。
眞玉　今度は五番ぢや。
眞麿　人夫、曳け。
（坩堝傾く。銅汁、樋の口に流れ入る。長い沈默。紅焔反映、土地鳴動。）
眞玉　（立上る）人夫ども。四番に銅汁を流せ。（紅焔天に反映して、白烟噴出、鳴動また起る。眞玉は三番の樋の口を覗いてゐる。少時沈默。）
眞國　それ、くさりを曳け。
（紅焔閃々、白烟また上る。）
眞玉　（一心に樋の口を覗いてゐる）三番の鞴をもつとしつかり蹈め。（間）もつと蹈むのぢや。（人夫入代りて一心に鞴をふむ）
男玉　（眞玉の傍に來る）まだ樋の口は燒けませぬか。銅汁の煮えは、今が頃ぢや。（坩堝を覗いて云ふ）
眞玉　まだぢや。多量の銅汁を注いだので、樋の口の色が定まらぬ。
男玉　前に注いだ銅汁と、煮の深さが違うてはならぬ。
眞玉　さうぢや。それが一番案じられるのぢや。（間）うむ、地の底で銅が煮つてゐるわ。
男玉　（山の中央に伏して、耳を地につける）此處には、まだ銅汁が廻つて居らぬ。
眞國　そこは佛頭のてつぺんぢや。
眞玉　男玉、どうぢや。その邊の土の燒けは。
男玉　よい工合ぢや。この上燒けては、巢が出來よう。
眞玉　（立上る）よし、三番の銅汁を流せ。（人夫聲を出してくさりを曳く。大地烈しく鳴動し、紅焔夜の濃くなるまゝに、閃々として、天に輝く）
眞玉　（佛頭の中央と思はれる處に凝立して、合掌瞑目す。

白烟彼を包む）南無行基菩薩々々々‥‥

男玉　（立昇る白烟に包まれて姿は見えず）　まだ、火を退いてはいかぬ。

眞國　（同じく姿は見えず）　左の壕の火が强過ぎるわ。

眞麿　まて、まて。もう炭を入れてはならぬ。

（白煙の内に、影のやうに、入亂れて人々の姿が動く。何やらわめく聲が喧しくきこえる。少時。白烟次第に薄くなる。大きな月が右の方から出る。突然疾風のやうに栖戸辨麿が駈けて來る。中央に凝立して念佛する眞玉に近づいて、刀子を閃かして、その背を刺す。）

眞玉　（前によろめく）　誰ぢや。（三番の樋の口 の傍に倒れる）　誰ぢや。（血が流れて、樋の口に入る）　辨麿ぢやな。　恐ろしい眼で、辨麿を見つめる。呻吟の聲）‥‥

辨麿　（顏色蒼ざめて）‥‥

（大鑄師人夫たち騷然として動搖する。）

男玉　（駈けよりて、後より辨麿を羽掻締めにする）　何をするのぢや。これ辨麿。

辨麿　放せ、ゑゝ、放せと云ふに。眞玉は憎んでも倦きたらぬ奴ぢや。いま呼吸の根を止めてくれるわ‥‥

男玉　此處を何處ぢやと思ふのぢや。これ　辨麿。氣が狂うたか‥‥

辨麿　（男玉を振放して）　かうしてやるのぢや。（眞玉をまた刺す）　眞玉の血が樋の口へ流れこむわ。濃い紅い血が‥‥

眞玉　（苦しむ）　辨麿‥‥

男玉　（また辨麿に組付く）　人夫達は何をしてゐるのぢや。

（人夫たちバラ／＼と駈けよつて、とう／＼辨麿を押へつける。「太政官へ曳いてゆけ。」などと叫ぶものがある。）

辨麿　放せ、放さぬか。我らは太政官へ自ら行く。自首するのぢや‥‥

（葛城若女が狂氣のやうになつて、あらはれる。）

眞玉　葛城若女ぢや。葛城若女ぢや。

（人々動搖す。葛城若女は眞玉にすがりつく。）

葛城若女　（血を吐くやうに）　眞玉さま、眞玉さま‥‥

眞玉　（漸く眼を開く）　葛城若女か‥‥

葛城若女　（泣く）　何と云ふ情ない御姿ぢや‥‥

眞玉　辨麿が‥‥憎い奴ぢや‥‥

葛城若女　（血相かへて）　辨麿、何でこのやうな酷い事をしたのぢや。

辨麿　（荒繩にて、人々に縛られてゐる）　我らを太政官へ曳いてゆけ。

男玉　（葛城若女に）　いま漸く鑄造を終つたところに、この辨麿が疾風のやうに走つてきて、眞玉を刺したのぢや。

葛城若女　…我身はもう久しい前から薄々知つてゐたのぢや。あ……（慟哭）眞玉さま、私が惡う御座りました。知つてゐながらどうしても、あなたさまに打あけて申上げる事が、出來なかつたのぢや…始終、それとなく他の事によそへて申上げても、あなたさまは、その心をお悟りなされなかつたのぢや…

眞玉　葛城若女、手を…そなたの手を…

葛城若女（手を出す。眞玉しつかりとそれを握る）何かにつけて合點のゆかぬ父の素振を見て、何時ぞや、春日野であやしい女子が占うた事も思出され、案じられてならぬゆゑ、來てみればこの始末ぢや。

眞玉　父とは…そなたの父か。公麿か…

葛城若女　はい。（慟哭）情ない事で御座ります…

公麿（何時の間にか、來てゐる）葛城若女、そなたは、この年を取つた父を誣ひてまで、男に付きたいのか。

（辨麿は凝乎つと公麿を見つめてゐる。）

葛城若女（狂氣のやうに）父上、あゝ。父上。どうして、そのやうに恐ろしい御心になられたのぢや。

（辨麿は次第に蒼ざめてくる。）

公麿　これ、娘、無禮な事を云うて、たつた一人の父を苦しめて、何になるのぢや。辨麿が出來した事に、俺が何の關係があるのぢや。氣を鎭めるがよい。此處に居る大鑄師たちも知つて居る。今少し前、つまらぬ事の起らぬやうに、俺は辨麿によく諭してきかせたのぢや。

辨麿（深く考へながら）さうぢや。不思議ぢや。

葛城若女　父上、私には云はれませぬ。（泣く）一方は生みの親ぢや。一方は戀人ぢや…。父上、私は何事もよく知つて居りまする…父上の御心は鏡にかけてみるやうに、よう分つてゐるのぢや…詛うても足らぬ恨ぢや。死んでも返らぬ恨ぢや…

辨麿（火のやうな眼附で）葛城若女、そなたは眞玉をやはりむかしのやうに慕うてゐるのか。

葛城若女（辱かしめられたやうに反問する）慕うてゐる…

辨麿　そなたが眞玉を捨てたと云ふのは嘘ぢやな。

葛城若女　眞玉さま、眞玉さま。（眞玉動かず。葛城若女は凝乎と眞玉の亡屍を見る）はあ…もう呼吸が絶えたのぢや。（恐ろしい眼ざしで、空を見つめる。突然立上つて、合掌したまゝ、炭火の壕に飛込まうとする）南無阿彌陀佛…

公麿（抱止める）これ、娘、何をするのぢや。氣が違うたのか。

（人々動搖する。）

葛城若女（泣伏す）詛うても足らぬ恨ぢや。死んでも返

らぬ恨ぢや……

辨麿　（間を置いて）公麿、そちは我らを欺いたな。ようも我らを欺いたな。（公麿を睨む）

公麿　俺はそちに諭してきかせただけぢや。

辨麿　嘘ぢや。そちは我らに何と云ふた。眞玉は傍若無人で人を人とも思はぬ。併し天下のためぢや。この鑄造の終るまでは何事もあつてはならぬ。葛城若女は賢い女子ぢや。近頃は眞玉とも會はぬとそちは云うたのぢや。今一つ云うた事を、よもそちは忘れまい。盧舍那佛の鑄造が終れば恩賞を授けられて、名を天下に馳せるのは眞玉一人ぢや。我らは犬骨折つて鷹に取らるゝやうなつまらぬ役廻りぢや。眞玉が名高うなれば、辨麿、そちなどは一生浮ぶ瀨はあるまい。眞玉はそちを憎んでゐる。俺が葛城若女をそちにやらうと云うたからぢやと、昨日、此處へ來る途で、そちは云うたのぢや。

公麿　（冷やかに）辨麿、そちは血迷うてゐるのぢや。成程、眞玉を傍若無人だとは云うた。天下のために事がないやうにせねばならぬとは云うた。夫はそちの荒んだ心を戒めるためであつたのぢや。

辨麿　いや、もう我らは欺かれぬ。成程、たゞきけば何事もない言ぢや。併し、そのやうな言が、どれほど我らの荒んだ心に毒を刺すかと云ふ事を、そちはよう知つて云ふのぢや。

公麿　それはそちが毒を求めるのぢや。

辨麿　葛城若女、死なねばならぬのは我らぢや。眞玉と辨麿とは、盧舍那佛鑄造の人柱ぢや。（立上つて炭火の壕に飛込む。烈しい動搖。人々の口から鋭い叫聲がほとばしる）

葛城若女　（突然顏を上げる）さうぢや、人柱ぢや、眞玉さまの紅い血が、樋の口に流れこむ……何時までも何時までも流れこむ……お顏が眞白うなつてしまうた。（泣く）あゝ、眞玉さまは死んでしまうたのぢや……（眞玉の屍に取すがる。慟哭）

——幕——

第四幕

第一場

雪の夜。空は既に晴れて、星の光が刺すやうに輝いてゐる。支那風の占星臺上に、年老いたる吉備眞備が童子一人を召つれて天文を見てゐる。

大きな不思議な形の日時計、漏刻、天球儀などが、並べてある。占星臺の周圍はバビロン風の裝飾をほどこした欄でかこまれてゐる。榻二三脚、小卓一個、眞備

も童子も支那風の服裝、眞備は頭巾をかぶり厚い鶴氅を着てゐる。人物の姿はすべて黑い影繪のやうに見える。低く平城京の火光塔影を望む。光爛々たる彗星が長い尾を曳いて天の一方にかゝつてゐる。

眞備　（横顏が黑くハッキリ見えるやうに立つて、凝乎と星を見てゐる。支那風に少し殘した顎鬚が片假名のノの字のやうにはれてゐる）もう何時ぢや。

童子　只今陰陽寮で、三更の皷を打ちました。

眞備　夜が更けたのう。そちは眠いであらう。

童子　いえ、眠うは御座りませぬ。

眞備　雪が晴れたためか、寒うなつたやうぢや。春と云ふのに、寒い大雪であつたのう。

童子　お風邪をお召しなされてはなりませぬ。もうお歸りなされませ。

眞備　うむ、俺もやがて歸る。そちは先きに參つて寢るがよい。

童子　老公の御寢みなされませぬ内は、どうしても私は寢まれませぬ。

眞備　俺が命ずるのぢや。寢るがよい。

童子　それではお先に御免をかうむります。（一禮して、下に降りる）

眞備　（寂然として天の一方にかゝつた彗星を見てゐる）見れば見る程不思議な星ぢや。陰氣天に上つて凝つて彗星と化り、妖光を吐く。これはよい兆ではあるまい。（長い沈默）俺の身の上ぢや。ふむ、今朝廷に於ては、藤原仲麿が不思議にも、わづか四五ケ月の間に、俄に權力を得て新帝をさしはさんで、自から政を行うて居る。不安な時ぢや。仲麿はかの廣嗣の從兄ぢや。妖星の光に毒されて、紫微宮中の文曲星が光を變じてゐる。ふむ。俺の身の上に何かよからぬ事があるであらう。氣をつけずばなるまい。

（長い沈默。）

（橘奈良麿が、私かに相模資人を伴れて、占星臺上に現はれる。）

奈良麿　吉備公、吉備公。

眞備　誰ぢや。この深夜に、誰ぢや。

奈良麿　我らで御座る。橘奈良麿ぢや。

眞備　何、左少辨どのか。何しに參られた。

奈良麿　吉備公に内密にお話しいたしたい事が御座つたゆゑ、かく深夜に及んで、わざとこの占星臺へお尋ね致したので御座る。相模資人、そちはこの階の上にかくれて、見張りをいたせ。

相模資人　はつ、畏まりました。（階の上に立つて見張つてゐる）

眞備　俺に內密に話したい事があると云はるゝか。

奈良麿　さやうで御座る。（二人は榻に腰かける）もはや夜も更けたる事ゆゑ、御迷惑とは思ひましたれど、何さま、御身の上にかゝはる事ぢや。早速お知らせいたさねばと思うて、推參致した次第で御座る。

眞備　ふむ、俺の身の上にかゝる事とは、如何なる事で御座るか。

奈良麿（聲をひそめて）吉備公、御用心が大事ぢや。今宵朝廷に於いては、御身を筑紫に左遷する議が定まりましたぞ。

眞備　何、俺が筑紫に左遷さるゝ……左少辨どの、如何なる罪で左遷さるゝので御座るか。

奈良麿　それは我らにも分りませぬ。父諸兄が朝廷より歸つて參つて、我らにたゞ一言、吉備公は筑前守に任ぜられた。あの御老體で筑紫に下向さるゝは、お氣の毒ぢやと申しましたゆゑ、筑前守とは如何なる仔細で御座ると聞きましたが、父は不興げに、海外が多事ぢや。吉備公は軍學にも勝れた御人ゆゑ、太宰府の防禦について、お力を借らねばならぬ事があると云ふのぢや。近頃の朝廷の事は我らには分らぬと、かう申して、奧へ入つてしまひました。吉備公、これは仲麿の仕業で御座るぞ。（和模養人が鋭い眼でこつちを窺つてゐる）

眞備（沈思する）左少辨どの、御覽なされ。（立つて天を指さす）御身の今云はれた事は、旣に天文に現はれてゐるのぢや。あれが紫微宮ぢや。紫微宮の南に當つて、あやしい光を、燦々と吐く彗星が見ゆるで御座らう。

奈良麿　血のやうな色の星で御座るか。

眞備　さうぢや。あの星の妖光に蝕せられて紫微宮は、色を變じてゐる。やがて國家に大難の來る兆ぢや。

奈良麿　大難の來る兆と申さるゝか。

備眞　さうぢや。あの妖星がやがては紫微宮中を犯すであらう。その時が大切ぢや。左少辨どの、我らの左遷は歷歷として紫微宮中に現はれてゐる。

奈良麿　なるほど天文は爭はれぬもので御座る。我らも吉備公の御敎によつていさゝか思ひ當る事が御座る。

眞備　たゞ今朝廷に於ては二つの朋黨が、暗默の內に爭うてゐる。俺はその何れが是なるかを知らぬ。たゞ折にふれ時に應じて、その爭が火花のやうに、俺の眼に映るだけぢや。たとへば此度の大佛鑄造にしても、帝が大願を御發しなされてより旣に十年を越えて、今漸く成就しようとしてゐる。その間に起つたさまざまの出來事は、皆兩黨の爭ひが外に現はれた火花に過ぎぬ。左少辨どの、御身を前に置いて、かやうな說法を致すは、烏滸がましい業で御座るのう。

奈良麿　我らをその内の一人と申さるゝので御座らう。

眞備　さうぢや。二つの朋黨は、その原にさかのぼれば結局、御身と仲麿との不和に歸するかも知れぬ。併し、大佛鑄造の場合には、行基と玄昉法師との確執となつて現はれてゐるのぢや。

奈良麿　玄昉法師はもはや入滅して久しうなるでは御座らぬか。

眞備　玄昉は死んだが、玄昉の精神は、後に現はれたさまざまの人によつて、受けつがれてゐるのぢや。行基とても、今はなき人の數に入つたが、稱名念佛を修業の根本として本地垂跡を信ずる彼の主張は、民の心に深く殘つてゐる。かの二人の確執を俺は深く考へてみたが、要するに二つの思想の對立する所に起つた火花ぢや。

奈良麿　二つの思想と申すのは何で御座る。

眞備　玄昉は唐土で學問をした定師ぢや。彼の魂には、天竺や西域の匂ひが染みこんでゐる。行基は元來この日本の土の匂ひを、常に忘れ得ぬ男ぢや。この二つの思想の確執は、決して今始まつた事ではない。始めて佛法が我國に渡來した時より連綿として絶えぬ爭ぢや。物部守屋と蘇我馬子が互に血を流したのも、やはりこの確執が原になつたのぢや。

奈良麿　併し物部守屋は遂に蘇我馬子に亡ぼされたでは御座らぬか。

眞備　古今成敗の跡を見れば、人心の歸する處が掌を指すやうに知らるゝものぢや。守屋が負けたのは決して守屋の罪ではない。時代の人心に反いたからぢや。

奈良麿　佛法を斥けたのが、民の心に叶はなかつたので御座らう。

眞備　この日本の國が、もはや舊來の單純な思想だけでは、育たぬやうになつてゐた時に佛法を斥けた守屋の固陋な心は、即ち人心の碍となつたのぢや。然るに人心に乘じて勝ちほこつた蘇我の一族もやがて藤原家によつて亡ぼされねばならなくなつたのぢや。

奈良麿　それは蘇我入鹿が、一門の榮華に溺れて傍若無人の振舞をいたしたためぢやと、きいて居りまする。現在我らは蘇我の一族に劣らぬ專横な振舞をなす奴原を見て、やがてはと思うて居るので御座る。

（相模資人が、熱心に奈良麿の言をきいてゐる。）

眞備　入鹿が誅せられたのは、御身の云はるゝ專横な振舞のためばかりではない。唐土天竺の學問に育てられて、人の心が、わが日本の國の成立を、深くかへりみたのぢや。そこで神祇に仕ふる中臣の家から、鎌子が出て蘇我の一族の政權を奪ひ神武以來の帝の政に返し奉つたのぢや。

奈良麿　然らば藤原氏は、政を私した事は御座りませぬか。

眞備　藤原氏は次第に榮えて、第二の蘇我氏となつた。御痛はしいのは、長屋王ぢや。遂に、上宮太子の御子山背王の轍をふませられたのぢや。
奈良麿　わが橘の一族は、あくまで長屋王の罪無き次第を朝廷に於て陳じ爭うたので御座るが、力及ばずあのやうな情ない御最期で御座つた。
眞備　長屋王の遺子安宿王、黄文王は此頃はどうして居らるゝ。
奈良麿　日陰者の世に捨てられた御暮しで御座る。我らはお氣の毒に思うて、私かに御補助いたして居りまする。
眞備　當分世の中にお出になる事は出來まい。
奈良麿　吉備公、まことを申せば安宿王黄文王の御事について、いささか御意を得たき仔細あつて我らは參つたので御座るが、まづその前に吉備公に伺はねばならぬ事が御座る。
眞備　何で御座る。
奈良麿（刀の柄を堅く握つて）吉備公は、我らとかの仲麿と、もし、不幸にして、劍戟の間に見ゆる機が來たならば、何れに黨せらるゝお考で御座るか。
眞備　俺がどちらに黨するかと云はるゝか。（眞備は深く奈良麿を見つめる）
相模資人（突然）誰か此處へ參るやうで御座ります。

奈良麿　何ぢや。誰か來る。（身構して、上り口の方を覗ふ）
眞備　かゝる深更に及んで、この占星臺へ上つてくる者はない筈ぢや。そちの聞きちがへではないか。
相模資人（凝乎つと聽きすまして）いえ、誰か上つて參ります。慥かに足音がきこえます。
（葛城若女が髮を振亂して、ほの白い裝で現はれる。）
奈良麿　誰ぢや。そちは誰ぢや。
葛城若女（聲高く笑ふ）眞玉さま、御覽なされませ。美しい處ぢや。あれ、あのやうに一面に蓮の華が眞白に咲いて居ります。行基菩薩がお出でなされた。にこやかな御顏ぢや。ほゝゝゝ。
眞備　そちは葛城若女ではないか。どういたしたのぢや。
葛城若女（走りよつて、眞備にすがる）あれ、大僧正さま。お助けなされて下さりませ。楯戸辨麿が、恐ろしい顏附で、追かけて參ります。
眞備　葛城若女、そちは氣が狂うたのぢやな。
葛城若女　帝さまがお代りなされたので、折角鑄上つた盧舍那佛さまが、怒つておしまひなされた。その證據には何を申上げても、返事をなさらぬ。（泣く）情ない事ぢや。託陀眞玉が慘い眼に會うて死んでしまひましたと我身が云うても、知らぬ顏をしてお出でなさるのぢや……
奈良麿　國公麿の娘で御座るな。戀人に死なれて狂氣いた

せしとは、かね〴〵聽いて居りましたが・何さま正體が御座らぬ。これ、娘子。このやうな雪の夜更に、何と思うてさまようて歩くのぢや。恐ろしうは思はぬか。

葛城若女　恐ろしいのは父上ぢや。心の底は夜叉のやうな御方ぢや。

眞備　戀人の死を、まのあたりみて、か弱い少女心が、ふと取りつめてしまうたのぢや。左少辨どの、託陀眞玉と云ふ佛師は、戀の恨で殺されたと申すは誠で御座るか。

奈良麿　さればで御座る。我らも人傳に聞いたので御座るが、才を嫉まれたとも、戀の恨ぢやとも、世の噂はさまざまで御座る。

葛城若女　（唄ふ）

戀しき人を待ちくらす
少女心のわびしさを
知るや知らずやしのゝめの
光は射しぬ、ほのぼのと。

奈良麿　……哀れな者で御座るのう。

相模姿人　これ、娘子、父御母御も案じて居らるゝであらう。早う家に歸るがよい。

葛城若女　厭ぢや。我身は歸るのは厭ぢや。歌を唄ふのぢや。阮咸を取つてたもれ。

相模姿人　阮咸は此處にはない。そなたの家に歸つて思ふさま彈くがよいではないか。

葛城若女　（泣く）　我身の大事な阮咸を、楯戸辨麿が奪ひ取つてしまうたのぢや。阮咸がないと、我身は寂しうて寂しうて、泣きたくなるのぢや。

眞備　公麿もたつた一人の娘ゆゑ、さぞ力を落したで御座らう。

奈良麿　見れば美しい女ぢや。親心の苦しさが思ひやられます。

葛城若女　（また唄ふ）

人の心の底深く
千尋の波を分けゆけば
みるめたなびく岩かげに
醜き鰐魚のすめるかな。

眞玉さま、何處へお出でなされた。眞玉さま。（泣く）もう影も形も見えぬ。悲しい事ぢや。

相模姿人　娘子、此處にはそなたの尋ねる人は居らぬ。さあ、早く歸つて親御たちに安心させるのぢや。

葛城若女　唄うても足らぬ。死んでも返らぬ。あゝ、我身

はどうしたらよいのか。父上、致へて下さりませ…
奈良麿　この雪の夜に狂女をさまよふまゝにして置く譯にも行かぬ。相模資人、國公麿の家は、左京二條大路三坊ぢや。此處からは左程へだたつても居らぬ。送つてつかはせ。
相模資人　はつ。畏まりました。これ、娘子。行くのぢや。
眞備　よくいたはつてやるのぢや。
相模資人　よろしう御座ります。それでは鳥渡送つて參ります。
奈良麿　我らは一人で歸るほどに、そちは、その狂女を送りとゞけたならば、そのまゝ歸つてやすむがよい。
相模資人　この娘子を送りとゞけましたならば、また迎ひに參ります。
奈良麿　いや、それには及ばぬ。遠い處でもない。我らは一人でよいわ。
相模資人　さやうならば、お氣をおつけなされてお歸りなされませ。（一禮して立上る）
葛城若女　我身はこれから盧舍那佛さまの處へ參るのぢや。たとへ帝さまが、お代りなされても、そのやうにお怒りなされてはなりませぬと、お諫め申さねばならぬ。盧舍那佛さまは我身の唄が、この上なくお好きぢや。

蓮の華のさきみつる
彌陀の淨土へいざなひて
常住不斷の法樂を
さづけ玉へよ、盧舍那佛…

我身がこの唄をうたふと、いつも御機嫌が直るのぢや。ほほ…東大寺へ行かう。さうぢや。東大寺へ行つて、盧舍那佛さまの御前で、心ゆくばかり泣くのぢや。（去る）
眞備　（見送つて）人の心ほど不思議なものは御座らぬ。あのやうに深く迷うてくると、我れとわが身が分らぬやうになるのぢや。
（遠く葛城若女の唄がきこえてくる。）

眞玉戀しや、雪の夜の
闇に立ちたる面影は
消えて跡なく、わがこゑの
たゞ木魂する寂しさよ…

（沈默。）
奈良麿　吉備公、もはや夜も更けたれば、御暇いたすで御座らう。思はぬ狂女にさまたげられて、我らの所存を申上ぐる機なく、いとゞ心をいらだてゝ居りました。まづ

先刻申上げし如く、我らと仲麿との間の不和が、形に現はれしときは、吉備公は何れに黨せらるゝ御所存で御座るか、承はりたう御座る。

眞備　天下人心の推移は、一人の力では禦げぬ物ぢや。只今の形勢では、所詮このまゝでは止むまい。行くべきところまでは行くで御座らう。

奈良麿（つめよる）行くべきところまで行きましたる節は……

眞備（凝乎つと奈良麿を見つめて）俺は一介の讀書人ぢや。森羅萬象の秘奥をさぐつて、宇宙の理法を究むる事より他には、野心も何も持たぬ老書生ぢや。たま／＼天下の形勢を見て、感慨めいた事を述ぶる時も御座るが、要するに、たゞ言語の上に現はすだけぢや。實行は他人に待たねばならぬ。

奈良麿　然らば吉備公には、時流の外に超然として、我ら兩黨の勢力の消長を眺めむと云ふ御所存で御座るか。

眞備　いかにも、この老ぼれめは、それより他に行く途が御座らぬ。人の世の興亡盛衰は俺の眼にはたゞ歴然たる天の理法の現はれとして映るのみぢや。その渦に卷きこまれて、喜怒哀樂を肆にしようとは思はぬ。この四五十年の間にわが日本の國は、未曾有の進展を遂げた。唐土、韓國を通じて、遍く世界の文化を吸うて以つて我身の養ひとしたのぢや。今や、國富み民の力は滿ちあふれんとしてゐる。かの應神天皇の御代に、文字が始めて渡來して以來、ひたすらに他國の文化を模して之れにならうた結果、外國崇拜の念が、人の心に深く根を張つたのぢや大化の革新に一度目ざめた民の心は、唐土との交通が繁盛になるに從つて、何時かまたかの國の文化に惑溺した。然るに天平の時代に入つてより民の心は、再び內に向つて目ざめて來た。わが日本の國の文化を建設しようと云ふ欲求が、何時となく起つてきたのぢや。勿論彼等は分明な意識を以て動いてゐるのではない。たゞ自然にしたがつて推移したのぢや。この度鑄造された盧舍那佛を見て俺は深く之を感じた。御身と仲麿との不和確執も根ざすところは此處にあるのぢや。

奈良麿　然らば吉備公は、仲麿が紫微中臺に入つて、新帝をさしはさんで專橫をきはめ、先帝は剃髮して藥師寺の宮に世をはかなみ給ふ目下の形勢を正しい推移と觀じ給ふので御座るか。この頃朝廷には何者とも知れず、屢々匿名の書を奉つて、時政を非議する者が御座る。平城の京造營以來、大寺大像の賦役に惱まされて、民の心は險しうなつて居るやうに我らには見えまする。吉備公、これは最も憂ふべき形勢では御座るまいか。

眞備　俺は讀書人ぢや。目前の事に激して政角の渦に身を

投ずるのは、その任でない。吾日本の文化は、今や漸く開くる時がきたのぢや。我ら讀書人の務として、俺はまづ第一に、音韻文字を整ふる必要を感じてゐるのぢや。

奈良麿　吉備公、然らば御身は、たとへ仲麿のために、筑紫へ左遷されても、腹立たしいとは思されぬので御座るか。まことを云へば我らは今夜、今少し打明けたお話がいたしたうて推參いたしたので御座る……

（奈良麿は迫るやうに刀の柄に手をかけて、眞備の前近くすゝみよる。）

眞備　たとへ俺が腹立しいと思うたところで、どうもならぬのぢや。

奈良麿　（低い聲に力をこめて）吉備公、我らは、今の天下の形勢に飽足らぬのぢや。……同志の內には、藤原の一族もある。手筈も旣に定まつて居るのぢや。御身とて、かの廣嗣の戰以來、つねに仲麿の白い眼で白眼まれてゐるのぢや。事を擧ぐる期はまだ定まらぬが、旣に我らは數年このかた機を覘つてゐるのぢや。吉備公、我らは一味の者の頼によつて、今宵御身の御同意を得るために參上いたしたので御座る。

眞備　（間を置いて）俺の豫期して居つた通りぢや。

奈良麿　御身としても今が一身の去就を決せらるゝ好機會ではないかと我らには思はれまする。もし、一旦朝命が降つて、筑紫へ下向さるゝときは、忽ち玄防法師の轍をふまるゝのぢや。

眞備　廣嗣の亡靈に取殺さるゝと云はるゝので御座るか。

奈良麿　廣嗣の亡靈とは、世を欺く仲麿の手段ぢや。恐ろしい刺客は、朝夕の分ちなく御身に影のやうにつきまとふて御座らう。

眞備　刺客は恐るゝ所で御座らぬ。面に殺氣を含んで、俺を凝乎つと見つめて居る人を、これまで幾たりとなく俺は見た事があるのぢや。

奈良麿　我らの一味の者は、是非とも御身に加擔して頂かねばならぬと云うて居ります。吉備公は唐土の軍學に通じて居らるゝ。事を擧ぐる時、お指揮を仰がねばならぬのぢや。

眞備　（冷然として）俺は一介の讀書人ぢや。宇宙の理法を究むるより他に野心は御座らぬ。（沈默。眞備はハッとして、速かに身を退く。奈良麿は刀の柄堅く握りしめて、眼を輝かしてゐる）刺客は恐るゝ所では御座らぬ。左少辨どの、今少し打ちくつろいでお話いたさうでは御座らぬか。今宵の御身のお話は俺は決して、他言はいたさぬゆゑ……

奈良麿　（間を置いて）然らば致方が御座らぬ。吉備公甚だ無禮の振舞のみいたし申譯も御座らぬ。

眞備　いや、それは俺が申すことぢや。おゆるし下され。

奈良麿　ついお話の面白さに思はず長座いたして御座る。然らば、これにてお別れいたす。只今のお言葉どほりかへすがへすも御他言無用に御願いたしまする。

眞備　他言は決していたさぬ。お案じなさるな。（奈良麿去る。眞備はそのまゝ凝乎つと天空を見つめてゐる）妖星が現はれて、紫微宮を犯すも理ぢや。（長い沈默の後）俺の身の上も油斷がならぬ。氣を付ける事ぢや。

——幕——

第二場

手向山の中腹。天平勝寶二年晩秋の事である。滿山の紅葉が燃えるやうである。途は左から右に上るやうになつてゐる。中央廣場、木の切株二三ヶ處。右は急峻な斜面になつてゐる。正面は眼界開けて、低い盧舍那佛鑄造の場より東大寺境内を一面に見渡す。盧舍那佛はもはや鑄上つて今磨きをかけてゐる。足場が一面に御尊體を取かこんでゐる有樣は丁度、蜘蛛の巣にかゝつたやうに見える。左は途が山の尾について屈折して麓の方へ下りてゐるのが木の間から隱見してゐる。金鐘寺の屋根が、すぐ眼の下に露はれてゐる。

仲麿　これ鮪、たゞ今、そちが申した事はまことか。

相模資人　はい、まことで御座ります。

仲麿　（獨言のやうに）新羅が奈良麿を助けるとは容易ならぬ事ぢや。……して奈良麿は、何時、それをそちに云うて聽かせたのぢや。

相模資人　昨夜、一味の人々がまた太政官の庭に集まり、密議をこらしました歸り途に、左少辨どのが、そちも聞知つたであらう。愈々時が近づいて參つたと、快げに云はれました。そして、聲をひそめて、これはまだ一味の人々にも祕めてある事なれど、そちには打明けてきかせよう。新羅の大軍が、我らの旗上げと同時に、太宰府を攻むる事になつてゐるのぢやと云はれたので御座ります。

仲麿　太政官の庭の密議では、どのやうな事を語合うたのぢや。

相模資人　吉備眞備さまの御身の上で御座ります。

仲麿　ふむ、吉備眞備をいかゞ致さうと云ふのぢや。

相模資人　吉備公は我らの祕密を知つて、而も一味せぬ人ぢや。此度、また遣唐副使を命ぜられて、筑紫より京に歸ると云ふ話ぢや。近頃の吉備公は藤原氏と因緣が深うなつた。このまゝにして置いたならば、我らの祕密はやがて、藤原氏に筒拔けぢやと、かう云ふので御座ります。

仲麿　して、刺客は誰ぢや。

相模資人 (聲低く) 大伴古麿の手より出す事になつたので御座ります。
仲麿 吉備眞備は心の深い人ぢや。かねて油斷はあるまいが、なほ我らよりよく心を付けて置かう。我ら一族の淸河が此度遣唐使となつてゆくについて、唐土の事情に通じた眞備はなくては叶はぬ人ぢや。もしもの事があつてはならぬ。(間) 時に行信は遲いのう。
相模資人 如何いたしたので御座りませう。もう參らねばなりませぬが……
仲麿 我らは例の地獄谷の岩窟に參つて待つてゐる程に、もし、行信が來たならば、さやう申してくれ。御苦勞ながら、そちはそれまで此處て待つてゐるのぢや。
相模資人 畏りました。(仲麿去る。資人その後姿を見送つて) 何さま不思議ぢや。地獄谷は人々が魔所ぢやと云ふに、大神命婦は、もはや何年となくあの岩窟に隱れ住んでゐる。そして、何とも云はれぬ異形の惡神を祭つてゐる。
(筑紫娘子が私かに現はれる。)
筑紫娘子 (感情を顏に現はして) 相模資人さま。
相模資人 や、誰かと思うたら、筑紫娘子ぢや。
筑紫娘子 此頃は打絕えてお眼にかゝりませぬ。何故、岩窟にはお出でなされませぬ。
相模資人 ほんに久しう會はぬ。(優しく肩に手をかけて) そなたはどうぢや。變る事もないか。
筑紫娘子 (淚ぐんで) たゞ、會ひたうて會ひたうて、熱を病んだ時のやうで御座りました。(相模資人に縋る)
相模資人 我らとてそちに變らぬ。たゞ、務めの忙がしさに、つい訪ねる事も怠りがちであつた。ゆるしてくれ。
筑紫娘子 (泣く) そのやうに優しいお言葉をきゝますと、どうしても泣かずには居られませぬ。
相模資人 岩窟には命婦が居らるゝ故、事繁く訪ぬるは何となくいぶせくてならぬ。それにあの八雷神が我らには氣味が惡うてならぬのぢや。そなたのやうなか弱い娘子が、よう恐ろしく思はぬことゝ我らは不思議で耐らぬ。
筑紫娘子 幼ない時より見馴れましたゆゑ、私は何とも思ひませぬ。
相模資人 筑紫娘子。
筑紫娘子 何で御座ります。
相模資人 八幡大菩薩に仕ふる大神命婦は、何故あのやうな惡神を齋きまつゝて居らるゝのぢや。これまで何度そなたに尋ねても、他言すれば、死なねばならぬと、たゞ悲しげに答ふるだけぢや。我らとそなたとは二世かけて誓うた仲ぢや。何故死なねばならぬのか、打明けて云うて貰ひたいと思ふのぢや。
筑紫娘子 また、それをお云ひなされまする……相模資

人さま、お願で御座ります。それだけはお聴きなされますな。

相模賓人　何故ぢや。そのやうに云はるゝと我らの疑はます〳〵強うなつてくるのぢや。

筑紫娘子　私は命婦さまが恐ろしうて……

相模賓人　大神命婦が恐(おそろ)しうて云はれぬと云ふのぢやな。

筑紫娘子　はい……

相模賓人　筑紫娘子、我らは決して人に明しはせぬ。大神命婦とて、我らが秘かにそなたより、惡神の秘密を聴知つた事を悟る事はよも出來まい。

筑紫娘子　いゝえ、命婦さまには、すぐ知れてしまひます。あの御方は、人の顔色を讀んで隱れた心を悟る術を知つて居られます……

相模賓人　我らはそなたの身の上の事を何も知らぬ。戀は疑深いものぢや。戀人の身の上の秘密ぐらゐ、心にかゝるものはない。筑紫娘子、我らの心の深さは、そなたも知つてゐよう。心が深いだけ、疑ひも深いのぢや……

筑紫娘子　相模賓人さま、どうぞ、それだけはおゆるし下さりませ。私は何もかも打明けてしまひたうは御座りまするが、まだ生命が惜しう御座ります。折角あなたさまと、かやうた嬉しい語らひを致す事になつたばかりで死なねばならぬとは、酷い事では御座りませぬか。そのやうな事をおつしやるより、まだ知らぬ戀のたのしさを、心行くまで、私に知らせて下さりませ。

相模賓人　さらば聴かぬ。我らはそなたについては、何事も知らぬのぢや。我らが始めての男であつたかそれすらも知る事が出來ぬのぢや。

筑紫娘子　（泣く）まあ、あなたさまは酷い事ばかり……

相模賓人　我らは二人の戀をかやうに果敢ないものであらうとは少しも思はなかつたのぢや……

筑紫娘子　あゝ、我身はどういたしたらよいのやら……恐ろしい命婦さまに、もし……

相模賓人　そなたはまた何故それ程恐るゝ大神命婦に仕へてゐるのぢや。

筑紫娘子　私は命婦さまのもとを離れて行く處のない身の上で御座ります。

相模賓人　そなたの父は、母は……

筑紫娘子　父母は顔さへ知りませぬ。何時、どうして、命婦さまのもとへ參つたやら、それも知りませぬ。

相模賓人　幼兒のときから、命婦に養はれてゐたのぢやな。

筑紫娘子　さうで御座ります。命婦さまは、豫々(かねぐ)私に「そちの魂は生れながらに我身が握つてゐる。そちの魂が我身と離るゝのは、そちが死ぬるときぢや。」と仰せられます。

相模賓人　恐ろしい言葉ぢや。我らにはどうしても分らぬ。

筑紫娘子　「それがそちの定められた生涯ぢや。ゆめ非望を起してはならぬ。」と、仰せられます。

相模資人　我らには分らぬ。

筑紫娘子　（涙の中に微笑して）もはや、そのやうな物語はよして、さ、相模資人さま、何時ものやうに私を抱いて下さりませ。

相模資人　いや、我らはどうしても知らねばならぬ。筑紫娘子、そなたの祕密をきかぬ内は、どうしても我らは心が安まらぬ。

筑紫娘子　また、そのやうな事を……

相模資人　我らも男ぢや。そなたとかゝる契りを結ぶ上はそなたの魂を握つてしまはねば氣がすまぬ。さ、打明けてきかせてくれ。そなたの身の上に、もし萬一の事がある時には、我らが向ふまでぢや。たとへ鬼神と云へども恐れぬ。

筑紫娘子　……どうぞそればかりはお許し下さりませ……

相模資人　どうあつても打明けられぬのぢやな。

筑紫娘子　はい……

相模資人　我らより大神命婦の方が大切ぢやと云ふのぢやな。

筑紫娘子　いえ、そのやうな事は御座りませぬ。私は、ただ、生命が惜しう御座ります……

相模資人　嘘ぢや。そなたはやはり命婦のものぢや。我らは欺かれたのぢや。

筑紫娘子　いえ、いえ、そのやうな事は御座りませぬ。決して御座りませぬ。

相模資人　もし、嘘でないと云ふならば、筑紫娘子、我らか命婦か。この二つの一つを取るのぢや。今のまゝでは、所詮我らの心は安まらぬ。

筑紫娘子　あゝ、情ない事ぢや。（泣く）

相模資人　さあ、どうぢや。早う決めるのぢや。我らは心が急いてならぬ……

筑紫娘子　（顔を上げる。恐ろしい眼ざしになつて、相模資人に縋りつく）我身は、あなたさまと別るゝのはいやぢや。

相模資人　我らとて同じ心ぢや。

（烈しく抱擁。）

筑紫娘子　たとへ殺されてもいたし方が御座りませぬ。何もかも打明けてお話いたしまするゆゑ、もつと、強く抱いて下さりませ。（相模資人が強く筑紫娘子を抱きしめる）あゝ、もつと強く――呼吸の根も止まるばかり抱いて下さりませ。

相模資人　何と云ふ胸のときめきぢや。

筑紫娘子　大神命婦さまが、あのやうな悪神をいつき祭つ

てお出でなさるのは、（此時、何處よりともなく白羽の征矢が高鳴りして飛んで來て、筑紫娘子の胸に深く立つ）あつ。

相模資人（驚いて、力なく倒れようとする筑紫娘子を抱上げる）これ、娘子、傷は淺い。氣を落すな。（征矢の來た方を眼で探す）誰ぢや。このやうな酷い事を……

筑紫娘子　……命婦さまぢや。我身にはよう分る……

（死す。）

（大神命婦が、半弓を携へて、木立の後から出てくる。）

相模資人　や、あなたさまは。（二三歩退る）

杜女（冷やかに）憎い娘子ぢや。俺の誓を破つた報をうけて苦しむがよい。（凝乎と屍を打見やつて）もう死んでしまうたか、さて〳〵、脆いものぢや。

相模資人（怒に前後を忘れて）我らの娘子を何でこのやうな酷い目に會はせたのぢや。

杜女　筑紫娘子は俺に仕ふる者ぢや。魂までも俺にさゝげた者ぢや。俺にさゝげられた者を俺が殺したのが、どうしたと云ふのぢや。

相模資人　いや、我らの娘子ぢや。二世かけて契りをこめた娘子ぢや。

杜女　そちは我身から娘子を盗んだのぢや。

相模資人　何を云ふのぢや。（打ちかゝる）たとへ命婦でも、もう容赦はならぬ……

杜女（手早く半弓に矢をつがへて）そちも筑紫娘子の跡を追ひたいのぢやな。

相模資人（齒嚙をして）むゝ、射つて見るがよい。さあ、その征矢で我らを射るがよい。

杜女（大聲に）行け。此處は靈地ぢや。そちたちの長う居る處でない。

相模資人　此恨は決して忘れぬ。杜女、やがてよい報が來ようぞ。（疾風のやうに麓の方に走り去る）

杜女（後を見送つて）愚かな奴ぢや。（娘子の屍を見る）危い所であつた。もし、俺が來合せずば、戀に狂うた娘子は、何もかも皆打明けてしまふ所であつた。（つぶやくやうに）このあたりを血潮で汚しては神に對して恐れぢや。俺を裏切つた憎い娘子は谷底に落ちて、鳥獸の餌食となるがよい。（筑紫娘子の屍を谷底へ押落す）

（行信が上つてくる。）

行信　命婦さま、仲麿公は此あたりには見えませぬか。

杜女　誰かと思うたら、藥師寺の行信どのぢやな。俺も仲麿公をお待ちいたしてゐるのぢや。ひよつとしたら、地獄谷の岩窟に待つて居らるゝかも知れぬ。

行信　夫(それ)ならば、これより岩窟へ參りませう。命婦さまは。

杜女　俺も歸るのぢや。

（仲麿が下りてくる。）

行信　や、あれより仲麿公が下りてお出でなされまする。

杜女　丁度、よい處で、お眼にかゝつたものぢや。

仲麿　杜女、我らは只今まで、岩窟で待つて居つたが、そちが歸つて來ぬゆゑ、また此處へ戻つてきたのぢや。（杜女一禮する）行信、そちにもよい處で出會うた。

行信　今日の論議は、大分暇どりましたゝめ、つい、參るのが遲うなりました。

仲麿　ふむ。して、結果はどうであつた。

行信　お喜びなされませ。帝の思召どほりに定まりました。

仲麿　ふむ。もはや、改鑄せぬのぢやな。

行信　さやうで御座ります。此儘に鑄上げ奉る事になつたので御座ります。明日より早速、殘りの螺髮を鑄始めまする事に定まりました。

仲麿　それで我らも安心いたした。

行信　何にいたせ、太上天皇の思召を奉ずる人々は、かの橘諸兄公を始めとして、良辨僧都、道璿法師など、昔より、あの盧舍那佛の御尊容を喜ばぬ人々で御座りまするゆゑ、一時はどうなる事かと、案ぜられましたが、丁度折よく論議の眞最中に、筑紫より吉備公が建白書を奉られましたゝめ、漸く帝の思召が通つたので御座ります。

仲麿　何、吉備公の建白書が參つたと云ふのか。

行信　さやうで御座ります。

仲麿　ふむ、吉備公は帝に學問をお教へ申した人ぢや。帝の御爲に惡うは計られまい。

行信　吉備公が筑紫にて天文を御覽なされますと、昨年より空の一方に姿を現はした怪しい星が、いよ／＼天庭を犯す象が現はれたさうに御座ります。それゆゑ、何事も只今のまゝ、たゞ重き御愼しみあるやう建白なされたので御座ります。

杜女　御覽なされませ。何時ぞや私が申上げたとほり、吉備公は冷靜な御方ぢや。何事もたゞ、凝乎つと見て居らるゝだけぢや。

仲麿　我らが今日不參いたした事については、何とも太上天皇より御沙汰はなかつたか。

行信　仲麿は所勞のよし、大切にいたせと、御勅が御座りましたと承はりました。

杜女　また明日よりあの盧舍那佛さまのあたりが賑かになりまする。かやうに足場をかけたまゝ工場を休んで居りますと、土民の惑も起り、つまらぬ流言が盛になつて參りまする。

仲麿　さうぢや。氣を付けねばならぬ事ぢや。併し、盧舍那佛が此まゝ開眼さるゝものと決まれば、かの行基大僧

正はもとより託陀眞玉も、また、かね〴〵大僧正の遺志を守つて、秘密の修法を行ふそちも大慶ぢや。

行信 （平伏して） 私の心中をお察し下さりませ。

仲麿 我らもこれで安心いたしした。

第三場

藥師寺僧綱所の光景。

天平勝寶二年十一月のある朝。陰晴として、何等の裝飾もなく、たゞ中央壇上の藥師三尊の銅像の前に花立、香爐燭臺等が置いてある。左右の壁に兩開きの扉があつて、外に通ふ。佛前に卓一脚、榻二脚。また、その左にやゝ長い粗末な卓を前の卓と直角に置いてある。腰かけ一脚。正面の壁上には、僧尼令廿七條を大書して掲げてある。左の卓上には卷物二三卷と、筆墨がそなへてある。中央の卓上には地獄谷の岩窟にあつた八雷の圖と獨鈷、鈴、半弓、征矢などの證據品が置いてある。左官二人、右手の卓によつてゐる。

左官一 昨夜の嵐はどうぢや。近來記えぬ荒れであつたのう。そなたの家は別に害はなかつたか。

左官二 いや、豪い目に會うたわ。垣は倒れる、樹木は根こぎにさるゝ。お蔭でたうとう一夜まんじりともせぬ。

左官一 我らの家は、また一段と烈しい災害ぢや。

左官二 何としたのぢや。

左官一 厨の屋根を吹きめくられてしまうたのぢや。

左官二 それはえらい目に會うたものぢや。

左官一 何にせよ、近年は怪しい事が續くのう。不思議な星が現はれたり、大地震があつたり、世の季が近づいたのかも知れぬ。

左官二 不思議と云へば昨夜の嵐にまぎれて、僧綱所に怪しい男が忍びこんだと云ふ話を、そなたはきいたか。

左官一 いや、初耳ぢや。何のやうな男が忍びこんだのぢや。

左官二 我らも悉しい事は知らぬが此僧綱所に囚はれて、きびしうつながれてゐる宇佐八幡の命婦をそなたも見た事があらう。

左官一 （點頭く） うむ〳〵。氣味の惡い女子ぢや。從四位下の位を持つてゐる奴ぢや。

左官二 あの女子を奪ひ取りに來たのかも知れぬと云ふ噂ぢや。それがのう、忍びこんだのは二人ぢや。

左官一 連立つてきたのか。

左官二 いや、出會うたのぢや。

左官一 ふうむ。

左官二 そして、闇の内で、互に渡りあうたのぢや。

左官一 ふうむ。敵同志ぢやな。

左官二　さうかも知れぬ。そして、何方か一方が傷を負うたのぢや。逃げた跡に、血が滴つて居るのを、我らは見て來た。
左官一　曲者を見付けたのは誰ぢや。
左官二　夜番ぢや。雙方ともに深々と顏を包んで居つたので、どのやうな男やら分らなかつたと云ふ事ぢや。
左官一　我らは、そのやうな騷のあつたのを少しも知らなんだ――氣味の悪い事ぢやのう。
左官二　全體あの女子の罪は何であらうな。
左官一　さればぢや。我らには見當がつかぬ。
左官二　行信が囚禁された日に、あの女子も縛られて來たのぢや。
左官一　何か行信と關係があるのであらうか。
左官二　さうかも知れぬ。
左官一　行信と云ふ男も、あのとほり蹤まである奴ぢやからな。
左官二　さうぢや心の底は分らぬわ。
左官一　何にせよ、不思議な事ばかりぢや。
左官二　このやうな時節には、賢振つて、餘計な差出口などせぬ事ぢや。
左官一　（欠伸をして）時に東大寺の盧舍那佛も、もういよいよ開眼が近づいたと云ふ話ぢやな。
左官二　大佛殿も來年一杯には出來上るであらうと云ふ事ぢや。
左官一　あの盧舍那佛で思出すが、去年は、さまざまの事があつたのう。
左官二　一年の内に二度年號が改まるやら、御讓位があつて、太上天皇は、この藥師寺へ御移轉をなされるやら……變らぬのは、我等とそなた位のものぢや。ははゝゝゝ。
左官一　本統ぢや。ははゝゝゝ。
（入口の扉を開けて、良辨僧都と玄光律師とが出てくる。左官二人は、その姿を見ると、恭やしく立つて一禮する。）
良辨　（榻に腰を下ろして）玄光律師。
玄光　はい。
良辨　當寺の沙門行信は確か行基大僧正の徒弟で御座つたな。
玄光　さやうで御座る。行基大僧正入滅の後、當寺へ參つたものでござる。
良辨　平生の行は如何でござつた。調べてお置きなされたか。
玄光　はい。同宿の者どもを、いろいろ取調べましたところ、至極無口にて、行狀には不審と思はるゝ體は見出さ

ぬと云ふ事で御座りましたが、彼を囚禁いたせし後、所持品の内より、不思議な品を見出しました。
良辨　何で御座る、不思議な品とは。
玄光　（懷中より盧舍那佛の畫像一葉を取出す）この畫像で御座る。法師の身にて、佛の御尊像を念持するは別に不思議とも云はれませぬが、よく御覽なされませ。この盧舍那佛は東大寺の盧舍那佛で御座る。
良辨　何さまさうぢや。まだ開眼もいたさぬ佛の畫像を所持いたして居るは…ふむ。兎も角不思議ぢや。
玄光　それに大神杜女のやうな者どもと密に往復いたし居りまするは、何と云うても、心得ぬ事で御座る。
良辨　玄光律師、昨夜忍入りし怪しき曲者については、まだ何の手がかりも御座らぬか。
玄光　殘念ながら、まだ、何の手がかりも見出しませぬ。
良辨　して、大神杜女をはじめ囚禁いたせし者どもは。
玄光　別に變りは御座らぬ樣で御座りまする。杜女は婦女子の事故、始めは首枷を除いて置きましたが、重大なる罪人故、もし重ねて昨夜の樣な危險があつてはならぬと存じ、今朝首枷をはめさせて置きました。
良辨　訴人いたせしかの橘どのゝ資人は。
玄光　やはり嚴しく囚禁いたして置きました。
良辨　あの男を少し責めてみたならば、存外早く手がかりがつくかもしれぬ。
玄光　さやうで御座る。昨夜の曲者は、如何いたして置きませう。何にいたせ、太上天皇の御座所近くを騷がせし不敵の者で御座る。きつと詮議いたさねばなりませぬゆゑ、早速太政官に通牒いたして置きませうか。
良辨　（沈思）玄光律師、まづ、お待ちなされ。兎も角も、今一度、訴人いたせし橘どのゝ資人を、取調べて見るといたさう。
玄光　左官たち。かの資人を曳いて來るように、使部の者どもに申傳へえ。
左官二人　はつ。畏まりました。（去る）
良辨　（聲をひくめて）玄光律師。
玄光　何で御座る。
良辨　我らの考ふる所では、これは非常な大疑獄ぢや。宇佐の八幡宮を取調べたら、神主たちの内より罪人が大勢出るであらう。それのみか、今世にときめく京の左官たちの内にも、關係のある人たちが少なからずあるかも知れぬ。
玄光　どうやら私にも、そのやうに思はるゝ節が御座りまする。
（相模資人が使部二人に引立てられて出てくる。顏色蒼ざめた、悲痛の色が深く現はれてゐる。）

玄光　そちが橘左少辨どの丶資人か。
相模資人　さやうで御座ります。
（相模資人の後について戻つてきた左官たちは、卷物なのべて、口供を取る。）
玄光　此處は藥師佛の御前ぢや。決して僞りを申立てゝはならぬ。もし、そちがわが言葉にそむいて、僞りを申せば、忽ち佛罰をかうむるのぢや。分つたか。
相模資人（悚然として）はい。
玄光　そちの名は何と云ふ。
相模資人　刑部鮪と申します。
玄光　年は。
相模資人　二十三歳で御座ります。
玄光　本貫は何處ぢや。
相模資人　相模國葦柄の郡で御座ります。
玄光　そちの屬する氏と、父の名を云へ。
相模資人　氏は藤原氏で、父は多爾彥と申します。葦柄の郡司で御座ります。
良辨　藤原を氏とするそちが、どうして橘氏へ仕へたのぢや。
相模資人……簡試がすみましてから式部省の命によつて參りました。
玄光（使部の者に）この繪を壁にかけて見い。（八雷の圖を指す。使部の者はその掛物を壁上にかけつられる）
そちはこの神像に記があるか。
相模資人　はい。それは杜女の居りました地獄谷の岩窟にあつたもので御座ります。
玄光　そちは何かこれに就いて知つて居るであらう。
相模資人　何も知りませぬ。宇佐の命婦は八幡大菩薩を、かの東大寺の境内に鎭座勸請するため、地獄谷に隱れて、秘宗の法を修するのぢやと云ふ事をきいたゞけで御座ります。
玄光　筑紫娘子を、そちはどうして知つたのぢや。
相模資人（口澁る）……春日野のそゞろ歩きに出會うたので御座ります。
良辨　然らば杜女は何處で知合うたのぢや。
相模資人　……
良辨　そちはこの神像を地獄谷の岩窟で見たと云うたが、そちは筑紫娘子と岩窟で會うてゐたのか。
相模資人　はい。岩窟でも會ひまして御座ります。
良辨　云ふまでもなく杜女の留守の折であつたらうな。
相模資人　はい。
良辨　刑部鮪、杜女と何處で知合うたか、そちは何故云はぬのぢや。
相模資人　……（蒼くなる）

良辨　（間を置いて）　そちが云はずとも、杜女に訊けばすぐ分る事ぢや。（相模資人苦惱する）　杜女が筑紫娘子を射て殺したのは、そちの見てゐた處であつたのぢやな。

相模資人　さやうで御座ります。

良辨　それ迄は杜女は、そちと筑紫娘子とひそかに心を通はしてゐる事を知らなかつたのぢやな。

相模資人　はい。

良辨　（鋭く）　これ、刑部鮪。そちの申す事は更に筋がとほつて居らぬぞ。そちはまだ、この外に知つてゐる事があるであらう。隱しだてしては、却つて、そちの爲によくないのぢや。

相模資人　……

玄光　どうせ知れる事ぢや。云うてしまふがよいではないか。

相模資人　いえ、私は何もその他には知りはいたしませぬ。

良辨　然らばこれより大神杜女を取調べよう。

玄光　大神杜女を曳いて參れ。大切な囚人ゆゑ、よく氣を付けるのぢや。

使部の一人　はつ。（去る）

良辨　（相模資人に）　そちは相模から參つてより何年になるのぢや。

相模資人　もはや、足掛五年になります。

良辨　（聲を柔げて）　そちのやうに若い時分は、兎角心が迷ふものぢや。わづかの恩に心を惱まして、天下の大義を忘れたり、情慾に曳かれて思はぬ僞を云うたりするものぢや。よく氣を付けて過をせぬやうにいたさねばならぬ。

相模資人　（泣く）……有難う御座ります。

良辨　そちの若さでは、定めし父も母もまだ此世に居らるるであらう。

相模資人　（泣伏す）……

（使部四人が首枷をはめた大神杜女をつれてくる。）

玄光　そこに引据ゑい。

杜女　我身は八幡大菩薩に仕ふる命婦ぢや。忝なくも帝より從四位の位を賜つたものぢや。かやうな處で取調べるのは不都合であらう。

良辨　杜女、我らは太上天皇の思召によつて、そちを取調ぶるのぢや。神妙にいたせ。

玄光　宇佐八幡大菩薩の命婦、從四位下大神朝臣杜女。

杜女　（少しく頭を低げる）

玄光　藥師佛の御前ぢや。何事も有のまゝに申上げい。

杜女　（また頭を低げる）

玄光　（半弓を示す）　杜女、この半弓を知つて居るか。

杜女　（平然として）　それは我身の物ぢや。知らいで何と

しやう。
良辨　杜女、そちはこの男を知つて居るか。（相模჋人を指す）
杜女　よく知つて居ります。わが最愛の筑紫娘子の魂を盜んだ奴ぢや。そして我身を僧綱所へ訴へた奴ぢや。
良辨　何處で知つたのぢや。
杜女　（顏色を變へて默つてゐる）……
良辨　杜女、何で答へぬのぢや。
杜女　（獨言のやうに）何處で始めて會うたやら、もはや覺えても居らぬ。
良辨　僞を申せ、杜女。かの地獄谷の岩窟で初めて會うたのであらう。
杜女　……
良辨　して、そちは何の咎あつて、そちに仕ふる筑紫娘子を殺したのぢや。
杜女　筑紫娘子は此奴に掠かされて、神を辱かしめようとしたからぢや。
良辨　刑部鮪、筑紫娘子は何のやうな事をして、神を辱かしめたのぢや。
相模჋人　大神杜女が齋きまつる異形の神は何ぢや。何のためにあのやうな恐ろしい神を祭るのぢやと、私が聽いたので御座ります。
良辨　して、筑紫娘子は何と答へた。
相模჋人　筑紫娘子は悲しげに、それは云はれぬ。それを打明くれば、死なねばならぬと申しました。奇を好む心から、私が再三聽きますと、娘子はたうとう包みきれずして、何やら云はうといたしました。（齒を喰縛つて泣く）
良辨　それからどうしたのぢや。
相模჋人　そのとき……
杜女　そのとき我身の矢が娘子の胸に立つたのぢや。（相模჋人泣伏す。）
良辨　（間を置いて）杜女、（八雷の圖を指して）かゝる異形の神を齋きまつるは、何のためぢや。
杜女　八幡大菩薩のためぢや。
良辨　默れ、杜女。我らは盲目ではないぞ。これは天竺婆羅門の邪神ぢや。
杜女　何を云はるゝ。これは我國の神ぢや。古事記にも現はれてゐるかの伊奘册命が黃泉國に下られたとき、御身の周りに蹲くまつてゐた八雷の神ぢや。良辨どのは何を思違うて居らるゝのぢや。
良辨　如何にも八雷の神に似せて、巧に本來の姿を隱してはあるが、良辨の眼はあざむかれぬ。そちは此神像を何處で得たのぢや。

杜女　宇佐の繪師に描かせたのぢや。

良辨　これを描いたのは決して日本の繪師ではない。杜女、これは天竺の繪ぢや。そちがあくまで云張るならば、我らは直ちに婆羅門僧正に證を立てゝ頂くだけぢや。

杜女　……

良辨　どうぢや、杜女。そちはなほ僞りを云はうといたすか。

杜女　――如何にも婆羅門の邪神で御座りまする。

良辨　然らばそちは何のためにこのやうな邪神を齋きまつるのぢや。隱しだては却つて爲にならぬ。潔よく白狀いたせ。

杜女　それは云はれぬ。たとへどのやうな責にあうてもそればかりは云はれぬ。良辨どの、無益ぢや。もうお訊きなさるな。（眼を閉ぢる）

良辨　ふむ。どうしても云はぬと云ふのぢやな。然らば、それは改めてまた聽く折があらう。杜女、そちは何處でこのやうな邪神を祭る事を習うたのぢや。

杜女　豐前の九重山て、異人に會うたとき、習うたのぢや。

良辨　左官たち、杜女の口供は別册に認めておくのぢや。

左官二人　はつ。（別の卷物を出して書く）

良辨　杜女、そちは昨夜ひそかにそちを囚禁する室を二人の曲者が覗ひよつたのを知つて居るか。

杜女　いや、知りませぬ。

良辨　あの恐ろしい嵐の內を、二更過ぎて、二人の曲者が、ひそかに此處に忍んで參つたのぢや。そして、互に鎬を削つて切結んだのぢや。

杜女　（沈思）　ふむ。それは我身には關はらぬ事ぢや。（相模資人を指さす）　此奴を殺さうための刺客ぢや。

良辨　どうして、そちはさう思ふのぢや。

杜女　良辨どの、我身の口は鐵より堅い事を世の中の人は皆知つて居るのぢや。ところが、此奴はさうは行かぬ。何か途方もない事を云出されては、迷惑する人も隨分あらう。現に我身を見らるゝがよい。此奴の淺墓な心から、このやうな眼に會はねばならぬのぢや。そこで、世の中の用心深い人たちが此奴の口をふさがうと設てたのぢや。二人の曲者は、大方仲が惡かつたのであらう。

相模資人　（色を變じて聽いてゐる。やがて）　その曲者は捕へられましたか。

良辨　いや、一人は深手を負うたまゝ、闇にまぎれて二人とも逃れてしまうた。たゞ血潮の滴が、殘つてゐるだけぢや。

杜女　一方が立てば、一方が立たぬのぢや。

相模資人　（苦悶。やがて）　あゝ、さうぢや。一方が立てば一方が立たぬのぢや。

良辨　ふむ、一方が立てば一方が立たぬ……
（相模資人が突然倒れて苦しむ。）
玄光　どうしたのぢや。
使部の一人　（驅よつて介抱する）舌を深く嚙んで居ります。
良辨　そやつを殺してはならぬ。早く醫者を呼べ。
使部の一人　（凝乎と相模資人を見つめてゐる。やがて）もはや、絕命いたしました。
良辨　（立上る）何、絕命いたした。（相模資人の屍に立寄つて、よく見る）ふむ。殘念ながらもう駄目ぢや。
（また卓のところへ戾る）
杜女　良辨どの、此奴が死んだからは、もはや怪しい曲者は參りますまい。御安心なされ。
良辨　杜女、そちと行信とは追つて取調べる。今日はこれ迄ぢや。（使部の者に）杜女を以前のとほり囚禁いたせ。囚禁がすんでからでよいから、この死屍を取片付けるのぢや。
使部の者　はつ。（杜女を曳いて去る）
良辨　左官たちも引取られい。
左官二人　はつ。（去る）
（沈默。）
玄光　成程これは容易ならぬ疑獄で御座る。我らにも、大方の推量はついたやうで御座る。
良辨　むづかしい事になつて參つた。（眉の間に八の字をよせて）我らの胸では、とても裁けぬ。
玄光　何ういたしたらよいもので御座らう。
良辨　さればぢや。（深く思案する）まづ、我らの思ふところでは、杜女行信は、このまゝ囚禁して置いて、徐ろに、天下の形勢の推移を待つのぢやな。東大寺の盧舍那佛も來年一杯には、何とか開眼の運びに至るであらう。盧舍那佛の開眼がすむ頃より、丁度春の日に溶くる淡雪のやうに、天下の形勢は推移し始むるであらう。その時になれば、また何とかなるであらう。
玄光　宇佐の八幡宮の方は如何致せばよろしう御座るか。
良辨　（案を打つて）さうぢや。京の方は此儘にいたしておいて、まづ宇佐の八幡宮を取調ぶるのぢや。その調べの暇取る內には、盧舍那佛の開眼はすむであらう。頗るよい思付ぢや。（良辨はかう云つてから、相模資人の屍のそばに立寄る。凝乎と屍を見つめる）みれば、美しい若者ぢや。哀れな者ぢや。（合掌）
玄光　（同じく屍に立寄つて）戀に狂うたのが、却つて、當人のためには幸であつたかも知れませぬ。何事も知らずに、たゞ美しい幻を見つめて死んでしまうたので御座るゆゑ。（合掌）南無阿彌陀佛々々々……

良辨　來世は、よい處に生れさせてやりたいものぢや。

——幕——

第五幕

第一場

大佛殿前の光景。天平勝寶四年四月大佛開眼供養の終つた數日後の夜、月光が晝のやうに輝いてゐる。正面、斜に閉ぢられた東大寺の中門が見える。その後に巨大な大佛の屋根が、丁度中門を壓するやうにそびえてゐる。右の方に蓮池がある。その池を圍んで杉の大木や、花さきみちた櫻の樹、枝を長く地に垂れた柳などが立つてゐる。左には今工事半成の七重の西塔が、足場をかけた儘、廢墟のやうに月光に照らされてゐる。群集大勢、地に伏して大佛殿を拜してゐる。月光の内にうごめく群集の何處からともなく稱名念佛の聲が低く力強く潮のみなぎるやうに響いてくる。

盲目の翁　俺はもはや百歳を越えてゐるが、このやうな騷ぎは、まだきいた事もない。

男一　翁は健やかぢやのう。

盲目の翁　（微笑）もう駄目ぢや。紫香樂の宮で、大佛造營が始まつた時分までは、まだ眼を開いてゐたので、樂があつたが、盲目になつては、おしまひぢや。この東山へ來るにも孫の手をからねばならぬ。

男二　人間も百歳まで生きると、もう命も惜しうはあるまい。併し、その百歳の間には、定めしさま〳〵の世の中の移りかはりがあつたであらうのう。

盲目の翁　それはさま〳〵の事があつた。身の毛のよだつやうな恐ろしい事も、また神佛も及ばぬこの世の不可思議も、俺はこの生きた眼で見てきたのぢや。壬申の戰の時には、俺はあのお氣の毒な大友皇子の衞士に召されて深手を負うた。長屋王が御自害なされて、御館に火の手のあがるのも見てきた。藤原宮の造營の時には、まだ俺も若かつたから、飛鳥の京から、眞先に引移つてきたのぢや。併し俺はまだこのやうな騷をきいた事がない……

法師（若い男）　我らは翁に盧舍那佛さまの開眼供養の美しさを見せなかつたのを口惜しう思ふのぢや。

盲目の翁　そなたは見たのか。

法師　（誇らしげに）　さうぢや。我らは下野の藥師寺の法師ぢや。末席にあつて、遙に禮拜いたしたが、まことに古今未曾有の盛儀であつた。

盲目の翁　（前ににじり出る）　盧舍那佛さまは、どのやうな御姿ぢや。悉しう話してきかせて下され。

男一　法師は幸ぢや。我ら庶民は、拜觀をゆるされぬゆ

ゑ、わづかに御門外から拜んだだけぢや。
法師　我らは明日京を發つて下野に下るのぢや、かゝる前代未聞の大供養に列席した身の果報を思うて、今宵大佛殿にお別れに參つたのぢや。
盲目の翁　法師どの、早う話してきかせて下され。
法師　何にせよ。各國分寺の僧尼と朝廷の百官が、悉く列席したのぢや。さすがの廣大な東大寺も當日は人々で一杯であつた。
男一　さうであらう。
法師　大佛殿の扉が一文字に開かれて、紫摩黄金の盧舍那佛さまは御膝から、御掌御胸のあたりまではつきりと拜まれた。
盲目の翁　南無毘盧舍那佛。南無毘盧舍那佛。
法師　大佛殿の前の廣場には、左右に幄舍をまうけて、千僧百官の席とせられた。我らはその末席についてゐたのぢや。帝は公卿たちに守られて、しづ〳〵と玉座におつきなされた。開眼導師婆羅門僧正が、輿に乘つて、白蓋をかざして、入つて來られた。その後には、講師讀師の諸名僧たちが續かれたのぢや。
（盲目の翁を始めとして、何時となく諸人が法師を取圍んで、ひそやかに念佛する。）
法師　華嚴經の讀誦が終ると、導師は立つて大佛殿の內に入り、長い梯子を踏み上つて、盧舍那佛の雙眼に睛を點ぜられた。
群集　南無毘盧舍那佛々々々……
法師　開眼がすむと、南門より樂人たちが列をなして入つてきて、大佛殿の前を二度廻つて、左右に分れ立つた。舞臺には、東西に寶樹を植ゑ、禮盤を据ゑてある。始めには五節舞が奏せられた。つゞいて勇ましい久米舞、楯伏舞が行はれた。次には、二十人の女が左右に分れて踏歌を奏したのぢや。それから唐樂、林邑樂、高麗樂と、次々に樂人や釆女たちの美しい舞が日の暮れるまで續いたのぢや。その舞振の雅かな、奏樂の微妙さは、所詮口には盡されぬ。極樂淨土もかくやと思ふばかりであつた。
盲目の翁　（合掌して）たゞかうして物語にきいてさへ、心が浮立つやうぢや。南無毘盧舍那佛々々……
群集の一人　（突然）や、大路の方より、誰やらが、大勢馬に乘つて來たわ。
（皆「誰ぢや、誰ぢや。」とひしめく。）
群集の一人　東の塔の傍に馬をつないで、此方にやつてくるわ……月の光でよくは分らぬが橘奈良麿さまのやうぢや。
群集　奈良麿さま御一人か。
群集の一人　いや、後からまだ幾人となく來るやうぢや。

群集　何ぢや。何事ぢや。（不穩の氣色）

（橘奈良麿、從者一人を從へて現はれる。ついでは、藤原仲麿がやはり從者を從へて出てくる。人々は、池の渚の櫻の木の下に立止る。）

奈良麿　仲麿公では御座らぬか。

仲麿　橘左少辨どのか。豪い人出で御座るのう。

奈良麿　かの開眼供養以來夜毎に土民の群が東大寺の門前に集まり、禮拜念佛いたすよし、人の噂に承はりしゆゑ、如何なる光景かと思ひ來てみれば、これはまた盛んな群集で御座るのう。

仲麿　土民の渇仰かほどまで盛んなりとは我らも思ひもよらぬ事で御座つた。帝に於かせられてもこの有樣を聞召したならばさぞ御滿足で御座らう。早速我らより奏上いたす心組で御座る。

奈良麿　（仲麿を睨んで）この盧舍那佛は、元來、先帝の御發願で御座る。たゞ今は御不豫にて、藥師寺の御所に垂れこめてのみおはせば、我ら、明日にも參內いたし、事こまやかに群集の信心の御物語り參らせなばいさゝかは御心も晴れるで御座らう。

（沈默。）

群集　南無毘盧舍那佛。南無毘盧舍那佛。……

（吉備眞備が童子一人を召つれて現はれる。）

仲麿　おう、珍らしや。吉備公。

眞備　どなたかと思うたら仲麿公ぢや。久しうお眼にかゝりませぬ。（一禮す）

奈良麿　吉備公、何時、京へはお歸りなされたのぢや。

眞備　橘左少辨どので御座るか。相かはらず御壯健で祝着至極ぢや。諸兄公にもお變りは御座らぬか。

奈良麿　父も變りは御座らぬ。あなたさまも老いてますます御壯んのやうに見受けますする。

眞備　幸と筑紫の土地がわが身に適して居つたと見えて、病氣にもかゝりませぬ。俺は、一昨日京へ戾つて參りました。まだ旅裝も解かぬ次第ゆゑ、朝廷以外は、どなたにも御無沙汰いたして居ります。御父上にもよろしうお傳へ下され。

仲麿　（間を置いて）筑紫は如何で御座つた。唐土、新羅あたりの樣子に變りは御座らぬか。

眞備　わづか二年あまりの滯在ゆゑ、悉しくは分りませぬが、新羅は困つたもので御座るのう。

仲麿　ふむ。多年朝貢を怠り居りしが、この三月王子金喧廉を以て舟七艘の貢物を捧げて筑紫に來泊せるよし、太宰府より報ありしが、吉備公はその使者にお逢ひなされてお座るか。

眞備　いかにも會ひました。併し新羅は、もはや我國に歸

順の志は少しも見えませぬ。使者の暴慢無禮の事は言語につきて居りまする。察するに、大唐の威勢を頼んで、わが國より離れ去らむ下心かと思はれまする。

仲麿　先年わが國よりつかはしたる問責の使を辱かしめたと云ふ事で御座る。吉備公、して、大唐の形勢は如何で御座つた。

眞備　もはや私がかの國に參りましてより、二十年にあまる間、遣唐使もつかはされず、公の交通絶えし次第ゆゑ、しかとは分りませぬが、玄宗皇帝の御代泰平にして、威望近隣に及ぶやうに承はりました。

仲麿　これまで遣唐使をつかはされぬのは、我ら昔より心得ぬ事と思うて居つた次第で御座る。此度、藤原清河をつかはすについては、何かと吉備公の御配慮をわずらはす事で御座らう。清河は若い者ゆゑ、御迷惑ながら吉備公に是非御同行を願ふやうに、我らより奏上いたした次第で御座る。

眞備　私とて、お役には立ちませぬが、幸、唐土には、阿倍の仲麿が參つて居りますゆゑ、何かと都合がよからうと思はれます。

奈良麿　阿倍仲麿は玄宗皇帝の御寵愛を受て、唐朝の重臣となり居ると云ふ話で御座るが、眞で御座りまするか。

眞備　俺もそのやうな噂をよく聞きまする。李白、王維などゝ云ふ名ある詩人と深い交をなしてゐるとやら……

仲麿　吉備公、新羅はいま一度大軍を發して、懲らしてやらねばならぬと我らは思ふのぢや。して、渤海女眞については何もお聞きなされぬか。

眞備　何もきゝませぬ。併し、海外はこれからます〳〵事が多からうかと私は考へまする。

仲麿　さうぢや。とも角も怠らず遣唐使をつかはして、唐土の形勢を知つて置かねばならぬ。

（群集俄かに騷ぎ立つ。）

群集一　何ぢや白い物が。左の御掌に。それはまことか。

群集二　まことぢや。我らは身よりの者が東大寺に居るので、その法師に聞いて參つたのぢや。東大寺は使を諸方に走らすやら、何やら火事のやうな騷ぎぢや。

群集三　不思議な談ぢや。我らには信ぜられぬわ。

群集二　信ぜられずば信ぜぬまでぢや。

群集一　何であらう。氣がゝりぢやな。

盲目の翁　（一人の男の耳打をきいて）ふむ。それはよい兆ではない。國の亂るゝ時、または、天の災害の來る前には、よく、そのやうな不思議な事が見ゆるものぢや。皆々もつゝしまねばなるまい。南無毗盧舍那佛々々々……

……

仲麿　（凝乎つと、彼等の騷ぎを聞きすましてゐる）何や

ら土民共が、あやしい事を云うて、騒いで居るやうぢや。
群集五 （女、突然泣き叫ぶ）……恐ろしい事ぢや。あゝ、盧舍那佛さま。
盲目の翁 誰やら女子の聲で泣いてゐるやうぢや。俺は、このやうな不氣味な前兆に、何度となく出會うた。何れよくない事が起るであらう。
群集 （諸方より寄り來る） 何ぢや、何ぢや。何事が起つたのか。
群集二 盧舍那佛の左の御掌に何やら白い物がうごめいてゐると云ふのぢや。
群集 （口々に） 何、白い物がうごめいてゐる。
（沈默。）
眞備 誰が云ひ出した事で御座るか知らぬが、跡方もない噂で御座らう。
仲麿 かやうな事は民の心を損ずる物ぢや。折角力を盡して造營いたされた東大寺に、つまらぬ災があつてはならぬ。我らはこれから大佛殿へ參つて、事の眞否を確めようと思ふのぢや。皆さま如何で御座る。（歩み出す）
奈良麿 我らも參るで御座らう。
眞備 （歩みながら） 臆病な法師たちが、何か見誤つて、かやうな騷ぎになつたかも知れませぬ、兎も角も參るで御座らう。
（仲麿、眞備、奈良麿、は群集の騷擾を後にして中門の方へ行く。）

——暗轉——

第二場

大佛殿内部の光景。太き柱の列。中央壇上には塗金既に終つて、紫摩黃金の御膚美くしく輝く本尊盧舍那佛大像を石銅二重の蓮華座に安んじてある。（舞臺にては御胸より上は見えず。）盧舍那佛の左の御掌に、朧ろげに白き者が蹲まつてゐるのが見える。大佛殿の、欞子の間より洩れる月光が、御體を、奇怪な斑點に染めてゐる。佛前には大花立二基、燈臺、大蠟燭立など並んでゐる。その他さまざまの御供物が供へられてゐる。
門前の群集の念佛禮讃の聲が、暗黑の内にきこえる。次第に明るくなる。少時、前面の御扉がギイと開いて、月光の内から、仲麿、眞備、奈良麿が、法師に案内せられて入つてくる。最後に、良辨が從僧をしたがへて現はれる。
仲麿 眞備公、御覽なされ。かの土民共の云ふごとく、成程、盧舍那佛の左の御掌に白い物が見ゆるわ。
眞備 不思議な事で御座るのう。

奈良麿　月の光で分明には見えねど、かの白い物は、何うやら蠢めいてゐるやうで御座る。
仲麿　はて、何であらう。
良辨　我らもたゞ今、報せをうけて驚いて參つた次第で御座る。夕の勤行の折までは、何の變つた事もないやうに見受けましたが、その節點した佛前の大蠟燭の消えて居るのも不思議で御座る。
奈良麿　(突然) あれは人間ぢや。
仲麿　人間……そのやうな事は御座るまい。御掌には梯子の助を借らねば、上る事は叶はぬのぢや。
奈良麿　いや、たしかに人間の姿で御座る。よく御覽なされ。白衣をきて蠢めいて居りまする。
(沈默。)
良辨　何やら小さな聲がきこえはいたしませぬか。
奈良麿　稱名念佛の聲ぢや。
眞備　(長い間を置いて) ふむ、いかさまこれは左少辨どのゝ云はるゝとほり人間のやうぢや。
仲麿　人間とすれば、どうしてあのやうな處に上つたので御座らう。
(大佛掌上の白い物は、すつと立上る。高い笑聲を發する。葛城若女である。)
葛城若女　ほほゝゝゝ。誰やら大勢參つたやうぢや。
眞備　やゝ、あれは國公麿の娘ぢや。
奈良麿　さうぢや。何時ぞやの娘子ぢや、戀人に別れて、ふと心を取つめた娘子ぢや。
仲麿　かね〳〵唄をうたうて平城京をさまよふ名高い狂女ぢや。
葛城若女　眞玉さまは盧舍那佛さまの人柱に立つたのぢや。赤い血が樋の口から流れ込んだのぢや。何時までも何時までも、流れてやまぬ。はてはたうとう眞玉さまの御顏が曉の月のやうに白うなつてしまつた。(泣く)
仲麿　何を考へて、またあのやうな處へ上つたので御座らう。我らには思ひも及ばぬ事ぢや。
良辨　國公麿の娘ならば、此頃朝夕の分ちなくこの邊をさまようては、かの非業に死んだ佛師眞玉の事を搔きくどいて居りました、何にいたせ、人騷がせな眞似をいたしたもので御座る。早速法師たちに引下ろさせるで御座らう。(從僧に) これ、そちは僧房へ參つて、法師たちを伴れて參れ。
從僧一　はつ、畏こまりました。(去る)
葛城若女　眞玉さまの赤い血が御膚に流れ込んだゆゑ、盧舍那佛さまは、我身にさま〳〵な御物語をして下さるのぢや。この御掌の溫かいことゝ云うたら、丁度人の肌のやうぢや。(泣く) 盧舍那佛さまは只今どこ

に居られますか。どうぞ我身に返して下されエ。
仲麿　まことに正體もなく狂うた者ぢや。
葛城若女　（唄ふ）。
悲しき夢のさめしとき
涙にしめる眼を上げて
ひとりぬる夜のわびしさを
毘盧舍那佛にかきくどく……
（笑ふ）　ほほゝゝゝ。盧舍那佛さま、何をそのやうにお笑ひなさるゝのぢや。
（法師たち大勢來る。）
從僧　法師たちをつれて參りました。
良辨　貴僧たちは梯子を持つて參つて、あの狂女を御掌より下ろすのぢや。
法師たち　はつ。
葛城若女　いやぢや。我身は何時までもかうして溫かい御掌の上に居るのぢや。死ぬまで居るのぢや。
法師一　これ、狂女。只今梯子を持つて參る程に、早く下りて參るのぢや。
葛城若女　いやぢや。我身は死ぬ迄、かうしてゐるのぢや。此處は眞玉さまの御掌の上ぢや。離れられる事でない。

（法師たちが運んできた長い梯子を御掌にかける。）
法師二　我らが上つて、つれて參らう。（梯子を上る）
葛城若女　これ、誰ぢや。我身に近づくと承知せぬ。此處はそち達の上つてくる場所ではない。これ、何で上つてくるのぢや。我身に近づいたが最後、かうしてくれる。
（葛城若女はその梯子を御掌より押脫さうとする。）
眞備　法師、下りるがよい。そのやうな手荒い事を致すより、やさしう云うてきかせて下ろすのが一番ぢや。
（法師下りる。）
奈良麿　吉備公はあの娘子を、むかしより知つて居らるゝゆゑ、何とか御思案が御座らう。
眞備　葛城若女。
葛城若女　誰ぢや、今我身を呼んだのは、誰ぢや。盧舍那佛さまか、眞玉さまか。
眞備　そちを呼んだのは俺ぢや。吉備眞備ぢや。
葛城若女　行基菩薩ぢや。さうぢや、菩薩の御聲ぢや。菩薩さま、久しくお眼にかゝりませぬ。御なつかしう存じまする。（長い間）うむ、やう〳〵分つてきたやうぢや。何時ぞや、我身は、この盧舍那佛さまを、むかし何處ぞで拜んだ事があるやうに思うたが、その筈ぢや。盧舍那佛さまの御顏は行基菩薩に生寫しぢや。ほほゝゝゝ。
眞備　もう俺の聲も忘れてしまうたのぢや。

葛城若女　（唄ふ）

　　眞玉戀しや。雪の夜の
　　暗に立ちたる面影は
　　消えて跡なく、わが聲の
　　たゞ木魂する寂しさよ……

　（門前の群集の聲盛にきこえる。國公麿が現はれる。）

公麿　これは皆さま、夜陰に及んで、お騷がせ申しまして、恐れ入りまして御座ります。

奈良麿　公麿。

公麿　や、これは左少辨さまでいらせられましたか。（此處に居並ぶ人たちに氣付いて平伏する）數ならぬ私の娘のふつゝかから、斯様な貴い御方々をお騷がせ申しまして、まことに何とも申譯が御座りませぬ。

葛城若女　（唄ふ）

　　蓮の華のさきみつる
　　彌陀の淨土へいざなひて
　　常住不斷の法樂を
　　さづけ玉へよ、盧舍那佛……

公麿　（仰ぎ見て）これ、娘、何でそのやうな勿體ない事をするのぢや。そこを何處ぢやと思うてゐるのぢや。

葛城若女　（突然泣く）一方は父ちや。一方は戀人ぢや。あゝ行基菩薩さま、何のやうにいたしたらよろしう御座りませう……

公麿　何をらちもない事ばかり云ふのぢや。如何に狂氣いたしたとは云へ、場所柄もわきまへず、たはけた事ばかりを口走るとは……

葛城若女　さうぢや、我身は小鳥になつたのぢや。何時ぞや、眞玉さまとつれ立つて、春日野をそぞろ歩きしたとき、艸の茂みに見つけた鶉の子を、そつと掌に乘せたのぢや。鶉の子は、瑠璃のやうに澄んだ眼で、我身を凝乎つと見て、ちゝと鳴いた――我身は鶉の子ぢや。行基菩薩さまの溫かい御掌に乘つた鶉の子ぢや。ほほ……

　（群集の禮讃の聲がきこえる。葛城若女は靜になる。）

公麿　葛城若女、早く降りるのぢや。皆さまに御厄介をかけぬ内、一人で降りてくるのぢや。

奈良麿　心が靜まつたのか、柔なしくなつたではないか。

公麿　時折は、常の人のやうに心が明るくなりまするかと見えて、よく物を聞分ける事が御座りまするが、すぐまた狂ひ出しまする。（鼻をすゝる）

仲麿　常の人では男でもあのやうな處へ上る事は叶はぬ。

狂氣いたすと不思議と身が輕くなるものと見ゆる。
公麿　お蔭を持ちまして、やう〳〵靜まりました。今の內に私があの御梯子を拜借いたして、つれ下ろしませうと思ひまする。
良辨　なる程、そちが參つて欺して下ろすのが一番ぢや。もしもの事のないやうに、皆して梯子の脚を押へて居るがよい。
法師たち　はつ。
公麿　それでは御免をかうむりまする。（梯子に上らうとして足をかける）
葛城若女　何と仰せられます。（公麿は梯子から足を下ろす）まあ、何うしてそれを知つておいでなされるのぢや。それは〳〵恐ろしい事で御座りました。地獄の鬼が何人となく出て參つて、眞玉さまを責めさいなむので御座ります。ふつ〳〵と煮えたぎる銅の汁のなかに追込んだり、また、やう〳〵眞玉さまが出ておいでなさると、今度は鐵の太やかな箸で情容赦もなくつまみ上げて、炭火の內に投げ入れたりするので御座ります。あゝ、それを見てゐる我身のつらさ、悲しさ、まあ思うても見て下さりませ…そして、そして終には、無慘にも殺してしまうたのぢや。
公麿　娘、これ、靜まらぬか。何度云うたら分るのぢや。
葛城若女　（泣く）眞玉さまは世にも勝れた佛師ぢや。地獄の鬼などに呵なまるゝやうな惡業は此世では夢にもなされぬのに、何で御佛は救うては下さらぬのぢや…
（群集の禮讃の聲がきこえる。）
（婆羅門僧正と唐僧道璿が現はれる。）
婆羅門僧正　これはこれは、皆さま。
良辨　僧正にも道璿どのにも、夜陰に御苦勞で御座る。
道璿　只今途上にて、聽けば、勿體なくも盧舍那佛の御掌に狂女が乘つて居るとか申して、土民どもが騷いで居りました。まことで御座るか。
良辨　御覽下され。あのとほりで御座る。只今はやゝ靜まつて居りまするが、先刻より、恐れ多くも御掌の上で、亂りに痴愚の言を發しまして、我らほと〳〵當惑いたした次第で御座る。
婆羅門僧正　良辨僧都、してあの狂女は何者で御座る。
良辨　あれなる國公麿の娘で御座る。
道璿　何、公麿の娘と仰せらるゝか。
公麿　道璿さま、よしなき事を仕出かしてくれましたので、私は、途方にくれて居ります。
（沈默。）
道璿　これは只事では御座らぬ。のう、婆羅門僧正。
婆羅門僧正　さればぢや。かやうな事は前代未聞ぢや。天

竺に於てもまだ承はらぬ。

道璿　それと申すも我らがつねに云うたとほり、盧舍那佛の御尊顔が、嚴たる威容をそなへて居らぬからぢや。何人も馴れ親しみ得るやうに見え奉るゆゑ、かやうな不詳事が起つて參るので御座る。

婆羅門僧正　何さま、道璿どのゝ說かるゝ所も一理あれど、我らにはかやうな不思議の行はるゝは、偏に我ら人間の凡智にはかられぬ廣大無邊の佛力の示現かと思はるるのぢや。

道璿　不思議な說を承はるものぢや。

婆羅門僧正　御覽なされ、道璿どの。金銅十六丈の毘盧舍那佛は、今、紫摩黃金の御掌をのべて、映し入る月の光に蒼白く照されたる狂女子を救はんとして居らるゝ所ぢや。

（一同感動す。門外の群集の禮讃の聲がきこえる。）

眞備　婆羅門僧正どのゝ只今の御物語、この眞備はいとゞ喜しく承はりました。我ら、かうして朧ろげなる月の光に、御尊容を拜し奉ると、何とも云はれぬ佛菩薩の有難さに、思はず涙がこぼれまする。慈悲に滿ちたるあの御眼の濡ほひと云ひ、今にも衆生濟度の有難いお言葉が出づるかと思はるゝあの御脣のにほやかさと云ひ、我ら初めて此世ならぬ聖人の面影に見え奉る心地ぢや。

葛城若女　はい、よう分ります。あゝ、有難いお言葉ぢや。（御掌より乘出して）皆さま、靜にお聞きなされませ。盧舍那佛さまが、今、有難い御說教をして下されます。

（門前の群集の聲がきこえる。）

（沈默。）

公麿　婆羅門僧正さま。親と子は一世の契と承はりましたが、まことで御座りまするか。

婆羅門僧正　さうぢや。一世の契よりはないのぢや。

公麿　葛城若女、そちはたつた一世の契りのこの親に、かくまで苦勞をかけるのぢやな。何と云ふ不孝者ぢや。

葛城若女　靜かに——我身はいま盧舍那佛さまの御說教をきいてゐるのぢや。

（沈默。）

公麿　そちを育てた苦勞が、口惜しいやうぢや。

（沈默。）

葛城若女　（突然、高い聲で）南無毘盧舍那佛々々々……あゝ、寂光土の姿が見ゆる。有難い事ぢや。いま、盧舍那佛さまが、そちは、この世に生れて、まことに苦しい目にばかり會うてきた。氣の毒なものぢやと仰せられた。すると夢幻のやうに美しい世界が、ふと、見えてきたのぢや。（間）盧舍那佛さま、私はまだ幼ない時分に、よく、このやうな景色を見たやうに思ひまする。夕暮になると、いつも黃金色の雲の崩るゝ西の方を見つめて、

亡き母上を忍びながら、涙をこぼして居りました頃、よく、このやうな美しい景色を見たやうに思ひまする。(月光次第に鮮やかになる)おゝ、あすこに眞玉さまが見える……まあ、何と云ふ美しさぢや。この世の面影にないほどぢや。(間)眞玉さま、私もやうやく盧舍那佛さまの慈悲の御手に救はれて、辛い悲しい世の中をすてゝ參りました。今から思うてみると、あの頃の苦しさが、まるで夢のやうで御座りまするなあ。……(月光にてらされたまゝ崩れるやうに伏す)

(沈默。)

公麿　これ娘、どうしたのぢや。(靜に梯子を上る。聽て)あゝ、もう呼吸が絕えてしまうた。悲しい事ぢや。(泣く)

良辨　公麿、それはまことか。

公麿　(泣きながら)はい。眼の光が消えてしまひました。出る呼吸も入る呼吸も、もはや御座りませぬ。

(一同合掌。)

(門前の群集の聲がかすかにきこえる。)

婆羅門僧正　我らはかやうに美しい往生をまだ見た事が御座らぬ。(合掌)

公麿　どなたか御手をお貸しなされて下さりませ。死屍を降さねばなりませぬ。

(法師たちの內に梯子の脚をおさへてゐる者がある。また上へ上つて、公麿の手より葛城若女の死屍を受取る者がある。やがて、美しい葛城若女の死屍は靜かに地上に下ろされる。)

良辨　公麿、その死屍を佛前に寢せて置くがよい。

公麿　はい。(二三の法師と一緖に死屍を抱いて佛前に橫たへる)

婆羅門僧正　我らが菩薩を弔うてつかはさう。

公麿　有難う御座りまする。(沈默、凝乎つと葛城若女の死顏を見てゐる。やがて泣崩れる)……

奈良麿　これ、公麿。そちの悲しみは、もつともではあるが、涙は佛のためにならぬ。(公麿の肩に手をかけて、葛城若女の死屍より引離す)

公麿　はい。(暗い柱の蔭に隱れる。蕭やかな泣聲が何時までもきこえてゐる)……

(婆羅門僧正は法師たちの先に立つて進み、一同靜かに半圓の形になつて、葛城若女の死屍を取圍む。默禱。仲麿と眞備は、法師たちに離れて合掌してゐる。)

(奈良麿は一人やゝ一同より遠い處に立つて、合掌してゐる。月光は虛になつた盧舍那佛の御掌を燦然と輝かす。)

(沈默。)

―― 靜かに幕 ――

銃殺された林少尉（三場）

時　日露戰役時代
處　南滿洲

一

明治三十七年六月中旬、晴れた午前――鳳凰城外の村落。師團司令部にあてた支那富豪の家の一部。石階、その上に石疊、奥に「師團長居室」の貼札。石疊には、支那風の卓、地圖數葉、四五脚の椅子。屋根を支へた太い二本の柱に金文字の大聯がかゝつてゐる。その前に衞兵二名。

幕僚二三名石疊の上の椅子によつて話してゐる。

幕僚一　どうも暑いね。
幕僚二　水浴でもするかな。
幕僚一　いや。後がたまらない。熱つて……
（師團長が上衣を脫いで出てくる。）
師團長　君たちも上衣を脫ぎ玉へ。
幕僚二　はつ。
師團長　いくらかしのぎいいよ。
幕僚一　ぢや、一つ御免かうむつて脫がうか。
（幕僚一同うなづく。立上つて上衣を脫ぐ。）
幕僚三　從卒。
從卒　はつ。
幕僚三　この上衣を何處かへかけて干しとけ。
從卒　はつ。（持つてゆく）
師團長　ところで、軍司令部の情況判斷では、……賽馬集附近に敵の大部隊がゐるとにらんでゐる。
幕僚二　自分もさう思ひます。
師團長　ふむ。（地圖をみる）
（幕僚二が地圖の上を指さして示してゐる。副官が出てくる。）
副官　師團長閣下。
師團長　（地圖を見ながら）おい。
副官　軍法會議の判士長が御眼にかゝりに來て居ります。
師團長　（頭を上げる）此處へ。
副官　はつ。（去る）
幕僚三　林少尉の一件ですか。
師團長　さうだ。

（副官が判士長をつれてくる。そして自分は石疊の端に直立してゐる。）

師團長　判士長。判決はどうなつたらう。

判士長　はつ。やはり銃殺の刑に決定いたしました。この宣告書に御捺印を願ひます。

師團長　（受取つて眼をとほす）してみると、林少尉はどうしても自説を曲げないのだな。

判士長　はい。

師團長　銃殺は何時決行するつもりか。

判士長　師團長閣下の御捺印がすめばすぐ施行いたします。もう、準備は整つて居ります。

師團長　場所は。

判士長　この司令部の裏の廣場で施行いたします。

師團長　…射手は林少尉の部下の小隊から出したか。

判士長　はつ。第一分隊長以下十二名――司令部の門前に集合させて置きました。

師團長　…判士長。林少尉を鳥渡此處へ伴れて來い。

判士長　はい。（退場）

師團長　（幕僚たちに）元來は眞面目な奴だよ。

幕僚三　さうらしいです。

師團長　とに角俺がもう一度説得してみよう。

幕僚二　それは結構です。（師團長が居室に入る。幕僚副官退場）

（判士長が林少尉の繩尻を兵卒に取らせてつれてくる。）

（師團長は軍服の上衣を着て出てくる。）

師團長　林少尉。

林少尉　はつ。

師團長　最後に俺は、もう一度君に訊く。どうしても、君の説を枉げる事は出來ないか。

林少尉　はい。

師團長　軍法會議は、君に帝國軍人として、最も恥づべき刑罰を宣告しようとしてゐる。これが、判士長の持つてきた宣告書だ――君が、自説を枉げなければ、俺はすぐこの書類に印を捺す…どうだ。林少尉。

林少尉　已むを得ません。

師團長　僕は君を惜しむ…君のやうな優秀な青年士官を自分の部下から失ひたくはないのだ。

林少尉　師團長閣下。恩も恨もない個人と個人が、强ひられた意志で殺しあはなければならないこの戰爭を不合理とはお思ひになりませんか。

師團長　それは我々の國民の權利のためだ。

林少尉　權利…我々の國民は、むしろ平和な生活を衷心望んでゐます。

師團長　（憤然として）　よし、俺はもうこの上お前を憫む事は出來ない。（ポケットから印を出して、宣告書に捺す）お前は帝國軍人として最も不名譽な銃殺の刑に處せられるのだ。
林少尉　（顔色蒼白となる）‥‥
師團長　判士長。（宣告書を渡す）
判士長　はつ。（進んでそれを受取る）
師團長　射手たちを此處へ呼べ。
判士長　はつ。（退場）
林少尉　（極度の興奮）　師團長閣下。銃殺の理由をお聽かせ下さい。
師團長　生かじりの非戰論を唱へて軍隊の志氣を害し、敵前に於て上官と鬪爭した重大な罪によつてだ。
林少尉　（凝つと師團長を見つめる）　では牛島中尉殿は‥‥
師團長　牛島中尉には進退伺ひを出させて置いた。
林少尉　それは不合理です。最初に軍刀を拔いたのは牛島中尉殿です。
師團長　それはお前の非戰論に憤激したからだ。
林少尉　（叫ぶ）　自分だけ罰せられるのは、どうしても不合理です。
（判士長入來る。）
判士長　射手たちが參りました。
（一人の軍曹に指揮されて、武裝した十二名の兵卒が現はれる。）
軍曹　（低聲に）　左向け止れ。捧げ銃。
（兵卒捧銃の禮。林少尉それを見てよろめく。）
師團長　（舉手）　御苦勞だな。行つて休息して居れ。
軍曹　はつ。（兵卒たちに）　立銃。右向け右、前へおい。
（退場。）
林少尉　不合理です。どうしても不合理です。
師團長　判士長。林少尉をつれて行け。
判士長　はつ。（繩尻を取つた兵卒に目くばせする）
林少尉　（曳かれてゆきながら、聲をしぼつて）　閣下。自分は銃殺される理由はありません。不合理です。どうしても不合理です。‥‥
（師團長は陰鬱な表情で莨に火をつける。）
（副官が出てくる。）
副官　師團長閣下。
師團長　何だ。
副官　（二枚の名刺を出す）　日本軍事通信員代表として、この二名の新聞記者が閣下に御面會願ひたいと申して參つて居りますが‥‥
師團長　（舌打）　面倒くさい奴等だ‥　今忙がしいからと

云ひ玉へ。
副官　はつ。（退場しようとする）
師團長　副官、仕方がない。會はう。此處へつれてき玉へ。
副官　はつ。（退場）
（やがて二名の觀戰記者をつれてくる。）
師團長（立上つて）私が師團長ですが。……
記者一　始めて御眼にかゝります。私は帝國寫眞畫報社の村山愛川です。
記者二　私は太陽新報社の特派記者、瀨川芳岳です。二人は日本軍事通信員の代表として、閣下に御願申したい事があつて參りました。
師團長　まあ、おかけ下さい。（兩人椅子にかける）で、御用といふのは。……
記者二　いや、他でもありません。私共の聞知しました處では、先日、前哨勤務中、同僚の牛島中尉と喧嘩をして、軍刀で切合つた林少尉は、本日處刑されるさうでありますが。もう、閣下は少尉の宣告書に御捺印なさいましたか。
師團長（嚴然として）捺印しました。林少尉は銃殺されるのです。
記者二　しますと、銃殺の判決理由とするところは、林少尉の思想ですか。
師團長　さうです。あゝ云ふ思想を苟くも帝國の名譽ある軍人が公言して憚らないのは、怪しからん事です。
記者一　では、もう一つお訊ねします。相手の牛島中尉は、どう云ふ處罰をうけたのです。
師團長　牛島中尉には進退伺ひを出させて置きました。
記者二　それだけですか。
師團長　それだけです。
記者二　……最初に軍刀を拔いたのは、牛島中尉だと云ふ噂ですが……
師團長　牛島中尉は、短氣ではありますが、常に軍人の本分を守つてゐます。中尉の罪は林少尉の言葉に激して、少々過激な行爲をしたと云ふだけです。
記者二　では軍律に牴觸すると云ふ譯ではないのですな。
師團長　戰地の生活は平時と違ひます。牛島中尉にはよく訓戒を施して置きました。今度の罪の償ないとして、中尉には、此次の戰場で拔群の働をする事を誓はせました。
記者二　成程。
記者一　師團長閣下。
師團長　何です。
記者一　私どもは處刑前の林少尉を撮影させて頂きたいの

ですが、お許し下さいますでせうか。

記者二　そして、少尉の最後の感想がきゝたいのです。

師團長　折角ですが、それは、お許し出來ません。

記者一　押してお願したいのですが……

師團長　絶對にお斷りします。それに林少尉は、今、處刑されるところです。この一二分中に……

記者一、二　（殆んど同時に）本統ですか。

師團長　判士長の宣告がすむと、すぐ火蓋が切つて放たれるのです。（時計をみる）

（一齊射撃の銃聲が大きく反響して響く。）

記者一、二　（ギクリとして）あれは……（同時に師團長をみる）

師團長　（ガッカリしたやうに）あれが林少尉の殺された銃聲です。

（沈默。）

記者一　（二に向つて）では、君、せめて處刑の跡でもみて行かうか。

記者二　さうだね。

記者一、二　どうも御忙がしい處を有難う御座いました。では失禮します。

師團長　いや、折角お出でになつたのに……私の許されてゐる範圍でなら、何でも御相談に應じますから、また、お出で下さい。

（記者去る。）

（判士長と軍醫と射手たちが入つて來る。）

軍曹　（低聲に）右向け止れ。捧げ銃。（捧銃の禮。師團長答禮）立銃。

判士長　只今林少尉の刑を終りました。（師團長點頭く）

軍曹　（捧銃）自分以下十二名、これから中隊へ歸ります。

師團長　御苦勞であつた。林少尉は柔弱な西洋の思想にかぶれたため、軍人として最も不名譽な最期を遂げなければならなかつた。お前たちはよく林少尉の最期を膽に銘じて、國家の爲に勇敢な軍人とならなければいけない。よし、歸つて休むがよい。

軍曹　捧げ銃——（師團長答禮）立銃。右向け右。前へおい。（退場）

師團長　（判士長に）處刑前の有樣は何うだつた。

判士長　非常に取亂しまして「不合理だ。銃殺は不合理だ」と叫びながら、絶命いたしました。

師團長　（熱心に）ふむ——彈丸は何處にあたつたかね。軍醫。

軍醫　三發命中しました内で、頭蓋の貫通銃創が致命傷でありました。部位は右の眉の一センチばかり上方です。

師團長　（感動）ふむ。や、御苦勞だつた。歸つて休み玉

へ。

兩人　（擧手敬禮）　はつ。（退場）

師團長　從卒。

從卒　（出てくる）　はつ。

師團長　（時計をみる）　もう午だ。まだ飯の支度は出來んか。

從卒　先刻閣下から聯隊長以上會食の御命令が御座いましたから……

師團長　おゝ、さうだつた――すつかり忘れて居つた、もう皆集まつたか。

從卒　大抵集まつてお出でのやうであります。

師團長　よし、では行かう。（立上る）　副官。

副官　（出てくる）　はつ。

師團長　今日の會食の俺の講話の原稿はもう書いてくれたかい。

副官　はい。こんな事でよろしいでせうか。（原稿を出す）

師團長　ふむ。（讀む）　所謂非戰論について……君。一緒に會食場へ行かう。

副官　はつ。

（師團長原稿を讀みながら退場。副官後に從ふ。――衞兵二名捧銃の禮。）

二

夜――荒廢した村落中の一民屋。壁が砲彈で破壞されてゐる。白紙に「第十中隊事務室」と書いて、入口に貼つてある。將校用の背嚢、圖嚢、行李、軍刀、軍帽などが亂雜に置かれてゐる。

屋背の方に兵卒たちの天幕露營の氣配がきこえる。正面に窓がある。戸も障子もなし。中央の古箱の上に裸蠟燭が燃えてゐる。中隊長と牛島中尉と、村松少尉とが、特務曹長の報告をきいてゐる。從卒二名土間に踞つて、靴や軍刀を磨いてゐる。

特務曹長　（手帳をひろげて）　そこで、第一、第二、第三の小隊を通算しますと、戰死十七名、負傷・三十一名であります。戰死者重傷者の官姓名は只今・申上げたとほりであります。

中隊長　特務曹長。負傷者の中で重傷者は何名とか云つたな。

特務曹長　重傷者は十二名であります。

中隊長　さうすると、現在の中隊の缺員が戰死者重傷者と合計で二十九名になる譯だな。

特務曹長　（老眼鏡をかけ直して）　えゝと十七名と……十二名……さうであります。

中隊長　ぢや、君、御苦勞だが、すぐ大隊本部へ報告してくれ玉へ。
特務曹長　はい。承知しました。（退場）
牛嶋中尉　（左腕に繃帶してゐる。窓から外へ向つて叫ぶ）おい、第一少隊の山田軍曹。
軍曹の聲　はい。
牛島中尉　第一少隊からは、まだ、武器の破損を屆けて來ないぞ。
軍曹の聲　はい。只今、取調中であります。
牛島中尉　早くせい――それから看護卒は居るか。
看護卒の聲　はい。居ります。
牛島中尉　鳥渡來て俺の繃帶を取替へてくれ。
看護卒の聲　はい。只今參ります。
（牛島中尉はもとのところへ戻つてくる。）
中隊長　從卒……おい、俺の從卒は何處へ行つた。
靴をみがいてゐる從卒　中隊長殿の從卒は、炊事場へ夕飯を取りに參りました。
中隊長　何を愚圖々々してゐるんだ。腹が空つて耐らんぢやないか。おい、靴なんか後にして、お前も炊事場へ催促に行つて來い。
靴をみがいてゐる從卒　はつ。（退場）
村松少尉　（まだ少年期の面影が殘つてゐる）　中隊長殿。
中隊長　おい。
村松少尉　貰はありませんか。
中隊長　うん。さつき大隊長殿から貰つたのがある筈だ。（ポケットをさぐる）や、殘念――みんな折れてゐる。
村松少尉　構ひません。一本下さい。
中隊長　おい。（貰を差出す）
村松少尉　（受取つて輕く頭を下げる。喫煙）あゝ、うまい……生返つたやうだ。
牛島中尉　村松。君の今日の援隊の誘導法はなつてゐなかつたぞ。
村松少尉　中隊の右翼に增加した時の事ですか。
牛島中尉　うん。あれぢや、丸で、側面を敵に暴露してゐる譯だ。……
村松少尉　どうも地形が惡くつて、思ふやうに行かなかつたんです。
中隊長　（間を置いて）　然し、今日は苦戰だつたな。
牛島中尉　中隊長殿。丁度我々が散開すると同時に、右の高地に機關銃が出てきたのには全く驚きましたな。
中隊長　あれで十二中隊はやられたんだよ。
牛島中尉　どうもあいつにや非道い眼に會つた。
（看護卒が現はれる。敬禮。）
中隊長　看護卒。メントルブランは持つてゐないか。

看護卒　あんまり減るんで、近頃は醫務室で渡してくれません。
中隊長　（舌打）嘘云へ。貴樣たちが飲んでしまふんだらう。
看護卒　（牛島中尉の繃帶を替へながら、薄笑ひして）いいえ、そんな事はありません。
中隊長　…つくづく酒が飲みたいな。こんな激動をした後では。
牛島中尉　はは…始まりましたな、中隊長殿。
（從卒たちが夕飯を運んでくる。）
村松少尉　中隊長殿。夕飯が來ました。
中隊長　やつと有附いたな。おい。從卒、今日の菜は何だ。
從卒の一　はあ、今日は豚と馬鈴薯の煮付と大福が二個宛であります。
中隊長　御馳走だな。早く持つて來い。
從卒の二　中隊長殿。
中隊長　おい。
從卒の二　それから酒が各人一合宛渡りました。
中隊長　何、酒——本統か。
從卒の一　はあ、本統であります。
中隊長　おい、夢ぢやないか。（從卒たち笑つてゐる）何を愚圖付いてゐるのだ。早く此處へ持つて來い。
（從卒三人で飯盒へ盛つた飯と菜と一合瓶を一本宛將校たちの前に運ぶ。）
村松少尉　おい、從卒。箸はどうしたんだ。
從卒の三　はつ。（箸を持つてくる）
中隊長　（まづ、水筒の蓋を取つて、冷酒をそれにつぐ）牛島君。甘いぞ。
看護卒　（繃帶を巻き終つて）中尉殿、もう大分肉が浮いてきました。
牛島中尉　さうか。御苦勞だつた。や、中隊長殿、もう初めましたな。
中隊長　（水筒の蓋を獻す）さあ、一つ行かう。
牛島中尉　これはどうも…（飲む）うむ、うまいですな。（返盃）
中隊長　久しく飲らんから醉うぞ。村松少尉。さあ、君も飲め。（獻す）
（村松少尉飲んで返盃。）
（第一少隊の山田軍曹が現はれる。敬禮。）
軍曹　少隊長殿。
牛島中尉　何か。
軍曹　（手帳を出してみながら）第一少隊の武器の破損は、劍鞘の破損三、彈藥盒の破損五、銃の修理が一でありま

す。

牛島中尉　よし、早速特務曹長に屆けて、修理に出せ。

軍曹　はつ。(敬禮。退場)

村松少尉　……うむ、馬鹿に醉つたぞ。

牛島中尉　どうだ。村松、御得意の「七卿落」でもやらんか。

村松少尉　一つやるかな。(兩眼を閉ぢて、美くしい聲で薩摩琵琶の七卿落を唄ふ)

世は刈菰と亂れつゝ
茜さす日もいとくらく
瀨見の小川に風たちて
隔ての雲となりにけり
あら、いたましや玉木はる
內裏にあけくれ宿直せし
實美朝臣に季知卿……

(特務曹長が突然出て來る。)

特務曹長　中隊長殿。

(村松少尉唄ひやむ。)

中隊長　何だ。

特務曹長　いや、實に馬鹿げた事ですが……鳥渡、お耳に入れとかにやならんと思ひまして……

中隊長　何か起つたか。

特務曹長　折角の御酒宴中、御邪魔して申譯ありません。實はこの間からチョイチョイお聞きになつてゐる林少尉の一件ですが……

牛島中尉　幽靈の話か。

特務曹長　はあ。

牛島中尉　また誰か騷ぎだしたんか。

特務曹長　第二少隊の前澤が、今、見たと云ふのです。

村松少尉　あの一等射手の前澤か。

特務曹長　さうです。彼奴は林少尉殿の銃殺の射手に出たんです。それで此間から、神經を起してゐたのです。

中隊長　まだ、宵の口ぢやないか。臆病な奴だな。で、何處でみたと云ふんだ。

特務曹長　何でも大隊本部の裏の槐の茂つた處だとか云つてゐました。

中隊長　特務曹長。此處へその兵隊を引つぱつてき玉へ。

特務曹長　はい。では、つれて參ります。(退場)

中隊長　この間からあれ程云つてきかせてあるのに、まだ、そんな下らん噂を立てる奴があるんだな。

村松少尉　中隊長殿には報告しませんでしたが、大分大勢見た奴があるらしいんです。

中隊長　氣の迷さ。

村松少尉　ところがこの中隊ばかりでなく、他の中隊の兵にまでもう廣がつてゐます。
中隊長　…何とかしなきやならんね。結局中隊の士氣に關係してくるから…
村松少尉　銃殺の時の射手を出したためか、第二少隊が一番盛んなやうであります。
牛島中尉　（冷笑）林の奴、幽靈になり下つてもまだ非戰論を説いてゐるだらう。
中隊長　師團長にでも聽えたら、中隊の成績は滅茶滅茶だ。（特務曹長が前澤と云ふ兵卒をつれてくる。兵卒敬禮。）
特務曹長　つれて參りました。
中隊長　前澤。
前澤　はつ。
中隊長　お前は何を寢ぼけたんだ。（前澤默つてゐる）何をしに大隊本部の裏へなんか行つたんだ。
前澤…
村松少尉　（強く）おい。前澤、上官に物をきかれて默つてゐる奴があるか。
前澤　（狼狽）はい…曹長殿の洗濯物を干したのを取りに行きました。
中隊長　お前が臆病だから、そんな變な物なんか見えるんだ。
村松少尉　何か出やしないかと思つてびくびくしながら行つたんだらう。
前澤　（不服らしい表情）…
牛島中尉　こら、前澤。林少尉が幽靈になつたら、まつ先に俺の處へ出て來なきやならん筈だぞ。はは…さうぢやないか。
前澤　（反抗的に）少尉殿は確かにあすこに居りました。（つゞけて何か云はうとする）
中隊長　（烈しく）馬鹿。
前澤　（口をつぐむ）…
中隊長　幽靈なんて云ふ者は、今日の科學の進步した世界には、居ないのだ――あれは皆昔の人の噓だ。分つたか。
特務曹長　つまりお前の心の中でこしらへてゐるんだ。
前澤　でも、あすこでは十一中隊の上等兵も林少尉殿を見たさうです…
村松少尉　誰か本統の將校が歩いてゐたんぢやないか。
前澤　いいえ。確かに林少尉殿です。初め地面に突伏してゐましたが、自分が行くと、眞靑な顏ですうつと立上りました。
中隊長　（將校たちに）村松少尉の云ふとほり、醉つた將校か何かが、倒れてでもゐたんだらう。

前澤　……でも眉毛の上に傷があつて、顏が半面血だらけでありました……

牛島中尉　(突然笑ふ)　はは……此奴銃殺の時の夢でも見てゐるんだらう。
(前澤は露骨な反感の態度を示す。)

中隊長　やつぱり中隊長が云つたとほり、お前が臆病だから、そんなありもしない幽靈なんか見るんだ。女や子供ぢやあるまいし、お前は立派な日本の軍人ぢやないか――これからそんな事を云ひふらすと嚴重に處罰するから、さう思つてゐるがいい――分つたか。

前澤　(不承不承に)　はつ。

中隊長　よし、行け。(前澤敬禮して去る。特務曹長に)君から、よく中隊の兵にもその趣を達して置いてくれ玉へ。

特務曹長　はい。(敬禮、退場)

村松少尉　(凝乎つと遠方の物音をきく様子)　中隊長殿。馬鹿に犬が吠えてゐますよ。遠くの方で……

中隊長　此邊は野良犬が何百疋となく居るからねえ……どりや、飯を食はう。つまらん幽靈騷ぎで、すつかり遲くなつてしまつた。

村松少尉　僕も腹が空つちやつた、從卒、湯を持つて來い。

從卒の三　はつ。(湯を入れた水筒を持つてくる。中隊長と少尉の飯盒の蓋についで行く)
(牛島中尉はもう醉つてゐる。)

中隊長　牛島中尉。飯はどうだ。

牛島中尉　何、飯――飯なんか喰ひません。酒だ、酒だ、こら、從卒。酒を持つて來んか。

從卒の三　はつ。(退場)

村松少尉　中隊長殿。

中隊長　何だ。

村松少尉　どうも僕は不思議で耐らないんです。

中隊長　何が不思議だ。

村松少尉　林少尉の事を兵隊が急にこの頃になつてあんなに騷ぎ出したのはどう云ふ譯なんでせう。
(從卒の三が一合瓶を三四本持つて來る。)

中隊長　さあ……僕にも分らんね。(食事終る)

村松少尉　僕は兵隊の心理を知る上から何か得る處があるだらうと思つて、實は研究してゐるんですが……

中隊長　君、兵隊の心理の研究なんて陸軍大學へでも行く連中のする事だぜ。

村松少尉　兎に角、今度の戰爭では、悲慘な死方をした者も隨分澤山あるんです。それに、林少尉の事だけ騷ぐと云ふのは、何か理由がなけりやならんと思ふんです。

中隊長　いや、臆病だからよ。

牛島中尉（突然叫ぶ）村松――貴樣は林少尉の肩を持つて俺にあてこするんか。

（蒼く醉つて眼が据つてゐる。）

村松少尉　僕が林少尉の……馬鹿な、そんな事があるもんですか。

牛島中尉（荒く）いいや、確かにさうだ。大體、貴樣はハイカラで氣に喰はん――軍人の面汚しだ。

村松少尉（氣色ばむ）何を云ふんです。中尉殿――何時、僕が軍人の面汚しをしました。

中隊長　よせ。村松……牛島は醉つてゐるんだ。君は默つて我慢しろ。

村松少尉　中隊長殿――でも、軍人の面汚しだの、林少尉の肩を持つのと云はれては我慢が出來ません。

牛島中尉　我慢が出來ん――面白い。貴樣は上官に反抗するつもりだな。よし、向つて來い。決鬪しよう（立上つて軍刀を握る）

中隊長（强く）おい、牛島。いい加減にせんか。

牛島中尉（歯を喰縛つて泣く）耐らん……俺はもう耐らん……

中隊長　どうしたんだ。牛島。

（沈默。）

牛島中尉　……中隊長殿。烏渡八中隊へ行つてきます。

（軍刀を帯ぶ）

中隊長　大丈夫か。

牛島中尉　八中隊の東中尉はバンカラだ……俺はあいつと軍人の士氣を論じて泣くんだ。（出てゆく）

中隊長　村松少尉。怒るな――牛島はあれで中々精神家なんだ。たゞ酒の上が惡くて困るが……

村松少尉　えゝ。酒の上ですから我慢しました。

（中隊長集まれの喇叭がきこえる。）

中隊長　や、中隊長集まれだ――今時分何だらう。（軍刀を帯びながら出かける）

（村松少尉ごろりと横になる。）

村松少尉　おい、從卒。

從卒の二　はつ。

村松少尉　俺の靴下は洗つて置いてくれたらうな。

從卒の二　はあ。洗ひましたが。もう、大分破れて居ります。

村松少尉　當分此處に滯在するだらうから、明日酒保を開いたら、買つておけよ。

從卒の二　はい。（食器を片付けて退場）

（沈默。村松少尉は何か口ずさんでゐる。屋背の方で急にガヤガヤ云ふ聲。）

村松少尉　（起き上る）何だらう。（少時。特務曹長が若い支那の女を引つぱつてくる）何だ、その女は……
特務曹長　今、第三少隊の露營地の裏を廻つてみますと、この女がうろうろしてゐるのです。どうも素振が可笑しいやうですから引ばつてきました。
村松少尉　間諜か。
特務曹長　どうも啞者のやうです。
村松少尉　啞者――わざと啞者を裝つてゐるんぢやないか。
特務曹長　何とも知れません（女をこづく）おい。何だつてあんな處へ入りこんだんだ。
支那の女　（怪しい聲で）あゝ……（何かしきりに手眞似をする）
特務曹長　（少尉を見て笑ふ）何を云つてゐるのかちつとも分りません。
（支那の女は泣きながら、頻りに手眞似をする。少尉と特務曹長とは面白半分に見てゐる。何時の間にか兵卒たちが大ぜい出てきて覗いてゐる。軍事通信員の代表二名出てくる。）
記者二　此處は十中隊だな。
記者一　（村松少尉を見て會釋。）やあ、御休息中御邪魔して申譯ありません。（二人名刺を出す）私共はかう云ふ者です。あなた方の戰鬪後の露營の狀態を內地へ通信しようと思つてやつて來ました。
村松少尉　あゝ、さうですか。自分は村松少尉であります。
記者一　はあ、中隊長は居られませんか。
村松少尉　中隊長はいま聯隊本部へ行かれました。
記者一　それや殘念です。實は中隊長とあなた方とお揃の處をフラツシユを燃いて撮影したいと思つたのですが。
村松少尉　もう、やがて歸つて來られるでせう。
記者二　（支那の女を見て、特務曹長に）今日は此處にきてゐますね。この女は。
特務曹長　今捕へたところです。
村松少尉　あなた方はこの女を御存知ですか。
記者二　えゝ、知つてゐますとも。
村松少尉　何者です……一體、この女は。
記者二　何でも驁馬集の田舍の百姓の娘ださうですがね。生來の啞者でしてね、兩親と二人で暮らしてゐたんださうです。ところがこの間の戰爭で父親が流彈に當つて死んでしまつたんださうです。
村松少尉　はあ……。
記者一　今日の晝間旅團司令部で間諜の嫌疑で調べられたさうですよ。
特務曹長　いや、この中隊でも今調べかけたところです。

村松少尉　いろいろ手眞似をしますが、何が何だかさつぱり分らないんです。
記者二　考へてみりや、可哀さうな女ですよ。
記者一　ねえ、君、もし、この女の舌が解けたら何て云ふだらう。
記者二　あゝやつて手眞似で一生懸命に訴へてゐる事をしやべるだらうよ。
記者一　腹の子の事をか。
村松少尉　腹の子――ぢや姙娠してゐるんですか。
記者一　（卑しく笑ふ。）えゝ、何でも、戰爭前に入りこんでゐた日本人がいたづらをしたんだと云ふ噂です。もう、臨月でせう。
村松少尉　非道い奴だな。
記者一　親は殺される、日本人の私生兒ははらむ、お負に生れ乍らの啞者だ。もうこの上虐められる事もあるまい。
記者二　（吐出すやうに）まるで現在の滿洲だ。
（中隊長が歸つてくる。）
中隊長　（大きな聲で）君、明日の朝、五時の出發だぞ。
村松少尉　本統ですか。
中隊長　うん。我々の聯隊が前衞ださうだ。
（この時遠く屋背の幕營から、十二三人の兵卒たちの軍歌の合唱がきこえてくる。）

軍歌

此處は御國を何百里
離れて遠き滿洲の
赤い夕日に照らされて
友は野末の石の下

思へば悲し昨日まで
眞先かけて突進し
敵を散々こらしたる
勇士は此處に眠れるか……

三

深更――摩天嶺の鞍部。後に鞍部の綾線が空を劃つてゐるのを望む。日本軍の小哨。急造の銃架に一列に銃を立てがけてある。小哨の位置は凹地になつてゐる。銃前哨二名、默々として立つ。一條の道路、小哨の傍をすぎて、鞍部の綾線の方へ走しる。
小哨長、牛島中尉、懷中電燈で地圖を照らして見てゐる。兵卒たちは影のやうに蹲つてゐる。
牛島中尉　（低聲に）おい、山田軍曹。

軍曹　はつ。
牛島中尉　巡察の兵隊は區分してあるな。
軍曹　はい――自分以下五名區分して置きました。
牛島中尉　（やはり地圖を見ながら）よろしい。――そこでと……斥候が一つも報告をよこさん。どうしたんだらうな。
軍曹　あんまり暗いので、道に迷つてでもゐるんぢやないでせうか。
牛島中尉　うむ――加藤上等兵の組を入れて都合三組出てゐる譯だな。
軍曹　さうであります。
（突然高い音をさせ嚔をする者がある。）
牛島中尉　誰だ。今嚔をしたのは。
兵卒の聲　はあ――自分であります。
牛島中尉　自分ぢや分らん。名を云へ。
兵卒の聲　はあ、藤村であります。
牛島中尉　敵前でそんな大きな音をさせる奴があるか。もつと小さな嚔をしろ。
兵卒の聲　はあ。
（バタバタと一人の兵卒が走つて來る。銃前哨、銃を構へろ。）
銃前哨　誰か。
兵卒　斥候。
（銃前哨通過を許す。）
兵卒　（牛島中尉の前に跪く）荒川斥候報告。
牛島中尉　よし。
兵卒　荒川斥候はこの道路上約千米の處に敵の下士哨を發見しました。なほ、荒川斥候は道路の右側を迂廻して敵の前哨線を捜索中であります。終り。
牛島中尉　（地圖を見つゝ）道路の前方約千米……この邊かな。（兵卒は立つて、兵卒たちの列に入る。）山田軍曹。
軍曹　はい。
牛島中尉　（立上る。）俺は歩哨線の巡察に行つてくる。お前俺の替りに殘つてゐてくれ。
軍曹　はい。
牛島中尉　巡察の組の者五名出ろ。（はつと答へて兵卒五名暗中に立上る。銃を執る）よし、俺について來い。
（牛島中尉先に立つて退場。）
（沈默。段々話聲が出てくる。）
兵卒一　おい。誰か莨を持つてゐねえか。
兵卒二　半分ならある。
兵卒一　俺にくれ。
兵卒二　そら。

兵卒一　何だ。半分もありやしねえぢやねえか。（パッとマッチをする）

軍曹　おい。もつと要領よく火を點けろよ。俺に知れねえやうに。

（暗中の兵卒クスクス笑ふ。）

兵卒三　腹が空いたなあ。

兵卒四　今夜は小夜食は出ないのかな。

兵卒五　今まで出なきや、もう出つこねえよ。

（沈默。）

兵卒六　もう何時だ。

兵卒一　待て、今見てやるから。（莨の火で腕時計を見る）午前三時だ。

兵卒六　三時か——何だか恐しく寒くなつてきやがつた。

兵卒一　本統だなあ——滿洲てえ處は、晝間は馬鹿に暑くて、夜になると冬みたいだなあ。

兵卒七　俺、さつき嚔をして憤られちやつた。

兵卒三　お前の嚔は、また馬鹿に大きかつたぜ。

兵卒七　あんまり寒いんで、耐へきれなくなつちやつたのさ。あんな大きな奴をするつもりぢやなかつたが、つひ出ちまひやがつた。

兵卒八　あゝ、かうやつてゐると、つくづく内地へ歸りてえなあ。

兵卒九　内地ぢや、もう單衣物をきてゐるんだなあ。

兵卒八　（間を置いて）畜生奴。若え女の單衣物をきてゐる姿は、思出しただけでも耐られねえ。

軍曹　馬鹿——誰だ、そんなふざけた事を云ふのは……

（兵卒たちが暗中でクスクス笑ふ。）

（伍長が一名の兵卒をつれて走つてくる。）

銃前哨　誰か——誰か。

哨長　荒川斥候。（銃前哨通過をゆるす）

荒川斥候。（軍曹に）小哨長殿は。

軍曹　今巡察に出かけた。二十分もしたら歸つてくるだらう。どうだ、敵狀は。

荒川斥候　何だか歩哨線の内が馬鹿に騷々しいやうであります。さつき報告を出してから、右の方の歩哨線の内へ入つてみましたが、傳令らしい奴があつちへ行つたり、こつちへ來たりして、どうも様子が變です。

軍曹　空模樣もこんなだ。また夜襲にでもでかけるつもりぢやないかな。

荒川斥候　さあ、何とも知れません。やれやれ、くたびれたぞ。馬鹿に温度が下つたが……軍曹殿、この工合ぢや明日は雨ですぜ。

軍曹　さうよ。星一つ見えねえからなあ。

（沈默、一人の兵卒は兵卒たちの列に入る。）

（荒川伍長パッとマッチをすつて頁をつける。遠つた處に蹲つてゐる兵卒たちの間で話がはじまる。）

兵卒十　おい、歩哨掛りの上等兵殿。今度は俺たちの上番だね。

上等兵　さうだ。第三複哨の交代だ。

兵卒十　（兵卒十一に）お前と俺だな。

兵卒十一　どう云ふんか、この頃歩哨に立つときにや、きつとお前と一緒だなあ。

兵卒十　おい。あすこの複哨は、何だか、不氣味だぜ。

卒兵十一　俺もさう思つたよ。昨夜立つたとき……前に太い立木があるだらう。あれが何だか人間のやうに見えて厭な氣持がしたぜ。

兵卒十二　お前たちの次は、俺の上番になるんだな。

兵卒十　もう、その時分にや、夜が明けちまはあ。

荒川伍長　おい、兵隊、靜かにしろ。（凝乎と聞きすます。）山田軍曹殿。

軍曹　何だ。何うかしたんか。

荒川伍長　何だか變な聲がきこえやしませんか。

（沈默。）

軍曹　いゝや、俺にや何もきこえない。

荒川伍長　何だらう……俺の空耳かな。

軍曹　どんな聲だ。

荒川伍長　人の呻り聲のやうだぞ……

軍曹。……犬か何かだらう。

荒川伍長　さうかしら……

（沈默。）

（怪鳥鳴いて羽音烈しく飛んでゆく。）

軍曹　何だ、あれは。

荒川伍長　鳥ですよ――夢でも見て寢ぼけやがつたんだ。

軍曹　寢鳥か――吃驚させやがる。（長い間）おい、荒川伍長。

伍長　何です。

軍曹　早いもんだな。俺たちが出征してから、もうやがて一年になるぜ。

伍長　でも、まあ、お互によく生きてゐたもんですね。

軍曹　全くだ――一緒に出征した中隊の下士で殘つてゐるのは、お前と俺だけだなあ……

伍長　さうですよ。つくづく考へると、かうして生きてゐるのが不思議ですね。

軍曹　全くだ。

（銃前哨が問査する。）

銃前哨　誰か。

斥候の聲　加藤斥候。

（銃前哨通過をゆるす。兵卒三名。）

荒川伍長　加藤上等兵か。
加藤上等兵　さうであります。小哨長殿は。
荒川伍長　巡察だ――もう歸つてくる。
軍曹　どうだ、敵狀は。
加藤上等兵。（二名の兵卒に）お前たちは休んでろ。
（兵卒は無言のまゝ兵卒たちの列に入る。）
荒川伍長　お前はどつちに出た。
加藤上等兵。（汗をふく）自分は本道上から左に出ました。
軍曹　敵の歩哨線に打突かつたか。
加藤上等兵　えゝ。本道の左の高粱畑の內をくゞつて行くと、不意に人聲がするんで、吃驚しましたが、それが敵の前哨中隊らしいんです。
荒川伍長　ぢや、歩哨線の內に入つたんだな。
加藤上等兵　えゝ、ちつとも知らないで入つてゐたんです。
軍曹（地圖をひろげて、懷中電燈で照らす）どの邊だね――前哨中隊は。
加藤上等兵　夜だからどうもよく分りませんが、（地圖を覗きこむ）何でも、この邊から左に切れたんです……さうだ。この川がありました。さうすると、この邊ですな。
軍曹　ふむ。（記しをつける）何か變つた事はなかつたか。
加藤上等兵　變つた事と云へば、前哨線が馬鹿に騷々しいやうであります。
軍曹　ふむ。敵の斥候には出會さなかつたか。
加藤上等兵　三組ばかり會ひました。歸りに會つた一組の奴は、大きな聲で、何か話しながら行きましたよ。
軍曹　間拔な斥候だな。
（ポンポンと二三發銃聲がきこえる。）
加藤上等兵　こつちの歩哨線かな。
荒川伍長　いや、遠い――きつと斥候と斥候の衝突だ。
軍曹　加藤上等兵。御苦勞だつた――もういゝから休んでゐろよ。
加藤上等兵　はつ。（暗中の兵卒の列に入る）
他の上等兵の聲　加藤上等兵。
加藤上等兵　何だ。
他の上等兵の聲　敵は夜襲でもしさうな樣子か。
加藤上等兵　何とも知れねえな。馬鹿に騷いでゐるから……おい。今、此處から將校が一人出て行つたか。
他の上等兵の聲　いゝや。
加藤上等兵　可笑しいぞ。
他の上等兵の聲　牛島中尉殿か。
加藤上等兵　いや、違ふ。たつた一人で、俺とすれ違つたんだが……（少し聲たかく）なあ、おい。秋本。

秋本　……牛島中尉殿ぢやねえよ、ありや。
他の上等兵の聲　小哨長殿は兵隊を五名つれて行つたぜ。
加藤上等兵　誰だらう。歩哨線の方へ向つてすた〳〵行つたぜ。
軍曹　何處で會つたんだ。加藤上等兵。
加藤上等兵　銃前哨の十米ばかり先です。
（沈默。）
軍曹　誰だ、そんな事を云ふのは。（返事なし）おい、誰
誰とも知れぬ兵卒の聲　林少尉殿ぢやねえか。
だ。返事をしろ。（返事なし）丁度、牛島中尉殿がゐないからいいが、居るときにでも云つてみろ。打殺されるぞ。（沈默）おい、加藤上等兵。
加藤上等兵　はい。
軍曹　お前も臆病風に誘はれたんぢやないか。
加藤上等兵　まさか。ははゝゝゝ（笑聲が空虚で恐怖を含んでゐる）
荒川伍長　ですが、軍曹殿、一昨日の晩も、第三中隊の兵隊が斥候の歸りに林少尉殿に會つたさうですよ。
軍曹　その話は俺も知つてゐる。噂だけだとしても兎に角いやな事になつたもんだな。
（兵卒たちがコソコソ話しだす。）
兵卒十三　どこでよ。

兵卒十四　あの前哨中隊の横手だとよ。
兵卒十三　本統か。
兵卒十四　顔がな、半分血で眞赤だつたとよ。
（沈默。）
誰とも知れぬ兵卒の聲　（大きく空虚な聲で）あゝ、厭だ。厭だ――金鵄勳章も何ももう欲しかあねえ。早く内地に歸りてえや。
軍曹　しツ。誰だ。そんな事を云ふのは。（兵卒たちクスクス笑ふ）
銃前哨　誰か――誰か。
小哨長　小哨長だ。（牛島中尉が兵卒五名をつれて歸つてくる）山田軍曹。別に異常はなかつたか。
軍曹　はい。異常ありません。荒川斥候と加藤斥候とが歸つて來ました。
小哨長　さうか。荒川斥候、敵狀は。
荒川伍長　はあ、自分は本道から右を搜索しましたが、敵の前哨線が大へん騷がしくありました。
小哨長　報告はそれだけか。
荒川伍長　はつ。
加藤上等兵　少哨長殿。加藤斥候報告。
小哨長　うん。
加藤上等兵　自分は本道から左に切れて高粱畑の内をくゞ

つて行きますと、敵の前哨中隊らしい物に打突かりました。

小哨長　(地圖を出す)　どの邊の地點だ。

軍曹　(指示)　この邊らしいやうであります。

小哨長　で、狀況は。

加藤上等兵　前哨中隊は大へん騷いで居りました。

小哨長　よし、山田軍曹。どうも敵は夜襲しさうな形跡があるな。歩哨線のところに頻々と斥候が出沒するしな……

軍曹　自分にもさう思はれます。

小哨長　おい。皆、そのまゝ、きけ。もし夜襲があつたらさつき云つたとほり、勉めて沈着にして、前哨中隊の前の抵抗線まで引上げるのだ。いいか、分つたな。どりや、敵狀を中隊長殿に報告して置かう。(圖嚢を出して懷中電氣の光をたよりに略圖をかく)

銃前哨　誰か。

中隊長　中隊長。(中隊長と傳令との通過をゆるす)

軍曹　小哨長殿——中隊長殿がお見えになりました。

中隊長　どうだ。牛島中尉。何か異常はないか。

小哨長　中隊長殿。今報告を出さうとしてゐたところであります。敵の前哨線の位置は、まあ、こんな物らしいのです。(略圖を示す)

中隊長　ふむ。ふむ。

小哨長　それから、此方の歩哨線に頻々と斥候が出沒しますし、敵の前哨線が非常に騷がしいさうであります。

中隊長　夜襲があるかも知れんよ、君。

小哨長　はあ。

中隊長　兎に角、嚴重に警戒してくれ玉へ。

小哨長　承知しました。

中隊長　歩哨線の巡察は。

小哨長　只今自分が巡察してきました。

中隊長　あゝ、それは御苦勞だつた——牛島中尉、馬鹿に寒くなつたな——今夜は雨になるぜ。

小哨長　降られちや閉口ですな。

中隊長　うん。(時計をみる)　もうやがて三時半だ。この頃は夜が短いから、もう、すぐ日が出る——此處一時間ばかりが肝心だ。よろしく頼むよ。

小哨長　はあ、承知しました。

中隊長　ぢや、失敬。(退場)

(沈默。)

荒川伍長　また、聞える——何だらう。あの呻り聲は。

小哨長　何だ、伍長。

荒川伍長　いいえ、さつきから、何か人間の呻りごゑみたやうな物が頻りにきこえるのであります。

小哨長　呻りごゑ……

荒川伍長　はあ。
小哨長（凝乎と聞入る）俺にも何もきこえやせん。
軍曹　自分にもきこえないんです。
荒川伍長　可笑しいな――ほら、また、きこえます。
（沈默。）
小哨長（兵卒たちに）どうだ。お前たちにも何かきこえるか。
兵卒數名（一度に）いいえ、何もきこえません。
小哨長　おい荒川伍長。しつかりしてくれ。何をきいてゐるんだ。
荒川伍長　でも……どうも可笑しいな。
（沈默。）
步哨掛　おい、三番の複哨の交代は、もう十分しきやないぞ。そろ〳〵支度をしておけよ。（返事なし）おい。何だ。寢てゐるのか。
兵卒九　えゝ。よく眠つてゐます。二人とも。
步哨掛　起してやれ。呑氣な奴等だ。
兵卒九　おい。上番だ。起きろ、起きろ。
兵卒十　うゝん。何だ。
兵卒十一　あゝすつかり寢込んぢやつた。
步哨掛　もう十分たつと三番の複哨の交代だ。
兵卒十　どりや、小便でもして來よう。（立つてゆく）
（突然急射擊の音がけたゝましくきこえる。一同緊張。）
小哨長　何だ。（急射擊はつゞいてきこえる）
荒川伍長　三番の複哨だ。
軍曹　夜襲か。
小哨長（大きな聲で）おい。前哨抵抗線まで引上げるんだ。忘れるな。
（兵卒立上る。銃を取る。暗默の動搖。急射擊の音やむ。）
小哨長　何うしたんだ。
（沈默。）
軍曹　敵襲なら。もう步哨が引上げて來さうな物です。
小哨長（間を置いて）山田軍曹。お前、兵を二名ばかりつれて巡察に行つて來い。
軍曹　はつ。おい、佐倉と木下、來い。（三名出てゆく）
小哨長（凝乎ときゝ入る）馬鹿に靜かだ。（銃前哨のところまで出る）
兵卒五　敵襲ぢやねえな。
兵卒六　敵の斥候に打喰らはしたのかな。
兵卒五　俺、敵襲かと思つて、吃驚した。
荒川伍長　おい。兵隊。お前たちにや、本統にあの呻りごゑはきこえないか。

兵卒一　いいえ、きこえます。

荒川伍長　ほら、段々ハツキリしてくる――女の聲のやうだぜ。

兵卒八　俺にやきこえねえ。

兵卒七　きこえるぢやねえか――ほら後の方だぜ。

荒川伍長　お前たちは、小哨長殿にきかれたとき、何故きこえないつて云つたんだ。（兵卒たちクスクス笑ふ）何故、嘘をついたんだ。

兵卒一　また、ビンタを喰ひますからねえ、伍長殿。

荒川伍長　どうしてビンタを喰ふんだ。

兵卒一　林少尉殿の幽靈の話をしたばつかりで、俺中尉殿のビンタを三つ喰つたからな。（兵卒クスクス笑ふ）

誰とも知れぬ兵卒の聲　や、ありや赤坊の啼聲だぜ。

荒川伍長　何、赤坊……

小哨長　（銃前哨の前に立つたまゝ暗中に向つて）山田軍曹か。

（少時、山田軍曹と二名の兵卒が走つてくる。）

軍曹　小哨長殿。

小哨長　おい。

軍曹　敵襲ではありません。

小哨長　さうか。（一緒に小哨に來る）で、何だつた。

軍曹　馬鹿げた話です――また、林少尉殿の幽靈をみたと云ふんです。

小哨長　それで急射撃をしたのか。

軍曹　さうであります。

小哨長　うろたへ者奴が……よし、中隊に報告して嚴罰に處してやるぞ。一體どうしたと云ふんだ。

軍曹　あの三番の複哨は、皆厭がるんです。

小哨長　鳥渡淋しいだけぢやないか。

軍曹　今立つてゐますのは、松田に崎山と云ふ兵隊ですが、崎山の前に、ひよつこり將校が一人やつて來たんださうです。そこですぐ問査しましたら、その將校がずうつと傍へよつてきたんださうです。それで耐らなくなつて、急射撃をしながらみると、半面血だらけになつた林少尉殿だつたと云ふんです。

加藤上等兵　（突然）軍曹殿。將校が一人でやつてきたと云ふんですか。

軍曹　うん。（深かい沈默）

小哨長　皆、氣の迷だ。（ふと何かきゝつけろ）何だ、あの聲は――赤坊の啼聲ぢやないか。

荒川伍長　あれです。さつきからきこえてゐたのは……

軍曹　赤坊の啼聲のやうです。

小哨長　おい。荒川伍長。鳥渡見て來い。

荒川伍長　はい。（退場）

小哨長　それで松田も、やはり射撃をしたのか。
軍曹　はあ。二人とも見たんださうです。
誰とも知れぬ兵卒の聲　たうとう雨が降つて來やがつた。
小哨長　馬鹿な奴等だ、他處の兵隊にきこえてみろ。いい物笑だぞ。いよ〱降りだしたな。今夜は濡れ佛だ。從卒。
從卒（暗中より）はい。
小哨長　俺の外套を取つてくれ。
從卒（はい。外套を持つてくる）
（小哨長は外套をきろ。荒川伍長が歸つてくる。）
荒川伍長　小哨長殿。
小哨長　うん。
荒川伍長　この間から此處らをうろついてゐた啞の女が、あすこの木の下で子供を生んだのであります。
小哨長　何、子供を……あの啞者がか。
荒川伍長　はい。
（兵卒たち動搖。）
小哨長　……それでどうした。
荒川伍長　自分が行きますと、恐がつて子供をしつかり抱いたまゝ、下の方へよろ〱下りて行きました。
（兵卒動搖。雨烈しくなる。）

（了）

澤野忠庵

――南蠻ころび伴天連
・キリシトワン・ヘレイラの事跡――

主だつた人々

キリシトワン・ヘレイラ　後に澤野忠庵
天使(アンジョ)
唐人陳穆　兇惡な囚徒
天草女まさ　その妻
皓臺寺僧鐵眼
光源寺松吟
曾我又左衞門尉　長崎奉行
今村傳四郎　同
遊女左近（洗禮名カテリナ）
その他、當時の役人、南蠻紅毛の人々
切支丹宗徒非人僧侶群集など大勢。

一　雪の聖瑪利亞(サンタマリア)

攝津國高槻在の山中。丘陵と森林とにかこまれた低地――寛永十年七月十二日の夕方――後に大きな月が丘陵の上に露はれる。

切支丹宗徒の男女五六人集まつてゐる。その内三人の者が聖壇をつくり、大きな材木で作つた稚拙な形の十字架を丘の下に樹てゝゐる。觸れ役と云つて、宗徒の間の通報機關になつてゐる男が、その指圖をしてゐる。

百姓一　お觸(ふ)れ役。
觸れ役　何だ。（かう云ひ乍ら十字架の手傳ひをしてゐる）
百姓一　今日は一體、どなたのお祭りだ。
百姓二　（老人）雪の聖瑪利亞(サンタマリア)だ。
百姓一　雪の聖瑪利亞(サンタマリア)・・・・
娘　（老母と二人でさまざまの夏艸の花を聖壇のほとりにまいてゐる）雪の聖瑪利亞とは。
百姓二　俺もよくは知らぬ。お觸れ役にきいて御覽。
觸れ役　（向きなほる）雪の聖瑪利亞とはな、羅馬の都に、昔、起つた天主(デウス)さまの靈驗だと云ふ事だが・・・・、まあ、お待ち。今に伴天連(バテレン)さまがお出になると、よく分る。今度の伴天連さまは、大へん物知りだと云ふ話だ。
娘　私まだ伴天連さまを、一度も拜んだ事がないわ。
百姓二　此頃は御法度(ごはっと)が嚴しいので、この邊では、伴天連さまは滅多に拜めぬが、俺の若い時分には、よくお出があつたもんだ。御彌撒(ミサ)をお上げなさる御聲が、まだ耳に

殘つてゐるやうだ。貴い羅甸の御言葉でな。

百姓三　（十字架を樹て終る）今度の伴天連さまは、日本のお言葉は、どうだな、お分りかな。

觸れ役　よくお分りなさる。何しろ、慶長からこの方、ざつと二十年も、こつちにばかり居らしつたのだから、そして、羅馬の法王さまから、日本の教區長と云ふ役名をお貰ひなすつた偉いお方だ。

百姓三　それは有難い。南蠻のお言葉では、たとへ通詞がついてゐても、御說教がどうも身に染みないやうだ。

百姓二の妻　（老女、胸に十字を切る）あゝ。昔は世の中がよかつた……瑪利亞さまを拜むにもこんなに人目をしのんで、逃げかくれしないでもよかつた――早く波羅葦僧へ行つて正身の瑪利亞さまを拜みたいものだ。

百姓四　（十字架の脚の土を拂ふ）さあ、これで、出來上つた。あゝ、暑かつた。

（百姓三、四、五の三人は、手の土を拂つて、十字を切る。）

娘　（老女に）お母さん、波羅葦僧では、この世界で鳴らす亞比瑪利亞の鐘の音が夢のやうに聞えるさうね。

百姓二の妻　（默禱）

百姓二　昔はこの邊でも、日がくれかゝると諸方のお寺から亞比瑪利亞の鐘がきこえてきたものだよ。

娘　私も波羅葦僧に行きたい。天使たちと一緒に遊びくらしたら、何んなに面白いだらう。

（森の内から中年の鄕士とその從者とが出てくる。）

中年の鄕士　（觸れ役に）まだ。伴天連さまは御出にならないか。

觸れ役　まだ、御出が御座いません。

（百姓たちは鄕士に丁寧に挨拶する。）

中年の鄕士　（獨語）遲いな。もう、此處へ來てゐらつしやる時分だと思つて、やつてきたのに……

觸れ役　もしか、路に迷うてお出なさるのでは御座いますまいな。

中年の鄕士　そんな事はあるまい。獵師のアントニオ久兵衞がお伴をしてゐるから……

從者　伴天連さまは、久兵衞の家へお立寄りなすつたので御座ります。

中年の鄕士　何、アントニオの家へ。

從者　はい。久兵衞の女房が、もう、長い間罹らうて居ります。それを診にお立寄りなすつたので御座います。

中年の鄕士　あの伴天連さまに診て頂くとはアントニオの女房は果報者だ。

百姓一　ジョワンの旦那さま。伴天連さまは、醫者も御上手で御座いますか。

中年の郷士　うむ。醫術と天文にかけては、これ迄ゐらしつたどの伴天連さまよりも學者だ。

（商人らしい夫婦者が忍びやかに森から出てくる。）

商人　皆さま。今晩は。お暑う御座います。

觸れ役　おゝ。平藏どの、クララどのもよくお出でなすつた。

商人　皆さま。この森の外の芋畑の畔に怪しい男が居りますよ。（一同緊張）

中年の郷士　何。怪しい奴が。

商人　はい。つひぞこの村で見かけぬ男で御座います。

觸れ役　どれ。私が見て參ります。（退場）

中年の郷士　どんな風體の男だ。

商人　さあ、生憎、夕暗でよく見えませんでしたが、あの森の入口の小徑を凝乎つと見つめて芋畑の畔に突立つて居りました。

商人の妻　鳥渡商人かと思はれるやうな様子の三十五六の男で御座います。

中年の郷士　お前たちは、その男の前を通つて森へ入つたか。

商人　いゝえ。ずつと下の路のない處から入つて參りました。

中年の郷士　それはよかつた。何しろこの頃は御法度が嚴しいので、皆よつぽど氣を付けて貰はなければならん。伴天連さまも此處へお出になるのに虚無僧の姿に變裝してゐらしつた。それでも變な奴につきまとはれて大へんお困りになつた相だ。

（此話の間に二人三人宛百姓や商人體の男女が五組ほど右と左の森から出てくる。そして、無言のまゝ、十字を切つて默禱する。）

百姓二　（立上つて人々の數をよむ）おゝ、もう大方お揃ひのやうだな。

中年の郷士　（透かしてみて）おゝ、そこにお出でになつたのは、地主の岡田フエデリゴどのではないか。

岡田　はい。フエデリゴで御座います、どうも遲くなりまして……

中年の郷士　早速ながらお尋ねしますが、森の入口で怪しい男を御見掛けにはなりませんでしたか。

八郎衞門　いや、別に誰も見かけません。何事か起りましたか。

中年の郷士　（後から來た人々に）お前たちはどうだ。來る路で何も怪しい事はなかつたか。

人々　｛いいえ、誰も居りません。
　　　何も見かけません。（口々に答へる）

中年の郷士　（地主に向つて）いや、實は今しがた森の入

口に怪しい男がゐたと申す者がありましたので――觸れ役が見に行きましたから、やがて、實否が分ります。

（月が丘の上に出る。）

（伴天連キリシトワン・ヘレイラが獵師のアントニオ久兵衞と二人で、觸れ役に案内されて森の内から出てくる。ヘレイラは五十歳あまり、編笠をかぶつて、虛無僧の姿に變裝してゐる。）

觸れ役　さあ、伴天連さまがお出になりました。丁度、森の入口でお眼にかゝつたので御案内いたしました。

中年の鄕士　おゝ、伴天連さま、あまりお出が遲いので、心配して居りました。

ヘレイラ　（編笠を脫ぐ。半白の頭髮ちゞれて肩にかゝつてゐる）大へん遲くれて申譯がありません。實はこの久兵衞どのの內儀のマリアどのが痛風で苦しんでゐられるときゝましたので、鳥渡見舞つてきました。もう、皆さんお集まりになりましたか。

中年の鄕士　はい。皆集まつて居ります。

（ヘレイラは十字架の前に進んで跪づき默禱する。衆人これにならふ。）

觸れ役　（祈禱をすまして中年の鄕士に近よる）ジヨワンの旦那さま。

中年の鄕士　怪しい者は居つたか。

觸れ役　いや、居りません。あの邊をよく探してみましたが何者も居りませんでした。

中年の鄕士　うむ。居なければ結構だ。然し用心は肝要だぞ。

觸れ役　さうで御座います。（ヘレイラ虛無僧の著物を脫ぐ。女これを受取つて疊む。下に耶蘇會士の法服を著てゐる）おゝ、御覽なさいまし。伴天連さまが……

中年の鄕士　あれが敎區(プロフインシャル)長の位を持つた伴天連さまの法衣だ。

百姓二　あゝ、俺は何十年振りに伴天連さまの法衣の御姿を見たらう。ヂユステ高山右近樣の御時代以來だ。

百姓二の妻　天正のむかしがまた歸つてきたやうだ。（泣く）

女　（手を胸に組む）ほんとに氣高いお姿だわ。

ヘレイラ　（中央に立つ）天にまします我々のおん父天主(デウス)のおん惠によつて、私は、今日此聖らかな森の內で皆樣と一緒に雪の聖瑪利亞(サンクマリア)をお祝ひする事になりました。私は遠い海のかなたの葡萄牙に生れました。そして天主(デウス)の思召のまゝに、この日本へ參つてから、もう二十三年になります。慶長この方、嚴しい切支丹御法度の掟をくゞつて、南は五島長崎から、北は蝦夷松前まで、幾度とな

く往復しました。それは、一人でも新らしい信者に洗禮（バプチスモ）をさづけ、天主（デウス）の御恵を知らしめるためでありました。（衆人感激のどよめき）　私と一緒にこの國に渡つてきた多くの伴天連や伊留滿（イルマン）は、殆んどみな、鬼のやうな役人の手に捕へられて、むごたらしい拷問にかゝり貴い殉教（マルチレス）を遂げました。彼等の血しほは、然し、決して無駄に流されたのではありません。天主（デウス）の榮光をこの國の土の上に赤く染め上げたのであります。（人々の迫つた氣息がきこえる）　たゞ、私だけは、まだ、かうして、一人皆さまの前に生き殘つて天主（デウス）の御恵を說いて居ります。山にかくれ、森に寢て、北に南にさまよひつゞけた二十年の間には、私もさまざまの危難に出合ひました。かうして生殘つたのがむしろ不思議な位であります。これもやはり人間の計り知る事の出來ない天主（デウス）の思召でありませう。（十字を切る）

（觸れ役進み出る。後から三人の男女が恐る恐るついてくる。）

觸れ役　伴天連さまに申上げます。この三人の者に洗禮（バプチスモ）をお授け下さいますやうにお願ひいたします。

ヘレイラ　よろしい。では御彌撒（ミサ）をすましてから、洗禮を授けませう。三人の名前は。

觸れ役　（一人一人指さして）　上の山の作左衛門に、新田の庄七とその女房のそでで御座います。

ヘレイラ　承知しました。

三人　有難う御座います。（低頭平身して退く）

中年の鄕士　（觸れ役に）　その他何か伴天連さまに御願申上げる事はないか。

女　あの……御願が御座います。

中年の鄕士　何だな、ナタリア。

女　雪の聖瑪利亞（サンタマリア）とは、どう云ふ事か敎へて頂きたいので御座います。

ヘレイラ　今日がその雪の聖瑪利亞の祝日（いはひび）であります。

女　……

ヘレイラ　雪の聖瑪利亞と云ふのは、童貞瑪利亞（ビルゼンマリア）の有難い不可思識が羅馬の都に現はれた昔の物語であります。その時分、羅馬の都にジョワンと云ふ金持がありました。ジョワンは夫婦の間に兒がなかつたので自分たちが死んだら財産を聖瑪利亞さまに差上げてしまはうと決心してゐました。ところがある年の七月十一日の夜、夫婦の者は夢に瑪利亞さまのお姿を見ました。その時、明朝雪のふりつもつた丘の上に私の寺を建てゝくれと云ふお告がありました。夫婦の者は、まさかこの熱いさかりに雪のふつた處はあるまいと疑ひながらも、夜が明けたので、外へ出てみると、エスキリヌスの丘が雪で眞白になつてゐ

ました。ジョワンは信心の涙にむせんで、早速お告げの通りそのヱスキリヌスの丘に、聖瑪利亞の御堂を建立しました――そして雪の聖瑪利亞の御堂と名づけたのであります。それからこの七月十二日が雪の聖瑪利亞として祝日に定められました。

女　……あゝ、童貞聖瑪利亞……

（一同、童貞聖瑪利亞……と稱名する。）

女（一心に）伴天連さま。その御堂は只今でも羅馬の都に御座いますか。

ヘレイラ　あります。今では、聖瑪利亞の大寺と呼ばれてゐます。（月をながめる）おゝ、月が大分たかく上つてきた。（觸れ役に）彌撒のお祈りを始めませう。

觸れ役　承知いたしました。（蠟燭の灯をつけたり、その他いろ〳〵支度をする）

（ヘレイラは十字架の前で彌撒の祈禱を始める。觸れ役・中年の鄕士、彌撒の答へをする。衆人、これに和す。この時、二三人の男がひそかに森の内から出てきて、衆人の後に跪づく。やがて、司祭ヘレイラが供へ物をさゝげて、おもむろに、贖罪と感謝の祈禱に入る。衆人やゝ、くつろぐ。此時、突然後に跪いた二三人の者が立上る。呼子の笛を吹く。中年の鄕士が俄然と後を振向く。）

中年の鄕士　誰だ。そこに立つてゐるのは誰だ。

（衆人立騒ぐ。鳥渡聲をとぎらせたヘレイラは一段聲たかく祈りをつゞける。少時、炬火を持つた捕手が周圍の森からバラバラと現はれる。）

捕手の頭　伴天連は何處にゐる。どれが伴天連だ。

捕手一（一同に向つて）逃げかくれをすると、かへつて爲にならんぞ。

捕手二（大聲に）誰だ、動くのは。動いてはならん。

（捕手は一同を取りかこむ。一同の者は今はもう凝乎つと動かない。）

捕手の頭（二三歩前に出る。捕手一、二、三、炬火をあげて一人一人の顏を照らし始める）伴天連は居らんか。

（ヘレイラ捕手の頭の方へつかつかと進む。中年の鄕士思はず彼の方へ驅けよる。）

女（絕望の聲）あゝ、聖瑪利亞。

ヘレイラ　彌撒のお祈りを邪魔してはいけません。（かう云うて、また十字架の方へ歸らうとする）

捕手の頭　お前が伴天連か。

ヘレイラ　いかにも、私が伴天連です。

捕手の頭　此奴を縛れ。

（捕手一、二、三が、ばらばらとヘレイラの傍に驅けよる。）

中年の郷士（身を以つてヘレイラを防ぐ）こら、何をする。

ヘレイラ　ジョワン、手向ふのはおよしなさい。

中年の郷士　それでも……

ヘレイラ　さあ、私を縛るがよい。（自分で手を後にまはす）

女　瑪利亞さま。どうぞ伴天連さまをお救け下さい。

（一同口々に「どうぞ伴天連さまをお救け下さい。」と叫ぶ。）

ヘレイラ　皆さん。殉教（マルチレス）の時が愈近づきましたぞ。（縛られる）

（捕手は一同の者を次から次に縛り上げる。）

二　双子星

玄海灘。八月始めの夜。大船の甲板――太い帆柱には唐人陳穆が亂髪を風になびかせて縛しつけられてゐる。その妻天草女まさは日本の服装でやゝ離れたところにやはり縛られてゐる。大きな帆でさへぎられて、舳の方は見えない。ヘレイラは、首かせをはめられて足を鐵の鎖でつながれてゐる。ヘレイラの鎖と天草女まさの繩尻とは同じところに結ばれてゐる。

陳穆　（怒つた聲で）御役人、御役人。（誰も出て來ない）畜生。この船に乖つてゐる役人の奴らは、みんな聾と見える。

まさ　お役人に何の用があるのさ。

陳穆　お前の知つた事ぢやない。

まさ　氣でも狂つたのかい。お前さん。今何時だと思つてゐるのさ。

陳穆　（返事をしない）……

まさ　伴天連さま。今、何時ぐらゐで御座いませう。

ヘレイラ　さやう。（空を眺める）東の水平線は双子星（ふたつぼし）が出てゐるから、もう、やがて夜明になります。

まさ　有難う御座います。（陳穆に）お前さん、もう、夜明けだよ。お役人お役人つてどなつてばかりゐずに、少し眠つたらどう。

陳穆　これで睡れるかい。

まさ　ぢや勝手におし。私は知らないから……

陳穆　御役人、御役人、少し繩をゆるめて下さい。これでは死んでしまひます。御役人。御役人。

まさ　お役人は今、白河夜船の最中だよ、叫（どな）りや叫（どな）るだけお前さん、疲（くたび）れまうけぢやないか。

陳穆　やかましい。默れ、賣女（ばいた）め。貴様に物を云つてゐやしないんだ。

まさ　（ふくれる）やかましいなあ、お前さんぢやないか。（ヘレイラはこの騒ぎも耳に入らぬやうに靜かに瞑目してゐる。）

陳穆　御役人。御役人。（一段聲を張上げて）御役人、御願で御座います。

役人　何だ。夜中大きな聲を出しちやいかんとあれ程申渡してあるではないか。（見張りの役人出てくる。）

陳穆　御願で御座います。繩が身體に喰込んで苦しくて耐りません。御慈悲でもう少しゆるめて下さい。

役人　それはならん。

陳穆　（眼をいからして）何、ならん。あの南蠻人をあんなに自由にさせて置いて、何で俺ばかりこんな眼に會はせるのだ。

役人　伴天連とお前とは違ふ。

陳穆　兩方とも重い咎人ぢやないか――依怙贔屓が過ぎるぞ。

役人　生意氣な事を云ふな。お前だつて牢破りや繩拔けをした事がなけりやこんな苦しい眼には會はないで濟むんだ。さあ、靜にしろ。（行きかける）

陳穆　いゝや、依怙だ。片手落だ。

役人　默らないと、猿ぐつわを喰ませるぞ。（去る）

陳穆　畜生奴。おぼえてゐろ。（沈默。）（浪の音が寂しく響いてくる。）

まさ　伴天連さま。今夜は月は出ないので御座いませうか。

ヘレイラ　明けがたになつて出ます。

まさ　お星さまが空一ぱいに光つてゐますね。何だかみてゐると、恐いやうで御座いますね。

ヘレイラ　夜が暗いからです。

まさ　伴天連さまがさつき時刻をお計りになつた星は何處に見えます。

ヘレイラ　（立上る）東の海のはてに、御覽なさい。低いところに、丁度、人間の眼のやうに二つ燦めいてゐる星があります。あれが双子星です。

まさ　ほんとに人間の眼のやうで御座いますね。

ヘレイラ　（間を置いて）私が二十年前に天主の敎をひろめるために、この日本へ向つてやつてきた時には、始終あの星が舳の上に輝いてゐた――私はその時はまだ若かつた。あの星がやさしい眼付で、日本へ私を迎へてくれるのだと思ひました。

まさ　この船は西へ向つて走つてゐるので、あの星が艫の方に見えるので御座いますね。

ヘレイラ　（間）我々はいまはあの星から見送られてゐま

す。（首を垂れる。小さな聲で）おゝ、耶蘇（ゼズス）、基督（キリシト）……

まさ　（突然泣出す）……

陳穆　（鋭く）何を泣くのだ。意氣地なしめ。

まさ　伴天連さま。お救け下さい。

ヘレイラ　御內儀は何うしました。

まさ　（狂氣のやうに）私もあの人も長崎へつけばすぐ……あゝ、伴天連さま。今あなたのおつしやつたとほり……私たちはあの星から見送られてゐます……（泣伏す）

ヘレイラ　長崎へつけばすぐ……死なゝければならない――それを歎きなさるのかな。

まさ　（急に首を上げる）獄門か、磔か――どのみち救かりません……

陳穆　はは……馬鹿。分り切つた事ぢやないか。

（まさはまた泣伏す。）

ヘレイラ　（間を置いて）あなた方は、何んな罪を犯しなすつたのか話して下さい。

陳穆　人殺し……牢破りの兇状だ――長崎ぢや、俺の名をきくと、皆顫へ上らあ。

まさ　あの人が牢を破つて、そつと家に歸つたとき、張込んでゐたお役人を殺したので御座います。

陳穆　俺はそのまゝ厭がるこの女をつれて下關まではうまく逃げたんだが、やつぱり國が運ふと、駄目だ――たうとう捕つて此仕末だ。

まさ　（泣く）お役人を殺したのが因果で御座います……

陳穆　獄門か、磔か。（意地の惡い笑ひ方で）ふふ……どつちみち同じ事だ。

まさ　伴天連さま。どうぞお救け下さい。

ヘレイラ　（間を置いて）御內儀。あなたは死ぬ事がそんなにお厭か。

まさ　はい。考へただけでも氣が狂ひさうで御座います。

ヘレイラ　私もやつぱり長崎に死に行くのだ。（間）磔か火刑（ひあぶり）か兎に角慘いお仕置に會はねばならぬ。然し、私は少しも恐しいとは思ひません。この世の苦しみをのがれて、波羅葦僧（ハライソ）へ行く――こんな樂しい事があらうか。

まさ　波羅葦僧とは何處で御座います。

ヘレイラ　あの星の輝やく天の國、天主（デウス）の極樂淨土を波羅葦僧と云ひます。

まさ　（ため息を吐く）……

陳穆　先の事が分るもんか。南蠻人。お前も餘程お目出度く出來てるな。

ヘレイラ　天主（デウス）のお裁きがお前には恐ろしくないか。

陳穆　そんな者はみんな嘘の皮だ。人間は死んでしまへば土の內で腐るだけだ。

まさ　お前さん。そりや本統かい。

陳穆　さうさ。きまつてらあな。おい。そんなつまらない話はよして、少し睡らう。何しろこの三日はろくに寢なかつたので瞼がくつゝきさうだ。（眠る）

（まさはため息を吐く。そして又しくしく泣き出す。）

ヘレイラ　御内儀。天主はあなたを救けます。きつと救けます。切支丹の教を信じて御覽なさい。死ぬ事が恐ろしくなくなります。

まさ　……伴天連さま。おゆるし下さい。あの人の云ふ事の方が何うしても私には本統だと思はれます。（泣伏す）

ヘレイラ　（間を置いて）御内儀、あなたは私が長崎で殉教を遂げたとき始めて私の云つた事を信じるやうになります。

（沈默。）

ヘレイラ　（祈る）天にまします天主よ。森羅萬象のおん主よ。我らを憫み玉へ。そしていかなる苦しみにも屈せず殉教者の位につく事を得させ玉へ。亞孟。

（沈默。）

ヘレイラ　おゝ、艫の方の信徒達が聖歌を唄つて居られる。

（帆影にかくれた艫の方から、聖歌を合唱する聲がきこえてくる。）

（此時帆の影も陳穆とまさの姿も消え失せて、太い帆柱の向うに十人ばかりの信徒が縛られたまゝ坐つて聖歌を唄つてゐるのが見える。蒼ざめた纎月が斜にそれを照してゐる。）

（一人の人が帆柱の處へ現はれる――天使である。）

天使　ヘレイラ

ヘレイラ　あなたはどなたです。

天使　お前は私の顏を見知つてゐないのか。

ヘレイラ　どこかで見たお方のやうには思はれますが……

天使　お前は一心に殉教を念じてゐる。死ぬ事が少しも恐ろしくないか。

ヘレイラ　少しも恐ろしくありません。

天使　でも、殉教を念じてゐるとき、お前は熱病やみのやうに惡寒を感じてゐるではないか。

ヘレイラ　これまで出合つた事のない天主の不可思議を待ち設けてゐる爲です。

天使　お前は殉教が近づくと一緒に死を感じて恐れてゐるのだ。

ヘレイラ　あなたは死を恐ろしいものと思ひますか。

天使　お前は時々涙ぐんでゐる。

ヘレイラ　それは悲しいからではありません。

天使　ではどうしてあゝ云ふ感情を露はすのだ。

ヘレイラ　死を念ふとき、何とも云へない深い心持に打たれるからです。

天使　お前は涙ぐんだまゝ、天主《デウス》に向つて一心に祈る――あれは何の爲だ。
ヘレイラ　天主《デウス》を信じるからです。
天使　信じるからか。疑ふからではないか。
ヘレイラ　あなたは天主《デウス》を疑ひますか。
天使　お前は自分の心を自分で、充分支配してゐると思ふか。
ヘレイラ　私の心は天主《デウス》が支配してゐます。
（沈默。聖歌やむ。）
天使　お前にはまだ俺が分らないか。
ヘレイラ　思ひ出せさうで思出せません。あなたは一體どなたです。
天使　聖歌の聲がきこえるか。
ヘレイラ　きこえません。
天使　（舳の方を指さす）見ろ、殉教者《マルチル》の姿はあれだ。
（信徒たちの姿が消えて、數多くの髑髏が蒼ざめた纖月に照らされてころがつてゐる。）
ヘレイラ　おゝ、耶蘇《ゼズス》、瑪利亞《マリア》、天にましますおん父天主《デウス》……
天使　俺は誰だかまだ思出せないか。
ヘレイラ　（鈍く）思出せません。
天使　（美しい光明を放つて自然と消えろ）……
ヘレイラ　天使《アンヂョ》だ。

（陳穆は縛りつけられて睡つてゐる。）
（まさがヘレイラの傍に伏して眠つてゐる。）
（鉛色の夜明けの光景――舳の方からは依然として聖歌の聲が響いてくる。）
（ヘレイラは跪づいて泣きながら默禱する。）

三　奉行所

寛永十年九月十六日朝。奉行所。曾我又左衞門尉と今村傳四郎の兩長崎奉行が上座に坐つてゐる。皓臺寺鐵眼、光源寺松吟の兩僧、その他、宗門改め係、書役などがその下に居流れてゐる。
庭上には、同心、與力など四五名。
宗門改め係　（同心たちに向つて）南蠻國の伴天連ヘレイラをこれへ呼出せ。
同心たち　かしこまりました。（二名出てゆく）
曾我又左衞門　（宗門改め係に向つて）あの伴天連は、我國の法師で云うてみたら、どの位の身分の者か。
宗門改め役　（一禮して）さやうで御座います。京畿地方の切支丹の教區長《プロフインシャル》と申しますから、まづ、日本の法師で申しますと、寺領二三千石の寺の住職の格式で御座いませう。

曾我又左衞門　ほう。なかなか重い身分だな。今村氏。先日からの樣子でみても、あの伴天連は並大抵の事では、切支丹を棄てゝころびはいたしますまいて。
今村傳四郎　さやう。江戶表よりのお指圖のやうな手段では容易くころばせる事はむづかしう思はれます――切支丹の頑固なのには、御同樣每々手を燒きまするな。
曾我又左衞門尉　せめて一人ぐらゐは何とかしてころばせたいものだ――江戶表から腑甲斐ない奴等だと思はれるのも心外だ。
今村傳四郎　御出家たちには、何かよい思案はないかな。
松吟　私共の考では、拷問で無暗に責めつけるのも、どうかと思はれます。
曾我又左衞門尉　では他に何か甘い手段がありますかな。
松吟　たゞ、いたづらに彼等を疲れさせるばかりでは、ころばせる事は出來ません。却つて、拷問の結果、彼等が所謂殉教を遂げれば、益々世人の心を感動させる譯になります。
今村傳四郎　我々の心配するのも、つまりはそれだて。
松吟　江戶表の御趣意が、我國から邪宗門の根を絕つにあるのですから、多少の方便を用ひても、ころばせてしまはなければなりません。
今村傳四郎　方便と云へばつまり欺すのだな。

松吟　つまりいろんな手段を使ふ事になります。
曾我又左衞門尉　ところが彼等がなかなかその手に乘らんのでな。
松吟　とも角もやつて見ようではありませんか。
今村傳四郎　（鐵眼に）あなたは何か御考はないかな。
鐵眼　あはは……どうも御注文がちと無理ぢやな。
今村傳四郎　（キッとなる）私の注文が無理だと云はれるのか。
鐵眼　あなたではない。江戶表の御注文がぢや。
今村傳四郎　無理と云はるゝ仔細は。
鐵眼　もし、彼等切支丹が眞人間ならころべる筈の者ではない。假に私に向つて、御法度だから禪宗を棄てろと云はれたとしたらどうぢやな。棄てゝしまふとお思ひなさるか。
今村傳四郎　（苦笑して）相變らず理窟ツぽい和尙だな。
曾我又左衞門尉　つまるところ拷問にかけるより他に手段がない譯だ。今村氏。やはり江戶表よりの御指圖のとほりに致すより仕方が御座るまいて。
今村傳四郎　何か手段がありさうなものだがなあ。……
（同心二人繩尻を取つて、ヘレイラをつれてくる。彼はやせて眼が熱病やみのやうに光つてゐる。）
宗門改め係　そこに坐らせい。

今村傳四郎　伴天連に床几をかしてやれ。
宗門改め係　はつ。これ御奉行の仰せだ。床几を借してやれ。
同心たち　はつ。（床几を持つてきて、ヘレイラにかけさせる）
宗門改め係　（宗門調書を開いて）その方の名は何と云ふ。
ヘレイラ　ジョワン・キリシトワン・ヘレイラ。
宗門改め係　年齢は。
ヘレイラ　五十四歳。
宗門改め係　出生の國處を云へ。
ヘレイラ　葡萄牙國トレス・ウエドラスであります。
宗門改め係　日本へ渡つたのは何時か。
ヘレイラ　慶長十七年四月であります。
宗門改め係　天河から渡つたか、呂宋から船に乘つたか。
ヘレイラ　天河から船に乘つて平戸へ着きました。
宗門改め係　その方の役名は。
ヘレイラ　日本首部の教區長であります。
宗門改め係　それに相違ないか。
ヘレイラ　相違ありません。
宗門改め係　（兩奉行に向つて）直ぐさま拷問にかけるやう申しつけませうか。
今村傳四郎　待て——奉行が直々話したい事がある。曾我氏、御免下さい。（縁先に進み出る）伴天連。
ヘレイラ　（輕く首を低げて彼を直視する）……
今村傳四郎　毎々、取調の度に云ひきかせたとほり切支丹宗門は、我國で堅く御法度になつてゐる。だから、かうして捕へられた以上、國法に照らして、當然、烈しいお仕置をうけなければならぬ。が、もし、其方が悔悟して宗門を棄てるならば、今でも遲くない。すぐ許してやる。その方も承知してゐるだらう。今日がその方の最後の取調べだ——どうだ。もう一度考へ直してみる氣はないか。
ヘレイラ　（頭を低げる）どうぞ私に國法どほりの御仕置を願ひます。
今村傳四郎　考へ直してみる氣はないか。
ヘレイラ　ありません。
今村傳四郎　考へ直さなければ是非がない、これからその方を拷問にかけなければならぬ。
ヘレイラ　（跪づく）おん父、天主は、もう私を待ちかねておいでになる。私は早く波羅葦僧へ行かねばなりません……
今村傳四郎　それは其方の迷だぞ。
ヘレイラ　そんな事はありません、私はこの眼でその證據を見ました。
今村傳四郎　證據を見たと申すか。

ヘレイラ　見ました――この長崎へ送られる船の內で、天使（アンジョ）が私に現はれました。そして殉敎（マルチレス）の心をはげましてくれました。おゝ、貴き天使（アンジョ）……

松吟　（進む）御奉行。私に一言云はせて頂けませうか。

今村傳四郎　差支ありません。

松吟　伴天連。私はあなたの信仰の堅いのに感心しましたそこで失禮ながら、何とかしてあなたをお救けしたいと思つていろいろ考へてみました。あなたは切支丹を世界で一番よい宗門だと信じてゐられる。ところが、此處に私どもの信じてゐる佛法がある。私どもは佛法を一番の宗門と思つてゐる。御相談したいのは、つまり此處だ。伴天連。あなたは佛法を學んでみる氣はありませんか。無論、切支丹をころぶのではありません。たゞ學ぶのだそして學んでみた上、あなたの心でとくと吟味分別してみて、もし佛法がよいと思はれたら、その時はじめて切支丹を棄てる……もし切支丹がよいと思はれたら……

ヘレイラ　（押しかぶせて烈しく）私は天主（デウス）より他にこの宇宙に神はないと信じてゐるのだ。

松吟　ところがある。

ヘレイラ　それは異端だ。眞正の神ではない。

松吟　（氣色ばんで）貴い阿彌陀如來を神でないと云ふのか。

ヘレイラ　さうだ。たゞ人間に作られた物にすぎない。あれは偶像だ。

曾我又左衞門尉　御出家。もうおよしなさい。南蠻人に佛法が分る氣づかひはないて。

（與力一人現はれる。）

與力　申上げます。

今村傳四郎　何だ。

與力　只今、あの牢破りの唐人陳穆のお仕置をすまして參りました。

今村傳四郎　あれは獄門だつたな。

與力　さうで御座います。

今村傳四郎　最後はどうであつた。

與力　さすが無類の惡人だけに尋常で御座いましたが、女房の天草女には弱らされました。

今村傳四郎　あれは事件に關係がないので今朝放免した筈ではないか。

與力　（苦笑）どうしても陳穆と一緒に殺してくれと申してきかないのであります。

今村傳四郎　あの兇惡な唐人をそれ程思ひ込んでゐたのか日本の女のくせに可笑しな奴だ。

與力　あの樣子では氣が狂ふかも知れません。

ヘレイラ　（感動して）天主（デウス）よ 彼女の上に惠をかけ玉へ。

今村傳四郎　まあ、なるたけいたはつてやれ、御苦勞であつた。
與力　はつ。御免下さい。（退場）
曾我又左衞門尉　今村氏、どうしても轉ばぬとあれば、その伴天連を拷問にかけてもころばせねばなりませぬぞ。
今村傳四郎　やむを得ませんな、どうも。
曾我又左衞門尉　宗門改め係。その伴天連を穴釣るしにかけろ。
宗門改め係　かしこまりました。（同心たちに）これ、つるし場の用意は出來て居るか。
同心　はつ。出來て居ります。
宗門改め係　伴天連をつるし場へ引立てい。
同心　はい。（繩尻を取つて引立てる）立て。
ヘレイラ　（天を仰いで）限りなき聖寵のおん主天主よ、早く私を迎へとらせ玉へ。

四　穴釣るし

切支丹宗徒等に俗に聖山と呼ばれたる丘陵の中腹。竹矢來にて圍まれた刑場。同じ日の午さがり。一列に數個の穴を掘りその側に柱をたて、柱から腕木を出す。腕木には滑車を付け、繩で切支丹の足を縛り滑車にかけ逆に穴の内に釣るしてある。地上からは、わづかに脚だけがみえる。中央の穴にはヘレイラが釣るされてゐるのでその靴が見える。その左右の穴には、日本人の宗徒たち――非人六人、番をしてゐる。

非人甲　（瘤のある大坊主）待ちくたびれたと見えて、見物人が大分減つたな。おい。朝鮮（手でバクチの眞似をする）昨夜のつゞきを一番行かうか。
非人乙　俺は腹が空つてきた。坊主、何か食ふ物はねえか。
非人甲　俺の瘤でも喰らへ。
非人丙　（石地藏のやうな顏付）はは・・・・坊主の瘤でも食つてみろ――雁がさが染らあ。
非人甲　（丙に）へん、嫉むねえ。石地藏め。手前にや、何一つ錢になる處はねえぢやねえか。この瘤は俺の錢箱だあ。
非人丙　變にぐにやぐにや柔かくて、氣味の惡い錢箱だなあ。
非人甲　もうやがて御彼岸だ。一つこの瘤で六阿彌陀參りの婆さまたちの巾着をしぼつてやるぞ。
非人頭　かう、坊主。この間お前が酒に喰醉つて寢てゐるのを見て、俺瓢簞がころがつて居るのかと思つたぜ。（非人たち笑ふ）
非人甲　（しよげる）お頭つまらねえ事を云ひなさんな。

それでなくてせえ、皆で冷語して仕様がねえのに……

非人丙　坊主が醉ふと、瘤まで眞赤になるから面白え。

非人甲　（忌々しさうに）あたり前ぢやねえか。俺が醉つてるのに、この瘤だけまさか素面でも居られめえ。

（一同笑ふ。）

非人乙　何か無えかなあ。腹が空つて切なくなつてきた。

非人丁　（隻脚）餅でも貰つて來たらいゝぢやねえか。

非人乙　俺おけらだ。昨夜あの坊主にすつかり取られちやたつのよ。

非人丁　お前また始終あの坊主に取られてるぢやねえか。

非人乙　忌々しい瓢簞だ。

非人戊　（鼻がかけてゐる）おい。朝鮮。腹が空つたら、ひい物がある。

非人乙　何だつて、鼻つかけ。

非人戊　あのな、今朝獄門になつた唐人の首の前に、飯が供へてはるぜ。

非人乙　本統か。

非人戊　本統だ。

非人頭　さうさう。あの唐人の嬶が泣きながら供へてゐたつけ。

非人乙　よし。（走つて退場）

非人甲　やあ、あいつめ、獄門の飯をかつぱらふ氣か。呆れた野郎だ。

非人頭　だが、あの女は唐人の嬶にや惜しい代物だなあ。

非人丁　ありや天草の女だ。

非人頭　あの惡黨に悉り惚れこんでゐたと云ふ噂だぜ。

非人丁　始は厭がつてゐたんだ。

非人丙　お頭。緣がありやこそ、唐人にも惚れるんだ。

非人頭　分らねえもんだなア。

（宗門改め係。同心二人をつれて巡つてくる。）

宗門改め係　こりや非人。別に異狀はないか。

非人頭　御役人さま、一番穴の切支丹は、もう、やがて、落入りで御座います。

宗門改め係　マリアと云ふ若い日本人の女か。

非人頭　さうで御座います。さつきから脚をばたばたやりますから、ころぶつもりかつて聞いてみましたが、返事をいたしません。

非人甲　御役人さま。御覧なせえまし、一番穴の切支丹は脚の尖が眞白になつてきました。

宗門改め係　その他の者は何うだ。

非人頭　別に變つた事は御座いません。

宗門改め係　南蠻の伴天連は何番だつけな。

非人戊　御役人さま。四番で御座います。（指さす）

宗門改め係　（つかつかとその穴の側に行つて覗く）うな

つてゐるな。伴天連、苦しいか。苦しきや早くころべ。ころびたくなつたら右の手をふれ。いいか。すぐゆるしてやるぞ。（答へなし）これ、非人頭。

非人頭　何で御座います。

宗門改め係　この伴天連は大切な囚人（めしうど）だからよく氣を付けてくれよ。

非人頭　かしこまりました。

宗門改め係　また後刻見巡りに參る。（去る）

非人頭　御苦勞さまで御座います。（頭を低げる）

（非人一同頭を低げる。）

五　死の天使（アンジョ）

暗黑。何者かくるくる渦卷いてゐるやうな氣配が感ぜられる。ヘレイラの苦しげな呻吟がきこえる。

ヘレイラ（姿は見えず）おゝ、天主よ。早く私を波羅葦僧（ハライソ）に迎へとり玉へ。（氣息迫りたる聲）早く早く、おゝ耶蘇（ゼズス）、聖瑪利亞（サンタマリア）……

（暗黑の焦點とも云ふべき中央のところに、陳穆の死顏が大きく現はれる――やがて刺すやうな鋭い天草女まさの泣聲。）

ヘレイラ（長い間）お前はあの唐人だ。お前のやさしい女房が泣いてゐる。

死顏（氣味惡く笑ふ）俺は獄門臺の上で女房の泣くのを眺めてゐる。そして、段々腐つてゆくのだ……

ヘレイラ（膚に粟を生ずるやうな聲で）おゝ、天主（デウス）……

死顏　この世の中ほど不思議な處はない――俺はお前が不憫に思はれる。

ヘレイラ　何うしてそんな事を云ふのだ、私はお前が不憫で仕樣がないのだ。

死顏　お前は俺たちの知つてゐる事を何も知らない……何の爲めに生きてゐるのだ。

ヘレイラ　天主（デウス）の爲だ。罪ある人たちを救ふ爲だ。

死顏（突然破裂するやうに笑ふ）ははは……

（死顏消える。）

（ヘレイラの呻吟の聲。）

（少時して、血のやうな紅い斑點が暗黑の焦點に現はれる。そして次第に擴がつてゆく。やがてその斑點の內に黑く影繪のやうに人の姿が現はれる――丁度、火の背光を背負つた人のやうに見える。）

ヘレイラ　誰だ。そこにゐるのは誰だ。

黑影　俺が分らないか。

ヘレイラ　分らない。

黑影　お前は俺を知つてゐる。

ヘレイラ　私には分らない。

黒影　まだ分らないか。

ヘレイラ　お前は今消えた唐人ぢやないか。

黒影　ちがふ。

ヘレイラ　何か用があるのか。

黒影　（段々ハツキリしてくる）お前が俺に用があるのだ。

ヘレイラ　段々お前の姿がハツキリしてきたやうだ。だがやつぱり分らない。

黒影　お前は俺に會つた事がある――忘れて了つたのか。

ヘレイラ　私はお前を見た事はない。

黒影　ある。お前の智惠が昏(くら)いから分らないのだ。

ヘレイラ　（間）では何處で會つたと云ふのだ。

黒影　玄海灘の船の上だ。

ヘレイラ　やつぱりお前はあの唐人だ。

黒影　ちがふ――唐人ではない。

ヘレイラ　お前の姿は男だ――するとあの唐人のやさしい女房でもない。私はあの時唐人と女房より他には誰にも會はなかつた。

黒影　（冷たく）嘘を云へ。お前はもう一人會つてゐる筈だ。

ヘレイラ　（間を置いて）では、お前は美しい光を放つて消えたあの時の天使(アンジョ)だと云ふのか。（黒影の顔が髑髏になる）

黒影　お前はあの時俺を天の使と呼んだのだ。

ヘレイラ　ちがふ。それこそ嘘だ。あの時の天使はお前のやうな恐ろしい顔ではなかつた。

黒影　俺は何時でも同じ事だ。

ヘレイラ　お前には生命(いのち)がない――冷酷だ。單調だ。無味乾燥だ。私はお前を見てゐると、石になるやうな氣がする。耶蘇(ゼズス)、瑪利亞(マリア)。救け玉へ。

黒影　やうやくお前に俺が分つたやうだ。

ヘレイラ　（哀泣）私はこの世の内に、まだまだ仕殘した事が澤山ある――今、それがハツキリ分つた……

黒影　お前は俺を見て顫へてゐるのか。

ヘレイラ　（強い聲で）私はお前を追拂はうとしてゐるのだ。

黒影　（刺すやうに）殉教(マルチレス)はどうした。お仕置場の竹矢來の外では、澤山の人がお前の貴い殉教(マルチレス)を見てゐるのだ。

ヘレイラ　……殉教はもう私には意味のない言葉になつてしまつたのだ。（長い間を置く）私は私だ。竹矢來の外で私を見てゐる人々はその人々だ。

黒影　お前はこの前船の上で、俺がきいたときには、「天主(デウス)が私を支配してゐる。」とハツキリ答へたではないか。

ヘレイラ　私が私を支配しなければならないと云ふ事が、

今、分つてきたのだ。

黒影　天河や呂宋の教會では、鐘を鳴らしてお前の殉教を祝福しお前を聖人の列に數へ入れようと支度をしてゐる――これまでの殉教者たちのやうに。

ヘレイラ　私はお前の言葉をきく毎に智惠が明るくなつてくるやうな氣がする。――私は生なければならない。これ迄仕殘した事をしてみなければならない。

（黒影は段々消えて、小さな血のやうな斑點が殘る……。）

六　第一の石

以前の刑場。一番の穴につるされた切支丹の女は、もう死んで引上げられてゐる。竹矢來の外には見物の男女が澤山ゐる。死者は荒蓆の上に寢かしてある。宗門改め係と、醫者とがその側にゐる。非人たちは一方にかたまつてゐる。二人の同心は矢來の外の群集を制してまはつてゐる。

宗門改め係　もう救かりませんか。

醫師　（脈を取りながら）もう脈が上りました。餘程苦しかつたと見えて唇を嚙み切つてゐます。（立上る）

（群集動搖。）

宗門改め係　非人頭。

非人頭　へい。（走つてくる）何か御用で御座いますか。

宗門改め係　死屍を埋める用意をいたせ。

非人頭　かしこまりました。

非人戍　（鼻つかけ。宗門改め係の側に來る）御役人はま。

宗門改め係　何だ。

非人戍　四番の穴のつるし人が頻りに脚をバタバタひやつて居ます。

宗門改め係　何四番の（その方をみる）

非人戍　はれで御座います。

宗門改め係　あの伴天連だな。

非人戍　へえ。

（宗門改め係は四番の柱の側に行つて内を覗く。少時）

宗門改め係　（喜色を顏に漲らして）おい。伴天連がころんだ。（醫師、同心、非人たち皆驚いて、宗門改め係の顏を見る）右の手を一生懸命にふつてゐる。

（非人戍四番の穴に走りよつて、急いで綱を曳く。ヘレイラの逆釣りの姿が現はれる。）

（非人たちが正氣を失つたヘレイラを抱きかゝへて、死骸と並べて、荒蓆を敷きその上に置く。）

（醫師が診察する。）

宗門改め係　（熱心に見てゐる）救かりませうか。

醫師　大丈夫です。（投藥する）然し。心臟をひどく痛めてゐるやうですから直るまでは餘程かゝりませう。

（ヘレイラ呼吸を吹返す――呻吟の聲。）

（群集大動搖。）

同心一　これさわいぢやいかん。

同心二　誰だ。木の上に上るのは。下りろ、下りろ。

宗門改め係　おゝ、眼を開いた。これ、伴天連。氣をしつかり持てよ――いいか。もう決してあんな苦しい眼には會はせんから……これ、誰か早く奉行所へ行つて來い。

同心一　はつ。

宗門改め係　御奉行に伴天連がころびましたと申上げてくるのだ。

同心一　はつ。（退場）

（ヘレイラ無理に起上る。）

（何處からともなく石が一つ飛んできてヘレイラの額を破る。ヘレイラ突伏す。）

宗門改め係　（眼をいからして）誰だ。石を投げたのは――大切な囚人に手を出すと承知せんぞ。

七　ふりつもる雪

寛永十一年正月末。長崎には珍らしい大雪の夕刻、寺町皓臺寺庫裏の一室。ヘレイラが病みおとろへて、寢てゐる。

鐵眼が入つてくる。

鐵眼　今日はどうぢや。臘梅はよろしいかな。

ヘレイラ　よくない。雪がふるので、氣が鬱してならん。

鐵眼　この南國の長崎には、近年珍らしい大雪ぢや。私の書齋の窓からみると、市中の屋並が銀の箱を伏せ並べたやうでかゞやくやうなよい景色ぢや。

ヘレイラ　此處は暗い。あの拷問に會つてから、心臟が餘程惡くなつたと見えて、動悸がしてならん。

鐵眼　そんなに惡いならなぜ醫者にかゝらん。きけば、今日は奉行からよこされた醫者を斷わつて歸したと云ふではないか。

ヘレイラ　（冷たく）俺はまだ生命が惜しいからな。

鐵眼　あの男は長崎では名醫の評判をうけてゐる男ぢや。

ヘレイラ　俺は羅馬で醫學を學んだ。俺の病氣はあの醫者より、俺の方が餘程、よく知つてゐる。

鐵眼　自分の身體は、なかなか見えない。丁度自分の心が分らんやうにな。

ヘレイラ　いや、分る。

鐵眼　いや、分らん。

ヘレイラ　分る。俺は羅馬で醫學を學んだから……

鐵眼　はは…それでは水かけ論ぢや。だがな、ヘレイラ。これはお前の方に無理があるぞ。
ヘレイラ　いや、和尙の方が無理だ。
鐵眼　まあ、聞け。いいか。お前は切支丹の神をすてゝしまつたのぢや——まあ待て、私はそれを非難するのぢやない。私は先達も云つたとほり、お前が拷問の苦しみに耐へ切れなくなつて、ころんだとは思つてゐない。かうと思ひつめたら死んでもそれを貫くだけの意力は確かにお前にある。
ヘレイラ　(憤然として)　和尙。何故お前はそこへ議論を持つて行くのだ。
鐵眼　そこから論じて來ないと議論が立たん。いいか。切支丹の神さへ棄てたお前が、どうして醫學をすてられないのぢや。
ヘレイラ　だから和尙の方が無理だと云ふのだ。いいか。よくきけ。切支丹は俺の信仰だつた。ところが、醫學は理解によつて得た智識だ。どうだ。分つたか。
鐵眼　ちつとも分らん。
ヘレイラ　だから俺が切支丹を棄てたからと云つて、何も醫學や天文の智識まで棄てゝしまふ必要はない。
鐵眼　そこが大切な處ぢや、まづ順を追つてお前に說いてきかせるが、お前は醫學は理解の力によつて得た智識だと云ふ。
ヘレイラ　さうだ。
鐵眼　理解の底に信仰がないと云へるか。
ヘレイラ　信仰なんかない。
鐵眼　信仰がないのにどうしてお前は自分の醫學をそれ程信じてゐるのぢや。お前が大切な時に臨んで神を棄てたのももつともぢや。
ヘレイラ　和尙は俺を辱かしめるつもりか。
鐵眼　まあ、待てと云ふに——私はお前を辱かしめるんでもなんでもない。今云ふとほり、私はお前の醫學も信仰だと思ふ。つまり智識の信仰が切支丹の信仰に勝つたのぢや。
ヘレイラ　そんな事はない。
鐵眼　それはお前が自分の心を知らんからぢやな。
ヘレイラ　俺はあの時自分の生命の貴い事を深かく感じたのだ。
鐵眼　自分の生命を貴いと感じたのは知識に信じすぎるからではないかな。お前は他の醫者より自分の方がよく自分の病氣を見る事が出來ると云ふ。一應尤ものやうだが、大きな間違ぢやと私は考へる。自分の身體を他人が診るやうに平氣で見る事の出來る人はまづないだらうな。
ヘレイラ　和尙は俺をさげすんでゐるな。

鐵眼　さげすんではゐない。お前の顏を見てゐるとお前の氣持はよく分る。お前は私をいま憎んでゐるやうぢやな。
ヘレイラ　うむ。何うかしてお前を苦しめてやりたい。
鐵眼　私はそこを好いてゐるのぢや。光源寺の松吟がお前を引取つて自分の門徒にしようとしてゐたのだから、あの男に任せて置けばよかつたのだが、私はお前を自分で引取つて見たかつた。引取つてみると、かうして毎日議論ばかりしてゐるが……
ヘレイラ　松吟は馬鹿だ。俺は頼まれてもあいつの處にはゆかない。
鐵眼　まあ、此處に居つて、氣長に養生するがいい。
ヘレイラ　(沈默)　和尙、實は俺は此處を出てゆかうと思つてゐる。
鐵眼　この寺に倦きたかな。
ヘレイラ　いや、さうぢやない。俺は和尙が嫌ひぢやない。だが、かうして和尙と一つ處に居るのはどうも苦痛だ。
鐵眼　それなら、仕方がない。然し病氣の直るまでは辛棒するがいい。
ヘレイラ　いや。明日出てゆくつもりだ。
鐵眼　えらい急ぢやな。それで、何處へ行くつもりぢやな。
ヘレイラ　家を持たうと思ふ。明朝探さして貰ひたいな。
鐵眼　よろしい。早速探させよう。
ヘレイラ　(間を置いて)　病氣が直つたら、俺は奉行所の通辭になる。それで活らしてゆくつもりだ。
鐵眼　お前は錢が欲しくなつたな。
ヘレイラ　うむ。錢も欲しい。
鐵眼　それもよからう。
ヘレイラ　御奉行から、俺に、宗門改め係になつてくれと云ふ話が內密にあつたが、ひよつとしたら、ならうとも思つてゐる。俺が宗門改め係になつたら、切支丹を顚へ上らせてやる。
鐵眼　つまり自分を苛なむのぢや。
ヘレイラ　俺がころんだのを笑つた奴等に思ひ知らせてやるのだ。
鐵眼　まあ、世間へ出てみろ。そして、思つた事をやつてみるのぢやな。業が滅してしまはなければお前は浮ばれない。……だが、旦那寺はやはり皓臺寺にしておくがいい。死んだら、骨は此處へ埋めてやるから……

八　切支丹一揆

寛永十五年二月二十六日夜。島原の城を取圍む寄手の陣中。民家に傷病兵を收容してある處。――雨あがり。澤野忠庵と改名したヘレイラは日本服を着て、一人の

侍の太腿の鐵砲傷を洗つてやつてゐる。黑奴（忠庵の僕）が入口に腰かけてゐる。

鐵砲傷の侍　もう大分肉が上つてきたやうだな。

忠庵　上つてきた。

鐵砲傷の侍　南蠻流の外科は療治が上手だ。（老人の侍に）太兵衞殿。御覽なさい。某は跛者にでもなりはすまいかと心配して居つたがこの通り、立派に直つてきました。

太兵衞　某もこの南蠻人の療治で、生命だけはやうやく取止めた。何しろ一揆の奴原が闇の中で突出した竹鎗の傷だけに、非道い膿の持ちやうであつたが、さあ、これで三途の川だけは當分渡らずに濟んだ譯ぢや。然し手荒い療治であつた——南蠻人。お前が創を切つて膿をしぼつた時は、つかみ殺してやりたいと思ふたぞ。（笑ふ）

忠庵　（冷然と）慈悲の心がある内は、思切つた治療は出來るものぢやない。

太兵衞　さう云ふ物かな。

破傷風の侍　（呻吟する）おい。南蠻人。熱が非道くなつてきた——あゝ苦しい。早くどうかしてくれ。

忠庵　（怒る）俺は南蠻人ぢやない。澤野忠庵と云ふ立派な名を持つた日本人だ。

破傷風の侍　早くどうかしてくれ。

忠庵　（低聲に）苦しければ死んでしまふがいい。（かう云ひながらその内に鐵砲傷に繃帶をしてしまふ）

顏を半面繃帶した侍　忠庵。櫻井氏がすんだら早速某の創を診て貰ひたい。また、今日は熱を持つてきたやうだぞ。

忠庵　俺の身體は一つしきやない。一度に二人も三人も治療は出來ぬ。これから細川越中守樣の陣屋へ治療に行かなければならん。（立上る）

顏を半面繃帶した侍　（氣色ばんで）では某を診てはくれないのか。

忠庵　うるさい奴だ。御家老の腫物を切るだけだから、すぐ歸つてくる。向うは急ぎだ。（黑奴に向つて）おい。ラマダン。その藥箱を擔いでこい。（黑奴と退場）

顏を半面繃帶した侍　（血相かへて）無禮な奴だ。

太兵衞　石黑氏。まあ、腹をお立てなさるな。あいつは有名な偏屈者ぢや。某なども時にはあんまり腹が立つので、切つて捨てようと思ふ事もあるが、何せえ、療治がうまいので、つい胸をさすつて我慢するのぢや。

顏を半面繃帶した侍　然し、あまり我々をなめ過ぎた仕打だから……

太兵衞　あいつは切支丹をころんで長崎奉行の祿を喰んでゐる奴ぢや。義理人情なんて云ふ物が分る筈がないて。ははは……

鐵砲傷の侍　偏屈者のくせに、あれで慾の皮は人一倍つっぱつて居る——各々は御存じかな、あいつは長崎で通詞を勤めながら、ひそかに高利を貸してゐると云ふ話だ。
腕を釣つた侍　いや、某が聞いた噂では、長崎奉行の手先になつて、切支丹の者どもを訴人しては、莫大な金をまうけて居ると云ふ事だ。
太兵衛　その位の事はやりかねまいて。
額の半面に繃帶した侍　額の傷が痛んできた——忠庵奴早く戻つてくればよいが……
鐵砲傷の侍　雨あがりで、まだ濕氣が殘つて居るから、傷痕が痛むのだな。
太兵衛　雨と云へば、昨日の總攻のお布令があのどしやぶりで流れてしまうたのは、勿怪の幸ぢや。もう四五日延びてくれればよい。さうすれば、某は戰場へ出られる……
腕を首に釣つた侍　御老人。總攻めは明朝夜の引明けと同時に行はるゝ事に定まりましたぞ。先刻から御使番があつちこつちと馳け廻つて居る。
太兵衛　何、明朝ぢやと……
額を半面繃帶した侍　某もさう聞いた。
太兵衛　それは殘念ぢや。
額を半面繃帶した侍　太兵衛殿。總攻は明朝だが、まだまだ城は落ちまいと某は思うて居る。

腕を首に釣つた侍　いや、明朝は落ちよう。
太兵衛　どうして貴殿にはそれが分るのぢや。
腕を首に釣つた侍　城内に裏切者が出たさうだ。
鐵砲傷の侍　何、裏切者が……

（四五人の負傷者たちが起上る。）

太兵衛　貴殿は何處できかれた。
腕を首に釣つた侍　二三日前に山脇氏からきいた。鐵砲組の足輕がそいつの矢文を拾うたと云ふ事だつた。
額を半面繃帶した侍　大將株か——その裏切者は。
腕を首に釣つた侍　大將株だ。切支丹をころんだ奴だと云ふ話だ。
太兵衛　ふむ。忠庵のやうな奴ぢやな。
腕を首に釣つた侍　もう城内には、兵糧がないさうだ。この儘、放つて置いても五日とは持つまいと云ふ事だつた。
太兵衛　いや、さうであらう。切支丹の一揆が籠城してから、もう四ケ月にもならう。考へてみれば、兵糧のつゞく譯がないて。
額を半面繃帶した侍　我々は折角、島原まできてゐながら傷を負うただけで、一揆の首一つ取らぬとは、よくよく武運のつきた話だ。
太兵衛　（間）いや、某は明日はどうあつても出陣する。
鐵砲傷の侍　忠庵は何をして居る。早く戻つて來んかなあ。

額を半面繃帶した侍　貴殿の療治は、今、濟んだばかりではないか。
鐵砲傷の侍　(そつと足を踏んでみる)　明日戰場へ出てよいか、あいつに聞くのだ。
腕を首に釣つた侍　しかし强かつたな。この孤城に天下の大軍を引受けて、三月以上籠城したのだから。一揆とは思はれん位だ。
太兵衞　何しろ、元龜天正以來故太閤恩顧の古兵が加はつてゐるからなあ。
額を半面繃帶した侍　高い聲では云はれぬが、彼等大阪方の浪人の將軍家へ對する恨は骨髓に徹してゐるからな。
鐵砲傷の侍　總大將の天草四郎は切支丹の申し子だと云ふ話だが本統か。
腕を首に釣つた侍　うん。一を聞いて十を知る神童だと云ふ噂だ。
破傷風の侍　(弱々しい聲で)　おい、各々方、少し靜にして下さい。何か異樣な聲がきこえる……
鐵砲傷の侍　何。異樣な聲が……
(一同耳を澄す。城内宗徒の唄ふ聖歌が聞えてくる。)
太兵衞　うむ。きこえる。何ぢや、あれは。
破傷風の侍　歌のやうだ。
腕を首に釣つた侍　城内で切支丹どもが唄ふのだ。(間)折々あゝして唄つてゐる。
破傷風の侍　(苦しさうに)　氣の滅入るやうな歌だ。
太兵衞　(間を置く)　明日の落城も知らずに、不憫な奴等ぢやな。
(聖歌力强くきこえる。)
(一同沈默。)
(忠庵が例の黑奴に藥箱をかつがせて歸つてくる。)
鐵砲傷の侍　これ、忠庵待ち兼ねて居つたぞ。早く來てくれ。
忠庵　何だ。
鐵砲傷の侍　明朝、總攻めがはじまると云ふ話をきいたか。
忠庵　聞いた。
鐵砲傷の侍　某は明朝戰場に出たいのだ。どうだ。出ていいか。
忠庵　出てもいい。そのかはり、傷口が破れて、今度はもう生命がないぞ。
(破傷風の侍の苦しんでゐるのを、忠庵は氣が付く。)
鐵砲傷の侍　貴樣は某を嘲弄するのか。
忠庵　嘲弄するんぢやない。本統の事を云つてきかせるのだ。(破傷風の侍の枕元に立寄る。脈を見る)　ふうむ。容態が惡いな。(一同しいんとなる。忠庵は藥箱を開けて藥を盛る)　これ。お侍。これを飮むがいい。(飮ま

せる）
破傷風の侍　（薬を吐出す。痙攣が起る）…
忠庵　（その侍の眼を開いてみる）　もう駄目だ。
（破傷風の侍死す。）
（聖歌の聲斷續する。）
太兵衞　（涙を拭く）　七郎兵衞はよい若者であつたが、壽命には勝てぬ――かうして一緒に傷の養生をしたのも何かの緣であらう。どうぢや。各々方。今夜はこの七郎兵衞の爲めに心ばかりの通夜をいたさう。遺骸は明日燒いて、骨にして國元に某が持つて歸る。
（侍たち合掌する。）
（唐人陳穆の妻のまさが入口から覗く。）
黑奴　何だ。誰に用事があるのだ。
まさ　長崎から南蠻流の外科の先生が來てゐらつしやるのは、此方で御座いませうか。
黑奴　さうだ。
忠庵　（ふりかへる）　外科の醫者は私だ。
まさ　兵糧方の女で御座いますが、指に腫物が出來て難澁して居ります。御慈悲で御座います。鳥渡診て下さいまし。
忠庵　（不機嫌に）　兵糧方の下司女なぞ診てやる醫者ではない。
まさ　では御座いませうが生憎この邊の御醫者がみんな逃げてしまつて誰も居りませんから…
忠庵　ならん。
（侍たちは女を珍らしさうにじろじろ見る。）
腕を首に釣つた侍　おい、忠庵。鳥渡見てやつたらどうだ。
忠庵　（しぶしぶ）　俺は外科では日本一だ。あんまり見くびつて貰ひたくない。
鐵砲傷の侍　さあ、女。此處へ上れ。いま忠庵が診てやるぞ。
まさ　有難う存じます。御蔭で助かります。
（忠庵、まさの傍によつて腫物を診察する。）
額を半面繃帶した侍　どれ、どれ、どんな腫物だ。
忠庵　そこに立つては暗くて見えない。どかないか。
額を半面繃帶した侍　えゝ、因業な南蠻人だ。
（ぶつぶつ云ひながら退く。）
（侍たち笑ふ。）
忠庵　（指を押へて）　どうだ。痛むか。
まさ　はい。（顏をしかめる）
忠庵　大へん熱を持つてゐる處をみると、こりや餘程ふかく膿んでゐるやうだ。切らずばなるまい。
まさ　（青くなる）　切るので御座いますか。
忠庵　何、ちよつと穴をあけて膿を出すだけだ。切つてしまへば、卽座に拭いたやうに痛がとれる。

まさ　でも……
忠庵　このまゝにして置くと、指が腐つて落ちるぞ。思切つて切つたらどうだ。
顏を半面繃帶した侍　切つて貰へ。その方がいゝぞ。
まさ　……ではお願いたしませうか。
忠庵　さうするがよい。（外科用の小刀を取出す。まさは眼を閉つて觀念してゐる）痛いのはほんの束の間だ。
（ずぶりと切る）
まさ　痛い。（身を顫はす）
忠庵　（膿を押出す）それ、もうしまひだ。
まさ　（苦痛の表情）あゝ、痛い。
忠庵　（まさの顏をよくみる。眼を疑ふやうに首をふる）どうだ。もう痛くはあるまい。
まさ　（吐息をつく）いいえ、まだ痛う御座います。
忠庵　お前は何處ぞで見たやうな氣がする。どうしても思出せぬが。
まさ　（顏色をかへる）……さうで御座いますか。
忠庵　長崎に居つた事はないか。
まさ　……いゝえ。
忠庵　（漸く思出す）むゝ。お前はあの陳穆の女房だな。
まさ　（驚く。聲低く）どうして御存じで御座います。
忠庵　私を忘れたか。
まさ　はい。
忠庵　私は玄海灘を一緒に船で越した者だ。
まさ　（大きな聲を出す）あ、伴天連さま……
忠庵　あの伴天連だ。どうしてお前はまたこんな處へ來て居るのだ。
まさ　（複雜な感情で）まあ、伴天連さまだ。此んな處でお眼にかゝらうとは、ほんとに思ひもかけませんでした。
忠庵　どうしてお前は此處に來てゐるのだ。
まさ　あれからこつちへ歸つて參りました。天草が私の國元で御座います。
忠庵　それで兵糧方に雇はれたのか。
まさ　はい。
忠庵　お前はあの頃とちつとも變らんやうだ。
まさ　（色氣を含んで）いゝえ。もうこんなに年を取つてしまひました……
（腫物のある方の手を劬るやうに他の手でさする。）
忠庵　どりや繃帶をしてやらう。

九　いさかひ

長崎五島町の忠庵の家。秋の午後。南蠻の趣味と日本の趣味との不思議な混合をしめす豐かな裝飾が施してあ

る。此處は忠庵が書齋として使つてゐる室である。壁上には萬國地圖、星圖などが揭げてあり、また人間の骸骨が一隅に立てゝある。天球儀、小型望遠鏡などが床の間に置かれてゐる。紫檀の机に洋書が開いてある。

客　（商人風の男）和蘭の船がシヤムロの沖合で沈んだのが私の不運で御座います。

忠庵　（白髮になつてゐる）だから、私は證文のとほり、あなたの家屋敷を頂戴します。

客　どうぞこの暮れまで待つて下さい。家屋敷を取られては、私は、もう、首でも縊るより他に仕方がありません。

忠庵　約束の期限は、この御盆ぢやありませんか。

客　申譯ありません。

忠庵　あなたが家屋敷を擔保に書入れられた上は、私がそれを取るのが一番正しい仕方だ。でなければ、金を造つてゐらつしやい。

客　いろいろ奔走してみましたが、金は出來ませんでした。來年の盆前には和蘭の船が入ります。さうすれば何とか工面がつきます。

忠庵　三日たつたら私はあなたの家屋敷を受取りに上ります。どうぞ、それ迄に支度をして置いて下さい。

客　（絕望）あなたはなる程因業だ。評判のとほりだ。私があなたから金を借りたのが不運だつた。

忠庵　三日の內に金の工面がつけば、家屋敷はあなたのものだ。

客　それはきくまでもありません。序ながらきかせて上げます。浦上の切支丹の間では、あなたの事を「サタンの忠庵」と云つてゐます。

忠庵　もう用事はすみました。

客　ゐろと云つたつて、こんな處にはゐやしません。（去る）

（忠庵眼鏡をかけて、側にある算盤を取上げ、頻りに何か計算する。）

（まさが出てくる。）

忠庵　（算盤を置く）何だ。

まさ　あなたはほんとにあの人の家屋敷を取上げるおつもり……

忠庵　きまつてゐるぢやないか。

まさ　（獨語）恐ろしい。恐ろしい人だ。

忠庵　何が恐ろしい。あたりまへの事ぢやないか。三百圓の借金が期限後三ケ月經つても返らない。だから擔保に書入れた家屋敷を取るのだ。

まさ　あの人はこの三年間高い利子を拂つてゐるぢやあり

ませんか。あなたは元金をもう取返してゐますよ。
忠庵　そんな事はお前の知つた事ぢやない。
まさ　あなたはどうしてさう慾が深くおなりなすつたでせう。
忠庵　この世の中では、金が一番よく物を云ふ事をお前は知らないのだな。
まさ　末を恐ろしいとは思ひませんか。
忠庵　俺は現在が一番大事だ。死んでからの事なんかどうでもいい。
まさ　ぢや、世間の評判は。
忠庵　そんな物を氣にして、何か得になるかな。
まさ　あゝ、何故私はあなたと夫婦になんかなつたらう。あなたに比べれば、あの獄門になつた人の方がよつぽど人間らしかつた……
（黒奴が入つてくる。）
忠庵　何だ。ラマダン。
黒奴　御奉行から、これを屆けて來ました。（箱に入れた重い物をわたす）
忠庵　（受取る。箱をあける。中から大きな十字架にかゝつた基督の銅牌が出てくる）うむこれでいい。確かに受取りましたと云つて使を歸せ。
（黒奴は默つて去る。）
まさ　切支丹の神樣でせう。（忠庵は返事をしない。）何か考へてゐる）これをどうなさるの。
忠庵　（にこにこ笑ふ）これか。これで切支丹を釣出してやるのだ。
まさ　また、恐ろしい事をお考へなすつたのね。
忠庵　御奉行も大喜びだつた――これでどんな切支丹だつて、みんな見露はしてやる。おまさ。みてゐろ。また、切支丹たちが顫へ上るぞ。
まさ　だつて、この頃は御法度がきびしいので、もう、切支丹はゐないぢやありませんか。
忠庵　ゐない事があるもんか。以前とちがつて、段々深くかくれてきたのだ。俺には、それがよく分つてゐる。だからこの聖像を使つて見露はさうと思付いたのだ。
まさ　それでどうして切支丹が見露はせます。
忠庵　（機嫌がよくなる）まづこの聖像をつき付けて、怪しいと思ふ奴にふませるのだ。切支丹の宗徒には、まさかこの聖像は蹈めまい――はゝゝゝさうではないか。
まさ　私はもうあなたの顔を見るのも厭になつた――それでは、まるで鬼の仕事ぢやありませんか。
忠庵　これを蹈ませられる時の宗徒たちの顔付は、考へるだけでも樂しみだ。
まさ　（泣く）あなた。御願ですから、私を離緣して下さい。

忠庵　馬鹿な事を云へ。俺は一生お前を離しはしない。

まさ　…毎日こんな恐ろしい事ばかり見たりきいたりしてゐるよりいつそ死んだ方が餘程いい…

忠庵　人間はさう安々と死ねるものではない。一體何がそんなに厭なのだ。俺はお前に何一つ不自由はさせやしないぢやないか。

まさ　あなたと一緒になつてから、もう十年になります。そりや仰しやるとほりあなたは私には、樂をさせて下さいました。

忠庵　それぢや、何も云ふ處はない筈ぢやないか。

まさ　私はこんな事をしてゐるのが空恐ろしくて耐りません。今に何か大變な事が出來るやうな氣がします。

忠庵　そんな事があるもんか。

まさ　十年も一緒にゐながら、私にはあなたと云ふ人がちつとも分りません。あなたのなさる事を見てゐると、何處まで恐ろしい方だか、底が知れないやうに思はれます。

忠庵　(眼を光らす)　お前はまた逃げ出すつもりだな。

まさ　いゝえ、もう、逃げません。逃げて何もなりませんもの――何時もあなたに捕まつては引戻されますから…

忠庵　(聖像の銅牌を箱にをさめる)　さうだ。逃げたつて、同じ事だ。一生、俺はお前を離しはしない。

まさ　(ため息をつく)　まるで蛇に見込まれた蛙のやうなものだ。

(沈默。)

忠庵　(銅牌の箱を差出す)　これを簞笥にしまつて置いてくれ。四五日内に使はなけりやならないから…

まさ　はい。(受取つて立上る)

十　墓地

皓臺寺の墓地、夜明け。陳穆の墓と書いた新らしい石塔がある。大輪の白菊の花が手向けてある。

その墓の前に、おまさが咽を突いて倒れてゐる。

寺男が、墓地を掃いてゐる。鴉が澤山飛んできて、墓地に下りる。

寺男　(老人)　おゝ、またやつてきたな。どれ朝飯をやらう。(腰の袋から米を出してまいてやる。鴉が集まつてきて、それを食ふ)　可愛いいもんだな。おゝ、今日は茶色の奴がゐないな。おい、どうした、お仲間の茶色の鴉は――病氣にでもなつたか、それとも吹矢で吹かれて死でもしたか。(かう云ひながら、掃いてゐる)　それ、みろ、お日さまがお出なすつた。今日もまた秋ばれのいい日だ。さあ、飯を喰つてしまつたら、裏の山へでも行

つて遊んでこい。お爺さんはこれから忙がしいんだ。何だ。まだ欲しいつて云ふのか。仕様のない喰ひしんぼうだな。（また米をまいてやる）さ、これでもう、おしまひだよ。

（寺男はそこらをすつかり掃いてしまつて、陳穆の墓の前にくる。まさの死骸を見付ける。驚く。）

寺男　や、誰か死んでゐる。（近よつて引起す）咽を突いたんだ。駄目だ。もう、すつかり冷え切つてゐる。む、こりや忠庵さんの奥さんだ。やれ、まあ、飛んだ事になつたもんだ。とに角、和尚さまに知らせて來なきやならない。（退場）

（少時、鳩の鳴聲だけがきこえる。）

（寺男、鐵眼、その他三人の僧侶が出てくる。）

鐵眼　（死骸を引起してみる）むゝ。こりやおまさどのだ。

僧侶一　忠庵殿にまづ知らせなければなりません。

僧侶二　それから自身番へ屆けなければなりません。

（沈默。）

僧侶三　この陳穆と云ふのは誰でせう。

鐵眼　おまさどのの前の亭主だ。牢破りをして獄門にかゝつた男だ。

僧侶三　それで奥さんは、此處に墓をたてられたのですか。

鐵眼　さうだ。

僧侶一　忠庵殿にまづ知らせなければなりません。

僧侶二　自身番に屆けなければなりません。

鐵眼　お前たち行つて來い。

僧侶一　行つて參ります。

僧侶二　行つて參ります。

（沈默。）

僧侶二　何で死ぬ氣になられたのでせう。

鐵眼　死人に口なしぢや。誰にも分らぬ。

寺男　やさしいお方だつたが、人と云ふ者は分らんものでご座います。

鐵眼　これでやうやく生きた幽靈から逃れて、死んだ男の處へ歸つて行つたのぢや。不憫な女ぢやな。

十一　踏　　給

丸山の廓。正月八日の夕刻。妓楼が軒をならべてゐる。正月の飾。花月樓と云ふ看板のでた大きな二階建の家が中央にある。

樓上の窓からは一人の和蘭人がラベイカを彈いてゐるのが見える。家の前には、遊女たちが華やかな蹈繪衣裳をきて、家中の男女と一緒に並んでゐる。群集。やがて町の行事が走つてくる。

行事　お出で御座います。（遊女たちをのけて、一同の者は地上に坐る。遊女たちは床几に腰かける。）

（黒い羽織に袴をはいた忠庵が先に立つて、町の乙名その他の町役人三名、書役一名をつれてやつてくる。後から番屋爺が二人例の聖像の入つた箱を持つてくる。）

花月樓主人　（平伏）御苦勞さまで御座います。

（一同それにつれて平伏する。）

忠庵　お前が花月樓の主人か。

花月樓主人　さやうで御座います。

忠庵　（町の二名をかへりみて）これで家中のものはすつかり揃つて居るのだな。

二名　（主人に）どうだ。揃つて居るか。

花月樓主人　はい。殘らず揃つて居ります。

二名　揃つて居るさうで御座います。

忠庵　では、これから人別帳によつて一々引合せて、聖像を蹈ませる。（一同に向つて）皆も知つてゐるとほり切支丹は嚴しい御法度だ。それにもかゝはらず、近年また、お上の眼をかすめて、ひそかに信仰いたすものが、非常に增えてきた。そして島原の一揆のやうな上を恐れぬ仕業をするやうになつてきた。御奉行はじめ我々はお國のために、何とかして、この異國の邪宗を根だやすやうにと、一生懸命に努めてゐるのだ。ところが近年の切支丹は、段々ずるくなつて、人の眼にかゝらないやうになつてきた。そこで案じ出したのがこの繪踏だ。これで取調べると、どんな切支丹でもみんな見露はされる。もしこの中に過つて切支丹を信じた者がゐるなら、今の内に申上げてころぶがいゝ。繪踏にかゝつてからだと、自然御仕置が重くなるぞ。どうぢや、切支丹はゐないか、

（答なし）では、そろ〳〵始めよう。書役。

書役　はつ。

忠庵　まづ遊女から蹈ませるから、人別帳をよみ上げろ。

書役　はつ。

（爺が聖像を地上に置く。群集がざわめく。）

番屋爺一　これ、みんな靜かにしろ。

番屋爺二　御役の邪魔をすると承知しないぞ。

書役　花鳥。

花鳥　はい。

書役　長崎古川町彥右衛門次女そで、二十一歲――これに相違ないか。

花鳥　はい。

書役　蹈め。

（花鳥は足袋をはいたまゝ蹈まうとする。）

忠庵　足袋を脫げ。

（花鳥は足袋を脱いで美くしい素足を聖像にのせる。）

花鳥　これでよろしう御座いますか。

書役　よし。退れ。

（花鳥もとの座にかへる。）

書役　次は紫君、

紫君　はい。

書役　肥前國大村、作兵衞三女きみ、十九歳――これに相違ないか。

紫君　はい。

書役　よし。蹈め。

（紫君足袋を脱いで聖像をふむ。）

書役　退れ、（紫君退く）次は、少將。大阪道修寺町、孫八長女。まつ、二十五歳――これに相違ないか。

少將　はい。

書役　蹈め。（少將聖像をふむ）

群集の内から　みろ、みろあの足を――指が三本しきやないぜ。

書役　退れ。（少將紅くなつて退く）

番屋爺一　（群集に）これ、餘計な事を云ふんぢやない。

書役　次は喜瀨川、筑前博多、長八七女。せき、四十三歳――これに相違ないか。

喜瀨川　（大年増）はい。

（群集笑ふ。）

番屋爺二　笑ふんぢやない、

書役　蹈め、（喜瀨川蹈む）よし、退れ。

（喜瀨川退く。）

書役　次は左近、長崎浦上村、茂右衞門長女きみ、十八歳――これに相違ないか。

左近　はい。（なかなか出て來ない）

書役　出ろ。

左近　……はい。

忠庵　出ろ。

左近　はい。（ふらふらよろめくやうに出てくる）

（忠庵きつと眼をつける。）

書役　蹈め。（左近はためらふ）

忠庵　（進む）こりや、足袋を脱いでこの聖像を蹈むのだ。

左近　……

忠庵　お前には蹈めないのか。

左近　（決然として）はい。私には蹈めません。

忠庵　何故蹈めぬ。

左近　（泣く）勿體なくて蹈めません……

忠庵　（凝乎つと左近を見つめる）お前はこれが蹈めない處をみると、切支丹だな。

左近　……

忠庵　返事をせい。
左近　（泣倒れる）……
忠庵　强情をはると爲にならんぞ。（忠庵は左近の懐中に手を入れ十字架を引出す）
左近　（突然）あゝ、聖瑪利亞（サンタマリア）さま。お救け下さい。
忠庵　問ふに落ちずして語るに落ちたな……。
左近　はい。私は切支丹で御座ります。
忠庵　うむ。
左近　しかも私はあなたに洗禮を授けて頂いたので御座います。
忠庵　何、俺に……
左近　はい、浦上の在所で、まだ七つになつたばかりの時、――あなたは、その時分、貴い伴天連さまで御座いました。（泣く）
忠庵　……
左近　白い伴天連の法服（ころも）を召して、私の頭に手を當て祈つて下さいました。そして、カテリナと云ふ御名をつけて下さいました。
忠庵　カテリナ……
（忠庵は凝乎つと左近の額を見つめてゐる。）
左近　瑪利亞（マリア）さま。これはどうした事で御座います。神さまの思召が私には分りません。

忠庵　（やがて花月樓主人に）この女は何時召抱へたのだ。
花月樓主人　去年の五月で御座いましたかと記憶いたします。
忠庵　此女の平生は何うだつた。別に變つた事はなかつたか。
花月樓主人　さうで御座います。（やりての老婆に向つて）お前が一番よく知つてるから御役人に申上げるがいゝ。
やりて　はい。御役人さま。少し陰氣な質で御座いますが。まことに柔なしい女で御座います。朋輩付合もよしお客の受けも惡く御座いませんでした。
忠庵　切支丹だと云ふ樣な素振は少しも見えなかつたか。
やりて　いえ、もう、ちつともそんな樣子は御座いませんでした。
忠庵　よし、（町役人に）この女を町役人にあづける。明日奉行所へ同道して參れ。
町の二名　はい。かしこまりました。
忠庵　（花月樓主人に）お前にも追つて奉行所から御呼出があらう。委細はその時取調べる。
（主人平伏。一同それにつれて平伏する。群集動搖。）

十二　温泉嶽（うんぜんがだけ）

温泉嶽の山頂。二月始めの夕刻。雪がつもつてゐる。空には雲間の月が髑髏のやうに白く輝いてゐる。やゝ平な處に粗末な小屋がある。その前に切支丹の宗徒男女十二三人きつく縛られて坐つてゐる。同心四五人つき添ふ。中央にやゝ小高い土手がある。その向うが噴火口の跡の熱湯の地獄である。白烟がもうもうと立上つてゐる。

鐵眼と松吟が、宗徒の前に立つてゐる。醫師がゐる。黑奴がゐる。

忠庵　さあ、これ程すゝめてころばなければ已むを得ない。これから拷問に取りかゝらう。

黑奴　先生は大へん顔色が悪いやうだ。

忠庵　別に何ともない。たゞ、時々氣が遠くなるやうな氣がするが、これは心臓の悪いためだ。別に大した事ではあるまい。

黑奴　それならばいゝが……此處は身體には悪い所だ。

忠庵　（土手にのぼる）丸山の遊女左近を曳いて來い。

（黑奴がついてゆく）

同心一二　はつ。（左近をつれて土手の上に行き引据ゑる）

忠庵　左近。

左近　はい。

忠庵　拷問にかける前にもう一度訊ねる。どうだ。轉んで助かる氣はないか。

左近　（眼をつぶつて返事をしない）耶蘇基督（ゼススキリスト）、聖母瑪利亞（せいぼマリア）この哀れな下婢（しもべ）に限りなき御恵を垂れ玉へ。亞孟（アーメン）。

忠庵　では金輪際、ころばないつもりだな。

左近　はい。

忠庵　よし、（同心に）この女を熱湯の地獄へ漬けろ。

（これをきくと縛られた男女の切支丹が聲を上げて、聖瑪利亞（サンタマリア）、耶蘇基督（ゼススキリスト）と叫ぶ。）

（左近の姿は土手の下にかくれる。）

忠庵　その女の着物をはげ。丸裸にするのだ。（間）煮えたぎる熱湯を肩からかけろ。（間）どうだ苦しいか。

（左近のうめき聲がきこえる。）

忠庵　苦しけりや、ころべ。

（沈默。）

忠庵　まだころばぬ。強情な奴だ。（間）もう一パイ硫黄の熱湯をかけろ。

（烈しい呻り聲。）

忠庵　どうだ、ころぶか。

左近の聲　（甲走つてゐる）あゝ、サタン！

忠庵　何、サタンだ、よく云つた——段々苦しくなるぞ。いゝか、

黑奴　先生。

忠庵　何だ。

黑奴　眼から涙が流れてゐる。何うしたのだ。

忠庵　多分硫黄にむせたんだらう。氣にするな。えゝ、その女を熱湯の池に漬けてやれ。

同心の聲　女が氣絶しました。

（醫師が急いで土手から下におりる。）

忠庵　死んだか。

醫師の聲　いゝや、まだ脈があります。少しやすませれば、呼吸を吹きかへしませう。

忠庵　（急にぐらぐら眩惑を感じて、黑奴に捕まつたまゝ倒れる）ラマダン。

黑奴　先生、どうしました。先生。

（忠庵死す。）

鐵眼　（かけよる）何うしたのだ。

松吟　病氣だ。

鐵眼　（顏を見つめて）いや、もう駄目だ。

松吟　死んだのかな。

鐵眼　うむ。

醫師　（上つてくる。脈を見る）もう、脈がありません。病氣は卒中です。

松吟　南無阿彌陀佛……

（鐵眼は默禱する。同心が左近を抱て土手を上つてくる。）

松吟　この人は不思議な生涯を送つた人だつた。然しいゝ人とは云はれないやうだ。

鐵眼　氣の毒な男だつた。

黑奴　（泣く）先生はいゝお方だつた。

鐵眼　これでこの男の業がやうやく滅したのぢや。

木下杢太郎篇

和泉屋染物店（一幕一場）

登場人物

おとせ
おその
おけん
おさい
徳兵衛
清右衛門
幸一
松次郎

義太夫節にて幕あく。

舞臺は紺屋和泉屋の内部を現はす。上手は床低き店先、下手は土間。土間には數多くの藍壺並び埋られてあり。そこと店の框との間には叩きの庭ありて奥の方に行くやうになりて居る。奥と店との境には紺地に『和泉屋』と染め出したる暖簾が懸かる。叩きの庭に向へる框には細木格の四尺障子二枚あり。藍壺の土間の上に電燈あり。また數本の竹竿を渡し、それに色々の絲を懸けてあり。下手は表の大戸となり、戸の前に腰高障子を閉めたり、それより奥は戸袋と壁とにて、その上のところに門口より取り込みたる暖簾擴げたるままに懸る。角の中に泉、その下に『萬染物所』右に『和泉屋』と二行に染め出されたり。赤き漆の地に金字にて京染と彫りたる看板も壁に立てかけられてあり。店は後ろに戸棚あり、其あひだに奥の間にゆく半間の障子、奥まりたる所に帳場。その上に電燈あり。柱には時計、神棚には燈明と注連飾。戸棚は皆戸をはめたれば、そこここ小ぢんまりと片付きて居る。殊に時は正月元日の夜九時過ぎにして、戸外には晝ごろよりの雪なほ降り續き、街道に人聲もなく、家の内もまた靜かなる心持を現はす。折々雪の崩れ落つる音をきかす。店先にはおとせ、おさい、おけん、おその四人、大きなる青銅の火鉢の傍にて話をして居る。あたりに茶道具、菓子鉢、餅を取りたるめいめい皿などあり。今しもおけんは膝より三味線を滑らしたる所なり。輕き笑聲起る。おそのは愼ましく帳場の格子の前に坐りて兩手を膝に並べて居る。職人の松次郎は藍壺の上に吊したる竹竿より紺絲を外して兩手にかけてばたばたと振ひ、一把一把づつ數へて居る。

おけん　（二十六歳。小造り。場所風の意氣なる身なりをして居る。髪はややあだなる丸髷。氣さくなれども涙もろき質）　ほほほ、もう之れぎりなのですよ。もう後は知らないの。

おさい　（四十六歳。大きなる姿體。同じく寛濶なる性。昔風の古びたる小紋の羽織など著てゐる。落ち付かざるさまに坐る）　さあ、私は往かう。かう道草を食つては居られない。——それでもまあ能くそれまでに仕込んだねえ。もうお前位の歳になつては、覺えられるものぢや無いのに。（立ち上る）

おけん　まあ、をばさん可いぢやありませんか。ごゆつくり御話しなさいな。——でも小さい時に少しでもかぢつて置くと違ひますわ。——をばさん、まあ貴方は往くのですか。

おさい　もう彌つから使が幾度家へ來たか知れはしない。その上また、もうこゝに小一時間も居たのだよ。もう事によると閾は引いてしまつたかも知れない。それでもまあ往つて見よう。ぢや、ねえさん、さよなら。早かつたらまた歸りに寄りますよ。——　ぢや、おけんさん、お前さんもまた遊びにお出でなさいよ。

おとせ　（五十二歳。痩せて丈高き方。極端に愼ましき口許。歳よりもやゝはでなる昔風の袖の著物をきる。小さき丸髷。眉を剃り歯を染めて居る）　ぢやまたお寄んなさいましよ。——おその大戸を閉けておやり。

おその　（十九歳。丈やや低く太りたる方。世慣れず、素直なる仕込。僅か恨あるやうなる表情の目許。廂髪。新しき質素なる著物。——庭に下りて、障子の棧にかゝりたる、蔦の紋の小さきぶら提灯に燈をともす）　はい、ぢやをばさん。

おさい　（黒めりんすのおこそ頭巾を被り、上り口に立てかけたる蛇の目の傘をとりて）　はい、有難う、おそのさんそれぢや後を閉めておくんなさいよ。（おその表戸をあける）

おさい　おや外の明るいこと。まるで月夜のやうだね。月夜に提灯は外聞がわるいと云ふけれども、雪の夜だから構ふまい。やつぱり點けてゆきませう。では、ねえさん、さよなら。——　おけんさん、さよなら。——おや御飾の繩が垂れてゐますよ。何だと思つた、頭の所が——おゝ寒い。ぢやおそのさん、さよなら、お休みなさいよ。（去る）

おその　さよなら。（戸を閉し、その前の障子をもしめて戻る）

おけん　富田屋のをばさんは何時も元氣がよござんすねえ。——ぢやも少し彈いて見ませう。佐和理の所だけでも、やつぱり素人にはさわりのとこが一番面白うござん

すわねえ。――太棹だと好いんですけど――こんな詼三味線ぢや、まるで音なんど出やしませんわ。
おとせ　大へん註文が六つかしいのだね。だつてもうお前六七年といふものは手をつけた事もないのだもの。
おその　おつ母さん。そら何時ぞや富田屋のおていさんが歸つてお出での時に、貸して上げたぢやありませんか。
おとせ　おや、さう、さう、さうだつたねえ。さうだ、それであの時に絃も仕替へて呉れたのだつた。
おけん　さう？　おていさんが歸つてきたの。私はもう久しく會はない。變つたでせうねえ。
おとせ　もうすつかり。でもお前大さうりうとした態をしてお出でだつたよ。一時はね、そら、あの人に捨てられて、隨分困つた相だつたけれど、それでも今ぢや好い旦那を見付けて、此節ではおかみさんで帳場に坐つて居られるのだとさ。色々と苦勞した話をして行つたよ。
おけん　もう〳〵さう云へば一昔經ちますものね。世が世ならあの人だつて――お、さう云へばあの菊屋さん店を閉ぢたつてことですねえ。
おとせ　お前、この三四年といふものは、どう云ふわけだか毎年々々不景氣で困つてしまふのだよ。去年はまた一層ひどくてね。(間)　松つアん。おい、松次郞。お前ももうお仕舞ひよ。お正月の元日ぢやないかえ今夜は。この雪ぢや明日の初賣だつて、そんなに人は來はしないよ。
松次郎　岡津屋のあのばあさんはあしたきつと來ますよ。もうこれで終へるのです。
おとせ　それだつてお前、構やしないよ。もうお休みよ。そしてもうこんなに雪が降るのだから、あしたの朝だつて、そんなに早くないつて可いのだよ。さあお休み、お休み。臺所へ行つて甘酒でもわかしておあがり。
おけん　(三味線の調子を合はせながら、氣さくに)　ねえ松つアん。紺屋の明後日つて昔から言ふぢやありませんか。お正月ですもの、もうお終ひになさいよ。
松次郎　いや、もう終へました。(間)
おけん　(松次郎に)　お前さんがそんなに働いてゐるのに此方ではこんなにのんきに三味線なんど彈いたりして濟まないわねえ。――ねえ、をばさん、さつき鍛冶屋でもかんかんやつてましたよ。元日のやうでもないぢやありませんか。――でもなぜそんなに不景氣なのでせうねえ。
おとせ　鍛冶屋さんはありや少し別だがね。然し不景氣には不景氣だよ。内だつても、町の税だの、所得税だのばつかりは昔の割に取られて居るのに、もう昔のやうにやつてはゐないのだし――
おけん　どこでも不景氣不景氣つて――まあいやですねえ。何故でせう。橫濱で、内に居てもね、三味線一つ彈

くのもあたり近所へ氣兼ねなんですもの。いつも困つたやうな顔をして、まあかう謹愼してゐないと跋が合はないんですもの。（間。急に笑談らしく）ね、をばさん、そりやさうと、私にもねえ近頃始めていろんな人情や世間のことが分つて來たんですよ。

おとせ　（微笑）そりやさうさ。その年齢で分らなくつてどうするのだえ。

おけん　いえ、でもねえ――三味線の歌の文句なんぞもねもとは唯何のわけもなく歌つたんでしたがね。やつぱり歌など丶云ふものは上手に作つてあるもので御座んすわねえ。

おとせ　さあ、前置は後にしてまた歌つてお聞かせよ。お前、こんなにのんきにして、お前の三味線なんかを聞くやうなときは滅多にありはしないのだから。お父さんがあ丶寢てしまつては、私一人で、お前、家のことを何から何までしなけりやならないのだからね。早くおそのに養子でも貰つて後をやつて貰はなくつちや私やもうかなはないのだよ。

おけん　さういへばねえ、幸さんも――

おとせ　だから、さあ、語つてお聞かせよ。

おけん　（氣をかへて）ぢや親類の二段聞きでもして貰ひませうかしら。（新口村の佐和理のところを小さい聲で語りながら彈く。此間に松次郎は片腕に一ぱいの紺絲をかけて、庭の電燈を消し暖簾をくぐつて奧の方に去る。外を火の廻りの拍子木が微かに過ぎてゆく。おけん、中途にて文句につかへて手をやめる）さあ、又忘れてしまつたわ。本をあてにしてまだ文句も覺えないものだから――親子は一世の緣とやら、それから何でしたかねえ。この世からなるぢやない。何でしたかしら。え、もう休しませう。忘れてしまつた。――何だつてそんなに眞面目になつて聽いて居るんです。きまりが惡るいぢやありませんか。（時計一つ打つ）

おとせ　おや、おその、お前臺所へ行つて皆んなにお休みつて云つてお出でよ。もう九時半だよ。それでね、もし明日のあさも雪ならば――明日だつて休みつこはありやしないよ。そんなに早くなくつても可いつてね。六時頃までにお節が視へさへすりや可いつて云つて來ておくれな。それから、もし甘酒がわいて居たらこ丶へも持つてお出でな。

おその　（立つて奧へゆく。障子を明けると屏風を立てたる次の間見ゆ）

おけん　ねえ、をばさん、あの事は早くきめてしまつた方がよ御座んすのよ。おそのさんの方だつて滿更ぢやないんですよ。確かにさうよ。養子でないつて好んですよ。

一緒にさしておやんなさいよ。

おとせ　だつてお前、幸一は全く當てになんないのだからねえ。

おけん　ですからさ。祝言はもつと延ばしたつてそりや可ご座んすわ。幸さんがお歸りになつて、幸さんにお婆さんでも出來てからでそりやよござんすがね、――（やさしく）ね、をばさん、私やほんたうにさう思ひますの。あの年頃に思つた事が一番本當なんですわ。年をとれば考も變るつて云ふけれども、そんなに人間の考へと云ふものは變るもんぢやなくつてよ。あの頃に思つた事が一番邪念がなくつて正直なんですわ。もう可いわ、私がどこまでも肩を持つて上げるわ。――私やねえ、をばさん（膝にねかしたるままに三味線を弄しながら）今になつて見るとつく〴〵とさう思ふのよ。をばさん、私やよつぽど馬鹿でしたのねえ。

おとせ　どうしてさ。

おけん　だつて――私はよつぽどおぼこだつたのね、ちつとも世間の事だの、人情だのつてのが分らなかつたのねえ。

おとせ　さうでもあるまいよ、お前は人よりも賢い方だつたよ。

おけん　（笑）そんな事はありやしませんわ。（蓮葉に）隨分だわね。――（沈みて）ねえ、をばさん、私はをばさんにも濟まない事をしましたのねえ。

おとせ　何をさ。

おけん　何をつて。

おとせ　お前の云ふ事はちつとも分りやしないのだよ。

おけん　さう。をばさんには分らなくつて？――そんなら云ひますがね、をばさんも幸さんも、私があすこへ嫁に往つたのを好い事には思つては居なかつたでせうね。

おとせ　何がお前、今更そんな古い事を誰が思つてゐるものかね。

おけん　でもさうばかりは行かないわ。私にも今になつて見れば色々と思ひ當ることがあるのよ。

おとせ　そんなつまらない事はお休しよ。お前それよりかまた歌でも聞かしてお呉れな。

おけん　ええ、ええ、それだから、それはもうそれ限ですからさ、幸さんを早く家へ呼んで、好いお婆さんでも貰つて、をばさんだつて、もう樂をしなさいましな。

おとせ　本當に、ねえおけん、さうなつて呉れると私やどんなに嬉しいか知れはしないのだよ。

おけん　私もね、生れ故郷の古い家に、をばさんだの、をぢさんだの中にかうして居た方がどれ程よかつたか知れはしないわ。知らない他人の中で苦勞するよりは。

おとせ　何でそんな老人じみた事を云ふのだえ。お前などは旦那さんが働き者だからこれからずん〳〵世の中へ出てゆくのだよ。——だがね、今度の事は私にはどうしても氣になつて困るのだよ。ねえ、おけん。どうしたら可いだらうねえ。

おけん　大丈夫よ、をばさん、私がさつきからあんなに云つてるぢやありませんか。そんな事はありやしないわ。幸さんみたやうなあゝいふ人が——

おとせ　お前は何にも知らないのだよ。——幸一は昔の幸一ぢやないのだよ。

おけん　そりや貴方の誤解だわ。

おとせ　さうでないよ。事によると——今度だつて、彼がやり兼ねまいものでもないからさ。

おけん　だつてそんな理由が無いのでせう。（間）　でも兄さんはもう著きさうなものですのにねえ。

おとせ　さうさ。昨日の手紙では確かに今日中には歸ると云つてあつた。都合がよければ幸一をも一遍兎に角一緒に連れてかへると書いてあつたが。

おけん　ぢや屹度來るでせう。も少し待つてゝ見ませう。

おとせ　もしや萬一幸一があの事件に關係して居たならどうしようねえ。

おけん　どうしてをばさんにはそんな事が考へられるのでせうね。

おとせ　お前は知らないからだ。何にも知らないからだ。

おけん　でもねえ、をばさん、そんな取越苦勞よりおそのさんの話の方が肝腎よ。後生ですからおそのさんの方はくれ〴〵も頼みますよ。ねえ——（奥の方に人の足音す。間。三味線の絃を弄ぢる）

おその　（甘酒の茶碗など持ちて來る）　今雪で臺所の煙突が折れたのですつて。

おとせ　煙突が——その音だつたのかえ、さつきのは。

おその　えゝ。

おとせ　もう皆な寢たかえ。

おその　もう寢るやうに言つて置きました。でもをぢさんが多分今夜お歸りでせうから起きて居ますなんて云つてゐます。松次郎は兎に角、も一遍河口までお迎へに行つて見ませうかなぞと申して居りますの。

おとせ　いんやもう可いのだよ。船はもうさつき笛の音がしたから——あれからかれこれ二時間も經つ。今日は歸つては來ないのだらう。もうこつちの事は構はないからみんなお休みと云つてお出で。（おその去る）

おとせ　昨日の新聞の夕刊に、またあの鑛山の騒動のことが少し許り出て居たが——（聲をひそめ、目を瞬りて）そしてねえ、お前、よくは分らないが、それがまた、あ

の事件に關係してゐるのだと云ふので、警察が活動を始めたなんて書いてあるのだよ――。
おけん　あの事件て？
おとせ　そら、あの……（聞き難き聲にて云ふ）
おけん　（驚きて）　まあさか……そんな……
おとせ　若しもさうだつたら何うしようねえ。
おけん　（不安を被ひて）　まさか、そんな。（瞬間の沈默）
おとせ　だから節季の忙はしい中を態々お前の兄さんを賴んで山にも往つて貰ひ、土地に親類も少いからお前にもかうして來て貰つたわけなのだよ、お前だつても忙はしい身體だのにねえ。
おけん　いんえ、をばさん、私は內に子供があるのではなし、又商賣が商賣ですから、節季だと云つて外の人様のやうに忙がしいと云ふのではなし、それは構ひはしないんですが。――でも何うしてをばさんは、幸さんがあの仲間に入つて居ると仰つしやるのです。私にはちつとも分らないのです。
おとせ　それはまだ詳しくは分らないけれども、幸一がもう去年の春頃からあの山に居たと云ふ事は私はうす〳〵知つて居たのだよ。そしてやつぱりあの主義の事から始終お上の注意を受けてゐたと云ふ事も知つて居たのだよ。今度あの山の騷動で呼ばれた人の中に劍持健作といふ人の名が見えて居たのさ。（目を光らす）
おけん　（疑問の表情をする）
おとせ　そりや全く私の知らない名だけれども、私はどうしても――幸一のことぢや無いかと云ふ氣がしてならないのだよ。そしてまたさう思ふわけもあるのだよ。（聲を低めて）一遍――そら一昨年ね、あれがしばらく內に歸つて居た時に――あの時だつてお前――（更に低く）あれの友達が捕まつて牢へはひつたのだつて――わたしやなんだか本當に自分の子ながら氣味が惡かつたよ。夜でなけりや外へも出なかつたりしてね、それで晝間は一日案じ屈托してゐてね。――その時あれの机の上に手紙が一本書いてあるのさ。私が部屋を掃除に往つて、何なら女中に出させようと思つて見ると、裏の名が違つてゐるのさ。その時たしかに劍持生つて書いてあつたのだよ。可笑しいからあれを呼んで聞くと、何でもないやうな振をしながら、其實引奪くるやうにその手紙を取つちやつて、どうかしたのさ。其時はをかしな事をするなとは思つたが、あまり氣にも留めては居なかつたが、今考へるとそんな名で手紙をやり取りして居たのではなかつたかと思はれるのさ。
おけん　（何か思ひ當るさまなれども、定かには言ひ兼ねたるが如く）　だつて、だつて――そんな事はありやしない

でせう。今度の劍持つて人と何も關係はありやしないでせう。
おとせ（聲を低めて）私やどうしても幸一が劍持つて隱れ名を持つて居るのぢや無いかと思ふのだよ。
おけん（不安なる顏をする）まさか。
おとせ　そんな筈はありやうは無いと思ふけれども、また然うだとも思はれてならないのさ。
おその（再び登場）まあ、まだおわがりになりませんか。冷めましたでせう。
おけん　おやさう／＼。話に氣をとられて。（碗をとる）でもそんな事はありやしませんよ。
おとせ　ありはしまいと思ふけれどもね。――まあ冷めないうちおわがりよ。
おけん　え、ぢや頂きます。――（別の感情にて）ねえ、をばさん、私の子供の時分には、藤三郎叔父さんが三味線が上手でしてねえ。よく松づくしを敎へられましたがねえ――あの時分は男の人が義太夫だの踊だのを習つたものでしたねえ、全く今とは世が違つてたのですね。
おとせ　あの時分だつて、お前、三味線を彈いたりした人達は今は皆んな零落れて居るわさ。
おけん　さうですね。富田屋でも、鍜冶屋でも――。でもねえ何だかあの時分が懷しいわ。大津繪だの端唄だの彈くとあの時分の事が思ひ出されて悲しくなることがあるわ。（碗を下に置き、半ば無意識に弄ぶさまに、指先にて昔の唄を彈く。そのあひだ遠くにて喇叭の音する。戶外に微かなる人聲。少時して田舍の箱馬車の表の街道を通り去る響す。長き間。雪の夜の深き寂寞）ねえ、好いものですねえ、歌といふものは。
おその（突然）おつ母さん、をぢさんでは無いのでせうか。
おとせ（驚きて）え、何がさ。
おその　今家の外で何か聲がしたやうですよ。
おとせ　さうかい、今の馬車より外にかえ。
おその　えゝ、いまよ。
おけん　さうねえ。人だつたかしら。雪が落ちたんぢや無くつて？
おその　さうですねえ。――私は――も少し嚮汽船の笛が鳴るやうでしたが――汽船が著いたのぢやないでせうか。
おとせ　汽船は八時ぢやないかえ。そしてもう嚮著いたと云ふぢやないかえ。
おその　もしかすると、さつきのは別の汽船で、今遲れて著いたのぢやないでせうか。
おとせ　それでも河口からはこゝまで三十分はかゝるよ。

おけん　をばさん、いまの馬車はどこから來たのです。河口からぢや無くつて？
おとせ　いやあれは違ふ。あれは峠から來る馬車さ。今夜はこんなに晩く來たのかねえ、お正月だのに。（間）
おその　（低く）あれ、戸を叩いて居るやうよ。（庭に下りる）
おとせ　今夜は是非歸るつては書いてあつたが。
おその　（表の障子をあけ、表戸の潜りの傍による。低く）何方さまですか。（間。聲なし）
おけん　おそのさん、さうぢや無いでせう。
おその　（氣味わるげに後ろを向く。二三歩あとへさがる）
おけん　（おとせも聲を合せて）あ。
おその　（又戸に近づき）何方様ですか――をぢさんですか。（潜りの開きの猿を外さむとす）
おとせ　（不安なる顔にて角の大黒柱までくる）さうなのかえ？
おその　私です。――今お著きですか。（潜りの戸をあく）
清右衞門　（四十七歳。黑の二重廻しと同じ色の頭巾に、泥にまみれたる日和下駄と云ふ旅裝束。蝙蝠傘をそつと戸の外にて振ひ、家の戸口を入りて身體を搖り動かして外套の雪を落す。森閑たる夜のうちにこのさやかなる響ことごとしく響く。一味の不安の氣人々の胸を襲ふ。お園は開きをしめてまた店の上り口に戻る）
おその　（不安さうに）をぢさんですか。大さう遲くなりましたねえ。
清右衞門　（默したるままに蝙蝠傘と風呂敷包とを差出す）
おその　（それを受取りながら）をぢさん。
清右衞門　（外套を脱ぎ靜かに雪を拂ひ落す。鼠羅紗の古風の鳥打帽子。兩手著しく打震ひて居る。疑深く四邊を見廻はす）
おけん　おや兄さん、御歸へんなさいまし。
清右衞門　（頷く。外套を差出す）
おその　（外套を受取る）
清右衞門　（店先に來りて框に腰を下ろす）ねえさん、只今。大さう遲くなりました。――もう皆休みましたか、――おその、店や臺所衆はもう寢たかい。俺は寒くてたまらない。少し寄り道をして山を越して來た。それ、下駄なんぞはこの通りだ。
おその　お濯ぎをもつて來ませう。
清右衞門　おその、それより早く飯にして呉れ、俺は上らない。すぐ今夜は家に歸る。腹がへつた。もうへとへとに勞れた。濟まないが、早く何か酒を一杯もつて來ておくれ。屠蘇でもなんでも構はない。冷で結構――臺所の人は起すなよ。わけがある。靜かに。そつとこゝへ持つ

て來い。何でも可いからな。

おけん　兄さん御機嫌よう御座います。

清右衛門　おゝ、おけんか。お前も來てくれたのか。

おけん　えゝ、此家(こつち)に厄介になつて居ります。（おその去る）

おとせ　まあお上りなさいよ。内から下駄をはいてゆけば可いぢやありませんかえ。今夜は内へ宿まつてお出でなさい。可いだらうがね。――もう今夜は歸らないと思つてゐたよ。

清右衛門　えゝ、大へん遲くなつて。だが今夜は家へ歸りますよ。ねえさん皆寢ましたか。手紙は著いたでせうね。

おとせ　そして山の方へも行つてくれたかえ。

清右衛門　えゝ、後でゆつくり話さなけりやならないのですがね、東京へ行つて直ぐ上村さんを訪ねました。やつぱり山の方に居るつて事が分りましたから早速行きましたがねえ。

おとせ　そして何うだつたのでしたえ。

清右衛門　ねえさん、にいさんはまだ起きてゐますか。

おとせ　もう寢たけれど、何なら起して來ようかえ。

清右衛門　にいさんはどうです、安排は。

おとせ　やつぱりはかばかしくは無いが、それでも別に惡くもならないのだが。

清右衛門　ねえさん、實はね今度の事は少し込入つて居ましてねえ。

おその　（會席膳に皿などのせ、玻璃の燗徳利に酒を入れたるを持ち來る）

おとせ　お前さん、上つてゆつくりして往けば可(よ)いのにねえ。そんな腰かけでなんぞ……。

清右衛門　實は少し上つて居られないわけがあるのです。あとでゆつくり云ひますがねえ。――おや濟まない、おそのさん、酒のみはいぢがきたなくてねえ。

おとせ　さつき汽船が著いたといふから見せにやつたがお前さんは見えなかつたと云ふからどうしたかと思つたよ。

清右衛門　え、さうです。實は此(こゝ)までは乘つては來ないのです。前の港で下りて雪の中を歩いて來たのです。もう日はとつぷり暮れてしまつたでせう。知つた道ではあるけれども提灯は無し、二人でてく／＼と歩いて來ると：：

おとせ　誰か道連れがあつたのかえ。

清右衛門　えゝ：：そこまで：：。で、てく／＼雪の中を歩いて來ましたが、本當に泣きたいやうになりましたよ。山から見ると海の方はぼおつと微(かす)んでゐるでせう。遠くの方に小さく沖の蒸氣の灯(ひ)が見えるばかりです。まるで

騙落者かなんぞのやうに……あんな事は始めてゞすよ。いや、妙な氣がしましたよ……

おとせ　なぜ――だつてお前さん、そんな山道なんぞしなくつても……

淸右衞門　ですけど、少し用があつたもんですからね――。丁度峠の少し前の所で幸ひ馬車に遇つたものですから――どこの別當だか知らない男でしたがね――そこん所まで乘つて來たのですよ。えゝ、山は隨分積りましたよ。隨分難澁でした。それでも雪あかりで道はよく分りました。乘合も四五人ありました。下りには別當が馬を飛ばして、分けなく著きました。――いや、さう〳〵、一寸御免なさいましよ。忘れ物をしました。ほゝ、大事な忘れ物を。途中ではあんまり寒いから馬車を下るのもいやだつたもんで我慢をして來たのです。いや、上るのは面倒臭い、一寸外の憚りへ行つて來ませう。――あ、おその。一寸、一寸――まあ一寸お出で。（おそのに耳打す）

おその　どつかまた直ぐお出でになるのですか。

淸右衞門　いゝからさ。また後で分るからさ。よいかえ。

（また上り口に戻り、德利を持ち、そのまゝ奥へと去る）

おけん　ま、どうしたのでせう、兄さんは。

おとせ　おけん、おけん！

おけん　え？

おその　おつ母さん。

おとせ　何だえ。

おその　何だか私心配ですわ。

おとせ　何故え？

おその　あの――外に誰か居るのでは無いでせうか。

おとせ　どうしてえ？

おその　でも――嚮たしかにも一人外に居たやうでしたよ。それにをぢさんが握飯を大急ぎで拵へてくれつて――。

おとせ　まあ。

おその　何だか私氣味がわるいわ。

おとせ　（思入）そんならお前早く拵へてあげれば可いぢやないかえ。おけん――

おその　兄さんでせうか。

おとせ　あ、私は本當に心配になつて來た。（庭を見まはす）

おその　下駄ですか。持つて來ませう――あ。

おとせ　（大きく呼び懸ける）淸右衞門さんですかい。

淸右衞門　（奥より出て來る）えゝ私、私。（おその不思議さうに淸右衞門の手許を見る）あ、私は飛んだ粗相をした。雪の上に酒の德利を落してしまうた。

おその　（思入）まあ。臺所に燈がついて居ましたか。暗

かつたでせう。
清右衞門　いや神棚の御燈明でよく分つた。外は雪でお前月夜のやうだ。それに鍛冶屋でまだ起きて居てぽつと明がさしてゐるわ。
おその　臺所の戸締をしてくれましたか。
清右衞門　いや頓と忘れた。――おその、さつきの事を頼むよ、早く。
おその　えゝ。（おとせと顏を見合はせながら、奥に去る）
清右衞門　（辟を低めて）　ねえさん、大變なことになりましたよ。
おとせ　（色を變ず）　え、え、やつばりそれぢや幸一が‥‥。
清右衞門　まあ〳〵、わけは後で分りますがねえ、今來て居るのですよ、幸一が、ねえさん、私と一緒に。
おとせ　えゝ、どこにえ？
清右衞門　今木戸口を開けてやつて裏の物置の所にゐるのですよ。
おとせ　まあ。
清右衞門　今夜中にまたすぐ出かけて行かなけりやならないのです。だから早く辨當を拵へてやつて下さいよ。ねえさん幸一は罪人ですよ。大へんな、大へんな罪人ですよ。え、もう飛んだ事になつてしまつて。そしてもう嚴しく手が廻つてゐるのですよ。一刻もぐづ〳〵しちや居られないのですよ。さつきも何か氣味のわるい人に出つかはしましてねえ、――それに汽船問屋の人にあふのもいやですから、そんな事でこゝまで乘つて來ないで早く上陸つてしまつたのですよ。
おとせ　（取亂して）　どうしてさうなのだえ。まあ、何をしたのだえ。ぢや、やつぱり――。
清右衞門　えゝ、ねえさん、山の方ばかりぢや無いのですよ。あの方ですよ、ほら、あの方ですよ。
おとせ　（色を失ふ）え、やつぱり、それぢややつぱり――。
清右衞門　本當に私やびつくりしちやつた。えゝ、まあだけど、今は夫れどこぢや無いのですよ。まあわけは後にして、さ、早く會つてお出でなさいよ、さ、早く。
おとせ　早く、おそのや、おその。
清右衞門　靜かに、まあ、皆を起しちや不可ません。
おとせ　早くこゝへ呼んで來ておくれな、ね、幸一をさ。早くよ。
清右衞門　不可ません。そうつと、そうつと。――裏の稻荷さんの蔭に居るのですよ。
おとせ　（足袋はだしとなりて庭に下り立つ）
おけん　（同じく足袋はだしとなる）
清右衞門　あ、まあ、靜かに、しつ。おい、おけん、何だ

い、まあ、お前はお出で、お前はそこにおいで。

おけん　（その儘に立つ。おとせは去る）　兄さん。（間）

清右衛門　もう仕方がない。唯諦めるのだ。諦めるのだ。（涙す）

おけん　兄さん、どうしたんですねえ、一體幸さんは。

清右衛門　えゝ、まあ何でも無いのだよ。何だつてそんなに喋々しく云ふのだよ。唯つまらない山の騒動さ。

おけん　ですけどねえ本當に。――やつぱりそれぢやあの――。

清右衛門　おけん、お前、をぢさんも起して來ておやり。もう今日が――さあ、をぢさんにも會つてやつて貰つておくれ。

おけん　（上り框に輕く腰かけて足袋を脫ぎて上にあがり、それを揃へて隅に置く）をぢさんを起しませうか。

清右衛門　（少時の沈默）　さうだ。おれが行かう。どこにお休みになつてゐるのだえ。面倒くさい、おれが自分で一寸會つて來よう。さう足も汚れては居ないやうだ。（足袋脚絆を脫す）

おけん　（低く、強く）　おそのさん、あの――。

清右衛門　何、よし、よし、さう汚れても居ない。（懐より手拭を出して、足指の凹き所を拭ふ）

おけん　ねえ、兄さん、本當にあの方つて、何なんですよ。私心配なんですもの。

清右衛門　（異常なる眼差にておけんを見る）　おけん、お前は新聞を見たらう――。

おけん　（右の如き瞬間の凝視）

清右衛門　あの恐ろしい――（迸る涙。腕を顔にす。そのまま奥に入らむとする）

おけん　暗うござんすよ、暗う――。

清右衛門　大丈夫だ、大丈夫だ。

おけん　電氣を點けませう。（清右衛門のあとにつきて入口の所までゆき、思ひかへして座に戻り、物案ずるさま。それから三味線や其他の器類を片つける）

おその　（泣き膨らしたる眼にて庭を奥より來る）

おけん　おそのさん、會つて來たの、お前さんは。

おその　ねえさん。（と云ひたるまゝ店の上り口にて忍び泣く。――清右衛門德兵衛を伴ひ奥の間より來る）

おけん　おや、もう火がすつかり消えて居りました。

德兵衛　（六十餘歳。半白の髪。髭なし。あまり商人らしかぬ風采。寢間着の上に厚き布子を羽織りて居る）　いや、いらぬ、いらぬ、些とも寒くはない。

幸一　（二十九歳。痩せて丈高し。顔青く眼凹み、斑らなる髭あり。鑛山にて働く人の服装にて、此場とは全く遠離

せる別の世界より來れるが如く見ゆ。――異常に沈着なる歩調にて庭の奥より來り少時土間に立ちてやゝ心決せざるが如き態す）

おけん　（土間に面せる店の障子を開く。幸　と視線を合はす。はつとしたる心持。その途端に幸一歩を動かしたる故沈默は破裂せずに保たれたり）

おとせ　（この度は下駄もはきて蹌踉めきながら幸一の後を追ひて來る）　さあ、幸一、お父さんだよ。お父さんだよ。よく、よく　お會ひ申しな。どんなに家ではお前のことを案じて居たか知れはしないのだよ。まあ本當に、どうしたら、お前、どうしたら可いと云ふのだえ。（泣く）

幸一　（極めて冷靜に）　お父さん。（間）　お久しぶりで御座います。お變りもありませんか。（異常なる沈默の間）

おとせ　幸一ですよ、幸一ですよ。ね、幸一、お前がもう一月早く歸つて來てくれたなら、こんな事もなかつたらうにねえ。幸一。幸一。幸一。（泣く）

幸一　おつ母さん、もう云つて下さるな、之も運命です。いやいや、運命と云つては、虚になる。かう成らなくてはならない事がさう成つた許りです。人間業とは云ひながら、是が自然の當然な成行だつたのです。嚮も道々をぢさんに御話したのですがね――實際今考へて見ると私は自分でどうする事も出來なかつたのです。何だか分らない力が、ずんずんと私の背中から押して來たのです。――實際お父さんや、おつ母さんや――親類一同には、まことに濟まない事をしました。昔なら一門殘らずお仕置きになる可きでした。ですけどねえ――。

おとせ　何もお前がそんな事をしないだつて、それにはお上の人達がどうでも善くやつて下さらうぢやないかえ、何もお前が豬口才に――。

幸一　おつ母さん、私の頭の中にあるものは、誰にも分らないのですよ。（悲しげに）　おつ母さん、親と子などと云つても、もう全く別々のものなんですよ。

德兵衞　幸一、ぢや、兎に角、新聞にも出て居たが、あの劍持と云ふ人は全くお前の事だつたのだな。

幸一　お父さん。

德兵衞　そしてお前は東京であんな騷動を起して、それから鑛山へ逃げて行つて……あの新聞に出て居た恐ろしい事はみんな本當の事だつたのか。

幸一　新聞ですつて？　新聞に何か出て居たのですか。新聞なんてものが本當の事を書くものですか。ありや皆權力のある世に諛ふ事ばかりなのですよ。――お父さん、あ。何と云つて可いのやら、何と云つたら分るやら――お父さん、――（異常なる沈着にて）　もう全く時代が違ふのですね。私はかうやつて皆様に御心配をかけて――

何とか云つて謝罪(あやま)りたい、身を投げ出して、泣いてお詫をしたいとは思つても、それを私の心は許さないのですよ。私はなんにも惡い事をしては居ないのですよ。私は私の良心の命令通りに生活して來た丈けですよ。外(ほか)の人は良心が命令をしてもその通りの生活はしないのです。それを私は心通りの生活をしようとした丈なのですよ。(悲しげに) かう云つても本當にお分りにはならないでせうね、恰(まる)で狂者(きちがひ)のよまひ言としかお考へにならないでせうね。實際もう時代が違ふのですもの。(絕望と狂熱との調子) 全く――こゝとは全く違つた世界から私は來たのです。それからまた全く違つた世界へ之から行くのです。今迄の奴隸の生活から出て、始めて新しい自由の世界へ行くのです。唯私達は、何にも考へないで、自分達の便利の爲め許りに、何時までか古い因襲を護つて行かうと云ふ傲慢な人達を憎んだ許りです。所がそんな人達は權力と云ふものを持つて居るのですね。ですから此方(こちら)も其代りに心の革命といふ武器を選んだのでしたよ。そしてまづ手始めに鑛山の、あの無知な二萬人の人の眼を開けてやらうとしたのです。(寂しき笑) あ、今思へばあんな心のはずんだ、生甲斐のある生活は今迄は知らなかつたのでした。汗と、血と、力と、意味のある生活、私の耳にはまだ蒸氣機關の響が鳴つて居ます。それが始めは鑛山の人々の耳に、世の中はつらい、不平公だ、つまらない――とさう聞えたのです。それが段々と愉快だ、甲斐がある、早く新しい世界になれ、早く新しい世界になれとさう響き出したのですね。愉快な努力と緊張した平和と、ま、そ云つたものが凡ゆる炭坑の中へ行き渡つたのです。さうすると鑛山の上役たちがそれを壞し始めたのです。その內東京の方でもとんだ騷動が起つたのです。私は急いで東京へ歸つたのです。さうするともう後の祭でした。

德兵衞　ぢやお前は東京のあの人達とは直接の關係は無かつたのだね。

幸一　ねえ、お父さん、貴方は私の小さかつた時分から、えらい人になれ、えらい人になれと云つては私をお叱りでしたね。そして私は本當の心の要求を枉げても貴方の仰つしやるえらい人にならなければならなかつたのですね。今ぢや何でも無いことですけれども、自分の志望も、またまあ戀愛と云つたやうなものをも犧牲にして、何かしらんえらい人にならなければならなかつたのですね。所が其後私も、えらい人つて一體どう云ふ人だらうかと考へて見たのですよ。さうすると、皆(みんな)の人の考へてゐる事とは全く別なものだつて事が分つたぢやありませんか。それで私はその考通りに生活しようと決心したので

す。さうして見ると、世の中は虚の人ばかりではありませんか。(寂しき笑) 私も、お父さん、若しも貴方がさう云つて叱つて下さらなかつたなら、そりやこの小さい町に――昔の唄もまだ殘つて居ようと云ふ寂しい港に、のんきな昔のやうな生活をして、子と呼ばれ、夫と呼ばれ、親と呼ばれて罪もない生活をして朽ち果てちやつたでせう。貴方はさう云ふ世界から私を追ひ出してくれました。けれどもそんならどんな世界に棲まなければならないかつて事は教へて下さることは出來なかつたのですね。だから私は一人で搜したのですよ。そして搜し當てたものは他の人の想像して居るやうなものでは無かつたのです。――あゝ、あゝ、かう云つてもお父さんにはお分りにならないでせうね。

德兵衞　分らない。お前の心持は私にはさつぱり分らない。お前は新しい學問もしたのだから何か理があるかも知らないけれども、第一お前が義理のある堀さんの山であゝ云ふ騷動を起すなどと云ふ事は誰が考へても、善い事ぢやない。その上お前は東京でまたあんな主義の仲間と氣脈を通じて居るなどと――もう私には心にも考へられない事ばかりだ。一體お前はどうしたと云ふのだえ。

幸一　お父さん、義理よりももつと大事なものが人間にはあるのですよ。

德兵衞　義理よりも大事なものとは?

幸一　自分の心の命令です。

德兵衞　幸一。お前も知つて居るぢや無いか。お前の實のお祖父さんも、お前の伯父さんと云ふ人も、やつぱり妙な、人には分らない考をもつて居て、當もない仕事を企んでは、お負けの果には氣狂になつて死んでしまつたのぢや無いか。さういふ事を見て居るから、たつた一人の男の子をさう云ふものにはしまいと思つてどんなに私が苦勞したか知れはしないのだ。そこをお前だつても酌んでくれたつて可さゝうなものだつたぢや無いかえ。それをお前は惡く僻んで到頭家を出て行つてしまつたのだ。

幸一　いやその事なら熟く知つて居ます。私はあの子供の時分に深く肝銘された恐しい事件をそれからも熟く考へて見ました。伯父さんは明治初年に耶蘇教を始めて信仰し出して、それを弘めようとした爲めに、皆に憎まれて到頭あんな事になつたのです。祖父さんは又人の知らない事業を始めて、一生せつせと働いて金を儲けた爲めに人から嫉まれたのです。皆他の人より一足進んで居たのです。みんなえらい人だつたのです。それを世間が氣狂にさせてしまつたのです。今度東京で捕つた私の友達だつてえらい人なのです。それを世間が罪人にしたのです。

德兵衞　お前は勿體ない事を云ふ。勿體ない事を云ふ。

幸一　（夢遊病者の沈着を以て）世界が違ふのです。お互に理解しないのです。暗い夜の世界から私は始めて明るい世界を見たのですね。いやまだ暗いのだ。それでもそこをもつと良い處にしようと、皆血と汗とを流して働いて居るのだ。いやさうではない。まだ中々眞暗だ。地獄の洞のやうに暗いのだ。もつとどつさり血を流さなければ明るくはなりはしないのだ。それでもその地獄の洞に小さい孔を見出したのだ。積り積つた人の思が厚い洞の壁に孔を明けたのだ。其孔から明るい外が見えたのだ。もつと廣い、廣い金色に光つた海の表面が見えたのだ。その海の向うに本當の都があつたのだ。さうです、その世界へ。廣い、廣い綠色の世界へ、私達は行かなけりやならないのです。

徳兵衞　（下駄を搜すが如く庭を見廻はして）幸一、お前は氣が狂つたのか。

幸一　（がつくりと我に歸りしものゝ如く）え、お父さん。

徳兵衞　（決心の調子にて）幸一、お前は良心が咎めてならないのだ。もう仕方がない。一層潔く自首して出ろ。（涙す）

幸一　（愕然として戰く。更に反語的なる沈着を以て徳兵衞の傍に寄る）え、あ父さん、自首して出るのですか。私が東京で何をしてゐるかを本當には御存知がないのですね。

徳兵衞　（幸一を凝視す）

幸一　お父さん。（徳兵衞に耳語す）

徳兵衞　（愕然として色を失ひ、狂氣の如く庭に飛び下りて）えゝ、何だと、何だと、まあ、お前は正氣なのか。本當か、本當か。

幸一　（異常なる笑）あの事件が世間に知れたら國中がひつくりかへるでせう。

徳兵衞　おい、幸一、お前はもう往つてはならぬ、さあ、この通り、この通り頭を地びたにつけろ。お上へも、御先祖さまへもお詫を申せ。さあ年寄の父親にばかり、こんな事をさせて唯見て居るのか。

おけん　（下駄をはきて庭に下りる）ねえ、幸さん、幸さん、お謝罪りなさい。——何だつて貴方はお父さまを——まあ貴方は酷い方なんですねえ。（涙になる）をぢさん。をぢさん、それでは餘り勿體なうございますよ。勿體なうございますよ。

おとせ　（おど〳〵しながら）幸一。幸一。

幸一　（慄然として身顫ふ）おや、今のは雪か。雪が落ちたのか。もうさう云へば彼方から笛の音がするやうだ。あの船で私はもう往かなくてはならないのだ。

徳兵衞　いや往つてはならぬぞ、往つてはならぬぞ。——

俺はもう家の事や自分の身などをかばつては居られない。

おけん　まあ、をぢさん、お上んなさいましよ、ねえさん、兄さん、さあどうかをぢさんを上にあげてやつて下さいよう。（幸一の兩腕に兩手をかけて）幸さん。（泣く）

幸一　（おけんの手を振り拂はむとする）

おけん　（涙聲にて）幸さん、濟みませんでした。堪忍して下さいよう。みんな私が惡かつたのです。（歔欷）

淸右衞門　（庭に下りて德兵衞を回護ひ、無理にあがらせ、幸一に目くばせする）

幸一　（再び怪しき冷靜の足どりにて奥の方にゆく。少時立つて回顧し、思入あり、遂に暖簾を潜りて退場す）

おけん　まあ、幸一さん。

おとせ　（急ぎ幸一の後を追ふ）幸一、幸一。

おその　（また倉皇しく去る）

德兵衞　（無言のまゝにて見送る。それからがつくりと身を落し、物をつぶやき乍ら立ち上りて奥の間に入る）

淸右衞門　（意味ありげにおけんに目くばせす。自らもまた奥の間に入る）

おけん　（意識せざるが如く店の間に上り、惘然と考へて居る。それから額に手をあてゝ疊の上に俯す。長き間。巽常なる寂寞。――この間舊劇に於ける佐和利の心持、必要に應じては遠き方の唄聲のつもりにて、陰の淨瑠璃をきかす。――そのうちに表の戸を輕く打つ音す。人の聲。おけん立ち上る）へえ、へえ、只今。（庭に下りる）どなた樣ですか。

外の聲　まあ／＼一寸開けておくんなさいよ。また戻つて來ましたよ。（おけん戸をあける）

おさい　（前の通りの風にて内に入る。傘を壁に立てかける）おゝ寒い。さ、早く戸を閉めよう、内へ吹き込んで來る。まだ中々やみ相もないね、珍らしい雪だね。――もう皆な寢ましたかね。

おけん　いゝえ。（戸をしめて戻る）

おさい　ねえさんはえ？（といひ乍ら、燈をつけたるまゝ提灯を適宜の壁にかけ、右の手にて肩の雪をうつ。頭巾を脫ぎて拂ふ）まあ見ておくれ、おけん、こんなものを付けられて來たよ。（頰にお白粉をぬりたる痕あり）あとで濡れた手拭を借りて拭つてゆかなくては。まだ皆なは大騷ぎだつたけれども私は一寸腹が立つことがあつたからそつと先きに出て來た。これから内へ行つたつてお常はもう寢てゐるし、湯も茶もないからまた一寸寄りましたよ。今ね銀明樓のおかみさんが内の藝者を電話で呼んで、いろんな歌をうたはして、そりや面白かつたよ。

ねえ、あすこの所は面白いね、アレ、ツテチン鳥がなく――鳥の名の――ねえ、一寸眞似も出來ないが。私も子供の時分習つた切りでもうすつかり忘れてしまつた。（店の框に腰を下ろさうとして）何だもう火はすつかり消えてゐるぢや無いかね。――え、まあ、さう云へばもう十時過だよ、ねえさんはもう寢ましたかね。おや、誰だね、この下駄は。清右衛門さんが歸つて來たのですかえ。一寸まあ私にその三味線を貸して御覽。どうだつたねえ、あすこの所は。（三味線を弄す）一寸調子を合はせておくんなさいよ。私にはどうも行かない。

おけん　（餘儀なく三味線を受取りて）まあ、をばさん。

おさい　おけんさん。ねえ、さあ一寸やつて見ておくんなよ。あすこの所を。それ――眺め見飽かぬ――。

おけん　（うはの空にて三味線の調子を合はす。おその庭奥より現はれためらふ。突然奥にて人の泣く聲す。おその去る。おけんも俄に三味線の手を止めて、袖にて顔を被ひ、たまらず泣き出す）をばさん――。

おさい　えゝまあ、おけん、お前はどうしたと云ふのだえ。（四下を見廻はし奥の方へ視線を据ゑる。――遠き方にて再び汽笛鳴る）

――幕――

南蠻寺門前（樂劇一幕三景）

登場人物

童子順禮等
千代
常丸
菊枝
老いたる男及び行人二三
うかれ男
舞妓白萩
伊留滿喜三郎
學頭
所化長順
所化乘圓、其他學僧
老いたる侍

永祿末年のこと。但し風俗は必ずしも史實に據らず、却つて今人の眼に親しうするものとす。秋の日、薄暮。後景は京都四條坊なる南蠻寺の高き石垣。その中ほどよりやゝ上手に寄りて門。その扉開かれてあり。門内の廣場に木立。そを透きて仄かに高堂見ゆ。門前の街道に童子等集まる、

第一景

童子等（唄）

夕やけ小やけ。
摩訶陀の池の
さんしよの魚は
きらきら光る。
玻璃のふらすこ、
ちんたの酒は
きらきら光る。
鐘が鳴る。鐘が鳴る。
寺の御堂の
十字の金は
きらきら光る。

（年少き姉妹の順禮御詠歌うたひながら下手より登場。姉なるは盲目なり。）

姉の順禮（程よき所に立止り、もの怪しむ氣はひ）何やら怪い音がするがのう。この近くに海でもあるかいのう。

妹の順禮　何の、姉や。京の都には海があるもんかの。

姉の順禮　そんなら河の音か。そや無けりや風かいのう。わしや滅相草臥れた。今日の宿はまだかいなあ。

妹の順禮　そやつて姉や。郷からまだ一里とも來やせぬわ。

姉の順禮　何處ぞで歌うたふ聲が聞えるやうやのう。

妹の順禮　姉や。此處は立派な寺やんどの。何樣ぢや知らぬけれども拜んで行かうよ。

姉の順禮　さうかいな。お寺ならば善う拜んで行かうのう。

（姉妹は門内を覗ふ。）

妹の順禮　何ていふお寺やろ。遠くに立派な御堂さまが見えるわかいよ。

姉の順禮　あゝ、わしも一目見たいのう。

妹の順禮　や。姉や。烏が。姉や。はれ烏があんなに來たよ。——お日樣がもうお隱れやるかいな。——西の天が赤なつた。はれ、血のやうに赤なつたわ。姉や。烏が仰山來た。寺の屋根へ留つたわ。はれ、屋根が靑うく光つて來た。海のやうに光つて來たわ。

姉の巡禮　何ていふお寺かいなあ。

妹の順禮　これ、そこな兒よ。この御堂は何といふお寺かいの。

第一の童子　（蔑むがごとき貌にて）　名など知らぬわ。

妹の順禮　和子は知らぬかいな。

第二の童子　おらも知らぬわ。はははは。

妹の順禮　ほほ、此土地に棲んで居やるのに、名も知らぬとは賢い子等やの。

第一の童子　此御寺の名を知るものは京中にはおぢやらぬわ。たつて知りたくば中の伴天連に聞いて來やれ。ははははは。

妹の順禮　我等は他國のものやほどに敎へてくれいのう。

第一の童子　このお寺は唯のお寺ではあらない。

妹の順禮　唯のお寺や無いとて坊樣が住むお寺やろがな。

第一の童子　その坊樣は眞の人間ではあらない。

妹の順禮　ほほ。眞の人間で無いのなら、そんなら天狗樣かいのう。

第一の童子　いやいや、天狗樣でもあらない。もつと怪しいものぢや。

妹の順禮　分つた。そんなら、そりや狸やろが。

第一の童子　狸でもおぢやらぬわい。

妹の順禮　お時どのよ。もう早う行かうよ。わしも奈何やら氣味わるうなつて來た。

第一の童子　この寺の方丈樣は、おらはまだ見ないが、皆のいうて居ることには、髮の毛が鼠の毛で、手の爪が熊の爪ぢや。

第二の童子　それで身の丈が一丈をも越えて、手の甲に鱗

が生えておぢやるさうぢや。

第一の童子　其くせ聲は鳩のやうで、ぐはう、ぐはう、ぐはう、ぐはうと啼く稀有な方丈様ぢや。

（日かげ傾く。南蠻寺の鐘鳴りはじむ。）

第一の童子　あれ鐘がなる。鐘がある。皆早う去のうよ。――お主達も早う去なないと、見よ、今に南蠻寺の門に食はれるぞよ。恐いぞ、恐いぞ、昨日も一昨日も人が食はれたさうぢや。皆去のうよ。去のうよ。

妹の順禮　お時どのよ。我等も早う行かうよ。

（皆々退場。暫く素舞臺。遠くにて再び夕やけの唄。）

（千代「年わかき母」、その子常丸下手より物語りつつ登場。）

常丸　そんなら、その黒い魚は何處に棲んでゐるのぢやえ。

千代　人の心の臓の中に居るのぢや。

常丸　それが奈何して外へ出るのぢやらうな。

千代　その黒い魚には羽が生えて、鳥よりも速う、空へ飛んでゆくといふことぢや。

常丸　それから奈何するのぢやえ。

千代　河ぢやろが、山ぢやろが、日輪ぢやろが、何處へでも飛んでゆくのぢや。その魚が空を蔽へば、日も曇つて、天の森に赤兒が泣く。

常丸　空に奈何して赤兒が泣くのぢやえ。

千代　遠いい、遠いい、父様や、ばば様、ぢぢ様の國に行きたいというて泣く。

常丸　父さまの國にえ？――母様、父様の國は空天竺におぢやるのかいなあ。

千代　空の、空の、大空の、夜摩の國といふところに、ぢぢ様も、父様も、また死んだ其方の妹も、みんな仲よう暮しておぢやると最勝寺様が申された。

常丸　かか様、何といふ國ぢやつたかな。

千代　かか様も善うは知らぬが、夜摩の國とか申された。

常丸　その夜摩の國に私も行きたいわいな。

千代　あれ滅相な、滅相なこと。その國にはな、四つの眼のある恐ろしい犬が居て、小さい子供には行かれぬ所ぢや。

常丸　（歩み澁りながら）私や其國に行きたいわいな。

千代　これ常丸。そのやうに聞きわけ無うては、もはや何處へも連れてゆかぬぞや。あれ、入日にも間近いさうな。急いで歸らうよ。

常丸　その四つの眼の犬とは、どのやうに恐ろしいものぢやえ。

千代　まあさ、その話は後で詳うするさかいに、早く行かうよ。

常丸　母様、今日のお會式は面白うおぢやつたのう。私やあのやうに面白うおぢつたのは、生れてから今日が始め

てぢや。私やまだ見ておぢやりたかつたのに、私や家へ歸るはいやぢや。

千代　まあ、此の子としたことが――そのやうな事いふものは、あの恐ろしい犬めが拉つてゆくぞや。家ではばばさまが待つておぢやらう程に、早う歸らうわいな。

（母なる人の友、菊枝、上手より來りてこの母子に摩れちがふ。）

菊枝　はれ、待ちやれのう。お前は千代さまではおぢやらぬかいな。

千代　あれ、これは菊枝さまさうな。異な所でお遇ひました。

菊枝　お前は何處からお歸りぢや。

千代　今日は最勝寺さまの御會式ぢやさかいに、死んだ娘と、この子の父御の供養しに參じまをした。鄕の母樣が強う止めるゆゑ、つい遲うなつて、今歸るところぢや、してお前は何處からぢやえ。

菊枝　さて其事ぢや、妾はな。近ごろ大い苦勞をしまをした。それ、お前も存じての黑谷の加門樣の妹娘のことぢやが。あの娘が氣がふれてな。

千代　さて、さて。

菊枝　ぎざぎざと針を植ゑたる金具もて、われとわが胸を十字に掻い傷つけ……。

千代　さて、さて。

菊枝　その揚句には親達も、男子・女子の見さかい無う切り付くるのぢや。

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

常丸　ほんまかえ。ほんまかえ。ほんまに嘘ではおりないと云ふのぢやな。……何ぢや。もつともつと面白い處ぢやてや。いや夫れは嘘ぢやらうわ。私が今日見た地獄の機關より、もつと面白いものは唐天竺にも決しておりないわ。……何、秋でも冬でも牡丹の花が咲いておりやるてや。え。われらの父上も、あの可愛い、妹も生きておりやるてや。……眞白い象も棲んでおりやるてや。嘘ぢや。……何、ほんまぢや。そんなら起請か、懸もするてや。好し、天も地も照覽あれ、指かけ小かけ、嘘云ふものは手の指腐され、好し、そんなら入つて見よう。嘘ぢややら、指十本腐るぞよ。……（常丸門内に入る、二人の女氣付かず）

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

千代　おう、それはとつと怪いことぢや。今年は何やら可厭な年ぢや。出來秋ぢや、出來秋ぢやと云うては米は不作。

菊枝　それにまた加茂川の大水。――妾の隣の祖母樣は、きつい朝起きぢやが、この三月が程は、毎朝毎朝、一番

鷄も啼かぬ間に怪しい鳥の啼聲を空に聞くといふし、また人の噂では、先頃攝津住吉の地震强く、社の松が數多く倒れたといふこと…。

千代　ほんまに氣味のわるいことでおりやるのう。あれ、また話で時を費いた。妾は今日は急ぐほどに、是で御免蒙りまらせうず。お前も精々體を大事にしや。命あつての物種ぢやのう。さらばまたの日にお會ひまをさう。

菊枝　それなら祖母さまにも好う言傳言うてたもれや。

（二人相別る。菊枝は下手より退場。忽ち千代けたたましく。）

千代　はれ、まあ、常丸。常丸。…はて、常丸としたことが、やよ、常丸。常丸。――（ふらふらと門に歩み寄り、内を覗ひながら）はて惡いことをば致いた。ここが南蠻寺の門ぢやとは、つひぞ氣付かいでおぢやつたが：：さてはこの門めが、中に引込んだと見ゆるよ…。

（千代。逡巡ながら二三歩門内に進み入り。「常丸、常丸。」と呼ばう、答なし。愛はしげに再び門外に出づ。）

千代　四邊には人も見えぬ。はて奈何したものであらうぞ。中に入るのも心もとなし…。

（思ひ付きたるさまに、急ぎ門より離れ來り、往來に立ち止まり、下手の方を呼ばふ。」

千代　おおい、おおい。先に行く菊枝どのいのう。菊枝どのいのう…はれ聞えぬげな。（躓くが如く、二足三足下手の方に歩みよりて）おおい、おおい、菊枝どのいのう。（右手を擧げて麾く）あ、やうやう聞えたさうな。やれ、うれしや、のう、のう、菊枝どのいのう。早う、早う菊枝どのいのう。

（此時老いたる男下手より來りてこのさまを怪む貌。）

老いたる男　やいの、其方はけたたましう何を呼ばふのぢや。（額に手を翳して、下手の方を眺めやり、また此方を向きて）何が起つたのぢや。

千代　われら。われら…われら常丸が拉はれておぢやつた。

老いたる男　何ぢや。何が拉はれたてや。

千代　われら常丸ぢや。われら小さい男の子ぢや。

老いたる男　はて、さて、今時この都に鷲の鳥はおぢやるまいと思うたが。

千代　いや鷲の鳥ではおぢやらぬわ。鷲の鳥ではおぢやらぬわ。

老いたる男　鷲の鳥でおぢやらぬなら、手長猿かいのう。

千代　いやいやそれでもおぢやらぬ。

老いたる男　さらばお山の女取でもおぢやつたかいの。

千代　人さらひぢや。人さらひぢや。

老いたる男　何な。人さらひとは近頃面妖なことぢや。何

處から來て、何の方角に隱れて行つたかの。

千代　（泣きながら）　何處からも來ぬ。何處へも行かぬ。

老いたる男　其方は泣いて許りおぢやつては、しやほに分らぬわ。

千代　（大聲にて）　あの南蠻寺が拉つたのぢや。

（菊枝戻り來る。）

菊枝　何ぢや。何ぢや。何ぢや。

千代　南蠻寺がわれら常丸を拉つておぢやつた。

菊枝　はれ！　（氣絶す）……

老いたる男　（獨白）　あれ、あれ、また一つ事が殖えた。女子といふものは理が分らいで困るものぢや。――（菊枝に）　やいの、女子よ、南蠻寺が人を拉ふわけはしやほにおぢやらぬ。――（千代に）　俺はな、この女子を介抱してゐるさかいに、其方は早う行て、寺の內に其方の子を搜して來やれ。何も不思議があるものか。不思議は皆心から湧くのぢや。疑心暗鬼ぢや。何も恐ろしい事はおぢやらぬさかいに、早う行て子を搜しておぢやれ。子等は法會の唄にな、聞き惚れておぢやるやろ。

千代　ほんまに怪うはないお寺か。

老いたる男　なかなか、なかなか。

千代　さらばあの中に天狗のやうな人喰人がおぢやるといふは、ありやほんまに嘘事でおりやるかいな。

老いたる男　何の、そのやうな事がおりやるものか。諄い女子ぢや。な。この世の中に天狗、人喰人などはおぢやりあらぬわい。ありや南蠻の坊主共ぢや。日もはや暮れる。早う行つておぢやれ。（千代門內に入る）

老いたる男　やいの、知らぬ女子よ。早う目を覺しや。いやさ、正氣に歸りおれと申すにな。やれ。女子よ。（女の背を打つ）

菊枝　あ、あ、あ、あれ、あれ。まだ大きな蛇體が。蛇體が……

老いたる男　愚なる女子ぢや。早う正氣に歸られい。な。女子よ。邪心を以て見るが故に、藁を綯うて造りたる繩も蛇體と見えるのぢや。

菊枝　それぢやと云うて……今の蛇體は？……

（この間に、南蠻寺の門扉音もなう自から內より閉まる。）

老いたる男　は。やれ、やれ。內なる門を鎖す男よ。やよ、男よ。その扉は今少時がほど開けて置かれよ。やよ。少時が程ぢや。（怒りて）　はれ。內に人が入りておぢやるといふにな。（門全く閉さる。內より女の聲聞ゆ）

女の聲　あれ、あれ、あれ、あれえ。

老いたる男　（兩手もて門の扉を押し試みつつ）　誰ぢや。門番の男よ。扉を開けよといふに。え。開けぬ積りか。

何。開けぬ。いや、いや、きつと開けぬ積りぢやな。好し。それなら此方にもする術があるぞよ。——(菊枝に)やいの。女子よ。そなたは少時此處に待つてたもれ。——何、此方にもする術があるぢやまで。——俺は直きこの附近に住まふものぢや。われら家に往で持つて來るものがあるわ。少時がほどこゝに待たれよ。

菊枝　妾一人が此處にかえ？

老いたる男　何、一人にてはいやぢやと申すか。

菊枝　さにてもおりないが、…妾は恐やの。

老いたる男　何のこと。何のこと。あれ向ひから男子が大勢來るわい。そんならほんの少時の程ぢや。(去る)

(行人二三下手より登場。)

菊枝　まをし、まをし、そこな方々よ。今此處に恐しい事が起り候よ。

第一の人　何ぢや。恐ろしい事とは。

菊枝　あの南蠻寺が人を拉うておぢやりました。

第二の人　何。南蠻寺が人を拉つておぢやつたと言やるか。やれ、夫は眞か誓文か。

菊枝　何で妾がこの年齢して、益ない嘘をつきまをしませうぞや。

第一の人　して何處の誰が拉はれたのぢや。

菊枝　妾の知邊ぢや。お千代母子が拉はれておぢやりました。

第二の人　やあれ、やあれ、恐ろしい事ぢや。むかしまつかう、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

第一の人　あれ見よ、最早空に星が出そめたさうな。

第二の人　急ぎまゐらうず。(行人行きすぎむとす)

菊枝　まをし、まをし、方々。今妾の連が來るほどに、今少時此處に止まり候へ。妾一人にては物おそろしや。こはや。

行人等　我等も急ぎの用事があるわ。

菊枝　さても無情の人々候ぞや。

(行人なほも行き去らむとす。忽ち下手の方賑はしき唄の聲　(下座の囃)。若きうかれ男。舞妓白萩、つゞきて屋號を染めたる提灯を持つ男。燈はいまだ點されず。登場。)

うかれ男　(扇子もて膝をうち拍子とり〳〵唄。)

〽鐘さへ鳴れば、去なうとおしやる。こゝは佛法東漸の源、初夜後夜の鐘はいつも鳴る。

はははは。(白萩に)　何とて人立がすることぢや。

白萩　さればいの、私も案じて居たのぢやわいの。

提灯を持ちたる男　(私かに)　此處は南蠻寺でございまする。

うかれ男　何ぢや。南蠻寺ぢや。へへ、はははは。

提灯を持ちたる男　笑ひ事では御座りませぬぞよ。早う參りませう。
うかれ男　南蠻寺なりや恐い事はおりない。
白萩　あの晩の鐘は、寺の深い井の底から湧いてくるといふは眞かいなあ。
うかれ男　(故更に嚴粛の貌を裝ひ)や、それこそは邪法の內祕、吉利支丹宗門の眞言、輕々しうは敎へられぬ。したが白萩よく聞きや。お許の怨じはまこと心底の胸から出やるか、乃至の脣の面からか。いやさ、それを告げいでは、ちやくと敎へられぬわい。
白萩　知らぬ、知らぬ。敎へなうてもよいわいな。
うかれ男　はてさて、是は剛い返答――(忽ち側を向きて大聲に)こりや!
(羅よりこの一群に、著きつ離れつ隨ひ來れる油賣、實は伊留滿喜三郎、油桶は持たで青き頭巾かぶれる。叱咤せられ、袖窮してすがる。)
うかれ男　はて怪かしい男共ぢや。
白萩　あの男なら、とうから我等の後に隨いて參りました。氣味わろいことぢやわいな。
うかれ男　何の。舍け、舍け。
(忽ち寺の內に遠波のごとき、奇しき妙音樂起る(羅曼的なる西洋管絃樂)さきに行き去らむとせし人々も踵を返す。)
第一の人　何ぢや。賑かな樂聲ぢや。
第二の人　寺の內に何かおぢやるさうな。
第一の人　何ぞ珍らしい異宗の祭典と見えるよな。些と覗いて見たいものぢや。
第二の人　なれども門は閉されたり。はて、如何致してか內を見る工夫はあるまいかな。
伊留滿喜三郎　(突然門扉の內に屈みて)やいの。やいの、皆の衆よ。ここの門の扉に細い隙があつたぞや。はれ、見られい。や、何とまあ美しい繪ぢや。唐、天竺は愚か、羅馬、以諳利亞にも見られぬ圖ぢや。櫻に善う似た麗しい花の樹の間に、はれ白象が竝んでをるわ。若い女子等が青い瓶から甘露を酌んでをるわ。赤い坊樣ぢや。噴泉からさら〳〵と黃金が流るる。眞晝のやうに日が照るわ。はれ、見られい、見られい、翼の生えた可愛い稚子が舞ひながらおぢやつたわ。はれ、皆が一齊に祈を上げてをるわ。
(樂聲快活に、敬虔に、やがて急激にやゝ誘惑的に、更にまた憂鬱に。)
菊枝　して、して…あの千代どのもおぢやるかいな。
伊留滿喜三郎　千代どのとは何ぢや。何處の人ぢや。
菊枝　まだ二十五とはならぬ女子ぢや。なれども二人の母

人ぢや。その妹の子はこの春死にあつたのぢやが。
伊留滿喜三郎　をるぞ。をるぞ。それもをるぞ。
菊枝　伜の常丸どのもおぢやるかいの。
伊留滿喜三郎　をるとも、をるとも、皆をるわ。
菊枝　はれ、お祭を見ておぢやるかいのう。何とまあおとましい人々ぢや。此方は強う案じておぢやつたのになあ。
伊留滿喜三郎　いや皆はもう神様になつて。美しい翼が生えてをるのぢや。はれ、美しい行列ぢや。歌唄うてをるわ。
菊枝　何と戯けた事をいふ人ぢや。妾は鄕から、眞か、眞かと聞いておぢやつたのに、おとましいことぢや。
伊留滿喜三郎　はれ黑い尼達が來ておぢやつた。日が曇つた……。
うかれ男　やい。油賣奴。そこ退きやれ。——やゝや、如何にも此處に細い隙間があるわ。やれ、やれ、某も一つ覗いて呉れむず。
白萩　見えたかいなあ。何ぞ見えたかいなあ。
うかれ男　善う見える。善う見える。はれ、僞の底が善う見える。
白萩　ほんまに何が見えるぞいなあ。
うかれ男　南蠻寺の情所が善う見えるわい。聞きや。はれ。や、何とも云へぬ名香のかをり。身も心も消ゆるやうぢや。四方には華の瓔珞、金銀、錦の幡天蓋、瑇瑁の障子、水晶の簾。まつたそが中の御厨子の本尊、妖娟なる天女の姿。匂ひやかなる雪の肌、消さば消ちなむ目見の霞……造りも造りたり僞の御堂よな。（門扉の内より目を離し、唄ふが如き調子にて）さて。僞りとは知りながら、悟られぬのがそれ何やらの道。喃、白萩小女郎、昔の人は秀句吐くな。
白萩　あれまたいやらしい戯れごと。
うかれ男　何で某がいふことが戯言であらうぞや。戯れごとはお許等のいふことぢや。いとし、戀しは口の先、腹の内には舌出いて、いやさ(唄)千たび百たびおしやるとも、なるまじものをうつゝなの其方や、われに主ある。思ひとまれよ。
などと、はゝ、南蠻寺の玄關で、誰やらがよい歌唄うておぢやるげな。
白萩　あれまた人をなぶるわいな。
伊留滿喜三郎　（再び門扉に倚りたるが、突然聲高に）波羅葦增ぢや、波羅葦增ぢや。
第三の人　眞か、眞か。
伊留滿喜三郎　じええずす、まりや、波羅葦增雲、波羅葦增雲。
（門内の樂聲更に壯んになる。忽ち下手に人聲。やが

て鬚の老いたる男大なる槌(かけや)もちて出づ。）

老いたる男　此方(こなた)にもする術があるのぢや。

菊枝　やれ、やれ、爺さま。久しう待たして、おぢやつたなあ。

老いたる男　されば皆の者よ。そこ退きやれ、そこ退きやれ。やい、危いわい。（門内樂聲息む。老いたる男携へ來れる大槌を擧げて烈しく門扉をうつ）――はら、やいの、おう。はら、やいの、おう。（人々怪しき驚愕の聲出しつゝ眺む。老いたる男少時槌の手を休めて、人々を顧みながら）皆の衆は、などて、さは默しをりやるぞや。念佛申さぬか、念佛申さぬか。――（再び槌を取り上げ）南無帝釋四天王、五道冥官、日本伊勢大神宮、八幡大菩薩、春日明神其他氏神、南無阿彌陀佛。はら、やいの、おう、南無阿彌陀佛。はおら、やいの、おう、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。――（汗を流し、いたく勞れたる樣に手を休めつゝ）や、さても堅い扉ぢやわい。

（下手より五六の學僧（學頭、所化長順、所化乘圓其他）登場。孰れも黑き衣、黑き頭巾、又長杖を持つ。但し先頭の所化乘圓は「妙法院」と記されたる提灯を持ちたり。提灯には燈ともさる。群ゐち漸(やや)にさわがし。）

學頭　やよ、人々、何とてさは雜談(ざふだん)致すぞ。

（さわぎ次第に高まる。）

學頭　何とてさは雜談(ざふだん)致すぞと申すにな。

第一の所化　所化長順が氣が狂うてござる。

學頭　何とな。

第一の所化　所化長順が氣が狂うてござる。

長順　否とよ。ふつつに狂ひなどは致さぬ。

第一の所化　（長順に）御宗門を疑ふが、狂はいで何としようぞ。

長順　ふつつに狂ひなどは致さぬ。

第一の所化　その證據が立つか。

長順　立たいでか。わが申開はこのやうぢや。（長順腕より數珠を外し、地上に拋ちて足もて踏む）

第一の所化　咄、仕をつたな。（皆々呆れ怒るこなし）

乘圓　（憂しげに、長順に向ひ）御宗門を足蹴に致したな。

長順　足蹴は愚か、矢を向け申すわ。

第一の所化　やい。よくもほざいたな。はは、御宗門に弓引くと申すからは、必定新たなる見證が付いてあらうな。

長順　見證なんどは事をかしや。釋迦牟尼は畢竟愚人、苦勞性なる摩訶陀の王子、天臺智者は大法螺吹、まつた傳敎は山師の支店。

第一の所化　默り召され！

長順　何とて默らうぞ。佛陀の敎は嘘八百、人を欺して可惜(あたら)しき若き命をむざ〳〵と枯木の如く朽ちさす敎……

（やう〳〵夢幻的になり）某在家の折柄は胡蝶は花に舞ひ戯れ、鳥が歌へばわが心、君の心もうち和み（小唄の節になりて）花の降る夕暮は、思へど思はぬ振りをして、啁、思ひやせに瘠せ候ひしが……（再び我に返りたる如く）教觀二門が何の眞諦、三觀十乘が何の悟道、某山に入りてより、四年四月は日夜撓まず勤業苦行、ひたすらに頓漸祕密の理を追へども……（また咏歎の調にて）かの日の幸に比べむ幸なく、わが美き人に似る神も……

乘圓　長順眞に正氣でか。

長順　正氣で無うて何としようぞ。

第一の所化　聞きしにまさる長順が亂心。今は堪忍の時ならず。（杖もて長順を打たんとす、乘圓之をかばふ）

乘圓　ま、ま、待つて下されい。是は長順の正氣ではござりませぬ。必定惡魔波旬の仕業……（忽ち南蠻寺の門に氣付きて）あれ、此處は邪法の窟宅、南蠻寺の門前なるよな。さてこそ必定邪法の手練……

長順　……あれ唄が聞えるわ、いとしう人が呼ぶさうな。

乘圓　（憂はしげに）長順、長順、其方はまた迷うたさうな。修行が足りぬぞよ。修行が足りぬぞよ。

長順　乘圓、其方もわが心は汲むまいな。（心弱く乘圓の腕にもたれる）

（忽ち南蠻寺の前にてけたゝましき響す。沙門の一行は前なる群集に近づく。）

老いたる男　（再び大槌もて門扉をうつ）はて、さて、怪しい扉ぢや。まだかや、まだかや。えい、やいほい、南無阿彌陀佛。はら、やいの、おう。南無阿彌陀佛。え、まだかや。まだかや。はらや、やいの、おう。南無阿彌陀佛。

（老いたる男。最後の一撃をなさむとする所に、忽ち眩暈き倒れ、槌は手を離れて地上に落つ。）

（門内樂辟——近世デカタン的音樂——嵐の如く高まる。）

菊枝　（うち驚ろきて）や。これは爺さまいのう。

伊留滿喜三郎　（菊枝を遮り）見やれ、こりや神罰ぢや、南蠻寺の罰ぢや。

菊枝　何と、それは眞かいなあ。

伊留滿喜三郎　大神でいゆすの威力の恐しさを、遲かりしな。今覺りしか。素より不信の極惡人、此儘に打ち捨て置き、風來犬にな食す可きなれど、今日は異例の情をもて、聖まりやに祈りを上げ蘇生らして呉れずらむ。（老いたる男の傍に進み寄り口に呪文を唱ふ。老いたる男目ざむ。）

伊留滿喜三郎　何と、老耄、正氣に歸つたか。

老いたる男　（いぶかしげに四下を見廻す貌）こゝは何處ぢや、何處ぢや。

伊留滿喜三郎　こゝは四條の眞中ぢや。南蠻寺の門前ぢや。

老いたる男　（驚き逃げ去らむとして）　何ぢや。南蠻寺の門前ぢやてや。

伊留滿喜三郎　これ。逃げなうても可いわ。心を落付けやい。某誠心を籠めて大神に祈りたれば汝が罪は許されたり。――（衆に向ひ）　貴き御堂の門扉を撃ち、天主の威靈を汚す罪によりて、思ふだにも恐ろしき彼の暗黑のいんへるの、解けば卽ち焦熱地獄のその底に落ちて行く可き所なるを、でいゆすの御教この國に入りてより、未だ間もなき事なれば、無知盲昧の蒼民の疑ひ怪しむそれ故に、心にもなき大罪に陷らむを憫み、某祈念を凝したれば彼の罪も許されたのぢや。皆々有り難き御惠の御禮申上げたが可からうぞ。――さんた、まりや。さんた、まりや。波羅葦增雲善主麿。

（皆々さんたまりや、じええずすまりやなどよぶ。）

うかれ男　やあれ、やあれ。そこな痴人、知らぬ爲して聞いてあれば片腹いたい妄言綺語。

伊留滿喜三郎　何。妄言綺語とな。雜言も程こそあれ、世にも恐ろしき神の威靈の近き驗を今見ざるか。かゝる賤しき油賣の姿にわが身を扮つしてあれば、貴き言葉も疑はるゝなれ――（伊留滿喜三郎俄に油賣の服裝を脫ぎて綠の地に金絲の緣飾をとりたる邪宗門僧侶の職服にかはる。右手に高く金色の十字架像を翳す）今までは包みこそ居れ、何か隱さむ。われこそ大神でいゆすが僕、伊留滿あんとにゆすであるぞ。

（人々たじろぐ。或は「じええずす、まりや。」などよぶ。）

伊留滿喜三郎　それわが神でいゆすは天地六合の唯一神、宇宙萬象の能造の主、天地空寂のうちに萬象を造り、かるが故に日月星宿光を放つて、明歷々として東涌西沒の時を違へず、地には千木萬草あつて、飛鳥落葉の期を誤たず。百萬の烝民善くこの神を拜する時は死後生を波羅葦增雲の樂園に享く。然るに、耳目あれども此神を知らず猥りに神德を害ふものは、卽ちいんへるのの苦淵に沈む。抑も波羅葦增の國と申すは、四時花咲き、鳥歌ひ、果實季なく實り、生あれど死なく、明あれど暗なく、悔なく、迷なく、苦なく、禍なく、白象鰐魚人に戲れ、河水甘露の味を宿して、白檀蘆薈のかをり園に滿ちたり。失せにしものは此に見出され、求むるものは此に備り、家兵燹に燒かるる憂なく、愛する夫を戰場に死せしめず、愉樂の和雅音大空に棚引いたり。如何に人々、今こそ波羅葦增雲近づけり。時に遲るな、祈りをあげよ。きりえ、えれいそん。くりすて、えれいそん。きりえ、えれいそん。さんた、まりや。ぜす、きりすて。

（人々或は之に和す。門内には法悅信樂の妙音樂（中

世の宗教樂。）所化乘圓提灯を翳して伊留滿に迫る。）

乘圓　伊留滿あんとにゆすと申すは其方か。

伊留滿喜三郎　如何にも伊留滿あんとにゆすは此方ぢや。

乘圓　咄。此老狐、猥りに愚民を誑らかし居るな。

伊留滿喜三郎　何とて人を誑らかさうや。

乘圓　然らば借問す。でいゆす天地を造りしは眞か。

伊留滿喜三郎　說くにや及ぶ。

乘圓　さらば其でいゆすを誰が造りしぞ。

伊留滿喜三郎　でいゆすこそは天地の唯一神。誰も造りしものはおぢやらぬ。

乘圓　は、は、でいゆすを造りしものが無うて、でいゆす能く天地萬象を造りしとな。然らばでいゆすは卽ち五塵の塊、五蘊の泉、憎愛簡擇の源とこそ見ゆれ。

伊留滿喜三郎　然らば問はむ。如何なるか是れ佛法。

乘圓　卽心卽佛。

伊留滿喜三郎　如何なるか是れ卽心卽佛。

乘圓　卽心卽佛。

（伊留滿忽ち隱し持ちたる短刀を拔いて、乘圓が胸に閃かす。）

伊留滿喜三郎　如何なるか是れ心。

乘圓　（平然として）法性は是れ無知亦無得。無色亦無受想行識。

うかれ男　（つと進みて伊留滿の手を抑へて）宗論に刃物三昧は卑怯なるぞ。

伊留滿喜三郎　（うかれ男に引かれて二足三足。後へ退りながら）無知亦無得とは珍らしや。本來空ならばなどて天地萬象が生ぜむや。

乘圓　諸法空相、不生不滅、不垢不淨、不增不減。

伊留滿喜三郎　何と諸法が空相とや。烏滸がましき似非經文よな。本來諸法が空相なら、何ぞ空を空ずるの相あらむや。誠や大神でいゆすは是れ天地能造の主、人類の起源。抑も天地虛曠晦冥。でいゆす光あれと呼べば卽ち光あり。人あれと呼べば卽ち人あり。諸人何ぞこの大神を崇めざるや。何ぞ猥りに神威を疑ひ、大神の怒、天地滅盡、じゆいぞぜらるの時來らむを恐れざるや。何ぞてひりいなりるを取り自ら己が身を打つて懺悔禮拜せざる。何ぞさんた、くるすをすいて、偏におらつしよを唱へざる。波羅葦增雲近づけり。祈りを上げよ。ぐろりや、いん、えきせるしす、でお。さんたまりや。えす、きりすて。

（伊留滿金十字架を頭上に捧げ、ひたすらに聖頌を唱ふ。門內の樂曲、嚴肅豐麗なる寺院樂律より再びやうやう神祕奇峭なる近世的問題樂曲に移る。四下やうやうさわがしくなる。）

第一の人　あれ伴天連が妖術を始めたぞ。

第二の人　何ぢや妖術だてや？

第　二　景

舞臺やうやく赤くかすみ來り、後景なる寺の石垣模糊として遠く退き、人々の形も朦朧として定かならず。樂音の旋律更に激越悲壯の度を加へ、之に諧和せざる梵音はた三絃の聲も、雜然として亦その中に雜じる。

乘圓　遠離一切顚倒夢想。

伊留滿喜三郎　らうだむす・て、べねぢしむす・て、あどらむす・て、ぐろりひかむす・て。

乘圓　究竟涅槃。

（忽ち所化長順群より離れ、舞臺の中央に來り、舞妓白萩にすれ違ふ。）

長順　ふつ、其方は……

（白萩袖を翳して退く、これより長順は白萩を追ひ之にからむ。うかれ男その間に入りて之を妨ぐる仕草。この三人の間に往々また伊留滿の姿現はる。右手に高く金十字架を捧ぐ。金の十字架煌々と光る。沙門等は下手の方、程よき所に立ち並ぶ。樂聲、沙門、伊留滿等の祈禱唱讃の聲、諸人の驚き叫ぶ聲、紛々囂々ととだえとだえにひゞらぐ。）

長順　ふつ。其方はお鶴どのではござらぬか。

白萩　さういふお前は源さまか。

長順　あな、めづらしや、お鶴どの、其方は健でゐやつたか。

白萩　あれなつかしや源さま。

長順　最早其方は此世におりないものと思ひあきらめ……

白萩　怨めしや源さま。

うかれ男　やよ白萩、時が遲うなるわ、早やう罷らうと申すにな。

長順　（回想に耽るが如く、夢幻的に）彼の時其方は全盛の歌ひ女、殊に但馬守殿が執着のおもひ者、われは貧しき沙門の小伜、どうせ儘ならぬ二人の中、思ふが迷と人にもいはれ……

白萩　お前はあむまり獨合點……

長順　え、まゝよ、さうなりや人をも殺し、われも死に、無間地獄に落ちば落ちと、暗夜の辻にもさまよひしが……

白萩　源さまお前もあむまりな、などて一言その事をわたしに明けてはくれなんだ……

長順　思へば女一人のために、身を殺さむは、さすが世間の手前、人の思はくも恥かしく、此世ながらの梵涅槃、桑門の道に入りもしたれ、そなたと別れて四年の間……

白萩　わたしや夜晝泣いて泣いて——

うかれ男　早う去なうと申すにな。

白萩　あれ諄い衆ぢや。歸りたくば一人で行なしやんせいなあ。

長順　始めは山の金鼓の音、梵音樂を珍らしみ、勤行唱讃に耽りしが……

白萩　そんならお前は、私のことはうち忘れてか……

長順　止觀の窓を押し開き、四教の奥に尋ね入れば、無明の流れは法相の大圓鏡智と變りはすれ。

白萩　……はれ。

長順　幼き時ゆこがれたる、ほの珍らかにいと甘き、いとあえかにもなつかしき「不可思議」の目見は我胸より全く消えうせ、遺れるは氷の如き空の影——（演說の調にて）法相眞如といふと雖も是れ佛陀乃至傳教等沙門の頭を寫したる幻の塔、夢の伽藍、どうせ人の頭より出たほどのもの故學んで悟らぬ筈はおりない。悟といふは益ない徒勞、わが望むところは彼の「不可思議」、解けがたき命の謎、一たび捨てにたる無明煩惱ぢや。天台乃至傳教はわが胸中のこの寶を盜みたる、いはば物取强盜ぢや。宗門を蹴らいで何としようぞ。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

所化等　（遠くの方にて）羯諦、羯諦、波羅羯諦、波羅僧羯諦。

伊留滿喜三郎　（前方に立ち現はれ）ぐらしやす、あじむす、ちび、ぶろぶてる、まぐなむ、ぐろりやむ、つあむ、……

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

（忽ち門内沈痛悲壯なるゐおろんちえろの單奏。既にして金光燦爛たる不可思議の邪宗禮拜堂目前に現出す、端嚴美麗なる神女の姿。）

長順　（舞踊の間に黑き法衣を脱ぎ華美なる姿となる）あの響ぢや。あの姿ぢや。白萩。あれは其方の昔の姿ぢや。もう今は無い姿ぢや。（跪きて禮拜す）

白萩　（長順にならひて跪く）

伊留滿喜三郎　どみね、でうす、れくす、けれすちす、ばてる、おむにぽてんす、どみねひり、うにじえにて、えす、きりして、あるちしめ、どみね、でうす、あぐぬす・でい、ひりうす、ばとりす……

第三景

遠き方に、再びかすかに童子等が夕やけの唄。舞臺・紅色の靄はやうやう消えゆきて、さびしき青色の光となる。後景の石垣再び鮮かに前に出づ。門内の樂音も

亦や丶靜まりゆく。忽ち上手に氣味わるき人聲。

聲　やい、こりや、喜三郎よ。

（褐色の衣。袴の股立高く取つたる、年老い瘦せ屈みたる侍。太刀の柄に手をかけつ丶上手より登場。）

老いたる侍　（憤怒の相貌恐ろしく、手も體もうち顫へつつ）やい、喜三郎よ。其方はよつくもまた此處へ來ておりやつたな。

伊留滿喜三郎　（十字架にて眼をかばひながら）　や、叔父上か。

老いたる侍　只今其方の母御はな……え、思ふだに淚が雫れるわ……其方の不幸をう、怨み、怨み死にに死んでおぢやつたのぢや。

伊留滿喜三郎　ええ、母人が死なれたとや。

老いたる侍　不孝者奴！

伊留滿喜三郎　（首うなだれ、思ひ沈むこなし、ややありて——獨白）この大神の御爲には、母も捨て、妻、子も捨てよと……ええ、聖經にも記されておぢやるわ——叔父上！

老いたる侍　不孝の罪はまだしもあれ、汚らはしき異國の邪法に迷ひ、剩さへ、猥りに愚人を惑はすとは……

伊留滿喜三郎　え、惑はすとは……

老いたる侍　……不、不、不便ながら其方の命は、父御に代りこの叔父が……え、思ひ知れ、天の罰ぢや。

（老いたる侍。忽ち刀を拔いて伊留滿の首を落す。四圍の人々、皆驚き恐れ「人殺ぢや、人殺ぢや。」などいひつ丶逃れ去る。長順、白萩と沙門等とのみのこる。）

老いたる侍　（刀の血を拭ひ、鞘に納めながら、四下の人は眼に入らざる如く、つぶつぶと獨語）……御、御先祖への申譯ぢや……御、御、御先祖への申譯ぢや……（よろめきつつ上手の方より去る）

第一の所化　（一歩前へ踏み出し乍ら）　やれ、口惜や、南蠻寺の妖術めに化されておぢやつたとは。

長順　（夢中に老いたる侍の後を追ひゆきて）　お侍、些と待たれい。

第一の所化　（忽ち長順の領を捉へて）　こや、長順。

長順　離しやれ、そこ離しやれい。

第一の所化　お主は血相かへて何する積りぢやえ。

長順　ふむ、何を隱さう——徒らに俗世間の義理人情に囚へられ、新しき敎の心もえ覺らぬ俗人原、あの老耄の痴首丁切り、吉利支丹宗へわが入門の手土産にな致さむ所存。

第一の所化　何と、吉利支丹へ入門とな。

長順　新しき不可思議世界へ。

第一の所化　やあい、同學衆よ、長順が吉利支丹へ改宗ぢ

やと申し居るわ。

所化等　え、邪宗へ改宗ぢやてや。

（再び門内に樂聲。あこがるるが如きろまんちつしゆの曲節。）

長順　おおあの聲にあくがるゝのぢや。

乘圓　（痛ましき顏容をなして）長順！（長順眼差を落す）

學頭　如何に方々、長順が墮落の程はもはや一毫の疑も容れぬ所ぢや。容赦は無用ぢや。棒を與へよ。

第一の所化　長順今ぞ思ひ知れ！（杖を以て打たむとす）

乘圓　（之を遮りて）ま、ま、待たれい方々、第一の咎はこの乘圓に任されよ。――（戻す）やよ、長順。煩惱六根の爲めに妨げられたる其方の心では、わが言はえ分るまいが、古き法類ぢや、少時わがいふことを聽かれよ。其方とわれとはふとしたる奇緣により、兄弟も及ばざる交を結びたりしが、かの時誓ひし言の葉は、まだえ忘れは致すまいがな。

長順　ふつ。

乘圓　大恩敎主の御敎は日月輪の如く明かなれども、波羅密多の岸は遠く、鈍根痴愚の我等風情の求道の旅は中々の難澁、それ故に互に諫め奬まし、過あれば戒め懲らし、よしや步は遲からうとも、いやさ精進懈怠はあるまいと、誓ひし言葉も覺えて居やるか。

長順　如何にも忘れは致さないが……

乘圓　さらば長順。無慙なれども其方が止觀を曇らする邪見の源を斷ち呉れむず。南無阿彌陀佛。（右手にて腰なる如意を取り、長順の額を打つ）護法の咎、斬魔の劍ぢや。

（所化等「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」と唱へ乍ら、杖を以て長順を打つ。舞妓白萩をろをろとして之をかばふ。長順倒る。やがて沙門の一行、列をなして上手の方に退く。）

第一の所化　（長順を顧りみつゝ）長順。莊嚴光明の究竟道、般若波羅密多には行きもせえで、女人の袖に隱るゝとは、はて、さて、お主たちに善う似合うた邪宗門の勤行よな。

（衆僧列をなし徐ろに上手より去らむとす。）

學頭　白衆等聽說、黃昏無常偈。

所化等　此日已過、命卽衰滅、如少水魚、斯有何樂。

長順　（傷に呻きながら後へより衆僧に呼びかく）やよ、人々、などて、徒に古人の敎に著しくおぢやるのぢや。此「不可思議」を見ざるか。この「不可思議」を。

（門内の悲しき音樂に交りて小鐘聲。）

所化等　諸衆等、當勤精進、如救頭燃、但念苦空、無常勤愼、莫放逸。

長順　（蹌踉きながら立ち上りて、南蠻寺の門扉に至り倚ろ）おお、この不可思議に酔はいで、何の妙、實相がおぢやらうものか、心の底に生まるる赤兒の聲は、いつもこの不可思議にこがれて泣くのぢや。

（所化等のうち、或は首を回らして長順を顧るものあり。）

學頭　（所化等に）天魔波旬の誘惑に、方々は心を勞すると見ゆるな。

長順　新なる「不可思議」の泉にあこがれて泣くのぢや。

（倒ろ）

學頭　衆生無邊誓願度、煩惱無邊誓願斷、法門無邊誓願知、無上菩薩誓願證。

所化等　南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。（沙門等悉く上手より去ろ）

〰〰〰〰〰〰〰〰

白萩　源さま。――あれ源さまとしたことが、もう聲は聞こえぬさうな。まをし源さま、源さまいのう。

長順　（立ち上らむとする如くにして、また倒れ伏す）おお、この「不可思議」にこがるるわ、「不可思議」にこがるるわ。（聲次第に弱ろ）

白萩　あれ、源さま。まだ言葉は聞こえるかいのう。源さま、源さま。

長順　（細き目を開き）お鶴どのか。

白萩　（泣き伏しながら）あい。鶴ぢやわいのう。

長順　やよ、お鶴どの。四邊に人は見えぬかいな。

白萩　（四下を見廻して）いやいや、誰も見えぬわいな。今宵は月も出ぬさうな。

長順　やよ、お鶴どの。もそつと近う其方の耳を貸しや。

白萩　あい。

長順　（言葉を改めて）やよ、鶴。昔其方（そなた）に戀ひこがれた。あの時の心がいとしいわい。あの時あの戀がかなうたなら、何も不可思議は欲しうは無かつたのぢや。（長順瞑目す）

（門内の鐘聲、大鐘聲を以て終ろ。）

――幕――

代議士の家（三幕社會劇）

中岡左右

時
　現代
所
　東京

第一幕　第一の現はれたる世界
第二幕　第二の隱れたる世界
第三幕　舊の第一の世界

第一幕

人物

津田叔　六十歲、代議士
同みき子　五十歲、その妻
同國彥　二十七歲、長男
同富子　十九歲、長女
山口自成　四十歲、學校教授
小代新　六十五歲、牧師
田邊圭助　三十歲、牧師

津田氏宅。五月中の日曜日。午後一時。後ろ、洋館。前、庭。芝生の上には白布を懸けたる食卓とそを圍む數脚の椅子と。

國彥と富子と

富子　おや、兄さん、しばらく……
國彥　お前敎會へ行つて來たのかい。
富子　ええ。
國彥　おつ母さんも御一緒？
富子　いんえ、おつ母さん今日はいらつしやらないの。
國彥　どうしてだらう。家にもお出でゞないねえ。
富子　さう、それぢや私の後でお出になつたのかしら。
國彥　おつ母さんが敎會へお出でにならないやうな事は無かつたらう。
富子　さうねえ、どうしたんでせう。
國彥　何か家に變つたことはなかつたのかい。
富子　變つた事つて？　變なことを仰やるのねえ。
國彥　兄さんは此四五日は屢家へ歸つて來たが何か陰氣臭いやうぢやないか。
富子　家は何時だつて陰氣臭いわ。母さんは、下町の町家でなけりや陽氣な家はないと仰やるわ。昔だつて侍の家

は陰氣臭かつたつて。兄さんも獨りで下宿なんかなさらないで、家へ歸つてお出でなさいよ。
國彦　僕はこんな陰氣な家庭は嫌ひだ。
富子　獨りぢやな ほ寂しいぢやありませんか。(間)ねえ、兄さん。(間)私——どうもさう疑はれてよ——兄さん。
國彦　む？
富子　さあ——こんな事を言つて可いのかしら。
國彦　何？
富子　私……兄さんは（顏を赤め、涙を催さむ許りとなりて）兄さんは背教者ぢやないかと思ふのよ。間違つたら御免下さい。（兩手を眼に當てる）
國彦　（感動して）背教者?!
富子　（顏を隱したるまま。泣聲）兄さん、私にみんな言はして下さい。兄さんは京都からお歸りになつてから、舊とはすつかりお變りですねえ。母さんもさう言つてらしつたわ。私、今日教會で兄さんの爲にお祈りをしたのですよ。兄さん、また舊のやうに信仰に歸つて下さい。
國彦　お前は泣てるのかい。——さう、そんな事はもう考へたことはないが——成程兄さんは背教者だつたかも知れないね。
富子　兄さんのお顏にはいつも不安が見えてよ。何か始終お考へになつてるやうに。
國彦　それはさうさ。兄さんだつて考へることはある——然し昔のやうな事は考へない。主觀的と云ふことと、社會的といふことを、後で說明してやる。兄さんの考への多少變つたことをもね——だけど此處の家は人を罪人扱ひに爲たがるよ。そりや基督教徒の惡い癖だ。僕が高等學校の時分、學校で教會の仲間と話をしてゐると、他の人が屢自分達の惡口を言つてるだらうと邪推を廻はして困つたことがあるが、然し實際そんな所もあるのだ。だが自分の兄弟から罪人扱ひを受けるのは厭ぢやないか。おつ母さんなども、僕がこの家の閾を跨ぐと、まるで惡魔の臭でも着物に附いてゐるやうな眼をなさるんだ。お父さんも僕を不良少年か高等遊民のやうにお考へになつていらつしやるんだらうよ。此處の家へ來ると、だから僕は裁判所へでも行つたやうな氣持になるんだ。教會へ行かないつて事がそんなに惡い事なのかい。憚りながら兄さんだつて、ニイチエ位は讀んでゐるよ。——お父さんは基督教徒ぢやないぢやないの。教會なんぞ行つたことはないぢやないか。そしてまた世間も潔白な國士としてのお父さんの人格を疑ふものは無いぢやないか。
富子　（常に復して）私にはむづかしい事は分らないのよ。だけどねえ兄さん、兄さんの考へだつて、間違つて

居ないとも限らないんですから、も一遍考へ直して御覽なさいよ。母さんだつて兄さんのお考へになるやうに、そんなに兄さんの事を悪く思つていらつしやるんぢやなくつてよ。何時もお祈の時には兄さんの事ばかり言ふのよ。

國彥　（苦笑して）迷へる羊といふわけだな。おつ母さんは兄さんをどう思つてるのだらう。

富子　本當はねえ、兄さん、兄さんの洋服の隱しからお茶屋の書付が出たことがあるのよ。

國彥　む？

富子　おつ母さんが洋服のズボンをお疊みになるつて云つて、皺くちやになつた手帛だの、煙草だのをお出しになつた時――それが一緒に出たのよ。

國彥　（慚愧の相を表はす）

富子　その時母さんはいやあな顏をなすつたの。その後でみんなに八ツ當りをしたの。

國彥　さう、それは兄さんも覺えがある。成程ねえ、自分には分らないけれども、さう云はれゝば、兄さんの生活も變つてゐるねえ。廻りがさう云ふ事には平氣だから、何とも思はなくなつてゐるが――あれは何かの會で兄さんが幹事をやつた事があつた時のことなのだ。然しね、富ちやん、職業に依つては、さう云ふやうな機會――お酒を飲んだりするやうな事が多少あるのは仕方がないねえ。

富子　皆さう云ふ風にお言ひになるわ――さうお母さんが言つてたわ。

國彥　さう――牧師とか哲學者とかいふやうに、書齋の中で物を考へる人には、生活の純粹は保たれる。少し大きく社會的の仕事をする場合には、淸濁倂せ呑むつて事も必要になる。

富子　だから兄さんの考へが變つたつて言ふのよ。――母さんがさうお言ひでしたわ。

國彥　何だい、母さんが――僕が神學をやつて牧師にならうと言つた時、第一にお止めになつたのは母さんぢやないか。

富子　私そんなこと、ちつとも知らないわ。

國彥　女なんぞ馬鹿だ。男の造つたものを唯奴隷的に守つて行けば之れで可い。――あの時分は僕の胸の中にも燬くやうに理想の火が燃えて居たんだ。僕には天上の祖國が目の前に見えて居た。到底法律學なんて云ふ、下らない世間的の學問は出來なかつたのだ。其時に一番先きに反對したのは母さんぢやなかつたかい。師範學校の伯父さんを呼んで僕に意見さしたんだ。お父さんは氣が大きいから、そりや心では何とお思ひになつて居たか分らな

いけれども、そんな事には干渉なさらないで放任主義を取つていらしつた。兄さんは餘りお母さんが心配なさるから、お氣の毒に思つた。是だけは小代先生にも御相談は出來なかつたらうからね。兄さんが牧師にならうと思つたのは、小代先生の感化だつたから。――僕は京都へ行つてからも二年間はこの問題で苦しめられた。大學の始めの二年間はその爲め學校も面白くなく、休んで許りゐた。それでも成績の悪いのは厭だつたよ。大學を卒業する時に牧師になつた人がある。母さんも他人の事だと感心なさる。僕はその時分は初心で、物を合理的に考へる性だつたからそんな事が刺戟になつて、大ぶ煩悶したよ。然し學校が後一年といふ時に、僕もかうしちやあ居られないと考へた。どうせ學校へ入つた以上まづい成績で社會へ出たくない。――そして――唯競爭心ばかりで勉強したのさ。すると面白いもんぢやないか、今まで厭だとばかり思つて居た法律學が面白くなつた。

富子　兄さんはお出來になるからよ。

國彦　その代り、お前、兄さんの心には神の國より大事なものが現はれて來たのさ。

富子　神の國よりですつて。

國彦　地上の國家！もつと大きい現實の國だ。目前の事實だ。耶蘇教なんぞ馬鹿らしくなつた。

富子　まあ。

國彦　合理的な考を持つ男の人には、價値の變つた二つの權威に同時に服從することは出來はしない。耶蘇教は世界的で、沒國家的で、理想的だ。國家的の耶蘇教なんぞ有りよう筈はない。僕はもう目に見えない神の理想なんぞに係つては居られない。さう云ふ風に兄さんの思想が變つて來た。それを母さんがまた舊の所へ戻さうつて、出來る筈は有りやしない。いくら親だつて子供の思想まで干渉することは出來ない。

富子　ひどいわ。

國彦　ひどい事があるものか。女なんぞ、馬鹿で保守的で、昔の人が定めた宗教、道德の權威に從ふが可い。新しいものを創成してやるのは男の仕事だ。男は思想がずんずん進歩して行つて、それをその度毎に實行すりや破壞ばかりになるから、そこに女が調停者になつて、一定の時期だけ、型にして保存して置くのだ。それが反對になつて、女の保守が男の進歩を阻害しちやならない。女に世話を燒かれるのは子供のうちだけの事だ。ツアラツストラの外套の隱しから「眞理」が何と叫んだ。「お前は女の所へ行くのか。鞭を忘れて行つちや不可んぞ、鞭を。」――

富子　そりや、兄さんは知識がお有んなさるから理窟はど

うでも附くわ。
國彥　理窟ぢやない、眞理だ。
富子　私には何も分りませんから、兎に角兄さん、好く考へて下さいよ。もう一時が打ちましたよ。そりや私は兄さんを信用してるのよ。時子さんなんかは、私が餘まり兄さんの事ばかり言うつて言つて笑ふくらゐよ。
國彥　有り難う。心配しないで見てお出でよ。大きな善人は、大きな惡をも爲る事が出來る人がらでなけりや、出來ないんだ。兄さんが新しい敎を說いたらまづ第一に歸依するんだよ、可いかい。（笑）
富子　そりや其時にならなくちや分らないわ。
國彥　皆な遲いね。今日の日曜會はお流れかしら。
富子　お流れになることはないわ。いつも一時過でなけりや始まらないのよ。
國彥　また師範學校の伯父さんが來るだらう、田邊さんもお出でかい。
富子　多分お出でになるんでせう。
國彥　田邊君は——田邊君としては——立派な人だ。兄さんも運命に依つてはあゝ成つたかも知れない。あんな立派な人に愛せられるお前は幸福だ。
富子　（顏を赤くす。俯く）
國彥　戀愛と結婚と云ふことが、お前さんたち見たやうに、理想的に調和する例は餘り世間にない。羨んで可いくらゐだ。
富子　いやよ、兄さん、そんな事はまだ極つたんぢやないのよ。
國彥　兄さんは戯談を言つてるんぢやない。まだ極んないのなら、早く極めるが可い。——兄さんは背敎者だが、お前の結婚の時には、お祝ひしよう。
富子　（兄の顏を見、案外にまじめの相なるが爲に、俯く。）
（玄關にて戶の開く音。）
國彥　おつ母さんだらう。
富子　さうでせう屹度。（去る）
（富子と母と。）
みき子　（冷淡に）　おや、いらつしやい。
國彥　（輕く會釋す）
みき子　（次の間に入る）
國彥　どうも皆遲いね。
（再び玄關にて物音。）
國彥　今度は誰だらう。お父さんかしら。
富子　さうねえ。（去る）
（富子と田邊と。）
國彥　おや。
田邊　今日は。久しく會ひませんでしたねえ。大層御健康

に見えます。
國彥　さうですか、有り難う。少し旅行をして居ましたから。
田邊　もうお體はすつかり好うございますか。
國彥　有り難う。すつかり好いのです。
田邊　夏休みにお目に掛つた切りでしたね。——お勤めの方は？
國彥　まだぶら〳〵して居ます。東京の大學で、大學院へ入りました。
田邊　さうさう、その事は伺つて居りました。さうですねえ。貴方にはやつぱり學問の方がお向きでせう。
國彥　さう云ふわけではないのです。一生學者で暮す筈ではないのです。口が見付かるまで、腰かけです。
田邊　然し學者の生活の方が、思想の純粹が保たれて可いでせう。實世間へ出るといろんな危險がありますから。
國彥　私が實世間の危險に堪へられないと云ふお考へですか。
田邊　いや決して、決して。そんなわけぢやないんです。
國彥　危險に臨むのもまた趣味でせう。
田邊　私はさうは思ひません。態々自分を不愉快な危險の地に置く必要はないと思ひます。例へば政治ですね——一度宗教的の自覺を通つて來た人が、實際苦痛なしに、日本の政界へ飛び込むことが出來るでせうか。
國彥　國家の政治機關を否定しようと云ふのですか。
田邊　いや、私はそんな抽象的な理窟を言ふのではない。現狀を指して言ふのです。無論貴方のお父さま見たやうな方もお有りです。が、然し、お父さまの立場としても、內心に苦痛はお有りだらうと私は考へるのですよ。
國彥　凡ての人が皆神の國からの派遣者でもないでせう。
田邊　然しさう云ふ渦中に投じないで、安らかに自己の純粹を保つ事の出來る領域が許されてあるなら、そこに住んで居た方が可いでせう。
國彥　貴方は消極論者ですね。
田邊　いや、私は積極論者の積りです。
國彥　どうしてです。
田邊　私の場合には一切の妥協調停に就かないからです。
國彥　（いやな顏をする）さうです個人主義の立場からは積極論者です。
田邊　そんな主義からではないのです。心からの要求です。
富子　（話を外らさんとして）何故今日はみんな遲いでせう。——先生、今日のお話は大變むづかしうございましたね。私共には分らない所がありました。
田邊　さうでしたかねえ。私の云ひやうが惡るかつたんで

せう。皆さん解らないつてお云ひですか。
富子　皆さんお解りでせうけれども――
田邊　僕もね、今一寸革命が起りかけてゐるから――もつと廣い、もつと基督に近い教義に就て考へてゐる――僕はベルグソンを讀んで大に動かされた――
富子　おやまたお客さんらしい。（去る）
田邊　僕は今本を書かうとしてゐるが、そしたら或は小代先生と衝突しはしまいかと思ふ――
國彥　若い時代には若い思想が必要だ。君の良心の求むる所なら、構はないからやり給へ。小代先生の宗教はパオロの亞流だ、それと東洋思想との結び付いた偏狹な嚴肅(リゴリズム)主義だ。――君だから云ふが、僕の母はやはりあの通りの嚴肅主義者(リゴリスト)だ。――僕は無論父をば尊敬するが、僕の父は教徒ではない。一體日本の家庭に本當の基督教徒(クリスチヤン)の家庭があるだらうか。
田邊　それは有る、少いには少いが――
國彥　恐らく表面(うはべ)だけの妥協だらう。形式的のことだらう。
田邊　さう云ふべきではない。――然し時勢が宗教的感激に乏しいと云ふことは事實だが――
（富子。山口氏。）
（人々交互に挨拶する。）

（國彥と田邊とは一たび庭の彼方(かなた)に去り。再び舊位置に戾り來る。）
國彥　どうも舊(もと)とは感激の源が變つて來たやうに思ふ。今僕は實行の欲望に燃えて居るのです。實世間的の事業がしたい。そしてまた實世間的の快樂が味ひたい。――僕は形式的な宗教の教儀に縛られるより、自分の本當の欲求に從ふ方が一層人間的だと思ふ。僕は宗教的の自己內省なんぞは厭だ。內生活に沈潜すると、實行的方面の能力が鈍るからね。
田邊　さう云つて多くの事業家は靈の上に蹉跌するよ。
國彥　然し僕は往々、僕の體の中に殘つてゐる耶蘇教の血を呪ふ位だ。
田邊　おお、全く、背教者の言葉だ。
（玄關にて人聲。老牧師小代氏來る。人々此人を迎へ、尊敬を現はす。）
（椅子は食卓より遠ざけられ、人々芝生の上に不規則に坐す。）
小代　大部夏らしくなりましたな。（國彥を見て）おゝ、久しぶり。どうです、近頃は。
國彥　（小學校生徒の教師に對する時の如き畏怖と、自家苛責との心持）いや‥‥
小代　さう、さう、君はもう大學を出たのだつたね。法學

士か。幾つ、幾つでしたなあ、年は。

みき子　二十六です。――おや、七だつたねえ。

國彦　二十七です。

小代　ちつともやつて來ないぢやないか、來給へちつと。

國彦　（顏を赤める）

（最後に主人來る。）

叔　や、今日は大變失禮しました。何時も日曜日は開けて置くのですが、急に今日は用が出來て呼び立てられたものですから――一寸御免下さい。着物を着かへて來ます。

（下女ポオイ等この間に食卓を調へる。）

みき子　さあ、それぢや皆さん、何にもありませんが、食卓に御就き下さい。

（人々食卓に就く。）

（主人和服となりて來り群に加はる。）

小代　（祈る）今日――私共が、かかる些細な、然し淸い集りを、此處に持つことの出來るのを、あなたのお力と思ひ、感謝いたします。どうぞかう云ふ機會にも――かう云ふ單なる食事に於ても、あなたの御力の現はれんことを望みます。そして是があなたの爲めに善き働きをなす爲めの糧となることの出來るのを望みます。この祈を、主イエスの御名を通じて聞しめされむことを。

（人々稽首す。主人と山口氏とは唯沈默してゐる。國彦は其顏に異常なる自家苦責の相を見せて、同じく沈默してゐる。）

みき子　さあ、何もありません、粗末なものですけれど、召上つて下さい。

岩代　いや、結構です。（人々食事を始む）津田さん、大分今度の司法事件はやかましくなりましたな。

叔　いやどうも政事のことは、いつもごたごたばかりで困つたものです。

岩代　日糖事件以來兎角ごたごたがありますな。

みき子　ねえ、先生、如何なものでせう。かう社會の上流の方々が牢などへ入るやうになつたら、敎育の爲めに善くはないでせうがねえ。――

小代　どうも仕方がないですなあ。各自自分の家庭だけづつを淸潔にして行くより外は仕方がないでせう。

山口　どうも近代の經濟主義の餘弊ですな。

叔　政治家は誰も彼も皆惡人のやうに世間では思つてゐますな。

小代　我々素人が考へても、政治社會にはどこにもかしこにも屹度暗い所があつて、偶然光で照らされた一角だけが罪となつて現はれるやうに見えますなあ。

叔　心外ですが已むを得ませんな。

みき子　今度なんぞも是非さう云ふ風にしなければならなかつたものでせうか。それともお上の方の手心でどうもなるやうなものでせうか。

小代　さて、そこが問題ですなあ。

田邊　私は時々さう思ふことがありますよ。一體裁く人を誰が裁くかつて。――

みき子　何ですか、西洋には戰爭があつて、理が否でも強いものが勝つと云ふことが露骨に知れてまゐりましたし――また日本は日本で、今まで立派な方々とばかり思つてゐた人樣が罪人になつたりしますと――何かかう大そう氣味が惡く思はれてなりません。

山口　（多少皮肉に）西洋の耶蘇教的道徳も多少疑はれて來ましたな。

小代　教儀と政治との混淆はどうも弊害があるものだが――。

叔　どうも政治には政權、金權の爭が始終附隨してゐるのですから、往々罪惡も生ずるのですよ。それに御存知でせうが、代議士といふものが、みんな立派な紳士として教養のあるものと限りませんからな。

小代　何時ぞやは議會の中に大變な騷動が起つたと云ふことでしたが、實際あんなものですかな。

叔　殘念ながら、珍らしいことではありません。

田邊　官吏や政治家は、今何と云つても一番尊敬されて居るのですから、政治家の行動は一番世間に影響するだらうと思ひますが――

小代　（皮肉に）さうさ。宗教や道徳などの權威をも、凡て政府の機關の下に置かうと云ふ位だから――いつかの三教會同のやうに。

山口　あはれさうお取りになつては不可いでせう。何も別に内務省や文部省を道徳の府にしようとしたわけでも無いでせう。

小代　床次はあれで何を爲ようと思つたのかしれんて。

山口　然し西洋にも近頃は、宗教などにも國家的の觀念を加へようと論じる人が多いやうですな。宗教だとても一概に世界的のものだとは限らないでせう。一番世界的の宗教を持つて居る印度人の運命はどうでせうか。私の考へでは、人道などももつと差別的でなければならないのですな。實行の本源は國家ですから。無論排外的な、頑迷偏狭な主我的の愛國主義は不可いのですが、國家的生活を離れて、人道の實現を望むことは出來ないのですから、人道の理想の實現上、極めて重大な使命を有する自覺の上に立つた國家主義を建てなければならないでせう。私なども三教會同は時機を得たものと思つたのです。

小代　さうですな。何事も政府の力を待たなくてはならな

い國ですから。
叔　それはやはり民間に金がないからでせうな。亞米利加などは民間に金があるから、敎育でも、工業でも、民間の事業としてどしどし發達して居ます。
小代　（みき子に）　さうさう、貴方にはまだお話しませんけれども、我々の敎會もやうやうミツショナリイの手から獨立が出來さうですよ。――亞米利加から歸朝した有力な信者が出來ましてね。
みき子　へえ、それは好う御座いますね。
小代　或は會堂の建築にも來年の春あたりは取りかかる事が出來るかも知れません。
叔　寄附金の方は大分集りましたか。
小代　塚村さんが――今の亞米利加から歸つた事業家ですが、其人が亡くなつた奧さんの記念として二萬圓寄附することになりましたから。
叔　塚村？　塚村銀行の塚村ぢやありませんか。
小代　や、さうでせう。
叔　（顏を顰める）
小代　御存知ですか。
叔　いや、知りませんが。
山口　貴方の敎會では金持を優遇すると云ふ評判がありますなあ。
小代　（憤りて）　そんな事はない。あらう道理がない。
山口　當節は凡ての事業が大規模になりましたから――傳道のやうな精神的の事業にも、經濟上の後援が必要になるでせう。
小代　それだから經濟の上で獨立する必要がありますな。兎に角ミツショナリイから獨立することの出來ただけでも大成功です。
（小間使の女名刺を持ち來り主人に渡す。）
叔　ふむ。（考へて）　只今は來客中で都合が惡うございますから、用事ならば明日午前事務所の方で伺ひませうとさう申せ。分つたか。丁寧にさう申すのだぞ。
（婢去る。）
みき子　先生、家の弟の方が、近頃の風にかぶれて、繪かきになるのだなど申して困りますが、一度伺はせますから、どうか一つ御話して下さいまし。
小代　みき子さんは到頭息子さんたちに感化を及ぼすことが出來なかつたのですな。
みき子　どうも私が何ですから。
小代　國彦さんは何故御宅に一緒にお出でにならないのです。
みき子　（辯解的に）　家は來客が多くてやかましいと申しまして。

小代　こんな廣い家なら靜かな部屋は幾らでもあるぢやありませんか。——國彦君もまた少し教會へ來たまへ。
國彦　（顏を赤くする）
小代　下宿などに居ると浮浪人臭くなつて不可んよ。（みき子に）どうも下宿に居るのは善くないやうだな。殊に大學の上級とか、大學を卒業しては不可ないやうだ。うちの教會のものでも、下宿に居るものは善くないやうだ。交際は廣くなる。いろんな客が來る。酒は飮む。夜は夜深しをする。それでも社會はもう學生ではないから干渉しないが、あれでは浮浪人も一緒だ。
國彦　（昏を顫はす）
小代　舊幕の時代には武士道と云ふやうなものがあつて、侍の間にはお互に禮儀があつたのだが——今はもう全く方便主義だから。それは學問とか工業とかの、特別の仕事には働いてゐるだらうが、道德的の意義などは乏しいものですな。我々は國彦君見たやうな人から、——別に宗教家を望むのではないが、教徒（クリスチヤン）として立派に實世間に働く人を要求したいのですなあ。
（嬸の婢再び來る。）
婢　何か急用で、是非五分間で宜しうございますから、お目にかかりたう御座いますと申して居ります。
叔　（額を顰む）さうか、それぢや應接間へ待たしておけ。
（みき子に）中岡だ。
（婢去る。）
國彦　私は感激のない——形式に使はれるのは嫌ひですから——私はもつと自分の、本當に思ふことの通りにして見る積りです。
小代　君の本當に思ふ事は、まあどんな事です。
國彦　宗教でも——昔からの習慣や、何かでは無く、もつと本當の人間の要求に添つたものにするのです。——教會なんて形式的のものでなく——
叔　私は失禮ですが、一寸中座します、どうも一刻も靜かにしては置かないのですから。（去る）
小代　屢（しば）さういふ風な事を近頃の青年は言ふが、どうも僕には好く分らないが——然し道德上の交友がないと、道德の意識は衰へてゆく。教會は一方から云へば、多少形式的なものであるが、然しその形式とても、放縱には勝るのだから。今君、教會を離れて見たまへ、全く世間の人のやうに、今日主義になつてしまふよ。もつと立派な、宗教的の感激に滿ちた、緊張した生活を創造したいぢやないか。
國彦　貴方は私の生活が如何にも醜い、惡いもののやうにお考へになつて居るのですね。それは基督教（キリストけう）の排外思想

です。自分の教派以外のものは皆罪惡視する、獄吏の思想です。私はもう基督教徒では無いのですが、自分の良心に恥ぢない、人間のもつと本然的な、好い生活をして居るつもりです。

みき子　お前は何て云ふ物の言ひじなをするのだえ。

小代　（人惡く）ねえ、國彥君、僕には君の話の間に、ちらちらと、君がどうも安んじて居ない所のあるのが見えるがねえ、唯僕は君が何かする時には、本當に一遍反省して見てからするやうに忠告して置きたいねえ。一遍實行になつた過は取り返しがつかないから。

國彥　先生は何か私の行爲に不德でもあつたやうにお話しなさいますね。

小代　いやそんな事はない。無論具體的に言つたのぢやない。――諸君我々は國彥君の爲めに祝はうぢやありませんか。國彥君の門出に當つて、今後の多幸であることを。

（人々立ち上りかける。）

國彥　（激して）先生、義務づけられるのは厭です。私は私の心の外に、――若し今貴方から祝福して頂くと、私は自分の心を枉げても、貴方の御心持に順應するやうな氣になりますから――私と貴方とは考も心持も大變變つて居るのです。私は一體貴方がたと一緒に食事するのが間違つて居たのです。かう云ふ淸い席に、背教者たる私の居たことは善くなかつたのです。私は行きます。

（去る）

小代　（皮肉に）現代人だ。

（一種の相そぐはぬ心持にて人々相對す。）

みき子　先生、國彥は我々から失はれたのでせうか。

小代　決してさうではない。國彥君は良心を持つて居られる。何よりも先きに我々は、國彥君を呼び戻さなくてはなりません。我々は我々の周圍から、神の國の實現をして行かねばならんのですから。

（主人再び戾り來る。全く別の世界より來りしが如き、苦惱の相其額に現はる。）

みき子　中岡さんはもうお歸りになりましたか。

叔　歸つた。

みき子　何用ですか。

叔　いや大したことぢやなかつた。

みき子　おや富ちやん、どうしたの。

富子　先生。（流涕す。跪きて兩手を合はせる）先生、兄さんを救つてやつて下さい。

――幕――

第二幕

人物

覆眼の青年
その友人
四人の紳士
文江
多くの男女

五月半の午後五時ごろ。

或る大きなる料理屋に於て妓女の温習會ある日。

舞臺は二間續きの仕度部屋を現はし、舞踊の舞臺はその奥にある心持。下手の襖よりそこの觀覽客に通じ、上手よりはその舞臺奥の間に通ず。

上手の室には調度混雜す。下手の室には藝人男女の出入するものあり。

日未だ全く暮れたるにはあられども、華燭既に點き、紅紫等色彩絢麗の調度及び女人の脯膩に當り、燦々の美を現はし、且つ音曲の緩調の加はるありて、前の第一の世界とは全く異りたる情調的雰圍氣を現ず。

この第二の世界は、第一、第三幕の間に、殆んど聯絡なく挿入せられ、恰も暗變（ダアクチエエンジ）を以てする夢の場の如き看をなす。

○（下手より來れる女）今何をやつてるの。
○長唄の踊よ。
○誰だ、誰だ。
○市松に鶴子に松わかよ。
○地は誰が彈いてるの。
○百合子さんよ。
○隨分今度は盛會ねえ。ぎつしりだわ。
○おや、お仙ちやん今晩は。
○今晩は。能ういらつしやい。
○君も出るのかい。
○もう濟んだのよ。
○それで踊つたのかい。
○まさか。高音（たかね）に出たのよ。
○鶯見たいだな。藪鶯だらう。
○どうせさうよ。貴方（あんた）見たいにどら犬ぢやなくつてよ。
（奥にて喝采の聲。）
（一群の妓女石橋の踊の衣裳にて上手の室に入る。）
（人々の出入少時混雜する。）
○どうも御苦勞さま。
○有り難う。
○綺麗だつたわ。
○隨分見にくかつたでせう、姉さん。

○大變に結構よ。
○あらお世辭ばかし。
○今晩は。
○今晩は。
（老人。）
老人　一龜さんは居ませんか。もう直ぐ始まりますよ。仕様がない。どこへ行つたんだらう。一龜さんに雛子さん。一龜さんに雛子さん。（去る）
○お龜さんに雛つ子さん。
（人々笑ふ。）
（三人の女。）
○私も今度の會には出ようかしら。
○お出なさいよ、あんた。
○氣味が惡いわねえ。
○構はないから出て御覽なさいよ。
○だけど不可いわ。もつと上手にならなくつちやあ。
○そんな事を言つてた日にや出る時はありやしないわ。
○餘り遠慮してゐちや、藝は上らないつて言ふわ。
○それもさうねえ。私が出たら誰か上調子を彈いてくれる人があるかしら。
○お前さん立で出るの。
○いんえ唄でなくつちや。

○唄なんかどうでも可いから私三味線が上手になりたいわ。
○私神田の方へ行かうかしら。
○淺草へいらつしやいな。
○いやよ。私神田へ行くのよ。おつ母さんがその方が可いと言ふのよ。
○あの人の三味線は撥がうるさいねえ。
○大きな聲でそんな事を言ふと聞えますよ。
○もう始まるのよ。
○さよちやんだわね。さよちやんは巧いわねえ。
○だけどあの人は早間だわ。
○あの人は綱吉さんに夢中なんだから眞似をするのよ。
○綱吉さんは様子は好いけど恐いわ。あんな人は恐いわ。
○本當よ。
○藝人は恐い、恐い。
○入つて見ませうよ。
○さうねえ、おや中岡さんが居るわ。あの方の御連の方が大分見えるわ。（人々去る）
（後方の室にて音曲始まる。）
（舞臺には三四の男女の後ろむきになりて後方の室内を眺めて居るものがある。）

（藝者文江、料理屋の女中。）
女中　山さんからさつき電話がかゝつて來たのよ。
文江　今日來るつて？
女中　二三人でいらつしやるかも知れないつて。
文江　知れないのは心細いわね。
女中　大抵いらしやるのよ。今夜は何かお奢んなさい。
文江　その時になつて見なくちや分らないわ。奢るかも知れないわ。
女中　あんたも亦知れない方のね。
文江　お座敷があつたの？
女中　離れの六疊が一つ明いてるわ。
文江　狹いわね。
女中　外はもう皆ふさがつて居るんですもの。
文江　狹くつても離れなら可いわ。
女中　山さんは本當の名ぢやないんですつてね。
文江　さう、誰に聞いたの。
女中　この間お連れの方が仰しつたわ。
文江　さう。私には敎へないのよ。今夜來たら苛めてやらう。
（出入の人に交互に挨拶し或は戯謔をなす。）
（後方の音樂佳境に入る。）
文江　さよちやん好い潔ねえ。

○　姉さん、今晩は。
文江　あんたもう濟んだの。
○　えゝ一つ濟んだの。も一度地に出るの。
文江　忙がしいのねえ。若いうちにたんとお働きなさい。
○　まあ、有り難いわねえ。
（看客、遊子、妓女等の會話は宜しく機に臨み變ずる所あるべし。）
（二人の青年。孰れも和裝にして、うちの一人は片眼を繃帶して居る。）
覆眼の青年　（文江の前に立ちふさがる）
文江　まあ、山さんなの。誰かと思つた。
覆眼の青年　もう濟んだの。
文江　（丁寧に、慇懃に、つくろつたる口調にて）いんえ、まだこれからなの。まあ好く來て下すつたのねえ。（他の青年に）今晩は。この間は。
第二の青年　あれからどうしたい。
文江　（蓮葉に、ぞんざいに）隨分しどいわねえ、もうすつかり醉つちやつて、家へ歸つたのも分らないくらゐよ。
第二の青年　（皮肉に）嘘だらう。種は上つてるよ。
文江　何に？　可笑しいことを言ふのね。
第二の青年　君がいくら隱したつて、もうすつかり山君か

ら聽いちやつたよ。

文江　(一種の嬌態を示したる笑ひ方をする)　何を言つてるの。餘程あんたもおたんちんね。――(覆眼の青年に)どうなすつたの、お眼は。

覆眼の青年　トラホオム。

文江　あら恐いわねえ。移るでせう。

第二の青年　(狡猾なる笑ひをして)　移つたつて大丈夫だよ。眼だから、安心するが可い。

文江　どうして眼なら可いの。(急に暗示を解したる如く、第二の青年を誇張したる眼にて叱しながら)　あんたはいけ好かない人ねえ。

第二の青年　所が本當は眼が惡いんぢやないんだよ。今日實は山君を僕が無理に引つぱつて來たんだ。先生例によつて、まつ暗な本の一杯つまつてゐる部屋の中で勉强してゐるのだらう。そこへ僕が尋ねて行つたのさ。そしてフアウスト先生と呼んだものさ。

文江　フワスト先生つて何(なん)なの。

第二の青年　お前さんは帝劇の伊場孝の芝居を見ないから話にならないよ。

文江　見たわ、幽靈の芝居でせう。

第二の青年　まづ聽いてお出でよ。先生大分御勉强ですな。わつちはメフイストですと言つたね。

文江　あんた何處かで召上つていらしつたのね。

第二の青年　先生大分御勉强のやうですが、今は氣候も夏の初めですぜ。一寸窓から首を出して御覽なさい、椎の樹には花が一杯さいて、ぷんぷんと好い香(にほひ)を立ててるぢやありませんか。あの香をかぐと、全く海のそばへ行つたやうな氣になりますねえ。心がすうつと紫色の水平線へ消えてゆくやうでさあ。人生は快活です。愉快です。もつと縹渺として居て面白いところです。さあ書齋をお出なさい。街頭へでませう。街(まち)は夏になつて、女の人が綺麗ですぜ。さあ耶蘇教の臭ひを洗ひませう。人の家の軒には丁度火が點く頃です。歡樂はこれからですつて――さう云つて無理にフアウスト先生を引つぱつて來たのさ。

文江　フワスト先生はお氣の毒ねえ。

第二の青年　然しその御氣の毒は愉快なお氣の毒だから可いのさ。先生は人中へ出るのが厭だといふから、僕が一策を献じたのさ。

文江　一さくつて何。

第二の青年　入智慧さ。

文江　まあ、惡い人ねえ。

第二の青年　もとから僕は惡い人に生れついて居るのだが、それはどうでも可いんだよ。そこで僕がかゝりつけ

の醫者へ飛び込んで行つたものさ。そこの息子で僕の飲み仲間を買收して、この通りの假病人さ。
文江　まあ、さう云ふわけだつたの。
第二の青年　そこで勇氣を附ける爲めに、資生堂でヰスキイソオダを一杯やつたのだが、一寸妙策だらう。誰か分らなかつたらう。
文江　直ぐ分るわ。
第二の青年　それや君の眼だからだよ。
（第二の藝者。）
第二の女　おや林さん、今晩は。
第二の青年　大變な頭だねえ。
第二の女　早く來て御覧なさい。あんたの何が今踊つてるわ。
（第二の女、第二の青年去る。）
文江　どうしたんです。隨分御無沙汰ねえ。
覆眼の青年　あゝ。
文江　あゝだつて。變な御返事ねえ。あれからもうかれこれ一月になるのよ。
覆眼の青年　さうかなあ。
文江　今晩いいんでせう。お緩くりなすつていらつしやいな。私もうこの次に出れば、暇くんですから。――あれから誰かに會ひましたか。

覆眼の青年　いんや、誰にも會はない。
文江　おかみさんねえ、山さん隨分お變りになつたと云つてたわ。どこか他で御遊びになるでせう。
覆眼の青年　そんな事はない。
文江　でも分らないわ。
覆眼の青年　そん事はありやしない。
文江　だつて隨分久しくお見えにならなかつたぢやありませんか。
覆眼の青年　家にばかり居たのだ。
文江　も少しいらつしやいよ。――今晩は緩りしていらしつても可いでせう、本當に。お宅に不可ないんですか。
覆眼の青年　（答へず）
文江　またあすこの家へ行つて面白く遊びませうよ。此處には座敷が取つてありますから少時こゝに入らつしやいな。それから林さんと一緒にお出でになつて、途中から貴方一人でお歸いんなさいよ。このお坊つちまは是程教へて上げないと分らないから。
覆眼の青年　氣が向いたら。
文江　氣が向いたらぢやなくつてよ。屹度よ。私電話かけときますよ。（突然）おや。
（二人の紳士。そのうち一人はいたく酩酊してゐる。）
文江　（其方に行きて）ま、入らつしやい。濶からお出で

になつたのですか。

第一の紳士　いや、今來たばかりだ。隣の家で今まで飲んで居たのだが、こゝに踊があると云ふから一寸見に來たのさ。

文江　皆樣御一緒ですか。

第一の紳士　君もあとで隣へ來たまへ。——勢田ケ谷君、一寸踊を見て行かう。

第二の紳士　今行くよ。（兩人奥に入る）

（女中。）

女中　文江さん、津田さんが入らつしつたのよ。

文江　さう？（顏を顰める）宅へ寄つていらしつたかしら。

女中　隣の家で何か相談會がおあんなすつたやうよ。

文江　仕樣がないねえ。

覆眼の青年　どうしたの。

（第三第四の紳士。）

第三の紳士　でも一寸見て行かう。

第四の紳士　こんなものを見たつてしやうがないがな。（通過の途中文江を見て認識の表情をする。低く）何かやるのかい。

文江　貴方、うちへお寄りでしたか。

第四の紳士　いんや。

覆眼の青年　（ふと第四の紳士を見る。忽ち異常の驚愕の相を現はし、直ぐに眸を轉ず。一瞬の後には彼は後ろを向き、障子に面したるまゝ、身動きもせず、凝としてゐる）

第四の紳士　（怪訝の相より驚愕の相に。やがて一種の不安なる容貌をなして、後向きに立てる青年の姿を見詰む。默したるまゝ奥に入る）

（奥の音曲例の如し。）

覆眼の青年　（後を向く。蒼白の色。うち顫ふ唇）

文江　どうなすつたの、貴方。

覆眼の青年　（異常なる調子にて）お前、今の人。

文江　え？

覆眼の青年　今の人は誰。

文江　當てゝ御覽なさい。

覆眼の青年　誰だか言つておくれ。

文江　お客さんよ。

覆眼の青年　お客さんて？

文江　お客さんてお客さんよ。（微笑）ぢや言つて上げませうねえ、怒つちや不可ませんよ。貴方がいつも聞きたがつてゐた人なの。

覆眼の青年　僕が聞きたがつて居たつて？

文江　私の旦那よ。貴方何時か、どんな人だか見たいと仰

やつたぢやありませんか。御安心なさい、あんな老人(ちいさん)よ。(笑ふ)

覆眼の青年 (無言。烈しき發作的の表情)

文江 まあ、どうなすつたの?

覆眼の青年 (女に支へられたるまゝ) あれは僕の父だ。本當の父親だ。

文江 (あきれたるこなし) まあ――さう。(少時して烈しく笑ひ出す) 兄弟つてことは屡(よく)言ふけど――まあ、私は何でせう。――本當に貴方のお父さんだつて苗字が違ふぢやありませんか。

覆眼の青年 僕の苗字は變つてゐるんだ。

文江 あら、本當に?――私はなんでせう。可笑いわねえ。

覆眼の青年 (憎惡の眼を以て女を見る) 可笑しい? (障子の所へ兩腕を當てゝ額を押へる)

(第二の青年。)

第二青年 (奥より來りて) 山君。君の父(ファザア)らしい人が來たぜ。見つかると不可ない。あつちへ行かう。(覆眼の青年を促して自らまづ去る)

文江 (後より覆眼の青年を追ひ、耳許にさゝやく) 御安心なさいよ。私がうまく繕つて置くわよ。何でもないわ。氣を大きくお持ちなさいよ。私待つて居ますよ。

覆眼の青年 (少時女の顏を見詰める。默つて去る)

(奥の座敷さわがしくなり、舞踊の終りに近づきたるを暗示す。二三人の人々既に出て來る。)

文江 (青年の後姿を見送りながら、一種複雜の笑顏を爲す)

――幕――

第三幕

人物

第一場の時の人物より二三の人々を缺く。

津田氏宅日本室客間。

五月末の夜十時ごろ。

みき子 (外より歸りたるまゝに坐つてゐる)

山口 (奥より來る)

みき子 どうでした。

山口 今電話で聞いて見たら、大抵巧くゆきさうです。も一人、私は新聞社に關係した人を知つてゐるのですが、今から直ぐ車で行つて見ようと思ひます。

みき子 お氣の毒ですねえ。

山口 一寸車を賴んで貰ひませう。

みき子 富子や、富子。

山口　妙な事が役に立つものです。私の高等學校時分の友達ですが、道樂の爲めに學校を廢めて新聞記者に成つてゐるのがあるのですがね。それが今ぢや中々新聞記者中の勢力家になつて居るのださうです。偶然二三日前に遇つて話をしたのですが、丁度可い。今から行つて一つ頼んで見ませう。私はどうもかう云ふ事は不得手ですから。少しお金は使はなくては不可ませんよ。

みき子　可ござんすとも。其事は心配なく貴方の思ふやうにして下さい。

（富子。）

富子　母さん、何です。

みき子　早く、お前、一つ車を誂へさしておくれ。

富子　はい。（去る）

みき子　山口さん、私本當に心配ですよ。もうどうして可いか、分らなくなつてしまひました。

山口　御安心なさい。生命には障りはないさうですから。

みき子　だけど何で自殺する氣になつたでせう。私は少しも分りませんよ。

山口　國彦さんはそんな人ぢやなかつたのですがねえ、やはり時代の風潮に感化れたのでせう。さう云ふ樣子は少しも見えませんでしたか。

みき子　いんえ、ちつとも。尤もあれつから家へはちつとも來ませんでしたからね。

山口　さうですな。それぢや分りませんな。

みき子　然し突然そんな風に精神病が起ることがあるのでせうか。

山口　さあ——宗敎のことなどで餘り煩悶したりするとあるものですが。

みき子　子供に宗敎を吹き込むのは惡いものでせうか。その爲めぢやないでせう。

山口　何時か小代さんのお出での時も妙だつたぢやありませんか。

みき子　さうでしたねえ。あれも氣が小さい方ですから。

山口　宗敎は兎角人の氣を小さくしますよ。兄さんは何て言つて居ました？

みき子　何とも言つて居ませんよ。忙がしいつて云つて碌々話もしません。唯國彦が病氣が直つたら、本人の希望に任せて、直ぐ亞米利加へやるつて言つて居るんですがね。

山口　亞米利加へですつて？

みき子　私などにも病院へ行ちつや不可ないと言ふのですよ。父だけには國彦も何か話したと見えます。私には何にも言ひません。

山口　私は惡いとおもつたから、餘り聞きませんでしたが。何かわけがあるのですか。

みき子　私には、ですから些とも分りません。出世前の大事な體だから、三四年亞米利加へやつて修業させようと宅では申して居りました。
山口　そんな先の事は今はどうでも可いのです。それより悪い記事が新聞へ出ないやうにしなけりやなりません。新聞では噓の事を面白く書き立てたがりますからね。女と關係があつたとか、哲學に中毒したとか。――
みき子　そんな事は決して有らう筈はありませんよ。國彥は女など〻關係するやうな子ぢやなかつたのです。
山口　兎に角無根の記事が出ると不可ませんから。新聞屋は機敏ですからね。誰でも可いから早く上手な專門家に賴まないと不可ませんね。私共はかう云ふ世間の事には慣れないから、骨が折れます。
みき子　島上さんにでも賴みませうか。辯護士ですから。何しても宅が歸らなくちや。
山口　忙しさうですね。
みき子　何しろ、貴方、出川さんの事件が大變ですから――政治家なんて職業は厭ですねえ。
山口　出川さんは拘引されたんですね。
みき子　まあ、本當ですか、あの人が――宅の親友です。
山口　多分本當でせうよ。貴方は知りませんか。
みき子　宅はそんな事は少しも話しません。
山口　さうですか。それぢや兄さんもお忙がしいでせう、同じ政黨など〻云ふ關係から――。
みき子　ねえ、山口さん、宅は私にはそんな事は少しも申しませんが、宅などはそんな事に少しも關係は無いでせうねえ。
山口　無論ですよ。ありや皆、政事家と云つても、極品性の悪い人達だけの事ですよ。
みき子　それでも近頃は大部世間のえらい人に、いろ〳〵の事がありますねえ。
（富子。）
富子　お車がまゐりました。
山口　それぢや姉さん、私一つ行つて來ますよ。首尾は兎に角途中から電話を懸けて寄越します。若し都合が附いたら、歸りに一寸病院へ寄つて樣子を見て來ませう。
みき子　山口さん、餘り深くは聽かないで下さいよ。
山口　いや大丈夫です。若し寢入つて居たら會はずに來ます。醫者に好く聞いて見ませう。（去る）
みき子　濟みませんねえ。
（皆々山口氏を送りて出づ。少時素舞臺。）
（みき子、富子再び戻り來る。）
みき子　今夜小代先生に來て頂かうかしら。母さんはどうして可いか、分らなくなつてしまつた。

富子　母さん、本當に兄さんはどうしたんでせうねえ。
みき子　淸い家庭から離れて、獨りで遠くへ行つて居たからだよ。さあ、お前も兄さんの爲にお祈りなさい。
（兩人祈る。その言葉聞々聞かれる。）
富子　かあさん。（みき子に取り縋り、顏を埋む）
みき子　田邊さんの所には電話はないかえ。車をやつて來て頂かうか。
富子　さうねえ、私手紙を書きますわ。
みき子　さうしておくれ、私は本當に心配になるのだから。だつてお父さまが些とも取り合つて下さらないのだもの。
富子（一たび去り、再び硯箱、卷紙を携へて出づ）
みき子　ねえ、富子、母さんが昨日いやな夢を見たつて言つたねえ。
富子　えゝ。
みき子　その夢がねえ。或るえらい人の事なのだよ。
富子　さう。
みき子　下手だつて構はないよ。そんなに破つてばかし居ちや、仕方が無いぢやないの。
富子　でも。
みき子　立派な先生の方が、芝居小屋見たやうな大きな所で演說していらつしやるのだよ。それを大勢聽いて居て、母さんも山口さんやなんかと聽いて居たの。——またむだなの。
富子　だつて母さんが御話なさるんですもの。間違ふのよ。
みき子　さう、御免なさい。
富子　可いのよ。そしてどうなの。
みき子　さうするとねえ、突然演說なすつていらしつた方が血相變へて飛び出したのよ。
富子　へえ。
みき子　そして母さんや山口さんなんぞの居る桝の中へ隱れてぶる〳〵と顫へていらつしやるの。
富子　どうしたんですつて？
みき子　何か惡るい事をなすつて、警察から人が來たんですつて。母さんはいやな氣になつたのよ——恐ろしい——。それがねえ、名を云つては不可ないけれども、お父さんのお友達の大學の先生の方の顏なの。
富子　まあ、いやな夢ねえ。
みき子　餘りいやな夢だつたから、母さんは朝起きると直ぐお祈りをして、昨日は一日斷食したのよ。
富子　さう、それでなの。お腹がお惡いんぢやなかつたんですねえ。
みき子　一度だつて思つたことも、考へたこともないやう

な夢ぢやないかい。いやな夢は人に話してしまつた方が可いと云ふけれども、餘りいやな夢だつたから話されなかつたのよ。そしたら兄さんがあんな事でせう。やつぱり話してしまつた方が可かつたんだねえ。

富子　そりや迷信よ。そんな事はありやしないわ。私こゝぢや手紙は書けないわ。あつちに行つて書くわ。

みき子　唯用だけ短くかけば可いのよ。

富子　そりやさうですわ。何を他の事を書くものですか。（去る）

（玄關に車の着きたるけはひ。）

（叔洋服にて座敷に入り來る。）

みき子　（立ち上りながら）まあ、貴方で御座いましたか。お歸んなさいまし。

叔　（何も言はず次の間に行く）

みき子　國彦の所へ寄つて來て下さいましたか。

叔　到頭隙がなかつた。鍵を借してくれ、簞笥の鍵を。――それから玄關へ人が尋ねて來ても留守だと斷つてくれ。

（小間使。）

婢　奥さま、奥さま。

みき子　（戻る）何だえ。

女中　（名刺を出す）かう云ふ人がまゐりました。

みき子　（名刺を見て）いやだねえ、また新聞記者――御主人は御不在だと申しなさい。

婢　さう申しましたら、奥さまでもよろしうございますから、御目に懸りたうございますつて。

みき子　奥さまはお出でだと言つたのかい。

婢　いゝえ。

みき子　奥さまも急用で外出したとお云ひ。

婢　（去る）

（富子。）

富子　母さま、車をやりました。――お父さまが外所行きの和服を出して下さいつて。

みき子　さう、只今。――お父さんはまた何處かお出でになるのかしら。

叔　（洋服を脱ぎたるまゝ、大なる鞄に書類など入れながら、それを携へ出づ）車屋を呼べ、車屋を。

（小間使。）

婢　奥さま、どう申しても歸りません。

みき子　何だと云ふのだえ。

婢　お歸りまで待つて居ますつて。

叔　面倒臭いな。俺が會つてやる。西洋館の應接間に通してお置き。

みき子　それぢやお前あとで車を誂へておくれ。

（婢去る。）

叔　（洋服を和服に着代へながら）俺は今夜今から急に大阪の方へ行かなけりやならない。詳しいことは手紙で寄越す。大抵五六日で歸つてくる積りだが――　――。留守中人が尋ねて來たら、好く名を聞いてお置きよ。

みき子　何でそんなに急にお立ちになるのです。國彦の事はどうしませう。

叔　あの方はもうあれで可いぢやないか。もう大丈夫だ、心配はない。むゝ、彼奴が氣の小さい奴だからあんな事になつた。もう好く話してあるから心配はない。

（小間使再び來る。）

婢　旦那樣お電話でございます。

叔　誰からだ。俺が居ると言うたか。

婢　お留守と申しましたら、奥さまでもよろしう御座いますから――中岡ですからと申しました。（去る）

叔　中岡？　それなら俺が出る。（去る）

富子　母さん、何故そんなにぼんやりして坐つて居らつしやるの。

みき子　早く山口さんが歸つて下されば可いねえ。新聞記者は何だといふのだらう。

富子　いやなものねえ。人の家の不幸につけこんで來て。

みき子　私會つて見ようかしら。

富子　母さん、およしなさいましよ。

（間。）

叔　（戻り來りて）富、こゝの荷物を片付けて置き、客が來るから。

富子　はい。（片付けながら去る）

みき子　何ですか、話して下さい。私は心配ですから。

叔　政治家といふ職業には時々厄介な事がある。お前も知つてゐる通り。

みき子　（蒼白になる）何か――何か事件が起りましたか。

叔　さ、早く帶を出してくれ。――羽織――良い方の紋付だ、良い方の――いろんな運命の傍杖を食つて困つてしまふ。

みき子　（物を考へてゐる）

叔　さ、早く。今夜大阪へ行つて、一週間ぐらゐの内には歸つて來る積りだが――事に依るとも少し遲くなるかも知れない。詳しい事は後で分る。留守中萬一何か用事が出來たら山口と相談して吳れ。――俺は一寸新聞記者に會はう。（去る）

（玄關にて物音。山口氏。）

みき子　お歸んなさい。御苦勞でした。

山口　（激昂してゐる）

みき子　どうでした。

山口　兄さんは？

みき子　今新聞記者と話しをなすつてゐます。

山口　姉さん、仕様がない。もう夕刊へ出ちやつた。「最後日報」だ。一番質の惡るい新聞です。

みき子　何だつて出てゐます。

山口　それやもう出駄ら目ばかり。

みき子　お見せなさい、新聞を。

山口　見ない方が可いのですよ。困つちやつた。困つちやつた。――當分姉さん、世間の誤解から來る不愉快を忍ばなくてはなりませんよ。

みき子　でもお見せなさいよ。

山口　さあ見るなら御覽なさい。

みき子　（新聞の夕刊を見る。異常なる感激を示す。所々讀みさしながら獨語をいふ）――紳士の家庭に――耶蘇教の家庭に有らう筈はない事ぢやありませんか――おゝ苛い事――何て惡德新聞でせう――隨分噓な事を――おゝ、私もう讀まない。

山口　お休しなさい、姉さん。

（間。）

みき子　山口さん、貴方はこの新聞を信じますか。

山口　無論、姉さん、そりや皆噓です。

みき子　無論噓ですけど――ねえ、山口さん――もし此萬分の一でも本當だつたら――

山口　姉さん、貴方は今日は餘り興奮して居ますから、正當な判斷力がありません。

みき子　若し然し少しでも本當でしたら――神さま。

（小間使。）

婢　奧さま、お客樣です。中岡さんがいらつしやいました。

みき子　旦那樣にさう申し。――山口さん、彼方へ行きませう。

（みき子、山口氏去る。）

（其後に中岡氏案內もなく上つて來る。）

（叔、急ぎ來り、緣側より客に「や、失禮、今直ぐ來る。」と云ひながら居間の方に入る。）

（後より女中座蒲團、茶など持つてくる。山口氏主人に代り、居間の方より、西洋館の應接間に行く樣子。）

（叔、再び來る。）

叔　やあ、失敬大變に早かつたなあ。

中岡　（低聲にて、重大らしく）いやそこまで自動車で來たから。――自動車はわざと角に待たしてある。

叔　不可んか。

中岡　いよ／＼拙い。

叔　うむ、不可んか。

中岡　事によると覺悟を要するぜ。
叔　實は今夜名古屋へ行く積りだ。
中岡　もう遲い。
叔　兎に角行つて見よう。
中岡　さうか。
叔　兎に角嚮き打合せたやうな筋で行かう。
中岡　（考へる）もう然しどうなるか、分らぬぞ。
叔　鞄は君に依托するよ。
中岡　俺の番までには間があるだらう。
叔　然し俺の歸るまで中は開けてくれるな。
中岡　大抵はさうする。場合に依つちや臨機應變の處置を取る。
叔　君を信用するより他はあるまい。
中岡　それぢや歸るとしよう。誰か車まで持つて行つて貰はないと困るな。運轉手は殘して來たから。
叔　車屋を呼ばう。
中岡　面倒臭いな。俺に持てるだらう。どれ見せたまへ。
叔　（隣室より鞄を持ち來る）是れだ。これだ。
中岡　持てる。持てる。
叔　僕は今度だけは恐ろしいよ。
中岡　もう一か跋かになつたら覺悟を決るさ。ぐづぐづすると却つてみつともない。何時かの鹿村のやうに。惡人になつたら惡人の隈で行くんだ。それぢや歸らう。
叔　君の自動車ぢやないか。自動車が來たぜ。
中岡　成程、だが俺のぢやない。この家を教へて置かなかつたから。
叔　はて、可笑しいな。自動車などの來る通りぢやない。
中岡　留つたかな。さうさう、君の息子さんが怪我をしたつてねえ。
叔　誰に聞いた？
中岡　誰かに聞いた。
叔　どうも飛んだ恥さらしだ。もう言つてくれるな。——門が開いたぜ。
（人々沈默して異常なる靜さとなる。門者の自動車の音、門を開く音、人の靴音などはつきりと聞える。）
叔　（不安さうに）何だらう。
中岡　可笑しいぞ。
（再び沈默。）
（呼鈴の音。やがて女中の玄關に出てたるらしきけはひ。）
（主客は相對しながら、注意深く耳を傾けてゐる。人の聲もかすかに聞える。）
（やがて女中襖を開けて入る。）
婢　（一種緊張したる容貌にて、一枚の名刺を主人に渡す。）

その際一言も言はず）

叔　（名刺を取る。直ぐ中岡の顔を見る。やがて名刺を中岡に渡す。突然無意識に立ち上る）

中岡　（同じく立ち上る）

女中　（同じく無意識に急ぎて奥に入る）

叔　（慌てゝ外へ飛び出す）

中岡　（續く）

（舞臺少時素舞臺。）

（女中。その後よりみき子。）

みき子　まづ此方へお通し。あゝ、それより西洋館の應接間が可い。もう新聞記者は歸つたのだらう。

（女中去る。）

（數人の足音。）

みき子　（山口氏の肩に手をかける）　山口さん、どうかして下さいよ、山口さん。

（富子。）

富子　（奥の間より座敷を覗ひ、他の人の在らざるを見て、そのまゝ疊の上にうつぶしになる）

――幕――

吉井勇篇

爲馬と句樂（一幕）

人物

爲馬　落語家
句樂　同じく落語家
柳沼　船の床屋
花子　爲馬の知つてゐる女
貞谷　講釋師

場所

航行してゐる船の甲板の上

或大きな汽船の甲板の上。船側から甲板を見たところで、下手半分は白く塗つた船室の外側になつてゐる。その中程のところに出入口、上手は籐の長椅子や安樂椅子が置いて、船室の上のもうひとつの甲板へ昇ることが出來るやうに梯子が懸かつてゐる。そして上手に艙口があつて、そこからは下の船室へ通ずる昇降口がある。

夜ももうかなり晩いのだけれども、まだ船室の窓には煌々とした電燈の光が映つてゐる。

月の美しい晩で、甲板の上は晝のやうに明るく、船の向うには銀のやうに輝いてゐる海が見える。

夏ももう終りに近い頃のこと。

爲馬は甲板の上の籐の長椅子に腰を懸けて、前に立つてゐる柳沼と話し合つてゐる。爲馬は二十七八歳位の小柄な男で、白い背廣の洋服を着てゐるのだけれども、話の調子で直ぐに落語家だと云ふことが分る。柳沼は白い詰襟の服を着た二十六七の小肥りの男で、今はその船の床屋をしてゐるが、以前は藝名をしん樂と云つて、落語家の前座だつたことがある。

爲馬　（懐しさうに）　お前がこの船に乘つてゐようとは、おれは全く知らなかつたよ。何かい。お前はあの名古屋でドロンをしてから、一體何をしてゐたんだい。

柳沼　（頭をかいて）　いや、如何もその節はいろ／＼師匠にも御迷惑を懸けつちまいました。何をするつてあなたもと／＼やくざに育つたものに、何が出來るものですかね。金の盡きたのが緣の切れ目で、神戸で女とは別れてしまつて、それからまあいろ／＼なことをやつた揚句が、以前ちよつとやつたことがあるので、この船の床屋になつたつてえ譯なんです。

爲馬　（意外な顏付で）　へえ、それぢやあお前は今床屋さんかい。おれはまたボオイか何かと思つてゐたんだが、

床屋とは變つてゐるね。早速明日剃つて貰ふぜ。

柳沼　へえ、かしこまりました。

爲馬　しかし、何だらう。船に乘つてこんな商賣をしてゐると、ずゐぶん面白れえこともあるだらう。

柳沼　なあに近頃ぢやあ面白いこともありませんよ。それでも以前この船が歐洲航路をやつてゐた時分は、一航海して來るといい收入がありましたから、ずゐぶん面白いこともありましたが、上海航路に變つてからは、もうから駄目になつてしまひました。

爲馬　(點頭いて)　さうだらうよ。この客ぢやあ如何にもならねえだらう。おれも少し厭になつたよ。

柳沼　落語なんててんで分る客はゐねえでせう。

爲馬　(忌々しさうに)　ゐるものかな。おれはさつき『對間腹』をやつて、あんまり妙なところで手を敲かれたり何かするんで厭になつちまつたよ。

柳沼　ほんとにあたしも聽いてゐて腹が立ちましたよ。若し何だつたらあつしも柳亭しん樂の昔に返つて、明日の晩あたり前座を勤めさせて貰はうと思つてゐたんですがあれぢやあおやめだ。

爲馬　うん、よしねえ、よしねえ、つまらねえやな。これで小しんなら何とか皮肉のひとつも云ふところだぜ。

柳沼　(急に氣が付いたやうな)　三筋町の師匠は近頃如何しておゐでゞす。

爲馬　師匠――ああ、小しんかい。うん相變らずだよ。如何も體の工合が惡いつて云つて、病院通ひをしてゐるが、それがをかしな病氣でね。

柳沼　へえ、何ですね。

爲馬　何てえんだか名前は知らねえが、足がふら〳〵する病氣なんだ。

柳沼　(笑つて)　はははは、師匠らしい病氣ですね。

爲馬　しかしそれでも相變らず強情つ張りでね、今度も誘つたんだけれども、おれはそんな觀光團の餘興に雇はれて往くために、洋服なんぞ着るのは厭だつて云つて、如何しても來やがらねえのよ。

柳沼　成程、師匠の云ひさうなこつた。(間を置いて)　だけど驚きましたねえ。あなたと句樂さんが洋服を着て乘り込んで來ようとは思ひませんでしたよ。何しろ句樂さんがカアキ色の詰襟の服に、豆絞りの手拭で頬冠りをした圖と來たらありませんでしたからね。

爲馬　横濱の棧橋の上で、あの格好で踊ををどられた時にやあさすがのおれもまゐつたよ。

柳沼　へえ。そいつはまゐりますね。(氣が付いたやうに)　さあ、ひとつウヰスキイでも持つて來ませうか。今に句樂さんや貞谷さんもやつて來るでせうから。

（柳沼が下手に行きかける時、貞谷が下手の船室への出入口から出て來る。四十四五歳位の顋髯を生やした男、新講談をやる講釋師。）

柳沼　（揖れ違ひながら貞谷に）　やあ、如何も御苦勞樣、焉馬さんはそこにゐますよ。

（柳沼は同じ出入口から去る。貞谷は焉馬の傍に來る。）

貞谷　如何したい。一人でぼんやりしてゐるぢやあないか。

焉馬　ぼんやりもすらあね。おれはもう東京へ歸りたくなつたよ。

貞谷　（笑つて）　また誰かのことを思ひ出したんだな。月を見て女のことを思ひ出すなんて古い型だ。焉馬師匠にも似合はねえ。（椅子に腰を懸ける）

焉馬　そんなんぢやあねえや。（氣を變へて）　一體貞谷さん、お前さんは今夜は何を讀んだんだい。

貞谷　今夜はわしは『噫無情』さ。さすがに船の客は教育があると見えて、みんなしんとして聽いてゐたよ。

焉馬　（面白くなさゝうに）　さうかい。『噫無情』つて云ふのはあれだね、あのジヤンバルジヤンだね。亞米利加へ行つた時も、お前さんは何處でもあいつばかり讀んでゐたぢやないか。

貞谷　亞米利加つて云やあかうして船にお前さんと一緒に乘つてゐると、あの亞米利加行きの時のとを思ひ出すね。

焉馬　あの時は面白かつたが、今度は如何もつまらなさうだよ。第一給金が安過ぎらあ。

貞谷　なに給金は安くつても、外に祝儀がたんまり貰へるつて話だから、まあそつちへ埋め合せをつけて貰ふんだね。

焉馬　なあにお前、祝儀を出しさうなお客は一人もゐやあしねえぢやないか。兎に角亞米利加へ行つた時は、給金は高えし、博奕は打てるし、毛唐の淫賣にやあ連れてつて貰へるし、あんな面白いことはなかつたが、如何も今度は最初からつけが惡いぜ。

貞谷　しかしお前さんは何だぜ、あのロスアンジエルスに行つた時にやあ、拳銃の音で脅え上がつたぢやなあいか。

焉馬　（少し機嫌を直して）　さう、さう、あの時やあ驚いたね。何しろ高座が球臺の上で、何だか喋り難くつて仕樣がねえところへバアンと云ふ音がしたんぢやねえか。不思議だね。亞米利加の拳銃は、ズドンなんて云はねえんだからな。バアンと云ふあの妙に不氣味な音は、今でも耳についてゐて忘れられねえよ。

貞谷　（笑つて）　はははは、あの時はわしよりお前さんの方が餘つ程意氣地がなかつたよ。（不圖思ひ出したやうに）　ああ、さう云やあの時歸りの船で一緒になつた

チヱリーダンスの女がこの船に乘つてゐるぜ。
焉馬　(ちよつと分らないやうな顔付)　チヱリーダンスー——何だい、チヱリーダンスつて云ふのは。
貞谷　何でもないぜ。あの中にやあ歸つてからお前さんが手紙を遣つたり何かした女がゐたぢやあないか。
焉馬　ああ、あの博覽會の餘興に往つた踊りの連中か。それぢやあの花子つて女だらう。
貞谷　何てえ名前だか知らないが。兎に角あの中ぢやあちよつと踏めた顔の女さ。たしかにあの女に違えねえんだ。さつき客の後の方にゐるのを、わしはちらと見付けたんだ。
焉馬　(にやりとして)　ふうん、ゐたかい、あいつが——ほんとかい。貞谷先生がつぐんぢやあねえだらうね。
貞谷　何を、馬鹿な。お前をかついだつて何になるものか。
(柳沼が銀色の盆の上にウヰスキイの壜やらコップやら摘み物の皿を載せて以前の出入口から出て來る。)
柳沼　やあ、何うも遲くなつちまひました。句樂さんが『長屋の花見』をやつてゐるんで、つい面白いので聽いてゐたもんですから——さあ、何うです。ひとつ。(卓子の上に盆を置いてウヰスキイの壜を取る)
焉馬　(直ぐにコップを取り上げて注がせながら)　やあ、こりやあ如何も——(貞谷に)如何です、先生。

貞谷　いや、わしはもう止めにしよう。
焉馬　相變らず交際へねえね。もつともタレの方ぢやあこつちで交際へねえがね。
貞谷　笑談云つちやあいけねえ、さあ、わしはもう寢るとするかな。
焉馬　おや、おや、床急ぎとお出でなすつたな。
貞谷　何を、馬鹿な。
(貞谷は上手の艙口を降りて去る。短い間。船を打つ浪の音。)
焉馬　あいつはどうも話せねえよ。(柳沼に)　何かい、句樂さんはまだ中々高座を降りさうもなかつたかい。
柳沼　いえ、もう直でせうよ。何しろ面白うござんしたよ。冒頭をふりながら船では毎日お菜に南瓜ばかり食はせるなんて云ふもんだから、みんな呆氣に取られてゐましたよ。
焉馬　(笑つて)　はははは、そいつはみんなも面喰つたらう。ちよつと濟まねえ、もう一杯。(コップを出す)
柳沼　(注ぎながら不圖氣が付いて)　ああ、すつかり忘れてゐましたが、今そこで師匠に逢ひたいつて女がゐましたから、ここに寄るやうに云つて置きましたぜ。
焉馬　(點頭いて)　ああ、さうかい。
柳沼　師匠。何です、あの女は。

鳶馬（納まつて）うん、なあに、ちよつと知り合ひの女よ。何かい。その女はレコが一緒なのかい。（親指を出す）

柳沼 いゝえ、一人のやうでしたよ。

鳶馬 さうか。そいつは有難えな。（今度は手酌でウヰスキイを注ぐ）

（句樂が下手の船室の戸口から出て來る。五十歳位の坊主頭の目のぎよろりとした男。カアキ色の詰襟の服の前をはだけて、豆絞りの手拭を首に卷いてゐる。鼻聲で何か唄をうたひながら鳶馬逹のゐる方へ來る。）

鳶馬（聲をかける）いよお、どうしたい。大人（たいじん）。

句樂（怒つたやうな調子で）何が大人だい。おれはもう厭だよ、船なんてものは。毎日南瓜ばかり食はせやがるし、何を演つたつて祝儀を呉れやがらねえし、うめえ酒は飲めねえし、おれはもう東京に歸りたくなつたよ。

（そこの椅子に腰を掛ける）

鳶馬（なだめるやうに）まあ、さう怒らずに一杯如何だい。

句樂 おや、何だい、それは。

鳶馬 ウヰスケつてやつさ。

句樂 うん、そいつは有難てえ。（コップを取り上て）酒でも飲まなくつちやあ如何も業腹でなりやしねえ。

鳶馬（女のことからすつかりいい機嫌になつて）ははは は、大人ひどく御立腹だが、なあにまたお前さんにだつていいことがあるよ。

句樂（ウヰスキイをぐつと飲み乾して）こんな船に乘つてゐて、何がいいことがあるものか。おれは何しろ南瓜のお菜でもうすつかり腹が立つてゐるんだ。

鳶馬（笑つて）はははは、何と云つたね、お前さんの南瓜の句は。

句樂 うん、「胃の中や今日も南瓜の花ざかり」つて云ふんだ。

鳶馬（面白さうに）はははは。

柳沼（鳶馬と一緒に笑つたが直ぐに改まつた調子になつて）ええ、句樂師匠。しばらくでございます。

句樂（びつくりしたやうに柳沼の顏を見詰めながら）誰だつたね、お前さんは。

鳶馬 何だよ。三筋町のところの手の者で、しん樂と云つたあの男さ。

句樂 ああ、さうかい。道理で何處かで見た顏だと思つた。

鳶馬 今はこの船で床屋をしてゐるつて云ふんだがね。これも誰ゆゑみんな女ゆゑさ。

柳沼 師匠。冷かしちやあいけませんよ。

句樂（眞面目な顏付で）船の人と聽くと頼みがあるんだが——何かかう食ひ物の世話をして貰へねえかね。

柳沼　ええ、ようがす。何か探して來ませう。

（柳沼は立ち上つて以前の戸口から去る。句樂はコップで二三杯立てつづけにウヰスキイを飲む。）

句樂　ねえ、おい焉馬、如何でえ、かう南瓜ばかり食はせられてゐちやあ遣り切れねえから、今度船の着いたところで降りつちまはうぢやねえか。

焉馬　うん、さつきはおれもちよつとさう考へたんだが、しかしまあもう少し樣子を見てからにしよう。

句樂　樣子を見てからつて——もう大抵分つてゐるぢやあねえか。

焉馬　うん、しかし何だよ。折角出懸けて來たもんだからな。

句樂　何しろお前から聽いた時にやあこんな話ぢやあなかつたぢやあねえか。雜用(ざふよう)だつて一等客並だつて云ふし、祝儀もばつばと出さうだと云ふし、それでおれはあんな安い給金でやつて來たんだぜ。

焉馬　いやそれに就ては何とも一言(ごん)もねえが——もとはと云へばあの貞谷が持つて來た話で、何しろ名のある新聞社の催しだと云ふし、ついうつかりとあいつの話を信用しちまつたてえ譯なんだ。

句樂　（忌々しさうに）一體おれはあの貞谷つてやつが大嫌れえなんだ。いやに髯なんぞ生やして大きな面をしてゐやがるが、何だい、あいつの講釋と來たら——まるで藝にも何にもなつてゐやしねえぢやねえか。

焉馬　うん、全く講釋と來たら聽けたもんぢやないがね、あいつはあれで妙にこんな話をまとめる腕があつてね。

句樂　（いよいよ忌々しさうに）おれはまたそれが嫌れえなんだ。かうなると小しんはやつぱり悧巧だよ。あいつの嗤つてゐる顏が見えるやうだ。

焉馬　全くあいつは器用に斷りやがつたからなあ。

句樂　そこへ往くとお前の馬鹿は放圖が知れねえ。全體なら、もう亞米利加の時で懲りてゐる筈ぢやあねえか。

焉馬　（辯解するやうに）いや、なに、亞米利加はそりやあ面白かつたよ。

句樂　（獨り言のやうに）いけねえ、いけねえ。また明日のお菜が南瓜かと思ふと、ウヰスキイも咽喉に通りやあしねえ。

（句樂はさう云ひながらもウヰスキイを飲みつづける。焉馬も時々手酌で飲む。そこへ柳沼がやつぱり銀色の盆の上に何か食べものを盛つた皿を載せたのを持つて以前の戸口から出て來る。その後から一人の若い女が出て來る。さつき話に出たチェリーダンスの花子と云ふ二十二三歲位のちよつと美しい女。厚化粧をして女優のやうなけば〳〵しい身裝をしてゐる。）

柳沼　（女に）奥さん。こちらですよ。
花子　（蓮葉に）厭だわ、奥さんだなんて——
柳沼　それぢやあお孃さんですか。
花子　お孃さんも氣障だわ。
（二人は焉馬や句樂の傍に來る。）
柳沼　（句樂に）師匠。何もありませんよ。冷いものばかりなんです。
句樂　ああ、南瓜でさへなけりやあ何でも結構だよ。
（句樂は柳沼の持つて來たものを食べながら、怪訝な顔付で女の方を見る。）
花子　（焉馬の傍に寄つて）しばらくだつたわね。お變りないこと。
焉馬　（女の顏を見上げて）ああ、やつぱりお前さんだつたんだな。チエリーダンスの女だつて云ふから誰かと思つてゐたんですよ。
花子　厭よ。チエリーダンスだなんて——そんなこと云ひつこなし。ここに懸けてもいいこと。
焉馬　（にやりとしながら）さあ、どうぞ——しかしどなたかに叱られやしませんかい。
花子　そんな人ありやあしないわ。それぢやあご免なさい。（馴々しく同じ長椅子に腰を懸けて）焉馬さんほんとにしばらくだつたわね。
焉馬　ええ。ほんたうに——あれつきりお目に懸からねえつて譯ですね。ほら、根岸の競馬に出懸けて往つたあれつきりですよ。
花子　ああ、さうね、あれからあたし間もなく上海へ往つちまつたもんだから——
焉馬　（びつくりしたやうに目を瞬つて）へえ、上海へ——大さう遠方へ往つちまつたもんですな。道理で幾度手紙を出しても返事が來ねえと思つた。何ですかい、あのやつぱり上海でも、フアーフアーつて譯の分らねえ唄をうたつて、京都の舞妓さん見たいな姿をして、例のダンスを踊つてゐるんですかい。
花子　笑談ぢやないわ。何時までもあんなダンスばかりやつてゐるもんですかね。あたしね、今は上海で料理屋をやつてゐるの。
焉馬　へえ、つまりそれぢやああなたはその料理屋のお女將さんて譯なんですね。
花子　（やや曖昧に）ええ、まあさうなの。
焉馬　（鼻の先へ親指を突き出して）さては出來ましたね、親指が——
花子　嘘よ。そんなものはありやしないわ。
焉馬　（眞面目に）ほんとですかい。ほんとにそんなものはねえんですかい。

花子　ほんとにそんなものはありやあしないわ。厭な焉馬さん。あたしに何かそんなものがあると思つてゐるの。
焉馬　だつてあなたのやうな女を誰が一人で棄てゝ置くもんですか。（急に眞面目になつて）しかし、何ですかい今度はお一人なんですかい。
花子　（笑ひながら）ええ、一人よ。
焉馬　（點頭いて）一人——さうですか。
花子　（不圖思ひ出したやうに）あゝ、あの何も一緒なのね。何とか云つたわね、あの長い髯を生やした講釋師——
焉馬　ああ、貞谷でせう。ええ、一緒です。ああ、さうだ。あいつは亞米利加から歸りの船で一緒でしたからあなたも知つてゐますねえ。
花子　ええ、知つてゐるわ。如何して。
焉馬　あいつはもう寢ちまひましたよ。（氣が付いて句樂の方を向いて）おい、大人、大人。
（句樂は苦々しさうに二人の方を見向きもしずに、柳沼と何か囁合つてゐたが、呼ばれて始めて焉馬の方を振り向く。もう大分醉つてゐる。）
句樂　何でえ。
焉馬　あのね、この女性は——それ、何時だかお前さんに話したことがあるだらう——亞米利加からの歸りの船で一緒になつた花子さんて方なんだ。

句樂　（面白くないと云つたやうな顏付で）ふうん、花子さんか。いい名前だね。しかしおれは何だな、やつぱり白玉さんとか紫君さんだとか云つた名前の方が好きだな。
焉馬　（怒つたやうな調子で）何を云つてやがるんでえ。人が折角引き合せてやらうと云ふのにつまらねえことを云やあがる。（女の方を向いて）なあにね。あいつ南瓜で腹を立てゝ自棄酒を飲んでゐやがるんですよ。
花子　（何だか分らず唯面白がつて）さう、南瓜で腹を立てゝゐるの。ずゐぶん面白いわね。
句樂　（腹立たしさうに）何が面白れえものか。ああ、厭だ、厭だ。ます／＼江戸が戀しくなるばかりだ。小しんのやつは羨ましいよ。今頃は席から歸つて、家で河鹿の啼く聲でも聽きながら、鰹の刺身か何かで一杯やつてゐやがるんだらう。（柳沼に向つて）おい、お前は何とか云つたね。
柳沼　あたしですか。あたしは柳沼つて云ふんです。
句樂　（首を振つて）さうぢやねえよ。以前小しんのところにゐた時分何て云つたか訊いてゐるんだ。
柳沼　あゝ、さうですか。あの時分はしん樂つて云つてゐました。
句樂　しん樂——あゝ、さうかい。お前は小しんのところ

にゐたんぢやあ新内の富士丸を知つてゐるだらう。
柳沼　ええ、知つてゐますとも。あの盲人の老人でせう。
句樂　さうよ。堪らねえいゝ聲の爺さんだ。
柳沼　ありや三筋町の師匠が馬鹿に贔屓でしてね、何かと云ふとよく家へ連れて來て語らせてゐましたよ。
句樂　ありやあ全くうめえからなあ。あいつの『尾上伊太八』と來たら一度聽いたら忘れられねえからなあ。
柳沼　全くあれを聽いたら忘れられませんねえ。
句樂　（嬉しがつて）さうかい。お前もあれを聽いたかい。
柳沼　えゝ、幾度も聽きましたよ。
句樂　さうかい。まあ、一杯上げよう。（コップを柳沼に差す）
柳沼　（受けて）へえ、有難う。
句樂　（ふら〳〵と首を振つて）全くいゝねえ、ありやあーねえ、おい。全くあいつは忘れられねえだらう。（目をつぶつて低音にうなる）
（焉馬は默つて二人の話を聽いてゐたが、馬鹿々々しさうに舌打をする。）
焉馬　なあんでえ。カアキ色の服を着て、ハムを突つついて、ウヰスキイに醉つ拂つて、それで新内をうたつてゐりやあ世話あねえや。（女に向つて）あいつはもうすつかり醉つ拂つてゐやがるんですよ。

花子　さうねえ。大分いい御機嫌のやうね。しかし焉馬さん。醉つ拂つたつて云へばあなたもあの時の船の中ではずゐぶん醉つ拂つたわね。
焉馬　（頭を掻いて）あの假裝會のあつた晩でせう。いや、もう形なしでしたね。だつてありやあ酷うがすよ。あなた達が寄つてたかつて、無理にあんな假裝をさせて、面白がつてお酒ばかり飲ませるんですもの。
花子　（笑つて）はははは、ほんとにあの時は面白かつたわ。
焉馬　いや、當人あんまり面白かあありませんでしたぜ。一體ありやあ何てえもんの假裝だつたんです。
花子　あれ——あれはピエローよ。
焉馬　（變な發音）ピエローですかい。變な名前のもんですねえ。
花子　（もう一度面白さうに笑つて）はははは、あたし今でもあなたのあの時の姿が目に見えるやうだわ。
焉馬　（わざと恨めしさうに）ありやあ酷うござんすよ。お白粉を塗つて與れたのはいいが、頰つぺたを眞つ赤にして、あれぢやあまるで二枚目でさあ。
花子　つまりありやあ西洋の三枚目よ。
焉馬　おや、おや、情ねえ役を勤めたもんですね。しかしあなたの舞妓姿はよござんしたぜ。あつしは全く惚々と

しましたね。（ぢつと女の顏を見つめる）
花子（顏をそむけて）厭よ。そんなにあたしの顏ばかり見ちやあ――何かまた惡口を云はうと思つてゐるんでせう。
焉馬　笑談云つちやあいけませんよ。（四邊を見廻してから聲を低めて）ねえ、花子さん。
花子　厭あよお、花子さんなんて云つちやあ――
焉馬（やつぱり聲を低く）あつしも上海まで行くんですが――就ちやあちよつと話があるんですがね。（そつと女の手を取る）
花子（おとなしく手を男に取らせながら）なあに、その話つて云ふのは。
（焉馬が何か云ひ懸けようとする時、一人のボオイが下手の船室の戶口から出て來て、急いで花子の傍に近寄つて來る。）
ボオイ　ああ、奧さん。あのう、あちらでお呼びになつてゐますよ。
花子（びつくりしてボオイの方を向いて）ああ、さう。それぢやあ直ぐ往くわ。
ボオイ（柳沼に）ああ、君。事務長が何か用があるつて云つてゐたぜ。
柳沼　ああ、さうか。それぢやあちよつと往つて來よう。
ボオイ（女に）それぢやあ奧さん。直ぐどうぞ。
（ボオイと柳沼とはまた以前の戶口から去る。）
花子　それぢやあ焉馬さん、あたしもう往くわ。（立ちあがる）
焉馬（ぽかんとした顏付で）さうですか。
花子（あつさりと）それぢやあさよなら。お寢みなさい。
（花子はさう云ひ棄てたまま急ぎ足に以前の戶口から姿を消す。短い間。船を打つ浪の音。）
（句樂はさつきから低音で新内をうなりつゞけてゐたが、ボオイの聲を聽くとふと氣が付いたやうにそれを止める。また短い間。）
（焉馬は立つてコツプにウヰスキーを注ぐ。）
句樂（吐き出すやうな調子で）おい、何だい、ありやあ――お前も不思議な女を知つてゐるね。
焉馬（ぐつと一息に飲み乾して）何も不思議なこたあありやあしねえ。ちよつと色つぽくつていい女ぢやねえか。
句樂　何がいゝ女なもんか。しかしありや中々大變もんだぜ。
焉馬　なあに口ぢやああんなことを云つてゐるけれども、あれでまだから初心なもんだよ。以前おれのところに寄越した手紙なんぞにやあ、まるでからねんねえのやうな可愛らしい文句が書いてあるんだ。

句樂　馬鹿。相變らずお前は女にかけるとだらしがないんだな。
焉馬　だらしがないやうにさせられるんだから仕方がねえあの女だつて今度はきつとものにして見せるから見てゐるがいい。
句樂　何を云つてやがるんでえ。お前が近頃でものにした女つて云ふのは神奈川のあればかりぢやねえか。この土用の眞つ最中に、褞袍を造つて待つてゐるから是非來て呉れつて手紙を寄越した女よ。
焉馬　ああありやあいけねえ、師匠、八木節を聽かしてお呉れよつて玉なんだから――。
句樂　（嘲けるやうに笑つて）　はははは、お前の女つて云やあ大抵そんなもんだ。
焉馬　しかし今の女はありやあさう惡かあないぜ。上海へ往つて料理屋の長火鉢の前に坐るのもちよつと乙ぢやないか。（句樂の方に向き直つて）　おい、句樂さん。おれもさつきはちよつと船を降りつちまひたいやうな氣がしたんだが、やつぱりおれは約束通り上海まで往くよ。
句樂　（怒つて）　勝手にしやがれ。何處まででも往くがいいや。おれは誰が何て云つたつて、今度船が着いたところで降りつちまふんだ。誰が每日南瓜ばかり食はせやがるこんな船に乘つてゐるもんか。

焉馬　まあ、いいぢやあねえか南瓜もあれでちよつと乙なもんだよ。
句樂　何が乙なもんか。全くお前の馬鹿は放圖が知れねえよ。
焉馬　（ひどく納まつて）　馬鹿とでも何とでもおつしやいまし　だ。梶原源太はわしか知らんとでも云ひたくなるね。
句樂　（呆れ返つてものが云へねえ、飛んだやつと一緒にやつて來たもんだ。（ちよつと考へて）　ええと――今度船が着くのは何てえところだ。
焉馬　今度船が着くところか。何よ、神戸よ。
句樂　神戸か。神戸なら大阪まで往くのは譯はねえな。
焉馬　うん、直きだ。電車で一時間もありやあ往つちまふだらう。
句樂　さうか。そんならひとつ大阪へ往つて、獨演會をやつてやるかな。
焉馬　勝手にしやがれだ。おれは何と云つたつて上海へ往くよ。
句樂　だから勝手に何處へでも往くがいいつて云つてゐるぢやねえか。おれはおれで勝手に大阪へ往くんだから――大阪へ往きやあ雜魚場の柴藤の旦那もゐるし、こつちから往つた遊橋もゐるし、これでちよつと面白れえからな。おれはもう何しろ早くこのカアキ色の服が脫ぎた

くつて仕方がねえんだ。

焉馬　勝手に脫いだらいいぢやあねえか。さうして素つ裸で南瓜踊でも踊つたら、きつと客には大受けだぜ。

句樂　（ほんとに怒つて）何だと――巫山戲たことを云やあがるねえ。

焉馬　何も巫山戲たことは云やあしねえぢやねえか。

句樂　何でえ。素つ裸で南瓜踊を踊れたあ何て云ひ草なんでえ。（少し調子を落着けて）それぢやあ改めてお前に訊くがな、お前は女と友達とどつちが大事だと思つてゐる。

焉馬　さあ、女が大事な場合もありやあ、また友達が大事な場合もあるね。

句樂　嘘を吐け。お前は友達なんか如何でもいいと思つてゐるんだらう。

焉馬　（默つてゐる）

句樂　おい返事をしねえかい、返事を――（ぢつと焉馬の顏を見詰めてゐる）

焉馬　（紛らすやうに鼻唄をうたふ）「更けてさびしき奧座敷。殺して通ふ上草履、やつれた寢顏見るにつけ、しがないわたしがあるゆゑに、さぞや世間が狹からう。」

句樂　（いきなり前にあつたコップを投げ付け）馬鹿。

焉馬　おや、こん畜生。大人々々と敬つてゐればいゝ氣になりやがつて――このままぢやあ置かねえぞ。（句樂に飛びかゝる。）

句樂　何を云やがるんでえ。素つ裸で南瓜踊が踊られるかい。

（二人は取つ組みあつて喧嘩をはじめる。二人とももうかなり醉つてゐるので、だらしなく甲板の上を、取つ組み合つたまま轉がり合ふ。）

（柳沼が丁度そこへ下手の船室の戸口から出て來る。このもの音を聽いてびつくりして駈け出して來る。）

柳沼　如何したんです。師匠。くだらねえ。およしなさいよ。（二人を引き離さうとする）

焉馬　打つ棄つといてくれ。こん畜生。人にコップなんぞ擲き付けやがつて――もう勘見がならねえんだ。

句樂　何を云やがるんでえ。素つ裸で南瓜踊が踊れるかい。

柳沼　（無理に二人を引き離して）まあ、師匠。いゝぢやありませんか。

（二人はやつと組み合ひを止めて起き上がる。）

焉馬　何でえ。こんなに頰つぺたを引つ掻きやがつて――斷つてから引つ掻いて貰ひてえや。

句樂　何を云やあがる。もうおりやあお前のやうな馬鹿にあ口を利かねえぞ。

焉馬　うん、勝手に口を利かねえがいい。おれだつてもう

お前と交際ふのは眞つ平御免だ。
句樂　お互ひ樣だ。誰がお前見たやうなやつと交際ふものか。（一番端の椅子に腰をかける）
焉馬　（頬を手で押へて）おお、痛え。びり〳〵しやがらあ。（柳沼に）おい、如何かなつてゐるかい。
柳沼　（頬を見ながら）ああ、蚯蚓腫になつてゐますよ。
焉馬　ひでえことをしやがる。折角の色男をだいなしにしやがつた。（句樂とは反對の端の椅子に腰をかける）
柳沼　如何したんです。師匠。驚きましたね。（焉馬に）ねえ。焉馬師匠、今夜は餘つぽどをかしな晩ですぜ。さつきもあつちで夫婦喧嘩がありましてね。
焉馬　（まだ不機嫌）夫婦喧嘩なら氣が利いてゐるが、あんなやつ相手ぢやあ始まらねえや。
柳沼　しかもその喧嘩の原因が、師匠あなたなんだから面白れえぢやありませんか。
焉馬　（ちよつとびつくりして）おれが原因だつて――如何云ふ譯でよ。
柳沼　つまりまあ嫉妬なんでせうね。奥さんて云ふのは、さつきあなたのところにやつて來たあの女なんですよ。
焉馬　（目を睜つて）奥さん――それぢやああ りやあ亭主持かい。
柳沼　いや、あたしもさつきまでは知らなかつたんですがね、亭主だか旦那だか分らない、金持らしい支那人か一緒なんださうです。
焉馬　ほんとかい。しかし何だぜ。さつきは一人だつて云つてゐたぜ。
柳沼　女の云ふことなんか分るもんですか。何しろその夫婦喧嘩つてえのが面白うござんしたよ。
焉馬　（がつかりした顔付で）さうかい。成程、さう云やあさつきボオイも奥さんだつて云つてゐたし、如何も樣子が變だつたよ。
柳沼　（ウヰスキーの罎を取り上げて見て）ああ、まだ少しはありますね。コツプもまだ二つこゝにありますから、仲直りに一杯飲んでお寢みなさいまし。
焉馬　（氣が付いたやうに怒り出す）笑談云つちやあいけねえ。誰があんなやつと仲直りなんぞするものか。
句樂　當り前よ。仲直りなんぞ厭なこつた。もうお前とは一生交際をしねえつもりだ。
焉馬　いいとも。お前のやうなやつに交際はれてたまるものか。
（二人は遠く離れた椅子に腰懸けたまま睨み合つてゐる。）
柳沼　（あきらめたやうに）それぢやあ お寢みなさいまし。

（柳沼はさつさと二人を殘して行つてしまふ。かなり長い間。二人は默つて何時までも睨み合つてゐる。）

（船室の窓に映つてゐる電燈の灯がだんだん消えはじめる。）

（句樂は立つて丁度眞ん中のところにある卓子のところに來て、コップにウヰスキーを注いで飮む。そのうち卓子の直ぐ傍の椅子に腰を懸ける。）

（暫らくすると焉馬も立つてその卓子のところに來て、同じやうにコップにウヰスキーを注いで飮んでからやつぱり直ぐ傍の椅子に腰を懸ける。）

（すべて無言。またかなり長い間。）

（不圖句樂がウヰスキーの罎の方へ手を出すと、焉馬も同時にその罎の方へ手を出す。二人ちよつと顏を見合せて氣まづさうに出した手を引つ込める。）

焉馬　（くづ折れたやうな調子で）　ねえ句樂さん。

句樂　（思はず返事をする）　ええ。

焉馬　やつぱりおれもお前さんと一緒に船を降りるよ。

句樂　うん、さうか。降りる氣になつたかい。

焉馬　（しんみりと）　やつぱりお前さんがゐなくなると寂しいからなあ。

句樂　（誘はれたやうにしんみりと）　さう云やあおれも一人になるのが寂しかつたんだよ。

焉馬　それぢやあ船が神戸に着いたら、誰にも感付かれねえやうに、そつと二人で降りてしまはう。

句樂　よし來た。荷物も何もねえんだから、かう云ふ時には都合がいゝや。しかしおれは何時素つ裸になつて、南瓜踊を踊つたらいいんだい。

焉馬　（苦笑ひをして）　はははは、ありやおれが惡かつたよ。もうそんなこたあ云ひつこなしにしよう。（二つのコップにウヰスキーを注いで）　さあ句樂さん。ひとつ仲直りのしるしに一杯やらうぢやないか。

句樂　うん、よからう。何にしても酒のこつた。

（二人はコップを取り上げて飮む。と同時に急にけたたましい汽笛の響きが聽える）

句樂　（びつくりして）　おお、何でえ。びつくりさせやがるぢやあねえか。

（つづいて遠く摺れ違ふ船からの汽笛の音。）

焉馬　うん、何だよ。何處かの船に摺れ違つたんだよ。

句樂　なあんだ。つまらねえ。はははは――（笑ふ）

（焉馬も一緒になつて笑ふ。甲板の上にはやつぱり晝のやうに明るい月の光りがある。風のない靜かな晩で二人の笑ひ聲だけが海にひびいて高く聽える。）

――徐ろに幕――

縛られた句樂（市井喜劇一幕）

人　物

句樂
焉馬　落語家

典凌
貞龍　講釋師

おまつ　小料理屋の娘

巡査

刑事

群衆

客

場　所

淺　草

時　代

十數年前

第一場

淺草の廣小路の近くにある或る小料理屋の内部。殆んど全部土間になつてるが、上手に四疊程疊を敷いたところがある。疊敷のところにチヤブ臺が二つばかり。土間には長い卓子や腰掛が置いてある。

正面は二枚の硝子戸で、そこには『小料理美吉野』と白く染め拔いた茶色の暖簾が懸かつてゐる。その外は直ぐに往來。

上手疊敷の向うが板場になつてゐる。壁には品書の紙が貼り付けられたり、俳句を書いた短册が懸かつたりしてゐる。十二月の半頃の或る夜、九時少し過ぎ。

典凌と貞龍とが、上手の疊敷のところで、チヤブ臺を差し挾んで酒を飮んでゐる。典凌は髪を撫で上げた苦み走しつた顔の四十二三位の男。貞龍は顔の長い小肥りの同じ位の年恰好の男。二人とも今飮み始めたばかりと見えてそれほどに醉つてゐない。

ほかに土間の方で客が二組ばかり酒を飮んでゐる。

表の往來の方から何處かの店でやつてゐる蓄音機の音や何かが聽えて來る。

客の一　（板場の方を向いて）おい、おまつさん、おまつさん。

おまつの聲　ええ、なあに……。

客の一　勘定だ、勘定だ。

おまつの聲　へえ、唯今。

（間もなくおまつが銚子を持つて出て來る。十八九歳の丸ぽちやの色つぽい女。銚子を典凌達のところに置いてからこつちへ來る。）

おまつ　ええと……二圓四十五錢頂きますわ。

客の一　おい來た。お剩錢は入らないよ。さあ、往かう。

客の二　ああ、おまつさん。また來るよ。

（一組の客は出て往つてしまふ。おまつはその後を片附けたりしてゐる。）

典凌　（思ひ出したやうに顔を上げて）　ああ、何だつて云ふぢやないか。お前の直ぐ近所の家に昨夜强盜が入つたつて云ふぢやあないか。

貞龍　ああ、だんだん押し詰まつて來ると物騷だよ。昨夜入られたつて云ふ家は、おれの直ぐ傍に鶴の湯つてお湯屋があるだらう。あの直ぐ前の藥屋さんだが、何しろ短刀を突き付けられた時には、生きてゐる空はなかつたつて、今朝主人に會つたら話してゐたよ。

典凌　そりやあさうだらう。何でも二人組で、三四日前に根岸の方に入つたのと、同じ手口だつて云ふぢやないか。

貞龍　うん、何でも前科何犯て云ふやうなやつに違ひないよ。ひどく落ち着いてゐたつて云ふからな。

典凌　さうか。こんなに物騷ぢやあお互ひにこれまでのやうに夜家を空けることも出來ないな。

貞龍　なあに、大丈夫さ、おれ達の家に入つたつて、何にも持つて往くものがないつて位は、少し氣の利いた盜賊なら大抵知つてらあ。はははははは。

貞龍　あべこべに置いて往かなくちやあならないからな。

（同じやうに笑ふ）

（おまつは卓子の上を片附けてから、料理を典凌達のところへ持つて來る。）

おまつ　如何もお待ち遠さま。

典凌　（からかふやうな調子で）　おまつさん。お前さんなんかも夜歩きは物騷だぜ。

おまつ　ええ、あたしなんか夜歩きなんてしないから大丈夫ですわ。

典凌　如何だか……。この間もかぶり際に宮戸座の樂屋口のところに立つてゐたぢやないか。

おまつ　あら、噓よ。あたし夜なんか外へ出やしないわ。

典凌　だつて何だぜ、おまつさん、おまへさんは何でもあすこの芳三郎に惚れてゐるつて噂だぜ。

おまつ　厭だわ、あんなひと。あたしあの人の歩き付きが嫌ひなの、あたしは役者なんかよりも講釋師の方が餘つぽどいいわ。

典凌　おや、おや、おまつさんの殺し文句に會つちやあかなはないな。それぢやまたこれから日參だ。

貞龍　おまつさん。しかし講釋師と云つたところでいろいろあるだらう。
おまつ　ええ、そりやあるわ。
貞龍　（にや／＼しながら）一番好きなのは誰だい。
おまつ　さあ、誰でせうねえ。（色つぽく首を傾げて）自分にもちよつと分らないわ。しかしまあ誰でもいいぢやありませんか。それよりも銚子を持つて來ませうね。
典凌　ああ、賴むよ。
（おまつ板場の方へ往つてしまふ。）
貞龍　（小聲で）ねえ、おい、大分色つぽい好い女になつたぢやあないか。
典凌　うん、兎に角あの娘がゐるんでこゝの家は客が來るんだよ。
貞龍　（默頭いて）さうだらう。あれだけのものは、兎に角この界隈ぢやあ見當らねえ。
典凌　（笑つて）はははははは。ひどく氣に入つたもんだな。それぢやお前もこれから毎日ここへやつて來るやうになりさうだな。
貞龍　無論だね。（間を置いて）一體おれ達の仲間でちよくちよくここへ來るのは誰なんだい。
典凌　さうさな。講釋師の連中はあんまり來ないよ。落語家ぢやあ句樂、焉馬、小しんなんぞがよく來るが……。
貞龍　ああ。さうか……。句樂にも久しく會はないが達者かね。
典凌　ああ、相變らずだよ。
貞龍　近頃あの連中何處へ凝つてゐるんだ。
典凌　やつぱり吉原さ。
貞龍　吉原は分つてゐるが……。
典凌　河内樓へよく往くやうだね。
貞龍　さうかい。
（おまつが新しい銚子を持つてくる。殘つてゐる客の一組の中の一人が聲をかける。）
客の三　おい、姐さん。勘定をして吳れないか。
おまつ　（銚子を典凌達のチャブ臺に置いてから）ええと……三圓七十錢頂きます。
客の四　いいよ。おれが拂ふよ。（勘定をする）
（客の三、四出て往つてしまふ。と、ほとんどそれと入れ違ひに句樂と焉馬とが面白さうに笑ひながら入つて來る。句樂は四十七八歲位の坊主頭で頰の削けた目のぎよろつとした男。焉馬は三十五六歲位の小柄で色の淺黑い男。句樂は手に細引繩の新しいのを持つてゐる。）
句樂　はははは。お前がつまらねえことを云ふんで、馬鹿を見ちまつたぜ。

焉馬　ははははは。まあ、いいやな。引窓の紐か何かにすりやあいいぢやねえか。
句樂　なあに使ひ道にや困らねえよ。（腰を懸けようとして典凌と貞龍に氣が付く）ああ、御兩所お揃ひだね。
典凌　やあ、そちらも御兩所お揃ひだな。如何だい、一緒にならうぢやないか。
句樂　うん。如何だい、焉馬。
焉馬　いや、結構だね。
貞龍　久しぶりだ。一緒にやらうよ。
典凌　（貞龍に）おい、そのチヤブ臺をくつ付けちまはう。（チヤブ臺をくつ付けて、四人は向ひ合つてその前に坐る。直ぐに杯のやりとりが始まる。）
句樂　いや、ほんとに貞龍さんとは久しぶりだつたね。もう一年近く會はないかも知れないぜ。
貞龍　ああ、もうかれこれその位になるだらう。何しろずうつと旅ばつかり歩いてゐたからな。
句樂　ああ、さうだつたつてな。如何だい。旅ぢやあ何か面白いことがあつたか。
貞龍　あるもんか。何處もかしこもさんざんな態たらくさ。名人會も何もあつたもんぢやありやあしねえ。
句樂　さうかい。それで今如何してゐるんだい。
貞龍　まあ、今年中は座敷を稼ぐ位のことにして置いて、來年正月から出直しだよ。（焉馬の方を向いて）焉馬さんもしばらくだつたね。
焉馬　いや、如何も……。しかし、貞龍さん、京都ぢやあ大分粹なことがあつたんだつてね。
貞龍　（笑つて）ははははは。なあにそれほどでもねえのさ。
典凌　みんな知つてゐるんだぜ。隱したつて駄目だよ。
句樂　ああ、さう、さう、何だつていふぢやないか、お前さんは京都で狂人の女に惚れられたつて云ふぢやないか。もつとも狂人の女ででもなけりやあお前さんには惚れねえだらうけれど。
貞龍　如何もつまらない話が傳つてゐやがるな。ははははは。
（みんな一緒に笑ふ。と、その時不圖典凌が句樂の持つてゐる細引繩に目を付ける。）
典凌　おや、句樂さん。お前妙なものを持つてゐるぢやあないか。如何したんだい、そいつは。まさか首でも縊るつもりなんぢやなからう。
句樂　（細引繩を出して）ああ、この細引か……。これに就ては馬鹿々々しい話があるんだ。
典凌　何だい、馬鹿々々しい話つて云ふのは。
句樂　こりやあね。かう云ふ譯なんだ。おれ達は今並木に

出てゐるんだが、今夜席を二人で出て、廣小路のところをぶらりとやつて來ると、あすこの田原町の方へ往かうつて橫町のところの荒物屋に奇妙な面をした小僧がゐやがるんだ。それで焉馬のやつの云ひ出しべで、あの、小僧めどんな聲を出しやがるかひとつ何か買物をして見ようと云ふことになつたんだよ。

貞龍　ははははは。二人とも相變らずだな。

典淩　それで如何したんだ。

句樂　それから二人で何を買つたらいゝかと思つていろいろ考へた結果、兎に角細引がよからうと言ふことになつて、細引を一本、一丈二尺買つて小僧に口を利かせて見たんだが、なあに別段面ほど奇妙な、鵺のやうな聲も出さなかつたつて譯よ。

焉馬　いや全くその小僧の面は奇妙でしたよ。あたしは全くどんな聲を出すかと思つたね。

典淩　はははは。馬鹿だなあ、お前さん達は。仕樣がねえぢやないか、そんな繩を買つたところで……。

句樂　全く仕樣がねえが、まあ、家へ持つて歸つたつて、引窓の紐位には使へるだらう。

典淩　そりやあ使へるけれど……。

貞龍　いや、それよりも今度落語家芝居がある時まで取つて置いて、お前さん達二人で『引窓』を出すんだね。

句樂　『引窓』を……。おれにや芝居なんか出來やあしねえ。

貞龍　なあに出來るよ。譯ありやしない。句樂さん、お前が南方十次兵衞で、それから焉馬さんが濡髮長五郎をやるのよ。

焉馬　成程、こいつあいゝ趣向だね。

句樂　いや、駄目だよ。おれには芝居は出來ないよ。

焉馬　なあに、兄貴、譯はないよ。おれがよく敎へてやるからやらうぢやあないか。

句樂　(首を振つて) いや、眞つ平御免だ。

典淩　はははははは。何を云つてゐるんだい。細引ひとつで芝居をやるやつもないぢやあないか。ねえ、句樂さん。

句樂　全くだよ、焉馬の云ふことを聽いてゐたらどんな目に會はされるか知れやしねえ。何しろ今日はおれはあんまりいゝ日ぢやなかつたんだからな。今朝は今朝で下駄泥坊に會ふし、今夜は今夜でこんな細引なんぞ買はされるし……。(首を傾げて) 何かこの繩を使つていゝ趣向はないものかな。

焉馬　繩飛びは如何だい。

句樂　馬鹿。子供ぢやああるめえし、大の男が繩飛びなんか出來るかい。

焉馬　それぢやあ綱つ引。

句樂　いゝ加減にしろよ。(考へてゐたが不圖何か思ひ付いたやうに)ああ、如何だい、かう云ふ趣向は。誰かその細で縛つて、往來を歩くなんざあ面白いぜ。

典凌　ははははは。こいつあ面白いね。つまり泥坊ごつこだね。

句樂　うん、まあ、さうだ。丁度こゝに四人ゐるから、誰か二人が刑事、それから誰か二人が縛られるやつになるんだね。

貞龍　うん。さうして何處を歩かうつて云ふんだい。

句樂　そりあなるべく人通りの多いところでなくちやあ面白くないやね。ま、ここならこれから廣小路の通りへ出て、それから仲店を觀音樣の方へ向つて歩くんだね。

典凌　しかしおれ達は兎に角顏が知れてゐるからな。

句樂　なあに刑事は帽子を眞深に被るし、縛られたやつは手拭で頰冠りをしてゐりやあ分りやあしねえやね。

貞龍　うん、さうすりやあ分るまいが、しかし一體誰が縛られるんだい。

句樂　さあ、そいつは何だね、籤引にするんだね。

典凌　籤引に……。そいつはいけないよ。こいつはやつぱり細引を持つて來たのがお前さんで、こいつを買はせたのが焉馬なんだから、二人が縛られる役に廻るのが當り前だよ。

句樂　(ちよつと困つたやうな顏付で焉馬に)おい、如何だい。焉馬。お前縛られるかい。

焉馬　(不平さうに)うん。

貞龍　しかし何だぜ、芝居だつて講釋だつて、縛られるやつの方がいゝ役なんだぜ。

焉馬　うん、そりやあさうだけれど……。(句樂に)兄貴お前如何するね。

句樂　仕方がねえ。縛られよう。(氣を變へて)しかし面白れえぢやねえか。いい趣向だよ。いや、往來のやつ等はきつとみんなびつくりしやがるぜ。何だらうと思ひやがるだらうなあ。まさかこれが天下の講釋師と落語家だとは思やあしめえ。

典凌　うん、兎に角面白いよ。それぢやあ早速支度に取り懸からうぢやないか。

(おまつさつきからの話を聽いてゐたが、急に笑ひ出す。)

おまつ　はははは。面白いわねえ。焉馬さんなんかきつとほんとに泥坊のやうに見えるわ。

焉馬　おい、おれはもう止すよ。だつておまつさんがほんとの泥坊のやうに見えるつて云ふんだもの。

句樂　何を云つてゐやがるんでえ。ほんものに見えるところが面白いぢやねえか。

焉馬　しかし、こんなことでおまつさんに愛想を盡かされちやあつまらねえからな。
おまつ　（笑ひながら）大丈夫よ。焉馬さん愛想なんぞ盡かさないからおやんなさいよ。
焉馬　ええ、みんなあゝ云ふんだからやることはやりますがね。（句樂に）如何すりやいいんだい。
句樂　うん、手拭を出して頰つ冠りをするのよ。
焉馬　うんさうか。（頰冠りをする）
句樂　まだ早いよ。
焉馬　（默つて頰冠りを取る）
典凌　はははは。似合ふよ。全くおまつさんの云ふ通りだ。しかし、お前さんのは泥坊にしてもこそ泥だね。
焉馬　おや、おや……。
（こんな話をしてゐる間も、みんなは絶えず杯のやりとりをしてゐる。おまつももう二三度銚子の代りを運んで來てゐる。みんな醉つて來るにつれて、だんだんこの企てに興味を持ち始めて來る。）
貞龍　さあ、如何だい。早くやらうぢやないか。遲くなると人通りが少なくなつちまつてつまらないぜ。
句樂　さうだ。早くやらう、早くやらう。
典凌　うん、刑事になるにはと…鳥打帽子がいいな、あ、丁度いい。お前さん達二人は鳥打帽子だらう。
句樂　うん。
典凌　それぢやあれをおれ達に貸してくれ。さうしてお前さん達はおれ達の此帽子を被つてその上から頰冠りをするんだ。
句樂　よし來た。
（典凌と貞龍は鳥打帽子を目深に被つて刑事の身拵へ。句樂と焉馬は手拭ひで頰冠りをする。）
句樂　はははは。面白れえね。（典凌の姿を見ながら）成程刑事に見えるから不思議だよ。第一顔付が刑事つて顔だ。
典凌　お前さんのさうやつたところも、如何して立派な泥坊面だ。
句樂　さあ、出懸けようか。
典凌　まあ、待つてくれ、細引、細引……。細引がなくつちやあ芝居が出來ねえ。
句樂　（細引繩を典凌に渡して）さあ、これだ。
典凌　よし。（おまつに）ああ、おまつさん、濟まないが庖丁を貸して呉れないか。
おまつ　ええ……。
（おまつ直ぐ板場から庖丁を持つて來る。典凌は庖丁で細引繩を二つに切つて、その一本を貞龍に渡す。）
典凌　さあ、捕繩だぜ。

貞龍　よし來た。早速ふん縛つちまはう。

焉馬　おい、おい、さう本氣になつてやらなくたつていいぢやないか。

貞龍　なあに本氣でやらなくちやあ氣が入らねえからな。さあ、きりきりと手を廻せ。

焉馬　（情なさうに）厭だなあ。

（貞龍が焉馬を縛らうとするのを句樂が留める。）

句樂　おい、こゝの家から繩付を出すのは酷いよ。外へ出てから芝居がかりで縛られるとしよう。

典淩　それぢや出懸けよう。（おまつに）おまつさん。勘定は一緒にして置いてお呉れよ。

句樂　さあ、往かう、往かう、ちよつと揚幕を出る時のやうな氣持だな。

（みんな笑ひながら出てゆく。）

（「御用だ。神妙にしろ。」と云ふ典淩と貞龍の聲が前後して聽えて來る。）

（おまつ暖簾のところから外を見て、可笑しくつて堪らないやうに聲を立てゝ笑つてゐる。）

第　二　場

淺草の仲店の通り。

正面には紅梅燒屋、小間物屋、玩具屋、人形屋、繪雙紙屋——と云つたやうな店がずらりと並んでゐる。その前は鋪石の敷いた通りになつてゐる。上手の方に觀音堂がある心持。店には煌々と電燈が點つてゐて、そこらは晝のやうに明るくなつてゐる。

同じ夜の十時頃。

觀音樣へ參詣に往つた歸りの人や、芝居や活動寫眞から歸りの人が、ぞろ〳〵上手から下手へ通り過ぎる。それと反對に下手から上手へ往く人も可なり多い。繼て暫くの間人脚が途切れる。と間もなく花道から焉馬の繩尻を取つた貞龍を先きに、句樂の繩尻を取つた典淩が出て來る。焉馬と句樂は頰冠り、貞龍と典淩は刑事らしく鳥打帽子を目深に冠つてゐる。後から四五人彌次馬が附いて出て來る。

焉馬　（花道の半位のところで）おい、おれはもう厭だよ。つまらねえや。

貞龍　（小聲で）おい、これからぢやあないか、これから仲店へかゝつてからが芝居なんだ。まあ、もう少し辛抱しろよ。

焉馬　うん、しかし……。

貞龍　（急に刑事のやうな口調で）こらこら不都合なことを申すな、さあ、早く步かんか。

句樂　（思はず口に出して）はははは。うめえ、うめえ。

そつくり本物だ。

典浚　こら、何を申す。ものを云ふちやいかん、ものを云ふちやいかん。

句樂　だつて、お前……。

典浚　（小聲で）　おい、聽えると底が割れて面白くねえから默つてゐろよ。（急に大きな聲で）　こら、さつさと歩け。何を愚圖々々しちよるんだ。

（四人はかうして舞臺にかゝる。彌次馬がだんだん多くなつて來る。）

（と、四人が舞臺の眞ん中のところに來た時分から、正面の背景が引道具でだんだん下手の方へ動いて往つて、そこにはいろいろの店が現はれて來る。）

（四人は足を動かしてゐるだけで、だんだん觀音堂の方へ近付いて往く心持。）

（そのうちそこに集つて來た群衆はこの四人を取り圍んで、いろいろの想像を描きはじめる。）

（群衆の聲。）

○　おおい、何だい、何だい。

○　うん　何でも掏兒が捕つたらしいんだ。

○　掏兒か。間拔けな野郎だな、ふん　捕（つかま）るなんて。

○　何でも仕立屋銀次の乾兒で、前科何十犯て云ふ凄いんださうだが、捕る時はやつぱり運だね。刑事の懷へ手を突つ込んだんだつて云ふから。

○　さうか。お前見てゐたのか。

○　ううん、見てやしねえが多分さうだらうと思ふんだ。

○　何だ、馬鹿々々しい。

（群衆笑ふ。）

○　何だつてえぢやありませんか。ありやあこの間うち向島の方を荒してゐたこそ泥だつてえぢやありませんか。

○　ああ、さうですか。しかしこそ泥にしちやあひどく落ち着いてゐますね。

○　ええ、もうかうなりあ度胸が据わりますよ。

○　これぢやもう遁げようたつて遁げられませんからな。

○　ええ、遁げられるものですか。

○　しかし泥坊にしちやあ粋な頬冠りの仕方をしてゐますね。

（群衆笑ふ。）

○　おい、昨夜の强盜が捕まつたつてえなほんとかい。

○　ああ、ほんとだとも。千束町に入つた二人組のやつだらう。

○　ああ、さうよ。成程、二人とも强盜らしい恰好をしてゐやがらあ。

○　何でもあの後から往くのが親分で雲霧仁左衞門つてやつなんださうだ。

○ ふうん、さうして前に往くのは何て云ふんだ。
○ ありやあ因果小僧の六之助つて云ふんだ。
○ ほんとかい。おい。
○ うん。何しろさつき金車で聽いて來たんだからほんとだらう。
○ 何だ。馬鹿にしてやがる。
（群衆笑ふ。）
○ おい、おい、いよいよ小名木川の人殺しの犯人が捕つたつて云ふぢやないか。
○ ああ、それぢやあ何か、ありやあ人殺しか。
○ さうだとも。さう聽いたからおれはびつくりして飛んで來たんだ。どんな面してゐる。
○ 何だか頬冠りしてゐるんで、よく見えねえが、何だかくだらなさうなやつだぜ。
○ さうか。いや、さう云ふやつが人殺しなんぞよくやるんだ。
○ 人殺しをしたやつつて聽くと、どんな凄いやつかと思ふが、見て見るとつまらねえもんだな。
○ うん、しかし惡いことは出來ねえよ。置き忘れた手拭から足が附いたんだつて云ふからな。
○ さうかい。
○ 何しろあの刑事は象潟署でも名うての刑事なんださうだ。

（こんな話をしてゐるうちにも、群衆はだんだん數を增して來て、殆んど四人が身動きも出來ないほどになつてしまふ。）
（その間に背景はだんだん動いて往つて、寫眞館のところから傳法院前のところになる。）

貞龍　（立ち留まつて）　おい、おい、寄つちやあいかん。寄つちやあいかん歩けやせんぢやないか。
焉馬　（群衆に向つて）　寄つちやいけねえよ。寄つちやいけねえよ。
貞龍　（繩をぐいと引いて）　おい、默つて、默つて……。
焉馬　痛えぢやねえか、そんなに引つ張つちやあ。……。
貞龍　（小聲で）　勘辨して吳れ。勘辨して吳れ。（大きな聲で）　何を云ふんだ。さあ、さつさと歩け。
焉馬　歩けるもんかい。こんなに人がゐちやあ。……
典凌　（後の方から）　おい、仕方がないなあ。默(だまつ)てゐろよ。
焉馬　（怒つて）　だつて、お前、厭だよおれはもうこんな役は。
句樂　まあそんなこと云はねえでもう少しだ。おれがうまくきつかけを附けるから、それまで待つてゐろよ。
焉馬　だつて、お前……。
貞龍　ええ、默つて歩け。

（四人は默つてまた歩きかける。と、丁度そこへ上手の方から制服の巡査が二人急いで驅けて來る。）

巡査の一　何だ、何だ。

巡査の二　さあ、道を開けろ、道を開けろ。

（巡査はどんどん群衆を掻きわけて四人の方へ近付いて來る。）

焉馬　（巡査を見るとびつくりして）あゝ、巡査だ。巡査だ。

（突然貞龍の持つてゐた繩を振り切つて逓げ出す。焉馬が逓げ出したのに誘はれて、貞龍も句樂も典淩も一緒になつて、群衆の間を掻き分けて逓げる。）

（群衆は呆氣に取られたやうにびつくりしてゐたが、そのうち誰か「泥坊が逓げたぞ。」と大きな聲で怒鳴るそれから、群衆は何だか譯の分らない渦に卷き込まれたやうに滅茶々々に混亂する。）

「逓げたぞ。」「捕へろ。」「泥坊だ。」「掏兒だ。」「人殺しだ。」と云ふやうな叫び聲が、その群衆の渦の中から起つてみんな入り亂れて焉馬や句樂の後を追ひかけ始める。）

第　二　場

公園の瓢箪池の傍。

上手に築山があつて、その下にロハ臺が置いてある。立木が五六本立つてゐる。正面に瓢箪池があつて、池の向ふに球乘や女芝居や活動寫眞の小屋などが見える下手にもやつぱり一かたまりの木立がある。街燈の瓦斯の燈が青白くそこらを照らしてゐる。

同じ夜。十時ちよつと過ぎ。

典淩と貞龍とが息せききつて下手の方から驅け出して來る。

典淩　おい、如何したらう、二人は。

貞龍　うん、飛んだことになつちまつたな。

典淩　うん、如何も彌次馬つてやつは、あんまり茶番氣がなさ過ぎるよ。

貞龍　全くだよ。もうかうなつちやあいくら云ひ譯を云つたつて仕樣がないからな。

典淩　如何にかして唯のお茶番だつてことを分らせる工夫はないものかな。

貞龍　そりや駄目だ。並木か金車へでも逓げ込みあ分るんだが、あいつ等にはそんな氣の利いた考へは浮ばねえだらう。

典淩　だが二人とも藝人のことだから誰か顏を知つてゐるものがありさうなものだがな。

（わあつと云ふ鯨波の聲が下手の方で聽こえる。）

貞龍　ああ、あんなに騷いでゐやがらあ。大丈夫かな。
典凌　兎に角傘車に往つて相談して來よう。
貞龍　うん、さうだな。何しろ飛んだ騷ぎになつちまつたものだ。
（二人が上手へ往きかけようとしたところへ、蔦馬が命からがら〳〵で下手の方から驅け出して來て、貞龍に突き當る。）
貞龍　何しやがるんでえ。
蔦馬　（貞龍の顏を見て）ああ、こん畜生。よくもおれをひでえ目に會はせやがつたな。
貞龍　まあ、まあ、怒るなよ。句樂は如何したい、句樂は何處へ往つちまつたい。
蔦馬　知らねえや、他人のことなんかさあ、おれの帽子を返して吳れ。
貞龍　うん、よし來た。（帽子を取り替へる）
典凌　兎に角傘車に往かう。あすこの樂屋に往つて隱れてゐるのが一番だよ。
蔦馬　何しろこんなひでえ目に會つたのは、おれは生れてから始めてだよ。
典凌　それもお前から起つたことぢやないか。あんな細引を買はせたのが惡いんだよ。
蔦馬　さう云やあさうだけれど……。
（わあつと云ふ叫び聲が直ぐ間近で聽こえたので、三人はびつくりして話を止める。）
典凌　さあ、往かう、往かう。こんなところにゐるとまたどんな目に會ふかも知れねえ。
（三人は急いで上手の方に往つてしまふ。大勢の群衆が手に棒つ切を持つたり何かして、下手の方から現はれて來る。）
（群衆の聲。）
○　ゐねえぞ。ゐねえぞ。
○　何處へ往つちまひやがつたんだらう。
○　たしかにこつちの方へ遁げて來やがつたんだがな。
○　向うの茶畑の方にゐるかも知れねえ。
○　うん、何でも傳法院の方へ遁げたらしいぞ。
○　それぢやあつちへ往つて見よう。
（群衆は上手の方に往つてしまふ。とまたわあつと云ふ叫び聲が、今度は揚幕の方で聽こえて、それと同時に句樂が花道から驅け出して來る。）
句樂　（池の前のところで）ああ、驚いた、驚いた。こんな騷ぎにならうとは思はなかつたよ。譯を云つたつて何だつてかうなつちやあもう仕方がねえんだから、兎に角早く何處かへ遁げなくちやあいけねえ。
（上手の方へ往きかけると、また上手の方でわあつと

云ふ叫び聲が聽こえるので、びつくりして引き返す。と、花道からわいわい云ひながら大勢の群衆が驅け出して來る。）

（群衆の聲。）

○　こつちだ。こつちだ。

○　遁げられないやうに用心しろ。

○　氣を付けろ。氣を付けろ。

○　危ねえぞ。危ねえぞ。

○　うつかりするな。

○　しつかりしろ。

（群衆はそんなことを云ひながらそこらを探し廻つて到頭句樂を見付ける。「ゐたぞ、ゐたぞ。」と誰かゞ怒鳴ると、上手からも下手からも彌次馬が飛び出して來る。みんなは句樂を捕へようとするけれども中々捕まらない。あつちへ遁げたりこつちへ遁げたりしてだん〳〵騷ぎがひどくなつて來る。）

（結局句樂はみんなに追ひ詰められて今度は本物の刑事の手で繩を懸けられてしまふ。）

句樂　（もがきながら）違ふんです。旦那。あたしは何もお繩を頂戴するやうなものぢやあねえんですよ。

刑事　まあ、いゝ。兎に角署まてちよつと來い。

句樂　（泣き聲になつて）だつて、旦那。

刑事　まあ。兎に角署まで來いと云ふのに……。

句樂　情ねえなあ。もう茶番も出來ねえ世の中になつたんですかねえ。

（句樂はおとなしく刑事に引かれてゆく。群衆はぞろぞろ後から附いてゆく。群衆のざわめきのうちに幕が下りる。）

――をはり――

句樂と小しん（一幕）

人物

句樂　落語家
小しん　同じく落語家
岡田　句樂や小しんの贔屓の旦那
醉狂　山の茶屋の主人
おまき　女中
番頭
もう一人の女中

場所

――伊豆方面の或溫泉宿

或大きな溫泉宿の階下の座敷で、八疊と十疊の二間。上手にあるのが十疊の座敷で、正面には障子が閉め切つてある。上手には立派な一間半の床の間があつて傍に一間半の琵琶床が附いてゐる。床の間には、南畫の觀瀑の圖が懸かつてゐる。大きな食卓が眞ん中に置いてある外に、机、小簞笥、長火鉢、茶棚、衣桁などがそれぞれのところに置かれてある。下手の八疊の座敷も大抵この十疊の座敷と同じやうで、唯下手にある床の間が一間で、その傍に一間の違ひ棚が附いてゐるだけが違つてゐる。正面も同じく障子。この二間の正面の向うは緣側で、緣側の直ぐ向うには絕えず水の流れ落ちてゐる泉水がある。

十二月ももう可なり押し詰つた或夜の六時頃、師走とは思はれないやうな靜かな晩で、唯水の流れる音ばかりが聽えてゐる。

下手の八疊の座敷の眞ん中に置いてあるチャブ臺を挾んで、句樂と小しんとが坐つてゐる。句樂は五十二三歲位の坊主頭の頰のこけた目のぎよろりとした男。小しんは三十五六歲位の色の黑い痩せた男で、足が惡いけれどもまだ立てないと云ふほどではない。二人とも落語家で、何處か藝人らしい柄の褞袍を着てゐる。丁度晚酌を濟まして飯を食ひ終つたと云ふところ、膳がまだ障子のところに置いてある。

小しん　（頰を撫でながら）いや、如何もひどく醉つちやつたよ。

句樂　うん、おれも如何してだか、今日はひどく逆上ていけねえ。湯あたりでもしたんぢやあねえか知ら。

小しん　一體お前さんの湯は長過ぎるよ。入つて來るやつを一人々々つかまへて、くだらねえ都々逸の講釋なんぞ

やつてゐるんだから、あれぢや逆上せるのも無理はねえよ。

句樂　しかしみんなおれの講釋を聽いて喜んでるぜ。

小しん　そりやあみんなは喜んでるだらうが、しかしお前さんあゝ長く入つてゐちや體に毒だよ。

句樂　さうか。それぢやこれからもつと早く上がるとしよう。（そこにあつた繪葉書を見付けて）こゝにあるこの繪葉書は誰かのところに出すのかい。

小しん（點頭いて）あゝ、出さうよ。こゝに來てからもう五日か六日になるけれども、まだ誰のところへも葉書一枚出さねえんだからな。

句樂　成程、さう云や上野の師匠と、岡田の旦那のところへだけは、もつと早く出さなけりや義理が惡かつたな。それぢやひとつ書かうぢやないか。えゝと――あたり箱はと――（部屋の中を見廻して）あゝあすこだ。

（句樂は立つて机の上の硯箱を取つて來る。）

小しん（手探りに繪葉書を取り上げて）それぢやあ上野の師匠のところへ出すのから書かうか。

句樂　うん、よからう。師匠きつと心配してゐるぜ。おれ達二人のことだから何をしてゐるか知れやしねえと思つてゐるからな。もつともお前さんが病人さんだから、昔のやうな馬鹿はやりやしまい位のことは思つてゐるだらうけれど――。

小しん（苦笑ひをして）何しろ一緒に泊まつてゐる友達が惡いからね。

句樂（墨を摺りながら）馬鹿を云つちやいけねえ。さう云ふ病人の方がどの位惡いか知れねえぢやねえか。現に昨夜だつてこれから河向うの赤ペンを冷かしに往かうと云ひ出したのは誰だつたい。

小しん（笑つて）はははは、それぢやあ大人伺ひますが、直ぐそれに御賛成なすつたのはどなたでしたらう。

句樂（笑ひながら）いや、しかし往かなくつてよかつたよ。うつかり飛び込んで往かうものなら、暴利やあがつて酷え目に會はされるさうだ。

小しん　さうだらう。大抵その位のことは分つてらあな。まさかおれだつて本氣で往かうと云ひ出したんぢやあないよ。

句樂（墨を摺るのを止めて）さあ摺れたぜ。（硯箱を小しんの前に押しやる）

小しん　うん。（しばらくぢつと繪葉書の方を見つめたまゝ考へてゐる）

句樂　如何したんだ。

小しん（氣が付いたやうに顔を上げて）うん、なあに、ちよつと發句を考へてゐたんだ。

（小しんはやつぱり手探りに硯箱の中から筆を取り上げて、指で見當をつけて書きはじめる。）

句樂　（不圖それを見て）　おい、そいつは表の宛名を書く方だぜ。

小しん　（寂しい苦笑を浮べて）　ああ、さうだつけな。（繪葉書の裏を返して）　一字位消したつていゝだらう。宛名はお前さんに賴むとして、おれは唯發句だけ書いて置くぜ。

句樂　（ちよつと解せないやうな顏付で）　うん。

小しん　（書きながら）　ええと——杖ついて見てもあぶなし年の阪——如何だいこの句は。

句樂　（覗き込むやうにして）　杖ついて見てもあぶなし年の阪か。成程、ちよつと面白い句ぢやあないか。

小しん　（もう一度吐くやうに）　杖ついて見てもあぶなし年の阪——しかし柳亭小しんもこんな句を作るやうになつちやあ情ねえな。何だかちよつと寂しいやうな氣もするよ。

句樂　何を云つてゐるんでえ。強情つ張りのお前さんにも似合はねえことを云ふぢやないか。（筆を取つて）　さてと——おれもやつぱり句を書かなくちやあいけねえかな。（しばらく考へてから）　うん、こいつあいい、こいつあいい。（急いで書く）

小しん　何だい。何てえ句だい。

句樂　うん。新宿へゆく華魁の師走かな——つて云ふんだ。

小しん　ふうん、新宿へゆく華魁の師走かな——面白れえ句ぢやあねえか。しかし、そいつは何だな。上野の師匠にやあ向かねえ句だよ。

句樂　（氣が付いて）　成程、こいつは上野の師匠のところへ出す葉書だつたんだな。しかしまだ宛名も書かねえんだし、上野の師匠のところへ出す葉書と限つたことはねえだらう。

小しん　そりやあさうだ。

句樂　（點頭いて）　そんならこいつは焉馬のところへ出してやらうぢやないか。

小しん　焉馬——（しばらく考へて）　焉馬のところへは出したつて無駄だよ。あいつは發句なんてまるで分からねえ男なんだから——それよりは岡田の旦那のところへ出さう。

句樂　うん、さうだ。岡田の旦那のところへ出すなら、發句だけにして置いて、何も文句を書かねえ方がかへつて氣が利いてゐるだらう。それに旦那はおれ達がこゝに來てゐるつてことを知つてゐるんだから——だがどつちへ出したらいいんだらう。

小しん　どつちつて云ふと――何だい。
句樂　深川か濱町かどつちつてことさ。
小しん　そりやあ無論濱町さ。極まつてゐるぢやあないか。當時當り屋の粂吉の大將だ。家へなんか歸るものかな。
句樂　さうか。それぢやあ濱町二丁目三番地と――（宛名を書かうとして）おや、こいつはいけねえ。おれにやあ岡田の旦那の名前が如何しても思ひ出せねえ。
小しん　馬鹿だなあ。貞之助つて云ふんぢやねえか。
句樂　あゝ、さうさう、貞之助々々々。（宛名を書く）
（女中のおまきが障子の外で「ご免なさいまし。」と云ふ辭を懸けてから入つて來る。二十二三の丸ぽちやの女。）
おまき　あの、もうお濟みになりましたが。
小しん　あゝ、濟みましたよ。どうぞ下げて下さい。
おまき　（膳を下げながら）今日は何處かへ御散歩にいらしつたんですか。
句樂　ええ、ちよつとあの瀑のところまで往つて來たのさ。ところが驚いたね、おまきさん。あの瀑の傍の茶屋にゐる變な夫婦――ありや一體何もんだい。
おまき　あゝ、あれを御存知ないの。あれこそ有名な醉狂つて男なんですわ。

句樂　醉狂――成程、醉狂に違ひねえ。いやに馴れ馴れしく師匠々々つて云やあがつてね。さすがのおれ達も少し面喰らつてしまつたよ。
小しん　いや、如何もあいつはおれには苦手だ。
おまき　あゝ、さう云へば、今帳場に來てゐましてね、師匠のところへ遊びに伺ふんだつて云つてゐましたよ。
小しん　（情なさうに）おやおや、お助からねえな。おまきさん、如何にかならないかい。
おまき　（笑つて）さあね、赤ペンにいらつしやらうと云ふ位の勇氣がおありなら、醉狂さん位何でもありますまい。
小しん　（頭を搔いて）はははは、こいつあ遣られた。もう今後決して昨夜のやうな不所存なことは申しませんよ。
おまき　（膳を持つて立ち上りながら）別に御用は――
小しん　へえ、別に――もう何にも云はずにおとなしく寢ますよ。
句樂　あゝ、おまきさん、いつもの通り按摩を賴むよ。
おまき　かしこまりました。
（おまきは障子を開けて出てゆく。）
小しん　あの女中、中々しつかり者だね。
句樂　誰かに似てゐると思つて考へてゐたんだが、やつと

思ひ出したよ。

小しん　ふうん、誰に似てゐるんだい。

句樂　うん、うちの紫君のところの下新にさ。

小しん　馬鹿。なにつけかにつけ紫君さんだ。分つたよ。お前さんの逆上るつて譯は。こいつは湯が長えばかりぢやあねえ。その紫君さんてやつがいけねえんだね。

句樂　何を云つてやがる。（氣が付いて）まあ、兎に角葉書を書いちまはう。

小しん　うん、まあお前宛名から書いてつたらいいだらう。

句樂　おれにみんな書かせる氣か。

小しん　（笑談のやうだけれど寂しく）そこはまあお年役にね。

句樂　仕方がねえ。ええと――一枚は上野の師匠と――（書きかけて不思議さうに）おや、いけねえ。如何したんだらう。東京市と書かうと思つたのに、こんな字が出來てしまひやがつた。こいつあよく不動様のお符に書いてある梵字だぜ。如何しておれはこんな字を書いてしまつたのだらう。（考へてゐる）

小しん　うん、どれ。（覗き込まうとしたが見えない心持）

（障子の外で「今晩は」と云ふ男の聲が聴こえる。二人は不圖以前の明るい心持にかへつて顔を見合す。）

小しん　（囁くやうに）おい、來たぜ。

句樂　（これも囁くやうに）おれは狂人の眞似をしてびつくりさせてやるから見てゐるがいい。

外の聲　（もう一度）今晩は。師匠おゐでですかい。

句樂　（聲のする方を向いて）ええ、をりますよ。どうぞお入んなさい。

（障子を開けて醉狂と呼ばれてゐる妙な男が入つて來る。四十二三位の痩せた出つ歯の野幇間のやうな男。）

醉狂　（ぴよこ〳〵お辭儀をして）いや、如何も先刻は――さぞお草臥れでげしたらう。何しろあの石の多い山路のことでげすからな。五六町あるかなしなんですけれど、師匠のやうにあんまり歩きつけねえ方にはえらうがすよ。

句樂　（形を改めて醉狂に向つて）下がれ。無禮者めが。

醉狂　（びつくりして句樂の顔を見つめながら）ええ、何でげす、師匠。

句樂　（默つてぢつと醉狂の顔を見つめてゐる）

醉狂　（もじもじしながら）驚きましたなあ、こいつは。入つて來るといきなり、下がれ、無禮者はないでせう。（小しんの方を向いて）ねえ、師匠。

小しん　（わざと聲を低めて）いや、實はね、この人少し

氣が變なんだよ。

醉狂　へええ、そいつはちつとも知らなかつたね。

句樂　（わざとものものしい調子で）　汝元來俗人の癖に、濫りに醉狂など號して仙人を氣取る、かかる山中の茶屋の主人となりて、蕎麥などを高く賣らんよりは、むしろ俗界に赴きて野幇間となれ。喝。（大きな聲で怒鳴る）

醉狂　（首を縮めて）　ああ、びつくりした。喝と來ちやあやりきれないね。（小しんに向つて）　師匠、成程、少し變なやうですね。

小しん　少しどころか、大した變になりやうなんだ。

句樂　（横柄に）　おい、醉狂。引導を渡してやつたんだから、もういい加減に歸れ。それともつとここにゐたければ、ひとつステテコを踊つて見せろ。

醉狂　ステテコは踊れませんが、サノサなら知つてゐますよ。（唄ふやうに）　人は武士氣慨は高山彦九郎・京の三條の橋の上――つてあいつならね。

小しん　（少し呆れたやうに）　おい、お前さんは踊る氣かい。

醉狂　ええ、みなさんが踊れつておつしやればね。

句樂　もうよい、もうよい。踊るのはいいが、もう一度引導を渡してやる。

醉狂　いや、もうあの喝つてやつは澤山でげすよ。また今度伺つた時にしませう。（またぴよこぴよこお辭儀をして）　それぢやあ師匠、また伺ひます。

（醉狂は少し面喰らつて出て行く。往つてしまふと二人は顏を見合せて聲を立てて笑ふ。）

句樂　はははは、面白れえ、面白れえ。あん畜生、面喰らつて往つてしまひやがつたぢやないか。

小しん　はははは、いゝお慰みだ。サノサなんか踊られてたまるものか。

句樂　あれで臆面もなく方々の座敷を押し廻つて、祝儀にあり附かうつて云ふんだから太えやつだよ。

小しん　おれ達の仲間にも、ちよつとあれに似たやうな輩が、近頃めつきりふえて來たぜ。

句樂　だからよ、おれは今度東京へ歸つたらいよいよひとつ戰爭をおつ始めるんだ。協會派でも、親睦會の連中でも、誰でも彼でもみんな滅茶々々に、遣つ付けてやるんだ。

小しん　大した勢だな。

句樂　その時はお前さんもおれの味方にならなくちやあいけねえぜ。如何だい、なるかならねえかい。

小しん　（點頭いて）　なるよ、なるよ。

句樂　さうか。（氣が付いて筆を取り上げて）　さあ、今

度は間違はねえやうに早く書いちまはう。

（句樂が書きはじめたところへ、縁側の方でどやどやと云ふ足音が聽こえて、鞄を下げた番頭を先きに、さつき句樂や小しん達の話頭に上つてゐた岡田が笑ひながら障子を開けて入つて來る。岡田は四十二三歳位の小肥りの男で、或大きな商家の旦那であるが遊蕩三昧に身を持ち崩して、今ではその心持も傷ましいまで荒んでゐる。おまきも後から附いて來る。）

岡田　おい、到頭やつて來たよ。

句樂　（びつくりして）あゝ、岡田の旦那。

小しん　（懷かしさうに）よくいらつしやいましたね。

岡田　（まだそこに立つたまま）ところで、番頭さん。何處かこの近くに空いてゐる座敷はないかい。

番頭　えゝお隣りが空いてをりますが――。

岡田　お隣結構、ここかい。（襖を開けて見て）うん、こゝがいい。ここがいい。（どん／＼入つて往つて自分で座蒲團を出してその上に胡坐をかく）うん、中々いい。中々いゝ座敷ぢやないか　水の音がちよろ／＼してるなざあ乙なものだ。（四邊を見廻してから句樂と小しんの方を向いて）おい、句樂も小しんもこつちへ來ないか。

句樂　ええ、ほんとによくいらつしやいましたね。今旦那のところへ葉書を書いてゐたところです。

小しん　全く旦那、不意討はひどうがすね。

岡田　不意討つて譯ぢやないんだがね、ちよつとこれには譯があつてね。（小しんは句樂に扶けられて、上手の方の座敷へ來る。おまきはもう一人の女中が持つて來た火鉢についだり、浴衣と褞袍と重ねたりする。）

おまき　（岡田に）あの旦那、晩のお支度は。

岡田　ああ、何か見つくろつて貰はう。（句樂達に）お前さん方はもう晩飯を濟ましたのかい。

句樂　ええ、今濟ましたところです。

岡田　さうか。しかし、まあいゝだらう。（おまきに）あのね、この人達にも何かお料理を持つて來て呉れないか。何か酒の肴になるやうなものがいいぜ。

おまき　かしこまりました。それぢやあどうぞ御風呂をお召し下さいまし。

（おまきは直ぐに出てゆく。）

岡田　ああ、それぢやあ一風呂浴びて來よう。（二人の方を向いて）おい、誰か一緒に附き合はねえか。

句樂　お伴しませう。

小しん　（句樂に）いゝかい、おい、逆上せて困るつて云つてゐるぢやあないか。

句樂　なあに大丈夫だ。長湯さへしなけりあ逆上やしない

よ。

岡田　それぢやあ行かう。（鞄を開けて石鹸だのタオルを出す）

（岡田と句樂とは障子を開けて椽側傳ひに風呂場の方へゆく。）

（小しんは一人寂しさうに食卓の前に取り殘されてゐる。みんなの足音が聽こえなくなると、不圖氣が付いたやうに電燈の方を見上げて、それから兩手を目の前に出して、指を動かしてぢつとそれを見ようとする。如何してもそれが見えない心持。やがて隣りの座敷に這入つて行つて、チャブ臺の上の繪葉書を取り上げて、そこに書いてある字を讀まうとする。遠く離しても、近く寄せても、如何してもそれが讀めないやうな心持で、しまひには情なさうにそこに抛り出してしまふ。可なり長い間。

小しんは默つて面をぢつと伏せて考へてゐたが、そのうち涙が頬を傳つて流れはじめる。そこへ障子の外で、「今晩は。」と云ふ聲がして、またさつきの醉狂が入つて來る。）

醉狂　（少し醉つてゐる）　いや、師匠。お一人ですか。いや驚きましたな。さつきは全くあつしはびつくりしてしまひましたよ。何しろいきなり下がれ無禮者と來たんでせう。少し氣が變だつてことを前から知つてゐりやあ何もびつくりすることあなかつたんですが、鹽間茶屋で會つた時は、別に變つた樣子も見えなかつたし、ちつともそんなことを知らなかつたもんですから、すつかり面喰らつてしまひました。それに師匠も人が惡いや。何も云はねえで唯默つて見てゐるんだもの。あつしはほんとにさつきは師匠が恨めしうござんしたよ。

小しん　（苛々しながら）　うるせえな。おれは少し今考へごとをしてゐるんだからちよつとの間默つててくれ。

醉狂　うるせえなはないでせう。考へごとなんざあ第一身體に毒でげすよ。湯治に來てまで考へごとなんぞしてゐちやあつまりませんや。ねえ苦勞忘れて浮々しやんせと云ふ唄の文句もあることつてさあ。

小しん　うるせえつてば、分らねえやつだな。

醉狂　こいつあ驚いた。もう下がれ無禮者は眞つ平御免ですぜ。（不圖氣が付いて）ああ、忘れねえうちに御使者の趣を申し上げますがね、あの實はあなた方お二人に、一席づつ演つて頂きたいと云ふさるお客樣からのお頼みなんですが、どんなものでげせう。

小しん　何だ。座敷か。

醉狂　へえ、つまりそのお座敷なんで——如何です、ひとつ。濱の生糸屋さんで紫鳳つていやあ素人義太夫ぢやあ

有名な方なんださうです。

小しん　紫鳳――聽かねえな。

醉狂　この御連中が四五人見えて、今夜義太夫の會があるんださうですが、その前に是非一席聽きたいとかうおつしやるんです。

小しん　何でえ、素人義太夫の前座か。そいつあまあお斷りだな。

醉狂　いや、前座なんて飛んでもない。そんな譯ぢやあないんですよ。

小しん　（頑なに）たとへさうではないにもしろ、おれは厭だよ。

醉狂　（少しがつかりして）さうですか。是非一席願ひたいと云ふ、たつてのお賴みなんですがねえ。

小しん　（怒つたやうな調子で）厭だつて云つたら如何しても厭だよ。兎に角、こいつはお斷りをするよ。

醉狂　しかし、そこんところを如何にか願へませんでせうかねえ。あつしは實はすつかり受け合つて來ちやつたんで、如何もその――困りましたなあ。

小しん　受け合つたのはお前が惡いんぢやあねえか。何しろ厭だつて云つたら如何あつても厭なんだから、斷られましたと云つて返事をするより外仕方がなからう。

醉狂　だけどねえ、師匠。

小しん　うるせえ男だな。この上何か云ふとおりやあ怒るよ。

醉狂　それぢやあ仕方がありません。さう返事をして置きませう。（澁々立上りながら）しかし師匠は慾がねえね。

小しん　當り前よ。慾があつたら落語家なんぞしてゐられるかい。

醉狂　それぢやあまた伺ひます。

小しん　いいよ、もう來なくつたつて――馬鹿にしてやがる。（醉狂は障子を開けて出てゆく。とそれと引き違へに岡田がタオルをぶら下げて、のつそり上手の座敷へ入つて來る）

岡田　ああ、いい氣持だ。（隣り座敷の方を向いて）おい、小しん、どうしたい。

小しん　ええ、今お座敷がかかりましてね。

岡田　へえ、そいつは大した景氣だな。

小しん　なあに景氣だけでさあ。厭だからつて斷つちまひましたよ。（匐ふやうにしてこつちの座敷へ來る）

岡田　（笑つて）ははは、斷つたのかい。もつともお前さんは病人だからな。

小しん　なあに病人だつて落語位は出來ますがね――旦那は素人義太夫で紫鳳つて名前の人を御存じですか。何で

も濱の生糸屋さんだとか云ふこつてすが――。
岡田　あゝ、紫鳳つて云ふのは濱の川島だらう。それが如何したつて云ふんだい。
小しん　今の座敷つて云ふのはその方なんです。
岡田　あゝさうか。道理でおれと一緒の汽車に、兜町の藤倉だの木場の福井だの義太夫をやる連中が乘つてゐたつけ。それぢやあ今夜デンデンを始めやがるんだな。
小しん　多分この池の直ぐ向うの、二階の廣間でやるんでせうから、始まると中々うるさうござんすよ。
岡田　まあ、いいや。こつちはこつちで、思ひ切つて飲るさ。兎角浮世は色と酒つて云ふけれど、全くだね。人間生きてるうちは、遊ぶ、飲む、この二つが、一番面白いね。
小しん　（微笑しながら）旦那はまだお倦きになりませんか。
岡田　倦きないとも――倦きたらもうおしまひだよ。
小しん　しかし、旦那。今度はお珍らしいぢやありませんか、たつた一人でお出でになるなんて――いつもかう云ふ時にお伴をする魚平は如何いたしました。
岡田　（ちよつと寂しさうに）うん、魚平かい。今度はあいつも誘はなかつた。何しろこつちにお前さん達がゐるんだから、一人でも寂しかあないだらうと思つてね。

小しん　あゝ、左樣ですか。（直ぐ相手の寂しさを感じたやうに口を噤む）
岡田　長えな、句樂は少しをかしいやうだよ。（ちよつと聲を低めて）おい、句樂の湯は――
小しん　（問の意味がよく分らないやうな樣子で）をかしいつて云ひますと――。
岡田　何だか云ふことが少し變だぜ。今一緒に湯に入るとおれの方に胸を向けて、旦那この水落のところを押して御覽なさい、堅いぐりぐりがあるでせう、こいつあ金の塊なんですぜなんてことを、眞面目な顏をして云やあがるんだ。
小しん　（首を傾げて）へえ、そいつはちよつと變ですね。
岡田　うん、大分をかしいよ。（不圖氣が付いて）如何したんだい。もうちやんと何か竝んでゐるものと思つて出て來たのに、大變遲いな。（呼鈴を押す）
（直ぐに返事の鈴の音が縁側のところで聽こえる。）
（間もなくおまきともう一人の女中が料理や酒の銚子を膳に載せて運んで來る。）
おまき　如何も遲くなりました。丁度お客樣が一時になつてしまひましたものですから――
岡田　あゝ、それ、それ――お待兼ねのところだ。（おま

きは料理の皿を食卓の上に並べてから、銚子を取つてお酌をする）

おまき　少しお熱いかも知れませんよ。

岡田　（一杯ぐつと飲み乾して）いや、上燗だよ。（少し心配さうに）時に句樂は如何したんだらう。

小しん　またきつと湯の中で、都々逸の講釋でもやつてゐやがるんでせうよ。（おまきに）おまきさん。濟まねえがちよつと迎へに行つて來て吳れないかい。

おまき　へえ、かしこまりました。（おまきは直ぐに立つて出てゆく。池の向うで義太夫の三味線の音が聽こえはじめる。淨瑠璃の文句は風の工合で聽こえたり聽こえなかつたりする）

小しん　旦那。いよいよ始まりましたぜ。

岡田　うん。（何か考へてゐる）

小しん　何だか義太夫つてものはあんまり陽氣なもんぢやありませんね。

岡田　（不圖顏を上げて）東京からここまで電報は幾時間位かかるかな。

小しん　さうですねえ。四五時間はかかるでせう。

岡田　その位はかかるだらうな。（考へてゐたが氣を變へて）おい、如何した。お酌をしよう。（銚子を取る）

小しん　（杯を取り上げて）こりや恐れ入ります。

岡田　（手酌で二三杯たてつづけに飲んで）おい、世の中つてえところはつまらねえもんだね。お前さんは人間何のために生きてゐるんだか知つてゐるかい。

小しん　（はつきりと）知りませんね。また知りたいとも思ひませんよ。

岡田　ところがおれは知りたいんだ。如何も金を遣ふためばかりぢやあないやうだよ。

小しん　しかし金を遣ふためばかりだつていゝぢやありませんか。

岡田　（苦笑ひをして）うん、遣ふ金があるうちはね。

（小しんが何か云ひ懸けようとした時、句樂が濡手拭をぶら下げたまま、障子を開けて入つて來る。つづいておまきも新しい銚子を持つて入つて來る。）

岡田　如何したい。ひどくゆつくりしてゐたぢやあないか。まあ、一杯おやりよ。

句樂　（坐つて）へえ、有難う。

小しん　（句樂に）何だい。また何か喋つてゐたのかい。

句樂　うん、不動樣の御利益の話をしてゐたんだがね――つい話が面白くなつて成田屋の不動の聲色を使つたもんなんだ。さうなるとみんな嬉しがりやがつて、もつとやれもつとやれつて云ふぢやあねえか。仕方がねえみんなやれつて氣になつて、知つてゐるだけの聲色をみんなや

つちまつたんだ。

岡田　道理で長い湯だと思つたよ。

句樂　（面白さうに笑つて）はゝゝゝ、いゝ氣持でしたよ。みんなほんとに嬉しがつて呉れてね、之からはみんな揃つて不動樣を信心するつて云つてゐましたぜ。

岡田　（劬はるやうに）さうか。そいつはよかつたね。

小しん　ところで、句樂さん。お前さんが湯に行つてゐる留守の間に、またあの醉狂のやつがやつて來てね。

句樂　あいつまだ懲りずにやつて來たかい。

小しん　懲りるどころか、お客から頼まれておれ達の座敷の懸け合ひに來やがつたんだ。

句樂　ふゝん、それでお前は何て返事をしたい。

小しん　無論お斷りよ。ずゐぶん執拗くいろんなことを云やあがつたけれど、如何しても厭だつて云つて斷つちまつたよ。

句樂　うん、そいつは斷るのが當り前だ。湯治に來て座敷を稼いだりしちやあ、不動樣にだつて、申譯がねえからな。誰だい、一體おれ達を座敷へ呼ばうなんてことを云ふ大それた客は。

小しん　お前さんも知らねえだらう。濱の川島つて云ふ生糸屋さんで、素人義太夫で紫鳳つて名前の人ださうだ。

句樂　（義太夫の三味線を聽き付けて）ああ、デンデンやつてやがるな。あれだね。

小しん　あゝさうだよ。あの連中だ。

句樂　（耳を傾けて）何だ何をやつてゐるのだらう。（しばらく唄の文句を聽いてゐてから）あゝ「新口村」だな。

小しん　如何もあんまりうまくないやうだね。

句樂　うん、うまくない。しかしおれは「新口村」つて淨瑠璃はあれは好きだよ。二分つきや持つてゐねえ癖に、二人でぢやら〳〵してゐるところが面白れえぢやねえか。

小しん　何だ。くだらねえところを面白がつてゐやがる。

岡田　（或る感慨をもつて）しかしあゝやつて女と一緒に死ねる男は仕合せだよ。唯遊んだばかり、金を遣つたばかりつて云ふのは寂しいもんだよ。

句樂　さうですかねえ。（氣が付いて）旦那はちつとも上がらないぢやありませんか。（おまきに）おい、おまきさん。お酌だ、お酌だ。

（おまきみんなにお酌をする。そろ〳〵杯のやりとりが始まる。）

句樂　（嬉しさうに）しかし旦那。ほんとによく出懸けていらしつたよ。あの時旦那はおれも後から往くよつておお言葉だつたけれど、何しろ暮のことでもあるし、とてもお出懸けはないだらうと、小しんとも話してゐたんで

す。それにかうしてお見えになつたんだから、あつしは全く嬉しうがした。まあ、ひとつお杯を戴きませう。

岡田　(句樂に杯を出して)　お前達がゐないとやつぱり如何も寂しくつてね。情婦に會ひに來るやうな心持でやつて來たのさ。

句樂　(笑つて)　はははは、飛んだ情婦だ。かう云ふ情婦なら御新造さんも御心配はなさらねえでせう。

岡田　(誘はれたやうに笑つて)　はははは、如何だか——かへつて心配するかも知れないぜ。

小しん　いや、そりや御心配なさいますよ。これまでだつて何か惡事を企てるとすると、大抵ここらあたりが張本人なんですからねえ。

句樂　(頭をかいて)　はははは、さう云やあさうだけれど——まあ、いいや、そんなことは。それよりも、少し杯を廻さうぢやないか。

岡田　うん、さすがはもう師走の寒さだ。少し酒でも飲まないと湯醒めがする。

(それから杯のとりやりが盛んになる。おまきは銚子の替りに立つて直ぐまた入つて來る)

句樂　(いい機嫌になつて)　はははは、やつぱり世の中は酒のこつた。ねえ、旦那、さうぢやありませんか。人間萬事酒の世の中つて芝居がありましたね。たしか默阿彌さんだつたと思ふが——

小しん　嘘を吐け。ありやあ金の世の中だよ。

句樂　ああさうか。人間萬事金の世の中——しかしまあどつちだつて同じやうなものだ。

岡田　(無理に笑つて)　はははは、やつぱりお前達と一緒に飲むと面白いね。いや全くここまで來た甲斐があつたよ。

句樂　(大分醉つて)　何しろいい氣持だな。醉狂のやつは逐つ拂ふし、おまきさんにやあお酌をして貰ふし——こいつあいい年忘れだ。

岡田　(わざと陽氣に)　如何だい、句樂。まだお前の十八番の「辻君」は出ないかね。

句樂　「辻君」ですか。ようがす。やりませう。(おまきに)　おい、おまきさん。濟まねえが帳場へ往つて三味線を借りて來て呉れないか。

おまき　駄目ですよ、帳場の三味線は。

句樂　いいんだよ。どんな三味線だつて——ペンとかツンとか音さへすりやあそれでいいんだ。

おまき　それぢやあ今持つてまゐりますわ。

(おまきは立つて三味線を取りに出てゆく。)

小しん　(句樂に)　おい、一體誰が三味線を彈くんだい。

句樂　(けろりとして)　お前さ。お前が彈いておれが唄ふ

と云ふ、かう云ふ趣向なんだ。

小しん　つまらねえ趣向だな。しかしおれにやあ「辻君」なんてむづかしいものは彈けねえよ。

句樂　なに彈けねえ。それぢや何にしよう（ちよつと考へて）それぢやひとつ大津繪でもやらうか。

小しん　大津繪か。大津繪なら如何にかやれるだらう。

岡田（笑つて）はははは、こいつあ面白くなつて來た。小しんが三味線を彈くなんておれが知つてから始めてだぜ。

小しん　いや、もうひでえ目に會ふもんです。

句樂　まあ、そんなことを云はずに、如何だい、一杯。（小しんに酌をする）

（そこへおまきが三味線を持つて入つて來る。）

おまき　あの撥がちよつと見付からないんですけれど――

小しん　いえ、撥なんぞ入りませんよ。（句樂に向つて）爪彈でいいだらう。（三味線を受取つて調子を合せる）

句樂（待ちかねたやうに）いいかい。

小しん　うん。

句樂（ぐつと一杯飲み乾してから唄ふ）

（句樂の唄も小しんの三味線も、兩方ともうまくはないが、しかしうまくないだけにかへつて妙な面白さがある。岡田は默つて聽いてゐるが、少し醉の出たその顏には、荒んだ寂しい色が動いてゐる。そのうち句樂がうたひ終る。）

岡田（取つて付けたやうに笑つて）はははは、面白い、面白い。さあ、もつと何か陽氣な唄を聽かして吳れ。

句樂　いや、如何も唯ほんのお笑ひ草でさあ。（句樂と小しんとは顔を合せて笑ふ。と、障子を開けて番頭が一通の電報を持つて入つて來る）

番頭　あの、岡田さんとおつしやるのはこちら樣でしたな。

岡田（ぎよつとしたやうに振向いて）ああ、さうだよ、さうだよ。

番頭　あの電報がまゐりました。

岡田　ああ、さうかい。

（岡田は番頭の手から奪ふやうに電報を受取つて讀む。番頭は直ぐに出てゆく。短い間。おまきは不圖氣が付いたやうに銚子を替へに立つて出てゆく。）

（これまでほんのり醉の出てゐた岡田の顏は、電報を見ると同時に急に蒼ざめて來る。その目は凝つたやうにぢつと電報の上に注がれてゐる。かなり長い間。みんな無言。）

（池の向うの義太夫は丁度「五十兩遣ひ果して二分殘ろ」と云ふサハリのところ。）

岡田　（そのうちやつと顔を上げて）　いけねえ、いけねえ。人間は間違ひ出すと萬事駄目だ。
小しん　（心配さうに）　如何なすつたんです。旦那。
岡田　うん、實はな、おれは今日は天下分目と云ふ大勝負をやつてゐたんだ。日本橋の店も濱町の家も深川の家も、みんな抵當に入れて金を借りて、それで無暗に強つ氣に買煽つてゐたんだが、今日の後場で滅茶々々よ。おい、句樂、ちよつとお酌をして呉れ。
句樂　（何か口の中でぶつぶつ云つてゐるだけで返事をしない）
岡田　（手酌で飲みながら）　實は今日かうしてこつちへ遣つて來たつて云ふのもとても家にぢつとしてゐられなかつたからなんだ。それでおれは今朝注文を出すと直ぐに汽車に乘つてやつて來たんだが、しかし今日一日――今この電報を見るまでは、實におれは何と云つていゝか、堪まらない心持がしてゐたんだよ。（あきらめたやうに）いや、しかしこれでさばさばした。公債や株なんかもう疾うに失くしてしまつたし、これで店や家を人手に渡してしまふと、結局おれの手に殘るものは借金位なもんだらう。百兩百貫の借錢負うて、總身が金の伊左衛門か。はははは。（寂しく笑ふ）
小しん　旦那。今のお話はほんとなんですかい。
岡田　ほんとだよ。まあ、この電報を見たがいい。（電報を小しんの前に抛る）
小しん　（電報を取り上げて讀まうとしたが目が見えない）
岡田　（銚子に殘つた酒をしためるやうにして飲んでから棄鉢な調子で）冷てえ酒だ。
小しん　（思ひ迫つたやうな聲で）　旦那。
岡田　（小しんの顏をぢつと見て）　うん、何だ。
小しん　（自分の目を指差して）　實はあたしは目が見えなくなつちまつたんですよ。
岡田　（びつくりして）　ええ、目が――何時からなんだ。
小しん　さう氣が付いたのは今日の夕方のことなんです。それまではぼんやり何でも見えてゐたんですがそれが夕方晝寢から起きて、そこらを見廻すともう四邊が眞つ暗になつてゐるぢやありませんか。その時の情なさつたらありませんでしたよ。
岡田　（傷ましさうに）　さうか。そいつは氣の毒だなあ。
句樂　（突然）　ああ不動樣、不動樣だ。（一生懸命床の間の方に向つて拜みはじめる）
小しん　（悲痛な顏付で）　旦那。句樂ももう いけませんよ。
岡田　（聲を呑むやうにして）　うん。（點頭く）
（そのうち岡田の目からも小しんの目からも涙がとめ

どなく溢れ出して來る。池の向うからはもう終りに近いことを思はせるやうな、やや急調な三味線の音。）

――幕――

狂藝人（三幕）

人物

俳諧亭句樂　落語家
おとし　句樂の妹
山崎新太郎　文科大學生
同 信子　新太郎の養母
おぎん　小間使
櫻村虎彦　新太郎の友達
延美津　清元の師匠
おはつ　稽古に來る娘
その他下男、煙草屋の女房など。

場所

東京、淺草

時代

現今

第一幕

隅田川に臨んでゐる大きな邸宅の一部。橋場附近。

新太郎の書齋と定められた十疊の間と六疊の次の間。上手の十疊の間は壁、六疊の間（觀客に近き方）は襖となつてゐる。襖の彼方は直ぐに土藏の入口となつてゐて、襖を開けると黑い扉、太い格子戸などが見える。襖と土藏の入口との間の板壁に、二三個の燈籠を懸け、その下に赤い色の消火器がある。正面には障子。その向うには廣い緣側を隔てて玻璃戸がある。障子を開けると、その玻璃戸を通して隅田川の一部が見える。下手の十疊の間は床の間と違ひ棚、六疊の間は襖。この襖からすべての人々が出入する。

上手の壁に添つて書棚がある。その前に川に向つて紫檀の机を置く。書棚の外に床の間にも書籍雜誌などが積み重ねてある。聚集した種々の玩具が床の間にも書棚の上にも夥しく置き並べてある。壁には三四個の油繪の懸けられた中に、古い役者の似顏繪なども交つてゐる。

机の傍に桐の火鉢。緣側に竹の椅子。二月下旬の或る日の午前。曇つてゐる空は時々冷たい日光を洩らす。

新太郎は机に向つて頻りに筆を走らせてゐる。二十三歳だが年よりも若く見える。美しい容貌、强度の近眼で金緣の目鏡を懸けてゐる。飛白の着物。筆を置いて溜息を吐き、傍の箱から卷煙草を取つて、殆

んど無意識に火を附ける。小間使のおぎんが下手の襖を開けて出て來る。十七歳。美しい目を持つた圓顔の稍大柄な女。よく火の熾つた炭を入れた十能を持つてゐる。

おぎん　（火鉢の傍に來て）お火が消えましたでございませう。

新太郎　（目が覺めたやうに）うん。まだあるよ。

おぎん　それでもこんなに消えかかつてをりますよ。（火箸を取つて）まるで炭をおつぎにならないんですもの。

新太郎　面倒臭いやね。それより早く書かなくちやならない仕事があるからな。（おぎんの頭に目を留めて）おやお前が島田に結つたのは、おれは始めて見るよ。

おぎん　頭なんぞご覽になつちやいけませんよ。

新太郎　お前には島田が一番好く似合ふね。これからいつもその頭に結つてゐると好いや。（回想するやうな眼差をして）あの晩には――

おぎん　（急に新太郎の言葉を遮つて）およし遊ばせよ、そんなことをおつしやるのは。（火をついでしまつて）そんなことをおつしやるなら私もうあつちへ往つてしまひますから。

新太郎　（わざと冷やかに）ああ、あつちへ往きたけりや勝手にお出でよ。（間）何故あの晩のことを云つちやいけないのだい。

おぎん　それでも――

新太郎　それでも何さ。あの晩のことを云はれるのはお前は厭なのだらう。

おぎん　いいえ。

新太郎　それぢやあ關はないぢやないか。（笑ひながら）しかし今おれが云はうと思つたことは、つまらないことなんだよ。あの晩お前がその頭に結つてゐたら猶嬉しかつたらうと思つたからそのことをお前に云はうと思つたのさ。

おぎん　まあ、そんなことをお考へになつたのでございますか。

（稍長い間。おぎんは感動して目に涙を浮べてゐる。）

新太郎　おや、如何したんだい。泣いてゐるのかい。（おぎんに近寄り肩に手を懸ける）何か氣に障つたことでもおれが云つたのかい。（間）默つてゐちや分らないよ。何とか返事をおしよ。

おぎん　（情熱の爲めに聲を顫はせて）ほんとに私――嬉しくつて嬉しくつて――

新太郎　（同じ程の情熱で）お前はそれ程嬉しいと思つて呉れるのかい。それぢやあお前はおれとこんな仲になつたのを別に後悔なんぞしてゐやしないのだね。

おぎん　ええ、しかしこれから先のことを考へますと、何だか悲しくなりますわ。

新太郎　如何して。

おぎん　あなたはここの跡取の方ぢやございませんか。如何して、一所になんぞなれやしません。いづれお別れする時がまゐりますもの――

新太郎　そんなことはないよ。如何しても一所にならうと思へば、さうなれないと云ふことはないよ。

おぎん　（悲しさうに頭を振る）いいえ。私にはちやんと分つてをりますわ。お父う様でもお母あ様でもきつとお許しになりませんから――

新太郎　さうしたらおれはこの家を出てしまふだけだ。

おぎん　（驚きと喜びと混じた表情）まあ――

新太郎　さうすれば一所になれるだらう。

おぎん　（放心したやうに）ええ。

新太郎　（急に興奮して）さあ、もう先のことなんぞ考へるのはおよしよ。（肩に懸けた手がおぎんの頬に觸れる）如何したんだい。お前の顔は。火のやうに熱くなつてゐるよ。

おぎん　（うつとりして）若様だつてきつと――

新太郎　若様なんて云つちやいけないつて云つたぢやないか。（唇をおぎんの唇の近くに寄せて）もう外のことは考へつこなしだよ。

（二人は接吻する。稍長い間。下手の襖を開けて信子が入つて來る。四十五歳。細面の瘠せ形の女。手に土藏の鍵を持つてゐる。二人が氣が付かず抱擁してゐる姿を見て驚いて立ち留まる。短い間。直ぐに土藏の入口に往き、わざと烈しく扉を開く響を立てる。）

新太郎　（おぎんより離れて）おや、誰だらう。

おぎん　（信子を認めて）まあ、奥様――

（二人は顔を見合せる。その間に信子は土藏の中に入る。）

新太郎　（少し自棄らしく）關やあしないよ。知れた方がかへつて都合の好いこともあるぢやないか。

おぎん　（落着かぬ様子で）それでも私――

新太郎　（もどかしさうに）何だい。もつとはつきり云はなくつちや分らないよ。關はないから何んでも思つてゐることを云つておしまひよ。

おぎん　（急に歔欷を始めて）もしやお暇でも出るやうなことがあつたら、私何處へ往く所もございませんもの――

新太郎　好いよ、好いよ。心配しずにおいて、おれが惡いやうにはしないから――（二度おぎんの傍へ寄つて抱くやうに）さあ、もう泣くのはおよしよ。

おぎん　ええ。私もうあちらへまゐりますわ。

新太郎　ああ、それぢやあまた後でおいで。ほんとに何も心配することはないよ。

（おぎんは十能を携へて下手の襖へ入る。新太郎はその後を見送つてゐたが、急に氣が付いて土藏の入口の方を凝視する。稍長い間。突然立ち上つて部屋の中を歩き廻る。やがて荒々しく障子を開けて縁側に出で椅子に腰を掛ける。大きな船の帆が玻璃戸の前を過ぎてゆく。）

（土藏の中から信子が出て來る。極めて神經質な顏付となつてゐる。）

（土藏の扉は開かれたるままで手には箱を持つてゐる。）

信子　（新太郎に近寄つて）お前は今日も學校を休んだのかい。

新太郎　（懶さうに）ええ。

信子　そんなに休んでも關はないのかねえ。もうお前が學校を怠け始めてから、かれこれ半年あまりになるよ。

新太郎　さうですね。もうそんなになりますかねえ。

信子　夏休みからずつとなんだもの――あんまり長過ぎるぢやないか。（母親らしき態度）體でも惡いのかい。

新太郎　（不快な顏付）さうですねえ。惡いと云へば惡いし、また惡くないと云へば惡くない――あんまり好くもありませんよ。（急に話頭を轉じて）あのね、おつ母さん。僕はもうこの樣子では、とても家を繼げさうもありませんよ。

信子　（別段に驚きもせず）如何してそんなことを云ふんです。何か譯でもあるのかい。

新太郎　（惧れむやうに信子を見る）譯ですか――それはおつ母さんにはお分りになりますまいよ。唯僕が自然にこんな考を起すやうになつたと思つて下さればそれで好いのです。しかしこんなことはまだ申し上げまいと思つてゐたのですが、今日は丁度云ひ出す機會があつたやうに思ひましたから、つい申し上げてしまつたのでした。

信子　（堪まり兼ねたやうに）お前は――今――（云ひ懸けて止める）

（興奮して椅子より立ち上がる）

新太郎　（歩み出さうとして立ち止まる）何です。

信子　（嚴粛に）私の口からは何にも云ひません。また云へることでもありませんからね。（女らしい臆測をして）何だね――てれ隱しにそんなことを云ひ出して――家を繼がないなんて――（脅かすやうに）待つておゐで、お父う樣にさう申し上げて來るから。

新太郎　（反抗的に）ええ。何時まででも待つてゐますよ。

（新太郎は机の前に坐る。信子が下手に往き懸かる時、

おぎんが下手の襖を開けて出て來る。二人は殆んど突き當りさうになる。）
おぎん　（信子を見ておびえたやうに）あ、奥樣――ご免下さいまし、ついうつかりしてをりまして。
（信子は何とも答へずに下手へ入る。）
おぎん　（賴りなささうに）如何しませう。奥樣は怒つていらつしやるやうですわね。
新太郎　（いぢらしさうにおぎんを見て）心配しなくつても好いよ。おつ母さんは僕に對して怒つてゐるのだから。
おぎん　（心配さうに）あなたに何か仰つたんですか。
新太郎　ううん、何とも。（間）あのことぢやないんだよ。まるで別のことなんだよ。
おぎん　（稍安心して）さうでございますか。（急に氣付いて）まあ、すつかり忘れてしまつて――あの樫村さんがいらつしやいました。こちらへお通し申しましてもよろしうございますか。
新太郎　（眉をひそめて）うん。また醉つてゐやしないかい。
おぎん　いいえ。
新太郎　こつちへお通しよ。
（おぎんは座布團を火鉢の傍に敷いて下手へ入る。大きな船の帆が再び玻璃戸の前を過ぎてゆく。稍長い間）
（おぎんに導かれて樫村虎彦が下手から出て來る。二十五歲。同じく文科大學生。快活だけれども何處となく鬱憂の影がある。色やや黑く短い口髭を生やしてゐる。制服。）
おぎん　（襖の所で樫村に）どうぞこちらへ。
（おぎんは直ぐに下手に入る。）
樫村　（新太郎を見て親しさうに）やあ――
新太郎　（無愛想に）如何したんだ。まだ國へ歸らなかつたのかい。
樫村　（座布團の上に無造作に胡坐をかく）うん。やつぱり東京にゐた方が面白いからなあ。
新太郎　相變らず飲み歩いてゐるのだらうな。それでも君は感心に講義だけは聽きに往つてゐるやうだね。
樫村　それが近頃少し怪しくなつて來たんだよ。君は夏休みからずつと學校へ出ないんだな。身體の具合が惡いつて云つてゐたが、もうすつかり快くなつたかい。
新太郎　まだ駄目さ。かうやつてゐては到底快くなりつこはありやあしないよ。
樫村　さうか。そりやあいけないな。（なつかしさうに）ほんとに暫らく會はなかつたなあ。何時だか一所に句樂を聽きに往つたきりだから、もうかれこれ二月になるよ。
新太郎　さうだね。句樂の氣狂ひが癒つてから席へ出ると

云ふ始めての晩だつたね。僕はあの晩位句樂の話を聴いて變な心持ちになつたことはないよ。人形町の角で君と別れてから、僕は何處を如何歩いたかまるで、分らないで到頭家まで歩いて歸つたのだよ。

樫村　（不思議さうに）何故そんなに變な心持になつたのだらうな。

新太郎　（少し興奮して）そりやあ何故だか自分にも分らなかつたのだ。唯句樂の話を聽いてゐるうちに、何だか堪らなく悲しい心持になつたから、僕は無理に君を引つ張つて外へ出てしまつたのだ。（やや躊躇して）實はあの前の晩にね――

（云ひよどむ。）

（おぎん茶道具と菓子皿を持つて下手から出て來る。おぎんは茶を淹れる。）

樫村　（無意識に）あの前の晩つて云ふと、君と二人で歌舞伎座へ往つた晩だぜ。毎日芝居ばかり見てゐる時分だつたからなあ。

（おぎんは或ることを直覺して顏を赧め、急いで下手へ入る。）

新太郎　（おぎんを目送しながら）さうだ。あの晩なのだ。（急に氣を變へて）しかしこの話は止さう。くだらないことなんだから――

樫村　（微笑して）あんまりくだらなくもなささうだぜ。關はないから話したまへ。

新太郎　それなら話すがね。（稍羞恥を感じながら）僕は或る女と關係してゐるのだが、それに就ていろいろ父やなんかに面倒な問題が起るだらうと思ふんだよ。それで君に相談したいと思つてゐたのだ。實は君にだけ相談しようと思ふのは――

樫村　（突然）それは何時頃からの話なんだい。

新太郎　それがあの君と句樂を聽きに往つた前の晩からのことなんだ。そんなことがあつたものだから、いつもなら何でもない句樂の話を聽いて、何だか氣が狂ひさうな心持になつたんだよ。（再び興奮して）それからそんな心持が幾日も續いたのだ。毎日ぼんやり何にもしずに、まるで夢を見てゐるやうな時ばかり送つてゐたのだ。

樫村　（同じやうに突然）一體その女つて云ふのは誰なんだい。

新太郎　（少し狼狽して）うん。まあそれだけは聽かずにゐてくれ。

樫村　（無邪氣に）當てゝ見ようか。（新太郎と目を見合はせて）それはあのおぎんなんだらう。

新太郎　（ぎくりとして問ひ返すやうに）おぎん――

樫村　うん。あのおぎんさ。あいつはなかなか別嬪だよ。

如何だ。當つたらう。

（快活に笑ふ。）

新太郎　（稍度を失つた形にて）全く君の想ひ通りだ。外の女ならまだ好いが、おぎんだから困つてゐるのだよ。何しろうちの小間使だからね。

樫村　なあにそんなことは關やしないぢやないか。うちの小間使だから惚れちやいけないなんてことがあるかい。馬鹿なことを云つてゐるなあ。君にも似合はない。

新太郎　さう云へばさうだが、僕の親父なんか實に頑固な分らず屋だから。

樫村　親父なんてものはみんな頑固な分らず屋さ。粹な父なんてやつは御維新以來ありやしないよ。（急に眞面目になつて）それで君は僕に如何云ふことを相談したいと云ふのだい。

新太郎　君から父に云つて貰はうと思つたんだよ。

樫村　何を――

新太郎　僕がおぎんと一所になることを許して吳れるやうに――

樫村　（少し呆れて）君はあの女と一所になる氣なのかい（嘲けるやうに）何だ。僕はまた君の相談と云ふのは、あの女と手を切るには如何したら好いだらうと云ふやうな事かと思つてゐたのだよ。

新太郎　（やや反抗的に）僕にはそんなことは出來やしないよ。

樫村　何故――

新太郎　（急に感傷的になつて）僕はあの女と別れてこんな家にゐるよりは、あの女と一所になつてこの家を出てしまひたいと思つてゐるのだ。

樫村　（云ふべき言葉に窮して）さうかな。

新太郎　全く僕は近頃家にゐるのが厭で厭で堪らないのだよ。あの女とこんなになる前からも、僕はどの位家を出ようと思つたか知れやしない。こんな家を繼ぐよりも落語家にでもなつた方が餘つぽど氣が利いてゐるよ。（間）僕はもう學校も止めてしまふつもりなのだ。僕は何時までも無智でゐたいよ。さうした無智な女と一所になつて、一生寂しく暮らしてしまふのだ。

樫村　（きつぱりと）そりやいかんよ。そんなことをして如何するのだ。自分で自分を滅ぼすやうなものぢやないか。

新太郎　さうぢやない。それが僕の生きる唯ひとつの道なのだ。

樫村　如何して――（口早に）小間使と一所になる。學校は止めてしまふ。家を飛び出す――それが何で君が生きる唯ひとつの道なのだい。

新太郎　（苛立たしさうに）　もうこんなことを云ひ合ふのは止さう。到底分りつこはないのだから――（自棄な調子）兎に角僕はあの女と別れたくないのだ。さうして僕は此家にゐたくないのだ。
樫村　（笑つて）　問答無益つて形だね。また馬鹿に惚れてしまつたものだなあ。
新太郎　（沈鬱に）　もう止さうよ、この話は。
樫村　うん。（机の上の原稿紙に目を着けて）　何か書いてゐるのかい。
新太郎　（慌ただしく隱して）　何でもない。つまらない仕事を始めてゐるのだ。
樫村　（思ひ當りし樣子）　君は近頃小說を書いてゐると云ふ噂だがほんとかい。
新太郎　いいや。小說なんぞ書きやあしないよ。
樫村　學校でみんながそんな噂をしてゐたぜ。誰だかその小說の梗概まで話してゐたやつがあつたつけ。何でも句樂のことを書いたものらしかつたよ。
新太郎　句樂のことを書いたものだつて――誰だらうな、そんなことを云つたのは。
樫村　誰だつたかな。（間）　ああ、君の所へは句樂はやつぱりちよいちよいやつて來るかい。
新太郎　うん、時々來るよ。
樫村　やつぱり元の家に住まつてゐるのかい。
新太郎　ああ、馬道八丁目さ。何時か君と一所に往つたことがあつたつけなあ。
樫村　氣狂ひはもうすつかり癒つたかね。
新太郎　もうすつかり快いやうだね。しかし相變らず譯の分らないことを饒舌つてばかりゐるよ。
樫村　（新太郎の顏を凝視しながら）　君は近頃大分句樂にかぶれて來たね。考へることなんか大抵句樂が考へさうなことばかりだ。君は自分で分らないかも知れないが、僕はちやんと分つてゐるよ。
樫村　（考へて）　そんなことはないよ。
おぎん　（新太郎に）　あの句樂さんがまゐりましたよ。
（おぎん下手より出で來る。）
新太郎　ああ、關はないからこつちへお通し。（樫村に）やつて來たぜ、句樂が。
樫村　何か面白い話でも聽かせないかな。
（おぎんはこの間に下手へ入る。）
新太郎　（机の上の葉書を取つて）　君はまた引つ越したんだね。瓦町だなんて洒落た所ぢやないか。
樫村　うん。あんまり洒落てもゐないよ。今度遊びにやつて來たまへ。久しぶりで一度飲まうよ。
新太郎　僕はまるで飲めなくなつたからなあ。

樫村　おや、おや、酒が飲めなくなつたとは頼もしくないやつだなあ。

（落語家の俳諧亭句樂が下手から出て來る。五十六歳。十五六日程前に剃つた頭には短い白髮が生えて、髯も疎らに延びてゐる。皮肉な容貌。）

新太郎　（樫村に）酒の飲めるやつがやつて來たが、この人なら頼もしいだらう。

句樂　何ですい、若旦那。不意討ちを食はしちやいけませんぜ。

樫村　何でもないんだよ。句樂さん。

句樂　さうですか。（新太郎に）ご免下さいまし。（坐つて）今日はね。あなた――何しろ雪模樣で寒くつて堪らねえんでせう。一つ風呂を浴びて溫まらうと思つて家を出たんですが、急に若旦那にお目に懸りたくなつてやつて來たんですよ。ご覽なさいまし。手拭と石鹼の箱を懷に入れたままさ。（懷から出して傍に置く）

新太郎　相變らず飄然としてゐるね。

（おぎん下手から出で來て茶などついで入る。）

句樂　ねえ、若旦那。實は私に分らねえことがあるんですがね。昨日からそれが氣になつて堪らねえんでさあ。それで今日あなたに伺つたら分るだらうと思つてやつて來たんですが――

新太郎　何だい、その分らないことつて云ふのは。

句樂　それがさ。全くつまらねえことなんですよ。（間）私には人間つてものが何故生きてゐるんだか分らねえ。こいつが如何も昨夜から馬鹿に氣になつて仕方がねえんです。昨夜一晩寢ずに考へましたがね。しかし如何しても分らねえ。

樫村　こいつは、句樂さん、大變なことを云ひ出したね。

新太郎　（笑つて）それを聽きにおれの所へやつて來たのかい。そいつはおれにも分らないなあ。

句樂　さうですかね。私はこちらに伺つたら大抵分ると思つたんだが――（獨語するやうに）人間は何故生きてゐる――たつたこれだけのことなんだが、如何してもおれにや分らねえ。

新太郎　何だい。そんなことを考へてゐたつて仕方がないやね。何か近頃面白い話はないかい。

句樂　さうですなあ。あなたにはもう大抵話してしまつたからね。（煙草入を出して）うん。あなたはまだこの話は知らないね。（煙草を吸ひながら饒舌り續ける）ええと――昨日――一昨日――さき一昨日の晩の話さ。私は不思議な夢を見たんでさあ。まあ、その夢の話からしなくちや分らねえから夢の話をちよつとしますがね。何でも始めは品川のお臺場らしいんですよ。私はたつた一

人でぼんやり海を見ながら考へてゐるんだが、その考へてゐることがをかしいやね。他のことは何にも考へずに唯酒が飲みてえとそればつかり考へてゐるのさ。こんな所にゐたつて仕方がねえから、早く家へ歸りてえと思ふけれども一隻も舟が通らねえ。そのうち日がだんだん暮れて來やがつたから、こいつは困つたなあと思つてゐると、そこへ通り懸つた一隻の小舟がある。舟の中を見るとこいつが大變だ。若い男と女がたつた二人乘つてゐて、抱き合つたまゝ泣いてゐる樣子なんだね。はてな心中でもするんぢやねえかと思つたから聲を懸けると、ひよいと顔を上げた男が——若旦那、あなたなのさ。それからその舟に乘つていろいろ譯を聽いてみるとやつぱり心中をしに往くところだつたんだが、その女つて云ふのが面白い。それが死んだ田之助なんでさあ。何でもその舟を永代の橋袂に着けて、陸へ上つたと思つた時に夢が覺めてしまつたが、それからと云ふものは、如何もその夢が氣になつてならねえんです。それでまあ家にゐてもつまらねえからつて云ふんで、品川にゐる友達の所へ往つて見たが、少し話してゐるうちにそいつが、句樂さん、品川心中つて話があるが、今朝はそいつのほんものを見たぜつて云ふんでせう。何處でと聽くと私は全く驚きましたね。若い男と女とが抱き合つたまま死んでゐるのを乘せた舟が、崩れ臺場に流れ着いたんだつて云ふぢやありませんか。それからいろんなことを考へた揚句、人間は何故生きてゐるんだか分らねえと云ふことになつたのさ。（突然立ち上つて）さうだ。かうやつちあゐられねえ。若旦那。また伺ひます。

（句樂は煙草入を置き忘れたまま下手へ入る。）

樫村　まだ餘つ程をかしいね。

新太郎　（何ごとか考へてゐる）うん。

樫村　（時計を見る）おや、十一時だ。僕はもう失敬するよ。

新太郎　さうか。まだ好いぢやないか。

樫村　ちよつと家に來るやつがあるから。

新太郎　それぢや强ひて留めないよ。

樫村　（微笑しながら）まあ、さつきの家を飛び出すなんて話は、よく考へてからのことにした方が好いぜ。（立ち上る）

新太郎　（立ち上りながら）うん。

（樫村は下手へ入る。新太郎も續いて下手へ入る。舞臺空虛。やや長い間。庭を掃く下男の姿玻璃戸の向うに見える。）

（信子とおぎんが下手から出て來る。おぎんは箱を持つてゐる。二人は土藏の中に入る。新太郎下手から出

て來る。机の前に坐る。信子土藏から出て來る。おぎんも續く。）
信子　（おぎんに鍵を渡して）ちやんと閉めておゐで。（立つたまゝ）新太郎――新太郎――ちよつと――
新太郎　何です。何かご用ですか。
信子　今來てゐた變な坊さんはありやあ何だい。近頃よく來るやうだけれど――
新太郎　ありやあ句樂つて落語家ですよ。
信子　（驚いた樣子）落語家――まあ、如何してそんな藝人見たいなものと附き合ふのだね。
（おぎんは土藏の扉を閉めて、急に歔欷をしながら話を聽いてゐる。）
新太郎　（信子の言葉には答へずに）お父つあんはまだお歸りになりませんか。
信子　もうお歸りになるだらうと思ふけれど――何か用があるのかい。
新太郎　ええ。ちよつと申し上げなくてはならないことがあるのです。
信子　私で分ることなら今聽かうぢやないか。
新太郎　さうですねえ。お母さんでも好い。（僅かに顏色を動かす）實は私はおぎんと一所にして頂きたいと思ふんですが――

信子　（冷笑するやうに）馬鹿なことをお云ひでない。あれはうちの小間使ぢやないか。
新太郎　そんなことは分つてゐますよ。しかし小間使だからいけないなんて、そんな馬鹿なことはないでせう。
信子　それもさうだけれど――しかしおぎんには今もう暇をやつたよ。さうして直ぐ出て往くやうに云つて置いたよ。
新太郎　（冷やかに）それが如何したんです。そんなことは何でもないぢやありませんか。おぎんが出て行けば僕も一所に出て行きます。
信子　（呆れて）まあ、何をお前は云ふのだい。よく氣を落ち着けて考へた上で、お父う樣とも御相談したら好いだらう。
（信子はおぎんに氣付かず下手へ入る。おぎんは直ぐ新太郎の傍に來る。）
おぎん　（涙をこぼして）急にお暇が出てしまひました。あのことが知れたからでございませうね。
（火鉢の傍に坐る。）
新太郎　そりやあさうだよ。そのこと何とも云はれなかつたかい。
おぎん　ええ。何とも――直ぐ出て往つて呉れつておつしやつたのでございますよ。（縋るやうに）私如何したら

好うございませう。これからはもう今までのやうにお目に懸ることは出來ないのでございませうね。

新太郎　(惑つて)　さうだねえ、お前はこれから往く所つて云ふと、何時か話してゐた叔母さんの家しかないんだらう。

おぎん　私もうあの叔母の家へ往く氣はないのでございます。往つたところでろくなことはございませんもの――(急に聲を立てて泣き出す)　きつとお妾かなんかにされてしまひます。きつとさうされるに極つてゐます。

新太郎　(おぎんの傍に擦り寄つて)　泣くのはおよし。もし誰か來るといけないから――

おぎん　ええ。だけど私何だか心細くつて仕方がございませんわ。これから先き如何なることやら――自分で自分の身の上が分らないのですもの――

新太郎　(興奮しながら慰めて)　心配しずにおゐで、心配しずにおゐで。おれはお前のためにはどんなことでもするつもりだから――(おぎんの手を取る)　ね、これからどんなことがあつても、おれが附いてゐると思つて安心しておゐでよ。

おぎん　(頷きながら涙を拭ふ)　ええ。

新太郎　(熱情をこめて)　しかしこれからはお前もずゐぶん苦勞しなくつてはならないと思ふよ。おれだつて今までのやうに呑氣にはしてゐられないだらう――ほんとに何時でも二人つきりでゐられる所へ往きたいね。さうして死ぬまでさう云ふ所でたつた二人で暮らしたいね。

おぎん　(喜ばしさうに)　さう云ふことが出來たらほんとに嬉しうございますねえ。

新太郎　出來るも出來ないもないぢやないか。二人でさうしようと思へば、何時でも出來るよ。

おぎん　(恍惚として)　ほんとにさう云ふことが出來ませうか。

新太郎　(おぎんの手を堅く握り締めて)　ああ、出來るとも――おれはもうお前がゐなくなれば家にはゐないよ。二人で何處かに家を持たうよ。ね、お前とおれとたつた二人で――(おぎんを引き寄せて)　厭かい、――厭ぢやないだらう――さあ何とか返事をおしな。

おぎん　(新太郎に靠れ懸つて)　私もう――さうなりや死んでも關ひませんわ――

(二人は接吻をする。長い間。)

新太郎　(醉つたやうに)　さあ、如何しようね。これから――

おぎん　(半目を閉ぢたまま)　私は如何ともあなたのおつしやる通りになりますわ。

新太郎　(おぎんの傍を離れて机の前に來る)　それぢやあ

ね。おれが手紙を書いてやるから、句樂の家へ往つてゐないか。

おぎん　（稍不安を感じて）　まあ、あんな人の所へ――

新太郎　さうすりやあ直ぐ後からおれも往くよ。

おぎん　あなたが直に來て下さるなら好うございますけれど――ほんとに直ぐ來て下さいますか。

新太郎　ああ、直ぐ往くとも。（机に向つて）　ちよつとお待ち。今手紙を書いてやるから――（手紙を書く）

おぎん　（傍から）　あの人の家はたしか馬道でございましたね。

新太郎　ああ、大抵分るだらう。番地を聽いて往けば――

おぎん　ええ。しかしなるべく早く來て下さいましな。

新太郎　大丈夫だよ。安心しておゐでよ。（書き終つて）さあ、これを持つておゐで。（手紙をおぎんに渡す）

おぎん　（急に悲しさうに）　何だか今お別れしてしまふとお目に懸れないやうな氣がして、急に情なくなつてまゐりましたわ。（寂しさうに笑つて）　全く私は馬鹿でございますわねえ。こんなつまらないことを考へるなんて――

新太郎　（同じ心持の中に引き込まれて）　何だかかうなると悲しいやうな氣もするね。（やはり寂しさうに笑つて）しかしこれからは嬉しいことばかりだから好い。おれはお前と一所にゐられるなら何もかもみんな棄ててしまつても關はないよ。家も、財産も、親も、友達も――。

おぎん　（新太郎の傍に寄つて）　どうぞ見棄てないで――何時までも――何時までも――　（頬は新太郎の頬に近づく）

新太郎　（おぎんを抱き締めて）　お前もだよ――お前もだよ――（熱して）　もう如何なつたつて關やあしない。お前のためなら死んでも好い。

おぎん　（喘ぐやうに）　私も――私も――

（おぎんの帶に挾んであつた土藏の鍵突然疊の上に落ちる。二人はその音に驚いて離れる。）

新太郎　何だい。

おぎん　（鍵を拾ひ上げて）　奥樣からお預り申した土藏の鍵でございますよ。

新太郎　何だ。そんなものは何處かそこいらに投り出して置けば澤山だ。（句樂の忘れて往つた煙草入を指差して）それよりも句樂が忘れて往つたその煙草入を、早く持つて往つて渡しておやりよ。

（おぎんは立つて煙草入を取り上げる。二人は顏を見合はせて寂しさうに笑ふ。）

（玻璃戸の向うを大きな船の帆が續いて過ぎてゆく。靜かに幕。）

第二幕

淺草馬道の路次の奥にある句樂の家。

上手に句樂の家がある。路次は上手に通ずるものと、正面の奥に通ずるものと二つあつて、句樂の家の前で相交る。路次と路次との間に長屋の一部が現はれてゐる。句樂の家と向ひ合つて清元の師匠の延美津の家がある。

句樂の家は、路次に向つて格子戸がある。極めて狹い土間。格子戸と並んで觀客から遠い方に臺所の障子。六疊と三疊の二間、正面は壁と押入。壁の前に本箱二個。その蓋には「軍書」と「俳書」と記してある。押入の前には芝居の番附などを貼つた古い枕屛風がある柱には發句を書いた短册が懸けてある。上手は障子、その外には狹い空地があつて壞れた箱庭や植木鉢などが散亂してゐる。

第一幕と同じ日の午後三時頃。雪を催した空模樣。

句樂は褞袍を着て安火に當りながら、しきりに句を案じてゐる。傍に硯箱煙草盆などがある。時々獨語しては紙に句を書き付ける。延美津の家からは三味線の音が聽えてゐる。

句樂　(筆を取り上げて)　ええと――道樂に身を持ちくづす春の風――(首を傾けて)　如何も何だか落ち着かねえな。成程こいつあ句樂が作りさうな句だと思はれなくつちやあつまらねえからなあ。(筆を置いて)　道樂だけを生かして置いて――道樂をみなしつくして――ぢやあ秋の風だなあ。(錆びた聲で笑ふ)

おとしの聲　(臺所から)　何を一人で笑つてゐるんだい。氣味の惡い――

句樂　默つてろい。今名句が出來さうなんぢやねえか。(再び筆を取り上げて)　ええと――道樂を人のほむるや春の風――(喜ばしさうに)　うめへ、うめへ、こいつあいい句だ。(紙にその句を書き付ける)

おとしの聲　兄さん、兄さん。

句樂　(懶うさうに)　何でえ。

おとしの聲　さつき兄さんが留守のうちにね、お向うの延美津さんの家で大騷ぎがあつたんだよ。

句樂　(急に顏を上げて)　さうか。如何したのよ。(心配さうに)　えゝ、おとし、一體その騷ぎつて云ふのは如何したのよ。

(おとし下手の障子を開けて出て來る。三十四歲。女郎上りの女。殆んど絕間なく悲しさうな表情ばかりするけれども、時々嘲けるやうに笑ふことがある。袢纏前垂。)

おとし　（句樂の前に坐つて）　さうねえ。兄さんが出て行つてから間もなくのことなんだよ。家の前を變な田舍者らしい男がうろうろしてゐたが、延美津さんの聲をぢつと聽いてゐるやうな樣子なんだよ。さうだ。丁度煙草屋のおはつつて娘が習つてゐる時だつたよ。私も變な奴だと思つてゐるうちに、そいつがいきなり格子を開けて延美津さんの家へ飛び込んで往つたものなのさ。

句樂　ふうん、何でえ、そいつは。

おとし　何だかいまだに分らないんだよ。何でも話の樣子では、延美津さんが北海道で藝者をしてゐた時分に、世話にでもなつた男らしいのだが、それにしてもひどい姿をしてゐるのさ。きつと好い所の息子だつたのが零落れてあんなになつたのだと私は思ふよ。

句樂　さうしてそれからどんな騷ぎがあつたんだ。

おとし　何だか知らないが、いきなり延美津さんを蹴倒しでもしたらしいのだね。家の中がまるで引つくり返るやうな騷ぎなんだらう。私はもう延美津さんは殺されでもしたことと思つたの。（安火に手を溫めながら）　ほんとに怖かつたよ。兄さん。

句樂　（熱心に）　それから如何したのよ。

おとし　それからばつたり靜かになつてしまつたが、おはつちやんが眞つ靑な顏をして出て來たから、如何したんだつて聽いたけれど、默つてゐて如何しても話をしないのだよ。

句樂　しかしもうああやつて稽古をしてゐるぢやねえか。

おとし　ああ、自分ぢや何とも思つてゐないのかも知れないよ。

句樂　その男は如何したい。

おとし　何處かへ往つてしまつたやうだつたよ。さんざんいろんなことを云つてゐたやうだつたけれど、――（句樂の顏を見て笑ふ）　厭だよ、兄さんは。お前 延美津さんに惚れてゐるんだね。

句樂　（少し狼狽して）　笑談云つちやいけねえ。そんなこたあありやしねえよ。

おとし　（嘲けるやうに）　惚れてゐるなら取り持つて上げようか。

句樂　（眞面目に）　馬鹿あ云ふねえ。（間）　しかし、あの延美津さんは死んだ紫君によく似てゐるぜ。

おとし　（氣味惡さうに）　さうかい。

句樂　（悲しさうに）　もう紫君が死んでから三年になるなあ。（稍狂はしい調子で）　あいつの所へは三年も通つたんだ。煩ひ付いてたつた二晩で死んぢまつたんだから、夢のやうな氣がするのも無理はねえだらう。しかし如何しても忘れられねえよ。今でもまだ生きてゐるやうな氣

がして、ふらふらと家を出懸けたくなることがあるからなあ。
おとし　（わざと戯れのやうに）兄さん。昔の情婦ののろけなんざおよしよ。
（三味線の音が止む。おぎんが正面の路次から出て來る。着物を着替へて、風呂敷包を持つてゐる。逡巡ひながら佇んでゐる。）
句樂　（寒さうに身顫ひをして）三味線の音が止むと急にひつそりしてしまひやがるな。如何もくさくさして氣が滅入つていけねえ。おとし、まだ酒を飲んぢやいけねえかな。
おとし　いけないよ。また病氣が起ると大變ぢやないか。それにお錢だつてありやあしないよ。
句樂　さうよなあ、席を休んでから半年になるからなあ。病院を出てから十日つきやあ稼がねえ。
（句樂は安火に寄懸つて考へ込む。延美津の家からおはつが出て來る。十五位の娘。）
おぎん　（おはつに）句樂さんて人のお宅はこのご近所でございますか。
おはつ　（不思議さうにおぎんを見て）句樂つて落語家さんでせう。
おぎん　ええ。さうですよ。
おはつ　それぢやあそこの家ですよ。（句樂の家を指す）
おぎん　ああ、さうですか。如何も難有う。
（おはつは正面の路次へ入る。おぎんは句樂の家の前に立つ。）
おぎん　ご免下さいまし。
おとし　（聽き付けて）どなた――（立つて障子を開ける）
おぎん　（極り惡さうに）あの――この手紙を持つてまゐりましたが――（手紙をおとしに渡す）
おとし　手紙を――あなたはどなたで――
句樂　何でえ、手紙か。早く見せろよ。（おとしから手紙を受取つて）何だ。山崎さんの若旦那からなんちやねえか。（開いて讀む）
おとし　（おぎんに）まあ、どうぞお入りなさいましよ。
おぎん　（ためらつて）ええ――
句樂　（快活に笑ふ）こいつあ洒落れてゐらあ。（おぎんに）まあ、どうぞこつちへお上んなさい。（おとしに）おい、おとし。ぼんやり立つてゐずに、何とか云つて上げねえな。
おぎん　いいえ。もう私はここで澤山でございます。
句樂　笑談云つちやいけねえ。この寒空にそんなところに何時まで立つてゐられるものぢやあねえ。
おとし　さあ、どうぞこつちへお上んなさいましよ。

（おぎんは家の中に入つて座敷の片隅に坐る。句樂は喜ばしさうにおぎんの姿を眺める。）

句樂　（半ばおぎんに、半ば獨語のやうに）さぞ嬉しいだらうなあ。おれも昔こんなことがあつたが、今でも時々思ひ出すよ。やつぱりこんな雪もよひの日だつけ――家を逃げ出して、女と一所に長崎三界まで往つたのだが――あれから二人でずゐぶん苦勞をしたつけなあ。

おとし　兄さん。何を云つてゐるのだね。

句樂　おれはこんなことに出會はすと嬉しくて堪らねえんのだ。

おとし　（訝しさうに）こんなことつて――

句樂　うん、お前にはまだ話さなかつたな。若旦那から女と二人何處かに匿まつて置いて呉れつてお賴みなのよ。好い氣持ぢやねえか。惚れた若い者同志を見てゐると、おれはもう堪らなく嬉しくなるね。なあ、おとし。何處かに二階でも貸す家はねえかな。

おとし　だつてそんなことがお宅へ知れたら大變だらう。

句樂　なあに關ふものかな。惚れた同志で一所になるのに何も不思議なことあねえぢやねえか。何處かこの近所を聽いて見て呉れねえか。

おとし　ああ。

（おとしは不性無性に勝手から出てゆく。殆んど同時に延美津が出て來る。三十歲位の凄艷な女。頰に傷痕がある。二人顏を見合せて挨拶する。）

延美津　如何も先き程は――あんな馬鹿がやつて來たものですから。

おとし　それでも怪我なんぞしなくつて好かつたわね。何處へ往くの。

延美津　聖天樣へお詣りに往かうと思つてゐるの。そこまで一所に往きませう。

おとし　聖天樣ならこつちの方が近いでせう。

（雪が降り出す。）

延美津　おや、到頭降り出して來た。

おとし　そんなにひどいことはないだらうけれど――兎に角傘がなくちややりきれないわ。

（二人は傘を取りに家に戻つて。何ごとか囁き合ひながら下手の路次へ入る。この間におぎんは風呂敷包の中から句樂の置き忘れた煙草入を取り出す。句樂は延美津の聲が聽こえなくなると同時に、ぢつと悲しさうに考へ込んで何ごとか思ひ出してゐる樣子。）

おぎん　句樂さん、これがさつき置き忘れてあつたのでございますよ。

句樂　（顏を上げて）ええ、何ですつて――（氣が付く）あゝ、如何もこれは――

おぎん（心配さうに）もういらつしやりさうなもんですがねえ。
句樂　何も心配しなさるこたあありませんよ。もう直きおゐでになるでせう。（感傷的になつて）何もそんなに心細がらなくつても好いやね。そりやあさうやつて一人で待つてゐる間と云ふものは、ずゐぶん情ないやうな氣もするだらうが、それがまた樂しみなものだ。おれのやうな年になつちあもうそんな心持になれやしねえ。たとへ惚れた女があつてものことだ。昔の女に似てゐるとか何とか云つて、やつぱり昔の夢を繰り返へさうとするのが、せめてもの樂しみなのだからなあ。
おぎん（何の氣なしに）昔の夢つてどんな夢なんですの。
句樂（この言葉を聽いて喜ばしさうに）そんなことを聽いて呉れるやつは、今日まで一人だつてありやあしねえ。おれは嬉しいよ。おぎんさん。ほんとに、嬉しい——堪らなく嬉しいや。（涙をこぼして）お前さんはおれの昔の夢の話を聽いて呉れるかい。
おぎん　ええ、聽くわ。話して下さいな。（急に驚いて）まあ、泣いてゐるのね。
句樂（突然笑ひ出して）はははは、昔の夢はどんな夢か。しかし待てよ。よく思ひ出さなくちや分らねえぞ。（沈默して考へ込む）さうだ。やつぱり始めは藥研堀の質屋の姿が殺された晩のことからだな。
おぎん（氣味惡さうに）何なの、一體その話は。
句樂　まあ默つて聽いてゐねえ。（怖ろしさうに）因緣と云ふものは怖ろしいものだぜ。その姿つて云ふのが、おれの眞實のおつ母さんで、おれが十四の時に殺されてしまつたんだが、それにもう一人娘があつて、それが後で鳥追お松になるのよ。（考へて）少し變だな。いけねえ、いけねえ、さうぢやねえ。何よ、それ——紫君がまだ店へ出たばつかりのことなんだ。
（句樂は最後の言葉を言ひ終つてから、ぼんやり何處となく凝視してゐる。おぎんは驚いてぢつと句樂の顏を見る。）
おぎん　もう好いわ、昔の夢の話は。
句樂（悲しさうに）もう昔の夢の話も忘れてしまつたよ。やつぱり山崎の若旦那位の時分だらう。もうかれこれ三十年も前のことだからなあ。おれは今までに駈落を三度したが、忘れられねえのはその中の一度だけだな。それが昔の夢の話なんだが、今日はもう話すのは止さうよ。聽いて呉れるのは嬉しいが、如何もまだすつかり思ひ出されなくつていけねえ。まだ體が惡いのかなあ。
おぎん　關はないから横になつてお寢みなさいよ。
句樂　なあに寢るにも及ばねえよ。

（新太郎が正面の路次から出て來る。外套。中折。句樂の家の前に來る。）

新太郎　（格子戸を無造作に開けて）　句樂さんは家かい。

句樂　若旦那ですか。さあ、お上んなさい。さつきからお待ち兼ねてすぜ。

新太郎　（座敷に上る）　如何も飛んだことを頼んぢやつて――

句樂　なあに飛んだことどころか――早速おとしを捜しにやりましたがね。二階か何かの方が好いだらうと思つてさう云ふことにして置きました。

新太郎　（坐る）　そりやあ如何も有難う。（寂しさうな調子）　しかしね、句樂さん。かうなつて見ると、おれも到頭君達のお仲間入りをしたやうな氣がして、何だか寂しいやうな心持もするよ。

句樂　（新太郎の言葉の意味がよく分らずに）　私達の仲間つて――。

新太郎　世間から見離された人達さ。さうしてまたこつちから世間を見離した人達さ。

句樂　（笑つて）　私なんぞはもつとひでえや。世間なんてまるでねえもんと思つてゐるんだからね。結句その方が幸福さね。

新太郎　お前さんでも幸福なんてことを考へるかい。

句樂　それやあ考へまさあね。だがね、若旦那、幸福なんてものは惡い酒のやうなものですぜ。醉つてる間は好い心持だが、覺めた後ぢやあきつと頭が痛みまさあ。

（二人は笑ふ。雪は次第に烈しくなる。）

新太郎　句樂さん。今日はまるで酒の氣がなささうだね。

句樂　ええ、飲みてえんですが、席を休んでゐるものですから――

新太郎　おい、おぎん。ちよつと酒を買つて來て呉れないか。（おぎんに金を渡す）

おぎん　酒屋はどこにあるんでせう。

句樂　なあにもうおとしが歸へつて來ますから、あいつを使ひにやりませうよ。

おぎん　いいえ。私が往つて來ますからよござんすよ。

句樂　さうですか。そいつは恐れ入りますな。酒屋はこの路次を出ると直ぐ向う側ですよ。

新太郎　（おぎんに）　おれの傘がそこにあるよ。

（おぎんは下手の路次へ入る。）

新太郎　句樂さん。何時だかお前の云つてゐた通り、到頭家を飛び出すことになつてしまつたよ。

句樂　いや、全く好いことをしましたよ。若いうちに一度位家を飛び出さないやうな男は駄目ですよ。家を飛び出してご覽なさい。これからはあなたの自由ぢやありませ

んか。しかしお宅ぢやさぞ驚いておゐでゝせうな。

新太郎　さうでもあるまいよ。結句好いことにしてゐるのかも知れない。（句樂の顏を凝視する）句樂さん。一體お前さんのあの病氣は、もうすつかり快くなつたのかい。

句樂　（ぎつくりして）ええ。もう大抵快くなつたと思ひますがね。しかし時々頭の中に泥が一杯詰まつてゐるやうな心持のすることがありますよ。

新太郎　何時だつけかなあ、あの病氣が起つたのは。

句樂　さうさね。去年の春時分から餘つ程怪しかつたのだが、ほんとに惡くなつたのは八月の末でしたかな。丁度その時は若竹に出てゐて、それから兩國の立花へ廻らなけりやあならなかつたのでしたが。電車に乘つてゆく途中で――さうさ、須田町を出て間もなくのことでしたよ――ふいと私の隣を見ると、死んだと思つた紫君が腰を懸けてゐるぢやありませんか。（急に話を止めて）この話はもうあなたには話してしまひましたかね。

新太郎　いいえ。まだ聽かないよ。紫君の話だけは聽いたけれど――。

句樂　それぢやあまあ聽いて下さいまし。（殆んど呼吸も吐かずに話す）それでもうその時は餘つ程如何かしてゐたのですね。紫君が死んだつてことは氣が付きません。會つたのが嬉しくつて、お前は何處へ往くんだつて云ふと、あなたの後を追つ懸けて來たつて云ふんでせう。それなら電車の中で話も出來ねえから、何處かで酒でも飲みながら話さうと云ふので、淺草橋あたりで電車を降りたとお思ひなせえ。誰もゐやしねえんだが、こつちは女と一所に歩いてゐる氣ですから、句樂だつて情婦を連れて歩くことはあらあつて顏付をして、如何でえ久しく會はなかつたな、病氣だつて話だがもうすつかり快いのかなんて云ひながら、何でも廣小路の近所の鳥屋へ上つたんですよ。さうして酒を飲まうとすると杯が一つしかない。姉さんお客は二人だぜつて云ふと、ご笑談をつて云つたきりまるで相手にしませんや。仕方がねえから一つの杯を遣り取りして――その實一人で飲んでゐるんですが――いろんなことを話してゐる。これだつて一人で何か饒舌つてゐたんですね。もうかうなると女中も何も出て來やしません。そいつがね、今考へて見てもをかしいのは、私の前に坐つてゐる紫君の姿つてものが、すつかり華魁の姿をしてゐるんでせう。頭を紫天神か何かに結つて、裲襠を着てゐるんだから面白いやね。

新太郎　つまりそんな幻が見えたんだね。

句樂　（眞面目に）いいえ、幻ぢやあねえんです。たしかにそこにゐたんですからな。それから家へ歸へつて來てふいと傍を見ると今までゐたと思つた紫君の姿が見えね

えんでせう。私はその時程がつかりしたことはありませんね。それから家を飛び出して、吉原へ往つて見るともう大引け過ぎです。蓬萊屋を敲き起して紫君に會はせろつて云つて聽かなかつたさうですが、何時の間にか酒に醉つぱらつて寢てしまつたものと見えますね。目を覺すともう曉の光が欄間の所へ差してゐて、名代部屋にたつた一人で寢てゐるんです。咽喉が乾いてゐたので水を吞まうと思つて、枕元に置いてあつた水差に手を懸けようとすると——如何です、そいつが口をきくぢやありませんか。

新太郎　大分怪談噺になつて來たね。

句樂　句樂さん、あんまり酒を飮むのはおよしよ。毒だよつてその水差が云ふのですよ。さうしてその聲がやつぱり紫君の聲なんです。何だかその聲を聽くと急に悲しくなつて來て、涙がぼろぼろこぼれてまるで留め度がねえんです。さうしてしまひには聲を立てて泣き出しました。驚いたのはここへ入つて來た華魁さね。私はみんなが留めるのも聽かずに外へ飛び出してしまつたが、さて何處へ往くと云ふ處もねえんでせう。そのうちやつて來たのが代地河岸なんです。柳橋を渡らうとするとまるで黑山のやうな人でさあ。何だつて傍の人に聽いて見ると、華魁の身投げだつて云ふんです。さうするとそこでひよつくり出會つたのが先代の談州樓燕枝さ。これが私の耳の傍へ口を寄せて驚いちやあいけねえ、紫君が身を投げたんだぜつて云ふんでせう。私は思はず人を搔き分けて前の方へ出て往きましたね。さうするとこれがまたをかしいやね。そこに並んでゐるのがみんな社杯を着たお役人ばかりなんでさあ。傍にゐる人達が私をつかまへて、うつかりあすこに往つちやあいけねえ、あすこにゐるのは幽靈のお役人ばかりなんだからつて云つたんですが、そんなことに關つてはゐられませんや。いきなり飛び出して往つて紫君の死骸に縋り着いて、おいおい聲を立てて泣いたもんです。それから後はまるで夢中でさあ。田端の氣狂ひ病院にゐる間紫君のことばかり云ひ續けてゐたんださうですよ。

新太郎　僕の一番始めに往つた時なんぞはかなりひどかつたね。すつかり白井左近になつてゐて人相を見てやるつて云つて困つたぜ。

句樂　（笑ふ）ははは、さうでしたかな。もう大丈夫です。

（おぎんが下手の路次から出て來る。家の中に入る。

雪がやや積る。）

おぎん　如何もおそくなりました。（臺所に往つて）おや、まるで火種がありませんね。

句樂　お燗を付けて下さるんですか。恐れ入りますな。（安

火を押し遣つて）　ここに種がありますよ。

おぎん　（安火を臺所に運ぶ）まあ、哀れな火種だこと―。

句樂　（おぎんの後姿を見送つて）　若旦那。可愛がつてやんなさいよ。こんなおとなしい子は今時あんまりありませんよ。

新太郎　（笑つて）　馬鹿あ云つてる。（間）　おとしさんは如何したんだい。大變おそいやうだね。

句樂　さうさね。あん畜生、何をしてゐやがるのか。しかしもう歸つて來ませうよ。（上手の障子を開けて）やあ、雪が大分積りましたぜ。

（沈默。雪の降る音が微かに聽こえる。）

新太郎　靜かだねえ。

句樂　（溜息を吐く）　ええ、こんな時は如何も氣が滅入つていけませんや。

新太郎　それにさつきの話で、また紫君のことでも思ひ出したのぢやないかい。

句樂　（悲しさうに笑つて）　ええ、すつかり思ひ出してしまひましたよ。始めて會つたのが丁度こんな雪の降る日でね。お客に連れられて童遊びに往つたのが病み付きさ。

（おぎんに）　まだお燗は付きませんかね。

おぎんの聲　まだ少し溫いかも知れないけれど―。

（おぎんは膳と德利とを持つて出て來る。）

句樂　（喜ばしさうに）　こりやあ有難てえ。久しぶりの酒だ。（杯を新太郎に差す）　さあ、まあ、若旦那一杯。

（新太郎の杯におぎんは酒をつぐ。）

新太郎　（おぎんに）おい、句樂さんにお酌をしておやりよ。

おぎん　ええ。（杯を句樂に差して酒をつぐ）

句樂　（酒を飲んで）　有難てえ。何だか昔の夢を見てゐるやうな氣がしますよ。（突然杯を置いて）　いけねえ、いけねえ、昔の夢なんてことを考へると―（戰慄して）それ、またあの病院へ―あの眞つ靑な病院へ往かなくちやならねえ。

新太郎　（驚いて）　如何したんだい、句樂さん、

句樂　いいえ、何でもねえんです。（寂しさうに）　若い時分に。私が女と駈落をして長崎へ往つたことがあるんですよ。その時私もずゐぶん惡いことをした盛りでしたからね。女を稻佐の女郎に敲き賣つて、その金を旅費にして東京へ歸つて來たんでさあ。それが不思議ぢやありませんか。あの田端の病院が稻佐のその女を賣つた家にそつくりなんですよ。（間）　さうさうさつきおぎんさんに昔の夢の話をしようと思つたが、如何しても思ひ出されねえで止めちまつたのでしたよ。（おぎんに）　やつと思ひ出すことは思ひ出したが、今度は何だか話すのが怖くつて仕方がねえ。

おぎん　(また氣味が惡るさうに)　もう好いわ。さあ、お酌をしませうね。
句樂　(杯を取り上げて)　これは如何も濟みません。(新太郎に)　醫者からは酒を飮むなつて云はれてゐるんですが、如何もこればかりは止められませんよ。しかし退院して二月やらなかつたのですから、もうやつても好いでせう。
新太郎　しかしあんまり飮まない方が好いぜ。
句樂　ええ。前見てえにはやりませんよ。
(おとしが正面の路次から出て來る。直ぐ家の中に入る。)
おとし　(新太郎に)　おや、若旦那。お出でなさいまし。(句樂に)　兄さん、お酒を飮んでゐるね。お醫者にあれ程止められてゐる癖に。
句樂　何云つてやがるんでえ。鬪ふもんか。惡くなりやあ惡くなつた時よ。
新太郎　(困つて)　おれが酒を買ひにやつたんだが、惡いことをしたね。
句樂　なあに大丈夫ですよ。何もご心配なさるにや及びませんや。(おとしに)　まあ、そんなことよりも肝腎の二階は如何したんだ。
おとし　方々捜したんだが、中々好い所がないんだよ。おはつやんの所の二階がまあ一番好ささうだからあすこに極めて來たんだよ。
新太郎　何處だつて好いよ。それぢやあ早く往かうぢやないか。
句樂　まあ、もう少しお待ちなさい。この酒を飮んでしまふまで。
おとし　そんなに飮んで如何する氣だい。若旦那と一所に往つておゐでよ。
新太郎　(おぎんに)　おい、その二階に往つて見ようよ。
おぎん　ええ。
おとし　(句樂に)　兄さん。知つてゐるだらう。あの呉服屋の隣の煙草屋さ。
句樂　うん。それぢやあちよつと往つて來るかな。
おぎん　(おとしに)　如何もお邪魔をいたしました。
おとし　如何いたしまして——
(新太郎、おぎん、句樂の三人は正面の路次へ入る。おとしは膳など片附け終つた後、細目に障子をあけて外の雪を眺める。稍長い間。)
(延美津下手の路次から出て來る。句樂の家の前に來て立ち留まる。)
延美津　おとしさん。ひどい雪になつてしまつたね。
おとし　今お歸り——大層おそかつたんですね。

延美津　ええ。廻り道をしてゐたもんだから、こんなにおそくなつてしまつて――句樂さんは――
おとし　今ちよつとそこまで――まあ、お上んなさいよ、たつた一人つきりなんだから。
延美津　さう――それぢやちよつとお邪魔をして往かうかね。
（延美津は句樂の家の中へ入る。二人は向ひ合つて坐る。）
おとし　何だかこの雪はなかなか止みさうもないわね。
延美津　ええ、この分ぢや大分積りさうですよ。句樂さんはまだ席を休んでゐるの。
おとし　病氣をしてからすつかり怠け癖が付いてしまつてね。ほんとにあんまり長く休んでゐると困つてしまふのだけれど――それでも藝人の有難いことは、いろいろ世話をして下さる方があるもんだから、まあやつと如何にかしてゆけるのさ。
延美津　しかし藝人では仕方がないね。苦勞が多いばかりなんだもの、ほんとに今朝のやうなあんな騷ぎにも幾度出つ會したか知れやしない。考へて見ると全くつまらないねえ。
おとし　あなたがそんなことを云つてゐたら私なんぞ何て云つたら好いだらう。女郎上りの女なんてものは、まるで羽の取れた蟋蟀見たやうなものだからね。今更泣くことも出來やしない。
延美津　そんなにくよくよしてゐちやあつまらないぢやないか。この世に生れた甲斐には面白をかしく暮らした方が本當だと思はれるのだがね。私は今までに幾度今朝見たいに男から打たれたりしたか知れやしないよ。ご覽よ。この傷痕を――これはね、忘れもしない二十三の時さ。まだ銚子で藝妓をしてゐる時分に、心中をしそこなつたお名殘りなのだよ。
おとし　まあ、男は如何しちまつたのだい。
延美津　男は死んぢまつたのさ。（間）あゝ、雪が降ると北海道のことが思ひ出されるよ。二十四の年から七年ゐたんだからねえ。そりやあずゐぶん嬉しいことがあつたのだよ。そのなかでも私たつたひとつ忘れられないことがあるの。
おとし　やつぱり男のことでなの。
延美津　ああ、勿論さ。しかしひとが聽くとつまらないかも知れないよ。
おとし　ああ、好いからお話しよ。
延美津　聽いて呉れるなら話すけれど――（うつとり障子を見る）さうさね。何處から話したら好いだらう。兎に角私が北海道を方々流れ渡つた末、二度目に札幌に舞

ひ戻つた時のことなのだよ。丁度家の隣が宿屋になつてゐて、そこには東京の役者に附いて來たお囃子の連中が泊つてゐたのさ。こつちも藝者のことだし直ぐ往來をするやうになつてしまつたのだが、そのお囃子の中に一人笛を勤めてゐる十七八の若い男がゐたのだよ。別段深くなつてゐた仲と云ふ譯ではなかつたけれど、もうその一座がそこを立つて東京へ歸ると云ふ晩に、私は何だかその人と別れるのが悲しくなつて芝居の閉ねるのを待つて呼び出したものさ。もう春にはなつてゐたけれども、まだ路傍には雪が殘つてゐて、月の光だつて冷たかつたつけ。そりや今思ひ出してもその晩の景色がはつきりと目に浮んで來るやうだねえ。樂屋口から出て來たその人の手を引いて話し合ひながら、ぶら／＼歩いて往くうちに、何時の間にか私達は街の外へ出てしまつたのさ。（言葉を止めて回想に耽ける）

おとし　それから如何したの。

延美津　もうゆつくり話しちやゐられないから急いで話すよ。（間）それからその人が笛を吹いたの。さうして私がその傍で泣いたの。その人もしまひには笛を吹きながら泣いてゐるのさ。笛の音が顫へてしまひにはもう吹けなくなつてしまつたんだよ。（目に涙を浮べながら笑つて）もう止さうね、こんな話は。ひとが聽いたらつまらない話に極つてゐるから——

おとし　それつきりその人には會はなかつたのかい。

延美津　時々會ひたいと思ふけれど——もうかうなつちやあ會つても呉れないよ。

（句樂が正面の路次から出て來る。蹌踉めきながら歩く。傘もさしてゐない。）

句樂　（怒鳴る）なに、句樂の氣狂ひだと——馬鹿——何が氣狂ひだ。（空虚な聲で笑ふ）ははは、世間の奴等はみんな氣狂ひなんだ。そいつらが何を云やがるんだ。おれは小猿七之助よ——それが仇討が怖いので俳諧亭句樂になつたのよ。如何でえ。分つたか。

（おとしはその聲を聽いて、疑ふやうに耳を傾ける。句樂は蹟いて烈しく格子戸に突き當る。）

句樂　べらぼうめ。おれの云ふことはみんな嘘だなんて、誰がそんなことを云やがるんだ。畜生。さあ、承知しねえぞ。出て來い。

（句樂はまた正面の路次の方へ歩いてゆく。おとしは外へ飛び出して引き留める。）

おとし　如何したんだね。こんなにお酒に醉つぱらつて—

句樂　嬉しいぢやねえか。惚れた同士が一所になる。こんな嬉しいこたあねえぢやねえか。そこで飲んだのよ。若旦那から一兩貰つて、今そこの酒屋ですつかり飲んぢま

つたんだ。
おとし　さあ、そんなことは如何でも好いから、早く家の中へお入りよ。着物もすつかり濡れてゐるよ。
句樂　（急に聲を潜めて）お前が鳥追お松だつてことは誰にも知らせちやいけねえぞ。
おとし　（悲しさうに句樂の顏を見る）お醫者があれ程飮んぢやいけないつて云つたお酒を、お前は到頭飮んぢまつたんだねえ。
句樂　（猶聲を潜めて）好いかい。もしお前が鳥追お松だつてことが知れると大變だぞ。
おとし　あゝ好いよ。分つたよ。さあ、家へお入りよ。
（句樂は家の中へ入らうとして、驚いて外を覗いてゐた延美津と顏を見合はせる。）
句樂　（叫ぶ）おゝ、お前は紫君ぢやねえか。（座敷へ上つて）ほんとに久しく會はなかつたなあ。
おとし　さうぢやないよ。お向うの延美津さんぢやないか。
句樂　笑談云ふねえ。延美津さんはさつき聖天樣へ往くつて出懸けたぢやねえか。（延美津に）さあ、紫君。久しぶりだ何處かへ往つて一杯やらう。
延美津　（小聲でおとしに）また病氣が起つたらしいね。
おとし　（悲しさうに）如何したら好いだらうねえ。
句樂　（延美津に）さあ、愚圖々々しずに支度しねえな。お前に始めて會つたのも、やつぱりこんなに雪の降る日だつたぢやあねえか。（おとしに）さあ、おとし。お前も早く逃げなくちやいけねえ。うつかりしてゐると仇討に會ふぜ。如何もこの間からおれ達を附け覗つてゐるやつがあるのに違えねえのだ。だからな――それさつき云つて置いた通りに、素性を隱してゐなくつちやいけねえぞ。おりやあ闕はねえよ。おれが小猿七之助だつてことは誰でも知つてゐらあな。しかしお前が鳥追お松だつてことは誰も知らねえ。知れたらそれこそ大變だ。それ――講釋師の典凌つてやつ――あいつが如何も怪しいぜ。藥研堀の一件もたしかにあいつに違えねえのだが――
おとし　（悲しさうに領く）分つたよ。分つたよ。
（延美津立ち上つて歸らうとするのを、句樂は慌たゞしくその前に立ち塞がる。）
句樂　（延美津の手を取る）何處へ往くんだ。待ちねえよ。今一所に往くから――何か澁けえもんで一杯やらうぢやねえか。（延美津當惑して佇んでゐる）なあ、紫君典凌のやつはお前にも惚れてゐたんだぜ。あいつの煙草入を質に入れて、お前の所へ通つたこともあつたが――あの煙草入の金具は好い彫だつたな。鰐の面よ。誰が彫つたんだか知らねえが、細い生々とした好い彫だつた。如何もあれが祟つてゐるんだな。あれからだぜ。お前は

どつと煩ひ付く。おれは博奕で滅茶々々に負けてしまふ。おれは氣なんど狂つてやしねえぞ。（急に笑ひ出して）はははは、べらぼうめ。世間の奴等はみんな氣が狂つてゐるんだ。第一世間の奴等は皆な嘘吐きだ、どいつもこいつも嘘ばかり吐きやがる。さうして眞實のことはひとつも知らねえ。早い話が眞實に女に惚れるやつだつてありやしねえぢやねえか。眞實に女に惚れることの出來ねえ奴等におれの話が分かつて堪るものか。

延美津　さあ、この手を離してお吳れな。ねえ、句樂さん。何處へでもお前の往く所へ一所に往くから——

句樂　さうか。（ぢつと延美津の顏を見る）紫君、お前だけは一度も嘘を吐かなかつたな。（手を離して）しかし女はなほさらさうだ。おれが今まで會つた女はみんな嘘吐きだつた。女位眞實のことを云はねえものはありやあしねえ。

おとし　兄さん。まあ、坐つたら好いぢやないか。

句樂　しかしおれはこれから紫君と一所に何處かに往くんだから、坐つたりなんかしてゐる暇はねえよ。

延美津　句樂さん。もう何處かへ往くのは止して、家で飲まうよ。

おとし　ああ、それが好い、それが好い。ねえ、兄さん。さうおしよ。

句樂　それなら家で飲んでも好いが——（坐る）家ぢやあうまくないからな。（急に何ごとかに氣付いて）さうだ。すつかり忘れてゐた。（部屋の隅を見て）あすこだ——あすこだ——

（句樂は一心に祈禱する。おとしは延美津に目で知らせる。延美津そつと立つて臺所から拔け出して、その家へ入る。）

おとし　兄さん。もうお寢みな。

（雪が止んで、急に薄日が差して來る。一人の娘が下手の路次から出て來て延美津の家に入る。）

おとし　（句樂の肩に手を懸けて）兄さん。

句樂　（怒つて）何でえ、うるせえな。今不動樣を拜んでゐるところぢやねえか。おれにはちやんと不動明王のお姿が見えてゐるんだが、お前には見えねえだらう。（部屋の一隅を指差して）それ、そこよ。有難てえ。有難てえ。お前も不動樣を信心しなくちやいけねえぞ。さあ、拜め、おれと一所に——拜まねえとぶん毆るぞ。

（立ち上つておとしに打ち懸らうとする。）

おとし　何をするんだね。拜むよ。さあ、兄さんもお坐りよ。

句樂　（坐つて）うん。よし、よし。（同じ部屋の一隅を指して）見ろ。有難てえお姿ぢやねえか。まるで成田屋のやつた不動樣見てえだな。（聲色を使ふ）わが大明王

大威力は五智の中央にして大日如來の化身なり。一切衆生を度せんがために、面に憤怒の相を現はし、智慧の利劍を以て煩惱の賊を斷ち——（身振をしながら） 好かつたぜ、ほんとに——

（延美津の家から再び三味線の音が聽こえ始める。句樂は急に沈默して考へ込む。やゝ長い間。）

おとし 如何したんだい、兄さん。

句樂 如何もおれには分らねえことが——あるんだが——

おとし 何さ。

句樂 今こゝに紫君がゐやあしなかつたかい。

おとし 笑談云つちやあいけないよ。紫君さんは死んぢまつたぢやないか。

句樂 （急に怒つて） 馬鹿あ云ふねえ。紫君が死んで堪るものか。おれの生きてゐる間は、紫君も生きてゐるに違えねえんだ。もう一度紫君が死んだなんて云つて見ろ。このまゝぢやあ置かねえぞ。（疑はしさうにおとしを見て）何だな。お前は紫君を何處かへ隱しやがつたのだな。（激して） 畜生。さあ、紫君を何處へ隱したんだ。早く出さねえか早く出せ——早く出せ——出さねえと承知しねえぞ。

おとし 今會はせるから靜かにしておゐでよ。

句樂 何でえ。そんなことを云つて胡魔化さうつたつて、おれはちやんと知つてゐるんだ。不動樣がちやんと敎へて下さらあな。紫君は何處にゐますかつて聽きさへすりやあ、きつと何處にゐるつてことを知らせて下さるんだ。

（句樂は再び部屋の一隅に向つて祈禱する。沈默。夕日の光が寂しく障子に映つてくる。）

句樂 （突然起き上つて笑ひ出す） 分つた、分つた。よし、さあ、おれはこれから紫君の所へ往つて來る。（急に悲しさうに） 可哀想に、紫君は眞つ暗な牢屋のなかにゐるんだぜ。その牢屋のなかには一年中日の光が差したことがねえんだ。（間） だがあの牢屋の鍵は誰が持つてゐるんだらう。あの牢屋のなかにはおぎんさんもゐるんだから——さうだ、若旦那が鍵を持つてゐるに違えねえ。

（句樂は突然跣足のまゝ外へ飛び出す。）

おとし （後を追つて） 兄さん——兄さん——

（句樂は正面の路次へ走り入る。おとしは後を追つて家から走り出る。路次の前に立ち留つて急に烈しく泣き始める。延美津の家の三味線の音が突然止む。）

——幕——

第三幕

同じく淺草馬道の煙草屋の二階。六疊と四疊半の二間。

上手は六疊の間の戸棚と壁。正面は窓。障子を閉め切つてある。下手の四疊半との間は襖で隔たつてゐる。下手に窓。同じく障子を閉め切つてある。階子段は下手にある。すべてこの階子段から出入する。壁に外套と中折が懸けてある。正面の窓の下に粗末な机が一個。その上に洋燈が置いてある。火鉢には藥罐が懸けてある。午後五時頃。外はまだ明るいけれども、部屋のなかは薄暗くなつてゐる。

新太郎とおぎんとは火鉢に向つて坐つてゐる。

おぎん　（洋燈を氣にして）何だか厭に暗うございますね。（振子を動かす）まあ。急に明るくなりましたわ。

新太郎　明日好い洋燈を買はうよ。まだいろいろ買ひ物があるね。

おぎん　ええ。（鬱ぎ込む）

新太郎　如何したんだい。また何か考へてゐるのだね。

おぎん　それでも何だかあなたに濟まないやうな氣がしまして——

新太郎　何だい。まだそんなことを云つてゐるのかい。馬鹿だなあ。もうそんなことを云ふのはおよし。水臭いぢやないか。

おぎん　今頃は宅ぢやきつと驚いていらつしやいますよ。

新太郎　しかし樫村が家へ往つてよく話して呉れるさうだから、そんなに驚きもしまいよ。樫村はもうぢきこつちへやつて來るだらう。

おぎん　ここの家がお分りになりませうか。

新太郎　句樂の家で聽くから分るよ。併し彼奴もきつと驚くぜ。煙草屋の二階とは氣が付かないだらうからなあ。

おぎん　（笑つて）ええ。

新太郎　（ぢつとおぎんの顏を見て）お前はかうやつてゐるのが嬉しくはないかい。

おぎん　嬉しくないなんて——そんな……——（直ぐ涙ぐむ）私はあんまり嬉しいので何だか夢のやうな氣がいたしますわ。しかし何時までかうやつてゐられますか——先きのことなんぞ考へると心細くつて仕方がございません。（涙をこぼす）

新太郎　もうそんなくだらないことを考へるのはおよし——さあ、涙をお拭き——（手巾を渡す）ここの家の人でも上つて來ると見つともないからね。

おぎん　（涙を拭く）ええ。

新太郎　（堪へがたい樣子で）さあ、ここは二人の世界なんだよ。もつとこつちへお寄りよ。（おぎんの手を取る）如何したんだい。冷たい手をしてゐるぢやないか。

おぎん　だつて雪の降るやうな寒さなんですもの——

新太郎　（おぎんの顏を見ながら）何だかね、お前今日は

頼なささうな顏をしてゐるねえ。
おぎん　さうですか。しかし何でもないんでございますよ。
新太郎　ほんとに餘りそんなことを考へるのはおよしよ。
おぎん　(伏目になつて)　女でございますもの――仕方がございませんわ。(新太郎が興奮して接吻せんとするを避けて)　まあ――
新太郎　如何して――
おぎん　(恥しさうに)　あんまりだしぬけなんでございますもの――びつくりいたしますわ。
(二人は徐に接吻する。稍長い間。突然階子段の下で騷がしい物音が起る。二人は驚いて離れる。)
句樂の聲　(階子段の下で)　若旦那――若旦那――
新太郎　誰だい。句樂さんかい。お上りよ。
(句樂は階子段を昇つて出て來る。着物は泥に塗れ、足には傷などが付いてゐる。殆ど人が變つたやうに狂暴な表情となつてゐる。續いて煙草屋の女房と娘のおはつが現はれ、階子段の上に佇んでゐる。)
句樂　(立つたまま)　若旦那。あなたが鍵を持つてゐるんでせう。
新太郎　(驚いて)　鍵なんぞ持つてゐやあしないよ。如何したんだい、句樂さん。着物が泥だらけだぜ。
女房　跣足で上り込んで來たんですよ。

句樂　(新太郎に)　なに、持つてゐねえ。そんなことはねえ筈だ。牢屋の鍵ですぜ。それ傳馬町の大牢の鍵さ。紫君があすこに入つてゐるのですよ。何の罪咎もねえのに可哀想ぢやありませんか。ねえ。若旦那。隱さずに鍵を出しておくんなさいな。
新太郎　ほんとに僕はそんな鍵なんぞ持つてやしないよ。
句樂　それぢやあなたはまだ知らねえな。おぎんさんも紫君と一所にその牢屋の中にゐるのですぜ。
新太郎　(やつと句樂の狂つてゐるのに氣付く)　おぎんはここにゐるよ。
句樂　笑談云つちやいけねえ。それや死んだ田之助の幽靈さ。
新太郎　(女房に)　また病氣が起つたのですね。
女房　さうでございますね。早く家へ知らせてやりませう。
おはつ　私往つて來ませう。おとしさんに知らせるのでせう。
(娘は階子段を降りて去る。句樂は坐つて沈默したまま洋燈の灯を凝視する。)
おぎん　(小聲で新太郎に)　如何しませう。怖いわね。
新太郎　大丈夫だよ。
女房　ほんとにこの前なんか大變でしたよ。今おとしさん

が來るでせう。
（女房は階子段を降りて去る。障子の外も全く暗くなる。句樂突然立ち上つて叫ぶ。）
句樂　ああ、あんなに大勢の跫音が聽える。畜生。到頭おれの居所を搜し出しやあがつたな。それで仇討に來やがつたのだらう。（急にがつかりして）いや、さうぢやねえ。跫音がまるで聽えねえやうになつてしまつたぢやねえか。べらぼうめ。おれには不動様が附いていらつしやるんだ。いくら仇討に來たつて駄目なことよ。（考へて）しかし何でおれは仇討に會ふんだらう。如何も分らねえぞ。（新太郎に）ねえ若旦那。あなたはその譯を知つてゐるでせう。
新太郎　分らないね。句樂さん。まあ坐つたら好いだらう。
句樂　（坐つて獨語する）如何も分らねえ。〓(うはこり)の煙草入を質に入れたことかな――さうぢやあねえ――何でも月が二つ出た晩のことだ。あの晩からこの仇討が始まるんだ。冬の眞つ最中のことで、丁度、私はその時金車へ出てゐたんだが、席を出てから何處かで一杯やらうと思つて、ひよいと空を見ると月が二つ出てゐやがる。私はその時考へたね。こりやあ世の中がだんだん惡くなつたからだなとかう思つたんでさあ。全くですぜ、若旦那。今にご覽なさい。戰があるから――えゝ、ありますとも。そりやあ大きな戰がある。大變ですぜ。貧乏人と金持との戰なんでさあ。私なんか貧乏人の方の大將になつて出懸けるんだが、こいつが馬鹿に强いんでね。向ふ所敵なしつて有樣で、金持は鏖殺しさ。（間）しかし若旦那は一體どつちの方なんですね。
新太郎　（笑ひながら）無論句樂さんの方の味方さ。
句樂　そいつは有難てえ。何しろ私は若けえ時から軍書を讀んでゐるから、戰のことには詳しいやね。（指を折つて數へる）三國誌、八犬傳、修紫田舍源氏、伊勢物語、徒然草、よものあか、柳樽――こりやあみんな立派な軍書でさあ。さあ、そこで戰となるとこれがみんな役に立つて來る。私の姿を見ると金持の方ぢやあみんな逃げ出しまさあ。とても敵ひつこねえんだから、いくら金持だつて命は惜しいやね。（間）おや、私はこんな話をするつもりぢやなかつたんだが――さうだ。月の二つ出た晩の話だつけ。ぶらぶら傳法院の横をやつて來ると、ばつたり出會つたのが例の典凌つて奴さ。何處かで一所に飲まうつて云ふんで、二人で飲み出したのは好いが、この晩はまた變な晩で、いくら飲んでも二人とも醉はねえんです。一體この典凌つてやつが惡いやつでね。こいつが私の戀敵なんでさあ。前から紫君に惚れてゐやがつたに違

えねえんだが、その晩始めて紫君に惚れてゐるつてことを私に云やがつたんですよ。これが敵討の發端なんですがね。（急にまた思ひ出して）こんな話どころぢやねえ。若旦那。鍵を出しておくんなさいな。紫君が牢屋のなかで泣いてゐるんぢやありませんか。
おぎん　如何してあんなに紫君つてひとのことばかり云ふんでせう。
新太郎　やつぱり忘れられないのだね、可哀想に――句樂さん。今ぢきに鍵を搜してやるから待つておゐでよ。
おぎん　横にでもなつてゐたら好いでせう。
新太郎　さうしてゐるが好い。その中に鍵を搜して置くよ。
句樂　（荒々しく）そんなことをしてゐられるものか。（部屋の一隅を見て）あゝ、不動様がいらしつた。不動様がいらしつた。紫君が如何してゐるかもう一度不動様に伺つて見よう。
（句樂は祈禱する。稍長い間。）
おぎん　何を拜んでゐるのでせう。
新太郎　不動樣なんだよ。不動樣を信心してゐるんだらう。
（二人は句樂の祈禱する姿を眺めてゐる。）
句樂　（急に起き上つて）若旦那。紫君が牢屋にゐるのは嘘だつたんですよ。あいつは山谷の重箱で鰻を食つてゐるんでさあ。あん畜生人を馬鹿にしてゐやがる。（立ち上つて）ご免なさいまし。またお邪魔に伺ひますよ。
（階子段の方へ歩む。）
新太郎　（句樂に）何處へ往くんだい。
句樂　（立ち留つて）山谷までさ。私だつて女には會ひてえやね。
新太郎　よした方が好いだらう。句樂さん。あんな薄情な女に會つたつて仕方がないぢやないか。
句樂　薄情ですつて――そいつはあなたがあの女をよく知らねえからだ。あんな親切な女はありやあしねえ。全くですぜ。誰が何と云つても、私はあの女が薄情だとは思はないね。（また坐つて）考へて見りやあ可哀想な女さ。あいつの親父つて云ふのは旅役者で、そいつが金に困つたもんだから娘を賣つてしまつたつてやつなんだ。（おぎんを見て急に笑ひ出す）はははは、田之助の幽靈め、默つておれの話を聽いてやがらあ。面白れえ。面白れえ。こんな面白れえことはねえ。全く舞臺で見た時とちつとも變らねえからをかしいや。（新太郎）ねえ。若旦那。世の中に幽靈なんてねえなんて云ふやつがあるが、あいつは嘘ですぜ。幽靈はたしかにあるに違えねえ。誰でもみんな魂のねえやつはねえでせう。魂つてやつは圓い硝子の壜なんだが、そのなかに入つてゐる水の色が人によ

つて違ふんだ。眞つ赤なやつがあるかと思ふと、眞つ靑なやつがある。中には眞つ黑なやつがあるけれども、こいつは一番小さいのさ。しかしこの眞つ黑なやつは今にだんだん多くなつて來るね。私のも眞つ黑だ。あなたのも眞つ黑だ。（間）この魂を時々壞すやつがあるんだね。何しろ硝子だから直ぐ壞れらあね。さうすると大變だ。直ぐ氣狂ひになつてしまふ――

新太郎　さうするとお前は――（言ひ懸けて止める）

句樂　（關はず話し續ける）だんだん世の中が惡くなるに從つて、この魂を壞すやつが多くなつて來るのだ。あつちでもこつちでも魂を壞す。さうすると硝子のかけらが風に吹き飛ばされて、何處へ往つても魂の粉だらけだ。しまひには世の中が氣狂ひで一杯になる。もうさうなると理窟も何もあつたもんぢやねえ。毎日々々方々で人殺しがある。あつちでもこつちでも血腥い噂ばつかりだ。人間がすつかり死に絶えてしまふまでその騷ぎが續くんだね。

新太郎　そいつは大變だな。不動樣を信心しても駄目なのかい。

句樂　不動樣だつてやつぱりしまひには氣が狂つてしまひまさあね。

（階子段を昇つておとしが出て來る。續いて樫村が出て來る。和服。）

おとし　直ぐ來ようと思つたんですが、お醫者樣の所へ往つたりなんかしてゐたものですから、おそくなつてしまひました。如何もお騷がせ申して濟みません。

樫村　今句樂さんの所へ君のゐる所を聽きに往くと、また氣が狂つたつて話だもんだから驚いたのだよ。

新太郎　さうか。可哀想に――なかなかほんとに快くなるまでは大變らしいね。

おとし　（句樂に）さあ、兄さん。家へ歸らうよ。

句樂　誰の家へよ。

おとし　兄さんの家へさ。

句樂　おれに家なんぞありやしねえよ。家なんぞあつて堪るものか。家は墓見てえなものだ。唯家には生きた人間が住んでゐるが、墓には死んだ人間が住んでゐる。たつたそれだけの違えぢやねえか。

おとし　（不圖氣付いて）何を云つてゐるんだね。さあ、柴君さんが待つてゐるから早く往かうよ。

句樂　ほんとか。それなら歸らう。

新太郎　（おとしに）大丈夫かい。

おとし　（頷く）ええ。

（句樂は立ち上つておとしと一所に階子段を降りてゆく。）

おぎん　ほんとにおとしさんが可哀想ですね。
新太郎　もうあの病氣は快くなりさうもないやうな氣がするね。好い藝人を惜しいものだ。（間）　樫村君、君はあゝ云ふ藝人の末路を考へたことがあるかい。
樫村　そりやあるよ。今まで句樂に會ふ度に、何時もそんなことを考へたよ。
新太郎　さうだらう。句樂を見ると誰でもそんなことを考へずにはゐられないよ。（感傷的に）　しかしあいつはまあ、あゝやつて氣が狂つてゐる方が幸福なのだ。世の中にはさう云ふ人が大勢ゐるよ。氣が狂つた方が幸福な人だ――
樫村　君だの僕だのもやつぱりその仲間かね。
新太郎　さうさ。だんだんその仲間に入つて往くやうだね。
おぎん　まあ、氣狂ひのお仲間入りなんて眞平ですわ。
新太郎　お前は大丈夫だよ。しかしお前は今にあのおとしさんのやうに、氣狂ひの介抱をしなけりやあならないよ。
おぎん　あんなことを――もうそんな厭なことを云ふのはおよしなさいまし。
樫村　（快活に笑ふ）　つまらないことを云つてゐる。（急に眞面目に）　さつきあれから橋場の　お宅へ往つておつ母さんだけにお目に懸つたがね。お父さん大分怒つてをられるらしいよ。
新太郎　（冷笑の調子）　さうかい。家の體面を汚したつて云つたらう、お極り文句だ。
樫村　うん。そんなことも云つてをられたやうだつたよ。それでもう一度よくお話しをすることにして來たのだよ。（磊落な態度で）　考へて見りやあつまらないなあ。もうよせよ、家なんぞ繼ぐのは。それよりこの二階にかうやつてゐる方が餘つ程好いぞ。
おぎん　併し、私何だか濟まないやうな氣がいたしますわ。
新太郎　好いよ。心配しなくても。どうせおれはかうなるべき人間なんだからね。
（沈默。三人は各異つた空想に耽ける。）
樫村　（突然）　如何したらうなあ、句樂は。ちよつと家へ往つて樣子を見て來らあ。
新太郎　さうか。直ぐ歸つて來るだらうね。
樫村　うん。
（樫村は階子段を降りてゆく。）
おぎん　私お宅のことを考へると氣になつてなりません。奥樣なんかさぞ私をひどい女だと思つていらつしやいませうね。
新太郎　（面倒臭さゝうに）　如何思つてゐたつて好いぢやないか。そんなことを心配してゐたらきりがないよ。
おぎん　（悲しさうにうな埀れて）　ええ。しかしあなたは

何時迄も私と一所にゐて下さるでせうねえ。私もしあなたから棄てられるやうなことがあつたら、それこそもう生きてはをりませんよ。（泣く）

新太郎　お前を棄てる――そんなことがおれに出來ると思つてゐるのかい。（おぎんの肩に手を縣けて）　さあ。もう泣くのはおよし。そんな泣き顔を樫村に見られたりすると變だよ。

おぎん　ほんとに私もしあなたから、棄てられたら身でも投げて死んぢまひますわ。

新太郎　（いぢらしさうにおぎんの横顔を見る）　さあもうそんなことを云ふのはおよし。ほんとにお前は氣の小さい女だね。（慰めて）　かうやつて家も何も棄ててしまつて、お前と一所に暮らさうとしてゐる位ぢやないか。お前を棄てるなんてことがあるものか。そりやあお前の取越苦勞だよ。

おぎん　取越苦勞だとすりあや安心ですけれど――（泣き止んで涙を拭く）　日の縁が赤くなつてゐるでせう。

新太郎　ああ、少し――

おぎん　樫村さんが見て泣いたつてことが分るか知ら――

新太郎　分るものか。あいつはそんなことには氣が付かないよ。

おぎん　もし泣いたつてことが知れると何だか極りが惡うございますわ。

（遠く半鐘の音が聽こえる。）

新太郎　おや、半鐘の音が聽こえるね。幾つ番なんだらう。

おぎん　遠くのやうですわね。

新太郎　（數へて）　それでも三つ番だよ。

おぎん　何處でせう。

（近くでも半鐘を打ち始める。新太郎とおぎんは立ち上つて障子を開ける。雪の積つた屋根を越して、空に映つた淺草公園の灯明りが見える。二人は寄り添ふやうにして窓から外を見る。）

新太郎　寒いだらう。

おぎん　ええ。（屋根のあなたを指して）　あら、あすこですわ。

新太郎　馬鹿なことを云つちやいけないよ。ありやあ公園の灯が映つてゐるのだよ。

おぎん　さうですか。それぢや火事は何處でせうね。

新太郎　何だかここからは見えないやうだね。

（樫村が階子段を上つて出て來る。）

樫村　火事だな。こゝから見えるのかい。

新太郎　ううん。まるで見えない。何處だらうな。

樫村　さあ――今下の娘が交番へ聽きに往つたやうだか

ら、もうぢき歸つて來ると分るだらう。

新太郎　如何したい、句樂は。

樫村　ぐつすり寢込んでしまつてゐるよ。あれできつと二日位寢通すのだぜ。可哀想にあの妹つて女は傍に坐つてぼんやりしてゐるのさ。(不思議なことを見出したやうに)君。句樂はあの前にゐる清元の師匠に惚れてゐたらしいね。如何もそれで氣が狂つたのらしいよ。

新太郎　さうかね。僕はまた句樂が僕とおぎんとを見て、昔の自分の姿をまざまざと見せられたやうな氣がして、あんなになつたのぢやあないかと思つてゐたのだよ。

樫村　さうさなあ。そんなこともあるかも知れない。しかし今まで皮肉や洒落ばかり云つてゐた男が、急にあんなに氣が狂つてしまつたりなんかするのを見ると、何だかお互ひにかうやつて話し合つてゐるのさへ、不思議なことのやうに思はれて來るね。

新太郎　さう云へば世の中のことはみんな不思議さ。ああやつて鳴つてゐる鐘の音さへ不思議に聽こえるだらう。

樫村　さうだな。(間)もう下の娘は歸つたらう。

新太郎　(おぎんに)お前ちよつと往つて聽いて來て呉れないか。

(おぎんは階子段を降りてゆく。半鐘の音が止むと急にひつそりとする。)

樫村　如何したんだい。馬鹿に考へ込んでゐるぢやないか。

新太郎　何だか句樂が氣が狂つてしまつたと思ふと、急に世の中が寂しくなつたやうな心持がして來たのだ。

(おぎんが階子段を昇つて出て來る。)

おぎん　瓦町ですつて――まだ燃えてゐるんださうでございますよ。

樫村　(驚いて)瓦町――そいつあ大變だ。僕の家が燒けてゐるのかも知れない。

新太郎　そんなことはないだらう。

樫村　兎に角僕は歸るよ。それではいづれまた會つて話さう。

新太郎　どうぞちよくちよくやつて來て呉れたまへ。

(樫村は階子段を降りてゆく。二人は階子段の上まで見送る。)

新太郎　さやうなら。

樫村の聲　(階子段の下から)さやうなら。

(二人は戻つて火鉢の傍に坐る。)

おぎん　まさか樫村さんのお宅が燒けてゐるんぢやないでせうね。

新太郎　さうぢやないだらうと思ふがね。(窓の方を見て)おや、障子を開けたままだつたね。道理で寒いと思つ

た。（立ち上らうとする）

おぎん　（立ち上つて）私が閉めますからよろしうございますよ。（障子を閉める）

新太郎　（坐り直して）心細いやうな氣がするかい。

おぎん　いいえ。あなたさへ傍にゐて下さるなら――しかし、これからあなたは如何なさるおつもり。

新太郎　仕方がないから何か書くのさ。さうしてしまひには何樂のやうになつてしまふのだらう。

おぎん　（わざとらしく戰慄して）笑談にもそんなことは云はないで下さい。あなたがあんな氣狂ひになるなんて――まあ、考へても怖しいやうな氣がいたしますわ。

新太郎　（笑つて）笑談だよ。さあ、もうそんな話はよさう。もつとこつちへお寄りよ。（おぎんの手を握る）

おぎん　（新太郎に寄り懸つて）私何時までもかうして二人で暮らしたうございますわ。

新太郎　まあ、何時までもかうやつて暮らさうよ。たつた二人で――

おぎん　ええ。

新太郎　ね。好いだらう。

（二人は接吻する。長い間。恍惚として目と目を見合せてゐる。）

（遠く消火の半鐘の音が聽こえ、續いて近くでも同じやうに消火の半鐘を打つ。）

新太郎　（目覺めたやうに）火事ももう消えたやうだね。

（おぎんは默つて頷く。二人は猶恍惚として目と目を見合せてゐる。）

――幕――

俳諧亭句樂の死（一幕）

人物

小しん　盲目の落語家
焉馬　落語家
柳橋　同
おたつ　小しんの女房
おとし　句樂の妹
山崎新太郎　文科大學生
おぎん　新太郎の情婦
蝶丸　盲目の新内語り
おせん　蝶丸の女房

場所　淺草

時代　現今

藏前附近の大川の河岸に近いところ。眞ん中からやや上手に寄つて盲目の落語家小しんの家がある。古い家だが數寄な造作の四疊半と六疊との二間つづき。上手の四疊半の座敷の正面には緣側があつて障子を閉め切つてある。上手に襖の出入口があつて臺所に通ずる。壁に古い顏見世の番附が貼り付けてある。柱には句樂の「五月雨ややうやう湯錢酒の錢。」と書いた短冊を懸けてある。下手の六疊の正面は半窓。窓は障子を閉め切つてある。長火鉢や茶簞笥などが置いてある。下手に格子戸。

格子戸の前は狹い路次。その突き當りは直ぐに大川の河岸となつてゐる。路次の此方に船宿の一部が現はれてゐて軒に太い字で「網德」と書いた四角な行燈を懸けてある。三月の始めの或る月夜。路次の向うに大川の水の面の銀色に光つてゐるのが見える。

小しんとおたつとは長火鉢に向つて坐つてゐる。小しんは三十歲位の瘦せた男。盲目で蹇。絕えず憂鬱な表情を續けてゐる。たとへ快活な言葉で語る時があつても顏は暗い。おたつは二十七八歲位の女。小しんの女房。小しんはおたつに本を讀ませて一心にそれを聽いてゐる。

おたつ　（低い聲で本を讀んでゐる）「その時、風來山人手に持ちし羽扇を與へて曰く、是は我仙術の奧義をこめし團扇なり。抑この團扇を以てあふげば、暑き時は涼しき風出で、寒き時は暖かなる風生じ、飛ばんと思へば羽とも

なり、海川にては船ともなり、遠近を知り、幽微を見る。身を隱さんと思へば忽ちにして見えざる、奇妙稀代の重寶なり。以て天地の間を往來し、諸國の人情を知るべし。汝が修業成就して、再びこの土に歸りし時、また對面をなすべし。さらばさらばと云ふ聲は、障子に殘る風の音。淺之進は茫然と光明院の窓の內に、眠るともなく覺むるともなく、机にかかりてもとの如く坐し居たるに、側を見ればかの夢中に授かりし、羽扇ばかりぞ殘りける。」(つまらなさうに)何だい。ちつとも面白くないぢやないか。

小しん　馬鹿云つてやがらあ。これからが面白くなるんだ。こりやあ句樂の好きな本なんだぜ。しかしまあ今夜はそこまでにして置かうよ。

おたつ　さうかい。私はもつと讀んだつて關はないよ。しかしこの前讀んだ「梅曆」の方が餘つ程面白かつたね。

小しん　(寂しさうに笑ふ)「梅曆」を讀んでゐる時分はおれがもう好いつて云つても聽かずに讀んだな。しまひには文句まで覺えつちまひやがつたぢやねえか。おれも昔は「梅曆」が好きだつたが——

おたつ　おや、おや、大變年寄染みたことを云ひ出したね。

小しん　(何事か思ひ出して)あの時分は面白かつたなあおれと句樂と焉馬の三人で、ずゐぶんいろんなことをして遊んだものさ。それが今ぢやあおれがこんな盲目になるし、句樂は狂人になりやがるし、達者なのは焉馬ばかりだ。

おたつ　何だね。今更そんなことを云つたつて仕方がないぢやないか。

小しん　うん。(間)さう云やあ句樂はどんな樣子だらう。この四五日あんまり好くねえつて話だが、まだ死にやあしねえだらうなあ。

おたつ　何しろあんな病氣だからねえ。何時どんなことがあるか知れやしないよ。一昨日もおとしさんが來て話してゐたが、相變らず不動樣ばかり拜んでゐるのだとさ。

小しん　ふん、おとしさんが來たのかい。一昨日と云やあおれは山崎の若旦那の所へ往つて留守だつたな。あいつの不動樣も久しいものだ。一昨日も若旦那とあいつの不動樣の話をしたんだが——何しろまだ死なせたくねえものだな。今時あの位の落語家はありやしないやね。そりやあずゐぶん飮んだくれの怠け者だが、あれであいつの云ふことは變つてゐて面白いよ。(悲しさうに溜息を吐いて)句樂が死んでしまつたら、どんなにこの世の中が寂しくなるか知れやしねえ。

おたつ　しかしあんな狂人になつてしまつてはもう仕方がないね。何しろ可哀さうなのはおとしさんさ。兄さんの看病で夜の目も寢ないものだから、一昨日來た時なんぞ

はすつかり寢れてしまつてゐるのさ。
小しん　あの女も不仕合せな女さね。女郎に賣られてさんざ苦勞した揚句が、あの兄貴があんな有樣なんだらう。何時まで苦勞するのだか分らねえやうなものだ。（しんみりした調子になつて）おとしさんばかりぢやねえ。おれはお前に濟まねえと思つてゐるよ。こんな盲目を亭主に持つて、世話が燒けるだらうが、まあ何かの因緣だと思つて辛抱してくんねえよ。
おたつ　何を云つてゐるんだね。そんな澤市のやうなことは云ひつこなしさ。
小しん（わざと淚を紛らすやうに笑ふ）到頭澤市にされつちまつたな。
（二人は寂しさうに笑ふ。）
（下手より焉馬と柳橋が出て來る。二人とも落語家。焉馬は三十五六歲位。柳橋は四十七八歲位。二人とも稍酒に醉つてゐる。焉馬は手に竹の皮包をぶら下げてゐる。）
焉馬（格子を開けて）如何したい。久しく會はなかつたな。
小しん　誰だ。焉馬か。まあ上んねえ。
焉馬　うん、柳橋さんと一所なんだよ。何だかいやに沈んでゐるぢやねえか。（座敷に上つて）おい、おたつさん。うめえものを持つて來たぜ。
（竹の皮包を渡す。）
おたつ　何だい、焉馬さん。（開いて）おや、おや、鰒だね。
柳橋（座敷に上つて）今そいつで一杯やつて來たところさ。
小しん　鰒か。そいつは難有てえ。早速一杯やらかさうぢやねえか。おたつ、酒の支度をしてくんねえ。（二人に向つて）一體今日は何處の歸りなんだね。
（おたつは上手へ入る。）
焉馬　なにね、今日は句樂の病院へ二人で見舞に往つて來たんだよ。
小しん　今日はまた席を拔いたんだな。何しろ二人とも席を拔くのは名人だぜ。
焉馬　お前さんだつて昔はあんまり拔かない方でもなかつたぜ。
（焉馬と柳橋上手の四疊半の方へ來る。勝手に座布團を出して敷く。）
小しん（獨言のやうに）もうおれは高座の湯の味も忘れてしまつたなあ。考へて見れば席へ出なくなつてから、もうかれこれ二年になるぜ。
柳橋　もうそんなことを云ひなさんな。（慰めるやうに）

句樂はあんなに狂人になつても、お前のことばかり云つてゐるんだぜ。なあ、今日も句樂は小しんのことばかり云つてゐたな。

焉馬　うん。（小しんに）何だか今日はお前と遊んだ時のことを話してゐやがつたよ。その時はあいつの目には、まるで紫君とお前との二人しか見えねえやうなのよ。あいつが死んだ紫君がまだそこにゐるつもりで、何か口說見てえなことを云つてゐやがるのを聽いてゐると、おりやあ可哀さうになつて淚がこぼれたよ。

小しん　句樂はまだあの女のとが忘れられねえんだなあ。

焉馬　それからお前に云つてゐる話と云ふのが面白れえんだ。何でもお前が盲目になつたのを、慰めてゐるやうな樣子なんだが、その文句が不思議な文句さ。

小しん　へえ、ひとつその文句を伺ひたいものだね。

焉馬　何でも人間にやあ目なんてものは入らねえ。みんな目があるから本當にものを見ることが出來ねえんだ。それだからお前は盲目になつたから仕合せな男だ――とかう云ふんだ。さうして句樂は今に法律を作つて、日本中の人間をみんな盲目にしてしまふ。何でも大きな役所を作つてそこで大勢の役人が片つ端から、呼び出した人間の目を潰すんださうだ。

小しん　（皮肉に笑つて）自分の目は如何する氣なんだらう。

焉馬　お役人に目を潰されるのは氣が利かねえから、おりやあ自分で潰してしまふんだつて云つてゐたよ。

小しん　成程ね、盲目になつた方が仕合せかも知れねえなあ。

焉馬　さうして今日はずゐぶん饒舌つてゐやがつたが、聽いてゐて何のことだか分らねえことの方が多いんだ。（柳橋に）なあ、柳橋さん。どんなことを云つてゐやがつたけな。

柳橋　さうさ。蝮の吉兵衞さんの話が大分出てゐたやうだつたぜ。（他の二人に）蝮の吉兵衞さんつて一體何なんだね。

小しん　おや、柳橋さんは蝮の吉兵衞さんのことを知らねえのかね。芝の仕事師で小唄のうまかつた人のとだよ。

柳橋　へえ、お前よく知つてゐるね。

焉馬　蝮の吉兵衞さんのとなら私だつて知つてゐらあね。

小しん　うん、お前もよく句樂から聽かされたなあ。さうしてその蝮の吉兵衞さんが如何したつて云ふ話なんですね。

柳橋　それが如何したつて云ふんだかよく分らねえのさ。何でも句樂が始めてその蝮の吉兵衞さんに會つた時の話らしいのだよ。

焉馬　全く小唄はうまかつたさうだね。句樂はよく云つてゐたぜ。あいつが生れてからこのかた、生きてゐた甲斐があつたと思つたのは、その蜆の吉兵衞さんの唄を聽いた時だけださうだ。
柳橋　その人はまだ達者でゐるのかい。
小しん　もう疾うに亡くなつたとも云ふし、まだ生きてゐるとも云ふし、何だかよく分らねえんですよ。何しろ狂人の云ふことだから當になりやしませんよ。（上手の方に向つて）おい、おたつ。早く酒を持つて來や。
（おたつは酒の支度をした膳を持つて上手から出て來る。）
おたつ　ほんとに何にもありませんよ。
小しん　まあ好いや。お持たせの鯛で一杯やらう。
焉馬　なあに酒さへありや澤山だ。
（おたつは上手の座敷に膳を置いて、小しんを助けてその傍に連れて來る。）
小しん　（自分を嘲けるやうに）盲目で甕と來てゐるんだからたまらねえ。近頃は乞食にだつてこんなのはゐやしねえぜ。
焉馬　（猪口を取り上げて）おや、こいつは八百善の猪口ぢやねえか。
小しん　うん、そいつは句樂が古道具屋で五匣で買つて來やがつたのよ。
焉馬　さうか。それぢやこいつで一杯飲むとしよう。
（おたつは焉馬の杯に酒を注ぐ。三人は酒を飲み始める。三人とも沈默。稍長い間。）
柳橋　如何したんだい。みんないやに滅入つてゐるぢやあねえか。
おたつ　焉馬さん。お前さんまで今夜は沈んでゐるんだね。いつもの通り騷いだら好いぢやないか。
焉馬　何ね、さつきから大分飮つてゐるんだが、如何も今日は醉はなくつていけねえのよ。
小しん　酒を飲んで醉はねえなんて、そんな箆棒な話があるものかな。
焉馬　よし來た。それならこれからうんと醉ふぜ。
小しん　ああ好いとも。うんと醉ひねえ。いくら醉つたつて驚きやあしねえから――
柳橋　おりやあ驚くね。焉馬が醉つぱらつたと來ちやあ手が附けられねえんだからな。この間も二人で一杯やると、これがまた席を拔くやうなことになつたのさ。さうしてそこにお神輿を据ゑてしまつて、二人でふんだんに飲んだものなんだ。
小しん　何處でよ、一體――
柳橋　傳法院横丁の例のところよ。

小しん　（面白さうに笑つて）　また菊さんの所へ往つたんだな。

焉馬　（小しんに）　お菊さんはお前に馬鹿な惚れやうをしてゐるぜ。なあ、柳橋さん。この間も小しんさんの目は如何かして好くならないかつて云つてゐたな。

小しん　（落語の通人のやうな調子で）　如何でげす。盲目になつても小しんには女が惚れやせう。

焉馬　（眞面目に）　笑談云つちやいけねえ。あの女はぞつこんおれに惚れてゐるんだぜ。

小しん　（調子に乘つて）　さう云やあ焉馬つて男も可哀さなものでげす。あの女には小しんと云ふ色男がちやんと附いてゐるんですぜ。

柳橋　（呆れたやうに）　おや、おや、何が何だか話がさつぱり分らなくなつて來たぜ。

小しん　話つて云やあさつきの話の續きを聽きてえものだな。焉馬師匠大とらの段てやつさ。大川亭柳橋先生、如何です、一席やつて下さいな。

柳橋　（間を置いて）　それからよ。あすこの家を出たのがもうかれこれ十二時なんだ。二人とも家に歸るのは厭だし、何處か遊びに往くのには金はなし、仕方がねえからぶらぶら茶畑を通り拔けて、二天門の方へ歩いて往つたのよ。別に何處へ往くつて當はねえんだが、ひとりでに足の向いた方へ歩いて往つたものさ。こんな時は何でもするね。若しも惚れた女が死ねつて云つたら、死んだかも知れねえよ。

焉馬　（氣が無ささうに）　笑談云つちやいけねえ。

柳橋　それから馬道へ出ると、こいつが如何でえひとつ若旦那の所へ押し懸けやうぢやねえかつて云ひ出したんだ。おれはもう晩いから止せつて云つたんだが、如何しても肯かねえ。仕方がねえからおれも一所にあの煙草屋を敲き起して、あの二階へ押し上つたものさ。

小しん　ふん、こいつは若旦那も驚いたらうなあ。

おたつ　全く焉馬さんに會つちや敵はないね。

柳橋　まあそれまでは何でもないんだがね。

焉馬　もう止しねえな。あんまり面白くもねえ話だぜ。

小しん　（焉馬に）　まあ好いやな。（柳橋に）　それから如何したのよ。

柳橋　いや、それからが騷ぎなんだ。まあ歌つたり踊つたりしたまではよかつたが、しまひにはこいつがあのおぎんさんに揶揄ひ始めやがつたのさ。それが醉つて執拗いと來てゐるから堪らねえや。あの氣の弱いおぎんさんのことだから、到頭泣き出してしまつたのよ。おれはあんなに困つたことはなかつたぜ。やつと引つ張り出してこいつの家へ送り込んで、家へ歸るともう夜が明けてゐる

ぢやねえか。何しろ若旦那の所へちよつと顏出しが出來ねえ始末になつちまつたんだ。

小しん（笑つて）焉馬はいつも酒と女でしくじるなあ。もつともそれより外に能のねえ男だが——

焉馬　ひでえことになつたものだな。

小しん　何もそんなに悄氣なさんな。そんなことは句樂は毎日やつて來たんだあな。（急に悲しさうに）しかし句樂もまだ死なせたくはねえな。おりや目が見えなくなつてから、如何云ふものだかあいつの云つた言葉ばかり思ひ出されて仕方がねえ。あいつは全く唯の落語家ぢやねえぜ。あいつの考へてゐることはみんな眞實のことばかりだ。盲目にならねえ前には氣が付かなかつたことも、かうやつて盲目になつてから考へて見ると、あいつ位眞實のことを云つてゐたやつはありやしねえ。

焉馬（不思議さうに）さうかなあ。おりああいつ位噓吐きはねえと思つてゐたんだぜ。

小しん　おれも盲目にならねえ前は、やつぱりさう思つてゐたものよ。句樂のやつまた法螺を吹き出しやがつたと思つて、別段氣にも留めずに聽いてゐたが、今考へて見りやそりやみんな眞實だつたんだな。全く不思議なやうに近頃はあいつの云つた言葉を思ひ出すよ。（考へるやうな顏付をして）句樂はよくこんなことを云つてゐたらう。人間の魂つてやつは、硝子の壜見てえなものだつて——あいつはほんとだぜ。おれは盲目になつてからその硝子の壜見てえなものが、目の前にちらついて仕方がねえんだ。

柳橋　變なことを云ひ出したな。句樂見てえなことを云つちやあいけねえぜ。

おたつ　ほんとに近頃は餘つ程云ふことが變なんですよ。

小しん　それが凡夫の淺猿しささねえ。おれの云ふことが變に聽えるやうぢやあ、まだまだ中々句樂の云ふことは分りやしねえよ。

焉馬　おい、もうそんな話は止さねえか。それより飮んでうんと騷がうぢやねえか。

小しん　まあ、待ちな。もう少しおれの話を聽いてくれても好いだらう。（間）それからまた句樂がこんなことを云つたことがあるんだ。この世の中位馬鹿々々しい所はねえ。何が噓で何が眞實だかまるつきり分りやしねえ。しかしその中でたつたひとつ誰でも眞實にしてゐることがある。そりやあ死ぬつて云ふことだ。

（焉馬は詰らなさうに低い聲で唄をうたつてゐる。）

柳橋　死ぬなんて話は止さうぢやねえか。

小しん　それぢやあこの話は止めにしよう。だが如何だい。今日の樣子は——

柳橋　今日は大變元氣だつたぜ。おれ達があいつの部屋に入ると、丁度あいつは本を讀んでゐるところさ。何を讀んでゐるのかと思つて見ると、それは例の風流志道軒傳なのよ。

小しん　（驚いて）おや、おれもさつきまでそいつを讀んでゐたんだぜ。

柳橋　（同じやうに驚いて）　さうかい。そいつは不思議だな。（間）　それから三人でいろんな話をしたんだが相變らず句樂のやつは傍に紫君がゐる氣でゐるらしいんだね。またいつもの通り蝮の吉兵衞さんの話をする時分になるともう分らねえ。小猿七之助だの、鳥追お松だのしまひには白井左近まで出たつけ。そのうちあいつは如何云ふ氣だか運座をやらうて云ひ出しやがつたのよ。

小しん　さうか。運座をやつたのか。

焉馬　（柳橋に代つて話し續く）　やつたことはやつたが、句樂の句が面白れえのよ。なあ、柳橋さん。何とか云つたな。句樂の句は――

柳橋　さうよ。さつきまで覺えてゐたんだが――　ええと、ひとつはかう云ふんだ。グランドの植ゑし櫻は燕枝かな。如何でえ。何だかさつぱり分らねえだらう。

焉馬　それからもうひとつ面白れえのがあつたな。それ、清正公が何とか云ふやつよ。

柳橋　うん。盲目の清正公や初櫻つてやつだらう。

焉馬　この盲目つて云ふのは、やつぱりお前のことを考へてゐたからのことなんだね。

小しん　面白れえな。狂人中々味をやるぢやねえか。

焉馬　うん、まあ運座までは好かつたんだが、それから凄い一幕があつたんだぜ。

小しん　如何したのよ。

焉馬　お前も知つてゐるだらう。あいつが大事にしてゐる鰯の根付の着いた煙草入があるだらう。急に立ち上つてあいつを出して來たから、何をするのかと思つたら、句樂のやつ凄い顏をしてあの根付を睨み付けてゐやがるのよ。さうしてまた始めやがつたなつて云ふぢやねえか。

小しん　ふん、それから――

焉馬　さうしてあいつはそれから悲しさうな顏付で、あの鰯の根付と話を始めやがつたのよ。よく聽いて見ると何でも句樂の目にはその根付が、あいつが子供の時分に見たつて云ふ、夜嵐お絹の曝し首に見えるらしいんだね。それがしまひにはまるで惚れた女にでも會つてゐるやうな調子で、もう直きお前の所へ往くから待つてゐてくれの、久しく會はねえのと、いろんなことを云つてゐるのよ。あの時の句樂の顏付つたらなかつたぜ。二人は氣味が惡くなつて直ぐに歸つてしまつたのよ。（間）　あいつ

もうあんまり長げえことはねえぜ。

小しん　さうさな。おれも如何もそんな氣がして仕方がねえんだ。しかしおれも今日やつぱり風流志道軒傳を讀んでゐたんだが――

焉馬　何もそんなことを氣にしなくつても好いぢやねえか。

小しん　何も氣にしねえけれど――何だか馬鹿に句樂に會ひてえやうな氣がするよ。會つたつて顏を見ることも出來ねえんだけれど、せめて話でもしてえなあ。

（下手から新太郎が出て來る。二十二三歲位。直ぐ格子戶を開けて家の中へ入る。）

新太郎　やあ。みんなお揃ひだな。（座敷に上つて來る）

小しん　若旦那ですね。今丁度一杯やつてゐるところでさあ。

おたつ　（座布團を進めて）　さあ、若旦那どうぞお敷き下さいまし。

新太郎　相變らず無賴漢が集まつてゐるんだね。

焉馬　いや、どうも――若旦那、先日はどうも相濟みません。

新太郎　なあに濟むも濟まないもありやしないよ。それよりも僕はあれから如何したかと思つて心配してゐたんだよ。

小しん　しかし若旦那はえらいよ。一昨日私が伺つた時に、そんな話はちつともしなかつたね。

焉馬　（杯を新太郎に差す）　若旦那、ひとつ如何です。

新太郎　や、有難う。如何だい。焉馬さん、何か面白いことでもないかね。

焉馬　面白いことつてまるつきりありませんね。第一世の中が惡くなりましたよ。女だつてほんとに惚れて來るやうなやつはありませんぜ。

小しん　しかし若旦那のおぎんさんはありやあ別さ。

焉馬　おぎさんて云やあ、まだ追手は懸かりませんかね。

新太郎　家でも呆れてしまつたと見えて、何とも云つて來ないやうだよ。

柳橋　（始めは歌ふやうに）　野暮な屋敷の大小棄てて、腰も身輕な町住居つてね。若旦那もこれで洒落れた人さ。

新太郎　あんまり洒落れてもゐやしないよ。しかしあの煙草屋の二階を借りた當座は、何だか二人でゐるのが寂しかつたけれど、馴れてしまふと結局氣樂さ。かうやつて世間を忘れたやうにして暮らしてゐるのも、また面白いやうな氣がするね。

小しん　全くさうですよ。一體世間なんてものを相手にしてゐたらきりがありませんや。（怒つたやうな調子で）世間ぐらゐ始末にならねえものはありやしねえ。まあ盲目になつてご覧なさい。その世間つてやつがはつきり形

に現はれて來ますぜ。頭もなければ尻つ尾もねえ。まるで妲妃のお百の芝居に出て來る海坊主のやうなもんでさあね。

焉馬　馬鹿なことを云つちやいけねえぜ。

小しん　嘘ぢやあねえよ。全くさう云ふものが見えるんだから不思議さね。だから私は盲目になつてもいろいろ今まで見えなかつたものが見えるから面白いのさ。私は自分の盲目になつたことなんぞは何とも思はねえが、唯氣になつて仕方がねえのは句樂ばかりさ。

新太郎　さうさね。如何も今度はすこし覺束ないやうだね。

小しん　ええ、今日も柳橋さんと焉馬とが、病院へ見舞に往つて來たさうですが、元氣は中々あるけれど云ふことが大分變なんださうですよ。今日はあの嬲（うはなり）の根付の着いた煙草入ね——若旦那もご存知でせう——あれと話をしてゐたさうですよ。

新太郎　あれは句樂が大事にしてゐた煙草入だぜ。

小しん　ええ。あいつは句樂が生命よりも大事にしてゐたもんですよ。きつとあの煙草入が句樂に何か話し懸けるんでせう。私はさうに違えねえと思ふんだが——

新太郎　さう、さう。何時だか枕元に置いてあつた水差が、口をきいたつて話があつたつけなあ。

小しん　やつぱりそれと同じわけさね。

焉馬　しかしそいつを傍で見てゐると、何だか涙がこぼれる様な心持がしますぜ。あいつと一所に遊んだ時分のことを考へたりして、あゝ句樂もこんなになりやがつたかと思ふと、人間てものは分らねえものだと、私はつくづく考へましたよ。

新太郎　（笑つて）焉馬さんもそんなことを考へるかな。

焉馬　そりやあ私だつて考へまさあね。

小しん　（沈んだ調子で）こんな落語家見てえな稼業してゐるものは、存外哀れなとばかり考へてゐるものですよ。

（沈默。新太郎は悲しさうに小しんの顏を見つめてゐる。）

柳橋　いや、話が理に落ちて來たぢやねえか。如何でえ、もう少し杯を動かしたら——。

焉馬　（急にはしやぎ出す）よし來た。さあ、今夜は飲み明かさうぜ。

小しん　盲目ながらも柳亭小しんだ。そんなことは敢て辭しやせんな。ねえ、若旦那。あなたも私達の仲間入りをした以上は、飲み明かす位のことは怖れねえでせう。

新太郎　當り前さ。そんなことを怖がつてゐたら、ここの閾は跨げやしないやね。

（皆盛んに酒を飲む。）

（新太郎は座敷の隅に置いてあつた異様な形の兜に目

を付ける。）

新太郎　おい、小しんさん。そこに置いてある兜のやうなものは何だい。

小しん　あれが例の句樂の兜さ。

新太郎　變な形の兜だなあ。如何云ふ譯で句樂はあんな兜を作つたのだらう。何しろ大變なものを作りやがつたぢやないか。（焉馬に）おい、焉馬さん。ちよつと取つて見せて吳れないか。

（焉馬はその兜を取つて新太郎に渡す。）

焉馬　若旦那。まあその兜の裏をご覽なさい。持主俳諧亭句樂と書いたこつちに、柳田金次郎と本名を書いたところがをかしいぢやありませんか。

小しん　えね、若旦那。句樂がこの兜を作つた譯が面白いんですぜ。句樂はよく今に戰があるつて云つてましたらう。この前に氣が狂つた時から、そのことを云つちやあ騷いでゐましたよ。それ、金持と貧乏人の戰ひつてやつさ。句樂はその戰の時には貧乏人の大將になつて出懸けるんだつて云ふんで、一しやう懸命に作つたのがこの兜なんでさあ。この前の時にはこの兜を冠つて病院中を暴れ廻つて困つたさうですよ。

新太郎　あゝ、その戰の話は僕も聽いたよ。それぢやあその戰に出懸けるつもりでこの兜を作つたんだねえ。（兜を見つめてゐる）

小しん　ええ、あいつはその戰を今か今かと待ち構へてゐたんですよ。だから病院に入つてゐても氣が氣ぢやあねえやね。それで軍書を讀むつもりで梅暦や風流志道軒を讀んでゐるんだから面白いよ。

焉馬　その兜から思ひ付いて句樂が作つた端唄があつたつけな。もう狂人になつてからだからすゐぶんをかしな文句がありましたぜ。誰か覺えてゐねえかな。

小しん　うん、おりやあ覺えてゐるよ。

新太郎　さうかい、ちよつとうたつてお聽かせな。

焉馬　（おたつに）おたつさん。ちよつと三味線を取つてくれませんか。

（おたつは壁に懸けた三味線を袋から出して焉馬に渡す。）

焉馬　（調子を合せて）おい、この位で好いかい。

小しん　もつと調子を低くしてくんねえ。

焉馬　よし。（調子を低くする）

小しん　おれもうろ覺えだから文句の違つてゐるところがあるかも知れねえよ。

焉馬　どうせ狂人の作つた唄だあな。

（小しんは歌ひ出さうとするけれど聲が出ない。何時か淚が盲ひた目の外に溢れて來る。焉馬は驚いて三味

線の手を留め小しんの顏を見る。)
焉馬　如何したんだい。
小しん　(何氣ない樣子で)　如何もしやしねえよ。さあ、彈いて呉れ。顫へ付きてえやうな好い聲を聽かしてやるから——
焉馬　(彈きながら獨語のやうに)　久しく小しんの唄も聽かねえなあ。
小しん　(うたひ出す)
「死ねと云ふ、死なねばならぬ今日となり、紫君の髷の天神は、諏訪法性のおん兜、一夜會はねばわれもまた、兜の下のきりぎりす、ほんに哀れぢやないかいな」
(歌ふ間絶えず小しんの目から涙が溢れ、頰を傳つて流れる。新太郎も目を潤ませて聽いてゐる。)
新太郎　おれは小しんさんの唄は始めて聽いたよ。
小しん　(寂しさうに笑つて)　いや、もう大變な聲で——(焉馬に)　久しくうたはねえから、これだけのものでも苦しいね。
焉馬　さうだらうな。しかし變な文句だな。如何しても狂人の作つた唄だね。
柳橋　こいつにも紫君つて名が入つてゐるね。
焉馬　あいつは餘つ程紫君に惚れてゐやがつたんだな。

小しん　さう云やあんなに氣が變になつたのも、紫君が死んでからのことですぜ。
焉馬　(小しんに)　しかしお前さんの聲はすつかり變つてしまつたね。
小しん　そりやあ盲目になつてからは、如何しても聲の調子が變つてしまふよ。何しろ何處から聲を出して好いんだか、盲目になり立てにはまるで見當が付きやしねえもの——今まで見えてゐたのがまるで見えなくなつてしまふんだからなあ。毎日々々夜ばかりで眞つ暗な中から人の聲が聽えて來るんだから情ないやね。
焉馬　さあ、もうそんな話は止めにしねえ。おれが彈くからみんなうたふんだぜ。さあ、柳橋さん。何かひとつやんねえな。
(焉馬は三味線を彈き始める。)
柳橋　(うたひ出す)
「かのひとをしんぞ思へばこの癪が、胸に差し込む窓の月、つづれさせてふ蟋蟀、年が明くれば侘住居、肩させすそさせ蟲の聲々、世帶染みたと云はれたい。」
(焉馬は一人面白さうにはしやいでゐる。)
焉馬　よう、よう、面白くなつて來たぜ。如何です、若旦那。何かひとつおうたひなさいな。
新太郎　僕はうたへないよ。

焉馬　笑談云つちやあいけません。私はちやんと知つてゐるんだから――。

柳橋　若旦那。隱しつこなしさ。

新太郎　僕はほんとにうたへないんだよ。

焉馬　それぢやあ私がひとつやりませう。（彈きながらうたふ。）

「裏の土藏のなか、姉やんとつんつらつん、片手に提灯片手に土藏の鍵、しばし待ちなはれ、髮を結うてしまふてね、おつかあやんを寢せ置いて、お代理參りと云うて出懸けませう、つんつらつんつらつんつらつん、四五日このかた會はなんだ、何から何まで話しましよ、勿體ないがお代理參りは、明日の晩といたしましよ、つんつらつんつらつんつらつん。」

小しん　こいつは句樂が好きな唄だぜ。よし來た。おれもうひとつやらう。

焉馬　何をやるんだい。

小しん　身ひとつをつてやつよ。今夜は句樂の好きな唄をみんなやつてしまはうぢやねえか。

焉馬　うん。さあ、好いぜ。

小しん　（うたひ出す）

「身ひとつを置所なき胸のうち、一重の心八重に解き指きり髮きり野暮な起請を神さんへ、お世話をかけて烏羽玉の、戀の闇路ぢやないかいな。」

（今度は小しんは涙を流さないでうたふ。）

焉馬　うめえ、うめえ。今度のは昔の小しんの唄を聽いてゐるやうだぜ。

新太郎　今夜句樂がゐたらさぞ面白かつたらうなあ。

小しん　あいつがゐねえと何だか寂しいやうな氣がしますね。

新太郎　句樂は今頃如何してゐるかな。

焉馬　若旦那。また鬱いでゐますね。

（この時河岸の近くを聲色つかひの舟が通り過ぎる。拍子木の音などが聽えて來る。）

焉馬　ありやあ聲色(こわいろ)つかひの舟だな。

小しん　うん、中洲や代地であぶれたやつが歸つてゆくのよ。

焉馬　如何でえ。あいつを呼ばうぢやねえか。

小しん　うん、あいつを呼んで柳橋さんの聲色でも聽くかな。

焉馬　（障子を開けて緣側へ出る）おゝい聲色屋やあい。

（開けた障子の間から大川の水の面や、河向うの灯明りなどが見える。舟の中で聲色つかひが「どうも有難うございます。」と云ふ聲が聽こえる。焉馬は障子を閉めて元のところへ坐る。）

小しん　（障子の外に向つて）　おい、何んでも好いからやつてくんねえ。

焉馬　好い景色だな。向う河岸はまるで芝居の書割のやうだつたぜ。

小しん　さうか。おれにはそれが見えねんだから情ねえ。

（聲色をつかふ聲が聴こえる「梅雨小袖昔八丈」の閻魔堂橋の出會のところ。座敷では關はずに話し續けてゐる。）

新太郎　何だかここでかうやつて君達と話をしてゐると、家のことや世の中のことなんぞ忘れてしまふね。

小しん　さうでせう。あなたはどつちが好いと思ひますね。お宅にゐて堅苦しい學問をしてゐるのと、かうやつて呑氣に日を送つてゐるのと――私はかうやつて日を送る方が、人間眞實の暮らし方ぢやないかと思ひますがね。

新太郎　僕だつてさう思へばこそ家を飛び出して、あんな女と一所に暮らしてゐるのだ。

焉馬　しかし若旦那もずゐぶん變つた方さね。小間使と一所にあんな汚ない煙草屋の二階にゐるなんて――お宅にいらつしやりやあ若旦那で立派にやつてゆける方ぢやありませんか。

新太郎　それが嫌ひだから因果なんだよ。考へて見れば僕がこんなことを考へるやうになつたのも、みんな句樂の爲めだと思ふよ。句樂は僕に如何して生きたら好いかつてことを敎へて呉れたのだ。さうして僕はあいつの云ふ通りになつたのだ。

（聲色が終ると同時に急に寂寞となる。）

小しん　柳橋さん。丁度鳴物がお誂へだ。ひとつ十八番の五代目でも聴かうぢやねえか。（障子の外に向つて）　おい、鳴物だけやつてくんねえ。柳橋さん。何をやるね。

柳橋　さうさな、例によつて野晒悟助でもやらうよ。粹菩提悟道俠客――（聲色をつかふ）

（柳橋の聲色の終る少し前に、おぎんが下手から出て來る。格子戸の前に佇んでゐる。）

柳橋　（聲色を終つて）　いや、如何もいけねえ。年を取ると聲が續かねえよ。

焉馬　まだそんな年でもねえぢやねえか。

小しん　（おたつに）　おい、おたつ。

（おたつは障子を開けて緣側に出て、聲色つかひに金を遣り、また元のところへ坐る。聲色つかひの舟は拍子木を打ちながら次第に遠ざかつてゆく。）

おぎん　（格子の外で）　ご免下さいまし。

小しん　おや、誰だか來たやうだぜ。

おたつ　（立ち上つて）　どなた――關はないからお入んなさいましよ。（おぎんを見て）　おや、おぎんさんですね。

おぎん　（云ひにくさうに）　あの、何はこちらへ伺つてをりますでせうか。
おたつ　若旦那ですか。えゝ、いらつしやいますよ。
新太郎　（坐つたまゝ）　おい、何か用があるのかい。
小しん　おぎんさん。まあ、お上んなさい。
（おぎん格子戸を開けて中に入り長火鉢の傍に坐る。）
おぎん　あの今句樂さんからお使が來て、こんな手紙を持つてまゐりましたよ。（手紙を出す）
新太郎　句樂から手紙だつて――何だらう。何だか變だな。どらお見せ――柳橋さん、はばかり樣。取つて呉れないか。
（柳橋はおぎんから手紙を受取つて新太郎に渡す。）
新太郎　（手紙を開いて）　何を云つて來たんだらう。
小しん　少しをかしうござんすね。句樂から手紙だなんて――あの狂人から手紙が來るなんてことはねえと思ふんだがね。
新太郎　さうさな。何だか不思議なやうな氣がするね。（手紙を見る）　何だかまるで讀めやしない。
小しん　若旦那。讀んで聽かして下さいよ。句樂の手紙なら私も聽きたいやね。
新太郎　ちよつとお待ちよ。今讀むから――（手紙を讀む）
私は今日より志道軒と一所に、旅をするつもりに御座候。何處へ往くと云ふあてもなく、例の通り飄然として――飄然の飄の字に氷つて字が書いてあるぜ。
爲馬　（笑つて）　飄然として溶けるつもりでゐやがるんだな。
新太郎　（手紙を讀みつゞける）　飄然として旅を致すべく候。志道軒と二人連れに候へば、何かと面白きこともあるだらうと思ひ、それが樂しみに御座候。くはしきことは旅先より申上ぐべく候。何だか發句見たいなものが書いてあるぜ。（讀みにくさうに考へてゐる）　行く春やきちがひ二人旅に出るか。
小しん　自分で狂人つて云つてるところは面白いね。しかし何だかまるで謎見てえな手紙ですね。あいつは如何云ふ氣でこんな手紙をあなたの所へ寄越したのだらうな。
新太郎　おい、おぎん。この手紙を持つて來た人づて云ふのは、一體どんな人だつたい。
おぎん　何だか氣味の惡いお爺さんでしたわ。顏に一杯痘痕があつて、め組と書いた差つ子を着てゐましたよ。
小しん　（驚いて）　何ですつて、おぎんさん。そのお爺さんは顏に痘痕があつて、め組の差つ子を着てゐたんですか。
おぎん　ええ。
小しん　うん、それぢやあいつに違えねえ。なあ、爲馬。

焉馬　あいつつて誰よ。
小しん　今め組の差つ子を着てゐる人なんぞありやあしねえぜ。それに顔に痘痕があると云やあ大抵見當は付くだらう。
焉馬　分らねえな。
小しん　そいつは蝮の吉兵衞さんだぜ。
（皆驚いて顏を見合はせる。下手からおとしが出て來る。格子戸を開けて家の中に入る。）
おたつ　おや、おとしさんが見えましたよ。
焉馬　如何したい。おとしさん。
小しん　まあこつちへお上んなさい。今不思議な手紙を讀んでゐるところさ。
（おとしは座敷に通ると同時に急に泣き始める。）
新太郎　如何したんだい。
小しん　默つて泣いてゐちやあ分らねえや。
（沈默。）
おとし　（歔欷しながら）　あの兄は到頭さつき亡くなりまして——
新太郎　何だつて——句樂さんが死んだつて——ほんとかい。
おとし　ええ、急に容體が惡くなりまして、さつき到頭呼吸を引き取つてしまひました。

新太郎　さうか。句樂は到頭死んだのか。
（手紙を握つた新太郎の手は微かに顫ふ。）
おとし　さつき焉馬さんと柳橋さんがいらつしつた時分は何ともなかつたのですが、あれからまた例の紫君と話を始めたのでございますよ。さうして一人で泣いたり笑つたりしてゐましたが、そのうち若旦那の所へ手紙を出すんだつて、何か書いては破つたりした揚句、しまひにやつと書き上げた手紙を持つて、外へ出懸ようとするのでございます。
新太郎　（怖しさうに）　ふうん、僕の所へ手紙を書いたんだね。
おとし　ええ、さうすると若旦那、不思議ぢやありませんか。あの部屋の戸がすうつと開いたのでございます。さうして誰か入つて來たやうな氣勢がしましたが、それと同時に兄は誰かと話を始めました。よくよくその言葉を聽いて見ると、それがあの蝮の吉兵衞さんと話をしてゐるのぢやありませんか。
小しん　ねえ、若旦那。私の云つた通りでせう。
おとし　それから急に容體が惡くなりましてね。ものの一時間と經たないうちに呼吸を引取つてしまつたのでございます。
（沈默。長い間。小しんと新太郎とは聲を立てずに泣

いてゐる。）

爲馬（おとしに）　おとしさん、今病院には誰もゐねえんだね。

おとし　え丶、病院の方が附いてゐるだけです。

柳橋　それぢやあ爲馬さん。おとしさんも女のことだし、何かと後の用事もあるだらうから、これから病院へ往つて來ようぢやねえか。

おとし　實はそのお願に上りましたので――

爲馬　それぢやあ直ぐ出懸けよう。

小しん　おれが目が見えると一所に往くんだがなあ。

（柳橋とおとしは一所に格子戸から出て下手に入る。）

小しん（悲しげに）　若旦那。到頭句樂も死んでしまひましたね。

新太郎　あ丶、何だかまるで夢のやうな氣がするねえ。ついこの間まで一所に飲み歩いてゐたんだが考へて見りやあ句樂が死んだことは、僕に取つてどの位悲しいことだか知れやしない。僕はあいつがゐるんでこんなにその日その日を送るやうな暮らし方をするやうになつたのだ。あいつの口から出る言葉の中から、眞實の事を聽くのを喜んで、今日までかうやつて暮して來たのだ。もうあいつが死んでしまつたら、あんな言葉を聽くことが出來ないんだなあ。

小しん　若旦那。私だつて句樂が死んだことがどんなに悲しいか知れやしねえ。あいつと私とは何か因緣があるやうな氣がして仕方がねえ。あいつが狂人になると同時に、私も盲目になつてしまつたんです。しかしその時私はどんなに狂人になつた句樂が羨ましかつたか知れやしねえ。あなたは盲目になつた時の心持をご存知ないでせうがこの位世の中に悲しいものはありやしませんぜ。

新太郎　そりやあさうだらうなあ。

小しん　しかし狂人は好うござんすよ。世の中に狂人ぐらゐ自由な人間はありやあしねえ。何を云つたつて何をしたつて、ありやあ狂人だと云ふんで通つて往くんだ。考へて見りやあ句樂なんぞもずゐぶん勝手なことを云つたりしたりして來ましたぜ。（思ひ出すやうな顔付をして）さうでしたなあ。始めて氣が狂つた時のことでしたよ。いきなり私の所へ飛び込んで來て、これから深川の不動様へ往くから一所に來ねえかつて云ふんでせう。まあ、その時の形が不思議さね。何處で探して來たんだか職工の着るやうな服を着て、箒を持つてゐるんですよ。何をしに往くんだつて聽いたら、何しろ今の世の中には、魂の粉が一面に散つてゐるから、そいつを掃き集めに往くんだつて云ふんでせう。如何して深川の不動様へ往くんだつて聽くと、親分の家から掃除を始めるんだつて云やが

るのさ。不動様を親分だと思つてゐやがるんだから面白いぢやありませんか。（急に悲しさうに）しかしもうその句樂にも會へねえんだなあ。
新太郎　句樂が掃除しないと世の中は、また魂の粉だらけになるぜ。小しんさん。僕もちよつと病院へ往つて來るよ。（立ち上がつて）あゝ、それから道で蝶丸に會つたから、こゝに來いつて云つて置いたから來るかも知れないよ。
小しん　（寂しさうに）若旦那。もう少しこゝにゐて下さいな。私一人になると寂しくつて仕方がないから――
新太郎　さうかい。それぢやもう少しゐよう。（おぎんに）お前はもう歸つても好いよ。
（おぎんは挨拶して出てゆく。下手に入る。殆んど入れ違ひに蝶丸とその女房おせんが出て來る。蝶丸は盲目の新内語り。三十四五歳。おせんは二十五六歳。）
蝶丸　（格子戸の外より）ご免下さいまし。
新太郎　（聲を聽き付けて）誰だい。蝶丸さんかい。
蝶丸　へえ、左樣でございます。
おたつ　お上んなさいよ。
（蝶丸とおせんは家の中に入つて、長火鉢の傍に坐る。）
小しん　蝶丸さん。句樂が死んだよ。
蝶丸　へえ、ほんとですかい。惜しいことをしましたな。
小しん　（何か考へながら）句樂は何が好きだつたかな。
蝶丸　さうさね。尾上伊太八か――新兵衞小女郎なんども好きのやうでしたね。
新太郎　句樂も旅に往つた人だ。「比翼の初旅」でもやつてもらはうぢやないか。
小しん　若旦那。泣かして下さい。ね。よござんすか。笑つちやいけませんぜ。私は今夜は泣きたくつて泣きたくつてたまらねえんだから――
新太郎　小しんさん。おれも一所に泣かうよ。それぢやあ蝶丸さん。「比翼の初旅」をやつて呉れないか。これが句樂紫君だつたらあいつも嬉しかつたらうになあ。
小しん　志道軒と一所に旅をしてゐる氣だから可哀さうですよ。
（蝶丸はうたひ始める。おせんは三味線を彈く。）
蝶丸　（うたふ）
「戀の港にうち寄する浪の紋日の賑はひは、都に負けぬ色どころ三國と云へるわけざとは、北國一の遊女町よねの情にかかり舟、碇下さぬ客もなく、中に玉屋の新兵衞、今日もつくづく入相の、鐘が敵の浮世とて、揚屋の不埒重なりし金の代りに手ばまつの、粹が嵩じ

て水風呂の桶伏せになる身ぞつらや、新兵衞おろおろ涙ぐみ、えゝ無念やなあ、この港で玉屋の新兵衞とて人に知られた身なれども、色ゆゑに身代はぼうふり蟲同前に、桶の中にまいまいと、日影さへ見ぬ戀の闇、逢ひたい見たい太夫にも、同じ廓に居は居ながら、顏さへ見る目嗅ぐ鼻の、鴇母を初め主人夫婦が見るまへも、遠慮ありまの人形筆。」

（小しんは烈しく泣く。新太郎は歔欷をする。新内の唄が悲しさうに續く。）

——幕——

小しんと焉馬（一幕）

人物

小しん　盲目の落語家
焉馬　その友達の落語家
おたつ　小しんの女房
おきよ　小しんの貰ひ娘
岡田　小しんや焉馬の以前の贔屓
小焉馬　焉馬の弟子の前座

時代

大正五六年頃

場所

淺草の或る裏町

落語家の小しんの家。下手は格子戸のある玄關で、格子戸の外は直ぐに裏町の人通りの少ない往來になつてゐる。玄關の中はタタキになつてゐて、下駄箱、傘置などがあり、上手には鐵の燈籠が吊してある。玄關を上がると二疊の部屋。その正面の障子の向うは二坪ばかりの狹い庭で、暗い植込の中に南天の赤いのがかへつて寂しい。

その部屋と襖を隔てて六疊の座敷。正面に床の間と神棚。床の間には蜀山人の狂歌を書いた懸物が懸かつてゐて、その前にはかなり大きな狸の置物が紅い蒲團に載せて置かれてある。神棚の前の方に目の描いてない赤い張子の達磨。座敷の隅に其角堂機一の吉原の句ばかりの式紙を貼り交ぜにした枕屏風。その屏風の上には袖疊みにした唐棧の半纏が懸かつてゐる。

この座敷とは障子を隔てて、上手にもう一間四疊半の茶の間。箪笥、長火鉢、茶棚、チヤブ臺など上手の壁には袋に入れた子供持の小形の三味線が一挺懸かつてゐる。正面は障子。その向うは臺所になつてゐて、ここからも人の出入りが出來る。

六疊の座敷と四疊半の茶の間に、電燈が一つづつ。しかし幕の明いた時は夕方だけれども、まだ灯の點く時刻にはなつてゐない。

十二月の七八日頃の夕方から夜にかけて。

六疊の座敷の眞ん中のところに、小しんと小焉馬とが向ひ合つて坐つてゐる。小しんは三十二三歳の色の黒い痩せた男で、盲目の上に蹇である。黒八の襟のかかつた古ぼけた八端の褞袍。小焉馬はまだ二十一二歳の小柄な男。ぞろりとした藝人らしい身裝。

丁度小しんが小鳶馬に「五人廻し」の稽古をしてやつてゐるところ。

小しん　いゝかい、お前。こゝんとこは何だぜ。息ひとつで持たせなくつちやあならねえところだから、よくこの疊み込んでゆく調子を覺え込んぢまはなくつちやあいけねえぜ。知らなければ云つて聞かせるから、耳の穴をかつぽじくつてよく聞きやがれ、この才槌め。」つて云ふと、相手の若え衆が「へえ。」と云つて受けらあ。さあ、それから先なんだが――

小鳶馬　（頭を掻きながら）　師匠、怖れ入りますがもう一度どうぞ。

小しん　（點頭いて）　よし來た。かう云ふ調子でやるんだ。（すつかり高座に上がつた時のやうな樣子で）「へえ。」と云ふ言葉にすぐおつ冠せて「吉原と云ふものは、慶長年間には京橋の柳町にあつたのだ。京橋が大門通へ移ひけて、明暦三年本郷の丸山の大火事で全燒になつて、小田原の庄司甚內が願ひを出して、それから吉原へ移けたつてことも、何代目の養子は何處から來て、誰は何時に死んで、施主は誰で、配り物は饅頭か赤飯か、寺は何處だつてこともちやんと心得てゐるんだ。お前のやうな才槌野郎は知るめえが、こちとらはおぎやあと生れて三歲の時からこの廓に繰り込んで、何處の女はもと品川にゐたか新宿にゐたか千住にゐたか根津にゐたか、何處から何處へ幾ら幾らで住み替へをしたか、借金はいくらあるか、何時になつて年が開けるか、誰が情夫に取られてゐるか、殘らずちやんと知つてゐるお兄さんだ。」とかうだんだん調子を早めて疊み込んでゆくんだが、如何でえ、もう大概吞み込めたらう。

小鳶馬　へえ、まあ、あらかたは吞み込みましたが、如何もこいつは幾度も繰り返して練習をしねえと、うまくその調子が出さうもありませんよ。

小しん　（笑つて）　ははは、練習はいいね。流石は亞米利加がへりの師匠を持つてゐるだけあつて、使ふ言葉が新しいや。

小鳶馬　師匠、まあ。そんなに冷かしつこはなしにしませう。

小しん　なあに、別に冷かした譯ぢやねえんだよ。（ちよつと間を置いてから寂しさうに）　しかしおいらなんかかうやつて燻り込んでゐるもんだから、だんだん時世に遲れてゆくなあ。

小鳶馬　笑談云つちやいけねえ。師匠なんかそんなことはありませんやね。

小しん　ところがさうでねえつてことよ。おれは目が見えなくなつてから、不思議にほんとのことがよく分つて仕

方がねえんだ。人間ほんとのことが分る位寂しいことはありやしねえぜ。

小焉馬　（怪訝さうに）へえ、さうですかね。あつしらにはほんとのことが分つた方が世の中は安心して渡れるやうな氣がしますがね。

小しん　（首を振つて）ところがそれが大間違ひ。おれも目が明いてゐる中はさう思つてゐたが、今になつて見るとそれが飛んだ思違ひだと云ふことが分つたのさ。何しろほんとのこと位怖ろしいものはありやしねえぜ。まあ譬へがだ。ここに惚れ合つた男と女とがゐて、これが眞底からほんとに惚れ合つてゐるものとして見ねえ。こいつは二人とも一所に死ぬより外道がねえぢやねえか。いづれどつちも人間のこつたから一度は死ななくつちやならねえ。さてどつちか一人死んだ場合殘つた一人は如何したらいいと思ふ。おれは二人がほんとに惚れ合つてゐるものなら殘つた一人はとても生きちやあゐられねえと思ふね。しかし、お前、そこで一人が死んだと云つても、それぢやあ一所に死んだんぢやありやしねえや。つまり人間てえものは何處まで往つても一人ぼつちなんだ。一人で生れて來て一人で死んで往くんだ（徐かにゆつくりと）一人ぼつち――たつた一人で死んで往く――こんな怖ろしいほんとのことが又と世の中にあるだらうか。なあ、おい、これがほんとのこととしたら人間位寂しいものはねえぢやあねえか。

小焉馬　へえ、しかし、師匠。未來つてやつがあるでせう。

小しん　（冷やかに笑つて）なに、未來だ。箆棒め。そんなものがあつて堪るものけえ。おれはもうこの世の中でせえ倦き倦きしてゐるんだ。この上未來だの來世だのがあられちや退屈でくさくさしちやはあな。

小焉馬　（急に氣の毒になつたやうな顏付で）成程ね、師匠の身になつて見れあさう考へるも無理もありませんよ。

小しん　（怒つたやうな調子で）何を云つてやがるんでえ利いた風なことを云やがらあ。さあ、早く歸んな。早く往かねえと席の方が遲くなるぜ。

小焉馬　なあに並木だから直きなんです。

小しん　（或る寂しい心持で）さうか。焉馬の眞打（とり）は並木か。

（短かい間の沈默。小焉馬はそろそろ歸り支度を始める。）

小焉馬　それぢやあ、師匠、また伺ひます。

小しん　あゝ、今度までによく今の處をよく呑み込んで來るんだぜ。

小焉馬　へえ、かしこまりました（茶の間の方に向つて）それぢやあ、お内儀さん。御免下さいまし。

小しん　（それを遮るやうに）ああ、おたつはゐねえや、

さつきゝい坊を連れて湯に入りに出懸けたやうだつたから——

小焉馬　あ、さうですかい。それぢやあ又。

（小焉馬は立ち上つて下手の格子戸から出てゆく。）

（それと殆んど同時に上手の勝手口から小しんの女房のおたつが貰ひ娘のおきよを連れて入つて來る。おたつは二十八九歳位の色は淺黑いけれど、ちよつと美しい女郎あがりの女。おきよは今年六つになる可愛らしい女の子。二人は直ぐに茶の間に來る。）

おたつ　おお、おお、お家の中の暗いこと。如何したんだらう。電氣はまだ點かないのかねえ。（座敷の方に向つて）只今。（おきよに）おや、きいちやんは只今を云ふのを忘れたの。

おきよ　（氣が付いたやうに）只今。

小しん　ああ、歸つて來たのか。さあ、きい坊、ここへ來な。

おきよ　（小しんの傍へ來て）なあに、父ちやん。

小しん　ううん、何でもねえけれど、まあ、ここへ來なつてことよ。（おきよの額を手探りに觸つて見ながら）おや、頭髮を綺麗に結つて貰つて來たな。

おきよ　ああ、お湯から上がつてから母ちやんが結つて呉れたの。

小しん　さうか。いい子になつたらおとなしくしなくつちやあいけねえぜ。

おきよ　おとなしくしてゐたらね、父ちやんあたいを吉原へ連れて往つて呉れるかい。

小しん　（笑ひながら）馬鹿。吉原つてところはきい坊見てえな子供の往くところぢやあねえんだ。（茶の間の方に向つて）おい、おたつ。ほんとに仕様がねえな。誰が吉原なんてことを敎へやがつたんだらう。

おたつ　小焉馬さんか柳左さんか、うちにお稽古に來る若い𨻶が話してゐるのでも聞いたのでせうよ。

小しん　さうかも知れねえ。ほんとに子供の前ぢやあうつかり話も出來やあしねえ。

おたつ　全くさ（笑談のやうに）ねえ、きいちやん。もうこれから吉原へなんぞ往きたがるんぢやないよ。

おきよ　（無邪氣に）だつて母ちやんは吉原にゐたんぢやないの。

おたつ　（ちよつとぎくりとして）何だつて、誰からお前はそんなことを聞いたんだい。（こつちの座敷に入つて來る）

おきよ　（おどおどしながら）だつて何時だか焉馬の叔父さんがさう云つてゐたもの。

小しん　（笑つて）こいつは吉原へ連れて往つてやるなん

て云つたのも、ひよつとすると焉馬の野郎かも知れねえぜ。
おたつ　（急に思ひ出したやうに）ああ、さう云へばね、今あたしお湯で焉馬さんのおかみさんに逢ひましたよ。
小しん　焉馬のかみさん――おかねさんにか。
おたつ　ああ。
小しん　（歎息をするやうに）あの女も可哀さうな女さ。
おたつ　焉馬さんは近頃まるで家に歸らないらしいね。
小しん　ふうん、おかねさんは何かお前に云つてゐたかい。
おたつ　別にくはしい話は聞かなかつたけれども、兎も角も近頃まるで家に寄り付かないで困つちまふと云ふことだけは云つてゐたよ。何だつてね。焉馬さんは近頃清元の延多津さんといゝ仲になつてゐるんだつてね。
小しん　うん、そんな噂だな。（半ばひとり言のやうに）あいつにもあれきり逢はねえが、相變らず「ずつこけ」を正でいつてゐやがるんだらう。なあ、おたつ。ありやあ今年の何時頃だつたらうな。
おたつ　（ちよつとその間が分らないやうな樣子で）あれつて云ふと――
小しん　それ、焉馬とおれとが喧嘩した晩よ。あん畜生、根岸の二代目にさんざ世話になりやあがつたのも忘れて、おれの前で惡口を云やがつたから、おれがうんととつちめてやつたんだ。さうするとその翌晩ぐでんぐでんに醉つ拂ひやがつて、手鍵を持つておれのところへ暴れ込んで來やがつたことがあつたぢやねえか。
おたつ　ああ、ありや慥か今年の七月のこつたよ。何でも三社樣のお祭時分のことのやうに覺えてゐるから――
小しん　（懷かしさうに）さうかなあ。さうするとおれはもう半年近くも焉馬の野郎に逢はねえんだな。

（短かい間の沈默。電燈が點かないので家の中はもうかなり暗い。）

おたつ　（電燈を見上げて）如何したんだらう。今日は電氣が點くのが馬鹿に遲いねえ。
小しん　何だ。まだ電氣が點かねえのか。よし來た。それぢやおれが直ぐ點くやうにお呪禁をやつてやらう。いいか。きい坊。電氣を見てゐな。もう直きつと點くからな。いいか。

（小しんは指を組んでお呪禁するやうな眞似をする。やや長い間を置いて電燈が急にぱつと點く。）

おきよ　やあ、父ちやん、電氣が點いたよ。
小しん　（笑つて）そうれ、見ねえ。父ちやんのお呪禁はよく利くだらう。
おたつ　（同じやうに笑つて）ははは、うまく電氣と息が合つたもんだね。（立つて茶の間の方へゆく）

小しん　（嘲けるやうに笑つて）ほんとに目の明いてゐる奴等は可哀さうなもんだな。おれはもう目が見えなくなつてから六年になるが、盲目になつて口惜しいなんて思つたことはただの一度だつてありやしねえぜ。
おたつ　そりやお前さんが強情つ張りだからさ。
小しん　なあにおらあ負け惜しみで云つてゐるんぢやあねえぜ。全くのところ盲目になつた方がどの位幸福だか知れねえと思つてゐるね。幸福だとも――第一お前盲目になると目の明いてゐるうちに見えなかつたものが、はつきりと見えるやうになるからなあ。
おたつ　（茶化すやうに）へえ、さうかね。そりやあかへつて重寶だね。
小しん　何だ。笑談だと思つてゐやがらあ、へつ、そこが凡夫の淺猿しさだ。（云つてから氣付いて）おつとこいつは女にやあ通用しねえ文句だつたな。（と笑つたがまたもとの寂しいやうな心持にかへつて）しかしさう云ふ風にこれまで見えなかつたものがはつきり見えるやうになつてからは、幸福だとは思ふものゝ、またひどく寂しい時もあるんだ。何しろいろんな人の思つてゐること――つまり「こころ」よ――こいつがはつきり目に見えるんだから堪つたもんぢやあねえや。こいつはこんなことを考へてゐやがるのかと思つて思はずぞつとすることもあるし、あゝこいつの考へてゐることとおれの考へてゐることはかうも違ふかと思つて急に寂しくなることもある。さう云ふ風にしていろんな人の「こころ」がはつきり目に見えるやうになつてから、おれはいよいよ人間てえものは結局一人ぼつちだつてことが分るやうになつたね。（ゆつくりしんみりと）一人ぼつち――この位生きてゐる人間に取つて寂しい言葉はありやしねえぜ。
おきよ　（子供の雜誌を見てゐたが突然顏を上げて）父ちやん、あたいも一人ぼつちなのかい。
小しん　（急に涙を誘はれて無言）
おきよ　（返事がないので不思議さうに小しんの顏を見てゐる）
小しん　（直ぐ紛らすやうに笑つて）なあにきい坊は一人ぼつちなものか。かうやつて父ちやんや母ちやんがゐるぢやあねえか。
（短かい間の沈默。）
焉馬と岡田とが下手から出て來る。焉馬は三十五六歳位の小柄な男で、何處か酒に荒んだやうな顏付をしてゐる。宗匠の着るやうな十德のやうな外套に鳥打帽子。岡田は四十四五歳になる小肥りの男で、今はすつかり零落しきつてゐるけれども、以前は小しんや焉馬などを贔屓にして、一時は「今紀文」などと云はれた人。縞

目も分らなくなつたやうな結城の着物に黑い無地の羽織。緣の狹い色の褪めた帽子。汚れた前掛。二人はもうかなり醉つてゐるらしく、岡田が先きに荒々しく格子戶を開けて中に入る。）

岡田　（大きな聲で）　おい、小しんさん家かい。おれだよ。おれだよ。

小しん　（直ぐに岡田と云ふことを知つて）　おや、旦那ですかい。さあ、どうぞお上がんなすつて下さい。

岡田　（やつぱり玄關に立つたまま）　なにね、今夜は一人連れがあるんだよ。

小しん　いいぢやありませんか、お連れの方も——（茶の間の方に向つて）　おたつ。岡田の旦那だ。座蒲團を持つて來な。

おたつ　（座蒲團を敷いてから玄關の方へ來て）　まあ、旦那。お上がんなさいましな。

岡田　それぢやあちよつとお邪魔するかな　（焉馬の方を振り返つて低い聲で）　おい、上がらうぢやないか。

（岡田はずんずん座敷の方へ來る。直ぐ後から焉馬がおづおづ附いて來る。おたつは焉馬の顏を見てちよつとびつくりしたやうな顏付。おきよを連れて茶の間の方へ來る。）

小しん　如何も旦那しばらく。

岡田　（坐つて）　ああ、しばらく。如何だい、近頃身體の工合は。席の方は出てゐるのかね。

小しん　席の方も近頃骨が折れて仕樣がありませんから、今月の上席から休ませて貰ひました。

岡田　さうか。そりやあその方がいゝだらう。あんまり無理をするといけねえからな。

小しん　ええ。（俯つむく）

岡田　（やゝ長い間を置いた後で）　あのな、今夜はな、實は焉馬を連れて來たんだよ。何時ぞや喧嘩をして以來まるつきり往來（ゆきき）もしねえつて話を聞いてゐたから、餘計なお節介かも知れないが、また元のやうな仲になつて貰はうと思つて、それで今夜焉馬を連れて來た譯なんだが、如何だい、ひとつおれの顏を立てゝ、さつぱりと仲直りをして吳れまいか。

小しん　（俯つ向いたまゝ無言）

岡田　如何だね。お前と焉馬とは昨今の交際と云ふ譯ではなく、子供の時分からの友達で、世間でも焉馬と云へば直ぐお前のことを思ふし、またお前の名を云へば直ぐ焉馬のことを思ふと云つたやうな工合で、云はば切つても切れねえ腐れ緣、と云つちやあ少し變だが、まあ、さう云つたやうな仲ぢやあないか。地體喧嘩の原因つて云ふのがあんなくだらねえことだし——

小しん　（顔を上げてその言葉を遮るやうに）　旦那。依怙地なことを云ふやうですが、あつしあくだらねえことで喧嘩をした覺えはありませんがね。

岡田　そりやあお前にはお前だけの理窟はあるだらうが、まあ、そこんところはおれに免じて、如何だい、ひとつ仲直りをしてやつて呉れないか。兎に角焉馬もかうやつて來てゐるこつたし、お前さへうんと承知をして呉れりやそれで濟むことなんだから――（焉馬に向つて）　おいお前も何とか云つたらいゝぢやないか。

焉馬　へえ。（小しんに向つて）　仙ちやん。（小しんの名）全く濟まなかつたよ。勘忍して呉んねえ。いろいろ世話になつた二代目のことをあんなに云ふ氣はなかつたんだが、そこが、それ、ついものゝ機會であんなことになつちまつたんだからな。

小しん　（點頭いて）　さう云つて呉れりや俺だつて話がしいいやな。何も好んで往來をしずにゐるつて譯ぢやあねえんだから、また以前のやうな交際にならうぢやねえか。

岡田　さうか。それぢやあ承知して呉れたんだな。ありがてえ。これでおれも口の利き甲斐があつたと云ふもんだ。さう極まりやあひとつ仲直りに一杯やらうぢやねえか。（立つて茶の間の方へ往つて）　おい、おたつさん。濟まないがこれで酒と、それから肴を何か見つくろつて呉れないか。

小しん　（金を渡さうとする岡田に向つて）　旦那。そんな御心配はようござんすよ。（おたつに）　おい、おたつ。ちよつとここへ來な。

（おたつ小しんの傍に來る。小しんはおたつの耳にさゝやく。おたつはまた茶の間の方へ戻つて直ぐに酒の支度を始める。）

岡田　（また元のところに坐つて）　ああ。ありがてえ、ありがてえ。おれはもうこの間からお前達二人のことが氣になつて仕方がなかつたんだ。しかしこいつあ强情つ張りの小しんのことだから中々承知しめえと思つて内々苦に病んでゐたんだが、かう早く話しが附いたのは何よりだつた。

焉馬　（頭を掻いて）　如何もいろいろ御心配を懸けて相濟みません。

岡田　なあに濟むも濟まないもあるものかな。（不圖枕屏風に目を付けて）　おや、こいつは見馴れねえ屏風だな。ふふん、其角堂の句か。何だ――「居殘りのよく寢ることよ春の雨」か。（笑つて）　ははは、こいつは佐平次だな。成程、小しんの家にありさうな屏風だ。

小しん　旦那その屏風は因緣付きの屏風なんですぜ。

岡田　へえ。さうかい。一體それは如何云ふ因緣なんだね。

小しん　柳家小しん屛風の由來と云つたところで、たいしたことぢやあねえんですよ。亡くなつた句樂が死ぬ少し前に、自分の得意で演つてゐた話――「ちきり伊勢屋」だとか、また今の「居殘佐平次」なんてやつの句を其角堂の宗匠に賴んで書いて貰つて、それをあの表具屋の忠助爺さん――旦那も御承知のあの蝮の吉兵衞さんの友達だとか云ふ、あの爺さんのところへ屛風にするやうに賴んであつたんでさあ。しかしまだ屛風が出來上がらねえうちに句樂のやつ死んぢまつたもんですから、それで到頭廻り廻つてあつしのところへ來るやうになつたんです。

岡田　さうか。そいつあ面白れえ屛風だな。

焉馬　おいらあまた因緣附きだと云ふから、屛風の陰から妖怪でも出るんぢやあねえかと思つて氣が氣ぢやあなかつたぜ。

小しん　なあに出りや句樂の幽靈位のもんだあな。

焉馬　あいつのこつたから出るといきなり酒が吞みてえつて云ふだらうぜ。

（三人一所に聲を立てて笑ふ。）

（おたつ茶の間の方から盃洗や箸などを載せたチャブ臺を運んで來る。）

おたつ　旦那も焉馬さんも何もございませんけれど――

岡田　いやもう酒さへありやあ結構なんだよ。

焉馬　（おたつに向つて）おたつさん。お聞きの通の次第で、これからまたちよくちよく伺ひますからどうぞよろしく。

おたつ　何ですねえ、焉馬さん。いやに改まつて――

岡田　さあ、さあ、まあ、そんな挨拶は拔きにして一杯やらうぢやないか。（猪口を取り上げる）

焉馬　仙ちやんはコツプだな。（コップを小しんの手に持たせてやる）

小しん　おい、おたつ。旦那にお酌をしねえか。

（おたつは岡田と焉馬にお酌をした後で、小しんのコップに六分目程酒を注ぐ。）

小しん　（コップを握つたままおたつに）おい、こりやあお燗が少し溫過ぎるぜ。

おたつ　ああ、さう。お湯がよく沸いてゐなかつたものだから――（立つて茶の間の方へゆく）

（みんな盛んに飲み始める。おたつは時刻を見計つて茶の間の方から德利を運んでゐるんだが如何もそれが間に合はない時の方が多い。その時には小しんはきつと極つたやうに「おたつ、早く酒を持つて來や。」と云ふおきよは茶の間の方へ來て人形なぞを持ち出して遊んでゐたが、何時の間にかそこへ眠つてしまふ。）

岡田　（直ぐ醉つて）あゝ、ありがてえ、ありがてえ。こ

れでもうすつかり安心した。いいかい、いいかい。今夜はおれは醉つ拂ふぜ。

焉馬　酒を飲んで醉はねえなんて篦棒な話はありませんやね。旦那が醉ふんならあつしも醉はあ。なあ仙ちやん、いいだらう。

小しん　(點頭いて)　ああ、いいとも。

岡田　(急に眞面目になつて)　いけねえ、いけねえ。おれは醉つ拂つてもいいけれど、お前は醉つちやいけねえよ。

焉馬　だつて、旦那。そりや無理ぢやありませんか。酒を飲んで醉つちやいけねえなんて、あつしにはそんな器用な眞似は出來ませんや。

岡田　お前は如何も酒つ癖が悪いからな。しかし、まあ、いいや。醉つてまた喧嘩なんぞされると困るけれど、まさか今夜つて今夜はそんなことはねえだらう。

焉馬　(恨めしさうに)　笑談云つてらあ。旦那はあたしが喧嘩を稼業にしてゐるやうに思つてるんだからひどいや。

岡田　(笑つて)　まあ、いいや。さあ、お酌だ。お酌だ。

(焉馬の杯に注いでやる)

小しん　なあにね、旦那。焉馬は近頃喧嘩をするやうな荒事師ぢやあねえんださうですぜ。

岡田　へえ、それぢやあ近頃どんな役どころを往つてゐるんだい。

小しん　近頃は如何してもうすつかり二枚目ださうですよ。

焉馬　(話がよく分らないやうな顔付で)　何でえ、仙ちやん。

小しん　白ばくれちやいけねえぜ。旦那ももう多分誰かから聞いて、御承知のことだらうと思ひますがね。

岡田　いいえ。知らないよ。何だい。

小しん　なあにたかが色戀の話なんですが、相手が焉馬にやあちつと職過ぎるんでさあ。

焉馬　(やつと氣が付いて)　いけねえよ、仙ちやん。そんなことを云つちやあ――(岡田に)　旦那、嘘ですよ。誰があんな延多津見てえな女に惚れるもんですかね。

岡田　さうか。その相手つて云ふのは延多津か。

小しん　(笑つて)　何でえ、自分の口から云つちまひやがつたぢやねえか。

焉馬　おつと、こいつは大しくじり。しかし、旦那。延多津ならちよつと可愛くつてようござんせう。

小しん　おや、おや、もう惚氣だ。

岡田　何しろ焉馬に會つちやあ敵はねえよ。あれで下座の女に手を出さねえといい落語家なんだがな。

小しん　玉の杯底あるが如き男なんだから全く厭になつち

まひまさあ。

焉馬　へつ、姨め、姨め、と今夜はひとつ月並で往くかな。

小しん　何を云つてやがるんでえ。發句のホの字も分らねえ癖に、月並が聞いて呆れらあ。

岡田　やあ、面白れえ。面白れえ。如何でえ。床の間の狸にも一杯酒を獻じようぢやねえか（杯を狸の置物の前に置いてから）おい、焉馬。ちよつとここへ來て狸の顏を見な。何處か延多津に似てゐるところがあるぜ。

焉馬　（悄氣て）何ぼ何だつて延多津の顏が狸に似てゐるはひどうがすね。

小しん　（傍から口を出す）今に腹まで似て來るんだらう。

焉馬　おや、おや、さんざんだな。まあ、仕方がねえ。色男は酷い目に會ふものと、芝居でも昔からちやんと相場が極まつてゐらあ。

小しん　いい氣なもんだな。

岡田　如何だい、色男。いい氣持になつてゐるところで、何かひとつ唄つて聞かせないか。

焉馬　おや、おや、この上まだ唄までうたはせるんですかい。ようがす。それぢやひとつやりませうだが、仙ちやん、家に三味線はあつたかね。

小しん　おつと三味線はちよつと藏入だが——（茶の間の方に向つて）なあ、おたつ、何處か三味線を借りるところはねえかな。

おたつ　さうさね。（ちよつと考へて）きい坊のならここにあるんだけれど、あんな玩具見たいな三味線ぢやあ間に合はないだらうねえ。

小しん　ああ、あれぢや仕様がねえ。

焉馬　なあに胴に猫の皮が張つてあつて、糸が三本あるもんなら何でもいゝやね。おたつさん、ちよつとその三味線を見せて下さいな。

（おたつは壁に懸けてあつた三味線を袋から出して、座敷の方へ持つて來る。）

おたつ　焉馬さん、これなんですよ。（三味線を渡す）

焉馬　（受け取つて）成程、こいつは可愛らしいや。（直ぐに調子を合せて見て）結構。これで間に合ひますよ。

（おたつはまた茶の間の方へゆく。焉馬は直ぐに唄ひ始める。）

焉馬　（彈きながら唄ふ）

「誰が罪の、あとぞ障子に指あなの、すきもる三味の高切れを、まつ辻占を、聞けばよいよい宵の首尾。」

（みんなぢつと身動きもしずにその唄を聞いてゐる。誰も杯に手を出すものもない。唄が終つてから暫くの間はみんな醉つたやうになつて默つてゐる。）

焉馬　（調子づいて）面白れえ、面白れえ。湯呑か何かで

一杯ぐつとやつ附けたくなつたな。

岡田　よし來た。さあ――（手近にあつた湯呑を焉馬の前に置いて酒を注ぐ）

焉馬　（ぐつと酒を呑んで）　全く、旦那、あつしやあ今夜は嬉しくつて嬉しくつて仕樣がねえ。仲のよかつた友達と仲直りが出來たんだ。こいつは誰だつて嬉しからうぢやありませんか。ねえ、さうでせう。

岡田　さうだとも――おれだつてどんなに嬉しいか知れやしねえ。

焉馬　なあ、仙ちやん。お前だつて嬉しいと思つて吳れるだらう。（小しんの方を見る）

小しん　（俯つ向いたまゝ無言）

焉馬　おい。如何したんだよ。すつかり默り込んぢまつたぢやあねえか。

小しん　（やや長い間を置いてから顏を上げて）　なあにね、近頃は如何したもんだか物事に感じつぽくなつていけねえんだ。今お前の唄を聞いてゐると、何だか急に悲しくなつて來て淚が零れさうになるぢやあねえか。こいつあいけねえ。こんなこつて泣いたりしちやあいゝ恥曝らしだと思つたから、ぢつと今まで淚を食ひ留めてゐたのよ。

焉馬　さうか。おりやまた如何かしたのかと思つた。それぢやあもう唄の方は止めにして杯を少し廻さうぢやねえか。

小しん　なにさ、唄を止めなくつたつていいぢやねえか。

岡田　さうだとも、さうだとも。何も唄を止すにやあ及ばねえ。折角ひとつやつたもんだ。もうひとつ何か聞かせねえか。全く焉馬の聲を聞いちやあ大抵の女は惚れつちまふだらうよ。

焉馬　煽てちやあいけねえ。いつもならこんな甘口の煽てに乘るんぢやあねえんだが、今夜は馬鹿にいゝ氣持だから、煽てに乘つたつもりでもうひとつやるかな。

小しん　豪氣に勿體を附けやがるな。

岡田　相手が男だとこれだから厭になつちまふね。

（焉馬は關はずに三味線を彈き出す。やがてまた自分で自分の聲に醉つてゐるやうな顏付で唄ひ始める。）

焉馬　（唄ふ）

「思ふ方より文附けられて、讀むにや讀まれず、人賴まれず、裏の狹戶の口を出て見てひつ開げて、かひころび、ものも書かねば是非もなや。」

（みんなまた前のやうにぢつと身動きもしずにその唄を聞いてゐる。唄が終つてからも今までのしんとした四邊の靜けさが暫くの間つづく。）

岡田　いや、如何も、ご苦勞、ご苦勞。さあ、一杯お酌をしよう。（德利を取り上げる）

焉馬　（杯に酒を受けて）　へえ、如何も憚り樣。いや、如何も久しく唄はねえもんだから、息が續かねえで苦しうござんすよ。

小しん　（冷かすやうに）　などと焉馬云ひかね。柳樽の中にでもありさうな文句を云ふぢやねえか。

焉馬　（笑つて）　兎角突つ轉ばしつてやつは氣障がられるもんさ。

小しん　自分でさう思つてゐりやあ間違ひはねえや。（笑ふ）

（岡田もそれに釣り込まれたやうに笑つたが、急に氣が付いたやうにふらふらと立ち上る。）

岡田　おい、それぢやあ、小しんさん。おれはもう歸るよ。

小しん　まあ、旦那。いゝぢやありませんか。

岡田　いや、なにね、今度おれはひとつ酒屋をやつて見ようかと思つてゐるんだ。

小しん　（笑つて）　旦那が酒屋をやつたんぢや賣るよりも御自分で飲む方が多さうですね。

岡田　なあに稼業となりやそんなこたあありやしないよ。何しろおれも何にもしずにかうやつてゐちや仕方がねえからね、ひとつ何かやらうと思つて考へたのがこの酒屋なんだ。何しろおれが道樂をし始めてから贔屓にした、お前達の仲間だとか、役者だとか、幇間だとか、そんな連中に廣めて貰やあかなり稼業はあるだらうと思ふんだが如何だらう。

小しん　まあ、やつて御覽なすつたらようがせう。

岡田　やつて見るさ。やつて見るとも。きつともう一度昔の岡田になつて見せるよ。それでね、そのことに就いてね、今夜京橋の弟が呼んであるんだ。（急にあわただしく）　それぢやあまたくるよ。

（岡田はみんなが挨拶をする間もないうちに玄關の方へゆく。）

焉馬　旦那。それぢやあおつしも御一所に往きませう。（立ち上がらうとする）

小しん　（焉馬に）　まあお前はもう少しいゝぢやあねえか。

焉馬　さうか　（直ぐ坐つて岡田に）　それぢやあ、旦那。ご免下さいまし。

小しん　（殆んど同時に）　旦那。ご免下さい。

（おたつは急いで茶の間から出て來て帽子を取つて岡田に渡す。）

岡田　（引つ繰くるやうに帽子を取つて）　さよなら。

（岡田は格子戸を開けて早足に出てゆく。）

おたつ　如何したんだらう。旦那は何か怒つたのかい。

小しん　なあに近頃は何時でもあんな調子なんだ。金持が貧乏するとみんなあんなになつちまふんだよ。

おたつ　さうかね。

小しん　こちとらは金持でなかつたのが幸福なのさ。お前達もその上盲目になつてゐると猶幸福なんだが、盲目になつただけおれの方が少し餘計に幸福かな。

焉馬　何だい。また變なことを云ひ出したぜ。

小しん　（眞面目に）笑談云つてらあ。これを變だつて云ふお前の方が餘つ程變だぜ。まあ、いいや。そんなこたあ如何でもいいとして、お前とは久しぶりのことだから、今夜はひとつうんとやらうぢやねえか。

焉馬　よし來た。ひとつ久しぶりで「ずつこけ」るかな。

おたつ　焉馬さんの「ずつこけ」はあんまり久しぶりでもないんでせう。あんたは近頃ちつとも家へ歸らないんだつてえぢやありませんか。

焉馬　いゝえ、そんなこたありませんよ。憚りながら近頃唯の一晩だつて家を明けたことなんかねえんですから――

小しん　おい、駄目だよ。嘘を吐いたつて――おたつのやつさつきお湯でお前んとこのおかねさんに逢つて來てゐるんだ。

焉馬　ああ、さうか。そいつあいけねえ。（頭を掻く）

おたつ　おかねさんもほんとに可哀さうだわ。偶には家に歸つてお上げなさいよ。

焉馬　へえ、へえ、以後はせいぜい氣を付けます。（笑談のやうに頭を下げてから）ところでひとつ、おたつさん。熱いやつを一本持つて來て下さいな。

おたつ　おや、もうないの。

（おたつは茶の間の方へ往つて燗のついた德利を持つて來て、また直ぐ茶の間の方へ立つてゆく。）

小しん　（改つた樣子で）如何でえ、その後は。

焉馬　相變らずよ。

小しん　お前は一體今度の紛紜ぢやどつちに附く。

焉馬　さうさな。まあ、どつちつて腹は極めちやゐねえんだけれど、兎に角おれは金の餘計取れる方に往かうと思ふね。

小しん　（不愉快さうに）ふつ、また金か。お前はそんなに金がありがてえのか。

焉馬　（急に氣が弱くなつて）なあにそんなにありがてえつて譯ぢやあねえけれど、兎に角貧乏にはもう倦き倦きしちまつたよ。

小しん　貧乏はお互ひ樣だ。おれは生きてゐるのには倦き倦きしたが、しかしまだ貧乏には退屈しねえよ。

焉馬　そりやあお前、負け惜しみぢやあねえか。

小しん　何だ。また負け惜しみか。（舌打をして）人が何か云ふと直きに負け惜しみだつて云やがらあ。貧乏する

のは道樂ぢやあねえぞ。負け惜しみで貧乏が出來るけえ。(調子を變へて) おい、お前は先き根岸の二代目にいろいろ世話になつたつて云つて、いつぞや惡口を云つたのを詫びてゐたが、あれは本氣で云つてゐたのか。

焉馬　本氣で云つてゐたんだとも、何でおれが嘘を云ふもんか。

小しん　おい、ちよつと斷つて置くがな。おれは目が見えなくなつてから、これまで見えなかつたものが見えるやうになつたんだぜ。譬へば人間の「こころ」つてやつよ。こいつは目の明いてゐるお前達には見えねえだらうが、おれにはちやんとはつきり見えるんだぜ。誰がどんなことを思つてゐるか位分らなくつて如何するものか。

焉馬　(ぎよつとして) ほんとか。

小しん　(ちよつと度膽を拔くやうに) ほんとだつたら如何するつて云ふんだ。

焉馬　(まじまじ小しんの顏を見ながら默つてゐる)

小しん　ざまあ見やがれ。嘘吐きめ。おれはお前が今度の紛紜(いざこざ)に陰て根岸の師匠に弓を引いてゐると云ふことをちやんとこの間から知つてゐたんだ。それに今度お前がおれのところに仲直りに來たのも、おれをお前の方の側に引つ張り込まうと云ふ魂膽だつて云ふこともちやんとおれには分つてゐるんだ。

焉馬　笑談云つちやいけねえ。おれは何もそんな魂膽だの何だのがあつてわざわざ仲直りに來たんぢやあねえよ。

小しん　(嘲るやうに) へつ、いやに白を切りやがるな。

焉馬　笑談云つちやいけねえ。まるで身に覺えのねえことだ。しかし、なあ、仙公。お前何時までもこんな強情を張つてゐずに、ひとつ金を取る氣はねえか。

小しん　厭だ。おれは金は大嫌れえだ。

焉馬　まあ、そんな頑固なことを云はずによ、惡いことは云はねえからおれの云ふことも肯いたらいゝぢやあねえか。

焉馬　厭だ。厭だつて云つたら殺されても厭なんだ。

焉馬　(獨り言のやうに) へつ、盲目の癖に強情つ張りな野郎だなあ。

小しん　(聞き咎めて) 何だと——もう一度云つて見ろ。

焉馬　(自棄腹になつて) えゝ、まゝにしやがれ。

(焉馬はいきなり前にあつたチヤブ臺を引つ繰り返す。臺の上の盃洗やコツプや猪口などがそこいらに一面に散亂する。小しんはぢつと默つて坐つてゐる。焉馬は立ち上がつたなりずつと玄關の方へゆく。おたつは座敷の方へ來てこの有樣を見てちよつと立ち竦んだ形。おきよも目を覺まして座敷の方をのぞく。)

焉馬　(捨臺詞のやうに) 畜生。見通しの法印が聞いて呆

れらあ。誰がもうこんな家へやつて來るもんか。
（焉馬は荒々しく下手の格子戸を開けて出てゆく。）
（やや長い間の沈默。おたつは默つてそこらに散らかつたものを片附ける。みんなそれぞれ違つた悲しい心持。）
（小しんは寂しさうに俯つ向いたまゝ何時までも顏を上げない。）
（おきよが座敷の方へ入つて來る。）

小しん　（不圖氣が付いたやうに顏を上げて）　おい　おたつ。
おたつ　（短く）　ええ。
小しん　（低い沈んだ聲で）　焉馬はもう歸つたのか。
おたつ　（やつぱり低い沈んだ聲で）　ええ。
小しん　（歎息のやうに）　さうか。（やや長い間を置いてから寂しさうに）　なあ、おたつ。おれと焉馬とは如何してあんなに喧嘩ばかりしなくつちやならねえんだらう。
おたつ　（目に涙を一杯溜めて默つてゐる）
（おきよが膝に寄りかかつたので、小しんは始めてそこにおきよがゐるのに氣が付く。）
小しん　おお、きい坊。そこにゐたのか。
（ぢつとおきよの體を抱きしめてゐるうちに、小しんのひたと閉ぢた瞼の間から涙がとめどなく溢れ出して頰を傳つて流れ始める。）

――幕――

小しんと焉馬後日譚（一幕）

人物

小しん　盲の落語家
焉馬　その友達の落語家
おたつ　小しんの女房
おきよ　小しんの貰ひ娘
岡田　小しんや焉馬の以前の贔屓
喬枝　賣れない老人の落語家
その他、車夫、若い者等。

時代

今から七八年前

場所

淺草の或る裏町

落語家の小しんの家。下手は格子戸のある玄關で、格子戸の外は直ぐ裏町の人通りの少い往來になつてゐる。玄關の中はタタキになつてゐて、下駄箱や傘置があるが、吊るしてある鐵燈籠には灯が入つてゐないので暗くつて何も見えない。格子戸の外には雨戸が閉め切つてある。

玄關を上がると二疊の部屋その部屋と襖を隔てゝ六疊の座敷。正面に床の間と神棚。床の間には蜀山人の狂歌を書いた懸物が懸かつてゐる。その前にはかなり大きな狸の置物が紅い布團に載せて置かれてある。神棚の方に目の描いてない赤い張子の達磨。座敷の隅には其角堂機一の吉原の句ばかりの式紙を貼り交ぜにした枕屏風。その上には袖疊みにした唐棧の半纏が懸かつてゐる。

その座敷を隔てて、上手にもう一間四疊半の茶の間、簞笥、長火鉢、茶棚、チヤブ臺など。上手の壁に子供持の小形の三味線。正面は障子。その向うが臺所。

十二月二十日頃の夜の十二時過ぎ。

六疊の座敷には、小しんとおたつとがおきよを中に挾んで寢てゐるのだが、電燈が消してあるので眞つ暗で何も見えない。締め忘れた引窓から射し込む月の光が、茶の間の障子を青白く照らしてゐるだけである。幕が明くと同時に消え半鐘の音が遠くの方で聞こえる。やゝ長い間。

外の往來をがやがや云ひながら通る人聲。それが聽こえなくなつた時分に、急に割れるばかり烈しく、格子戸の外の雨戸を叩くものがある。）

外の聲（烈しく）やい、開けろ、開けろ。開けねえかい。開けねえと叩つ壞すぞ。何を愚圖々々してゐやがるんでえ。さあ、開けろつて云つたら早く開けろい。早く開けねえとこんな雨戸は、ほんとに一思ひに叩き壞しちまふぞ。

（怒鳴りながらもやつぱり雨戸を激しく叩き續ける。）

（暗黑の中から小しんの聲とおたつの聲が聞こえて來る。）

小しんの聲　おい、おたつ。焉馬のやつ、また來やがつたぜ。

おたつの聲　仕樣がないねえ。打つ棄らかして置くと、ほんとに雨戸も何も叩き壞しちまふよ。

小しんの聲　あいつのことだからその位のことは遣りかねないな。

おたつの聲　何しに來たんだらうねえ、今時分。また喧嘩をしに來たんだらうか。

小しんの聲　當り前よ。喧嘩をするより外に能のねえ男ぢやないか。さつき何處かに火事があつたやうだからきつとその歸りに一杯やりやあがつて、醉つた勢ひで例の手鍵を持つて乘り込んで來たつて譯なんだ。

（外では暫らく叩く手を緩めてゐたが、今度は急に思ひ出したやうに、大きな聲で怒鳴りながら、前よりも激しく雨戸を叩く。）

外の聲　やい、何をしてゐやがるんでえ。さあ、開けろ、開けろ。愚圖々々してゐずに早くここを開けねえかい。畜生。如何しても開けねえ氣か。如何でえ、やい。開ける氣か開けねえ氣か返事をしろい、返事をしねえと叩つ壞すぞ。

（返事を待つやうに叩く手を止める。）

（暗黑の中からまた小しんの聲とおたつの聲が聞こえて來る。）

おたつの聲　（心配さうに）如何したらいいだらう、お前さん。

小しんの聲　畜生。ほんとに仕樣のねえ野郎だ。まあ、もう少し默つて樣子を見てゐてやらう。ひよつとすると叩き疲びれて往つちまふかも知れないから――

おたつの聲　だつてあの勢ひぢや往つちまひさうにも見えないぢやあないか。

小しんの聲　（きつぱりと）往つちまはなきやあ開けてやるだけのことだ。なあにたかが相手は焉馬ぢやあねえか。いくらおれが目が見えねえし、足が立たねえつて、云つたつて、あいつに負けて堪るもんか。

（外では返事を待ちかねてまた雨戸を激しく叩きはじめる。）

外の聲　何でえ、こいつらは――何故返事をしやがらねえ

んだい。よもやまだ寢てゐるんぢやあるめえ。寢てゐねえんなら返事をしろい、返事を――やい、一體この戶を開けるのか開けねえのかい。（やゝ長い間）――畜生――返事をしやがらねえな。よおし、さう云ふ氣なら關はねえ。いよいよ叩き壞すばかりだ。

（雨戶へ手鍵を打ち込みはじめる。）

小しんの聲　（烈しく寢床の中から）やい、やい。靜かにしろい。

外の聲　靜かになんぞ出來るかい。さあ、開けるのか開けねえのか返事をしろい。

小しんの聲　開けるから待てつて云ふんだ。分らねえか。

（ばつたりもの音が止んで急に靜かになる。）

小しんの聲　おい、おたつ。電燈を點けて吳れ。

おたつの聲　お前さん、ほんとに大丈夫かい。

（おたつはさう云ひながら電燈を點ける。座敷が明るくなつたので、始めて小しんやおたつやおきよの姿がそこに照らし出される。小しんは三十六七歳の色の黑い瘦せた男で、盲目の上に聾である。おたつは三十八九歳の色の淺黑い、ちよつと美しい女郎上りの女。おきよは六つになる可愛らしい女の子である。）

（電燈が點くと同時に、おきよが目を覺まして泣き出す。）

小しん　（やつと床の上に起き上がつて）ああ、いけねえ、いけねえ。きい坊はあつちの部屋に連れてきねえ。そこからお前の布團もきい坊の布團もあつちの部屋に持つて往くがいいや。

おたつ　（まだ心配さうに）お前さん、ほんとに大丈夫かい。

小しん　大丈夫だつてことよ。うるせえぢやねえか。早くきい坊を連れてつて吳れ。

おたつ　（おきよに向つて）さあ、さあ、泣くんぢやないよ。泣くんぢやないよ。ねえ、いい子だから泣くのはお止し。さあ、あつちへ往つて母ちやんと一緒に寢んねしよう。

（おたつはおきよを賺しながら、茶の間の方へ連れてゆく。それから自分とおきよの布團を茶の間の方へ運んでゆく。そのうちおきよは泣き止む。）

小しん　おい、おたつ。寒いから半纏を取つて吳れ。

（おたつ屛風に懸けた半纏を取つて小しんに着せる。）

小しん　（確めるやうに）お前達の布團はあつちの部屋へ持つて往つてしまつたな。

おたつ　ああ、持つて往つたよ。

小しん　（點頭いて）よをし――それぢやあそこへ座布團を敷いといて吳れ。

　（おたつは云はれた通りに座布團を敷く。と外では待ちかれてまた雨戸を激しく叩きはじめる。）
外の聲　（むしろ自棄に）やい、如何したんでえ。開けるなら早く開けねえかい。何を愚圖々々してゐやがるんでえ。江戸つ子は氣が短いんだ。開けるなら開けるでさつさと開けて呉れ。開けなきやあ今度こそほんとに叩き壞すぞ。
小しん　（體に似合はない大きな聲で）靜かにしろつて云つたら靜かにしねえかい。野中の一軒家ぢやあねえんだぞ。いけ騷々しく怒鳴り散らしやがつて、近所隣りにもみつともねえや。（おたつに向つて徐に）おい、おたつ。あすこを開けてやつて呉れ。
おたつ　（逡巡ひながら）だけど――お前さん。
小しん　（低いが強く）大丈夫だつてことよ。いいから開けてやんな。
　（おたつは怖々玄關のタタキに下りて雨戸を開ける。外には霜のために白く凍てた、月の光が凄いほど明るい往來が見える。雨戸が開くと同時に焉馬がおたつを突き飛ばすやうにして飛び込んで來る。焉馬は三十五六歳位の小柄な男。差つ子半纒に頭巾を被ぶつた火事裝束をして、右の手に手鍵を握つてゐる。ひどく醉つてゐるらしい顏付。足袋跣足のままづかづか家の中に上つて來る。）
焉馬　（座敷の眞ん中に突つ立つたまま）やい、こん畜生。この間はよくもおれに耻を掻かせやがつたな。今日おれはこの間の仕返しにやつて來たのだ。
小しん　ふうん、仕返しに來た――。そいつあ面白れえ。それでおれを如何しよつて云ふんだ。
焉馬　如何するもかうするもあるもんか。こん畜生。かうしてやるんだ。
　（焉馬はいきなり手鍵を打ち込んで來たが、醉つてゐるので手許が狂つて、踏跟けたはずみに、神棚の上の張り子の達磨に鍵先を打ち込む。それからは手鍵の先に張り子の達磨を引つ懸けたまま、小しんに向つて打つてかかつて來る。おたつがびつくりして止めに入つて、焉馬の腕にしがみ付く。）
おたつ　危ないつたら――焉馬さん、何をするんだい。
焉馬　やい、こん畜生。離さねえかい。
おたつ　離すもんかい。そんなもの振り廻して危ないぢやあないか。
焉馬　（やつぱり手鍵を振り廻しながら）さあ、こん畜生。おれはもう如何しても了簡がならねえんだ。
おたつ　さあ。お寄越しよ、それを。焉馬さん。如何しても寄越さないのかい。

焉馬　何を云やがるんでえ。女なんぞの出る幕ぢやあねえ。引つ込んでゐろい。

おたつ　（泣き聲になつて）危ないよ、そんなもの振り廻して――

焉馬　えゝ、離せつたら――（振り離さうとする拍子におたつの何處かを打つ）

おたつ　（喚くやうに）畜生――。打ちやあがつたな。（いきなり焉馬の手に嚙み付く）

（焉馬はおたつに嚙付かれたので、びつくりして手鍵を落す。おたつがそれを取り上げて、柄の方で向う脛を拂つたので、焉馬はそのまゝのめるやうに俯向きに倒れる。）

（その間小しんは一言も口を利かなければ身動きもしない。）

（おたつはその騒ぎでおきよが火の附くやうに泣き立てたので、その聲を聽き付けて茶の間の方へゆく。）

焉馬　（やつと起き上つて）畜生――ひでえことをしやがる。やい、小しん。覺えてゐろ。

小しん　（始めて口を利く）覺えてゐるとも……しかし、焉馬。お前の仕返しつて云ふのはそれつきりか。

焉馬　（忌々しさうに向う脛を觸りながら）なに、これつきりで濟ますものか。おれはお前がもうこれから一切高座へ上がれねえやうにしてやるんだ。

小しん　（傷ましく笑つて）おい、焉馬。氣を付けて口を利きねえ。おれはもう疾うから御覽の通り腰が拔けて高座へだつて人手を借りなくちやあ上れねえやうな體になつてゐるんだぜ。

焉馬　知つてらい、そんなこと――。今度は人手を借りても高座へ上がれねえやうにしてやるんだ。

小しん　（焉馬に關はずに）それにおれはまた御覽の通りの盲目だ。お前の聲だつて、唯眞つ暗な中から聞こえて來るだけで、お前がどんな裝をしてゐるか、お前がどんな顏をしてゐるか、おれにはまるつきり見えやしねえ。情ねえ體だ。

焉馬　何が情ねえもんかい。そんな體をしてゐやがる癖に、相變らず昔の通り剛情つ張りで、おれに耻を搔かせるやうなことをしやがるぢやねえか。

小しん　まあいいや、おれはお前に耻を搔かせるつもりで云つたりしたんぢやあなかつたんだが、それはまあ今に分るこつた。今ここで何を云つたつてお前の耳には入らないだらうから默つてゐる。しかしだ、焉馬。（きつぱり云つて顏を上げる）お前はおれの目がほんとに見えねえと思つてゐると飛んだ間違えだぞ。

焉馬　（ぎよつとしたやうに）何だと――

小しん　（きつと焉馬の方へ顏を向けて）實はおれの目が見えなくなつたてえのは、ありや嘘なんだ。（目を指差して）成程ここにあるこの目は潰れつちまつたに違えねえが、しかし目つてえ云ふものはこんなところにばかり附いてゐやしねえぞ。おれの目はここに附いてゐるんだ。（胸を叩く）

焉馬　何を云つてゐやがるんでえ。蒟蒻問答見てえなことを云つてやがらあ。

小しん　（壓しつけるやうに）默つて聽いてろい。（暫く間を置いてから）いいか、焉馬。こいつはつまり心眼てやつだ。それだからなまじつかな目を持つてゐるよりも、この目を持つてゐる方が、どの位調法だか知れやしねえ。第一これまで見えなかつた、いろいろのものが見えて來るんだから面白れえぢやねえか。

焉馬　（少し醉が覺めて來たやうな樣子で）ほんとか。ほんとにそんなにいろいろのものが見えて來るのか。

小しん　見えるとも――亡くなつた句樂が氣が狂つてから、いろいろおれ達の目に見えねえやうなものが見えるやうなことを云つてゐたが、手つ取り早く云へばつまりあれだね。それと云ふのも句樂のは氣狂ひになつたためだし、おれは盲目になつたお蔭だし――これから考へると達者な奴は、如何も一番つまらねえやうな氣がして憐れになるよ。

焉馬　（少し呆れて）飛んでもねえことを云やあがる。

小しん　何が飛んでもねえことなものか。おれはほんとのことを云つてゐるのだ。全く達者な奴位憐れなものはねえよ。お前なんかはその中でもまた憐れな方だね。

焉馬　おい、おい、いい加減にしねえかい。折角仕返しにやつて來たのにそんなことを云はれちやあ、張り合が拔けつちまふぢやねえか。

小しん　（にたりと笑つて）それなら仕返しなんか止めにしちまつたらいいぢやあねえか。第一おれのところに仕返しに來るつて云ふのからして間違つてゐるんだ。

焉馬　如何してよ。恥を掻かされりやあ仕返しに來るのは當り前ぢやあねえか。

小しん　その恥を掻かされたと思つてゐるのからして間違つてゐるんだ。

焉馬　何でえ、それぢやあ何から何まで、みんなおれのすることは間違つてゐるのか。

小しん　まあ、さうだね。

焉馬　へつ、馬鹿にしてやがらあ。それぢやあこの間の話は、お前の云つたことがみんな好くつて、おれの云つたことがみんな惡いとかう云ふのかい。

小しん　さうよ。極まつてゐるぢやあねえか。よく胸に手

を當てゝ考へて見ろ。
焉馬　考へて見なくつたつて分つてらあ。そいつはお前我田引水と云ふもんだ。
小しん　(噴き出しさうになつて)　おや、我田引水だと――こいつあ面白れえぞ。お前、我田引水なんて言葉を何處で覺えて來た。
焉馬　馬鹿にするねえ。何處で覺えても來やあしねえ。その位のことはおれだつて前から知つてらあ。
小しん　さうか。そいつは豪勢だな。しかし惡いことは云はねえ。お前は漢語なんぞ使ふ柄ぢやねえから、他所へ行つたらそんな言葉はつかはねえ方がいいぜ。
焉馬　使へつて云つたつて使ふもんかい。お前のとこだから癪に觸つて使つてやつたんだ。
小しん　(笑つて)　あんなことを云やあがる。癪に觸つて漢語を使ふ奴もねえぢやあねえか。まあ、そんなこたあ如何でもいいや。しかし、如何だい。ちつたあ醉が覺めたかい。
焉馬　うん、覺めもすらあな。いやつて程向う脛を搔つ拂はれたんだから――(痛さうに顏を顰めて)　おお、痛え。まだひりひりしやあがらあ。
小しん　だからくだらねえ仕返しなんかに來るもんぢやあねえつて云ふんだ。(ちよつと點頭いて)　なあ、焉馬。お前がおれに腹を立つてゐると云ふ譯は、つまりかうなんだらう。もとはと云へば今度の紛紜だ。腹の出來てゐねえ、どつちでもいゝから金の餘計取れる方へ往かうと云ふ、ふはりふはりとした考へ方をしてゐるお前の事だから、こんな場合にやあ目先の早え、あの兵隊上りの燕樂に眞つ先きにつかまりやがつたのに違えねえんだ。そして根がぐうたらなお前のことだから根岸の二代目への義理なんかすつかり忘れて、直ぐに承知をしてしまひやがつたのに違えねえんだ。ところがあの落語家に似合はねえ、敏捷い燕樂のことだから、お前と云ふと直ぐにおれに目を附けやがつた。そこでお前が仲直りにかこつけて岡田の旦那をだしに使つて、おれのところへ御使者に立つた――とまあ、荒つぽく云へば、かう云つた筋書だつたんだらう。ええ、おい、如何だい。おれの心眼に映つたところでは、蔭で燕樂が糸を引いてゐるやうに思へるんだがね。
焉馬　(曖昧に)　うん、まあ糸を引くつて程ぢやあねえけれど、兎に角燕樂から賴まれたんだ。
小しん　そをれ、見ねえ。おれの思つてゐた通りだ。なあ、おい、焉馬、よく考へて見ろよ。おれと燕樂と同じ高座に上がれるかい。お前もあんまり盆中が暗過ぎるぢやねえか。
焉馬　うん、さう云やあさうだけれど――おれは實は小し

んなら今こそ喧嘩をしてゐるけれど、仲直りさへしてしまへば、如何にでもおれの手でして見せるつて、すつかり受合つて來てしまつたんだ。

小しん　(點頭いて)　さうだらう。すつかり受合つて來て見たところが、おれが如何しても云ふことを肯かねえ。そこだ、お前が腹を立てるところは。如何でえ。圖星だらう。

焉馬　(苦笑ひをして)　まあ、いいぢやあねえか、あの時のことは。

小しん　まあ、いいぢやあ濟まされねえよ。お前がおれに耻を搔かされたつて云ふのは、つまり受合つて來た燕樂に顔向けが出來ねえと云ふだけのことで、今夜も多分お前は燕樂の家へ火事見舞に往つた歸りなんだらう。

焉馬　うん、まあ、そんなところだ。

小しん　(ちよつと調子を變へて)　火事は一體何處だつたんだ。

焉馬　こつちから往くと今戸橋を渡つてからちよつと往つた河岸つ縁て、以前吉原の角河内の寮のあつたところだ。なあに大したこたあねえ。四五軒燒けた位のもんだらう。

小しん　(ちよつと暗く眉を寄せて)　今戸橋を渡つてちよつと往つたところ――おや、それぢや今度岡田の旦那が始めた酒屋の店は直ぐ近所だぜ。

焉馬　(始めて氣が付いたやうに)　ああ、さうだつたな。

小しん　お前は見舞に寄つて來なかつたんだらう。

焉馬　うん、寄らなかつた。實はすつかり忘れてゐたんだ。

小しん　さう云ふ奴だ。お前は一體義理つてことを知らねえよ。如何だい、旦那のところは。開店以來ちつたあ繁昌してゐるかね。

焉馬　おれは一度往つたきりだけれども、何しろあれぢやあいくら繁昌したところで商賣にやあなりやあしねえよ。來る奴も來る奴もみんな吾々の仲間か幇間、それでなけりや雜俳の連中で、それに旦那も止せばいいのに、一々海鼠腸(このわた)か何かで酒を出してゐるんだらう。いくら賣れたつて、あんなことをしてゐちやあ堪らねえや。

小しん　旦那があんな派手つ氣の方だからな。成程、その位のことにはなりさうなことだ、それに近頃はあの喬枝が大分御贔屓だつて云ふぢやあないか。

焉馬　うん、如何云ふ譯だかあの爺さんがひどくお氣に入りでね、おれが近頃旦那のところへあんまり往かねえのも、ひとつはそれが氣に入らねえからなんだ。

小しん　(首を振つて)　うん、ありやいけねえ。ああ云ふものが氣に入るやうぢやあ旦那ももうあれつきりだな。

焉馬　それに人間落魄れると仕様のねえもんでね、近頃の

旦那の醉ひ方と來たらまるで昔とは變つてしまつたぜ。

小しん　（寂しく點頭いて）　うん、それもおれは疾うから氣が付いてゐる。藝人でも何でもひとつこぢれて來るとおしまひだからな。

焉馬　何しろ旦那と來たら近頃は醉ふと直ぐに喧嘩なんだ。昔はおつとりしたいゝ酒だつたが、近頃ぢやあ全く情なくなることがあるよ。

小しん　（皮肉に）　醉つて喧嘩するのは、そこにお師匠さんがゐるからな。

焉馬　（笑つて）　笑談云つちやあいけねえ。そんなことを云はれると、すつかり醉も何も覺めつちまはあ。

小しん　（氣が付いたやうに茶の間の方を向いて）　おい、おたつ。

（おたつはおきよが泣くのを賺し乍ら添寢をして、初めのうちは心配さうに隣りの話に聞き耳を立ててゐたが、そのうち何時の間にかぐつすり寢込んでしまつてゐる。それだから小しんに呼ばれても返事をしない。）

小しん　（聲を大きく）　おい、おたつ。

おたつ　（やつと目を覺ます）　えゝ――

小しん　何でえ。眠つちまひやがつたのか。あのな、焉馬師匠の御機嫌が直つたやうだから、ちよつとここに來て挨拶をしねえ。

焉馬　（極まり惡さうに）　いゝよ。寢てゐるものをわざわざ起さなくつたつていゝぢやあねえか。

小しん　なあにいいんだ。まだ外に用もあるんだ。（また茶の間の方を向いて）　おい、おたつ。それからな、醉醒の水つてところだが、やつぱり水より酒の方がいいだらう。おれと焉馬さんとに、コツプに二つ、酒を注いで持つて來て呉れ。

焉馬　いや、もうおれは酒は澤山だよ。

小しん　なあに澤山なことがあるものか。まあ、仲直りの印に、一杯づつ冷酒で引つ懸けよう。

（おたつが酒を滿たした二つのコツプを盆の上に載せて持つてくる。）

おたつ　焉馬さん。如何もさつきは濟みません。痛かつたでせう。

焉馬　（恐縮して）　いや、如何も、これは。何しろあなたの力のあるのに驚きましたよ。見事に向う脛を掻つ拂はれたので、あつしはもう忽ちまゐつてしまひました。

おたつ　ほんとに濟みませんでしたねえ。あたしはもうさつきはまるで夢中だつたもんですから、ついあんなことをして――

焉馬　いえ、もう今は何ともありませんけれども、さつきはほんとに痛うがしたよ。

小しん　（コップを取上げて）　さあ、如何だい、一杯。
焉馬　（これもコップを取上げて）　醉醒とは、やつぱりお前さんは氣が利いてゐるねえ。
小しん　何を云つてやがるんでえ。つまらないところでお世辭を遣ひやがらあ。
（二人がコップを置いた拍子に、さつきおたつの閉めて置いた玄關の雨戸を、また激しく叩くものがある焉馬とおたつとは顏を見合せる。小しんはぢつと聞き耳を立てる。）
外の聲　もし――もし――小しんさんはおゐでですかい。師匠がおうちならちよつと目を覺まして頂きたいんですが――
小しん　（呟くやうに）　うん、喬枝だな。
焉馬　（これも呟くやうに）　こんな夜中に何しに來やがつたんだらう。
おたつ　（小しんに）　ねえ、何とか返事をしなくつていいんですか。
小しん　まあ、待ちな。默つてぢつとしてゐねえ。
（外ではまだ二三人ゐる樣子で、がやがや云ふ話し聲が聞こえてゐたが、返事がないのでまた慌ただしく雨戸をたたく。）
外の聲　もし、もし――夜中お騷がせして濟みませんが、實は岡田の旦那が怪我をなすつたので、こちらが一番近いもんですからお伴れ申したつて譯なんですが――
（三人はその聲を聞いてびつくりする。）
小しん　（外に向つて）　今開けますよ。ちよつとお待ちなすつて下さい。（おたつに）おい、おたつ。早く戸を開けて上げて呉れ。
おたつ　ああ、いいよ。如何して怪我なんぞなすつたんだらうねえ。
（おたつは立つて雨戸を開けにゆく。）
小しん　（焉馬に）　焉馬。お前も手傳つて旦那をこつちへお伴れして呉れ。
焉馬　よし來た。
（焉馬も續いて立つてゆく。）
（おたつが雨戸を開けると、そこに喬枝が立つてゐる。喬枝は六十二三歳位の老人の落語家。頭の禿げた目の窪んだ、卑しげな顏付。かなり見窄らしい身裝をしてゐる。）
（喬枝の背後には、汚い辻俥の提灯が見え、俥の上にはまるで死んだもののやうに仰向けに寢てゐる岡田の姿が見える。俥の傍には車夫の外にまだ一人か二人誰か人のゐるやうな氣勢。）
おたつ　まあ、喬枝さん。一體旦那は如何なすつたんです。

喬枝　いや、如何も飛んだことでしてな。
焉馬　怪我をなすつたんだつて――
喬枝　や、これはこれは焉馬さん。如何も全く飛んだことでしてな。
焉馬　飛んだことばかりぢや分らねえが――まあ、早く旦那を家へお入れしよう。
喬枝　さう、さう――それではどうぞ焉馬さんも手を貸して下さい。（外の方を向いて）若い衆さん。濟まないがどうぞ手傳つてな。いや、何しろ飛んだことだ。

（焉馬と小料理屋の若い者らしい男とで、俥の上に寢てゐる岡田の體を、重さうにかつぎながら、座敷の方へ運んで來て、おたつが敷いた布團の上に徐かに寢かせる。岡田は四十四五歳位の小肥りの男で、今はすつかり零落してゐるが、以前は小しんや焉馬などを贔屓にして、「一時は『今紀文』などと云はれたこともある。縞目も分らなくなつた結城の着物に黑無地の羽織。汚れた前掛。額の半面はべつとり血に染まつて着物も羽織も泥まみれになつてゐる、時々苦しさうな呻き聲を立てる。）

若い者　（喬枝に）それぢやあ、あつしはもう――
（喬枝は後からおどおどしながら附いて來る。）
喬枝　ああ、いいよ。如何も御苦勞樣。御亭主によろしくな。

（若い者出てゆく。おたつは玄關の戸を閉めにゆく。）
おたつ　（歸りかけてゐる俥夫に）ああ、車夫さん、お代は――
車夫　へい、もう頂戴しました。
おたつ　ああ、さう――如何も御苦勞樣。

（おたつは雨戸を閉めて座敷の方へ戻つて來る。それまでみんな無言で、唯心配さうに岡田の方ばかり見詰めてゐる。小しんはぢつと俯向いたまま默つてゐる。もの凄いやうな短い間。）

小しん　（突然顏を上げて）喬枝さん。醫者はまだ頼まねえんだらうな。
喬枝　ああ、それどころの騷ぎぢやあないもんでな。
小しん　（矯めるやうに）何を云つてゐるんだい。年甲斐もねえ。醫者が一番大事ぢやあねえか。（おたつに）おい、おたつ。お前ちよつとそこの樺島さんまで往つて來て吳れないか。
おたつ　ああ、いいよ。何て云つたらいいだらう。
小しん　分つてゐるぢやあねえか。怪我人が出來ましたから直ぐに來て下さいつて云ふんだ。代診ぢやあ駄目だぜ。是非先生につて頼んで來るんだ。
（おたつは點頭いて、直ぐ臺所の方の戸を開けて出て

ゆく。おたつの下駄の音が消えるまでの沈默。）

焉馬　（獨り言のやうに）　ひでえ怪我だね。醉つてるから中々血が止まらねえや。（喬枝の方を向いて）　喬枝さん。一體如何してこんなことになつたんだい。

喬枝　（面目なさゝうに）　へえ、それが如何も飛んだことでしてな。

焉馬　（少し怒つたやうに）　飛んだこと位は分つてゐらあな。如何してこんなことになつたかつて訊いてゐるんだ。

喬枝　それがでげす。さつき今戸に火事があつたでせう。あの時丁度わたくしはあの今度の旦那のお店にをりましてな、一杯頂いてゐたところなんでした。「濡髮」つて酒もいゝが、「宮戸川」つて方も中々いゝ。ねえ、焉馬さん。ありやあ兩方ともちよつと飲めるぢやありませんか。

焉馬　（苛立たしさうに）　おい、餘計なことを云はねえで、早く先を話したらいいぢやあねえか。

喬枝　へい、へい――ええと――一杯頂いてゐると、急にぢやんぢやんと來たんでせう。それつて云ふんで表に出て見ると火は半町と離れてゐねえところから上つてゐるし、それに風下なんだから驚きましたね。丁度そこに居合せた、あつしにそれから吉原の太夫衆のきん孝、それに淸水町の宗匠なんて輩（てあひ）で、荷物を拵へて直ぐ運び出せるやうに支度をしたり、屋根に上つて火の子を拂つたり、そこんところみんな車輪になつて働きましたよ。が、そのうち火事はたいしたことがなくつて消えてしまつたので、これぢやあもう大丈夫だから、みんなお暇をしようと云つて歸らうとすると、ああ云つた氣性の旦那のことだから、如何もそのままぢやあ歸せないと見えるんだね。

焉馬　（點頭いて）　うん、それからまた飲つたのかい。（酒を飲むやうな手附をする）

喬枝　（情なさうに）　飲りましたよ、こんなことになるとは知らねえから。旦那がみんな御苦勞だつたから、これからちよつとそこまで飲みに出懸けよう。この間ちよつとおつなものを食はせる家を見付けたからと云ふのをいいことにして、みんなであのお店を出たもんなんです。で、往つた先が師匠も知つてゐりやあ、あつしも偶には出懸けることのある、あの「紺暖簾」つて家さ。

焉馬　ああ、あすこはおれが旦那に敎へたんだ。

喬枝　ああ、さうですかい。まあ、そこにお神輿を据ゑて、飲み始めたまではよかつたんだが、旦那は如何してだか近頃酒癖が惡くつてね、醉ふと變に絡んで來たり、厭に突つ懸かつて來たりするんですよ。で、今夜も少し酒が

廻つて來ると、またさう云つたいつものお株が始まつて、淸水町の宗匠を始めきん孝もあつしも、いやもうさんざんなんでさあ。そのうち淸水町の宗匠が見えなくなつたかと思ふと、きん孝のやつが消えてなくなる。後に殘つたのは旦那とあつしと二人つきりさ。こいつはまさか旦那一人を殘して消える譯にも行かねえ。と、そこに運惡く喧嘩と來たんだ。

焉馬　誰でえ、一體その喧嘩の相手は。

喬枝　それが何處のどいつだか分らねえやうな、けちな三下奴なんだから情ねえ話さ。丁度あつし達が入つて往つた時、あの札下のところで三人ばかり、こいつは疊屋辰の身內だなと思はれるやうな男が、とぐろを卷いて飲んでゐるのを見て、こいつはいけねえ、間違ひがなけりやあいいがとは思つてゐたんだが、こんなことになるとは思はなかつたんですよ。

焉馬　さうか。何か言葉の往き違ひから喧嘩になつたつて譯なんだね。

喬枝　ええ、それがほんとにつまらねえことでね、伯山の講釋がうまいとかうまくないとか云ふことからなんですよ。

焉馬　成程、そいつは喧嘩になりさうなこつた。

（小しんはこの間默つてぢつと項垂れたまま二人の話を聽いてゐる。時々心配さうに岡田の呻き聲に耳を傾ける。）

（と、この時岡田が何か譫言のやうなことを云つたので、焉馬も喬枝も話を止めて岡田の方を見る。小しんも思はず顏を上げる。）

岡田　（今度ははつきりと）　おい、水を一杯呉れ――咽喉が渇いていけない――。

喬枝　へえ、水ですか、旦那。（立つて水を取りにゆく）

岡田　（不圖氣が付いたやうに目を開けて）　ここは何處だい。

焉馬　こゝは何ですよ。小しんの家ですよ。

岡田　（焉馬の顏をしげしげと見ながら）　ああ、焉馬か。おれはつまらない目に會つちまつたよ。

焉馬　ほんとに如何も飛んだ目にお會ひでしたな。

小しん　如何です、旦那。お苦しうござんすか。

岡田　ああ、苦しいよ。何だか胸のところをいやつて程やられたのでね。

小しん　今おたつをお醫者樣のところにやりましたから、もう直きに見えるだらうと思ひますよ。

岡田　さうかい。如何も濟まない。（呻き聲を立てて）　おお、痛え。今までうとうとしてゐたんで分らなかつたが、頭も何處かやられてゐるな。

(喬枝が水を持つて出て來る。)

喬枝　へい、旦那。水――。

岡田　あ――ありがたう。(寢ながら飮まうとしたが大抵はこぼしてしまふ。)

(岡田はそのまま目を瞑つてうとうとしながら、時々苦しさうに呻く。)

焉馬　如何したんだらう。おたつさんはひどく遲いね。樺島さんて云やあ八幡町のあの醫者だらう。

小しん　ああ、あの年を老つた――。あの醫者はいつもおれの懸かりつけなんだから直ぐに來て吳れさうなもんだがなあ。何しろ夜中のことだから中々起きねえんだよ。

焉馬　うん、中々起きねえかも知れねえ。(喬枝に)ほんとなら喬枝さん。怪我なんぞの場合は醫者の家へいきなり往つた方がよかつたんだぜ。

喬枝　さうでしたな。何しろ近いところと思つたもんですから、こちらへお伴れしたやうな譯なんでして――。

小しん　なあにもう直きにやつて來るだらう。

(暫らくみんな默つてゐる。火の番の拍子木の音が遠くの方で聽こえる。)

岡田　(突然目を開けて)おや、句樂は如何したい。

小しん　(びつくりして)ええ、句樂――。

岡田　今そこで聲がしてゐたぢやあないか。

小しん　いいえ、そんなことはありませんよ。だつて句樂は一昨年亡くなりましたよ。

岡田　(微に點頭いて)ああ、さう、さう――。句樂はもう死んぢまつたんだつけ――。なあにね――旦那々々つておれを呼んでゐるのが、如何しても句樂の聲のやうに思はれたんでね――。

(岡田はまた目を瞑つてうとうとする。)

焉馬　(低い聲で小しんに)變だね。

小しん　(うなづく)うん。

焉馬　夢にしても妙だし――ひよつとするとこいつあもう――。

小しん　(矯めるやうに)何を云やがるんでえ。(苛々しながら)おたつのやつ、如何しやがつたんだらう。

喬枝　ほんとに少し遲うがすね。

(岡田がこの時突然これまでとは違つた、氣味の惡いやうな呻き聲を立てる。)

小しん　おや、旦那。如何かなすつたんぢやありませんか。

焉馬　(岡田の顏をぢつと見詰めながら)ああ、變だせ、小しん。

小しん　何、變だ。(周章てゝ岡田の傍へ摺り寄つてゆく)旦那――旦那――。

岡田　（ぐつたり目を瞑つたまゝ返事をしない）

小しん　（だんだん涙聲になつて）　旦那――旦那――。

焉馬　（岡田の耳の傍に口を押し付けるやうにして）　旦那――岡田の旦那――。

（いくら二人で呼んでも岡田は何とも返事をしない。）

焉馬　（岡田の口に手を遣つて）　ああ、もういけねえ。

小しん　（岡田の手の脈を取つて見て）　もう駄目だ。

喬枝　（おどおどしながら）　何です、駄目だつて云ふのは。

小しん　（悲しさうに）　もう脈がねえんだ。

（何とも云へない暗い沈默が三人のうへに來る。短い間。）

小しん　（思ひ迫つたやうな聲で）　情ねえなあ。これが以前は今紀文と云はれた人の死態かい。なあ、おい、焉馬。ほんとなら口惜しいと云ひたいところだけれど、おれは唯々情ないよ。何處のどいつだか分らねえやうな奴と喧嘩をして、その怪我のために亡くなるなんて、何んてえ情けねえ死態なんだらう。（岡田の死骸に向つて）旦那。あつしは泣きませんよ。口惜しけりやあ涙もこぼれるが、かう情けなくつちやあ涙もこぼれません。ねえ、旦那。あつしはほんとに泣きませんよ。あつしが泣かねえと云ふ心持は、旦那にやあ分つてゐるでせう。泣きませんとも。誰が泣くもんか。

（さう云ひながらも小しんの目からは涙がとめどもなく溢れて來る。焉馬も喬枝も唯ぢつと岡田の死顔を見詰めてゐる。そこへ臺所口の戸を開けて、おたつが息を切らしながら入つて來る。）

おたつ　（少し燥いだ聲で）　あのね、あすこの先生の家のやつはそりや寢坊て、いくら敲いても如何して起きないんだよ。だけどやつと起して、よく譯を云つて頼んで來たから、もう直に先生が見えるだらう。

小しん　（獨り言のやうに）　もう醫者が來たつて何が來たつて仕様がねえや。

おたつ　（始めて氣が付いて）　えつ――如何して――。旦那はもういけないのかい。

小しん　（無言のまま點頭く。）

おたつ　まあ、さうかい。（ぢつと岡田の死顔を見ながら涙をこぼす）

（小しんは肩を顫はして聲を立てて泣きはじめる。焉馬も喬枝もおたつもそれに誘はれたやうに泣く。）

――幕――

お澄の死（一幕九場）

人物

お澄　或る哀れな女（十五歳）
戸川賢之進　醫師（六十歳）
お秋　その妻（四十五歳）
北尾松三　驛長（四十三歳）
大木　書生
鈴江　看護婦
山田頼太郎　巡査（三十八歳）
角田　驛夫
お槇　女中

お澄の夢に現れる人物
亮太郎
お澄の父
ホゼに扮した男
ヱスカミロに扮した男
大勢の子供
オオケストラの男
道具方
多勢の男優
多勢の女優
酒場の女
外國の水兵
混血兒の女
自動車の運轉手

場所

或寂れた田舍町
（夢にはさまざまのところが現はれる）

時

近頃のこと

第一場

或る寂れた田舍町に住んでゐる醫師の家。八疊と六疊の二間つゞき。和洋折衷の粗末な建築で、壁はすべて黄いろつぽい色の壁紙で貼られてゐる。右方は八疊の座敷。書棚や簞笥などが置いてある。正面に西洋風の大きな窓。綠色の窓帷。その左方は襖を隔てて六疊の茶の間。そこには茶簞笥、長火鉢、茶棚などがある。正面に臺所へ通ふ戶口。

左方には西洋風の唐戸のある出入口があつて、そこから玄關や、診察室の方へ行く事が出來る樣になつてゐる。十月も終りに近い或夜の九時頃。外はかなり激しい風雨の音。稻妻の閃き。

主人の醫師戸川賢之進とその妻のお秋とが、長火鉢の傍でしめやかに話し合つてゐる。主人の顏には、晩酌の後の微薰があるが、しかし何處かに寂しい心持が現はれてゐる。妻は傷ましいほど窶れてゐる。

主人　今夜は何だか馬鹿に寒いな。外はまるで嵐のやうな吹き降りだ。

妻　さうですねえ。何だか今年は少し寒さが早いやうぢやございませんか。

主人　うん、年をとるとさう思はれて來るのかも知れないよ。

妻　さう云へばあたしは光子がゐなくなつてから、急に年をとつたやうに思はれますの。あなただつてめつきり白髮がお殖えになりましたわ。

主人　(苦々しげに)　さうか。おれはもう光子つて名前を聽いただけでも、胸がむかむかして來るやうだ。

妻　しかし、あなた。光子だつて可哀さうですわ。今ではあの仁田は何處かの工場に出てゐるし、自分も何か內職をやつて、ずゐぶんひどい暮らしをしてゐると云ふんですもの。(ふと柱の暦を見て)　ああ、丁度去年の今夜でございますよ、光子が家出をいたしましたのは。

主人　さうか。もう一年になるかな。おれはまだつい一月か二月か前のことのやうに思つてゐたのに……。

妻　(思ひ切つたやうな調子で)　ねえ、あなた。

主人　何だ。

妻　あなたは如何しても光子を許しておやりにならないおつもりなんですの。

主人　(強くうなづく)　無論おれは許さないつもりだ。親に背いて……年をとつた親を棄てて、男と一緒に家出をするなんて、そんなだいそれた女は、おれはもう娘とも何とも思つてゐないのだ。おれはもういつそのこと死んでくれた方がいいと思つてゐる位だ。

妻　しかし、あなた。あの光子の外には、わたくし達には子と云ふものがないのぢやあございませんか。

主人　それだからおれはなほさら光子が憎いのだ。たつた一人の子に背かれたと云ふことは、どんなにおれの心を寂しくしたか知れやしない。全くおれは今でもふとそのことを考へると、ゐても立つてもゐられないほど、寂しくつて寂しくつて堪まらなくなるのだ。

妻　わたくしも最初は……。あの置手紙を見た時には、ほんとに憎い子だと思ひました。相手もあらうにあの藥局生

の仁田なんぞと家出をするなんて、ほんとに呆れたものだとは思ひましたが、しかし今になつて見れば何だかわたくしは、あの子が可哀さうでなりませんの。あの仁田だつて、いろいろ聽いて見れば中々感心な男のやうですし、光子と一緒にしてやつてもいいと思ひますわ。

主人　（怒つたやうな顔付）何だ。主人の娘を唆すやうなやつが、何で感心な男なんだ。一緒にするなんて以ての外だ。おれはあの時餘程誘拐の訴へをしてやらうと思つたんだが、さうすると又表沙汰になつて一家の耻になることだから、無理に耐へておいてやつたんだ。そんな男と一緒にするなんて……そんな馬鹿なことが出來るものか。

妻　しかし、ねえ、あなた。もし光子に子供が出來たら如何なさるおつもりですの。

主人　（胸を刺されたやうに）子供が……。（間）何だな。お前の所へ光子から何か手紙で云つて來たのだな。

妻　（間を置いて）ええ。實は昨夜手紙で子供が生れたと云ふことを知らせてまゐりましたの。

主人　（思はず釣り込まれて）さうか。生れたのは男の子か女の子か、どつちだつたのだい。

妻　男の子ですつて。

主人　男の子か……。さうか……。

妻　ねえ、あなた。子供まで生れたんですし、ずゐぶんひどい暮らしをしてゐるらしいんですから、もう許してやつて下さいましな。

主人　（直ぐに以前の冷めたさに返つて）いや、何と云つても許すことは出來ない。

妻　（怨めしさうに）如何してあなたはさう一酷なことをおつしやるんです。あたしなんか一日も早く歸つて來てくれればいいとそればつかり思つてをりますのに……。夜なんぞふいと目を覺ますと、玄關の扉を誰だか叩いてゐるやうに思つたりして、ああ、きつと光子が歸つて來たんだと思つて、思はず起き上がつたことさへ幾度あつたか知れませんわ。

主人　（叱るやうに）何だ。そんな氣の弱いことで如何するのだ。おれは娘が歸つて來ても、斷然この家の閾は跨がせないつもりだ。玄關先から追ひ返してやる……。

妻　まあ、あなた。そんなことを……。（泣く）

主人　何だ。泣くやつがあるか。

（やや長い間、歔欷の聲。）

（風雨の中を微かに汽車の駛る音。）

（それがだんだん近づいて來ると、牛町ばかり離れた線路の方でけたたましい汽笛の響き。）

主人　おや、何だらう。人でも轢いたのかな。

（主人が立って座敷の正面の窓を開けると、闇を通し

て向うの方に、シグナルの青い灯がぼんやり雨に濡れて見える。）

主人　ああ、汽車が停まつたやうだ。

妻　（ぎよつとして）ほんとに誰か轢かれたんでせうか。

主人。（何か考へてゐるやうな様子で默つてゐる）

妻　（立つて窓の方へ往きながら）誰か轢かれたんでせう。

主人　そんなこと分るものか。

妻　（窓際で）まあ、ほんとにひどい吹き降りですこと……。

主人　うん、ひどい雨だ。（呟くやうに）やつぱり誰か轢かれたんだよ。丁度あすこはあの踏切の近所だからね。こんな吹き降りの晩にはいつもきつと誰か轢られる……。

妻　さうですねえ。あたしは何だかこんな吹き降りの晩は、何かありさうな氣がして、何だか氣味が惡いやうな氣がいたしますわ。

主人　（やつぱり何か考へながら）うん、如何もこんな晩はよくないよ。光子が家出をした晩も、やつぱり今夜のやうな吹き降りの晩だつたからね。

妻　さうでしたか知ら……。

主人　さうだつたよ。おれはようく覺えてゐる。（間）さあ、風邪をひくといけないから、もう閉めよう。老人に夜風は毒だからな。（窓を閉める）

妻　しかし、汽車に轢かれて死ぬなんて、よくよく生きてゐられない譯があるからのことなんでせうね。

主人　（重く沈んだ聲）うん、さうだらう。

妻　ほんとにここはあれが厭ですわね。それにきつとまたあなたを呼びにまゐりますよ。

主人　（うなづく）醫者をしてゐる以上は仕方がないさ。

（二人はまた長火鉢の傍に來て坐る。）

（やや長い間。）

（やがて玄關の扉を烈しく敲く音。）

主人　おや、玄關の扉を敲いてゐるやうだね。

妻　（柱の時計を見上げて）まさかまだ家ぢやあ扉を閉めやいたしますまい。まだ九時ちよつと過ぎですもの。

主人　いや、うちの玄關だよ。大木のやつこんな晩だし眠いものだから早く閉めてしまつたのだらう。

妻　さうですか知ら……。

（間。書生の大木が左方の戸口から出て來る。）

書生　ああ、先生。今驛長の北尾さんのところから使ひが見えて、直ぐに一人怪我人を連れて往くからよろしく頼むつてことでしたが……。

主人　怪我人だつて……。それぢやあ轢れ損なつたんだな。

書生　ええ、何でも男の方は滅茶滅茶に轢られて、もうとても駄目なんださうですが、女の方は煽りを食つて、彈

ね飛ばされただけらしいんです。

妻　まあ、それぢやあ情死なの。

書生　ええ、さうらしいですな。(主人に) それでは、先生。何と云つて返事をして置きませう。

主人　(何か考へてゐたがふと氣が付いたやうに) うん、どうぞお連れ下さいつて……。

書生　はあ。(往きかけろ)

主人　(呼びとめて) おい、その女つて云ふのはいくつ位の女なんだらう。

書生　さあ、それは聽きませんでしたが……。

主人　(間を置いて) うん、さうか。それぢやあいいよ。

(書生は直ぐに元の戸口から出てゆく。)

妻　ねえ、あなた。まさか光子ぢやあないでせうね。

主人　(わざと快活に) 馬鹿な……。光子なら驛長の北尾君だつて顔を知つてゐる譯ぢやないか。

妻　さうですねえ。しかし如何云ふ譯で情死なんぞしたんでせう。

主人　そんなことをおれが知るものか。如何云ふ譯があるにしろ、死ぬなんて餘つ程馬鹿な奴等だ。(間) ところでと…入院させなくちやあならないんだらうが、生憎病室が塞がつてゐるな。もつともたつた二つしかない病室だから、塞がつてゐるのも無理もないが……。

妻　診察室ではいけませんの。

主人　あすこはあんな部屋で寒いからな。まあ、いい。診てからのことだ。あの何は如何したい、鈴江さんは。

妻　ああ、看護婦さんですか。きつと二階の患者さんのところに往つてゐるんでせう。さつき氷嚢を持つてあつちへ往つたやうですから……。

主人　ああ、さうか。それぢやあおれの診察着を出してくれ。

妻　はい。(壁にかけてあつた白い診察着を主人に着せろ)

主人　もうそろそろやつて來るだらう。

(主人は左方の戸口から出てゆく。)

(間。看護婦の鈴江が左方の戸口から入つて來ろ。)

看護婦　ああ、奥さん。誰か汽車に轢かれたんですつて…。

妻　ええ、何でも情死らしいんですよ。男はもう滅茶滅茶にやられて駄目なんださうですけれど、女は唯彈飛ばされただけで助かりさうなんですつて……。

看護婦　まあ、厭ですわねえ。

妻　しかしね、死ぬほど思ひ詰めるなんて、よくよくのことなんでせうよ。

看護婦　ええ、それはさうでせうけれど、若しその女が助かつて、男が死んだつてことを聽いたら、どんな心持がするでせう。

妻　全く堪まらない心持がするでせうねえ。

看護婦　ええ。ほんとにさうなると生きてゐる方が可哀さうですわ。あたし何時でしたか……さうですねえ……もう三年ばかり前、やつぱりさうした情死をし損なつた女の人に附いてゐたことがありましたが、男が死んで自分だけ一人助かつたと聽いた時には、まるで狂人のやうになつてゐましたわ。死にたい死にたいつて云ひつづけて……。

妻　さうでせうねえ。思つて見ただけでも堪まらなくなりますもの。（耳を傾けて）おや、來たやうですわ。

看護婦　ああ、それぢやあたし……お手傳ひして來なくちやあ……。

（看護婦は元の戸口から出てゆく。）

（かなり長い間。）

（妻はそつと帶の間から娘の手紙を出して讀む。）

（そのうち汽車の動き出す音。やがてその響きはだんだん風雨の中を遠ざかつてゆく。）

（書生あわただしく左方の戸口から入つて來る。）

書生　ああ、奥さん。あのう、お孃さんの着物を持つて來いつてことですが……。

妻　お孃さんの着物を……。

書生　着物が雨でぐつしよりなんです。

妻　ああ、さう……。この雨ぢやあね。（立ち上つて簞笥から着物を出す）

書生　それから、奥さん。あの今の怪我人をこつちの座敷へ寢かせるんですつて……。

妻　ああ、さう……。どんな工合なの。

書生　何だかひどく胸を打つてゐるので、ちよつとむづかしいかも知れませんよ。

妻　可哀さうに……。いくつ位の女なの。

書生　十八九ですかな。可愛らしい顏をした中々の美人ですよ。（氣が付いて）それぢやあ。奥さん。お願ひします。

（書生は直ぐに着物を持つて元の戸口から出てゆく。）

（妻は立つて正面の戸口のところにゆき、扉を開けて、「おまき、おまき。」と女中を呼ぶ。）

（女中正面の戸口から出て來る。）

妻　ああ、あのね。この座敷に患者さんを一人寢かせるんだからね、そこの納戸から布團を出して來ておくれ。

（女中直ぐ出てゆく。間もなく布團を運んで來て、座敷の方にそれを敷く。）

（左方の戸口から書生と驛員とで戸板に載せた若い女の體を運んで來る。その後から醫師、驛長、巡査、看護婦などがぞろぞろ附いて入つて來る。）

（みんな手傳つて女の體を座敷の寢床の上に移す。）

（女は時々苦しさうに呻くだけで、死んだもののやうに身動きもしない。色の白い美しい顏付。）

驛長　（妻に）いや、如何もいろいろ御面倒をかけまして……。

妻　いえ。如何いたしまして……。ほんとにかう云ふことがあるので、あなたも大抵ぢやあございませんね。

驛長　ええ。しかしもうわたくしもかう云ふお客様には馴れてしまひましたよ。（笑ふ）

妻　まあ、厭な……。（眉をひそめる）

驛長　（氣が付いたやうに醫師に）如何です。少しは氣が付いて來ましたでせうか。

主人　ええ、さつきのカンフルが利いたと見えて大分元氣が出て來たやうです。しかし胸をひどくやられてゐますからね。さつき診たところでは、大分內出血をしてゐるらしいですよ。それに肋骨も二本ばかり折れてゐるやうですし……中々面倒です。

驛長　さうですか。成程……肋骨がねえ。

巡査　（驛長に）何ですか……別に遺書と云ふやうなものは……。

驛長　ええ、それが如何も見當らないのですが……。ひよつとしたらこれまで泊つてゐた宿屋か何かに置いてあるんぢやないかと思ひますよ。これまでの經驗上大抵みんなさうのやうです。

巡査　成程。さう云はれると大抵さうのやうですな。（帳面を出して）ええと……年齡は十八歲……九歲位ですかな。容貌美……髮は束髮と……着物は（氣が付いて）ああ、着物はあつちでしたな。（何か書きつける）

主人　（脈を見ながら巡査に）君。まあ書くのは後にしてちよつとこつちへ寄つてゐてくれたまへ。

巡査　やあ。如何も……。（帳面をしまふ）

主人　（獨語のやうに）うん、大分いいやうだ。（驛長に）この脈の工合ぢやあ大丈夫ですよ。

（女は微に目を開ける。みんなの視線は女の顏にあつまる）

主人　（やさしく）如何だ。苦しいかい。

女　（默つて微にうなづく）

主人　もう直き樂になるよ。もう直きだ。

女　（殆んど聽き取れない位の聲で）あの……亮さんは如何して……亮さんは……。

主人　（訊き返すやうに）亮さん　。（直ぐに氣が付く）うん、亮さんか。亮さんは生きてゐるよ。生きてゐるから安心おし。

女　（微にうなづく）

巡査　（傍から）　あのね、お前さんの名前は何て云ふんだい。
女　（かなり長い間を置いて）……。すみつて云ふの……。
巡査　うん、それでお前さんのところは……。
お澄　（返事をしずに目をつぶる）
主人　（巡査の言葉を遮るやうに）　おおい、君。もう少しそんなことを訊くのは待つてゐてくれたまへ。
巡査　さうですか。それぢやあ僕はもう一度現場へ往つて來ませう。（驛長に）　驛長さん。あなたは……。
驛長　ああ、それぢやあ御一緒に往きませう。まだあつちはその儘になつてゐるんだから……。（主人に）　それぢやあまた後程伺ひますが、どうぞよろしくお願します。
巡査　いや、どうもお邪魔をしました。
主人　いや、どうも御苦勞さまです。
（驛長、巡査、驛員の三人は、元の戸口から出てゆく。妻と書生とは見送りにいつたが、妻だけはまた直ぐかへつて來る。この間主人はぢつと女の顏ばかり見つめてゐる）
妻　あなた。
主人　ううむ。
妻　丁度光子と同じ位の年恰好でございますわね。
主人　うん……。（何か考へてゐる）
お澄　（脅えたやうに目を開けて）　亮さん……亮さん……亮さんはどうして。あたし……あのう……亮さんに逢ひたい……。
妻　（涙ぐんで）　亮さんはね、生きてゐるんだから安心なさいね。ね……、ね……分つたでせう。後できつと逢はせますから……。
お澄　（點頭いて目をつぶる）
（かなり長い極めて靜かな間。）
（主人はその間手の脈を取りながら、やつぱりぢつと女の顏ばかり見つめてゐる。）
主人　（重い落着いた聲で）　いい按排だ。眠つたやうだよ。
（みんなの視線が女の顏にあつまる。）
（かなり激しい風雨の音。稻妻の閃き。）
（舞臺はだんだん暗くなる。）

第二場

これから第八場まではお澄の夢。
舞臺がだんだん明るくなつて來ると、そこには美しい野の景色が現はれて來る。
小川が一筋絹のやうに白く流れてゐて、そこには細い

丸太の橋がかかつてゐる。野には茅花が咲いてゐる。日の暮れがた。遠くで子供達のうたふ唄の聲。

お澄はまだ十二三歳位、亮太郎は十四五歳位の男の子。二人は小川の傍りで草土手に腰をかけてゐる。

亮太郎　澄ちやんまだ家へ歸らなくつてもいいのかい。

お澄　ええ、いいわ、まだ。……亮ちやんは遲くなると叱られやしないこと……。

亮太郎　（首を振つて）ううん、僕は大丈夫だよ。

お澄　さう……。それならいいけれど……。（不圖思ひ出したやうに）だけど誰だか學校でいつてゐたわ。亮ちやんのお母さんはずゐぶん亮ちやんをいぢめるんだつて……。

亮太郎　（寂しさうに）いぢめるなんてことはないけれど、何しろ僕のほんとのお母さんぢやないんだからね。

お澄　あら、さう……それぢやああたしと同じだわね。あたしのおつ母さんもほんとのお母さんぢやないんですつて……。

亮太郎　澄ちやんのおつ母さんも。さうかい。僕ちつとも知らなかつたよ。ほんとのおつ母さんどうしちまつたの。

お澄　何でもあたしが三つの時に、惡いことをして何處かへ往つてしまつたんですつて……。

亮太郎　惡いことつてどんなことをしたんだらう。

お澄　どんなことだか知らないけど。兎に角惡いことをしたんですつて……。あたしほんとのおつ母さんのことを聞きたいけれど聞きかけるといつもお父つあんに叱られるの。

亮太郎　ああ、僕のところと同じやうだな。僕もほんとのおつ母さんのことを聞かうとすると、いつもお父つあんはそんなこと聞くもんぢやないつて云つて怒鳴り付けるんだよ。

お澄　どうしてでせうねえ。あたしには何故お父つあんが怒るか譯が分らないわ。

亮太郎　だけどいくら叱られても、ほんとのおつ母さんのこと聞きたいだらう。

お澄　ええ、聞きたいわ。さうしてもし逢へることが出來るなら逢ひたいと思ふわ。

亮太郎　ああ、ほんとに逢ひたくつて堪らなくなることがあるね。

お澄　（獨り言のやうに）どうかして逢へないか知ら……あたし何だか急に逢ひたくなつたわ。

亮太郎　（慰めるやうに）逢へるよ。今にきつと逢へるよ。僕は今にきつとほんとのおつ母さんの傍で暮らすこ

とが出來ると思つてゐるんだ。

お澄　ほんとのおつ母さんに逢ふことが出來たら、どんなにあたし嬉しいでせう。

（間。）

（二人は何時の間にか手を取り合つてゐる。）

（五六人の子供達が何か面白さうに騒ぎながら出て來る。）

子供の一　ああ、面白かつた。明日もまたあすこに往つて遊ばう。

子供の二　丁度城のやうになつてゐるんだもの。戰爭ごつこには持つて來いつてところだぜ。

子供の三　しかし僕は明日は厭だぜ、攻められる方になるのは……。

子供の四　それぢや明日はぢやんけんで極めよう。

子供の五　それに何だよ、明日は負傷兵を入れる病院を作つて、そこに看護婦を置かうぢやないか。

子供の六　ああ、それぢやあ女の子も入れてやるのかい。

子供の五　ああ、さうさ。赤十字の旗を立てておくのさ。

子供の一　いいね。しかし僕達の仲間に入つてくれる女の子があるか知ら……。

子供の二　そりやあるよ。第一亮公を入れてやりやあお澄ちやんがきつと入つて來るぜ。

子供の一　（二人を見付けて）おい、ゐるよ、その二人が……。

（子供達は亮太郎とお澄の傍に近づく。）

（二人は立ち上がる）

子供の三　やあ、をかしいな。二人で何をしてゐたんだい。

亮太郎　何にもしてやしないよ。話をしてゐたんだよ。

子供の四　（囃すやうに）をかしいな。をかしいな。男と女と豆煎り。やあい。

亮太郎　何がをかしいんだい。

子供の一　まあ、いいよ。怒るのはおよしよ。

子供の二　それよりも、亮ちやん。君は明日僕達と遊ばないか。戰爭ごつこをして遊ぶんだから……。

亮太郎　厭だよ。戰爭ごつこなんか僕はきらひだ。

子供の三　さうかい。それならいいよ。何だい。女とばつかり遊んでゐやがらあ。厭なやつ……。

亮太郎　何だと……。女と遊ばうと誰と遊ばうと餘計なお世話ぢやあないか。

子供の四　生意氣云ふない。

亮太郎　生意氣なのは君達だよ。

子供の五　何だと……。（他の子供達に）おい、君。やつ付けちまはう。

子供達　やつ付けろ。やつ付けろ。

（子供達はみんなで亮太郎をいぢめる。）

（亮太郎も負けてゐずに取つ組み合ひをはじめる。）

（お澄は亮太郎を助けようとしたが女のことで如何にもならない。）

（そのうち子供達は亮太郎をそこの草の上に突き倒す。）

子供達　やあい、態を見ろ。いい氣味だ。さあ、往かう。往かう。

（子供達はわいわい云ひながら往つてしまふ。直ぐ軍歌をうたふ聲が聽こえる。）

（日漸く暮れはじめる。）

お澄　（亮太郎を扶け起して）亮ちやん。何處も怪我はしなくつて……。

亮太郎　（起き上がつて）大丈夫だよ。しかしお澄ちやん。僕口惜しいよ。

お澄　あたしだつて口惜しいわ。大勢でたつた一人をいぢめるなんて……。第一男らしくないわ。卑怯だわ。

亮太郎　しかし僕も惡かつたんだよ。默つてみんなの云ふことを肯いてゐればよかつたんだ。

お澄　あなたが惡いなんて……そんなことはないわ。まあ、こんなに泥だらけにして……。（着物の泥を拂つてやる）

亮太郎　有難う。

お澄　（びつくりして）まあ、腕のところを擂りむいたと見えて、こんなに血がにじんでゐるわ。痛かないこと……。

亮太郎　少し痛いけれど大丈夫だよ。

お澄　さう、何だか痛さうだわ。何かで縛つて置くといいんだけれど……。

亮太郎　いいよ、いいよ。大丈夫だよ（間を置いて）ねえ、お澄ちやん……。

お澄　ええ。

亮太郎　（涙ぐんだやうな聲で）君は何時までも僕の友達になつてゐて吳れる……。

お澄　ええ。なるわ。何時までても……。

亮太郎　何時まででも……。きつとだね。

お澄　ええ。きつと……。

（二人は目と目とを見合はせる。）

（暮色迫る。）

（茅花に吹く風がうすら寒い。）

（舞臺はだんだん暗くなる。）

第三場

舞臺がだんだん明るくなつて來ると、そこには黑く丈の高い板塀が現はれて來る。
お澄の家の塀の外。
塀の中には立木が五六本。丁度塀の眞ん中のところ邊りに木戶口。
夜だけれども月光がかなり明るくそこらを照らしてゐる。
前の場からは四五年の後。
遠く微に浪の音。
亮太郎は二十歲位。お澄は十七八歲位。
亮太郎は出て來て塀の前をあつちへ往つたりこつちへ往つたりしてゐる。
そのうちお澄が木戶の扉を開けて出て來る。

お澄　（低い聲で）亮さん……。
亮太郎　（同じく低い聲で）ああ、お澄さんかい。
お澄　ええ。あたし……。餘つ程待つて……。
亮太郎　いいえ。そんなには待たなかつたけれども……。しかし誰かに見付かりやあしないかと思つて氣が氣ぢやあなかつたよ。
お澄　さう、ご免なさい。あたし先のやうに自由に外に出られるといいんだけれど、あの話が始まつてからつて云ふものはもうまるで一足だつて外へ出して吳れないの。
亮太郎　（心配さうに）それでこの間ちよつと手紙に書いてあつた話は如何なつたのだい。
お澄　それで困つてゐるのよ。おつ母さんは如何してもその男のところへ嫁に往けつて云つて、もうどんどん話を運んでゐるらしいの。
亮太郎　ふうん、おつ母さんもずゐぶん亂暴だね。
お澄　ええ。お父つあんがちやんとした體でゐりやあいいんだけれど、何しろもう近頃ではだんだん病氣がひどくなつて、每日每日座敷牢の中で、氣味の惡いことばかり怒鳴りつづけてゐるつて始末なんでせう。あたしもう自分で自分の體を如何していいか分らなくなつちまつたわ。ねえ、亮さん。あたし如何したらいいでせう。
亮太郎　さうだねえ。（暫らく考へてゐた後で）あのね、僕もまだはつきり決心が付かないんだけれど、僕は如何しても東京へ往かうと思つてゐるんだよ。それもね……お澄さんがいけないつて云へば止めるつもりだけれど……。
お澄　東京へ往つてあなた何をするつもりなの。
亮太郎　何をつて……まだはつきり決まつてはゐないんだけれど、何しろ家があんな事情だから、どうしても東京へ往つてしまひたいと思つてゐるんだ。若し入れるなら音樂學校に入りたいんだけれど、これが駄目ならまだ何

か外のことを勉强するつもりさ。

お澄　さうねえ。あたしもいつそ東京へ往つてしまはうか知ら……。

亮太郎　(訊き返すやうに) 東京へ……。

お澄　ええ。あなたが往くなら丁度好いわ。一緒に東京へ往つてしまひませうか。

亮太郎　さうねえ。あなただつて今家にゐない方が都合がいい譯なんだからなあ。

お澄　ええ。さうよ。家にゐなけりやあおつ母さんだつて、どうすることも出來ないでせう。お父つあんのことだけは、何だか少し氣になるけれど、しかし毎日毎日座敷牢の中で怒鳴つてゐる聲を聽かされてゐるのも堪まらないわ。

亮太郎　そりやあ全く堪まらないだらうねえ。話しを聽いただけでも、何だか堪まらない氣持がするもの……。

お澄　さうでせう。ほんとにあたしが毎日どんな日を送つてゐるか察して頂戴。あたし今賴りに思つてゐるのは、亮さんあなたばつかりだわ。(間を置いて思ひ切つたやうに) ねえ、亮さん。あたしもう心を決めたわ。二人で東京へ往つてしまひませうよ。

亮太郎　お澄さん。あなたほんとに僕と一緒に東京へ往つて吳れる……。

お澄　ええ、往くわ。東京へでもどこへでも往くわ。

亮太郎　きつとだね。お澄さん。

お澄　ええ。きつとですとも……。

亮太郎　それぢやあ何時往くことにしよう。

お澄　さうねえ。明日の晩あたりなら都合がいいわ。

亮太郎　(考へて) 明日の晩……。

お澄　明日の晩ぢやああまんり早過ぎること……。

亮太郎　いいえ。早過ぎるとは思はないけれど……。どうしたらいいかなあ、みんなに分らないやうに東京へ往くのには。

お澄　さうねえ。ここの停車場から汽車に乘つたんでは、直きに見付かつてしまふわねえ。

亮太郎　そりやあ直ぐに見付かつちまふよ。汽車よりも汽船の方がいいかも知れないと思ふんだけれど……。

お澄　ああ、汽船がいいわ。汽船は毎晩出るんでせう。

亮太郎　ああ、毎晩出るには出るんだけれど……。しかし、お澄さんは何だか船に暈ひさうだなあ。

お澄　いいわよ。暈つたつて……。(不圖聞耳を立てて) おや、誰だらう。誰だかこつちへやつて來るやうだわ。

亮太郎　ああ、見付かるといけない。早くあすこの塀の蔭に往かう。

お澄　おや、何だか怒鳴つてゐるわ。(氣が付いてびつく

りしたやうに）ああ、きつとお父つあんだわ。お父つあんが座敷牢から遁げ出したんだわ。

亮太郎　さあ、早く……。見付かつたら大變ぢやないか。

（二人は塀の蔭に隱れる。）

（木戸口を開けてお澄の父が飛び出して來る。老いたる狂人。）

お澄の父　畜生……畜生……畜生……。しつ……しつ……何處までわしの後を跟いて來るんぢや。いくら跟いて來たつても駄目ぢやと云ふのに……。それよりもな……お前はあつちへ往つて、あすこに死んでゐる女の番をしてゐるんぢや。ええか……分つたな。（かう云つてゐるがそこには何ものの姿も見えない）はははは……。分つたと見えて往つてしまふた。ところでわしはどうするかな。極樂からも來い來い云うし、地獄からも來い來い云ふ。どつちにしたらええものかな。（しばらく考へてゐたが急に脅えたやうに）ああ、何ぢや。ありやあお重の聲ぢや。今わしが殺してやつた女房の聲ぢや。何ぢや。蛇が化けてをつた癖に……。わしは正體を見屆けるために殺したんぢや。（血にまみれた兩手を出して）これ、見い。こつちの手にも蛇の血が着いてゐる。こつちの手にも蛇の血が着いてゐる。いかん、いかん。早う河へ往つて洗つて來よう、こんな血だらけの手をしとつたんでは、きつと極樂では入れて吳れやせんからな。わしはやつぱり如何考へても地獄へ往くのは厭ぢや。さうぢや。やつぱり極樂がええ……。極樂がええ……。

（お澄の父ぱぢつと血にまみれた兩手を見ながら往つてしまふ。）

（二人は塀の蔭から出る。）

お澄　（脅えたやうな顏付）ねえ、亮さん。お父つあんはほんとにおつ母さんを殺したんでせうか。

亮太郎　（同じやうに脅えた顏付で）うん、如何もさうらしいね。座敷牢を壞して飛び出して仕つたんだね。

お澄　どうしたらいいでせう。亮さん。あたしもう怖くつて家へ歸れないわ。

亮太郎　どうだい。それぢやあ明日の晩なんてことを云つてゐずに、今夜これから直ぐ東京へ往つてしまはう。

お澄　ええ。さうしませう。しかしあたしお金も何も持つてゐませんわ。

亮太郎　いいよ。二人が東京へ往く位のお金は僕が持つてゐるから……。東京へ往つてしまへば友達もゐるし、どうにかなるから大丈夫だよ。

お澄　東京へ往つて了へばあたしだつて知つてゐる人がゐるから、何とか會つて賴んで見るわ。あのう……ほら……あなたも知つてゐる、あたしの級に吉岡さんて人がゐ

たてせう。彼人も東京へ往つて女優になつてゐるのよ。

亮太郎　ああ、あのちよつと混血兒(あひのこ)見たいな顔をした人だね。

お澄　ええ。さうよ。

亮太郎　(氣が付いたやうに)　あなたほんとにこれから東京へ往ける……。

お澄　ええ。もう厭だわ、家へ歸るのは……だつて何だか怖いんですもの。ほんとにねえ、亮さん。これからあたしを東京に連れて往つて頂戴。

亮太郎　(決心して)　それぢやあ、往かう。これから直ぐに……。

お澄　(不圖また聞き耳を立てて)　おや、また誰か來るやうだわ。さあ、往きませう。早く……早く……。

(二人は往きかける。)

(塀の中で「人殺しだ、人殺しだ。」「狂人が逃げた。」などと叫ぶ聲が聞こえる。)

(浪の音やや高くなる。)

(舞臺はだんだん暗くなる。)

第四場

暗の中から最初は遠く微に何だか分らないやうな音樂の響きが聽こえてゐたが、そのうちそれがだんだん近くはつきり聽こえるやうになつて來ると、はじめて、それはビゼーの『カルメン』の中の或曲だと云ふことが分る。

そのうち合唱の唄の聲が聽こえて來ると、舞臺がだんだん明るくなつて、そこには或る歌劇ばかりをやつてゐる小さな劇場の舞臺が現れて來る。

舞臺面は序幕のセギイラの辻公園の場のところだが、背景の色も唯けばけばしいばかりで、かなり粗末な道具である。

明るくなつた時は、丁度兵隊や女工の群が合唱をしてゐるところ。

前の場からは一年ばかりの後。

お澄は十八九歳位でカルメンに扮してゐる。

兵隊や女工の群の合唱が終ると、お澄の扮してゐるカルメンはハバネラを歌ふ。

カルメンが歌つてゐる間、ドン・ホセに扮した男優は、しきりに棧敷にゐる女と目まぜをしたり何かをする。

棧敷と思はれる方からは、「素敵だぞ。」とか「いよ、お澄ちやん。」とか云ふやうな叫び聲が、時々投げ付けるやうに聽こえて來る。

カルメンに扮してゐるお澄は時々愛嬌笑ひをしたり

何かして歌つてゐるが、しかしその顏には何處か寂しい影がある。カルメンの唄が終ると、棧敷や土間と思はれる邊から、急に拍手の音が起る。誰かの惡戯に吹く口笛がその騷ぎの中に鋭くひびく。

舞臺はだんだん暗くなる。

第　五　場

暗の中からカルメンの歌ふハバネラが聽こえてゐたが、そのうち微に鈴が鳴つて、幕の降りる氣配がすると同時に舞臺がだんだん明るくなつて來て、そこには前の場と同じ劇場の舞臺裏の光景が現れて來る。

丁度カルメンの序幕が閉まつたところで、道具方は忙しさうに背景の布を運んだりしてゐる。

第二幕に出るジプシイの男や女の扮裝をした人達が、何か喋つたり舞臺裏を通り過ぎてゆく。

かなり長い間。道具方の怒鳴る聲や釘を打つ音。

やがてお澄のカルメンがやつぱりジプシーの娘の姿で出て來て、急いで舞臺裏を通り拔けようとする。

丁度そこへ道具の蔭からひどく窶れた顏をした亮太郎が出て來る。

お澄　（びつくりして立ち留まつて）どうしたの、あなた。もう幕が開くんぢやないの。

亮太郎　（棄鉢に）幕が開いたつていいよ。おれはもうあんなところで、ギターなんか彈いてゐるのは厭になつた。

お澄　（詰るやう）何故……どうしてそんなことを云ふの。

亮太郎　どうしてつて譯はないけれど、唯厭になつて來たのさ。つまらないぢやないか。あんな穴ぼこ見たいなところに入つて、見物席から來る埃を浴びて、出來損なひのカルメンを彈いてゐたところで何になるんだい。女房は舞臺の上で踊つてゐるし、亭主はオオケストラの中でギターを彈く……。何だい、この態は。體のいい大道藝人ぢやないか。

お澄　（困つた顏付で）今さらそんなことを云つたつて困るぢやないの。兎に角あなたもあたしと同じに半年つて契約がしてあるんだから、いくら厭でもそれが濟むまでは我慢して貰はなくつちやあ……。

亮太郎　だつておれはもうほんとに厭になつてしまつたんだ。ギターを彈いてゐる間はまだいいんだが、不圖目を上げて舞臺を見るとおれはもう堪まらなくなるんだ。

お澄　堪まらなくなるつて……。どう堪まらなくなるの。

亮太郎　さあ、何て云つたらいいんだらう。恥かしいやうな、寂しいやうな、悲しいやうな、馬鹿々々しいやうな

……まあ、ちよつと何とも云へないやうな心持だな。

お澄　（ちつと亮太郎の顔を見つめながら）　何ね……あなた嫉妬やいてゐるのね。

亮太郎　（ぎよつとして）　嫉妬……。嫉妬なんぞやきやあしないよ。

お澄　嘘よ。自分でさうとは氣が付かないかも知れないけれど、あなたはたしかに嫉妬をやいてゐるのよ。

亮太郎　そんなことはないよ。第一嫉妬をやく譯がないぢやないか。

お澄　いいえ。あるわ。大にあるわ。あなたは何ぢやないの、あたしが舞臺に出てゐると云ふことが厭なんぢやないの。自分が厭になつたと云ふよりは……。

亮太郎　そりやあんまりいい氣持はしないね。こんな小汚い舞臺の上で、くだらない見物を相手に、お前が歌つたり踊つたりしてゐるのを見てゐると、全く情なくなるからね。

お澄　そりやあたしだつて情なくなるわ。しかしもうかうなつたら仕方がないぢやありませんか。ね……ね……分つたでせう。仕方がないとあきらめて、厭だなんてことを云はずに、もう少しどうぞ辛抱して頂戴。

亮太郎　うん、お前がさう云ふならもう少し辛抱してもいいけれど……。しかしお前もおれもどうにかして早くこの小屋から出ようよ。

お澄　ええ。出てもいいけれど……。

亮太郎　お前は厭なんだらう。出たくないんだらう。何時までもここにゐたいんだらう。

お澄　どうしてあなたはそんなことを云ふの。

亮太郎　分つてゐるよ。今度ホセをやつてゐる柳澤だつて、エスカミロをやつてゐる古宇田だつて、みんなお前に惚れてゐるんだ。

お澄　（急にヒステリカルに笑ふ）　あははは……。あなたはほんとに嫉妬をやいてゐるのね。馬鹿々々しいぢやありませんか。向うで惚れたつてこつちで惚れなきやあそれまでぢやありませんか。

亮太郎　しかし。……。（云ひかけてやめる）

お澄　しかし、何なの。

（亮太郎が何か云はうとした時、道具の蔭からオオケストラの一人が出て來る。）

その男　（亮太郎に）　おい、君。もう幕が開くんだ。早く來て呉れたまへ。

亮太郎　うん、今往くよ。

その男　駄目だよ。すぐ來なくつちやあ……。（亮太郎の腕を取つて）　さあ、往かう。

亮太郎　（お澄に）　まあ、いいや。後で話すよ。

（亮太郎はその男に引つ張られるやうにして道具の蔭に入る。）

（お澄は默つて男の姿を見送つてゐたが、そのうちその目の中には、涙が一杯溜つて來る。）

（闘牛者のエスカミロに扮した男が出て來て、お澄の姿を見つけると、そつと、背後から忍び寄つて、微笑しながらその肩に手を置く。）

エスカミロに扮した男　おい、澄ちやん。まだ返事をして臭れないんだね。

（お澄は默つてぢつと身動きもしないでゐたが、そのうち男はだんだん首の方までその手を延ばして捲き付けて來る。遠くで幕の開くのを催促する拍手の音。）

お澄　（急に氣が付いたやうに男の手を振り拂つて）　ああ、もう幕が開くわ、幕が開くわ。

（お澄は遁げるやうにして道具の蔭へ駈け込む。）

（間もなく幕開きの鈴が鳴つて、カスタネットの伴奏でうたふジプシーの合唱が聽こえる。）

（舞臺はだんだん暗くなる。）

第六場

蓄音機でやつてゐるワルツの調べが聽こえて來ると同時に、舞臺はまただんだん明るくなつて、そこには或港街の陰凄とした酒場の内部が現れて來る。NAVY HOTEL と大きくかいた入口の硝子扉。いろいろな酒の壜を並べた棚。大きな外國の美人の畫。蓄音機の臺。壁鏡など。前の場からは半年ばかりの後。もう夜も十二時に近い。

蓄音機のワルツにつれて、二人の女は各外國人の水兵を相手に踊つてゐる。

お澄は蓄音機の傍の籐椅子に腰をかけて、つまらなさうにみんなの踊るのを見てゐる。

酒棚の前には印度人と日本人の混血兒らしい。色の黑い薄痘痕のある四十女が、これも椅子に靠れたままこくりこくり居眠りをしてゐる。

ワルツの曲が終ると、みんなは踊るのを止めて、隅の方の卓子の周りに置いてある椅子のところにかへつて來る。

女の一　ヘンリーさん。シヤンパン奢らない。

水兵の一　シヤンパンいけません。高いです。

女の一　吝ね。あんなに一緒に踊つてやつたのに……。ああ、咽喉が乾いて仕方がないわ。それぢやあビールいけない。

水兵の一　ビールいいです。

女の一　（酒棚の方を向いて）　あまさん。ビールお臭ん

な。
女の二　（水兵の二に）　ボーウヱルさん。あなた否なことを云はないで、シヤンパンでなくつていいから、ウヰスキイソーダお奢りよ。いいだらう。
水兵の二　（默つてうなづく）
女の二　（混血兒の四十女に）　あのね、あまさん。こつちにはウヰスキイソーダ……。
（混血兒の女は立ち上つて、それぞれ云はれたものを銀色をした盆の上に載せて、みんなのゐる卓子の方へ持つて來る。）
（お澄はこの間やつぱりつまらなさうにみんなのすることを眺めてゐる。）
（やや長い間。時計が懶うさうに十二時を打つ。）
（入口の扉が徐かに開いて、亮太郎がかなり醉つて入つて來る。お澄はぎよつとした顏付で立ち上がる。）
亮太郎　（空いてゐる椅子に腰を下ろして）　おい、ウヰスキイを一杯吳れないか。
お澄　（傍に往つて）　あなたどうしたの。また醉つ拂つてゐるのね。
亮太郎　醉つて惡いかい。何を云つてやがるんだい。おい、ウヰスキイを吳れつて云つたら早く持つて來たらいいぢやないか。
お澄　ええ、上げないとは云ひませんよ。
（お澄は自分で酒棚のところに往き、混血兒の女からウヰスキイを出して貰つて持つて來る。）
亮太郎　（俯向きになつて考へてゐる）
お澄　さあ、持つて來たわ。お上がんなさい。（椅子にかける）
亮太郎　（顏を上げて）　ああ、濟まねえ。濟まねえ。もう止めるよ。明日からきつと止めるよ。しかし、なあ、お澄。おれは何だか酒でも飮んで、醉つ拂ひでもしてゐないと、どうしても生きてゐられないやうな氣持がしてゐるんだ。みんなおれが惡いんだ。みんなおれが惡いんだから、どうぞ勘辨して吳れ。なあ、どうぞあやまるから勘辨して吳れ。（淚をこぼす）
お澄　何を云つてゐるの。みんなの見てゐる前で見つともないぢやないの。さあ、もうそんなことを云はないでお飮みなさい。しかし、もうこれ一杯ぎりよ。
亮太郎　一杯ぎり……。一杯ぎりつと云ふのはつまり早く歸れつてことなのかい。
お澄　厭なことを云ふのね。さう云ふ意味で云つたんぢやあないわ。
亮太郎　噓を吐け。いくらさう云ふ意味で云つたんぢやあなくつても、おれの耳にはさう云ふ意味に聽こえたんだ

から仕方がねえ。歸るよ。これを飲んでからきつと歸るよ。お前の商賣の邪魔になるやうなことはしないから安心してゐるがいいや。
お澄　（涙ぐんで）いいわよ、歸らなくたつて……。そんなことを云ふなら、いくらでも飲みたいだけ飲むがいいわ。身體を壞したつて知らないから……。
亮太郎　飲むとも……。いくら飲んだつて金さへ拂つてやりやあそれでいいんだらう。へつ、おれだつて偶にやあ十圓紙幣の十枚や二十枚は持つてゐるんだ。（衣兜からくしやしやくにした紙幣を摑み出して卓子の上に置いて）さあ、ウヰスキイを壜ごとここへ持つて來て吳れ。
お澄　まあ、どうしたの。こんなにお紙幣を……。
亮太郎　どうしたつていいぢやねえか。（混血兒の女の方を向いて）なあ、おい、あまさん。そこにあるジョニウオカアを持つて來て吳れないか。
（混血兒の女は紙幣を見たので、急に氣味の惡い薄笑ひをしながら、その壜を持つて來る。）
（二人の水兵と二人の女とは、何時の間にかもうここにゐない。）
（やや長い間。亮太郎は默つてウヰスキイを飲む。お澄は目に一杯涙を溜めて、ぢつと亮太郎の顏を見つめてゐる。）

（混血兒の女はまた元の椅子に腰をかけて直ぐに、こくりこくり居眠りをはじめる。）
お澄　（思ひ迫つたやうな聲で）ねえ、亮さん……。
亮太郎　なに、亮さんだつて……。ひどく改まつた呼び方をするぢやあないか。
お澄　あたしもういつそ死んぢまひたくなつたわ。
亮太郎　（笑つて）ははは……。何だ。またいつもの極りが始まつたな。おれはお前の口から死んぢまひたいつて言葉を、幾度聽いたか知れやしないぜ。まあ、そんなことを云はないで……どうだい、一杯ウヰスキーでも飲んだら……。
お澄　厭々……。あたしには、お酒はどうしても飲めないの。（間を置いて）ねえ亮さん。亮さんつて呼んだつていいでせう。あたし亮さんつて呼ぶと、何だか以前のあなたの姿が見えて來て懷かしいんだから……。
亮太郎　どうとも勝手にお呼びなさいましだ。しかし以前から見ると、おれもずゐぶん變つたなあ。さう思ふとおれだつて、何だか情ないやうな悲しいやうな妙な氣持になることがあるよ。おればかりぢやあない。お前だつてずゐぶんひどい變りやうだからなあ。
お澄　あたしなんかもう滅茶々々だわ。まだ舞臺に出てゐるうちはよかつたけれども、あんな騷ぎからあすこにも

ゐられないやうになつてからは、棄鉢つて云ふんだか何だか知らないけれど、もうどうにでもなれつて氣になつてしまつたの。

亮太郎　いや、何しろみんなおれが惡いんだよ。あの騒ぎだつておれのやつたことだし、お前がこんなところに入るやうになつたのも、やつぱりおれのやつたことなんだ。

お澄　しかしあなたばつかり惡い譯ぢやないわ。あの騒ぎだつて因（もと）はつて云へば、あたしが惡かつたのよ。だけど、あたし…。あなたがあんな思ひ切つたことをするとは思はなかつたわ。

亮太郎　うん、あの拳銃の一件かい。

お澄　ええ。あの音を聽いた時には、あたしはこりやあ大變なことになつたと思つたわ。

亮太郎　今になつて考へて見れば、誰にも怪我がなかつたのが勿怪の幸ひさ。あれであいつに傷でも負はせて見ろ、今ぢやあおりやあ牢屋の中にゐて、こんな酒なんぞ飲めやしねえ。

お澄　ほんとに今考へて見てもぞつとするわ。

亮太郎　擊つた御當人のおれだつてぞつとするよ。

お澄　もうあなた拳銃なんか持つてやしないでせうねえ。

亮太郎　うん、拳銃か…。（あいまいに）持つてやしねえ、持つてやしねえ。

お澄　（不思議さうに）だがね、亮さん。あなたはどうして今夜こんなに澤山お金を持つてゐるの。

亮太郎　うん、これか…。これはちよつと思惑をやつて儲けたのよ。

お澄　儲けたつて、何で儲けたの。

亮太郎　まあ、いいぢやないか。そんなに訊かなくつたつて…。

お澄　だつてあたし心配だわ。

亮太郎　何も心配することはないよ。（間を置いてから聲を潜めて）なあ、おい、お澄。おれはもうこの町にゐるのが厭になつたんだがな。どうだい。お前は何時までこんな家にゐる氣なのかい。

お澄　厭だね。こんな家にゐる位なら死んぢまつた方がいいわ。

亮太郎　さうか。お前がさう云ふ氣なら、おれが手引をして、うまくここから遁げ出させてやらあ。

お澄　しかし、やり損ふとひどい目に會ふわ。それこそほんとに殺されるかも死れないわ。ここのマスタアはそりやあひどい奴なんだもの。

亮太郎　大丈夫だよ。さう極まりやあ少しでも金を持つてゐる方がいい。（卓子の上の紙幣をしまつて）二枚も置いときやあ御の字だらう。（二枚だけ投げ出す）

お澄　ほんとに、亮さん。大丈夫なの。

亮太郎　大丈夫だつて云へば。安心してゐろよ。（立ち上がつて）それぢやあまた明日の晩來て相談すらあ。

お澄　待つてるわ、明日の晩……。

（二人が入口の方へ往きかける時、何處かでぽんぽん爆竹の音が聽こえる。）

亮太郎　（ぎよつとして立ち留まつて）おや、拳銃ぢやあねえか。

お澄　違ふよ。今夜は何處かでお祭があるつて云ふんで、南京街の方で爆竹を上げて騷いでゐるんだよ。

亮太郎　なあんだ。爆竹か……。おりやまた誰か喧嘩をして、拳銃でも撃つてゐるのかと思つた。（間）それぢやあまた……。

お澄　明日の晩きつとね。

（亮太郎は入口の硝子戸を開けて出てゆく。）

（お澄はぼんやり見送つてゐたが、暫らくすると氣が付いて、卓子の上に置いてあつた紙幣を持つて、混血兒の女の方へゆく。）

（あまさんと呼ばれてゐる混血兒の女は、この紙幣を受け取りながら欠伸をする。）

（遠く續けざまに爆竹の音。）

（舞臺はだんだん暗くなる。）

第七場

闇の中を遠くの方から、自動車の警笛の音とエンジンの響きとが近づいて來る。

そのうち青白い尖燈（へつどらいと）の光が、ぱつと暗を照らしたかと思ふと、ぽんとパンクした音がして、エンジンの響きばかりが一つところで喘ぐやうに聽こえる。

舞臺は依然として暗黑のまゝ。

唯尖燈（へつどらいと）の光りに依つて、そこに自動車があると云ふことが分る。

前の場の翌晩。深更の田舍道。

亮太郎の聲と、お澄の聲。そして自動車の運轉手の聲。

エンジンの響きは暫時するとぱつたり消える。

亮太郎の聲　（慌ただしく）おい、如何したんだ。如何したんだ。

運轉手の聲　パンクしてしまひました。

亮太郎の聲　なに、パンクした。そんなことがあるものか。嘘を吐くと承知しないぞ。

運轉手の聲　いゝえ。嘘ぢやありません。今あんなに大きな音がしたぢやありませんか。

亮太郎の聲　大きな音が……。そんな音は俺の耳には聽こ

えなかつたぞ。（間）お前にはそんな音が聽こえたかい。
お澄の聲　さうねえ。さう云やあそんな音がしたやうにも思ふけれど……。
亮太郎の聲　おい、如何だ。パンクしたんぢやあないだらう。
運轉手の聲　いいえ。やつぱりパンクしてゐます。
亮太郎の聲　さうか。ほんとにパンクしてゐるのか。
運轉手の聲　ええ。あんまりスピートを出し過ぎたからですよ。
亮太郎の聲　畜生……。仕樣がねえな。おれ達は少し急ぐんだからな。おい、これから街までは餘つ程あるかい。
運轉手の聲　さうですねえ。近いところで一里はありませう。
亮太郎の聲　おい、如何だ。街まで往つて代りの自動車を呼んで來て呉れないか。
運轉手の聲　駄目ですよ。こんな夜中に起きるもんですか。
亮太郎の聲　起きないなんてことがあるものか。關はないから敲き起すんだ。おい、お願ひだから往つて來て呉れ。それだけの金はきつと出すよ。
運轉手の聲　しかし、そんなことをしてゐたら夜が明けつちまひますぜ。
亮太郎の聲　（ぎよつとしたやうに）夜が明ける。そんなに時間がかかるものか。
（運轉手は尖燈の光で時計を見る。）
運轉手の聲　だつてもう二時ですもの。愚圖々々してゐるうちには夜が明けつちまひまさあ。（呟くやうに）おや、雨かな。
亮太郎の聲　雨……。何だ。雨が降り出したのか。
運轉手の聲　ええ。何だかぽつりと大粒なやつが……。
亮太郎の聲　（苛々した調子で）仕樣がねえなあ。自動車はパンクする。雨は降り出す。如何したらいいんだ。
お澄の聲　ほんとに如何したらいいでせう。早く何處かに往つちまはないと、捕つたら大變だわ。
亮太郎の聲　困つたなあ。ねえ、運轉手さん。それぢやあここから一番近い停車場まではどの位あるだらう。
運轉手の聲　さうですねえ。停車場は街と反對の方なんだけど、やつぱり一里位ありますかね。
亮太郎の聲　さうか。一里位か……。おい、如何だい。一里位なら歩かうぢやないか。
お澄の聲　ええ。歩いても好けれど……。しかし、汽車に乘つたり何かして誰かに見つけられたら大變ぢやないの。

亮太郎の聲　見附けられたら見附けられた時さ。しかし、大丈夫だよ。もうあすこの街からは餘つ程離れてゐるんだもの。

お澄の聲　さうねえ。どうせ動かない自動車なら、何時まで乘つてゐたつて仕方がないわ。それぢやあ降りて歩きませう。

亮太郎の聲　それぢやあ、運轉手さん。おれ達はこれから停車場まで歩かあ。いくらだい。

運轉手の聲　さうですねえ。夜中のことだから十七圓頂きませう。

亮太郎の聲　よし……。さあ、お剰錢は入らない。

運轉手の聲　有難う。

（二人は自動車を降りる氣勢。）

亮太郎の聲　成程、雨だ。（間）おい、運轉手さん。停車場へはどつちの方へ往くんだい。

運轉手の聲　眞つ直ぐ往くと道が二筋に分れますから、それを左へ往くと停車場に出ます。

亮太郎の聲　さうか。それぢや往かう。

お澄の聲　ええ。雨はひどくはならないでせうか。

亮太郎の聲　ひどくなつたらひどくなつた時のことさ。兎に角急がう。

（尖燈の光りの中に二人の姿が現はれて、すぐまた暗の中に消える。）

（そのうち尖燈の光りがだんだん薄くなつて、ふつと急に消えてしまふ。）

運轉手の聲　（投げるやうに）ちえつ……、燈まで消えてしまひやがつた。

（微に雨の音。）

（舞臺は全くの暗となる。）

第　八　場

暗の中から激しい風雨の音が聽こえて來る。かなり長い間。

やがて鋭い稻妻の閃き。その閃きに依つて、そこに鐵道線路があり、踏切があると云ふことが分る。

遠く微にシグナルの赤い灯。稻妻に照らされて見える白い雨脚。

前の場の翌晩の九時頃。

激しい風雨の中を、亮太郎とお澄とが、濡鼠になつて蹌踉めきながら辿つて來る。

お澄　あなた。亮さんて云つたつていいでせう。

亮太郎　ああ、いいとも……。おれも今夜は何だか亮さんて云つて貰ひたいやうな氣がするよ。

お澄　ねえ、亮さん。あなたほんとに死んで呉れる……。

亮太郎　あゝ、死ぬとも……。おれはもうほんとに生きてゐられない體なんだ。おれは詐欺師だ、泥坊だ、人殺しだ。いづれは捕まつて牢屋に入らなければならない體なんだ。お前をこんなにしちまつたのも、みんなおれが惡かつたんだ。お澄さん。おれも改めてお澄さんて云ふよ。ねえ、お澄さん。どうぞ死ぬ前におれを許して呉れ。おれの罪を許して呉れ。どうぞお願ひだ。許すと言ふ言葉を、どうぞお前の口から聽かして呉れ。(泣く)

お澄　何を云つてゐるの。亮さん。許すも許さないもないぢやないの。さあ、そんなことを云つてゐないで、早く死にませう。あたし何だか早く死にたい。

亮太郎　それぢやあお前はおれを許して呉れないのかい。

お澄　だから許すも許さないもないつて云つてゐるぢやないの。もうそんなことを云ふのは止して頂戴。そして今夜は昔の樣な……あの茅花(つばな)を取りに往つた子供の時分のやうな心持になつて、一緒に抱き合つて死にませうよ。

亮太郎　あゝ、死なう。子供の時分のやうな心持になつて……。おれは嬉しいよ。お澄さん。こんな心持になつたのは久しぶりだ。ほんとに思ひ出すことも出來ないほど久しぶりだ。

(シグナルの灯の色靑にかはる。微かに遠く汽車の音。)

お澄　あゝ、汽車の音が聽こえるやうだわ。

亮太郎　あゝ、汽車の音だ。あゝ、あの汽車の音も昔聽いた汽車の音だ。

お澄　亮さん。よくつて……。一緒に死ぬのよ。

亮太郎　あゝ、いゝよ。(間)あゝ、だんだん汽車の音が近寄つて來る……。

お澄　さあ、死ぬ前にぢつとあたしを抱いて頂戴。もつとぎゆつと……もつとぎゆつと……。

亮太郎　あゝ、體中雨でぐつしよりだね。頰つぺたなんか冷たくなつてゐるぢやないか。

お澄　(夢中に)さあ、もつとぎゆつと……もつとぎゆつと……。

亮太郎　あゝ、息が窒まるやうだ。それでゐて體中が何だかがたがた顫へる……。

(もうこの時は汽車の音がかなり近い。)

亮太郎　(氣が付いて)あゝ、もう直ぐそこだ。

お澄　(やつぱり夢中に)もつとぎゆつと……もつとぎゆつと……。

(轟々たる車輪の響き。)

亮太郎　あゝ、來た。(叫ぶ)死ぬぞう……。(線路の中に飛び込む)

(汽車の通りすぎる音。)

(けたたましい汽笛の響き。)

(激しい風雨の音。)

(舞臺は全く暗くなる。)

第　九　場

暗の中で聽こえてゐた激しい風雨の音が段々遠ざかつてゆくにつれて、舞臺は段々明るくなつて來る。

第一場の醫師の家。座敷の中のすべての光景は、殆んど前と變つてゐない。

第一場からは凡そ一時間ばかりを經過してゐて、外の風雨の音も大分靜かになつて來てゐる。時々微な稻妻の閃き。

座敷の眞ん中の床の上には、やつぱりお澄が眠つてゐる。主人の醫師はその傍で心配さうにお澄の手の脈を診てゐる。

茶の間の長火鉢の傍には、主人の妻と看護婦とが、これもやつぱり心配さうに坐つてゐる。

お澄　(苦しさうに呻く)　あゝつ……あゝつ……。

主人　(呟く)　これはいかん。少し變だぞ。(看護婦に向つて)　鈴江さん。注射器々々々……。

看護婦　はつ、カンフルでございますね。

(鈴江は注射の支度をする。)

お澄　(目を開けて)　あゝ、怖い……。亮さんはどうして……。

主人　(慰めるやうに)　うん、亮さんはね……生きてゐるよ。快くなつたら會はせるからね……。何にも心配しないでゐるがいいよ。いいかい。分つたかね。

お澄　(微かに首を振つて)　知つてゐるわ……。亮さんは死んだんだわ……。

主人　何を云つてゐるんだ。亮さんは死にやあしないよ。ねえ、分つたらう。何にも心配しないで、靜かに寢てゐるときつと癒るからね。もう何にも考へたり何かするんぢやないよ。ほんとにきつとあたしが癒して上げるから……。

お澄　(また首を振つて)　いや、いや……。あたし死にたい……亮さんと一緒に……。

妻　(お澄の傍へ來る)　さあ、そんなことを云はないで、また靜かにお眠みなさいね。何にも考へないで、靜かにしてゐなければ駄目ですよ。ねえ、分つたでせう。

お澄　(目を閉つて呻く)　ううん……ううん……。

妻　あなた。何だか苦しさうですわね。今まではあんなによく眠つてをりましたのに……。

主人　うん。何か厭な夢でも見たらしいのだよ。目を覺ますなり怖いと云つてゐたからな。

妻　さうですか。可哀さうに……。（間）ねえ、あなた。かうして光子の着物を着てゐるところを見ると、わたくし何だか光子が歸つて來たやうな氣がしてなりませんわ。年恰好も丁度同じ位ですし……。
主人　うん……。（氣が付いたやうに看護婦に）鈴江さん。まだですか。
看護婦　はい。唯今。（注射の道具を主人の傍に置く）
主人　よろしい。これで少しは元氣が出るだらう。
（主人はお澄の腕に注射をする。）
（やゝ長い間。みんなの視線は悉くお澄の額の上に注がれてゐる。）
（お澄の息急に靜かになる。）
主人　はてな。（脈を取つて見て顏色を變へる）
妻　（心配さうに）どうかいたしましたんですか。
主人　（目を開けて見て）あゝ、こりやあいかん。もう駄目だ。
妻　（びつくりして傍へ摺り寄つて）何でございますつて……。もういけないんでございますか。
主人　（傷ましさうに點頭いて）心臟痲痺を起したんだよ。おれはそれを心配したから、さつきから幾度もカンフル注射をしてゐたんだが……。
妻　まあ、可哀さうに……。もうどうにもならないのでせうか。
主人　（吐息をついて）もう駄目だ。何しろ胸をひどくやられてゐたんだから、おれは最初からとても駄目だと思つてゐたのだ。
妻　それぢやあもうほんとに駄目なんですかねえ。何だかわたくしはほんとの自分の娘が死んだやうな氣がいたしますわ。（泣く）
主人　しかし考へて見ると死んだ方がかへつて幸福だよ。これでだんだん快くなるとすると、いづれ男が死んだと云ふことが分るには極まつてゐる。さうした場合にこの女は、一生死ぬより苦しい思ひをして過ごさなければならないぢやあないか。この女に取つて生きると云ふことは、死ぬと云ふことよりも幾層倍不幸なことだか知れなかつたのだ。
妻　さうでございますねえ。さう考へれば死んだ方が幸福かも知れませんわ。それはさつきも鈴江さんと二人で話してゐたんでございますけれど……。ねえ、鈴江さん。
看護婦　ええ。わたくしはこの前さう云ふ女の人を見てゐただけに、猶更さう云ふ氣がいたしますわ。
妻　（不圖思ひ出したやうに）ねえ。あなた。
主人　うん。何だ。
妻　あなたはどうしてもあの光子を許してやつては下さい

ませんの。

主人　うん……（ぢつと考へてゐる）

妻　ねえ。あなた。若し二人がこんなことになつたら大變ぢやございませんか。それに子供も出來たつて云ふことですし、どうぞわたくしの一生のお願ひですから、許してやつて下さいましな。

主人　（やつぱり默つて考へてゐる）

妻　そりや親に背いて家出をしたり何かしたことは、光子が重々惡いんではございますけれど、しかしあれも今では大變後悔してゐるんでございますよ。昨夜まゐりました手紙にも、お父樣にお詫びをして呉れつてことが幾度も幾度も繰り返して書いてあるんでございますからね。

主人　（突然顏を上げて）お前は光子の居所を知つてゐるんだね。

妻　ええ、知つてをります。

主人　さうか。（間）それぢやあお前から手紙をやつてやれ。

妻　（嬉しさうに）えつ、それぢやあなた許してやつて下さるんですか。

主人　（點頭くと同時に涙が瞼から溢れて來る）

妻　ああ、それぢやあわたくし早速手紙を書いて出してやりますわ。直ぐ歸つて來いと書いてやつてもいゝんでございませうね。

主人　いいとも……いいとも……。直ぐ今夜にも大木に持たせて出させるがいい。（看護婦に）鈴江さん。ちよつと大木を呼んで來て下さい。この女が死んだつてことを、ちよつと驛長と巡査のところへ知らせる用もあるんだから……。

（看護婦は立つて左方の戸口から出てゆく。）

主人　（泣いてゐる妻に）何を泣いてゐるんだ。さあ、早く手紙を書いたらいゝぢやないか。

妻　ええ……。（立ち上がる）

主人　（父親らしい愛の籠つた調子で）早く歸つて來いと云ふことを忘れずにな。

（妻は茶の間の方に來て、娘にやる手紙を書きはじめる。）

（風雨の音だんだん靜かになつてゆく。遠く微かに稻妻の閃き。）

（靜かに幕が下りる。）

雨の夜話（一幕）

人物

喬　枝　賣れない老人の落語家
傳　朝　その一座の眞打の落語家
小傳朝　その弟子
桂玉川　支那人の手品師
清　玉　傳朝の女房で義太夫語り
おつね　桂玉川の妾で下座

場所
東海道筋の或る田舍町

時代
この頃

東海道筋の或る田舍町にある、汚ない寄席の樂屋である。秋の始めの或る寂しい晩の十時近く。

樂屋では窓に近いところで、野面から吹いて來る風を入れながら、傳朝と桂玉川とが話し合つてゐる。少し離れて小傳朝とおつねとがその次ぎに高座に上がる、桂玉川の手品の道具を調べてゐる。

傳朝は四十四五歲位の一座の眞打。桂玉川は五十歲位の支那人の手品師だが、もう三十年近くもこつちにゐるので、ちよつと聽いただけでは支那人と分らない位日本語がうまい。しかし長い話の間には、時々片言めいた言葉が出る。小傳朝は傳朝の弟子で、まだやつと二十歲を越したばかり位の落語家。おつねは三十五歲の女で桂玉川の妾、この旅廻りの一座の下座を勤めてゐる。高座の方からは、今上がつてゐる淸玉と云ふ娘義太夫が語つてゐる『阿波の鳴門十郎兵衞住家の段』の文句が、三味線の音と一緒に聽こえて來る。

傳朝　如何も何だね、桂玉川さん、かう何時までも暑くつちやあやり切れないね。

桂玉川　ああ、全くやり切れない。それにあたし肥つてゐるからね、暑いうちはもう商賣が厭になるよ。

傳朝　と云つたところで稼がずにやゐられないし――これがまあ東京か大阪なら、稼ぎ甲斐もあると云ふもんだけれど、かう田舍廻りばかり續けてゐたんぢやあ、暑いうちばかりでなく、つくづく商賣が厭になるね。

桂玉川　しかし師匠なんか結構あるよ。あんなに綺麗なおかみさんと一緒に共稼ぎで方々歩いてゐるんだからね。

（妙な聲を立てゝ笑ふ）

傳朝　何を云つてやがるんでえ。そんなことを云やあお前

さんだつて、あのおつねさんと一緒の、お羨ましい御身分ぢやあねえか。

桂玉川　いや、あれ駄目あるよ。もうお婆あさんだからね。

傳朝　（笑つて）贅澤なことを云つちやいけねえ（おつねに向つて）おい、おつねさん。お前の旦那はあんなことを云つてゐるぜ。

おつね　ええ、もう何て云つたつて關ひませんよ。あたしの方ではもう疾うから愛想を盡かしてゐるんだから――

桂玉川　愛想を盡かす――（笑つて）それ噓々。ねえ、師匠。あたしがおつねに惚れてゐるよりも、おつねがあたしに惚れてゐる分が澤山あるね。

おつね　笑談云つちやいけないよ。自惚も大抵におしなね。そんなことを云つたつて、桂さんお前さんは、あたしに別れたら困るだらう。

桂玉川　いいえ、あたし困らない。若い女直ぐあたしのところへ來ること分つてゐる。

おつね　それぢやあお前さんは近頃何か浮氣をしてゐるのかい。

桂玉川　（笑つて）浮氣はその日の出來ごころつてね、都々逸には中々面白い文句あるよ。

おつね　（怒つて）馬鹿におしでないよ。靜岡で興行てゐる時だつて、是非お金の入ることがあるつて云ふから、着物も何もすつかり質いでやつたんぢやあないか。さうすると如何だらう、そのお金を持つて二丁町に往つて、すつてんてんになつて歸つて來て――（小傳朝の方を向いて）一體小傳朝さん、お前さんが惡いんだよ。二丁町に連れて往つたのはお前さんだつて云ふぢやないか。

小傳朝　（困つたやうな調子で）いいえ、あつしぢやあありませんよ。あつしが何も――ありやあお前さん、喬枝さんが惡いんですよ。

おつね　いいえ、お前さんだよ、お前さんだよ。あたしにはちやんと分つてゐるんだよ。

傳朝　おい、おい、いい加減にしろよ。そんな大きな聲を出すと、客席の方に聽こえるぢやあないか。

おつね　だつて、師匠、あんまりひとを馬鹿にしてゐるんですもの、いくらあたしのやうなものだつて口惜しいぢやありませんか。

傳朝　まあ、何もさう口惜しがることはないさ。

おつね　（涙聲になつて）いいえ、あたし口惜しいんです、口惜しいんです。

傳朝　困るなあ（桂玉川に向つて）おい、桂さん。さう澄まして納まつてゐずに、如何とかしねえかい。

桂玉川　なあに打つちやらかして置く一番いいあるよ。

傳朝　（苦笑ひをして）困つちまふなあ。樂屋で痴話喧嘩

なんぞやられちやあやり切れやしねえ。殘暑よりもこつちの方が餘つぽど暑つ苦しいや。（不圖氣が付いたやうに）あゝ、さう云やあ喬枝の爺さん如何したい。

小傳朝　あゝ、また出懸けたな。一杯引つかけに往つたんですよ。

傳朝　仕樣がねえなあ。間さへありや酒なんだから——今日の「星野屋」なんか醉つ拂つてゐて、何を喋つてゐるんだか、まるで分らなかつたぢやあねえか。

小傳朝　ええ、如何もあの爺さんにも困りもんですよ。

傳朝　ほんとに仕樣がありやあしねえ。お前もあんな爺さんを見習つちやいけねえぜ。

小傳朝　しかし若い時分には、圓朝さんや何かと肩を並べたほど上手かつたつて云ふぢやありませんか。

傳朝　昔がたとへうまくつても、今があれぢやあ仕樣がねえ。もう辛抱が出來ねえから、今夜限りこの一座から出て往つて貰はうと思つてゐるんだ。（高座の義太夫に耳を傾けてから）ああ、もぅ切れたぜ。

小傳朝　（びつくりしたやうに）ああ、さうだ。

（間もなく拍手の音と一緒に高座の義太夫が終つて中入りとなる。客席の方から聽こえて來るざわめきの音、中賣りの呼び聲。）

（そこへ高座を終つた清玉が入つて來る。清玉は二十五六歳位の義太夫語りで、傳朝の女房になつてゐる。）

小傳朝 ┐
おつれ ┘ 如何も御苦勞樣。

清玉　ほんとに御苦勞樣位云はれなくちやあやり切れないよ。もう四五日で十月だつて云ふのに、何時まで暑さが續くんだらう。ねえ、師匠、ちよつと觸つて御覽よ。肩衣まで汗でぐつちよりだよ。

傳朝　うん、ひでえ汗だな。そこの手桶に水があるから、ちよつと裸になつて拭くといゝや。

清玉　あゝ、さうでもしなくちや氣持が惡いわ。（おつれに向つて）ちよいと、おつねさん、そこの金盥と手拭を取つて吳れない。

おつれ。あゝ、これですか。

清玉　如何もはばかり樣。

おつれ　あのう、背中を拭いて上げませうか。

清玉　いゝわ、自分で拭くから——（不圖氣が付いたやうに）あら、如何したの、おつねさん。何だか涙ぐんでゐるぢやないの。

傳朝　うん、今ね、桂さんと痴話喧嘩をやつてたつて譯なんだよ。

清玉　おや、おや、暑いのに御苦勞樣だわね。（桂玉川に向つて）桂さん、あんまりおつねさんを苛めるもんぢ

やありませんよ。
桂玉川　いいえ、あたし苛めやしない。苛められる何時でもあたしの方——
清玉　如何だか分りやあしないわ。桂さんこれで中々色男なんだからね。
桂玉川　いいえ、いいえ、色男は師匠あるよ。
傳朝　まあ、餘計なこと云はねえで、そろそろ高座の支度をしたら如何だね。
桂玉川　高座の支度、小傳朝さんちやんとして吳れてある。
傳朝　しかしお前さんいくらこんな田舍でもそんな襯衣一枚ぢやあ出られねえだらう。
桂玉川　（始めて氣が付いて）ああ、さうさう、上着々々。
傳朝　（笑つて）呑氣な藝人だよ。これぢやあおつねさんが賴りながるのも無理はねえや。
清玉　だけどこんな人と旅を廻つてゐると、いくら御難でトヤを食つても、こつちまでが呑氣になるね。
傳朝　なあにこんな人にかぎつてそんな時には、眞つ先ドロンをしてしまふやつさ。
おつね　ええ、そりやあもうさうに極まつてゐますわ。何しろ薄情この上なしつて人なんですからね。
傳朝　おい、おい、また始めちやあいけねえ（清玉に向つて）なあ、おきよ。（清玉の名）これだから何時までも暑さが續く譯ぢやあねえか。
清玉　ほんとにさ。おつねさんもいい加減におしよ。
おつね　だつて、お師匠さん、あたし口惜しくつて仕樣がいんですもの——
（そこへ席亭の方から知らせが來たので、おつねは急いで下座の方へ往つて、賑やかな三味線を彈き始める。桂玉川が高座へあがると同時に客席の方から聽こえて來る拍手の音。）
（やがて高座で喋つてゐる聲や、客の笑ひ聲が聽こえて來る。下座のおつねは時々高座の曲藝に合せて唄をうたふ。）
清玉　だけどおつねさんて人も變つてゐるぢやないの。以前はあれで赤坂あたりで藝者をしてゐたつて云ふんだけれど、如何してあんな支那人なんかに惚れちまつたんだらう。
傳朝　そこがお前、この道ばかりは別だからね。それに最初からあの桂玉川の妾になつたんぢやあなくつて、ああなるまでには、かなりいろいろのことをして來たんだつて話だぜ。
清玉　そりやあさうだけれど——
傳朝　一番始めが新派の役者の竹林——
清玉　竹林つと云ふと二枚目のうまい、竹林昇一つてあの

人なの。
傳朝　ああ、さうよ。その次が丸一の龜三郎――
清玉　ああ、さう――あたしちつとも知らなかつたわ。
傳朝　さうだつたかな。あれはもう疾うにお前は知つてゐるものと思つて默つてゐたんだ。
清玉　いいえ、何にも――唯赤坂で藝者をしてゐたつてことだけは、誰からか聽いて知つてゐたの。さうするとずゐぶんあのおつねさんも、いろいろのことをして來た譯なのね。
傳朝　ああ、そりやあもうかうして旅廻りの一座の下座なんぞやつてゐるんだもの、いろいろのことをして來てゐらあね。
清玉　そこへ往くとあたいなんか初心なもんだね。ねえ、師匠。
傳朝　へつ、せいぜい初心がつてゐるがいいさ。廿五にもなつて、何處を押しやあそんな音が出るんだ。
清玉　だつてあたいほんとに初心なんだもの――男つてものほんとに師匠が始めてなんだからね。
傳朝　笑談云つちやいけねえ。おれは喬枝から聽いて、ちやんと知つてゐるぜ。
清玉　（ぎつくりとしたやうに）ええ、何をさ。
傳朝　ほうれ、見ねえ。おれが喬枝から聽いたと云つたらお前はぎくつとしたぢあねえか。
清玉　いいえ、別にぎくつとした譯ぢあないけれど――一體あの爺さん、何をお前さんに喋つたんだらう。
傳朝　まあ、何でもいいさ。
清玉　いいえ、何でもいいぢやあないわ。ねえ、師匠。云つて呉れたつていいぢやあないの。
傳朝　しかしおれは別に喬枝から聽いたことに、こだはつてゐる譯ぢやあないんだから、さう氣にするにやあ及ばないよ。
清玉　それでも何だかあたし氣になるもの――
傳朝　（笑つて）そんなに氣にするなら云つてやらう。お前が以前子供を生んだことがあるつて話さ。
清玉　（やつぱりちよつとぎつくりとして）ああ、そんなことをあの爺さんが――
傳朝　あいつ醉つ拂つてついうつかり口を辷らしやがつたんだがね――何もそんなことを氣にするやうなおれぢやあねえから安心するがいいよ。それにその子供も三つの時かに亡くなつたんださうだね。
清玉　ああ、それだからあたし師匠にも、何にも云はずに默つてゐたんだわ。
傳朝　それがお前をかしいぢやないか。喬枝の爺さんその子供の亡くなつた話をする時に、ぼろぼろ涙をこぼして

まるで自分の孫でも死んだ時のやうに泣くんだよ。

清玉　へえ、をかしなお爺だわね。あのお爺さん近頃餘つぽど如何かしてゐるよ。（始めて氣付いたやうに）おや、また何處かへ出懸けて往つたの。

傳朝　うん、間さへありやあ酒ばかり飲んでゐやがるんだ。それに近頃ぢや高座も何も滅茶々々で、今夜の『星野屋』なんぞと來ちやあ、何を喋つてゐるんだか、まるで譯が分らねえぢやあねえか。あれぢやあ如何もいくらおれでももう我慢が出來ねえから、今夜限りこの一座から出て往つて貰はうと思つてゐるんだがね。

清玉　ああ、ほんとにあんな人おつ抛り出しちまつた方がいいわ。あたしだつて毎日のやうに、ちびちび酒錢を絞られるんだからほんとにうるさくつて仕方がありやあしない。

傳朝　しかし絞られるには譯があるんだからな。

清玉　厭だわ、師匠。白狀しちまへばいゝぢやないの。

傳朝　その代りもう初心だなんて云はせないよ。

（賑やかな囃しの三味線につれて、桂玉川が高座から下りて來る。暫く間を置いてから傳朝は同じやうな囃しの三味線につれて高座に上がる。客席の方から聽こえて來る拍手の音。）

（三味線と拍手の音が止むと、直ぐに高座の方から傳朝のしんみりとした話し聲が聽こえて來る。話は『眞景累ヶ淵』である。）

（そこへ喬枝が表から、したたかに醉つ拂つてかへつて來る。喬枝はもう六十四五歳位の落魄れた落語家。）

喬枝　（しやがれ聲で笑つて）師匠、やつてゐるね。ふうん、眞景累ケ淵か——なるほどね、兎も角も文句を知つてゐるだけでも感心だよ。しかし如何も息が違ふね。ああ、いけねえな。かう云ふのを聽いて見ると、さすがに圓朝つて人はうまかつたね。憎いやうだがうまかつたよ。今のところのあの息なんかは、敵ながらも堪らねえと思つたほどうまかつたからね。あれに較べるとこの傳朝なんてやつは、よくもあれで圖々しく人情噺がやれると思ふ位まづいね。（嘲るやうに笑つて）馬鹿々々しくつて聽いてゐられやしねえ。

清玉　（聽きかれたやうに）ちよいと、喬枝さん。お前さん何を云つてゐるんだい。

喬枝　（始めて清玉のゐるのに氣が付いた樣子で）ああ、清玉さんか。これは如何も——あつしはね、お前さんがそこにゐるのに氣が付かなかつたもんだから、ついいろんなことを喋べつちまつて——（てれ隱しのやうな笑ひ方をして）まあさ、まんざら出鱈目を云つてゐる譯でもねえんだから、さうあつしを睨めないでお呉んなさい

よ。師直の臺詞ぢやあないが、これこの通りお詫びお詫びだ。

清玉　何だい。自分が落語(はなし)ひとつろくろく出來もしない癖に、師匠の惡口もないもんだ。

喬枝　いえさ、今云つたのを、師匠の惡口と思つて呉れちやあ困るよ。あつしは決して師匠の惡口を云ふつもりで、あんなことを云つたんぢやあないんだからね。いや、全くだよ、清玉さん。あつしは師匠の藝を思へばこそあんなことを云つたんだ。それでなけりやあ誰がお前、わざわざ師匠の氣に觸るやうなことを喋るものかな。

清玉　何を云つてゐるんだい。ほんとにこんな狸爺つたらありあしないよ。ねえ、桂さん。

桂玉川　ああ、全く狸爺あるね。しかし喬枝さん狸のところがえらいあるよ。

喬枝　(自ら嘲るやうに笑つて)狸爺か——狸爺結構だね。あつしはもう酒さへ飲まして置いて呉れさへすれば、何と云はれても怒らないよ。

清玉　(苛々したやうに)　怒らないところが狸だつて云ふんだよ。

喬枝　いや結構々々——何でもお前さんの云ふ通りだ。

清玉　ほんとに厭になつちまふねえ。

喬枝　まあ、まあ、さう嫌ひつこなしさ。これだつてお前さんがまだ肩上げのある時分から知つてゐる仲ぢやあないか。

桂玉川　喬枝さん、清玉さんを口說いちやあいけないあるよ。

喬枝　何を云つてやがるんでえ。

清玉　(氣が付いて詰るやうに)　ああ、喬枝さん——

喬枝　ええ、何だい。

清玉　お前さんは喋つたね。

喬枝　何をさ。だしぬけに喋つたねとお出でなすつたんぢやあ分らないぢやないか。

清玉　分つてゐるよ。分つてゐる筈だよ。

喬枝　いいえ、あつしには分らないよ。何だい、清玉さん。

清玉　ふん、何處まで狸なんだか分りやあしない。ねえ、喬枝さん。お前さんはうちの師匠に、あたしが以前子供を生んだことがあるつて喋つたんだらう。

喬枝　はあてね、喋つたか知ら——

清玉　おとぼけでないよ。あたしは今師匠からそのことを云はれて困つてしまつたんだよ。何も隱してゐたつて譯ぢやあなくつて、唯云ふ機會(をり)がなかつたと云ふだけのことなんだけれど、向うからさう云はれると、何だかちよつと氣まづいぢやあないの。

喬枝　成程、そいつはちよつと氣まづかつたかも知れない

が――しかしあつしは師匠に話したか知ら――如何もその邊のことが、はつきり頭に殘つてゐないので困り入る次第さ。しかしまああつしが喋つたにしたところが、もうその子供だつて死んぢまつたんだし、師匠だつて何時までも氣を惡くしてゐるやうなことはないだらうぢやないか。

清玉　そりやあ師匠は別にたいして氣にもしてゐないやうだけれど――

喬枝　そんならまあいいぢやないか。（急にしんみりとして調子で）だがね、清玉さん。あつしはこの間ちよつと數へて見たんだが、あの子が生きてゐるとすると、今年はもう八つになるよ。

清玉　さうかねえ

喬枝　さうかねえつてお前さんは、數へて見たこともねえのかい。

清玉　だつて死んだ子の年なんぞ數へて見たつて仕樣がないもの――

喬枝　ふうん、さう云ふもんかねえ。

清玉　いやだよ。喬枝さん。何だつてさうしげしげあたしの顏ばかり見詰めてゐるの。

喬枝　なあにね、まだ肩上げのある時分のおきよちやんのことを考へると、こんなになつたのが不思議に思はれてならねえんだよ。あの時分はお前さんも、ほんとに可愛らしい子だつたからね。お前さんのおつ母さんの瓢玉さんが、まだ猿屋町にゐる時分で、あつしもちよくちよく遊びに往つたもんだが、あの時分のことを考へると、まつたく夢のやうな氣がするよ。お前さんはもうあの時分のことは忘れつちまつたらうね。

清玉　ああ、もう大抵忘れつちまつたね。昔のことなんか覺えてゐたところで始まらないぢやないか。

喬枝　さう云つちまやあそれまでだけれど――あの時あつしはお前さんに、簪を買つてやつたり何かしたもんだぜ。

清玉　いやだよ。そんなことを云つて、またあたしから酒錢を强請らうつて氣なんだらう。そんな手に乘つてたまるものかね。

喬枝　いや。そんな氣ぢやあないよ。つまり唯の昔話なんだ。

清玉　如何だか知れたもんぢやありやしない。

桂玉川　ほんとだよ、清玉さん。狸爺氣を付けないと危い危い。

（急に客席の方から聽こえて來る拍手の音。と同時に打出しの太鼓の音。どやどやと大勢の客の立つ氣勢。遠く木戸口の方から聽こえて來る下駄や足駄の音。ひとしきりさう云つたもの音が騷がしく續いた後、四邊

は急に靜かになる。)

(今降りだしたばかりの雨の音と、そこらで寂しさうに鳴いてゐる蟲の聲。)

(傳朝は高座で禮を云ひながら、客をあらかた送り出したところで下りて來る。)

小傳朝
桂玉川　} 御苦勞様。
おつれ

傳朝　到頭降り出して來たね。

清玉　ああ、さうね。ずゐぶん今日は蒸し暑かつたから——

桂玉川　雨降る涼しくなつてよろしい。(ちよつと間を置いて) では、師匠、お先きへ——

清玉　あら、おつねさんを置いて往くのかい。

桂玉川　あたしちよつと寄り道ある。

清玉　いけないよ、桂さん。そんなにおつねさんに氣を揉ませるもんぢあないつて云ふのに——

桂玉川　大丈夫々々々——

清玉　大丈夫ぢやあないよ。さあ、おつねさん。早く支度をして一緒におゐでよ。

おつれ　ええ、ほんとに油斷が出來ないんですからね。(桂玉川に) お待ちなさいよ、あたし一緒に往くから——

(桂玉川が出て行くと、直ぐその後を追ふやうにしておつれも出てゆく。細々とつづく蟲の音。遠くを駛つてゐる夜汽車の響。)

(雨の音がだんだん激しくなつて來る。)

傳朝　一體あの二人は何處に泊つてゐるんだい。

小傳朝　ええ、あのう、この向うの街はづれのところの汚ない宿屋に泊つてゐるんですが、桂的如何もそこの娘と出來てゐるらしいんですよ。

傳朝　へえ、さうかい。それで歸りを急いでゐやがるんだな。

小傳朝　ええ、如何もあの支那人に會つちあわれわれ日本人たじたじです。

傳朝　若え癖に意氣地がねえな。

喬枝　全くだよ、師匠。あつしなんぞの若い時分は、そんなものぢやあなかつたぜ。

傳朝　(喬枝に向つて) ああ、お前さんは何時歸つて來たんだね。

喬枝　あつしかね。あつしは丁度師匠が高座に上がつたところに歸つて來たんだ。

傳朝　さうか。また何處かで酒を食(くら)つて來やがつたんだな。

喬枝　いや、なあに、ほんのコツプで二三杯さ。

傳朝　今は二三杯だらうが、今朝つから一體何杯飲んでゐるんだ。

喬枝　勘定して飲むほど吝つたれた眞似は、この年になつてもしたくねえから、何杯飲んだかあつしにやあ分らねえ。
傳朝　だがよくお前酒錢がつづくね。
喬枝　（笑つて）不思議なもんでこいつだけは、如何にかなつてゆくから豪儀なものさ。
傳朝　（急に改つた調子で）おい、喬枝さん。
喬枝　何だね。
傳朝　おれは以前お前さんが、圓朝師匠なんぞと肩を並べた、立派な落語家だと云ふことを知つてゐるから、酒を飲まうが席を拔かうが、これまで默つて辛抱してゐたんだ。
喬枝　いや、如何も濟まねえよ。全く師匠にやあ濟まねえと思つてゐるんだ。だがね、師匠。お前さんはうまくなつたもんだね。さつきの累ヶ淵なんぞは、全く圓朝そつくりつて出來だつたぜ。あつしはもう樂屋で聽いてゐて、すつかり感心しちまつたよ。
傳朝　何を云つてやがるんでえ。
清玉　ほんとに人を馬鹿にしてゐるね。全く呆れた狸爺だよ。（傳朝に向つて）ねえ、師匠。さつきはお前さん醉つ拂つてかへつてきて、高座でお前さんのやつてゐる話を聽きながら、よくも岡々しく人情噺がやれるの、馬鹿馬鹿しくつて聽いちやあゐられないのつて、さんざん惡口を云つてゐたんだよ。
喬枝　笑談云つちやいけないよ。
傳朝　いや、笑談ぢやあねえだらう。その位のことは云ひかねないやつだ。
喬枝　そりやあ、師匠、殺生だよ。全くあつしはそんなことを云つた覺えはないんだから——
清玉　駄目だよ、喬枝さん、ちやんとあたしの目の前でさう云つたぢやあないか。
傳朝　まあ、いい。まあ、いい。云はねえなら云はねえにして置かうよ。しかし喬枝さん。もうおれは辛抱が出來なくなつたから、今夜かぎりこの一座から出て往つて貰ひたいんだ。
喬枝　なに、出て往つて呉れ——
傳朝　うん、もう如何あつてもお前さんを、この一座に置いておくことは出來ねえんだ。
喬枝　成程ね、もう置いて置くことは出來ねえから、今夜かぎり出て往つて呉れとかう云ふんだね。
傳朝　さうよ。分つたらう。
喬枝　ところがあつしには分らねえんだ。
傳朝　ふうん、分らねえつて云ふのは何處が分らねえんだ。
喬枝　何處もそこもありやあしねえ、お前さんの云ふこと

が、そつくりあつしには分らないね。

傳朝　何を云やがるんでえ。ひとを馬鹿にしてやがる。

喬枝　いや、馬鹿にしてゐる譯ぢやあないが――つまり何だね、お前さんは何にも知らねえから、そんなことを云ひなさるんだね。

傳朝　何にも知らねえつて云ふと――

喬枝　（冷やかに笑つて）まあ、止さうよ。今頃になつて云つたところで仕方がねえや。

傳朝　何だい。云つたつていゝぢやないか。

喬枝　ふうん、そんなにお前さんあつしの話が聽きたいのかね。よおし、そんなら云つて聽かせるが、びつくりしちあいけねえぜ。おい、淸玉さん。お前さんもよく聽いてゐなくちやあいけねえ（ちよつと凄味のある間を置いて）寶はね、傳朝さん。この淸玉つて女は、あつしの寶の娘なんだよ。

傳朝　ええ、笑談云つちやいけねえ。

淸玉　（笑つて）馬鹿におしでないよ。あたしがお前さんの娘だなんて馬鹿々々しいにも程があるぢやあないか。

喬枝　（少し寂しさうに）成程ねえ。ほんとにしねえのも無理はないが、しかしお前さん達はこんなことに、嘘が云へると思つてゐるのかい。いくらあつしが狸爺でも、この話にやあ嘘はないよ。

傳朝　（笑つて）笑談云つてらあ。喬枝さん、さう云ふ嘘は罪が深いよ。ねえ、おい、おきよ。お前には何かさう云ふ覺えがあるのかい。

淸玉　あるもんですかね。若しそれがほんとだとすりやあ今日まで默つてゐるのがをかしいぢやありませんか。

喬枝　いや、それにはいろいろ譯があつてね――そんなことを云ひ出してお前のおつ母さんを苦しめたくなかつたんだよ。

淸玉　だつてもうおつ母さんが死んでから七年になるわ。

喬枝　もうさうなるかねえ。（淸玉に向つて）何かい。おつ母さんはお前さんに何とも云つてゐなかつたかい。

淸玉　ええ、何を云ふもんですか。

喬枝　それぢやあお前はやつぱりあの講釋師の典凌を、ほんとの親父（おやぢ）だと思つてゐるんだね。

淸玉　だつてそりやあさうに違ひないんだもの――

喬枝　（溜息のやうに）さうか――

淸玉　それとも何かあたしのほんとのお父つあんだつて云ふことがあたしにも分るやうな證據でもあるの。

喬枝　いいや、そんなものはありやあしねえよ。

淸玉　それぢや仕樣がないぢやないの。ねえ、師匠。さうでせう。

傳朝　さうよ。藪から棒にそんなことを云ひ出したつて、

誰がほんとにするものか。さあ、くだらねえ夢見てえなことを云つてゐねえで、さつさとここを出て往つて呉れ。

喬枝　厭だ。おれは如何してもこの一座から離れるのは厭だ。

傳朝　それぢやあお前は如何しても出て往かねえつて云ふのか。

喬枝　出て往かねえでもいゝ譯があるからここにゐるのだ。（急に強い調子になつて）おれはおきよの親父だぞ。お前だつておきよと一緒になつてゐるからには、もう師匠とは云はせねえぞ。

傳朝　何を云やがるんだ。手前は氣が狂つたんだな。

喬枝　氣なんぞ狂つて堪るものか。今夜位頭のはつきりした晩はありやあしねえ。おれの目にはあの晩のことが今でもはつきりと見えてゐる。隅田川が見える。聖天様の森が見える。雨あがりの星の綺麗な晩だつたつけ。二人はあぶなく心中をするところだつたんだ。おれも泣いたし女も泣いてゐた。それから間もなくだつた。おきよが生れたのは。

傳朝　馬鹿野郎。何を夢見てえなことを云つたゐやがるんだ。おい、小傳朝。この爺を早く表へ敲き出しちまへ。

小傳朝　だつて師匠、雨がどしや降りですぜ。

傳朝　どしや降りだつて何だつて關ふことあたねえ。何だ。手前までがおれの云ふことを肯かねえのか。

小傳朝　いや、さう云ふ譯ぢやありませんけれど――（喬枝に向つて）さあ、喬枝さん。師匠があゝ云ひ出したからにはとても駄目だ。兎も角も表へ出よう。

喬枝　（泣きながら）厭だ。おれは如何してもここを出るのは厭だ。おきよはおれの娘なんだ。譯があつて他人の子になつてゐたけれども、おきよはおれのたつた一人の娘なんだ。

小傳朝　困るなあ、喬枝さん。兎も角もおれと一緒に、この樂屋を出てお呉れよ。

喬枝　（やつぱり泣きながら）ここを出て何處へ往くんだ。この雨の中を何處へ往くんだ。

傳朝　何を愚圖々々してゐやがるんだ。さあ出て往けつたら出て往かねえか。

喬枝　厭だ。如何しても厭だ。おれは娘の傍に何時までもゐてえんだ。

傳朝　畜生。如何しても出て往かねえな。

（傳朝は喬枝を外へ突き出さうとする。喬枝は柱にかぢり付いたり何かして、どうしてもこの樂屋を離れまいとする。二人の間の爭ひのもの音。そのうち喬枝は樂屋の戸口から外へ突き出されてしまふ。雨はやつぱり激しく降りしきつてゐる。）

傳朝　畜生。くだらねえことばつかり云やがつて（小傳朝に向つて）もうあの爺を樂屋へ入れると承知しねえぞ。（不圖氣が付いたやうに）あゝ、今の騒ぎですつかり忘れてゐたが俥を二臺さう云つて來て呉れ。
小傳朝　二臺ですね。
傳朝　當り前よ。一人乘に二人乘れやしねえぢやねえか。（出て往かうとする小傳朝に）あゝ、それからな、喬枝のやつまだそこらにうろうろしてゐやしねえか、よく見て來て呉れ。
（小傳朝急いで出てゆく。短い間。）
（雨の降りしきる音の間に、ほそぼそとした蟲の聲。）
（不圖清玉の泣き聲が聽こえる。）
傳朝　おや、如何したんだい。何を泣いてゐるんだい。
（泣き聲ばかりで返事がない。）
傳朝　何だい。何も泣くことはないぢやあないか。
清玉　ええ、だけどあたし——
傳朝　何だ泣くやうなことがあるのかい。
清玉　ええ、あたし何だか喬枝さんが、ほんとにあたしのお父つあんぢやないかと思はれて來たんですの。
（激しい雨の音と微かな泣き聲。）

——終——

〔東京中央放送局のためにラジオドラマとしての試作〕

渡り鳥

（「雨の夜話」後日譚）

人物

傳朝　その一座の眞打の落語家
小傳朝　その弟子
清玉　傳朝の女房で義太夫語り
旭五郎　劍舞師
扇藏　傳朝の兄弟子の落語家
加賀丸　盲目の新内語り
おつね　下座の女

場所

東海道も名古屋に近い田舍町

時代

この頃のこと

東海道筋の名古屋に近い、或る田舍町の宿屋の二階。上手の方に八疊の座敷。正面の床の間には、贋ものの岸駒の虎の懸け物と達磨の置物。上手の障子の外は縁側で、下は直ぐに往來になつてゐる。下手の襖の外は幅の廣い廊下で、そこには梯子段の上り口が見える。下手の壁には時計が掛かつてゐて、その下には汽車の時間表や宿料を書いた紙が貼り付けてある。廊下の突き當りは客室の襖。

秋の半過ぎの或る曇つた日の黄昏近く。しかしまだ外はかなり明るい。

座敷では清玉とおつねとが、火鉢に當りながら話をしてゐる。清玉は二十五六歲の色つぽい女。義太夫語りで傳朝の女房になつてゐる。おつねはこの一座の下座を勤めてゐる。三十五六歲の女。

清玉　何だか急に寒くなつて來たね。

おつね　ええ、だつてもう十一月に入つたんですもの。この位寒いのが當り前ですわ。

清玉　さうだねえ。この間うちの暑さは全く時候はづれだつたんだね。

おつね　ええ、さうですとも。十月だつて云ふのにまるで暑中のやうなんですもの。（不圖氣が付いたやうに）如何なすつたんでせう。師匠は大變遲いぢやありませんか。

清玉　久しぶりで扇藏さんに會つたんだから、きつと二人で飮んでゐるんだらうよ。

おつね　名古屋までは、ここから餘程かかるんですか。

清玉　いいえ、電車で三四十分位のもんだらう。

おつね　それぢやあ大いして遠くはないんですわね。

清玉　ああ、直きだよ。だけどここらは田舍だねえ。席なんぞずゐぶんひどいだらう。
おつれ　ええ、そりやあもう樂屋の汚なさなんて云つたら全くお話になりやあしません。
清玉　しかしあの中泉の何とか云つた寄席よりはまだましだらう。
おつれ　ええ、まあ、どつちがどつちとも云へませんね。（今の清玉の言葉で思ひ出したやうに）中泉つて云へば、髙村の爺さんは如何しちまつたんでせうねえ。
清玉　（ちよつと面を暗くして）　さあ、如何しちまつたらうねえ。豐橋であたしが風邪を引いて休んだ晩、樂屋へふらりとやつて來て、あたしに是非會はせろつて云つて肯かないので、みんなから酷い目に會はされたつて話は聽いてゐるが、それからこつちまるで姿を見せないやうだね。
おつれ　ええ、あの時はあたし何だか可哀さうになつてしまひましたよ。小傳朝のやつなんぞここぞとばかり忠義立をしてあんな老人を打つたり蹴たりするんですもの。
清玉　（少しほろりとして）　さうかい。そんなに酷い目に會はせたのかい。
おつれ　ええ、そりやあもうちよつと見てゐられない位。しかし桂公がゐなくてようござんしたよ。若しゐたらあの馬鹿のことだから、ほんとにどんなことをしたか知れやしません。
清玉　ああ、桂さん如何したらうねえ。
おつれ　（吐き出すやうな調子で）　あんなやつ、どうせろくなことありませんよ。
清玉　しかしお前さんだつて、ちつとはあの人に惚れてゐたんだらう。
おつれ　惚れてなんぞゐるものですか。あたし今ぢやあ桂玉川つて名前を聽いただけでもぞつとしますわ。
清玉　だつてずゐぶん嫉妬を燒いたり何かしてゐたぢやあないか。
おつれ　そりや人情でその位のことはあつたかも知れませんけれど、誰がほんとにあんなちやんころに惚れるもんですか。それにあの奇術だつて樂屋から見てゐて、はらはらする位まづいんですもの。
清玉　（微かに笑つて）　はらはらしたこともあつたんだね。
おつれ　厭ですよ。お師匠さんさう云ふ譯ではらはらしたんぢやないんですよ。
（遠くの方から町廻りの太鼓の音が、だんだんこつちの方へ近付いて來る。）
清玉　ああ、歸つて來たね。

おつれ　小傳朝さんには篏まり役ですね。ああやつて太皷を敲きながら町廻りをすのは。
清玉　ああ、あのおつちよこちよいには丁度いいよ。
おつれ　(不圖心配さうに)　しかし師匠の歸りも遲いけれど劍舞の先生も遲いぢやありませんか。まだあすこに引つ懸かつてゐるんですか知ら。
清玉　(聽き咎めるやうに)　あすこつて何處さ。
おつれ　あら、御存知ないんですか。世話になつたお客のところへ顏出しをしなければならないなんて、ありやあみんな嘘なんですよ。
清玉　さうかい。何かおつこちがあるのかい。
おつれ　ええ、それだからあの人豐橋でごろごろしてゐたんですよ。
清玉　へつ、馬鹿にしてゐるねえ。(氣にするやうな樣子で)　何だい、藝者かい。
おつれ　ええ、何とか云ひましたね。さう、さう、小秀とか云ふまだ若い妓なんですつて。
清玉　(いくらか感情を昂らせて)　一體あの五郎つてやつは、東京にゐる時分から女たらしでね。田舍を廻らなくつちやならないやうになつたのも、やつぱり女出入からなんだよ。
おつれ　ええ、あれで中々色魔なんですつてね。しかし桂公の代りに、あれと加賀丸さんが入つたんで、ぐつと一座が賑やかになつて來ましたよ。
清玉　ほんとにあたし桂さんがどろんをした時には、これはもうとても駄目かと思つてゐたんだが、あの二人が來て吳れたんでほんとに安心したよ。(ちよつと廊下の突き當りの部屋を振り返るやうにして)　加賀丸さん如何してるね。
おつれ　さつきから寐てゐるやうですよ。
清玉　さうかい。しかしあの人の新内はほんとにいいねえ。樂屋で聽いてゐて全く堪らなくなることがあるからね。

(太皷の音一時ちよつと聽こえなくなつたが、急にまた近くなつて來てぱつたり止む。小傳朝梯子段を上がつて來る。小傳朝は傳朝の弟子で、まだやつと二十歲を越したばかり位の男。)

小傳朝　(襖を開けて)　ああ、唯今。
清玉　おつれ　(殆んど同時に)　ああ、如何も御苦勞樣。
小傳朝　(中を見廻はして)　あのう、師匠はまだなんですか。
清玉　ああ、まだなんだよ。師匠ばかりぢやない、五郎のやつもまだなんだ。
小傳朝　ええ、仕樣がねえなあ。あの先生今夜がここの初日だつてことは知つてゐるんでせうねえ。

清玉　そりやあ知つてゐるよ。
小傳朝　知つてゐるならもうやつて來さうなものぢやありませんか。
清玉　（いくらか嫉妬めいた心持で）　女が中々離さないんだとさ。
小傳朝　へつ、馬鹿にしてゐやがんな。（忌々しさうな顏付でそこに坐して）　ねえ、お師匠さん。さうぢやありませんか。こつちは一生懸命入りがあるやうにと思つて、腕が痺れる位太皷をぶつ敲いて町廻りをしてゐるのに、女の傍でうぢやうぢやけてゐるなんて、あんまり人の氣を知らな過ぎまさあ。
清玉　（笑つて）　ここで怒つたつて仕方がないやね。お前さんも早く小情婦の一人位拵へたらいいぢやあないか。
小傳朝　（にやにや笑つて）　ええ、そりやあもう拵らへたいのは山々なんですが。
清玉　出來ないのかい。
小傳朝　如何もいつも武運拙く。
清玉　意氣地がないねえ。
（外の光がだんだん淡れて電燈が點く。小傳朝はびつくりしたやうに立ち上がつて、襖を開けて時計を見る）
小傳朝　ああ、もう五時半だ。（おつれに向つて）　おい。おつねさん。往かうぢやないか。樂屋の支度もしなくつちやならないから。
おつれ　ああ、そろそろ出懸るかね。お前さんと道行ぢやあ始まらないけれど。
小傳朝　何を云つてやがるんだい。ちやんころよりはまだましだぜ。
おつれ　なあにぼちぼちの癖に。（清玉に）　ぢやあお師匠さん、お先きに。
小傳朝　ああ、お先きに。六時半までには見えるでせうね。
清玉　大丈夫だよ。
（小傳朝とおつれとが梯子段を降りてゆくと、丁度それと入れ違ひ位に、傳朝と扇藏とが梯子段を上がつて來る。傳朝は四十四五歲位のこの一座の眞打の落語家。扇藏は五十三四歲位の落語家で、名古屋での大眞打。東京にゐた時分には、傳朝と同門の兄弟子である。二人はもうかなりいい心持に醉つてゐる。）
傳朝　（清玉に）　おい、扇藏さんを連れて來たよ。扇藏さんは今夜暇だから、是非スケに出て下さるつて云ふんだ。
清玉　（立ち上がつて座布團を敷き直しながら）　ああ、そりやあ如何も。（扇藏に）　さあ、どうぞお敷き下さいまし。
傳朝　ああ、扇藏さん。これがあたしの家内さ。清玉つて云つてね、べんべんの分なんだ。

扇藏　（坐つて）ああ、さうですか。ゐたしは時雨家扇藏と云つて。

傳朝　（云ひかけるのを引き取るやうに）まあ、いいよ。扇藏さん、そんな挨拶は。如何もお前さんは堅過ぎて困るよ。

扇藏　しかしね、挨拶はちやんとして置かないと、如何もあたしは氣が濟まない性でね。

傳朝　まあ、いいつてことさ。（清玉に向つて）おい、おきよ。兎も角も少し早間で、酒の支度をさせて呉れねえか。

扇藏　いいよ、傳朝さん、そんなに心配しなくつても。

傳朝　なあにまあこんな宿屋のことだから、ろくな肴も出來ねえだらうが、兎も角もちよつと飲み直さうよ。道中の電車ですつかり醉が醒めちまつたから。（もう一度清玉に）さあ、大急ぎに支度させて呉れ。

清玉　（立ち上がりながら）しかし、師匠、あんまり飲み過ぎちやあ駄目ですよ。

傳朝　まだおれが高座に上るまで三時間もあるぢやあねえか。

（清玉は呼鈴の釦を押したが、不圖思ひ直したやうに、自分で梯子段を降りてゆく。短い間。外はもう殆んど暗くなつてゐる。）

扇藏　（何か思ひ出さうとするやうに）ええと誰だつけかなあ。お前さんの奥方は、あたしの知つてゐる誰かに似てゐるよ。

傳朝　（聽き咎めるやうな調子で）ええ、誰に似てゐるつて。

扇藏　さあ、それがちよつと思ひ出せないんだが。（考へてゐたが不圖氣付いて）ああ、さうだ。七八年前に亡くなつた瓢玉の若い時分にそつくりだね。

傳朝　（笑つて）そつくりな筈だ。扇藏さん。あれは瓢玉の娘だよ。

扇藏　（これも笑つて）ああ、さうかい。それぢやあ似てゐるに不思議はねえや。（首を振りながら獨り言のやうに）さうかねえ。あたしは五つか六つ位の時分を知つてゐるんだが、もう今ぢやあまるで分らないよ。

傳朝　五つか六つ位つて云ふと、かれこれ二十年位前のことだね。

扇藏　ああ、もうさうなるだらう。あたしが名古屋に腰を落ち付けてから十八年になるからね。

傳朝　（感心したやうに）ふうん、もうそんなになるかねえ。

扇藏　なるともさ。あの時分はうちの扇枝師匠、喬枝、さん朝なんて人達が大看板時代なんだから、もうその位に

はなるだらうぢやないか。（不圖氣付いたやうに）ああさう云やあ喬枝さんがお前さんの一座にゐたんださうだね。

傳朝（ちよつと不快さうな顏付で）ああ、ゐたよ。昔は大看板だつたかも知れないが、今ぢやあもうすつかり舌がいけなくなつて、落語と來たらとても聽いちやあゐられないんだ。それにもう一日酒つ氣が絶えねえと來てゐるんだから如何も始末にいけなかつたかよ。

扇藏（或る感慨から）さうかねえ。喬枝さんもそんなになつちまつたかねえ。

（清玉は何氣なく梯子段を上がつて來たが、不圖、「喬枝」と云ふ名前を聽いて、廊下のところに立ち留まつたまま、二人の話に耳を澄ます。）

傳朝　しかしあの爺さん若い時分は、そんなに落語がうまかつたのかい。

扇藏　ああ、さうだね。お前さんはあんまりあの人の落語を聽いてゐないかも知れないね。賣り出して大看板になると間もなく、女の間違ひから東京にゐられなくなつて、あたしがこつちに來る少し前に、大阪に往つてしまつたんだから。

傳朝　なあに何度も落語は聽いてゐるけれど、如何もあんまりうまいと思はなかつたやうな氣がするんだ。

扇藏　さうかねえ。あたしはあの人の「ちきり伊勢屋」なんか今でもはつきり覺えてゐるよ。それにあの人は當時大いした色男でね、今のお前さんの奧方の母親なんかは一時は、夢中で惚れてゐたもんだよ。

傳朝（呟くやうに）ふうん、それぢやあまんざら噓でもなかつたんだな。

扇藏　ええ、何だい。

傳朝　なあにね、中泉での話なんだが、あの爺さんべろべろに醉つ拂つて、樂屋でくだらねえことを云やがるから、おれもう辛抱がしきれなくなつて、今夜かぎり斷るから出て往つて呉れつて云つたもんなんだ。さうするとあの爺さん急に威張り出して、おれはおきよの父親だから娘の傍にゐるのに不思議はねえ、如何してもおきよの傍を離れるのは厭だつて云つて肯かねえぢやねえか。

扇藏（首を振つて）ふうん、成程。それから如何したい。

傳朝（やや曖昧に）ううん、まあ、それからやつと出て往つて貰つたんだがね。しかし何かねえ、ほんたうにあの喬枝の爺さんは、おきよの父親なんだらうかねえ。

扇藏　うん、それがさ。一體あの瓢玉つてひとは中々浮氣な女で、講釋師の典凌ともさうだつたもんだから、表向きは典凌の子つてことになつてゐたが、あたしの考へぢやあ如何もあの喬枝さんが、ほんとの父親ぢやないかと

思ふよ。

（それまで默つて二人の話を聽いてゐた淸玉は、その時急に襖を開けて轉げ込むやうに入つて來たかと思ふと、いきなり扇藏の手を夢中になつて掴む。）

淸玉 （おろおろ聲で）扇藏さん。ほんとにあの人が、あたしの眞實のお父つあんなんですか。

扇藏 （少し面喰つて）いえね。ほんとと云つても、あたしが唯さう感じただけで、別にたしかな證據があるつて譯ぢやあないんですから。

傳朝 おい、おきよ。何をくだらねえことを訊くんだ。

淸玉 （やつぱり扇藏の手を掴んだまま）いいえ、くだらないことぢやありません。あたしはあたしのほんとのお父つあんが知りたいんです。ねえ、扇藏さん。あなた知つてゐるんなら、何もかも隱さずあたしに敎へて下さい。（うるみ聲になつて）唯感じたなんて、そんなことないわ、そんなことないわ。あなたはちやんと何もかも知つてゐるんだわ。

扇藏 （返事に困つて）いえ、ほんとにあたしは何にも知らないんですよ。唯その時分喬枝さんと瓢玉さんとが、さう云つたやうな仲だつてことは知つてゐるんですが、その外のことは何にもあたしは知らないんです。

淸玉 （やつと扇藏の手を離して）さうですか。しかしあの喬枝さんとうちのおつ母さんとの間に、關係があつたことはたしかなんですね。

扇藏 ええ、そりやあもう心中まで仕懸けた仲なんですからね。

淸玉 （思ひ出したやうに）ああ、さうさう、喬枝の爺さんもそんなことを云つてゐましたよ。（傳朝に向つて）ねえ、師匠。喬枝さんは如何したでせうねえ。

傳朝 （突き放すやうな調子で）知るもんかい、あんなやつのこと。それよりも酒は如何したんだ。

淸玉 （强く投げるやうに）今持つて來ますよ。（思ひ返して哀願するやうに）ねえ、師匠。お願ひだから許してやつて、喬枝さんをもう一度うちの一座に入れてやつて下さい。ねえ、ほんとうにあたし後生一生のお願ひだから。

傳朝 駄目だよ、あんなやつ。每日酒錢をせびられた上に、お前の女房の父親だなんて威張られた日にやあ、やり切れるもんぢやありやあしねえ。

淸玉 だけどほんとにあたしあの人が、何だか可哀さうでならなくなつて來たんですの。それにあたしあの晩から、何だかそんな氣がして仕方がなかつたんだが、色々話を聽いて見ると、あの人きつとあたしのお父つあんに違ひないわ。

傳朝 （怒鳴り付けるやうに）馬鹿なことを云ふねえ。あ

んな小汚ねえ爺さんが、お前の父親であつて堪るものか。

清玉　(悲しさうに首を振つて)　いいえ、いいえ、たしかにさうに違ひないわ。あなたがさうでないつて云つたつて、あたしはさうだと思ふわ。(泣き聲になつて)　ねえ、師匠。ほんとにお願ひだから許してやつて、もう一度うちの一座で使つてやつて下さい。お願ひです。お願ひです。後生一生のお願ひです。(涙をこぼす)

傳朝　いけねえ、いけねえ。何て云つたつてあんな爺は眞つ平御免だ。

扇藏　(傍から取りなすやうに)　しかしね、傳朝さん。昔の喬枝さんがそんなになつてゐるとすりやあ、ほんとに氣の毒な話なんだから、惡いことがあつたかも知れないが許してやつて、もう一度お前さんのところで使つておやりよ。

傳朝　いや、如何もこいつばかりは、兄貴の云ふことでも肯かれないよ。

扇藏　しかし、何だぜ、お互ひに藝人なんてものは、何時またどんなことで、今の喬枝さんのやうな身の上にならねえとも限らねえんだからね。情は人の爲ならずだ。かう云ふ時には助けてやつといた方がいいと思ふんだがなあ。

清玉　ねえ、師匠。ほんとにお願ひだから助けてやつて下さい。あたし何だかあの晩雨に濡れて、とぼとぼ出て往つたあの人の姿が、目にちらついて仕方がないんです。昨夜なんかもこつちを向いて、じつと掌を合せて拜んでゐるあの人の姿が、はつきりあたしの目に見えたんですもの。

扇藏　傳朝さん。ほんとにお前さん助けておやりよ。

(傳朝が返事をしずに默つてゐるところへ、旭五郎が荒つぽい跫音を立てて梯子段を上がつて來る。三十七八歳位のきりりとした顔立の男。劍舞師だけれども、踊りや唄の方が高座の人氣になつてゐる。)

五郎　(廊下のところで)　師匠、師匠。

傳朝　ああ、誰だい、こつちだよ。

五郎　(襖を開けて)　ああ、ここですか。ご免なさい。如何も遲くなりまして。(坐るなり直ぐに)　師匠。飛んでもねえことになりましたよ。

傳朝　ええ、何だい、飛んでもないことつて。

五郎　いえね、あの喬枝の爺さんね。

傳朝　(ぎくりとして)　如何かしたのか。

五郎　如何したもかうしたもありやしねえ。到頭死んでしまひましたよ。

清玉　(びつくりして)　ええ、ほんとなの。

五郎　ほんとにも何にも、あたしは今までそれにつかまつてゐて、こんなに遲くなつちまつたんです。

清玉　それぢやあほんとに死んぢまつたのね。

五郎　ええ、ほんとですよ。誰が嘘なんか云ふもんですか。(脅えるやうな顏付で)　それもね、當り前の死にやうならいいんだが、見るも無殘な死態(しにざま)でね。

清玉　(やつぱり脅えたやうに)　ああ、それぢやあやつぱりあたしの思つてゐた通りだ。あたしの思つてゐた通りの死にやうをしたんだ。昨夜あんなに掌を合はせて拜んでゐたのも、やつぱり死んだ知らせだつたんだ。五郎さん。もつと詳しく話して下さい。如何したんです。如何してあの人は死んだんです。

五郎　(恐縮したやうに頭をかいて)　實はね、あたし昨夜客先からちよつと外に廻るところがあつて、いい心持に醉つて歩いてゐるうちに、道を間違へたと見えてずつと町はづれの方の鐵道の踏切のところに出てしまつたんです。さあ、もうかれこれ一時頃になつてゐましたかね。霧が深いのでちよつと向うが見えなかつたのですが、踏切だと云ふことが分つた時、丁度東京行の急行が通つたので、はつと思つて立ち竦んでゐると、如何でせう。列車が往つてしまつた後の線路の傍に、何だか人らしい黑いものが倒れてゐるぢやありませんか。

清玉　ああ、それがあの喬枝さんだつたのね。

五郎　ええ、さうなんですよ。しかしその時はまだあたしには、誰だつてことが分りませんから、もう轢き殺されてしまつたものと思つて、大急ぎで停車場に知らせに往つて、みんなでやつて來て見ると、轢かれたんでなくつて彈ね飛ばされたものと見えて、ひどい怪我はしてゐましたが、まだ蟲の息が通つてゐるんです。それでまあ急いで近所の病院を敲き起して、連れ込んでから顏を見ると、それがあの喬枝爺さんなんぢやありませんか。あたしは何だか氣味が惡くつて、昨夜一晩全く往生してしまひましたよ。

清玉　それぢやあ暫く生きてゐた譯なのね。

五郎　ええ、もうまるで死んだも同然でしたけれど、兎も角も息だけは通つてゐたんです。しかし何しろ顏は壓し潰されたやうになつてゐるし、肋骨(あばらぼね)も一二本折れてゐると云ふんだから堪りませんや。さうですねえ、今朝の八時頃でしたらうか。最後の息を引き取つたのは。

清玉　(頼もしさうに五郎の顏を見ながら)　それぢやあなたは、それまでずうつと附いてゐたのね。

五郎　(思ひ出してぞつとしたやうに)　ええ、そりやあもう氣味が惡くつて堪らなかつたんですが、さう云ふところに往き合せたのも何かの緣だと思つたもんですから、離れずくつ附いてゐましたよ。(傳朝へ向つて)　ねえ師匠。あなたも一度お經でも上げてやつた方がようござんすぜ。あの爺さんも死ぬ少し前に、はつきりあなたのこ

とを云つてましたからね。

傳朝　（怒つたやうな調子で）何を云やあがるんでえ。薄氣味の悪いことを云やあがるねえ。脅かしつこなしにしよう。

五郎　いえ、脅かす譯ぢやありませんがね、ほんとにあの爺さん師匠のことを云つてましたぜ。

傳朝　（ちよつと氣になるやうな樣子で）どんなことを云つてたんだ。

五郎　ええ、そのう、傳朝のやつ覺えてゐろつて。

傳朝　へえ、生意氣なことを云つてゐやがる。

五郎　（少し脅かし氣味に）何しろその聲つたらありませんでしたからね。（その聲を眞似るやうに）傳朝のやつ覺えてゐろ。ああ、思ひ出してもぞつとすらあ。

傳朝　もう止して呉れ、そんな話は。おれはあんなやつの話は聽きたくねえんだ。誰がお經なんぞ上げてやるものか。

扇藏　（傍から口を出して）しかし、傳朝さん。そんなことを云ふもんぢやあないよ。せめて一度位はお經を上げてやつたらいいぢやないか。

傳朝　厭だよ、おれは。あんな爺さんのために、お經なんぞ上げてやる理由(わけ)はねえんだ。

扇藏　しかしさうしてやつた方が、お前さんも寐覺めがいいだらうになあ。

傳朝　（棄ばちに）寐覺めなんて如何だつていいよ。（不圖淸玉が泣いてゐるのに氣が付いて）おい、何を泣いてゐるんだ。何にも泣くことなんかありやしねえぢやねえか。さあ、それよりも酒を早くしろつて云つて來て呉れ。

扇藏　もういいよ。もう酒を飮むのは止めにしよう。

傳朝　笑談云つちやいけねえ。厭な話を聽いたんで、すつかり酒が醒めちやつたぢやあねえか。

扇藏　しかしお前さんはまだこれから高座を勤めなくつちやならないんだらう。

傳朝　そんなことは如何でもいいよ。ああ、何だか嫌くなつて來やがつた。いけねえ、いけねえ、酒でも飮まなくつちやあとてもいけねえ。（嘲けるやうに笑つて）傳朝のやつ覺えてゐろか。何を云つてやがるんでえ。（急に立ち上がつて）おい、扇藏さん。飮みに往かう、飮みに往かう。こんな宿屋で酒を飮んだつて仕樣がねえや。さあ何處かへ飮みに往かう。（扇藏の手を取つて無理に引つ張つて往かうとする）

扇藏　（引つ張られながら立ち上がつて）しかし大丈夫かい、席の方は。

傳朝　大丈夫だよ。飮みに行つた先から、ここにゐるつてことを知らせてやつて置けばいいぢやないか。

五郎　（心配さうに）だけど、師匠。あんまり醉はないやうにして下さいよ。濱松の時のやうに、お客と喧嘩を始められたりすると困るからね。
傳朝　餘計な心配をするねえ。（扇藏に向つて）さあ、行かう、扇藏さん。
（傳朝と扇藏とは梯子段を降りてゆく。五郎は淸玉が火鉢の傍で俯つ向いたまゝ泣いてゐるので、ちよつと困つたやうな顏付。微かに寄席の太鼓の音が聽こえて來る。）
（やゝ長い間があつてから、女中が德利や料理を載せた膳を持つて梯子段を上がつて來る。）
女中　（襖を開けて）如何もお待遠樣。
淸玉　（顏を上げて）ああ、もうよかつたんだけれど。
女中　ああ、さうでしたか。
淸玉　いいえ、いいのよ。（五郎に向つて）ねえ五郎さん。二人で一杯飮まうぢやないの。
五郎　ええ結構ですな。併し席の時間は大丈夫ですかね。
淸玉　大丈夫よ。それにここからは直きなんだから、樂屋にゐて飮んでゐるやうなもんだわ。
五郎　しかしさう悠くりはしてゐられませんね。
淸玉　まあ、そんな心配いいぢやないの。あたしあんたに相談したいこともあるんだから。（女中に）あのね、もう一本お酒を持つて來て頂戴。
（女中は梯子段を降りてゆく。淸玉と五郎とは膳の前に坐つて酒を飮み始める。二人とも暫くの間默つてゐる。）
淸玉　（不圖思ひ出したやうに）ねえ、五郎さん。喬枝さんはあたしのことを何にも云つてなかつた。
五郎　ああ、さうさう、二三度おきよおきよつて云つてましたが、あれはあなたのこつてすかね。
淸玉　ああ、おきよつて云つてたの。
五郎　ええ、あたしは誰のことかと思つてゐたんだけれど。
（不思議さうに淸玉の顏を見詰めながら）しかし如何云ふ譯であの爺さんはあなたの名前を云つたのでせう。
淸玉　（悲しさうに點頭いて）それにはいろいろ仔細があるんですが、手短かに云つてしまへばあの人は、あたしのほんとのお父つあんらしいのよ。
五郎　へえ、あなたのほんとのお父つあん。
淸玉　自分ではもうこの間中泉であたしに向つて、お前はおれの娘だつて云つたんだけれど、まだそれだけではあたしもすつかりほんとにはしてゐなかつたの。さうすると今日あの扇藏さんが來て、あの人もそんなことを云ふのでせう。だからあたしもうたしかにほんとのお父つあんに違ひないと思ふんだけれど。

五郎　自分でもさう云ふし、扇蔵さんもさう云ふんなら、そりやあもうたしかにさうに違ひありませんよ。

清玉　(少し涙含んで)　さうするとあたしはほんとに悪い事をしたやうな氣がしてならないのよ。それにうちの師匠だつてあんまり遣り方が酷いんだからねえ。あんなにまでしなくつてもいゝと思ふわ。

五郎　さうですねえ。あなたのほんとのお父つあんだつてことが分つて見りやあ、もう少し何とかしてもよかつたらうにと思ひますね。

清玉　それがもううちの師匠と來たら、義理も人情も何にも知らないんだから駄目なのよ。今もあんたが聽いてゐた通り、お經を上げるのも厭だつて云つてゐる位なんでせう。あたしもう何だか一緒にゐるのが厭になつて來たの。五郎さん。一杯呉れない。

五郎　(周章てて杯を差してから)　へえ、お酌しませう。少し温いやうですね。

清玉　今熱いのが來るわ。(杯を返して)　しかし不思議だわねえ、丁度さう云ふところへあんたが往き合せたなんて。ほんとに何かの因縁だわよ。(不圖氣が付いたやうに)　ああ、それで息を引き取つてから如何なつたの。

五郎　いえ、それがね、あたしには喬枝さんの家が何處にあるか、まるでそんなことが分らないんでせう。それでまあ兎も角も東京の組合の方へ電報を打つて、死骸はひと先づ假埋葬と云ふことにして置いたんですよ。

清玉　ああ、さう。そりやあ如何もいろいろお骨折だつたのね。

五郎　いいえ、別に骨折つた程のとぢやありませんけれど。

清玉　だけどあなたがゐたんでほんとによかつたわ。若しあなたがゐなかつたら何處の誰だか分らない譯なんでせう。

五郎　そりやあちよつと分りますまいね。

(女中が梯子段を上がつて來て、持つて來た徳利をそこに置くと、そのまま直ぐに降りてゆく。やゝ長い間。)

清玉　(不圖氣が付いて)　ああ、熱いのが來たのね。(そこにあつた湯呑を取つて)　これに注いで頂戴。

五郎　ようござんすか、そんなもので飲んで。まだあなたは高座前なんですぜ。

清玉　いいのよ、いいのよ。(湯呑の酒をぐつと飲んで)あたしはもう今夜は高座には上がらないんだから。

五郎　えゝ、如何してなんです。

清玉　如何してつて。(ぢつと五郎の顔を見詰めながら)わねえ、五郎さん。あんたあたしを連れて逃げて呉れない。

五郎　ええ、逃げて呉れ。(笑つて輕く)　笑談でせう。

清玉　(眞劍に)　いいえ、あたし笑談なんぞ云つてゐるん

ぢやないわ。あたしもうほんとうにこの一座にゐるのが厭になつたの。この一座つて云ふよりも、傳朝のやつが厭になつたの。

五郎　厭になつたのは分つてゐますが、あたしに連れて遁げて呉れつて云ふのは如何云ふ譯なんです。

清玉　（焦つたさうに）分らない人だわねえ。連れて遁げて呉れつて云へば、大抵あたしの心持は分りさうなもんぢやないか。

五郎　（湯呑で酒を飲んでから點頭いて）よろしい、遁げませう。

清玉　（五郎の手をじつと握つて）きつとだわね。五郎さん。

五郎　ええ、きつとですとも。

清玉　今夜これから直ぐになんだよ。

五郎　（少し面喰つて）ええ、これから直ぐ。

清玉　直ぐぢや厭なの。

五郎　いいえ。よござんすよ。さうなりやあ力酒だ。（もう一杯湯呑で飮む）

（廊下の突き當りの襖を開けて、新内語りの加賀丸が出て來る。六十歳位の盲目の老人。手探りで廊下づたひに二人のゐる座敷の前まで來て「師匠々々。」と呼びながら襖を開ける。）

（清玉と五郎とは思はずぎよつとして寄り添ひながらじつと息を殺してゐる。）

加賀丸　（返事がないので獨り言のやうに）はてな、もう師匠は出懸けたのかな。（さう云つてからもう一度たしかめるやうに）師匠。傳朝さん。お留守なんですかい。清玉さんもおゐでがないんですかね。（寂しく笑つて）變だなあ。さつきまで話し聲がしてゐたのに、みんな如何しちまつたんだらう。（廊下の時計が六時を打つ）なあんだ、まだ六時ぢやあねえか。おれはもう席へ往くのが遲くなつたかと思つたんだが、六時ならまだ大分時間があらあ。ちよつとひとつ今夜の語り物を浚つて置くかな。

（加賀丸はまた廊下づたひに手探りで、突き當りの襖を開けて入つてしまふ。加賀丸が往つてしまつてからも、清玉と五郎とはやつぱりじつと寄り添つてゐる。）

清玉　（低い聲で）もう往つてしまつたやうだわね。

五郎　ええ、あたしは小傳朝のやつかと思つてびつくりしましたよ。

清玉　力酒も駄目ぢやないの。

五郎　だつて湯呑に一杯位ぢやあ。

清玉　（徳利を取り上げて）まだあるわよ。もう一杯飮んだらどう。

五郎　ええ、もう一杯やつ付けますかね。

清玉　お飲みよ、五郎さん。お前さんがびくびくしてゐちやあ心細いわ。
五郎　(湯呑に酒を注いで貰つて)　あなたもちつとおあがんなさいよ。
清玉　ああ、それぢやあ半分づつ。
(突き當りの加賀丸の部屋で、三味線の音がし始めたかと思ふと直ぐに哀れげな新内の唄の聲が聽こえて來る。)
(二人は默つてじつとその唄を聽いてゐる。やや長い間。)
清玉　(不圖氣が付いたやうに)　さあ、出懸けよう。また誰かやつて來るとうるさいから。
五郎　ええ、出懸けませう。(そこらを見廻はして)　何にも持つて往かないんですか。
清玉　お金さへあればいいぢやないの。
五郎　ええ、そりやあさうですけれど。
清玉　兎も角もここの家は席へ往く振をして出てしまはうよ。
五郎　ええ、さうしませう。
清玉　さうしてずつと電車で名古屋へ往つてしまつて、あすこで悠くり往く先を極めよう。
五郎　さうですね。(殘つてゐた酒をぐつと飲み乾して)　さあ出懸けませう。
清玉　五郎さん、大丈夫だわね。きつとあたしを見棄てないね。
五郎　ええ、そりやあもう。
清玉　(立ち上がりながら)　あたしもうすつかり醉つちまつたわ。
五郎　ええ、あたしもすつかり醉ひましたよ。(清玉が火鉢に躓きそうになつたので)　ああ、危なうござんすよ。
清玉　大丈夫だわよ。
(清玉と五郎とは跫音を忍ばせるやうにして、そつと梯子段を降りてゆく。)
(加賀丸の部屋から聽こえて來る、三味線の音と唄の聲はそれからまだ暫くの間續く。)

―― 幕 ――

髑髏尼

人物

新中納言局　後に髑髏尼
阿證坊印西
壽王丸　新中納言局の子
乳母、汐路　後に堂守の尼
烏男　一人の白痴
鐘樓守　七兵衞

猶數人の武士、七人の尼、多くの市民、二人の山賊等出づ。

髑髏尼が幻想の中に現はるゝ者として、死、及び既に骸骨となれる重衡其他の平家の人々あり。

場所

京、及び奈良。

時代

文治元年——二年。

第一幕

第一場

京師一條萬里の小路の一部。

舞臺の左方は一條の大路に面す。廣濶なる坦道長く續き、市街の上に遠く圓き形の山脈見ゆ。

正面より右方に懸けて萬里の小路に面す。すべて築土の垣。中央に兩緒戸の土門あり。薄檜皮の家の屋根垣の上より見ゆ。門破れ屋根に草生す。その下に四五個の棄石あり。道路には二三株の枯柳あり。

晩冬の午後、日光は怪しきまで白く市街の上を照らし、烏の悲鳴頻りに聽ゆ。

幕明く。一群の市民道路の上に立ち騷ぎゐる。多くは戰亂の爲めに家を失へる浮浪人にして、身に襤褸をまとへる者なれども、中には清楚なる衣を裝へる者も交れり。老人も、青年も、少女も、童も、すべて恐怖と不安との表情を示しつゝ、舞臺の左方を凝視す。

烏男と渾名を呼ばるゝ一人の白痴あり。三十歲位なれど老人の如く見ゆ。石に腰懸けて悲しげに歌ふ。

白痴の歌
烏、烏、寒がらす。
眞黒な着物着て、
悲しげに鳴きながら、
鳴きながら何處へ往く。
京は一面血だらけだ。
平家の旗も血だらけだ。

（市民等の沈默遽かに破る。すべて恐怖と不安とに滿ちたる聲なり。）

第一の市民　おお、またあすこの家から子供を連れ出して來た。

第二の市民　あれ、あんなに泣いてゐるが、もう直き殺されてしまふのだな。

老いたる市民　可哀らしい女の子ぢや。

第一の少女　まあ、如何したら好いでせう。可哀想に――

第三の市民　また一人子供を搜し出して來た。

老いたる市民　おお、今度は美しい男の子ぢや。

（一瞬間の沈默。市民等感動す。）

第二の少女　（悲しげに叫ぶ）あれえ…あんなに酷たらしく首を切つてしまひました。

第一の市民　おお、あの武士の刀からは、あんなに眞赤な血汐が流れてゐる。

第二の市民　今日迄にもう幾百人の子供が殺されたらう。

老いたる市民　平家の裔を絶つと云ふが、まるで人間の裔を絶つやうぢや。

童　（老いたる市民に）お祖父さん。あの人達はここにもやつて來るのだらうねえ。

老いたる市民　うん。だんだん此方へやつて來るやうぢや。

第一の少女　もしこの子が殺されたら如何しませう。

第三の市民　さうだ。もしもの事があると大變だから、何處かへ逃げた方が好いぜ。

老いたる市民　（冷かに）何處へ逃げたつて駄目ぢや。

第四の市民　おお、前よりも人數が增したやうだ。

第五の市民　二人の子供を兩脇に擁へて、門の中から駈け出して來たぜ。

第六の市民　もう二人とも死んでゐるのだ。手足をまるで動かさない。

（この時二三の市民左右より走り出づ。その中に殺されたる子の母あり。）

殺されたる子の母　（狂へる如く）何卒あの子の讐を取つて下さいまし、何卒あの子の讐を取つて下さいまし。

第一の少女　まあ、今殺された子のお母さんなんですねえ。

第一の市民　あいつ等はみんな源氏方の北條の家來だ。

第二の市民　讐なんぞ如何して討てるものか。
第三の市民　みんな戰に勝つた人達なんだからなあ。
殺されたる子の母　あの子は平家に由緣の者でもなんでもないのでございます。それだのにあんなに酷たらしく殺されてしまひました。あの子には何の罪科もないのでございます。
老いたる市民　これ、母御、今さう歎いても仕方がない事ぢや。それよりも早く歸つて亡き子の菩提を弔うたが好い。
第四の市民　さうだ。讐を取つてくれなんて事は、あんまり云はない方が好いぜ。
第五の市民　もしあいつ等に聽かれたら、それこそ今度は自分が殺されるかも知れぬ。
殺されたる子の母　いえ、いえ、私は殺されても關ひません。ああ、何卒あの子の讐を取つて下さいまし。何卒あの子の讐を取つて下さいまし。
（殺されたる子の母は泣き叫びつつ右方に走り入る。）
二三の市民　何處へ往くのだ。何處へ往くのだ。そんな事を云つて歩くと大變だ。
（二三の市民も後を追うて右方に走り入る。）
第一の少女　可哀想に――氣でも狂はなければ好うござんすがねえ。
第二の少女　大事の子供を殺されては、あんなになるのも無理はありませんね。
第一の市民　（左方を見つつ叫ぶ）もうここにもゐられなくなつた。だんだんこつちへやつて來るやうだ。
第二の市民　みんな血だらけになつてゐる。もう半分氣が狂つてゐるのだ。
第三の市民　もう直き京中の子供を殺し盡してしまふだらう。
第四の市民　やあ、また一人男の子を殺した。東夷は怖ろしい奴等ばかりだな。
（左方より大勢の人の荒々しき跫音聽ゆ。）
第一の少女　あれえ……そこの小路からあんなに大勢出て來ました。
第一の市民　危い。危い。逃げろ――逃げろ――
（市民等は慌ただしく右方に走り入る、白痴のみ唯一人殘る。）
（短き間。左方より一群の武士等出づ。北條の家來。すべて血に染みたる刀を持ち、狂へる如き表情を示す。門前に立ち留まる。）
第一の武士　（刀にて右方を差す）あの群集の中にも二三人子供がゐたやうぢや。
第二の武士　あれはみんな卑しい者の子ぢや。
第三の武士　併し平家の子供達も、どのやうに身を窶して

ゐるか分らないぞ。
第四の武士　それもさうだな。（間）よし。おれが往つて調べて來よう。（他の二三の武士に）おれと一所に來てくれい。
（第四の武士は他の二三の武士とともに、慌ただしく右方に走り入る。白痴は突然立ち上がる。）
白痴　やあ、みんな刀を持つてゐるな。さうして刀にはみんな血が附いてゐるな。（間）みんな何處からやつて來たんだい。さうしてみんな何處へ往くんだい。
第一の武士　何ぢや。一體貴樣は何者ぢや。
第二の武士　さうしてそこで何をしてゐたのぢや。
痴白　あの烏の聲を聽いてゐたのだよ。そりやあいろんな事を云つてゐるぜ。みんなあの烏の聲が分らないんだらう。それがおれにはよく分るんだよ。それだからみんなおれの事を烏男つて云やがるんだよ。
第三の武士　何を馬鹿な。（間）人間に烏の聲なぞが分らうかい。
第一の武士　まあ試しに何と云つてゐるか云つて見ろ。
（烏の悲鳴近く聽ゆ。短き間。）
白痴　あれはみんな戰を呪つてゐる聲なのだぜ。あの烏はみんな死んだ平家の人達の血で生きてゐるのだから、それはいろんな事を云つてゐるよ。
第二の武士　何ぢや。あの烏はみんな死んだ平家の人達の血で生きてゐると云ふのか。
第三の武士　何を云つてゐるのだ。（間）こんな馬鹿に關つてゐても仕方がない。
第一の武士　さうぢや。それよりも早く平家の子供達を搜し出さう。まだ何處かに隱れてゐるに違ひない。
（武士は門内に入る。白痴は武士等の後を見送りつつ悲しげに歌ふ。）

白痴の歌

烏、烏、寒がらす。
眞黒なくちばして、
突つけば散るであろ、
散るであろ、赤い花。
京は一面血だらけだ。
平家の旗も血だらけだ。

（白痴は歌ひつゝ左方に入る。舞臺空虚、稍長き間。）
白痴の歌斷續して聽こえ來る。阿證坊印西左方より出づ。五十七八歳。僧衣。錫杖を持つ。）
印西　またあの烏男が歌つてゐるのぢやな。併しあれは何と云ふ歌であらう。わしは今日までずゐぶん諸國を歩き

廻つたが、つひぞあんな歌を聽いた事がなかつた。(間)何處かに呪ひの調がある。何處かに恨みの響きがある。あの男も平家の滅びたのを悲しんでゐるものであらう。(間)今日圖らずも京へ來て見れば、見る事聽く事すべて傷ましい事ばかりぢや。あゝ、美しい平家の公達が都大路を練り歩いたのも、まるで昨日のやうに思はれるのに、もう今ではその姿を見る事も出來ぬのぢや。何處へ往つても血腥ぐさい話ばかりで、さながら地獄のやうな氣がする位ぢや。源氏方の武士達には、何故やさしい心がないのであらう。

(門内遽かに騷がしくなる。印西は柳の樹蔭に隱る。武士等門内より出づ。第一の武士は一人の童を抱き擁へる。壽王丸。六歳。重衡の忘形見。胸に傷を負ひて血汐流る。乳母、汐路、二十三四歳。泣き叫びつつ後を追ひて出づ。)

第一の武士　こいつは確かに平家の誰かの子ぢや。

第二の武士　由緒ある人の子かも知れぬ。(間)胸の傷は大事あるまい。

第三の武士　呼吸絶えぬうちに早く往つて、みんなに見せるが好い。見覺えたやつがをるかも知らぬぞ。

(第一の武士は壽王丸を抱きたるまま左方に走り入らむとす。乳母その前に立ち塞がる。)

乳母　何卒お情でございます。そのお子だけはお助け下さいまし。

第一の武士　これ、邪魔立てすると許さんぞ。

第三の武士　貴樣の命は惜しくはないか。

乳母　いえ、いえ、私の體は如何なつても厭ひません。何卒そのお子だけは、酷たらしい目に會はせないで下さいまし。お願でございます。

第二の武士　さあ、退け、退け。

第三の武士　退かぬと手荒な事をしなければならない。

乳母　いいえ、退きませぬ。死んでもここは退きませぬ。

第一の武士　ええ、面倒な女だ。(乳母を蹴倒す)さあ、早く往かう。

壽王丸　(微かに)乳母、何だか怖いよ。(突然叫び)あつ――何だか冷たい眞白なものが――花だよ――花だよ。

第一の武士　何ぢや。冷たい白いものぢや。大方夢でも見てゐるのだらう。

(武士等は右方に走り入る。乳母は起き上りて蹌踉めきつつ後を追ふ。)

乳母　壽王丸さま。壽王丸さま。

(乳母は右方に走り入る。壽王丸さまと呼ぶ聲次第に遠ざかる。印西は柳の樹蔭より出づ。悲しげに右方を凝視す。)

印西（獨語）もうあの子の呼吸も絶えるのであらう。胸には傷を負つてゐたやうぢや。今日ここに來るまでの道傍にも、幾人の子供の死骸が投げ棄ててあつたか分らぬ。その死骸の近くには、幾百羽の鳥が群がつて、肉を啄み血を啜つてゐるのぢや。（嗟歎の調子）ああ、平家が盛んだつた時分を思へば、まるで夢のやうぢや。戰の爲めに幾萬の人が死んだらう。戰の爲めに燒かれた寺もどの位あるか知れぬ。さうぢや。あの東大寺も燒けてしまつた。（間）併しあの寺を燒いたのは源氏の人々ではなかつた。あれは重衡が燒いたのぢや。重衡も面白い事を云ふ男だつたが――（錫杖を見て）この杖の事を運命の杖と呼んだのも、あの男が云ひ始めたのぢや。

（門內より新中納言局出づ。二十一二歲。信西の孫、美しき上﨟。殆んど狂へるが如く走り來りて印西に突き當る。）

新中納言局（叫ぶ）壽王丸。壽王丸。何處へ往つたのぢや。（印西を認めて）おお、お上人樣だつた。今男の子を連れて大勢の武士が、この門の中から出て來たでございませう。その武士は何處へまゐりました。

印西　おお、そなた新中納言の局ぢやな。それでは今の男の子はそなたの子か。

新中納言局　あれは重衡さまの忘形見でございます。何卒取り返して下さいまし。あの子を殺されては、重衡さまに申譯がございません。あの武士達はどつちへ往つたのでございませう。私がこれから後を追つて往つて、如何しても取り返してまゐります。さあ、何卒あの武士達がどつちへ往つたか敎へて下さいまし。

印西　そんな事をしてはそなたの生命にも關はる事ぢや。そんな危い事はなさらぬが好い。これから後を追うたところで、か弱い女の足ではとても追ひ附く事は出來まい。

新中納言局　いえ、いえ、如何してもあの子を取り返してまゐります。さあ、何卒あの武士達がどつちへ往つたか敎へて下さいまし。

印西　さうか。そんなに云はれるなら、まあ後を追つて往つて見るが好い。（地上を差し示す）それ、その血汐の痕を傳はつて往くのぢや。

新中納言局（地上を凝視す）おお、血汐がまるで紅い絹絲のやうに續いてゐる。

印西　それはあの子の胸から流れた血汐ぢや。

新中納言局　この血汐は何處まで續いてゐるのやら、――（次第に感動す）壽王丸――如何してそなたを死なせて好いものか。大事な大事な重衡さまの忘形見ぢや。平家は滅びても戀は滅びぬ。（間）さうぢや。早く壽王丸を取り返して來よう。

（新中納言局地上に續きし血汐の痕を傳はりて、しどろもどろに右方に走り入る。印西は悲しげにその後を見送る。）

印西　ああ、あの血汐の痕は何處まであの女を連れて往くであらう。（間）　おそらくはあの女に死と云ふ不思議な事を見せるであらう。（錫杖を鳴らしつつ）　この運命の杖が多くの人に見せたやうに――

（白痴二度歌ひつつ左方より出づ。手に烏の死骸を持つ。）

白痴の歌

烏、烏、寒がらす。
眞黑な尾を振つて、
晝も夜も狂ほしく、
狂ほしく鳴いてゐる。
京は一面血だらけだ。
平家の旗も血だらけだ。

（白痴は印西を見て怪しげに笑ふ。）

印西　お前はいつも何の爲めに歌うてゐるのぢや。

白痴　（猶笑ひつゝ）　そんな事を誰が考へてゐるものか。

印西　それでもお前はいつも歌ばかり歌うてゐるやうぢやが――

白痴　今はもう歌を歌ふやつもゐなくなつたからなあ。一人位歌を歌ふやつでもゐなくつては、この世の中が寂しいだらう。

印西　うん、面白い事を云ふやつぢや。（間）　その手に持つてゐるのは何ぢや。

白痴　これは烏の死骸だよ。今道傍の子供の死骸に、一杯たかつてゐる烏の中へ、石礫を投げて殺したのだ。（烏の死骸を凝視しつつ）　生きたものは何故死ななければならないのだらう。

印西　うん。その謎を解いた者はまだ一人もない。（痛ましげに白痴を見る）　そのやうな事を考へずに、お前はいつも歌うてゐたが好い。わしはこれからあの女の後を追つて、悲しい人の世の出來事を見なければならないのぢや。（右方に歩む）　死か。（白痴に）　さうぢや。もう一度烏の歌を歌つてくれ。それ、髑髏が何とか云ふ文句のがあつたな。

（白痴は極めて悲しげに歌ふ。目には涙溢る。）

白痴の歌

烏、烏、寒がらす。
眞黑なその胸で、

溫めりや髑髏さへ、
髑髏さへ泣くてあろ。
京は一面血だらけだ。
平家の旗も血だらけだ。

（印西は悲しげに地上を凝視しつゝ、次第に足を早めて右方に入る。）

第　二　場

蓮臺野と呼べる鳥邊山の一部。

山上の稍平らなる土地。右方は鬱憂を極めたる杉の木立あり。

中央の谷を隔てゝ、遙かに京の市街の鳥瞰景を見る。銀の如く光れる加茂川の水は、燻されたるが如き午後の空に映れり。

左方に一屋の古き庵室あり。懸樋、水桶、その周圍に破れたる柴垣、その前に小徑ありて左右に通ず。梟の聲など聽ゆ。寂寞。

最初は舞臺空虚なり。やがて左方より一群の人の跫音聽こえ來る。間もなく市民等走り出づ。第一場に現はれたる市民の一部分なり。

第一の少女　如何したら好いでせう。

第二の少女　（童を抱きて）この子を何處かへ隱さないときつと殺されてしまひますよ。

老いたる市民　いくら隱しても駄目ぢや。

童　お祖父さん。早く逃げようよ。何だか怖いよ。

老いたる市民　わしはもうすつかり疲れてしまつた。

第一の市民　さあ、どんどん追つ懸けて來るやうだから、早く逃げなくちやいけないぜ。

第二の市民　さうだ、早く逃げろ。早く逃げろ。

（市民等急いで右方に走り入る。老いたる市民一人殘る。第四の武士及び二三の武士左方より走り出づ。）

第四の武士　（呼ぶ）待て、待て、何故逃げるのだ。（老いたる市民に）貴樣はあいつ等の仲間だな。

老いたる市民　はい。左樣でございますが、別段惡い事をした者ではございません。

第四の武士　おれはそんな事を聽いてゐるのではない。あの中に子供がゐやしないか。

老いたる市民　いいえ。子供などはをりません。

第四の武士　噓を吐け。（他の武士に）それ、その老耄れを引つ立てて來い。

（武士等は老いたる市民を引連れて右方に走り入る。）

舞臺二度空虚。長き間。二人の尼徐かに左方より出づ。）

第一の尼　如何したんでせう。何だか大勢の人の跫音が聽こえるやうですね。

第二の尼　まあ。ほんとにあんなに大勢の人の跫音が――

第一の尼　ああ、だんだん遠くなつてゆきますよ。

第二の尼　さうですね。もう何にも聽こえなくなつてしまひました。

第一の尼　何だかこの山の中までも、浮世の波が押寄せて來たやうな氣がしてなりません。

第二の尼　さうですねえ。時々戰なぞの怖ろしい噂が、ここにも傳はつて來る事がありますね。

第一の尼　ほんとに靜かな山でしたが――

第二の尼　ええ、亡くなつた人の野邊送りに來る人ばかりだつたのに――

（沈默。寂寞は風の如く舞臺の上を過ぐ。）

第一の尼　さあ、もうそんな事は考へますまい。いろんな怖ろしい事ばかりが思ひ出されてなりませんから。

第二の尼　さうですね。併しほんとにこの山に何か變つた事なぞなければ好うござんすが――

第一の尼　おや、もう加茂川の水も光らなくなりました。

第二の尼　それではもう黃昏には間もないでせう。夕の勤行を始めなければなりませんね。

（二人の尼は庵室の中に入る。稍昏き間。勤行の鉦の音聽こえ始む。第一の武士等左方より出づ。第一の武士は猶ほ壽王丸を抱きたるままなり。乳母の叫び聲左方より聽ゆ。）

乳母の聲。――壽王丸さま――壽王丸さま――

（武士等は舞臺の中央にて立ち留まる。）

第二の武士　（第一の武士に）おい、何だかその子は呼吸が絕えてしまつたやうだぜ。

第一の武士　うん。如何も變だと思つてゐたんだ。

第三の武士　急に泣き止んだ事と思ふと、それつきり動かなくなつてしまつた。

第一の武士　一寸ここに下して見よう。

（第一の武士は壽王丸を地上に下ろす。壽王丸は既に呼吸絕えゐる。武士等顏を見合はす。）

第二の武士　到頭死んでしまつた。

第三の武士　仕方がない。首だけ持つて往つてみんなに見せよう。

（乳母左方より走り出づ。壽王丸の死骸を見て驚き、直ちに縋り付きて泣く。）

乳母　壽王丸さま。壽王丸さま。如何してこんな酷たらしいお目にお會ひになつたのでございます。ああ、もう何を申し上げてもお分りになりますまい。こんなに冷たくなつておしまひになつたのですもの。

第一の武士　これ、これ、そこにをつては邪魔だ。

第三の武士　さあ、退け、退け。いくら泣いたつて死んだ

者は生き返りはせんぞ。

乳母　もうかうなりましたからは、せめて死骸だけでも持つて歸りませう。(悲しげに)　あゝ、今まで機嫌よく遊んでいらしつたものが、もうこのやうな淺猿しい姿におなりになるとは、まるで夢のやうな氣がいたします。(壽王丸の死骸を抱き上ぐ)　壽王丸さま。さあ、乳母と一所にまゐりませう。

第二の武士　これ、これ、その死骸を持つて往く事はならんぞ。

乳母　えつ、それは如何云ふ譯なのでございます。

第一の武士　その子の首が入用なのだ。

乳母　(驚く)　ええ、それではこのお子の首までも――(死骸を抱きたるまま地に伏す)　壽王丸さま。あなたは何と云ふ哀れな身の上なのでございませう。

(乳母は壽王丸の死骸の上に身を投げて泣く。一瞬間の寂寞。猶ほ勤行の鉦の音聽ゆ。)

第一の武士　(左方を見る)　や、あすこに一人の女がやつて來る。

第二の武士　美しい上臈だ。併し何だか氣でも狂つてゐるやうな樣子だな。

第三の武士　おお、あれはこの子の母親だ。さつき氣を失つて倒れた女だ。

(長き間。左方より新中納言局走り出づ。武士等を見て立ち留まる。)

新中納言局　おお、やつと追ひ付いた。(狂ほしく叫ぶ)　壽王丸は何處にゐる。壽王丸は何處にゐる。さあ、早くあの子を返しておくれ。私はあの子がゐるばかりに、今日まで寂しく生きてゐたのだ。さあ、早くあの子を返しておくれ。

第一の武士　(壽王丸の死骸を指差す、冷やかに)　あれを見ろ。

新中納言局　(死骸を見て驚く)　や、あの子はもうこんな姿に――(乳母に)これ、乳母、一寸あの子の顏を見せておくれ。

乳母　(歔欷しつつ)　お局さま。如何したら好いでございませう。

(新中納言局は無言にて壽王丸の顏を凝視す。次第に烈しき感動の表情を示し來る。)

新中納言局　壽王丸。お前は到頭悲しい戀の犧牲(いけにへ)となつてしまつたのだね。重衡さまにお別れ申してから、お前を重衡さまだと思つて、今日まで寂しく生きてゐたのだよ。額付から目元まで重衡さまそつくりなので、私はお前の顏を見る度毎に、どんなにか樂しかつた時を思ひ出したらう。平家が滅びてしまつても、この戀だけは滅びぬと、

今まで思つてゐたのだけれど、お前が死んでしまつては、もうそんな事も云つてをられぬ。ああ、戀も滅びる時が來たのぢや。

（武士等目と目と見合はせ、狡猾に笑ふ。）

第二の武士　それではこの子は重衡の子なのだな。

第三の武士　それではこの首を持つて往けば、たいした褒美が貰へる譯だ。

新中納言局　（絶望の表情）　もうかうなつたからは、何もかも云つて聽かさう、私は櫻町中納言成範の娘で、新中納言局と云ふものぢや。

第一の武士　（嘲ける如く笑ふ）　それぢやあ重衡がよく通つたと云ふ女だな。

新中納言局　お前達のやうな下司な人に、何で戀などと云ふ事が分らう。（間）　さあ、もうお前達には用はない。早く何處へなりと往くが好い。私はこれからこの哀れな戀の犧牲とともにわが家へ歸るのぢや。

第二の武士　なに、さう聽きやあ平家に由緣の女だ。

第三の武士　さうだ。二人ともふん縛つて連れて往かう。

（武士等二人の女を捕へむとす。一瞬間の爭鬪。）

第一の武士　さうだ。この間にこの首を――

（第一の武士は壽王丸の首級を取り、死骸を谷間に投げ棄つ。阿證坊印西左方より走り出づ。錫杖にて武士等と烈しく鬪ひ、遂に第一の武士より首級を奪ふ。武士等右方に逃げ入る。）

印西　（冷笑）　鎌倉武士と云ふものは、存外弱いものぢや。（錫杖を鳴らしつゝ）　併しこの杖にはかなはぬ筈ぢや。（間）　これは運命の杖だからなあ。（女に）　何處もお怪我はなかつたかな。

新中納言局　難有うございます。別段怪我はございませんでして。（印西を見て）　おお、あなたはお上人樣ではございませんか。

印西　氣懸りでならなかつたから、後を追つて來て見たのぢや。

乳母　お庇蔭で危いところを助かりました。

印西　それにしてもあの子は可哀想な事をしたな。やつと首だけは奪ひ返したが、死骸は谷間へでも投げ込んだかそこら邊には見當らぬやうぢや。（首級を新中納言局に渡す）よく回向をするが好い。

新中納言局　（首級を凝視す）　ああ　さつきまで美しかつた頰の色も、今ではまるで蠟のやうに青ざめてゐる。ああ、さつきまで可哀らしい事を云つた口も、今では堅く閉ぢてゐる。あの小さな靈魂はもう何處かへ往つてしまつたのだらう。（間。急に感動して）　ああ、今目のあたりまざまざと死に向ひ合つて、私は始めて戀よりも大き

なものがあるのを知つたやうな氣がする。ああ、かうやつてゐてさへ胸が裂けるかと思はれる程、暗く冷たいものが私の目の前にあるのぢや。

乳母　(氣遣はしげに)　お局さま——

新中納言局　いつそ私も後を追うて、このまま死んでしまはうか。(間)　いや、いや、私はまだ死ぬ事は出來ぬ。私の胸にはまだ戀の思ひ出が殘つてゐる。さうぢや。私はこれから戀の思ひ出に生きるのぢや。いづれこの首も髑髏となつてしまふであらうが、それでも絶えず身に着けて、見る度毎に思ひ出すのぢや。

乳母　(二度)　お局さま——

新中納言局　併し私はこれから何處へ往つたら好いのであらう。

(印西は瞬きもせずに新中納言局を凝視しゐる。突然烈しく錫杖を鳴らす。)

印西　何を思ひ煩うてゐるのぢや。お前の往くべき道は唯ひとつぢや。

新中納言局　お上人樣。何卒その道を敎へて下さいまし。

印西　すべての過去を忘れてしまふのぢや。さうするには沙門の身とならねばならぬ。

新中納言局　それでは戀の事も忘れてしまふのでござりますか。

印西　無論戀の事などはまづ第一に忘れてしまふのぢや。

新中納言局　如何してそんな事が出來ませう。

印西　併しそれがお前の行くべき唯ひとつの道ぢや。(二度錫杖を鳴らして)これから尼となつて一生を送るのぢや。

新中納言局　(殆んど無意識に)　よろしうございます。尼となるでございませう。

乳母　えつ、尼に——それでは私もご一所に——

印西　うん。幸ひそこに庵室がある。(柴垣に近寄る)　お頼み申す。

尼の聲　(中より)　何かご用でござりますか。

印西　一寸ご庵室の中を拜借いたしたいが——

尼の聲　何卒お關ひなくお入り下さいまし。

印西　(二人の女に)　さあ、あの庵室の中で——直ぐに剃髮せねばならぬ。(獨語の如く)　運命の杖は何時外の道を差すか分らぬからな。

(三人は庵室の中へ入らむとす。山賤二人右方より慌ただしく走り出づ。)

第一の山賤　何てえ騷ぎだ。おれはもう少しで斬られる所だつた。

第二の山賤　ほんとに近頃は危なくつてうつかり歩けやしねえ。

第一の山賤　全くだなあ。平家が滅びてしまつてからと言

ふものは、京はまるで曠野のやうだ。

第二の山賤　おや、ここにも血がこぼれてゐるぜ。

第一の山賤　さあ、またあんな氣狂ひ武士に出會はさないうちに急いで歸らう。

第二の山賤　さうだ。斬られたりしちやあつまらねえ。

（山賤等は左方に走り入る。新中納言局はその言葉を聽きつつ猶ほ柴垣の外に佇みゐる。印西と乳母は庵室の中に入る。黃昏。谷より狹霧立ち始む。）

新中納言局　（獨語）　あの山賤でさへ源氏の者を呪うてゐる。あの人々は平家を滅ぼしたばかりでなく、私の戀までも滅ぼしたのぢや。（間）　あゝ、あのお上人樣は戀の事なんど忘れねばならぬと云はれるけれど、私には如何して戀を忘れる事が出來よう。（間）　さつきはあの錫杖が何だか怖ろしくつて、つい尼となるやうに云つてしまつたのぢや。併しもうかうなる上は仕方がない。尼となつても戀を忘れずに、何か秘法を求めた上で、せめて幻でなりと重衡さまにお目に懸らう。さうして猶源氏の人人を呪うてやるのぢや。（首級を見る）　この首が髑髏となる時分には、何か秘法を求める事が出來るであらう。

乳母の聲　（中より）　お局さま――お局さま――

新中納言局　ああ、乳母があのやうに呼んでゐる。（間）到頭私も尼となるのか。

（鐘の音微かに聽こえ來る。）

新中納言局　ああ、京の寺々では鐘が鳴つてゐる。その響さへ昔とはまるで變つてしまつた。これから私も尼になつてしまへば、日每に鐘の音を聽かなければならないであらう。何だか急に鐘の音が懷かしくなつて來た。（間）ああ、もう黃昏となつてしまつた。まるで私の心のやうに。

（新中納言局は徐かに步みて庵室の中に入らむとす。黃昏の色が次第に迫り來るとともに、狹霧は全く舞臺を包む。鐘の音二度微かに聽こえ來る。）

第二幕

第一場

奈良の大いなる尼寺の廊下。

右方に伽藍の一部現はる。入口の前に凡そ十級程の石段あり。直ちに廊下に接す。その石段の傍に魚板懸れり。

廊下は舞臺を橫斷して左方に到る。屋根、石甃、柱など。

左方に石垣ありて、蘿蔓の枯れたるがその面に匐へり。

小門ありて廊下に接す。

廊下の前後は尼寺の庭。廊下の彼方に大いなる靑銅の

水盤あり。水溢れて流れ落つ。遠く山門及び塔など見ゆ。庭の面には一面に公孫樹の落葉散る。第一幕より殆んど一年を經過す。

秋の終り。午後晩く。

幕明くと同時に、鐘樓守、七兵衛、左方の小門より出づ。三十二三歳。極めて醜き――むしろ怖ろしき容貌、怖る怖る廊下を過ぎて、堂の入口に近寄る。

鐘樓守　まだ勤行はおしめえにならねえのかな。さつきから門の外で待つてゐたが、あんまり遲いので到頭ここまで入つて來たのだ。一體あの門から中へは、男が入つてはいけねえつて掟があるのだが、ついうかうかと入つてしまつた。併し見付かつたら大變だぞ。直ぐこの寺から追ひ出されてしまはなくつちやならねえ。（扉に耳を當てて内部の物音を聽く）まだお經の聲や鉦の音がしてゐるから大丈夫だ。（石段を下りて水盤の傍に來る）今まで一度もこの門から中へ入つた事はなかつたが、何だかまるで違つた世界へ來たやうな氣がするな。公孫樹の落葉の匂ひまでが、何時になく胸に染みて、氣がうつとりしてしまふやうだ。おれは今までこんな心持になつた事はなかつたのだが、二月ばかり前からと云ふものは、如何してこんなに夢でも見てゐるやうになつたのだらう。毎日毎日撞く鐘の數さへ間違へるやうになつてしまつた。（急に狼狽して）や、みんなこつちへやつて來るやうだ。何だか大勢の話し聲が聽こえる。見付かつたら大變だぞ。

（鐘樓守は水盤の蔭に隱る。右方の堂の入口より數人の尼出づ。第一の尼、第二の尼は、第一幕第二場に現はれたる人物なり。廊下の石甃の上に佇む。）

第一の尼　まあ……公孫樹の葉は皆散つて了ひましたね。

第二の尼　ほんとにもう秋も終りなんですね。

第一の尼　こゝに來たのはまだ昨日のやうに思はれるのにもう直き一年になるのですねえ。

第二の尼　あの山であの悲しい事があつてから直ぐですから、もう一年にもなりませうよ。

第一の尼　（右方を見る）如何したんでせう、髑髏尼は――

第二の尼　まあ……あなたまで髑髏尼だなんて――

第一の尼　それでもみんなが髑髏尼と云ふものですから、つい私までさう云ふやうになつてしまつたのですよ。

第二の尼　髑髏尼だなんて誰が云ひ始めたのでせう。何だか氣味が惡いぢやありませんか。

第一の尼　併し私は髑髏尼つて名は好きですよ。

第二の尼　まあ……如何して――

第一の尼　私は髑髏尼つて名を聽くと、あらゆる美しいものが目に見えるやうな氣がするのですよ。

第二の尼　まあ……（微笑して）大變な名ですねえ。

（二人は聲を立てて笑ふ。やがて徐かに左方に入る。）

第三の尼　（二人を見送りつゝ）あのお二人は何時もご一所にいらつしやるのね。

第四の尼　ええ、まるで私達とは話もなさらないのですよ。

第五の尼　時々あの髑髏尼と一所の事がありますね。

第六の尼　さう云へばあの髑髏尼は如何したのでせう。たつた一人であの太い柱の傍に突つ伏してゐたやうですが、まだ出て來ないやうですね。

第七の尼　きつとまた泣いてゐるのですよ。

（沈默。）

第三の尼　公孫樹の葉の散るのが、一日增しに多くなつてゆきますね。

第四の尼　庭は一面に黄いろくなつてしまひました。

第五の尼　何だか大變靜かな夕方ですこと。（間）それに近頃はもう戰の噂もあんまり聽えて來ないやうですね。

第六の尼　何時ぞや東大寺が燒けた時は、ずゐぶん怖かつたぢやありませんか。

第七の尼　あの重衡と云ふ人も、到頭殺されてしまつたさうですよ。佛罰ですね。

（鐘樓守は水盤の蔭より密かに尼寺の方を窺ふ。）

第四の尼　もうあの時から七年になりますね。まだ私がこの寺へ來たばつかりの事でしたから——

第五の尼　ずゐぶんここへも流矢が飛んで來ましたね。まだそこいらの柱にも鏃の痕が殘つてゐますよ。

第六の尼　もうそんな話は止めませう。話を聽いてさへ怖ろしくなります。

第六の尼　ほんとにあまり好い氣持はしませぬ。毎日靜かな時ばかり送つてゐる者は、ちよつとした事にも非常に感じるものですよ。

第七の尼　それに私は近頃何だかあの鐘の音が、急に悲しい響を出すやうになつたと思はれてなりません。

（鐘樓守ぎつくりして思はず全身を現はす。）

第三の尼　あの鐘樓守は近頃何だか樣子が變ですね。

第四の尼　この間もあの鐘樓の石段に腰を懸けて、ぼんやり何か考へてゐるのですよ。さうして時々悲しげに嘆息をしては、何時までも何時までも夕日の方ばかり眺めてゐるのですよ。

第五の尼　如何したんでせうね。私もこの間門の傍で摺違つたら、何だか獨り言を言ひながら、私の方を見て笑つたのですよ。

第六の尼　まあ……氣味が惡い——私はあんなに怖ろしい顏をまだ見た事がありません。

第七の尼　（鐘樓守を認めて）あれえ……あすこにあの鐘

樓守が――

（尼等一時に鐘樓守の方を見る。鐘樓守は誘惑せらるる如く尼等に近寄る。）

鐘樓守　（殆んど本能的に）　おい、あの何時でも髑髏を持つてゐる尼さんは、まだここへやつて來ねえのか。（間）あの何時でも髑髏を持つてゐる尼さんは――

尼等　（同時に）　あれえ……

（尼等は恐怖に打たれて、追はるゝ如く左方に入る。鐘樓守は悲しげに左方を凝視す。長き間。）

鐘樓守　如何してみんなおれの顏を見ると、あんなに逃げてしまふのだらう。おれはそんなに怖ろしい顏をしてゐるのかなあ。（間）　おれは子供の時分から、まだ一度も鏡に向つて、自分の顏を見た事がねえんだ。おれのお母はお前は決して自分の顏を見るなと、何時もおれに云つてゐたが、おれはまだその言葉を忘れねえでゐるのだ。うつかり自分の顏が映るといけねえと思ふものだから、池の傍にも近寄らねえでゐた位だ。そんな事を聽いてゐたからおれはまるで人にも會はずに、かうやつて今日まで鐘樓守をして來たのだが、何故だかこの頃ぢやあ自分の顏が見たくつてならねえ。時々關はねえから水にでも映して見ようかと思ふが、何だか怖ろしいやうな氣がして止めてしまつたのだ。（水盤に近付く）　併し今日は如何しても見ずにやあゐられねえ。あんなにみんなが逃げるのは、きつとおれが怖ろしい顏をしてゐるのに違えねえ。（顏を映さむとして躊躇す）　もしおれの思つてゐるやうな怖しい顏だつたら如何しよう。さうしたらやつぱりあの髑髏を持つた尼さんだつて、きつとおれの顏を見て逃げ出すだらう。さうしておれもこれからどんなに悲しい思をするかも知れやしねえのだ。いつそ見ずにゐた方が好いかも知れねえ。（二三步水盤より離る間）　それでも何だか今日は、如何しても見ずにはゐられねえやうな氣がするな。思ひ切つて見てしまはうか。（夢幻の境にあるものの如く）生れてからまだ一度も見た事がねえのだ。生れてからまだ一度も見た事がねえのだ。（怖る怖る水盤の上に顏を差し出す。極めて深刻なる凝視。長き間。水盤の緣を掴みたるまま次第に烈しく戰慄す）　これがおれの顏なのか。何てえ怖ろしい顏なんだらう。まるで獸のやうな顏だ。自分が見てさへこんなに怖ろしいと思ふのだから、人が見たらどんなに怖ろしく思ふか分らねえ。唯怖ろしいばかりぢやねえ。かうやつてぢつと凝視めてゐると、何だか今まで知らなかつた悲哀が、あの額の邊から湧いて來るやうな氣がするのだ。ああ、自分の目がまるで呪ふやうに自分を睨み付けてゐる。ああ、もう見てゐる事も出來ねえ。（失神せる如くに水盤を離る。間）

ああ、到頭おれは見てしまつた。生れてから始めておれは自分の顏を見たのだ。お母が見るなと云つたのも無理はねえ。おれがこんな怖ろしい顏だと云ふ事を、もし早くから知つてゐたならば、とても今日まで生きてはゐなかつたのだ。もう疾うに死んでしまつてゐたらう。さうだ。ほんとに死んでしまつた方が餘つ程好い。これぢやあみんなおれの顏を見て逃げるのも當り前だ。（間）あの髑髏を持つた尼さんもやつぱりおれの顏を見て逃げるだらうなあ。さうすりやあおれはもう生きてゐる甲斐もねえと云ふもんだ。（狂ほしげに）ああ、おれはこれから如何したら好いのだ、こんな怖ろしい顏をしてゐちやあ、たとへあの髑髏を持つた尼さんに、おれの心を打ち明けたところで、如何しておれの願を聽いてくれるもんぢやあねえ。（絕望の調子）ああ、おれは何故こんな怖ろしい顏に生れたんだらう。ああ、おれは何故こんな怖ろしい顏に生れたんだらう。

（鐘樓守は二度水盤に近付きてその顏を映す。長き間。遂に倒るゝが如く地上に伏し、烈しく身を顫はせて泣く。公孫樹の葉頻りに散る。）

第　二　場

同じ尼寺の堂の內部。極めて太き圓柱數本並び立つ。中央に極めて大いなる香爐あり。青き煙り緩やかに立ち昇りて、異薫堂の內部に滿つ。柱には幢幡懸りて、微かに風に動く。奥及び左右はすべて暗黑。何處よりともなく、薄明しめやかに差し來りて、舞臺の一隅を照らすのみ。

太き圓柱の傍の薄明の落つるところに、髑髏尼唯一人坐す。新中納言局の剃髮して尼となれるものなり。その前に一個の小さき髑髏を置きあり。寂寞。やがて微かに髑髏尼の嗟嘆の聲聽こえ來る。

髑髏尼　また夜が來ると見えて、お堂の中がもう大分暗くなつた。もうみんなは往つてしまつたのか知ら——暗いのでよくは見えないけれど、如何やらお堂の中には誰もゐなくなつたやうぢや。（間）何處からともなく差して來る薄明が、今日は何だかいつもより悲しく思はれてならない。ほんとにあの薄明は、一體何處から差して來るのであらう。あんな高い天井の上には窓も開いてゐないのに、如何してあんなに外の光が差し込んで來るのやら——ひよつとしたら何時か戰があつたと云ふ時に、鏑矢の當つた穴の痕で、だんだん大きくなつたところがあるのかも知れぬ。ああ、戰と云へばまた昔の事が思ひ出されて、夢のやうに送つてゐた時分の有樣が、まざまざと

目の前に現はれて來る。(間) 始めて重衡さまにお目に懸つたのは、あれは何時の事であつたらう。何でも春ももう終る時分の事であつた。李の花が一面に咲いてゐる庭で、夕方から夜になるまでいろいろの話をしたのが、あれが始めてであつた事と思ふが、あの時分の事はみんな夢のやうな氣がして、はつきり覺えてゐる事はひとつもない。(間) ああ、もう夜になると見えて、あの薄明もだんだん消えてゆく。それに引き代へて私の悲哀は、だんだん增してゆくばかりで、何時消えるとも分らないのぢや。さうは云ふものの今日までかうやつて、一人寂しく生きて來たと云ふのも、みんなこの悲哀があるばかりだつた。昔は戀が生命だつたやうに、今は悲哀が生命となつた。一人靜かにこの太い圓柱の傍に坐つて、熱い涙を流す時だけ私は生きてゐるやうな心持がする。(間) 時々は京の事を思ひ出すけれど、それとても今ではもう大抵忘れてしまつた。加茂川がどんなに流れてゐたやら、淸水の鐘がどんなに響いてゐたやら、今では蓬の香よりもはかなく胸に殘つてゐるばかりぢや。(稍長き間) ああ、併しあの重衡さまの事ばかりは、如何しても忘れる事が出來ない。かうやつてこの尼寺に入つてからも、一日でも忘れた事がない。何時も勤行の濟んだ後で、たつた一人でかうやつてゐるが、その時程いろいろの事を思ひ出す時はないのぢや。重衡さまの事を思ひ出す時もある。または壽王丸の事を思ひ出す時もある。それらの人人を思ひ出す度每に、私は平家の滅びた事を悲しまなくてはならぬのぢや。

(薄明全く差さずなる。舞臺殆んど暗黑。堂守の尼左方より出づ。乳母汐路の剃髮して尼となれるものなり。手に燭を携へ音なく步みて髑髏尼の傍に來る。)

堂守の尼　お局さま——(急に氣付きて)ご免下さいまし。ついうつかり昔のやうにお呼び申してしまひました。(間) さあ、もう大抵祕法も分りましたから、今夜試しに行うて見ようではございませんか。

髑髏尼　おお、私もさう思つてゐたところぢや。丁度お堂に誰もをらぬ。(間) さあ、先づ第一に燈火を點けるのぢや。

堂守の尼　よろしうございます。さうして燭臺の數は——

髑髏尼　四つぢや。

(堂守の尼左方より燭臺を運び、黃蠟に火を點ず。舞臺稍明るし。)

堂守の尼　次は甕でございますね。(髑髏尼頷く) さうしてその甕の數は——

髑髏尼　それも四つぢや。

(堂守の尼左方より甕を運び燭臺の傍に置く。)

堂守の尼　（甕を差し示しつゝ）これが蛇の甕でござりまする。（間）これが蜥蜴の甕でござりまする。（間）これが蝎の甕でござりまする。（間）これが守宮の甕でござりまする。

髑髏尼　もうこれで好いのぢや。お前はあちらへ往つてゐるが好い。

堂守の尼　それでは試してご覽なさいまし。幻は多分現はれるだらうと存じますよ。（獨語の如く）どんな幻が現はれますか――

（堂守の尼は徐かに左方へ入る。髑髏尼の顏には凄慘なる表情現はる。動作言語等稍狂ほし。）

髑髏尼　だが、黄蠟の光はなんて美しいのだらう。併しこのお堂の中をすつかり照らす事は出來ないで、まるで闇の中に咲いてゐる月見草のやうに、高く燃え立つてゐるばかりぢや。闇と光との間には、まるで黄昏のやうな色が漂つてゐて、灯が瞬く度毎に、これがまるで波のやうに顫へる――（やや長き間）だが、私は今こんな事を云つてゐる時ではない。これから大事な仕事を始めなければならないのぢや。（髑髏を取り上ぐ）髑髏よ。お前はこの四つの甕の油を注ぎ懸けた時、きつと幻を見せてくれるだらうね。

（髑髏尼は四つの甕の油を髑髏の上に注ぐ。突然風烈しく吹き出づ。幢幡は旗の如く飜へり、燭臺の火一時に滅す。舞臺全く暗黒。稍ありて青き光舞臺の一隅より差し來る。髑髏尼は死骸の如くこの光の中に倒れ伏したり。重く冷たき聲ありて、暗中より髑髏尼を呼ぶ。）

暗中の聲　髑髏尼――髑髏尼――

髑髏尼　（驚きて目覺む）誰だらう、私を呼んでゐるのは。（間）つひぞ聽いた事のない聲ぢや。

暗中の聲　髑髏尼――

髑髏尼　（起き上がる）たしかに髑髏尼と呼んでゐるが、誰であるかまるで分らぬ。髑髏尼などと呼ぶ者はあまりないのに、誰があのやうに呼ぶのであらう。

（この時堂の一隅に死の姿朦朧と現はれる。髑髏尼驚きて倒れむとす。）

死　（冷やかに笑ふ）何もそんなに驚く事はない。今わしがお前を呼んだのぢや。

髑髏尼　まあ……何と云ふ怖しい姿をしてゐるのだらう。一體お前は誰なのぢや。

死　わしは死ぢや。少しお前に用があつてやつて來たのぢや。まあ、もつと氣を落ち着けるが好い。わしは別段怖ろしい者でも何でもない。誰しも人間と生れたからは、一度はわしの手に觸れねばならぬのぢや。

髑髏尼　さうして私に用があると云ふのは――

死　まあ、何もさう心に懸ける事はない。(間) 併し今はお前は何故その髑髏に、蛇や蝎の油を注いだのだ。

髑髏尼　死んだ人々に會ふ爲めに――

死　唯それだけの願なのか。(間) おれの事を考へたあげくに、思ひ煩うての事ではなかつたのだな。

髑髏尼　おれの事とは――

死　(もどかしげに) 死の事ぢや。(間) お前はおれを美しいと思つてゐるのか、また醜いと思つてゐるのか。

髑髏尼　私は美しいと思つてゐる。

死　さうか。よし、よし。(間) それではお前にこれからこの美しいものゝ幻を見せてやらう。併しこの幻を見た者は、一時間と經たぬうちに、みんな戀の爲めに死んでしまふのぢや。

髑髏尼　(笑ふ) 何で尼寺の中に戀があらう。(間) 私はいつそ戀の爲めに死ぬをうれしいと思つてゐる位ぢや。

死　いや、いや、尼寺の中にも戀はある。(間) さあ、幻が大事ぢや。(强く) その髑髏を凝視めながらいろいろの人を思ひ出すが好い。

(死は圓柱に凭りて立つ。靑き光は次第に白き光に變ず。第一幕の第一場にて白痴が歌へると同じ調子の歌微かに聽こえ來る。次第に近付く。數十人の合唱なり。幽鬼の群の泣き叫ぶかと疑はる。)

幻の歌

髑髏、髑髏、されかうべ。
悲哀の湧くと云ふ、
古甕を轉がして、
轉がして誰が來た。
地獄で花も泣くであろ。
平家の人も泣くであろ。

(髑髏尼は思はずその歌の聽ゆる方へ二三歩歩む。)

髑髏尼　おお、あの歌は京でよく聽いた歌ぢや。誰があの歌を歌つてゐるのであらう。

(二度歌の聲聽こゆ。極めて近し。この歌の間に、一群の幻の人々白き光の中に現はる。すべて骸骨の人々なり。二三の人々は骸骨の馬に跨る。長刀を持てるものあり。鎗を持てるものあり。最後に赤き旗を持てる一個の骸骨ありてその列を終る。蹄の音。武器の音。)

幻の歌

髑髏、髑髏、されかうべ。
薊さへ花が咲く。
世の中がなんとして、
なんとして恨めしい。

地獄で花も泣くであろ。
平家の人も泣くであろ。

（一群の幻の人々は唯白き光の中を通過するのみ。その間髑髏尼は叫び續く。）

髑髏尼　おお、みんな平家の一門の方々ぢや。（間）おお、あすこにをらるるは知盛さまぢや。（間）おお、教經さまも、忠度さまも、みんな馬に跨がつて往かれた。（間）おお、あれはたしかに維盛さまぢや。徒歩ではさぞお疲れになつた事であらう。（間）あれ、あれ、あのやうに鯨波の聲を作つてゐる。こんなに大勢の軍兵を率ゐて、みんな何處へ往かれるのであらう。黄泉には戰もあるまいに——（突然幻に向ひて走らんとす。足動かず）おお、あすこに重衡さまが——昔と變らぬお姿ぢや。逞ましい馬に跨がつて、美しい鎧をお着けになつたあのお姿を、如何して忘れてよいものか。（間）重衡さま、何卒もう一度還つて來て下さいまし。たつた一目でよろしうございますから、お目に懸らせて下さいまし。（間）おお、赤い旗が往く——旗竿は血だらけぢや。

（白き光は二度青き光に變ず。幻の人々消え去る。）

死　あれがお前の目に何と見えた。

髑髏尼　みんな平家の一門の方々ぢや。

死　いや、そのやうな事を聴いてゐるのではない。あれがみんな骸骨には、お前の目には映らなかつたらう。あの馬も骸骨ぢや。

髑髏尼　なに——骸骨——

死　（高く笑ふ）これから一時間も經たぬうちに、お前もあんな姿になるのぢや。

（死、消え去る、舞臺突然暗黒となる。微かに歌の聲聽ゆ。）

幻の歌

髑髏、髑髏、されかうべ。
蛇にさへ戀がある、
世の中がなんとして、
なんとして呪はしい。
地獄で花も泣くであろ。
平家の人も泣くであろ。

（何處よりともなく、月光悲しげに差し來る。風吹きて頻りに幢幡を動かす。）

髑髏尼　（目覺めたる如く）おお、今のはすべて幻だつたか。怖ろしい幻を見たものぢや。（間）黄蠟の火は消えてしまつたが、幸ひ月の光が差して來てゐる。（間）さ

あ、もう往かう。尼達が待つてゐるから——

(風の音、月光青く髑髏尼の顔を照らす。徐かに右方に向ひて歩む。)

第　三　場

第一場と同じ舞臺面。

月夜。水盤の水は銀(しろがね)の如く光り、溢れ落つる音高く聽こえ始む。

風烈しく吹きて、公孫樹の葉夥しく散る。

鐘樓守は水盤の傍(かたはら)に横たはる。第一場の終りと同じ位置。

鐘樓守　(突然面を上ぐ)　何時まで待つてもやつて來ねえなあ。お堂の中で一體何をしてゐるのだらう。いつその事お堂の中まで入つて往つて見ようか。(間)　いや、そんな事をしちやあいけねえ。もう直き出て來るだらうから、それまでここで待つてゐよう。(突然起き上りて右方を窺ふ)や、誰かこつちへやつて來るやうだ。

(鐘樓守は慌ただしく水盤の蔭に隱る。堂守の尼右方より出づ。)

堂守の尼　(廊下に佇む)　好い月夜になつてしまつた。こんな晩は何だか昔の事が思ひ出されてならぬ。お局さまは尼とおなりになつてからも、絶えず昔の事ばかり思ひ出していらつしやるご樣子だが、そんなに戀と云ふ事は忘れられないものだらうか。(間)　あの幻を見る祕法は何處の誰が教へたのやら——(急に思ひ付きたる如く)おお私は見廻りの役をすつかり忘れてゐた。

(堂守の尼は左方に入る。鐘樓守は水盤の蔭より現はる。)

鐘樓守　何だ。堂守の尼だつたのか。(右方の入口に近寄りて中を覗く)如何したんだらう、あの髑髏を持つた尼さんは。何時まで待つても出て來ねえんだなあ。

(この時中より髑髏尼の聲聽ゆ。)

髑髏尼の聲　そこにゐるのは誰ぢや。

(鐘樓守は立ち竦みたる如くなりしが、直ちに身を翻へして水盤の蔭に隱る。殆んど同時に髑髏尼の姿右方の石段の上に現はる。)

髑髏尼　誰だかそこにゐたやうだつたが——何處へ往つてしまつたのだらう。(周邊(あたり)を見廻しつつ石段を下る)　ああ、まだあの歌が聽こえるやうな氣がする。まだあの鯨波の聲が聽こえるやうな氣がする。ほんとにあれはみんな昔のお姿と少しも變つてゐぬやうに見えた。とりわけ重衡さまなぞは昔のやうに勇ましいお姿で、馬も見覺えのある連錢葦毛だつた。(間)　まあ、何と云ふ美しい月夜なのだらう。こんな月夜にはきつと重衡さまと一所に過

ごしたものだが、今ではこんな尼寺でたつた一人で過さねばならない。ああ、だんだん風が烈しくなつた。これではあの公孫樹の葉も、一夜(ひとよ)で散り盡くしてしまふであらう。(次第に左方に歩む) 併し今幻で見たあの死から聽いた言葉の中で、如何も心懸りでならぬ事がある。あの幻を見た者は、一時間經たぬうちに死ぬと云つたが、あれはほんとの事だらうか。今となつてはあの幻が怖ろしくなつた。

(左方より去らんとする時、鐘樓守二度水盤の蔭より現はれ髑髏尼の傍(かたはら)に近寄る。)

鐘樓守 (叫ぶ) 一寸待つてくれ。おれはお前にお願があるんだ。

髑髏尼 (驚く) あれえ……

(髑髏尼は逃げんとす。鐘樓守はその腕を堅く握りて離さず。)

鐘樓守 何も怖いこたあねえ。おれは鐘樓守の七兵衛だよ。

髑髏尼 (氣付く) おお、さう云へばお前は鐘樓守だね。

鐘樓守 うん。この鐘樓守の七兵衛が、お前に一生のお願があるんだ。

髑髏尼 えつ……一生のお願とは――

鐘樓守 ほんとにお前がこの願をかなへてさへくれりやあ、おれはもう生命を棄てても關はねえ。

髑髏尼 ええ……

鐘樓守 おれはこの事をお前に云はうか云ふまいかと思つて、どの位迷つたか知れねえんだ。おれはほんとに死ぬやうな苦痛(くるしみ)をしたのだぜ。毎日々々その事ばかりを考へて、自分でも體の瘦せるのが分る位だつた。ほんとに近頃は夜もろくろく眠つたこたありやあしねえ。たまにうとうと眠つたかと思ふと、直ぐ魘されて目を覺ましてしまふのだ。(悲しげに) 併しお前はおれが何故こんなに苦しんでゐるか知らねえだらう。お前はおれの撞く鐘の音が、近頃急に弱つたと云ふ事さへ知らねえだらう。

髑髏尼 さあ、その一生の願と云ふのは――

鐘樓守 それを聽いたらお前はきつと驚くに違ひねえ。さうしてきつと厭だと云ふに違ひねえ。(間) ああ、おれは何故さつき自分の顏を見たのだらう。おれは生れてから始めて自分の顏を見たのだ。さうしてもうこの願をお前に云ふ力もなくなつてしまつたのだ。さつきはほんとに死なうと思つたよ。(間) ああ、併しおれは如何しても死ねねえ。お前にこの願をかなへて貰ふまでは如何しても死ねねえ。

髑髏尼 (身を跪きつつ) さあ、早くその一生の願とやらを云つておくれ。(叫ぶ) この手を離して――この手を離して――

鐘樓守　その手を離したらお前はあつちへ逃げて往くだらう。(間)まあ、もうすこしおれの云ふ事を聽いてくれ。おれは今までたつた一人で暮らして來たのだ。親もなければ女房もねえ體だ。考へて見れば三十幾年の間よくたつた一人で暮らして來たと思ふが、それでもこの間までは寂しいとも何とも思つてゐなかつたのだ。それが如何してだか急に寂しくつてたまらなくなり出したのだ。近頃ぢやあ一人であの鐘樓の石段を上る時なぞは、涙がこぼれるやうな心持がして仕方がねえ。

髑髏尼　そんな事よりも早くその願つて云ふ事を――

鐘樓守　(聽かざるものの如く)　如何しておれがそんなになつたかお前に分るかい。(間)　そりやあお前には分らねえと思ふよ。併しこんな事をくどくど云つてゐても仕方がねえ。おれはもうすつかりお前に云つてしまはう。(間。强く)　おれはお前に惚れてゐるのだ。

髑髏尼　ええ…

鐘樓守　何もそんなに驚くこたあねえ。(間)　何時だかよく覺えてゐないが、まだ夏の事だつた。お前はやつぱりたつた一人でお堂に殘つてゐたと見えて、もう日が暮れかかる時分にあの鐘樓の傍を通つた事があつたらう。あの時おれは丁度鐘を撞き終つて、石段を下りようとするところだつたが、お前の姿を見るといきなりそこに立ち竦んでしまつたのだ。さうだ。お前はその時もやつぱりその髑髏を手に持つてゐたな。さうしてぢつとその髑髏ばかり凝視めてゐて、おれにはまるで氣が付かなかつたやうだつたな。(嫉妬を感ずるものの如く)　一體その髑髏は誰の髑髏なのだ。

髑髏尼　まあ…なんて怖ろしい――この髑髏の事なぞは聽かずにゐておくれ。

鐘樓守　何だ。誰の髑髏だか云ふこたあ出來ねえのか。(嘲ける如く)ふん、何時でもお前はその髑髏を手から離したこたあねえな。それだからみんなお前の事を髑髏尼つて云つてゐるんだ。(狂暴なる表情)　さあ、そんな髑髏は早く棄てつちまへ。さうしておれと一所にこの尼寺から逃げてくれ。

髑髏尼　まあ…如何してそんな事が――

鐘樓守　出來ねえと云ふのか(憤怒の情を壓し付けつつ)　おれが一生のお願と云ふのはこの事なのだ。何卒お願だからおれと一所にこの尼寺から逃げてくれ。さうして何處かへ往かう。(間)　さうだ。京へ往かう。こんな奈良なんぞにゐたつて仕方がねえ。京にはおれはまだ一度も往つた事はねえが、あすこへ往けばおれ達は、きつと幸福な日を送れるだらう。

髑髏尼　なに、京へ往く――(稍憤怒と恥辱を感じつつ)

誰が卑しい鐘樓守風情と京へ往かう。

鐘樓守　（感情勃發す）　何だと――それぢやあ如何しても
おれの頭を聽いてはくれないのだな。

髑髏尼　さあ、早くこの手を離しておくれ。

鐘樓守　（二度くづをれたる樣子）　さあ、そんな事を云はねえで、何卒おれと一所にこの尼寺から逃げてくれ。さあ、おれと一所にこの尼寺から――

髑髏尼　（戰慄しつゝ）　尼寺から――（髑髏を凝視す）　如何してそんな事が出來るものか――

鐘樓守　そんな髑髏を持つてゐるから、おれの云ふ事を聽いてくれねえのだらう。さあ、早くそんな髑髏は棄てつちまへ。

（二人は髑髏を爭ふ。鐘樓守の顏には次第に殘忍なる表情現はれ來る。髑髏尼の逃ぐるを追うて、水盤の周圍を走り廻る。）

髑髏尼　（叫ぶ）　誰か……誰か……助けて……

鐘樓守　（殆んど意識を失ひて）　さあ、そんな髑髏は早く棄てつちまへ。（間）　さうしておれと一所にこの尼寺から逃げてくれ。

（髑髏尼は魚板に氣付く。髑髏にて烈しく魚板を敲く。その響き高く聽ゆると同時に、髑髏は碎けて散亂す。）

髑髏尼　（悲しげに）　あつ、髑髏も碎けてしまつた。

鐘樓守　（髑髏の碎けしも知らず）　さあ、そんな髑髏は早く棄てつちまへ。

髑髏尼　ああ、これでみんな滅びてしまつた。（泣く）

鐘樓守　さあ、早くこの尼寺から逃げよう。さあ、早く――

（鐘樓守は髑髏尼の手を取りて、右方に拉せむとす。髑髏尼烈しく鐘樓守の胸を打ち、極めて感傷的に泣く）

鐘樓守　お前は如何してもおれと一所に逃げてくれねえのだな。（殘忍に笑ふ）　よし、それぢやあおれと一所に死んでくれ。

（鐘樓守は狂へるが如く髑髏尼に飛び懸かる。怖ろしき一瞬間。鐘樓守は二度殘忍に笑ひたる後、髑髏尼を引き摺りつつ石段を上りて右方に入る。舞臺空虛。長き間。堂守の尼、及び第一の尼と第二の尼左方より出づ。）

第一の尼　今誰だか魚板を鳴らしたやうですね。

第二の尼　如何したでんせう。誰が鳴らしたんでせう。

堂守の尼　（獨語の如く）　ひよつとすると大變な事が、お堂の中にあつたのぢやないだらうか。

（この時右方の戸の中にて髑髏尼の悲鳴聽ゆ。三人の尼一時に恐怖を感じて沈默す。やや長き間。右方の入口に鐘樓守の姿現はる。尼等に氣付かず蹌踉として石段を下る。）

鐘樓守　（夢見る人の如く）　この手があの柔かい咽喉にからみ付いたのだ。（兩手を見る）　おれは何處までも一所に往く——何處までも——（左方に歩む）　さうだ。早くおれも死なう。あの鐘樓の上で——

（鐘樓守は廊下の柱などに突き當りつゝ、狂ほしく左方に入る。堂守の尼は徐かに右方の戶口に入る。二人の尼は怖る怖る堂の中を覗き込む。長い間、堂守の尼出で來りて二人の尼に囁く。三人の尼歔欷しつゝ地上に倒れ伏す。風烈しく吹きて魚板を動かす。公孫樹の葉月光の中を渦卷きて飛ぶ。）

鳥羽港漂流奇譚（三幕）

人物

出崎の藤内　釣針鍛冶

藤　助　藤内の悴

おその　藤助の妹

吉　野　下田の遊女

六　藏　船大工

日和見の松　乞食

玄　黄　渡唐の僧

杉原半太夫　役人

老いたる牢番

其他、駕籠舁、捕手、船頭、及び南蠻國の獄吏等出づ。

場　所

伊勢の國、鳥羽

時　代

寛永の末年

第一幕

第一場

伊勢の國鳥羽の街盡頭にある、釣針鍛冶出崎の藤内の家。

舞臺の中央に粗末なる家あり。藁葺と貝殼の屋根と。上手は煤けたる障子。その障子の奥に一間あり。障子を開くるとこの間の正面の竹窓より、遠く鳥羽の港の一部見ゆ。

正面は荒壁、中央に暖簾口、上手寄りに佛壇戸棚など。また片隅に古き枕屏風などあり。下手寄に釣針を入れたる箱。多くの抽斗の表には釣針の名を書きたる紙札を貼る。

下手一段低きところに仕事場あり。小さき鞴、其他釣針鍛冶に必要なる道具を置く。軒に『釣針鍛冶藤内』と書きたる木札を懸ぐ。

家の上手に遠く伊勢の海見ゆ。下手は直ちに鳥羽の街に續く。

秋の終りに近き頃。静かなる日の午後。

おその、座敷に坐りゐる。藤内の娘。十八歳位の美しき女。六藏、椽に腰懸けゐる。船大工。二十四五歳の若き男。

六藏　それはさうと、おそのさん。お前の兄の藤助どのは、この頃一體如何したものだ。あれ程商賣に精出した男が、何もせずにのらりくらりと、怠け放題怠けてゐるのは、何か仔細が無うてはかなはぬ。

おその　それに付いては私とても、心を痛めてをりますが、何を云うても默つてゐる故、さつぱり譯が分りませぬ。それと云ふのもこの正月、神戸屋様の持船の仕合丸が出た時、皆の留めるのも聽き入れずに、江戸へ往つて來てからのこと。

六藏　(思ひ出したやうに)　あの仕合丸を造るには、私も一骨折つたものだ。船大工の仲間でも誰一人、あのやうな大船を手懸けた者がなく、先づ土臺骨を据ゑるにも、如何して好いか分らぬ有様。出來上るまでの苦勞と云つたら、そりや並大抵のことではなかつた。

おその　(頷きて)　おほ、さうでござんしたらうなあ。好く父さんの云はれるには、釣針一つ打つさへ、人に云はれぬ苦勞がある。一心籠れば餌はなくとも、魚は自ら針に懸る。何ごともすべてさうぢやとのこと。まして多くの人を乘せ、荒海を往く船のこと故、それを造る身の苦勞は、人一倍でござんせう。

六藏　あんな大船を造らずとも、結構商賣が出來るものを、あの神戸屋の若旦那傳吉様の生物識から、役にも立たぬ大船を造ることになつたのだ。あれが何で仕合丸。(氣付きて)　おお、そなたの前で傳吉様の惡口云ふのは禁物だつたのう。(笑ふ)

おその　(顔を赧めて)　六藏どの。何を云はしやんすぞいの。傳吉様はこの鳥羽でも指折りの物持、あの神戸屋の若旦那。私は釣針鍛冶の娘。思ふだけが無駄でござんす。

六藏　さう云ふからはそなたはやつぱり、あの傳吉様を思うてゐるのだな。(間)　隱しても隱されぬ今の言葉。そんならそなたを喜ばすことがある。あの傳吉様もやつぱりそなたを、思うてゐられると云ふ噂だ。

おその　(喜ばしげに)　それは誠のことでござんすかえ。(間)　いや、いや、何であの傳吉様が、私のやうな者を思はさんせうぞ。そのやうな嘘を云うて、そなたは私を嬲らつしやるのぢや。

六藏　何で私がそなたを嬲らう。もし嘘だと思ふなら、直直傳吉様に會つた上で、心のたけを云ふが好い。

おその　何でそのやうな耻かしいことが。

六藏　(笑ふ)　出來ないと云ふのか。そこらはやつぱり女だなあ。(間)　しかし會ひたけりや二見の茶屋へ、大抵毎日往つてゐなさるから、あそこへ往けば何時でも會へるぜ。

おその　（不思議さうに）何しに毎日二見の茶屋に。（間）好い娘でもゐるのでござんすかえ。
六藏　何の娘なんどゐるものか。仕合丸の後で造つた、あれより大きな龍神丸。（四邊を見廻して）御法度破りの三本檣、こいつを外海へ乘り出さうと、日和と潮の工合を見る爲め、毎日あすこに往きなさるのさ。
おその　（驚く）それでは天下の御法度を。
六藏　（制して）これ、そなただから云つたのだ。こいつは誰にも內密だぜ。（立ち上りて）それでは藤助どのが戻つたら、急な用事で私が來たと、好う云うて置いて下され。
（六藏、下手に入る。おそのは何ごとか考へてゐる。風の音。）
（藤助、上手より出づ。おそのの兄。二十六歲。物思ひに沈みゐる。うかうかとわが家の前に來る。）
おその　（藤助を見て）もし、兄さん。
藤助　（面を上げて）おお、おそのか。
（藤助は惱ましげに椽に腰懸く。）
おその　（心配さうに）兄さん、お前は如何かしやしやんしたのかえ。見れば顏も靑ざめて、髮も亂れてゐやしやんすぞえ。（間）江戸に往かれた前と變り、戻られてからのお前の樣子、私はとんと合點がゆかぬ。毎日悲しさうなお前の顏を、見るさへ胸が塞がつて、そのやうに苦勞があるものなら、何故現在の妹の私に、打ち明けて下さんせぬと、そればつかり恨みでござんす。
藤助　（悲しげに）妹であらうが親であらうが、云はれぬことが世にはある。しかし折角尋ねて吳れたこと故、そなたばかりに打ち明けよう。（間）思へば今年の正月の末、仕合丸の新艘下しも、目出度濟んで初船出。江戸へ往くのを幸ひに、人の留めるのも聽かずして、神戸屋の旦那樣にお賴み申し、無理にも乘せて貰うたは、日頃の望を遂げるため、（間）とかう云うたばかりでは分るまいが、これには些と譯のあること。
おその　おお、その譯を聽かして下さんせ。
藤助　（頷きて）あの神戸屋の若旦那傳吉樣はこの鳥羽でも一番物を識られた方ぢや。それと云ふのも元はと云へば、傳吉樣は神戸屋の御養子。生みの親は藤堂家の水軍の中でも名ありし武士、そなたや私の父さんとも、同じ御家中の方なのぢや。
おその　（呟くやうに）そのやうなこととは少しも知らずに。
藤助　（氣付かずして）それゆゑ私も御昵懇になり、隙さへあればいろいろと、話を聽かせて貰うてゐたが、いやもう却々深い學問。いつも私に向はれては、このやうな

鳥羽なぞに、引つ込んでゐては仕方がない。何ごとも海を越えて、外に出でねばようは分らぬ。先づ江戸へ往け江戸へ往けと、口癖のやうに云はれたのぢや。

おその　（稍憧憬の調子にて）そりや江戸と云ふところは、將軍樣のお膝元故、繁華な都でござんせう。それに引き代へこの鳥羽は、見る影もない港街、船の出入りのある度に、諸國の噂を聽くばかり。傳吉樣のおつしやることは、そりや道理ではござんせぬか。

藤助　私も道理ぢやと思うた故、成程この鳥羽なぞに、何時までもゐても仕方があるまい。こりやもういつそ江戸へ出て、浮世の學問をせうと思ひ、それで無理にも仕合丸の、上乘（うはのり）にして貰うたのぢや。

おその　それが何でまた一年も、經たぬうちに戻らさんした。

藤助　（夢見る如き眼差にて）　遠江灘相摸灘無事に越して江戸に着き、見れば聽きしにまさる繁昌。わけても日本橋のあたりと云へば、商ひの店が軒を並べ、槍を持つた奴も往けば、風呂敷背負つた丁稚も往く。諸國のお大名の參勤交代、制止の聲が空に響いて、そりやとても言葉には、盡されぬ程の賑はしさぢや。（悲しげに）　しかしのう、私は直ぐにその江戸が厭になつてしまうたのぢや。

おその　（訝かしげに）　はて、それは如何して厭になつたのでござんす。

藤助　さあ、厭になつたと云ふ譯は、外でもないこの私には、江戸よりももつと好いところがあると思はれて來たのぢや。

おその　江戸よりも好いところが、外にあるでござんせうか。それは一體何處でござんす。

藤助　（稍力強く）　それは何處とも分らぬが、あることだけは確かなのぢや。或は日本の中ではなく、天竺呂宋の果かも知れねど、私は如何あつてもそこに往き、天晴藤助は出來した奴と、多くの人からも云はれたい。

おその　（驚きて）　これ、兄さん。それならお前は御法度を破つてまでも往く氣なのかえ。

藤助　なに、御法度。（笑ふ）　何が天下の御法度ぢや。

おその　それでも今から十年程前に、出た御法度で日本の者が、異國へ往くのを留めてあるのに、話なりともそのやうなことを云うては大事ぢやぞえ。

藤助　（頷きて）　大事なことはよう知つてゐる。（しんみりと）しかし私はそのことを考へると、かうやつてこの鳥羽なぞに、引つ込んでゐることが、堪へられぬ程苦しいのぢや。我等も根から釣針鍛冶の家に生れた者ではないし。父の一徹からこのやうなところに埋れてゐるもの

の、元は名だたる武士の末。(間) 今日も今日とてこの向うの海に臨んだ岩の上で、悲しいことばかり考へてゐたのぢや。(上手を指差す)

おその　(悲しげに) もうそのやうなこと云うて下さんすな。何時までもこのやうなところに埋れてゐると云ふ譯でもなし。いづれ世に出られる時もござんせう。

藤助　いや、いや、さう云ふ時は却々あるまい。

おその　(思ひ付いて) いいえ、兄さん、そりやあるぞえ。

藤助　なに、あるとは。

おその　先き船大工の六藏どの、ここに來ての話では、傳吉樣は近々のうちに、今度造つた龍神丸で、何處ぞへ船出をなさるとのこと。さう云ふお心と聽く上はもう私は留めませぬ。もう一度傳吉樣にお願ひ申し、立派な者になつて來て下され。(間) おおそれにまたあの六藏どのが、何か急な用事があると云うてゐました。

藤助　六藏どのの用事とは何であらう。(考へて) 龍神丸が船出をすると云ふ噂は私もうすうす聽いたれども、傳吉樣にはこの前にあのやうな不しだらがあること故、如何も私からは云ひ出し難い。

おその　(よく分らずに) この前の不しだらとは。(氣付きて) おお、あの下田の女郎吉野とやらがことでござんすかえ。何のまあそのやうなことを、傳吉樣が氣に懸けておゐでござんせう。(稍耻かしげに) お前が云ひ難ければ私からでも。

藤助　折もあつたらそなたからも好うお賴み申して吳れやれ。

おその　折などと云はれゐては、船出に遲れることであらう。これから私が一走り。

(おそのは立上つて身支度をす。藤助は猶茫然と何ごとか考へてゐる。)

おその　それでは、兄さん。留守を好う賴んだぞや。

藤助　うん。早う往つて來るが好い。

(藤助はおその方には目も遣らず、何處ともなく眺めゐる。おそのは急ぎ下手に入る。)

藤助　(呟くやうに) あの吉野にも久しう會はぬが、今は如何してゐるであらう。龍神丸が船出をすれば、また下田に船がかり。さすればまた會へると云ふものぢや。(現のやうに) あれもやはり夢かのう。

(向うより下田の遊女吉野駕籠に乘りて出づ。二十歲位。藤內の家の前にて駕籠を下す。)

藤助　(顏を見て驚く) おお、吉野か。

吉野　(殆んど同時に) おお、藤助さん。

(吉野、駕籠を下り、藤助、立ち上る。)

藤助　そなたはまたどうしてここに。

吉野　何かの話は後でゆつくり。（駕籠舁に）　これ、駕籠の衆。あまり手間は取らせぬ程に、そこらで待つてゐて下され。これはほんの酒手代り、取つて置いて下さんせ。

（金を遣る。）

駕籠舁一　へえ、如何も難有うございます。

駕籠舁二　それではあちらで待つてをります。

（駕籠舁は下手に入る。）

吉野　（嬉しげに）　おお、やつと會ふことが出來て、このやうに嬉しいことはない。別れてからもう二月毎日會ひたうて會ひたうて、どの位苦勞したか知れぬぞえ。

藤助　私もそなたに會ひたいと、今も思うてゐたところぢや。（間）　立つてゐては話が出來ぬ。まあこつちへ上つたが好い。

吉野　それでは上つても大事ござんせぬか。

藤助　おお、大事ないわい。今は丁度皆留守ぢや。

（吉野は家の中に上る。藤助は猶合點の往かぬ顔付。）

藤助　してまたそなたは如何してここまで、遙々尋ねて來てたもつた。何か用ばしあつてのことか。それとも客衆に連れられて、鳥羽へ下つたといふ譯か。

吉野　（ほほ笑む）　どれもこれもてんと當らぬ。用もなければ、客衆に連れられ鳥羽に下つた譯でもない。唯お前のことが忘れられず、つい便船があつたを幸ひ、家を抜け出し乘せて貰ひ、やうやく遣つて來たのぢやわいなあ。

藤助　それでは私のことが忘れられず、わざわざ鳥羽まで下つたのか。（間）　はて、大それた事する女子ぢやのう。

吉野　大それたとはお情けない。勤めする身がこのやうに、無理な首尾して會ひに來るは、並大抵のことではござんせぬぞえ。（間）　とはいへ家では今頃は、さぞ大騒ぎでござんせう。

藤助　さう云ふことなら一時も早う、戻らねばなるまいが、好い便船のない時は、何と云うても詮ないこと。

吉野　私の乘つて來た船も、これから室へ往くとやら。（間）　しかし、まあ、藤助さん。來る早々そのやうに、追ひ立てずとも好うござんす。

藤助　別に追ひ立てると云ふ譯ではなけれど、二日三日とここにゐて、追手の懸るやうなことがあつては、そなたも私もとも難儀。それに私は今些と企んだこともあれば、何時までここにゐられるやら。（考へて）　おお、左様ぢや。丁度好い船がある。私もそれに乘つて往く故、そなたもそれに乘つて往け。下田までの船の上で、何かのことはゆつくり話さう。

吉野　それならお前はまた江戸へ。

藤助　いいや。江戸ではない。江戸よりももつと好いところぢや。

吉野　はて、まあ、それは何處でござんす。

藤助　何處と分つてゐる位なら、私はこのやうに苦勞はせぬ。大方私の尋ねるところは、天竺呂宋暹羅安南、摩伽陀の國でもあらうわい。

吉野　でも、まあ、恐しい。そのやうなところへ往かしやんして、如何なさらうと云ふお心でござんす。何時かも下田の船頭が、暴風(あらし)の爲めに吹き流され、呆宋とやらへ往つたと云うて、歸つて來てからの物語。私は話を聽いてさへ、怖うて怖うてならなかつたぞえ。

藤助　(笑ふ)女子供には怖ろしいかも知れぬが、私には怖ろしくとも何ともないのぢや。(思ひ付きたるやうに)おお、そなた伽羅(きやら)と云ふものを知つてゐやるか。

吉野　話にばかり聽いてゐて、まだ見たこともござんせぬが、それはそれは好い薫りのする木ぢやとのこと。

藤助　(頷きて)うん。それは珍らしい香木ぢや。今から凡そ十年程前に小倉の商人が爪哇(じやわ)に往き、澤山買うて歸つて來て、えらい金儲けをしたと云ふことぢや。私の往きたいと思ふところには、その伽羅の木もあるであらう。そなたへの土産としては、伽羅に上越するものはあるまい。(吉野の肩に手を懸けて)如何ぢやのう。

吉野　(悲しげに)名前ばかりは吉野でも、たかが下田の女郎風情に、伽羅などといふは奢りの沙汰。私には寧ろ伽羅よりも、藻屑の方が好いわいなあ。

藤助　(聽き咎めて)はて、藻屑とは氣懸りな。ひよつと烈しい疾風(はやて)に出會ひ、海の藻屑と。(云ひ懸けて笑ふ)何でそのやうなことがあらうぞ。さながら浮城(うきしろ)の龍神丸ぢや。(間)おお、龍神丸と云へばかうやつて、ゆつくり話などしてはをられぬ。そなたは直ぐにあの駕籠で、龍神丸を尋ね往き、譯を話して頼むが好い。私も追付け後から往く。

吉野　それならこれから直ぐ船へ。

藤助　おお、何かのことは後でゆつくり。

吉野　ここから鳥羽へ往く間、苫を敷寢の舵枕。(間)それでは、藤助さん。私は船で待つてゐるぞえ。

(吉野は下に降りて駕籠舁を呼ぶ。)

吉野　(下手に向ひて)もし、駕籠の衆、駕籠の衆。

(下手より駕籠舁出づ。吉野は駕籠に乘る。)

吉野　それなら、藤助さん。

藤助　おお、氣を付けて往け。龍神丸を忘るるなよ。

(吉野は駕籠に乘りて向うへ入る。藤助立ちて見送る。獨語す。)

藤助　かう云ふことになつたからは、たとへ如何あつても

龍神丸に、乘つて往かねばならぬ身ぢや。乘つてしまへば傳吉樣も、きつと喜ばれるに違ひない。如何で傳吉樣とても、御法度破りの天下の科人。（四邊を見る。間）密かに造つたあの船が、三本檣と云ふことは、私もよう知つてゐるのぢや。それを知つてゐるからは、船に乘るを許さるるは定、それにあの吉野のことも、何とかよしなにお賴み申さう。

（この少し前より藤内上手の障子を開け、半ば出懸りて窺ひゐる。突然聲を懸く。六十歲位。頑丈なる爺。）

藤内　こりや、やい、藤助。そちやまだ夢が覺めぬのぢやなあ。

（藤内、座敷の方に來る。藤助、驚く。）

藤助　（狼狽へて）こりや親父樣(おやぢさま)には如何して家に。（間）私はお留守ぢやとばかり思うてをりました。

藤内　（座りながら藤助に）何をうろうろ狼狽へ騷ぐ。まあ、靜かにそこに坐りをらぬか。

（藤助、坐る）

藤内　（怒りと悲しみの顏付）やい、藤助。おのれはまたわが家を棄てて、何處ぞへ往かうとしをるのぢやな。（間）思ひ出せばこの正月、あの仕合丸が出來た時、傳吉樣に唆かされ、皆があれ程留めたのも聽かず、如何しても江戸へ往くと云うて、船の上乘に抱へられ、往きは往つたが奉公の、手蔓もなうてうかうかと、またこの鳥羽へ戻つて來た。云はうやうなき意氣地無し奴が。（哀れむやうに）身過世過は樣々あれど、おのれのやうなうつけ者には、何を仕出來すこともなるまい。

藤助　（反抗するやうに）それぢやと云うて人は皆、運否(うんぷ)天賦でござります。あの神戸屋とても昔から、あのやうな身代ではなかつたに、親旦那樣の運の好く、思はく當つた出來分限。私とてもその通り、たとへ江戸でないと云つても、何處ぞ好いところへ行つて、立派にこの身を立てることが、出來ぬと云ふこともござりますまい。（嘲るやうに）何の江戸ばかりが都なものか。

藤内　何。それではおのれは何處へ往く氣ぢや。

藤助　（夢見る如く）蝦夷松前平戸長崎、日本はおろか異國まで。

藤内　（驚く）よもやよもやと思うたに、氣が狂うたか血迷うたか、大それたことを企みをるな。（間）そちや寬永三年幕府から出た御禁令を、知らぬといふことはよもあるまい。しかもこの第一箇條に、異國へ日本の船遣し候儀堅く停止の事とあるを、おのれはもはや忘れたか。

藤助　（熱心に）いいや、忘れは致しませぬが、こればつかりは如何あつても、止むに止まれぬ私の望。この前江戸へ往く時は、唯何となく往つて見たさに、うかうか往

つたのでござりますが、今度はそのやうな浮いた心で、往かうとしてゐるのではござりませぬ。

藤内　それでは何處へ何しに往く。

藤助　はて、知れたこと。(强く)　海のあなたへ。

(稍長き間。)

藤内　(合點ゆかず)　うん。おのれはまた傳吉様に、唆かされたか或はまた、ものに魅かれての囈言か。私にはとんと合點がゆかぬ。おのれの云ふこと思ふこと、爲すことは皆夢幻、那古の浦曲に立つと云ふ、蜃氣樓にもひとしいものぢや。

藤助　何のこれが夢幻。(間)　まあ、私の云ふことを、とつくりお聽きなされた上で、何なりともおつしやりませ。(考へて)　親父様とても根からこのやうな、釣針鍜冶ではござりますまい。元はと云へば藤堂家の水軍の中にても名うての楫取。さすれば私の申すことも、まんざらお耳に入らぬと云ふ、こともないと思ふ故、今日はすつかり打ち明けませう。

藤内　うん。打ち明けるとは、そりやまた何を。

藤助　傳吉様の今度の企、うすうす聽いたその次第。親父様、こりや隱密でござりますぞ。(間)　傳吉様直々に聽いた話ではなけれども、この間船大工の六藏どのが、私に話したことに據ると、かう云ふ譯なのでござります。

あの傳吉様とても根からの商人風情ではなく、親父様も御承知の通り、元は私共のお主筋。とてもこのやうな鳥羽などにゐて、算盤秤をせせることなど、御辛抱が出來まいと、思うてゐたが案に違はず、先づ手始めが仕合丸。さうして今度はあれよりも、一倍大きな龍神丸。(間)　ありや御法度の三本檣、如何なる遠い荒海でも、容易く乘り切ることが出來る、ゆゆしき大船でござります。傳吉様があれに乘つて、これから始められると云ふは、これも御法度の唐人商賣。玳瑁珊瑚綾錦を、異國の商人から買ひ取つて、大金儲けをなさらうと云ふ、企みなのでござります。

藤内　して、おのれもその仲間か。

藤助　いや、いや、私はそのやうな金儲けをしたいとは思ひませぬ。龍神丸に乘ると云ふも、唯おのれの便宜の爲め、唯私が日頃から尋ねるところへ往きたいばつかり。

藤内　うん。その日頃から尋ぬるところとは。

藤助　(狂熱の調子にて)　先程も申した通り、海のあなたでござります。海のあなたの美しい國なのでござります。それには幸福が私を待つてをります。私は生きる爲めに、如何してもそこに往かなければなりませぬ。(間)　親父様。何卒私の往くのを許して下さりませ。

藤内　(不興げに)　またしても夢がたりか。して、おのれ

はまたあの女も、一所に連れて往く氣なのか。

藤助 (驚く) え丶。それでは何から何まで。

藤内 うん。知つてゐるのぢや。晝間からして女を引き入れ、わが家を揚屋にしてのけた奴。見て見ぬ振の親の慈悲を、難有いとも思はずに、私の言葉に背いても、おのれは何處ぞへ往く氣ぢやな。おのれは憎うはなけれども、おのれの性根がおりや憎い。(間) おのれはもう外へ出ることならぬぞ。奥へ往つてとつくり思案せい。(立ち上りて) 私はこれから一仕事。どりや鞴の火でも起さうわい。

(藤内仕事場にゆきて坐る。藤助、何か考へゐる。)

藤助 もし、親父様。それでは如何しても私の望みを叶へては下さりませぬか。

藤内 ええ、くどいわ。兎やかう云はずと顔でも洗つて、たはけた夢を覺ましをれ。

藤助 (棄鉢のやうに) たとへ誰が何と云うても、私の往きたいところまでは、私の力で往くばかりぢや。

(藤助、奥に入る。藤内、仕事を始む。小さなる鎚の音。稍長き間)

(日和見の松、上手より出づ。非人、三十四歳位。醜怪なる容貌。仕事場に近付き、默つて鍛冶の様を眺める。)

藤内 (氣付きて氣味惡げに) おのれは一體何處の奴ぢや。

日和見の松 私は日和見の松といふ乞食でござります。

藤内 つひぞここらで見懸けぬ奴。何處から來た。

日和見の松 何處から來たか、私も存じませぬ。

藤内 して、またこれから何處へゆく。

日和見の松 さあ、何處へ往くか。丁度あの船と同じやうに、その日その日の風次第。

藤内 はて、をかしな奴ぢやのう。

日和見の松 そこで些とお願ひがござりますが、何と聽いては下さりませぬか。

藤内 して、その願ひと云ふのは。

日和見の松 針を賣つて下さりませ。

藤内 うん。(考へて) いやこの針は賣ることがならぬ。

日和見の松 そりやまた何故でござります。

藤内 釣針鍛冶などと云ふ、賤しい稼業はしてゐれど、藤内この年に至るまで、まだ乞食に賣るやうな針は造らぬ。(間) して、その針で何を釣る。

日和見の松 (眞面目に) 魚なぞは釣りませぬ。私は運を釣ります。

藤内 何、運を釣る。(嘲ける如く笑ふ) 飛んだ大公望を氣取りをるわい。そのやうな針はなほさらないわ。(間) おのれ阿呆か狂人か、そのやうなことを云つてゐずと、

とつとここを失せて往きをれ。
日和見の松　（罵る）　失せて往かうが往くまいが、おのれの差圖はおりや受けぬ。おりや阿呆でも狂人でもない。運を釣るのが何で不思議ぢや。
藤内　おのれ口の減らぬ乞食奴ぢやのう。（立ち上りて）ええい、仕事の邪魔ぢや。そこ退け。退かぬとおのれ。（鎚を振り上ぐ）
日和見の松　おお、こりや、面白い。打つなら打て。
藤内　打たいで置かうか。
（藤内、日和見の松を打たんとす。おその、下手より出で驚きて止む。藤助、奥より出づ。日和見の松を見て驚く。）
藤助　おお、そちやさつきの。
藤内　おのれはこの乞食を存じをるのか。
藤助　存じてをる譯ではござりませぬが、さつき岬の岩のところで、不圖出會つたのでござります。
おその　して、また、この有様は。
藤内　あまり無禮な乞食故、打ち懲さんと存じたのぢや。
日和見の松　（投げるやうに）　賣らぬものは買はれもすまい。釣針のあるのはここばかりとは限らぬ。（豫言するやうに）私は唯の乞食ではない。何時何處にどんな姿で現はれるか分らぬ。よく私の顔を覺えてゐるが好い。

（日和見の松は下手に入る。三人は氣味惡げにその後を見送る。）
藤内　氣味の惡い乞食ぢやのう。（おそのに）　おお、そちや何處へ往つたのぢや。
おその　ちよつと街までまゐりましたが、父さん、一大事でござんすぞえ。
藤内　何、一大事とは。
おその　今人の噂を聽けば、何のお咎めかは存じませぬが、神戸屋樣の御一家は、追付け召捕りになるとのこと。
藤助　何、神戸屋。（間）　傳吉樣もか。
おその　（悲しげに）　はい。
藤内　おお、それではここにかうしてはをられぬ。これから急いで神戸屋に往き、仔細を聞いて無事に濟むやう。（間）　こりや、娘。羽織を出して呉れやれ。
（おその、奥に入り直ちに羽織を持ちて出づ。藤内、羽織を着る。）
藤内　ことの起りはてつきり傳吉。（藤助と顔を見合せ）やい、藤助。私の戻つて來るまでは、外へ出てはならぬぞよ。
（藤内、急ぎ足に向うへ入る。）
藤助　（氣遣はしげに）　傳吉樣は如何なされた。
おその　折よく傳吉樣にお目に懸り、兄さんの話をしたと

ころ、大變喜んでゐられましたぞえ。さうして如何でこの工合では、まともに船出をすることも出來まい。三日のうちに闇に紛れて、そつと船出をなさるとのこと。六藏どのの用事と云ふのも、傳吉樣のお言傳、兄さんにも仲間に入れと、云ふことらしう思はれます。

藤助　おお、それでは愈々二三日のうちに。（間）しかし神戸屋の御一家が、召捕りになると云ふのは氣懸り。傳吉樣はそのことを、もう知つてをられたのか。

おその　いえ、いえ、まだ御存知のない樣子。

藤助　はてなあ。

（六藏下手より走り出づ。）

六藏　大變だ。大變だ。

藤助　おお、六藏どの。何事ぢや。

六藏　龍神丸のことが知れたと見えて、今神戸屋へお役人が、捕手を連れて往つた樣子。如何やら船大工の方にまで、御詮議があると云ふことだ。

藤助　して、傳吉樣は。

六藏　おお、傳吉樣は今の先、大急ぎで龍神丸へ。

藤助　やあ、もう乘り込んでしまはれたか。

六藏　直ぐ樣船出をなさるとのこと。

藤助　こりやかうしてはゐられぬわい。

（藤助、身支度をなし、直ちに走り行かんとす。）

六藏　血相變へて何處へゆく。

藤助　私は龍神丸に乘つて往くのぢや。

（おその、藤助に取り縋る。）

おその　兄さん。傳吉樣にお怪我のないやう。

藤助　おお、心配するな。この兄が受け合つた。（間）親父樣のこと頼んだぞよ。

（藤助、おそのを突き離す。一散に向うへ走り入る。おその、泣き伏す。六藏、驚きて藤助の後を見送る。）

第二場

鳥羽の港の埠頭の一部。

正面は上手より下手に一帶の石垣。石垣の向うは直ちに海。彼方に港口。海には船がかりをなせる數艘の船など見ゆ。

所々に松の木生え、下手には材木其他の積荷、錆びたる錨など亂雜に置きあり。

同じ日の黃昏。鷗の聲と浪の音。

二三人の船頭話してゐる。

船頭の一　到頭あの龍神丸のことが知れて、神戸屋では大騷ぎぢや。

船頭の二　（沖の方を見て）もう追付けあの船も燒き棄てられてしまふのであらう。

船頭の三　船大工達は飛んだ災難ぢや。

船頭の一　鬪り合ひは免れられまいからのう。

船頭の二　（上手を見る）やあ、あすこに來るのはお役人様らしい。

船頭の三　己達もここらにゐて、傍杖でも食ふと大變ぢや。

（船頭等は逃ぐるが如く下手に入る。上手より役人杉原牛太夫、捕手を引き連れて出づ。）

牛太夫　（沖の方を見て）うん。あの船が龍神丸ぢやな。（間）船出の用意を致しをるとのこと故、もしも乘り込まんとする者あらば、誰にてもあれ引つ捕へい。（間）油斷なく見張り致せ。

（牛太夫、下手に入る。捕手等は上手と下手に分れて入る。藤助、向うより走り出づ）

藤助　（沖の方を見て）うん。あすこに見えるは龍神丸。直ぐ様これから乘り込みたいけれど、生憎ここらに舟はなし。愚圖々々してゐるうちには、捕手の者につかまるは必定。

（捕手等左右より窺ひ寄る。）

捕手の一　御用だ。

（捕手等、藤助に打つて懸る。藤助、捕手等と烈しく鬪ふ。藤助、危く捕へられんとす。）

藤助　ええ、こりや寧そ泳いで往かう。

（藤助、海に飛び込む。）

捕手の二　おお、海に飛び込んだ樣子ぢや。

捕手の三　さあ、舟ぢや、舟ぢや。

（捕手等、上手と下手とに分れ入る。）

（藤内、「おおい」「おおい」と叫びつゝ、向うより走り出づ。石垣の傍にて、躓きて轉ぶ。）

藤内　（起き上りて）おおい、傳吉樣。その船出して下さるな。もしもその船出したが最後、そなたは重い科人とならねばならぬ身でござるぞ。血氣に任せて船を乘り出し、たとへ何處に往つたとて、天下の御法度は遁れられまい。親旦那樣始め御一家の方が、召し捕らるるを目の前に、見ながら船出をなさる心か。（間）傳吉樣。その船出して下さるな。こればつかりが私の願ひぢや。

（藤内、泣く。日和見の松、下手より出づ。黄昏となる。）

日和見の松　（やはり豫言するやうに）もう直き夜が來る。眞つ暗な怖ろしい夜が來る。夢もなければ眠りもない、長い長い夜が來る。（間）さうしてその夜と一緒に、怖ろしい暴風が來る。（冷やかに笑ふ）暴風ぢや。暴風ぢや。

（藤内、驚きて日和見の松を見る。舞臺次第に暗くな

ろ。船唄の聲悲しげに聽ゆ。）

〽船頭する身と空飛ぶ鳥は、何處のいづこで果てるやら。

（藤内も日和見の松も、悲しげに海の方を眺む。鷗の聲と浪の音。靜かに幕。）

第二幕

南蠻國纐纈城内の牢獄。

上手も下手も正面も、すべて灰色の壁。陰慘たる牢獄の内部を現はす。上手の高きところに窓あかり。鐵の格子戶。

正面に入口。それより牢獄の内部に向ひて七八級の石階あり。大いなる鐵の扉。

下手に石の寢臺あり。二基の蠟燭臺。一基は上手に、一基は下手に。

室の隅々には怪異なる惡鬼の立像立ちて、囚人に恐怖の念を與ふ。

腰懸に用ふる二三の石、室内にあり。

曉。夜未だ明けず。牢獄の中殆んど暗く、唯僅に一枚の蠟燭の灯に依りて朦朧とその内部を見るをうるのみ。

藤助、異樣の囚衣を着て寢臺の上に眠りゐる。髮延び面瘠せ、見るも傷ましき姿となりゐる。やがて曉の光窓より白く差し込み來る。

藤助　（目を覺まして起き上る）今まざまざと見た夢は、まさしく故鄕のわが家のこと。（間）わがなき後の悲しみを、思ひ遣られるばかりであつた。父御の顏も妹の顏も、猶目の前にある心地ぢや。僅かの間に年を寄られて、父御も老を覺えられたか。夢の中で聽いた鎚の音も、私の耳には寂しく響いた。僅かの間に髮も窶れて、妹ももの哀れを知つたか。夢の中で見た顏の色も、私の目には悲しく映つた。ああ哀れな釣針鍛冶の父子二人は、あやつて何時までも私を待つてゐるのであらう。（間）しかし私はもうあの鳥羽へは歸ることが出來ない。何時までもこの暗い怖ろしい獄の中にゐなければならないのだ。もう誰にも會ふことも出來まい。あの吉野も如何してゐるであらう。下田で別れたのが、到頭長い別れとなつてしまつた。（間。窓を見上げて）おお、もう夜が明けたやうだな。異國を照らす太陽の光は、何故こんなに冷たいのであらう。私が鳥羽にゐた時分は、こんなに冷たい太陽の光を見たことがない。この國の人は春と云ふのに、私には冬としか思はれないのだ。この寒さは如何であらう。この身に霜を置くかとも思はれる位だ。（間）しかしここで一人不思議なのは、あの年寄つた牢番だ。

いろいろのことをよく知つてゐる。人の世のことばかりではなく、星の世のこともよく知つてゐる。それに如何やらあの顏は、何處かで一度見たやうな氣がするが、それが如何しても思ひ出されない。私はこんな異國に來て、日本の言葉を話す男が、あらうなどとは思へなかつたのに、あの牢番はよく話す。私が話の相手になつて呉れるのは、あの牢番ばかりなのだ。

（この時鐵の扉を開く鍵の音聽ゆ。）

藤助　おお、朝の見廻りがやつて來たな。

（正面の鐵の扉を開きて南蠻の獄吏等出づ。老いたる牢番、その後より出づ。日和見の松に酷似せる容貌。六十五六歲位。獄吏等は藤助を見て直ちに入る。老いたる牢番一人殘る。この間すべて無言。）

牢番　（藤助に）如何ぢや。昨夜はよく眠られたかの。

藤助　よく眠られました。

牢番　しかし今夜から眠られまい。今日はこの牢屋から引き出されるのぢや。

藤助　（驚きと悲みとに打たれて）ええ。また今日から地獄の責か。もし私は何故あのやうな苦しい目を見なければならないのでございませう。（間）あの怖ろしい鐵の門。あの怖ろしい銅の柱。逆様に吊し上げられて、手足の筋から油を絞られ、死ぬよりつらい苦しみを、また今日はしなければならないのか。呼吸絕えんとすれば藥を與へ、生けつ殺しつ日數を經る。最早今日まで三月あまり。（間）もし牢番どの。言葉の分るはあなたばかりぢや。何故このやうに苦しい目を、私は見なければならぬのか。仔細を聽かせて下さらぬか。

牢番　（冷やかに）それはそなたの夢を覺ます爲めぢや。

藤助　何、私の夢を覺ます。（間）いや、いや私は夢などは見てをりませぬ。

牢番　（同じやうに）そなたは死なねば覺めぬ夢を見てゐるのぢや。しかし安心したがよい。夢も今日は覺めるであらう。

藤助　（恐怖の表情）ああ、それではいよいよ私は、今日殺されるのでございますか。

牢番　死ぬのがそれほど怖ろしいか。

藤助　（呻く如く）ええ、何よりも怖ろしうございます。私は死と云ふ言葉を聽いただけでも、身も魂もをののきます。私の死を怖れるのは、多くの人が怖れるのより、幾層倍だか分りませぬ。（間）この呼吸が絕えてしまふのぢや。この目が瞑ぢてしまふのぢや。脈が打たなくなる。手足が動かなくなる。身體がだんだん冷たくなる。（悲しげに叫ぶ）さうして私の魂は、穴のやうな闇の中に落ちてゆく。（間）ああ、私は如何しても死なけれ

ばならないのか。

（藤助、泣く。）

牢番　（猶冷やかに）　何を悲み何を泣くのぢや。（間）　あゝ、さうぢや。丁度昨夜この城を尋ねて來て、泊めて貰うた旅僧がゐる。生きてゐる者に回向でもあるまいが、會はすも私の慈悲心ぢや。今直きに呼んでくるから待つてゐるが好い。

（牢番、入る。）

藤助　旅僧などに會うたとて、私には何の役に立たう。私はそれよりもこの牢屋を、早く出して貰ひたい。私の今の願ひと云ふは、唯この牢屋を出たいばかりだ。しかし牢屋を出たと云うて、今では何處へ往くと云ふ、その目的さへもない身の上。（間）　今となつてはあの鳥羽が、この私には戀しいわい。（項垂る。）

（牢番、旅僧を伴ひて出づ。玄黄、五十歳位。髪長く伸び、僧衣もいたく破れゐる。牢番、直ちに入る。）

玄黄　（靜かに）　これ、この獄に囚はれてゐるのは、そなた一人か。

藤助　（驚きて顔を上ぐ）　おお、懐かしい日本の言葉。して御僧は日本のお方でござりますか。

玄黄　おお、日本に生れて唐に渡り、それより諸國を修行に歩く、玄黄と申す旅僧ぢや。

藤助　（懐かしげに）　おお、それではやはり日本のお方か。お懐かしうござります。

（藤助、玄黄に縋り付きて泣く。玄黄、涙を流す。）

藤助　（氣付きて）　思はぬところで故郷の人に會ひし嬉しさに、思はず、僧衣を涙に汚し、粗相なことを致しました。

玄黄　何の貧道にその言譯。（間）　このやうな獄に囚はれてゐるには、何か深い仔細があらう。如何してこのやうなところに來たか、それを聽かせて下さらぬか。

藤助　お尋ねなくとも私の方から、お話致さうと思うてゐました。（石を指差す）　まあ、そこにお懸けなされませ。仔細をお話申しませう。

（玄黄、腰懸く。藤助、その前に坐す。）

玄黄　して、その仔細は。

藤助　はい。私は伊勢の國鳥羽の港に住居致す、藤助と申す者でござりますが、釣針鍛冶の渡世を嫌ひ、神戸屋と云ふ出來分限の造つた船の新艘下し、江戸へ往くのを幸ひと、都へ出たのが抑もの身の誤り。江戸ばかりでは倦足らずに、もつと好いところへ往きたいと、大望起した折も折、その神戸屋の若旦那、傳吉様と云ふお方が、また新しく造られたは、當時御法度の三本檣、名さへ龍神丸と云ふ、唐人商賣に使ふ大船。これ幸ひとそれに乘り、

先づ伽羅の木を手に入れて、一儲けせうと思ふ矢先、船のことがお上に知れ、捕手が向ふと云ふ騒ぎ。いや、もう、鳥羽の港は時ならぬ暴風が吹いたやうになりました。

玄黄　今日本は戰ひの後を受けたる遽かの鎖國に、そのやうな騒ぎは何處にもある。今の話もそのひとつぢや。(間)　して、それから如何致した。

藤助　それから漸くお上の手を遁れて船出を致しましたが、何を申せ乘組の人數が足らぬその上に、數度の暴風に出會ひまして、先づ最初に心懸けた安南國へも往くことが出來ず、風のまにまに吹き流され、やつと漂ひ着いたのは、それはそれは不思議な國。海には珊瑚の枝が輝き、陸には伽羅の木が匂ふ、世に珍らしき有様を、見たばかりで私達は、夢かとばかりに喜びました。

玄黄　はてなあ。そのやうな國が何處にあらう。そりや夢であつたであらうのう。

藤助　いや、いや、夢ではござりませぬ。それはこの國だつたのでござります。まあ、その先をお聽き下さいまし。(間)　さうして私達がそこに上つて、伽羅の匂ひに醉つてゐると、何處からともなく現はれた、一人の老人がござりました。その老人は私達に、ここにゐては生命が危い、早う歸れと云はれましたが、いつかな聽かぬ私は、ここここそ私の尋ぬるところと、一人殘つたが運の盡。見馴れぬ異國の人々に、取り圍まれて連れ往かれ、この牢屋に入れられて、さあ、それからの苦しみは、一通りや二通りのことではござりませぬ。(戰慄しつつ)　あの怖ろしい鐵の門。あの怖ろしい銅の柱。それから私は毎日のやうに、逆様に吊し上げられて、手足の筋から油を絞られ、死の苦しみをしてゐるのでござります。

玄黄　(眉を顰めて)　はて、酷いことを致すのう。

藤助　もし、ここは纐纈城と申しまして、今お話申上げたやうに、それはそれは怖ろしいところでござります。あなたも私のやうな目に會はぬうち、早くここをお逃げなされませ。

玄黄　その心遣ひは忝けなけれど、難行苦行は我等の常、少しも怖るることはない。それよりもそなたの身の上、何時までかかる牢屋にゐて、苦しい目に會ふよりも、私と一緒にまゐつたら如何ぢや。

藤助　(喜びて)　おお、それでは私をお助け下さりますか。

玄黄　うん。助ける程にここを出て、私と一緒に修行せぬか。

藤助　はい。(考へゐる)

玄黄　如何ぢや。

藤助　(決心して)　こりややつぱり私はここにをりませう。

玄黄　何と申す。

藤助　折角のお思召ではございますが、よく考へて見まするると、如何してもここは出られませぬ。よし出たにしたところが、あなた様と御一緒に諸國修行に歩くも厭、また日本に歸るは好けれど、御法度破りの罪を名のつて、お仕置を受けることなぞは、猶更厭でございます。さすれば何處へ往く目的もなし、如何も考へて見まするると、この牢屋にゐるうちには、何か好いことがあるやうに、思はれるのでございます。

玄黄　はて、異なことを申すのう。たしかにさうと思ひをるか。

藤助　はい。どうもさう思はれるのでございます。私が尋ねてをりましたところは、やはりここのやうな氣がするのでございます。陸に伽羅、海には珊瑚。このやうな國は何處にございませう。

玄黄　(寂しげに笑ふ)　そりやそなたの夢幻。この城の外は荒凉たる大きな沙漠があるばかりで、草も木もない未開の土地ぢや。

藤助　いや、そのやうなことはございますまい。現在私はこの城に連れられて來る時、伽羅の林を通りました。

玄黄　(暫らく考へて)　それではそなたはこの城に好いことがあるまでゐると云ふのか。

藤助　はい。

玄黄　ゐたいとあれば仕方がない。私はいづれ日本へ歸るが、故郷に何の言傳もないか。

藤助　何の言傳もございませぬ。もし鳥羽へお出でなされましたら、藤助は無事に生きてゐると、知らせて遣つて下されませ。

玄黄　(頷きて)　それではよしなに傳へ置かう。

(牢番、出づ。玄黄、それを見て立ち上る。)

玄黄　藤助どのとやら、私はもう往かねばならぬ。

藤助　もうお出でなされますか。お名殘惜しうございますなあ。

玄黄　もうこの世では會はれまい。會者定離ぢや。(往き懸けて獨り言のやうに)　夢を追うて往つたものは、再び歸るものではない。知らぬ他國の土佛、夢が覺むれば死ぬであらう。夢見る人は哀れぢやのう。

(玄黄入る。藤助、その後を見送る。牢番、藤助を凝視しつつ佇む。)

藤助　(獨言す)　夢見る人が何で哀れぢや。この醜い世の中に、夢程美しいものがあらうか。(間)　しかし私は夢を見てゐるのではない。

(牢番、笑ふ。)

藤助　誰ぢや。そこにゐるのは。(間)　おゝ牢番の爺どの

か。して、また何で笑うた。

牢番　そなたの言葉がをかしかつたからぢや。私はそなたをよう知つてゐる。私はそなたと一緒にこの牢屋に來たのぢや。

藤助　（驚く）　ええ。一體そなたは誰なのぢや。

（この時荒々しき跫音聽ゆ。）

牢番　おお、大勢の跫音が聽える。さあ、もう何もかもおしまひぢや。そなたはまたここから引き出されるのぢや。

（南蠻國の獄吏等出づ。藤助を捕へて連れ往かんとす。）

藤助　（悲しげに）　おお、またあすこに引き出されて、苦しい目に會はねばならぬのか。あの怖ろしい鐵の門。あの怖ろしい銅の柱。（間）　いや、みんな夢ではない。夢でないものが何で覺めよう。（間）　海には珊瑚、陸には伽羅。私はたしかにそれを見たのだ。（間）　いや、いや、みんな夢ではない。（更に悲しげに）　もしこれを夢とすれば、夢程悲しいものが世にあらうか。

（南蠻國の獄吏等、藤助を引き立てむとす。藤助、蹌踉として地に倒れ、身を顫はせて泣く。牢番、靜かに鐵の門を開く。門のあなたに美しき景色現はる。藤助は恍惚としてそれを眺めながら曳かれゆく。）

―幕―

郡虎彥篇

猶太史劇

王爭曲

（サウル・ダビデ王爭史五幕、附、納曲）

人物

サウル　イスラエル王第一代
ヨナタン　王太子
ミカル　王女
アブネル　王軍總統
アデリエル　王甥
祭司之長
ダビデ　イスラエル王第二代
ヨアブ　ダビデ王謀將
ラハズ｝ミカル之侍女
タマル
ヤコブ　ダビデ之僕
廷臣、將士、使者、舍人、兵卒、其他多勢。

序幕

サウル王宮殿、政事之間。

右手、壁に近く廣やかなる壇、（大凡場の四分が一を占め。）その上に王座を据う。

正面、中央に高く廣き扉口あり、兩開きの帷をもて覆ひ、その左右、壁の程よき高さに燭臺各々一個を取り附く。扉口の左、壁に沿ひて小さき交椅二個。

左手、三個の大きなる窓。

意匠粗大なる浮彫楣間を廻り、倚、氈、掛布など皆に適へる趣。

（左右前後は觀客の方より稱ふ。）

晴れたる秋の日の日沒前後。窓外に夕映えの空。やうやうに紅褪せて行き、内には暮暗の迫るをあわたゞし。

第一段

（イスラエルサウル、王座にすまひ、その左に並びて、王軍總統アブネル、王甥アデリエル、侍臣——面ひて、祭司よりの使者、立ちてゐる）

アブネル　我君——

サウル　（焦ら立たしく）はあ、もはや申すな。

（間。）

アブネル　まことに高き御座より此世をいかに御覽せばとて、恐れ乍ら君を始めてその御位に福問ひ參らせ、イスラエルをけふの榮えに御導き下されましたは、今御昇天の聖の御手で御座りまする。君がこの程の御迷ひはともかくも、けふこそは——

サウル　けふサムエルの死んだが何ぢや。生死の境の夢に縺れてためらひ過した朽木の影が、いま地上より消ゆるとてイスラエルの東西が變りもしまい。いづれも老いぼれの無益な繰言をはやおけい。

（間。）

アデリエル　（使者に）そちはもはや退るがよい。何はあれ祭司之長が、此の御大事に自こそ參內致すべきぢや。疾う疾う罷り戻つて懈怠の趣恐れ入らせい。

使者　祭司之長も御追福さへ相濟む上は、――

サウル　捨て置けい。けふまでも生き乍らの屍骸に仕へて、自らもうつゝの生は腐れ居らう。いづれ地上にはある甲斐も無い祭司どもぢや。いづこへなりと主に纒うて思ふもの影につくばひ行けい。

アデリエル　（使者に）疾う罷り退れい。

（使者去る。）

アブネル　我君、自己を欺くは賤夫こそ致せ、神の民を知ろし食す君の御事では御座りますまい。

サウル　アブネル、――

アブネル　この年月サムエル様を御疎外あつて、恐れ多きエホバの聖劍を御心のまゝに遊ばしてより、ともすれば萬乘の君が御胸の、あるまじき御煩ひに曇りまする、何卒、――

（舍人出づ。）

サウル　（アブネルの言葉を遮りて、舍人に）何ぢや。

舍人　戰場よりダビデの使將が到着致し、何事か差し迫りて叡慮を伺ひ度き由申しまする。

アブネル　暫く次室に控へさせい。

サウル　之に來らせい。

アブネル　我君。――

サウル　えい、その使將を疾う之に引いて參れい。

（舍人去る。）

アブネル　我君、只一と言御聽取り願はしう存じまする。

――

サウル　（激しく）はあ、何ぢや。アブネルが老にうつけて君臣の分を忘れもしたか。若人原に白髮の頭を打たれて、今はお身までわれらの聲を嘲らうとか。

第二段

（ダビデ使將ヨアブ、出づ。）

ヨアブ　恐れ乍ら將軍ダビデの捧げまする忠誠の後に附し、數なりませぬ僕の身も、君の大御氣色御伺ひ申上げまする。

サウル　（何ほ焦ら立ちたる語調にて）ダビデよりの急使と申すは何事ぢや。疾う申せい。

ヨアブ　先つ日アヅラム大捷の後、尙追ひ撃ちの折を移さずペリシテの境を破り、夷の刃を末長く碎きまするも此機と存じて、若干追援の御差遣を御願ひ申し上げましたが、――

サウル　その追援は俺等許さぬ。尙アヅラムの峽間に駐り北境の守りを固めよと、更めてダビデには命じた筈ぢや。

ヨアブ　勅は一統に畏み承はり、直ちに要所の守りを固めて、恰も國境に四方より集ふ夷らの步騎の勢萬に餘ると聞ゆるを、弓張の弦抑へ難く待ち設けて居りました。然るに敵は先度の大敗より悉く志氣を喪ひ、軍の備へを探ねまするに、きのふまでたゞ血に飢し豺狼の夷の刃は、けふ芦の葉の風にも搖らぎ、士卒いひ甲斐無き合掌に、邪神の冥加を祈るばかりで御座りまする。此方は三千の士卒どもいづれもいづれ大捷に勢ふ只今、猶二千騎許の追援をも賜はらば峽間の關は破るに易く、けふこそペリシテの地上地下より、君が久しき御煩ひの根を斷ちまするもやはか難うは御座りませぬ。

サウル　はあ、――

アブネル　（サウルを制して）我君、――

ヨアブ　前後の狀のかゝるに鑑み、追援の儀を恐れ乍ら重ねて叡慮に仰ぎ度く、ダビデより心急奏請の次第で御座りまする。

サウル　（言葉と共に怒りを增し行きて）ダビデより心急き、――重ねてわれらに思ひ直せと、早急の追援を致し參れと、ダビデがそれを申して參るか。

ヨアブ　恐れ乍ら僕の務と存じ、――

サウル　刃の嵐に年を經た老の耳には、若人の言葉も今正しうは聞えぬさうな。年久しい王の憂ひを斷つも易いと王の面に申すダビデが、又早急の追援をも致せと申すか。――

アブネル　我君、――

サウル　（アブネルをば顧みず、激しく）はあ、ペリシテの夷の栖より、自らが不遜の頭こそ碎いて參れい。イスラエルの王が自の憂ひを、今牧羊者に敎へらるゝか。――僕の務と、――天下の方略を士民ばらが口にも輕く、論ひ、尙王の面に言葉を返すが自らけふの務と申すか。

アブネル　（ヨアブに）暫く次室に控へられい。追て評議の上御沙汰を申し聞かせるであらう。

（ヨアブ去る。）

アブネル　御心靜かに遊ばしませい。何事もあるまじき御迷ひゆゑ、今忠誠の僕らが然るべき奏請まで、徒に影も怪しく君の御眼には映じまする。まことにダビデの申すごとく、けふもまつろはぬ夷の地の胸深う神怒の恐れを印させまするに、かゝる折こそ又と得易う御座りませぬ。

此の追援は早々に御差遣あつて然るべう存じまする。

（王女ミカル、一箇の書狀を手にし、二人の侍女を從へて出づ。）

第三段

ミカル　廣間へ御名代に出まするやう、仰せを承りましたが、――

サウル　（心和ぎたる語調にて）さうぢや、われらに代りゾバの貢を受けてくれい。父は公事に控へられて暫くは座を立ち難い。

ミカル　畏まりました。只今彼方へ參りまする。丁度兄上のお文が御座りましたゆゑ、ともかくもお目にかけに參りました。

サウル　む、何を申して參つた。

ミカル　之に、（書狀をサウルに渡しつゝ）ヨルダンの原をお越えなされたとばかりで、委しくは父上にお便り申し上ぐると、お文の面で御座りまする。

サウル　よい、ともかく今は廣間に參つて父の代りを勤めてくれい。式の順序はアデリエルが心得居る。（アデリエルに）行けい。われらもやがて使節等に會ふであらう、凡て然るべく扱ひ置けい。

アデリエル　承はりました。

（ミカル、アデリエル、侍女等去る。）

第四段

（サウルはミカルの遺せる書狀を披きて讀む。）

（間。）

サウル　（對者の面をば視ず、半ば自らに）アブネル、ヨナタンを都に召し還させい。――夜晝のもの騷がしいけふこのごろ、國の太子を取り立てゝ、夷の刃に向かはするもおろかであらう。

（間。）

サウル　老の心を誇らば誇れヨナタンこそ、アヒノアムが命に易へて國とわれらに遺した一人の男子ぢや。歳々に力も智惠も又彼世より母の后の祝福も、いづれは共に實り行く若人の眼には、あわたゞしいけふの世態も、我等の見るとは異つて映るであらう。――折を移さず使を立て王子を都に召し還させい。アンモンには今此方より戰を仕掛けずともぢや。

アブネル　仰せのまゝに就らせまする。――たゞ併し、もろもろの御煩ひはさることながら、君は何事も御迷ひ無く、日輪のエホバの道を嘗てのまゝに御踏み固めさへ遊ばさば、此の天が下には生るゝも埋めらるゝも君に誠を誓ひ合せ、禍の夢の宿るべき影とて殘りは致しませぬ。

何卒不祥の雲霧をば、尊き御胸より先づ御拂ひ退け遊ばしませい。

サウル　此の民が、昨日は苟且の言葉にも敬ひ畏れたサウルの名を、けふは牧羊者の呼び名に比べ、嘲り歌ふ浮虚の心に何の誠の誓があらう。

アブネル　まことに此亂聲の日夜を分たず、やゝもすれば恐れ多き御名をさへ、輕き言葉に上げまするこそ、苦々しき限りでは御座りまする。つひ思ひ寄らぬ牧羊の若人が、遠き野の夢かとも浮び出で、忽ちゴリアテの首を上げて國の危難を救ひしこそ、我人一と時は驚き合へれ、おろかの男女の倘醉ひ痴れて、亂聲の止まらず濫るまゝに、天下規準の堤まで犯しまするは、捨て置くべき次第でも御座りませぬ。――併し乍ら、所詮は束の間を衢に亂るゝ風塵をば、風雨を孕む雲の影とは世に紛ふべき由御座りませず、何よりもダビデ自らこそ、君の勅を神の旨と畏む外の私無く、拔んずる忠の一と向に又無き功を重ねまするは、君こそとくに御照覽遊ばしまする。此の追援の奏請とて、――

サウル　もうよい、冗々しき理なぞを聞かずとも、われらとて心得べきは心得てある。――ともかくも折を移さず、ヨナタンに召し還しの使者を立てい。

アブネル　承はりました。――倘いづれにしてもダビデの使將には特と軍狀を陳じさせ、此の追援の儀は早々に取り定めずばと存じまするが、――

サウル　（焦立たしく）何事も思うたやうに取り計へい。

（アブネルの步み出づると同時に舍人出づ。）

舍人　祭司之長の御參內で御座りまする。

（アブネル立ち止りて嚴しくサウルの面を視る。間。）

サウル　罷り出させい。

アブネル　我君、――

サウル　（愈々焦ら立たしく）疾う行けい。

（アブネル去る。）

第五段

（入れ違ひて祭司之長出づ。）

祭司之長　イスラエルの萬物に悲しみの日が落ちまして御座りまする。

サウル　（何ほ焦ら立ちたる語調のまゝ）　サムエルが死去の儀は、先刻僕の使により承知いたした。

祭司之長　御遺言が御座りまして只今御追福も半ばながら、心急ぎ奏聞に罷り出でました。

（侍臣場を去る。）

祭司之長　けふ御他界に先ちまする三夜續けて、時も違はず黎明に、聖は稀有の御幻を御覽した由に御座りまする。

サウル　(慄然として。)　はあ、——

祭司之長　曉に一と筋洩るゝ光りかとも一口の劍が宙宇に浮び、執る手は見えず暗の上下を、一と時ばかり搏ち爭ふと見えたる後　早黎明の仄の明りに消ゆる趣、——

サウル　僞りぢや。

祭司之長　この程の夜毎の暗は君が御寢所にも、かゝる示現を實らせませうと、聖は仰せ御座りました。

(間。)

祭司之長　四十年の昔此の國の始めて仰ぐ高き御座に君御即位の砌にも、三夜續きて御二方に同じき示現の畏さを、我等も豫て承はり居りまする。たゞその折は、——

サウル　申すな。

(間。)

祭司之長　サムエル樣の御遺言で御座りまする。

サウル　(强ひて自らを覆ふがごとく)　聞き度うも無い。とくよりもうつゝの生無く、薄暗の夢に腐れたサムエルが、夜明けの空に何幻を見ようとも、珍らしからぬ語り草ぢや。——屍骸は世の最終まで呟き居れい。イスラエルの萬物はわれら定むる。日夜に荒ぶ異教徒の刃の海より、われら救ひ出したわれらの民ぢや。

(間。)

祭司之長　我君、申すも畏れながらイスラエルの王位の基は、天に就るエホバの眞をカナンの地に實らせ倚もろもろの地靈に迷ふ島山にも久遠の日月を照らせよとの神慮の嚴で御座りまする。然るをこの程君はたゞ御自らの御榮えを思し召すとて、畏き神慮を御忽諸に遊ばされ、文武の政事も神宣には御從ひ御座りませぬが、今かゝる示現の恐れも多きエホバの聖訓を、よも苟且には御覽し御座りますまい。

サウル　(激しく)　おけい。——

祭司之長　只今神前に御悔改めの炎と血とを捧げさせられ、御恭謙の昔ての御心に御立ち歸り遊ばさずは、御手の聖劍はいま四方の秋の嵐に折れ碎け、刃は翻つて恐れ乍ら君の御身を刺しませうと、サムエル樣の御遺言で御座りまする。

(間。)

(サウルは言ひ難き恐怖と爭ひて見ゆ。突然城の内部より歡稱の聲、「千代ませい、八千代ませい、サウル、——」と呼ぶが聞ゆ。サウル愕然として面を上ぐ。)

サウル　(祭司之長の座に在りしを忘れたるがごとく)　はあ、罷り退れい。

祭司之長　我君、——

サウル　疾う疾う罷り退れい。

(間。)

祭司之長　明日は燔祭の趣、仰せを承はりまして御座りまするが、――

サウル　さうぢや。われら誕辰の賀ぎに奉謝の炎を天に上ぐる。罷り退つてそれぞれの用意を備へ、己等も神と王とに捧ぐべき僕の誠を學び知れい。

祭司之長　我君、エホバの神事に勤みまする祭司ども一同、規に應はぬ燔祭の執り行ひは御辭退申し上げねばなりませぬ。

サウル　（俄に燃え立つごとく）何と、――

祭司之長　神に捧ぐる瀆罪の聖き犧牲を、規にも應はず徒の炎に上げましては、天地にエホバの御怒を招ぎまする。

サウル　徒の炎とな、王の捧ぐる王の犧牲を――

祭司之長　御懺悔の御祈りの爲とあらば空たちのぼる聖き炎も、御自らの御榮えの爲とあらば野に匐ひめぐる徒の炎で御座りまする。

サウル　心せい、炎の鞭は我手にあるぞよ。

祭司之長　神怒の炎を御心遊ばしませい。――我君、かゝる畏きエホバの示現も御座りまする。高きに在す御身なればこそいよいよ重きエホバの聖旨に、御心空しく只今御從ひ遊ばされずば、――

サウル　（立ち上り王杖をもて壇の床を打ち）王命に從へい。――疾う罷り退つてあすの燔祭を用意致せい。尚此の上も王に逆ひ妄りな舌を弄ぶなら、祭司らとて逆徒の刑は逃れぬぞよ。――王命に從へい。

祭司之長　エホバの祭司らには、聖き祭壇を徒の血に穢すべき手は御座りませぬ。

サウル　はあ、（激しく）逆徒ぢや。

（侍臣出づ。）

サウル　（壇を下り祭司之長之面を睥視したるまゝ）此の逆徒を死罪に引けい。

廷臣　恐れ乍ら神の祭司を、――

サウル　われらより即刻の死罪に渡す。引けい。――

（侍臣已む無きこゝろにて帷を開き、内に向いて何事か呼ぶ。）

（――衞卒二人出づ。）

祭司之長　只今聖の御跡に從ひ參らするこそ、己の身にはいかばかり幸ながら、神の祭司の血に濡るゝ御座こそ、やがて必滅の秋の嵐に碎け、イスラエルの王の劍も新な空の光りと共に、神を敬ふ若人の手に輝くは程遠うも御座りますまい。

サウル　（生色無く）疾う引けい。行けい。

（祭司之長、侍臣と衞卒等とに圍まれて去る。）

第六段

（夕暗頓に迫る。）

サウル　（倚ほたゝずみたるまゝ心空しく）　行けい、行けい、――サムエルも祭司らも、暗のあなたに逐はれて行けい。――天が下は暗に崩るゝ、神の祭司の血に染まば、イスラエルの王の座も一と夜の風に碎かるゝぞよ。――行けい、行けい、夜半の劍も四方の落葉も、四方の嵐に逐はれて行けい。――イスラエルの王の劍は新な空の、――王の劍が牧羊者の手に輝くと、――（蹌踉として窓の方に歩み出で）　はあ、炎を上げい、天が下はわれら定むる。嵐吹く野に空に叛逆の指が散らば、その野に空に王の怒りの炎を上げい。――

（譫語の終りに近くアブネル出て、少時扉口に立ち止りゐる。）

アブネル　（サウルの方に歩み寄りて）　我君、――

サウル　（夢より醒むるがごとく）　アブネル、――

アブネル　御座に御直り遊ばしませい。

（宮女二人各々燭火を携へて出で、左右の燭臺に之れを置きて又靜かに去る。）

アブネル　御座に御直り遊ばしませい。

（サウル、アブネルに扶けられて王座に着く。再び城の内部より歡稱の聲、「千代ませい、八千代ませい」サウル、――」と呼ぶ聲が聞ゆ。）

サウル　（慄然として）　何事ぢや。

アブネル　納貢の御式が廣間の方に取り運ぶものと見えまする。

（間。）

アブネル　早何事も甲斐無き言葉を重ねて申し上げは致しませぬ。唇に任す務の果つる上は、たゞ老の手に生死執着の忠を集め、然ばかりも御胸を惱むるものゝ影をば、地上に地下に狩り盡すまで、アブネルの眼は瞑りますまい。――御齡の春より多へ御身の影に添ひ參らする老の僕を、御前を衞る不死の犬とも思し召し、今はいかなる御望みをも、御心のまゝに仰せつけ下されませい。

（間。）

サウル　（足下に眼を注ぎたるまゝ）　ダビデを失きものにせい。

（間。）

サウル　ダビデを失きものにせい。

アブネル　承りまして御座ります。――まことに此の若人が自こそ罪を知らずも、斯くまでに君の御安息を妨げましては、僕には早善惡を論らふ心は御座りませぬ。仰せのまゝに就らせまする。たゞ、サムエル樣御他界のけふと申し、故も無く遽に御誅戮を仰せ出で御座りましては、然らでも日頃ダビデを讃ふる狂燥に掟を紊る民の上

下、いかばかりか擾亂し、ひいては御國の楯矛まで、却つて危う搖らぐまいとも申されませぬ。何か然るべき術を講じて——、

サウル （再び焦ら立ち行きて） あすの煩ひはあすにせい。けふの野山に實り行くダビデの名が、尙日を重ねて雨露に會うてはならぬのぢや。

アブネル 御心安う在しませい。何事もアブネルが承りまして御座りまする。

（侍臣出づ。）

侍臣 祭司之長の死罪は只今執行せまして御座りまする。

サウル （辛うじて） 祭司之長の、——

（間。）

アブネル 我君、ともかくも御座所の方に今は暫く御寛ぎ遊ばしませい。

（間。）

アブネル 我君、——

（サウルは心空しく壇を下り、アブネルを從へて侍臣の掲ぐる帷中に入る。）

——幕——

第二幕

場面前幕に同じく、時は旬日の後。麗に晴れたる朝。日の光り注ぎ入る。

第一段

（王太子ヨナタン、窓側に倚り、ひとり物思ふこゝろにて秋日に輝く宮苑を眺めゐる。）

（ミカル出づ。）

ミカル あゝ兄上、こちらで御座りましたか。只今お部屋へお伺ひして參りました。

ヨナタン 朝餉の間には見えなんだが、どうぞしたのか。

ミカル 何か頭が重うて氣儘を致して居りました。——したがもうこちらは、父上もお出ましで御座りまするか、——もう御評議の刻で御座りまするか。

ヨナタン まだよい頃の間はあるが、何ぞ用なら部屋に參らう。

ミカル いゝえ、——何でも御座りませぬ。お妨げでさへ御座りませねば、却つて靜なこちらで、少時お話し致し度う御座りまする。（窓に近き交椅に着く）

ヨナタン 面持が惡しう見ゆる、まだ心地は勝れぬか。

ミカル つい晴れ晴れも致しませぬ。——それよりも兄上こそ、今度のお急ぎでは、どのやうにかお疲れで御座りませう。ゆうべはようお寢みなされましたかや。

ヨナタン　別に變つたことも無い。いづれは風の來去のまゝに刃を逐うて經る我等ぢや。
ミカル　ほんに恐ろしい戰ばかりで御座りまする。それでも今度はよう早うにお歸りで御座りました。又永い一と月も二た月も胸騒がしう送ることかと存じましたに、思ひもかけぬお召し還しが、ほんにうれしう御座りまする。——父上も御病ひの夜晝に、たゞ兄上のお歸りばかりお待ち受けで御座りました。
ヨナタン　したが、自體父上はどのやうな御樣子なのぢや。昨夜は夜更けゆゑ、御挨拶を申したばかりで御氣色もよう伺はず、今も朝餉の僅の程では、さしてお變りも見えぬやうなが、——
ミカル　ゆうべ兄上のお歸りから、父上も俄に常のお心にお立ち歸り遊ばしましたが、ほんにこの程は、祭司之長のお處刑からで御座りまする、何ぞの影が絶え間無うお身を逐ひでもするかして、日夜分たぬお譫語の恐ろしさに、お側の男女も常の心は逐はれて居りました。
ヨナタン　（半ば自からに）あるまじい御自らの御心ゆゑ、御手の劍も民の心も甲斐無う搖るゝ。今遏むべきを遏めずば、やがてはイスラエルの野も山も此の贖罪の血に濡れねばなるまい。——
（間。）

ミカル　兄上、——お伺ひ致し度いことが御座りまする。
ヨナタン　何ぢや。
（間。）
ミカル　お便りは、——死海の岸からのお便りは、まだ御座りませぬかや。
ヨナタン　まだ今朝は何の便りも來ぬさうな。
ミカル　ほんにどうなつたので御座りまする。——兄上、ダビデ樣は、モアブ人との戰は、どうなつたので御座りまする。
ヨナタン　俺も今その便りを待てゐるのぢや。之から敵に向ふといふ早打が來て、五日にもなると聞いたが。——
ミカル　六日で御座りまする。ほんに此の六日、夜晝にめぐる轍が狂はしう擾れでもしたことか、日の光りも夜の暗も身に辨へる心は御座りませぬ。ほんにどうなされたので御座りませう。このやうなことは今までにも御座りませぬ。どうして、——何でお便りが無いので御座りまする。
ヨナタン　萬に一不祥な事が起つたならどうで知らせは來る筈ぢや。便りの無いのは氣懸りながら、それかというてまたきつう案じることも無い。それに、——
ミカル　兄上、けさ女どもが街方から聞いて參りましたが、何か今度の戰をばダビデ樣の生きてはお還へりになり難

い穽(おとしあな)とか、もつぱら衢(ちまた)の取沙汰ぢやと申しまする。アヒトペルの救ひといふも、まことはつくりごとで、ダビデ様の小勢を味方に離させ、恐ろしいモアブの大軍にお向けなされたのぢやと、そのやうなことも聞いて參りました。

（間）

ミカル　口さが無い下々の噂なぞを、心にかけもいたしませぬが、あんまり永うお便りが無いので、――したが、よもやそのやうな、なあ、まことでは御座りますまい。そのやうな恥ぢがましいたくらみがよもや、――兄上、いづれ賤しいしもべどもが、つい徒に言ひふらす根無しごとで御座りませうぞえ。兄上、――

（ヨナタンは陰鬱に眼を落して居る。）

ミカル　（言葉强く）兄上、――

ヨナタン　深う案じることは無い、たとへまことにしたところで。――

ミカル　そんなら――（碎かれたるがごとく面を袖に埋む）

（間。）

ヨナタン　（ミカルの肩に手を置きて、半ば自らに確めいふごとく）妹よ、何事もエホバを信じて望み深う祈る心を失ふまい。己が道を神のみ畏れて一と筋に步むダビデが、今身を果すことは無いのぢや。果てゝはならぬのぢや。それに、――たとへ父上はじめ皆々はダビデを恐れて、恥ぢがましい策(てだて)を廻らさうと、ヨナタンはいつもお身たちの味方(かたうど)である、正路を走る勇士の駒を、なんのたくらみの係蹄(わな)なぞで捉へはさせぬ。――ようお聞きやれ、その衢での噂といふは根無しごととも言はれぬが、外に兄の計(はから)うたことがあつて、ダビデはきつと恙無うあすにも戾つて來ようぞよ。そして又、――もうこの上由無い父上のお疑ひから、國が徒に亂れてはならぬ、ゆくすゑずゑの固めにも、今は兄より是が非お願ひして、そなたをダビデの渝らぬ妻にときつと取りなして進ぜる覺悟ぢや。――何事もきつう煩ふことは無いぞよ。

ミカル　兄上、――（ヨナタンの衣袂に縋りて泣き入る）

（間。）

ヨナタン　（ミカルの手を取りて）ミカル、何にしても一と先づ兄が部屋まで參るとしよう。此處は早父上のお出ましに程もあるまい。どうで之まで知つた上はまだ外にいうて聞かせることもあるゆゑ、さあ、ともかく――（ミカルを起たしむ）

（侍臣出づ。）

ヨナタン　何ぢや。父上が早出御になるか。評議の刻が早められたか。

侍臣　總統が早々の御出仕にて、君も俄の御動座を仰せ出で御座りました。御評議の刻に就きては別に仰せも承はりませぬ。

ヨナタン　アブネルが早出仕致したと。

ミカル　（ヨナタンの腕を取りて）兄上、——

（ヨナタン、ミカル去る。）

第二段

（やゝ暫く間ありて後、二人の侍童帷を左右に開きて出で、そのまゝ跪拜す。）

（サウル、ヨナタン、ミカル、アブネル出づ。）

サウル　（心晴れやかに王子等と語らひつゝ王座に歩み寄る）さうか、評議まではミカルも此處に居つてよいが、又いづれともお身たちの心のまゝに致すがよい。（座に着く）

（ヨナタン、ミカル禮して去る。）

アブネル。我君、實は差し迫り、ひそかに申し上げ度き仔細あつて、恐れ乍らかく御早々の御動座をも願ひまして御座りまする。（恰も場を去らむとする侍臣に）御評議の時刻まで、何人も御前を御遠慮申すやう、衞護の者に心得させい。

（侍臣去る。）

サウル　（悉く心の平衡を失ひて）何事ぢや——早打が參つたか。

アブネル　我君、ダビデ討伐の儀は既に空しう成り果てました。

サウル　何と申す、——

アブネル　御思し召しに從ひ參らせ、ダビデを討つと案じましたアブネルの愚の策は、思はざる王子の御計ひを受け、尙その他不覺の違算にて今は甲斐無う破れまして御座りまする。

サウル　おけい、——

アブネル　一とわたり有るがやうを御聽取り下されませい。王子は御歸城の御途すがら、ダビデが死戰の趣を何處よりか聞し召され、直ちに御麾下の一千餘騎を、ダビデの援護に御遣し遊ばされたので御座りまする。實は此の仔細は兩三日以來聞こえて居りましたが、今ダビデが三千の精騎を持てばとて、倍にも餘るモアブの刃に包まれては、よも免れまいと思ひ賴み、成るべくば王子の御計ひも御耳には入れぬ覺悟で御座りました。然るに昨夜夜半、かねて戰場近く遣しました腹心の者が戻つて參り、戰のやうを語るを聞けば、連日の亂戰にダビデ方は衆寡敵ひ難く、幾度か危ふうなりながら、また一昨の日暮れより夕空の星に光りを合せ、草間にもダビデの刃が息づ

いて參つたさうに御座りまする。之までの例にてらし、一度彼者が劍の運に歸りし上は、早勝敗も定まるものと申さう外は御座りませぬ。事悉く思ふに違ひ、今はあすにも彼者がいかやうにか思ひあがつて、御前に出でむも知れませず。昨夜は王子の御歸城もあり、何事もその上御包みは致しかねまする。併し乍ら、――

サウル　(言葉重く)　何でぢや。――何でヨナタンが、何で我子までが、此の牧羊者に力を添へてわれらの思ひに逆らふのぢや。われらを父と呼ぶ唯一人の男子まで、野に吹く風に聲を合せて王の面を嘲らうとか。何でぢや、何でヨナタンまでが、賤しい土民に心を寄せて。――

アブネル　王子はたゞ、アブネルが老の吐息に編み出でし蜘蛛の網の、風にも搖らぐたくらみを御嘲り遊ばしまする。

サウル　何と、――

アブネル　われから申し上ぐる面も御座りませぬが、きのふ、けふアブネルこそ曾ては知らぬ耻と悔みに責められて、胸も眼も夜晝に息んでは居りませぬ。たゞ君の御胸の安けくとねがふ忠の一と筋に、劍に老ゆる身が恥を忘れて、けふ勢ひ立つ若人の駒のゆくてに、淺間しうも企てました蜘蛛の網手は、今は自の呪ひの網となりはてまして御座りまする。まことにヨナタン樣こそ日頃正義の日月に上下を御照らしある御心には、此の御計ひはさもあるべく、思ふにつけて老の身の恥は限りも御座りませぬ。

(間。)

アブネル　我君、アブネルが今生最後の御暇を只今茲に賜はり度く、御願ひに參りまして御座りまする。

サウル　アブネル、――

アブネル　躊躇ひ存ふるも君の御爲所詮甲斐無き老の身の、今は一期の思ひ出に、御復命に戻るダビデを迎へて、私事を云ひがゝらせ、彼者と必死の刃を交へ度う思ひ決めまして御座りまする。――王子が貴き御心の只御一向に、行く行くの嵐も潮も御顧み無きはさることながら、かく明白の係蹄を逃れて、今歸り來るダビデの心が、恭謙の昨日のまゝに居らうとはいかにも思ひ寄られませぬ。殊にはいつか下々も、戰の由來を疑ひ語る有樣ゆゑ、はしたなき庶民の聲の潮騒が、いかなる雲を招くとも、けふは豫め測り難く、君が御座の泰きが爲には、ダビデの命こそ世にも忌むべう相成りました。只今ならば彼者も御復命に規定の手勢の幾許も伴ひ難く、我等家子どもの刃を集めてゆめ打ち損じは御座りますまい。又萬が一、白髮の首は運に捨てられ牧羊者の手に上げらるればとて、私事の爭ひより直ちには、劍も駒も王城近く、亂れは

すまじく、其上の手配りなぞも、早アデリエルには申し含めて參りました。もとより王子とていよ〳〵御大事とならば、近衞の鉾に御先き駈け遊ばさるゝは、申すまでの儀も御座りませぬ。――我君、アブネルが生死の力は此の執念の一つに燃え立ちまする。何卒只今、――

サウル　（半ば自らに）　よいわ、――明暗も別ち易からぬ老の身には、一念の矢の行衞も危い。――

アブネル　我君、――

サウル　われら老來の力と頼むヨナタンまで、今は父の思ひに逆らひ、――

アブネル　王子の御逆らひありまするは、神意に逆らふアブネルの詭計ばかりで御座りまする。

（間。）

サウル　何者が何に順ひ何に逆らふとも、凡て迴る此の順逆を誰が知るぞい。王の手に結ばれた國民は何としてか王を離れ、行衞も知らず流れて行く。殘さるゝ王の身はたゞ一り底ひも知らぬもの影の暗に沈むで、――沈むとはいへ流さるゝ。流るゝはわれらとも、われらの民とも、此の迴る順逆を誰が捉へるぞい。今在るわれらもわれらで無う、王もやがて王では無う、民もやがては民では無いのぢや。――

（唐突に銅鑼の聲起る。（高低無く只規則的に斷音ある急撥音の連續。是は尙鳴り轟きて次第に渡る。））

アブネル　御評議の刻で御座りまする。今は何事も重ねて申し上げては居られませぬ。けふ斯くまでの御煩ひをいかにかしてと、日夜に心を碎きながらも不覺にも道を誤り、却つて暗き雲の旗をも招ぎしこそ今更に許し難く、尙この上に彼者を誇らしう御前に罷出させましては、アブネルが死後の刄も凌辱の灰に埋もれまする。我君――何卒御暇を賜はりませい。若人の劍は運に強くも、老の忠に執念の刄をたゝみかけ、生き代り死に更り、死滅の刄を此の御煩ひに刺し留めずば措きませぬ。

（舍人出づ。）

舍人　將軍どもの出仕で御座りまする。

アブネル　我君、――

サウル　（舍人に）　よい、罷り出させい。

（舍人去る。）

第三段

（將軍等續次に現れ、左側の窓を背にして立ち並び行く、場未だ整はざる內倏忽として銅鑼の聲罷み、アデリエル出づ。）

アデリエル　我君、ダビデが戾つて參りました。

（動搖。）

アデリエル　早朝より東南に百騎ばかりが、駒を急がせ參ると見えましたが、「物見」にては、昨夜より引き續き王子の御勢とのみ存じて居りました。然るに右の一勢が王都の東門を入るより早く、男女一つにダビデの名を呼び、――

アブネル　聞き違へては御座らぬか。一昨日まで勝負も分かぬ戰ひの死海の岸より、いかな戰をしようとも今日の内には戻れもすまい。

アデリエル　我等も區々に申し居つたが、早御城門に近づく旗じるしには紛らふ方御座らぬ。

（遠く歡呼の聲聞ゆ再び一座に動搖あり。）

（間。）

サウル　（安からず座を視まはして）ヨナタンは何處にぢや。

アデリエル　只今お庭を御門の方にお急ぎのやうで御座りました。

サウル　呼べい、疾う之に呼んで參れい。

（アデリエル去る。）

アブネル　（將軍等に）各方暫く次室に控へられい。

（將軍等再び續次に場を去る。）

（その最後の一人と入れ違ひて舍人出づ。）

舍人　ダビデ將軍の御歸城で御座ります。

サウル　（焦ら立ちて）罷り出させい。

（舍人去る。）

（ヨナタンに導かれて將軍ダビデ、續きてアデリエル出づ。）

ダビデ　萬王の王の高き御座に、エホバの聖福千代長う止まりませい。――神の靈と大君の稜威とに依り、イスラエルの劍は例無き勝利を得まして御座りまする。

（間。）

（サウルはあらぬ方に眼を注ぎ、ものいはむとしてものいひ難く見ゆ。）

ダビデ　アヅラムの戰後俄の勅を拜し、死海に立ち向ひましてより、引き續きての七日七夜は、たゞ敵味方刄と血とを卷き立つる亂軍で御座りました。幸ひ一昨の暮暗と共に敵の備へはつひに搖らぎ、一時に崩るゝ暗の夜の混亂に、夷らは夜半をも待たず、七千の野邊の屍骸となり果てまして御座りまする。尙分捕の品々は、――

サウル　もうよい。大仰な戰話は童こそ喜び聞かう、――

ヨナタン　我君、――

サウル　（始めてヨナタンに眼を注ぎ諸念怒りに破るゝごとく。）ヨナタン、そちは、――そちは我子か、われらが王位の世嗣はそちか。

ヨナタン　我君、けふこそもろもろの甲斐無き御煩ひを捨

てさせられ、神意に根ざす王權の畏き大義を、再び內外に仰せ出で下され度く、ヨナタンよりの御願ひで御座りまする。

サウル　默り居れい。

（間。）

ヨナタン　申すも歎かはしきことながら此の戰ひは常の戰ひでは御座りませぬ。

（サウル思はず立ち上る。）

アブネル　（サウルを制して）我君。

ヨナタン　もとより此處に何事も過ぎしを論ふ甲斐は御座りませぬ。たゞ例無き不祥の發端も、いづれはエホバの聖旨にて、けふ例無き慶福の終りを實らせ、四方の夷も樣々の言葉一つに、君の稜威を今更高う讃へまする。此の上も御座の雲は晴れずして、畏き聖劍が尙徒に亂れましては、神怒のほどこそ思ふも畏れ御座りまする。――父上、けふの日を事凡て慶福の終りを實ぶ緣の機と思召し、サウルの家又イスラエルの繁榮の爲、ゴリアテの日の御約束こそ、――

サウル　（ダビデの方に怒を集めて）ああ。――

ヨナタン　私より御願ひ申し上げまする。此の日頃上に御光の隱るゝにつけ、ともすればつく這ひ寄する祥なき霧をも、幾代長くイスラエルの地より拂ふに、之に過ぎたる緣とて御座りませぬ。けふこそ先年の御諚の如く、ミカルをダビデに御娶せ遊ばしませい。

（ミカル場に現れ、尙進みかねて扉口に立ちてゐる。サウルは之を知らず。）

ダビデ　恐れ乍ら御諚を賜ひし曾ての日より、男の誓ひは王女の御胸に捧げまゐらせ、君に奉る僕の忠と共に、此の身が生死の基とも相成りまして御座りまする。

（サウル王劍の柄に手をかく。）

ヨナタン　父上、――

（ミカル走り寄りてサウルの前に跪く。）

ミカル　父上、父上、――

サウル　はあ、ミカル、賤奴がそちの名を辱しむる、除けい。今父が、――

ミカル　父上、お許し下されませ、わたくしは、――

サウル　そちの恥ぢをも父の劍は雪ぎとらする、除けい。

ミカル　わたくしは、――わたくしの命は、ダビデ樣ので御座りまする。

サウル　（壇を降りミカルの肩を掴みて物狂ほしく）ミカル、――心が亂れたか、惡靈に憑かれてものを申すか、よも王の血を泥に汚して、父に狂亂を敎へはすまい。――まことの心をしかと申せい。

ミカル　（眼を伏せて）　此の身には外の心は御座りませぬ。（サウル思はず手を離す）

ヨナタン　（再びミカルの肩を摑まむとするサウルの手を右より抑へて）　父上、——

ダビデ　（同時に左より手を延べて）　我君、——

サウル　（ダビデに向き反りて）　はあ、そちは、——

ダビデ　恐れ乍ら王女の御身に御手を、——

（ミカル、サウルの手に縋り付く。）

サウル　（悉く己を失ひ、ミカルをヨナタンの手に突き倒し）　おけい。——（劍を拔きてよろめく。）

（ダビデ右肩を斬られてダビデを斬る）

（王は動かず、一座亂るゝ中を。）

——幕——

第三幕

此の幕はたゞ正面のみをして場面を作り、舞臺左右の前方には黑色の幕を垂れて各側面を覆はしむ。

サウル王宮殿、廻廊を宮苑の一部（舞臺の床）より見る。正面中央に幅廣く高き石段あり、登りてそれを同じ廣さなる扉口に導き、その左右に廻廊を走らしめ、欄干は高き圓拱を戴きて續く。（圓拱は此の場面にては左右に各々二個見はる。）

正面奥の扉口は暗色なる兩開きの帷をもて閉ぢ、その前に高く油燈を吊す。

前幕と同日の夜半。——弱き油燈の光り。

第一段

（ミカル被面し、同じ姿の侍女ラハズと共に庭の右手より忍び出で、石段右側に身を隱す。——燈火正しき中央に在りて、石段の兩側は各々深き黑影を作る。）

ミカル　（侍女に身を寄せ左手の奥を窺ひつゝ囁きて）見えたかや。——ラハズ、見えたかや。——

（間。）

ミカル　えゝ、何をして、——よも、——よも手ちがひになりはせまい。

ラハズ　まあ外の女でも御座りませぬ。したが、——

（間。）

ミカル　ひよつと、——ひよつとお傷が重りでもして、——

ラハズ　はて、姬君樣、お氣强うなされませ。——

ミカル　（何者をか認め出でたるがごとく）　ああ、あれぢや、タマルぢや。

（やゝ長き間。）

ラハズ　さうでは御座りませぬ。上(かみ)のお窓からお燈火(あかし)が洩れたので御座りまする。——それにしてもあの女(たご)が、三

番の夜警も早間近いと知つて居らうに。――

ミカル　えゝどうぞいの、もう、――

ラハズ　姫君様、ちよつとこゝにお待ちなされて下さりませ。わたくしはお木戸まで一と走りして、もうお番が更つたか見て參りまする。タマルの連れ合ひさへ彼處に來てゐるやうなら、ともかくお木戸は出るとに致しませうぞえ。このやうな處に時を移して、誰に見付けられてもなりませぬ。

ミカル　さうぢや。行つて見てたも。ぐづぐづしてはゐられぬことぢや。

（ラハズ走り出でむとして、忽ち何物をか見出でたるがごとく、又石段の影に隱れ入る。）

（間。）

ラハズ　今度こそさうで御座りまする。まあ漸のことに（手を振り招きつゝ）早う、早う、――

ミカル　早う、早う、――

（間。）

（庭の左手侍女、タマル、走り出で佇るゝごとくミカルの前に跪く）

タマル　（息を切らしつゝ）遲なはりました。御免下さりませ。

ラハズ　何をしてゐやつたぞえ。もう、――

ミカル　どうぢや、何もよいかや、――

タマル　お宜しう御座りまする。何かのお仕度はヨアブ様のお屋敷に備ひました。はや殿様も彼方でお待ち受けで御座りまする。すぐにお出ましなされませ。したが、――

ミカル　ああ、お傷は、――（タマルの腕を捉ふ）

タマル　いまはお痛みもさしては御座りませぬ。したが――（既に走り出でむとするミカルを引き止め）姫君様、お待ち下さりませ、いま東のお廊下を誰やら參るやうで御座りまする。しばらくお植ゑ込みに隱れてこのやうに遲なはりましたが。どうやらアブネル様とお見受け申しました。その內舍人のイサクが追ひ付いてお立ち話のやうすゆゑ、思ひ切つて出て參りましたが、今刻の御參內では、きつとこゝから大君様の御寢所にお出でゞ御座りまする。しばらくお待ちなされませ。

ミカル　えゝ、何のとぐづくしてゐては、もう誰ぞに見られてしまふであらう。――

ラハズ　（タマルに）それでお木戸の方には、手落ちも無いであらうなあ。

タマル　それに手落ちがあつてよいものかえ。二番の夜警からはわしの連れ合ひが、ちやつと更つて來てゐることぢや。

ミカル　（二人を覆ひて）しつ、――（左手の廻廊の奥に

何者をか見出でたるがごとく）あ、アブネルぢや。――

（各々面を覆ひて潜む。）

第二段

（やゝ長き間。）

（アブネル廻廊を左手より出づ。）

アブネル　（立ち止りて）誰ぢや、何者ぢや。

（三人は相抱きたるまゝ共に身を低うす。）

聲　（右手の廻廊より）君に千代ませい、アデリエルぢや。――アブネル殿か。

アブネル　君に千代ませい。

（アデリエル廻廊を右手より出づ。）

アデリエル　お身も登城と存じて參つた。――ダビデが兵を集めるとな。

アブネル　如何にも。戰場より伴ひ參つた手勢の外、日頃ダビデに心を寄する其方此方の諸兵まで、追々に集ふと見ゆる。――愈々の御大事ぢや。寸時も早く鉾を集めて、今宵の内にも過たず彼者の首を上げねば、災禍の及ぶ所は測り難い。

アデリエル　申すまでも無い。したが何よりも王子が御同意無くば。――

アブネル　其儀をお身に諒らひ度く、今お館へ丁度お身が登城の後に立ち寄つたが、王子とて斯くとならば此の上ダビデをお被ひもなされまい。申さば此の討伐の成敗も王子のお靡で定まることぢや。今朝の椿事より御座所にも御出で無くお引き籠りの様に見ゆるが、即刻御旗を仰ぎ度き儀は、御近親のお身の口よりいかにもしてお願ひ下され度い。――お引き受け下さるゝか、必ず御同意の仰がるゝやう。

アデリエル　――承知致した。

アブネル　何分にもお頼み申す。身共は今より勅を仰ぎ、たゞ一番の暗矢となつて此の御仇に立ち向ふゆゑ、お身も王子と御共々、直ちにお續け下され度い。さらば、――安かれい、何事もエホバの下に。

アデリエル　安かれい、エホバの下に。

（アブネルは帷を排して中に入り、アデリエルは廻廊を左に去る。）

第三段

（間。）

タマル　いまで御座りまする。その明い所は一人一人に出た方がよう御座りまする。早う。――

（ミカル先づ忍び出でて石段の前の明き部分を走り拔け、左手の影に至る。次いでタマル出で、恰もラハズ

の之に續きて燈火を浴びんとせる時。)

聲　(庭の右手より)　止まれい、何者ぢや。

(ラハズはその儘石段の中邊に蹲りて面を伏す。庭の右手より燈の光先づ射り、續きて衞卒一人走り出づ。)

衞卒　(ミカルとタマルとの潜める左手の影には心付かず、ラハズの背に光を向けて)　何者ぢや、誰ぢや、やあ女(をなご)ぢやな。立てい。——立ていと申すに。えい。御寢所近く深夜に、(ラハズの腕を取りて引き立つ)

(左手の影よりタマル跳り出で、篝燈の照らさゞる影を廻りて衞卒の背後に至り忽ち手にある匕首を閃かして衞卒の胸背を刺しゑぐる。衞卒急を突かれて篝燈を落しよろめきつゝ右手の影に至り、仆れて死す。)

(ミカルも影より出で、三女幽燈の下に相抱きて空しく戰きゐる。)

(間。)

ラハズ　(俄に夢より醒めたるがごとく二人を拉して)　早う——(三女は倘相抱くがごとき姿にて、庭の左手に走り入る。)

第四段

(長き間。)

(廻廊を左より、舍人の炬火を先に立てゝヨナタン出づ。倘無言のまゝ扉口の前を歩み過ぎんとしてふと立ち止る。)

ヨナタン　はあ、何ごとぢや。アブネルが參つて居るな。また、——(少時思考して舍人に)　そちは先に參つて、兄が急(にはか)の用で會ひに來たと、ミカルの女(をなご)どもに申してくれい。アブネルの聲が聞える上に、どうやら父上のお聲が高い。わしはしばらく御寢所に立ち寄つて、直に後から參るとしよう。

舍人　畏りました。(廻廊を右に去る)

(ヨナタンは倘少時默思し。さて、帷に手を觸ると同時に帷は中より侍童の手にて開かる。)

第五段

(サウル現る。アブネル之に從ひ、二人の舍人左右に炬火を持ちて侍す。(一同未だ廻廊には降らず。)ヨナタン扉口の前に跪拜す。)

サウル　(激しく)　はあ、退り居れい。——

ヨナタン　我君は夜半も過ぎて何方(いづかた)に御出でまし御座りまする。

サウル　其處退り居れい、妨げ致すな。

ヨナタン　我君、——

サウル　えい、ものを申すな。そちこそは耳目の汚れぢや。

逆徒の杖に王を嗣ぐべき首を折られて、父の冠も母の墓をも、凌辱の灰に埋め居つたわ。出て行けい、二度とわれらの面前に罷り出るな。世の果の何處へなりと、自こそ灰を被つてつくばひ行けい。──はあ、退り居らぬか。今こそに暗に土民ばらが蠢き初むる。──

ヨナタン　我君、ダビデは早王都の内には居りませぬ。

（更に二人の舍人左右に加はり炬火の數四個となる。）

ナヨタン　己が所有を凡て棄て、ダビデは今宵ギベアの市を立ち出でまして御座りまする。

（間。）

ヨナタン　彼者の館近く夜と共に騷がしうなる氣色を聞き、取り敢へず見定めに馳せ參じましたところ、旣にダビデは何方へか退却の後で御座りました。諸兵若干に王都の男女も數を加へて、群れ騷ぐやうには御座りましたが、案ずる所誰誘ふとも無く思ひ思ひに寄り集ひし雷同の衆と見え、隊の長ども數人の外はダビデの退去も知りませず、おのがじゝ埒無きことを、たゞ姦しう呼び合ふばかりで御座りまする。ともかくも私より輕擧を訓めて居りまする內、早歸る心と舌に君の御名を呼づ立つもあり、いづれは附和の群衆の追々に散り始め、何事も常に歸るは今いくばくも御座りますまい。

（更に二人の舍人左右に加はりて炬火六個となる。）

（ヨナタンの舍人倘炬火を手にしたる儘廻廊を右手より出でゝ深く跪拜し、扨ヨナタンに近づき、書狀のやうなるものを渡しつゝ何事か囁く。ヨナタン愕然とす。）

（更に二人の舍人左右に加はりて炬火八個となる。）

サウル　（夢見るごとく蹌踉として廻廊に降り立ち徐に）追へい追へい、逃してはならぬのぢや。──何處までも、地の果までも追ひ立て行けい。雨も嵐も王の怒りに伴うて、追討の刃を地の東西に渦巻かせい。（左手に歩み出でつゝ）追へい追ひ立てい、この暗に野山も空も蠢き初むる、──

（炬火を持てる舍人等左右に分れ、王の步調に隨ひ動く。ヨナタンとアブネルとは動かず、各異る姿にて物思ひゐる。）

（次のサウルの言葉の間にアデリエル左より出づ。）

サウル　はあ、アデリエル、追へい。ダビデを逃してはならぬのぢや。暗に走る謀叛の眼に明日の日影を見さするな。疾う追ひ立てい。（顧みずして左に去る。）

（侍童舍人等續きて去る。）

アブネル　（ヨナタンに禮して王に續き、アデリエルの前を過ぎりつゝ）お出で下さらぬか。

アデリエル　直に續いて參る。

（アブネル左に去る。）

第六段

（間。）

ヨナタン　（舍人に）　外に女どもも誰も居らぬか。

舍人　誰一人居りませぬやうに御座りまする。いづれの部屋にも何の應へは御座りませず、そのお文は姫君樣お部屋の扉口に御座りました。

（ヨナタン書狀を披きて讀む。）

（間。）

アデリエル　（ヨナタンの方に歩み寄りて）　只今お部屋へお伺ひ致しましたが、——

ヨナタン　アデリエル、お身は暫く此の城を統べてくれい。

アデリエル　何と仰せられまする。

（間。）

ヨナタン　（半ば自らに）　いよいよの時が來たのぢや。今こそうつし世の生死正邪の思ひの下に、我名を呼ばふ宿命の聲も聞ゆる。父の王の御屍骸の衣となつて、此の身は野末に果つる日もいよいよ廻流り來たさうな。——今はわしも行かねばならぬ。野分の行衞の野に山に、いづれ落葉の甲斐無い劍を揮ふまでぢや。

アデリエル　その儀ならば私とてやはか遲れは致しませぬ。海山の何處へなりと、君に從ひ參らする一と筋の道より外は、此の世にも又來る世にも、身に存じ寄ることは御座りませぬ。

ヨナタン　お身の忠は疑ひもせぬ。したが、いよいよの時が來たとはいへ、まだけふは明な刃が父上に迫るといふのでも無い。四方の氣色はともかくも、ダビデ自らこそ今頭を上げて王に向ふ心は無いのぢや。——

（間。）

ヨナタン　（半ば自らに）　それも恐らく此の暗の夜が、望月を待つひとところの程であらう。イスラエルの王權を誤り用ゐたサウルは仆れ、神の詩人のダビデは立つべく、早エホバの道には定められてあると見ゆる。けふ逐はれゆく若人の胸の中に、やがて野山に溢るゝ四大の力を則ち已が力と見る、雄々しい望みが自ら湧き立たうとは、今宵父上の御聲こそ證しをなさるゝ。——まことに萬軍のエホバから御覽しては、神怒の嵐に逐はれ行くサウルを扶け、自ら求めて自らの血を野山に獵る我等こそ、寧ろおろかの叛逆とも思し召されう。止まると見ゆるもの必ずしも止まらず、きのふの順逆もけふは上下の所を更ふるが、人間の流轉の定めぢや。——（アデリエルに向き直りて）　たゞ、いよいよ父上に刃が向ふと聞ゆる日までは、ともかくも王城に主が無うては叶はぬゆゑ、お身は暫く後に殘つて此の城を守つてくれい。（右手の奥を

見やりつゝ）――ミカルも何れへか落ちたさうな。
アデリエル（愕然として）姫君が――
ヨナタン　ダビデのあとを慕うて宵の間にも城を出たと見ゆる。かねてよりかうなる事かと案じてゐたが、――
舎人（唐突に叫びて）王子様、何者か仆れて居りまする。
（一同欄に凭りて下を見る。舎人石段を走せ下る。）
舎人（炬火に照らして見つゝ）やあ、刺されて、――夜警の者で御座りまする。背に匕首を刺されて、――
ヨナタン　刺されて居る、――
（ヨナタンも、アデリエルも石段を走せ下る。）
舎人　ああ、女の被面が落ちて居りまする。――
ヨナタン　どれ、見せい。（舎人より被面を取り、炬火に照らし見て、思はず聲を上げ）ああ、――
（三者凝立してあり。）

――幕――

第四幕

「曠野」の南、死海に近き村家の一室。
正面、壁の中央に廣やかなる窓あり、その腰は椅臺を作し、窓外には荒凉たる野色を越えて遠山も見ゆ。
右手、壁の中央に扉あり。その奥、室の右隅と窓との間に、小さき卓子と交椅とを置く。
左手、壁の中央に帷をもて覆へる扉口あり、その左に細長き卓子を置き、卓上には竪琴、武具、華美なる貴女の套衣なぞ、凡て村家の建具には、悉く應はざる高貴の物具亂れ置かる。
前幕より旬日の後。夕近く曇れる午後、風吹き雲亂れゐる。

第一段

（ミカル窓腰なる椅臺の端に坐し、ダビデ右肩を白布にて裹みミカルの膝に枕して眠りゐる。ミカルは外を眺めつゝ靜に歌を唱ふ。）
ミカル（歌）――

夕されど　あらしはやまで、
若人は　かへりも來ねば、
こひごゝろ　髮もみだれて、
秋の葉の　散りまふまゝに、
あらし吹く　野に走せ出でし、
行衞しらずも。
ああ君よいづこぞや。――
わがしらぬ　森のあなたの

いづこにか　行きたまひぬる。
この風の　渡る行衞の
いづこにか　君をいだかむ。
ああ君よいづこぞや。――
きた風の　泣きわぶ聲乎、
こひごゝろ　呼ばはる聲乎、
秋の葉の　くるひくるひて、
森も野も　散るかあらしの
人知らぬ　夜のあなたよ、
行衞しらずも。――

（ダビデ歌の末節より眼を開きてゐる。）

ミカル　お眼ざめ遊ばしましたか。

ダビデ　別に眠りもせぬ。――

ミカル　まあよう仰せで御座りまする。もうけふも暮れまするぞえ。

ダビデ　そんなになるか。（起き上り坐して）どうやら咽喉が渇く、水を呉れい。

ミカル　（立ち上りて）お冷が宜しう御座りませう、井戸から直の、――

ダビデ　む。

ミカル　（椅臺の褥を直しつゝ）さあ、もう一度お横になり遊ばしませ。

ダビデ　もうかうしてゐよう。（立ち上りて）また空が荒れて參るな。

ミカル　ほんにこゝは夕方になると、いつでもかうと見えまする。――すぐに參りまする。（右手の扉より去る）

（ダビデはそのまゝ動かずして外を眺めゐる。）

（間。）

（ミカル窓外に上半身を見し、手をのべて湯呑みを差し出だす。ダビデ取りて呑む。）

ミカル　（手を窓框に置きたるまゝ）氣味の惡い空の色で御座りまする。また今夜もあの恐ろしい風の聲が、空も野も掻き裂くやうに、夜すがら聞えるので、御座りませう。――お水は、もつと汲むで參りませうか。

ダビデ　もうよい。

（ミカル、ダビデより湯呑みを取りて右手に見えずなる。ダビデは再び座に着き、椅背に倚りて心を捨つ。）

（間。）

（ミカル右手の扉より、湯呑みに野花を挿したるを手にして出づ。）

ミカル　（野花を右隅の卓子に置きつゝ）ゆうべの嵐に花は殘らず散らされて、之だけ淋しう垣根に咲いて居りました。むごたらしい今夜の風にはいづれ逃れも無いも

のを、あはれな花で御座りまする。(ダビデに並びて坐し、その手を取りて) まあお手の暑い。それでもお痛みは、――やつぱり御座りませぬか。

ダビデ　何にも覺えぬ、――

ミカル　ほんにもう何もお癒り遊ばしたぞえ。あのヨアブとのお散歩(ひろひ)さへお障りにはなりませいで、――なあ、いよ〳〵けふは御本復で御座りまする。

ダビデ　一體此處に來てもう幾日になるかしら、――

ミカル　ちやうどけふで十日になりまする。それでも、あんな御無理をなされたからは、もつと〳〵永うお身動きもなるまいことゝ存じましたに、まあ夢のやうに早いお癒りで、こんなうれしいことは御座りませぬ。

(間。)

ミカル　ほんに何もかも夢のやうでは御座りませぬか。浮世の涯の曠野(あれの)が原に、人にも知られぬ朝夕を送る現在(いま)が、思へば思ふほど夢のやうなら、けふまで忍び忍びのつらい月日も、また長い夜の夢かと思へまする。(ダビデの胸に倚りて) ほんに魚も住まはぬ死海の岸の曠野(あれの)といへば、曾てはどのやうにか恐ろしう思ひもしたもの、今は身に此處より外の都も家も御座りませぬ。夜毎の空に吹き荒ぶあの嵐が、わづらはしい浮世の姿を拂うてくれて、こしかたもゆくすゑも、昔死海に沈むだ町と一つにわれらは無いもので御座りまする。ほんにいつまでもいつまでも二人の戀の胸ばかり此の世の涯に、見果てぬ夢を結び通して居りませうぞえ。

(間。)

ダビデ　(半ば自らに) 夢は明暗の境によろめく影ぢや。やがて光りか暗かいづれか一つに醒めずばなるまい。――小止みない人間流轉の流れの中に、ふとした渦卷きの淵があつたとて、限り無う續くこしかたもゆくすゑも忘れてはゐられぬ。現在(いま)のわれらこそ曾てのわれら又將(やが)てのわれらぢや。いつまでもうつゝ無う渦卷く夢に溺れてはゐられまい。

ミカル　(ダビデの言葉の間にその胸より離れて) そのやうなものにお思ひなされまするか。永い年月、夜も晝も願ひ通した喜びの日が今こそ目前(まのあたり)來て居りまするに、――一と日でも一と夜でも誰憚からず二人きりでゐられうならと、あのやうにこめた祈願が、今こそ現(うつゝ)にも叶うて居りまするに、――ほんにかうなればこしかたもゆくすゑも、なんにもわづらふことは無いでは御座りませぬか。二人の戀の胸の外には、世も人もありとも知らぬ喜びを、たゞ束の間の影のやうに思召しなされまするか。

ダビデ　喜びは光りと暗とのかつ爭ひかつ幸ふ實相(うつゝ)の中に

こそある、生死の力の等しく廻る地に水に人間の喜びは盡きずにあるのぢや。蒼ざめた月の繭からつむいだ絹の細糸なぞでは、日の喜びの旗を織るには便無い徒な夢の緒琴に束の間の喜びを歌はうとて、いづれ空しい夜の影なら、やがて朝吹くそよ風にもあと無う散らされてしまふばかりぢや。

（間。）

ミカル　（哀なる絶望を抑へつゝうなだれて）　ゆくすゑのことゝても兄上が何もお含みゆゑ、しばらくは此處にかうして、浮世忘れた朝夕を送つてゐても案じることは無いでは御座りませぬか。――父上の御不興も畢竟は御病ひのなすわざゆゑ、やがて一陽の春にもなれば、あの頑なお胸の中も野山と一つに柔ぐは定のことで御座りまする。今は閉ぢた鐵の扉もその上は吹く春風に自づと開け、われこそ男女の歌にも迎へられて、うれしう王都に歸れることで御座りませぬか。――たとへまた、あの王都には歸らずとも――タビデ樣、もうこのやうな話はやめに致しませうぞえ、なあ。――

（間。）

タビデ　（眼を足下に注ぎたるまゝ。漸々に熱しゆきつゝ）　萬象の今枯れ落つるこの秋に又豐熟の歡びは地に醸さるる、かつ築きかつ崩して久遠に新に久遠に淪らぬエホバこそわれらの神ぢや。われらの世にも今生るべきものが生れ、落つべきものが落つるなら、凡てエホバの力を力とするわれらの力が、それを行はずにはゐられぬゆゑぢや。現るべきエホバの力を知つて現さうと力むる者に、人間の力と喜びとはあり、消ゆべき者が殘らうと焦るところに、人間の恐れにも迷ひにてエホバの力は現るゝと知らねばならぬ。――暴虐と詭計とに逐ひ立てられ、イスラエルの土に身を置く陰も無う、曠野の末に隱れてともす覺束無い燭の火が、さても朝を知らする金星の光りとでも見ゆることか、新生を呼ばはるゝ聲々が傷つき惱む此の身をめぐれば、又夜毎の空に吹き荒ぶ嵐の聲は、我が命に幾世の呪ひを運んでやまぬ。――生死の二つに分れながら何處にも我が名を呼ぶが聞ゆるにつけ、きのふまで取り立てゝは思ひもせなむだ身の命、身の力をも、今は深う思ひ見ずはゐられぬのぢや。――何事もたゞ王命に畏み從ひ、自ら直には萬軍のエホバの聖旨も思ひ測つたことは無いに、己が頭の空高う聳えて見えた山々は、朝日の前にはらゝくる夜のやうに、今は一つ一つ崩れ碎くる、たゞ何處にもけふ我が力我が命のみ充ち溢るゝを見るにつけ、人間善惡の思ひを超えたエホバの聖旨も、やう／＼身に明らかに覺えて來るのぢや。

（間。）

（ダビデは愈熱して愈々語り、ミカルはその始め恐怖の心にてダビデの面を見守りゐたるが漸次に歡喜を共にして行く。）

ダビデ　今こそダビデの胸の中に、天地に活くるエホバの命は秋の豐酒を釀して溢るゝ。春が來れば花咲き秋になれば實る自然のこゝろが、今は此の胸にも波打ち躍つて、夢のやうに辿り來たこしかたをやがて束ぬるゆくすゑまで影を明にして來るわ。エホバは活くる、イスラエルは活くる、ダビデは活くる。――あるもの凡てよいのぢや。雨にも日にも喜びを等しく受くる野に山に、成熟の木の實はみのる。ダビデの名を歡びの歌に上ぐる遠近の我が友も、又日夜わが身に死滅の咒ひをかくる仇敵も、今は凡てなつかしく身に近くこそ思はるゝ、いづれ人間の愛憎は互に交す命の糧ぢや。ダビデを憎む者は憎めい、恐るゝ者は恐れい、讃へる者は讃へい、愛する者は愛してくれい。われも人も今こそ新に力を讃へ力を恐れ、又命の愛憎を倶にせうぞい。何處にも何人にもエホバの力が新に溢れ、わが胸も、わが友の手もわが敵の刃も、凡て強く利くあれい。時が來てわれら手力に互の命を爭ふことがあつても、いづれは同じ一つの神に一つの誠を捧ぐる所以ぢや。友に敵にも何處の涯にも、喜びと苦しみの幸福こそ普くあれい。世も人も神の力に充ち溢れい、充ち溢れい。――（歡び叫び立ち上る。）

ミカル　（共に立ち上りて）ダビデ樣、――

（ダビデ左手にてミカルを抱き唇を結ぶ。）

第二段

（ラハズ右手の扉を開きて出づ。）

ラハズ　ヨアブ樣がお出でゝ御座りました。

ダビデ　よい、之に通せ。

（ラハズ去る。）

（兩人は再び唇を結び、ダビデは座に着き、ミカルは室を出でむとして、ヨアブに行きあふ。）

ヨアブ　度々ながらお妨げに伺ひました。

ミカル　ようこそ、――（去る）

ヨアブ　御機嫌は如何で御座りまする。今朝のお歩きが過ぎは致しませぬか。

ダビデ　いよ〳〵殘り無う愈えたと見ゆる。午過ぎのいつもの痛みも更に無い。

（間。）

（ヨアブ、ダビデの方に歩み寄る。）

ヨアブ　お心は、――お定め御座りましたか。

（間。）

ダビデ（半ば自らに）定められた自の道を徜歩まずば、ダビデは世にも怯れ者ぢや。

ヨアブ（ダビデの面を睇視し、さてその前に跪伏して）我君。

（間。）

ダビデ　立てい、ヨアブ。――一同は參つたか。

ヨアブ　殘り無う參り集ひ、けふ暴君に瀆さるゝ聖匱の御守護を、面々エホバのみ名の下に刃を合せて誓ひました。今は、いづれとも談議の上大小のお指圖も仰ぎ度く、一同を伴ひ參らうと存じましたが、今多勢がお門近く群れましては、又そちこちの目にも如何で御座りまする。今朝の御氣色といひ若しお障りも御座りませずば、恐れ乍ら彼方の茅屋まで、一と時お出ましも願はるゝかと、お乘輿を用意致して參りましたが、――

第　三　段

（ミカル圓盆に酒甕と杯とを載せたるを持ちて出づ。）

ミカル　又いやな風が出て參りました。ほんに死海の岸は夜は、きまつて嵐になると見えまする。（ヨアブに杯を取らしめつゝ）どうぞ、――

ヨアブ　之は恐れ入りまする。

（ミカルは兩人の杯に酒を注ぐ。）

ヨアブ（外を眺めつゝ）秋の末には何處の空も荒れまするが、此處は一入曠野より死海に渡る風並が、――

ダビデ　ヨアブ――（立ち上りて）エホバの下に安かれい。

ヨアブ　エホバの下に安うゐませい。

（兩人杯を乾す。）

ダビデ　ミカル、劍を持てい。

ミカル（解し得ずして）は、――

ダビデ　ついヨアブの家まで行つてすぐ戻る。劍を持てい。

ヨアブ　御機嫌も秀れて拜見致しまするゆゑ、お乘輿を用意致し、――

ミカル（ダビデに眼を注ぎたるまゝ）それであなたは此の風に、川向うへなぞお出ましと仰せで御座りますか。

ダビデ　間近い所ぢや。夕餉までには戻つて參らう。さあ、――

ミカル　思ひも寄りませぬぞえ、ようお成りとはいへまだお熱氣も少し殘つて、今が大切な時で御座りまする。けさのお散歩でも過ぎはせぬかと案じて居りまするに、今から夕方吹き荒れる川風にお當りなされて、どのやうなとにならうも知れませぬ。お出ましはなりませぬぞえ。

ダビデ（稍焦ら立たしく）はて、――

ミカル（語調を變へ歎願の聲にて）なあ、けふはどうぞやめて下さりませ。またあすでも同じことでは御座りま

せぬか。あのやうに段々風も荒びて參りまする。お歸りには空も暗う、――なあ、またあす朝の内のことになされて、けふはどうぞやめて下さりませ。

ダビデ　（稍強く）あすのことをいうて居る折ではない。今目前の用があるのぢや。

（間。）

（ミカル思はず身を離し、少時ダビデの面を見つめたる後、悄々として左手の帷を排し、中に入る。）

（ミカル劍を兩手にて胸に當てつゝ出で、眼を伏せたるまゝダビデに近寄り、その腰に劍を帶ばしむ。）

ミカル　（ダビデの身に寄り添ひたるまゝ、その面を見上げつゝ）ダビデ樣、――

（ダビデ言無くしてミカルの面を見つむ。）

ミカル　（心安からずなりて）ああ、お痛いのでは御座りませぬか。なあ、お痛みが起つたのでは御座りませぬか。ダビデ樣、――

ダビデ　（ミカルの肩に手を置きて）もう痛みなぞは何にも無い。それに身に障るも障らぬも橋一つ渡る僅の道ぢや。夕餉の仕度など備へて快う待つてゐてくれい。

ミカル　（ダビデの胸に倚り、眼を落して）何やら心もと無う胸が騷いでなりませぬ。このやうな時にお出し申して、常でも無いおからだの上に、ひよつと途でお怪我でもなさりはせぬかと、胸が騷いで切無う御座りまする。

ダビデ　何ぢや。半時足らずで往つて戻れる道の中に、昔譚の地震ひがして又の死海が湧き出もしまい、おろかなことを案じまいぞよ。

ミカル　（ダビデの胸に面を埋めて）ダビデ樣、――

ダビデ　（稍強く）さあ、いつものそなたのやうにも無い。何としたのぢや。（ヨアブに）ヨアブ、參らう。

（ダビデ、ヨアブの歩み出づるに、ミカルも已む無き心にて共に從ひ、一同右手より去る。）

第四段

（長き間。）

（ミカル出でゝ窓側に走り寄り、手を窓框につきたるまゝダビデを見送りゐる。尙ほ暫らくはその姿にて遠くを眺めゐたるが、やがて碎かれるがごとく俄にくづをれ、面を伏せて聲高く泣く。）

（長き間。）

（ラハズ右手より出で、瞬時扉口に立ち止りてミカルの姿を見守りゐる。）

ラハズ　（ミカルの傍に歩み寄り跪きて）姫君樣、――姫君樣、――

（間。）

ラハズ　どうぞなされましたかや、姫君様。――

（間。）

ラハズ　殿様が何ぞ仰せなされたのでは御座りませぬか。――此の風にまあ何でお出ましなされたので御座りまする、――なあ、姫君様、――

（間。）

ミカル　（涙を拭ひて立ち上り、ラハズの面は見ずして）もうよい、――何でも無い、――

（間。）

ラハズ　ほんに姫君様、どうなされたので御座りまする。何でも仰せなされて下さりませ。――もしや、殿様は、――大君様に、――

ミカル　云やんな。

（間。）

ラハズ　なあ、これまでお伴申したわたくしでは御座りませぬか、今更お胸の中をおつゝみ下されては、お怨みで御座りまするぞえ。どこまでも、どうしてなりと、お側仕へのラハズで御座りまする。

（間。）

ミカル　（再び椅臺に坐し、ラハズの手を取りて）ラハズ、――

ラハズ　（にじり寄りて）姫君様――

ミカル　（ラハズの髮を撫でその面に見入りつゝ）ほんにそちはいとしい女ちや。――世を悲しみに生れたミカルゆゑ、そちにまで處女の歡びを外にさせ、憂いことばかり見させたものをよう之までに盡してくれた。この身には知らなむだ樂しいことの數々も、その身にはやがて豐に實るやう姉のこゝろで祈るぞや。

ラハズ　何を仰せなされまするぞえ。――

ミカル　（俄に面を上げて）あゝ、誰ぞ門の戶をたゝくやうでは無いか。

（間。）

（風の音やうやう荒びて聞え始む。）

ラハズ　風の音で御座りませう。今ごろに誰がくる筈も御座りませぬ。（立ち上り窓の外に面を出し、忽ち辟を上げて）あゝ、ほんに、ヤコブが馬で來て居りまする。――（外に呼びて）今開ける、待つてや。（向き反りて）姫君様、たゞごとでは御座りませぬぞえ。――

ミカル　早う見て來てたも、早う、――

（ラハズ走りて去る。）

第五段

（やゝ長き間。）

（ラハズ、ダビデの僕ヤコブを伴ひて走り出づ。）

ラハズ　大事で御座りまする、姫君様、追手で御座りまする。ヤコブはエレゲデから參りました。――もうあそこまで。
ヤコブ　幾干と無い大兵が押しかけ參りまする。私は間道より馬を飛ばせて參りましたが、大君様王子様の御旗幟も相見えました。
ミカル　王子の――しかと王子の御旗に見違へ無いかや。
ヤコブ　見違へは御座りませぬ。御旗は諸兵の御先頭にて、――
ミカル　（自らに）諸兵の先頭に、――兄上が、――兄上が、――
（間。）
ラハズ　かうしてゐる時では御座りませぬ。姫君様、――
ミカル　（ヤコブに向ひ、語調靜かなれども明かに）そちはヨアブの家まで駒を飛ばせて、殿樣はあそこにお出でなされる、――此の急をお知らせ申してたも。わが身は、――すぐ濱傳ひに本街道へ出てお先きに待ち申すゆゑ。――早う行きや、かまへて遲れまいぞや。
ヤコブ　承はりました。（去る）
（間。）
（風の音いよいよ激しくなる。）
ラハズ　それで――

ミカル　ラハズ、そちは文書類を取り揃へて、本街道で殿樣をお先き待ち申してたも、――
ラハズ　（解せずして）は、――
ミカル　わが身が出ては誰の眼にも立つことぢや、そち一人行つてたも。――わが身は殘つて、兄上にもお目にかかり度いことがある。
（間。）
ラハズ　よもやわたくしにそのやうな、よもやラハズをお思ひたがへでは御座りますまい。此の際にお側を離れて、どこへ行けと仰せ下されまするぞえ。
ミカル　なんにも云やんな。今のヤコブに含めた次第が手ちがひになつてはならぬ。早う行きや。
（間。）
ラハズ　（やゝ鋭く）お前樣は何でお出ましなされませぬぞえ。
ミカル　はて、わが身は出られぬ、又兄上にお目にかゝり度いことがあるのぢや。
ラハズ　そして、それからどうなされまする。
ミカル　えゝ、何のとぐ〳〵、――エレゲデから廻る追手のあしならもうこゝへは束の間ぢや。早う行きや。
ラハズ　わたくしは參られませぬ、いまお前樣をお殘し申してどこの道を走るこゝろも御座りませぬ。

ミカル　はて、情剛（じやうごは）の女ではある。――二度と此の世であはぬと云ふのでも無い、本街道までたゞ往き戻りの使ばかりに、何のと言ひ立てして主の命に抗（あらが）はやるか。

ラハズ　それでも姫君様、――

ミカル　（權威を以ちて）まだ云やるか。

（間。）

ラハズ　（涙を抑へて）そして、殿様にお會ひ申して、何と申し上げるので御座りまする。

ミカル　殿様に、――殿様に、――わが身は殘つて兄上にもお目にかゝり、しばしなりと追手のあしをゆるめさせ、――いづれあとから、――ハキラの御陣所へ參じまする と、そのやうに申し上げてたも。

ラハズ　姫君様、どうしてもわたくしは參られませぬ、もしも、――

ミカル　はあ、わが身を主と思ふなら、なんでわが身の云ふなりにしやらぬのぢや。

ラハズ　あゝ、姫君様。――（くづをれてミカルの衣端に取りつき泣き入る）

（間。）

ミカル　（直にラハズの手を取りて起ち上らしめ扉口に導きつゝ）さあ、早う、ほんに、束の間も移してはゐられぬ、大事の際ぢや、早う往つてたも。

（二女右の手の扉より去る。）

（間。）

（二女再び場に出でミカルは窓側に走り寄りて外に面を出し、ラハズは扉口より數歩のところに立ち止る。）

ラハズ　（激しき風に面を向けたれば、束れたる髪みるみる散りはらゝけつゝ、叫びて）さうで御座りまする。――もうあの、――あの森蔭から黒雲（くろくも）と一つになつて、見る見る寄せて參りまする。――（ミカルに近づきつゝ）姫君様、――

ミカル　（言葉早く）早う出や、裏口から藪道づたひに早う往きや。

（ラハズはミカルを見守りて佇みゐる。）

ミカル　早う往きやといふに。

ラハズ　（かすかに）參りまする。（去る）

（扉の外にラハズの泣く聲高く聞ゆ。）

（ミカル亦場を去る。）

第六段

（間。）

（ミカル出づ。面色蒼白、蹌踉として歩み出で室の左なる長卓の前に至り、少時石のごとく立ちてゐたるが、たちまち心破れ、卓上なるダビデの套衣にとりつきて

烈しく慟哭す。)

ミカル　あゝダビデ樣、――ダビデ樣、――今一度お目にかゝり度う御座りまする、なんにも申し上げず承はりませいで、たゞ一と目お顏が見度う御座りまする。――ミカルは、――只今この世を去りまする。――父と夫の双の間をいつまでも、よるべなうさまようては、お身の上にもわが身にも、詮ない歎きが重なるばかりで御座りませう。――ほんにいつかはかうなることゝ、かねて覺悟もして御座りまする、もうお怨みもなんにも御座りませぬ。天下をお統べなされるお胸の中に、一日でも宿つた此の身こそ、何ぼ果報な女でも御座りまする。あのお胸に、――あゝお怨みで御座りまするぞえ、ダビデ樣、年月のお誓ひゆゑミカルは世を捨てゝ、かへらぬ流れに身を投げましたもの、あなたはまあむごたらしうお見捨て下されました。たとへ酷い言葉は仰せ無うても、お耳には早血腥い叫喚が夜も日も聞える上は、ミカルは世に寄るべも御座りませぬ。父上も兄上も、――あゝいゝえ、いゝえもうお怨みもなんにも御座りませぬ。――ほんにあのお手が、しろがねの琴絃をお調べなされるあのお手が、やがて天下の山水をお調べなされる時が來るとは、存ぜぬミカルでも御座りませぬ。その時が、――その時が今こそ來たのを、ミカルもお慶び申し上げまする。あゝダビデ樣、大君樣、――なんにも申し上げないで今一度、死ぬる間際にお顏が見度う御座りまする。たつた一と目お目にかゝり度う御座りまする。ダビデ樣、――

(たちまち激しく門戸をたゝく音聞ゆ。ミカル愕然として面を上げ手にせる套衣を落して少時動かずにゐたるが、やがて左手の帷を排して中に入る。引き續き門戸を叩く音、毀つ音、「戸を明けい。」「誰も居らぬか。」「庭へまはつて見い。」「窓から入れい。」――なぞと罵る聲、騷然として亂るゝ中に、たちまち帷の内よりミカルが痛苦の叫び高く長く聞ゆ。)

(騷擾は愈々激しく、つひに武具の鏘然と鳴る音、足音なぞ入り亂れて、兵卒等右手の扉を突き開く者、窓を攀ぢ登る者續次に現れ、口々に――「誰も居らぬか。」「潛むで居るのぢや。」「家ぐるみ燒き拂へい。」「誰も出て來ぬか。」なぞと罵りつゝ、尙左手の帷を排し踏み入らんとして、いづれも中なる場景に打たれたるが如く聲を上げてたじろぐ。右手の扉よりアブネル出づ。)

アブネル　(一同の樣子を見て)　何事ぢや。(急ぎ行きて左手の帷を開き思はず聲を上げて)　姫君、――(中に入る)

(尙ほ續きて場に入り來る者等一時に聲を歛む。)

――幕――

第五幕

第一場

ギルボア山々麓。

床は裾野の一部となり、正面一體は崖の斷面にてその上に空僅かに見ゆ。斷面には灌木繁み合ひ、左手高所より小徑緩斜をなして右に降る。崖の上には樹木無し。前幕より半月の後。昧曉。空は漸々に赤らみ行けど、舞臺を覆ひて壁のごとくに聳え立てる崖の下は、事物凡て朦く朧かに見ゆ。

第一段

（アブネル深く傷つき、アデリエルと一隊の兵卒等とに支へられつゝ右手より出づ。）

アブネル　（身を放たむと藻掻きつゝ）　えい、放せい、捨て置けい。亂軍ぢや。屍骸なぞは暗にも捨てゝ、君の御守護に參らぬか。

アデリエル　煩ふな、君は王子が御一所ぢや。（强ひてアブネルを横たへしめつゝ）　再び味方の立ち直るまで、此處に暫らく息ふがよい。傷は何程も深う無いぞよ。

アブネル　はあ、まだ兩眼を持ちながら此の亂軍が見えぬのか、行けい。――アブネルの命も既に裂かれた。老ぼれの最期なぞに鬪うて、空しう刃を曇らするな。退けい。

（左手の奥より戰呼の聲きこゆ。）

アデリエル　何ぢや、敵か、味方か。――

アブネル　（强ひて起き上らんと焦りつゝ）　行けい、アデリエル、――君が危い、王の劍が、暗に碎くる、――アデリエル、行けい、所詮敗れた戰ながら、ともかくも我君をダビデの手に捕へさするな。川添ひを退くだけ退いて、ああ、――（仆る）

（戰呼の聲の中に「千代ませい、サウル――」と叫ぶが聞ゆ。）

アデリエル　味方ぢや、――アブネル、氣をたしかにせい、味方の軍ぢや。（右手の奥を見入り劍を高く上げて）　千代ませい、サウル。――

（戰呼之れに應へて近く聞ゆ。）

第二段

（左手より一隊の士卒を率ゐてヨナタン走り出づ。白布をもて左眼を覆ひゐる。）

アブネル　（斷末魔の聲を絞りて）　千代ませい、サウル。――（息絶ゆ）

ヨナタン　あゝ、アブネルぢやな。（走せ寄りて）　氣をたしかに持てい、アブネル、アブネル、――アブネル――

アデリエル　——はや縡切ましたやうに御座りまする。
ヨナタン　（立ち上り四邊を顧みて）我君は何處にぢや。
アデリエル　王子と御一所では御座りまぬか。
ヨナタン　お身達と一所では無かつたのか。
（間。）
ヨナタン　敵も味方も別ち無う刄を亂す暗の內にいつか御姿を失うたが、必定お身達が添參らするとぢやと思うた。
アデリエル　此方はまた王子が御一所とばかり存じて居りました。——王子はお目を、——
ヨナタン　暗の夜の暗の戰に眼もいらぬ。所詮は一時もせず刃の底に兩眼を瞑る我等ぢや。（アブネルの死屍に）老の身ながら先駈けた暗の旅路に、心淋しい思ひはさせぬ、
（左手の奧より戰呼の聲「千代ませい、ダビデ——」と叫ぶが聞ゆ。）
一將　敵勢が近う寄せ參りまする。
ヨナタン　（半ば自らに。）寄せ來らせい、寄せ返させい、暗に碎くる王の劍も夜を裂く朝日の劍も、今は一つの渦巻きに生死の基を搖り動かせい。（一同に向ひ）いづれも覺悟はよいであらう、暗の擾れの何處にか我君を尋ね出だして、命を御屍骸の衣とするまで絶望の今一と太刀ぢや。——（劍を上げ、一同と聲を併せて）千代ませい、八千代ませい、サウル。——
（一同ヨナタンに導かれて左に入る。）

第三段

（長き間。）
（舞臺漸々に明るくなり、叫喚の聲斷續して聞ゆ。左手よりアデリエル。ヨアブの太刀を受け退りつゝ出づ。）
ヨアブ　所詮無益な劍を捨てい、覺束無い暗の刃に命は任ね難いぞよ。
アデリエル　刃には死を任ねて戰ふ我等ぢや、犬奴の舌に暗の刃を嘗め啗へい。
ヨアブ　何と。——
（兩人激しく切り結び、終にアデリエル胸を突かれて仆る。）
アデリエル　あゝ、——我君、——あゝ、——千代ませい、サウル。——（息絶ゆ）
ヨアブ　呼べい、呼び立てい、その名を呼ぶは早屍骸の舌ばかりぢや。暗に沈む屍骸どもが劍と舌をわなゝかして、甲斐無い名をば呼び立つるわ、——
（一將左手より走り出づ。）
一將　千代ませい、ダビデ——ヨアブ殿か。
ヨアブ　千代ませい、ダビデ——アデリエルを此處に仕止

めた。早敵勢も多くは殘るまい。したが暴君は何處に潜むか、まだ捕はれず居ると見ゆるな。

一將　合圖の太鼓はまだ聞えぬ、所詮逃れる道は無いゆゑ、いづれ何處(どこ)ぞの叢に屍骸の枯れ葉となつて落ちて居よう、やがて朝になれば尋ねるまでも無いことぢや。

ヨアブ　やがて朝になれば暗の聲はあと無う消ゆる、今一と時の爭ひぢや。

（左手の奥より戰呼の聲「イスラエル王サウル」と叫ぶが聞ゆ。）

ヨアブ　また屍骸が呼び立つる。一と時の露の乾ぬ間に、倚絶望の刃をもひらめかさうとな。（友將と共に劍を上げ左手に立ち入りつゝ）はあ、その血煙を暗に散らせい、やがて來る朝日の影の先驅(さきばし)りぢや。（二人去る）

第四段

（間。）

（崖の小徑を左手より重傷に惱み喘げるヨナタン、ダビデ方の一將と切り結びつゝ現はる。）

ヨナタン　（恰も劍を敵手の腹に刺しつゝ）今一人、暗の旅路の伴をせい。

（敵將は急所を突かれ苦悶の聲を上げつゝ、小徑より轉び落ちて息絶ゆ。ヨナタンも敵手の落つると共に、折るゝがごとく小徑の上に仆る。）

ヨナタン　（つく匐び呻きて、斷末魔の息絶え絶えに）父上、——父上、——何處にお出でされまする、——父上、何處に、——

（唐突に左手の奥より地を搖がするごとき大太鼓の聲、おそろしく轟き渡る。）

ヨナタン　（最後の息を絞りて）あゝ、——千代ませい、サウル。——！（かく叫びつゝ双手を擧ぐると共に重心を失ひ、小徑より頭を逆にして轉び落ち、死す）

（同時にアブネルの屍骸、既に枯硬せる死指を動かしつゝ幽明の聲を上げて叫ぶ）

アブネルの屍骸　千代ませい、サウル。

（再び轟々たる大太鼓の響き、曉天の薄明を寸斷しつつ轟き渡る。舞臺頓に明るくなる。大いなる歡呼叫喚の聲之れに續きて聞ゆ。）

叫喚の聲　千代ませい、八千代ませい、ダビデ。——

——幕——

第二場　納曲

日出前。新天新地金光に照り輝く。

舞臺はたゞ床全體に、なだらかなる傾斜をもて奥に高まり行く。

中央、坂の頂きに近くダビデ劍を突きて立ち、その足下左右に、サウルの死屍とヨナタンの死屍とを各楯に載せ黒布をかけて横たふ。
中央ダビデの前後を除きて、ヨアブ以下將卒等一面に群がり立てるが、今幕の上り行くと同時に、各々手にせる劍戟叉旗幟を高く上げて歡稱の聲を併せ。

一同　千代ませい、八千代ませい、ダビデ。――

（間。）

ダビデ　このやうにして夜は明けた、このやうにして「昨日」は碎け、地に重く纏うた闇ははらゝけて、新生の日はイスラエルに輝き出づる。――早飛び散らふ群鳥の翼に初風は喜びを薫らせながら、野に落ちた屍骸にも我等が勝利の刃にも、けふの日の出を告げ渡る、新生の朝は今こそ來たのぢや。この日夜我等千々の心を一つにけふの日を待ち望むだが、けふの日も亦我等を待ち侘びて、やがて生るべき新な市は野に山に豊な種子を實らせ乍ら、我等の手をば待ち望み焦ら立つてゐた、時は來たのぢや。――今こそ天地に生誕の歡びは溢るゝ。その生まるゝは神と我等、之を産むだ者も亦神と我等の外には無い。新な天地を榮えさするは今生るゝ我等の務めぢや。戰ひに揮ふ我等の刃が朝日の征箭の散ると一つに暗の刃を捕へたなら、平和を耕ふ我等の手にも白日の晝の幸こそ、溢れねばならぬ。まことに「昨日」の宮殿は大きく、その宮殿を築いた「昨日」の王は尊まるべき神の子であつた。その宮殿を壞しその神の子を仆した我等こそ、更に大いな宮殿の主、更に尊い神の子とならいでは、この犧牲は徒に尊貴の血を流し我等は空しく叛逆の徒ともならう。――兄弟たちよ心を併せい。生れ出づるこの光明を各の手に集め、今日こそ我等の統ぶる野の上に、天の榮えを築き立つるが我等の務めぢや、今生誕に喜び揺らるゝこの天地を彌榮えさせ彌輝かするは、たゞ我等の手にこそあるのぢや。

ヨアブ　その我等の新生もたゞ君の御手によつてこそ彌輝き榮えまする。君は御代長く御榮え高うましませい。この朝、久しく暗の夜の嵐に迷ふイスラエルも始めてまことの王を仰ぎ、輝き出づる天地の曉に歡びの聲を併せまする。我等の上に、イスラエルの上に、――

一同　千代ませい、八千代ませい、ダビデ。――

ダビデ　（聲を高めて）歡びの聲を上げい。譽を上げい、我名にも、お身たち自らにも、又我等の刃に仆れたきのふの敵にも。――今こそ新生の朝日は生るゝ。我等の築く我等の榮えを、先づこの朝初日の歡びに祝ぎ始めい。朝の空の黄金の聲を我等の胸よりも呼ばはり通せい。ゆうべは野邊の小川を苦しみの紅に染めた敵と味方の血潮

も、けさは歡びの濃い酒となつて、イスラエルの全土また遠い異教の國々まで、流れ溢れねばならぬのぢや。聲を上げい、歡びの聲を上げい。地の面に渦卷く歡びを、天のこだまに應へさせい。――

（恰も此の時ダビデの背に當りて、大いなる日輪の昇り出づ。將卒等歡喜のこゝろを極めて凡て自ら叫號す。）

ダビデ（高く劍を上げて。）

久遠の神に榮えあれい。
天に地に光りあれい。
天の歡びを地に築く我等の手に力あれい。
榮えあれい。――

一同（歡叫して）榮えあれい、榮えあれい、榮えあれい――

（轟々たる歡叫の聲の中に幕は降り、燈火破るゝごとく輝き出づると同時に、かねて設らへ置ける gallery 席の「落ち幕」離れ落ち、白衣したる男女大衆天井をめぐりて立ち現れ、次の合唱を歌ひ出づ。）

（舞臺の幕は合唱の始まる頃既に閉ぢ終る。）

（合唱。）

ああ日は出でぬ　ひがしの空も
われらの胸も、　今ぞやぶれて、
歡びの日は　輝き出づる。
われらの命　生れ出でぬる。
　ああ出でぬ。
見よ、日は出でぬ。歡びうたへや。

黄金の　嵐たけりて、
をのゝける　星の燈は落ち、
なげかへる　月もくだけて、
日の叫び　よもにみちみち
あめつちは　今よみがへる。
　ああ出でぬ。
見よ日は出でぬ。

はらからよ、　いざ手力に
光明の　幸をほがひて、
もろともに、　築き立てなむ、
夜の夢の　今ぞ消えぬる
地の上に、　日の住む宮を。
ああ日は出でぬ、　ひがしの空も
われらの胸も、　今ぞやぶれて、
歡びの日は　輝き出づる。
われらの命　生れ出でぬる。
　ああ出でぬ。
見よ、日は出でぬ。歡びうたへや。

（新小説　大正六年十一月）

プロローグ（一幕）

濃き緑色の落ち幕を垂る。舞臺の奥よりおぼろかなる光射したれば、覺束無き緑光は幕の一面を蔽ひてあり。下手よりプロローグの青年出づ、西班牙のカーパのやうなる黑き套衣をまとひ、左手に廣き縁ある黑色の帽子を持ち、右手には象牙の杖をつきたり。其の面大理石のやうに白けれど（脚燈をよわくし）光りを背にしたれば、定かには容姿をもわきまへがたし。舞臺の中邊に止まりて人々に面ふ。調子は殆ど强弱の變化無く、一定の抑揚を靜なる語勢にて繰り返すに過ぎざれば、たとへば唖り謠のやうな單調の情趣を思はしむべし。

プロローグ　此の幕の後には、精靈の國の薄明りが漂つてゐる。丁度あの偉きな太陽が、西方の雲に今かくれたところだと云ふやうに、しめやかな金色の光りには、もう碧い、暗い夜の吐息が滲みこんで、物思はしさうに慄へてゐる。それにしてもあの明るい眞白な晝は、いつ消えて行つたのだらう、海の面を飛び交す海鳥の一と群が、自分達の翼の赤く染められたのに氣が付くころは、もう太陽が波の上にゆらめいては居ないのだ。忍びやかに這ひよつて來た夜の足あとは、つやゝかな樫の葉並にも印つてゐるけれど、其の枝に巢を作つた梟の色好みな瞳にさへ、あの淫な素足は映らずにゐた。捉へ難いくれがたの薄明りよ、晝と夜との境よ。其處では凡てのものが慄へてゐる、形のある者も形の無い者もみんな深いしめやかな歎息を吐いてゐるのだ。石より金に積重ねた伽藍の尖塔も、千年の老いた智慧を誇る公孫樹の梢も、蒼白い頰の處女が聖像の前に捧げた香のやうに悲しげに慄へてゐるのだ。湖の底のやうに靜かな金色の霞よ、けれどもまた小やみなくゆらめいてゐる銀いろの霞よ、私はいま精靈の國の薄明りの前に、一重の幕を隔てゝ立つてはゐるが、ひそやかに肌に迫る霞の鱗は、たとへていつて見れば赤い雄花の花粉が、執念深い生の感覺に誘はれて赤い雌花の蜜にまつはつて行くやうに、私の血管に言ひやうの無い戰慄を傳へてゐるのだ。それで私の口には言葉が溢れて來た、くれがたの金の光りに輝いた噴水の銀盤から、虹いろの水が溢れて出るやうに、私の口からも「日常生活の鈍い言葉」や「科學の弱い術語」とは丸で違つた魔力の言葉が溢れて出るやうだ、詩の言葉が流れて出るやうだ。精靈の國の薄明りも、今までは僅かな織り糸

の透間を覗つて、臆病さうに這ひ込んで來たのが、いつのまにか勢(いきほひ)をましてもう此處(こゝら)まで溢れ漂つて來たやうだ。靜かにして居なければ聞えなかつた精靈達の聲も、丁度あの激しく海の荒れた日に、赤い旗を翻して歸つてくる漁夫共のやうに、段々はつきりきこえて來た。やがて此の幕が落ちさへすれば其の奇麗な子供達の顏も、精靈の姿を辨(みわけ)る人々の瞳には、鮮に映つて見えるのだ。今の世に、誰よりも明かなたましひの瞳をもつた一人の賢者が、かういふことを敎へてくれた。「世にたましひほど『美しさ』を求めてゐるものはない。又『美しさ』は何よりもたましひを求めて之に結び付かうとしてゐる。それが此の世を動かして行く力のもとゐだ。たましひはたゞ『美しさ』によつて顯れもし互の道を通じもする。なぜならば、たましひとは『美しさ』より外のものでは無いからだ、それゆゑたましひは詩よりも外の言葉を持つては居ない、言ひやうを換へれば眞實とは、詩に依らなければ顯れることの無いものなのだ。」それだから精靈達はいま詩の言葉を物語る。眞實の國には詩よりも外に言葉は無いのだ、昔は精靈達の棲む國を「詩の島」と呼び慣はしたこともあつた、けれどもいまはもう眞實の國と呼ぶがよい、さもなければ本體の國とでも呼ぶがよい。——人々は何よりも夢を恐れてゐる、夢の世の蒼い光りに、

碧玉の冕(かんむり)だと思つたものが、晨(あした)の太陽に照らされてつい路傍の石だと知つてから、人は聲を擧げて夢を呪ひはじめた、そしていつか命の本體(もと)のたましひさへ、波の噪(さわ)ぐ心の上面(うはがは)には浮んで來ぬといふばかりに、夢の世の蒼い煙と同じ樣に、逃かくれをされる事になつてしまつた。人々はたましひを恐れ始めた、其の眼を下に落せば、此世にありとある流轉の相を支へて、鼠色の殼をかぶつた大地「死」が悸へてゐる、仰げば眞暗な「恐怖」の雲が異形(いぎやう)の掌を擴げて覆(かぶさ)つてゐる。愚な人々は其雲の上にこそ、永遠の太陽が輝いて居るのを知らないのだ。人間のたましひをたとへていつて見れば鏡の樣なものだ。其鏡がくもつてさへ居なければ、あの恐怖の雲を透いて、ひそやかに降りてくる精靈の薄明りも映るであらう。そして人は、朝の光りに照らされた水晶の甕(かめ)の樣に輝くことも出來るのだ。寶玉の鏡を持つた人々の貴(たつと)さよ。數多くの聖者や豫言者や詩人がその人々の中にゐた、ある時は戀人達もゐた、罪囚もゐた。その人々の心臟には生(いのち)の血が脈を搏つて、無量壽(かぎりないいのち)の光りが金の冕(かんむり)をつくつてゐる、その人々も「死」といふ假の衣を着てはゐるけれど、たましひはもう精靈の國に棲むでゐるのだ。此の地上では精靈の國の光りも、おぼろげな薄明りにしかあらはれることは無い。丁度くれがたの捉へ難たい吐息のやうに、意

識の涯のひそやかな池の面に、精靈の蕾が漂つてゐる、そして日毎夜毎待ち焦れる望みに慄へ乍ら、あの銀色に輝いた風が、花瓣を開きにくるのをまつてゐるのだ。精靈の使は露の上を素足でふんで燐の燈をさげ乍ら晝も夜も人々のたましひを呼んでゐる。たとへば考へ深い老人が長い病の後で、いよいよ死の面を見出でた夜更けや、心の純らかな女がはじめて熱い接吻を受けた朝なぞに、精靈の聲は、森中の小鳥が囀り合したよりも鋭く、池の面に反響してきこえるのだ、それだのに臆病な人々は、假の姿の「死」に心を奪はれて、額に汗を流し乍らせはし無い恐怖の道を歩いてゐる。

（突如おほどかなる鐘の音ひゞく。）

プロローグ　あゝ。鐘が鳴つた。心の海を千尋の底からゆさぶらして、眞珠の床に眠つた魂を、呼び醒まさうとする響きやうだ。昔から東洋の精舍では、あの鐘をついて時のしらせにかへてゐた、そしては眠りかけるたましひの眼を、見開かせようとしたものだ。此頃ではたゞ太陽の光りに見え無いばかりで精靈といふ言葉にさへ疑深い眼を光らすやうになつた。昔は野の面に出て、太陽の東の空に登るのを待ち望むやうに、神の國が天から降りて來るのを待ち望むだ人々もゐた、けれども精靈の國はそんなに遠くから降りてくる想像の雲では無かつたのだ。いふ迄も無く汗ばんだ夜の墓の幻なぞでは無い。それは人々の心の裏に眠つてゐる實在といふ者なのだ。心は又ありとある流轉の相に根を張つてゐるので、谷川の傍に咲いた鈴蘭の根を掘つても、精靈の鋤を借りさへすれば、湧いて出る泉に心の姿は映るであらう。日常の表面の生活には精靈の棲む第宅は無い、太陽の光りで乾いたり濕つたりする大地は、四角く掘つて人の骨を埋めるところだ。精靈よ、私はこの地上で爾が棲む三つの第宅を知つてゐる。それは沈默と詩と音樂だ。けれども今こゝに立つ私の考へでは、その內の二つを門だと思つた聖者のやうに、「詩よりも外に眞實の棲む處は無い」といつた方がいゝかも知れない。ほんとにあのおどろおどろした靑銅の呻き聲が、霞の底から湧き上つて、くれがたの傷ましい薄明りににじんで行くのを眺めてゐれば、たとへ考へ深い白髯の老僧で無いまでも、流轉のこの世を超えて彼岸の光明を思ふであらう。

（再び鐘の音ひゞく。）

プロローグ　また鐘が鳴つた。あの聲はもう精靈の國からひゞいてくるのだ。昔この國のならひであつた緋絨といふ赤い鎧を着た若者や、振袖といふ華かな衣を着た娘たちが、白い花の香りのやうな「死」の光につゝまれて、人々の幻影にあらはれようといふのだ。鐘の音は現世の

人々に「死」の海の彼岸を思はせる聲ともなれば、その蒼白い波を超えて現世に浮ばうとする精靈達の知らせにもなるのだ。いつて見れば「死」の聲だ。

（三度び鐘の音ひゞく。）

プロローグ　おゝ。三度目の鐘だな。私はつい忘れてゐた、あの鐘が四つとはならぬ内に、私はこの象牙の杖をついて、行くべきところへ行かねばならないのだ。今日はしみじみと精靈の薄明を身に浴びたので、知らぬ内に言葉が多くなつた。あの奇麗な顔をした子供達が、どのやうにもどかしがつてゐるかも知れ無い、それではもうこれでおさらばだ。――

（靜に杖をつきて上手に入る。其の姿見えずなると全く同時に、第四の鐘鳴り出で、落ち幕を落す。）

（舞臺ははじめ蒼暗き夜の光漂ひ、朦朧として事物の所在をも辨へ難きほどなるが、鐘の音の微にはかなく消えてゆくにつれ、次第に明るみつゝ漸々さだかにやがて情景をあらはし來る。）

（新聞不明）

一人の死（二　幕）

民の爲に一人の死するはよきことなり　――カバヤ

人　物

イ　エ　ス
ペ　テ　ロ
ヨ　ハ　ネ
ヤ　コ　ブ
イスカリオテのユダ
方伯ピラト
マ　リ　ア
マ　ル　タ
ピラトの妻に仕へたる侍女二人
羅馬人數人
イエルサレムの長老二人
祭司の下吏
方伯の廳に從ける下吏二人
守衞の兵卒數人

第一幕　三十二年十月中旬
第二幕　三十三年四月初旬

第　一　幕

ベタニアなるシモンの家。舞臺奥左の隅によせて戸口を仕切り、之につゞける正面の壁に大いなる窓二つ、右手の壁の前の方には扉ありて内に通ふ。秋の日暮るゝに近く、戸口も窓も開きたるまゝにあれば、おぼつかなき夕陽の、夜の吐息にまじりたるが漂ひてあり。外面には橄欖、無花果、棕櫚の樹の繁みをこえて、とほくネボの山、死海の面、夢のやうにかすみて見ゆ。戸口の外左の方によりて、枝もたわゝに實れる無花果の樹の一はしあらはれ、正面は樹々の葉の遮るも無くて、直ちにケデロンの谷に下るべき坂路通じたり。一つとして裝飾も無き簡粗なるユダヤの民家にて、中央縱に大いなる食卓あり、兩側に沿うて椅背無き長椅子を据ゑ、窓側には二つ三つの椅子を置く。情景には限り無き靜寂と哀傷の氣漲り溢る。

マリア一人戸口に坐し、とほき谷のかなたに見はるけてあり。やゝ長き靜寂。右手の扉をあけてマルタ入り來る。

マルタ　まだラビはお見えにならないの？（戸口の方に歩みよりて）何だか急に寒くなつたのねえ、風はすつかりやんでしまつたけれど――。

マリア（顧みずして靜かに）ほんとにどうなすつたのでせう。もう蟲があんなになく時分だのに――。

マルタ　大變お遲いのねえ、あのベテパゲの人は、夜にならない内お見えになるやうな話をしてゐたけれど、またイエルサレムでとめられてゞもいらつしやるのぢや無いかしら。

マリア　早くお見えになればいゝのに、今日は先刻から妙な動悸がして、悲しい心持で胸も重くなつてゐるのだから。――だけどもうあんなに、谷の棕櫚の樹が煙のやうにかすむで行つてよ。

マルタ　おまちしてゐると一と時でもどんなにか長く思へるのねえ。此の前はまだ百合が咲いてゐる時分だつたから、それでももう四月ばかりよ、ラビはお變りになつたかしら。（ふと心付けるがごとく）すつかり忘れてゐた、無花果を取つて置かなければならないのに。

（右手の戸口より家の内に入る。靜寂。しばらくして手に大きなる銀盤をもちて出て來る。）

マルタ（ほゝゑみ乍ら）ほんとにまあ、今までちつとも氣が付かずにゐたのねえ――。

（そのまゝ外に出で無花果の實をつみて銀盤にもる。この間マリアは身を動かすこともなく同じ姿にて遠き山河を眺めてあり。）

マルタ（尙ほ果實を摘み取りつゝ）外へ出るとそれは寒いの、もう露が降りて來たので、みんな冷い銀色の薄皮がかゝつて居るのよ。二三日取らなかつたら大概はじけてしまつて――去年もあんなに仰つたのだから、きつとおよろこびになるでせうよ。それでももうおしまひの時分だし、丁度いゝ鹽梅だつた。

マリア（おどろきの聲にては無く輕く）あ、――

マルタ（旣に銀盤を滿たして）どうしたの？

マリア　谷の底で急に燈が點つたの、あんな處に火がつかうとは思はなかつたんですもの。

マルタ　ザカリアの家よ。谷の底で丁度橄欖の林の中だから、早く日が暗くなるのでせう。

マリア　何でも無いことにこんな氣づかひな動悸がして、乳のさきまで熱でもあるやうにほてつてくる。――

マルタ（銀盤を床に置き戸口にもたれ立ちて）どうしたの？　ラビもお出でになるつていふのに――。中へ這入つていらつしやいな。少し顏色も惡いやうだし、何だか急に寒くなつたから。

（やゝ長き間。）

マリア　ほんとは、先刻あのベテパゲの人に今日お出でのことをきいてから、こんな心持がして來たの、姉様が無花果を取つていらつしやるのを見ながらでも、さういふ果實が日を浴びて、段々熟れて行くのを思つてゐると、私の胸も、かなしさに重くなつて行くやうな氣がするんですもの。

マルタ　なぜそんなことをいふの？　夏の中からあれほどもおまちしてゐたのに。

マリア　それでも今度お出での時は、きつとあの恐ろしいことがあるやうな氣がして、あんなにおまちしてはゐながら、やつぱりお見えにならなければいゝと思つたり、いろいろ考へては一人で泣いてゐましたの。それが急に今日の知らせで、何だか重い石が胸へでもぶつかつたやうに、いよいよの時が來たのかと思つて――

マルタ　何なの、その恐しいことつて？

マリア　この前の時あんなに云つていらしつたぢやありませんか、人の子が祭司の長に付されて、十字架に釘られるのも近づいて來たつて、――

マルタ　あれは何かの譬喩でせうよ。ラビはいつでも譬喩でお話になるのだから。

マリア　私もはじめは譬喩かと思つて居たけれど、段々さうで無いやうな氣がして來たの。あの小河の音にまじつて、始終聞えてゐるラビのお聲の中でも、このごろは、丁度日ましに寒くなつて行く風が肌へ泌みて來るやうに、あの時のかなしいお言葉ばかりきこえて來るんですもの。（間）いつか此處で天國の幸福をお話しになつたのは、丁度四月の末だつたけれど、霞と陽炎にゆられてぼんやりした銀色にヨルダンの流れて行くのや、水に浮むだ影のやうなネボの山を眺めながら草の上や樹の蔭に坐つた人達が、みんな、小鳥の聲とラビのお聲とを一所にきいて、醉つたやうになつてゐたことがあつたでせう。ラビも輝くやうに晴れやかなお顏をなすつて、心の貧しい者や哀しむ者の幸福を敎へていらしつたけれど、何だかもうあんな時は二度と歸つて來ないやうに思へるんですもの。

マルタ　ほんとにあの日は山中の花が一どきに咲いたやうな朗かな日で、誰一人ラビを神様の御子だと思はないものはなかつたのねえ。――（間）あなたがそんなことをいふので、私まで何だか悲しい氣持になつてしまつた。

マリア　（マルタの裾にすがりかなしみに慄へたる聲にて）――姉様！

マルタ　もう山の向うに薄い星が見えて來てよ。（マリアを見て）あなたは泣いてゐるの？

マリア　どうしてもかなしい心持がするんですもの。（仰ぎ見て星を見出で）ほんとに――まあつめたさうな星ね。（間）アンチオケにゐた時分、眠られ無い晩が幾晩もつづくと、胸がほてつてどうすることも出來なくなるので、いつでも眞珠の襟飾をそのまゝ乳におしつけてゐたけれど、今夜の星は、何だかそんな小さい寶石のやうにつめたく光つてゐる、それに私の胸も丁度あの時分の晩のやうにほてつて、――乳の先でも脈を打つてゐるのよ。（間。にはかに感情の溢るゝ調）ほんとにアンチオケにゐた間の、バルサムで薰らした恐ろしい牀のことを思ふと……

マルタ　マリア！

マリア　（尙ほ感激の調をつゞけて）ラビはどうなすつたのかしら、この肌の下まで、くされた膏のやうにしみ通つてゐる耻も汚れも、みんなラビが潔めて下さるんだけれど、（ふと何事か恐ろしきことに思ひ當れるが如く）もしか、もしかイヱルサレムへいらしつて、恐ろしいことにおあひになつたのぢや無いかしら――！。

マルタ　でもラビはいつでも神樣のお使に守られていらつしやるのだし、御自分は死人でも蘇生らす力がおありになるんだもの、祭司の人達だつてどうすることも出來やしないでせうよ。

（マリア立ち上り外に出で行かんとす。）

マルタ　（上り來る人影を見出したるが如く）誰か上つて來る――（マリア立ち止る）兄樣かしら。

（間。）

マルタ　ヤコブよ。どうしたんでせう、一人で。

（間。ヤコブ上り來る。）

ヤコブ　安かれ！

マルタ　安かれ。ラビは？

ヤコブ　（尙ほ多く漁夫の語調を保ちて）ぢつきいま上つて見えようわ。つい麓まで來かゝると、稅吏のナアマンがイヱルサレムから追うて來たのよ、先前の數へをも一度聞かして欲しいといふので、あんまり手間の取れぬ先、ともかくわしをよこされたのぢや。（中に入りてマルタの進むる椅子を取り）ベテパゲの男にも日のある內とことづけて置きはしたが、さうはいはなんだかの？

マルタ　其のおことづけだつたので、先刻からどんなにかお待ちして居りました。

ヤコブ　ラビもさうあらうと言はれてゐたのぢや、それでもまあ二人とも變りが無うてよかつた。兄御はどうなされたかい？

マルタ　ほんとに折の惡いことでした。あの時からもう四月にもなりますけれど、毎日大方は部屋にとぢこもつ

て、ろくに物も言はないで居りましたのに、急に今朝、天國が近づいたから傳へて來なければならないとか言つて麓へ降りて行きましたの。ベテパゲの人がくる二た時ばかりまへでした。それまでも時々は思ひ出したやうに、神様がこの世とあの世の秘密をお示しになる夕方が近づいたの、どうしても一度麓へ降りて歡びの曉が近づいたことを知らせるのと、わけの分らないことを云つては居ましたけれど、急に今日出て行かうとは誰も思つて居りませんでした。でももうあんな風ですから止めたつて何にも聞きはしませんし、今日お出でのことも知らなかつたので、二人とも默つて居りました。まあそれでも、先刻へブロンの方から來た旅の人が寄つて、來る途で兄を見た話をして行きましたの。

ヤコブ　どのやうなことをいうて居たかい、兄御は何をなされてゐたのぢや。

マルタ　何でも死んで蘇生らされたシモンだといふので、村中の人達が多勢寄つて來るのですつて。その中を眞蒼な顔をし乍ら、それは鋭い——誰でも恐がらずに居られ無いやうな聲で、天國は近づいて來た、キリストが地上を歩いてお出でになると呼んでゐましたさうですの。もうやがて歸るでせうとは思ひますけれど、折角初めての晩餐におそくならなければいゝと案じて居ります。

ヤコブ　キリストよ、限り無うお榮えなされませい！　ほんに天國は近づいた、よみがへつた死人さへ命のしらせを敎へて歩かうといふのぢや、兄御も大けな幸を受けられようわ。此のごろはわしのやうなものゝ眼にも、水や木の色の中に正眞神様の息の震へるのが見えて、何か知らぬ夕やけ雲のやうに近づいて來るのが知れて來たわ。ラビが榮えをお受けなされる天國も、段々迫つて來たやうぢや。

マルタ　だけどもイエルサレムでは、學者やパリサイの人達がラビのお命をたくらんでゐるといふのはほんとですの？

ヤコブ　そんなことがあるにしても案じるには及ばぬ、新しいキリストの王國が、心の驕つた者や富んだ者の軛を折つて、貧しい者でも惠みを受ける時がぢつき來るのぢや。學者やパリサイの人達はそんなことを信じ度うも無いので、自分達を惡く言はれる口惜しさに何かとうるさう言ひがゝつて來るのよ。今日もいつもの廊を歩き乍ら、天國のことを葡萄畑の譬喩で敎へてお出でると、パリサイの弟子がヘロデの役人なぞと一所に來て、ラビのことを僞らぬ師ぢやの、誰にも偏らぬ眞理で神の道を敎へるものぢやのと、何やかや言うた揚句、貢をカイゼルに納めるのはよいか惡いかと尋ね出すのぢや。

マルタ　ラビはどう仰いましたの？

ヤコブ　はじめに貢の錢を見せよといはれたので、ヘロデの役人がデナリを出した。すると「その像と號とは誰か。」と問はれたのぢや、二人して「カイゼルぢや。」といふと、つい「カイゼルの者はカイゼルに納め、神の物は神に納めるがよい。」と言はれたので、それだけになつてしまうた。パリサイの奴等も言ひがゝるつてが無うなつて、顏を見合せ乍ら引き退つて行きよつたわ。此の頃のラビのお躰はわし等でも恐しう思ふ時がある。今日も丁度歸りがけにペテロが殿宇の美しさを讃めていふと、「お前達はこの大きな殿宇ばかりを見てゐるけれど、やがて時が來れば、この殿宇の石の一つさへ圮されずには遺らぬのだ、その時日は晦く月も光が無いやうになつてもろもろの星が落ちる中を、人の子は限り無い權威と榮光を受け乍ら、雲の間に現れよう。」といはれた時、わしはどうといふわけもなく總身が慄へてしまうた。

マリア　（定まらざる思ひをものいふ如く空に）ラビ！

マルタ　それは何の譬喩なのでせう？

ヤコブ　それはわしにも分らぬ、そしては繰り返して來年の春逾越節の日に、人の子は祭司に付されて十字架に釘られようと言はれるのぢや。昨日もペテロが此の譬喩を解いて下されいとお願ひしたのよ。するとしばらくは返事もなされずに悲しい顏をしておいでたが、やがて「新しい芽を殖やすには、日の光りを種子まで吸うて熟した實が、地に落ちて行くことを知つてゐよう、天國の命をよろづの人に傳へるにも、父の光りで熟した人の子の血が、十字架の上に流されねばならぬ。」と言うてのぢや。何故また新しい天國の望みが、方々にあらはれて來る今になつて、ラビが此のやうなことをいはれるのか誰にも分らぬのよ。

マルタ　だけども、ほんとにその十字架が譬喩では無いのぢや無いかしら。

ヤコブ　譬喩で無いことがあるものかい。此間の兄御の蘇生からまたガリラヤに歸つて行つたが、途々サマリアの異邦人までラビをキリストぢやと信じるやうになつて來たわ。わしはまあ一人の考へで、その逾越節の日に、何か恐ろしい天からの榮でもあらはれることかと思うてゐるのぢや。

（此間マリアはものいはずうつゝ無き姿にて立ちてありしが、にはかに抑へ難き心の溢るゝにあひしがごとくひとり出で行く。）

マルタ　マリア！

（間。）

ヤコブ　どうしたのぢや？

（間。）

マルタ　いつでもあんなですの。今日はまたさつきから、先の時仰つたラビのお言葉を氣にし出して、恐ろしいことが近くなつたのかも知れ無いつて泣いてばかりゐるんですもの。

ヤコブ　（にはかに外の人影に心付けるがごとく）ラビぢや！

マルタ　ラビ！

（二人ともに出で行かんとするとき、イエス、ヨハネ、ペテロ、ユダ、マリア入り來る。）

イエス　安かれ、マルタよ！

マルタ　安かれ、ラビ！（間）ほんとに久しくお出でが御座いませんでしたので、毎日お案じ申して居りました。

（イエスより初めて一同食卓に沿へる椅子に腰をおろす。ペテロとヨハネとイエスの左右に侍し、ヤコブとユダと之れに對ふ。マリアはイエスの脚下に坐り、マルタはやゝ離れたるまゝ立ちてあり。夕暗はやうやう濃くなりまさりて、人々のおもてをも辨ち難きほどなり）

ヤコブ　ラビ！　シモンが天國の幸を傳へに、麓へ降りて行きましたさうなぢや。

マルタ　兄も昨日までは大方部屋にとぢこもつて居りましたのに、今朝になつて急に出て參つたので御座います。（心付けるがごとく）まあこんなに暗くなつてしまひました。燈をもつて參りませう。（右手の扉より内に入る）

ヤコブ　ヘブロンから來た旅人とかの話で、シモンが途々ラビの證や天國の近づいたことなぞを多勢の人に聞かしてゐたといひまするのぢや。天國の夜あけには、死人の唇に命の聲が溢れると聞いてゐたのも此事で御座りませうぞい。ほんにもう新しい王國の芽ばえは、丁度春の若芽が枯草の中に色づいてでも來るやうに、其處にも此處にも見えて來たと今もはなして居りまするのぢや。

イエス　神の國は此處に見よ彼處に見よといふやうにあらはれて來るものでは無い、神の國はお前達の心の裏にあるのだ。

（マルタ三脚に火皿を支へたる燈を、もえたるまゝに持ち來て卓子の中央に置く。おぼつかなけれども暖き光り充ち溢れて、外面なる無花果の枝をもてらせり。）

（間。）

ペテロ　（ユダと二人此の座の年長にて、最も多く粗野なる漁夫の語調を保てり）先前の譬喩をも一度お話し下されませい。わしはあのやうな話をきくと、何ともわけが分らずに悲しうなつてなりませぬのぢや。

イエス　（その聲靜かにかなしけれど力こもりて）もう今

は譬喩で話してゐるのでは無い。丁度此頃の山にも街にも吹く風が、やがて來る冬を知らせてゐるやうに、人の子も、やがて來る死のことを明らさまに話してゐるのだ。お前達の眼にも明けの星が東の空に輝いて見えれば、程なく夜明けの來るのが知れるであらう、人の子のたましひにも無量壽の夜明けが近づいて見えて來たのだ。父の神の榮えをあらはす時は近づいて來た。人の子の命に宿つた父の光りは、やがて十字架の上のくるしみに、何よりも強く輝いて出るであらう。その時眼を射られて盲にならぬやう氣を付けてゐるがよい、十字架の上で人の子がこの世の息を絡る時、死も命も一つになつた凡ての壽が、大空の雲を裂いて世の人々にあらはれもしよう。新しい春が來て草木の間に靑い命が萌え出る頃、人の子は擧げられて死なねばならないのだ。

ペテロ　律法にも、キリストは窮り無う生きる者ぢやと敎へてあるといひまするに、十字架に擧げられてお死になされるとは、どういふことで御座りまするかい。

イエス　シモンよ、お前はやがて父の名を世に傳へる人々の中に、動かぬ磐と立てられるであらうけれど、今は何事も分らずにゐるのだ。人の子が今日まで生きて來たのも、まことを云へば十字架の上で死ぬためだつたとおぼえるがよい、世にありとあるくるしみとかなしみとを一人の身に負うて、人の子が罪人のやうに血を流す時、新しい天國の命は泉のやうに溢れて出るのだ。それでも三日目には復活つてくるであらう、お前達のために無量壽の門を開いて、天の所を備へて歸つてくるのだ、父の家に第宅は多い。――もう時は近くなつて來た。このやうなことを話してゐるにも、人の子の心はかなしみ傷んでくるけれど、たとへ今祈ればとて、父よ此のかなしみより救ひ玉へと祈りはせぬ、人の子は初めにこの道を定めた父の心を、日の光りでも見るやうに明と知つてゐるのだ。人の子の命さへもよろづの人の命と一所に、十字架の上で死ぬ時にはじめて生きるといふことや、凡てのくるしみと凡てのよろこびとが人の子の胸にたまつて、その十字架から流れるのだといふことも殘らず知つてゐる。此の死のために、人の子は父の榮をあらはすことが出來もするし、父は人の子の力を示すことも出來るのだ。父を信じ父の聲をきいて、父の心を殘り無く知つて居さへすれば、どのやうな時にもたましひの安らかさを失はずに居られるのだ。お前達も何事が起らうと、つねに父を信じまた人の子を信じて、たましひの安らかさを保つてゐるがよい、しばらくの間、お前達も世の人達と

一所に、人の子を見なくなる時が來るであらう。

ペテロ　主よ、何處へ行かれますのぢや。

イエス　人の子の行く所へお前も今は從いて來られぬ。後になれば多勢と一所に來ることが出來るのだ。

ペテロ　主よ、何故今はついて行かれませぬのぢや。わしは主のために命でも捨てゝかまはぬと思うて居りまするのぢや、獄の中でも地獄の中でも恐れなぞは致しませぬ。

イエス　そのやうにいふお前達も、やがて時が來れば散々ににげ走つて、人の子を一人殘して行くのであらう。それでも人の子は獨ゐるのでは無い、この世の萬物を育てる父が、何處にでも一所にゐて下さるのだ。人の子を捕へる者が來て槍を肋に突き刺さうと、人の子の心には、もう世に勝つた平安が溶かした金のやうに重くたまつて、風の無い日の水ほども動きはすまい。お前達も此の世ではさま／＼の患難を受けようけれど、天からの命を心に保つて、たましひの平安を失はぬやうにいつも祈つてゐるがよい、凡そ人の子の名を呼んで二三人でも集まるところには、人の子もきつとまじつて、たましひの祈るものをきいてゐるのだ。

（長き間。悲しき沈默はゆるやかによどみ行けり。）

マルタ　（徐かにマリアをかへりみて）　マリア、あんまりおそくならない内に、晩餐の仕度を整へて置きませう。

（促すやうにいへどマリア耳に入らざる姿にて動くこと無きに、しばらくはたゆたひて立ちゐたれど、やがて一人内に入り行く。）

ヨハネ　（未だ年若く容姿聰げなり。かなしげにイエスの面を瞻りて）　主よ――

イエス　（優しく愛にみちて）　ヨハネよ、お前はいろいろの異象を見るであらう。望みを失はずに居るがよい。やがて無量壽の光りが其の胸を輝かす時になれば、お前の智慧はありとある寶にもまさつて、世々に傳へられることであらう。蛇の聰明と鳩の柔和とをいつまでも失つてはならぬぞよ。

（食器などを抱へ運びてマルタ出で來。）

マルタ　（卓子の上に並べ終へて再びマリアの方を眺めつつ促すやうに）　マリアー

イエス　（優しく靜に）　マルタよ、マルタよ！　其方は多端に思ひ慮つてゐるけれど、世に心をこめて思はねばならぬ者は一つより無い、それはたゞ、たましひの願ひに耳をかたむけるのだ。何を飲み何を着ようと心を煩はして父の聲をきかずにゐれば、人は風にそよぐ葦のやうにはかないものであらう。マリアはいまたましひの聲を心にきいてゐる、その時人の聲が來て名を呼ばはうとも、

もう妨げることは出來無いのだ。

（マルタ俯れ立ちてあり。間。マリアにはかに立ち上りて内に入り行く。マルタはそのあとを見送りて自も從ひ入りしが、しばらくしてまた新らしき食器を運び來り卓子の上にとゝのふ。その時マリア蠟石にて造りたる希臘の油盒を持ちて出で來りしが、イエスの傍に歩みより忽ち盒を傾けて中なる香膏を注ぎかく。つややかなるイエスの髮より脚に重き香膏流る。やがてマリアの涙溢れまた跪きて自らの髮を解き主の脚を拭ふ。弟子等驚き顧む。間。）

ユダ　（醜く卑しきさまなる容姿）途方も無い香りぢや、ヘロデ王の花室へ這入つてもこれほどの香りはしまいぞよ。ほんにまがひの無いナルドの香膏ぢや、價もよつぽど高うする、その盒で三百有奇のデナリには間違ひ無う賣れたものぢやに、何でまた無駄に流してしまふのぢや。貧しい者にどれだけ施しが出來たか考へても見い。

イエス　此の女を擾さぬがよい。純りの無い金にもかへられぬ心の香りが、此のナルドには流れてゐるのだ。貧しい者はお前達の心のまゝにいつ助けることも出來ようけれど、人の子はもう世を離れて父の家へ歸つて行くのだ。マリアが心をこめたもてなしも、やがて葬りの香膏にならうか知れぬ。いまこの室は膏の香りで充ちてゐる。人の子の死を思ふものゝ心にも、この女の名はナルドのやうに香る時が來るであらう。

（長き間。）

マリア　（跪きイエスの膝の上に手を合せつゝ哭き變ひて）ラビ！　どうしてもお死になさらなければなりませんので御座いますか――

（間。）

――やがて徐かに幕――

第二幕

序章

ケデロンの谷なるゲツセマネの園。春のなかば暗き夜半なり。いと繁き橄欖の樹の中程なるにもえ上れる燈を吊したれば、血の如き光りしばだゝきて、ほのかに明らめる樹々の枝には暗き谷の恐怖おのゝきてあり。燈の園に三人の使徒等。ペテロ、ヨハネ、ヤコブ蹲る。

ヤコブ　渝越節ぢやといふに夜はまだこんなに寒いのかなあ、わしはどうしても慄へがとまらぬ。

ヨハネ　もう夜明けにも近いので、つめたい露が降りて來るのだ。

ヤコブ　早う明けてくれゝばよい、暗やみであの水の音を

きいてゐると、何か知ら胸がさわぐやうでならぬわ。(にはかに心付けるがごとく) 燈が小さうなりはせぬかい、油は大丈夫かの？

ヨハネ　何にも小さうなりはせぬ。わしは先前からあの火ばかりをみつめてゐるのだ。

(間。)

ヤコブ　シモン、和主は今日劍をさげてゐたかのう。

(ペテロ答へ無くて睡り居る。)

ヤコブ　シモン！

ヨハネ　シモン！

ペテロ　(目を醒ましつゝ) 何ぢや！

ヤコブ　和主は今日劍をさげてゐたかのう？

ペテロ　わしはねむつてゐたのかい、ラビよ、おゆるしなされませい、何でついあのお言葉をきいてゐながら、一夜ぐらゐ起きてゐられぬのぢや——

ヤコブ　わしは和主の劍のことをきいてゐたのぢや。

ペテロ　この劍か、(腰より劍を拔きて) 半月まへに街で買うた、ローマ人の鎧ぐらゐは突き通しも出來る双刃ぢや。(奥の方を顧み見て) ラビはまだ祈つてお出でるのかい。

(ヨハネ立ちて奥の方を窺ひ見る。)

ヤコブ　立つて行くなよ。祈つてゐる間は、こゝを動いてはならぬとお言ひ付けなされたのぢや。

ヨハネ　川の向うの石のかげに祈つてお出でる——靜にして見い、くるしさうにかすかなお聲がきこえるぢや無いか。

(間。不安なる沈默。)

ヤコブ　わしにはなんでラビがあんなにくるしさうにしてお出でるのかわけが知れぬ。昨日の有樣を思うても見い。ベテパゲからイエルサレムまで、ラビを圍んで行く何百人の人の中には、四つ位になる嬰兒までダビデの裔よホザナよと呼ばうてゐたわ。それにあの都城の騷ぎよ、わしは今にも十二軍の權威がラビのお手に宿つて、新しい神の國があらはれようと思うてゐたのぢや。

ペテロ　まだ時が來ぬのぢやよ、わしも昨日こそはと思うてゐたが、きつとラビはまだ早いとお思ひなされたのぢや。

(間。)

ヤコブ　それでもほんとにユダの奴は、ラビを賣しに行つたのかい。ヨハネよ、和主はたしかに名前をきいたのだな。

ヨハネ　あの羔を食べた後でラビがパンをさき乍ら、この内の一人人の子を賣すものがあらうといはれた時、わしは耳によつてそつときいて見たのだ。すると、パンに水

をつけて渡す者を見よといはれて、すぐそれをユダにお渡しなされた、それからユダが出て行つたのだ。

（間。）

ペテロ　たとへ羅馬の兵卒が何人して捕へに來ようとも、神の子のラビには十二軍の天使がついてお出でるのぢや、何の恐れることがあらうかい、これまでも幾度パリサイの奴等て、ラビを石撃ちにしようとしたか知れぬが、ラビのお身に怪我一つなされたことは無いのぢや。

ヨハネ　それにしても去年からあれほども繰り返して、十字架のことを言はれた逾越節が、もう明日になつてゐるのだ。わしは先前食卓に並んで、葡萄酒の杯をまはし乍ら「これが最後の晩餐にならうも知れぬ、世のために流す人の子の血を飲んでおけよ。」と言はれた時から、誰にも言ひはせなんだか、恐しいことが眼の前に近づいたのでは無いかと思うてゐるのだ。それにあのくるしさうな祈禱のお聲よ、今和主達が睡つてゐる間に一寸戻つてお出てたが、額から血のやうな汗が流れて見えたぞよ。

ペテロ　わしには解らぬ、あの十字架のお言葉もわしにはどうしても何かの譬喩としか思へぬのぢや。キリストは限り無う生きて、新しいイエルサレムを地の上にたてゝ下さる方では無いのかい。神の子のキリストが何故お死になされねばならぬのぢや。あの死人さへもよみがへらしたラビが、どうしてお自分のお身を救ふことがお出來なさらぬのぢや。

ヨハネ　（僅に幻覺を感ぜる調をおびて）　和主がそのやうに言へば言ふほど、かすかにきこえてゐた恐しい聲がもうはつきりひゞくやうに思へるわ。ほんに今までは之ほども思うてゐなんだ。（次第に恍惚の調を高めて）　先前からこの燈ばかりをみつめてゐたのだが、和主がそのやうな話をする内に、段々あの聲が火にあつまつて、葡萄酒の赤い色もこの火の色も、みんな十字架から流れたラビの血のやうに思へて來たわ、この血が命の泉になるのだ、この血の流れて行く野原には無量壽の花が咲いて、やがて新しいイエルサレムの邦もたつのだ――

ヤコブ　（怖れたる語調にて遮り）　ヨハネよ、和主はどうぞしたのかい。

ヨハネ　（我に返りて）　わしは何を言うてゐたのだ、（奥の方を顧み）ラビはまだ祈つてお出でるのだな、きつと今夜の内に祭司はラビを捕へに來ようわ、ユダの奴が行つたからラビが此處にお出でのことも知れてゐるのだ。

（不安なる間。）

ヤコブ　（怖れたる語調）　ヨハネよ、和主はどうぞしてゐるのでは無いのかい。

（間。）

ペテロ　（語調唐突に怖れをまぎらすが如く）　何の捕へさしてよいことかい、羅馬人が百人來ようとわしはこの劍でラビをお守りして上げるのぢや。

（この時右手よりイエスあらはる。）

イエス　シモンよ、劍を鞘にをさめて置くがよい、劍の力でたたうとするものは又劍の力で仆されてしまふのだ。若し守られて身を安らかにしようと思へば、人の子の力にどのやうなことも出來るといふのを知らないのか。

（間）世につながれた空しい夢をいつまで見てゐるのだ。財寶と希望とを天に置けと人の子は何度敎へたか知れぬ——やがてお前達の心の裏にも、新しい天國の夜明けは來るであらうが、今あからさまに告げる言葉をきくがよい。——人の子は明日の節に死なねばならないのだ。

（間）命の力といふものを人の子は今より強く思つたことも無い、溢れ出る命のくるしみといふ力の中にはもう新しいよろこびの力が湧いてゐるのだ。やがて無量壽の金の光りも、十字架から流れる血の色に輝いて見えるであらう。——まだ祈つて來ねばならぬ、人の子の胸はありとある死のくるしみに惱んではゐるけれど、定められた父の心を誤り無う世につたへて、その名の榮をあらはせるやうに終りまで祈つて居ねばならないのだ。お前達はまだこゝにゐて。人の子の祈禱を守つてくれねばならぬぞよ。

（又右手より入り行く。恐怖と不安と哀傷とにみてる長き間。）

ヨハネ　（にはかに立ち上り左手の方を眺めつゝ）　見い、あすこの棕櫚林の上が赤うなつたぞよ。——段々こつちへくるわ、炬火の火だ。

（他の二人齊しく立ち自ら相よりて眺めやる。間。）

ヨハネ　鎧にさはる劍の音がきこえる、兵卒どもがやつて來たのだ。

ヤコブ　ラビ！

ペテロ　父よ、ラビのお身をお守り下されませい！

ヨハネ　たうとう川まで來てしまうた。——

（間。）

ヨハネ　ユダがゐる！

ペテロ　（思はず進み出で慄へてかすかなる聲なれど鋭く）ユダ！

（間。同じ姿を保ちたるまゝ三人は等しく右手の方にたじろぎゆく。劍鞘の鎧に觸るゝ音きこゆ。しばらくありてイスカリオテのユダ先だち、炬火を持ち棒をさげたる祭司の下吏二人、劍を拔き持てる守衞の兵四人左手よりあらはる。兩者對立す。イエス徐かに右手より出で來る。）

イエス（極めて平かなる語調）刀や棒片をさげて强盗を尋ねるやうに誰を尋ねてゐるのだ。

祭司の下吏　ナザレのイエスを尋ねるのぢや。

イエス（言ふべからざる力こもりて）これがナザレのイエスだ。

（遣はされたる者等自ら期せずしてたじろぐ。）

イエス　日毎に殿宇の廊で教へをしたナザレのイエスだ。早う捕へてお前達の役目を果してしまふがよい。

（間。兵卒等進み出で劍を拔けるまゝにてイエスを周る。下吏の一人其の手を縛し終れば、他の一人右手の方に先だち皆之に從はんとす。誰ありて言ふことなし。たちまちペテロ躍り出で劍を揮ひつゝ兵卒等を打たんとして反つて止めらる。）

イエス　シモンよ、劍を鞘に韜めよといふた詞を忘れたのか。父の心から出た杯は、飲んでしまはねばならないのだ。

（再び歩み出でんとして、ふと何左の樹蔭に俯れて立ちつくしたるユダを顧み優しくいふ。）

イエス　ユダよ。

（ユダ面を上ぐること無く、一隊は炬火の煙を殘して去る。三人の使徒等之につゞく。ユダ一人場に殘り何方に行くべきかを迷へるものゝごとくなりしが、やがてまたもと來し道の方へ俯れよろめきて去る。）

——幕——

後　章

方伯ポンテオ・ピラトの廳。建築は早初羅馬期の樣式に倣ふ。正面の奧、壁の中央に大いなる黑き扉あり、開けば露臺にして、その上にしつらへたる審判座の一部を覗ふべく、左右の兩隅には太き角柱を壁の中にぬり込め、之を結びて全室を覆ふ穹窿となせり。右手の壁間に高さ天井に至る座障を構へ方伯の座を設く。その段階には豹の皮をしきてあり。左手の壁中央にも正面と同じき大いなる扉あり。床には赤き絨毯をしき、扉の前を除く外、室の緣二クビットばかりをやゝ小高き臺に作る。欄間、座障、椅座、角柱等には凡て重く黑き浮彫を施せり。

前景の事ありし明る朝、四月三日逾越節の日なり。

羅馬人四人椅座の此方に立ち、見物には背をなして語る。正面の扉の兩側には槍を持てる守衛の兵立ち、左手の扉と同じく今は閉ぢてあり。外面に喧擾の聲。

第一の羅馬人　段々騷ぎがひどくなるぢや無いか。街中の奴等が狂人にでもなつたやうだ。

第二の羅馬人　今來る途で見てゐると、若い女達まで多勢

の中にまじつてかけ乍ら、みんなして、惡魔の僕を殺せの、叛逆人は何處にゐるのつて怒鳴るのだが、まるで血に飢ゑた猛獸共が吠えるやうな騷ぎだ。

第三の羅馬人　癩病と石塊の中に育つた奴等だ。デナリの錢が欲しければ豚のやうなまねもするし、晝日中馬鹿馬鹿しい夢を見ては狂人にもなる奴等だ。だがアツピユウスは叛逆人といふ男をまだ見てゐるのかい。

第一の羅馬人　あれも妙な人だよ。何故かあの男にひどく感心して、先刻から審判座に出てゐるのだ。どうも哲學者なぞといふものは、己達に分らないことを考へるものだからなあ。

第四の羅馬人　だが叛逆人といふのはほんとに危險な男なのかい。己はまだ顏も見ないが一體何をしたといふのだ。

第一の羅馬人　何をしたのでも無いんだ。たゞ自分から神の子だのユダヤの王だのと名乘つたばかりで、例の律法の死罪に觸れたといふのだ。それがをかしいぢや無いか、つい一昨日は何處か田舍の方から大變な行列で這入つて來て、街の奴等も、凱旋の將軍でも迎へるやうにきちがひ騷ぎで迎へたんださうだ。

第二の羅馬人　あの男かい。己は丁度ベテパゲのネツサリウスを訪ねようとするところだつた、その行列に出會したよ、先生が驢馬かなんぞに乘つてやつてくると、あとや先に何百といふ人達が取りまいて、手ん手に棕櫚の葉なぞを振り立て乍ら、王だの神の子だの分らないことを怒鳴つて行くんだ。婦達は自分の着てゐる上衣まで脫いで、馬の通る道の上へ投げてゐるし、時候が時候だから己は羅馬の花祭でも見るやうな氣がして、しばらくは立つて見てゐたつけ。

第四の羅馬人　だけど分らないぢや無いか、そんなにまでして騷いだ男を、なぜ今日は罪人にして引つ張つて來るんだ。

第一の羅馬人　己の考へでは祭司の奴等がどうにかして、街中をおだてたんだと思ふよ。ともかく彼奴等が一番大きな勢力を持つてゐるんだから。何にしてもこんな狂人達の考へが羅馬人に分ることぢや無い。今もあれでみんな審判座へ上らずに、下から怒鳴つてゐるんだが、審判の座へ出ると身が汚れるので、今夜節の羔が食へなくなるといふんださうだ。方伯もあの騷ぎの中で、一齊に怒鳴り立てる訴へをきかれるのだから、一と通りの骨折では無いだらうよ。

（此の時正面の扉を開きて第五の羅馬人入り來る。扉の開くる時外なる喧擾明かに聞ゆ。）

第一の羅馬人　アツピユウスはまだ見てゐるのかつて話してゐたところだ。あの男は何か言つたかい。

第五の羅馬人　不思議な男だ。街の奴等がわめき立てゝ、自分で王と名乘つたの、税(みつぎ)をカイゼルにをさめないのといろいろに訴へるのだが、先刻から一言ものをいはずに立つてゐる、それが何か恐しい力を握つてゐるやうに見えるのだ。ソクラテス派の哲學者がいふ心の中に太陽のやうな信念がもえて、生も死も其の焰にやかれてゐるとでもいふ風だ。祭司の奴等もあんな男に生きてゐられては、自分達の安心が出來ないので街中を唆したものと見える。もう集議所の屋根の上まで一杯に上つて、十字架につけろの石撃ちにしろのと怒鳴つてゐるのだ、方伯(つかさ)も釋し度いと思つて居られるやうだが、とても血を見ずにをさまることでは無ささうだ。

（間。）

第四の羅馬人　一體その男は何處から出て來たのだい。

第五の羅馬人　ガリラヤのナザレといふ村から來たのださうだ。いつか君とアレキサンドリアの歸り途で、死人をよみがへらしたイエスといふ途方も無い若者の話をきいたぢや無いか。あの時のイエスといふ男だ。

第四の羅馬人　（驚きて）　何だ、ナザレのイエスか、――己は二三日前ベテスダの池の所でついあの男に出くわしたよ。いつかは君も馬鹿々々しいので笑つてゐたが、全く不思議な力を持つた男なんだ。其の時も丁度、生れつきの跛者(あしなえ)だといふ老人を起たしたところで、老人は大きな聲をあげて、神の子よ救世者よと泣き乍ら呼んでゐたが、猶太人には珍らしい上品な顏をして不思議に力のある聲をした男だ、あんな男を殺すことは無いぢや無いか。

（この時また正面の扉を排してピラト、三人の羅馬人を從へて入る。）

ピラト　（方伯の座に着きつゝ新に入れる第六の羅馬人に向ひ煩はしげに）　自分達の律法で自分達の思ふやうに審判をしろとでもいつてくれないか。

（第六の羅馬人出で行く。）

ピラト　狂人達の騷ぐのをいつまで聞いて居られるものぢや無い、昨夜から妙に氣持が惡い所へ彼奴等の騷ぎを聞いてゐると、己の頭まで變になつて來さうだ。

第一の羅馬人　どうしてもあの男を殺さうといふので御座いますか。

ピラト　馬鹿々々しい話だ、あの男が神を見たといつたり、ユダヤ人の王だといつたりしたから十字架につけろといふのだ。一體ガリラヤ人のことならヘロデに渡して置けばよかつたぢや無いか、血だの律法だの途方も無いことをいふ宗教の騷ぎは、己は此の前からこりごりしてゐる。

第一の羅馬人　何でも彼奴等の律法を定めた神といふのは宇宙に一人しかゐないので、酒よりも血の方が好きなのだとか馬鹿々々しいことを申して居りました。

ピラト　己もつくづくユダヤなぞにゐるのがいやになつた。もう四月の花が咲く時分だのに、赤くやけた磽地の灰でもかぶつてゐて、街の鋪石をまたぐにも律法だの魔法だの癩病だのがころがつてゐるのだ。——（頭に手を支へて）ゆふべよくねなかつたせゐか、時々眼の前が眞赤になつて何だか妙な氣がしてならない——

（第六の羅馬人入り來る。）

第六の羅馬人　自分達には人を殺す權利が無いから付しに來たのだと怒鳴つて居ります。私の考へではともかくあの男をお呼び入れになつて、一と通りお審べをなさるより外は無いやうで御座います。

（間。）

ピラト　ともかく呼び入れるがいゝ、街の奴等が亂暴をしないやうに氣を付けてくれ。

（第六の羅馬人出て行く。間。）

ピラト　あの男には何か恐しいところがある。いろ〳〵な奴等が何を言つても一言も口をきかないで立つてゐるのだが、あの眼でぢつと己の眼を見られると、何か火のやうなものが頭の中へ這入つてくるやうだ。

第五の羅馬人　私も今そんなに申して居りました、どうも只の猶太人では無いやうで御座います。もつともあの男の名は先から聞いて居りました、昨年の夏シラニユウスとアレキサンドリアへ參つた歸途で御座いましたが、四日の間塚穴に葬つてあつた死人をよみがへらしたといふので、ベタニアの村は大變な騷ぎをして居りました。又馬鹿々々しい例の妄想だと思つて其の時は氣にも止めずに居りましたが、今朝名前を聞いて見ますとそれがあの男なので御座います。

ピラト　あの男が死人をよみがへらしたといふのか。

第五の羅馬人　勿論幻象ばかりを追つて居ります猶太人の申すことで、信ずるわけには參りませんけれど。

ピラト　（正面の扉に面を向けて）ひどい騷ぎをする奴等だ。中へ連れて這入るので皆が聲をあげるのだな。

（間。扉開きて、手をつながれたるイエス、二人の兵卒と第六の羅馬人とに導かれて入る。いふべからざる恐怖人々の面にあらはる。イエスの容姿はまのあたり生命の眩燿に面へるが如く、前の夜に比べては既に明に嚴かなれど裏には限り無き不安の心を湛へゐたり。ピラトの前に立つ。間。）

ピラト　お前はユダヤ人の王か。

イエス　其方がそれを尋ねるのは自分で思うていふのか、

人の告げたのをきいて言ふのか。

（間。）

ピラト　己はユダヤ人ではない、羅馬皇帝に命ぜられた方伯のポンテオ・ピラトだ。祭司の長がお前を連れて來て己に刑を求めてゐるのを知らないのか。街中がお前を十字架につけろと迫つてゐる、お前は一體何をしたのだ。

イエス　我國は此の世の國では無い、もしわが國がこの世の國ならば、僕たちは此の身をユダヤ人に付すまいとして戰ひもするであらう。此の身は地上の煩ひにつながれた者では無いのだ。僕たちも此の世の屬では無く、わが國も此の世の國では無い。

（間。）

ピラト　（既に明かなる恐怖の語調）　お前は自分で王と名乘つてゐるのか。

イエス　其方は自分で知らずにいつたのだが、世にまことの王と名乘らねばならないものは此の身より外に無い、此の身より外に天地のもとゐとなる眞理を證したものは無いのだ。凡そ眞理につかうといふ人々に父の神の聲をきかせ、無量壽と呼ぶたましひの平安を與へるのが、世にある間此の身のして來たことであつた、之からも限り無くつとめなければならない仕事なのだ。

（やゝ長き間。）

ピラト　（第一の羅馬人に問ひ）　チゲルリウス、逾越節に一人の罪人を釋すのが彼奴等の傳習だ。己はユダヤ人の王を釋さうと思つてゐると、外へ出て言つてくれ。

（第一の羅馬人出で行く。間。）

ピラト　（またイエスに）　それほどの貴い身であり乍ら、なぜあんな卑しいユダヤ人に捕へられてしまつたのだ。

イエス　此の身が十字架にあげられて死なねばならぬことは、世のもとゐをも置かれてゐない初めから定めてあるのだ。死といふ命の最後に、此の身に宿つた神の力と榮とは殘り無く輝いて、凡そ日の下にある國々に神の名が聲高く呼ばれねばならない、ありとあるくるしみとよろこびとを一つにした壽が此の身の死に輝いてあらはれるのだ、耳をもつてきくものはきくがよい。天地の失せる時は來ようけれど、わが言葉の失せる時は來無いのだ。

（やゝ長き間。第一の羅馬人入り來る。）

第一の羅馬人　仰せの通り申しますと、何か祭司の奴等が街の者共に言ひ付けましたやうで、すぐ、此の男では無いバラバのイエスを釋せと喊き立てゝ參りました。みんなあとからあとから押して參るのでもう先の者は鋪石の上まで上つて騷いで居ります。

ピラト　バラバのイエスといふのは此間の亂暴な一揆を起した男だな。

第一の羅馬人　左様で御座います。あの男こそ用心せねばならない奴で御座いました。

（間。）

ピラト　ともかく鞭を當てさせるより仕方が無い。君は此の男を奥庭へ連れて行つて兵卒共に吩付けてくれ、街の奴等も眼の前に鞭の當つた姿を見たら、其の上殺せとは言ひ出せないかも知れ無い。

第一の羅馬人　宜しう御座います。

（第一の羅馬人先だち、イエスは兵卒等に曳かれつゝ、左手の扉をあけて入る。間。）

ピラト　あの男の聲には恐しい力があるやうだ。胸の中へ鎔けた金でも流れるやうに重々しくひゞいてくる、わけの解ら無いことをいふのだが、あの聲をきいてゐると、己の心の底で何かしら慄へるものがあるやうだ。己はあの男を殺し度くは無い。

第五の羅馬人　ほんとに不思議な男で御座います。希臘の哲學者にもあれほどの力をもつて死を語つてゐるものは御座いません、ソクラテスでさへあれほど確に死を克服してゐたとは思へないやうで御座います。一人の死の中に命があるなぞと、まだ誰も云つて居らないことを、自明のことのやうに申して居りますが、どうもあのわけの分らない言葉の中に、何かしら深い力を握つてゐるのでは無いかと思はれます。

（左手の扉を開きて廳に屬ける下吏一人入る。）

下吏　奥方から侍女が二人お使ひに見えまして直にお耳に入れることが御座いますやうに申しておいでになります。

ピラト　奥から使が來た？（間）ともかく通して來い。

（下吏出づ。間。侍女二人入り來る。）

ピラト　何の用で來たのだ。今日は審判があるのを知つて居るぢや無いか。

第一の侍女　其の御用で奥方からのお使ひを持つて參りました。

ピラト　何だ、審判の用といふのは？

第二の侍女　今日お審判にあふといふガリヤラ人のとで、奥方がお夢を御覽になつたので御座います。そのとを申上げて餘り酷い處刑をなさらないやうにお願ひ申して來よと仰るので御座います。

ピラト　（甚だ安からざる語調）あの男のことを夢に見たといふのか、何だ、早く話せ。

第一の侍女　曉方殿樣がお出ましになりまして後に少しばかりお眠みになりますと、丁度お庭の花苑を殿樣とお二人でお歩ひのところだつたと仰るので御座います。此頃のやうに暖かい日の中を、いつものミネルヴの噴水まで

お出でになりますと、今までに無い眞赤な花が一輪お目にとまりましたので、何の思召も無く、殿樣がそれをお摘み遊ばしたのださうで御座います。するとその花のつみ口から人の血のやうな赤い水が流れて、ついお手が汚れましたのを、奥方がすぐ傍の噴水でお洗ひ申上げたと仰るので御座います。ほんに申上げるのも恐ろしいことで御座います――まあその血がいくらお洗ひになつても落ちませぬばかりか、奥方のお手まですつかり赤く染まつて、見る内に段々濃くなつて參るのださうで御座います。その内たしかに噴水の像の口からきこえたと仰います、恐しい聲がして、「その血こそあのガリラヤ人の義しい血だ、いつまでも二人の身から拭はれる時のないものだ。」と申すので、思はず像の方を御覽になりますと、それがまあ、血に塗れた――殿樣だつたと仰るので御座います――

ピラト　（不安に亂れたる語調）　もういゝ、夢の話をこんな所に云つてよこす奴があるものか、馬鹿々々しい奴だ。己達は羅馬人なのだ。

（此の時扉を排してイエス前の人々に曳かれて入る。頭には棘にて編める冕をのせ、紫の布を袍衣のごとく肩より着たるがそのさまいふべからず慘まし。繩を持てる二人の兵卒等正面の扉を守れる兵卒等と相見て嘲り笑む。）

第一の羅馬人　ユダヤ人の王といふので兵卒共が戯れに致したので御座います。別に傷を負はせることでも御座いませんのでする儘に任せて置きました。

ピラト　己はいつそんな風をさせろといひつけたのだ。

（間）　まあいゝ。（自ら段を降りつゝ）　己のあとからその男を連れて來い。

（ピラト、イエス、第一の羅馬人、椅座の彼方に立てる四人の羅馬人等正面の扉を排して露臺に出づ。間。）

第三の羅馬人　方伯はどうなさるつもりなのだらう。何だか氣味を惡がつて居られるぢや無いか。

第二の羅馬人　もう何をしても空なことだ、街の奴等がかう騒ぎ出したからは、あの男の血を見ない内にをさまりはし無い。だがどうも今度のは、いつもの宗教騒ぎと同じでは無いやうだなあ。

第四の羅馬人　己は何だか妙な氣がして來た。今まで考へずにゐたいろいろなことが大きな流れになつて眼の前へ迫つて來たとでもいふやうだ。あの男が死人をよみがへらしたといふのも己はほんとのことぢや無いかと思ふよ、ベタスダの地で見た時も多勢の眞中に立つて、自分を信じるものは死んでも生きるとかいつてゐたが、全くあの男には人間の力に無いものが潜んでゐるやうだ。

第三の羅馬人　だが途方も無いことを言ふ男だ。自分が十字架にあげられて死ぬのは、此世のもとゐも出來てゐない初めから、きめてあるなぞといつてゐたぢや無いか。(第五の羅馬人に問ひ諷刺的に)　君なぞの哲學の方ではあんなことはおかしいのぢや無いのかい。

第五の羅馬人　心の力で握つてゐる生命さへ眞實のものなら、其れが思想や言葉となつて意識の表に出てくる時、たとへ幼稚な形を取つてゐようと煩はさるゝことは無い。段々己にも、あの男の意識の下で感じてゐる眞實が太陽のやうに強い光りのもので、それがいつも不思議な力の源(もと)になつてゐるのだと分つて來た。人間の言葉や推理なぞといふものはどうせ眩惑と欺瞞とに滿ちたものだ。思想や哲學はいつまでも子供な智識と一所に動いて行くので、今日の眞理はもう明日の眞理ではない、日常の事實も其の通りだ、只言葉や事實の意識の下に、此の世を動かして行く永遠の眞實が流れてゐる、そしてその眞實は、見る人の目に應じて各々(それぞれ)に見えるだけよりあらはれることは無いものなのだ。己は二十年修辭を修めて希臘の哲學も殘り無く調べたが、眞理はいつでも言葉が明に意識してゐないところに光つてゐる。だがソクラテスもプラトーも、あの男のやうに恐しいと思ふ程眞實の光つた言葉を吐いてはゐない。自分の死はありとあるくるしみとよろこびとを一つにした命だと云つて居たが、あれは非常な言葉だ、何だか人間の心には、あの言葉にあらはれたよりも強い眞實を掴むことは出來ないやうな氣がする。それにしても平常(ふだん)どんなことを教へて居たかきゝ度いものだつた。

第四の羅馬人　己の見た時は死んでも生きるのだといふことや、父の心を知らなければならないといふやうなことをいつて居たが、何だか己にはわけが分らなかつた。

(此の時再びイエス、ピラト、前の人々等出で來る。間。)

ピラト　(座に直りて)　街の者はあんなに騷ぎ立てゝゐるのに、お前は何の答へもしないのか。

(イエス答へ無くしてピラトの面を見つめてあり。)

ピラト　何故己の言葉にも答へ無いのだ。己はお前を十字架に釘(つけ)る權威もあり、またお前を釋す權威もあるのだ。己の手にお前の命を握つてゐるのを知らないのか。

(イエス猶ほ答へ無し。長き間。其のさま直ちに人々の心をして眞實の權威を思はしむ。正面の扉開け、廳に屬ける他の下吏一人入る。)

下吏　祭司共が街の者に今夜は節(いはひ)の羔(こひつじ)をたべずとも、直(ぢか)にお訴へせねばならぬと申しましたやうで、長老(としより)が十人ばかり審判座(ピマ)の下まで參つて居ります。あとから多勢が

押して參るので、どのやうに追ひ拂ひましても動く所では御座いませぬ。如何致せば宜しう御座いませうか。

(間)

ピラト　二人ばかり這入るやうに云つて來い。

下吏　畏りまして御座います。

(下吏出でゝ行く。間。)

ピラト　(何言無きイエスに向ひ、語調著しく謙りて)　もう一度己に聞かしてくれないか、己はもつと早くお前の言葉をきけばよかつたと思つてゐる。先刻眞理といふことを云つてゐたが、一體眞理とはどんなものをいふのだ。(間。不安に迫らるゝものゝごとく)　返事をしてくれないか。己はいま聞いてゐるのだ。

(イエス遂に答ふることなし。長き間。やがてイエルサレムの長老二人、下吏に連れられて正面の扉より入り來る。)

ピラト　(荒々しく)　お前達は街の長老だな。己はお前達の王を十字架に釘ねばならないのか。

第一の長老　カイゼルより外にわしらの王はありませぬのぢや。若し此の男をお釋しなされたら方伯はカイゼルに不忠な者といはれますぞい。羅馬まで使をやつて此の有樣を申上る位はわけのないことぢや。

第二の長老　わしらにはヱホバの大神がシナイ山で、モーゼにお示しなされた律法がありますのぢや。其の律法をば此の男が汚しましたのぢや。大安息日に麥の穗をつむ、サマリアの女とものをいふ、神の子ぢやの王ぢやのと名乘る、恐ろしい罪は一々數へても居られませぬ。此の男は死なねばなりませぬのぢや。

第一の長老　何人も自分で王と名乘る者は、カイゼルに叛くものではありませぬのかい、此の男は稅もをさめてはならぬと申しますのぢや。途方も無い叛逆人ぢや。

第二の長老　此の男は……

ピラト　もうよせ。(間。思ひ切りて語ふごとく)――己は此の義人の血に關係は無い、――自分で宣告すのでは無いが、お前達の手に任せてやらうわ、――己はこの人の血を見度くは無いのだ。

第一の長老　それで此方の用もすんだといふものぢや。此んな男の血位は、わしらとわしらの子孫にふりかゝつても仔細は御座りませぬわい。ナザレ人、ほんにナザレからキリストが出るのぢやなぞと途方も無いたわけたことをいふ奴ぢや。ナザレのキリストよ、大工の御子よ、これからゴルゴダへ行くのぢや。イエルサレムの殿宇を三日で建てる位の神の子なら、手足を釘づけにされた十字架からでも飛び降りて、自分の身を救うて見せるであらう、そしたらわしらも信じませうわ。

第二の長老　罪をゆるすの潔めるのと無法なことを吐(ほざ)いた舌も、もう恐れに硬ばつて一と言もものが言へぬと見えるわ。それにしても十字架を負うて行く囚人(めしうと)に、其の冕と袍衣(うはぎ)とは不似合ぢや。（冕と袍衣とを剝ぎ取り、兵卒共に問ひて）そんならついゴルゴダまで曳いて行つて下されますかい。十字架は用意がしてありますのぢや。

（イエス、長老等、兵卒等、正面の扉より出づ。暴かに破るゝが如き叫喚の聲聞ゆ。間。）

ピラト　（既に閉ぢたる扉の方を向ひ、そのこゝろ節を失ひて）己はあの男を殺したのでは無い、――あの男の血が己にかゝる理由は無いのだ――。

（再び間。）

寧ろ急に幕。

――終焉――

（白樺　大正元年十月）

夜潮のどよみ（一幕）

若くは太古少女譚

人物

パンニノ　グラウロの父
チアンチヨツトー　グラウロの叔父
グラジーラ　グラウロの妹
アリアドネ　グラウロの戀人
マツチニの占ひ婆
劍と楯とを持つの力無きがゆゑにのみ戰場に參ずること無かりし老人・兒女等。

時代

基督前七百年代

場所

ロマ市外郊の一角

第一段

彼等の殺伐なる文明を、こちたき石塊の間に築けりし古都外郊のいと明かなる月夜。

左手奥より斜前（なゝめまへ）の方にグラウロが家の石橋走り、幅ひろき階段に臨みて扉無き門開けたり。石にたゝめる街路、石橋の角を廻りて左折すれば更に之に沿うて河水流れ、右手前寄りに石橋の一部をあらはす。曲りて見ゆる對岸は蒼茫たる廣野に、形ある者の遮ぎること無ければ、數知れぬ玻璃を重ねし月空のあを色、海底の如く澄み輝きて散らぼへり。いま右手隅の方に血の蒸氣（ゆげ）にも似つといふべきあか色ありて、煙の如く這ひ漂ひ、病める指等の如く掴み慄へつゝ、ほのぼのとひろごるなべに、幾千群衆が叫喚と知らるゝ騷擾は遙かに遠きより、さながら野に溢れたる洪水の恐ろしき夜潮の如く、迫り近づき來らんとす。

（アリアドネ白衣して橋欄に立ち、遠く叫喚のものいふを沈み聞ける姿にてあり。僅かに時を經て門の内より赤き衣を纏へるグラジーラ歩み出でたるが、階段を下り終らんとして橋上の白影を認め歩みを止む。）

グラジーラ　（靜かに）　アリアドネ。（やゝ高く）　アリアドネ！

アリアドネ　（驚き顧みて又靜かに）　出ていらつしやいましたのね。この橋の上に立つてゐると、月の光に濡らされた銀色の煙の樣に、あの聲が水の上を這つてくるのがよく聞えますの。

グラジーラ　いつからさうして聞いてゐたの。

アリアドネ　まだ水に映つた月が私の窓の下を流れてゐる時分に家をぬけて來ましたの。今日は朝目が覺めた時、寢床の上にさし込む日の光りが、偶然眞赤な血の色に見えてから、もう一日丁度香の高い花束を枕に置いて夢を見た翌る日の樣に、重い血が兩方の乳に下つて、息の出し入れにも胸が騷ぐ樣でなりませんでした。それでも夕方、薄みどりに月を含むだ細い露の粉が髮の上に降りて來て、柔いびろうどの艶にしつとり包まれる時分からは、玻璃の水鉢へ入れた眞珠でも眺める樣に、物事がはつきり見聞き出來る樣になつて來ました。段々月が高くなつて、方々の家の燈火が消える頃、私もグラウロの名を念じ乍ら窓をしめようとしますと、川の底からとも何處からとも無く、あの聲が風に散らされた金紗の樣に漂つて來ましたの、そして不思議にグラウロといふ名が、海の底で眞珠の光が搖らいだ樣に一と言聞えると思つたので、私はといた髮を川の水に洗はれるほど身をのり出したまゝ、息の音も恐がる樣にしましたけれど、そんなはつきりした言葉などは、それつきり何も聞えなくなつてしまひました。すると戰にならない前、よくこの橋の上で會はうと約束した時の心持が、俄にからだ中を波打つて來たので、もうぢつとしては居られなくなつて、いつもの樣に裏の門から忍んで駈けて來ました。來る道でも丁度あの時分と同じ樣に、ふは／＼と空に漂つた用の無い雲が、あんまり明い月の顏に氣まぐれな覆ひでもかけてくれると、何だか安心した氣持になる樣でしたけれど、此の橋へ來てかうしてぢいつと聞いてゐる内に、露の冷たさが睫毛の先にも慄へて、段々あの聲が戰場から歸つて來るかちどきだと分る樣になつて來ました。――

グラジーラ　もう街の人達は知つてゐるのでせうか。

アリアドネ　私の來る時分はまだ何處の家も固く締まつてゐましたけれど、もうあんなに方々の窓が驚いた樣に眼をあけ始めたのですから、やがてみんなの耳にも勇ましい聲のしらせが渦を卷いて聞えるのでせう。私は又あの聲をきいてゐれば、いつもの樣に白いばらの花へ自分の血をふりかけて、グラウロの花環でも編むでゐなければならないのに、なぜだか丁度深い深い水の底へ沈んで行くと思ふ樣な、不思議に靜なよろこびの音ばかり、耳の中で銀色の鱗が囁く樣にきこえますの。

グラジーラ　(獨白のやうに)　朝の風が月や星の光りを吹き消して、まだ初々しい金色の日が方々の壁を華かに照らして來る時分には、もうロマの街は血腥ひいきれに蒸れ立つて、穴に棲む蜘蛛の樣に骨ばかりの老人や薄赤い蝦蟇の樣な孕み女まで、踏みにじられた人達の血や腸に

辷り乍ら、かちいくさの歡喜を踊りまはるのでせう。そんな騷々しい血潮の洪水が渦卷く中で私は一人、……

アリアドネ　（語を遮ぎり）グラジーラ、段々近くなつてくるあのかちどきの中に、朝の光がくらやみの中から赤い花をよび醒ます樣に、あなたの兄樣の名がはつきり聞えて來ました。きつとグラウロが王樣の前に馬を進ませる樣な勇ましい手柄を立てゝ、幾千の人達に名を呼ばれていらつしやるのよ。

グラジーラ　（依然として獨白の調をつゞけ次第に聲亂れつゝ）私は何かしなければならない。神々がアルバンの國を呪つたしかへしには、驕りの汗で油ぎつた兄樣の胸を占ひの血鍋がゆだつ樣に赤く爛らして、チエツォーの耻ぢが蛇の皮の樣にはがれるまでロマのよろこびは私の舌に呪はれるのだ。私の生れる時は母樣に血みどろの苦み死にをさして、自分のからだも眞赤になつたまゝ出て來たといふけれど、なぜだか今夜はそんなおそろしい母樣のまぼろしが、眼の前に泳いで來るやうな氣がする……

アリアドネ　（あわたゞしく再び語を遮りて）あ、もう街の人達があんなに集まつて、みんな此の橋の方へ歩いて來ました。楯も劍も持て無くなつた老人などに、私達の衣が見られてしまはない内早く野の方へ逃げて行きませう。騷々しい叓れ聲に露の降る音が消されない樣な所へ重い金の幕を垂れて、こんな大事の晩に私達の考へねばならぬことを考へて居ませう。グラジーラ――。

（グラジーラは唇を緘み空しき方をみまもりてアリアドネの導くまゝに橋を渡る。）

第二段

（舞臺しばらく無人。叫喚と火光といよいよ近づく也。下手より老人の一團。若き少女に從ひて橋畔に出づ。老婆等の相連れたるもの、兒女等の伴へるもの伍々之に續き、中には若き女等の步みを緩むることなくして急ぎ行くもあれど、多くは其のほとりに駐まる。）

老人一　たしかに勝ちいくさの鬨の聲だ。追はれ乍ら逃げて來る時は多勢の聲が合はさつても、もつと途切れ途切れにきこえるわ。その上、敗けいくさには火の色を立てぬものぢや。

老人二　そんなことを物識りらしく言はう時かい。あの勇ましいかちどきを聞いてゐると、お互の乾からびた身軀にも冬最中發かれた蛇の巢のやうに、昔の血が驚き乍らかけ廻つて來るぢや無いか。孫の奴血のかたまりのついた槍をふり立て乍ら、足も浮かせて飛んでくるのが見えるやうぢや。

老婆一　わしは又最前から何處ぞに作奴のくるし相な呻きが聞える樣で、ゆうべの夢見やら何やら不吉な胸騷ぎがしてならぬわ。

老人三　何を言ふのぢや。和主のバートランドーにそこのグラウロ殿、それからわし等とこのオスタシオとかう並べて、ホラティイの三人兄弟ともいはれたロマの剛者ぢや。その親がとかげの子でも生みはすまいに、怯れたことはいはぬものだ。

老人四　わしにはやつぱり人の名を繰り返して呼ぶ樣に聞えるが、誰ぞ一人えらい手柄でもしたと見えるわ。それにしても一體何と思うて逃げ軍の叫び聲だなんぞと、わけも無いことをあの樣にわめき合つたのだ。

老婆二　昨日の夕方マツチニの占ひ婆さんが方々の家々を覗きまはつて、今夜中にロマの街は、皮を剝がれた犧牛でも見るやうに眞赤になつて亡びる相なと、おそろしいことを告げて步いたんぢや。

老婆三　わしのとこの窓の下にも立つて、丁度なき出したみゝづをぐと蹈んづけ乍ら、その樣に言うてぢやつた。

老人二　婆の奴、きつと占ひの鍋の中へ、蝮蛇の腸と蝙蝠の翼とを、寢惚けまなこに取違へて煮たもんぢや。あの勇ましい鬨の聲が枕にした死人の腹へ響くので、今ごろ鍋の底なと舐り乍ら、呆れた面でもして居るだらうわ。

老人五　だがまあ首尾のよい勝ちいくさで、どんなにか芽出度いことぢや。隣り合せの國同志三月も勝負が定まらず、年よりや女子供の外は誰一人街に殘つた者も無いんぢやからの。

老婆四　あの子が生きて歸らぬものなら、こんな戰なぞして貰ひ度うも無い。人の云ふには一番がけに敵の中へ切り込んで、何十人の栫に圍まれ乍らやつぱり槍を振りかざして居たとのことぢや。月の國から銀の杯を取つて來たというて、どんな勇ましい手柄話は聞かうとも、もうあの子が生きた聲で、わしを呼ぶのは聞かれもせぬ……

老人四　やつぱり人の名ぢや。bravo, bravissimo といふ嵐の中に、グラウロの名が鷹の樣に飛び馳けるわ。戰があつたら目覺ましい手柄を立てずに歸らぬグラウロ殿ぢや、きつと今夜も王樣の前に馬を進ませて御座らうに、

老人六　バンニノ殿もグラジーラ殿も、さつきからまだ姿は見えぬ樣ぢや。

老婆五　グラジーラ殿といへば、アルバン方のチエツォーといふ剛者に契りを交して見えたのだが、今度の戰から敵と味方に分れて、どんなにつらい思ひをなされたかのう。

老婆六　丁度ゆうべも寒い夜風に紅い花片の散る樣な姿し

て、物思はし相にこの橋を行き戻りなされてゐたが、何にしてもおいとしいことぢや。

老人七　その樣なことは今は言ひ出さぬものだ。それよか俄に軍勢の蹄が近くなつて來たわ。かういふ時に若い者の足並は早瀨にのつた小魚の勢で年よりなぞの考へにも及ばぬものだ。見い、丁度一と晩うなされてゐた暗い海が、朝の魔法ですき通つた濃緑色に變へて行かれるのを、金や銀の泡を散らして高らかに唱ひ合し乍ら、勇ましい歡喜の魚達を虹の粉と一所にお日樣の中へ投げ上げたり、吝嗇な磯の岩が大切にかくした眞珠を攫つて來たり、ひよつとすると底に沈んでゐた名高いお妃のされかふべまで、貝の玉座と一所に運び乍ら、勇ましいかちどきをあげて來るやうぢや無いか。

若き女　（橋の彼方を望みつゝ）　あ、誰かゞ馬に乘つてかけて來る。銀色の鎧が月にきらきら輝いて……

老人六　戰場の知らせを持つて急いでくるのだ。誰とも知らぬがあの勇ましい姿を見い。水煙の散る樣に白い馬の鬣が風に亂れて、また銀の鳥でも飛ぶ樣に蹄は土に着かぬばかりぢや。お互に若い時分の覺えもあるが、かち戰を一人で知らせに歸る時は、人も馬も狂氣したやうな氣持になるものだ。

（群衆は共に橋の彼方に眺め入りしが、しばらくあり殆ど口を齊しくして高く叫ぶ。間。）

老人八　あの小河を飛び損ねたんぢや。前へのめつたので人に怪我は無いやうだが、可愛相に馬の奴膝骨を碎いた相な。

老人九　馬をのりすてゝ今度は自分がかけて來ようといふのぢや。だがあの足元の具合では若い者とも見えぬがのう。

老人四　うむあれはヂアンチヨツトー殿ぢやよ。グラウロ殿の叔父御ぢや。甥の勇ましい手柄話を、わが口より先へ傳へられるがおそろしさに、陣から拔けがけて見えたんぢや。

（この時グラウロが家の門より、父バンニノいたく年老いて腰ゆがみ杖つきたるが二人の從者を從へ、階段の上に出でゝ止まる。）

バンニノ　皆も此處に出て見えたのか。倅の名を呼び乍ら軍勢が歸つて來るやうに思うたが、老いぼれた耳で聞きたがへましたかの。

老人十　お聞きたがへては御座りませぬ。私共もその樣に聞き乍らかうして最前から、甲斐の無い血を湧き立たせてゐるので御座います。又しても目覺ましいグラロウ殿がお手柄と見えまする。それに今あすこへヂアンチヨツトー殿が何か知らせを持つてお出でになりました。

バンニノ　ほうあれは弟か。馬にも乘らず覺束ない足元でどうしたといふことぢや。

老人八　馬はいまあの川をとび損ねて膝を折つた樣で御座いましたが、お年寄りのからだに重い鎧を召したまゝ、羅(うすもの)を着た若い女でも走る樣に、たうとう驅けつけて見えました。

第三段

（しばらくは期待の沈默。やがて橋上にヂアンチョットー戰場の鎧を着たるまゝにして走り出でたるが、階段の上に進みバンニノの双手を取りつゝ。）

ヂアンチョットー　（狂喜に迫れる語調にて）兄御。お互ひによう生きてゐたことぢや。グラウロの名がロマの空から海を越えて、遠くの島まで鳴りどよむ時が來たのぢや。（俄に不安の情に目覺めたるが如く）誰も先に來たものはないかの。

バンニノ　（激しき感動に打ち慄へつゝ）誰も來やせぬわ。それよりもグラウロがどうしたんぢや。

ヂアンチョットー　あの子の腕があつたばかりに、長い戰が勝ちになつたんぢや。丁度今何千人の楯にうつゝた月の影と、手ん手に持つた炬火が血の蒸氣(ゆげ)の樣にもえる中を、王樣の眞前(まんまへ)に馬を立てゝ來る姿は日の神の申し子というても足らぬ。軍兵どもはみんな狂氣して、焰の色に赤く染められた槍や楯をふりかざし乍ら、グラウロの名をわめいて來るわ。わしは又誰ぞ先に知らせはすまいかといふのが恐しさに、つなみのやうに陣の中からぬけ驅けて飛ばしては來たが、氣のあせつた上に馬は疲れる、ついそこの小川まで來かゝつて、可愛相に兩膝ともへし折つてしまうた。だがもう街へ這入つて來るのも程ないことぢや。待つ間には丁度皆も一所にグラウロの手柄をきいてくれぬか。

（と下方の階段に腰をおろせば、群衆も物言はずして集り圍み、バンニノは落ちゐぬ姿にて上方の階段に腰をおろす。）

ヂアンチョットー　何しろ今度は誰も知つての大戰で、アルバン方も王樣のクルイリュウスが死んで國境まで退(ひ)いてからは、もう一と足もたじろぐ樣子は無し、味方とて其處まで寄せた勢ぢや。何度手合せしても夥しい死骸こそ落ちるが陣は落ちぬので、しまひには兩軍とも楯の面や劍の双を鏡の樣に磨く外には、仕やうことも無うなつた。そんな有樣で二た月もつゞく內とうとう王樣同志使者が立つて、いつ果てるとも見えぬ勝負を、かうして限なくまつてゐるよりも、各(めいめい)の軍中から三人の勇者を選り出して、六つの腕に國の命を任せようといふにきまつ

たのぢや。誰しも血の色に飢ゑてゐた時のことで、丁度小魚の群が網にでもかゝつた樣に我も我もとひしめき立つたが、其の中から王樣のお鑒定で、グラウロを隨一にホラティイの三人がすぐり出されたのよ。

老人三　（激しく語を遮りて）　わしがオスタシオも外れはしますまいの。

ヂアンチヨツトー　さうぢや、和主のオスタシオにバートランドーを合せて三人ぢや。いよ〳〵兩軍の對ひ合つた眞中の廣場へ、拜領の鎧を着て勇ましく出て行く時には、わしはもう嬉しさとも恐ろしさとも知れぬ心持で、たゞ慄へ乍ら眼をつぶつてゐるより外も無かつたわ。その內兩軍の凄まじいときの聲が、ばつたり川面の樣に靜かになつて、又俄に脈すぢの切り口から血潮の迸り出る勢で、前よりもはげしくわめき出した。試合の合圖がおりたと知つたので、わしはやつぱり眼をつぶつたまゝ神々の名を唱へてゐたが、もう誰といふことはなく槍にでも突かれた人達の樣に、胸も張りさけるばかりをらび乍ら狂ひまはつて、陣の中にも無益な血が流れるほどの有樣ぢや。すると不意に、黃色い煙のはふ樣な怪しい呻きが口々に傳はつて、敵の陣からは七つの空も落ちるかと思ふ恐ろしい聲が、鎧の胸をへし折るやうにひゞいて來るぢや無いか。俺ははつと思うて眼をあけた。見るとバートランドーが肩先から切りこまれて血煙りを上げ乍ら倒れるのだ。

老婆一　（亂れたる語調にて）　やつぱり伜はやられましたかいの。忌はしい夢見が外れなんだかいの。やつぱりのう……。

ヂアンチヨツトー　（老婆のものいふを殆ど顧みずして）　屈強な若者だつたが氣の毒に時の運ぢや。さあかうなるとたとへ鐵の目隱しをされようとも、眼はしつかりあいて居ねばならなかつたが、一體どの樣にして見てゐたのか、人のことも自分のこともそれから後は皆目覺えも無いわ。何しろグラウロはまだ薄手も負はぬに又しても今度はオスタシオが……。

老人三　（再度激しく語を遮りて）　何、オスタシオと言はれますかい。あれがどうしたと言ひますんぢや。

ヂアンチヨツトー　劍をたゝき落されて、見る內に腦天へ切りつけられた……。

老人三　嘘ぢや嘘ぢや。わしがとこのオスタシオに限つて其の樣な、……土に棲むけら蟲のたましひに魅入られたというても其の樣な鈍い事をさせはせぬ。嘘ぢや……。

ヂアンチヨツトー　和主がさういふのも尤だがかういふ時には、自分の伜に怪我があつても國の手柄を第一に祝ふものだ。まあ落ちついてくれぬかい。いよ〳〵三人の敵

にグラウロは一人で向ふんぢや。もう敵味方の陣から立つときの聲も耳には入らいで、一心に見入る内グラウロの奴、たじたじとなるわ、やと思ふ暇もなく踵を返して、追ひまくられた鹿のやうに逃げ出して來るぢや無いか。敵味方の騷ぎを思うても見い。其の時は此のわしまで楯を地面にたゝきつけてグラウロの名を呪うたものぢや。だが勿體ない、今になつて考へれば神々の智慧があの子に降つたのだ、それを知らずに親身の叔父であり乍ら、呪などを吐いたこの舌が、今日まで蛇の舌の樣にさかれずにゐるのが不思議ぢや。後から三人で追ひかけるのだが、手負の違ひで一人一人に離れて行く。——これも不意ぢや。グラウロはつと立ち止つたが、直ぐ後に追つて來た奴が、勢あまつてのめり乍らふみ止まるのを、苦もなく横面から切りつけた、つゞいて來たのも脇腹をつきさゝれて仰け樣ぢや。ところへ血の滴つた劍がまだ拔けもせぬに、海の中から湧き出た樣な勇ましい姿をしてこの國へも名のひゞいたチエツォーが馳けつけて來た。もう左の股に傷を負うてはゐたが何を云うても恐ろしい剛者ぢや。味方も敵も誰からとはなく、魚の群が潮にでも乘つたやうにずんずんとにじり出乍ら、息の音も止めるやうに靜にしたので、ぶつかり合ふ楯の音が、各の胸にこたへて高く聞えるばかりぢや。誰も夢中になつたので劍がどこを突いたのやら分らぬが、見る内にさつと目の眩む金の樣な血煙りが立つた。——のう兄御、グラウロはもう仆れた奴の胸にふんまたがつて、咽喉を突き徹してゐるぢや無いか。

パンニノ　（立ち上り聲慄へつゝ）　グラウロ……

（よろぼひて叫喚の近づく方に眼を放ちつゝ階段を下り來れば、群衆の中にも之に附して勇者の名を呼ぶもあり、殺氣を含める興奮の迫れるが如し。）

チアンチヨツトー　（立ち上り）　さあ兄御、わしが腕につかまつて來るのぢや。もう行列もそこまで見えて來た、和主達もこんなところに待ちうけて居ようより、みんなグラウロの名を呼ばはつて廣い野の方へ迎ひに行かうものぢや。

（群衆は口々にグラウロの名を叫びつゝ悉く去る。最前より次第にその聲を大にしたる叫喚はこの時、やうやく明に bravo, bravissimo. グラウロときこゆるに至り、空いよいよ赤し。）

第四段

（白髮なるマッチニの占ひ婆、下手より汚れたる頭巾を載きふしくれの杖をもちて出づ。體軀の倭小なるに比べては顏貌大きくして醜く、齡は辨じ難き程也。）

占ひ婆　(叫喚の來り迫るを眺めつゝ)　狂犬共が泥田の中でわめく樣ぢや。あすはお日樣が一日かゝつても、衢に流れた膿血は乾せまい。土の底で眠りかけた蛇や蛙やみゝず達も、生腥い臭ひが泌みて來るので、又のろのろと這ひ出して來ようも知れぬ。わしが妖術の鍋で蝙蝠の羽根さへ殘らなんだら、ロマはめでたい勝利の都ぢやが、何處ぞに恐ろしい女の念力があつたと見えるは。

(この時グラジーラは橋上を赤き閃きの如く走せ來りしが占ひ婆の前に跪き——)

グラジーラ　お婆樣。どうぞ魔法のお祈りで助けて下さいまし。私は忌はしい兄妹の呪に身をまかれるやうで御座います。遠くに居る戀人の小さな息の出し入れでさへ女の胸にはひゞくと云ひますのに、チエツォーの胸にたまつた命の血が呻き乍ら迸つて出たのを、夕靄の粉の中で自分の脈をきくほどにも氣が付かないで居りました。王樣の前に馬を立てゝくる兄が誇らし相に鞍へしいた下着を見るまで、私はやつぱり兄を勇ましいものゝ樣に呼ばはつて居たので御座います。一すぢ一すぢの赤い絲も血のすぢを縫ひ込む樣に織り上げた下着が慘しく破りさかれて、焰のまじなひを稱へ乍ら髮の毛で二人の名を縫ひつけた胸の合せ目も、黑血と馬の汗とにまみれて居りました。遠くの方からその血が毒針のやうに私の眼へさゝつた時、はじめて自分の姿を朝日に向いて鏡へ映したやうに、はつきり命のことが分つたので、思はずチエツォーの名を呼び乍ら行列の前へ躍り出ようとしますと、馬の上から睨むだ兄の眼付きで、もう先へは一と足も身動きが出來なくなつてしまひました。きつと忌はしい兄妹の血の網が私の心もからだも包んでしまつたので御座います。それでも丁度暗やみの中を人殺しの匕首が閃く樣に、私も鏡の前へしまつた自分の匕首が、眞赤な炬火の潮の中を泳ぐのが見えるので、其の影を追ひ乍ら人波の間を小魚の樣にぬけ潜りして參りました。お婆樣、どうぞ力を助けて下さいまし、いつでも蛇の鱗に持たしていらつしやる力を、私の乳にも持たして下さいまし、どんなに澤山な呪の蛇達に身をくゝられても、汚された二人のたましひを洗ふには、兄の胸からしかへしの血を絞り取つて、骨の間にからみついた薄い皮まで、私の爪が掻き取つて來ねばなりません。

占ひ婆　おそろしい念力を持つた女といふのは和主のことぢやつたな。其の心配はおくがよいわ。今夜の中にロマの街は血にひたつて亡びるといふお告げぢや。わしが妖術の鍋に蝙蝠の羽根がへばりついて、壇の上へのせた牛の兒が、血のよだれを流し乍らくたばつた、女の念力が殘るしるしばかりぢやて。和主の匕首は餌を食ふ獸の舌の

樣に傑へて、嬉しさに呻き乍らグラウロの胸につきささらうぞ。勝ち軍のよろこびだけで、もうあの樣に狂氣した人達は、和主の執念に燃やされて恐ろしい斬り合ひを始めるのぢや。七つの空もやき落すほど燃え立つた歡喜のかちどきが、黒い煙のやうな呻き聲に代へられて、街中を這ひなめづる頃には、道の角で生れ落ちた犬の仔子も血の波に溺れ乍ら鳴きわめかうわ。

グラジーラ　（躍り立ち心こゝにあらざるものゝ如く獨白しつゝ門に入る）重い重い金の海が私の肩から乳までかぶさつて來た。兄と妹につながつた血の呪を、きたならしい胞衣の樣に斷ち切つて、匕首がグラウロの胸へつきさゝる時には、千も萬もの人の首から瀧の樣に償ひの血が注がれるのだ。——

占ひ婆　さあ俺もこの間に洞穴へ戻りましよ。一番細い血で編むだ蜘蛛の網を入口に張つて、舌の白い妖魔どもに番をさせたら、それでもうゆつくりと、死人の腹を枕に寢られるといふものぢや。お月樣の眼にも眠さうに薄やにがたまつて來たの。やれやれ、急ぐことぢや。（グラウロが家の石墻に沿うて左折し消ゆ。）

（門内よりグラジーラは匕首を右手に持ちて走り出でたるが、突如アリアドネの白影橋を渡り來て之に縋る。）

アリアドネ　グラジーラ、もう一と足も動かせはしません。多勢の人波に長い髪が渦をまかれるので、あなたの舌がグラウロの金の命へ、火のやうな呪を吐いてゐるのきゝ乍ら、思ふ樣に追つついて來られなかつたのだけれど、もうかうして血吸ひ女の樣に兩方の膝をだきしめてしまへば、あなたの眼から血の色が消えて、小魚の樣な綠色になるまで、一と足だつて動かせはしますまい。

グラジーラ　（全くたましひうつけたる怪しき獨白の調子にて）重い重い金の海が私の肩から乳へかぶさつて來た。匕首の泳いで行く血潮の流れへ、二人のたましひものがれて行く——。

（眼を定むることなくして匕首をアリアドネの胸に刺す。白衣に血の華さき最後の聲と共に仆るゝや、殆ど俄に群衆の叫喚その勢を大にし、bravo, bravissimo. グラウロの聲明かに、既に先頭の炬火橋上にあらはれんとす。）

グラジーラ　眞赤な夜潮へ、匕首の泳いで行く金色の血の海へ。——

（よろぼひつゝ橋を走り行く。幕——。）

（白樺　明治四十五年二月）

父と母（一幕喜劇）

人物

青山俊一　官吏（五十歳）
青山よし子　その妻（四十三歳）
青山くに子　彼等の娘（二十歳）
大村久雄　新に青山家に雇はれし書生（二十二歳）
老婢さよ　くに子の乳母として二十年前より青山家に奉公せる寡婦（五十一歳）
下女一人

現代

第一段

青山俊一の書齋。床には黒褐色の絨氈をしき中央縦に長き大なるテエブルあり、書類其の上に堆積し各側に二脚づゝ白き布をかけたる椅子あり。正面の奥には窓二つ、各濃緑色のカアテンをかゝげて庭の木立を窺はしむ。中央にカミン爐を仕切り、上に鏡を置きまた鑄像、花瓶、陶器、寫眞などを並ぶ。向つて右手には庭に通ずべき兩開きの扉あり、皮張りの寢椅子前方に横はりて豹の皮をかけたり。其の傍に書類をのせたる小さき圓卓あり、二脚の椅子之れを圍む。向つて左手中央に扉ありて家居に通じ、奥手の隅には大なる書棚あり、丈高き卓子之れに接し、上に蘭種の植木鉢を置く。風景畫の扁額正面の壁に二個、右手の壁には人物畫一個をかけ、壁紙は樺色を帶びたる模樣を用ゐ、凡て簡素なる政治家のやゝ整ひたる趣味を示す。

雨降れる初夏の午後。

左手の扉を排してよし子、さよ入り來る。

よし子　（明かに永き憂鬱病の徴候を示せる容貌語調にて）誰も來やしないだらうね。あとをしめておくれ。（小さき圓卓を圍める椅子の一つを取り、さよが扉を閉づるをまちて）乳母（ばあや）、私はもうどうしていゝか分らなくなつてしまつた。まあお前かけておいでよ。（同じ椅子の一つを取らしめつゝ）此の年になつてまだこんな苦しい目を見て居るより、死んだ方がいくらいゝか知れやしない。（間）もうつくづく生きて居るのがいやだ。

さよ　又それをお考へ遊ばす。しばらく何もさつぱり遊ばした樣で、よい鹽梅だと存じて居りましたのに、又お考

へ始めになりましたのね。いくらそればかり苦になさいましてもすんだことはすんだことで御座います。それが又格別大變なことにでもなつたと申すならで御座いますけれど、ともかくあゝして皆樣は何も御存知なく、御家も平に治まつて參るので御座いますから、何も今になつてそんなにお考へになることも無いぢや御座いませんか。

よし子　それだから猶のこと苦しい目を見なければならない。みんながすつかり知つてくれて、それでかうして行けるのなら何も苦にすることは無いだらうが、みんなは何も知らず、私はいはゞ家中を欺しにかけて居るんだもの、旦那樣があの娘をお可愛がりになればなる程、いよいよ恐しい羂目に身を喰ひ込まれる樣で、もうどうしていゝのだか考へることも出來やしない。

さよ　さうお思ひになるのも御尤な事で御座いますけれど、もう二十年も昔のことを、今更どうお考へ遊ばしても無駄といふもので御座います。それは遊ばし事がよいこととは申されませんけれど、もともとあゝいふ場合のことでずし、何もあなたばかりがそんなにお苦しみになる譯は無いぢや御座いませんか。

よし子　お前はいつでもさうお言ひだが、旦那のなすつたことは世間にいくらもあることだけれど、私のしたやうなことは恐しい『はなし』にでも聞かなければないことなんだもの。あの娘までがほんとの自分といふものを知らずに、あゝしてお慕ひして居るのを見ると、もう一日も猶豫しては居られない樣な氣になつて、何もかも奇麗に打ち明けてしまはうと思ふんだけれど…

さよ　それは奧樣、致し方が御座いません。御打ち明け遊ばした方が、お宜しい事は申すまでも御座いませんが、折角あゝしていらつしやるところを、そんなことを仰り出してどれ程恐しいことになるかお考へ遊ばさないではいけません。それこそもう日々の御日樣はおてらしになつても、御宅からはお笑ひ聲一つ聞えない樣な有樣になつてしまふので御座いませう。

よし子　だけど今の樣にみんなを欺してゐる方が、まだまだどんなに恐しいことになるのよりも、尙すまないわけぢやないか。

さよ　それはさうで御座いますけれど、何しろもう一と昔も二た昔も前にすぎてしまつたことで御座いますもの、それにそんな屈托ばかりしていらしつては、おからだだつて續きは致しません。此頃はお顏の色も大層お惡い樣で御座います。

よし子　夜だつてろくにねやしないんだもの。こんな苦しい目をして、さいなまれ乍ら生きて行くより、一層病氣

にでもなつて死んでしまつた方がいくらいゝか知れやしない。

さよ　まあ緣起でも無いことを仰います。そんなお考へをお持ちになるのが、尙お二人へすまないことになるのぢや御座いませんか。ですけれど一體どうなすつたので御座います。此間內まるで忘れた樣にさつぱりしていらつしやいましたのに。

よし子　そのことでけふお前に話がし度いと思つたのだけれど……（と湧き出づるが如き痛苦の情を表はしつゝ、懷より紙に包みたる寫眞を取り出してさよの前に置く）その寫眞が誰のだかお前は知つてるかい。

さよ　（寫眞とよし子とを交る交る凝視しつゝ淚を含みて）まだこんなものを持つていらしつたので御座いますか。私だつて忘れは致しません。この女があつたばかりに奧樣のお心が亂れたので御座います。何一つ御不足のないお家を恐しいかくしごとで、刺し縫つて行かなければならない樣にしたのも此の女があつたからばかりぢや御座いませんか。

よし子　そんなにその女ばかり責めるものぢやない。かうなつたのはみんなが惡かつたのだ。だけどその女のせゐで、此の家が又お前の知らない一層縺れたものになつてゐるのかも知れないよ。

さよ　私の知らないと申しますと何で御座います。

よし子　お前はあの大村といふ書生を何とも思はないかい。

さよ　（甚だ驚きて）ぢや奧樣は……

よし子　（語を遮りて）其の寫眞と似て居るとは思はないかい。

さよ　（自ら言ひ出でんとしたるとは、あまりに唐突なる違反に遭ひ痛く驚きて、再び寫眞を熟視しつゝ、やゝある內忽ち恐ろべき事實に思ひ當れるが如く）では奧樣、ちつとも存じないで居りましたけれど　（間）　大村といふ人は旦那樣のお子なので御座いませうか。

よし子　先月の末に旦那樣が、今度鶴田さんに書生を一人賴まれたので置かうと思ふつて仰つた時から、私は何だか氣が進まずに居たのだが、いよいよあの人が來て見ると、無理にかくさうかくさうとなさる御樣子なり、第一其の寫眞にそつくりなあの顏なりで樣子はすつかり分つてしまつた。それが一つとして身に思ひ當らないことはないのだから、かくしていらつしやるお怨みでも、その女の憎らしさでも、一々通り矢の樣に私の胸にさゝつて、自分の咎を又新しく責めて來るのが、もう私には迚も堪へて居られない。

さよ　御尤もで御座います、かうなりましてはもう何と申

上げてよろしいのやら分りませんが、それを承はりますと、ともかく何より先に申上げなければならないことが御座います。

よし子　邦子とのことなのだらう。

さよ　もうそれもお氣が付いていらつしやいましたのですか。

よし子　お前に話をきいて貰はうと思つたのも、其のことからの心配なんだよ。お前はいつ頃から氣が付いて居たのだい。

さよ　今更申上げることでも御座いませんけれど、あの人がはじめて參られました時から、書生さんにしては顔立が奇麗すぎると思つて居りましたのですが、誠に何とも御申譯の致し樣が御座いません。充分氣を付けましたつもりで御座いますが、いつのまにかこんなことになつて居るので御座います。けれども外のことゝは違つてすぐにお話も致しかねますので、出來るだけお氣を付け申す樣に致し乍ら、申上げる時をまつて居りましたので御座います。ほんとに永年お付き致して居り乍らこんなことになりまして、旦那樣にも奥樣にも何と申して御詫び致せばよろしいやら、恐れ入りまして御座います。

よし子　何もお前の咎といふ譯はないけれど、旦那樣はあゝいふ方だから、このことをお知りになつたら二人をほんとの兄弟だとお思ひになつて、どんなにおくるしみになるか知れはしない。だから一應お前の考へもきいて見てからだが、私はいつそいますつかりお打ち明けしてどうにでもなる樣にして頂かうと決心したのだが。……

さよ　もう私は何とも申し上げられません。それはこんなにまでことが縺れて參りましたのですから、お打ち明け遊ばした方がおよろしいかも知れませんけれど、……

よし子　あら。（立ち上り窓の外を眺めつゝ）お歸りだ。どうなすつたんだらう。こんなに早く。

さよ　ほんとにまあ大變お早く。（手早く寫眞を包みてよし子に渡し、相伴ひてあわたゞしく退場す）

第二段

（舞臺暫く無人。やゝあつて左手の扉を排し青山俊一、よし子入り來る。俊一は身に恰ひたるフロックコートに、金縁の眼鏡をかけ風采優れて見ゆ。常に葉卷を燻らす。）

よし子　大層お早う御座いましたのね。

俊一　うん、用事が思ひの外すくなかつたものだから。（白き布をかけたる椅子を取る。よし子は之れに對座す）どうした、大變顏色が惡いぢやないか。具合でもどこか惡いのかい。

よし子　いゝえ別に。
俊一　氣候が悪いから用心しなくちやいけない。近頃ずつと顔色が優れないい樣だが、醫者は何とも云はないのかい。
よし子　先程も佐山さんがお見えになつて、別に變つた所もないい樣だが多分時候のせゐだらうつて仰いました。
俊一　何にしても用心しなくつちやいけない。（間）誰も留守には來なかつたかい。
よし子　はあ谷田とかいふ方がいらつしやいました。（と机の上を探して名刺を取り出す。）
俊一　谷田？（名刺を讀みて）あゝさうか、別に何ともいつては居なかつたかい。
よし子　一寸御話申し度いことが御座いますから、又明日の午後に伺ひますとか申されました。
俊一　ふん。（机上の官文書類に一と通り目を通しつゝ）電話は？
よし子　あゝさうでした。大野さんから後程伺ひますとかつて。
俊一　なに大野から。（間。よし子の方を直視す）くにはまだ歸つて來ないか。
よし子（明に苦痛を持ちて）もう歸つて來る時分なので御座いますが。

俊一　實は此間谷本から又くにの緣談で話があつたのだが、いづれ其の内大野の夫婦が來ることになつて居たのだ。何でも向うは實業家の息子とかで、去年大學を卒業した中々頭のしつかりした人ださうだ。くはしいことは私も知らないが、ぢやどうせあとで分るであらう。もうあれも二十だし、いつまで家に置いとくといふ譯にも行かないのだから、まあそれも模樣によつてだが、よければ本人の考へ次第でやつて見ようぢやないか。
よし子　はい。
俊一　それはお前が何となく氣が進まないといふのも尤もだが、さういつまでも、のばして置いちや却つてあとであれのためにも可愛相なことにでもなるといけないからね。
よし子　はあそれは……（扉をたゝく音す。）
俊一　お這入り。
（くに子入り來る。鋭くして輪廓の明なる美貌。）
くに子　只今。
よし子　お歸り。
くに子　お父樣、大變お早う御座いましたのね。
俊一　あゝ今日は早く用がすんだものだから、（間）丁度いま……

（よし子あわたゞしき眼くばせて之れを制しつゝ。）

よし子　お前あのね、さつき木村さんとこから電話がかゝつた樣だつたよ。

くに子　あらさう、何でせう。一寸かけて來ませう。（退場す）

よし子　まあもう少しおまち下さいまし。何もいますぐあれに仰ることもないぢやありませんか。あとで大野さん達がいらしつた話の模樣になすつたつて、遲か御座いますまいのに。

俊一　それはさうだが。……（よし子を直視する）

よし子　（逡巡しつゝ）くにのことではまだいろいろおはなし申されなければならないことも御座いますし。

俊一　お前はいつもそんなことを云つてるが、あれだつていつまで子供で居るわけでもないのだから、考へて見なければいけない。

よし子　それはもう分つて居りますけれど。（凡て是等の發語は恐ろしき秘密に入らんとする導火線の如く、危險と期待と憂慮とに慄へつゝ）あなたはまだあれのことをお氣づき下さいませんのね。

俊一　（不安の調）何だあれのことゝは。

（長き焦立たしき間。）

よし子　大村とのことで御座います。

俊一　（甚だしき恐愕の表情）何だ大村とのことだ。（大なる黑影の落ち來らんとするが如き間。）ぢやお前は大村とくにとが、何か親しい話でもしたつていふのか。

よし子　（甚だ弱く）はい。

俊一　かういふことは外のことゝ違つて、年を取つた人達はよく思ひ違ひをする者だが、お前はたしかにかうと言ひ切ることが出來るのだね。

よし子　（やゝ語調を捉へ得て）女親が娘の胸の中を察するのはそんなにむづかしいことでは御座いません。

俊一　いつ頃から氣がついて居たのだ。

よし子　十日程前からで御座います。

俊一　ぢやなぜもつと早く言はなかつたのだ。

よし子　外のことでは御座いませんから、いよいよたしかめてからと思つて、何も申し上げずに居りました。

（やゝ長き間。）

俊一　こんなまちがひを起した責任として、私はお前にも子供達にも言ふべきことでないことを言はなければならない。いよいよさうとたしかなことなら二人を此處へ呼んで貰はう。

よし子　どうなさるので御座います。

俊一　お前は驚くかも知れないが二人は兄妹なのだ。このことを知らせる外に道はない。

よし子　（弱く）それは此間から存じて居りました。

俊一　（再び驚きて）何知つて居る？　どうして知つて居るのだ。

よし子　どんなにおかくしにならうとなすつても、御無理なお仕打はすぐ分りますし、それに私はまだあの女の寫眞を持つて居りましたから：：：

俊一　もういゝ、みんな私が惡かつたのだ。あの女のことでは散々お前を苦しめて來たのだから、もう何も思ひ出させまいと思つて、わざとかくして置いたのだ。あの男もこれまで養ひ親になつてゐた者が急に九州の方へ行くことになつて、勉強の都合もあり、まあ私も：：：こんなことをいふのは心苦しいが：：：正しい間の子ではないけれど、子となれば矢つ張り傍へも置き度い樣な氣になつたのだ。（間）だが二人が兄妹といふことを知つてゐたのなら、たとへたしかでないにしてもなぜもつと早く言はなかつたのだ。（間）まあ併し、今更そんなことを言ひ出したつて仕方がない。みんな私が淺はかな祕密といふことで、自分の責任を逃げようとしたのが惡かつたのだ。ともかく二人を此處へ呼んで貰はう。

よし子　二人にそのことを仰るので御座いますか。

俊一　外に道は無いぢやないか。

よし子　それはさうですけど。

俊一　それとも何か考へでもあるのかい。

よし子　別に考へとても：：：。

俊一　ぢやなんだつてそんなに躊躇するのだ。肉身の兄妹を少しでもさういふ風に思ひ合せて置くのはどれ程悲慘なことだか分つて居るぢやないか。それにかういふことは少しの誤解もない樣に、みんなが一所にきかなければならないのだ。（間）何をぐづぐづして居る。（遂に耐へ切れざる樣にて立ち上り激しく鈴を押す）お前はくにを連れておいで。

（よし子は流れ行く弱き女性の眩暈を感じつゝ、自らの刹那を知らざるものゝ如く立ち出づ。すれ違ひに下女入り來る。）

俊一　一寸大村を呼んで來い。

下女　はい。（退場）

第三段

（俊一の瞑想を沈めて、舞臺には息づまるが如き沈默よどむ。扉をたゝく音す。）

俊一　お這入り。

（大村久雄入り來る。扉をとぢんとして又後より來る人あるを見、其のまゝに入る。つゞきて、よし子くにに子相伴ひて入る。若き二人はかくの如き機會に遭へる若

き男女等の如く、甚だしき恐怖と不安とを相通ず。）

俊一　みんな腰をかけるがいゝ。（一同席を取る。間）私はけふお前達にあやまらなければならない。自分の行爲についての責任をまちがへて考へたゝめに、私はお前達を恐しい不幸に陥れてしまつたのだ。かう云つたばかりでは何のことだか分るまいが、お前達は實は兄妹なのだ。（二人は甚だ驚けるも未だ信じ難き姿をあらはし、よし子の面には明らかなる苦悶の情を見る）ほんととはどうしたつて思へないだらうが、大村の實の阿母さんといふのは、十年程前に死んだ藝妓なのだ。それだけの事實をきけば様子は分つたらう。

私は昔の浮いた心が今になつて自分の子供達を、こんな目にあはせようとは思はなかつた。誰にも云はずに置けば、餘計な苦勞をする人もあるまいと思つて淺はかな祕密といふことを考へたのが、お前達を殘酷な不幸に陥れてしまつたのだ。（間）それから先はもう何にも言はないから、お前達も心得て居ておくれ。

（扉をたゝく音す。）

俊一　誰だ。

下女　（戸口に立ちたるまゝ）大野さんがお見えになりました。

俊一　奥へお通し申せ。一人かい。

下女　いゝえ御夫婦で御座います。

俊一　ぢやともかくさういふことを心得て居ておくれ、又あとで話もしようが。（よし子を直視しつゝ立ち上り）さあ立たないか。

（よし子うなだれたるまゝ俊一の後より退場す。）

（退場）

第四段

（若き男女を殘せる舞臺は、しんしんとして果實の熟し行くが如き沈默を保つ。間。）

くに子　あなたはほんとゝ思へて？

久雄　もうかうなつてしまつては、ほんとゝ思ふも思はないもないぢやありませんか。

くに子　いゝえこれはほんとぢやなくつてよ。たとへまたほんとの兄妹にしたところで、そんなことは私達の知つたことでないぢやありませんか。始めつからかうと知らされてゐたのなら、まだしもそれが自分の境遇だと思ふことも出來るけれど、――それだつて自分の手でこしらへた境遇にくらべれば何でもないのに――もう私達の方で何よりも強い境遇を作つて居るあとから、私達には責任のない境遇を知らされたつてそんなことが何になつて？　親子だつて兄妹だつてみんな私達には責任のない境遇なんですもの。だけどそれはまあそれとして私達は

ほんとに兄妹ぢやないことよ。

久雄　そんなことをいま云つたつて……

くに子　いゝえたしかなの、ふだんから何かつき物の樣に私の心にこびりついて居た疑ひが、今阿父樣のおはなしや阿母樣の樣子ですつかり分つたの。

久雄　何のことだか私に落ち付いて信じさせる樣にくはしく話して下さい。

くに子　くはしくつてほど私だつてよく知つてるわけぢやないけれど、小さい時分から何だか私には二人阿父樣があるやうな氣がしてならなかつたの。うろ覺えに阿父樣だと覺えて居た顏と、今の阿父樣とはどうしても容子が違ふ樣だし、よく私の頭をさすり乍ら『くにや』つて呼んで下すつた聲が、今の阿父樣の聲とはまるで變つて居る樣な氣がして仕方がないんですもの。それからずつと物覺えのついた後にも、雨でも降る日に阿父樣がお留守で、阿母樣と二人つきりの時なんか、急に飛び立つ樣にして私を抱きしめながら、永い永い間お泣きになる妙な樣子などで私は小さいながらに何か悲しいことがあるのだらうと思つて居たの、阿父樣が何處かへ泊つてお歸りにならない樣な晩になると、よく私の顏をぢいつと見つめ乍ら、お前のお父樣はどうなすつたんだらうねえつて仰るから、明日になつたら歸つていらつしやるでせうつていふと、いゝえ明日になつても明後日になつても、歸つていらつしやることはないんだよつて泣き乍ら、私の顏を淚で濡らしておしまひになることもあつたし、一々數へ上げたつて仕方がないけれど、私はこれにはきつと恐しい祕密があつて、それでふだんから阿母樣がくるしんでいらつしやるのだらうと思つて居たの。今の阿父樣のおはなしで阿母樣一人家にいらしつたその時分のことなどを考へて見れば、丁度今もあんな苦しさうな樣子をしていらしつたのも、みんな私の身の上のことに違ひないのよ。私のほんとの阿父樣はきつと外にあるの、小さい時分から胸の中に網の樣にかぶさつてゐた疑が、すつかりはつきりしたので何だか私晴々する樣な氣がしてよ。ね、あなたも安心して頂だい。（間）何だつてそんな臆病者の樣な顏をするの？

久雄　私には何だかよく分らないけれど……

くに子　あれだけいつてもまだ信じないの（間）あなたは意氣地の無い意氣地の無い人なのね、いつもあんな心丈夫なことをいつてたのもみんな口先ばかりの嘘だつたのね。私をこんなものにしちまつといて、今更一寸した知らせをきいたばかりに逃げて行かうとなさるの。

久雄　もういゝ、安心していらつしやい。どういふことになるのだか分らないけれど、私はあなたと離れては何す

ることも出來ない。どんな恐しいものゝ中へでも二人して一所に這入つて行きませう。

くに子　大村さん！（男の膝に身を投ぐ。間。忽ち何物かに驚きたるが如く身を離し立ちて扉を凝視す）

第　五　段

（間。扉あく。俊一、よし子入り來る。）

俊一　まだお前達はそこに居たのか。

よし子　早速だが大村、一寸內密の急ぐ用があるのだから遠慮して貰ひませうか。

俊一　いゝぢやないか、もう二人の身の上が分つてしまへば、妹の大事だからどうせ相談はしなくちやならない。其處に居て貰はうよ。まあかけといで。（一同席を取る。）くにも今日はいろいろなことをきいて貰はなければならないが、實はまた緣談なのだ。お前ももう學校は一と通りすんで、いつまでも子供で居るといふわけには行かないし、年も若すぎるといふ方ではないのだから、まあ今の內に良い所でもあればきめとく方があとになつて心配でないといふものだがね。これまでもあゝして幾度もあるにはあつたが、私達の方でも何しろお前の一生涯のことだから、充分しつかりした所をと思つて躊躇してゐたのだ。今そのことで大野さんも來たのだが、何だか急ぎの用があるとかでくはしい話はきけなかつたけれど、先づ普通には願つても無いところの樣なのだ。お前が、ともかく平山といへば今の實業家でも指折りの仲間だし、其の總領で大學も成績よく卒業したといふのだから、決して不足な人物ではあるまい。それに風采もすぐれた方の人ださうだ。いろいろの事を一時だが何も事のついでだから、これは一つ決心した方がいゝだらうと思ふがね。まあお前にもきいてからだが、大概はお受けし度いといふ風に返事をしといたけれどどうだい。それとも何か考へでもあるのなら遠慮なくいふがいゝ。尤も外のことゝは違つて早速に返事が出來かねるかも知れないが、まあよく考へて一つ阿母樣にでも返事をしといて貰はうぢやないか。

よし子　全く緣などゝいふものはむづかしい者だから、こんな結構な時をはづして、あとで餘計な苦勞をする樣だといけないからね。

くに子　阿母樣、いま阿父樣の仰る通り、何も事のついでですから。一つ大切なことをおきかせ下さいまし。

よし子　（怪しき顫へを帶びたる聲にて）大切なことつて：：：

くに子　こんなことをお尋ねするのは大變失禮ですけれ

ど、阿母様どうぞほんとのことを仰つて下さい。私達は全く兄妹なのでせうか。

よし子　（意味を知らずしてもの いふが如く） まあお前は……

くに子　いゝえおかくしになつても分つて居ります。私の小さい時分よく抱いて下すつた阿父様は今の阿父様とは違ふんでせう。ねえ阿母様。お前の阿父様はあしたになつてもあさつてになつても歸つていらつしやらないつて仰つたことを忘れは致しませんでした。ほんとのことを仰つて下さいまし。阿母様。

よし子　（叫ぶが如く） もうよしとくれ、くに。

（長き間。測り難き洞穴の如き沈默。）

俊一　お前もやつぱり恐しい祕密を持つて居たのだな。……くには私の娘ぢやないのか。

くに子　違ふんで御座いませう、阿母様。

よし子　全くあなたの娘では御座いません、もうどうぞ……（顏を埋む）

俊一　それだけきけば澤山だ、何もかもみんなもとは私から出たことなのだ。

くに子　阿母様、おや私のほんとの阿父様といふのは、今でも生きていらつしやるのですか。

よし子　お前はほんとに恐しい女だねえ。お前のお父様といふ方はもう生きてはいらつしやらない。

俊一　誰のことだ、安田ぢやあるまいな。

よし子　安田さんで御座います。

俊一　何、安田……（よし子の手を取り）皆な私が惡かつた、あらためて許してくれ。

よし子　（身を悶きつゝ） まああなた。どうぞ……。

くに子　阿父様、先程の緣談はおことわり致します。

俊一　何、ことわるつて?

くに子　はい、その方はどんな立派な方か存じませんけれど、私にはこゝに居る大村さんほど貴い人は世界にないので御座います。私はこの方より外へ妻に行くことの出來ないからだなので御座います。家中の祕密が殘らずはつきりしましたついでに、私達の祕密も申し上げてあらためて御願致します。どうぞ二人をあなた方のお手で正式に結婚さして下さいまし。

俊一　二た親の罪の結果が結びあつたら、却つて又堅い實がみのるかも知れない。其の結婚は許してやらう。

久雄　阿父様!

くに子　お許し下さいますか阿父様!

（若き人々の歡喜と、老いたる人々の嗟嘆とを喚びつつおもむろに幕。）

（三田文學　明治四十四年八月）

清　姫（一　幕）

若くは道成寺

此の演劇は今を距る數百年、紀ノ國日高郡道成寺に於て、道成寺和尙妙念、道成寺僧徒四人、女鑄鐘師久子及び清姫等の間に起りたるものとして演ぜらるべきものなり。

第一段

（唐突なる而して甚だ重き鐘の音の一杵と共に、幕は驚き逃ぐるものの如く、するすると捲き上げらるれば、舞臺上手三分の一を占めて石段により登りぬべき鐘樓あり、いささか大に過ぎたる怖なる鐘の片はしあらはる。下手奥一面、谷の底より這ひ上りし甚だ老いたる森林也。有明の月の故に、空はかく薄ら明りの漲れりと知るべし。六十才なる蓬髮の和尙妙念は、鐘樓の欄に手をつき犬の如き姿して、今しも鐘の餘韻が弛みたる鼓動の如く山に谷に漂ひ下るを捉へんとするものの如く、驕慢と狂喜との怪體なる微笑を浮めつつ獨白す。）

妙念　無量百千の梵音が聞えるかい。有難い鐘の音の山にも川にも降つて行くのが、執念深い霧でも這ふ樣に、谷底の小蛇の巢や、くもの網などといふものにまでまつはつて露の樣に震へてゐるのだ。ねぼけものの蝦蟇も、天竺の上人樣達と一所に目でも醒まして佛願に喰ひ入つたことであらう。三十年が間、外道の執念を退け散らして、この鐘をひびかせようと云ふ祈誓ばかりに、己のからだは乾した屍骸の樣にやせこけて、靑すぢばかりみみずの樣にもれ上つてしまつたわ。だが今度こそは何の清姫が執念でも、まじなひ程のひびも得う入れずに、川底の小石でもなめづつて、慄へ乍ら聞いて居るのであらう。この鐘にはな、女鐘造り久子の一念で女人のたましひを千といふ數鑄込んであるのだ。久遠といふ呪も僅か三十年で譯なくほどけてしまふのかい。二つや三つの鐘を陶器の樣にこはされたつて、そんなことで己の法力がゆるみはしないのだ。この三十年が間、呪の執念のと小うるさく耳元にささやく聲が、小蟲の樣に頭の中へ嚙み入つて、何を見るにもこまかい血色の網目からのぞく樣であつたのが、見ろ、大空の壁からひびき返つて來るこの梵音で、蛇の皮でも剝ぐ樣にするするはがれて行つたわ。はゝゝ、はゝ、惡蛇の鱗にも皺がよつて來たのかな。（この時忽ち

何者かを見出して、おそろしき驚愕に打たれたるが如く。）や！（間）あの月に輝いた日高川の川面が、はれものの様にむくんで來たが……またのろのろ上つて來やうと云ふのだな。このおほどかな鐘の音が、川の底まで揺さぶつて居るのに、まだ執念深く呪ひに來やうといふのかい。今夜こそ長い戰の結着だ。小蛇の様にたたきひしいで呉れやうわ。

第二段

（かく言ひもて倚川の方を睨みつつ、石段を下りて下手より退場せんとする時、恰も下手より僧徒四人、影の如くふらふらと出で來れるに行き遇ふ。物凄き佇立。）

妙念　何にも登つては來なかつたか。

僧徒甲　（最も老いて白髯を蓄へたる僧徒）月の光りで見えるほどの者は何にも登つては參りませんでした。

妙念　お前達はしばらく此處に居て鐘を見張つて居てくれ。おれは山門の傍にまちうけて、愈今夜を最後に惡靈を取り伏せてやるのだ。

僧徒乙　（中年の平凡なる容貌）惡蛇はやつぱり登つて來るので御座いませうか。

妙念　今鐘樓から見て居る内、月に輝いた日高川の川面から、いつもの蛇體がのさばり出てやつて來たわ。よく氣を付けて見張をして貰はう。白拍子か鬼女か兎も角女體になつて登つて來るのかも知れぬ。（と其のまま下手に入る）

第三段

（四人は恰も一つ腹より出でたる猫の子等の如く、甚だ臆病なる姿にてたたずめり。ややありて僧徒甲、つれに年長の一人がかくの如き場合に處する調子にて。）

僧徒甲　さあ、この様な恐しい晩には默つて居るのは禁物だ。かすかな出し入れの息の音さへ、じいつときいてる内には恐しく思へて來る者だ。みんな此處へ腰をおろして話でも始めたがいいぢや無いか。

（と他の僧徒等をも石段に腰をおろさしむ。然るに僧徒等の内、最も若年にして甚だ鋭感なるべきをあらはせる蒼白き顏の僧徒丙、何者かをきき出でたるが如く座を立ちて佇立す。）

僧徒甲　何しにさう立つのだ。ぢつと座つて居ないかといふに。

僧徒丙。變な音がきこえるぞ。なめらかな鱗が笹の葉をこする様な――

他の三人　（聊か高低を違へて殆ど同時に）え！

（立ち上りつつ四人は恰もくらげの浮動するが如き怪

しき姿して物の音たづれてあり。やや長き間。中年なれど逞しき容姿を具へたる僧徒丁、腹立たしき調子にて先づ言ふ。）

僧徒丁　何にも聞えはしないぢやないか。恐ろしさに耳の中まで慄へるので、自分の血のめぐる音がそんな風に聞えるのだらう。

僧徒甲　ええ恐しいことを言はぬものだ。（他の僧徒等をもうづくまらしめつつ）みんなもつと寄り合つて居た方がいい、少しでも離れて居るとつい寒氣などがして來るのだ。

僧徒乙　ほんとに氣味の悪いことをいふ奴だな。小蛇に背すぢを這はれたやうな氣がするわ。それにしても此の鐘が鳴つて居るのでもなく、かうして默つて吊り下つて居るのを見て居ると、何だか恐しい形に見えて來るぢや無いか。

僧徒丁　おれなぞは鳴らずに居た方がいい。まるで外道の呻く様ないやな音がするぢやないか。何にしても狂氣と邪婬とで鑄上げたものにいい響きのしやう筈が無いのだ。

僧徒甲　だが兎や角はいふものの、これで久し振りにおほどかな音の出る鐘が出來たのだから、あんまり不祥なことは言はぬものだ。三十年も前のことでお前達は誰も知るまいが、丁度やつぱりこんな恐ろしい夏の晩だつた。思ひを遂げ度い一心に、まだほんの小娘が生き乍ら魔性の大蛇になつて追つて來たのだが、和尚のはからひから男の逃げて這入つた鐘を卷くかと思ふ内、鐘も男も鉛の様にどろどろとけてしまつたわ。其の時分はまだ和尚も年若な堅固な道人で、見事に魔性を追ひ拂つてしまつたのだが、そのはからひに怨みを殘して、執念といふものが和尚の胸の中に喰ひ入つて來たのよ。それにしても戀を欺された女の心といふものは恐しいものだ。あれほど天晴な善智識だつたのが、一日一日とたましひの奥を喰み破られて、此頃では爪の先まで狂氣の色に變つた上、あんな怪しい女かねつくりに不浄な胎子を孕まして、邪婬の煩惱で猶のことたましひは蝕ばまれてしまふし、鐘と云へば作るのも作るのも、供養に一とうちすると陶器か何ぞの様にめげてしまふのだ。

第四段

（この時又下手より妙念登場す。甚しく落ち付かぬ様にて。）

妙念　まだ何にも登つて來ないのか。

僧徒甲　先程と變りは御座いません。

妙念　さういふ筈はないのだが、お前はこの様な晩にもま

だ居眠りをしたがるのだらう。己があの山門の傍で犬の樣に這ひつくばつて、地をなめづるみづの動くのにさへ、飛び立つ樣にしてゐるのに、お前達はいぎたなく屛を弛まして眠つてゐたに違ひないのだ。

僧徒甲　眠るどころでは御座いません。自分の耳の中を廻る血の音にさへ、とかげの樣に怯えて心を付けて居りました。

妙念　何にしても先刻川を出てからもう登つて來る時分なのだ。お前達の運命ももう此の山に來たからは、己の運命と一所にくくられてしまつたのだから、あの執念の綱から逃げることは出來ないのだ。お前達のたましひにも執念の爪はささつてゐるのだぞ。立つて居て地を這ふうろこの音がきこえると思ふのかい、みんな地べたへ手をついて這つて居るがいい。（と凡て擧措甚落ち付ずして、焦立たしき恐怖にからるるが如く、去るともなしに下手より去る。）

第五段

（甚不安なる間。）

僧徒乙　和尚は何處へ行つたのだらう。

僧徒丁　己はもうあのぼうふらの樣に血の走つた眼がぎよろぎよろするのを見て居ると、怪しいより憎たらしくなつてくるわ。

僧徒甲　よさぬかといふのに。狂氣した人の顏をとやかく言ふものではない。それに其の樣なことを言うたのが、若しあの耳にでも這入つて、又この間の妙信の樣な目を見たらどうするのだ。

僧徒丁　ほんとにあの時は恐ろしかつたな。つい和尚の來かかつたのを知らずに、久子の腹のことを口走つたと思ふと、鷲が小魚でも攫ふ樣に首筋を引つつかまへて、見て居る內に鋸のぎりぎり引きよ。

僧徒乙　其の話はもうやめにしやう。妙信の奴一分一分首根つこを刻み込まれて、腸でも手繰り出される樣な悲鳴をあげたのが今だに耳の中で渦を卷いて、思つてもぞつとするわ。

僧徒丁　それからあの血でひたひたになつた本堂の隅へ、惡魚の泳ぐ樣に這ひつくばつて、眞赤な口をしながら「執念が何だ、邪婬の外道が何の法力にかなふかい」とわめいた眼付は――

僧徒乙　ええやめにしろつたらよ。さもないでさへ恐ろしい此の夜中に、そんな話は無用のことだ。

僧徒甲　ほんとによしたがいい。狂人の噂をするのはいいことぢやない。お互に因緣事で一度この山に來たからは、もうどんなにあがいたところで、狂氣と執念との綱から

逃れることは出來ないのだから、無用の恐しいことを考へるのはよした方がいい。

僧徒丁　逃れることが出來ないといふのかい。己達は三善の智識が得たさにこの山へ登つて來たのだ。こんな邪婬の蜘蛛の網にかかつて、外道の宿業を自分の運命だなぞと考へるうつけがあるものか。山を降りればいつでも自由のからだになるのぢや無いか。

僧徒甲　降りる降りるとは言ひ乍ら、つひぞ降りたことも無いくせに、そんなことを言ふものぢや無い。それにお前だつて鐘を造る千の鏡を奪ひに行つた一人ぢや無いか。どうせ運命などといふものは、俺等には分らぬものだ、がもうこの網から逃れられないといふことだけは、知つて居なければならないのだ。

（然るに此の時僧徒丙、又唐突に立ち上る。其の眼は甚だ深くしてさながら髑髏の眼の如く也。他の僧徒等も亦自ら知らずして立つ。）

僧徒丙　又何か聞えるぞ。忍んで來る女の衣づれの樣な音だ。

（長き間。僧徒等の慄へつつ相寄れるは水に沈み行く稀有なる群像の如くなりしが、遂に何等をも聞くを得ざりし也。）

僧徒丁　（又腹たたしげに）何も聞えやしないぢや無いか。いつまで實の無いことを言つて人を驚かすのだ。臆病な恐れなどといふものは、自分で胸のくらやみにかくして置いて人になど見せるものでは無いのだ。

僧徒甲　若い者のことだ。さう怒つたものでも無い。可哀相にまだ二十二だと云ふぢや無いか。何にも知らず人に連れられてこんな山へ來たばつかりに、人の世の光りといふことを知らず、目なし魚の樣に世を終るのだ。物に怯えるのは無理はない。だがそれにしてもあんまり恐しいことは口走らぬものだ。

第六段

（此の時又妙念あわただしく下手より登場す。きよろきよろと四邊を見まはしつつ。）

妙念　まだお前達はそんなねぼけた樣な恰好をして突つ立つてゐるのか。お前達の樣な奴の眼の前へ形が見える先に、忍んで來る物の音といふものをきくことが出來ないのだな。

僧徒丙　（極めて神經質的に首を絶えず微動せしめつつ）さういふ忍びの音は聞えました。さつきから二度も聞えました。

（妙念愕然たる表情。）

僧徒丁　嘘で御座います。此奴は先刻からびくびくと物に

怯えては人を驚かして居るのです。
僧徒丙　あ、又、女の衣ずれとせき切つた息の音が聞える。
（池底の如き沈默。）
妙念　うん聞える。たしかに聞える。
僧徒丁　今度は己にもきこえる樣だ。
僧徒甲　たしかに女のきぬずれだ。
（僧徒等は期せずして相摑むが如く寄り集ふ。惡寒を導くが如き間。忽ち僧徒丙一人群を離れ、上手の下奥を伺ひつゝ。）
僧徒丙　あ、若い女が、一人かけ上つて參ります。眞蒼な顏が木の間から洩れ落ちる月の光りで、ちらちらと散斑にてらされるのが、變つて行く痣の樣に見えます。孕み女の樣な苦しさうな息づかひで、あ、仆れた——重さうに身を起す恰好は、どうしても二人のからだを運んでゐる女の樣で御座います。
（忽ち妙念は何物かに引き拔かるゝが如きひよろけたる發作にて、僧徒丙の傍に居より上手の下奥を伺ひ居たりしが、ややありて疑惧を明かにしたる表情にて。）
妙念　何だ久子ぢや無いか。今時分どうしたといふのだ。それに今夜は女人の禁制といふことを知らないのか。
（恰もこの時上手よりあわただしげに女鑄鐘師久子はせ來り妙念に縋り付く。甚だ蒼白なる美貌也。僧徒互ひに犬等の如く見合ふ。）
久子（息を切らしつゝ）どうしたと申すどころでは御座いませぬ。恐しくつて、恐しくつて。（と急に四邊の僧徒等に心付き妙念より身を離しつゝ）此の方達は——
妙念　お前達は山門の所で見張つて居て貰はう。又眠つてなぞ居ると、お前達の未來まで灰にされてしまふのだぞ。さ、早く行かないか。
（僧徒等再び互ひに犬等の如く見合ひて各首を俛れつつ一人一人に下手より退場す。久子又妙念に寄り縋る。）
妙念　何を其の樣に恐れるのだ。
久子　何をと申して和尚樣。鬼女を見たので御座います。もう此のあたりへ來て居るかも知れません。川の傍で、日高川の傍で見たので御座います。
妙念　いつ見た？　どうして又川の傍へなぞ行つたのだ。
久子　たつた今で御座います。丁度赤い月の出る時分お山からあの鐘が響き始めたのを聞いて居ります內、何だか胎の子でも動くのかと思ふ位、妙にじつとして居られない氣づかはしい樣な氣持になりまして、ふらふら家を出て參りましたが、一つ二つとひびく鐘の音に丁度海の潮が胸にでもぶつかる樣に、私のからだはあちこちへひよろひよろ振り動かされる樣で、狐につかれた人達の樣に

どこといふ宛もなく、夜の更けるのも知らずに村中をさまよひ歩いて居ります內、とうとういつのまにか川の所まで來てしまつたので御座います。

妙念　川の中から蛇體が上つて來たのか。

久子　いいえ川は少し薄らいだ月の光が靜にうつつて、丁度魚鱗の樣にキラキラ輝いて居りました、私はまだ茫然して橋から此方へ歩いて居りますと、不意にうしろから人の名を呼ぶ者が御座います。

妙念　(愈々焦立たしく)　ええどんな顏をして居た、お前はそれからどうしたのだ。それからどうしたのだ。

久子　振り向いてはつと思ふ內、魚が水にでも沈んど行く樣に何處かへ消えてしまひました。川底の魚の樣なつめた相な眞蒼な顏が月の中にふうはり浮んで、口だけがまだ濡れて居る血の樣に赤う御座いました。私はもう恐しくつて恐しくつて、胎の子のことも何も忘れてただわくわくとはせ上つて參りました。それに中途から鐘がなり止むだので、尙のこと恐しくなりました。あの音がなつて居る間はまだ何か賴りになる樣な心丈夫な氣がして居りましたのに。

妙念　つい今しがたまで一つ一つとついて居る間に、日高川の川面がはれものの樣にむくんで來て、蛇體らしいものが這ひ上る樣子だつたので、下まではせおりてまち受け樣と思つたのだ。それにしてももう此の邊に登つて來なければならない。

第七段

(すなはち此の時何處より登りしともなく、鐘樓に鬼女淸姫あらはる。久子の叙說に言へるが如き物凄き形相を具へ、さて左手をもて鐘の一端をつかみ右手は欄につかへ、のぞくが如くにして不淨なる僧と女とのものいふ樣を見下してあり。)

久子　ええもうどうしても上つて來て居る筈で御座います。和尙樣、今夜こそしつかりなすつて下さいまし。惡蛇の執念などといふものを和尙樣の法力で、粉の樣に撒き散らして下さいまし。

(かく言ひつゝふと鐘樓を仰ぎ見たるや忽ち恐ろしき鬼形を見出でたる也。甚だ怪しき絕叫を放ちて昏倒す。妙念はあらはれたる魔幻にたましひを奪はれたるが如く愕然として鐘樓の方を眺めてあり。皮膚に痛き程なる沈默は、恐怖と絕望と憤怒とを刻々に啄くが如く、老狂の意識を激興せしむるに似たり。)

清姫　(冷嘲の調子)　まだ心といふものを自分で持つて居ると思ふのかい。いよいよ最後の今夜だから敎へて上げるのだけれど、もう世界にお前といふものはなくなつ

たのだ。年取つた盲女の樣にうろたへた臆病な手付をして探しまはつても、命知らずの若者を眞似して向う見ずに走り廻つても、もうお前といふものは見付かりつこがないのだよ。たつた一と晩といふ女の願もにげて來た臆病男を、こんな鐘の中にかくまつたのは怨めしいお前のはからひだつたものぢや無いか。魔性といふのは怨みばかりを餌にして居るものなのだ。この三十年が間ちびちびお前のたましひに喰ひ付き乍ら、そんなゑらさうにいふ法力などといふものも殘らず吸ひ取つて、其の代り狂氣といふお前には他人だつた外道の息を吹き込んでやつたのだ。

妙念 (硬ばれる舌端を强ひて動かしむるが如く。) お前は己が狂人だといふのだな。己の法力が噓の法力ででもあるといふのだな。先刻から川底の小砂まで搖ぶる樣にひびいた此の鐘の梵音が、噓の法力で出來ると思ふのか。

淸姫 お前が自分で法力だの知識だのと思つて、たましひの奥どころに生み立てて大切にして居たのは、そこに仆れてゐる女の醜い腹の中で、きちがひ痣の臭い胎子が育つて行くことだつたのだ。そんな邪婬の外道であり乍ら、えらさうに法力などと賴りにして居るのも、皆私がお前の心を喰ひ破つて、もう世の中にお前といふものがないからの道化なのだ。はゝゝゝ何が梵音だ。村の人達はみんなあの音をいやらしがつて、耳にふたをして居るわ。邪淫の響の外に梵音など聞える筈も無いこんな鐘は、今夜執念の炎で鉛の樣にとかして見せるからまつて居るがいい。

(かく言ひもて鐘の下に身を入るるや、怪しき響きして巨鐘は地に落ち魔性の姿を蔽ひぬ。妙念はもはや何等の興奮をもつくるに堪へざるが如く、凡て目前の異變を或は知らざる者の如く又は知れる者の如く、絲にて吊られたる人形の如き姿して怪し氣に自ら立てり。この時最前の僧徒四人、逃げまどへる哀れなる獸等の如く走せ上り、久子の仆れたるを見て更に驚ける樣なりしが、一同妙念の前に跪きつつ。)

僧徒甲 大變で御座います。怪しい火がお山を取り卷いて參ります。

僧徒丁 仰せの通り山門の處にをりますと、何處ともなく麓の方からめらめらと焰が一面にもえ上つて參りました。

僧徒甲 もう裏口の谷川へ傳つておりなければお寺と一所に灰になつてしまひます。和尙樣、さあ。何を其の樣におろかな風をして立つてお出でなのです。

僧徒乙 (立ち上り) や、あの音は中門の傍の大杉が燒き

佇れる音だ。こんな所にぐづぐづして居ては、みんな燒かれてしまふばかりぢや無いか。

（もとよりたましひ拔けたる妙念はこの恐ろべき知らせをも殆んど解せざるが如きさまにて、最前より漸次昏迷の狀態に至り、この時遂に枯れたる幹の如く女體の傍に佇ろ。丙の僧徒を除く三人は、互ひに驚愕の内にも一縷喜悅の漲れる殘忍なる表情をもて見合せつつ、上手に走りにぐ。僧徒一人殘れり。）

僧徒丙　（鐘樓を仰ぎ見つつ。）や、鐘が落ちて居る。（と石段を登り鐘に手を支へ、下手の空を眺め渡しつつ。）ああ丁度お日樣が上るのだな。今朝はお山の炎が映つてか血で塗つた珠の樣に眞赤だが、あ、見てゐる内に、ついつい擴がつて大きくなつて行くわ。

（舞臺は火焰と朝暾とが刻々と赤き色を流し來たらんとする內、さておもむろに幕。）

（スバル　大正二年三月）

腐敗すべからざる狂人（一幕）

人物

ロベスピーア
テオー
第一の山黨員
第二の山黨員
第三の山黨員
遁走者一人
ダントンの亡靈の聲
ギロチンに搬ばるゝ女人の悲鳴
ギロチンに搬ばるゝ男子の叫號

時代

佛蘭西恐怖時代

場所

巴里市外の森林

第一段

恐しき森林也。風やゝはげしきに、薄明の空に散らばへる星くずは、消えなんとする燭光の如く、暗黒と罪惡との夜を嚙み貪りつゝ晝は、——かくいふはいとも怪しきことながら——更に光明と罪惡とを世にもたらさんとする也。

今、赤き曙光の東天に漲れるは、洪水の如く巴里の街を涵したる血の波のてりかへり也。もしは、幾十のギロチンより立ちのぼりたる赤き蒸氣也。

立ち並びたる木々の姿も、思ひなしにはかの名高き詩人の想像を呼びて、異形なる妖怪の如くも見ゆ。

中央よりやゝ下手奥、平たき石のそばに、魔女テオー立つ。

石上には白きなめし皮しきてあり——恐るべきかなそは昨日屠られたるダントンのなめし皮也——その上に五つの蠟燭ありて、四つは悉く盡き、中央の一つのみ未だ消えがてにまたゝける也。

打ち殺さるゝ犬等の、長き長き血に染める蜘蛛の絲の如き悲鳴、卽ち幾十の束ねられたる女人の悲鳴、始めかすかなるより次第に近づき來り、更に憎むべき重き車輪の、れきろくとゞろくにまじりて、又遠ざかりゆく。

ロベスピーア上手より登場。

テオー　今日は遲う御座いましたのね、今あの女達のはじ

めの車が、通つて行くところでした。

ロベスピーア　妙な夢に苦しめられて、遅くなつてしまつた。だが今日のしるしはどうだ。

テオー　上々で御座います。御覧遊ばせ。（とかの怪しき燭を指さす）

ロベスピーア　神様御禮を申します。今朝の夢が妙だつたのに、あんまり急いだせゐか、路々三度も躓いて仆れたので、死人の首の様な重い心配が、胸にかゝつて息をするにも苦しかつた。でも悪いしるしで無くて何よりだ。（間。かの怪しき少さき光りを凝視しつゝ。）テオー、今朝の火の色は昨日のよりも赤い様ぢや無いか。

テオー　きのふとゆうべとの間に、四百人の血が流れたのですもの、何だつてちつとは赤くなるでせう。

ロベスピーア　（間。魔女の方に進み寄る。鋭くしてしかも注意の集まらざる眼光）お前は焔の色と血の色とどつちが綺麗だと思ふ。

テオー　ギロチンから逆つて出てくる時などは、血ほど綺麗な者は無いと思ひますけれど、すぐ泥の様にきたなく黒ずんでしまひますのね。焔でも燃えてゐる間はほんとに綺麗ですのに、ぢき眼にしみる様な煙になるんですもの。だけど私、焔も血も両方共大好きですの。こんな小さな、薄い薄いへらへらした焔などは、どんな花びらよりも可愛いとお思ひになりませんか。

ロベスピーア　（嬉しげに）お前も焔と血が好きなのかい。大好きなのかい。（急にひざまづき、テオーに寄り縋りつゝ）テオー、いつまでも己を捨てずに居てくれ、毎朝毎朝・其の綺麗な蠟燭の火で、己の吉兆を占つてくれ、己は其の小さな焔に敎へられて、フランスに道徳をしくことが出來るのだ、無神論者や不道徳な母等の、けがれた血を殘らず絞り出して、道徳の焔を天にまで上げるのだ、さうして己は豫言者になるのだ。（夢に驚きたるが如く立ち上る。あはれなる唐突なる發作は、この偉大なる革命家をして野獸の姿を帶びしめたり）己は豫言者になるのだ。マホメツドやクロムウエルの様な豫言者になつて、人類に道徳の火を放すのだ。（やゝ長き間。併し乍ら其の興奮は電流の如く忽ち通りすぎて、不安なる佇立の姿となり、蒼白なる顔面は、おびえたる理性がたじろぎつゝ歸り來るをあらはす。其の間魔女はなりゆく様を鋭く眺めてあり。さて冷かに）

テオー　大層お慄へになりますのね。どうかなさいましたか。

ロベテピーア　いや何でも無い。森の中があんまり寒すぎるのだ。（とかの石上のなめし皮に腰をおろす）之がダントンだな。大きな血迷つたことを言つても、犬の子

の様に譯もなく皮をはがれて、重い蠟の涙を吸ひながら、己の運命を判斷するのだ。だがあの男は綺麗な肌を持つて居たものだな、この手ざはりの滑かさは、丁度戀を知らぬ處女の乳の樣だ。

テオー　からだを廻る血の湧き立つて居る者は、いつでも綺麗な肌をして居ります。（この時怪しき燭の光消ゆ）あ、丁度蠟燭も消えて、燈火(あかり)がなくても人の首が見える時刻になりました。又明朝までおいとまを下さいまし。

（下手より退場）

（恐怖に狂へる男子の、呻吟、罵詈、叫號をのせて、又ギロチンに赴く第二の車、響き來り響き去る。）

第　二　段

ロベスピーア　（深き瞑想に沈み、魔女の去れるを知らず。）無神論などゝいふものは貴族的な者だ。なまけ者と金持とが、勝手に作り出した宗教だ。之に反して神を信ずることは、平民的な普遍的な、そして更に必要な信仰なのだ。もし神が存在して居なかつたのなら、我々は之を造り出さねばならない。イスラヱルの昔から神は血と焔とを愛して居たのだ。我々の造り出す神も血と焔とを愛する者でなければならない。

（怪しきかなやこの時、何處よりとも知らず、空洞にひゞく銅鑼の如きもの言ふ聲、この大なる森林をなりとゞろかしてきこえ始む。是れなむかのダントンの亡靈が、ギロチン上にさけびし、最後の絶叫を繰り返せる也。幾萬民衆の大氾濫をこえて、セイヌ對岸まで聞えたりと歷史に殘れる聲なれば、すなはち劇場の調子を破りぬべからん也。而して舞臺は次第に、かの焔に血潮がうつれる如き、怪しき赤色につゝまれ來る。）

（背景はそのまゝ也。）

ダントンの聲　己はロベスピーアを地獄に連れて行かずには置かないのだ。あの狼を連れて行くのだぞ。貴樣達がどんなに騷いだつて、己達の首は自分から先に、首かごを喰ひ付きに行くのだ。馬鹿々々しいこんな世の中に、一刻も生きて居たくは無い。己の始めた革命も、結句氣ちがひの空さわぎにされて、のんだくれや姦淫にけがされてしまふんぢや無いか。早く殺してくれ。己の名前はもう永遠に歷史のパンテオンに記されたのだ。誰が思ひ殘すことなんかあるものか。ロベスピーアの奴、あとからついて來るんだぞ。地獄の中へ引つ張り落してやるからまつて居ろ。今己の首が乘つかるギロチンに、すぐあの首がのつかるのだ。もう十日の內には、貴樣のこしらへた此の世の地獄より、もつと恐しい地獄の血沼で、たましひもからだもずたずたに、切り刻ざかれて煮られ

るのだ。支度をしてまつて居るがいゝ。
（舞臺は全くかの怪しき赤色につゝまる。あはれなる狂革命家は、猝にかゝれる野獸の如く、狼狽して自らをおかず、耳を掩ひつゝうづくまれり。しかれども、かの轟々たる呪詛はあらしの如く、あはれなるたましひはらみがらの如く、すなはちかり立てらるゝ也。絶望の叫號。）
ロベスピーア　血の粉を撒け。世界の表に血の粉を撒け。不道徳な亡靈の眼をつぶして、一寸先も見えない樣にするのだ。日の光りも月の光りも、さし通すことの出來ない血の霧がこの世を包んで、いつまでも道德の焰を守るのだ。そして女の腸で造つた網を、空にも地にも水にも投げかけて、不道德なダントンのたましひをつかまへて來て、永遠に血沼の底から浮ぶことも出來ない樣に、百ばかり鉛の彈丸が打ちこんで、金よりも重くなつた、刑人の首を縛へたまゝ、地獄の谷へ投げ込むでやるのだ。

第二段

（第一の山黨員下手より登場。）
（舞臺一時に常の色に復す。既に日は朝に入りて、赤き空もほがらかなる紺青と化せり。）
第一の山黨員　此處にお出でゝしたか、どちらかと思つてさつきから尋ねて居りました。
ロベスピーア　（何失神のすがたにて）　ダントンのたましひはつかまへたか。
第一の山黨員　（甚しき驚愕の色。やゝありて）　まだで御座います。何しろギロチンの廻りには、川床の小石の樣にころがつて居りますので、少し血に濡れまいと致しますと、百や二百の首をふみ碎かずには步けない有樣で御座いますから、どれをダントンの首とも見わけるわけには參りません。昨日までにギロチンにかけました首の數は三萬位だらうと思ひます。
（さわやかなる朝の光りは、次第に狂豫言者の血夢を明にするが如く、蹌踉として又かの石上に腰をおろす、疑惧の狀也。）
第一の山黨員　大層お顏色が惡いぢやありませんか。それにひどく慄へてお出での樣ですが。
ロベスピーア　別に何でもない。森の中があんまり寒過ぎるのだ。（間）　だがお前の來たのは何の用だ。
第一の山黨員　もう六時になりましたから、なめし皮をかけようと思ひまして。
ロベスピーア　うん、丁度こゝにある。小刀を出せ、今日はかう書いてやらう。（と白き紙片を黨員に渡す）
第一の山黨員　（聲低く讀む）

我に贊する者よ。我に敵する者よ。
記憶べし。
我等血によりて淨められたる、
恐怖と道徳とを以て、
今日の制をしかんとする也。
（間。ロベスピーアは刀を取りて、此の呪詛の如き法例を、なめし皮に切取る間、黨員が上より之をのぞき込めるに、兩者の頭顱殆ど接せんとする也。）

ロベスピーア　（理由無き小聲にて）男の皮はこんなによくかける。女のは薄い上皮が、一所によぢれて取れるので、きたなくなつて駄目だ。明日から制文を書くなめし皮には、男のばかり剝ぐやうにいひつけるがいゝ。さあ、これへずつと血を流し込んで、いつもの處へかけて來い。

第一の山黨員　（布の如く捲きたゝみ、脇にかゝへつゝ）では行つて參ります。（上手より退場す、この時第二の山黨員登場し、すれ違ひに鋭く睨み合ふ）

第二の山黨員　新しいギロチンを据ゑつけて參りました。始めからある內十ばかりは、臺に血がしみ込んで朽ちたやうになりましたから、それと取りかへることに致しました。今朝私がくる時、女を束にした一と車がつきましたので、丁度それをかけて參りましたが、したぎを引つ剝いで、素つ裸にされるのをいやがつた女共は、其の場で撃ち殺して來たと申して居りました。

ロベスピーア　うん、それでいゝ。一番野蠻なことは慈悲といふことなのだ。赤兒も育てばすぐ狼になるのだから、生れたばかりのでも何でも、血といふものさへ持つて居るのならみんなギロチンへ持つて行くがいゝ。巴里の街に空地がなくなるまで、首の霰をふらして、セイヌの川が溢れるまで、不道徳な奴等の血を流すのだ。
（續いて第三の山黨員登場。）

第三の山黨員　彫刻の方の支度が整ひました。『知識』の大理石像をこしらへて居りました彫刻家が、昨日ギロチンにかけられましたので、新らしい人が後を引き受けて、昨夜の內に仕上げをすましてしまひました。燒かれる方の木像達と一所に、式場の方へ据ゑつけて參りましたが、丁度仰いましたアルプスの雪の柱の樣に、見事な形に出來上りました。

第四段

（これより先、梢に荒ぶ嵐の如き、狂飈せらるゝ人々の泣號と、獵人の放てるが如き殺伐なる銃聲と、遠くよりきこえ來りしが、この頃に至り、その直ちに人々の胸を撞つが如き銃聲と、實感にしてしかも

甚だ人に迫り易からざる泣號と、場に滿つるに至る。）

第二の山黨員　又ギロチンの車に、投げ込まれるのをいやがるのだな、ともかく此處にお出でになつては若し危いことがあると惡う御座いますから、お館の方へ御歸りになつた方が、宜しい樣に存じます。

第三の山黨員　さうで御座います。かり立てられる奴等の中には、死に物狂ひになつて、刃物やピストルをふり立て乍ら、はむかつて來るものも御座います。中には恐しい獸の樣に、かみついて刑吏を殺した奴も御座います。それが口々に――

（第二の山黨員あわたゞしき目配せして之を制す。）

（舞臺にはやうやく、かの赤色にじみ來り、恐怖の色は狂へる虐君の面にも浮び始む。然るにこの時森の中より、突如として追ひ立てられたる民衆の一人、まろぶが如く躍り出でたるが、未だ三人のあるを知らず、右に左に狂奔して身を隱す蔭を求む。驚愕せる三人の就中ロベスピーアは、やせ犬の如くうづくまりて、舞臺は愈ゝ赤くなる。然れども遁走者は忽ちうづくまれる人の影をみとめたる也。しかも其の虐君の醜き容貌を知るや、忿怒の泡を吹きつゝ、之にとびかゝらんとせる時、二人の黨員が短銃より射れる射丸は、はげしく之を倒したるに、尙絕望的の跳躍をなしつゝ、最後の呪詛を、血と共に吐くが如くにして死す。）

遁走者　惡魔！　地獄に墮ちろ外道！

（舞臺は全く赤くなり、幕は甚だゆるくおり始む、而してこの時又かのダントンのおどろおどろしき聲聞えたる也。）

ダントンの聲　ロベスピーア奴、地獄に引つ張り墮してやるんだ、支度をしてまつて居るがいゝ。

（最後の聲と幕と同時に閉づ。――）

（白樺　明治四十四年五月）

解說

能島武文

時代の概觀

日本戲曲全集は、その現代戲曲篇の第十篇として、長田秀雄、木下杢太郎、吉井勇、並びに故郡虎彥の四氏を選び、その作品を輯錄してゐる。

この四氏を選んで一卷となしたことについては、編輯者は十分の意義を持つてゐることゝ信じる。私も亦この四氏の作品を以て一卷を編むことに不自然でない意義を感じる。卽ち作品の持つ色合、思想、傾向の類似の上からも、またその交友の上に於ても、更に何よりも四氏がその最初の作を以て、我が劇壇に擡頭した時代を殆んど同じうする點に於て、四氏を以て一卷を編むことは、文學史的に十分の意義を認めなければならない。

私が解說するのは、故郡虎彥氏を除いた三氏に就いてゞあるが、今各作家個人の解說に入るに先だつて、四氏を生むに至つた當時の我が劇界の趨勢について、その概觀を述べることは、四氏の理解に便するとに於て、決して不必要なことではないと信ずるので、一應四氏の處女作を生むに至つた當時の文學界並びに劇界の概觀を述べたい。

今私の手記に依つてその處女作を發表した年代を調査して見ると、長田秀雄氏が處女作「歡樂の鬼」を發表したのは明治四十三年、吉井勇氏の「午後三時」が四十二年、木下杢太郎氏の「南蠻寺門前」が四十二年、郡虎彥氏については私には確信を以て言ひ切れないが、四十四年の「鐵輪」が處女作ではないかと思はれる。いづれにしても四家ともその戲曲としての處女作は明治の末葉、四十二年から三四年にかけて發表せられた。

さうしてこの四家に加へて秋田雨雀氏、谷崎潤一郎氏、池田大伍氏、仲木貞一氏等、數氏がいづれも明治四十二三年（一九一〇頃）その處女作を發表した戲曲界の新人であり、また實に創作劇運動の先驅をなした作家であるといはなければならない。

一體日本の戲曲といふものについて考へて見るのに、それは常に劇場あつての、俳優あつての戲曲であつて、戲曲が戲曲として、文學的な作品として、印刷せられ觀賞せられるやうなことはなかつた。德川時代から何百年、劇作家は狂言作者の名の下に、劇場付の作家として、また劇場付で

ないまでも俳優の依賴、劇場側の依賴によつて、その作品は常に劇場の舞臺にのみ發表せられた。從つて常に幾分、俳優なり、または劇場の實際的な機構に制約せられねばならなかつた。

明治維新は社會のあらゆる制度を改新したとはいひながら、保守的な劇場は尙德川時代の制度をその儘に繼承した。更に河竹默阿彌といふ偉大なる劇場作家があつて、新時代の機運は、劇場に於て、戲曲界に於て、尙遲々としてその歩みをはこんでゐた。

演劇改良會、演劇矯風會等は早く、演劇の革新を叫んだとはいふものゝ、戲曲の精神にまでは入ることは出來なかつた。二十世紀の聲を聞くと共に、岡本綺堂、山崎紫紅、松居松翁、諸氏の名を、劇場內に見出すやうになつたとはいふものゝ、尙未だ新時代の黎明は來なかつた。

一方當時の歐洲文藝界を見るに、十九世紀中葉を風靡したロマンテイシズムは旣に亡びて、寫實的な自然主義の息吹は、あらゆる國のあらゆる文藝界の分野を吹いてゐた。さうしてそれは當然の勢を以て、戲曲界にまで侵入してゐた。

自然主義の母國ともいふべきフランスでは早く旣に、デユマ・フイス・オージエ・サルドウ等に依て、劇壇は寫實主義的な傾向に向ひつゝあつたばかりでなく、千八百八十七年(明治二十年)にはアンドレ・アントワヌに依て自由劇場の運動が始められ、近代的な寫實主義的な戲曲の先驅者といふべきアンリ・ベツクを生んでゐた。

それればかりではない。近代劇の始祖、寫實主義劇の生みの親、ヘンリツク・イプセンは千八百六十九年最初の社會劇「青年同盟」を書いて以來、千八百七十九年(明治十二年)には「人形の家」を書き、八十一年には「幽靈」、八十四年には「鴨」を書き、その他旣に知られてゐる通りの多くの作品を書き、多くの人々に良き刺戟を與へて、千九百六年(明治三十九年)その生を終つてゐる。

その他、イプセンを先達として、ストリンドベリイ、マアテルリンク、トルストイ、ハウプトマン等は相次いでその名作を書き近代劇の精華は一時に歐洲の天地を咲き埋めるの概があつた。

この機運が明治維新と共に鎖國の夢を踏み破り、久しきに亙る禁書から解放せられ、更に日淸戰爭に依て新興の機運をいやが上にもあふられた當時の青年を刺戟しない筈がなかつた。才能ある青年は、燃ゆるやうな熱情を以て、新しき歐洲の文明に灌漑せられた。

既に明治三十四年には高安月郊氏が「イプセン社會劇」の名の下に、「人形の家」と「社會の敵」の飜譯を發表した。坪內逍遙氏は早く既に「自由太刀餘波鋭鋒」といふ名の下に、シエイクスピアの「ジユリアス・シーザー」の飜譯を發表してゐたが、更にこの新機運に乘じて、「新史劇論」を發表して、これまで唱へられた演劇改良會あたりの皮相な演劇改良論を一蹴して、功利的な勸善懲惡主義以外に、眞の藝術的な史劇の必要を論じ、續いて二十七年には「桐一葉」「牧の方」を創作して、自ら範を示した。また森鷗外氏は「玉篋兩浦嶼」や「日蓮上人辻說法」を書いて、別途に新時代の要求に應ずべき戲曲を示した。鷗外氏はそればかりでなく、多くの近代劇――後に正、續、新、「一幕物」に收められた――を飜譯紹介して、新機運の釀成に資しようとした。

だからこの明治三十年から四十年にかけての十年間は、この短い文章では十分に盡すことは出來ないとはいふもののいろいろな意味で我が戲曲界にとつては重要な紀念すべき時代であるといはなければならない。

さうしてこれらの時代こそ、この十年こそ本輯輯錄の四氏を劇作家としての今日を成すべくはぐくんだ時代であつたのである。

やがてこの近代劇移植運動は、劇壇をも使すに至つて、遂に小山內薰、市川左團次兩氏による自由劇場の創立となり、明治四十二年十一月二十七、二十八の兩日、イプセンの「ジヨン・ガブリエル・ボルクマン」に依て、第一回試演の蓋は開けられた。實にこの日こそ、新時代がその第一聲を劇壇に放つた日であつた。

續いて翌四十三年五月、第二回試演としてウエデキントの「出發前半時間」、森鷗外氏の「生田川」、チエホフの「犬」の三作を上演し、同年十二月の第三回試演にはゴルキイの「夜の宿」と共に、吉井勇氏の「夢介と僧と」を上演した。

かくて翌四十四年六月には第四回試演として、長田秀雄氏作「歡樂の鬼」、吉井勇氏作「河內屋與兵衞」、秋田雨雀氏作「第一の曉」の三新人の作にマアテルリンクの「奇蹟」とを上演したが、當時島崎藤村氏もいはれたやうに、これこそ新劇運動、創作劇運動の「第一の曉」であつたといはなければならない。

引き續き第六回には當時萱野二十一といつた郡虎彥氏の「道成寺」を演じ、その他數回の近代劇上演を以てその使命を終つてゐる。

かうして四氏とも戯曲界と劇壇とを通じての近代劇移植運動の中に培はれた人であつた。たゞ當時の我が文學界、特に小説界が自然主義の強い色を以て彩られたやうに、イプセンの寫實的自然主義を初めとして、マアテルリンクの神祕主義、キーン派の新浪漫主義や、その他ロシヤのトルストイやチエホフや、北歐のストリンドベリイ、その他あらゆる傾向の一時に、百花の競ふ如くに紹介せられた我が戯曲界が、小説界の如くに一色に彩られなかつたのは、止むを得ないことであつたといはなければならないと共に、そこにあらゆる近代劇の色合に依つて彩られ染められた當時の戯曲家が、精神は近代的な思想傾向を攝取しつゝ、そこゝ多種多樣な新劇の華を咲かしたのは、むしろ時代的特長として祝福すべきであると、私は考へたい。

長田秀雄篇解説

長田秀雄氏は明治十八年五月十三日、東京市神田區神保町に生れた。父祖は代々熊本藩の醫家であつた。誕生の翌年、麹町九段中坂上へ一家は引つ越された。こゝで氏の少年時代青年時代は送られた。小學校を卒へると共に、醫家たらしむべく考へた父君は、氏を獨逸協會附屬中學へ入學せしめられた。

同級に後年の木下杢太郎事、太田正雄氏があつた。この後年の劇作家が相揃つて同時に獨逸協會中學に入學し、相共に劇作家として立つたことはまた不思議なる運命といはなければならない。兎に角この二人の劇作家は、實に十四歳の年少多感の時、既に深い深い友交の中にあつた。

天才的な情熱家木下杢太郎と不羈奔放自由の精神に富んだ長田秀雄氏と、そこに我々は當時の新機運に若く見覺めるべき萌芽を見出さないではゐられない。既に中學三年の時、氏と木下氏とはさゝやかなる回覽雜誌をこしらへてゐたほどであつたといふ話である。

中學を卒へると共に、父君の命に依つて氏は大阪醫科大學、當時の大阪醫學專門學校に入學すべく大阪に赴いた。さうして濱寺海岸に日を送ることゝなつた。が當時既に文學者をもつて終生の目的とした氏が、そのことに心を打ち込んで行ける筈がなかつた。

間もなく歸京すると共に明治大學に、また濱寺海岸に赴いて、關西大學に入學したりした。その間にも、文學に對

する熱情は益々強く高くなつて行つたが、尙父君からは文學に專心すべき許可は得られなかつた。弟君なる幹彥氏は次男たるの故を以て、文學者たることを許され、早稻田大學文科に籍をおくやうになつてゐる間にも、尙且氏は天涯放浪の日を過しつゝあつた。

が、この孤獨放浪の日々が、また却つて氏の文學に對する熱情を如何に昂揚せしめ、如何に文學の世界に沈潜せしめたか知れない。

勿論その間にも文學に對する熱情は空しく內にのみ止まつてはゐなかつた。當時雜誌「明星」に依て天下を風靡したかの槪のあつた與謝野寬氏の新詩社に於いて、氏の風貌は一段と秀れたものであつた。吉井勇氏もやがて來り加はつた。木下杢太郎氏もまた長田氏の紹介によつて加はつた。

その他新詩社の中には北原白秋、石川琢木、平野萬里等を初め、當時の新進靑年はすべてこゝに集まつたかの槪があつた。

「明星」廢刊の後、明治四十二年一月には同人達に依つて雜誌「スバル」は創刊せられた。さうしてその第二月號に木下杢太郎氏の「南蠻寺門前」、第三月號には吉井勇氏の「午後三時」が發表せられた。

さうしてまた同じ年の十一月には前述の通り自由劇場が第一回の試演に「ボルクマン」を上演した。この自由劇場はあらゆる文學者に非常な刺戟を與へた。當時尙年少の多感の長田氏がこれに強い興奮を受けたのはこゝにいふまでもない。

しかも氏は目前に木下氏等多くの友人が劇作に筆を染め、各々新領地を開拓しつゝある中に、默々としてイプセンを讀み、特にウエデキントを讀んでゐた。このウエデキントの影響は後々永く、今に至るまで氏の人生觀察の根本に多くのものを與へてゐる。

その中にも氏の才能は徐々に戲曲の世界に向つて進みつつあつた。さうして遂に四十三年十月、處女作「歡樂の鬼」は三田文學に發表せられた。この「歡樂の鬼」は一時に世の注目の的となつた。その手法は純然たる近代劇——特にイプセンを祖とする自然主義の正統を享けたものであつた。手法ばかりでなしに、その人生に對する觀察は、飽くまで自然主義的な科學的立脚地の上に立てられ、その思想道德感、いづれも近代的な色彩を以て強く裏付けられてゐた。

茲に至つて我が戯曲界は初めて自然主義的な近代劇の正統にある作品を生んだといふことが出來る。

引き續いて氏は同じ傾向の上にある「黄金截」「發兵院夜曲」「姙婦授産所」「死骸の哄笑」「磔死」等の、自然主義的な觀察の上に、更にウエデキント流の諷刺的な色を帶びた作品を發表し、最近に至つては「噓」「微笑」「惡鬼跳躍」等に及んでゐる。

一方、大正元年十一月には四幕よりなる「琴平丸」を「三田文學」に發表した。これは飽くまでも自然主義の寫實的傾向を强調したものであつて、氏の觀察の正しさを示すと共に、戯曲構成の才能の非凡さを示してゐる。

さうしてこの寫實的な傾向は更に進んで、大正四年四月には「飢餓」三幕を「早稻田文學」に發表して、氏の代表作であるばかりでなしに、新劇の生んだ傑作として一世の賞讃を受けた。

「飢餓」はどちらかといへばチエホフの影響を多く受けてゐるやうに思はれる作品であるが、その自然主義的な觀察と表現に加ふるに、更に叙情詩的な風韻を以てして、惻々として哀音の身に迫るもの丶あるのを感じさせる作品である。

この「飢餓」は發表の後間もなく新劇場に依て初演されたが、大正十年五月、この上演はさほど好評を得なかつた。尾上菊五郎一座に依て市村座に於て上演され、作者の名を更に高くすると共に、新劇俳優としての尾上菊五郎の聲價をも決するに至つたほどの秀れた舞臺を見せるに至つた。

尙この寫實的な現代劇の部類に這入る作品には「放火」三幕、「父の別莊」四幕、「女の職業」四幕、等多くの作品がある。

その後大正七八の二年間、氏はしばらく沈默を續けてゐたが、大正九年四月に至つて、「大佛開眼」六幕十二場を「人間」に發表して、奈良朝時代、佛法渡來當時に於ける新舊思想の葛藤、新時代への煩悶を捉へ來つて、そこに大正初頭に於ける新舊思想の葛藤と暗鬪と勝利とを諷刺する文明史的な作品を發表し、堂々たる作者の手腕を示した。

その後氏は尾上菊五郎の請に依て市村座に入つて劇場の實際的な經營に當ることになつた。この頃から氏は更にその自然主義的な觀察眼を歷史の上に投ずるに至つた。勿論その以前から「お七吉三」三幕の如き「牡丹燈籠」四幕の如き作品がないではなかつたが、それらはむしろ寫實的な表現の薄い傾がないではなかつた。むしろ初期の作に屬す

るものであつた。

　やがて大正九年十二月「淨海入道」三幕を發表し、引き續き「高松城水攻」三幕、「石山開城記」四幕、「袈裟の魂」三幕、「寺田屋騷動」三幕、「千姫」一幕、「石が物言ふ時」一幕、「父子」一幕等の作品を相ついで發表した。

　これらの作品はその技巧の秀拔とその表現の的確さとその觀察の正しさに依て、いづれも劇場に良き作品を加へつゝあつたのであるが、しかも最近氏はこれらの劇場的な技巧より逃れようとして、久しきに亙る思索の日月を送りつゝあるやうであつた。その間から「亡き妻を哭く」一幕、「先夫の子」一幕、「死」一幕、「塹壕の內」一幕、「銃殺された林少尉」三場などの作品が現れた。

　さうして最近に至つて氏は事實上にも市村座から身を引くと共に、純藝術的な立脚地に歸ると共に、その史劇に於ける代表作ともいふべき「澤野忠庵」十二場を昭和二年十一月新潮に發表して、技巧的にもまた思想的にも大きな進出を示すに至つたのである。

　氏の作品はその處女作より「澤野忠庵」に至るまで約六十篇に及んでゐる。日本戯曲全集が輯錄する十篇は、氏を代表するものとしてむしろ少ない感を抱く人があるかも知れないが、しかし選擇の上に於て氏の各方面を代表して遺憾がない。

　私は氏の全作の目錄を示したいのであるがそれはこの短かい頁のよくする所ではない。で、玆に輯錄作品の發表年代等を示すと共に、氏の作集について記すに止めたいと思ふ。讀者と長田氏の寬恕を乞ふ所以である。

「惡鬼跳躍」

大正十三年一月、演劇新潮所載、同年、水谷八重子一座藝術座上演。

「嘘」

大正八年、　大觀所載。

「死骸の哄笑」

大正三年八月、新日本所載、同年九月、新時代劇協會上演。

「姙婦授產所」

「歡樂の鬼」

大正三年四月、文章世界所載。

明治四十三年十一月、三田文學所載、明治四十四年六月自由劇場第四回試演。

「飢渇」

大正四年四月、早稻田文學所載、大正十年五月市村座に於て尾上菊五郎一座上演。

「石山開城記」
大正十二年二月、改造所載。

「大佛開眼」
大正九年四月、人間所載。

「銃殺された林少尉」
昭和二年三月、新潮所載。

「澤野忠庵」
昭和二年十一月、新潮所載。

長田秀雄氏戯曲集目錄

「歡樂の鬼」大正二年たちばなや書店版
「お七吉三、發兵院夜曲、黄金藏、歡樂の鬼」
「琴平丸」大正二年春陽堂版
「放火」大正三年植竹書院版
「牡丹燈籠」大正六年春陽堂版
「飢渇」大正十年新潮社版
「飢渇、轢死、大雪の夜」
「大佛開眼」大正十年新潮社版
「愛憎篇」大正十二年改造社版
「石山開城記、父の別莊」
「黑幕」大正十三年玄文社版
「惡鬼跳躍、嘘、微笑、姙婦授産所、死骸の哄笑、寺田屋騷動、袈裟の魂」
「亡き妻を哭く」大正十三年聚英閣版
「亡き妻を哭く、先夫の子、祭の夜がたり、死、塹壕の內、船中、父子、高松城水攻」
「石山開城記」大正十五年春陽堂版

以上

木下杢太郎篇解說

木下杢太郎氏は明治十八年五月　伊豆國伊東に生れた。

この南國伊豆に生れたといふことは、その熱情的な氣魄を裏付けるものでなければならない。

氏の本名は太田正雄氏、目下東北帝國大學醫科大學皮膚科主任教授の醫學博士である。

氏は故郷伊豆に小學校を卒へると共に、上京して長田秀雄氏と同じ獨逸協會中學に入學した。さうして長田氏の解說に於て述べたやうに二人の若き多感の青年の間に美しき交友の日月は始められた。

氏は當時日本橋の知己の家に寄寓して居られたが、この南國に生ひ立つた情熱的にして多感の少年は、故郷の山河を離れて更にその夢み勝ちな魂は何物ともなき憧憬の情に燃えねばならなかつた。

詩才あり更に繪畫的才能を多分に持つてゐた氏は、小網町の邊りや、靈岸嶋の邊りと、都市放浪を續けた。その當時のことを氏は戲曲集「南蠻寺門前」の跋文中に述べてゐる。

中學を卒へると共に第一高等學校第三部に入り續いて東京帝大を經て醫學士となつた。

その後南滿醫學堂に、名古屋醫科大學に、さうして現在の東北帝大教授に至つてゐる。

しかもその傍ら氏は常に燃ゆるやうな熱情を以て、一貫して文學にその眞の生命を灌いで來られた。さうして長田氏と同じやうに當時の新時代の情熱的な氣運は當然氏をも捲き込んでしまつた。新詩社にあつて詩作の發表をなしつつあると共に、一方獨逸、殊にホフマンスタールの影響は氏の上に大きく働いて行つた。

やがてそのロマンテイツクな情熱に更に新たなものが加はつた。「南蠻寺門前」跋文の中で氏はいつてゐる。

「明治四十一年の夏、予は新詩社の先輩與謝野寛氏、友人北原白秋、平野萬里、吉井勇の諸氏と共に九州西岸を旅し、平戶、島原、長崎等の風光と其歷史的興味とから深厚なる感激をうけた。天草洋上を航する小蒸氣船より眼を放つて左を見れば一帶の山影を見る。其最も高峻なるものは嘗てかの伴天連の徒を陷れた所の溫泉岳ではないか。島原の市街を離れて行くこと半里なれば、廣い桑畠の中に崩れたる石垣があり、其下の水涸れたる濠には淡紅の蓮の花、また藤色の臺灣藻の花が所狹く咲き亂れてゐる。是れこそ彼の不思議なる天才天草四郎の立籠つたる有馬城の址ではないか。その他平戶では和蘭陀塀、和蘭陀井戶を見、天草島中の寂しい村落には天草言葉の巧みなる佛國僧侶に遇つて、サンタ・クルスの數々を見せて貰つた。さういふ實景と、其後の野史の涉獵とに由つて、予の頭は德川初期の舶來文明

の悲劇的精神で灌漑せられた」と。

さうしてその中から「南蠻寺門前」が成り、四十二年二月の「スバル」紙上に發表せられた。

この「南蠻寺門前」は氏自身もいつてゐるやうに情調と形式との作品である。さうしてこの傾向は常に氏の一面を代表してゐる。

この作品の中から自然主義的な觀察とか、または劇的な事件等を求めてはならない。これは一片の繪畫であり、一聯の叙情詩であるといはなければならない。

氏の本質はエステテイシズムである。舞臺の色彩的な効果と、賓白の叙情詩的な情調と、科學のリトムと形式と、そこから審美的な美學的な効果をねらつてゐるのである。

社會劇的な問題や事件を描いてゐる場合でも、氏は常にその問題の解決には赴かないで、その事件の陰に動く情の薄明に涙を灌がうとする。

「南蠻寺門前」の後、更にホフマンスタールの影響の多い「燈臺直下」「温室」等を發表しつゝ、またイプセンの影響を思はせる「實驗時代」を書いた。

その後四十四年三月三田文學に「和泉屋染物店」一幕を發表した。この作品も氏の從來の傾向を示してはゐたが、その寫實的な手法の點で從來の氏になかつたものを付け加へたばかりでなしに、この作品は後に久保田万太郎氏を刺戟して戯曲創作の暗示を與へたほどで、實にその後に於ける寫實的傾向の先驅をなしたといはなければならない劃期的な作品である。さうしてこの傾向を押し進めたものこそ大正三年三月太陽に發表られせた「柏屋傳右衛門」三幕十場であつた。

その後、「天草四郎と山田右衛門作」を書き、更に社會劇風の「空地裏の殺人」と「代議士の家」とを書き、喜劇「花曇遠唄蘆」を書いた後、久しく小説に、また紀行文に、更に考古學的な探究に、そのロマンテイツクな性情は止まる所を知らない。さうして今年昭和三年四月「常長」を女性に發表した。

その作品、戯曲としては十數篇、或物は詩的なるもの、或物は社會劇的なるもの、いろいろに含んでゐる。が、その根本を流れる作者の氣魄は「南蠻寺門前」の處女作より「常長」に至るまで、常に魂の薄明の中に、何物かを求め、遠き國を憧れ、見えざる物を希ふ。浪漫主義の香氣に依て滿たされ、彩られてゐる。さうしてその影に近代的な神經が、情の薄明を透して迫つて來るのである。

輯錄の三篇、一はロマンテイツクな傾向を代表し、一は寫實的な表現にあるものゝ代表であり、一は社會劇的な問題劇を代表するものである。

しかしこの三篇、傾向の相違こそあれ、作者がそこに描き出さうとしたものは、情調と形式とを透して繪畫的な効果を與へ、更に魂の薄明の中に近代的な神經のリトムを傳へようとするのである。

最後に輯錄三篇の制作年代と作集目錄とを擧げてこの解說を了りたい。

「南蠻寺門前」

明治四十二年二月、スバル所載、大正三年十一月於市村座狂言座上演。

「和泉屋染物店」

明治四十四年三月、スバル所載、大正三年九月於有樂座新時代劇協會上演。

「代議士の家」

大正四年十二月中央公論所載。

木下杢太郎氏戲曲集目錄

「和泉屋染物店」明治四十五年東雲堂版

「和泉屋染物店、醫師ドオバンの首、溫室、燈臺直下、印度王と太子、十一人の偏盲」

「南蠻寺門前」大正三年春陽堂版

「南蠻寺門前、繪踏、天竺德兵衞昔物語、實驗時代、柏屋傳右衞門」

「空地裏の殺人」大正十年叢文閣版

「空地裏の殺人、和泉屋染物店」

以上

吉井勇篇解說

吉井勇氏は明治十九年十月八日、東京市麹町區平河町に生れた。祖父は明治維新の際、西鄉隆盛大久保利光を助けて功のあつた伯爵吉井友實卿である。

芝の御田小學校、東京府第一中學校、攻玉舍中學校等を

經て、早稻田大學文科に入り、後轉じて政治經濟科に入つたが、年少よりの多感の氏は到底政治に身を投ずべくもなかつた。遂に半途退學してしまつた。

その頃から氏は短歌の制作に從事した。今歌集として「酒ほがひ」「昨日まで」「祇園歌集」「旅情」「黑髮集」「未練」「毒うつぎ」「河原蓬」「毒の華」等があるほどで、實に氏の文壇に於ける最初の足跡は、先づ歌人として初められた。殊にその最初の稍民衆的な作品を經て、戀愛歌の制作に至つて、氏は「明星」派歌人として、斷然として認められるやうになつた。この情熱多感の貴公子の詠ひ出す愛の歌は、一時わが短歌界を風靡するかの趣きがあつた。またその短歌と短文とを合はせたる物語「戀愛小品」や「水莊記」は、四十年代の青年を刺戟する所は非常であつた。

そこに前述の通り近代劇移植運動は華々しく文學界を風靡した。多感にして才能に誇つてゐた當時の氏が戯曲にその天分を試みるのはまた當然であつたといはなければならない。

四十二年三月には遂に處女作「午后三時」が「スバル」紙上に發表せられた。この「午后三時」はマアテルリンクの影響を多分に示したもので、象徵的な香りの高い、瞑想的な感じを與へる作品であつた。

引き續き「淺草觀音堂」を同年六月に、「鴎の死骸」を同年八月に發表した。尙翌年には「海の子」「河內屋與兵衞」「夢介と僧と」「銀行頭取の娘」「偶像」を相ついで發表し、その多產なる作品によつて、その天分を示した。今戯曲集「午后三時」に收められてゐる十一篇は、すべてこの神秘的傾向を代表してゐるものばかりである。

やがて四十三年十一月には自由劇場第三回試演として「夢介と僧と」が上演せられ、續いて第四回試演には「河內屋與兵衞」が上演せられた。

島崎藤村氏は「河內屋與兵衞」を見て、「豐富な色彩に心を惹かれ」また「抒情詩を舞臺の上で味はふやうな」氣がしたといふことを批評で述べられた。かうして全く氏の劇作家としての地步も確立された。

その後、年を經ると共にまた一方文學界に於ける自然主義の流行と共に、その傾向は稍變遷して、手法の上に於て從來の作品よりは遙かに寫實的な分子が加はつた。さうして大正三年七月には「無賴漢」四幕を、同年四月には「俳諧亭句樂の死」を發表して、先づ現在の寫實的な傾向の先驅を示した。

しかし手法の上に寫實的な色彩が加はつたとはいふものの、尚その底には神秘的な瞑想的な魂の思慕が、常にかくされてゐる。魂への瞑想、運命への怖れ、未來への憧れ、未知なるものへの畏怖、これらが常にその寫實的な表現の陰に波うつてゐる。

氏はその處女作以來、常に多産な發表を怠らない。おそらく氏の全作を數へ上げたならば百を出づるのではないかと思はれる。

その內文學史的に見て氏を代表するものとしては前期の神秘的な作品の中には、「午后三時」「淺草觀音堂」「河內屋與兵衞」「夢介と僧と」「夜」「襲の女」等があり、寫實的なものの內には、「狂藝人」「無頼漢」「俳諧亭句樂の死」「幸福」等がある。

本輯輯錄の作品はどちらかといへば後期の寫實的なもののみが占めてゐる。この選擇は作者自身の選擇に依るものであるといふ話であるが、私自身の希望としては前期の神秘的な作品の二三、せめて「午后三時」「河內屋與兵衞」等は、文學史的にいつて是非選擇せられたかつたと殘念に堪へない。

その代り後期の寫實的な作品、特に氏獨自の特長ともいふべき落語家の生活を描ける、所謂世相劇ともいふべき作品については、先づ遺憾がないといつても好い。その點でこの輯錄にも恐らく作者としては十分の意義があると信じる。

尚最後につけ加へて讀者と吉井氏とに謝さなければならないのは、私は最近の吉井氏の作品の發表年代等のリストを持つてゐないことである。その爲こゝに輯錄された作品について十分の發表年代を付け加へることの出來ないのを殘念に思ふ。且目下氏自身は旅行中であるとの事で、くれぐれも殘念に思ふ次第であつて、深く讀者と吉井氏との寛恕を乞ひたい。

「焉馬と句樂」
大正十三年一月隨筆所載。

「狂藝人」
大正三年一月三田文學所載

「俳諧亭句樂の死」
大正三年四月中央公論所載、同年九月於市村座狂言座上演。

「小しんと焉馬」

大正九年一月人間所載
「小しんと焉馬後日譚」
大正十三年二月演劇新潮所載
「髑髏尼」
大正二年十月演藝倶樂部所載於市村座上演
「鳥羽港漂流奇譚」
大正四年一月太陽所載

吉井勇氏戲曲集目錄

「午後三時」明治四十四年東雲堂版
「夜」大正元年春陽堂版
「俳諧亭句樂の死」大正五年通一舍版
「麻の葉集」大正六年版
「狂藝人」大正六年春陽堂版
「髑髏舞」大正十年新潮社版
「生靈」大正十二年日本評論社版
「杯」大正十三年玄文社版

以上

故郡虎彦氏の戯曲について

園池公功

日本では郡虎彦と云ふよりも、萱野二十一と云つた方が、まだ知られて居るかも知れない。氏が英文で書いた最後の戯曲 The Toils of Yoshitomo.（義朝記）は一九二一年十月三日から三週間、倫敦のリツトル・セアターに上演されて英國劇壇に大センセーションを起した。此の一戯曲によつて、郡虎彦の名は日本に於けるよりも却つて海外に有名である。

同氏が倫敦で上梓した著作に、前述戯曲（一九二二年刊行）の外 Absalom (1920), Saul and David (1918). Kanawa: The Incantation (1918) 等がある。

本篇に收録した「王爭曲」は「サウル・アンド・デヴイツド」の原文である。是は大正六年十一月の「新小說」誌上に、同氏が萱野二十一なるペンネームを廢して、初めて郡虎彦の本名を以て發表した戯曲である。

萱野二十一の名は、同氏が歳二十一の時に雜誌「太陽」の懸賞小說に應募して、內田魯庵氏の選の下に一等を得た「松山一家」に始まるので、是が同氏の文壇出世作であつた。

「プロローグ」は戯曲「鐵輪」の序曲で、歿後同氏のスクラップから發見されたものである。發表された新聞名や年月日等は不明であるが、餘り人に知られて居ないと思ふから特に採錄することにした。是には發表の後、作者が筆を入れた處がある。

「清姬」は明治四十四年六月に「スバル」に發表されたもので、その翌年自由劇場の臺本として改作した「道成寺」の原作である。小山內薰氏市川左團次氏の自由劇場の全盛時代を記憶するものは、明治四十五年四月二十七、二十八の兩日、帝國劇場に於て、第六回公演としてマアテルリンクの「タンタヂイルの死」と共にこの「道成寺」が上演されて好評だつたことを覺えて居るであらう。

批評家の見る眼に據つて、夫々意見は違ふが、戯曲としては一部の批評家から「道成寺」より「清姬」の方が評判がよかつたので、本篇には特に「清姬」の方を採錄することにした。

郡虎彦氏は明治二十三年六月二十八日東京市京橋區八丁堀の鈴木家に生れ、生後直ちに母方の叔母に當る神戶の郡

家に養子として赴いた。同三十五年神戸の小學校を卒へて上京し、學習院中等科に入り、高等科を經て東京帝國大學文科に入學、間もなく中途退學した。

氏が最初に獨逸へ行つたのは大正二年のことである。翌年には歐洲大戰勃發の爲め難を避けて英國に渡り、其後倫敦を生活中心として伊太利、瑞西等に旅をすること數回、大正十三年三月より二た月に亙つて大阪朝日新聞に連載された「藝術覺書」を未完のまゝ、病を獲て大正十三年十月六日瑞西モンタナ山上の客舍に永眠した。行年三十五。「義朝記」の次に執筆すべき戯曲の構想を抱き乍ら夭逝した氏の文壇的生涯は決して長いものとは云へない。同氏の創作は主として「白樺」「三田文學」「スバル」「朱欒」等の誌上に發表された。同氏の邦文創作に戯曲十篇、小說七篇、詩六篇、隨筆「戯曲論議」「藝術覺書」外十數篇、飜譯戯曲二篇がある。

本篇に集輯した七篇の戯曲は發表された後未だ嘗て一度も他の全集その他に收錄されたことのないもののみである。各篇の發表年月に於いては夫々の末尾に記入して置いた。

編輯校訂
責任
吉田甲子太郎
淸水義政
佐藤十三郎

日本戯曲全集・第四十一巻
現代篇第九輯・第二回配本

昭和三年四月二十五日印刷
昭和三年四月二十八日發行
（非賣品）

著作者　長田秀雄
　　　　木下杢太郎
　　　　吉井勇
　　　　郡虎彦

發行者　和田利彦

印刷者　島源四郎

製本者　高崎鐵五郎

東京市京橋區南傳馬町二丁目
發行所　春陽堂
電話京橋　六五二
　　　　四四一五
振替東京一六一七

東京市小石川區久堅町・共同印刷株式會社印刷



